

# 少年士官と緋弾のエリア

関東の酒飲

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

なあ、緋弾のアリアって知っているか？あのドンパチのやつ。俺はドンパチものは好きだよ？でも、自分が命の取り合いでドンパチするのは勘弁してほしい。でもやらなきゃ死ぬんだよなあ……。べらんめえ!!!

緋弾のアリアの世界に転生した男が生き残るために、あとちよつとした幸せのために銃と刀を振り回していく!!  
設定グダグダです。

## 目次

### 民間人編

|                             |    |
|-----------------------------|----|
| なんで来ちゃったのかね・・・              | 1  |
| ダイ・コード!!上 初めての海外旅行なのにな・・・   | 6  |
| ダイ・コード!!下 追い掛け回されるのは嫌いだ・・・  | 11 |
| もうメインヒロインに会うなんて・・・          | 15 |
| ダイ・コード2!!上 銃撃のない海外はあるのかね・・・ | 21 |
| ダイ・コード2!!中 銃弾のプレゼントかよ・・・    | 29 |
| ダイ・コード2!!下 最も長いクリスマスの終わり・・・ | 37 |
| ダイ・コード2!!その後 やつと家に帰れる・・・    | 46 |
| 爺ちゃん、いらぬ物は捨てとけよ・・・          | 50 |

### 閑話：民間人編

58

### 新人軍人編

|                    |     |
|--------------------|-----|
| 学生生活が短すぎる・・・       | 66  |
| HS部隊とか濃い人ばっか・・・    | 70  |
| 精神論はいやだ・・・         | 76  |
| 休日くらい上司から離れたい・・・   | 85  |
| 私事に部下を巻き込まないで・・・   | 96  |
| これ以上変人奇人になりたくない・・・ | 102 |
| ドンパチからもっと近づいた・・・   | 109 |
| 辻さんの使い過ぎもよくない・・・   | 117 |

### 閑話：新人軍人編

123

### 高校生活一学期編

|                                 |     |
|---------------------------------|-----|
| せめて人に当てないで・・・                   | 131 |
| もう少し話が通じないかな・・・                 | 138 |
| 誤診なんてひどい・・・                     | 145 |
| 飛行機なんて大っ嫌いだ・・・                  | 153 |
| 怪我人にボディーガードさせるのかよ・・・            | 159 |
| 任務中に喧嘩しないで・・・                   | 166 |
| また家族が増えるのか・・・                   | 171 |
| 弾運びとか地獄だ・・・                     | 178 |
| 意外と耐久無いな・・・                     | 185 |
| 狼に轢かれるのはいわ・・・                   | 193 |
| 空港の時より嫌な予感がする・・・                | 200 |
| ここまで怪しいとか逆にすごいな・・・              | 207 |
| 俺は計画破壊の疫病神じゃねえ・・・               | 214 |
| ニコラ・テスラ引かないとまずいかな・・・            | 222 |
| まさか女装姿で会うなんて・・・                 | 232 |
| 若頭はないだろ・・・                      | 242 |
| 金を貸すのもほどほどに・・・                  | 251 |
| 起床ラツパはやメテ・・・                    | 261 |
| 水上機が陸上機に勝てるわけないだろ・・・            | 274 |
| 大量破壊兵器は使っちゃいけない・・・              | 286 |
| 槍なんていららないんですが・・・                | 296 |
| 閑話：高校生活一学期編                     | 302 |
| 高校生活夏休み編                        |     |
| 魔法少女リリカル○のは 旅行にはトラブルが付き物だけどさ・・・ | 312 |

魔法少女リリカル○のは 高町一家怪しすぎだろ・・・ | 324

魔法少女リリカル○のは 誘拐犯弱すぎだろ・・・ | 335

魔法少女リリカル○のは やつと原因が分かった・・・。

341

魔法少女リリカル○のは 家庭訪問に武装はいらないだろ・・・

352

魔法少女リリカル○のは 休みをください・・・ | 364

ラッシュ○ワー 海外にはこいつがいる・・・ | 371

ラッシュ○ワー やっぱり英語くらいは分かってるよな・・・

383

ラッシュ○ワー お互い協力しようぜ・・・ | 395

ラッシュ○ワー バンジーはやりたくない・・・ | 408

ラッシュ○ワー 締まらねえ・・・ | 423

サッカー編 スポーツつってのもいいな・・・ | 438

ガールズ&パンツァー 畑違いなんですけど・・・ | 455

閑話：高校生活夏休み編 | 466

### 高校生活2学期編

キンジ、お前また女問題かい・・・ | 483

なんでこいつらがいるんだよ・・・ | 497

山の登り下りは辛い・・・ | 513

試験かよ・・・ | 526

一般人に爆弾つて・・・ | 539

宙づりなんて絶対やんねえ・・・ | 554

誰かこいつらを引き取ってくれないか・・・ | 569

パロディのチーム名は勘弁してくれ・・・ | 585

公衆の面前で振られるなんて…… | 601

閑話：高校生活2学期編 B O K O H a r d 2 . 5 その | 611

閑話：高校生活2学期編 B O K O H a r d 2 . 5 その | 626

閑話：高校生活2学期編 B O K O H a r d 2 . 5 その | 642

### 極東戦役：極東編

宣戦会議ってこんなに混沌としてるのか…… | 660

これは変装じゃないだろ…… | 672

場所考えろよ…… | 691

男装バレバレなんだけど…… | 709

その果物は人を殺せるから…… | 731

獲物の横取り…… | 753

黒歴史を量産させられるなんて…… | 773

ゲテモノじゃないはず…… | 787

おいパイ食わねえか…… | 805

お前も食べるんだから…… | 823

久しぶりの第二中隊…… | 840

頼むから喧嘩はやめてくれ…… | 855

俺の酒が…… | 868

金は天下の回りもの…… | 885

いつ撮ったんだよ…… | 900

⊠H S S ⊠⊠ってなんだよ…… | 917

くさいセリフは似合わない…… | 931

|      |                                       |      |
|------|---------------------------------------|------|
|      | 高速の神輿は危険……                            | 947  |
|      | 寒さは恐ろしい……                             | 964  |
|      | テストは絶対受けよう……                          | 980  |
|      | 閑話：クリスマス特別編 上                         | 987  |
|      | 閑話：クリスマス特別編 下                         | 1006 |
|      | 閑話 極東戦役：極東編                           | 1026 |
|      | 俺のいちばん長い日 with BaNG Dream!            | 1046 |
|      | 有能な人間は癖がある……                          | 1061 |
|      | 形あるもの、いつか壊れる……                        | 1079 |
|      | まともな会議をしてくれ……                         | 1095 |
|      | 高級中華食い放題(手土産付き)……                     | 1106 |
|      | Die Hard 3 in Tokyo 俺の一番長い日の始まり……     | 1118 |
|      | て……                                   | 1137 |
|      | Die Hard 3 in Tokyo 10年越しの再会……        | 1154 |
|      | Die Hard 3 in Tokyo 爆風は避けられない……       | 1175 |
| 1197 | Die Hard 3 in Tokyo 『ボコ』仲間……          |      |
|      | Die Hard 3 in Tokyo 『復讐』じゃなくて『盗み』かよ…… | 1218 |
|      | Die Hard 3 in Tokyo 変態刑事……            | 1239 |
|      | Die Hard 3 in Tokyo 不死身は死なない……        |      |

|                                 |      |
|---------------------------------|------|
| 寒中水泳……                          | 1471 |
| 遠すぎた香港……                        | 1452 |
| この刀つてなんだよ……                     | 1436 |
| 酒は飲んでも飲まれるな……                   | 1420 |
| 極東戦役：香港編                        | 1391 |
| 閑話 俺のいちばん長い日 with Bang Dream!   | 1381 |
| ……                              | 1366 |
| Die Hard 3 in Tokyo キグルミの中は暑い   | 1344 |
| Die Hard 3 in Tokyo 西住さん、誤解です…… | 1344 |
| Die Hard 3 in Tokyo 後輩は自重しない……  | 1321 |
| Die Hard 3 in Tokyo 切れ味抜群すぎ……   | 1303 |
| Die Hard 3 in Tokyo 高鏡組壊滅……     | 1283 |
| ますか……                           | 1261 |
| Die Hard 3 in Tokyo 『おねーちゃん』を探し | 1261 |



## 民間人編

なんで来ちやったのかね・・・

みんなは神様転生って知ってる？死んだかなんかで神様にあつてさ、特典もらってどつかの世界に転生するってやつさ。俺も転生(?)したよ、神様には会わなかったけど。信仰心が足りなかったのかね？俺はとある地方の国立大学に通っていた、アニメやラノベが好きな理系の学生だった。高校1年のころはまじめに勉強してたけど、高校2年から勉強に疲れて、ゲーム三昧。かろうじてノートは取っていたから、運よく地方の国立の大学にぎりぎりで入れたわけだ。

で、大学の微積の授業中つい、うとうと寝ちまったわけだ。朝7時まで「戦車の世界」で小隊組んでやるんじゃないかって。そう思いつつ寝ていたら、やけにまぶしい。なんだ隣の野郎の悪戯か？そう思いつて起きたらおばちゃんの顔がドアップ。こんなことが起こったら誰だって驚くはずだ。「うわ!!!」っていうつもりだったのだろう、俺は、でも

「おぎやあああああああ!!!」

人間驚くと、まともな声が出ないらしい。そうしたら今度はおばちゃんから若いお姉さんの顔がドアップになった。そろそろ自分も落ち着いてきて、「誰ですか？」聞こうとしたんだ。

「だあだあ〜」

・・・ちよつと待とうか。俺しやべれないの？どうなってんの？しかもなんか若いお姉さん、聖母のような微笑み浮かべてるんだけど。今度は若いお姉さんと若いお兄さんがドアップになってなんか話している。なんかすごい夢見てるな、しかも夢の中でも眠いし。うん、寝よう。そうして俺は転生(?)した瞬間を、夢だと思っていたわけだ。

3歳くらいになると、そろそろなんかおかしいと思い、どつかの世界に行ったのでは？と考え始めた。新聞を読んだら(親は父親の真似をしている)と思っていたらしい)日付がおかしい。毎日読んでいて

も、微積の授業を受けてた時よりだいぶ前だった。しかも、西暦の隣に皇歴あるし……。自衛隊関連の話であろうことも全部が「日本軍くくくく」って書いてある。8月半ばによくやる第二次世界大戦のドラマなど見ると「日本が条件付き降伏した……」ってあった。うん、知ってるのと違う。3歳の年のドラマはレイテ沖と沖縄戦のことやっていたけど、レイテでは栗田長官が反転命令したとき、彼が倒れてしまい、そのあと栗田長官の後を継いだ宇垣司令官が指揮を執って、突撃し、満身創痍で何とか帰ってきたらしい。沖縄戦では残存航空戦力を全部使って何とか機動部隊を撤退させ、戦艦の艦砲で敵輸送船と上陸用舟艇を全部破壊して、米兵が飢えたところを襲撃し、大量の捕虜を取り、その兵を人質にして和平交渉したそうさ。……全然知らないんですけど……。

これらのことから異世界に転生(?)したと確信した。転生前にPCのデータ全部消去すりやよかつたと思えば頭抱えて転がっていたら遊んでいると思われたのか両親に写真やビデオを撮られてしまった。黒歴史撮るんじゃないやねえ!!と今でも思ってる。

まだ、この時はよかつたんだ。ただ違う歴史を進んでいても、この世界と、転生前の世界じゃそこまで変わらないじゃん。ちっちゃいころは記憶力がいいから今のうちに勉強すれば、将来遊んで旧帝国大学なんて余裕だぜ!!そう気楽に考えていたんだ。

5歳のころニュースで犯罪が多発しているため、武装探偵(略して武偵)が設置されたそうで……。これ、絶対「緋弾のアリア」だよな、昔この作品好きで読んでたなー……。うん、現実に戻ろうか。最後にあのラノベ読んだのいつだよ。もう概要くらいしか覚えてないぞ。そういえば幼稚園で仲いい友達が「トオヤマ キンジ」だったような……。なんかキンジが前

「俺のパパは武偵なんだ」

とか言って自慢してたな……。うん、主人公ですね、わかります。まあ……武偵にならないで一般人でのんびりすればいいと思っ  
ていたんだよ。でも、キンジとキンジの兄ちゃんと(キンイチというらしい、そういえば名前そのまんまだな)とデパートで買い物に行っ

たんだ。そこで強盗が発生。まあ、キンイチさんがいたからすぐに終わったけど、そのとき思ったんだ。自分の身くらい自分で守れないとまずい!!そのせいで軍人を目指すようになったんだ。

なんで武偵じゃなくて軍人かって?そりゃあ公務員で、はるかに安全だからですよ。武偵はしよっちゅうドンパチだけど、軍人は戦争中か紛争地帯に行かない限り、訓練中だけ銃撃てばいいだけ。海軍や空軍(空軍は太平洋戦争終わってからできたらしい)なら船か飛行機の中でボタン押すだけでいい。軍人は公務員だから一定の金がもらえるし、働けなくなっても、国から金がもらえるしな。これほど簡単で安定してる職業ないでしょ?そう考えて軍人になろうと思って努力しようと思ったんだ。キンジやキンイチさんは応援するぞ!!って言うていたけど、今思えば、あまりにも甘い考えだと呆れるけどね.....。

7歳の夏、俺はキンジとキンイチさんに連れられ青森まで旅行に行った。よくトオヤマ家で遊んでいたため、俺の両親とキンジの両親が仲が良かった。青森旅行は俺の両親たちとトオヤマ家で行こうとしていたんだけど、俺の両親とキンジの両親に外せない仕事が入ってしまった。そこでこの旅行はお流れに.....となるはずだった。キンジがぐずったのだ。そこで困り果てたところ、キンイチさんが「俺が連れて行くよ」

そういつてくれたため、急遽三人で行くことになった。

今考えると、星伽神社って男が入れないんだけど、なんで入れたんだ?キンジ達と一緒にだったから特例かな?

そこで原作キャラの一人、白雪に会った。意外に暗い性格をしていたが、ちっこい子供はすぐに友達になれる、俺らと白雪と白雪の妹たちとすぐに仲良くなった。特に粉雪は自分に懐いた。俺らが帰るときは泣いてぐずっていたなあ.....。

星伽神社に泊まっている時、近くで花火大会をやると聞いて、みんなで行きたいとキンジが言った。大人達はもちろんダメの一点張り。そこで俺もキンジに加勢し、

「なんでダメなんですか?理由を教えてください。」

「ダメなものだダメだ」

「理由を教えてくださいなきや納得できません!!」

「ダメだ!!これだからどの馬の骨ともわからない子供は……」  
さすがにキレてもいいよね。ただ、ここで怒っても意味がない。脱走して、花火を見せてやる!!って思ったね。そこで夕方、納屋にあつたりアカーにくすねた懐中電灯と白雪と妹達を乗せて、星伽神社を脱走、花火会場まで行つちまったんだ。白雪と妹達の花火を見た時の驚いた顔は今でも鮮明に覚えている。だってあんなかわいい子たちの驚いた顔だぜ?おっと俺はロリコンでないぞ。でも同じ年だからロリコンにならないか?まあいいや。それで花火大会から帰ると、大人達はカンカンに怒っていた。怒られたが

「この警備がザルだから抜けだしたんです。ザルな警備をしているのが悪くないですか?」

「あんなにダメダメって言うてるから、押すなよ押すなよのやつだと思いました。」

「花火大会くらい行かせない、しかも警備がザルなことを棚に上げて怒る心の狭い大人にはなりたくないなあ。」

とか言つて仕返しをしてやった。あの時の大人の怒った顔はみんなに見せてやりたいぜ。

花火を見てから、白雪は明るくなっていった。キンジにべつたりだったけどな……。別に羨ましくないんだからね、こっちは白雪がいるし……。とか思いながら残り数日を過ごし、帰る日になった。

白雪はまだ分別がつからしく、普通に見送ってくれたが、問題は粉雪だった。俺つかんで離そうとしない。しかも泣いてるし……。服に鼻水ついたし……。

「粉雪ちゃん、放してくれない?」

「やゝだあ」

「また会えるからね」

「やゝだあ」

そこで白雪が

「粉雪、いい?」

「なに？？」

「お嫁さんになれば、ずっと一緒にいられるよ」

おいこら、何言ってますか。ってなんで粉雪泣き止んでんの？

「お兄ちゃん、粉雪お嫁さんにして」

うん・・・どうしようか・・・

「お嫁さんは難しいかな・・・」

ちよつと粉雪さん？泣きそうになってるんですけど・・・

「お嫁さんは大人にならないとなれないから、今はダメなんだよ」

「じゃあ、大人になったらお嫁さんしてくれる？」

「そうだね、大人になっても覚えていたら、お嫁さんになってくれる？」

「うん!!」

「ゆーびきーりげんまん・・・」

とお嫁さんにするという約束を交わし、俺たちは帰っていった。

なんかヤバいことしたなあと感じたが気のせいだと思いたい。

ダイ・ロード!!上 初めての海外旅行なのにな・・・

7歳のクリスマス、俺は両親に連れられてアメリカ、ロサンゼルスにいた。この世界に来て初めての外国だ。とてもわくわくする。なぜロサンゼルスに来たのかというと、日系アメリカ人が作った会社「ナカジマ商事」のクリスマスパーティーに出席するためだ。両親曰く

「ナカジマ商事は結構お世話になってるから今年こそは出なきゃ」

だそう。でもなぜか・・・俺の勘はここにいるとまずいと言っているんだが・・・大丈夫かね。

この時、勘に従ってホテルに閉じこもっていればなあ・・・とは思う。

ナカジマ商事のクリスマスパーティー中、どうしてもトイレに行きたくなった。ジュースでも飲みすぎたか？まあ、やけにうまかったかな、ジュースより酒のほうが飲みたかったけど。

「父さん、母さんトイレ言ってくるわ」

「迷子にならないでね。迷子になったら近くのウェイターさんやウェイトレスさんに声かけるのよ」

「分かってるよ」

このころの記憶力ってすごいな。外国語とか古典漢文とかすらすら覚えられるの。転生前に中高で必死に英語を勉強したのがバカバカしいと思うぜ。

当時の俺（今もだけど）英語堪能だから、外国なのに一人でトイレ行かせちゃってもいいやとか思ってたのだろうな。ここでもし、俺の親と一緒にいったら何か変わっていたかな・・・。うん親と一緒に殺されていたかもな。

トイレで用を足している時、後ろから疲れてそうな30代の白人のおっさんが来た。なぜか知らないが、無性にこのおっさんに声をかけなきゃいけないと思ったんだ。

「メリークリスマス、おっさん。おっさんもパーティーに？」

「ん？ああ・・・そういうところだ」



が動かないからか、安心しておっさんが男から手を放して肩で息していた。したら動かなかった男が急に動き出して・・・っておっさんが危ない!!!手に持っていたハンマーでとっさにその男を殴った。だいたいいい衝撃がして男はうごかなくなった。

「おっさん、油断すんなよ・・・」

「坊主なんでここにいやがる。トイレでじっとしてろって言ったはずだぞ。」

「トイレでじっとするより、おっさんについて行ったほうが安全だと思っただ。敵は子供にも容赦なく撃ちそうな感じだったから。」

「来たって足手まといだ。すっこんでろ。」

「少なくとも今は役に立ったはずだぞおっさん。」

そういつて動かない男の腰から拳銃を取り出して、10メートルくらい先のドアノブに向かって5発撃った。全て命中。意外と当たるもんだな。

「人を殺さなきゃなんねえぞ。」

「どうせ殺さなきゃ、殺されるんだ。座して待つよりあがくほうがいい。」

「つけーませやがって。ロン・ロジャーにでもあこがれたか?足手まといになつたら置いてくからな、くそツタレ!!」

「合点だあ!!」

こうして、マクレーのおっさんと一人一人敵を無力化していったわけだ。通気口のともぐったり、俺の上着破いて作った即席の靴履いでガラス片ばかりのところ走ったり、屋上で俺がホース見つけてきて、それを使って二人一緒に屋上からダイブしたり・・・。あのおっさん格闘は弱いというか力任せだから二人で一人に当たらないときついし、しかも爆弾をエレベーターに落とすのにずつとのぞきこんでるんだぞ。慌てて伏せさせて何とか負傷しないで済んだけど・・・。そして、敵のボスがおっさんの嫁さんの腕につかまって宙ぶらりんはさらに驚いた。慌てて俺がパンツの中に隠しておいた拳銃で敵のボスの頭に風穴開けてなんとか一件落着。そして敵のボス無力化した後、おっさんと嫁さんが濃厚なキッス・・・大丈夫自分は空気



が読める人間……邪魔はしないさ。何分か待っているとキスが終わったのか嫁さんが

「そういえば、あの坊やは誰？」

「ん？あの坊主は俺の相棒だ」

うれしいこと言ってくれるじゃないか。そういえばマクレーのおっさんは嫁さんと別居中だっけか、

「こんばんは、マクレー夫人。ジョニー・マクレーさんと一緒に戦った、村田維吹と言います。戦闘中や移動中にさんざん夫人ののろけ話聞かされましたが、なるほど納得です。」

あ、マクレーのおっさん眉ひそめてる。

「あら、ずいぶんませたこと言うのね。この人が言えって言ったの？」「本当のことですよ。戦闘に関係ある話以外は、ほとんどのろけ話……。」

遠い目をしていった。これぐらいしたらマクレーのおっさんも喜ぶだろう。

「フッフ、本当みたいね。」

「そういえば坊主、お前両親に会ったらだいぶ絞られるんじゃないか？。」

無理やり話し変えたな、このおっさん。ってそういえばそうだった。

「っておい。なんでそこまで落ち込んでんだ坊主。」

orzの状態になっちゃったよ。ヤバい、そうだった、忘れてた……。マクレーのおっさん思い出させるなよ……。

「マクレーのおっさん助けてくれ。」

「俺はお兄さんだからな、おっさんって誰だw？」

このおっさん地味に歳のこと根に持ってやがった。

そんなこんなでナカジマプラザでのテロリスト襲撃事件が終わり、かろうじて生きてたやつも警察のおっさんが無力化して一件落着……。

「維吹、何てことをしていたの!!!。」

「心配したんだぞ!!!。」

俺の親と再会して、涙ぐみながら抱いてくれた我が両親は今、修羅になってます。お母様、お父様、ここ他人の目が沢山あるところ…。「ちよつといいですか?」  
「なんですか!!!」

マクレーのおっさん!!もしかして助けて…

「彼は本官と一緒にこのテロリスト達を無力化していました。彼は何度も本官を助けてくれました。まあいささか蛮勇な部分もありましたけどね。ここでは人がたくさん見えています。ホテルで叱ってはどうですか?」

このおっさん、問題先送りにしやがった…。

「私はニューヨーク市警察巡査部長のジョニー・マクレー。彼女は私の妻マリー・マクレー。」

「ご親切にどうも。私が維吹の父親の村田康夫、こちらが母の村田勝子です。」

「母の勝子です。」

「戦友をここで叱らせたままはさすがに私も思うところがあります。車でホテルまでお送りしましょう。」

って言ったらリムジンが来て乗るように誘ってきた。マクレーのおっさん…普通にしやべれたんだな…似合ってねえぞ。」

「おい、聞こえてるぞ坊主。こういうようにしやべらないといけない場合があるんだよ。さあお二人とも乗ってください。」

俺の両親はリムジンに乗ってナカジマプラザを後にした。

今ならよくわかる、あのおっさんと俺はよくテロリストに対して生きてたな…。あのおっさん火器爆薬の知識はあっても格闘は力任せ、俺は銃と棒は多少できるが、体が小さいせいで力が入らないし至近距離ではテロリストには完敗であっただろう。

これがマクレーのおっさんとの初めての出会いだった。

ダイ・ロード!!下 追い掛け回されるのは嫌いだ・・・

リムジンが俺らの泊まるホテルに着いた時、マクレーのおっさんは急に俺と二人で話がしたいと言って、運転手と俺の両親、おっさんの嫁さんをリムジンから出した。

「俺、おっさんと二人きりで話すことなんかねえぞ。・・・もしかしておっさん。若い男の趣味があつたりして・・・。」

「くそ野郎!!そんな趣味はねえ!!これだからませたガキは・・・。」

「冗談はこれくらいにしてマクレーのおっさんなんだ?」

「つたく、お前から冗談出したんだろうが。まじめな話をするとだな坊主、坊主は殺しつていうのは初めてか?」

「・・・。」

「この反応じゃ、初めてか。まあその歳で初めてじゃなかったらおかしいか。坊主は正当防衛とはいえ人を殺した。それは一生ついていくだろう。坊主、今どんな気持ちだ。」

「なんか殺したって気がしないな。ぎりぎりまでリアルなゲームのゾンビを殺したって感じ。」

「今のガキって怖いねえ。人殺してゲームと同じ感覚だだよ。おそろく、時間がたつてから殺したって感覚が出るだろう。坊主はまだ幼い、このことに関してはいぶ気に掛けるかもしれないねえ。そういう時は俺に連絡しな、いつでも相談に乗ってやる。時差は考えろよ。」

そう言つて、マクレーのおっさんは数字が書かれた紙きれを俺に渡してきた。

「それにしてもクリスマスパーティーがこんなクソのようになってしまった。残念だったな。」

「でも、俺はマクレーのおっさんからクリスマスパーティーじゃ学べない大切なことを教わったぞ。」

「ん?なんだ?」

「敵に イピカイエー・マザーファッカー って言つて銃をぶち込む

こと。」

「イピカイエー・マザーファッカー か。」

「そう、イピカイエー・マザーファッカー ってね。」

「イピカイエー・マザーファッカー っ」

マクレーのおっさんと俺はそう言っつて互いの拳をぶつけた。

俺はリムジンから降りて、両親と一緒にマクレーのおっさんと嫁さんを見送った。

「さあ維吹、説教は終わってないわ。」

「さんざん心配かけさせたからな。」

・・・マクレーのおっさん、一緒にリムジンでもう少しドライブしたかったよ・・・。

マクレーのおっさんがこんなに気を遣うつてことは何か企んでいることだ。当時の俺でも、この短い付き合いでもわかっていただろうに。マクレーのおっさんを疑わなかった当時の自分は考えなしだったんだろう。

翌日、起きるとホテルの前に大きな人だかりができていることに気が付いた。テレビ局員らしい人までいるし・・・。なんだ？このホテルに有名でも泊まっているのか？ホテルの部屋に備え付けてあるテレビをつけてみると

「昨日ロサンゼルス、ナカジマプラザでテロリストによる人質事件ですが偶然その場に居合わせた警察官と少年の二人によって事件は解決されました。」

ああ・・・昨日のことは夢じゃなかったんだな・・・。お、マクレーのおっさんがインタビューに答えてる。あの人こういうこと苦手そうだけどなあ・・・。

「あの事件は少年によって解決されたといっても過言ではないです。少年に事件のことを聞いたほうがいいでしょう。本官は彼の手助けをした程度です。」

あのおっさん俺を売りやがった!!!もしかしてこのホテルの前にある人ばかりって・・・。

「今、その少年が泊まっているホテルの前にはいます。まだ少年は表れ

ていません。情報によると、事件を解決した少年の名前はイブキ・ムラタというそうです。」

「やっぱり俺だよね……。両親も苦笑い。……お父様、お母様、ロサンゼルス観光はどうなります?」

「うん、旅行は中止にして、日本に帰ることにしたよ。」

「そうね、さつきホテルの人もタクシー代航空券代ホテル持ち、キャンセル料もとらないから帰ってほしいって言われたわよ。」

「なんていうホテルだ……。そういえばマクレーのおっさんから電話番号もらってたな。」

「・・・ハアイ、ハロー、ただいまロン・ロジャー似のイケメンでナイスガイなジョニー・マクレーお兄さんは外出中だ。要件がある人はガチャツてなった後、要件を言いやがれ。」

「おっさんふざけてやがる……。」

「おい、マダオいるんだろ?」

「なんだあ、マダオっていうのは。」

「まるで ダメな マクレーのおっさん 略してマダオだ。」

「…………俺が悪かった。おっさんでいいからマダオだけはやめてくれ。」

「マクレーのおっさんマダオはやけに嫌がるな。」

「まあいいや、マクレーのおっさん、俺をマスコミに売りやがったな。」

「何言ってるんだ。相談に乗るって言ったろ?その報酬さ。しかも、マスコミにちやほやされて英雄になれるぞ。」

「そしてマクレーのおっさんは電話を切った。何度もかけ直したが出ない。あのおっさん電話線抜きやがったな。」

「じゃあ帰るか、ほら維吹、帰り支度をしなさい。」

「こうして、初めての海外行きはたったの一泊二日で日本に帰ることになったんだ。まあ、日本でもマスコミに追い掛け回されたけど、ロサンゼルスのホテルで見た人だからほどの量じゃなかったからよかったよかった…………。」

「イブキ、アメリカでテロリスト相手に大活躍したんだって?すごいな!!」

「おい、キンジ、マスコミに追い掛け回されたいなら、いつでも変わるぞ。」

「それならいいや。」

この野郎、他人事だと思いやがって……。

なお、日本に帰ってキンイチさん、キンジの両親、俺の両親によるステレオ説教はだいぶ辛いものがあった。

今思えば、怒ってくれる親がいるってのはありがたいことだ。なんだから？それはな……。

12歳のクリスマス、両親が死んだ。

もうメインヒロインに会うなんて・・・

俺の親が死ぬより少し前、俺が12歳の時の秋にキンジの両親が他界した。仕事での殉職だったそうだ。キンジとキンイチさんは人前では泣かなかった。さすが遠山家の人間だ。って思ったっけか。キンイチさんは寮に住んでいるけど、キンジはキンジのじいちゃんに引き取られるらしい。まあキンジは武偵中学に行くから3月からは寮暮らしになるって言ってたっけ。そういえば、その葬式に星伽の人間が葬式に来ていたのは驚いた。原作で遠山家と星伽はなんか関係があったらしいが詳しくは覚えてない。(なお白雪、粉雪は葬式に来ていない。)

星伽で思い出した、あのマクレーのおっさんといっしょにナカジマプラザで戦い日本に帰ってから数日後、俺の携帯電話に知らない番号から電話が来たんだ。なんだろうと思っただけで電話に出たんだ。

「はい、もしもし。」

「お兄ちゃん大丈夫?!?ケガしてない?!?あちこちケガしたって聞いたよ?!?」

「ああ、大丈夫大丈夫、無事に歩けてるよ。」

「お兄ちゃんが単身テロリストと戦ったって聞いたからとても心配したんだよ?!?」

「だいたい早口でしゃべってるな。ってなんで俺が単身で倒したことになるってんだよ。」

「いや、単身で倒してないから。ジョニー・マクレーって言う警察のおっちゃんと二人で倒したんだ。それにテロリストは13人しかいなかったし。」

「13人もいたの?!?どうして戦ったの!!!」

そこから1時間も電話で説教・・・。まあ心配させたから贖罪のつもりで聞いてたけど、さすがに長すぎませんか?説教が終わった時に

「なんで俺の携帯の番号がわかったの?急に電話が来てびっくりしたよ。いつも手紙だったのに。」

粉雪とは星伽神社訪問の後から文通をしていた。信じられるか？  
この時代に文通だぜ。

「星伽の力を使ってお兄ちゃんの電話番号を知ったの。」

なにそれ、星伽って怖い。

「お兄ちゃん、本当に心配したんだからね。」

「ああ本当にごめんね。あんな偶然、もう起こらないだろうし大丈夫だよ。」

これがフラグになったんだろうなあ……。まあ、普通あんなビルの中二人でテロリストを倒すみたいなこと2度も起こるとは思わな  
いしな……。

話を戻そう。キンジの両親の葬式を終えて数カ月、12歳のクリスマス、俺はニューヨーク、ジョン・F・ケネディ国際空港に来ていた。俺のかあさんの友達がクリスマスパーティーに我が一家を招待したからだ。両親は毎年断っていたが、俺が幼年学校に入学することが決定したこと、7歳の時の事件から5年もたっていること、俺に世界を見せて勉強させよう、などの理由から今年は参加することにした。

そういえば幼年学校の説明はしていなかったな。武偵を養成するための武偵高校、武偵高校付属中等部が設置されたとき、当時の兵部省（転生前の世界で例えると防衛省、太平洋戦争後に再設置。兵部省の下に陸軍省、海軍省、空軍局、大本営がある。）が人材が武偵のほうに流失すると考えたため、中学から士官を育て上げる幼年学校、高校から士官を育て上げる予備士官学校、そのあと陸海空に分かれ陸軍士官学校・海軍兵学校・空軍士官学校 というようなシステムを作ったそう。簡単に言うと、

武偵高校付属中等部（武偵） || 幼年学校（軍）

武偵高校（武偵） || 予備士官学校（軍）

武偵大学（武偵） || 陸軍士官学校・海軍兵学校・空軍士官学校（軍）  
って思ってくればいい。

おっとだいたい話がそれだな。そんな理由で俺はこの世界に来て2度目の外国に来たわけだ。前ははさんざんだったからな、期待しないわけがない。けど一つだけ不安があったんだ。俺の勤が「この空港



「にいちやいけない」ってめっちゃ騒いでいたんだ。ナカジマ商事のパーティーでもこういう感じしたしな、早く出たい。だけれど、迎えに来てくれるらしい母の友達(パーティーの招待主ではない)になかなか見つからなかった。早く見つけてこの空港から出たい。

「初めまして、あなたのお母さんの友達の神崎かなえよ。よろしくね。」

「初めまして、村田維吹です。維新の風が吹くで維吹です。」

「迎えに来た母さんの友達のかなえっていう人、やけに若くねえか。うちの母さんも結構若いけど、この人もつと若いぞ。」

「それで、この子がアリアで、車いすの子がメヌエツトよ。維吹君とアリアとは同じ年ね」

「……まじ? 面白いえばアリアの母親が「かなえ」だったか「かおり」だったかうる覚えだったけど、この人がアリアの母親!?! うちの母さん交友ヤバくないか? まさかここで会うとは思わなかったぞ。だけどアリアの髪、金髪だな……緋弾をホームズに撃たれてないのか?」

「こんばんは、初めまして自分は村田維吹と言います。よろしくね。」

「私は神崎・H・アリアよ!!」

「やけに元気がいいな……。このころから活発だったのか。三つ子の魂百までとは言ったものだ。」

「私は……メヌエツト・ホームズ……」

「このころのメヌエツトはおとなしいな。何かあるのか?」

「メヌエツトはね、すごく頭がいいのよ!! すぐにどんなことでも当てちゃうんだから!!」

アリアがない胸を張って自慢している。メヌエツトが足が悪いことで馬鹿にされることを防ごうとこういう話を切り出しをしているのか? そうだとすると妹思いだな。

「そうなの?」

「……うん」

「そうだね……自分は武道をやっているんだけど何をやっているかわかる?」

「……銃剣道……やっていると思う……」

「なんでそう思ったの？」

「……まず手……手にタコがついてる……この形は何か棒を握つてできる……だから剣道などの棒を使う武道……手のタコが左右で不均等にできてるから銃剣道だと思った……」

このお嬢ちゃんすげえな……。8つでこれだけできるとは……。

あのナカジマプラザで起こった事件の後、俺は家の近くにある元軍人の人が開いた道場に通い始めた。今のうちにある程度鍛えなければ死ぬかもしれねえ!!って思ったからだ。このことを師範に言ったら喜んで銃剣道を教えてくれた。ただでさえ厳しい練習なのに俺だけそれ以上に厳しかったけど。しかも、本物の38式と銃剣使って訓練させるってどうなのよ……。そういえば、幼年学校に入学が決まったって報告したら、すごくあの師範は喜んでた。俺が引くくらいだもの、懐かしいなあ。

「すごいね、正解だ!!」

「でしょ!!メヌエットはすごいだよ!!」

アリアが自分のことのように自慢する。ああ……。そういえば、このぐらいからアリアの体はほとんど成長しないのか、かわいそうに……。

「でも……。足が悪いし……。それで馬鹿にされる……」

なるほど、だから暗いのか？

「メヌエットは人よりも断然、桁違いで頭がいい。だから足が悪くてもプラスマイナスゼロどころかプラスだ!!馬鹿にされるならメヌエットの頭を使って仕返しをすればいい。それでもだめなら俺が日本から飛んできてとっちめてやる!」

「……うん!!」

これ以降、なぜかメヌエットは俺に懐いたんだっけか。この初めて会った時にメールアドレスを交換して以来ずっとメヌエットとメールのやり取りしてるな。今でもメールくるしね。

そのあと、ホームズ姉妹と仲良くなり、三人でしゃべっていたら、見覚えがある顔を見つけた。

「よう坊主。久しぶりだなあ元気か？ってナンパ中か、悪かったな。」  
「おい、マクレーのおっさん。どう見てもナンパに見えねえだろうが。それになんか額が前見たよりもでかくなってないか？海藻は髪にいらしいぜ。日本のワカメやコンブを送ってやろうか？」

まさかマクレーのおっさんに会うとは!!って思ったっけ。

「うるせえな、髪の毛は気にしてるんだよ。なんで坊主がここにいるんだ？」

「クリスマスパーティーによばれてな。ああナカジマ商事のやつじゃないぜ。あれはもうごめんだ。おっさんは何で？」

「マリーを迎えにな。俺もあのクリスマスパーティーはもうごめんだ。」

「イブキ!!このおじさんだれ？」

「お姉さま、彼はジョニー・マクレー警部補だと思う。」

すげえなメヌエツト当たりだ

「ジョニー・マクレーってテロリストを単身で鎮圧した人じゃない!!」

アリアよ、単身じゃないぞ。いや、このままでいいか。

「いや、あの事件はこの坊主と☒二人で☒解決したんだ。」

おい、「二人で」を強調するな。このまま勘違いさせておこうと思っただのに

俺の両親もマクレーのおっさんに気がついたのか、マクレーのおっさんに挨拶してる。

そのあと、アリアがナカジマプラザでのことを俺とマクレーのおっさん二人に質問攻め……。

「なあ、おっさん。あれ……。」

「なんだあ、坊主も気づいたか。」

俺とマクレーのおっさんが見ていた先には、怪しげな二人の男がいた。その二人組は置いてあった荷物を持って立とうとしていた。

「イブキ!!マクレーさん!!聞いているの!?!」

「アリアごめん、ちょっとトイレに行きたくなって。マクレーのおっさんはどうするっ?」

「ああ、今日はコーヒーの飲みすぎのせいで、トイレが近くてな。俺も

行く。」

「おっさん年じゃねえの?」

「っは!言ってるやがれ。」

そう言ってる俺とマクレーのおっさんは立った。

「イブキ!!マクレーさん!!早く帰ってくるのよ!!」

「ああ ちょっと長くなるかもしれねえ。」

マクレーのおっさんはそう言ってる俺と二人でトイレとは逆方向に行った怪しい二人組の後を追ったんだ。

この行動のおかげで俺とマクレーのおっさんは「ナカジマプラザの人質を救った英雄達」から「もつとも不幸な、不死身の二人組」になっちゃったんだ。こんな行動しないでアリア達と話していたらどうだったかなあ……。結局なんだかねでこの後と同じ展開になりそうなのがするな……。

ダイ・ード2!!上 銃撃のない海外はあるのかね……

俺とマクレーのおっさんは怪しげな二人組を追っていたんだが……。

「人混みのせいで進みづれえ……。外人は体が大きいから見えねえし……。みんな小っちゃくなっちゃまえ。」

「っは！小っちゃいより大きい方が良いだろうが。」

マクレーのおっさんよ、そんなにでかいことを自慢したかったのか？子供相手だったんだぞ。

「っけ、でかいからって調子に乗りやがって。マクレーのおっさん、あの時は格闘は力任せのお粗末なものだったけど、今はどうだ？」

格闘はおっさん力任せだからな、何か言われたらこのこと言ってるうって思ってたんだっけ。

「うるせえ、坊主だっけそうだっただろうが」

「俺は銃剣道をやっててね。少なくともおっさんよりは活躍しそうだ。」

「言ってやがれ。」

軽口を言い合っていたら、二人組の男は荷物室に入っていた。

「……おい、荷物室に入ったぞ。どうする、おっさん。」

「俺は警察だ。何とかなる。坊主、てめえは自分で何とかしな。」

このおっさん一人でやる気だな？格闘は弱いくせに。

「おい、警備員の兄ちゃん。ちよつと荷物室の中に入れてくれねえか。警察なんだが怪しいやつが入ったみたいでな。」

そういつてマクレーのおっさんは警察手帳を見せびらかした。絶対について行ってやるって思った俺は、銃剣道の師範から教わった「影を薄くする技」を使い、マクレーのおっさんと一緒に荷物室に入った。この技のおかげで誰にも気づかれず荷物室に潜入できた。今思えばあの師範何者だよ、「影を薄くする技」なんて一般兵じゃ教わらないだろ。

「なんだ坊主、ついてきたのか。」

「なんだって俺は、おっさんの☒相棒☒だからよ。」

「懐かしいこと言ってくれるねえ」

「あっちだ、おっさん」

話し声が聞こえる。俺は近くに落ちていた1.5メートルほどの金属の棒を拾った。

「おい、兄ちゃん。ここは一般人は立ち入り禁止だぞ。」

「あんただってそうじゃないか」

「いやあ・・・俺は警察だ。」

おっさんが言った瞬間、あの二人は拳銃を抜いて撃ち始めた!!絶対あの二人組は一般人じゃないぞ。チクショウ!!俺は銃持っていないから隠れるしかねえ!!撃ち合っていると一瞬、銃声が止んだ。野郎、回りこむ気だな。

「おっさん、囲まれるぞ」

「分かってらあ、ちったあ黙ってやがれ。」

するとまた、銃撃が始まった。そうしたらマクレーのおっさん拳銃落としやがった!!

こいつはヤバイ!!俺とおっさんはベルトコンベアに乗り、ばれないように敵に接近し、接近戦を挑もうとした。敵の中肉のほうの男に近づいた瞬間、おっさんはその男に殴りかかろうとし・・・

「三段突き!!!」

俺が持っていた棒で中肉の男のみぞおちに突きをくらわした。「三段突き」はFateシリーズに出てくる喀血美少女剣士の放つあの突きの槍版だと思ってくれ。というかこれ、師範から教えてもらったんだけど、よくこんな技できたな。絶対転生する前の世界じゃ無理だ。マジで三回の突きが一つしか見えないもの。あの師範、絶対一般兵じゃないだろ。できるようになった自分も大概だけどき。

話を戻そう、中肉の男は声も上げずに気絶してしまった。

「やるじゃねえか坊主。」

「おっさん、拳銃落とすってどういうことだよ。」

「うるせえ、この傷見ろ」

おっさんの手の甲に傷があった。弾がかすったのか？つてもう一人の細見の男が撃つてきやがった!!俺とおっさんは逃げ、細身の男が俺らを探しに来たところで奇襲、殴りかかって……っておっさん何コンベアに男と一緒に落ちてんだよ!!俺は急いでコンベアに乗り、おっさんと細身の男が殴り合っているところに合流し、細身の男に三段突き!!細身の男が気絶し一安心……かと思つたらすぐ近くにコンベアに乗ってる荷物の形を整えるローラーが!!俺とおっさんは急いでコンベアから降り、細身の男はローラーに挟まり痙攣してる……。南無阿弥陀仏……。

「おい、おっさん!中肉の野郎がいない!」

「なんだと!!」

中肉の野郎が気絶させたのに全然見当たらねえ。そいつがさつきまで転がっていたところに走ると、男の姿はなく、一面に水や溶けかけの氷が落ちている。

「あの野郎が倒れていたところに、解けかけの雪がある。誰かに回収されたか?おっさん。」

「というと外部関係者か。面倒臭えことになりそうだぜ!!」

ガチャツ!!

俺とおっさんの後ろで銃を構えた音がした。俺とおっさんは手にしていたものを落とし、手をあげ、恐る恐る後ろを向いた。

銃を持った太った警察官がいた。

そのあと俺達はこの空港を管轄する署長の部屋に連れていかれた。この時、俺は「自分はこのおっさんの息子だ」と嘘をついて何とかごまかした。マクレーのおっさんは嫌な顔してたけど。

ここのハゲた署長は俺らの話を聞かないで、「置き引き相手に銃撃戦なんてどういふことだ!!」と言って聞かなかった。……いや空港で泥棒が銃使うってことは、ヤバイ奴らだろって思ったが駄目だった。

その後、ハゲの署長から解放された俺達は納得がいかなかった。

「おっさん、どうする。あのハゲまともに話を聞こうとしねえ。」

「こういう時は、友人に頼むのがいいんだ。黙ってみてろ。」

そういうと、マクレーのおっさんはいつの間撮ったのかわからな  
いが、細身の男の指紋の写真をメールで送り、そのあと携帯電話で何  
か話してた。数分後話が終わったのかマクレーのおっさんは携帯電  
話をしまいつつ。

「これはヤバいことになりそうだな。」

「どうしたんだ、マクレーのおっさん。空港で銃撃ちまくるよりまず  
いいことなのか？」

「あの細身の野郎、2年前にホンジュラスで死んだ元アメリカ軍軍曹  
だそうだな。」

うん、こいつはヤバいことになりそうだな。

俺とおっさんはあのハゲ署長は話にならねえ。しょうがねえ、管制  
室で直談判だ、ということになり、警察手帳を見せびらかしながら管  
制室に突んだ(俺は「影を薄くする技」を使って誰にもばれていない)。  
その管制部長に事の重大性を話していたが(なぜかハゲ署長がい  
た)急に走路の着陸誘導灯が消えちまって、管制室にある部屋の機械  
が制御不能になっちまった。

その後、急に放送が流れてきた。放送の内容は「俺は元米軍特殊部  
隊だ。麻薬王の将軍を奪還するため、我々は空港の管制システムを  
乗っ取った。余計な真似はするんじゃないぞ。」

うん、ここまでくればわかるさ……。俺は絶対違う、ただの偶然  
だって思ったかったけど、そろそろ現実を向くさ。ダイ・コード2!!??  
あれって第一作の1年後とかじゃなかったっけ!?!?なんで5年後にな  
るのさ!?

こんな風に混乱していたらマクレーのおっさんと、なぜかここに  
いた女の人がエレベーターに乗せられて管制室から締め出されようと  
されていた。ちよつと待って、俺も一緒にエレベーターに乗るか  
ら……。

何とか乗れたよ……。

「おっさん、こいつあヤバいことになっちまったな。」

「お、坊主いたのか。」

「ずつといたぞ、気づかなかったのか？」



なんか一緒に乗ってる女の人がすっごく驚いてる。

「坊主ならどうする。」

「建設中の管制室へ威力偵察。敵も構えていそうだけど。それと敵の本拠地の搜索。どう考えても空港の近くに敵の本拠地はあるだろうね。」

「まあ無難なところだな。」

そう言つて、マクレーのおっさんはエレベーターの天井を開け、そこからエレベーターを出ようとした。あ、俺小さくてエレベーターの天井に届かねえ……。

「ほら坊主。手を出せ。」

「なんだ、邪魔じゃなかったのか。」

「それなら、こなくていいんだぞ。」

俺はしぶしぶおっさんに手伝ってもらいエレベーターから出た。なんか女の人が喚いていたけど

「お姉さん、このことは内緒だよ。」

俺がそう言つて天井を閉めたから、きつと内緒にしてくれろ…….

エレベーターを出た俺達は迷っていた。そりゃあ空港の裏の通路。職員じゃない限り迷うわな。ほんとあの時の俺って考えなしだわ。今の俺はそうじゃないと思いたい。

迷い続けていたら今時珍しくレコードでクリスマスソングを流してあった。なんだ?と思つた瞬間後ろに気配!?俺は迷っている途中で拾つた棒をそいつに突き付け、おっさんは銃を突きつけた!

結果を言おう。清掃員のおじさんでした。本当にあの時はごめんなさい。おじさん曰く「一人でクリスマスは寂しい、せめてクリスマスソングでも流そうつて思つて自宅から持ってきたレコードを流していた。」つて震えながら言つていた。余計に寂しくならないのかね?

俺たちはおじさんに謝り、そして、このおじさんから空港の図面をもらった。(脅迫ではない、いいね?)その図面を見て、俺たちは管制室から建設中の管制室への道へ出る方法を見つけた!!

「普通のクリスマスなら、たいていツリーに、七面鳥の丸焼き……。なのに俺はパイプのなかを這いずり回る……。」

「マクレー父ちゃん、プレゼントにケーキを忘れちゃだめだよ。期待してるよ。」

「うるせえ！坊主のような奴が俺のガキなら、俺は一生家に帰んねえぞ。」

マクレーのおっさんよ、そこまで嫌なのか……。

「マクレーのおっさん、通気口を移動するなんて懐かしくないか？」

「こんなことはもう二度とやりたくねえよ……。坊主は楽しいのか？いい感性をお持ちで。」

「前回の下から弾が飛び出てくる通気口よりだいぶました。」

「違いねえ。」

そう、たどり着く方法は定番の通気口を通るだ!!うん、これ本当にきついで。埃だらけだし……。

ダダダダダ!!!

「おいおっさん銃声が聞こえるぞ逃げ!!後ろがつつかえてるぞ!!」

「うるせえ!!こつちも急いでんだよ!!」

こういう狭いとこだと大きいより小さいほうが有利だ。っへ!何が大きい方が良いだ!

銃撃戦のするところの通気窓にやつと着くと銃声は止んでいた。まったくおっさんが遅いから……。そこからのぞくと白髪の初老が銃を突きつけられてる!!マクレーのおっさんは通気窓を蹴破り、突きつけてる野郎に銃をぶつ放した!!マクレーのおっさんよ、さすがに敵一人に対して5、6発はもつたないか?つとアブねえこつちにほかの敵が撃ってきやがった。マクレーのおっさんは銃で反撃して敵が撃たなくなった瞬間、換気窓から飛び降りた!!残存兵力は4人、おっさんと俺で二人ずつか……。

俺は「影を薄くする技」を使い、俺も換気窓から降りた。すげえ、全然ばれねえ。この技の名前、いつか考えておくか?とか思いながら、こと切れている空港警察特殊部隊の隊員から銃をパクっていた。つて隣で死んでるテロリストのやつ、ルガーP08なんて珍しいの持つ

てるな、これもいただくか。

M16（銃剣付き）とルガーで武装した俺は「影を薄くする技」を解き、銃を敵に連射した。やっと俺に気づいてくれたか。連射によって2人死亡、残り2人。俺に注意が向いたところで、マクレーのおっさんは敵の一人を鉄パイプでできている大きな足場の下敷きにさせ無力化に成功、残り一人……。つておっさんなんであんたも長机の下敷きになってるの？銃も落としちゃったし……。やべえあと一人無力化しないと、そう思つて引き金を引いたが、アサルトライフルから弾が出ない!!不発弾かよ!?!というか弾倉に弾ないし!?!

この時焦つてたんだろうな……。残弾管理なんて基本中の基本なのにな……。

俺は「影を薄くする技」を使い、最後の敵に気づかれぬようにし、一気に接近。（マクレーのおっさんに注意がいつてるな……?まあ長机の下敷きだしな。）バレないギリギリまで接近し、「影を薄くする技」を解いて、銃剣で

「三段突き!!」

見事に決まった。何とか全員倒したようだ……。まあ空港警察特殊部隊も全員倒されたけどね……。

やっとマクレーのおっさんは長机から抜け出せたようだ。というか銃突きつけられてた白髪の初老、ケガしないで生きてるし。なんて豪運だよ。俺やマクレーのおっさんだって弾丸は直撃はしてないけど結構かすつて傷作つてるのに……。

「おい、爺さん大丈夫か？まったくなんてクリスマスだ、くそツタレ。」マクレーのおっさんそれは同感だよ……。

ドーーーーー！！！！

爆発音がした。煙が晴れてくると建設中の管制室がボロボロになつてる。爆破されたようだ。なんてクリスマスプレゼントだ……。この後、敵が放送を無視した報復をしたんだっけ。そのせいで200人が死んだ。



ダイ・ロード2!!中 銃弾のプレゼントかよ・・・

敵がウインザー114便に偽の管制指示と誤ったILS情報を与え、墜落させようとしていることを俺とおっさんは聞いた。おっさんは鉄パイプと布、灯油を使って即席の松明を作って、滑走路に出ている、危ないことを知らせようとした。しかし、ウインザー114便は墜落し、乗員乗客約200人は全員死亡してしまった。

「くそつ 今空港の上で旋回している飛行機の中に、マリーがいるんだ!!」

「おっさん、落ち着け。ここで焦ってもだめだ!!。ナカジマプラザでも人質に取られても冷静に対処しただろ!!」

「そうだったな坊主。ところで、ナンパした子と坊主の親、心配してるんじゃないか。」

「・・・僕ノ名前 イブキ・マクレー ジョニー・マクレー 父サ  
ンノ 息子サ。」

「現実逃避したっていいことねえぞ。」

うるせえ・・・わかってるよ・・・。

「どうせ、今戻ろうが、おっさんについて行ってから戻ろうが、どうせ怒られるんだ。最後までついていく・・・。」

「ませてるなあ・・・。子供が入れねえとはてめえで何とかしろよ。」  
ですよねー。

この時戻っていれば、だいぶ変わっていたかな・・・。ダメだ結局おっさんと合流して同じ展開になりそうだ。

アメリカ陸軍対テロ特殊部隊が到着した。アメリカ陸軍対テロ特殊部隊を率いているグレーン少佐は、敵の頭であるエドワード元大佐（そういえば、そんな名前だったな）の教え子だったらしい。グレーン少佐はあえて消極策をとり、麻薬王の將軍の身柄を渡し、彼らが要求した航空機で高跳びする際に一網打尽にするという。どう考えてもおかしくないか。

「なあ、おっさん。おかしくないか。」

「っ!!坊主いたのかよ。」

そういえば、「影の薄くなる技」使ってたな。

「この作戦、一網打尽に失敗したらどうするんだ？空軍に連絡して飛行機落とすのか。」

なんか、この部屋にいる人全員こっち見て驚いている。あ、「影の薄くなる技」解いちゃった。

「少年、どこから入ったのかわからないが、君はここにいちやいけな。早く出ていきなさい。」

グレーン少佐はすぐに我に返ったのか、俺に出ていくように言った。

「グレーン少佐、出ていくのでこれだけは教えてください。一網打尽に失敗したらどうするんですか。」

「大丈夫、我々アメリカ陸軍対テロ特殊部隊は失敗しないさ。」

「考えてないんですか？」

「さあ、出ていくんだ。」

渋々、俺は作戦室（仮）から追い出されてしまった。

しばらくすると、マクレーのおっさんが出てきた。

「おっさん、結局どうなった。」

「坊主も聞いていただろう。あの作戦で決行だ。」

「となると、だいぶ怪しいな。空軍に連絡してないだろうし、最悪あの部隊の独断で来たのかもしれない。」

そうだとしたらマジでヤバイ。確かダイ・オード2は裏切りがあったような覚えがあるけど、ほとんど忘れちゃった。それに、完全にクロスはしてないからな……。つたく、転生前のこういう知識は全く役に立ってないな。

「ん？坊主、空軍はなんとなくわかるが、独断の理由がわからん。」

「おっさん、簡単だ。この作戦は、失敗したらそれこそ戦闘機で落とすしかない。なら空軍と協力しなきゃいけないから、空軍は佐官、せめて大尉クラスは絶対に来るんだ。なのに空軍関係者は誰も来ていない。」

「ああ、それは理解できた。部隊の独断ってやつはどうしてだ？」

「あんな、一か八かの作戦。上が許可しないだろ。すでに200人以

上の犠牲者が出てるんだ。どんなに頑張ったって隠せない。だから、上は慎重になる。失敗したらマスコミに叩かれるからな。それなのに、失敗したら終わりの作戦なんて絶対に許可しないんだ。これらことから、上が奇跡のような無能か、部隊の独断が考えられるんだ。待てよ、もしかしたら……。」

「坊主どうした？」

「何でもない、心配すんなおっさん。」

原作では確か……あの部隊裏切ってたんだっけ？でも、ここは原作とは違っている世界だ。慎重にして、原作知識は参考程度にしないと……。」

「坊主は、親とカワイ子ちゃんに叱られることでも心配してろ。」

Orz……。」

何とか立ち直った俺は、マクレーのおっさんと何をするか考えた。た。

「気に食わねえ軍人は護送機で將軍をここにまで来させるつもりだ。」  
「となると、敵はその將軍を確保しようとするな。俺たちは將軍の身柄を確保し続けないとやばいぞ、おっさん。」

「ああ、なのに軍人様は將軍の護衛をしようとしな。俺らで身柄確保しなきゃだめだ。坊主、護送機はどこに着陸するかわかるか？」

「詳細な図面が必要だ。あそこに行くぞおっさん。」

「あいつのところか。」

そういって、俺とマクレーのおっさんは「クリスマスマスを資料室の中で一人寂しくレコードを流す清掃員のおっさん」のところに行くことにした。だけど……。」

「イブキ!!どこに行っていたんだ!!」

「また、心配させて、どういうこと!？」

両親に見つかりました。お父様、お母様ここ公共の場よ……他人が見てる……。」

「イブキ!!トイレ長すぎよ!!どこ行ってたの!？」

アリア様まで怒るとは……。」

「……(涙目)」

メヌエットのこれはだいぶつらい。車いすの美少女が涙目ですつと見ている。

「ご両親、お嬢さん達、本官と彼は今とても重要なことをやるために急いでいます。叱るのは後でにしてもらえないでしょうか。」

「・・・また、問題先送りにしやがった、このおっさん。つて俺を置いていかない。」

「・・・それはとても大切なことかい、イブキ?」

「・・・父さん、義を見てせざるは勇なきなりつて言葉があるだろ。俺、これをやらないと、将来ずつと引きずりそうなんだ。」

「・・・わかった。行ってきなさい。」

「あなた!?!」

「男にはやらなきゃいけない時があるんだ。臭いセリフだけどね。でも、これは真実だと思うんだ。」

「・・・分かったわ・・・イブキ、ケガをしないでね、無事に帰ってくるのよ。」

「父さん、母さん、俺言ってくるよ。」

驚いたことに、俺の両親は納得してくれた。

「叱るのはホテルについてからだな。」

お父様、勘弁してください・・・。

「私たちは納得したけど、この子たちの説得は自分でするのよ。」

そういつて、母さんはアリアとメヌエットを見た。え?俺がやるの・・・。

「アリア、今やらなきゃいけないことができたんだ。ナカジマプラザのことは、クリスマスパーティーの時に話すから。」

「分かったわ・・・。」

アリアはなんとかあったが(ナカジマプラザの件・・・おっさんの功績にするか)、問題は・・・。

「・・・(ウルウル)」

メヌエットだ。彼女は頭がいいからな。

「大丈夫、無事に帰ってくるから、心配しないで。」

「・・・ちゃんと帰ってきて、お兄さん。」



「大丈夫、約束するさ。」

「……お兄さんと言われて、なんか、こう、グツとくるものがあつたぞ。落ち着け俺……俺はロリコンに非ず。」

「よし、じゃ、行ってきます。」

そう言つて俺と、マクレーのおっさんは資料室へ走つた。

珍しくおっさんは何も言わなかつたな。意外と空気が読めるのか？

これが、俺の親の最後の言葉になつちまつたんだっけ？あ、違つたこれは最後じゃねえ、間違えた。

「また、あんたたちかい!？」

清掃員のおじさんは震えていた。あ、本当にあの時はすいません。事情を話し、おじさんは空港の凶面を探してきてくれた。

「おい、坊主。護送機の着陸するところはどこだ。」

「落ち着け、おっさん。ウィンザー114便は第一滑走路を南西から北東に向かつて墜落した。第三、第四滑走路は第一滑走路とクロスしている部分があるから使用は難しい。だから、第二滑走路に着陸だ。一人の護送だし大型機でもないだろうしな。」

「さすがだ坊主。行くにはどうすればいい。」

「ここから行くとなると、相当時間がかかる……」

ヤバいな、凶面を見た限りだと、だいぶ行つたり来たりしなきゃいけないらしい……。

「あのう……。」

「ああ、すまん。せつかくのクリスマススを邪魔しちゃつてな。」

清掃員のおじさんが何か言いたそうだ。

「第二滑走路までの早い道を知ってますよ。」

マジかよ、このおじさん。というか清掃員でよくそんなこと知ってるな。

「どこだ？早く言え。」

「……マクレーのおっさん、脅すんじゃねえよ……。」

「ち、地下から行けばいいんです……。」

あんた、清掃員のくせに、よくそんな抜け道知ってるな……。

俺とマクレーのおっさんは清掃員のおじさんに教えたもらった道から何とか第二滑走路まで来た。そうしたらもう護送機がもう着いちまった。早すぎだろ!?

護送機が止まり、ドアが開いた。すると写真で見たことがある奴が護送機から降りてきた。って麻薬王の將軍!?なんでイの一番に降りるんだよ!?!まあいい、急いで確保しなければ……。俺とマクレーのおっさんは將軍に駆け寄り……

「イピカイエー・マザーファッカー!!」

二人で將軍を殴った。將軍は倒れ、銃を落とした後、俺とマクレーのおっさんは將軍に銃を突きつけた。

「ターミナル到着まで席を立たないでください。坊主、銃持ってたんだな。」

「ご搭乗ありがとうございます。拳銃ならコートの下に隠せられるからな。」

ほんと、拳銃って小さいから隠しやすいな。親にも軍人にもばれなかったし。メヌエツトはわかってそうだけど。

「お前達は誰だ。」

まあ、急に銃を突きつけられたら、そう思うよな。

「俺は警察、こいつは相棒。こっちはイイヤつ、そっちはワルイヤつ、お分かり?」

「このおっさんの嫁さん助けるために、人質になってもらうぞ。」

そういつた瞬間俺たちの後ろから弾が飛んできた。アブねえ!!

車から武装してきた男たちが何人も出てきた。俺達はとつさに反撃をして、二人を倒したが、敵は一斉に銃を撃ってきた!!これはたまらんと護送機の中に隠れたら將軍が銃構えた。

「じつとしてろ!!」

俺とマクレーのおっさんは將軍に向けて発砲、將軍の肩に一発命中し、將軍は銃を落とした。

俺とマクレーのおっさんは將軍が銃を落としたのを確認すると、コックピットに入り、立てこもった。

「坊主どうする。」

「八方ふさがりだ。まあこの護送機は軍用機のようなだ。敵が使っているサブマシンガンぐらいじゃ、軍用機のコックピットは抜けやしないさ。軍用機でよかったなおっさん。まあ、最悪の場合射出座席で逃げよう。」

これがフラグだったんだろうなあ・・・。

敵のほうも何かしゃべっているが聞こえない。

「マクレー、そして村田少年!!またお前たちか!!実に勇敢だ!!軍人の理想像だ!!」

エドワード元大佐が急に俺たちのことを褒めちぎった。え?マクレーのおっさんはともかく、俺まで知られてるの!?

「坊主コックピットのドアが開かねえ!!」

マクレーのおっさんがそう言った瞬間、敵は一斉に銃をコクピットに撃ち始めた。これ軍用機よ、コックピットには多少の防弾装置あるからサブマシンガン程度じゃ抜けないぞ?

って普通に抜かれてるんですけど!!ちよつと待って、これどう考えても欠陥品でしょ!?!ガラスも普通に割れたし・・・。あれ、防弾ガラスじゃないのかよ!?!ちよつと、弾がかすったぞ。

銃声が収まってから

「手榴弾を放り込め!!」

マジかよ!!

「おっさん急いでシートベルトつけろ!!」

「なんだ、どうした急に」

「いいからつけろ!!!急げ!!!」

このおっさん、銃声のせいで、耳が遠くなつて、敵が言ったの聞こえなかったな?

「っ!!わかった。」

マクレーのおっさんがこう言った瞬間。ゴトツ、ゴトゴト!!手榴弾が外から投げ込まれ始めた。おっさんが焦って、シートベルトに手間取っている。急げよ!!

敵のほうから

「退避——!!」

と聞こえた瞬間、俺とおっさんは射出装置のレバーを引いた!!  
ドカー——————ン!!!

手榴弾が爆発した。俺とおっさんは、手榴弾の爆発より一瞬早くレバーを引いたので、死なないで済んだ。そういえば、敵の使ってる手榴弾、やけに爆発までの時間が長かったんだよなあ。

「うわあああああああああああああああ!!!」  
「ばんぎ——————い!!!」

さすがに、爆風に巻き込まれながらの逆バンジーは怖い。．．．あれなんだな、「ばんぎーい」って言って突撃するのって、大きな声出して恐怖心を忘れさせようという理由もあるんだな。実感したわ。

結局俺とマクレーのおっさんは大小多くの傷を作って、將軍を確保できなかったわけだ。

そして、俺たちは、またハゲの署長に怒られていた。しかし、グレイン少佐は俺達の勇気を称えハゲの署長を批判した。弁護してもらった恩はあるんだけど、この少佐やっぱり怪しいんだよなあ．．．。

すると銃撃戦の時に助けた白髪の初老が来た。敵の本拠地の予想がついたそうだ。

「敵は、ジョン・F・ケネディ国際空港に隣接しているアイドルワイルドパークにある小屋が怪しい。」

そこで俺とおっさんが先行し、見てくることになった。ただの厄介払いだろ、これ。

この小屋を発見し、この小屋での戦闘のおかげで俺とマクレーのおっさんは、敵の本当の計画を知ることになったんだよなあ．．．。

ダイ・ード2!!下 最も長いクリスマスの終わり・・・

俺とマクレーのおっさん、白髪の初老は小屋に行くため、車に揺られていた。

「そういうえば、なんで子供がいるんだ？」

「ああ、巻き込まれちゃってね。安心して、あのおっさんよりは戦えるから。」

「何言ってやがるんだ坊主、まあ役には立ってるけどよ。」

「そ、そうなのか・・・。」

「俺は村田維吹っていうんだイブキって呼んでくれ。」

「そういうばこのじいさんの名前知らなかったな。」

「ああ、私の名前はレス・バーンっていうんだ。よろしく、イブキ君。」

「じゃあ、バーン爺さんって呼ぶね、よろしく。」

「とまあこんな感じで車に揺れていたが、

「イブキ君、君は本当にこれで戦うのかい？」

俺の持っている装備はルガーP08と銃剣一本。民間人の少年が戦うのに、こんな軽装備でいいのか？って聞きたいのだろう。

「大丈夫、大丈夫。バーン爺さんは後ろで気楽に通信してくれればいいよ。」

小屋の近くに着いたので、車から降り、徒歩で小屋まで行くことになった。小屋に着くと、二人の武装した男が見回りをしていた。こいつは黒だな。

「おっさん、俺が処理してくる。無いとは思いますが、バレたら援護よろしく。」

「何言ってるんだ坊主。」

「管制室で直談判してた時、俺はずっとおっさんの後ろにいたんだぞ。」

「・・・気をつけろよ、坊主。」

「わかってらあ」

雪が降り積もっている。足跡っていう「違和感」ができちまうけど仕方ない。俺は少し遠回りをして、二人のうちの一人に近づき、銃剣を振るった!!

ドサツ・・・

首が落ち、敵は倒れた。あと一人だ。

あの銃剣道の師範から、ナイフの術も教わったんだっけ……。しかもナイフによる首の落とし方とか教えられたし……。

あと一人に向かおうとしたところ、急に携帯が鳴る音!!おっさん、なんで携帯鳴らすんだよ!!電源切つとけよ!!そのせいでおっさんは敵にバレ、敵と格闘してるし……。

今思ったら、なんであの敵は銃を持っていないのに、使わなかったんだろう。今でも不思議でならない。

おっさんがだいぶ不利だし!!急がないと!!マクレーのおっさんがマウントポジションを取られナイフに刺されようとした瞬間、一閃!!俺はそいつの首を落とした。そのせいで、マクレーのおっさんは返り血で見事な紅に染まったけど、気にしない気にしない……。

「ったく、服が真っ赤じゃねえか。何てことしやがる。」

「助かったんだから、いいじゃねえか、おっさん。」

マクレーのおっさん、いい体格してるのに格闘は力任せだから弱いつて、本当もつたいないよな。

バーン爺さんが急いで空港へ連絡したため、アメリカ陸軍対テロ特殊部隊のグレーン少佐達が数分も待たずに来てくれ、小屋を包囲した。そのとき、ハゲの署長にまた色々言われたが、またグレーン少佐に助けられた。助けてくれるのはありがたいけど、俺グレーン少佐のこと疑っているんだよな……。

小屋の窓が割れる音がした。

「伏せろ!!」

誰が言ったかわからないが急いで俺とマクレーのおっさんは近くの木に隠れた。

ズダダダダダダ!!!

あいつら気づいてこっちに銃を撃ってきた。アメリカ陸軍対テロ

特殊部隊の隊員達は反撃を開始したがあたる気配はない。ちよつと待て、あの隊員たちの射線の先には小屋があるのに、なんで小屋に一つの穴も開かないんだ!? しかも隊員の近くに大量に紙の燃えカスが落ちている……。もしかして……。あいつら!! いや、そっちよりも敵が逃げちまう。

「おっさん追うぞ!!」

「馬鹿野郎、弾が当たるぞ。隠れてろ!!」

「弾は絶対に当たらないから大丈夫だ!! 急がないと逃げちまうぞ!!」

「わかったよくそツタレ!!」

俺とマクレーのおっさんは走り、敵を追いかけた。しかし、敵はスノーモービルに乗って逃走した。敵は8台。後の2台はやれる!! 俺とマクレーのおっさんは拳銃を撃った!!

この2台に乗ってたやつは動かなくなり、俺とマクレーのおっさんはそのうちの一台に乗り込んだ。

「なんで坊主が乗るんだよ。」

「子供がスノーモービルなんて動かせるわけないだろ!!」

さすがにスノーモービルは動かせねえよ。というか触ったことすらないよ。

「そういえば坊主はガキだったな。射撃は任せたぞ。」

「任せろ。安全運転で頼むぜ。」

「そいつは無理な相談だ、お客様。」

俺とマクレーのおっさんを乗せたスノーモービルは敵を追いかけた。

「おい、もっと当てろ坊主!!」

「こんなに、荒い運転で3台やったんだぞ!! 褒めてくれたっていいだろう!!」

こんな上下左右に揺れているところで素人が3台も敵を撃破したんだ。普通に考えたらすごいことだろ!?

「なんだ、褒めてほしいのか!？」

「……ごめん、寒気がしてきた。」

「本気にするなよ、坊主……。俺も傷つくんだぞ。」

だって、このおっさんが褒めるって気持ち悪くないか？

カチツカチツ

「チクシヨウ!!弾切れだ!!」

「仕方ねえ、俺のやる!!、俺の脇にあるからテメエで取れ!!」

俺はマクレーのおっさんの脇から拳銃を出したが

「おっさんのも無いじゃねえか!!しかも予備弾倉もないし!!」

「わりい、忘れてた。」

残り三台これじゃきついぞ。敵の2台が視界から隠れるところに入り、一台はこっちに近づいてきた。

「ヤバいぞ囲むつもりだぞ!!」

「どっちにしろ、行くっきやねえ。坊主、強行突破は好きか?」

「嫌いじゃないね、ハア……。おっさん、こっちに來るやつに、ギリギリまで近づいてくれ!!」

「死ぬんじゃねえぞ、坊主!!」

「おっさんこそな!!」

そういつて俺はナイフを持った。近づいてきた敵はサブマシンガンを連射してきたが、こっちは反撃できねえ……。そして敵と交差した瞬間

「イピカイエー・マザーファッカー!!!」

俺はナイフを敵の額に向けて投げた。敵に当たったのか、そいつはスノーモービルから転げ落ちながら、大量の血を出していた。

敵を倒し一安心したその瞬間、見えなかった2台が視界に入った。

そいつらスノーモービルから降りて、こっちを狙ってやがる!!

「伏せろ!!」

俺とマクレーのおっさんは伏せ、敵が一齐に打ち始めた。俺とマクレーのおっさんは撃たれながら、スノーモービルをフルスロットにした!!やべえ煙ふきだし始めたよ。ってヤバい、正面にジャンプ台みないなのがある。

「おっさん、前、前!!」

「なんだ?ってうわああああ!!」

俺とマクレーのおっさんの乗ったスノーモービルは宙を舞った。



これは敵のいい的だ。

「手離せ、坊主!!」

「分かった!!」

俺とマクレーのおっさんがスノーモービルから手を放し、さらに宙を舞った瞬間、俺たちの乗っていたスノーモービルが大爆発!!

「うわああああああああああああああああああ!!」

「ぎゃああああああああああああああああああ!!」

俺たちは地面に叩きつけられた。完全に満身創痍・・・超痛え・・・敵は爆発に巻き込まれて死んだと思っただのか、どっかに行っちゃまった。

今よく考えたら、なんであんな至近距離から撃たれたのに、俺達は一発も直撃してないんだ？運良すぎだろ。

俺とマクレーのおっさんは体を引きずるようにし、空港に戻った。

「ん？あんたたちか・・・って、おい!!どうした!」

あ、清掃員のおじさんだ。まあ、俺達はボロボロだから驚かれてもしょうがないか。俺とマクレーのおっさんは清掃員のおじさんに事情を話し、空港内で荷物や乗客を運ぶ小さな車で、署長室に行ってもらうように頼んだ。

「どいたどいた!!」

「危ないからどいてくださーい!!」

なんで、一般人を避難させてないんだよ・・・。あ、アリアとメヌエツト発見。手振っておこう。

「おっさん、その持つてる銃はやっぱり。」

「ああ物的証拠だ。」

「となると、相当まずいぞ、避難すらしてねえし。」

「まあ、何とかするしかねえな坊主。」

俺とマクレーのおっさんは署長室に車ごと乗りこんだ。そしてエドワードとグレーン少佐達の銃撃戦で使われたマシンガンのマガジンが空砲であったことを身をもって知っていただき、初めからグラントが裏切り者であったことを教えた。その時のハゲの署長は赤鬼のごとく怒ってな、俺らに協力したんだ。それで俺たちは、敵と裏切者

たちが向かった航空機へ急いだんだ。だけど、ハゲの署長は警察部隊はクリスマス混雑とウィンザー114便の墜落による混乱で何もできないとか言い出した。まったく使えねえ……。

何とか滑走路に着いたら、敵の高飛び用の飛行機が動き始めていた。どうしようかと思つたところ、マクレーのおっさんは近くにあった報道用のヘリを見つけた。

「ヘリはいい思い出がないなあ」

「なんなら来なくてもいいぜ、坊主。」

「つけ、来るなって言われてもついて行ってやるよ。」

おっさんは報道中のニューキャスターに警察手帳を見せびらかせ、ヘリコプターを動かしてもらい、敵の飛行機の主翼に行くように言った。

「カメラマンのお兄さん、このレンチ借りるよ」

なんかカメラマンとニューキャスターも一緒に来ちまつたけどしょうがない。

俺達はヘリコプターから飛行機の主翼に飛び移った。マクレーのおっさんが主翼の可動部に上着を詰めて、動かせないようにしていたら、ドアが開き、グリーン少佐が来た。

「君たちには何年もかけた計画を台無しにされたよ。まさか、中年オヤジと少年によって、計画が水の泡になる一歩手前になると思わなかったよ。」

「グリーン少佐には色々と弁護してもらった恩があるけど、まさか裏切者だったとはな。少佐、かかってきやがれ!!」

「私は子供だからって手加減はしないぞ!!」

グリーン少佐がそう言つて俺に近づいてきた。つとアブねえ師範ほどではないけど、ボロボロの体じゃきついぞ。

しかし、俺のほうが上手だったか、レンチでグリーン少佐の頭を殴ることに成功した。グリーン少佐はそのまま地面に落ちていった。

「おっさんここに給油口がある。開けてくれ!!」

「つ!!ああ、わかった。!!」

俺の考えが通じたのか、マクレーのおっさんが給油口を開けようと

したら。今度はエドワードが主翼に來やがった。クソツ!! 血の流しすぎで意識が朦朧としてきやがった……。

「さあこれで終わりだ、ガキ、マクレー!!」

エドワードがそう言うってナイフを俺に向かって突き出してきた。何とか食らいつついてるけど、大分きついぞ……おっさん早く給油口を開けてくれ……。そう思いつつレンチとナイフをぶつけていた。俺が力を振り絞り、何とかナイフを弾き飛ばしたけど、勢い余って俺のレンチも飛んで行っちゃった。お互い素手か……殴り合いなんざ、大人と子供だぞ、勝てる自信がない……。おっさんはまだか? 思った瞬間、マクレーのおっさんは、俺とエドワードの戦っているところに来た。え? さっさと逃げようよ。

エドワードは意外と強かったらしく、俺とマクレーのおっさん二人で殴り合っても圧倒していた。そして俺達は給油口の近くまで押されていった。その時、飛行機が大きく揺れたせいで、おっさんは主翼から転げ落ち、俺は給油口の近くでぶら下がっているようになってしまった。おっさんはちゃんと仕事をしたようで、給油口は開いており、そこから滝のように燃料を出していた。そこで俺は、さつきグレン少佐と戦っている時に、奪った二つの物を給油口に入れた。うん、この感覚だとちゃんと燃料タンクまで行ったな。その瞬間

「オラア!!」

と掛け声でエドワードの蹴りを受け、俺も飛行機から落ちてしまった。

「今度こそ、さよならだあ!!」

俺も、あんたらともう会いたくねえよ。

体が小さいせいとか、よく吹っ飛び、マクレーのおっさんの近くまで転がってしまった。飛行機は加速を始めた。

おっさんはジツポを取り出し火をつけ、

「イピカイエー・マザーファッカー」

そういつて漏れ出た航空燃料に火をつけた。その火はどんどん燃え移り、飛行機に近づ……。かなかった。むしろ追い放されてる。

「おっさん、さすがに火は飛行機より早くないぜ。」

「じゃあどうして開けさせたんだよ。」

「まあ、見てなつて。イピカイエー・マザーファツカー」

言った瞬間、飛行機は大爆発をした。つて俺のすぐ目の前に飛行機の骨だと思うやつが刺さつたし、アブねえ……。

「燃料タンクの燃料をいい具合に抜いて、燃料と空気を混ぜ、そこに手榴弾を爆発させたのさ。ここまででかい爆発になるとは思わなかつたけど。」

ほんと、あんな大爆発になるとは思わなかつた。火薬でも積んでいたのかね。

「……坊主よく考えたな。ハハハ。」

「何笑つてんだよ、おっさんククツ……」

なんか急におかしくなつちまつたんだ。

「っはっはっはっはっは!!!」

二人して地面に横になつて笑いころげた。

今思うとよく生きてたよなあ……。実はもう一つ、この後、重大な事件が起こつたんだが。

おっさんが見つけた火を頼りに飛行機が下りてきた。それを聞いて安心したぜ。マリーさんが乗つてた機体は燃料が少なかったらしいからな。マリーさんの飛行機が下りてきて、そこから乗客が出てきたとき、

「マリー!!!マリー!!!」

とか言つておっさん大きく手を振つてたつて。それでマリーさんと会つたら、マクレーのおっさんとマリーさんが抱き合つたんだ。結構感動したなあ。その後、俺とマクレーのおっさん、マリーさんと一緒に俺の親のところに行こうとしたら、マスコミにマイクとカメラを向けられた。

マスコミを避けて、ターミナル内に入り、俺の両親たちを探していた。両親は何か見つかった。あちこちケガをしていたのでみんな驚いたようだったが、よく帰ってきたと言ってくれた。その時、違和感があった。顔をあげると、アリアの後ろに空間を無理やりつないだような丸い穴があった。その穴の中には、柱のようなものと、根暗そ

うな男、ピンク色の髪の少女、そしてアリアに向けて驚きながら銃を構えているオールバックの青年が・・・

「アリア!!避ける!!」

根暗そうな男がそう言っつて、アリアが後ろに振り向いた瞬間、我に返り

「伏せろ!!」

そういつて、俺の近くにいたアリアとメヌエットを押し倒した!!

ターン!!ダダダダダダ!!!

銃声が聞こえ、俺は胸を撃たれた。

薄れていく意識の中、俺はこう思ったんだっけか、「俺、外国に行つたら厄介ごとに巻き込まれる運命にでもあるのか?」今のところ正解だよ、くそツタレ。

こうして、12歳の長いクリスマスは終わった。

ダイ・コード2!!その後 やつと家に帰れる・・・

目が覚めた俺は、周りを見渡した。やけに大きな部屋にいるらしい。部屋の窓からは曇天が見えるから、夜ではないだろう。隣のベッドにはアリアが寝ている。他にもベッドがあつて、みんな寝ているようだ。自分のベッドを見ると、メヌエツトが俺のベッドに寄りかかつて寝ていた。あれ? どういうこと?なんで知らない部屋にいるんだ?そいえば「知らない天井だ」つていうの忘れた。などと考えていると部屋のドアが開いた。

「いよお坊主、こんなに早く起きるとは思わなかったぜ。」

包帯だらけのマクレーのおっさんとマリーさんが来た。

「おっさん静かにしろ。」

そう言つて、俺はメヌエツトのほうを見た。

「悪かったよ。」

そして、俺はマクレーのおっさんから、俺が撃たれ後のことを教えてもらった。あの時、敵の生き残りが、道連れとばかりに空港内に入って銃を乱射したらしい。ちよつと待て、そういえば、別の空間のような穴が見えたよな・・・。あれはただの幻覚か、そうだよな。

「一応、そういう事になつてるが・・・。」

なんか嫌な予感がする・・・。

「お前を貫通し、あの嬢ちゃんの体にある弾だけ、口径が違うんだ。」

うん、あれは幻覚じゃないらしい・・・。

「あのテロリスト共が使つた銃の口径じゃない。古い銃の弾だ。だが、これ以上捜査を混乱させないため、このことは隠すことになった。だから、お前と嬢ちゃんはテロリストに撃たれた、ということになつてる・・・。」

そして、おっさんの顔が曇つた。

「どうしたおっさん、気分でも悪いのか?」

「・・・いや。じゃあ、聞いてくれ。お前の両親が死んだ。」

はい?」

「おいおい、さすがにそんな冗談、面白くねえぞ。」

「今、俺が冗談言っているように見えるか？」

マクレーのおっさんの顔が深刻だ。

「死因は？」

「銃弾を頭に食らって即死だ。」

この世界に来て約12年。色々世話してくれた両親が・・・そうか・・・。

おかしいな、涙が出ない。そういえば、転生する前の世界でも、いつも世話してくれてた爺ちゃん、婆ちゃん死んでも、あまり涙が出なかったな。人間相当ショックを受けると涙が出ないらしい。そうなのかもしれない。

「なぜか、涙が出ないな。」

「最初、事実を事実として認識しなく、その後少しづつ受け入れてく人間はこういう人の死であり涙を流さないらしい。坊主はそうなのかもな。」

「なるほど。マクレーのおっさんは詳しいな。」

「俺は刑事だぞ？人の心のことも頭に入れなきゃいけねえんだよ。」

そういえば、マクレーのおっさん刑事だったな。職業、リアルスタントマンと勘違いしてたよ。

「坊主、お前の爺さん、婆さんは死んでいるし、叔父、叔母はいねえ。これからどうする。」

天涯孤独になっちまったわけかあ・・・

「イブキ君、よければ・・・」

「マリーさん、俺3月から寮暮らしなんで大丈夫ですよ。それに、入寮までの2カ月くらい一人暮らしなんて平気です。あと、ジョニー・マクレーさんと一緒にいたら、毎日なんかの事件に巻き込まれそうです。」

さすがに、マクレー家に世話になるのはなあ。実際子供もいるみたいだし。

「坊主、俺のこと疫病神かなんかと思ってねえか？」

「え？違うの？」

「俺にしちゃ、坊主のほうが疫病神だ。」

両方、疫病神なのかね。

その後、ある程度話をしてからマクレー夫妻は帰っていった。

「ところでメヌエツト、どこから聞いてたんだい？」

「お兄さん、おはよう。お兄さんの両親が即死したってこと。」

だいぶ前から起きていたようだ。アリアのことについては聞いていなかったみたいだ。だけど、メヌエツトは賢い。すぐに気づきそうだな

「お兄さん、こんなに沢山ケガして心配したんですよ!!」

そう言つて俺を叱り始めた。その後、起きたアリアも加わってしまった。そういえば、俺の両親も帰ってから説教つて言つてたっけ……。

「イブキ!! (お兄さん!!) 聞いているの!! (聞いているんですか!!)」

「ちゃんと聞いているから!!」

そういえば、飛行機の主翼で戦っていたところをばっちり取られたため、俺とマクレーのおっさんはまた、マスコミに追いかけられた。ナカジマプラザの事件の解決のことも持ち出され、「ナカジマプラザの人質を救った英雄達」から「もつとも不幸な、不死身の二人組」になっちゃった。しかも、俺とマクレーのおっさんに二つ名までつけられた。マクレーのおっさんは「不死身の男」、俺は「不死の英雄」だそう。いや、いらぬよ、そんな中二病臭いの。

まあ二つ名は、その後ちよつと変わるんだけどな……。

マクレーのおっさんと神崎かなえさんはありがたいことに、書類のことをやってくれた。そうして俺は一週間後、マクレー夫妻と、かなえさん、アリア、メヌエツト、バーン爺さん、清掃員のおっちゃん、あとなぜかハゲの署長が見送ってくれ、日本へと帰っていった。さんざんなクリスマスに年末だったぜ……。

今でも、よく生きていたなあつて思うよ。

日本に着いた後、最初に行ったのは携帯ショップだった。まあ、あんな事件に巻き込まれて、俺の携帯は見るも無残な状態になってしまったからだ。データを取り出せないほど木端微塵に……。

携帯を買い、キンジの電話番号とメールは覚えていたからよかった



けど、他なんて覚えてない・・・どうしよう・・・と思った瞬間、俺の携帯が鳴りだした!!相手の番号を見ると見覚えがある・・・。恐る恐る出たら。

「お兄ちゃん!!大丈夫!?心配したんですよ!!!」

粉雪か・・・。

「ああ、だいじょうぶ・・・」

「銃撃たれたんですよ!!それで大丈夫なはずがありません!!」

また、前回のように俺は怒られた。俺、海外に行かないほうがいいのかなあ・・・。

「聞いてるんですか!？」

「ハイ!!聞いてます!!」

叱られながら、我が家に着いた後、俺は必要書類などの処理をしようとした。だけれど、天涯孤独になった身、保護者などいるはずがない。必要な書類も作れない。そこで幼年学校にそのことを連絡すると、後日、軍のほうからある人が来た。

「テロリストと戦い!多くの人を救ったのに!!天涯孤独になるとは!!!この希信!!悲しみでいっぱいだ!!!」(号泣)

来てくれた人は辻希信陸軍大尉という人だった。涙もろく、感受性が人よりもあり、理性より感情が先に行く人であったが、有能な人間だった。てきぱきと必要な書類を全部用意してくれ、後は読んでサインするだけの状態にしてくれた。

今でもほんと感謝してますよ、辻さん。ただ、感情をもうちよつと抑えてくれると嬉しいんだけどな。

これが辻さんとの初めての出会いだった。

書類整理や遺品整理をして、入寮まで残り2カ月弱。俺は遺品を整理していたら出てきた、ある物がとても気になっていた。虹色に光るトゲトゲの石と、十字の楯、黄金の高坏(?)、そして本。俺はあの時、転生前の知識を少しでも憶えていれば、これが何かわかっただろうなあ・・・。

これらの物によって俺は濃い性格の人達と会うことになった。

爺ちゃん、いらぬ物は捨てとけよ・・・

辻さんは遺品整理まで手伝ってくれた。

「イブキ君の父！村田中将は！この希信に！！後方の重要性を教えなくてええました！！そのせめてもの恩返しとして！この希信！！遺品整理も手伝いましょう！！」

だそうで。初めて知ったよ、俺の父さんが軍人だったなんてさ。いつもスーツ着て出かけて、出張の以外毎日家に帰ってきてきたんだぜ。気づけるはずがない。なるほど、幼年学校に行くことに抵抗がないわけだ。俺の父さんが軍で何をやってたか辻さんに聞いたところ

「村田中将は！・~~村田~~後方の鬼~~村田~~や~~村田~~後方の神様~~村田~~と呼ばれ！！・・・」

あまりにも長かったので掻い摘んで説明すると、俺の父さんは、「後方の鬼」、「後方の神様」って呼ばれていたらしい。予算の無駄遣い、横領を軍用犬の如く見つけ、武器弾薬食料などの必需品は最低でも要求の1.5倍は確保することで有名だったそうさ。また、浮いた予算で工廠や軍需品工場の設備を最新式にして生産力をあげていたらしい。おかげで、軍上層部や兵、軍関係の民間企業は頭が上がらなかつたそうで・・・。

ついでに、辻さんが陸軍士官学校生の時、俺の父さんはその寮長を務めていた。その時に辻さんに後方の重要性を叩き込んだそうさ。「なので、この希信！！村田中将に多大な恩が！！おや？怪しいものを見つけましたよ。」

辻さんは大量のお札が張つてある、大きな桐の箱を見つけてきた。「この希信、軍務で様々なものを見てきましたが、ここまで強く封印された物を見たことはありませんなあ。」

一人が余裕で入るくらい大きな箱に、これでもか！っていうくらいお札が張つてある・・・。しかも何か大きな力を感じるし・・・。「開けませんか？辻さん。」

「開けましょうか、イブキ君」

俺と、辻さんは好奇心に負けてしまい。その箱を開けてしまった。中には小さい箱、大きな十字の楯、黄金の高坏(?)、本、あと一枚の

紙が入っていた。

見たことあるような、ないような・・・

「ここまでの封印、とても大きな呪術か何かの物かと思いましたが、この希信、安心しました。」

「あれ？辻さん。こういうの見たことあるの？」

「軍機なのであまり詳しくは言えませんが、ここまでのじやありませんが、いくつか・・・。」

軍ってこういう、オカルト系もやってるのか・・・。そういえば緋弾のアリアには超能力者がいるんだっけ？ならこういうことやつていてもしょうがないか・・・。

辻さんと一緒に遺品整理を終わらし、辻さんは帰っていった。

「イブキ君!!ぜひ!!ぜひ!!陸軍に来てくれよ!!!」

辻さん・・・俺、比較的楽そうな海軍や空軍狙ってるんだ・・・。

辻さんが帰った後、あの怪しい箱の中にあつた紙切れを読んだ。内容は

「昭和〇〇年■月▲日

大逆を犯した者達より没収したものである。処分するにも恐れ多い物であるので、星伽の者を内密に呼び、封印したのちに憲兵〇〇科によって分散、処分したうちの一つである。憲兵〇〇科隊長、村田弘大尉」

なんか、曰くつきなんだな。要は、俺の爺ちゃんが処分するの面倒で物置に入れっぱなしのやつを、俺と辻さんが掘り出しちまったってわけか。

本には使い方があつた。この十字の楯を地面に置き月光にあて、深夜2時にトゲトゲの石を3の倍数だけ楯に投げるそうだ。他にも書いてあつたけど、カビちやってもう他は読めなかつた。この本は燃えるゴミ行きだな。

黄金の高坏(?)の使用方法はわからなかつたけど、まあいいや。実際やってみて、なんか起こったら対処すればいいし、何もなかつたら燃えないゴミに出せばいい。そう思ってたんだ。

今思うと、馬鹿なことしたなあ・・・。二つの事件解決して、若干

天狗になってたんだよ。まあ、でもこれしなかったら俺、今生きてなかっただろうな。

深夜2時前、俺は庭に十字の楯を置き、一応のため、縁側に黄金の高坏(?)を置いておいた。トゲトゲの石は124個と微妙に3で割れない数であったので、半分の60個くらい投げとけばいいや、と考えていた。

今思えば、深夜テンションだったのだろう。十字の楯が若干光っていたのに気づかなかったんだ。

深夜2時、俺は待つてましたとばかりに石を60個、楯に向かって投げた。その瞬間、大きな爆発音がし、力が一気に抜けていくような感覚がした。立っているどころか、意識すら保てそうにない……。俺は、意識を手放した。意識を手放す瞬間こう思ったんだっけ、「やべえ……近所迷惑じゃん。」

目が覚めた俺の目の前には、槍を持った全身タイトの痴女がいた。どんな夢だよ、さっさと寝よう……。俺は寝ようと……

「む？起きたか。」

現実でしたか。シウガナイ、起きるか。って全身タイトの痴女？もしかして……。いや、ただの偶然、この人はきつと、最近日本に来た痴女のは……。

ドス!!

目の前に槍が刺さった。

「おぬし、よからぬことを考えてないか？」

「いえ、めっそもございません。」

「そうか……。」

どうしよう、この空気。

「えっと僕は村田維吹、イブキって呼んでください。」

「影の国よりまかり越した、スカサハだ。マスター、と呼べばいいのかな？ お主を」

……ここまでくればなんだかわかるよ。まさかのFGOまでクロスとは思わなかった。でもちよっと待て、魔術師じゃないと呼べないんじゃないかっつけ。

「まあいい、おぬし、私たちを呼んだせいかな、魔力枯渇で死ぬ寸前だったぞ。」

はい!? まあ普通、一般人が英霊呼び出したら、そうなるよね。

「じゃあ、どうして生きてるんです?」

「私とそこのキツネとフアラオで聖杯をおぬしに入れたからだ・・・。」  
なるほど、あれ聖杯だったのか・・・。

「そうなんですか、えっと、これからもよろしく?」

「ああ、そうなるな」

そういつて俺とスカサハ師匠は握手をした。これが師匠との最初の出会いだった。

「イブキ、そろそろ現実を見よ。」

「あ、はい。そうですね。」

俺は家の中にいる愉快的仲間たちを見た。テレビを分解し、いじっているライオン頭のスーパーヒーロー。こつちを見ながらニコニコしている緑髪の中性的な人。目を輝かせこつちを見ている、まるで主人を待つような感じの痴女。俺のために洗ってない食器を樂しうに洗っているキツネ耳と尻尾がついた巫女(?)さん。白い謎の物体に囲まれた褐色痴女。残念な歌声で歌っている赤い服の少女と、その横でシャドウボクシングをしてる上半身裸の男・・・。大体誰だかわかるよ。誰だか。

すると目を輝かせた痴女がこつちに来た。

「牛若丸、罷り越しました。武士として誠心誠意尽くさせていただきます」

「俺は村田維吹っていうんだ。よろしくね。」

「よろしくお願ひします!!主殿!!」

元気があってよろしい。

「ところで寒くないの?」

真冬でその恰好は寒そうだけど・・・。

「はい!へっちらですー!」

そ、そうなんだ・・・。

その次にニコニコしている緑髪の中性的な人が来た。

「サーヴァント、ランサー。エルキドゥ。君の呼び声で起動した。どうか自在に、無慈悲に使ってほしいな、マスター」

「よろしくね、俺は村田維吹っていうんだ。」

「ん？おおいみんな!!マスターが起きたみたいだぞ!!」

ライオン頭のスパーヒーローが気づいたみたいだ。そうするとみんな、やってることを止め、こっちへ来た。

「サーヴァント、キャスター。トーマス・アルバ・エジソンである!顔のことは気にするな!これは!アメリカの象徴である!」

「サーヴァント・キャスター。天空の神ホルスの化身、ニトクリス、召喚に応じました。このようにフアラオではありますが、私はあまりに未熟の身。故に、今回だけ特別に貴方を同盟の相手と認めましょう。……ですがその前に、言うべき事は言っておきます。頭を垂れなさい。不敬ですよ!」

「ご用とあらば即参上! 貴方の頼れる巫女狐、玉藻の前 降臨っ! です!」

「サーヴァント・セイバー。ネロ・クラウディウス、呼び声に応じ推参した! うむ、よくぞ余を選んだ! 違いの分かる魔術師よな!」

「サーヴァント・バーサーカー、真名ベオウルフ。じゃあ、殴りに行くぞマスター!……オイオイ、引くなよ!」

皆さん、真名はわかってるけど、せめて別々に言ってくれない? 一斉に言われてもわからないよ……。

そこから、幼年学校の寮へ入るまで濃厚な2カ月弱を過ごしたんだっけ。ある一日を例にとると、

朝

「しっ!」

「ッ!!」

俺は素早く起きて、投げられた槍を避ける。

「師匠!!目覚まし代わりに槍投げるなっていつてるだろ!!」

「これも修行だ。」

こんな修行なんて嫌だ。

その後、顔を洗い、牛乳を飲んで体操し、

「オラオラオラ、どうしたどうしたア！」

「少しは手加減してくれよ!!」

「それじゃ生き残れないだろオ!!」

ベオウルフと組合。

組合が終わると朝食

「ああ・・・御飯が美味しい・・・。」

「良妻ですもの、このぐらいできて当然です。そういえば、牛乳がなくなりそうなので、学校から帰ってきたら一緒に買い物行きませんか!? ついでにホテルにも!!」

「いえ、遠慮しておきます。」

最後の一言さえなければ、完全な良妻なのに・・・。

朝食食べて、牛乳飲んだら、

「主殿!!頭をなでてください!!」

「奏者よ!!余に構うがよい!!」

学校行くまでの時間、牛若とネロと遊ぶ。

放課後

学校から帰ってきて、牛乳飲んで、道場へ行って師範と取っ組み合  
い・・・。

道場から帰って、牛乳飲んで、

「遅い！」

「いい声を聞かせておくれ」

「ちよつと待って、今槍が折れた!!って、ぎやあああああ!!」

今度は師匠とエル（こう呼んでくれて言われた。）による修行。

夜

「今日はブリが安かったのでぶり大根にしてみました。マスター?た  
くさん食べてくださいね。」

「ああ・・・さすが良妻。とてもおいしい。」

「もう寝めたってなにも出ませんよ!後でリングゴむいちやいます!!」

玉藻の作った夕食食べて、牛乳飲んだら、

「わっはっはっはっはっはっ!マスターもアメリカという二律背反の  
国家を分かってきたようだな。我々は、未熟にして最強なのだよ!」

「どうにもあなたは私への畏敬が足りていません！ 今更言うまでもないことですが私は天空の神にして、冥界の神。そして、ファラオなのですよ？ 只人であれば、ははーっ！ つと平伏するところなのです！ そんな私に魔術を教わっているんですよ！」

「基礎は備わって来たな。ならばいいよ、基礎からの実践だ。気を抜くなよ。趣向を凝らしてあれこれ用意してみた故、一歩間違えば命は無いと思え」

エジソン、ニト（こう呼んでみたら他のみんなもこう言い始めた）、師匠による魔術と科学、そして社会科（？）の授業。授業が終わって牛乳飲んだら、

「何度裏切られても、やっぱり私は誰かの為に戦いたいです。主殿が許してくれるのなら、最期まで一緒に……いえ、なんでもありません」  
「余は充実している。なんと幸福な皇帝であることか。遠くローマを離れた世界で、よき勇者と巡り会えた。ん、誰のことかだと？ ……  
貴様に決まっていよう、我が自慢のマスターよ」

「僕は相変わらず兵器だし、精神は一向に成長しない。だけど、いつも僕は君のことを考えている。これは、どう言うのだろう……どう、言うのだろうね」

牛若、ネロ、エルと戯れ、牛乳飲んで体操して寝る。

このキチ○イのような修行のおかげで、俺生き残ってるんだよなあ……。

そして、あつという間に2カ月は過ぎ、幼年学校の寮へ行くこととなった。

「おぬしにはこれをやろう。」

そういつて師匠は赤い日本刀を俺に渡した。

「師匠、これは……。」

「おぬしは槍より刀のほうに向いている。これは私とエジソン、ニトが作ったやつだ。大切にするがいい。」

「師匠、エジソン、ニトちゃん……。」

「イブキ!! 失敗を恐れるな!! 何時、如何なる時でも、フロンティア!!!」

「そのニトちゃんって何なんですか!?! 私はファラオなんですよ!?!」



やっぱりニトをからかうの楽しい。

「この生活も慣れてきましたが、マスターがいなくなるのは、寂しいです。ね。」

「マスターが向こうでもうまくいくよう、僕は祈ってるよ。」

玉藻、エル……。

「余は寂しい……。早く戻ってくるのだぞ!!」

「主殿、私待ってますから!!」

「一皮むけて帰って来いよ!!あと、こいつら寂しがり屋だからな、休みの時はなるべく早くかえって、ってイテエ!!」

ベオウルフがネロと牛若に剣で刺されてる。

「じゃあ、行ってきます!!」

「!!!!!!!!!!!!!!」

そうして俺は幼年学校へ行ったんだ。

「イブキ、書類忘れてるよ。」

「あ、やべえ!!エル、ありがとう。」

そうして俺は幼年学校へ行ったんだ。実は「行っただけ」になっちゃったんだけどな……。

## 閑話：民間人編

### 1：花火

私は5歳の時、大きな花火を見ました。花火を見せに行かせてくれた人はトオヤマ様とお兄ちゃんです。お兄ちゃんは、私たちをリアカーに乗せ、花火大会へ連れて行ってくれました。花火を見終わった後、みんな怒られるところでしたが、お兄ちゃんは一人で泥をかぶってくれました。花火を見る前からお兄ちゃんは優しい人だなあと思っていました。これを見てかっこいいと思うようになりました。お兄ちゃんが帰っちゃうとき、私は泣いてしまいました。でも、お兄ちゃんは私をお嫁さんにしてくれると約束してくれました。私、ちゃんと覚えてるからね。

その後、お兄ちゃんは大きな事件を二つ解決しました。流石お兄ちゃん!!すごい!!と思いましたが、お兄ちゃんは銃に撃たれたり、ナイフに刺されそうになったりしたそうです。私は不安になりました。私は急いでお兄ちゃんの携帯電話を探し、電話を掛けました。

「ハイ、もしもし・・・」

お兄ちゃんだ!!よかった無事だったんだ。でも私、とても心配したんだよ?

「お兄ちゃん!!大丈夫?!心配したんですよ!!!」

ちよつとくらい怒ってもいいよね。

### 2：汚ねえ花火

俺がこのガキに話しかけられた時、面倒臭いガキだなって思った。だけど坊主、俺を一瞬で刑事と見破った。こいつは驚いた。その後色々あって俺はテロリストの一人と一緒に階段から落ち、そいつを無力化した。そうしたら、坊主が急いできて、立とうとしていた、テロリストの頭をハンマーで殴ったんだ。その時、俺は助けてくれたことより、勝手にこっちに来たことで頭がいっぱいになった。

「坊主なんでここにいやがる。トイレでじつとしてろツて言っただぞ。」

「トイレでじっとするより、おっさんについて行ったほうが安全だと思っただ。敵は子供にも容赦なく撃ちそうな感じだったから。」

そう言われればそうだ。その後、坊主は拳銃で、10メートルくらい先のドアノブに向かって5発撃ち、全て命中させた。撃ち方は素人っぽかったがこいつはセンスの塊だな、初めての銃であんなに当てるなんて。はあ・・・坊主ここまで来ちまったからには連れてかねえと危険だな・・・。

「つけ！ませやがって。ロン・ロジャーにでもあこがれたか？足手まといになつたら置いてくからな、くそツタレ!!」

「合点だあ!!」

俺は移動する前に銃の撃ち方をそいつに教えた。驚くぐらいに呑み込みが早かった。

坊主と2度目に会ったのは、5年後の空港だった。坊主は嬢ちゃん二人と楽しく話してた。その後、俺と坊主は嬢ちゃんの一人に質問攻めにあっていたが、俺は刑事の癖で怪しい二人組を見つけてしまった。

「なあ、おっさん。あれ・・・。」

坊主も気づいちまったか……。しかし、この質問攻めからどうやって逃げよう。

「アリアごめん、ちよつとトイレに行きたくなって。マクレーのおっさんはどうする?」

お? いいことするじゃねえか坊主。そうして俺と坊主は二人組を追った。

実は、坊主に一緒に来てほしくなかった。坊主はまだ子供だ。犯罪が多発しているからって、子供にドンパチさせるなんて間違ってる。でもこいつは来ちまった。そういうやつだとわかっていたがな。しかもこの坊主、格闘戦が強くなつてやがった。おかげで、何度も助けられたぜ。普通なら、子供に助けてもらったって思い、情けなく感じる。しかし、この坊主には不思議とそう思わねえ。むしろ、年下の相棒って思えるから不思議なもんだ。そうして俺達は、テロリスト共を「汚ねえ花火」にしたわけだ。

あとこれだけは言わせてくれ。俺じゃなくて坊主が「疫病神」だ!!

### 3：師範

私はもともと軍にいた教官だった。しかし、私の技を完全に習得した者はいなかった。軍には完全に習得できる者いないのだから、そう思い軍を辞め、道場を建てた。しかし、習得できる者は表れなかった。諦めていたその時だ、ある少年が来た。その少年はテロリストに会い、自分の無力を知り、強くなりたいといった。最初から意思のある者は強い。だが、私はこの少年にただならぬ気配を感じた。

この少年の呑み込みの早さは異常だった。教えたことをすぐさま吸収し、それを応用してくる。私はこの少年との組合が楽しくなった。

この少年がどこまでできるか、試したくなつたのはいつからであろうか。私は軍人の中でも習得できたものがほとんどいない技を教えていった。「ナイフで首を切り落とす技」「三段突き」そして、

「今日は影を薄くする技を教える。」

「その名前、何とかありませんか？師範。」

「うるさい。この技は相手に違和感を持たせない技だ。人間文字をじつと見ていると本当にこんな形だったか？と思うことがある。あれの原因は、変化のない物をずつと見続けるからそう思うんだ。」

「ゲシュタルト崩壊っていうんですね。」

「よく知っているな。人間は変化や違和感があるとそこに注意が行く。逆に変化や違和感がないものは素通りする。この技はその変化、違和感を相手に認識させない技だ。」

「簡単そうなこと言ってますね。」

「うるさい、では見てみる。」

この技を教え、2週間で習得したのは驚いた。

もしかしたら、私の技を完全に習得してくれるかもしれない。そう思い始めた時だった。

「師範、俺、幼年学校受かったよ!!」

彼は幼年学校に行ってしまうらしい。あそこは寮暮らしだ。私の

道場に通えるのもあと1年もないだろう。1年で私の全ての技を教えるのは無理だ。私は寂しくなった。しかし、そのことを少年に感づかせたくなかった。だから私は大げさに喜んだ。なんで引いてるんだ？

数か月後、彼は幼年学校へ行ってしまった。ん？軍からの手紙で「教官として、軍に来てくれ」とあった。そうだな、今私には門下生がいるから非常勤ならいいかもしれない。

ところで、「ナイフで首を切り落とす技」「影を薄くする技」の名前を覚えてくれ？、「ナイフで首を切り落とす技」「影を薄くする技」が名前だ!!わかりやすくていいだろう？

#### 4：師匠

私は驚いた。影の国で生きているから、英霊の座には登録されていない。それなのに私を呼び出した者がいる。「私を殺せるものが呼んでいる」そう私の勘は言っていた。

そして呆れた。私を呼んだ者はほかにも色々と呼び、そのせいで魔力枯渇で死ぬ寸前ではないか。この者が私を殺せるのか？しかし、私の勘は「是」と言っている。面白い。私とそこにいた魔術師と協力し、その場になぜかあつた聖杯をその者の中に入れた。

私の勘は当たっていたようだ。まだまだ未熟だが驚くほどに吸収する。セタンタといい勝負かもしれない。まあ、イブキはセタンタと違い、槍よりも刀や飛び道具そして銃剣？といった物が得意そうだが。他の分野でも吸収がいいのだろう。他の者達もイブキに色々教えていった。私では教えられない他の分野を英霊が教えるのだ。もしや、セタンタ以上の者になるかもしれない。私は興奮した。

召喚されてからある程度たった時、イブキはいまだに銃剣を教わっていると聞いた。我々英雄に教わっているんだ。そっちが最優先だろうに。

きつと私は、その師範とやたら嫉妬し、恐れていたのだろう。「私の物が盗られる」と。

私はある日、イブキが学校に行っている時にその師範に会いに行

き、勝負を挑んだ。ルールという制限があり、しかも木銃での勝負であつたが、私はその師範に負けてしまった。長い間、影の国で人と接触しなかつたせいだろうか、私は慢心していたようだ。師範、貴様がイブキに教えることを認めよう。しかし、イブキは私の物だ。貴様には渡さん。

その日から修行を10倍に増やした。

「いい声を聞かせておくれ」

「ちよ、ま、ぎやああああああ!!!。」

泥人形よ、それはやりすぎではないか？

5:どつち？

「そういえばエル。普段は男か女どつちでいるの。」

俺は素朴な疑問をエルに尋ねた。

「僕は兵器だからね男も女もないさ。」

「でも聖娼シヤムハトをモデルにしてるんでしょ。」

「そうだね。」

「じゃあ、肉体は男女どつち?」

「イブキ、君はどつちのほうがいいかい?」

なるほど、普段は男でもあり、女でもある状態なんだな。

「そうだね、さすがに男より女のほうが華があつていいかな。」

そりゃあ、男より女のほうが何倍もいいでしょ。

「了解、イブキ。」

よく考えればセクハラだなこれ。これを聞いていた玉藻に俺は叱られた。

1週間後、

「何度裏切られても、やっぱり私は誰かの為に戦いたいです。主殿が許してくれるのなら、最期まで一緒に……いえ、なんでもありません」  
「余は充実している。なんと幸福な皇帝であることか。遠くローマを離れた世界で、よき勇者と巡り会えた。ん、誰のことかだと? ……」

貴様に決まっていよう、我が自慢のマスターよ」

「僕は相変わらず兵器だし、精神は一向に成長しない。だけど、いつも

僕は君のことを考えている。これは、どう言うのだろうか……どう、言うのだろうかね」

英霊三人の授業の後の、牛若とネロと戯れるところにエルも加わってきた。あの、エル様。瞳孔を開いたまま、俺に抱き着くのやめてくれませんか、怖いです。

「主殿!!私には撫でてください!!。」

「奏者よ!!抱きつくことを許そう!!」

ああ!!クソ!!要求に答えてやらあ!!! (思考放棄)

## 6：職業

「ええ、皆さん聞いてください。」

俺は夕食の時間、重大なことをみんなに打ち明けた。

「マスター、お代わりですか?今、尻尾にピーンとききました♪」

「あ、玉藻お願い。」

やっぱり白いご飯は美味しい。日本人でよかった……。

「じゃない!実は今、遺産を食いつぶして生活してるんだけど、このままだと1年後には、遺産がなくなっちゃうんだ!!」

そのことにみんな驚いた。どのくらいって言うと、急に少女漫画のシヨックを受けたシーンのようになったんだ。まあ、生きていた時代より遥かに美味な食事を毎日食べていたんだ。食べられなくなるのはきついだらう。

「そういう事なんで、ネロと牛若、玉藻以外はある程度の食事代を入れてほしいんだ。」

「な!!ファラオに向かって働けというのですか!!それにあの3人は例外とはどういうことですか!?!」

ニトが文句を言いだした。まあ確かにファラオに向かってこの言葉はだいぶ不敬だけど、食べるためにはシヨウガナイ。

「ネロと牛若は見た目が大人に見えないから、職に就けないんだ。もし就けたら、その仕事かなりまずいやつだし……。玉藻は全員の炊事洗濯してもらってるから例外。」

ニトは観念したのか黙ってくれた。ありがたい。

「まあ、この理由から二人には中学に通ってもらうけどね。」

「了解しました主殿!!」

「うむ!!学校か、面白そうなところよな!」

二人も納得してくれたようだ。

「さすがに、働けて言うだけっていうのも悪いし、色々仕事見つけてきたよ。」

そういつて紙を個人個人に渡していった。

「まずエジソンなんだけど、電気に詳しいから教師なんてどうかな? 非常勤だからあまり厳しく調べられないし。あと、これが特許の取り方ね。エジソンは発明だからいいかなと思って。」

「うっはっはっはっはー!!さすがマスター!!この大統王のことをわかってる!!期待に応えよう!!」

納得してくれて何より、

「師匠は、師範の道場でのアルバイト。なんか師範、今度から道場よく開けるようになるらしいから、バイト探しているみたい。師匠なら大丈夫でしょ。」

「あ、ああ・・・食べるためだ、仕方あるまい。」

以外なことに、師匠は嫌そうだな、教えるの好きだと思ったのに。「残りの三人は難しいから迷ったんだ。嫌ならやめていいからね。エールは農家の派遣のバイト、ベオウルフはジムのコーチ、ニトは内職ね。」

「わかったよ。」

「しよーがねえ、食べるためだしな。」

「私は細かい作業できませんよ!?!」

ニト以外は好評だよかったよかった。

「マミー達にやってもらおうと思ってさ。流石にフアラオに仕事させるのはどうかと思っつてね。ニトのためならマミー達はやってくれそうだし、なんなら、マミー達の方まで御飯作ればいいかなあ〜って。」  
「しょうがないですね・・・。皆が払うのに私だけ払わないのはフアラオとしてもどうかと思いますし・・・。わかりました。」

そうして、俺の新しい家族は仕事に就いたわけ。どうやって戸籍を



準備したって？それは

「もしもし、辻さん？実は……」

「わかりました!!この希信!!8人分の戸籍を準備しましょう!!」

困ったときは友人に頼めばいい。さすが、マクレーのおっさん。これは座右の銘にしようかな。

## 新人軍人編

学生生活が短すぎる・・・

幼年学校の位置づけは民間人編「もうメインヒロインに会うなんて・・・」を読んでほしい。ここからは細かい説明をする。幼年学校は小学校卒業後入ることが出来る学校だ。この学校は授業料、食費、家賃すべてタダ、それに一応公務員になるため給料が発生する（幼年学校の場合、月5000円、夏冬ボーナスあり）。そして、この学校は、入学への偏差値もまあまあ高く、制度として、年間に赤点を一個以上とると退学、飛び級がある。制度上、飛び級は幼年学校入学してすぐ、陸軍士官学校、海軍兵学校、空軍士官学校を卒業することが可能だ。（しかし、陸軍士官学校、海軍兵学校、空軍士官学校の最後の1年半は実地訓練になるため実際は不可能）そして、飛び級卒業した者は、主席卒業を同じ扱いをされる。そして、飛び級試験は春と秋に行われるのだが・・・。

俺は幼年学校に着くとすぐ、教室へ行かされた。他の生徒もそうだ。そして、教室に入り、しばらくすると、試験問題が配られた。え？なんで？

「諸君、入学おめでとう。このテストは今の君たちの学力を計るものだ。手を抜かず、全力で解くように。」

なるほど、入学前の頭の出来を調べるわけか。ここはまああの難関校だし、ある程度本気出しても不思議がられないはずだ。そう思っ  
て俺は、その試験問題を真面目に全部解いちゃったんだ。

あの時の俺、問題の難易度考えろよ・・・。あの試験、ちやつかり  
大学入試レベルまであるのわからなかったのか・・・。

試験を回収され、近くの生徒と適当に話していると、教官がこの教室に走って入ってきた。

「村田学生、試験に不備が出たからもう一回受けてくれないか？」

なんだ？何かおかしいことでもあったか？そう思いつつも教官に  
連れられ、違う教室に行かされた。その教室にはほかの教官が何人も

いた。どうしたんだ？

「ではもう一度問題を解いてもらう。用意、はじめ。」

俺はもう一度試験を受けた。なんかさつきより難しいと思ったんだが。とりあえず全部解いてみることにした。

この時の俺、おかしいと思えよ。どう考えても、大学クラスの問題が出されていただろうに……。

時間が来た。多少わからなかったところがあったが、まあまあのお出だと思おう。教官達はその解答用紙を回収し、別室へ移動してしまつた。しばらくすると、教官の一人が来て、俺の対面に座つた。

「村田学生、君は陸軍士官学校、海軍兵学校、空軍士官学校、どこに行きたい？」

「海軍兵学校ですかね？海軍は給料イイですし。なんでそんなことを聞くんです？」

「原のやつ……説明してないな。」

教官は額を抑えた。

「そういえば君、この学校は飛び級があるのを知っているかい？」

「はい、知ってます。」

飛び級制度は有名だからな。

「さつきまでの試験は飛び級ができるかどうかの試験なんだ。」

え？

「君の学力では、士官学校3年後期からがいいと判断された。」

ちよつと待って……

「だから君は、海軍兵学校へ行ってもらおう。あ、必要な書類はこれだから、サインと拇印を押すだけでいいからね。」

「え？ちよと待ってください自分飛び級の自信ないですよ!？」

当たり前だ。そんな目立つこと誰がするか。

「安心して、君の学力では、大学院クラスだから。」

「いやいや、軍事関係とかさつきぱりですし!!」

軍事関係だつてある程度は勉強したけど、素人に毛が生えたようなものだぞ。

「君はこのテストの結果から言うと軍事の基礎はできているようじゃ

ないか。向こうで補修という形でやってくれるそうだ。」

クソツ!!最後の手だ・・・。

「ほら、体動かすこととかも素人だし・・・。」

「体の動かし方は、士官学校3年後期からになるから大丈夫。それまでみんな素人さ。」

なにがなんでも俺を行かせる気だなチクシヨウ。

「下世話な話になるんだけど、飛び級の生徒を出すとね、その子を受け持つ予定だった教官に手当がつくんだ。その手当が結構大きくてね、飛び級ができる子は無理やり飛び級させる教官もいるんだ。僕は君の意思を尊重するけど、君が飛び級しなかった場合、他の教官に僕が小言を言われるんだよね。」

・・・チクシヨウ、本気を出すんじゃないやなかった。俺のミスで他人様に迷惑かけるのはなあ・・・。

諦めて俺はその教官から書類を奪い、サインと拇印を押し、書類を教官に渡した。

「よし書類を確認した。村田学生!貴官は江田島に行き、訓練生配属部署を聞き、そこに配属せよ!!」

「了解・・・」

そうして俺は、幼年学校名物「班対抗マラソン」、予備士官学校名物「遠泳」、海軍兵学校名物「カッター競争」を体験することなく、俺は訓練生として、さまざまな船に乗り、また陸軍や空軍に出向し、一年半を訓練漬けで過ごしたわけだ。

今もこれらの行事に参加できなかったことは後悔してる。やってみたかったなあ・・・。

一年半後、俺は海軍兵学校を卒業し、晴れて少尉となったわけだ。なに?ジュネーブ条約で少年兵は軍人になれない?そう、俺は正確には軍人でなく、少尉待遇のただの軍属つてわけ。戦場に行つて戦う事もあるけど、「軍属が偶然そこに行ったら、撃たれたため、自衛のため銃を取った。」ということにしているらしい。この手のやり方は、最近、先進国でも結構使っている。世の中物騒になったなあ・・・。

話を戻そう、卒業してすぐ、俺は新たな配属先を知った。

「村田少尉!! 貴官は兵特部隊、略称H S部隊第2中隊所属第1小隊へ配属せよ!!」

「ハイ!!」

どこだよ、H S部隊なんて、知らねえぞ。あ、場所は関東か。休みの時は家に帰りやすいな。

そうして俺は化け物だらけのH S部隊へ所属したわけだ。まあ、配属して半年後、H S部隊第2中隊はロスアラモスに行くわけなんだけどな・・・。

H S部隊とか濃い人ばっか・・・

俺は江田島から関東の某所へ行くことになった。H S部隊駐屯地は軍機によつて教えられないからあきらめてくれ。俺は新幹線に乗りながら、この部隊のことについて考えてた。どう考えても、この部隊は船じゃねえ・・・。後方の事務作業でもなさそうだ・・・。とすると・・・陸戦隊!?待つて、俺、船の上でボタン押すっていう楽な仕事(実際楽しじゃなかったけど)するために海軍入つたんだぞ!?なんで陸戦隊!?

そう考えながら、俺は関東に着いたわけだ。東京駅で迎えが来るつて言つてたけど・・・。

「久しぶりだイブキ君!!いやイブキ少尉!!この希信!!また君に会えて感激だ!!」

この人が迎えに来たのかよ。

「さあ!イブキ少尉乗つた乗つた!!部隊の説明は!この希信が!車の中でしょう!!」

「ちよ、辻さん押さないでつて!!」

なんか面倒なことになりそうだ。

俺と辻さん、あと運転手が車に揺られていた。

「まさか、イブキ少尉が海軍に行くとは!この希信!悲しいが!!同じH S部隊第2中隊に配属されるとは!!」

「そういえば、そのH S部隊ってなんですか?あと辻さん、少佐になつたんですね。おめでとうございます。」

襟章が大尉から少佐に代わつていた。なぜか飾緒つけてるし・・・。「軍機だからイブキ少尉は聞かなかつたか。正式名所は兵部省直属特殊作戦部隊第2中隊だ。略称が兵特部隊だね。そこからH S部隊つて誰かが言つて、そのまま通称になつてしまった。この部隊は表にできない面倒なことを内密に処理する部隊第1中隊は国内、第2中隊は海外担当。その第1小隊は殴り込み部隊だ。」

これまた面倒なことになつたな。なんで殴り込み部隊なんだよ。

「なんでそんなところに、俺が配属されたんですか?」

「うむ！君は陸軍の出向の際、とても優秀な陸戦能力があることが認められた!!この希信!!そのことを聞いて驚いた!!だからこの希信が君を!!引っ張ってきた!!」

厄介なことするんじゃないやねえよ……。陸軍への出向の際、そういえば陸戦訓練があつたけど、向こう殺しに来てたから、全力出したんだよね……。

「この部隊は特殊なため、人が少ない!!イブキ少尉のことだ!!すぐに部隊の人と仲良くできる!!この希信は第2中隊の参謀長をしている!!ついでに運転手は第一小隊長の鬼塚鬼次中尉!!彼は叩き上げだ!!イブキ少尉に色々教えてくれるだろう!!」

え、あの運転手の丸坊主のマッチョで片目にケガの後があるおっさんが隊長？

「こいつがノーライフ・ヒーロー不死身の英雄カが。俺が泣く子も黙る第2中隊第一小隊長の鬼塚よ。びしびし鍛えてやる!!覚悟しろよ!!。」

この人、この中二病のような名前知ってるのかよ!!あと、なんか見たことあるような顔だけど……。

「は!!ご指導、ご鞭撻!!よろしくお願いします!!」

「っはっはっは!!威勢があるなボウズ!!」

あ、この人もボウズっていうのか、マクレーのおっさんと色々かぶらなきゃいいけど……。

これが、HS部隊第2中隊第一小隊長、通称「自走式暴力装置」鬼塚鬼次中尉との初めての出会いだった。

俺はHS部隊駐屯地につき、辻さんにある一室に行かされた。

「イブキ少尉!!ここが第2中隊中隊長の部屋だ!!中隊長にはちゃんと挨拶するように!!」

「わかりました。辻少佐。」

「辻少佐、村田少尉入ります!!」

そうして俺と辻さんがその部屋に入った。その部屋には二人の男がいた。

「ほお、君がノーライフ・ヒーロー不死身の英雄カで、作戦参謀が気に入り、参謀長が無理やり連れてきた村田少尉か。自分は角山中佐。この部隊の隊長を

やっているものだ。」

へ？作戦参謀が気に入った？どういうことだ？あとこの人も知ってるのかよ……。やだなあ……。

「村田少尉です!!至らぬこともあります、粉骨碎身努力していくつもりです。」

「ほお、元気があっていいじゃないか、なあ作戦参謀？」

「そうですね、私の作戦にはもってこいの人材です。ああ、私は神城大尉かみしろです。作戦参謀をしています。」

この人が作戦参謀か、ちよび髭とはまた珍しいな。

「よし、村田少尉、君は部隊に挨拶に行け。」

「了解しました。」

俺は、話を通じそうな人でよかった。

まさか、こんな人たちが、イケイケドンドン、ガンガン行こうぜの人達とは思えないよなあ……。

俺は、鬼塚隊長から駐屯地の滑走路で集合とあったため、滑走路へ来た。C-1の横で、鬼塚中尉と他3人が談笑していた。

「鬼塚中尉、中隊長への挨拶終わりました。」

「おお!!やっと来やがったか……。お前ら、こいつが今日から配属された。村田だ。仲良くしろよ。」

「村田維吹少尉です。よろしくお願いします。」

3人はこっちへ敬礼した。

「堀二等兵曹です。情報担当。メガネって呼んでください。」

メガネをかけたオタクっぽい人が言った。

「岩下いわしも一等兵曹ツス。狙撃が得意ツス。」

顔の上半分がヘルメットで隠れている人が言った。

「田中曹長、工兵だ。よろしくな。」

色黒のニイチャンの人が言った。

「ハ！、よろしくお願いします!!」

「ボウズ、後で自分の使う銃を買っておけよ。この部隊は秘密部隊だからな、弾薬がバラバラのほうがバレにくくなるからな。」

そうなんだ。今度の休みに買いに行かないと……。家族に会う時



間が減る・・・。

「訓練始めるぞ!!ほら乗った乗った!!」

そういつて、鬼塚中尉と3人はC-1乗り込んだ。

「おい!!ボウズ、早く乗れ!!」

「イタイ、イタイ乗りますから!!引つ張らないで!!」

そして、C-1は飛び立った。

「ぶっついで地上500メートルからの降下訓練だ!!天国へ連れてってやるぞ!!っはっはっはっはー。」

え?この隊長、今なんて言った?

「お待ちかねのパーティの時間だ!!受付時間に遅れるなよ!!さあ、行ってこい!!」

そういつて、三人はC-1から飛び出していった。あの三人ちゃっかりパラシュート持ってやがった。

「どうしたボウズ!!男らしくスパツと飛んでみせろ!!」

は?.

「いやいやいや、パラシュートなしにどうやって降下するんですか!!」

「パラシュートお? あんなもんだだの飾りよ!!」

「パラシュートなしの空挺とか死にますから!!いや押さないで落ちる落ちる!!」

ちよ、隊長足で押さないで!!

「おらあ!!」

「うわああああああああああああああああああ!!」

俺はパラシュートなしで降下訓練に参加したんだっけ・・・。

なぜかパラシュートなしでも空挺は成功した。月日がたち、この部隊に来て半年、訓練に明け暮れていた。そして悲しいことに、パラシュートなしの空挺も慣れてきた。

そういえば、俺の武器は、メインが38式歩兵銃、サブで14年式とワルサーP38、師匠からもらった赤い日本刀にした。38式は、師範との組合で慣れていたから。14年式は小さい俺でも持ちやすく、反動が少ないため。ワルサーP38は相手の弾を鹵獲した時撃てるようにするため、それと俺が好きだから。これを申請したら受理さ

れた。マジで武器は適当でいいんだな。

「おい、ボウズ。」

「なんでしよう?」

俺は鬼塚中尉に呼ばれた。

「中隊長に呼ばれた。お前もこい。」

そういつて俺は鬼塚中尉に引きずられ、官舎のほうへと連れ去られた。

「イタイイタイ、自分で歩けますから!!」

そして俺と鬼塚中尉は中隊長の部屋に入った。そこに、角山中佐、辻さん、神城大尉その他数人がいた。

「中隊長、なんでしようか。」

あ、鬼塚中尉って普通にしゃべれるんだ。

「うん、それはだね、第一小隊には今からロスアラモスに行つてほしいんだ。」

は?」

「辻少佐、説明を。」

そして、辻さんは言い出した。

「アメリカ政府の機関ロスアラモス・エリートというものがあります。そこでは人工的に天才を作るといふ研究をしていたようです。ですが、その研究者は!!その被験者の子供たちに!!非人道的な行爲を行ひ!!さらには政府を転覆させる計画まで立てる始末!!この希信!!怒りでいっぱいだ!!」

やべえ・・・辻さんが真っ赤になつてる。

「辻さん落ち着いて、今怒つても何もならないですよ!!」

「そ、そうですね、イブキ少尉。この希信、怒りで周りが見えませんでした。」

俺はこの時、周りの人間の目が光つたことに気が付かなかつた。

「そこで、アメリカ軍精鋭部隊がその施設へ攻撃したところ、反撃を受け、壊滅状態になってしまいました。」

ちよつと待つて、アメリカの精鋭部隊でも壊滅つてどんな武力持つてるんだよ!?

「そこで、アメリカ軍より精銳のわが日本軍に!!その施設へ攻撃し!!  
ロスアラモス・エリートを処理してほしいということだそうです。」

え?マジかよ、なんでアメリカの尻ぬぐいをしなきゃならねえんだ。  
「まあ、なぜアメリカの尻ぬぐいをしなければならぬか。そう思う  
のも無理はない。まあ、取引としてね。そのデータは取れた分だけ  
取っていい。そういう事があつたらしい。それに、持ちつ持たれつで  
ね、こういうことはお互い、けつこうやっているんだ。もちろん、こ  
れらの情報は軍機だし、この作戦も軍機だからね。」

なんか、嫌なこと知つたなあ。

「大丈夫!!この希信と神城作戦参謀、そして中隊長殿が一緒について  
いき!!後方で支持をだしましょう!!」

そうして俺は三度目の外国行きも、ドンパチすることになつてし  
まつたんだっけ。

そういえば、なんで回想文のようになってるかって?それは：

「村田少尉!!聞いているのか!」

「イブキ少尉!!ちゃんと聞いていますか!!」

「村田少尉、ボーっとしないでほしい!!」

ロスアラモスから30キロ離れた先で、作戦が紛糾しているから  
さ。あまりにも長いから、今までのことを回想してたんだ……。

「そうだ、村田少尉、君は、飛行機による殴り込み、戦車による殴り込  
み、ジープによる殴り込み、どれがいいかい!」

まさか、中隊長、参謀長、作戦参謀、全員が真正面からの殴り込み  
作戦で決定しているからさ……。

早く家に帰って、家族に会いたいよ……。

精神論はいやだ・・・

結局、鬼塚中尉が

「空挺なら奇襲ができるな。」

その一言で、中隊長の案である「飛行機による殴り込み」が決定され、辻さんの「ジープによる殴り込み」、神城作戦参謀の「戦車による殴り込み」は廃案になった。そこからの作戦立案は早かった。

「では、第一小隊の諸君。今回の作戦を発表する。神城作戦参謀、説明を。」

「はっ!!では作戦を説明いたします!!今回、敵研究者たちは国家安全保障科学館に立てこもっています。そこで、我々はC-1で高度10m以下から接近し、2キロ圏内になってから上昇。水平飛行になった瞬間に国家安全保障科学館の屋上へ空挺を慣行。その後、国家安全保障科学館に潜入、被験者の子供、研究者たちのデータをなるべく多く保護し、首魁の研究者4人を殺害。その後、第一小隊は脱出します。第一小隊脱出後、米軍からの攻撃により、国家安全保障科学館は破壊されます。」

質問はありますか。」

「ハイ!!」

俺は手を挙げた。

「村田少尉、発言を許す。」

「二つあります。一つ目、政府転覆を狙う計画に反対、もしくは無関係の研究者たちはどうなっていますか?」

無関係な民間人を殺したくないからな。

「この希信が答えましょう!!彼らはすでにロスアラモスから、データのバックアップを取り、避難している!!国家安全保障科学館は被験者以外は全員敵だ!!。」

なるほど、避難は完了してる。会ったやつは基本ぶっ放しているんだな。

「ではもう一つ、なぜ、辻少佐と神城大尉が武装してるんですか?」

これが一番不思議だった。参謀でしょ?後方で待機じゃないの?

「参謀が前線視察をしないとは!!それでは現場と本部の意識の差が出る!!この希信と一緒についていき!!現場の有無を確認しましょう!!」

「私も一緒です。」

「納得したかい?村田少尉。」

うん、なんとなくこんな性格だつてわかっていただけだな。

「はっ!!了解いたしました!!」

そういつて俺は、席に座った。

「他には質問はないようだね。よし!!全員C-1に搭乗せよ!!」

「「「了解」」」」

そうして、我ら第一小隊と参謀二人がC-1に乗り込み、敵陣に向かって殴り込みをかけた!!

「そういえば、辻さん、神城大尉。二人はパラシユートなしで大丈夫なんでしょうか?」

「この希信も、この部隊に来たときは落下傘がないと空挺ができないと思っっていたがね。」

「あの鬼塚中尉からパラシユートは飾りだと知りましてね。いやあ、常識に囚われていましたなあ、参謀長?」

「そうですね、作戦参謀?」

ああ・・・この二人もこっち側なんだ。

え?俺だつて?パラシユートは持つてないぞ。だつて、「パラシユートはただの飾り」だからね(白目)

出発して数分後

「おい、敵陣から何か来てるぞ!!リーダーが反応してる!!」

C-1は鬼塚中尉が操縦していた。つてもう気づかれたのかよ!?「この感じからすると無人機だな。動きが直線的だ。」

すげえ・・・鬼塚中尉つてそんなことわかるんだ。敵が目視できるようになった。敵は2機か。すると、岩下さんがドアを開け、そこからライフルを構えた。

「まあ、ここは俺の出番ツスね。」

そうして岩下さんがライフルを2発撃つと、その2機は煙を上げて落ちていった。

「まあ、このくらい朝飯前つす。」

訓練中、狙撃がうまいなああって感じていたけど、まさかたった2発で、でかい無人機を打ち落とすとは。

「おい、今度はミサイルが来やがった!!」

「さ、さすがにミサイルすべて落とすのは無理ツスよ!!」

「手伝いますよ!!」

「手伝うぞ!!」

俺と田中さんは別のドアから身を乗り出し、ミサイルの迎撃を始めた。

「俺、近距離が専門なんですけどねえ!!」

俺は38式を連射して迎撃する。俺はほとんどを拳銃か銃剣、刀で戦うから長距離戦はきつい。

「俺なんて、爆弾、爆薬が専門だぞ!」

田中さんは40ミリ自動擲弾筒を撃ち出した。よくあんな重い物持ってきてたなあ……。

「何とかミサイルにハックしてますけど、目標誤認できるのはよくて3割です。」

メガネさんは持つてるタブレットをすごい勢いでたたいていた。

5分経つてもミサイルの雨は止まない。

「神城作戦参謀!!これ敵に感づかれてますよ!?作戦中止はしないんですか?」

バレてるのに突っ込むのはどうかと思うぞ。

「戦闘において、失敗するのは勇気が足りないせいだ!!勇気さえあれば敵が優勢であつても不可能でない!!!」

ダメだ、こりゃ。

「辻さん!」

「なあに、我が大和民族に不可能はない!!!」

ウソだろ!?

「上昇地点だ!!全員つかまれ!!」

鬼塚中尉がそう言って、C-1を急上昇させた瞬間

ドカーカーカーン

右エンジンに被弾。よかった、俺は破片浴びたけど致命傷はない。

「ボウズ、大丈夫かア!!」

「俺は大丈夫です中尉、しかし右エンジン被弾!!」

「なあに、C-1はエンジン一つでもなんとかなるんだよ!!」

「もうすぐ降下地点だ、降りる準備をしろ!!」

鬼塚中尉はそういつて、コックピットから出てきた。すると、第一小隊員の三人はパラシュートの準備をしだした。

「あれ?なんでパラシュート持ってきたんですか?」

「バカヤロウ!!パラシュート無しじゃ死んじゃまうだろうが!!」

おかしいな「パラシュートはただの飾り」なのに……。

「お待ちかねのパーティーの時間だ!!手厚い歓迎をされてるぜ!!俺らは泣く子も黙るHS部隊の第2中隊第1小隊だ!!その誇りを忘れるな!!!」

そういつて、鬼塚中尉はC-1から飛び降りた!!それに続き、俺たちも飛び降りた!!!「うわああああああああああ!!!」

パラシュート無しの空挺は慣れてきたけど、いい思いがしないな……。まだ師匠とエルの修行のほうがいいかな……。すいません嘘つきました。生身の空挺のほうが何倍もいいです。

「辻少佐、神城大尉、ボウズ、あいつらが到着するまで待機だ。」

そういつて、鬼塚中尉は一服しだした。ほんと「パラシュートはただの飾り」だし、着陸するのも時間かかるから、むしろ邪魔じゃないかなあ……。

あの3人が到着した後、辻さんと神城作戦参謀がどういう風に動くか指示を出した。

「敵は地下にいます。おそらく被験者とメインコンピューターもそこです。地下を目指して進んでください。」

「しかし、敵は傭兵を雇ったようだ!!それに被験者をも戦わせると考えられる!!この希信!!被験者の子供無理やり戦わせるとは!!……」  
「辻さん、落ち着いて落ち着いて、その子たちを助けるためにいるんですよ。」

「・・・そうだったな、イブキ少尉。」

また辻さんが熱くなつた。この人はすぐに熱くなるな・・・。

辻さんが落ち着いた瞬間、屋上のドアが開き、そこから銃を持った男たちが5、6人出てきた。

ダダダダダダダダダダ!!!

その男たちは、俺たちに向かつて一斉に撃ち始めた。急いで物陰に隠れた。

「ボウズ、奴らを始末してこい!!俺らは援護だ!!」

そう言つて鬼塚中尉は銃を撃ち始めた。それに続き、他の隊員も撃ちはじめ・・・つて辻さんと神城作戦参謀も撃つのかよ・・・

俺は「影を薄くする技」を使い敵に近づいた。敵は向こうに集中している。こつちには違和感を持たないな・・・。俺は刀を抜刀し一閃!!

ザシュ!!

一気に敵兵三人の首を落とした。そのまま返す刀でもう一人を真つ二つ。

「なっ!!」

慌てて、残り二人がこつちに気づいたが遅い、俺はもう一人を刀で胸に刺し、もう一人をワルサーで射殺。

「おらあ!!」

なんだ、もう一人いたのか。でも遅すぎるんだよ。刀を抜き、ワルサーをそいつに構えた。

ダアン

弾は一発で十分だ。俺はマクレーのおっさんのようにバカスカ撃たない。

「処理、終わりました。」

これで中に入れるな。

中に入りしばらくすると、大きな部屋があり、大きな機械とゴーグルをし、手にガトリングを持った子供が一人そこにいた。どう考えてもおかしい。

「ここ、通らないといけませんかね?どう見ても怪しいんですけ



ど……。」

「この部屋を通らないとだめです。地下には行けません。」

そうですか、神城大尉。

「子供を無理やり戦わせるとは!!これが人間のやることか!!!!」

辻さん落ち着いて……。あ、やべ、こっち向いたし。!!!!」

「あ、あそこにケーブル管があります。あれからこの施設の情報を取ります。運が良ければセキュリティシステムと研究データを奪いますから、時間を稼いでください。」

メガネさんが言った。

「ボウズはあいつの相手。岩下はボウズの援護だ。田中、ケーブルを切らないようにケーブル管を壊せ。少佐と大尉はメガネからの情報を見てください。始めろ!!」

シヨウガナイ、俺は近接戦だし……。室内戦の中で一番こき使われるのはわかってたよ……。

「影を薄くする技」を使い、ガトリングを持った子供の射線に出た瞬間

ダーーーーー!!!!!!!!!!

あいつなんでわかった!?もしかしてあのゴーグル、サーモグラフィー積んでるのか!?それならどんなに頑張ったってバレるぞ!!イテツ今かすつたぞ!!

俺は刀を抜き、銃口の向きから直撃するであろう弾を予測し、弾をはじいていた。

「おい、お前は操られているのか!!」

今回の作戦はデータ奪取と被験者である子供の救出だ。この子供がもし被験者なら、救出対象になる。

「……………」

そいつは無言のままガトリングを撃ち続けている。クソツ、埒が明かねえ……。俺はその子供接近し、そいつの首に峰で殴った。師匠たちの修行でさんざんやられたからな。どうやれば気絶するかわかる。

そして、その子が倒れようとした瞬間、俺の勘は「そいつに急いで

「離れる!!」といった。俺が離れようとした瞬間

ドカーカーカーカー

その子は爆発してしまった。俺は爆風をもろにくらい音が聞こえなくなった。

「ボウズ……ズ、……じよか。ボ……」

なんだ？

「ボウズ!!大丈夫か!!」

「ハイ大丈夫です!!」

ああ、鬼塚中尉が言っていたのか。

「ボウズ、爆発をもろに食らったが大丈夫か!!」

「ハイ!!致命傷はありません!!」

致命傷はないけど、満身創痍だ。ケーブル菅のほうを見ると、辻さんと神城作戦参謀、メガネさんが神妙な顔をしていた。……辻さんと神城作戦参謀に話しかけると面倒なことになりそうだ。

「メガネさんどうかしたんですか。」

「ああ、イブキ君。一応セキュリティシステムを奪って、データも奪ったんですけど……。」

すごいな、メガネさん、この短時間でそこまでやるとは……。

「各階に脳に無理やり機械を埋め、体に爆弾を埋め込まれた子供たちが待機しているようです。」

マジかよ……。

「これが!!!人間のやることかっ!!!この希信!!!怒りでいっぱいだっ!!!改造もそうだが!!!子供に銃を撃ちストレスを発散し!!!それを訓練だ!!!廃棄個体で遊ぶだ!!!ふざけているのか!!!」

やべえ……辻さんが怒り心頭だ……!

「……(何か言ってるが聞こえない)」

神城作戦参謀も何かすごいことになっちゃやし。ハア……正気に戻させるか。

「辻さん、神城作戦参謀落ち着いてください!!」

「落ち着いていられるかっ!!!」

「(ギロツ!!)」

うわあ……なんか二人とも、狂気に取りつかれたような顔だよ……  
「俺らはその子たちを保護するために来たんですよ!!落ち着いて対処  
しないと、救える子ですら救えなくなりますよ!!」

「……そうだな、確かにイブキ少尉の言うとおりで。この希信、礼を  
言おう。」

「……そうでしたね。そうだ、落ち着かなければ……。」

何とか辻さんと神城作戦参謀は落ち着いたようだ。第一小隊のみ  
んな、なんで俺を神様のように見るんだ？

「その改造された子は助かるんですか？」

「ダメなようですね……。もうほとんどが人間じゃない……。」

神城作戦参謀は悔しそうな顔をしていった。

「武士の情けだ……。この希信、悔しいが、せめて楽にさせよう。……

堀二等兵曹、彼らを自爆させることはできるか？」

「できますよ。」

「彼らを……。自爆させろ……。」

辻さんは俯いて言った。

「了解しました。」

メガネさんは強く唇をかみながら、タブレット叩いた。爆発音が連  
続でした。

「もう一つ、報告があります。なぜか地下で戦闘が起こっています。  
仲間割れですかね？」

は？なんで戦闘が？

「わからねえが、助けに行くしかねえだろ。全員で残敵掃討。一階に  
着いたら俺と岩下、メガネで脱出用の車を鹵獲。残り地下へ行つて  
子供たちを助ける。これでいいですか？辻少佐、神城大尉。」

そういつて鬼塚中尉は二人を見た。二人はうなづいた。

「おい、田中、あれあれ持ってきてくるか？」

「はいはい、ちゃんと持ってきてきますよ。」

そういつて普通の手榴弾より一回り大きい物体を出した。もしか  
して「あれ」か……。

そこからの掃討は簡単だった。「あれ」とは田中さんお手製の手榴

弾で、ちよつと大きな部屋ぐらいいは一発で木端微塵にできるほどの威力だ。田中さんは敵のいるところにそいつを投げ込み、ほとんどの敵をそいつで処理してしまった。また、トラップにも鼻が利き、仕掛けられていた罠を彼一人で解除してしまった。

田中さんの手榴弾の威力はヤバイ……。爆炎が部屋の外にまで出るとか、映画かアニメでしか見たことなかったぞ。

そうして一階までたどり着き、鹵獲組と別れ、俺と田中さん、辻さん、神城作戦参謀は地下に潜った。地下に潜り、研究者と被験者の子供たちがいる部屋にたどり着いた。その部屋はでかい扉があり、その扉は閉まっている。

「ここは俺がやるか。」

そういつて田中さんは扉に爆薬をくっ付けようとしたが、

「待ってください田中さん、俺のほうが早いです。」

そういつて俺は刀を抜いた。

「おお、そうだったな。じゃ、よろしくな。辻少佐、神城大尉、すこしイブキから離れてください。」

田中さんは辻さんと神城作戦参謀を下がらせた。ありがたい。

「しっ!!」

そういつて俺は刀を振るった。その瞬間、扉は音をたて、崩れ落ちた。家族のみんなで「ルパン三世」を見ていた時、石川五エ門の切るシーンを見たせいかな、師匠がこの技を俺に無理やり教えたんだけ……。だいぶきつかったなあ……。なぜか牛若とネロも影響したのか、この技二人も覚えちゃったし……。

そうして俺は、敵の首謀者と被験者の子供たちに会った。

休日くらい上司から離れたい・・・

「よく来たな諸君盛大に歓迎sh・・・。」

なんか言ってたけど、俺は研究者4人を峰で殴り、気絶させた。わざわざ向こうの話聞く義理なんてないし。

「大丈夫かい、私たちは助けに来たんだ。」

「大丈夫、君たちの安全は、この希信が、保証しましょう！」

参謀の二人は被験者の子供たちの保護に向かったようだ。

「田中さん、こいつらどうします？」

「そうだなあ・・・。こいつら爆発させようとしてたんだろ？  
じゃあ・・・。」

そういつて田中さんは爆薬を持った。

「そうしますか。」

また、汚い花火ができるのか。

俺たちは子供たちを引き連れ、地上に出た。その瞬間殺気!?俺は急いで抜刀し、構えた。

ガキイイイン!!

師匠からもらった刀と錨迫り合いとかどんなナイフだよ!!

「ウラア!!」

敵の少年（どこかキンジに似てるような気がする）はナイフを振るった。

「つと危ねえ!!テメエ研究者の仲間か!!」

「研究者?ふざけるな!!!」

そういつて、切り合いをしていた瞬間

「キヤアアアアアアアア!!」

なんだ!?!たがいに振り向いた先には、茶髪の女の子が傭兵に捕まってる。

「へ、へへへ。よ、よしお前ら、武器を下ろせ・・・。俺は生き延びるんだ・・・。」

あちやあ・・・。掃討してたけど、生き残ってたのか・・・。しかもだいたいぶタだし・・・。とりあえず「影を薄くする技」使うか。

「!?」

「デメエ!!どこ行きやがった。」

少年と傭兵が驚いてる。まあ、向こうからすれば消えたように見えるからな。

一氣に近づいて……。

「ここだよ。」

正面に出て殴る!!傭兵は気絶したみたいだ。

「大丈夫?怖かったね。」

そういつて女の子の頭をなでようとした瞬間

「妹に手出すんじゃない!!」

いや、助けたんですけど!?そういつて切り合っていたら、

「サード止めて!!その人は私たちをたすけにきてくれたんだよ!!」

少女かそう言ったら、少年は切り合いをいったん止めた。

「そうだ。俺たちは被験者の子供たちを助けるために来たんだ。君は被験者か?」

研究者の仲間かどうか聞いたら、「ふぎけるな」と答えたんだ。こいつは被験者に違いない。

「ちっ!!てめえらなんて来なくても逃げられた!!まあいい、お前らはこの後どうする。」

何とか収まったのかな?

そうして、この子たちも保護し、鹵獲組と合流し、ロスアラモスから去った。ある程度してからロスアラモスから爆発音が聞こえてきた。アメリカ軍がやり始めたのかな?

「ねえ……。」

あの時に助けた茶髪の子が俺の袖を引っ張ってきた。

「あなたの名前って何?」

「イブキっていうんだ。」

「私にはお兄ちゃんがいるんだけど……。あなたのことイブキにいつてよんではない?」

はっ……まあ……呼び方なんてどうでもいいか。

「ああ、いいよ。」

「イブキにい、私はGIVっていうのよろしくね！」

ジー・フォースっていう名前なんだ……。珍しい名前だなあ……。やっぱりかあ……。

「フォースちゃん、よろしくね。」

「うん!!」

これが、まさか布石だったとは思ひもしなかった。

基地に戻ってから俺は治療を受けてた。致命傷がないって言っても満身創痍には変わりないしなあ。空港の時よりも作った傷が多いんじゃないか？

「イブキさん、ちょっと問題が……。」

メガネさんが来た。

「どうしたんですか？メガネさん。」

「実はですね、保護した子のうち一人が君についていきたいと言いついてね。」

保護した子はアメリカが責任をもつて育てるそうだが、心配だけど。だが一人が俺についていきたいと言いついてね。

その子がいるところに俺は行かされた。そこには俺に切りかかってきたキンジジ似の少年と、助けた茶髪少女がいた。え？もしかして……。

「フォース俺とこい!!」

「サードは大きくなってから合流するよ。私はそれまでイブキにいてついていく。サードはこれから逃げるんでしょ？それなら一人のほうが合理的だよ。」

……。帰っていいですか？

「おお!!イブキ少尉!!来たか!!」

辻さんが笑顔でこっちに来た……。なんか嫌な予感が……。

「いやあまさかイブキ少尉が!!短時間でこの子と仲良くなるとは!!この希信!!驚きを隠せない!!この希信は!この子たちをアメリカに渡すのには反対だが!しかし!!自ら日本に来たいというのなら問題にはならない!!さすがイブキ少尉!!仲良くなり日本へ行きたいといわせるようにするとは!!」

・・・だいたい誤解なんですけど・・・。

「あ、あの・・・辻さん・・・。」

「イブキ少尉のことをイブキにいと呼ばせたと聞きました!! そう呼ばせたとすることは!! 妹として引き取るということ!! さすがイブキ少尉!! この希信!! 急いで戸籍を準備しましょう!!」

そこへ角山中隊長と神城作戦参謀が来た。

「村田少尉、妹さんのことは任せたまえ!! 自分が上の説得をしておこう!!」

「流石ですね、村田少尉は。まあ、面倒なことは私たちに任せてください。」

・・・。。。。G IVを見ると、「計画通り」とでも言いたそうな顔で笑ってた。

そうして俺はなし崩し的にG IVを引き取ることになった。

なお、帰りの飛行機でG IVは研究所であったことを話し、辻さんと神城作戦参謀、それに角山中隊長と鬼塚中尉が号泣した。

「イブキ少尉!! この子の名前をどうしよう。流石に村田G IVだ」と、この希信でも、戸籍を作るのが難しいのだが・・・。」

そういわれればそうだ・・・。G IVは俺を見ている・・・。名前をつけるだけでもいいのか? 原作道理でいいか。

「・・・では村田かなめでお願います。彼女の元になった人の家族を知ってましてね、その人たち名前に金を入れるのでかなめにしました。」

「・・・ふふふ。イブキに、あたしはかなめ!! かなめだよ!!」

なんか泣いて抱き着いてきた。頭を胸にグリグリするな、傷が開くだろ!?! ってなんでみんな泣いてるんですか!! 辻さんと鬼塚中尉なんて号泣してるし!!

まあ、皆さん、俺に妹ができました。

「キンジへ

俺、お前の妹を義理の妹にしちやった。」

「イブキへ

病院行くか? そんなに軍隊つてきついのか?」



普通は信じてくれないよな。

中隊長は俺たちに2週間の休みをくれた。かなめと包帯だらけの俺は二人で俺の家へ帰ることにした。

「ここがイブキにいと過ぐす愛の巣！さすがイブキにい!!合理的い!!」

「いや、違うからね。他の人いるからね!？」

家の前で、玉藻がホウキを掃いてた。

「玉藻く、帰ったよ。」

「まあ、おかえりなさいまし。つて、マスターが女の子を誘拐したああああ!？」

何言ってるの?人聞きの悪いこと言わないで!!

「いや、これ違うから!!」

「ほう、まさかイブキが手を出し連れ帰るとは!おお!!美しいではないか!!イブキよ!!余にも分けよ!!」

ネロ、何言ってるの!?

「主殿!!寂しかったです!!撫でてください!!」

牛若はかなめのことが見えていないようだ。

「フッフ…、まさか、イブキがほかの女を連れてくるなんてね…。」

エルさん?瞳孔が開いて怖いんですが…。あと、鎖で俺のこと縛らないでくれません?

「傷だらけとは情けない…。修行だ!!まずは竜を狩りに行くぞ!!」  
待って、師匠。引つ張らないで!!つて、この世界に竜なんているの?

「イブキ!!誘拐とはどういうことですか!?!あなたはファラオである私の同盟者であることを…。(以下省略)」

ニトちゃん…。

「男前になつたじゃねえか。」

「わっはっはっはっはっはっ!英雄色を好むという!!」

ベオウルフにエジソンも…。

俺は何とかその誤解は解き、かなめのことを紹介してくれた。みんなは彼女を温かく迎えた。そこから俺は休みの2週間を家族とゆっ

くり過ぎした。これほど癒されるものはない(修行を除く)。だが、休みの最終日、事件が起こった。鬼塚中尉の買い出しに俺が付き合わされたのだ。

「生麺タイプってやつがあるがあれは邪道よ。カップは乾麺！店では生麺！適材適所、メリハリってものがないとなあ……。」

「そうですか……。ところでまだ買うんですか？」

なんで家族とゆっくりしたかったのに!!なんでこんなおっさんと二人で買い物しなきゃいけないんだ!!

「当り前よ!!俺は三食カップ麺を食わなきゃ力が出ねえ!!」

この中尉、カップ麺箱買いして、全部俺にも持たせる。しかもカートを使おうとしたら睨まれたし……。

5分後、鬼塚中尉は満足したのか

「よし、レジまで運べ!!いい運動になるぞ!!」

てやんでえ!!!じゃあ、テメエがしろよ!!

買い物が終わり、俺と鬼塚中尉は食堂に来ていた。

「たまには部下と一緒に休日を通ぐすのはいいもんだ、なあボウズ！」

「ソウデスネ……。」

上司と通ぐす休日ほどクソなものはねえ!!

「おい！楽しいか！はっはっは!!」

「ソウデスネ……。」

楽しくなんかねえ!!

「ご注文は？」

「こつてりチャーシュー麺2つ!!」

「かしこまりました。」

「え？ちよつと待って……。」

ウェイターさんは厨房のほうへ……。俺、疲れたから、あつさりしたラーメンじゃないのが良かったんですけどお……。

「俺のおごりだ!!遠慮せず食べ!!」

「ラーメンじゃないのが良かったんですけど……。」

俺は、渋々ラーメンを啜っていると、

「お？鬼塚じゃん。」

「おお!!ジミよ!!」

アフロで道着を着たおっさんが来た。二人は親友なのだろうか？二人で盛り上がっている。

「この時間じゃ、飲み屋は開いてねえな。」

「じゃあ、カラオケカラオケ。」

そういつて二人は席を立った。しめた!!この流れなら俺は帰れる!!

「二人の邪魔だろうし、俺は帰りますね。」

そういつて俺は席を立ち、帰ろうとすると

「よし、ボウズも来い!!」

そういつて、俺に買ったカップ麺の箱を持たせ、カラオケに連れていかれた……。

そのあとは悲惨だった。カラオケと居酒屋は鬼塚中尉が代金を持ってくれたが、男二人のヘタクソな歌を何時間も聞き、その後居酒屋で二人が盛り上がっている中、ジュースをチビチビ飲む……。これならまだ、ネロのワンマンライブのほうが何倍もイイわ!!しかも、居酒屋でジミさんと別れた後、鬼塚中尉が俺の家まで来て泊まっちゃったし……。ベオウルフと鬼塚中尉はお互い気に入ったのかだいぶ仲良くなったけど、女子勢が怖かった。エルとかなめは瞳孔開いて鬼塚中尉を見るし、師匠と玉藻とニトは額に青筋があるし、牛若なんか鬼塚中尉を何度も切ろうとしたし……。あまりにも女子勢の怒りが怖かったのか、エジソンとネロは早く寝てしまった。

そして次の日、俺と鬼塚中尉は駐屯地に戻っていった。休んだ気がしねえ……。

「おい、起きろ。」

田中さんが銃床で俺をつついた。俺は訓練中、トラックに揺られながら寝ていたようだ。

「どうした、休暇ボケか?」

「すみません……。休暇の疲れがどっと出ちゃって……。」

「どうした、休暇中なんかあったのか?」

鬼塚中尉はトラックを運転してる。俺たちはトラックの荷台にい

るから、ここで話しても鬼塚中尉には聞こえないか。

「昨日、一日中、中尉につき合わされてたんです……。買い物つき合わされて、うまくもない歌をさんざん聞かされて、拳句の果てに俺の家まできて泊まったんですよ!？」

「ああ……。そいつは災難だったな……。上司と過ごす休日ほど、空しいもんはないからな……。」

田中さんは俺の背中をポンポンと叩いた。

「まったく……。休暇を返してほしいですよ……。」

「部下とのコミュニケーションのつもりなんスカねえ?」

岩下さんが言った。

「そんなの知るかよ……。俺こないだ休みの日にスーパーで刺身を見てたらよ……。。」

田中さん曰く、スーパーの刺身を見ていたら鬼塚中尉に会い、そのまま無理やり築地に連れていかれ、そこで2、3時間魚の講釈を聞かされた。その後、家まで来られて捌き方の講釈が始まったらしい。

「結局、うまかったんですか?」

俺がそう聞いた後、田中さんは銃を床にガンガンとぶつけながら

「それがありえねえぐらい、クツソまずいんだよ!!」

と言った。

「長々講釈垂れてる時点で、新鮮さもクソもないツスよね……。」

「俺には刺身食わせて、テメエはカップ麺啜ってんだよ!!」

「うわあ……。」

流石にそれはないな……。するとメガネさんはタブレットから目を離し、

「俺もこの間、中尉に誘われたんですが、ウザいから断ったんですよ。」

「断った!?!」

俺と、田中さんと岩下さんは驚いた。

「いや、服買ったかったんで一人で行ったんですよ……。」

メガネさん曰く、一人で服を選んで試着室に入ったならそこに中尉が待ち構えていた。そのまま、試着室で酒盛りとばかりに中尉はビールを飲み、カップ麺を啜っていたらしい……。

「怖っ!!」

「休日ほかにすることないんですかね？」

「そう俺が言ったら、」

「単に寂しがり屋って説があるな」

田中さん、よく知ってるな。

「ハイ、俺、中尉と二人で遊園地いったツス。」

「ああああああ!!!」

俺と田中さんはあまりの衝撃で悲鳴をあげた。

「お、男二人だぞ!」

「中尉はそういうの気にしないツスから。カップルだらけのところ  
野郎二人が並んで、観覧車乗って、きつかったなあ……。しかも観  
覧車の中でカップ麺食うんツスよ!」

岩下さん……。

「よ、よく耐えたな……。」

「そのあとが大変なんスよ。ゴンドラがグーって上がって、てっぺん  
ぐらいまで来たとき……。」

「突風によりトラブル発生、観覧車の動きが止まる。当たってます?」

急にメガネさんが言い出した。

「あ、ああ……。」

「4時間宙ぶりじゃ、トイレ大変じゃありませんでしたか?」

「ちよ、待って、なんでメガネが知ってるんスカ!」

「ちよつと面白い物見つけまして……。」

そういつて、メガネさんがタブレットをたたき始めた。

「イブキさん、先月の15日。中尉とカジノ行って、ボロ儲けしません  
でしたか?」

「え?俺のことまでわかるんですか!」

確かに、俺は中尉にカジノに連れていかれ、身分を偽って中に入り、  
そこでだいぶ儲けて帰ったんだけど……。

「二つて何見てるんですか!?(見てるんだ!)(見てるんツスカ!)」

俺たち三人はメガネさんのタブレットを覗いた。そこには「あおぞ  
ら特殊部隊　く部下と過ごす楽しい日々」という名前のブログが

あった。

「中尉のブログ!?!」

「適当なワードでググったら 一発でしたよ。」

まさか、あの厳つい中尉がブロガーとか……。全然そう見えねえ……。

「ってこれ、俺の話じゃないツスカ!?!」

「まさか行間開ける系とはな……。」

「アーカイブ三年分はありましたよ。」

俺らからネタを拾っていたのか……。だから、色々つき合わされたのか……。

「おいおいおい!!これって俺の写真じゃないツスカ!人の写真勝手に使っていいんツスカ!?!」

覗いていくと、コメントのところがあった。

「だいぶコメントがありますね。開けますか?」

「よし、開けてみる。」

田中さんがGOを出したので、メガネさんがコメントのページを開いた。すると……

「・鬼中尉の部下への愛が伝わってきます。」

「いつもほほえましい記事をありがとうございます。部下さんがんばれー!!」

・初めまして、鬼中尉は部下さんが大好きなんですね

・余は、イブキの記事をもっと読みたい!!イブキの記事はまだか!!

・主殿の記事を楽しみにしています!!

・イブキにいの記事を多くするのは合理的だと思います。

・イブキの記事を探してしまう……。これは、どうしてだろう……。」

などと、心温まるコメントが沢山あった。

「二「なんか照れますね〜(照れるなあ〜)(照れるツスね〜)」「三」

そういうって俺達は盛り上がった。

「このブログは見なかったことにする。いいな?」  
そう田中さんは言ってこの話は流れた。さて、今日も訓練に励みますか。

そういえば、あのコメント見たら、脳裏にうちの家族のことが思い浮かんだんだけど・・・気のせいだろう。

私事に部下を巻き込まないで・・・

そうして俺はこの部隊で1年を過ごした。まさか忘年会の王様ゲームで、鬼塚中尉が

「3番が、北方部隊へ島流し〜。」

と言ったら、次の日、本当に北方へ送られるとは思わなかった。(その時、俺が3番だった。)そのせいで年末を家で過ごせず、家族に怒られた。

4月、キンジからメールで東京武偵高校に入学したと教えてくれた。それはめでたい、あいつはベレッタを使ってるんだっけ？俺はキンジの入学祝として9mmパラベラムを木箱で送ってやった。きつと喜ぶに違いない。

5月、かなめが家を出て行った。やりたいことがあるそうだし、きつとサードと合流するつもりなのだろう。寂しくなるな。特に可愛がっていた玉藻とネロはすごく寂しそうだった。

11月ごろ、ある事件が起こった。ニュースは

「三角諸島沖に絡み、某国外務省は緊急声明を発表しました。」

「我が国の潜水艦が領海内を潜航中、日本軍の攻撃を受け消息を絶つた。国際社会の平和を乱す日本の愚劣な行為に対し、我々は厳しい対抗措置を取る用意がある。」

「某報道官は三角諸島沖を自国の領海とした上で日本を激しく批判、厳しい対抗措置とる可能性を示唆しました。」

と言っていた。これを見ていた。俺、田中さん、岩下さん、メガネさんは

「！！「ふざけるなよ！！」「！！」」

「被害者面してるんじゃないぞ!!」

「不法侵入はそっちツスよ!!」

と言っていた。ニュースは続き、

「総理はこのことに対し、コメントを出しました。」

「え〜事実関係は把握しておりませんが、今回の件は国の主権に関わる問題ですので、国内法に基づき粛々と・・・グー・・・」



・・・おい。

「肃々と寝やがった!!」

「現実から目を背けないでほしいツス!!」

「・・・鬼塚中尉が見てなくてよかったですね。」

「というか、立ったままで寝られるとかすごいな。」

などとしやべっていた。そうしたらすぐに速報が入ってきた。

「緊急速報です。某国政府は武力衝突事件の報復措置として、日本に対するレアアース輸出の全面差し止めを決定。予定された輸出生分のすべてを、強制的に冷凍餃子に切り替える方針を明らかにしました。」

・・・なんで冷凍餃子?それよりも・・・

「二!いらねえっつーの!!」

「なんで冷凍餃子なんだよ!!」

「そんなに冷凍餃子あっても冷凍庫の肥やしになるだけツス!!」

「向こうって冷凍餃子余ってるんですか?メガネさん。」

「そういう情報はないですね。イブキ君」

などと話していた。本当にこの場に鬼塚中尉、辻さん、神城さん(か  
なめの件で仲良くなった)、角山中隊長がいなくてよかった。絶対爆  
発しそうだ・・・。

ドカーーン!!この希信!!!

兵舎の一部が爆発し、爆発の中心部であろうところから騒音と妖気  
が出てるのは気のせいなはずだ。きつとそうだ、そうに違いない。

そして、本日は訓練がなくなり、代わりに兵舎の修復となった。

俺は起きたら海で浮かんでいた。え?どういうこと?周りには何  
も見えない。というか陸地も見えない・・・。俺は海パン一つと水泳  
帽、ゴーグルのみ・・・。は?どうして?すると近くから何か浮か  
んできた。・・・それは、どう見ても手作りのタコ足を首につけた鬼  
塚中尉、同じく手作りのイカの足を首につけた辻さんだった。あんた  
ら何やってるの?暇なの?」

「・・・鬼塚中尉、辻さん。なにやってるんですか?」

「俺たちは、鬼塚や辻少佐じゃねえ・・・。俺は☒☒通りすがりのタコ☒☒

!!

「この希信は！~~×~~~~×~~偶々いたイカ~~×~~~~×~~!!」

「・・・大丈夫ですか？」

「なぜこんなことをしているか、この希信が、説明しよう。今、我々、希信たちがいる場所は、三角諸島から北西に50kmの、我が国の、排他的経済水域内だ!!」

「そういえば、辻さん陸軍なのに海の上で立ち泳ぎできるのか・・・」  
「なんで俺がここにいるんです？」

「事前の説明は省かせてもらった、この希信が、情報の漏洩を危惧したためだ！」

「極秘の任務、ですか？一応、国内になるので第一中隊の管轄だと思うんですけど・・・。」

「・・・。」

黙り込むつもしかして・・・。そこに違法操業中であろう漁船が通りかかった。鬼塚中尉と辻さんはその船に近寄って行った。

「なーに他人のシマで操業してんだよ!!!なめてんじやねーぞ!!」

「我が国への侮辱行為!!!受けて立つぞ!!!キエエエエ!!!」

「そう言ったら漁船は去っていった。わかる、その気持ち・・・。タコとイカのコスプレした人たちが近寄ってきて、何言っているかわからないことを怒って言うてるんだよ。それは逃げたくなるさ・・・。すると鬼塚中尉がこつちを振り向き、説明しだした。

「見ての通り、この海域では他国の漁船による違法操業が常態化している。このたび海保が追っ払っちゃいるが、いかんせん、いたちごっこよ。連中は三角諸島を自分の領土だと思っているからな。」

「はあ・・・それは我が国の領土保全にかかわる問題ですね。」

「そう俺が言うと、

「俺たちの海は!!!」

「俺たちが守る!!!」

「そう言っつて、鬼塚中尉と辻さんは決めポーズを取った。あんたら元氣あるなあ・・・。」

「しかし、丸腰のパンツ一丁でどうやって・・・。」

「気合で乗り切れえ！」

いや・・・丸腰の3人に何ができるんだよ・・・。

「そもそも、第2中隊は海外が専門でしょう？それに特殊部隊が海上警備って・・・。」

そういうと、鬼塚中尉と辻さんは首を横に振った。

「お前は特殊部隊隊員じゃねえ・・・。」

「イブキ少尉は、~~名~~ブイ~~名~~だ!!」

は？

「何言ってるんですか？」

そうすると・・・鬼塚中尉は俺に指をさした。

「だから、~~名~~名も無きブイ~~名~~と・・・。」

今度は鬼塚中尉自らを指さした。

~~名~~通りすがりのタコ~~名~~よ！」

「この希信は！~~名~~偶々いたイカ~~名~~!!」

・・・何を言いたいんだ？

「さつきから、何を言ってるんですか？」

そうすると、鬼塚中尉と辻さんはあたりを見回した。いや・・・近くに何もねえよ・・・。そして、鬼塚中尉はこっちに手招きし、

「おい、近くに寄れ、大きな声じゃ言えねえんだけどよ、実は・・・。」

「出動命令出てないってどういうことですか!?まさかの独断ですか!?!」

俺たち三人は漁船を追いながら話していた。

「だったらどうした!!お上の命令なんて待ってられるか!!」

「最悪、この希信が煽り、正当化すればいい!!」

「オラ、帰れ帰れ!!」

これ、軍法会議クラスだよね・・・。

「いやいや、お上の弱腰な対応にいら立つのもわかりますが、それに耐えるのも軍人でしょう!?!これ、バレたら軍法会議物ですよ!?!」

「大丈夫!!タコとイカとブイがやったこと!!バレるはずがない!!この希信が保証しましょう!!」

「いやいやいや、政治の判断待ちましょうよ!!」

すると鬼塚中尉が

「じゃあ何か！このまま指咥えて見てろっていうのか!? 奴らがただの漁船かどうかなんてわかったもんじゃねえんだぞ!!」

そう言うのと、鬼塚中尉は急にまじめな顔をし、

「俺には政治だの、外交だのはわからねえ。だけどよ……。」

「祖国を蹂躪するが如く!! なめ腐った挑発行為は!! 俺（この希信）個人に対する!! 宣戦布告と判断する!!」

「じゃあ、俺を巻き込まないでくれませんか……。」

私的な事のために俺は、こんな南方まで拉致されたのか……。

「ブイじゃア!!」

「タコじゃア!!」

「イカだあ!!!」

「べらんめえ!!! 貴様何処のもんだア!! ケツからてえ突っ込んで歯がたがた言わせたるか!! べらんめえ!!! しまいにやミンチにして餃子にして食うぞ!! この野郎!!」

色々諦めた俺は、「名も無きブイ」として、違法操業中の漁船を追い掛け回していた……。

「い、イブキ少尉……。それは言い過ぎだ……。流石にこの希信も引く……。」

え？ そうでしたか？

「あらかた、追い払いましたね。」

「おう、よく頑張ったな。」

「そういえば、神城大尉はどうしてるんです?」

あの人も来そうな気がするんだけどなあ……。

「ああ、この希信が答えよう。神城大尉は今頃兵部省と総理官邸に殴り込みをかけて、我々の擁護と、違法操業中の漁船への殴り込み作戦の草案を出しに行っている。」

ああ……お上にこのことバレてるのか……。家族とどこか遠くへ逃げようかな……。なるべく海外以外で……。

「ボウズ、お前ブイ向いてるんじゃねえのか」

鬼塚中尉がそう言った。うれしくないんですが……。

「いやあく……(泣)お二人のタコとイカも見事でしたよ(お世辞)。」  
「そ、そうか？」

「この希信、それはうれしい!!」

なんでそんな喜んでんだよ……。すると下から大きな影がゆっく  
りと……。ええ？

「二うわああああああ!!」

大きな潜水艦が浮上してきた。その潜水艦の横には「伊・U」の文  
字が……。はい？

「オラオラオラア!!潜ってんじゃねえぞ!!」

「我が日本の領海に来るとは!!この希信が相手になりましょう!!!」

そうして二人は海パン一丁に手作りの足をつけたまま、その潜水艦  
に乗り込もうとした。

「いやいやいやいや、乗り込むのはまずいでしょ!?!」

聞くそぶりはなく、二人はハッチをこじ開け、中に入って行った。  
追うしかないのか……。

そうして俺は、海パン一丁に水泳帽をつけた丸腰の格好で、イ・ウー  
の人たちと戦わなくてはならなくなつた……。

これ以上変人奇人になりたくない・・・

俺は鬼塚中尉と辻さんを連れ戻すために潜水艦の中に入った。なんなのここ？剥製とか骨格の標本とか沢山あるんだけど・・・。下手な博物館よりすごいぞ・・・。最初は海水の跡を追っていたんだけど、途中でなくなってる・・・。シヨウガナイ、すべての部屋探すか・・・。俺は近くにあったドアを開けた。

「フフフ・・・。ッ!!誰かいたような・・・。」

銀髪のかわいい女の子がフリフリのドレスを着て、鏡見て笑ってたよ・・・。俺は何も見なかった・・・。

ほかの部屋を見て回り、変装用具一式とナイフ、銃が置いてある部屋を見つけ、そこから色々と拝借した。ただ、そこにあつた服は小さくて着れなかった。だから俺は「名も無きブイ」から「海パン一丁にカツラとサングラスをつけ、銃とナイフを持った変質者」にジョブチェンジしてしまった・・・泣きそう。

人間堂々とすれば意外とバレないもんだな。

「どうもー新入りです。相棒のタコとイカのコスプレした人見ませんでしたか？」

ずっとこれ言ってるんだけど、全然不審がられてない。時々、名前聞かれるけど

「ジョニー・マクレーです。」

そう言ったらそれ以上質問されなかった。海パン一丁の武装しているやつを平気でスルーするって、この組織、変人奇人が沢山いるのか？あとマクレーのおっさん、有名人になるよ。やったね!!

潜水艦を探索していると、ある一室から声が聞こえてきた。あそこか？

「どうもー新入りです。相棒のタコとイカのコスプレした人見ませんでしたか・・・。」

そこには、二本足で立っている獣と銀髪(?)に近い髪をしたメイドさんがいた。なぜかメイドさんは泣いてた。・・・これ、ブラドとリサだよな。

「ああ？新入りなんて聞いてないぞ？」

「最近入ったんですよ。ジョニー・マクレーって言うんです。お嬢さん、あなたの名前は？」

「え？私はリサ。リサ・アヴェエ・デュ・アンクです。」

やっぱりなあ……。どう思った瞬間、殺気!?慌てて避けたら、俺がいたところにはでっかい槍が刺さっていた。

「新入りなんて聞いてねえ。それにな、俺は本物のジョニー・マクレーを知ってるんだよ。テメエはここで死ねえ!!!」

そういつてブラドは腕を振るった。つて、あのままだとリサに攻撃が当たる!?俺は慌ててリサを抱え避けた。

「リサ!!危ないから隠れる!!この野郎!!こんなかわいい子泣かせやがって!!まるで勇者と魔王だな……。」

前世は中高ともに男子校なんでね、かわいい子を泣かすのはすぐく頭にくる。それにこのシチュエーション、まるで攫われたお姫様を助けに来た勇者だな……。勇者が海パンだけなのが笑えるが……。まあいい、騒ぎを起こすのは厄介だ。あと、こいつ殺しても問題は起きないんだっけ？ならこの技で仕留める！俺はその場にルーンとヒエログリフを刻んだ。

☒☒反魂蝶☒☒!!!」

その場から大量の光る蝶が出てきてブラドを襲った。こいつは魔術の時間に二トから教えてもらった物だ。本当は苦しんだ顔をした人魂もどきが出てきて、敵を即死させる、という魔術だった。でも、さすがにそんな人魂もどきを使いたくないじゃん……。崇られそうだしさ……。そこで師匠がその人魂を蝶の姿にするMOD……。間違えた、ルーンを作ってくれ、さらに師匠はその術自体も簡略化してくれた。ほんと師匠様です。

しかし、効いてるようだがブラドは死なない……。FGO風に言う、即死は入ってるんだけど、連続してガッツで耐えてるから一向に死なないって感じ。そういうえば、リサが俺を驚いた顔をして見てるんだが……。

「ゲババババ!!俺は魔臓がある限り不死身だア!!!」

そうか、魔臓の場所なんて忘れちゃったしな……。原作読んだのももう10年以上前だし……。シヨウガナイ、師匠直伝「不死殺し」をやるか!!俺は持っていたナイフに力を入れた。

よかった。ブラドの肉体は哺乳類に近い。これなら何とかかなりそ  
うだ。

「テメエの首はいらねえ!!べらんめえ!!命置いてけよ!!命置いてけよ!!なあ!?なあ!?!」

「わ……。悪か……。ヤメテ……」

そう!師匠直伝「不死殺し」とは、「相手の精神が死ぬまで痛めつける」です。肉体は不死身でも、精神は不死身じゃないやつが多いからな。

「なんだ、まだしゃべれるのか。足りねえようだな!!」

……。なんか、客観的に見ると俺のほうが悪者だな。って、そういう  
えば俺は鬼塚中尉と辻さんを追いかけて来たんだ!!急がないと!!俺は治癒を抑えるルーンと体内時間を遅くするヒエログリフをブラドに刻んだ。そして

「イピカイエー・マザーファッカー!!」

とどめにナイフを頭に刺し、リサのほうを向いた。なんかこの子、  
すぐく目を輝かせてるんだけど……。

「リサさん、タコとイカのコスプレした男二人組知らない?」

「リサとお呼びください。勇者様。」

……。やっちゃった。

「リサ、タコとイカのコスプレした男二人組知らないか?」

「はい、教授の部屋のところに行きましたよ。リサが案内します。勇者様。」

そうして、リサは俺の手を取り、案内してくれた。あの、リサさん?  
俺は勇者じゃないですからね。それに俺の手、血と肉片がついてるから汚れるぞ。

リサが案内してくれた部屋に入った。すると、オールバックの青年と鬼塚中尉と辻さんが戦っていた。というか、押されてるとはいえ、鬼塚中尉と辻さんが素手でシャーロックと互角の勝負してるってマ



ジかよ!?

「君たちは誰なんだい!? 僕の推理でもわからないよ!？」

「通りすがりのタコ!？」

「偶々いたイカ!？」

「・・・まだその設定続けてたんだね。」

「(テメエ(貴様))!!どこのもんじゃあ(だあ)!!!!」

「イギリス出身だね」

教授さんよ、律儀に答えなくていいから。

「鬼畜米英だオラア!!」

「イギリスが我が領海に入り挑発だ!!このイカ!!憤慨だ!!」

「・・・帰る準備するか。」

「リサ、この潜水艦から脱出できて、日本まで送ってくれるっていう便利な乗り物とかある?」

「確か原作だと、魚雷を改造した乗り物があったような・・・。」

「はい、ありますよ。案内しますか?」

「うん、ちよつと待って。」

「はあ、あの二人を止めなきゃ・・・。」

「イカさん!!タコ中尉!!撤退するので戦いを辞めてください!!」

「ふざけるなあ!!祖国を蹂躪するが如く!!なめ腐った挑発行為!!見逃せというのか!!」

「・・・聞いてくれないか。ショウガナイ、嘘も方便だしな。」

「このままだと敵の思うつぼです!!囲まれてしまいます!戦略的撤退!転進です!!」

「なんだと!逃げるぞ!!ボウズ!!」

「この希信!一生の不覚!!危うく敵の策謀にはまるなんて!!」

「そうして、鬼塚中尉と辻さんは俺のほうへ急いで逃げてきた。」

「君も僕の推理にない!!君は一体誰なんだ!？」

「ただの!名も無きブイ!だよ!!べらんめえ!!リサ!!案内してくれ!!」

「はい!!」

俺たちは走った。

騒ぎを聞いたのか、道中でいろんな人が妨害しようとしていたが、先頭を走る鬼塚中尉と辻さんの手によって難なく障害を突破していた。あの二人、すごいな……。

「つてそつちじゃないです!!右です!!」

「早く言え!!ボウズ!!」

あんたらが先頭突つ走るからだろ……。

リサは俺たちをたくさんさんの柱があるところへ案内した。え?これってもしかして……。

「これに乗れば日本に帰れますよ、勇者様。」

「う、うん。ありがとう。」

その柱の中にハッチがあつて、そこに乗れといった。これICBMを改造した奴だよね……。

「勇者様、勇者様の本当の名前はなんていうんですか?」

……どうしよう。言わなきゃいけないかな。でも、案内してくれただよな……。

「村田維吹、イブキって呼んでくれ。」

「はい!!イブキ様!!」

「ボウズ!!早く乗れ!!」

「ブイ少尉!!早く!!」

まだその設定生きてるのかよ!!

「じゃあね、リサ」

「はい!!」

そうしてハッチを閉めた。リサがその時なんか言っていたような気がするが気のせいだろう。

そして、ICBMはゆっくりと宇宙空間へ飛んで行った。

「イタイイタイ!!鬼塚中尉!!辻さん押さないで!!」

「狭いんだからしょうがねえだろ。」

「イブキ少尉!!この希信も我慢している!!」

二人乗りであろうものに、ガタイがいい3人が乗り込めば狭っ苦しい……。そうして俺たちは宇宙空間へ行った後、駐屯地の演習場へほぼ直角のまま落ちていった。

あとで聞いた話だが俺が寝ている時、部屋にガスを流し、完全に寝たところを拉致つたらしい。そこまでして領海守ろうとするのかよ……。

俺たちが宇宙空間にいる頃、第2中隊兵舎の一室で田中さん、岩下さん、メガネさんは一つのPCを見ていた。そこには「三角諸島の真実」という題の動画があった。

「深夜0時ごろアップロードされたみたいですよ。」

その動画には、某国漁船が海保の船に体当たりした様子が映されていた。

「流出とはな……中尉はこの動画見たのか？」

そう田中さんが聞いたら、岩下さんが

「さあ……知らないツスけど。」

と答えた。

「こんなもん見たら、相当ブチギレるぜ、あのおっさん。」

「いきり立って、現地に乗り込みそうツスよね。」

「そこまで馬鹿じゃねえだろ。」

「っはっはっは」

田中さんと岩下さんがそう言って笑っていた時、メガネさんは動画にある物を見つけた。そこにはタコのコスプレをした鬼塚中尉、イカのコスプレをした辻少佐、諦めた顔をして水泳帽をかぶるイブキが漁船を追い回していたのだ。

「ちよつと!!これを見てください!!」

流石にメガネさんも驚いた。そしてメガネさんはその写っている部分を田中さんと岩下さんに見せた!!

「タコとイカとブイだろ?」

「タコとイカとブイ、ツスよね?」

「……タコと……イカと……ブイ……ですか……」

演習場にICBMが落ち、そこからイブキ、鬼塚中尉、辻中佐が出てきて驚いた数時間後、メガネさんは一人でパソコンをいじっていた。メガネさんは動画のタコとイカとブイに疑問を持ち、その部分を

何度も見ていた。そういえば中尉のブログはどうなってるんだろう。急にメガネさんはそう思い、中尉のブログを覗いた。そこには海パン姿の中尉と辻少佐、海で浮かんでいるイブキ、そして大きな潜水艦の写真があった。

「部下と上司で一緒に南の島に行ってきました。」

「だいぶ日に焼けました★」

「場所は秘密です（爆）」

「メガネさんは考えるのを止めた。」

「自由な人だなあ……。」

「次の日のニュースでは」

「総理は本日記者会見を開き、記者団の前で国内法に基づき、粛々と餃子を食べました。」

「えー、今回輸入に踏み切ったこの餃子は安心して食べてもらって大丈夫です。レアアースより餃子のほうがいいですね、ええ。だってレアアース食えないですしね。」

「……ああ、天国のお父様お母様、家にいる家族のみんな、かなめ、今日も日本は平和です……。」

「そして、俺と鬼塚中尉、辻さん、神城さんは中隊長の部屋に呼び出された。」

ドンパチからもっと近づいた・・・

俺と鬼塚中尉、辻さん、神城さんは中隊長室の前で話していた。

「これ、絶対中尉と辻さん、神城さんが起こした奴の話ですよ。俺言いましたよね、ヤバいことになるって。」

「まあ、確かにあの時テンション上がりまくってよ。確かにちよつとやり過ぎたかもな・・・。」

「この希信も、さすがにやり過ぎた・・・。」

「まあまあ、でも、鬼塚中尉。流石に君のブログで潜水艦の写真をあげるのはいかがと思いますよ。」

あ、神城さん、ブログのこと中尉に言っちゃった。

「ああ、さすがにヤバいと思つたので速攻消し・・・神城大尉、俺のブログ見ましたか？」

「うん、みんな知ってると思いますよ。」

その瞬間、鬼塚中尉は茹ダコのように赤くなり、その場でジタバタしていた。

「なんで俺のブログ知ってるんだよ!!!」

「中尉、あのブログ第1小隊の全員知ってますよ。」

「あのブログ、知らない人はいないと、この希信が保証しよう。」

さらに鬼塚中尉は赤くなった。そこで俺がもうひと押し。

「中尉落ち着いてください。第1小隊は全員黙認してますから。」

「ウガアーーーーー!!!」

ああ、これが愉悦というものか・・・。

鬼塚中尉が落ち着いたころ、中隊長室から角山中隊長が来た。

「鬼塚中尉は落ち着いたかい？落ち着いたなら早く入ってくれないか？」

その一言で俺たち4人は中隊長室に入った。

角山中隊長は呆れたような顔をして言った。そういえば中隊長が中佐から大佐になっていた。

「」「中隊長、昇進おめでとうございます」「」

「ああ、ありがとう。」

そうして中隊長は机の上で手を組んだ。まるで某使徒と戦うアニメの司令みたいだな。

「君たち、よくもやってくれたね。特に神城大尉、あなた兵部省は普通に入ったけど、総理官邸に本当に殴り込みに行ったそうじゃないか。」  
「すいません。だいぶテンションが上がってました。」

神城さん本当に殴り込みに行ったのかよ。流石に辻さんの冗談だと思ってたぞ。

「まあ、向こうは警備体制が甘いということが分かったから不問にするって言ってたけど。それにほかの部隊も行つて結構煽つたそうじゃないか。そのせいで他部隊も不満が爆発寸前。政府もある程度動かないとまずいつて認識したみたいだけど。3人もやらかしてくれたね。特に鬼塚君、あの写真はブログに上げちゃまずいよ。」

おい、中隊長まで見てたのかよ。鬼塚中尉また真つ赤になつてるし。

「でも、神城君。あの煽りはよくやった。あれは辻君が作ったやつかい？僕も政府の対応には頭に来ていたからね。君たちがもう少し遅くやっていたら自分も一緒に三角諸島に行くところだったよ。」

え？この人も行こうとしたの!?

「まあ、でも信賞必罰だからね。君たちには罰を与えなきゃいけないんだけど……。村田君以外の3人は1階級昇進と今日から一週間便所掃除ね。」

え？なんで昇進？降格じゃないの？というか俺は例外!?

「なぜここで降格じゃなくて昇進か？つて顔だね。本当はロスアラモスの件でみんな一つ昇進だったんだ。そうなると部隊編成とか考え直さなきゃいけないからさせてなかったんだけどね。」

確かに今まで鬼塚中尉が小隊長だったけど大尉になつちやったら面倒だよな……。

「それで今回の三角諸島の件、その罰としてロスアラモスの昇進はなかったことにする。そしてあの潜水艦、実は相当な機密なんだ。君たちがもし今後黙ってくれるのなら、口止め料として1階級昇進という事だ。」

だから1階級昇進なんだ。

「了解しました。」

三人は納得したようだ。ところで俺は？

「村田少尉は今回無理やりだったんだろう。しかも上司を止めようとしていたそうじゃないか。だから君は2階級特進。」

なんか戦死したみたいだなあ……。

「それに君は飛び級しまくったせいで同期の友人はいないし、同じぐらいの年の友達も少ないだろう？」

いやさすがに友達はあるし!!ボツチじゃないし……。

「だから東京武偵高校へ出向を命じる。村田大尉、東京武偵高へ出向し、無事卒業せよ!!」

「ハイ!!」

つい、脊髄反射でハイって言っちゃったけど、東京武偵高へ出向!!

「出向の件は前々からあったんだ。辻君や神城君が心配していてね。三角諸島の件の罰と研修のためって対外的にはなるけど。」

「了解しました。」

平和に生きるために海軍入ったのに……。ロスアラモスでドンパチやるわ、上司に連れられて潜水艦でドンパチするわ、拳銃の果てに原作であるように常日頃ドンパチやる東京武偵高へ入校か……。

「君は1月から1年生として入ってもらおう。ちょうど君の友達もいるそうじゃないか、同じ強襲科にしておいたよ。」

「いやいやいや、強襲科って一番危ないところじゃないですか!？」

明日なき学科って言われてるんだぞ!?!せめて探偵科のほうが……。

「戦闘を学ぶためって名目だから。転科は許さないよ。」

「りよ、了解しました……。」

「今日は家に帰り、このことを家族に話すように。」

「ああ、忘れてたけど、君の二つ名。上層部が君の働きに期待して

ノライフ・ヒーロー **不死の英雄** イモータル・スピリット **から不死の英霊** になったから。あのサイボーグ船坂にあやかっているそうだよ。」

「……ハイ。」

この中二病の名前忘れようと思ったのに……。

中隊長室から出た後、鬼塚中尉、辻さん、神城さんの喜びようはすごかった。でも皆さん、ドンパチが日常の高校へ行くんですよ？

「ドンパチがなんだ!!いつものことだろう!!」

「いやあくめでたい!!この希信!!イブキ大尉の入学祝はどうしよう!!」

「まあ、ドンパチなんていつも訓練でやっていますよね。大丈夫、ロスアラモスのようなことは起きないはずですよ。」

そうだった……。俺いつもドンパチの訓練してるんだった。海軍って何だっけ？

第一小隊のみんなにもこのことを言ったら、おめでどうと言ってくれた。顔には不憫だな、と書いてあったけどさ……。

俺は家に帰りこのことを家族に言った。

「ほう!!イブキが学校に!!余もその学校へ行こう!!」

「主殿!!私もついていきます!!」

「イブキ……僕も一緒に行きたいと思うのは……おかしいかな……。」

「うん、大分荒い学校だけど……。行きたいならいいんじゃないかな?まあエルの場合は戸籍改竄しなきゃならないけど。」

まさか行きたいとは……。戦闘能力は大丈夫だと思うけど、逆にやり過ぎないか心配だ……。

「ほお……。行くがよい。」

珍しく師匠は何も言わない……。何か企んでいるのか？

「そうになると、4人は寮生活ですか。寂しくなりますねえ。っは!通い妻という手が!!」

「うん、ヤメテ。これ以上面倒なのはヤメテ。」

玉藻は本当にやりそうだから怖い。

「ほお!!私が教えている学校に行くとは!!これも何かの縁だな!!」

そういえばエジソンはその教師してたのか……。

「最近あまり殴り合いができなくてなあ……。俺も行こうかな。」

「さすがに学生はベオウルフの相手は無理だぞ。」

「そうか?行けそうだと思うんだがよ……。」

ベオウルフさん、あなたが行ったらみんな死んでしまいます。



ニトがこつちを見て何か言いたそうな顔をしてる。スルーするか。「まあ、そういう事で1月から東京武偵高行くから、よろしくね。」

「私をスルーしないでください!!私は天空の神にして、冥界の神。そして、ファラオなのですよ!」(以下省略)

「まあまあ、で、ニトはどうするの?」

ああ、やっぱりこの子からかうの楽しい。

「あなたの世話をするのは私の役割。今までは付いていけないというので家にいましたが、今度は付いていきましよう。」

あら、そう思ってくれてんだ。

「でも、来るんだったらファラオとしてのニトだと難しいよ。普通の女の子ニトじゃないと。」

そうするとニトは固まってしまった。その後、何かぶつぶつと言っていたが、無視することにした。

「とりあえず、一緒に学生として行きたい人は俺に報告して。書類と戸籍改竄するから。」

結果、自分入れて5人分の転入書類と2人分の戸籍改竄が必要になった。

「そういえば師匠、ニト、エジソン。英雄王の~~王~~の財宝~~の~~の宝具がないような、いつでもどこでも取り出せる倉庫みたいな魔術ってある?」

「今のところ私はないな、よし!!発明してみせよう!!」

そうやってエジソンは自分の部屋へ行ってしまった。ああ、ないならないでよかったんだけど。

「ありますよ。冥界へ行ってもファラオがいつでも物を出せるように、ということで作りました。」

「あってもどうする。得物があればどうってことはなからう。」

あるんですか?俺は今回、名も無きブイとして得物なしで戦ったことを話した。あとダメ押しとしてこの言葉を何度も使った。

「師匠とニトが作ってくれた刀をいつも大切に持っていたんだ!!」

そのおかげでニト発案、改良師匠の「4次元倉庫」は完成した。ルーンとヒエログリフを俺に刻み、俺はいつでも英雄王のように宝具を出

せるようになった。やったね!! (中身は自分で調達)

「毒にやられるとは情けない、イブキ、ちよつとヒュドラを狩って来い。」

「え? 師匠? 何言ってるのってうわああああああ!!!」

師匠に拉致られ、どつかの山で八岐大蛇みたいなのやつと戦わされた。その蛇の血がやけに痛かったけど、気合で乗り切ったのは言うまでもない……。

「キンジへ

軍の命令で東京武偵高へ転入することになった。お前と同学年だ。よろしくな。あと俺の家族からも何人か行くから。

追伸、キンジの妹で俺の義妹は家を出てやりたいことをやりに行きました。」

「イブキへ

そうか、よろしくな。

追伸、まだその設定やってたのか。こつち来たら病院紹介するぞ。やっぱり、信じてくれないなあ……。

俺は転入希望者4人を引き連れ駐屯地へ向かった。4人は武偵高で必須の銃を買うため。俺は「4次元倉庫」を得たのでこの機会に大口徑、長射程、連発性の高い銃が欲しかったからだ。ロスアラモス殴り込み作戦、ミサイル落としの時さすがに三八式だと威力不足、射程不足、連発性が不足していると感じたからだ。

駐屯地へ着くと辻さんが待っていてくれた。あれ? 参謀長だよね。暇なの?

「いやあ、イブキ大尉とご家族が銃を選びに来るといので、この希信、待っていた!!」

「いやあ、すいません忙しいところに来て。」

「何、最近ゴタゴタがなくて、この希信も暇だからな。どつか煽って騒ぎ起こそうかと……。」

おい待て、この危険人物。

「まあまあ、軍が暇つてことは平和つてことですし。あと、戸籍改竄の件ありがとうございます。」

変なこと考えさせる前に話し変えないと。

「なあに、この希信にかかればなんてことない。銃を探してるんだらう、射撃場へこの希信が案内しよう。」

辻さんと俺達5人は射撃場へ向かった。

「さあ、この中から選ぶといい。ここにある銃は安値にしよう!!。イブキ大尉から欲しい銃は聞いていたからこの希信が厳選したぞ!!」

そういうと、辻さんは奥へ行き、銃を取りに行ってしまった。事前に行くことと、どのような銃が欲しいということは伝えてあった。とりあえず女性でも使える銃と大口径、長射程、連発性の高い銃を選んで欲しいとは言ったけど、辻さんが選んだのか・・・。

「イブキよ!!余は銃はわからぬ。余のため選ぶがよい!!」

「主殿!!これはどうでしょう。」

「うん・・・わからないね・・・。」

「同盟者よ、選ぶのを手伝ってください。」

うん、みんな待ってて、俺の選んだらすぐやるから。あと牛若、そのパンツァーフアウストはしまいなさい。どこから選んできたの!?

少しして、辻さんが台座付きの銃を持ってきた。え?

「倉庫に眠っていたが、信頼性はこの希信が保証しよう。九六式二十五耗機銃だ!!」

「待ってください、それ200キロくらいありましたよね!?!そんなの持てませんよ!?!それに在庫処分でしょ絶対!?!」

「正確には250キロだ。この希信に言ったじゃないか。重さは問わない、大口径、長射程、連発性の高い銃、さらに信頼性もあるといい。まさにこれのことじゃないか!!」

倉庫に眠っているって言うてたし、それに重さは問わないって言うたけど、そこまで重いのはふつう考えないぞ!?!

「いやいや、そんな重いの持てませんって!!」

「大丈夫、気合で持てる。この希信が保証しよう!!」

悲しいかな、魔力を筋肉に振ったら軽々持てた(泣)

そして、自分の銃はあっさり決まり、4人の銃の選択に移った。牛若とネロ、エルは直感で選んだものを自分のにしたようだ。牛若は

モーゼル・ミリタリー 9mm、エルはS&amp;W M500を選んだ。ネロはさんざん迷った結果、二十六年式拳銃にした。待つて、三人とも個性ありすぎない!?それに結構古い銃ばつか置いてあるけど、もしかして在庫整理も兼ねてやってるの!?だから伝えた時だいが安値にするって言ったのか。まあ、古いけど、丁寧に整備されてるの是一目でわかる。それに英霊だし、拳銃なんてそんな使わないだろう。いいや。

「ニトはどうしようか。」

「これとかどうでしょう?」

そうしてニトはルガーP08を出した。懐かしいなあ。

「自分がいいって思った物を持つのでいいと思うよ。どうせほとんど使わないだろうしね。」

みんなの銃は決まった。

1月、俺たちは東京武偵高へ転入した。

辻さんの使い過ぎもよくない・・・

俺達5人は東京武偵高に来了。とうとう来てしまったんだな。おかしいな、平穩に生きるため海軍に入り、軍艦の中でボタンを押す仕事になりたかったのに・・・。

東京武偵高で手続きをし、俺達は荷物を整理するため、それぞれ充てられた寮の部屋へ行った。(なお、サーヴァント4人はみんな同じ部屋だそうだ)

「どうも、転入する村田維吹です。って何だキンジか。」

「転入生がここに住むって聞いてたからまさかとは思ってたけど、イブキとはな。」

まあ、確かこいつは原作では一人ででかい部屋に住んでたんだっけ。それなら充てられても不思議じゃないな。

「キンジ、お前強襲科なんだって？俺もなんだ。先輩よろでくす。」

「まあ、多少のことは教えてやるけどさ。イブキのほうが実力上だろ？俺が引き取られた後、空港でテロリストとやりあったってニュースで聞いたぞ、ノーライフ・ヒーロー不死の英雄だっけ？」

この野郎、からかってやがる。

「実は軍の意向で変更になってね。ノーライフ・ヒーロー不死の英雄からイモータル・スピリット不死の英霊になったんだ。あとからかかってるだろう。」

「悪かったって。あと妹の件、頭は大丈夫か？」

やっぱり信用できないよなあ・・・。

「軍の秘密作戦で保護されてな。まあ、DNAでキンジの父さんが親ってことがわかったから、キンジの妹なんだ。ついでに俺が引き取ったから俺の義妹でもある。」

「そうなのか、複雑な関係だなあ・・・。父さん、不倫してたのか・・・。あ、そう思っちゃうよな。」

「軍機だから出生のことは言えないけど、少なくともキンジの父さんが不倫してできたってわけじゃないから安心しろ。あとキンジの弟もいるから。」

そう言ったらキンジはorzの体勢になってしまった。急に家族

が増えたんだ、気持ちにはわかる。

そして次の日、久しぶりに白雪に会った。そこにエルと牛若、ネロ、二トが来て一悶着があったが気にしない。その後、俺たち5人は武偵ランクを計るために東京武偵高に来ていた。俺とネロ、牛若は強襲科、エルと二トはSSRに行った。エルは強襲科に行きたかったみたいだが、さすがに戦い方がなあ……。自由履修ができるなどと言い、何とか説得した。

強襲科に行った俺たちは部屋に案内された。そこから一人づつ呼ばれ教官と戦い、簡単なランク付けをするそうだ。何でも、どうせ近々来年のためのランク付けの試験があるし、仮でいいだろうって思ったからだそうだ。

「村田く。お前の番だ。」

「ハイ。」

生徒であろう人に呼ばれ、俺は試験が行われるであろうとここまで誘導された。って強襲科の円形闘技場みたいなどこでやるのか、なんか多くの生徒が見てるし。そして闘技場の中には私服の師匠がいた。why?

「あの、師匠？なんでここにいますか？」

「ここで非常勤であるが教師をしている。セタンタほどではないがここには勇者が沢山いるから教えがいがある。さあ、お主の実力を計るとするか。イブキ、私を殺せるか？」

道場のバイトに加えて教師もやってたのか。だから俺が東京武偵高に行くって言った時何も言わなかったのか。今理解した。

「師匠が相手とか、きつすぎでしょ。はあ……。やるしかないんですよ……。ね……。」

「当り前だ。力を見せるがよい、勇士よ。出来なければお前の命を貰うまで。」

チクシヨウめ!!

「てやんでえ!!その命!もらって見せラア!!」

もちろん、負けましたよ、ええ。闘技場が壊れるから宝具なしの技術勝負だったけど。というかやつぱり師匠は異常だ。25ミリ機銃

撃つても槍で弾を弾く、銃は効かないからって「影を薄くする技」を使つて近づいても普通に対応してくる、懐に入っても槍で普通に対応するってどういうことだよ？距離1メートルもないところから拳銃撃つても対応するとか化け物過ぎる。

ネロと牛若も師匠と対決したらしい。二人も負けたそう。道具さえ使えば……って言つてたけど使つたらこの学園島、最悪沈むぞ。

俺とネロ、牛若はAランク（仮）だそう。正式じゃないから、殺そうとしていたから、という理由でSではないらしい。どう考えても師匠と対決するなら殺す気でやらないときついし、師匠は死なないだろうという考えでやったのがまずかったかな。ニトとエルはSSRでのランクはS相当のA（仮）だそう。こっちは正式じゃないからという理由でAらしい。納得の結果だ。

俺達5人は1週間ほどでずいぶんとなじんだ。キンジが友達の武藤や不知火を紹介してくれたり、4人に慕われてるからって強襲科で戦いを挑まれたり、エルが強襲科に居座るようになったり、拳句の果てに4人のファンクラブができたらしい。まあ、ドンパチが多いが、この世界ではほとんどできなかった学生生活を謳歌していた。その時、あるニュースが飛び込んできた。キンイチさんが死んだという話だ。ただでさえキンジは家族親戚は少ないのにキンイチさんが死んだというのはショックのよう。さらに、キンイチさんが乗っていた船の船会社は責任をすべてキンイチさんに押し付けようとしていた。これにマスコミが便乗、連日寮の部屋の玄関までカメラが回る。さすがに俺はこのことにブチギレた。

「キンジ、キンイチさんは武偵だろ？任務のために死んだことになっているだけだと思うぞ。キンイチさんの実力はキンジが良く知ってるはずだ。」

「そうかな……。」

「船会社とマスコミは俺が何とかする。キンジお前は部屋で休んでろ。」

「ああ……。」

キンジは大分ショックを受けているのだろう、ふらふらとベットへ向かった。さて、マスコミ対策をするか。俺一人では何もできないが、マクレーのおっさん曰く「こういう時は、友人に頼むのがいいんだ」。早速俺は携帯を手を取った。

「もしもし?」

「おお!!イブキ大尉!!元気に学生を楽しんでいるか!?この希信は心配で。」

「ああ大丈夫、楽しんでますよ。ところで辻さん、今暇?」

「毎日訓練だけで。希信は暇で暇で・・・。」

よし、暇だな。

「辻さん、その暇を解消させる出来事を持ってきたんですよ。」

「なんだと!?!イブキ大尉!!この希信に早く!!」

よし!!食らいついた。

「最近ニュースで船が沈んで、そこにいた武偵が批判されていますよね?その武偵の弟が俺の友達で、しかもルームメイトなんですよ。その友人がこれの件で大分落ち込んじゃいまして。」

「なるほど、あのニュースは船会社の責任逃れのために色々と言っているのはすぐに分かった。それにマスコミも便乗するとはおかしいはずだし、この希信もおかしいと思っていたが・・・。もしや・・・。」

「はい、辻さんに船会社にちゃんと責任を取らせるようにしたいなど。あと、俺たちの部屋にまでマスコミは来るし、マスコミの報道もだいぶ偏っています。ちよつとマスコミも自重つてのを覚えてもらいたいと思います。報道しない権利とか言つて、偏向報道するのは国民の知る権利を阻害する。それにマスコミによつて国防の危機になったこともありましたし。」

「この希信!!全力で協力しましょう!!なに、脛に傷がないやつはいない!!火のないところに煙は立たないが、人間は有史以来どこにでも火をつけられる!!この希信に任せなさい!!イブキ大尉は・・・。」

辻さんもやる気だな。そして辻さんは俺が何をすればいいかという作戦を伝えた。

「・・・わかりました。道具と人は送つてくれませんか?」



「明日の午前には着くだろう。作戦は早い方が良い、明日の午後には決行するように。希信は兵部省へ行き、陸軍省の永田鉄海中将、大本営の東条英雄少将にこのことを話す。すぐに決行されるはずだ。では。」

「よろしくお願いします。」

次の日はちょうど休みだった。これは好都合だ。10時ぐらいに道具と憲兵さんがやってきて、キンジも加えこの作戦を話した。キンジは最初乗り気ではなかったが、俺が

「流石にマスコミに追われるのは嫌だろ？」

この一言で参加を決意したようだ。

午後、俺たちはわざと玄関を半開きにした。そうしたらマスコミは来るわ来るわ、土足で上がり込むやつもいるし……。掃除が大変だな……。そしてマスコミは軍機と書かれてある紙を持つ俺、キンジ、憲兵を見つけた。

「シージャックについて……。」

「午後一時十二分、住居侵入罪および軍機保護法違反の現行犯によりお前らを逮捕する!!!」

そこから憲兵さん達はその場にいたマスコミを全員逮捕。留置所に連行された。また、船会社の幹部とマスコミが繋がっていたことが発覚。違うところからマスコミが軍・武偵を賤めようとしていた、という証言が出てきた。マスコミはこのことを少ししか報道しなかったが、SNSでは大炎上。これらのおかげでマスコミ各社と船会社の上層部は全員が辞職したようだ。やっと俺らはマスコミに追われることがなくなった。

「なあ、これってイブキの仕業か？」

「俺じゃないけど、上司がやったんだ。後悔はしてないが反省はしてる。」

後日、

「もしもし辻さん？そっういえばあの件ってどこまで本当なんですか？」

「まあ、証拠の大半は希信の作った捏造だが、ほとんど事実だ。だいぶ

希信が大きくしたがね。あとはSNSで炎上させれば終わりだ。  
☒9割の凡人を扇動すれば、1割の知識人は動かざるを得ない☒このことは覚えておくといい。今はこの事件の処理で希信は忙しい。この件を持ってきてくれて希信は感謝する!!では。」

うん、無関係の方達、どうもすいませんでした。

そして、俺達5人は武偵高校の授業を受けたり、依頼を受けたりした。意外に充実した生活に満足した。キンジは転科願いを出し、来年は探偵科になるそうだ。やっぱりあの事件を引きづっているようだな。

学年末にテストを受け、俺達5人は全員Sランクを取った。あんな訓練していたんだ、取れて当然だと思うだろ？実は不殺がだいぶ難しかったんだ。テストの時に教師が試験場に潜んでいるのだが、俺の試験の時に潜んでいたのが師匠だった。流石に殺す気でいかなかったときつい。おかげでSランクギリギリだったそうだ。おい、師匠……。

そして時は過ぎ4月、とうとう原作が始まった。

## 閑話：新人軍人編

1：コスプレ

俺達HS部隊第2中隊第1小隊は「七生報国」を胸に、今日も訓練に明け暮れていた。そんな部下たちを見守るのが「自走式暴力装置」こと鬼塚鬼次中尉。その暴君ぶりからみんなに恐れられている中尉だが、秘密のブログ「あおぞら特殊部隊 く部下と過ぐす楽しい日々」を開設し、部下との思い出をマメに綴るなど見かけによらず部下思いの一面もある。そんな中尉だからこそ、部下たちに関する悩みは人一倍深いようだ。

「厳しい戦いになるな……。」

「ハイ？」

そう言つて鬼塚中尉は去つていった。部下の命を預かる上官としての責任と重圧、それがどれほど重い物なのか、俺もいつか知るときが来るんだろう。

ちょうど辻さんが通りかかったので、

「辻さん、鬼塚中尉が独り言で厳しい戦いになるつて言つてたんですけど……。」

「少なくとも、この希信が知っている限りないと……ああ、もしかして……。」

「知ってるんですか？」

「いや、何でもない。まだ希信の憶測を出ないからな。」

なんか嫌な予感するなあ……。

俺は兵舎近くで食料弾薬の運搬をしていた。すると兵舎から鬼塚中尉が出てきた。

「ボウズ!!」

「はい、なんででしょう?」

「ちよつといいか?」

鬼塚中尉はまじめな顔をし、

「岩下、呼んで来い。」

なにか重要な事でもあるのか?

俺は岩下さん呼び出しに行った。岩下さんは銃の整備をしていたが、それをすぐ片付け、中尉の部屋へ俺と一緒に向かった。途中で田中さんとメガネさんも加わった。

「なんで俺だけ呼び出されるんツスよ……。中尉、イブキに何か言ってたツスか？」

「いえ、俺は呼んで来いとしか聞かれてないです。でも、やけにまじめな顔で言っていましたね。それに最近悩んでいるようだったので、岩下さんに伝えたいことでもあるんですかねえ？」

「まあ、一緒に遊園地とか笑えないツスよ……。」

そう言つて岩下さんはため息をついた。

「岩下、入ります。」

そう言つて岩下さんは鬼塚中尉の部屋へ入つて行った。もちろん俺、田中さん、メガネさんは聞き耳を立てる。

「そこ座れ。」

「な、なんスか、改めて話つて……。」

「俺なりに考えた結果だ。恨んでくれるなよ……。お前は次の作戦の選抜メンバーだ。」

「え？選抜メンバー？またまた！なんスか、選抜メンバーって！こないだみたいになんかの徹マンとかは厳しいんで勘弁してほしいツスよ……。へへへ……。」

そして、しばらくたった後、鬼塚中尉は言った。

「残念だが、今回は遊びじゃねえ……。作戦は市街で行われる。ハチの巣つついたような戦場よ!!俺に……。命預けるか？」

「……。余裕ツス!!」

「よし……。今から言うことを頭に叩き込め!!!」

「ハイ!!」

「一つ目!!お前の語尾は☒ヤンス☒!!」

「はあ？」

「お前のキャラ設定はこうだー☒かつては盗賊を生業とする子悪党!!現在はその俊敏さを生かし、主人公と行動を共に!」

「何言ってるんスか？」

「語尾に☒☒ヤンス☒☒をつけろといっただろうが!!あの戦場に飛び込ん  
だら生半可じゃ勝てねえんだ!!口を開く際には語尾に☒☒ヤンス☒☒を  
つけ、努めてすばしっこく行動しキャラへの理解を深めるように!!以  
上だ!!」

それを盗み聞きしていた俺たち三人は逃げだした。俺たちまで被  
害が来る前に逃げなくては!!

だが、岩下さんは絶対に道連れにしてやるという執念か

「オヤビンがお呼びでヤンスよ。」

そう言つて田中さんを引きずつていった。田中さんあなたのこと  
は忘れないよ。

「俺もかよ〜〜!!」

そして、メガネさんも岩下さんと田中さんに

「オヤビンがお呼びでヤンスよ。」

「呼んでるでゴワス。」

「なんで俺もなんですか〜〜!!」

メガネさん犠牲は忘れない!!

その後、三人の執念はすごく、「影を薄くする技」を使つても連行さ  
れた。マジかよ・・・。

「オヤビンがお呼びでヤンスよ。」

「呼んでるでゴワス。」

「呼んでるニヨ。」

「俺もか〜〜!!あとメガネさんが女装とか俺はどうなるんだあ〜  
!!」

連行され、鬼塚中尉の前に出された。

「お前は主人公を助ける妖精!!語尾は☒☒ピポ☒☒だ!!」

「不幸だピポ〜〜!!」

東京ビツクサイトにおいて、辻さん、神城さん、それになぜか角山  
中隊長三人で大きなドラゴンの被り物で暴れていた。(獅子舞のよう  
にやって大きなドラゴンを再現)そこにヌンチャクの先に鎌をつけ飛  
行帽をかぶった岩下さん、毛皮を着てハンマーを持つ田中さん、ツイ  
ンテールで女装するメガネさん、羽の生えた服を着る俺が来た。



ああ、牛若が暴走しないでよかった。

「余はネロ・クラウディウス!! かなめとやらも美しいな!! イブキよ! よくぞ連れてきた!!」

ネロさん、あなた手出しちゃだめだよ。

「そうですか、私はニトクリス。イブキの同盟者であり、フアラオです。」

「彼女は信じられないがフアラオだ! 私はトーマス・アルバ・エジソンである!」

「スカサハだ。」

「ベオウルフ。じゃあ、殴りに行こうぜ!! って引くなよ……。」

……まあ、最初の印象はよかったのかな?

「イブキにい、顔がライオンの人がいるんだけど……。」

「大丈夫、顔がライオンでもすごく優秀な人だから。」

かなめはだいぶ驚いてた。

数日後、かなめはみんなと仲良くなった。特に玉藻にはだいぶ懐いたようだ。よく玉藻と一緒に家事をしたりしている。玉藻曰く

「娘のような、妹のような子と思ってますねえ。」

でも玉藻さん、かなめに一夫多妻去勢拳を教えるのやめてください。怖いです。

### 3：島流し

私は山口多聞丸少将。第5艦隊参謀長で司令長官代理だ。第5艦隊は日本の北方を守る艦隊だ。

「中央から荷物が届きました。」

そう言っただけの兵と数人で人間が一人は入るくらいの箱を持ってきた。

「何でも兵部省直轄部隊から来たようです。」

となるとHS部隊か? なぜそんなところから。

「開けてくれないか?」

「は!!」

そうして箱を開けると、軍服を着た少年が気絶していた。これは村

田少尉か。彼は士官候補生の時に会っていたな。幼年学校から一気に海軍兵学校の実地訓練まで行ったのは初めてだそうなので驚いた覚えがある。おや？彼の上に手紙がある。

「北方部隊での研修をお願いします。」

H S 部隊第2中隊長 角山中佐

H S 部隊第2中隊長 鬼塚中尉

・・・なるほど。たぶん「自走式暴力装置」による結果か。ここまですで噂が広まっているんだ。本当のことなのだろう。お？少年が起きたようだ。

「え？はい？って山口少将!!」

「落ち着きなさい。ここは第5艦隊だ。」

そうして彼にどうしてここにいるかということ伝えた。とりあえず私の近くで研修してもらおう。士官候補生の時めだいぶ面白かったし。

村田少尉が来て数日後、所属不明の漁船群が我々の艦に向かって攻撃してきたそう。幸い弾は当たらなかったそう。

「攻撃しろ!!すべて沈めろ!!」

私は頭にきた。我が艦隊を攻撃だ?!すべて沈めてしまえ!!

「ちよつと待ってください少将!!」

そこに村田少尉が手をあげ発言を求めた。

「少尉風情が意見具申か!!」

「大人にもなっていない者が意見するか!!」

参謀たちが村田少尉を避難した。その光景を見て、私は少し落ち着いた。

「まあまあ、彼は入ったばかりだ。柔軟な意見が聞けるかもしれない。」

そう言っ私は村田少尉の意見を聞こうとした。士官候補生の時めだいぶ面白かったな。

「は!!私の意見としましては一部漁船を沈め、残りの漁船を逃がしてしまおうと思います!!」

「「なんだと!!」」



参謀たちは憤慨しているな。

「まだあります。その漁船を偵察機やレーダーで追い、どこ国に所属しているかを知り、そのことを中央に流します。そこから国を非難させようと思います!!」

「もし、中央が何もしなかったらどうする?」

「漁船が我々の艦を攻撃した映像は残っているはずです。その映像を流出させましょう。我が艦隊は架空の人物がその情報を流したとすればいいと思います。」

「面白い、その案を修正し実行してみよう。」

この少尉は面白い。何とか私の下におけないものか?

#### 4：師匠再び

イブキが東京武偵高へ転入すると聞いて驚いた。最近、私は道場のバイト以外にその高校の非常勤ではあるが教師をやっていたからだ。エジソンがそこで働いており、彼からの推薦で入った。その生徒はセタンタやイブキほどではないが骨のあるやつが多い。道場より教えがいがあつていい。そこにイブキが転入か……。また私がイブキを修行させることができる!!私はうれしかった。

転入生は仮のランク付けをするため、教師と戦闘するらしい。そこで私が名乗り出た。イブキが軍でどのくらいになったのか知りたかったからだ。文句を言ったやつには槍を投げ、全員一致で私が担当することになった。

私は驚いた。イブキの銃はもう少しというところがあるが、あの「影の薄くなる技」で私は一瞬イブキがどこにいるかわからなくなつた。また、懐の中にまで入ることができるようになっていた。もつと成長し、私を殺せるようになってほしい。

最近、ベオウルフもこの学校で非常勤で働いているらしい。殴り合いはいいが、全員イブキと同じようにはいかない。そのことを頭に入れる。入って一週間で何人病院送りにしたんだ?まったく……。

#### 5：勇者

リサはボストーク号にいた時、勇者様に出会いました。まさにシャーロック卿が言った通り、「東からくる。ちよつと目つきが悪くて、しゃべり方はぶつきらぼうで女たらし」「渡り蝶を空に見るとき。」東とは極東から、目つきはブラド様を解体してる時はとても悪かったです。しゃべり方はぶつきらぼうというより乱暴のほう合ってるような気がしますね。女たらしかどうかはわかりませんがそのようなでしょう。渡り蝶とは、この世とあの世を渡る蝶という事だったんですね。流石シャーロック卿です。

「なので、リサはここを降ります。シャーロック卿、長い間お世話になりました。」

「うん、ちよつと待とうか。そんなこと僕の推理にないよ。」

「冗談がきついですよ。では。」

そうして私は一礼し、ここを降りた。

「イブキ様は軍人ですが今は東京武偵高校に通っているそうですね。きつとりサのご主人様になってくれるはずですよ!!」

早く会いたくてしょうがないです。

ボストーク号にて

「うん、あのタコ、イカ、ブイの襲撃は僕の条理予知にはない。それに彼女のこと予想外だ。推理が鈍った？いや違う……。僕の知らないイレギュラーがいるのか？」

## 高校生活一学期編

せめて人に当てないで・・・

空から女の子が降ってくると思うか？

確かに映画やアニメ、漫画なら物語が始まる良いきっかけになるだろう。けどリアルだとどうだろう。女の子が空から降ってくるなど絶対面倒なことの前触れだ。空から女の子が降るなんて、自殺志願者か、鬼塚大尉の手の者か、自分の妄想以外はありえないからだ。だから俺は空から女の子が降ってほしくない。

俺の住んでいる寮の部屋には、俺とキンジが住んでいる。朝と夕方はそこに白雪に、サーヴァントの4人が来て、みんなで朝食・夕食をとることになっている。キンジは料理ができないし、ネロは残念な腕前、牛若はなぜか毎回兜焼き、エルはサラダとフルーツだけ、ニトは豆のスープとパンを作ってくれるけど苦手な様子。そこで、うまいけど見た目が雑、時々ゲテモノあり（ゲテモノじゃないと思うんだけど・・・）な料理を作る俺が飯を作ることになってしまった。でも毎日俺が6人分の朝夕を作るのは面倒・・・間違えた、大変なので白雪を説得し（キンジと一緒に自分の作ったあつたかい飯食いたいだろと言ったらすぐだった。）7人で一緒に食べることになった。

「イブキ君もうすぐできるからキンちゃん呼んできて。」

「了解。いつもすまんねえ・・・。」

「ううん、好きでやってることだから。」

白雪さんや、答え方が違うぞ。そう思いながら俺はキンジのベットへ向かった。

「起きろ〜キンジ〜。」

「・・・・・・・・・・。」

こいつ・・・俺や白雪が朝食の準備している間、のんきに寝やがって。そして俺はサイレンのボタンを押した。

ウ~~~~~!!!ウ~~~~~!!!

「うわあ!!!」

「キンジ、おはよう。」

「イブキ!!朝からサイレンつけるな!!」

「え?だってキンジが起きるの一番遅いし。それに俺が朝飯作ってる  
ときものんきに寝てたのかって思うと、つい。」

「ついじゃねえ!!」

「ほら早く着替えて飯食うぞ。みんな待つてんだ。」

「わかったよ。」

俺とキンジはダイニングへ向かった。

「遅いぞ!!余は待ちくたびれた!!」

「主殿!!準備は終わりました。」

「さあ、食べようか。」

「相変わらず、キンジは遅いですね。」

「キンちゃん、おはよう。御飯できてるよ。」

すでに5人は席についてるようだ。

「ああ、おはよう。」

「待たせてごめん。」

そして俺達も席に着き

「」「」「いただきます。」「」「」

みんなで食べる飯はうまいな。

俺とキンジは別々に登校してる。なるべく白雪にキンジと二人の  
時間を増やしてあげたいからだ。なので俺たちはキンジ達より少し  
早く出て、車で学校へ行っている。その時、使用する車が第2中隊の  
みんなからもらった「高機動車」だ。廃車予定のやつもらってきて、整  
備してくれたらしい。また、在庫処分か……。いや、くれるのはう  
れしいんだけどさ……。

今日、始業式があるのだが、キンジは始業式をさぼったようだ。そ  
うか……。もしかして原作が始まるのか。アリアがここに来ていたの  
はわかっていた。3月ぐらいには会って話もしたし。メヌエツトか  
らメールが来てたしな。

「お姉さまが日本へ行って相棒を探しに行きました。お姉さまが迷惑  
をかけますのでどうかご容赦してくださいね、お兄さん。」

「メヌエツトも来ればよかったのに、残念。」

本当に来ればよかったのに。

キンジが教室へ来た。

「キンジ、どうした？まるで空から女の子が降ってきて、そのせいで覚醒。白馬の王子モードで敵を倒し、そのことについて後悔しているようだぜ？」

「イブキ、見てたのかよ。」

「いや、そんな感じがしただけだぞ。」

当たり前ってところか。

「私、あいつの隣に座りたい。」

アリアが転校生としてみんなに紹介された後、こんな発言をした。

「よかったなキンジ!!何だか知らんがおまえにも春が来たみたいだぞ!!先生!!俺席変わりますよ!!」

武藤、お前アリアとキンジがくっついたら白雪がフリーになるとでも思ってるのか？その後、アリアがキンジにベルトを返し、見ていた理子が

「理子わかつちやった！これフラグバキバキに立ってるよ!!キー君ベルトしてない。そしてそのベルトをツインテールさんが持ってた！これ謎でしょ!?!でも理子には推理できちゃった!!」

お?ここは俺も乗ろうかな。

「ほう、理子ームズ探偵にはどういう推理ができたのかな？」

「イブソン君、これは簡単な推理だよ。キー君は彼女とベルトをとる必要がある何らかの行為をした。そしてキー君はベルトを忘れていった。」

「理子ームズ、じらさないでくれ。」

「しようがないなあ、イブソン君。つまり答えは・・・二人は熱い恋愛の真っ最中なんだよ!!」

「な、なんだってー!!」

完全な間違いです。そして、みんなが盛り上がった瞬間

ダアンダアンダアン

「恋愛なんてくだらない!!」

教室の後ろに二発の穴が空いていた。あと一発？俺の胴体に一発だよ。抜けなくてよかった。

ジャラジャラジャラ、チャキ

エルが鎖でアリアを拘束、牛若が刀を抜きアリアの首に添えた。

「主殿に攻撃するとは……。」

「ふふふ……フフフフフフ……イブキに攻撃するのか……。」

「な、なによ!!」

ヤバい！牛若とエルが暴走した。

「エル、俺は大丈夫だから。流れ弾当たっただけだから。鎖戻して、瞳孔も戻して!!牛若も、ほら頭を撫でてあげるから。」

「本当ですか!!」

「僕には何かないのかい?」

「エルも撫でてあげるから!!」

何とか治まったようだ……。

放課後、俺とキンジは寮の部屋にいた。

「俺、アリアと知り合いでなあ。空港でテロと会った事件の時に初めて会ってな。」

「へえ、というくだい昔だな。」

「そうだなあ、その時はキレイな金髪のちっこい元気な子だったのに、今は髪をピンクに染めて……銃をボカス力撃つようになったやつて……。反抗期なのかね?」

「どうなんだろう?」

などと話をしていたら

ピンポーン、ピンポーン

「キンジお前が出るよ。」

「いやいや、イブキが出るよ。」

「ジャーんけーんぽん」

ピンポーンピンポーンピピピピピンポーン

「ハイハイ、今出ますよ〜つと。」

負けたので俺が出る羽目になった。

「なんだ、アリアか。」

「遅い!!あたしがチャイムを押ししたら5秒以内に出ること!!イブキもこの部屋なのね!手間が省けてよかった。」

落ち着け・・・ブツダフェイスも三度までだ。まだ一度だ。

そしてアリアは玄関で靴を脱ぎ散らかし、泥がついているトランクを持ってリビングに行ってしまった。(二度目)

「ねえ、トイレどこ?」

「ああ、あっちだ。」

アリアはトイレに行ってしまった。落ち着け・・・俺は仏、俺は仏・・・

アリアはトイレから出た後、ソファーにドカツと座り

「コーヒー!エスプレッソ・ルンゴ・ドツピオ!!砂糖はカンナ!!一分以内!!」

仏様、三度目だったのでいいですよね。

「アリア・・・正座せい・・・。」

この雰囲気で何か感じたのか、キングは自分の部屋に避難していった。

「何よ!!」

「てやんでえ!!正座せよと言っているのだア!!わからんのかあ!!べらんめえ!!」

「は、ハイ!!」

アリアが床に正座した。

「貴様あ親しき中にも礼儀ありという言葉を知らんのかあ!!汚れているトランクを部屋にまで引きずり、誰が掃除すると思っっているのだあ!!べらんめえ!!挙句の果てに、コーヒーを要求するだとお!!なめてるのかあ!!・・・。」

ある程度たった後、

「ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ・・・。」

アリアは虚ろな目でゴメンナサイしか言わなくなったので、説教はここで終わりにするか。

「終わりだ、正座を崩してよろしい。」

「ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ……」

「崩してよろしいといったのだア!!!」

「ハイ!!」

アリアは正座を崩し、足が痺れているようだが何とかソファアに座った。

「イブキ、終わったか?」

「いや、すまんなあ。」

キンジが緑茶を持ってきてくれた。俺コーヒー好きじゃないから、あるの全部お茶なんだよね。

「アリア、キンジと俺に用事があるようだけど何か用か?」

俺がそう言うのとアリアはまだ痺れているであらう足を引きずり、ペランダのほうまで行った。そしてくるつと（痺れてるせいでぎこちないが）こつちを向き、俺達のほうに指をさして

「あんたたちー!あたしのDr……」

「イブキよ!!余は帰ってきたぞ!!」

「主殿!サワラが安かったので買ってまいりました!!」

「まったく、廊下が汚れてましたよ。掃除しないと。」

「イブキ……ただい……懲りずに来たのかい?」

「イブキの料理が食べたくなつてな。邪魔するぞ。」

「キンちゃん、イブキ君、ただいま……」

ネロ、牛若、ニト、エル、白雪が帰ってきたようだ。それに師匠まで来たようだ。

グー

アリアから何か聞こえたようだが気にしない。

「今日の夕飯は俺が担当か。無難にサワラの塩焼きと、マテ貝があるからその酒蒸しとサラダにでもするかな。アリア食っていくか? エル、大丈夫だからね。俺とキンジに伝えたいことがあるらしいから。だから瞳孔戻して。」

そうして俺は台所へ向かった。ニトと白雪がついてきた。手伝ってくれるようだ。まあ、飯食いながらならゆつくりしやべれるだろ



う。

「イブキ、コゴミがあるからこれも茹でてくれないかな？」  
「ほんと、エルは農家の人と仲良くなれるねえ」



なあ……。俺は突撃兵だし……。

「よくない、そもそもなんで俺なんだ。」

まあ、負傷率が高いところにキンジは行きたくないよな。

「太陽は何で昇る？月はなぜ輝く？」

アリア、さすがに話し飛びすぎ。

「キンジは質問ばかりの子供みたい。仮にも武偵なら自分で推理して見せなさいよ。」

面倒な子になったな……。昔は……。昔もだいぶ我が強かったな、うん。

「とにかく帰ってくれ。俺は一人でいたいんだ。帰れよ」

流石にキンジは面倒だと思ったのだろう。

「そのうちね。」

「そのうちっていつだよ。」

「キンジとイブキが強襲科であたしのパーティーに入るって言うまで」

「でももう夜だぞ。」

まさか、トランク持ってきたってことは……。

「何が何でも入ってもらおうわ。あたしには時間が無いの。うんと言わないなら泊まる……」

「言わないならなんだア、泊まるとでもいうのか？アリア、飯の前にもさんざんやったが、今もするつもりか？べれんめえ。」

流石に、泊まるとかふざけてるのか？入ってほしいなら、せめて下手に出ろよ。

「それにな、俺はすでにネロや牛若、エルに二トと組んでいる。一時的ならまだしも、永続的には俺は無理だ。」

俺はキンジのほうへ向いた。

「キンジ、お前も多少は折れてくれ。女子供が一人で男二人の部屋に泊まるって言ったんだ。よっぽどの度胸と事情があるみたいだ。こいつの度胸に免じて組んだらどうだ。一回二回程度なら別に問題ないんじゃないか？」

ここにアリアが泊まるとなると、サーヴァントたちが何しでかすか

分からないから……。

何とか二人は納得し、みんな帰っていった。

「まあ、キンジ。こうしなかったら、もつと面倒なことになっていたのはわかるだろ？ 諦めなつて。人生諦めが肝心だぞ。」

「わかつてる……。」

俺は次の日の放課後、装備科の平賀文さんのところに行っていた。

「おーい、平賀さん注文の品終わった？」

「おーイブキ君、終わってるのだ。」

俺は平賀さんに、25ミリ機銃を二脚で撃てるように改造してもらったのと、特別なスタングレネードを作ってもらった。流石に25ミリ機銃を台座で撃つのは面倒だからな。ほう、25ミリはいい出来じゃないか。スタングレネードは使わなきゃわからないか。

「ちゃんと、故障しないか？ 故障なんてしたら死ぬからさ。」

時々甘いから怖いんだよなあ。

「大丈夫なのだ！ それにしても、そんな大きい銃何に使うのだ？」

普通はそう思うよね。

「昔、大口徑、長射程、連発性の高い銃がないときついつてことがあつてね。これが料金の40万。自分でも数えたけど一応確認しといて。」

そう言つて俺は封筒に入った40万を渡した。銀行に振り込みつてあんまり好きじゃないんだよなあ。なんか数字の移動みたいで、これだけの分の金を俺は出したつて実感が湧きづらんだよなあ。

「イブキ君はお金に正確だから信用してるのだ。スタングレネードはレバーを抜いて3秒後に爆発するのだ。」

「ありがとうね。」

そうして俺は25ミリ機銃を背負い、スタングレネードの入った箱を持つて部屋に帰った。

そして夕方になるちよつと前ぐらいの時間、俺は理子と会つていた。アリアのことと、キンジのことだ。原作で何があつたのかはある程度は覚えているけど、その知識は参考程度にしかないから調べてもらう必要があつた。流石にメガネさん頼るわけにもいかないし。

「イブイブー!!」

「・・・そのイブイブは止めてくれないか。」

俺は理子にイブイブなんて呼ばれている。なんで、こんな呼び名になっただろう。

「報酬のギャルゲーは持つてきたから。2とか3とかはいらないんだっけ? 買ってきてないぞ。」

「2や3は蔑称、嫌な言葉。」

「そうかなあ。俺としては第1作だけとか足りないと思うんだけどなあ。」

だって、ラノベの第1巻だけ買って、2, 3, 4, とか出てるのに買わないとか普通はしらないと思うんだけど・・・いや・・・確か理子って何とかの2世3世4世だったんだっけ? 覚えてないや。

「いつもの通り、紙にしてくれたか? メールで貰っても結局印刷するから面倒なんだよなあ。」

紙だといつでも見れるし、消去も簡単だし重宝するんだよな。環境? 電気とタブレット分考えたら、紙のほうが環境に良くないか?

「あい!! そういうえばイブイブ、機関砲を背負ってたって聞いたけどよくそんなの持ってるね。理子びっくりだよ!!」

やっぱおかしいつて思うよね・・・よく辻さんあんなのチョイスしたな。

「大分軽量化しているからな(嘘)。情報ありがとね。」  
「バイビー。」

次の日、学校に着き車から出ようとした瞬間、携帯が鳴った。アリアからだ。

「なんだ? 朝っぱらから。事件でも起きたか?」

「そうよ、C装備して女子寮の屋上に来なさい!! すぐに!!」  
「ハイハイ・・・」

C装備はしていないが、俺は車を急発進させ女子寮へ行った。俺が女子寮に到着したとき、アリア、キンジ、レキが作戦会議中だった。

「これだと俺は必要ないかな。じゃあ学校に戻るわ。」

「あんたも来なさい!!」

そうして俺は強制的にこのパーティーに入れさせられた。なんでもバスジャックが起こったらしい。バスに爆弾をつけられ、ある程度スピード出してないと爆発だそうだ。

「レキも大変だな。朝っぱらからこんな事件に会うなんて。」

「いえ、大変ではありません。」

「そうか。」

話し続かないな……。

「今日の風の音はどこのだ?」

「故郷のです。」

「そうか……。」

続かねえ……。

「あんたたち!話してないでさっさと乗りなさい!!」

そういつて俺とレキにへりに乗るよう催促してきた。へりか……嫌な思い出ばっかりだなあ。

「ハイハイ……。」

「見えました。」

レキがバスを発見したらしい。俺もあそこらへんかな?程度だけど、この距離はつきりと分かるのはすごいな。

「よく見えるな、視力どんくらいだい?」

俺が聞くと

「両目ともに6.0です。」

……はい?

「なんかの薬とかやってないよな。」

「やってません。」

やってるとしか思えないよ。

バスがある程度見えてきた。

「おい、へりを最高速に上げてくれ。そろそろ降下する。」

俺がそう言うのと

「何言ってるのよ!!バスはまだ遠いし、それにあんたC装備つけてないじゃない!!」

「いやいや、これが俺の戦闘服だぞ。」

下手に装備つけても動きづらいだけだしね。制服のままだ。

「いやいや、イブキ。お前パラシユート持つてないだろ!」

「何言つてんだキンジ?」  
「パラシユートはただの飾り」だぞ? 中学の頃、体育で習つてないのか?」

「習わねえよ!! (習わないわよ!!)」

おかしいなあ。俺、お前たちが中学ぐらいの時に訓練で習つたんだけど……。

「お? そろそろ降下か、んじや行つてくるわ。」

そう言つて俺は飛び降りた。

「ほんとに降りて行つたわね……。」

「気をつけの姿勢のまま飛び降りて、そのままの体勢でバスの天井に着地つてどういふことだよ……。」

俺はバスの中の生徒に窓を開けてもらい、中に入った。

「よお武藤。まさか教室じゃなくてバスで会うとはな。放課後暇か? 車の改造してほしくてな。」

「今はそれどころじゃねえだろ!!」

「場を和ませようと思つたのに……。車の件は本当だぞ。で、かわいいそうな子は?」

「あの子だ。」

メガネをかけた中等部であろう子が震えながら携帯を持っていた。  
「む、村田先輩!! ど、どうすれば……。」

完全に慌ててるな。すると、その子の持つてる携帯から  
「速度を落とすと、爆発しやがります。」

面倒なことになったな。そう思つた時、バスの天井からドン、ドンと音がした。

「お二人さん、遅いぞ。」

「パラシユート無しで降下するイブキがおかしいから!!」

「パラシユートはただの飾り」なのにそんなの付けてるから遅いんだよ。」

「パラシユートつけるほうが普通なの!!」

なぜかバスにいるみんなが驚いた表情で俺を見るんだが……。

その後、キンジとアリアが色々と話していた。何でもバスの裏に電  
車も吹き飛ぶくらい爆弾をつけられたらしい。それを聞いた瞬間、  
バスに車が近づいてきた。その車にはUZIがついて銃口はこっち  
側について……ヤバイ!!

「伏せろ!!」

ダダダダダダダダ

そのUZIが発砲しだした。4, 5発貫つたし……。つて運転手  
が血まみれになつてる!?

「武藤!! 運転代われ!! 俺の上着貸すから速度落とすな!!」

そういつて俺は武藤に上着を投げ渡し、その車のタイヤに銃を撃つ  
た。

バンバン

タイヤが破裂しその車はガードレールに激突した。

「俺はほかの車の迎撃をする!!」

そういつて、バスの天井の部分に戻ると、バスの後ろにガトリング  
銃を積んだ車が5台いた。

「うん、ちよつと待つてくれない?」

俺を狙つて、5台が一斉に火を噴きだした。

「ウソだろ!?!」



誤診なんてひどい……

ガトリング銃は1丁おおよそ毎分3000発なので毎秒50発という速さで撃つ。単純計算すると、そのガトリング銃が5丁あるので毎秒250発イブキに向かつてくるといいう事に……。

「リアルな数字なんて考えなきゃよかった!!くたばれガトリング!!」  
クソツ!!案の定「影を薄くする技」使っても狙っていやがる!!でも一瞬だけ動きがおかしかったな。機械の助けを借りた人間が遠隔操作してるのか?今とつきに刀抜いて自分に当たる銃弾だけを何とかしてるけど、このままだとジリ貧だ。すでに何発もかすって血まみれだし。

「バンザーイー!!」

俺はバスから飛び、車の一台へ!!その間に散々撃たれたけど致命傷になる部分しか弾けなかった。クソツ!!何発被弾した?あちこちがイテエ!!俺の動きが変化する時に一瞬「影の薄くなる技」使っているから敵の銃の動きが若干遅いけど、それでも何発も被弾する。「緋弾のエリア」から「被弾のイブキ」にでもするか!?うん、絶対売れないな。カット

俺は一台に乗り移り、その車にあった銃に一閃。そして刀を納刀し、二丁拳銃で残り4台のタイヤを破壊。よろめきながら乗っている車の運転席に乗り込み、減速……。ヤバい、意識が朦朧としてきた。血の流し過ぎか?もう一台新しいのが来たな。そいつのタイヤを破壊し

「おう、俺離脱するからよろしく……。」

インカムでそう伝えた俺は意識を失った。

なぜか、お経のようなものが聞こえる。なんでだ?俺は目を開けると、箱に入れられていた。しかも俺は白装束を着させられてるし。え?ふざけるな!!これは冗談でもしちやいけねえだろ!?

「おい!!俺は生きてるぞ!!」

俺は箱のふたを蹴り、何とかどかした。そして、その箱から俺は出て

「冗談でもこれはないだろ!!」

と怒鳴った。あちこちがイテエ……。流石に結構傷を負ったしな……。その場を見渡すと、そこには坊さんと、涙を流す第2中隊の面々、山口少将、カジノで会った山本さん、士官候補生の時に世話になった人たち、武偵高校の面々に、家族まで……。え？なんでみんな驚いた顔してるの？まるで死人が蘇ったような……。

「「「ぎやああああああ!!!生き返ったああああああ!!!」」」」

どうも、バスジャックから三日も経っていたようだ。矢常呂イリン先生から

「銃創18箇所、また20箇所以上弾丸や車の破片が食い込んでいたのよ!?脱臼や捻挫もあったのになんで生きてるの!?何度も死亡判定したのよ!?!」

なんて言われた。18箇所しか被弾してないのか、運がいいな。俺は

「人ですし間違えくらいありますよ。」

そういうと、矢常呂先生は、おかしい、間違えるはずがない……。などとブツブツと何かをしゃべってた。後日、俺のサンプルが欲しいと強請られた。

矢常呂先生がブツブツと何か言いだした時、やっと我に戻ったのか、第2中隊と武偵高

の面々が俺に駆け寄り、俺を叩いてきた。

「なんだ生きてたのかよ!!」

「心配かけやがって!!」

「この希信!!感涙の涙が止まらない!!」

「死んだって聞いてたのにこの野郎!!」

イタイ、イタイって!!

何とかみんな落ち着き、俺は病院に搬送されることになった。その時に聞いたのだが、家族のみんなは生きていることはわかっていたようだ。まあ、死んだらパスが切れるし。でも、ネロと牛若は泣いて抱き着いてくるし、エルと二トに師匠はしきりに俺の体に触っていた。

ところで、エル？瞳孔開いて

「こんな風にしたのは武偵殺しだっけ？・・・どこを切り落とそうか」  
なんて言わないで。ほら武偵は不殺だからね。牛若も

「首・・・落とす・・・。」

なんて言わないで!!

病院に着くころ、俺はアリアとキンジがどうなっているのか気になった。何でもアリアは今日、羽田から4時の便でイギリスに帰るらしい。思い出したぞ、そこに武偵殺しがいるんだった。犯人は理子だっけ？

家族のみんなが病室から出て行ったあと、俺は鬼塚大尉に電話をした。家族にこの事伝えたら絶対理子を殺しに行くだろうし・・・。

「どうした、ボウズ。さつき会ったばかりだろう。」

「鬼塚大尉!!俺を羽田まで送ってください!!友人が危ないんです!!」

「・・・ボウズ。それは傷だらけのお前が行かなきゃダメな事なのか?」

「そうです!!今日の4時の便には間に合わない!!」

「もう3時過ぎだぞ。それでもか?」

「そうです!!何とかありませんか!!」

「わかった。病院の外で待ってろ。」

鬼塚大尉は電話を切った。これできつと羽田に間に合う。武装は「4次元倉庫」に全部入ってるな。俺は「影が薄くなる技」を使い、病院の外に出た。よかった家族がいたらバレそうだし・・・。

そういえばそろそろ「4次元倉庫」の名前をつけないとダメかな。「王の財宝」がもとだし「一般人の雑貨」にでもするか?うん、ネーミングセンスないな。などと考えていると、病院の大きな駐車スペースにC-1が着陸した。そこから辻さんが出てきた。あ、この人も巻き込んだのか。

「イブキ大尉!!早く来い!!」

「ハイ!!」

C-1の中で鬼塚大尉、辻さん、神城さん、角山中隊長に散々泣かれながら、よかった、生きてたか、と言われたときは悪いことしたなあなどと思った。

「イブキ大尉、これは本当に君がやらなきゃいけないのかね？」  
辻さんが聞いてきた。

「友人の命の危機です。それにその便に乗っている一般人も危機に瀕するので。」

そう言ったら、角山中隊長が

「まあ、村田大尉はやるって言ったら聞かないだろうしね。ナカジマプラザや空港の件でもそうだったらしいじゃないか。行ってきなさい。でも我々は行けないからね。」

「なんでです!? 行きましようよ!!」

コックピットから鬼塚大尉が反論をした。

「私も行きたいんだけど、三角諸島の件がまだ引きずっていてね。あの事件があつたのに1年もたたずにもう一回となると弁護は難しい。もちろん、通りすがりのタコや偶々いたイカは無理だからね。」

「……………」

三人がそつぽを向いた。おい、やる気だったのかよ。だから隅っこにタコやイカの足や魚の被り物があるのか……。

「ところで、その飛行機は4時12分羽田発ロンドン・ヒースロー空港行き、ANA600便ボーイング737-350だよね。」

「え? 多分そうですが?」

角山中隊長は急にそんなことを聞いてきた。

「うん、神崎・H・アリアという名前が乗客名簿にあつたからね。」

……………嫌な予感がするなあ。

「ちょうど村田大尉の葬式があつたから有給を4日もらつたんだ。でも村田大尉が生き返っちゃったしなー。ちょうどその便でイギリスにでも旅行しようかと考えていたんだー。」

……………もしかして。

「旅行鞆ありませんよ? パスポート持ってるんですか?」

「必需品は現地調達。パスポートは持っているし大丈夫さ。軍人ではなく、旅行者として行く。チケット代だいぶかかったなあ」

「中隊長!! ずるいです!!」

三人が猛抗議。

「君たち有給は二日しかとってないでしょ？それにパスポートも持ってきてない。前回の件で君たちは自重しなきゃいけないしね。」

その一言で三人は黙ってしまった。よって、角山中隊長も同行することになった。

「ところで、村田大尉。君は二階級特進だったんだけど、それ取り消しになるからね。」

「ですよー。中佐になれるかも!!って思ってたんですが……。」

何とかギリギリで羽田に着いた。俺と角山中隊長は空港内を走り、搭乗ゲートに向かっていった。その時、武偵高の制服を着た人間が走っているのを見つけた。キンジだ。

「キンジ!!お前もアリアの飛行機止めようとしているのか!？」

「え？イブキ!?なんでいるんだよ!?死んだって聞いたぞ!?幽霊か!?幽霊なのか!？」

キンジは大分慌てている様子。

「矢常呂先生の誤診で死んだことになってたんだよ!!」

「あの先生が誤診とかありえないだろ!?俺も確認したぞ!?イブキ、本当に幽霊じゃないのか!？」

「しつこいな!!俺は生きてるよ!!あちこちケガばっかりだけど!!」

そうすると、走りながらキンジは俺の頭を指さした。頭になんかついてるのか？

「なんで白装束に三角のやつ頭に着けてるんだよ!!」

え？そういえば式場からここまで着替えるの忘れてた……。だから空港内でジロジロ見られるのか。

「……着替えるの忘れてた。」

「ふっう忘れるか!!」

なんでC-1内で指摘されなかったんだ？

「中隊長、なんで教えてくれなかったんですか!？」

「いや、わざわざ着けてたから意味があるのかなって。」

せめて教えてくれよ……。頭巾くらいは取るよ。

「イブキ、隣の人は?」

「俺の部隊の中隊長。角山大佐。」

「どうも少年。角山です。」

「あ、どうも。遠山キンジです。」

ゲートに着き、ボーディングブリッジを過ぎ、何とか飛行機に乗った。ボタン、ハッチが閉められた。キンジはフライアテンダントに飛行機を止めるよう説得するが、結局無理なようだ。まあ、動き出しちゃったしな。キンジは諦めたようで、アリアの部屋であろうところへ行ってしまった。角山中隊長も自分の席へ行ってしまった。一応聞いておくか。俺はフライアテンダントに声をかけた。そして、フライアテンダントが俺を見たらすごく驚き、困惑、そして少し怯えていた。まあ、白装束だからシヨウガナイか？

「お嬢さん、ところでこんな子を見ませんでしたか？」

俺はそういつて懐から理子の写真を出し、フライアテンダントに見せた。

「い、いえ。み、見ていません……。」

「そうですか、こんなかわいい子見たら、印象に残っていると思うんだけど、やっぱり見覚えありません？」

「は、ハイ……。」

なんか怪しいがシヨウガナイ。

「そうですか。何か思い出したら教えてください。」

俺はアリアのところへ行った。

アリアを驚かせようと思い、取っていた三角のあれを頭に着け、中に入ろうとした。

ガガガーン!!

お？雷の音か。いい雰囲気だな。そして俺はアリアの部屋に入り

「キエエエエエ!!よくも!!よくもおおお!!」

「ぎゃああああああああああああ!!」

二人して驚きやがった。おい、キンジ、お前は知ってただろうが。

「幽霊!?幽霊なんですよ!?イブキは死んだって!!」

「いや、生きてますからね、ちゃんと足もあるぞ。」

俺はそう言つて三角のやつを取り、足を見せた。それでもアリアは

落ち着かない。どうしよう。

「医者 of 誤診だったのね。驚いちゃったわ。」

「泣いて驚いてたよな、アリア。」

俺がそう言ったら睨まれた。もう少しいい反応してくれないかな。愉悦を感じられないじゃないか……。そう思いながら俺は刀を差し、銃を身に着けた。

「キンジの分は払うになったけど、イブキはどうするの?」

「そのくらい出すさ貴族様。平民だからってこっちにも矜持はある。」

そう言ったら、アリアはフーンと納得したようだ。あれ?キンジ、なんか苦悶の表情だけどどうした?そう思った瞬間

ダアンダアン

始まったか。俺たちは部屋を出て機体前方のほうへ向かった。その時に角山中隊長と合流した。すると、コックピットへの扉が開いており、そこからさっきのフライアテンダントが基調と副機長を引きずって出てきた。小さい体でよく男二人引きずれるな。

「動くな!!」

そう言っただ俺とキンジ、角山中隊長は拳銃を構えた。するとフライアテンダントが

「Attention please. でやがります。」

そう言っただ胸から出した缶をこっちに投げた。缶からは煙が……。フライアテンダントは防毒マスクなんてつけてないから、ただの発煙筒だろう。

「みんな部屋に戻れ!! ドアを閉めろ!!」

そう言っただキンジは近くの部屋に避難し……。って、おい!!

「キンジ!! こいつは毒ガスじゃねえ!! 発煙筒だ!!」

っち、フライアテンダントは一階のほうへ避難しやがった。そこからアリアも合流し、一階に行くと、そのバーでフライアテンダントが足を組んで座っていた。

「お嬢さん、ところでさっきの写真の女の子。見覚えあるんじゃないですか?」

俺がそう言うと、フライアテンダントは顔に貼ってあった特殊メイ

クであろう物をベリベリと？がしながら

「ええ、毎日見てますから。」

と言った。特殊メイクを剥がした後、その顔には写真に写っていた顔と同じ顔があった。同じくらいの背、胸、そして若干の怯え、もしかしてって思ったけど当たり前だったか。

「理子!？」

「やっぱりなあ……。」

「Bon soir」

理子はそう言っただけにあつたカクテルを飲み、ウイソクをした。

「おい、理子。お前未成年だよな。」

「ちゃんとノンアルコールだよ!!」



飛行機なんて大っ嫌いだ・・・

理子は足を組み直した。

「アタマとカラダで人と戦う才能ってさ、けっこう遺伝するんだよね。武偵高にも、お前たちみたいな遺伝系の天才がけっこういる。でも・・・お前の一族は特別だよ、オルメス。」

「っ!!!」

理子の言葉でアリアは硬直した。確かホームズのフランス語読みがオルメスだっけ？あと「お前たちみたいな遺伝系の天才」？

「そういうえば、俺のご先祖様もなんか天才がいるのか？」

「いや、イブキのご先祖は誰もいない。せいぜい一族が軍人って程度。」

マジですか・・・orzの体勢になった。そういえば今、コックピットに人がいないんだっけ？俺はorzの体勢のまま、角山中隊長にモールスで

「ゴノ機体 パイロット P ナシ」

と送った。すると角山中隊長は2階へ戻っていった。よかったバレなかったようだ。

「理子・峰・リュパン4世。それが私の本当の名前。」

話が多少進んでたようだな。ところでなんで理子の話を聞いているんだろう？逮捕してから聞いてもいいような気がするんだけど。

「でも・・・家の人間はみんな理子を☒理子☒とはよんでくれなかった。お母様がつけてくれた、このかわいい名前を。呼び方がおかしいんだよ。」

「おかしい・・・？」

アリアがつぶやいた。

「4世、4世、4世さまあー。どいつもこいつも、使用人共まで・・・理子をそう呼んでたんだよ。ひどいと思わない？」

とりあえず、偉大なご先祖様と毎日比べられるから嫌だ、ってところか？徳川幕府2代將軍の秀忠とか親父の家康に散々比べられて苦労したってこと聞いたことあるような・・・。そんな感じかな？

「そ、それがどうしたつてのよ……。4世の何が悪いつてのよ。」  
おい、アリア。お前自分で何でも聞くな、推理しろなんてこと言わなかったっけ？

「悪いに決まってるだろ!!あたしは数字か!?あたしはただのDNAかよ!?あたしは理子だ!!数字じゃない!!どいつもこいつもよお!!」

理子は俺達じゃない何か言っているような気がする。DNA：？数字……。それにイ・ウ……。あとちよつとで何か大切なことを思い出せるような気がするんだが……。

「曾お爺様を越えなければ、あたしは一生あたしじゃない☒☒リユパンの曾孫☒☒として扱われる!!だからイ・ウーに入つて、この力を得た……。この力であたしはもぎ取るんだ……。あたしを!!」

面倒になってきた。しかも武偵殺しの件とかキンイチさんの事とか……。なんか俺、邪魔な子?とりあえず理子を捕まえておこう。俺は「影の薄くなる技」を使い、理子の後ろに移動した。その瞬間

ダアンダアンダアン!!

アリアが理子に撃つた。もちろん、理子の後ろにいる俺も射線に入るわけで……。

「ぐああああ!!」

チクシヨウ!!白装束だから普通に貫通するぞ!!二人は俺に構わず至近距離の撃ち合いに……。

「イブキ!!大丈夫か!」

キンジだけが俺に気が付いてくれた。

「なんだよ、理子の後ろに移動して、気絶させようと思ったのに、アリアのやつ撃ちやがって……。」

「おい、止血するか!」

「……。大丈夫だ。運よく弾が貫通してる。この服破いて止血するかr……。ぐああああ!!」

「イブキ!」

流れ弾がまた当たった……。計4発の被弾……。神様、あんた俺に恨みでもあるのか?

「キンジ!!」

アリアと理子が弾切れになったようだ。キンジは理子へナイフを向けた。

「そこまでだ理子!!」

「双剣双銃・・・奇遇だよ、アリア」

なんか嫌な予感がする・・・。

「理子とアリアはいろんなところが似ている。家系、キュートな姿、それと・・・二つ名」

「二?」

「あたしも同じ名前を持っているのよ双剣双銃の理子でもね・・・。」

そう言っつて理子の髪は不自然に動いた。でも二つ名自慢とかよくできるな・・・。俺恥ずかしくてできないもん。

「アリアは本当の双剣双銃じゃない。お前はまだ知らない。この力の事を!!」

理子の髪はアニメのようにゆらゆらと動き、その髪が持っていたナイフでアリアを切りつけた。アリアは一本は避けられたようだが、もう一本に切られたようだ。

「うああ!!」

アリアは紅の血を撒きながら倒れた。つたく、俺がもつと早く動いて理子を拘束させれば・・・。

「あははは!!曾お爺様。108年の歳月は、こども子孫に差を作っちゃうもんなんだね。勝負にならない。こいつ、パートナーどころか、自分の力すら使えてない!!勝てる!!勝てるよ!!理子は今日、理子になれる!!あは、あはは、あははは!!」

理子が狂気に取りつかれたように笑った。理子は何かから解放されるような喜びを・・・。あ、DNA、数字、イ・ウー、解放・・・。思い出した。あの獣野郎!!だけど、まずは手当だ。

「キンジ!!アリアを手当てしろ!!流れ弾の当たらないところで!!」

「っ!!わかった!!生きて帰れよ!!」

「てやんでえ!!別に倒してしまっても、構わねえだろう!!」

キンジは急いでアリアを連れてどこかへ行つた。この死亡フラグ、

折ってみせラア!!

「イブキは作戦の最大の障害だった。だから、確実に殺すためにあそこまでやったのに……。どうして生きてるの!? 死んだことは確認したの!!」

理子は俺を見て、若干怯えていた。……まあ、ボロボロの白装束に三角のやつ着けっぱなし、しかも血まみれとなればどこのお化け屋敷ですか? ってなるか。

「俺は死んじやねえ、先生の誤診だ。だから俺はここにいます。」

俺はどうも理子を完全に敵とは見れない。背後にあるものを知っているせいだろう。それに一度刀を抜いたら確実に敵として処分することになるからかもしれない。

「思い出したよ。DNA、数字、イ・ウー。理子はブラドから解放されたいんじゃないか?」

俺がそう言うと、理子は驚いた顔をした。うまく説得すれば穏便に終わるかもしれない。俺は理子に近づいた。

「イ・ウーで、タコ、イカ、ブイが襲撃してきたとか話聞いてないか?」  
「もしかして……。」

イイ感じだ。俺はさらに近づいた。

「そこでブイがブラドを半殺しにしたのを知っているか? もし、それをやったのが俺だと言ったらどうする?」

俺はもつと近づいた。もう、理子との間はもうメートルもない。「なあ、こんな犯罪を犯さないで自首しようぜ。俺もついていくからさ。ブラドのことも協力する。そうすれば理子はもう堂々とお天道様が見てる場所を歩ける。」

だって、理子は服も着ることができずに監禁されて、それから解放されるために犯罪を犯したんだ。情状酌量の余地なんて沢山あるだろ? それに武偵殺しは公式上キンイチさんしか殺してない。キンイチさんは生きているから、誰も死んでいない。それに俺を殺した、と言った時理子は顔がゆがんだ。殺そうとしたことに後悔があるからだ。だから、俺は理子に刃を向けたくない。

「なあ、キンイチさんだって生きてるんだろ。理子は誰も殺していな

い。情状酌量の余地は大いにある。」

「ダアンダアンダアン!!」

俺は理子に撃たれた。理子が驚いたような、諦めたような顔をしたような気がした。でも、それが答えか・・・そうか、よろしい。ならば戦争だ。でもその前に休ませてくれ・・・もうイタイっていうか熱い・・・。

何か声が聞こえる・・・。ってヤバい!!眠ってた!!

ドウウウン!!

理子は爆弾で壁を開け、そこから脱出したようだ。俺に宣戦布告し、逃げるだ!!許さん!!意地でも捕まえてやる!!

「まあてええええええええ!!理子おとおおお!!」

俺は血まみれの白装束の格好で飛行機から飛び降りた。なんかアリアとキンジが化け物を見るような感じで俺を見ていたんだが・・・。飛行機から降りると、下から2本の線がこっちに・・・ってミサイル!?なんで!?

ドーンドーン

「ぐあああああ!!」

2本のミサイルは飛行機のエンジンに当たり、その破片が俺に降りかかってきた。その破片を俺は浴び、さらに大きな傷を作った。なんか、もう痛み感じなくなっただぞ、おい・・・。

破片を浴びた後、パラシュートで降りている下着姿の理子を見つけた。

「まああああてえええええええ!!りいりいりいこおおおおお!!」

その声が聞こえたのだろう、理子はこっちを向き、驚いた表情をした。俺は空中で理子の胴体をつかみ、そしてパラシュートのロープを刀で一閃。

「イ、イブキ!?なんで!?!どうして!?!ってパラシュートなんで切ったの!?!」

「てやんでえ!!テメエ!!手え差し伸べたら銃弾の答えとかふざけるのか!!まだ拒否するならわかるけど、銃弾の答えはないだろ!!意地で

も捕まえてやるよ!!」

「そのためにパラシュート切ったの!？」

「~~×~~パラシュートはただの飾り~~×~~だ!!」

「何言ってるの!？」

俺は理子を抱えたまま着水。衝撃は理子のほうに行っていないから大丈夫なはずだ。それにしても、海水が傷にしみてイテエ……。

「うわぁ……理子……生きてる……。」

「だから言っただろ~~×~~パラシュートはただの飾り~~×~~だって。」

俺はそう言っただけで理子に手錠をかけた。

「時計壊れてるから時間わかんないや。とりあえず、峰理子、お前を殺人未遂で逮捕する。」

リユパン4世はさすがにつけねえよ。あそこまで嫌がるんだから。

「……大人しく捕まると思う?」

「捕まんないど何するかわかる?」

その一言で理子は黙った。

「さて、じゃあお互い頑張りますか。」

「ゴメン、イブイブ。理子わからない。」

うん、理子はある程度調子が戻ってきたようだな。

「もちろん、陸に上がるために泳ぐんだけど?」

「え?」

「見た感じ10キロもないだろ。三角諸島の時に比べれば近い近い。」

大量の血が抜けてたの忘れてたよ。しかも現在進行形で抜けてるし……。何とかたどり着いた俺と理子はお互い、ヘトヘトだった。そして格好は、血まみれ・びしょびしょの白装束を着た男と、下着姿の痴女、完全に俺たちは変質者だった。そこに偶然通りかかったヤンキーのような少年達から電話を狩り……。間違えた借り、第2中隊に連絡。基地から近かったのだろうか、10分もしないうちに来てくれた。

「辻さん、殺人未遂の現行犯で峰理子さんを逮捕しました。あとはお願いします。」

俺はそう言っただけで、意識を失った。

怪我人にボディーガードさせるのかよ……

俺は起きると、ベッドに鎖で繋がれていた。え？

「イブキ、起きたんだね。」

俺の横に瞳孔が開いたエルが座っていた。

「あのエル？なんで俺は鎖で縛られてるの？なんとなく想像はできるけど。」

大怪我したままで家族に何も言わず病院を抜け出し、瀕死の重傷をして帰ってきたわけだしなあ……。でも抜け出すこと伝えれば、絶対だれか来るし、理子を殺そうとするよな……。

「イブキ、僕って価値はないのかな。僕は君が使う兵器に過ぎない。兵器をどう扱い、どう思うかは君の自由なんじゃないかな。だけど、僕を連れて行ってくれなかった。そして、イブキは傷ついて帰ってきた。僕に価値はないのかい？無いのなら無いと言ってほしい。廊下に出て自爆するだけだから。」

エルがすごいことやってきた!?!?!まじめに話さないとだめだよね。

「まず、エルに価値はないなんて思ってない。俺の掛けがえのない家族だ。それだけは覚えておいてほしい。そして、俺はエルを兵器として見てないし、見たくない。家族を兵器としてみたくないから。それに兵器なら今のようなことは言わないはずだ。兵器とは無感情であり、命令に忠実であり、最低限の思考しかない。だから、価値がないなら自爆するなんて言わないはずだ。だけど、兵器として壊れているかもしれないけど、俺は今のエルを好ましいと思ってる。だから……。」

「マスター!?!起きたのですか!?!玉藻心配したんですよ!?!」

玉藻が部屋に入り、慌てている。慌てすぎて完全に素が出ている。その後、ネロ、牛若、二ト、師匠、エジソン、ベオウルフが来てみんなからステレオで怒られた。俺はこの世界の両親はいなくなっただけで、叱ってくれる家族がいたんだなあと思うと、うれしかった。

「このぐらいで瀕死とは情けない。怪我が治ったら修行を10倍に増

やすか。」

「そのほうがいいな。このぐらいの殴り合いで倒れるのはなあ。」

「ふむ、特訓用の機械を発明しよう!!」

「流石に10倍はきついよ!!!」

俺は家族からお叱りを受け、みんなはいったん出ていった。流石に授業があるからしようがないか。

「エルちよつと待って。」

「なんだい?」

エルはこつちに来てくれた。

「俺は例え、兵器として壊れているとしても今のほうがいいと思う。つたく、よくまあ、こんな恥ずかしいこと言ったなあ。それだけ。」

俺はそう言っつてベットに包まった。エルの笑い声が聞こえたような気がするが大丈夫だろう。きつと……。

その後、矢常呂先生が来て、俺の状態を教えてくださいました。

「前回の傷が癒えてないのに、新しく銃創7箇所、火傷に14箇所の金属片の食い込み。あなたは死に行きたいの?」

そんなありがたい言葉をもらった。

キンジとアリアも見舞いに来てくれた。二人によると、飛行機は角山中隊長のおかげで無事羽田に不時着したらしい。また、もう少しコンビを組んでみようと思っているようだ。それはよかった。

「そういえば理子のことなんだが……。」

「どうしたキンジ。ちゃんと理子は留置所だろ?」

「それがな、護送中に逃走して、そのまま行方不明らしい。」

理子の護送中に護送車が何者かに襲われ、そのまま理子は逃げていったそうだ。俺がここまでして捕まえた意味なかったよね……。

「キンジ、俺は疲れた。不貞寝させてもらう。」

「あ、ああ。お大事にな。」

不貞寝しても、理子が脱走した事実が変わらなかった。

不貞寝して起きた後、携帯が鳴った。この電話番号は……。

「もしもs……。」



「お兄ちゃん!!死ぬ寸前だったって本当ですか!？」

「えっと、粉雪?落ち着いてほしいんだけど・・・。」

「お兄ちゃんが死んだって聞いた時、私は!私は!!」

そう言っつて、粉雪は泣いてしまった。悪いことをしたなあ。

「粉雪、ゴメン。こういうことが無いように海軍に入ったのに・・・研修で武偵高に行っっちゃって。危ない真似はしないようにするから。」

その後、俺は粉雪に叱られた。

粉雪からのお叱りを受けた後、俺は嫌な予感がしてパソコンを開いた。するとスカイプでかなめからテレビ電話が来た。

「イブキにいい!!心配したんだよ!!死んだって聞いてどう思ったかわかる!？」

かなめの目にはクマと涙があつた。

「ごめんなさい。」

「イブキにいが生きてて・・・本当に、よ、がっだあああ!!」

かなめは泣き出してしまった。俺は謝り続けるしかなかった。

かなめが落ち着き、ある程度話してスカイプは切った。メールには27件ほどメヌエツトからのメールがあつた。俺は最初と最後のメールだけ読んだ後

「心配をかけてしまい、誠にすいませんでした。後悔はしてませんが反省はしています。今後はこのような無茶をしないよう努力してまいります。」

と送った。

俺は一週間後には退院できた。矢常呂先生は驚異の回復力だ、ありえない、みたいなこと言っていたけど気にしない。それで俺は寮の部屋に帰ると、アリアが部屋を要塞化していた。何言っているかわからないと思うけど、俺もこの状況を理解できてない。

「あの?アリアさん?人の部屋に何してるんですか?」

「見てわからないの?部屋を要塞化してるのよ。」

「何でそんなことしてるんだ?」

「ボディーガードをやるからよ。アンタもやるのよ!!」

何それ、初めて知ったんだけど。

「・・・怪我人に仕事しろというのか？」

「あんたには無理しない程度でやってもらうわ。流石に重症の怪我人を前線に出すほどあたしは鬼じゃないわ!!」

怪我人にボディーガードやらせるのは鬼じゃないとでもいうのか？まあ、体鈍っているだろうし、多少はイイかな。すると、白雪と桐のタンスを運んでいるキンジが来た。

「イブキ、退院したのか？おめでどう。」

「あ、イブキ君。退院おめでどう。」

「ああ、二人ともありがと。ところでボディーガードやるんだって？俺も参加するみたいだな。対象者って誰だ？」

「それって私のことだよ。」

白雪!?なんで!?

諜報科とSSRから白雪が「魔剣」に狙われている、という情報があったらしい。アリアは「魔剣」の逮捕を狙っているため無償で白雪のボディーガードになった。ついでにキンジとアリアが同棲していたそうなので、白雪もここで一緒に暮らす!!ということになり、急遽この部屋を要塞化しているそうさ。・・・待とうか、キンジが同棲してる？

「おいキンジ。お前同棲してたなんて聞いてないぞ。まさか、俺がいないからってしつぱりやりあつてたんじゃないだろうな。」

「そうなの？キンちゃん・・・。」

白雪は刀に手をかけ、瞳孔が開いた。

「そ、そんなわけないだろう!!それに白雪、おまえには説明しただろ!!アリアが部屋から出ていかなかったんだよ!!」

なんだ、やっぱりか。

「とりあえず俺の部屋はいじってないよな？」

「アリアにも釘刺したし大丈夫だろ？入ったらあの時のように怒るぞって言うておいたし。」

俺ってそんなに怖いかねえ？

部屋の要塞化&白雪の私物運びの手伝いをしていたらキンジがいつの間にか消えていた。あの野郎サボリやがったな。手伝いが終わ

るとアリアが警護よろしくと言って、キンジを探しに行った。どうせだからと白雪と夕飯を作っているとキンジとアリア、それにサーヴァントの4人が帰ってきた。今日の夕飯はカニチャーハン、エビチリ、酢豚、餃子にミニラーメン、アワビのオイスターソース和え……。流石に作り過ぎじゃないですかね。料理の手伝いだって何時もは「これ切って」とか「これ見ておいて」程度なのに、今日にいたっては「これやったら、あれやって、これ見ながらあれもやって!!」みたいな感じでしたよ……。

「食べて食べて。全部キンちゃんのために作ったんだよ。」

そう言って白雪はジャスマンティイーを人数分持ってきた。みんなで「いただきます」をした後、キンジが箸をつけ

「お、おいしいですか?」

と白雪が聞いた。

「うまいよ」

キンジがそう言ったら白雪はだいぶ舞い上がっていた。ああ、お熱いことで。でも白雪さん?アリアに何にも出してないのはどうしてですかね?」

「で?あたしの席には食器がないのかしら?」

「アリアはこれ。」

そう言って白雪はドンツとアリアの前に割りばしが刺さっているドンブリ飯を出した。

「なんでよ!!」

「文句があるのならボディーガードは解約します!!」

白雪がそう言うと、アリアは諦めて飯を掻き込み始めた。流石に冗談のようで、ある程度たったら取り皿を白雪が渡していたけど。

4人も泊まりたいと言ってきたが、着替えの問題、人数の問題を出して何とか自分たちの部屋へ帰らせた。その後、キンジとアリアがテレビのチャンネルを巡って争い、俺は銃の簡易整備をしていた。すると白雪はお札?みたいなものを持ってきた。

「キンちゃん、あのね、これ……巫女占札っていうんだけど。」

「巫女せん……?」

「占いの道具じゃないか？」

俺がそう言うのと

「うん、キンちゃん将来のことで悩んでいたから、占ってあげようと思ってる。」

「よかったなキンジ。現役の格式高い神社の巫女さんに占ってもらって。」

「じゃあ、やってもらおうかな。」

キンジがそう言うのと、アリアも一応女の子なのだろうか、占いには興味があるらしく、何々？と言って近寄ってきた。

「キンちゃんはなにがいい？恋占いとか金運占いとか恋愛運、健康運、恋愛占いとかあるけど。」

「数年後の将来について占ってくれないか？」

白雪はそんなに恋に関して占いたかったのかよ……。キンジが答えると、白雪はその札を並べ始めた。

「どうなのよ。」

アリアがそう言った時、白雪の表情が曇った。そのあとすぐに顔を戻し、

「総運、幸運です。よかったねキンちゃん」

「おい、それだけかよ。何か具体的な事わからないのか。」

キンジよ、さすがに占いだぞ。そこまで詳しいことはわからないだろう。

「え、えっと。黒髪の女の子と結婚します。なんちやって。」

明らかに作り笑いな白雪。なんかいい結果じゃなさそうだな。

「はい!!じゃああたしを占ってよ!」

アリアが机から身を乗り出して言った。

「生年月日は言わなくていい?私は乙女座よ。」

「へえ、似合わないね」

白雪はそう言うって適当に一枚を引き

「総運ろくでもないの一言に尽きます。」

「白雪、俺を占ってくれ。外国行くと絶対ケガして戻ってきたり、最近も色々あつて何かに憑かれてるような気がしてなあ。何か憑いてる

か憑いてないか、あとちよつとした将来でも占ってくれないか？」  
喧嘩になる前に俺を占ってもらうことにした。

「わかったよ。」

白雪がそう言って札を並べた瞬間

ダアン

札に弾が着弾した。え？

「ど、どっから飛んできたのよ!? ってイブキの銃から!? あんた弾抜いときなさいよ!？」

弾は俺の整備していた銃の方向から飛んできたようだ。

「いやいや!? 俺銃に弾なんて入れてないし、弾倉入れてないぞ!? それに弾倉にすら弾入れてないぞ!？」

俺は銃を組み立てた後、銃本体・弾倉・弾に分けておいたはずだ。

「そうみたいだな。薬莢があんなところまで飛んで行ってる。暴発か?」

キンジは空薬莢を見つけ、なぜそうなったか推理した。

「二二二二二二二二二二二二」

占いの時に暴発し、札に弾が当たる……。俺は得体のしれない恐怖を感じた。

「あ、あたしもう寝るから!! お休み!!」

「そ、そうだな。明日も朝練あるし俺も寝るわ。白雪、イブキお休み。」

「お、俺怪我人だし、早く寝て傷を癒さないとお休み。」

結局、俺は結果も知らないで早く寝ることにした。

「イブキ!! 銃ちゃんとしまっておけよ!!」

「あ、忘れてた。」

リビングに戻って銃を片付け、俺は布団に包まった。

任務中に喧嘩しないで・・・

俺は夜中に目が覚めた。やけにのどが渴く。台所へ向かった。冷蔵庫で冷やしてある水を一杯飲みベッドへ帰ろうとした時、人の気配がした。慌てて振り向くとそこには白雪がいた。

「なんだ白雪か。喉でも乾いたのか？」

「イブキ君に占いの結果を教えようと思って。」

・・・わざわざ起きて占いの結果を教えようとするのはうれしいんだけど、こんな深夜に結果を聞くって大分怖いんですけど。

「ワザワザこんな時間じゃなくてもよかったのに。いや、教えてくれるのはうれしいけど。」

「みんなに言えない内容だったから・・・。」

みんなに言えない結果ってどういうことだよ!!

「そ、そうなんだ・・・。どうだった？」

「うん、イブキ君。あ、あのね・・・。」

すごく言いづらそう・・・。

「うん。」

「あのね。沢山の霊と神様に取りつかれてるの。」

・・・何それ。

「現役の巫女様。どうかお祓いはできますでしょうか。」

「お祓いしないほうがいいよ。今、霊によって守ってもらってるから。」

「どういう事？」

「神様のほうがイブキ君を殺そうとしていて、沢山の霊がイブキ君を守ってくれているの。」

「とりあえず、死神が俺のこと狙っていて、沢山の守護霊がその死神から俺を守ってくれてるって感じか？」

「そうだね。」

なんか聞かないほうがよかったような、悪かったような。

「外国に行つて怪我するのは、外国だと守つてくれる霊の力が弱まるから。この前の怪我は沢山の守ってくれる霊のおかげで助かった

みたい。」

つまり、守護霊様のおかげで理子の攻撃から生き延びたわけか。

「その神様を何とか祓ってもらえないか？」

「普通、神様を弱めるとか鎮めるならできるんだけど祓うってできないんだ。それにこの神様、とても力が強いからちゃんとした設備があるところじゃないと逆に力が強くなっちゃう。」

何でそんな神様に憑かれてんだよ。まあいい・・・それなら神様のほうはシヨウガナイ、守護霊様の方だ。

「守護霊様を強くしてくれませんか。」

「うん、そうだと思ってお守りとお札を家から取り寄せてるから。あと神棚作って毎日参拝するだけでも効果があるよ。」

たったそれだけで効果があるとは・・・。

「明日から神棚作るわ。いや、時間としては今日か？」

「そうしたほうがいいよ。」

「ありがとう、いいこと聞いた。今日はぐっすり眠れるぞ!!おやすみ。」

そう言っただけ俺は部屋に帰り、ベッドに潜った。

「将来のことを聞かれなくてよかった。あんなこと言えないよ・・・。」

俺は翌日の放課後、神棚制作のために材料と飾るお札を買ってきた。さて、部屋に帰ろうとすると、アリアがももまんの包み抱えていた。

「イブキ、その荷物は何？」

「ああ、白雪から神棚作って毎日拝めば運がよくなるって聞いてな。武偵殺しの件とか海外行くと大きな事件に巻き込まれて怪我して帰ってくるから運を上げようと思ってな。」

「確かにイブキは運が悪すぎるわよね。まさか初めて会った時の空港でイブキとテロリストが戦うなんて思いもしなかったわ。」

「これまた懐かしい話を。アリアがマクレーのおっさんと会って、マクレーのおっさんと俺を質問攻めしてただろ？その時に置き引き見つけて一緒にそいつについていたらテロリストだったんだ。」

「トイレ行く途中にテロリストに会ったと思っただけだわ。」

などと懐かしい話に花を咲かせた。

「ただいまー」

いざ部屋に入ろうと扉を開けたら

「大人しくしろ!!!」

キンジが裸で嫌がる白雪を襲おうとしてました。あれ?でも白雪がキンジに襲われたら嫌がらないと思うんだけど……。

「こ……こんのおおおおお。」

アリアが俯きながらキンジに近づいてゆく。なんか嫌な予感がするなあ。

「バカキンジイイイ!!」

そう言ってアリアは裸のキンジにガバメントを発砲しだした。

「バカヤロウ!!アリア!!キンジを殺す気かああ!!」

俺がそう言ってアリアの銃を叩き落とした。

その後、アリアと白雪が合意だとかなんだとか言い合っていたけど、最終的にまたキンジはアリアに撃たれ、東京湾へダイブした。

「おい、アリア。お前キンジを殺す気かあ?どうなんだよ?べらんめえ!」

「ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ……。」

俺は東京湾に落ちたキンジを急いで回収したが、結局キンジは風邪をひいてしまった。なんかキンジは特定の薬じゃないと効かないっていう事は覚えてるんだけど、忘れちゃったしなあ……。とりあえずショウガがカゼに効くしこいつでいいか。などと考え、料理を作ろうとしたが白雪に代わってくれと懇願されたため、今日は白雪が飯を作ることになった。

今日も4人は泊まると言っていたがキンジを理由に自分たちの部屋へ帰ってもらった。

そういえば、俺はアドシアードは出場しないことになっている。アドシアードの好成績者は武偵大への推薦を得ることができる。だけど、俺この学校出たら軍に戻るから武偵大への推薦はいらぬ。なので他のやつに譲ろうと思ったからだ。で、アドシアードに出場しないやつはこの大会の準備に駆り出されるんだが……。



「というわけで村田君は地下倉庫での弾薬運搬だからね。」

「高天原先生、何とかありませんかね。」

俺の入院中にその役割分担が決まってしまっていた。

「代わってくれる人を探さないことには……。」

牛若とか喜んで代わってくれそうだけど、申し訳ないしなあ……。

「……わかりました。」

「ゴメンね。村田君。」

俺に憑いている神様とやらよ!!これもあんたのせいなのかああ!!!

アリアとキンジが喧嘩したらしい。そうキンジが俺に言った。はあ……。キンジはイイとしてもアリアのフォローに行つたほうがいいなあ……。そういう事で俺はアリアを探した。アリアは女子寮の屋上にいた。狙撃屋のレキならもしかして、と思つて連絡したら一発だったよ。というか、アリアとレキ一緒にいたのかよ。

「よお、アリア。キンジと喧嘩したんだつて?」

「そうなのよ!!キンジったら!!……。」

そう言つてアリアは愚痴と一緒に喧嘩の内容まで話してくれた。なんか「魔剣」はいる、いないなどのことに発展し喧嘩別れしたようだ。

「まあなあ、仮にも受けたボディーガードとはいえ、いないこと前提でボディーガードするのはさすがにバカだなあ。ボディーガードは最悪の時の保険なんだから、いること前提にして動いてそれでいなかつたよかつたね、つて感じなのにな。」

「そうなのよ!!なのにキンジは……。」

「でもアリアも悪い。アリアは言葉がきついし、それに私の勘ではいるだあ?お前キンジとコンビ組んでどのくらいいたつ?」

「ひと月経つてないわね。」

「ひと月経つてないのに信頼関係なんて築けるかつてんだ。軍だつて早くても3カ月は常に一緒に行動してやつと構築できてきたかなつて感じのなのに、結成一カ月も経つてないのに私の勘を信じるは無理があるぞ。」

「武偵殺しのことだtt……。」

「武偵殺しの件一回だけだろう。人間は二回以上繰り返さないと普通は信じない。」

流石に言い過ぎたかね。

「あんたはどうなのよ。」

俺か……。

「俺個人としては信じている。だけど軍人としてはなあ……。ボディーガード受けるんならいること前提で進めるが、何も無いところでそんなこと聞いても証拠は？ってなるな。まあ、~~魔剣~~は軍でいるって聞いたことがあるから信じているけど。」

「そう……。」

アリアが落ち込んでしまった。うん、フォローのつもりだったんだけど、フォローどころか攻撃しちまったな。

「少なくとも俺は~~魔剣~~がいることは信じている。」

そうやって俺はその場を去った。

さて、昨日はキンジの看病とかあって神棚づくりが終わってないから今日中に仕上げないとなあ、あと喧嘩の件どうすればいいかなあなどと思いつつ俺は部屋に帰った。

「ただいまあ〜」

玄関にはみんなの靴がない。まだ帰ってきてないな、と思った瞬間、隅に見知らぬ靴がポツンと置いてある。え？リビングからパパタと、銀髪のかわいいメイドさんが来た。え？もしかして……。そしてメイドさんは俺の前に来ると一礼し、

「おかえりなさいませ！イブキ様！」

見惚れるような可愛い笑顔で出迎えてくれた。

「リサ!？」

「はい！リサです！」

「鍵閉まっていたと思うんだけどどうして入れたの？」

「え？鍵は開いていましたよ。鍵が開いていたのに誰もいなかったの、リサは留守番をしていました。」

あいつら!!戸締りぐらいしておけよ!!

また家族が増えるのか・・・

俺は進められるままりビングへ行き、ソファアに座った。

「イブキ様、お茶です。」

「あ、ありがとう。」

俺はそしてお茶をグイツと

「あつつ。」

「大丈夫ですか!？」

「ああ、大丈夫だから。」

ってこんな事してる場合じゃないな。

「リサ、単刀直入なんだが、なんでここに？」

なんとなく理由はわからんでもないけど、一応・・・。

「はい、リサの・・・いえ、私のご主人様になつてください!!」

・・・某武偵さんの「ドレイに・・・」よりは断然いいと思うんだけど、真逆だねえ。

「パーティーに入れてくださいっていう意味じゃないよね。」

「はい。リサをメイドとしてお傍においてください。」

マジか・・・でも会ったのって潜水艦だよね。たった一回だけど・・・なんで？

「俺と一回しか会ってないよね。なんで俺なの？」

「はい。イ・ウーで運命の勇者様に出会えずに悩んでいた私は、シャーロック卿に御助言をいただいたことがあるんです。そこで卿は言われました。私がお仕えるお方は東からくる。ちよつと目つきが悪くて、しゃべり方はぶつきらぼうで女たらし・・・。」

ちよつと待て、目つきが悪いとぶつきらぼうはシヨウガナイにせよ、女たらしはないだろ・・・。それはキンジだ。

「そのお方と運命の時を迎える際の光景も、卿は予知しました。渡り蝶を空に見るとき、と。それはあの時の潜水艦で会った時です!! 私は運命の勇者様に巡り会ったのです!!」

うん、あの技出さなきやよかった。うーん人違いですって言おうにも、感動でリサの翡翠の瞳に涙が・・・。

「ですからイブキ様。どうかリサのご主人様になってください。どうぞリサをメイドとしておそばにおいてください。」

「・・・誠にどうしましょう。確か原作だと、この子はそのキンジに仕えようとしたんだっけ？あのキンジに仕えようとするってことは、ひどい言い方をすると自分を確実に守ってくれる強い奴に仕えたってところか？」

「リサって何ができるんだ？」

「はい。お料理、お洗濯、お掃除、リサは何でもします。ご主人様が望むことなら何でもいたします。その代り・・・戦いたくない、傷つきたくないリサに代わって、その御手に銃を、剣を持ってください。そうして、リサを苦しめるものから救ってください。」

「なあ、もし断られたらリサはどうする？」

「え？リサはシャーロック卿にお別れをいたしました・・・。帰る場所がありません・・・。」

リサが泣きそう・・・。はあ、かなめだけ拾ってリサは捨てるってできないよな。

「わかった。でもご主人様にはなれない。」

「え？」

「形式上はなるけど家に帰ってまで上下関係があるのは嫌だな。家では主人とメイドじゃなくて家族としてなら・・・。まあ、仕事に上下関係で苦勞するのに家でも上下関係とか・・・ねえ。」

ただでさえ鬼塚大尉に辻さん神城さんで苦勞しそうなのに・・・。家でも畏まられたら・・・。するとリサは泣いてしまった。え？マジ？ご主人様じゃないと嫌なの!？」

「え・・・いや・・・リサの主人になるのがイヤってわけじゃないんだよ。ほら、主人とメイドって固い関係より、こうフランクなね、家族のような・・・。」

「いえ、嫌じゃないんです。うれしいんです。」

そう言ってリサは泣きながら笑顔を作り、

「村田イブキ様。リサのご主人様。リサはイブキ様を元気づける妹になります。慈しむ姉になります。お母様にもなれるよう努めます。」

イブキ様の身の回りのお世話はみんなリサがして差し上げます。イブキ様の家族の一員になれるよう頑張ります。だから、どうかリサと一緒に時は家族と一緒にいるように、寛いでお過ごしくださいませ。今からこの身は全て、頭から爪先までイブキ様の所有物です。」

リサは跪き、胸の前に手の平を組んだ。うん、待とうか。いまサラリとすごいこと言わなかった？こう、リサの体は俺の物みたいな。

「「「ただいまー」」」

キンジ、白雪、サーヴァント4人が帰ってきた。そしてこつちをガシ見……。あ、泣いている美少女が俺に跪いている。

「ちよつと待とうか。」

ジャラジャラジャラジャラ、チャキ、

「浮気だね！わかるとも!!」

「決まっておろう。浮気者には、この世の地獄を味わわせるのみだ！」

「同盟者とあろうものが女を泣かせるとは……。どういことですか!!」

「主殿のお客様ですか？」

そう言つてエルは鎖で俺を拘束し、ネロは原初の火を俺へ構え、二トの後ろにはメジエド様が……。牛若はただの客と思つているようだ、流石天才よくわかつてらっしゃる。

「ちよつと待つて!!落ち着いて!!」

「イ、イブキ様?!」

俺はまだ怪我が癒えてないのにも関わらず、リサは俺の知り合い、最近家族になったという事を何とか肉体言語で説得した。

「こう……。胸が締め付けられるような……。これはどう言うのだろう……。どう、言うのだろうか。」

「うん、わからないからって感情で動いて、鎖で拘束しないでください。い。」

未だに瞳孔開いたまんまだけど、もういいや。

「そのことを余に早く伝えよ。そなた、なかなか美しいよな。」

「ネロ様、伝える間もなく抜きましたよね、後ナンパしない。」

ネロはリサを口説きに……。

「わ、私は最初からわかつていましたよ。」

「違うよね、メジエド様けしかけた後気づいたよね。メジエド様けしかけた後気づいた素振りしてたけど攻撃したよね。」

ニトは謝ってくれたけど、最初からわかってたはないでしょ……。「主殿のお客様でしたか。牛若丸と覚えてください。」

「イブキ様！すでにメイドがいたのですか!?!」

「牛若、間違えないとは偉いな。あと、リサ牛若はメイドじゃないから呼び方訂正してもこのままだから諦めたただけだから。」

なんかりサも大きな勘違いしたようだけど、何とか訂正……。

「えつと、とりあえずあんたの名前は？」

そう言つてキンジはリサに尋ねた。

「はい、イブキ様の新しい家族であり、メイドであるリサ・アヴェ・リュ・アंकと申します。あなたはキンジ様ですね。えつとそちらは……キンジ様の奥さまですか？」

リサが盛大な間違いを犯した。

「キンちゃんの奥さんの遠山白雪です！」

「違う!!こいつは星伽白雪!!ボディーガードの対象者なんだ。」

キンジは訂正したものの、白雪は「奥さん……奥さん……お嫁さん、キヤー」などと呟きながらだいぶ浮かれている様子。

「とりあえず飯にでもするか……。今日の当番俺だっけ。」

そう言つて俺は台所へ行くこうとすると、

「イブキ様!!リサにお料理をさせてください。」

そういえば料理ができるんだっけ？

「そうだな、お願いできるか？」

「はい!!」

リサは肉団子やコロツケのようなもの、豆のスープ、そしてご飯を作った。とても楽しそうに作っていたな、きつと家事が好きなのだろう。なるほど、メイドは天職だな。玉藻のキャラを取られたような気がするけど、戦闘ができるかできないかで居場所の分別ができるし大丈夫だろう。実際今も玉藻が家にいるのって家の防衛も兼ねてるし。

「イブキ様どうですか？」

「うまい!!ありがとう!!」

「はい!!」

チクシヨウ、うますぎるんだよ!!こんなの食ったら戦闘糧食なんて食えなくなるだろ!!戦闘糧食は一定の時期になったら消費し、新しい糧食に変えておくんだけど、消費する日のテンションダダ下がりになるぞ!!

「ほう!これはうまい!!リサよ、余の専属料理人にならぬか?」

「うん、この味を・・・おいしいというんだね。」

「リサ殿!!美味しいです!!」

「このスープ、懐かしいですね。」

「これはうまいな。」

「リサさん、洋食を教えてください!!私、和食得意だから教えるよ!!」

みんなにも大好評のようだ。

「これからもよろしくなりサ。」

「はい!!」

夕食を食べた後、デザートフルーツとお茶を飲みながらリサの今後をどうするかという話になった。

「リサはカバン一つもってここまで来たと・・・泊まるところどうしよう・・・こっちか、女子寮のほうか・・・。」

「リサはイブキ様のおそばにいたいんです。」

だろうと思っただけだし・・・。

「ずるいぞ!!余もここに泊まる!!」

「主殿のそばにいたいんです!!」

「あなたの世話をするのは私の役割。私が泊まるのは当然です!!」

「僕は・・・いらぬのかい?」

リサをこっちに泊めると、4人に不満が・・・さてどうしよう。また、逆に考えるんだ。今はボディーガード中・・・泊めるんじゃない、ボディーガードとして雇うんだ。

「キンジ、泊めても大丈夫か?」

「いや、それはさすがに・・・。」

キンジは反対か。

「でも、お前。アリア泊めてたんだっけ?しかも俺のいない間に?自

分はよくて俺はダメか。わかった。」

そうすると5人はキンジを非難するような目で見た。

「いや、あのな……。」

「ボディガードとして雇う。それならいいだろ？寝るところは白雪のところ。寝る時の守りは薄いからもってこいだろ？」

「……わかったよ。でもベットが足りないぞ。」

「俺のを使わせればギリギリ足りるだろ。俺は軍のお下がりのハンモック使うから何とかなる。」

ずっと昔に在庫整理と言われてハンモックをもらったことがあった。よくもまあ、あんな骨董品を今まで保管していたなあと思うくらい古さだけど。

「泊まるならボディガードをタダですることが条件。いいか？」

4人は急いで部屋を出ていった。荷物を取りに行ったようだ。

4人が荷物を取りに行き、リサが夕食の後片付けをしている時、キンジと白雪はPCを覗いていた。白雪はすごく喜んでいる。

「おう、お二人さん。何見てるんだ。」

そうしてPCを覗くとあるサイトが表示されていた。

「東京ウオルトランドの花火大会？」

「ああ、白雪と行こうと思ってるな。葛西臨海公園から見ようと思ってる。」

「こいつボディガードだよな。」

「ボディガードをして花火大会ってお前大丈夫か？」

「葛西臨海公園ならそんなに人いない。それにずっと引きこもってばっかりじゃストレスたまるだろ。」

「はあ……ちゃんと考えているんらいいけどよ。気をつけろよ。」

「わかってる。」

キンジと白雪の二人の時間は邪魔したくないけど、たった二人って言うのもなあ……。俺がついていけばリサにサーヴァント4人は付いてくるし……。うん、レキに頼んで見張っててもらおう。俺はレキにメールでキンジと白雪の監視を頼んだ。とすると、明日暇だな。リサの件を話すにしても急に家に帰れないだろうしどうしよう。



「「ただいまー」」

4人が帰ってきたようだ。まあ、リサと家族にあいさつ回りでもいいかな。

「おかえりー」

「ちよつと待って。ネロにニト。その異常な量の荷物は何？」

二人は荷物が異常に多く、メジエド様などにも持たせている。

「何を驚くことがある。余は皇帝だぞ。これでも荷物を少なくしたのだ。」

「私はファラオですよ。それに、あなたの世話をするのは私の役割。荷物が多くなつて当然でしょう？」

結局俺のほう折れて、荷物は俺たちの部屋の物置き場に保管されることとなった。

弾運びとか地獄だ・・・

リサが俺の部屋に来た翌日、師匠、ベオウルフ、エジソン、玉藻にリサを紹介しに行った。師匠とベオウルフは以外にも好意的（好戦的？）で、リサと戦おうとしていた。（リサってなんかの獣なんだっけ？）エジソンは何かの開発中で忙しかったようだがいつもの大きい声であいさつ。玉藻は最初「キャラが被る・・・」などと言っていたけど、裁縫や料理のことで意気投合していた。かなめにはメールを送っておいたし大丈夫だろう。

そしてアドシアード当日。俺は傷が完治していないのに、地下倉庫で弾薬運びをしていた。弾薬運び、これ簡単そうに見えてすごくきつい。軽いのなら20〜30キロ、重いと50キロある箱を数十個も運ばなければいけない。

「オイ村田ア。15分でA―25―Bを10箱とD―56―Cを7箱、G―64―H61を12箱運んどけや。」

「イヤイヤ蘭豹先生!!15分は無理ですよ!!俺怪我人ですよ!!それに綴先生にチャン先生、高天原先生の分もあるんですよ!」

「そおか?なら20分でもいいぞ。」

何言ってるんだこの野郎は?

「かなり譲歩してやったような言い方ですけど、それでも全力でやっても25分はかかりますからね!そもそも交代要員はいつ来るんですか!?!朝7時から始まって昼休憩なしですつとやってるんですよ!」

「ああん? そんなないわ。今日一日お前のシフトや。明日は火野が一日やって、それ以降二人で最後まで回すんやぞ。」

今なんて言った?

「弾薬運び二人とかふざけてるんですか!?!」

「じゃあ、25分後までに急げや。」

切りやがった・・・この地下倉庫には携帯の電波が入らず、専用の無線によって指示されている。ただどここんないきついに感謝の言葉は高天原先生だけだ。やってらんねえ・・・こんな仕事を後輩の火野ライカがやるとは・・・向こうはくじ引きで決まったらしい

からまだいいのかな……。俺、入院中に決められちゃったし……。明日俺が手伝いに行ったら、俺の時も手伝いに来てくれるかな？などと考えつつ俺はカートに箱を運び、それでエレベーターまで持って行き、そこから弾薬用エレベーターに箱を乗せ換えるということを延々とやっていった。途中、暇になった牛若と弁当を届けに来たりサが手伝ったおかげで弾薬運びはスムーズに進んだ。

「村田君、1時間休憩して大丈夫ですよ。」

「本当ですか!?ありがとうございます!!」

高天原先生から休憩の許可が下り、やっと昼が食べれるようになった。あの先生は神だ。神棚に先生の名前が書いてある紙でも置いておこうかな。嘘だけど。

「主殿!!荷物の運搬が終わりました。」

牛若もちょうど終わったか。やっと昼飯が食える……。

「やっと休憩していいようだから、昼食べよう。遅くなっちゃったな……。」

「イブキ様お昼の準備はできてますよ。」

リサは弾薬箱の上に布を敷き、簡易のテーブルとイスを作った。まあ、弾薬箱だけどシヨウガナイか。ここにはそれしかないんだし。弁当はおにぎりに卵焼き、ソーセージ、唐揚げ、漬物と日本では一般的な弁当だった。なのにこんなうまいとは!!

「すげえ!!唐揚げがサクサク!!卵焼きもちやんと出汁が効いてる。おにぎりもうまい!!」

「私もすでにお昼はいただいているのですが、またいただきたくなくなるくらいおいしいですね!!」

「ありがとうございます。」

リサは手を合わせ、幸せいっぱいっていうような笑顔を見せる。

ああ、この笑顔で癒される。

デザートのリントゴを食べていると話し声が聞こえてきた。

「キンちゃんは欠陥品じゃない!!」

え?白雪?なんでここに?

「今白雪の声が聞こえなかったか?」

「聞こえましたね。主殿」

「はい、聞こえましたよ。」

残っているリングを俺と牛若が口に詰め、声の聞こえるほうに向かった。するとそこには銀髪の少女と白雪が話していた。あれ？あの少女って潜水艦の中でフリフリドレス着て、鏡に映った自分見て笑っていた子じやなかったっけ？

「迷惑をかけたくない、か。だがな白雪。お前も私の策に一役買ったのだぞ。」

「私・・・が？」

☒☒電話を覚えているだろう☒☒

銀髪の少女がキンジの声を真似した。だいぶうまいな。電話でしゃべられたら完全に分からないぞ。

☒☒すぐ来てくれ白雪！来い！バスルームにいる！☒☒

そのことを聞くと白雪は息をのんだ。なるほど、キンジの強姦未遂はこういうことが原因で起きたのか。というか、あのイ・ウーでのコスプレ少女が魔剣だったのか。俺は牛若に殺さず・傷つけず捕縛、リサは隠れて待機、と命令した。牛若はちゃんと言わないと何するかわからないからな・・・。

「ホームズは無数の監視カメラを仕掛けていたが、お前達の部屋を監視していたのは、私のほうだ。お前はリビングの窓際において、遠山が入っていたバスルームの灯りが消え・・・。そこにちょうど神崎アリアが帰ってきた。私はそういう好機を逃さない正確でな。」

「キンちゃんのフリをして私を動かして、キンちゃんと、アリアを・・・仲間割れ、させたの？」

「途中で護衛が増えるのは予想外だったが、転がる石のように、数日も経たずして、アリアはお前たちから離れた。全ては私の策通りに、な。」

牛若はバレずに配置に着いたようだ。さて、行きますか。

「これも、策通りか？てやんでえ!!」

「やあ!!」

俺と牛若が銀髪の少女にめがけ突撃しだした。魔剣と白雪が驚い

た顔をしている。予想外の展開だな？

「また貴様か!!イブキ!!貴様はいつも私の策を崩していく!!」

崩した憶えないんだけどな？

「白雪!!逃げる!!」

そう言つてキンジも突撃してきた。

「キンちゃん!?来ちゃダメ!!逃げて!!武偵は超偵に勝てない!!」

白雪が悲鳴のような叫び声をあげた。すると、魔剣は銃剣を俺と牛若、キンジに投げた。銃剣は俺と牛若、キンジの足元に刺さり、そこから白いものが広がり、俺と牛若、キンジの足に絡みついた。冷たい氷か。俺と牛若の足がゆかに縫い付けられた。キンジは体勢を崩し、コケた状態で床に縫い付けられてしまった。

「ラ・ピュセルの枷罪人とされ枷を科される者の屈辱を知れ、武偵よ。」

「そんな中二病みたいな技名とか恥ずかしくないのか?フリフリドレス大好きで、鏡に映ったフリフリドレス姿の自分を見て笑うコスプレ少女 魔剣ちゃん?」

「貴様なぜそのことを知っていい?フ、そんな戯言を・・・。」

そう言ってるけど魔剣ちゃん、顔が真っ赤ですよ?その後、魔剣ちゃんは深呼吸をして何とか真っ赤な顔を戻したようだ。

「我が一族は光を身に纏い、その実態は、陰の裏・・・。策士の裏をかき、策を得意とする。その私がこの世で最も嫌うもの、それは誤算でな。」

「じゃあ、これも魔剣ちゃんが嫌いな誤算かな?」

俺はそう言つて足に着いた氷を破壊し、俺はまた魔剣に突撃した。その時、地下室のライトが消え、周りが見えなくなった。クソ、目が慣れるまで何もできない・・・。

「・・・い、いやっ!!やめて!!なんにするの!?!うっ・・・。」

ジャラジャラという音と、白雪の悲鳴が聞こえる。目が慣れた時、魔剣は鎖で白雪を拘束させた終わったようだ。手際がいいな。すると魔剣は剣を抜きキンジのほうへ・・・。

「たあ!!」

ギヤリギヤリ

牛若が魔剣に攻撃し、魔剣もそれに対応。

「じゃあ、バトンタッチね!!」

パパパパ

ライトが灯り、後ろからアリアがきた。

「そこにいるわね魔剣!! 未成年者略取未遂の容疑で、逮捕するわ!!」

アリアがキンジを踏み台にし、キンジの前に出た。

「アリア!？」

「ホームズ、か」

魔剣は牛若の攻撃を振り払い、白雪を連れて去ってしまった。火薬棚の裏側へ行ってしまったらしい。その火薬棚の隙間から銃剣が合計6本が俺、牛若、アリアへ投げられた。アリアは刀を風車のように回転させ銃剣を弾き、俺と牛若は普通に刀で弾き飛ばした。

「何本でも投げてくれば?こんな物、バッテリーセンターみたいなモノだわ。」

アリアがそう言うと

ガチャン

扉が閉まった音がした。まずはリサの無事を確認しないと。

「二人とも、リサの回収をしてくる。」

近くにあった罫であろうピアノ線を切り、リサのもとへ向かった。

リサは無事だった。

「イブキ様!!お怪我はございませんか!？」

「ああ、俺も牛若も無事だ。急いでここを脱出するぞ。俺が魔剣ならここを海水で沈めて、ノコノコと上の階へ避難したところを狙う。」

俺がそう言った途端

ドーン

という音と、水が流れてくる音が聞こえた。完全にフラグでしたね。

「急ぐぞ!!リサ、牛若!!」

「はい!!」

出口へ向かおうとしたらエリアに会った。

「おい、キンジと白雪はどうした?」

「白雪が鎖で拘束されているからキンジは対応しているわ。」

「了解。」

俺達は上の階へ続く隔壁を開けた。エリアが先行し上階へ上がったが襲撃はなかった。この階には壁のようなコンピュータが大量にあった。俗にいうスーパーコンピューター室だ。ああ、このスパコンもきつとダメになるのか……。何億するのかな……。このスパコン……。

「いい?分散して探すわよ。あたしはこっちに行くから、あんた達はあつちとそつちから行きなさい。」

「リサは戦闘ができない。牛若、リサの護衛を。リサ、そこでじつとしているんだ。いいね?」

「お任せを。」

「イブキ様……。ご武運を……。」

俺は牛若とリサの頭を撫で、俺は言われた方向に駆けていった。

探し始めてから5分後、隔壁が再び開く音が聞こえた。キンジと白雪が上ってきたのだろう。その音がしてしばらくすると白雪に会った。しかし、この白雪何か変だ。胸の大きさが一回り以上小さい。それに胸の部分に何か金属板を入れているようだ。もしや……。

「あ、イブキ君。無事だったんだね。」

「ああ、ところでフリフリドレスに飽き足らず、巫女服まで着るとは。最近の流行りは巫女さんかい?」

それを言った瞬間、少しであるが表情が曇った。間違いねえ、魔剣だ。俺は日本刀で切りかかった。すると魔剣は諸刃の西洋剣で応戦をした。

「貴様……。また貴様か!!!」

「うわあ……。嫌われてる……。俺何かしたかなあ?」

「自覚がないのか!?!」

俺と魔剣は切り合ったが。少しして、お互いのにらみ合いになっ

た。

「で、魔剣ちゃんは本当の顔は出さないのかい？白雪を襲っているようであまり乗り気じゃないんでね。」

「私をその名で呼ぶな。人に付けられた名前は好きでない。」

そう言つて魔剣は特殊メイクをベリベリと剥がし、巫女服を脱いだ。銀髪に整った顔の女騎士がそこに現れた。

「へえ、じゃあなんていえばいい？」

「私は600年にも及ぶ、光の歴史を誇る一族の末裔。我が一族は、策の一族。聖女を装うも、その正体を歴史の闇に隠しながら・・・誇りと、名と、知略を子々孫々に伝えてきたのだ。私はその30代目。30代目・・・ジャンヌ・ダルク。」

あれ？Fateとクロスしてると思ってたんだけど・・・。あのジャンヌちゃんが子持ち？

「ジャンヌ・ダルクって聖処女と言われて、10代で死んだって聞いているんだけど？」

「我が始祖は危うく火に処されるところだったものでな。その後、この力を代々探求してきたのだ。」

そう言つて白い氷が俺のほうへ広がり、魔剣は俺へ切りかかった。

「というかジャンヌちゃんよ。お前、女騎士のコスプレしたまま戦闘とか、根っからのコスプレ好きかよ!？」

「違う!!これは戦装束だ!!コスプレではない!!」

え?どう考えてもコスプレでしょ?



意外と耐久無いな・・・

「おらあああ!!」

ギヤリギヤリギヤリ

ジャンヌと切りあいをしているが剣の腕は師匠ほどではない。それに氷という面倒な能力もあるが、気合で氷を割れるから言うほど面倒ではない。ただ氷漬けされて何も感じなくなってきたのが怖いんだけど・・・。さて、もう終わりにするか。

「らあ!!」

俺は刀に魔力を一杯に込めた。刀は異様なほど紅に染まり、俺はそのままジャンヌの西洋剣を文字通り切った。

ガラガラ・・・

ジャンヌの剣は二つに切れてしまった。ジャンヌはその事実にも然とした。

「・・・!?」

彼女の中では最大の「誤算」だろう。彼女はサファイアの瞳を大きく見開き、立ち尽くしてしまった。だが、その隙を見逃すほど俺は甘くねえ!!

「これで終わりだ!!ジャンヌ!!」

俺はそう言つて「4次元倉庫」から25ミリ機銃と平賀さん特製25ミリ機銃用ゴム弾の入った弾倉を出した。

「ちよつと待て!!武偵法9条を知らないのか!!」

「てやんでえ!!これなら逃げらんねえだろ!!それに俺は軍人だ!!」

ガチャ、ガチャツコン

イ・ウー戦だと、ブラドの耐久に手こずって、理子にも逃げられた。今度こそは確実に仕留める!!こいつなら何とかなるはず!!

「待て!!私が悪かった!!」

「イピカイエー・マザーファッカー!!」

ダンダンダンダンダンダンダン

撃たれたジャンヌは数メートルほどぶつ飛んだ。弾倉の半分ほど撃ち、いったん射撃を止めると、ジャンヌは動かなくなっていた。

「午後4時24分!!未成年誘拐の疑いと殺人未遂で現行犯逮捕だア!!」

俺は動かなくなったジャンヌのもとに向かい手錠をかけようとしたら……。あれ?息してない?え?念のため脈を計ると脈がない!?え?ブラドほどではないにせよ、それに近い耐久あると思つてただけど……。理子だつて戦闘して上空6〜7000メートル程度から飛び降りた後、海を10キロほど泳いだくらいタフなのに!!

「ちよつと待て!!死ぬんじやねえ!!」

「イブキ、助けに来たわよ!!つて、あれ?」

「なんだイブキ、もう倒しちゃつたのか?」

アリアと白馬モードのキンジが来たけど、そんなことより蘇生だ!!俺はジャンヌの甲冑を剥ぎ、上半身の服を破いた。

「ちよつと!!アンタ何やつてんのよ!!」

アリアが騒いだけど、気にしない。俺は人工呼吸と心臓マッサージを開始した。

結果、何とか息を吹き返したようだ。

「う、うう……。ん?ムー!!!」

「よかった……。何とかなつた……。」

なんかジャンヌは真つ赤になつているが気にしない。俺はそのままジャンヌに手錠をかけた。廻りを見回してみたら、キンジと白雪がなんか二人の空間ができてるし、アリアは顔真つ赤だし。

「アンタ!!いきなり何してんのよ!!」

「いやあ、今までイ・ウーと戦つてきて、大分タフな奴ばっかりだったから。それで確実に仕留めようとして25ミリ撃っちゃつたらジャンヌが死ぬ寸前で。」

「バカなの!?!そんな大口徑撃つたら普通は死ぬわよ!!というかジャンヌつて誰よ!!」

ああ、そういえば「魔剣」の名前は知らなかつたっけ?

「ああ、~~魔剣~~の名前がジャンヌ・ダルク30世だそうで。本人曰く、聖処女は何か火刑から逃れて、子を成したんだと。」

「そうなの。まあいいわ。あんた!!あたしは神崎・ホームズ・アリア!!」

ママに着せた冤罪、107年分はあんたの罪よ!!あんたが償うのよ!!」

アリアはそう言ってビシツとジャンヌに指をさした。当のジャンヌは

「わ．．．私にキスをするとは．．．貴様!!私の初めてだったんだぞ!!責任を取れ!!」

「人工呼吸だから!!死ぬ寸前だったんだからね!?原因俺だけど!!ノーカんだから!!ほらよく言うだろ、犬にかまれたと思えっ!!」

そんな混沌とした状態に。

「主殿!!リサ殿を守り通しました!!撫でてください!!」

「イブキ様!!無事でよかったです!!」

牛若とリサが合流し、さらに混沌と．．．。はあ、まず最初に解決しなきゃいけないことは．．．

「とりあえず、肌の感覚がないから病院行ってもいいですか?」

ジャンヌの氷のせいで肌の感覚がないから早く病院に行きたい。

ジャンヌをほかの人たちに任せ、俺は牛若とリサの頭をなでながら病院へ行った。診察の結果、俺は軽い凍傷になっていた。矢常呂先生は一日入院したら帰っていいと判断。神棚作って拝んだせいか、いつもより怪我の度合いが小さい。これは白雪のアドバイスのおかげか?いつかお礼しないといけないな。

地下倉庫が海水に浸ってしまった関係で、業者が弾薬置き場(仮)に置き、弾薬置き場(仮)から会場へ動かす仕事を地下倉庫係が担当することになった。．．．要は、係りの仕事の量がさらに増えた。流石に女の子一人でその仕事はかわいそうということ、俺は病院を抜け出し弾薬運びの手伝いに行った。なんか火野ライカの友人も手伝っていたから俺いらなかったかな．．．。

アドアシアードが終わった。

「I, d like to thank the person..」

不知火のボーカル、キンジのギター、そして罪袋&全身包帯姿の俺による踊りによって閉会式のアルカカタが始まった。誰だか知らないけど某同人音楽サークルの「帝都行動的自宅警備員共」の真似をし

て罪袋やろうぜ!! って言ったやつ<sup>の</sup>せいで、俺がその役を急遽やることになった。

「Who shoot the flash..!」

ねえ・・・、みんな普通に受け入れているけど、俺怪我人なんだよ。まだ入院していきやいけないんだけど、蘭豹先生にM500構えられて「やれ。」って言われたら、さすがに断れないよなあ・・・。ああ・・・天国のお父様、お母様、今日もいい天気です。

「who flash the shot like the bang bang bang a?」

曲が急にアップテンポになると、左右からポンポンを持ったチアリーダーの女の子達が舞台上が上がってきた。やつぱり思うんだ。この子たちいるんだから俺いらないよね？

「で、でもやつぱりこんなの・・・。」

舞台の袖でもじもじしている白雪を発見。まあ、いきなりチアリーダーやるのは誰でも恥ずかしいよな。

「白雪様。大丈夫です。似合っていますよ!!」

「あーもう!!ここまで来て何言ってるの!!ほら出る!!」

リサの応援と、アリアの蹴るような仕草によって白雪は舞台の中央に出てきた。白雪はセンターだ。白雪の隣にはアリアとリサがいる。運動神経がいいアリア、フォローのうまいリサ、みんなからの期待が厚い白雪・・・あれ、最高のチアリーダーディングじゃね？

「Each time we're in froooooont of enemies!! We never hide, sneak away!!」

俺はそんな華を見ながら必死に罪袋<sup>ビエロ</sup>を演じていたわけさ。

俺は案の定、衛生学部の面々に連行され、病院のベッドに縛り付けられることになった。おかしい、俺は自分の意思じゃなくて脅されてショウガナク舞台に立ったのに、俺が勝手に病院から抜け出したことになっている・・・。なんでだ・・・。

俺は退院し寮の部屋に帰る途中、知らない電話番号から電話があった。俺は不審に思いつつ出ると・・・

「もしもし?」

「イブキ? あんた、どこにいんの?」

「アリアだった。それにおかしいな、俺は今日退院するって伝えておいたはずなんだが。」

「どうだっていいだろ。それよりもこの前のももまん代早く払えよ。」  
「後でちゃんと払うわよ。それと、すぐに来なさい。女子寮、1101号室にいるわ。」

もちろん、俺はアリアにももまんを奢ったり、代わりに払ってはいない。ますます怪しい……。

「なんで女子寮に行かなきゃならねーんだよ。」

「うるさい!! あたしが来ると言ったらすぐ来る!! 来ないと風穴!!」

怪しさ満載だけど……行くか。

警戒度MAXで1101号室に向かうと、その部屋の鍵は開いていた。

「来たぞ、何の用だ。」

「遅い!! でも許してあげる。」

セーラー服のアリアが洗面所から出てきた。アリアが許すだど? ありえなくないが、今までの言動からするとそう簡単に許さないとと思うだが……

「こつちにきなさい。」

そう言われ、リビングに入ると、そこには足の踏み場がないほど様々な衣装がある。そういえば、アリアの胸が若干膨らんでいる。おかしい……あの空港の件のころから、ほとんど成長しないはずだ。それにこの大量の服……。もしや……。

「ところで……よくも逃げやがったな。俺が瀕死の重傷を負ってまで捕まえたのに、パアになりやがった。」

「はあ? 何のこと?」

「お前は俺に捕まりに来たわけじゃねえんだろ? だとすればなぜノコノコと現れた。……いや、司法取引か?」

「……」

「俺を殺そうとしたのは、まあ……お前の作戦のために止む無し、同

情の余地ありだけど・・・俺の問いに銃をもって答えた。それをしたのにも関わらず、俺の前に現れるたあ、どういう事だ。なあ、理子？」  
言った瞬間、アリアは苦笑した。

「やっぱり、イブキにはバレたか。」

そう言つて、特殊メイクであろうマスクをベリベリと剥がし、カツラを取ると・・・そこには理子が現れた。

「お前、胸あるのにアリアの変装とかだいたい無理あるだろ。」

「イブイブ!!それはセクハラだよ!!」

「で、敵対した奴の前に現れる理由つて言うのはなんだ?」

俺がそういうと理子は悲しいそうな顔を一瞬した後、ポーカークフェイスに戻った。

「イブキ、お前がいるといつも計画が破綻する。だから私の計画に関わるな。」

「俺って疫病神かなんかだと思つてねえか?」

「ナカジマプラザ、ジョン・F・ケネディ国際空港、ANA600便、学園島地下倉庫・・・これら全て、お前がいたせいで計画が破綻している。」

・・・おかしいな、説得力がある。

「オイオイ、前二つはマクレーのおっさんのせいだつて可能性もあるだろうが。残り二つは否定できないけどよ。」

「私はブラドから奪われたお母様の形見を取り返す!!そして、ホームズに勝つ!!その邪魔をするな!!」

・・・まだ勝つことに執着しているのか。

「ブラドをまだ恐れているのか?おm・・・」

「うるさい!!終わりだ!!」

そう言つて理子は部屋を出ようした。

「待て!!俺も一つだけ用がある!!」

俺は理子を引き留めた。そして理子がこっちを向いた瞬間。

ガツン!!

「ツ~~~~!!イブイブ!!何するの!?!」

俺は理子の頭を殴り、理子は頭を押さえ転がっていた。

「これで銃の件はチャラだ。気にするんじゃないぞ。変に遠慮されたらこつちがまいっちゃう。」

そう言っつて俺は理子を立たせた。

「これで終わり。もう、理子に同情もしない。友人としてなんかあつたら呼んでくれ。」

俺は理子の頭を一撫でした。

「なあに、友人がなんか困つてたら助けに行つてやつから、その計画とやらをやつて来い。じゃあな。」

俺はそう言っつて女子寮の1101号室を出ていった。

「友人と思われてなかつたら、大分恥かいたよな俺……。」

俺は自分の部屋の寮に戻ると、玄関に大量の靴がある。あれ？この部屋つて、俺とキンジだけだよな。

「ただいま」

俺がそう言っつてリビングに入ると

「あ、イブキ様。おかえりなさいませ。」

「イブキ君おかえりなさい。」

リサと白雪が夕飯を作つてた。

「イブキよ。戻つたか。」

「おかえりなさい。イブキ。」

「主殿!!おかえりなさいませ!!」

「帰つてきましたか。お帰りなさい。」

テレビを見ていたであろうネロと牛若、ニト。観葉植物やベランダにある植物の世話をしていたであろうエル。おかしいな、やけに順応してる……。

「イブキ様!!退院祝いで御馳走を作りますからね!!」

リサは張り切っているけど……。あれ？君たち、ボディーガードの仕事は許可したけど、終わった後も家にいいって言つてないよ。

「ただいま」

キンジとアリアが帰ってきたようだ。

「おい、キンジ!!なんでまだいるんだ!？」

これだけでわかったのだろう。キンジは疲れていそうな顔を上げて

「言っても出ていかなくてな・・・。」

「納得したわ。っていう事は、俺、ベッドじゃなくてハンモックで寝ろと?。」

「そういう事になるわね。」

・・・マジか。あれで寝ると腰が痛くなるんですけど。っていうか原因の一人、何偉そうに言いやがる。

「俺もソファア―で寝てるんだ。諦めてくれ。」

布団・・・買おうかな・・・。

「イブキ様。夕食ができました。」

「ありがとう、リサ。」

俺は今日もハンモックで寝るであろうことを忘れるために、リサの手料理をやけ食いした。



狼に轢かれるのはないわ・・・

さて、我が部屋に大量の住民が住むことになった翌日。一般授業が終わった後、理子が教室に来た。

「たっだいまぁー!!」

いつも通りのフリフリ制服で現れた理子にわぁー!!とクラスの皆はすごく盛り上がった。理子Ⅱ武偵殺しということをみんな知らないからだ。武偵少年法によって未成年の武偵が犯した犯罪の情報は公開されない。全く、完全に悪法だろ。ついでにクラスの認識では4月からアメリカで依頼を受けて、昨日帰ってきたということになっているようだ。

「みんなー!!おっひさしぶりー!!りこりんが帰ってきたよー!!」

理子は教壇にアがりくるつと一回転のあと決めポーズ、するとAクラスの一部が理子に集まる。ついでに腕を振りながら「りこりん!!りこりん!!」と言っているやつまで・・・。

「みんな寂しかったかなー?」

(。▽。 ) ○ミ。りこりん!りこりん!

・・・帰ろう。このクラスより部屋のほうが落ち着く。

りこりん事件の翌日、中間テストが行われた。午前中にやった一般科目については前世からやっているし楽勝であった。そして昼休みを挟み、午後はスポーツテストに。やることは普通の50メートル走や反復横跳びなどのテストだけど・・・試験監督やっている先生たちがおかしい。

香港マフィアの愛娘、「死ねや」が口癖、試験監督中もM500と斬艦刀を振り回す蘭豹先生。この時間もタバコのようなものを吸ってラリっている綴先生。背後に立ったからと言って、生徒を手刀で骨折させた南郷先生。声は聞こえているけど姿が見えないチャン・ウー先生。・・・こいつらと比較すれば、教師をやっている師匠、エジソン、ベオウルフが普通に見えるから驚きだ。

「イブキ、この成績はどういう事だ。手を抜いているだろう。」

師匠が俺のところに来て成績について尋ねてきた。

「イヤイヤ、魔力使ったら不味いくらいはわかりますよ。それにある程度手抜かないと部活の勧誘があるんですよ。」

「それにしてもこの成績はなかるう。最近修行をしていなかったせいかな、何度も病院へ入院していると聞いている。たるんでいるのではないかな?」

なんか嫌な空気に……。するとベオウルフがこっちに来た。

「最近、イブキに構ってもらえないからって機嫌が悪いんだ。たまには修行に付き合ってやれよ。あと、俺もたまには殴り合いしようや。ここの生徒は教えがいはあるっちゃあるが、楽しめる奴はほとんどいなくてよ。」

そう言った瞬間、ベオウルフに槍が飛来……。

「アブねえ!!じゃあな!!」

流星は叙事詩『ベオウルフ』の主人公、何とか槍を躲し逃げていった。

「久しくやっていなかったからな、趣向を凝らしてあれこれ用意してみた故、一歩間違えば命は無いと思え。」

俺は師匠に首根つこをつかまれた。

「ちよつと待つて、顔赤くして言うセリフじゃないですよ!?!ちよ、エル、ネロ助けて!!」

そこに偶々通りかかったエルとネロに助けを求めたが……。

「そうだね、最近入院も多かったし鍛えなおしたほうがいいんじゃないかな。」

「俗に言う☒☒でえと☒☒というものではないのか?」

ネロさん、なんでそう思いますか!?

「さて、行くか。最近新しい女もできたしな。」

「いや!?!それ関係ありませんよね!?!」

修行が終わり何とか部屋に帰ってきたとき、エルがニコニコしながら俺に近づいてきた。

「イブキ、一緒にこの任務を受けてほしいんだ。」

そうやって紙を俺に差し出した。

「ん?コックと庭師の任務?」

紙にはコックと庭師の募集があった。

「うん、二週間程度で2単位だね。」

「なんで俺なの？コックならリサのほうが向いているんじ……」

「僕と一緒にするのは嫌かい？」

そう言つてエルは瞳孔が開いた。

「ま、待って。ほら、俺はエルと一緒にやりたいけど料理そこまでうまくないし、ね？」

「大丈夫さ。条件は肉の串焼きができることだけだそうだよ。」

……確かに単純な料理だけどさ、単純だからこそ難しい物があるんだぞ。それでいいのかよ。

「わかった。いつからやればいいんだ？」

「四日後からだつて。衣服は向こうで支給されるそうだよ。じゃあ、僕は申請してくるね。」

そう言つてエルは瞳孔を戻し、ニコニコしながら部屋を出ていった。だいぶ嬉しがつているな。

次の日、おれは救護科棟の近くにいた。矢常呂先生の定期健診があるためだ。俺はあの誤診の後、一カ月に一回定期検診を受けるよう矢常呂先生に言われた。先生曰く

「サボつたらスカサハ先生か、ベオウルフ先生に連れてきてもらうから。」

おかげでサボれなくなりました。ついでだ、リサも救護科に入ったから、リサの様子でも見ようかなうなんて歩いていると

ガシャーン!!

という音がした。俺は走つて音のしたほうへ行くと、割れた窓ガラスと、茂みに隠されている武藤のバイクを見つけた。武藤がのぞきに失敗した？それにしても銃声が聞こえないけど……。俺は不思議に思い、部屋を覗くと……。めちやくちや大きな狼がこつちに突っ込んできた。

「は？つてま、グハツ!!!!!!」

体重が100キロを優に超える狼が俺を跳ね飛ばし、どつかへ逃げてしまった。チクシヨウ胸が特に痛い……。肋骨でも折ったか？

「追いなさいキンジ!!先生はあたしたちが手当てするわ!!」

「使えキンジ!!その茂みの向こうにある!!」

そういう話声が聞こえた後、キンジが窓から飛び出してバイクにキーを差しこみ、キックスターターでエンジンをかけ始めた。

「よお、キンジ。狼なら向こうへ行つたぞ。」

「わかった・・・ってイブキ!?お前何してるんだ!」

「ああ、ちよつと狼に轢かれてな。全くついてねえ。」

そんな話をしていたらレキが下着姿でバイクに二人乗りをしてきた。

「レキ!?戻れ!!防弾制服を着ろ!!」

キンジが焦つたようにレキに言う。流石に下着姿のレキと二人乗りとか噂になつたら最悪だよな。

「あなたでは、あの狼を探せない。」

まあ、レキの目じゃないときついものがあるかもしれない。

「おいレキ、これ着ていけ!!」

俺は制服の上着をレキに投げ渡した。

「ありがとうございます。」

そう言つてレキは俺の制服に腕を通した。

「しつかり捕まつてろよ!!」

キンジがそう言つた後、バイクは加速し始めた。まあ、あの二人ならスタジオ・シブリの犬神みたいな狼をちゃんと処分してくれるだろう。・・・うん、とりあえず検診と、治療を受けに行くか。

矢常呂先生の診断の結果、あばら三本の骨折と打撲だそうだ。今日明日と入院すれば問題はないらしい。・・・まあ、ガトリングよりはよかつたと思おう。そうじゃないとやってらんねえ。

俺は診断の後、衛生科と救護科の生徒達十数人によって速攻ベッドに縛られた。俺は病院抜け出しの常習犯であるための措置であるらしい。おい、俺が何かしたか?

リサの説得のおかげでベッドに鎖と手錠、足枷での固定はなくなり、病室（牢屋の間違いでは?）に軟禁になった。

次の日、リサから朝食と弁当を扉についている小さな窓から届けら

れた。朝食は御飯、納豆、サケの切り身、漬物、味噌汁だった。相変わらずうまい飯を作ってくれる……。

昼のチャイムが聞こえ、楽しみの弁当でも開けようとした時だった。

「抜け出しの常習犯だから牢屋に入れられているのか。情けないな、イブキ。」

俺は声が出した方向を見ると、そこには小さな監視用の窓からこつちを覗いているジャンヌがいた。

「よお、学生のコスプレか？やけに似合っているじゃないか。」

ジャンヌは東京武偵高の制服を着ていた。まあ、司法取引だろう。だけど、こいつをからかうと面白い。

「うるさい。私とて恥ずかしいのだぞ？……未婚の乙女はみだりに足を出すものでない。」

ジャンヌは顔を赤くし、そっぽを向きながら言った。

「俺は似合っていると思うけどなあ。そういえばフリフリした奴がいんだっけ？それなら理子かりサに言えば何とかなるだろ。今度頼むといいぞ。イ・ウーでは制服は必要ないよな。」

ジャンヌはキレイな銀髪にほりの深い顔、すらっとした背、これだけの素材があれば何でも似合うだろうに。

「ほお、イ・ウーのことを知りたいか？」

ここに來るってことは、イ・ウー関係のことを教えようとしている、それぐらいしか考えられんのだけだな。まあ、乗ってやるか。

「まあな。ある程度は知ってるが、情報源が信用できなくてな。」

この世界は、歴史も変わっているし、他作品ともクロスしている。それに記憶もあいまいだしな。

「イ・ウーは知っているだけで身に危険が及ぶ、国家機密だからな。計画を破綻させ、捕まえ、しかもファーストキスさえ奪った貴様に情報を与え、破滅させてやりたいとは思いますが、何もかも話すわけにはいかんだ。」

「おい、ファーストキスの件は事故だ。ノーカンだ。……司法取引に、情報次第でお前を狙うやつもいるんだろ？言えないことは言わなく

ていいぞ。」

こいつ、まだ根に持つてやがる……。

「まあ、答えられる範囲で答えてくれ。イ・ウーは伊号潜水艦の伊伊とUボートUがもとだよな。」

「そうだ。」

「イ・ウーではお互いが生徒であり先生だ。互いが得意なものを教えあう。例えばお前は作戦立案を、理子が変装術を……ってどこか？」

「その作戦立案もお前のせいで破綻してるがな。」

ここまででは合っているか。

「若干、イ・ウーからは話がそれるが、理子はイ・ウーのナンバー2のブラドによって監禁されていた。あいつはブラドから自由を得るために強くなるうとした。合っているか？」

すると、ジャンヌは驚いた顔をした。

「イブキ、貴様よく知っているな。そうだ、リュパン家は理子の両親が死んだあと没落した。理子は養子にとるど騙されルーマニアにわたり、長い間監禁されたのだ。」

良かった、俺の知っている通りか。ブラドが人間に擬態できる能力とか持っているって記憶にあるけど、それ以上はジャンヌも言えないか。

「ジャンヌ、ありがとな。情報が合つてほつとしたよ。」

「そういうえば、理子を護送車から脱走をさせた後、寝言でゴメンナサイ……イブキ……ゴメンナサイと散々言っていたが、何やった？」

「いや、俺やられたほうなんですけど……。つて、テメエか!!護送車襲撃した奴!!俺が瀕死になってまで捕まえたのに逃がしやがって!!俺の努力と苦勞を返しやがれ!!てやんでえ!!」

そういうと、ジャンヌは俺を馬鹿にしたような目で見た。

「よかったではないか、責任も取らずに乙女のファーストキスを奪ったのだ。まだ足りないくらいだろうか？」

この野郎……。俺は監視窓に手を入れ、その手でジャンヌを顎をクイツと持ち上げた。

「なら、俺がファーストキスの責任を取るって言ったらどうする、ジャンヌ？」

そう言ったら、ジャンヌは顔が再び赤くなった。少し経った後、ジャンヌは俺の手を払い、窓から拳銃を入れて発砲しだした。

ダンダンダンダンダンダンダンダンダンダンダン

「ふ、ふぎけているのか貴様は!!」

「ちよつと待て、俺丸腰、丸腰だぞ!!」

防弾制服を着ていたおかげで、貫通はしなかったからよかった。

「貴様のような醜男などいらん!!」

そう言ってジャンヌは怒って帰って行ってしまった。あんな歯が総入れ歯になりそうなセリフは俺に合わないけどさ・・・醜男はないよ。俺だって傷つくんだぞ。

「ああー！！！！弁当が!!!」

ジャンヌの銃撃のせいで、弁当が見るも無残な形になってしまった。ただ、幸運なことに料理があまり床にこぼれていないのが救いか・・・。ただ中身はシェイクされた状態になっていて、何が入っていたのが区別ができない状態になっていた。そんな状態でもおいしかったです。

空港の時より嫌な予感がする・・・

ジャンヌ発砲事件から数時間後、俺は牢屋から解放された。

「ただいまあゝ」

「おかえり、イブキ。」

俺が部屋に帰ると、玄関にエルが立っていた。

「イブキ、明日だから。」

もしかして、確認のためにずっと待っていた？ いや、そんなことはないよな。

「わかってるよ。神奈川だっけ？」

「そうだよ。」

エルの目が輝いているように見える。

「神奈川の紅鳴館だっけ？ ちゃんとルート調べておくから。」

「頼むよ。」

エルはそういうと俺の手をつないでリビングに連れて行った。そこまでうれいのですかエルさん。

リビングに入ると、キンジとアリアが明日の予定を相談していた。なんか、「執事が・・・メイドが・・・」って聞こえるけど・・・。そういうば原作だと、執事とメイドをどこかでやるんだっけ？ ま・・・まあ、まさか紅鳴館じゃないだろう。きつとそうだ、そうに違いはない。

次の日、キンジとアリアは多めの荷物を持って何処かへ出かけてしまった。何でも理子と一緒に任務らしい。きつと理子の作戦とやらが始まるのだろうか。

「イブキ、そろそろ行こうか。」

エルがポストンバッグを持って俺に言ってきた。

「じゃ、俺らも行きますか。」

俺は車のキーを手の中で回しながら、もう一方の手で荷物を持った。一応、肉の串焼きの作り方をネットで調べ、リサにマンツーマンで教わったから大丈夫なはず・・・。

例の紅鳴館は横浜の郊外にあるらしい。で、俺は指定された住所に来ているんだが、何かおかしい。そう、そこはうっそうとした森なの



だ。これ絶対ふざけてるよね。

「エル？本当にここか？」

「言われた住所はここなんだけど・・・あれ？アリアとキンジがいる。」  
エルの指さした方向を見ると、そこにはアリア、キンジ、そしてキンイチさん（女装Ver）がいた。え？なんでキンイチさん？ってよく見ると胸がでかくなってるし、厚底靴も履いてる・・・。キンジもあまり気にしてないから、これは理子が変装でもしているのか？

俺は門の前に車を止め、エルと一緒に車を出した後、キンジ達に話しかけた。

「よお、まさかここで会うとはなあ。ところでここ、紅鳴館でいいのか？」

「あ・・・ああ。なんでイブキがいるんだ。」

キンジが驚きつつも答えてくれた。

「いや、俺とエルがここでコックと庭師の任務があつてな。もしかして、最近執事だ〜メイドだ〜なんていつてたけど、ここでやるのか？」  
俺達は門から玄関まで歩きながら話していた。

「まさか一緒の場所で任務とはなあ。こんな偶然なかなかないな。」

「コックはともかく、庭師はここに必要ね。」

うっそうとした森、茨が絡まっている鉄串の柵、薄気味悪い霧、時々横切る蝙蝠・・・。これは必要ですわ。

「何でここにイブキがいるんだ!?なんでまた私の計画に関わる!？」

キンイチさんに化けている理子が苦虫をこれでもかというくらい噛んだような顔をして言った。

「イブキ。そんな約束をしていたのかい？」

エルは首をかしげながら俺に聞いてきた。

「いやいやいや。俺もさ、さすがにあそこまで言われたら関わろうと思わなかったよ!!でも、その肝心の計画を知らないんだぞ!!まさか一緒に紅鳴館で仕事するなんて思いもしなかったもの!!」

どこで何やるって聞いてないから、関わるなって言われても難しいものがあるぞ。それに原作知識なんて、あてにできない and 忘れてきてるしで使えないし。

屋敷の前に着いた。玄関もまた気味悪い形をしている……。

「はあ、計画が破綻しそうな気がする……。いいか!? イブキ!! 計画に絶対関わるな!？」

理子は俺に詰めよってきて言ってきた。

「あ、あんた。さすがにそこまで言わなくてもいいんじゃないの? イブキもあんたのお母様の形見を取り返す計画に入れたらいいじゃない。」

ナイス、いい助け舟だアリア。そうだもつと理子に言っつてやれ!!

「ナカジマプラザ、ジョン・F・ケネディ空港テロ事件、三角諸島沖に北方漁船襲撃事件、それに武偵殺しに魔剣……。これら全てイブキのせいで計画が破綻している。それでも関わるなと言うなというのか?」

一同、シーンと静まり返ってしまった。……。俺そこまで疫病神と思われてるのかよ!?! まあ、確かに言われると否定できないけどさ。

「いやね、理子のハイジャック以外は全部偶然だからね。ほら、安心して。」

「でも、今回も偶然一緒に出会ったんでしょ。」

アリアさん。それいつたら終わりよ……。

ガチャ

玄関のあく音がして、理子は急いで猫をかぶった。

「初めまして。正午からで面会のご予定をいただいております者です。本日よりこちらで家事のお手伝いをさせていただく、ハウスキーパー2名を連れてまいりました。」

「こんにちは。お聞きかと思いますが、庭師とコックを一時的にさせていただくものです。」

俺と理子がそう言っつてドアを開けた人物を見ると……。そこには小夜鳴先生がいた。は?なんでここにいるんだ?

「い、いやー。意外なことになりましたねえー……。あははー……。」

小夜鳴先生は笑っていたが、瞳の奥底では「計画通り」とでも言いそうに見えた。きつと気のせいだと思うが……。

俺たちは小夜鳴先生に連れられて館の中に入った。館のホールに

は「狼に槍(?)」の模様が描かれた旗が飾られていた。家具は全体的に年代物、しかも色褪せていると来た。これは気味悪い。

「いやー、武偵高の生徒さんがバイトですかあ。まあ正直な話、難しい仕事ではないので誰でもいいと言えればいいんですが……ははっ。ちよつと、気恥ずかしいですね。」

小夜鳴先生は腕にギプスをつけていた。何でも、救護科棟に突撃してきた狼にやられたそうさ。そして、俺達をソファアに座らせた後、小夜鳴先生は座った。

「小夜鳴先生、こんな大きなお屋敷に住んでいたんですね。びっくりしちゃいましたよ。」

キンジが努めて平静を装って言っているけど、動揺してるのバレバレだぞ。

「いやー、私の家じゃないんですけどね。私はここの研究施設を借りることが時々ありまして、いつの間にか管理人のような立場になってしまっていたんです。ただ……私はすぐ研究に没頭してしまう癖がありますからね。その間に不審者に入られたりしたら、あとでトラブルになっちゃいますから……むしろ、ハウスキーパーさんにコックさん、庭師さんが武偵なのは良いことなのかもしれないですね。」

小夜鳴先生は予定通り、俺達を雇ってくれるようだ。でも、なんか俺の勘が怪しいって言うてるんだよなあ。あのジョン・F・ケネディ空港であったグレン少佐の時より悪い感じがする……。

「私も驚いております。まさか偶然、学校の先生と生徒だったなんて。」

そういえば理子、お前、派遣会社の人間を装っていたんだな。

「ご主人様がお戻りになられたら、ちよつとした話のタネになりますね。まあ、この4人の契約期間中にお戻りになられれば……のはなしですが。」

あれ？小夜鳴先生って管理人(仮)なんだよな。ということは主人であるはずのブラドが帰ってきたら、いない間に何があったかの報告くらいはするはず……。なのに、なんで契約期間中に帰ってこないと、話のタネにならないんだ？一回ヴラドに会ったが、しゃべるのが

嫌い or 無口ではないはず……。これまた怪しいな。

「ご主人はいつお戻りになられるのですか？」

理子がさりげなく確認したところ、

「いや、彼は今とても遠くにおりまして。しばらく帰ってこないみたいなんです。」

俺はこの時、小夜鳴先生の答え方がよそよそしく、そして俺達と自分に言い聞かせるように言ったように感じた。やっぱり怪しい……。  
「ご主人は、お忙しい方なんですか？」

理子がさらに尋ねる。

「それが実は、お恥ずかしながら……。詳しくは知らないんです。私と彼はとても親密なのですが……。直接話したことが無いものでして。」

と苦笑いをして小夜鳴先生は言った。絶対に怪しい。親密なのに、直接話したことがない。直接話したことが無いということは、会う事すらない or ほとんどないということだ。それなのにヴラドは小夜鳴先生に屋敷の管理をさせている。絶対にありえない……。さて、話さなくても屋敷の状態が分かるのなら、直接話さなくてもいいかもしれない。だけど、どうやってわかるんだ？監視カメラの類は一切なかった。じゃあ、どうやって屋敷の情報に分かるんだ？カット。

これ以上考えると迷宮入りしそうな感じがしたため、これ以上の考察はやめた。まあ、とりあえず分かったことは、面倒ごとにまた巻き込まれた、という事か……。神棚に捧げてあるワンカップを四合ビンの高級酒に変えたほうがいいかな……。そういえばあのワンカップ、蓋開けてないのに一週間で空になってただけど……。カット。  
理子が去った後、俺達は二階へ案内され、部屋をあてがわれた。「すいませんねえ。この屋敷の伝統といいますかルールで、ハウスキーパーさんとコックさん、庭師さんは全員制服を着ることになってるんです。昔に仕立てられた制服がそれぞれの部屋にあって、サイズも色々ありますから、選んでみてくださいくださいね。仕事については、前の人達が簡単な資料を台所に置いておきましたから……。適当にやりちゃってください。」

そう言つて小夜鳴先生は笑うが、瞳の奥ではやはり笑っていない。「で、申し訳ないのですが私は研究で多忙でして・・・地下の研究室にこもり気味の生活をしてるんです。ですから、お二人と遊んだりする時間はあまりとれないんです。ほんと、すいませんねえ。」

地下で研究・・・ようは何やつてるか、こつちは小夜鳴先生に気づかれず何やつているかを知るとは難しいか・・・。

「暇なときは・・・そうですねー・・・あ、その遊戯室にビリヤード台があるんですよ。それで遊んで結構です。誰も使つてないから、ラシヤもほとんど新品なんです。」

そう言つて、小夜鳴先生は一階ホール脇にある薄暗い遊戯室を示した。

「それじゃあ早速ですが失礼します。夕食の時間になったら教えてくださいねー。」

そう言つて小夜鳴先生は地下室へ行つてしまった。

「なあ、エルさんや。」

「どうしたんだい、イブキ。そんな口調で。」

「面倒なことに巻き込まれたねえ。」

エルは首をかわいらしく傾げた。エルは面倒ごとに巻き込まれたつて気づいてないな。・・・まあ、ただの考えすぎで終わることを祈ろう。俺たちはあてがわれた部屋に入り、制服を着ることにした。

俺はコックなため、普通の白いコックの服だった。キンジやアリアも、普通の執事とメイド(?)さんだった。廊下でお互い、似合っているなあ、とか、さすがにそれはないわ、など話していると、エルが部屋から出てきた。

「似合っているかな?」

そう言つてエルはくるつと一回転。でもその服装は・・・「紅鳴館」と書かれた紺のハッピ、紺の乗馬ズボン、地下足袋だった。

「・・・うん・・・似合ってるよ。」

「そうかな。」

そう言つてエルはにっこりと笑顔を見せた。誰だよ!!この制服に

したやつ!!!

……)まで怪しいとか逆にすごいな……

俺達がこの紅鳴館に到着してから七日が過ぎた。うん……完全に暇。俺の仕事は小夜鳴先生に朝と夜に肉の串焼き(これだけでいいらしい、米食えよ!!)を出す、あとキンジ、アリア、エルにご飯(朝昼夜の三食)を作るそれだけ。

エルは時間があるから、ということでも鬱蒼とした森に間違えた庭を日本庭園に変えて時間を潰している。ここ洋館なのに、なぜ日本庭園なのかと尋ねたところ、

「日本庭園のほうが、植物たちが伸び伸びできていいからね。」

だそうだ。小夜鳴先生に許可を取ったので木を伐採し、石を置き……と結構楽しんでる。小夜鳴先生は最初冗談だと思っていたみたいだが、翌日木を伐採し、池を作っているところを見て苦笑いしていたのは見間違いではないと思う。

キンジとアリアは作戦のために信用を得ようとしているのか、広い館を隅から隅まで掃除、洗濯をしている。なので、この館で俺だけが暇なのだ。

そこで俺は暇な時間、この屋敷のことや小夜鳴先生のことを調べていた。すると、色々なことが分かってきた。到着してから五日目までは、監視カメラの類は地下への廊下にしかないことが分かった。(六日目以降から監視カメラが増えた。)また、小夜鳴先生は京大卒と聞いていたが京大に問い合わせたところ、そのような卒業生はいないと返答された。なので、小夜鳴先生に変装し役所で戸籍をもらってきて、出生地の役所に出生届があるかどうか聞いたところ、

「小夜鳴 徹 さんの出生届はありませんね。」

と帰ってきた。

怪しさいっぱいである。

これらの材料が集まった昨日の夜、ある仮説がひらめいた。「小夜鳴IIブラド ではないか?」という仮説だ。

小夜鳴先生の話から、ブラドはこの横浜の郊外の屋敷にはある程度は戻ってくるようだ。だが、あの巨体の毛むくじやらがここを出入り

すればSNSなどで話題になるのではないか？車で隠れて館に来て  
いるならバレないが、屋敷のタイヤ痕を調べると俺の車と小夜鳴先生  
のクラウンのタイヤ痕しかなかった。(後日、小夜鳴先生に聞いたと  
ころ、今までの人たちは電車で通勤しているらしい) だけど・・・も  
し「小夜鳴Ⅱブラド」ならお互い話したことがないのも分かる、会っ  
たことがないのも分かる、すべてが説明つく・・・。人化はどこかの  
やつに教えてもらったとすれば説明がつく。・・・面倒なこと  
になった。

「イブキ、できたか？」

「ん？ああ、後はわさび擦って、肉炙るだけだ。」

「イブキ、深刻そうになにか考え事してたみたいだけど・・・相談にで  
も乗ろうか。」

キンジに心配されるほど考えていたか。

「いやあ・・・こいつあ面倒なことに巻き込まれたなってな。」

「盗人計画に巻き込まれるのは、災難だよな。」

「まったくだ。あとでこいつで一杯やるかい？」

俺はそう言って、一升瓶を持ち上げた。

「イブキ!! 武偵は女、酒、毒に気をつけろって教わってないのか  
!?!それに俺らは未成年だろ!!」

キンジは焦ったように言った。

「まあまあ、冗談だつて。あと五分もしないでできる。もうちよい  
待ってくれ。」

俺はそう言ってキンジを追い払った。武偵は大変だな、酒の一杯に  
も気をつけなきゃいけないなんてな。

実は未成年の軍人(正確には軍属)は16歳以上であれば軍医の診  
断次第で飲んで良いことになっている。(酒の味も知らずに死ぬのは  
かわいそうだろう、という事らしい) だけど買うことはできない。だ  
から、最近ご無沙汰だったんだけど、この台所には沢山の酒が置いて  
ある。引き継ぎ書には、「台所にある物は好きに使っていい」と書いて  
あったために色々と拝借している。(俺が死んだらもしかしたら返  
す)「マツカラン1926 60年物」と「グレンフィディック195



5 55年物」のウイスキーを見つけた時は驚いたね。前者は600万、後者は810万もするんだ。今、旅行中のコックさんに電話したら

「やけに古いビンだったから捨てようと思ってたんだ。よかつたらあげるよ。」

これを聞いた瞬間、俺は急いでバックの中にしまった。後日、ゴミ箱の横に置いてあった「1762 Gautier Cognac」（三世紀前のコニャック、一本650万）を見つけた時は、前のコックは全く知識が無いんだな、なんて思ったつけ。

「キンジー、運んでくれー。」

俺はキンジを呼び、小夜鳴先生以外の夕食を作り始めた。

最終日の夕方、キンジとアリアは作戦を実行したようだ。アリアが小夜鳴先生と外で話している間にキンジが盗むということをしていった。二人はその作戦が終わった後、二人は即座に帰った。おい・・・小夜鳴先生が帰っていいよって言った瞬間、すぐ帰ったよこいつら・・・俺とエルもキンジ達が帰った後、荷物を片付けて、車に乗った。

「いやあ、助かりましたよ。ありがとうございます。」

小夜鳴先生がワザワザ見送ってくれるようだ。

「すいません。串焼き作るだけでこんなに（お酒を）もらっちゃって。」俺は結局、20本くらい酒を頂戴した。いやあ、あんな高級酒をありがとうございます。

「いえいえ、（給料は）これくらいが正當なんですから。」

「そうですか？では（酒を）有難く頂きます。では、失礼します。」

俺とエルを乗せた車は、洋館と日本庭園がある敷地から出ていった。

敷地から出て少しした後、GPSでキンジ達がどこにいるかを調べた。キンジ達が帰るときに、俺は二人に発信機を着けておいた。紅鳴館を昨日調べたところ、警備はさらに厳重になっていたが、不自然に警戒していないところがあった。これは絶対怪しい。こいつはワザとその形見とやらを盗ませようとしているに違いない。ということ

は、あの3人が危なくなるだろう。それらのことから、俺は二人を追いかけることにした。

「イブキ、何しているんだい？」

「エルがカーナビを覗いてきた。」

「いやあ、実は……」

「おれはここで初めてすべてを説明した。」

「……というわけで、二人を追おうと思っているんだ。」

「イブキ……なんでもっと早く、僕に教えてくれなかったんだい？」

「エルが頬を膨らまし、俺に言った。」

「いや、今も確信はしてないよ。あくまで保険だよ保険。無駄な気遣いでよかった、で済めばバンザイですよ。あとね……もしかしたら、そいつがガトリングを俺にぶつ放した原因のやつかもしれないからね……。」

「そう言った瞬間、車の中に殺気が一気に充満した。」

「フッフッフ……。」

「……エルさん。こうなるかもしれないと思っって言わなかったのよ。それにあくまでも憶測だからね？」

すると、エルは殺気を出さなくなった。

「さて、キンジ達は横浜に向かっているようだな。」

俺は横浜へ車を走らせた。

キンジ達のGPSの移動が止まった。止まった場所はランドマークタワー。

「人目がないところは……屋上くらいか。じゃ、エル一緒に行こう。」  
「わかったよ。」

「エルはうれしそうに俺の手を握った。あれ？俺、手出してないんだけど……。」

屋上にはキンジとアリア、理子がいた。

「この十字架はただの十字架じゃないんだよ。これはお母様が、理子が大好きだったお母様が☒☒これはリュパン家の全財産を引き換えにしても釣り合う宝物なのよ☒☒って、ご生前にくださった……一族の秘宝なんだよ。だから理子は檻に閉じ込められてた頃も、これだけは

絶対にとられないように・・・ずっと口の中に隠し続けてきた。そして・・・」

理子の髪はまるで意思を持つように動き始めた。

「イブキ、彼女が原因かい？」

「いや、理子じゃない。」

俺がそう言った瞬間

バチツ!!!

雷のような音が聞こえた。音が鳴った後、理子は倒れ、後ろに小夜鳴先生がいた。

「遠山君、神崎さん。ちよつとの間、動かないでくださいね。」

小夜鳴先生は拳銃を抜き、倒れた理子へ銃口をむけた。これは・・・当たりか？

「前には出ないほうがいいですよ。お二人が今より少しでも私に近づくると襲うように仕込んでありますので。」

小夜鳴先生の後ろから狼が2匹出てきた。これは面倒だな・・・。

「影を薄くする技」は匂い誤魔化せないぞ。

「イブキ、あいつかい？」

エルが訪ねてきた。

「まだ確定じゃないけど、黒に最も近い灰色。原因の姿は2本足の獣だけど、もしそいつが人化できるなら確定だ。エル、いつでも襲撃できるように配置に着こう。」

エルは小夜鳴先生の正面に隠れて待機、俺は後ろ側へ移動し「影の薄くなる技」を使った。

「教育してあげましょう、4世さん。人間は、遺伝子で決まる!!優秀な人間は、いくら努力を積んでも・・・すぐに限界を迎えるのです!!今のあなたのようにね!!」

そう言つて小夜鳴先生は理子の胸元から十字架を奪い取った。そして明らかに偽物であろう安物の十字架を口に押し込む。俺はその瞬間、狼を襲った。狼たちは、匂いはあるが姿が見えないせいか狼狽していた。おかげで楽に気絶させることができた。

「い、いい加減にしなさいよ!!理子をいじめて何の意味があるの!？」

アリアが叫ぶ。チクシヨウ!!小夜鳴!!ブラドの証拠さえ掴めれば理子を助けられるのに!!

「絶望が必要なんです!!彼を呼ぶにはね。彼は絶望の詩を聞いてやってくる。この十字架も、ワザワザ本物を盗ませたのは・・・こうやって小娘を一度喜ばせてから、より深い絶望に叩き落とすためですね。ついでに☒☒不死の英霊☒のおかげで計画が破綻したところを楽しもうと思っていたんですが、彼は何もしませんでしたね。全く見当違いです。・・・まあ、これだけでもいい感じになりましたよ。」

あの野郎、俺は計画を破綻させるための人間かよ!!今までののは偶然だぞこの野郎!!小夜鳴先生がまたしゃべりだした。

「遠山君、よく見ておいてくださいよ・・・」

小夜鳴が話に集中している。俺はその隙に理子を回収した。

「理子!!大丈夫か!!」

俺が「影の薄くなる技」を解き、話しかけた瞬間、理子は目を思いっきり開け驚いた。

「イ・・・イブキ・・・どうしてここに・・・」

「小夜鳴が怪しいと思って念のためついてきたらこうなってたんだよ!チクシヨウ!!」

そう言っただけは理子の脈を計ったが正常・・・よかった。俺は小夜鳴のほうを見た。まだあいつしゃべってる・・・

「脈は正常だけど、後で病院行けよ。それにしても、あんな猛獣用のスタンガン喰らって無事ってのはすごいな。」

すると理子は俺を睨んだ。

「なんで・・・追ってきた・・・。無視しても・・・いいはずなのに・・・。わ、私は・・・お前を殺そうと・・・」

「てやんでえ、それはもうチャラだろうが。それに友達が心配で来ちゃ悪いか、べらんめえ。・・・友達じゃねえとか言うなよ。すごく悲しくなるから。」

こんなセリフ言っただけで、友達と思っただけかと思われたら悲しいものがあるから・・・

「理子、これからどうするんだ。計画は破綻、約束は守られない。この

ままだと、ずっとブラドに縛り付けられたままになるぞ」

「……………」

だんまりかよ……………」

「俺は今、結構頭にきてる。あいつは、家族に親友虐めてたって聞きやあ頭に来ないほうがおかしい。だから、俺はブラドにちよつと挨拶しに行きてえんだ。だけど理子、お前ブラドに恨み辛みあるだろ。どうする？そこで引きこもっているか、それとも一緒にやりに行くか。」

「なんで私にそこまでする。」

普通に話せるようになったようだ。回復早いな。

「友達だから……………っていうのじゃ納得しないよな。お前、一緒に東京湾泳いだ時、いつでも俺をやれたはずだろ？なのに何もしなかったから……………。あと一年の時の貸し、まだ返してもらって無いだろ？これでも足りないか？」

俺は一年の頃、任務で2〜3回ほど理子と組んだ。その時、理子が爆発に巻き込まれたが俺が間一髪で助け出した。その時の事を貸しにしておいた。

「安心しろ。引きこもっていても、ちゃんと形見は返してもらおうか  
r……………」

「イブキ、あたしに協力しろ!!」

理子はバツと立ち上がり、その、力強い瞳で俺を見た。

「親友の大事なものが盗られたんだ。協力しろ。」

「てやんでえ!!あたぼうよ!!」

「でもイブイブ。理子はまだ処女で初恋もまだだからね。」

「こんな状況で下ネタ言えるとは…………お前、だいぶ元気だな…………おい。」

俺は計画破壊の疫病神じゃねえ・・・

「よお〜ブラド、久しぶりだな。あんなにしても生きてるとか、正真正銘の化け物だな。」

俺と理子はブラドの前に姿を現した。するとキンジとアリアが何やら驚いていた。

「ああん、テメエになんか会ったことないぞ。」

あら、ブラドさん俺のことをお忘れのようで。

「覚えてないようだな・・・。全く、あそこまでやったのにな・・・。

☒☒ジョニー・マクレイって言うんです。☒☒

それを言った瞬間、ブラドが固まった。よし、影武者じゃないな。

「家族に親友と色々とお世話になったそうじゃねえか・・・。☒☒やれ☒☒

俺が言った瞬間、ブラドは胴体から黄金に光る鎖を生やした。

「さあ・・・どこを切り落とそうか!!」

エルさんがだいぶ張り切っているようで・・・。エルは自分の腕を刃にし、また鎖を使いブラドの再生よりも早く手足、首を落としていく。その様子を見ているキンジ、アリア、理子が引いているように見えるのは気のせいに違いない。よし、俺も行くか。

「おい理子、早くしないとお前の分がなくなるぞ!!」

そう言っただけ俺は抜刀し、ブラドへ突撃した。

「首はいらねえ!!命置いてけ!!命置いてけえ!!べらんめえ!!」

俺が切り刻み始めた時、理子は我に返ったようだ。理子は手に拳銃、髪にナイフを持ってこっちに来て、ブラドへのお礼(意味深)に参加した。少し遅れてアリアとキンジも援護射撃を始めた。

俺、エル、理子でブラドにお礼(意味深)をし始めて10分程度たっただろうか、ブラドはミンチになっただけでも生きていた。

「いい声を聞かせておくれ。」

エルさんは張り切って(しかもいい笑顔で)ブラドを切り刻んだり鎖で拘束したりしているがこれでは埒が明かない。

「理子!!そっかえばコイツの殺しk・・・倒し方はどうするんだ!!」

俺の生半可な知識より理子のほうが知っているだろう、そう思い俺

は理子に聞いた。

「イブキ!?お前知らずにやってたのか!?それとナイフが壊れた!!何か貸せ!!」

理子が目を大きく開き驚いた。でも手を止めないのはさすがというべきか……。

「目玉模様を一緒に刺すつてのは聞いたことはあるが、情報源が信用できなくてな!!それにミンチにしなければいつか殺s・・・倒せるだろ!!得物はこれでいいか!?!」

俺は銃剣を渡した。理子は呆れたような顔をして受け取り、再び解体作業を開始した。

「・・・イブキの言った通り、目玉模様の場所にある魔臓を4つ同時に破壊すればいい!!」

「だそうだ!!エル!!」

「わかったよ。」

エルはそう返事をし、切り刻むのをいったん止め、4つの鎖を出した。そして4つの鎖は右肩、左肩、右わき腹、ブラドの首へ飛んで行った。

「くあwせdrftgyふじこーp;@!!」

ブラドは最後に聞きとれない悲鳴を上げた後、あちこちから血が大量に出て、静かになった。

「終わったな・・・。」

俺は「4次元倉庫」からティッシュを取り出し刀に付いた血を拭い、納刀した。

今回の戦いを俺なりに考察すると、ブラドの敗因は自分の耐久性に過信し過ぎていたことだ。ブラドは自分の弱点をなくそうとし、結果的に異常なほどの耐久力を得た。ゲーム風に言うところか。超HighPに毎ターンの異常な回復量、そして無限に近い残機持ちつてところか。だけど、攻撃は力任せにしていたために俺達には当たらなかつた。俊敏性も無かつたから俺達の攻撃は当て放題だつた。もしブラドが何かしらの武術を学び、俊敏性を少しでも上げていれば俺達は負けていたかもしれない……。でもこいつつてイ・ウーのNo2なんだよな。つ

てことはシャーロック以外のイ・ウーのメンバーってそこまで強くないんじゃないか。カット。油断は危険だな。

ヘリの音が聞こえる。空を見上げると、神奈川県警のヘリが飛んでいた。これならワザワザ警察に連絡しなくても来てくれそうだな。

「あたしが散々苦勞して作った作戦が・・・ハア。イブキ、お前は疫病神じゃないのか？」

理子がため息交じりに言ってきた。

「俺は疫病神じゃねえ!!・・・つたく、結果的に解放されたわけだ。あの意味、計画大成功じゃないか？」

俺のことを散々「計画破壊の疫病神」みたいなこと言っているけど、この程度の不測の事態くらい計画立案時に予想できるだろ。

「言われればそうかもしれないな。」

理子は憑き物が取れたような清々しい笑顔を俺に向けた。でも顔に大量の血が付いているために、その笑顔が怖い・・・。

「ほら、顔ふけ。せつかくの顔も血で台無しだぞ。」

そう言っただけは「四次元倉庫」からタオルを取り出し、理子とエルに渡した。このタオルは捨てなきや駄目か・・・。

「やったな理子。」

キンジとアリアがこっちに来て。理子に声をかけた。

「イブキ、警察呼んでおいたぞ。」

上空のヘリはキンジが呼んだのか。

「ありがとな、キンジ。」

すると、アリアが理子に話しかけた。

「なんか理子、初代を超えるだの超えないだのってこだわってたけど——あんた、いま、初代リュパンを超えたわね」

・・・半分以上はエルがやっていたけど、協同で倒したことになるよな。

「うーん・・・やっぱりこんなものか。イブキ、タオルありがとう。」

エルが俺にタオルを渡そうとした。しかし、エルの頬にはまだ血が・・・。

「エル、ちよっと動かないでね。」



「イブキ!?くすぐったいよ!」

俺は頬の血を拭ってあげた。

「ちゃんと拭けてなかったよ、エル。」

「ありがとう。」

エルの顔が少し赤くなったような気がしたが……気のせいだろう。「ブラドのこと——感謝はしないよ、オルメス。今回は偶然、利害が一致しただけだ」

キンジとアリアは途中から援護射撃をしてくれた。……理子、お前照れてるのか？

「オルメス家がリユパン家の宿敵であることに変わりはない。永遠にな。」

うん、セリフだけならかっこいいのだけれど……タオルで顔を拭きながら言われてもなあ。

「そうね。あたしもあんたなんかと馴れ合うつもりはないわ。で？あんた、これからどうするの。逃げようってんなら捕まえるわよ。ママのこと、尋問科にぶちこんででも証言させてやるんだから。観念しなさい——理子。得意の口先ももう通用しない。得意の双剣双銃をやろうにも、武器が無い。得意技を全部封じられたら、人間、何もできないものよ」

そういえば、理子のやつ持ってた弾全部使って、ナイフも折れたとか言って、俺から銃剣借りたんだっけ？あと、このブラドから奪った十字架、いつ返せばいいのか……。

「……神崎・ホームズ・アリア、遠山キンジ。あたしはもう、お前たちを下に見ない。騙したり利用したりする敵じゃなくて、対等なライバルと見なす。だから——した約束は守る。  
⊠Au<sup>バ</sup>re<sup>イ</sup>vo<sup>イ</sup>ir<sup>ラ</sup>·Me<sup>イ</sup>s<sup>バ</sup>ri<sup>ル</sup>va<sup>タ</sup>ux<sup>チ</sup>;」あたし以外の人間に殺られたら、許さないよ」

「おい、待て。俺は!？」

俺の言葉を聞かずに、理子はビルから飛び降りた。俺は慌てて理子が落ちたところへ行き、下を見た。そこにはパラグライダーで夜の街を飛ぶ理子の姿が……。俺はポケットに手を入れ、入っていた十字

架を出した。その十字架は偽物だった。理子、お前いつの間に取ったんだよ……。取られたの気づかないとか、鈍ったなあ。

後日、宛先不明の荷物が届いた。中身は、新品のタオルと銃剣が入っていた。

理子がパラグライダーで逃走してすぐ、警察が屋上に来た。若い警察官がミンチのブラドを見て吐いていたのは見なかったことにする。

警察が来て、15分くらいたった時、俺たちの所に一人の老いた刑事が来た。その刑事はベージュのトレンチコートとソフトという格好で、コートとソフトの使われ具合から長い間現場に立っていたのであろうと推測できる。しかし、その刑事は頬が痩せこけ、大きな隈があり、死んだ魚のような目をしていた。何かとても悲しいことがあり、それを引きずっているように見えた。

「今日はもう遅い。君達の取り調べは後日やる。君達は武偵かな？君達の武偵手帳を見せてくれるかい？」

その刑事が渋い声で話しかけた。俺達は言われた通りに武偵手帳を見せた。

「ここにいたのは君達だけかい？」

「いや、もう一人いまして……。うちの学校の峰理子っていう子なんですが……。」

俺が答えた。答えなくて後からなんか言われるのも嫌だし報告した。

「峰理子さんか……。ん？峰……。理子……。もしかして本名峰理子・リュパン四世か!!!」

刑事が俺の肩を持ち、揺らしながら言った。

「そうです！峰理子・リュパン四世です!!だから刑事さん揺らさないで!!」

それを聞いた刑事さんの目がランランと輝き始めた。そして敏腕刑事のオーラがはじめた。刑事さんは俺を離し、大きな声で叫び始めた。

「リュパー……!!今度はお前の娘を逮捕してやる!!ちやんと矯正させてやるからな!!覚悟しろよ!!!」

「じつとしてる場合じゃない!!ここに3〜4人残して残りはリュパン逮捕に動け!!」

刑事さんは警察官達に命令した後、再び俺たちの所に来た。

「少年!!教えてくれてありがとう!!ありがとう!!!」

刑事さんは号泣しながら俺の手を握り、感謝し始めた。

「え・・・いや・・・頑張ってください。」

「よし、リュパン逮捕へ出動だ!!」

刑事さんは俺の手を放し、泣きながら敬礼した後、警察官を率いて屋上から去ろうとした。

「ちよつと待って刑事さん!!刑事さんの名前は?」

そういえばこの刑事さんの名前知らない。すると、刑事さんは走ってこつちにまた来て、名刺を渡した。

「私は元ICPO、今は神奈川県警警部の銭形幸一であります!!!」

うん、理子がヤバイことになりそうな感じがするが・・・、気のせいに違いない。俺達は帰ることにした。俺の車にアリア達が乗って来たが、帰りは同じ場所だ。何も問題はない。

「あの人が銭形幸一!!リュパン三世を何回も捕まえた刑事よ!!」

アリアが興奮気味に銭形警部の話しをした。アリアにとって銭形警部は尊敬する人物だったらしい。

警察関係で思い出した。マクレーのおっさん、二気にしてるかな・・・。うん、あのおっさんのことだ。どうせピンピンしてるだろう。

ブラドを倒した翌日の放課後、俺、エル、アリア、キンジは特別教室へ行くようにとの放送が流れた。特別教室に4人で行ってみると、そこには銭形警部に叱られている理子がいた。

「あ、イブイブ!!助けて!!」

「お取り込み中失礼しました。」

俺は静かに開けた扉を元に戻した。

「先客がいるみたいだし帰ろうぜ。祝勝会だつてリサと玉藻が今、張り切つてご馳走作つてるんだ。」

「君達どこへ行くこうというのかい？君達を待つていたんだ。」

ガラガラつと特別教室の扉が開き、銭形警部が俺達に言った。俺達は諦めて中に入った。

銭形警部がいたのは司法取引のためだったようだ。俺達は書類にサインをした後、説教を10分くらい食らった。

「イブイブく!!親友を見捨てるなんてブンブンガオーだぞ!!」

説教が終わつた後、理子は指で角を作り、頬を膨らましながら言った。

「いや・・・さすがに警察からの嚴重注意受けてる所に割り込むほどの度胸はないわ。それが原因で第2のゴー・ストップ事件になるかもしれないし。」

ゴー・ストップ事件とは、戦前に信号無視で陸軍兵と巡査が喧嘩し、最終的に陸軍と警察が互いのメンツにかけて対立した事件。このような事件があつたので、普通の軍人はよっほどのことがない（任務とか戦地とか占領地とか）がない限りは基本警察に従う。それを聞いた理子は頭で角を作つている手を下ろした。

「祝勝会があるんだよね。理子りん沢山食べちゃうぞく!!」

「お前参加するの!?今日帰つて来ると思つてなかつたから足りないぞ!!」

「理子りんもこんな早く捕まると思わなかつたからね!!」

「胸張つて言うなよ!!」

「何？理子りんの胸に興味があるの？」

「なんでお前は下ネタに持つてくんだよ!!しかも恥ずかしいなら言うなよ!!」

理子は顔が真っ赤になっていた。

「イブキは、胸が大きい方がいいの？それなら作り変えるけど。」

「イブイブは理子りんのようなロリ巨乳が好みなのだ!!」

「おい理子!! 適当なこというな!! エル!! 別に作り変えなくていいから!! 今のままで十分魅力的だから!!」

「イブイブ!! 理子りんは魅力的じゃないの!?!」

「ハイハイ、理子りんも魅力的魅力的。」

ガラガラガラガラガラガラ

「うちの理子は渡さーりーりーん!!!!」

「なんで銭形警部が出てくるの!?! しかも頑固おやし役で!!」

「うるさーりーりーりーりーりーりーりーい!!!」

ダアンダアンダアンダアン

「静かにしないと風穴!!!」

「すみませんでした!!!」

この件の後、エルの胸が気持ち大きくなったような気がするが、気のせいだと思う。

ニコラ・テスラ引かないとまずいかな・・・

「「「カンパニー」」」

みんな思い思いのグラスをとって乾杯をした。

あの後急いで一人増えたことを伝えた。するとリサと玉藻はバイキング形式にして、さらに何品か作ったらしい。おかげで足りないということはなくなった。流星はメイドさんと良妻である。

しばらくして俺はふと窓を見た。何か嫌な予感したからだ。窓を見ると、そこにはビッシリとカナブン（みたいなやつ）が引っ付いていた。数が多いせいで外が見えない……。あまりの衝撃で固まっていると、

「どうしたのよ、イブキ。」

おかしいと思ったのか、アリアが話しかけてきた。

「ま、窓がな。」

「窓がどうしたのよ・・・ぎゃー！！！！」

アリアが女の子としては出してはいけないような悲鳴をあげた。みんなも気づいたのか、窓を見て驚いている。

みんなが落ち着いた。

「呪術の類いですねえ。この系統はニトの方が詳しいんじゃないですか？」

玉藻がニトに尋ねた。

「ええ、エジプト魔術ですね。それも比較的新しい部類です。この程度なら造作もないですね。」

ニトはそう言って、杖を振った。すると振ったところからカー（頭が人間、体が鳥の人魂みたいなもの）が数体出てきた。カーは窓をすり抜け、カナブン（モドキ）を駆逐し始めた（潰したり、食ったり・・・）。うん・・・ニトの魔術は見た目が残念なんだよなあ。ほら、うちの家族は慣れているからなんともないけど、キンジにアリア、白雪、理子は引いてる・・・。

「マスター、これをどうぞ。」

カナブンがある程度駆逐されたぐらいに玉藻が俺に何かを渡してきた。それは首にかけられるお守りだった。

「え？あ、ありがとう」

「マスターに何かあったら嫌なので作りました。呪術の無効と、かけた野郎に倍で呪術返しするものです。」

こう、キャピキャピ言っても、エグいことには変わりないんだけど……。

「ちよつと過激すぎるような気がするけどありがとう……。俺、何か恨まれる様なことしたかなあ……。うん、あり過ぎるわ。」

ビルに空港、科学者、イ・ウー、その他色々……。恨まれない方がおかしいか（泣）玉藻は他の人にもお守りを配り始めた。

「まあ、その、なんだ。いつでも相談に乗ってやるからよ。」

ベオウルフが俺の背をさすりながら言った。やめろよ、余計に自覚するだろ。

俺はその日、ブラドからの贈り物（紅鳴館で貰った酒）を飲みまくった。

次の日、俺は二日酔いもしないですっきりと起きれた。酒は飲んで飲まれるな、って言うのは基本中の基本だからな（酒瓶抱えて寝たのはご愛敬だ）。俺がダイニングへ行くと、キンジは珍しく椅子の上で寝ていた。何があったか知らないがそつとしておこう。その後、リサと白雪の朝食をみんなで取り、教師陣は先に学校へいった。そういえばエジソンが、連絡掲示板を見ておくように、とか言ってた。車を駐車場に止め、掲示板のほうへ俺は歩いた。すると掲示板の前に人だかりができていて。人を押しのけ前のほうへ行くと、掲示板には単位不足者の発表があった。一応の為、確認したが俺の文字はなかった。何か間違いがあったりして単位不足者になるのは嫌だからな。いやあく書かれてなくてよかった……。でも、知り合いが書かれていたような気が……。

（2年A組 遠山金次 専門科目（探偵科） 1. 9単位不足）

キンジの名前が……。あいつ、何してんだよ。あんなに事件解決

してるのに……。

「よかつたな、貴様の名前が無くて。」

振り向くとそこには松葉杖をついたジャンヌがいた。

「よおジャンヌ、お前まだ制服改造してないのか？それとも普通の制服のほうがいいのか？てつきりそのフリフリが付いた……ロリータつてやつ？あれが好きだと思ってたんだg。」

「うるさい、静かにしろ。」

ジャンヌが松葉杖に仕込んだデュランダルを俺に見せてきた。しかも目が座つてやがる……。

「……ああ、その足どうした？あそこに居たお前なら下手にケガしないと思うんだが。」

超耐久で不死身のブラド、戦闘後にスカイダイビングと遠泳をこなす理子、25ミリ機銃に撃たれても肋骨3本骨折で済むジャンヌ……イ・ウーって化け物ばかりじゃねえか!!

「……虫がな。」

「虫？」

「道を歩いていたら、コガネムシのような虫が膝に張り付いたのだ。」

「……もしかして、黒色でカナブンにしては頭がでかい奴じゃないか？」

「イブキ、貴様知っているのか？」

「昨日窓にビッシリ張り付いててな……。中から外が見えないんだぜ。」

昨日はトラウマになるくらい張り付いてたな……。駆除もトラウマものだけだ。

「……災難だったな。」

「ジャンヌほどじゃないさ。あれ呪術だそうだ。気をつけろよ。」

「わかってる。あの魔術を使う者の見当もついている。」

ちようどその時キンジ、アリア、白雪が来た。

「イブキ、ジャンヌ、この人混みはなんだ？」

「単位不足者の発表だ。めでたくお前の名前があつたぞ。」

キンジは掲示板を見た後顔が引きつった。



「・・・そういえばジャンヌ、お前の足どうしたんだよ。」

キンジ、現実から目をそらそうとしているのはバレバレだぞ。

「イブキにも言ったのだが、コガネムシのような虫が膝に張り付いたのだ。私は驚いてな。そのせいで道の側溝に足がはまった。」

「二二二二二二二二二二」

「そこを通りかかったバスに轢かれてな。全治2週間だ。」

バスに轢かれて全治2週間・・・さすがはイ・ウー。体の丈夫さは化け物クラスばかりだぜ。

「キンジ、現実から目をそらすのは良いけど現実を見ようぜ。隣の掲示板でも見ろよ。」

俺は隣の掲示板を示した。そこには「夏季休業期・緊急任務」と書かれた張り紙がある。緊急任務とは単位が足りない生徒のためにある任務だ。学校が割引価格で任務を沢山とつてきてくれる・・・簡単に言うとは補修授業の武偵版だな。なので報酬は大分安くなってしま

うが・・・。  
キンジはその掲示板を見た。その時キンジはある任務をじつと見  
ていた。どれどれと俺も見るとそこには

〔場所・港区 アクア・エデン〕

内容・カジノ「ピラミディオン」私服警備（強襲科、探偵科、他学  
科も応相談）

詳細・要帯剣又は帯銃 必要生徒数6人 女子推奨 被服支給あり  
単位・1・9単位

アクア・エデン・・・身分証が無いとは入れない、出入りがヤケに  
厳しい人工島だ。しかも入るための交通手段が鉄道だけ・・・。そし  
て、日本でカジノや風俗が許される数少ない場所の一つだ。関東甲信  
越ではここだけだったな。ここでよく第2中隊のみんなまで博打し  
たっけか。敵の観察及びその他観察力の向上訓練とかいつて結構連  
れていかれたなあ・・・。プレイヤーとかの表情を読み、カードにつ  
いているほとんど見えない傷やカードの種類を区別したり、ボールの  
回転速度から止まる数字の場所を把握したり・・・。田中さん曰く  
「カードは細工がすべてだ。」

岩下さん曰く

「カジノは観察で決まるツス。」

メガネさん曰く

「賭け事は計算ですよ」

うん、全員の性格が出てるな。ついでに鬼塚中尉は「勘だ!!」だぞうだ。全く参考にならなかつたな。そういえば、よく使っていたのはちようどこの「ピラミディオン」だつたな。あそこのディーラーは元気だろうか。

キンジはじつと見た後、急いでスマホをいじくりだした。が・・・急に手を止め、アリアのほうを向いた。単位ではない、何か別のことで切羽詰まっているように見えるのは何でだろう。

「アリア・・・お前もこの仕事、一緒にやれよ。」

「・・・なんで？あたしは単位、不足してない。」

そう言つてアリアは頬を膨らました。

「パートナーだろ。」

他にも何か思惑があるように見えるが、キンジは初めてアリアをパートナーだつて公言したな。これはめでたい。

アリアは多少もつたいぶつたように腕を組み、考えるような仕草を見せた。

「ふーん。キンジがあたしを仕事に誘うなんてね。ま、いい傾向と言えるわね。」

こんなこと言っているアリアだが、その顔はうれしさを必死に我慢しようとしているのがバレバレな表情をしていた。

「最低6人以上つて書いてあるし。・・・そうね。パートナー同士、困ったときはお互い様。やつてあげてもいいわよ。」

今日はリサに頼んで赤飯にするか？

今日の3時限目は体育・・・プールでの水泳の授業だつた。まあ、この授業を担当しているのは蘭豹ということもあってだいたい加減な授業なのだ。今日の授業も

「拳銃使いながら水球やれ。2, 3人しぬまでやれ。」

そう言い残し帰ってしまった。こんな授業で給料もらえるって羨ましいな。

そんな授業、しかも疲れるプールときたら・・・生徒のほとんどはフケてしまっている。俺はプールで浮かびながらボーっとしていて、プールサイドから団体さんが来た。

「おー、ほとんど人がいねえ!!おーいイブキ、不知火、プールから上がれよ!!邪魔だ!!」

俺はプールから上がりながら聞こえてきたほうを見ると、丸太のような黒い物体をプールに運び入れている何人かの生徒と、ライオン頭のスーパーマンがいた。これは車輻科と装備科の連中だな。男女ともに水着か・・・キンジは嫌がるだろうな。

「武藤君!!すぐ浮かべて!!時間が無いのだ!!」

平賀さんもこれに一枚噛んでるのか・・・エジソンと平賀さんとか変に化学反応しなきゃいいけど。

「すぐって平賀!!暖機運転しなくて平気なのかよ!!」

「そこは改造しておいたよ!!人間に不可能はないのだ!!」

平賀さんはでっかいリモコンのコントローラーを持ちプールサイドで正座をした。うん、無邪気に笑っている。

「さあ!!早速発進せよ!!」

「了解なのだ!!」

エジソンの一声でその黒い物体（潜水艦か?どっかで見たことあるような）がブルンブルンと音を立て進み始めた。

「ミサイル発射!!」

「発射なのだ!!」

すると黒い物体（潜水艦に違いない。でも海軍の船じゃないな）のハッチが空き、そこからロケット花火がピューピューピューと10発程度発射された。驚いたことにそのロケット花火は車輻科か装備科の生徒が持ってきた大きな的に全て当たった。こいつはすごいな。

「「「おおーーーーー!!」」」

車輻科と装備科の生徒達は拍手喝采、一部には泣いている者すらいる・・・。

「諸君!!!この成功は我々の99%の努力によって成し得たものである!!!」

「「然り!!!然り!!!」」

「この成功をもとに!!我々はさらに改良を加える!!!」

「「然り!!!然り!!!」」

「そして諸君!!失敗を恐れるな!!何時、如何なる時でも、フロンティア!!」

「「然り!!!然り!!!」」

「さあ諸君!!闇を照らせ!!世界を創造せよ!!!」

「「直流万歳!!!直流万歳!!!」」

エジソンの演説によって車輛科と装備科は拳を振り上げ、声を上げている。その中にはもちろん武藤に平賀さんも……。この前、平賀さんの工房に言ったら「直流こそ至高」って掛け軸が飾ってあったな。これ家に帰ってニコラ・テスラ召喚しないとやばいかな……。でも絶対にほかのサーヴァントも召喚されるわけだし……。カット。

演説が終わり、場の空気がある程度冷めてきた。

「おう、お前ら!!見ろよこれ!!超アクラ級原子力潜水艦ボストークだ!!」

俺とキンジ不知火を見つけた武藤がこっちへ来た。ああ、ボストークか、イ・ウーの潜水艦か。なるほど、それは見たことがあるわけだ。「ボストークは悲劇の原潜なんだぜ!!空前絶後の巨大潜水艦だったんだが、1979年、浸水直後に事故で行方不明になっちゃったんだ。それを俺と平賀とエジソン大先生で現代に蘇らせた!!どうよお前ら!!感動するだろ!?!ええ!?!」

そして行方不明のほうはイ・ウーが使用中と……。なるほど武藤、解説をありがとう。

「せめて屋外プールでやれ。」

熱っぽく解説した武藤に、キンジは冷たく返す。

「すごいのはわかるが、せめて花火打ち上げるなら屋外じゃないとなあ。なあ不知火。」

屋内で花火やるのはさすがにねえ……。

「まあ、そうだよね。」

不知火も否定的なようだ。そういえば、俺の勘が不知火を警戒しろって言ってるんだが、なんでだろう。

「お前らは感動が足りねえ!!後で原潜で轢いてやる!!」

武藤は残念な捨て台詞を吐き、プールサイドに胡坐をかいた。ボストーク号の鑑賞でもするようだ。

「二人とも、雑談してもいいかな。」

不知火が白い歯をニコツと見せ、話しかけた。というか、そんなセリフ初めて聞いたぞ

「別に許可なんか取らなくていいって。」

「許可取る奴なんて初めて見たぞ。」

キンジと俺は不知火に言った。

「ちよつと、良くない話なんだけど。聞く?」

「良くない話・・・?何だよそれ。まあ、話したきゃ話せよ。」

「さつき2時間目。休講だったじゃない。」

2時間目の綴先生は二日酔いで休講だった。いいよなあ・・・そんなので金もらえて。

「ああ。」

「そうだったな。」

「その時僕、ちよつと強襲科に顔出したんだけどさ。神崎さんも来てたんだよね。」

なんだ、練習でもしてたのか?いや、それならワザワザ話題に上がらないか。

「・・・アリアに何かあったのか。」

キンジの目が怖くなった。

「ははっ。そんな怖い目しなくていいよ。そういう事じゃないから。」  
不知火は小さく笑う。

「・・・神崎さんって彼氏いるの?」

コイツは何を言ってるんだ?

「しらねーよ。アリアに直接聞けて。」

「そんな話は聞いたことがないぞ。」

「遠山君、ライバルがいるかもしれないよ。」

「なんだそれ？」

「神崎さんが武偵手帳にメモってる時、偶然見えちゃったんだけど……手帳に男の人の写真が入ってたんだよね。細かくまでは見なかったけど、君じゃなかった。」

ああ、あれか。若き頃のシャーロックの白黒写真がそう言えば挟まってたな。

「……そんなこと、俺に関係ないだろ。」

「ははっ。今一瞬、君黙った。」

「気を付けたほうがいいよ遠山君。神崎さんって、一部の男子に結構人気あるからねえ。ボヤボヤしてたら取られちゃう。ポピュラーな言い方だけど、夏は……男女の仲が大きく進展する季節なんだよ。」  
夏か……もう夏になるのか。そういえば今年の梅干し作りは参加しなくていいのかな。

梅干しは健康に良く、昔ながらの製法で作れば何年でも持つという優れた食品だ。おかげで軍の最重要食品の一つに入れられ、最低1日1回は梅干しが出る。そんな理由で大量に仕入れているわけだが、あまりの消費に一時期買占めに近いとこまでいったらしい。それ以降軍の敷地に空いているスペースがあれば桜か梅を植えることになった。初夏の時期には敷地にある梅の実を梅干しにするという行事までできてしまった。(なお、イベントで試しに売ったら意外と好評だったらしい。)その梅干し作りに参加せよって命令を聞いてないけど、大丈夫なのかね……カット。

そんなことを考えていたら、不知火がヒョイツとキンジの携帯を取り上げた。

「おい!!」

「そういえば神崎さん言ってたけどさ。君たち夏休みにカジノの警備やるんだよね?混雑地での警備訓練ってことで、一緒に緋川神社の夏休みに行ってみたらどう?うん、そうしよう!!あそこは縁結びの神社ってことでポピュラーだし。ねえ二人とも?」

不知火はポーンとキンジの携帯を武藤に投げた。武藤はキャッチ

すると悪戯する悪ガキのような笑顔をした。

「おう！それはいいアイディアだ！！お誘いメール、俺が書いてやるよ！！」

「コラ武藤！！返せ！！」

キンジは携帯を必死に打ち込んでいる武藤のほうへダツシユするも

「イブキ！！パス！！」

「俺は白雪応援してるんだけどなあ。でも、アリアの援護しちやいけないって理由はないしな。」

どれどれ・・・覗き込んだ瞬間俺は吹き出した。

「武藤お前！！（親愛なるアリアへ。カジノ警備の練習がてら、二人つきりで七夕まつりにいかないか？7日7時、上野駅ジャイアントパンダ前で待ち合わせだ。かわいい浴衣で来いよ？）ってこんなの見たら絶対悪戯されたってわかるだろ！！（親愛なる）と（かわいい）は削除つと。これでいいかキンジ？」

俺は武藤に羽交い絞めされているキンジに聞いた。

「言い訳ねえだろ！！」

「送信つと。」

Lineじゃないからちゃんと見てくれるかね？

その後、俺たち三人は仲良くキンジにプールに落とされたのと言うまでもない。（その時、ボストークに当たりそうだったのだが、ボストークが異常な機動力を見せて俺達を避けていったのは見間違いではないはずだ。）

まさか女装姿で会うなんて・・・

午後からは専門科目の授業である。ところで、俺はある悩みを抱えていた。

「イ・ウーの中には銃どころか刀を喰らっても平気な奴がいるかもしれない・・・」

ブラドのようなHPチートがいるのなら、防御力チート、回避力チートがいてもおかしくない。今まで対峙したのはブラド、理子、ジャンヌの三人だけだが、この三人は耐久が半端ない。ジャンヌに至っては、一発でも当たったら上半身と下半身がサヨナラする威力を持つている25ミリ機銃を喰らっても肋骨3本骨折で済んだ。もしかしたら25ミリ機銃を喰らっても平気な奴がいるかもしれないと考えると・・・もう、対戦車ミサイルや対戦車砲を使わなきゃいけないかも・・・いや、直死の魔眼が無いとやっていけないかも・・・でも、死を理解するとか無理な話だし、それに精神やられそうだし・・・もう戦艦の砲弾投げるか？

などと考えがだいぶ飛躍してきた頃

「イブキ、久しぶりね。元気にしてる？」

俺に話しかけてきた人がいた。懐かしい声だが誰だかわからない。振り向くとそこには、キンジの兄のキンイチさん（女装Ver）がいた。え？

「キンイチさん、お久しぶりです。いくら弟が心配だからって女装して潜入は無理があるんじゃない？」

カチャリ

俺の腹にリボルバーが・・・

「今の私はカナ。いいわね。」

「イエス、ママ。」

リボルバーが下ろされた。

「カナさん、なんでここにいるんです？来るなら連絡してくださいよ。」

「悪かったわね。ちよつと用事があつてここに来たの。」



その用事とやらを知りたいけど、深入りは禁物だしな……。

「そうですね。キンジには会いました？ だいぶ心配してましたよ。」

おかげで憲兵動員したしな。

「ええ、もう会ったわ。元気そうじゃよかった。」

「そうですね、偶には連絡くださいよ。」

「ええ、分かったわ。」

そう言っただけでカナさん（キンイチさん）はスタスタと何処かへ行ってしまった。まったく、無事なら連絡くらい欲しかったぜ。

「イブキ、今の人は誰かな。」

エルが瞳孔を開きつたまま、俺に話しかけて来た。うん、何か大きな誤解をしていそうだ。

「あまり大きな声で言えないけど、キンジの兄さんだから。俺がちつさい頃世話焼いてもらった人だから。」

「じゃあ、なんで女装してるのかな？」

「俺が知りたいよ。何でも用事があるそうだ。その為じゃないか？」

そう伝えるとエルの瞳孔は元に戻った。よかった。ついでだ、エルにさっきまで悩んでたことを相談しよう。

「なあ、エル。ty……」

「おい!! 札幌武偵高の生徒と神崎が戦うってよ!!」

知らない生徒が走ってきて、この大部屋にいる皆に大声で伝えてきた。

「イブキ、どうしたの？」

「いや……何でもないわ……」

なんか、喋る気失せちゃったよ。いや、平賀さんに今度25ミリ機銃用の<sup>A</sup>硬芯<sup>P</sup>徹甲<sup>C</sup>弾<sup>R</sup>でも作ってもらおう。それに辻さんに頼んでパンツアーフアウストかそれに近い物貰ってくればいいか。

俺とエルは第一体育館に行くと、そこはすでに人だかりができていた。

「おい、あの札高の子すげえぞ。」

「こりや神崎の不敗伝説も終わりか？」

「ハアハア、アリアさんの汗、太もも・・・ハアハア。」

なんか怖い奴もいたけど気のせいに違いない。人をかき分け最前列へ行くと、そこではアリアとカナさん（キンイチさん）が戦闘をしていた。これは・・・まあ、戦力差ありすぎだろ。アリアはいくら将来性があるからって言っても経験の差がなあ・・・。霊基再臨1段のアリアが聖杯使われたカナさん（キンイチさん）と戦っているって思えばいい。圧倒的な戦力差だ。というかなんで戦ってるんだ？カナさん（キンイチさん）に殺気はないし、全力を出しているようにも見えない。アリアの実力を計っているのか、稽古しているかのどつちかなだ。

俺とエルが観戦をしていると聞きなれた声が聞こえてきた。

「どけ!!どいてくれ!!」

キンジが人波をかき分けて最前列にいる俺たちの隣に来た。

「キンジ、お前も見に来たのか?」

「アリア!!!」

こりやあ、俺達のこと視界に入っていないな。・・・試合でも見るか。「おいで、神崎・H・アリア。もうちよつと・・・あなたを見せてごらん。」

そう言つてカナさん（キンイチさん）は憂いた表情をしたまま、早撃ちをした。この早撃ちはすごいな、普通じやこの早撃ちが見えないぞ。

「っう!!」

アリアの体から鞭でたたかれた音が聞こえた後、前のめりに倒れた。アリアは防弾制服を着ているから弾が貫通しないけど、その分そのエネルギーすべてを受けるからなあ・・・。流石に倒れるよなあ・・・。これが普通なんだよね。初期の戦車を貫通できる威力の銃弾何発も喰らつて肋骨三本骨折で済むのっておかしいよね・・・。イ・ウーって化け物ばかりなんだろうなあ・・・。カット

「蘭豹、やめさせる!!こんなものどう考えても違法だろ!!また死人が出るぞ!!」

キンジが蘭豹に抗議をし始めた。確かに武偵法によって実弾使用の訓練においてはC装備（全身フルアーマー）の着用が義務付けられている。まあ、生徒同士の私闘や蘭豹の命令のせいでC装備なんてほとんど着けている奴はいないけどな。どうせ戦闘の時なんてC装備つけていることなんてほとんどないから、初期訓練以外はC装備いらないと思うんだけどなあ。

「おう死ぬ死ぬ!!教育のため、大観衆の前で華々しく死んで見せろや!!」

そう言つて蘭豹は瓢箪をグイッと・・・あの中酒入ってるのかよ。それで給料よく出てるな。・・・それに蘭豹もあんなこと言ってるが、カナさん（キンイチさん）がアリアに殺意や殺気が無いのは分かっているだろう。そうじゃなかったら絶対に門前払いだからな。

キンジは蘭豹の説得を諦めたようで、今度は防弾ガラス製の扉の鍵を開け中に侵入した。

「カナ!!やめろ!!」

キンジがここまで焦つてやるということは・・・アリアとカナに何か関係があるのか？

「くおらキンジ!!授業妨害するなや!!脳みそぶちまけたいんか!」

ズドオン

そう言つて蘭豹はキンジの足元にS&WM500をぶつ放した。キンジはそのせいで転びかけたが、それでもカナさん（キンイチさん）のほうへ駆け寄る。ここまでやるってことは大分ヤバいことでもあったのか？

「・・・キンジ?」

カナがキンジのほうへ注意がいった瞬間、アリアは逆立ちをするように立ち上がりカナさん（キンイチさん）へ蹴りを入れようとした。カナさん（キンイチさん）はほとんど動かずに避ける

「こんのお!!」





そう言つてアリアは至近距離で発砲するも、カナさん（キンイチさん）に手首を叩かれ射線がずれる。

ダンダンダンダン・・・ガチャ

アリアの拳銃が弾切れを起こした。ちょうどその時アリアはカナさん（キンイチさん）の背後に入り込んだ。絶好のチャンスとばかりに拳銃から小太刀に替えて切りかかった。

ガガガ!!

金属と金属の激しい衝突の音が聞こえたと思ったら、アリアの小太刀は真つ二つになっており、刀身は宙にくると飛んでいた。カナさん（キンイチさん）は頭の三つ編みにナイフでも仕込んでいたのだろう。ただ軽く髪を振っただけで小太刀を切り刻む威力を生むとか、カナさん（キンイチさん）も化け物だな……。

「はあ……はあ……さ、さっきの銃撃……ピースメーカーね!?!」

アリアはカナさん（キンイチさん）を睨みながら言った。

「よくわかったわね。そう、私の銃は、コルトSAA……通称、ピースメーカー平和の作り手。でも、あなたはそれを見ることができなかったはずだけど?」

アリアよくわかったな。俺見えていても、古い6発装填のリボルバーくらいしかわからなかったぞ。……勉強不足か。

「イブキよ!!この集まりは一体何だ?」

いつの間にかネロも来ていたらしい。

「アリアとカナさん（キンイチさん）の戦闘をみんな見ようと来たみたいだ。まあ、キンジの乱入でもうそろそろお開きになりそうだけど。」

「ほう、カナとやらはあの三つ編みの子か?」

「ああ、キンイチの兄さんだ。」

「なかなか美しい奴よのう。」

「……ネロさん。あの男だし彼女いるぞ。」

「余は関係ない!」

……そういえば、両刀だったんだっけ。そういえば、キンイチさんはパトラと結ばれるんだっけか?」

「妬いているイブキは見ものよのう。愛い奴め。」

「ネロ、お前揶揄ってたのかよ……。あと妬いてない。」

流星に親友の兄貴を家族が寝取りとか笑えないから言ったんです

けど。

そんなこんなネロと話していると

ピーーーーー!!!

ホイッスルの音が聞こえた。なんだなんだと音がしたほうを見ると、そこには小さな婦警さんがいた。は？なんでここに警察が？

「あなたたちも解散しなさい!!」

婦警さんがそう言うと言徒たちはワラワラと散っていった。学校に警察が入ることはめつたにない。それに女性の警察が一人で来るなんて絶対あり得ない。身長、胸の大きさ、声の質からして理子か？「ツケ!!サムい芝居で水差しやがって。後で教務課に來いや!!・・・峰理子!!」

蘭豹は防弾ガラスの衝立を飛び越え、小さな婦警さんにガン垂れて言った。

「・・・くふっ！くふふふふふふふふ・・・」

婦警さんは笑い出した。理子の声で・・・。うん、正解だな。

するとカナさん（キンイチさん）はフラリと踵を返し、あくびを一つ。そしてそのまま体育館を去っていった。

緊張の糸が切れたのだろう、キンジは脇腹を抱え、その場に膝をついた。遅れてアリアも膝を折り、顔面から倒れた。

「帰りますか。」

「そうだね（そうしよう。）」

アリアの手当とかしようと思ったけど、後はキンジに任したほうがよさそうだしな。

「平賀さんいる〜?」

俺はあのアリアとカナさん（キンイチさん）の決闘（?）の後、エールとネロから分かれ、平賀さんの工房に顔を出した。

「ここなのだ〜。」

平賀さんは大きな箱に頭を突っ込み、足をバタバタ振っていた。パンツが丸見えだが、なんかこう・・・小さい子が遊んでいるようで、まったく興奮しない。よかった、俺はロリコンでない。

「どうしたのだ？」

「ああ、25ミリ機銃の貫通特化の弾を作ってほしくて。」

それを聞くと平賀さんは少し引いた。

「これ以上威力を増すって何に使うのだ・・・？」

「ちよつ!!何引いてるの!?!人には使わないよ!!非装甲や軽装甲の車とかだよ!?!」

これ人に使うと思ってやがる!?!

「よかつた。イブキ君が警察に捕まるのはさすがに嫌なのだ。」

「・・・俺を何だと思ってるんですか。流星に人に通常弾使うとかしないから。」

25ミリの通常弾（弾の中に火薬が入っている）とか使ったら人間木っ端みじんだぞ!?!そのくらい俺だつてわかってるぞ!?!

「ジャンヌちゃんという例がいるのだ。」

「あれ、あなたが作ったゴム弾使いましたよ!?!」

「流星にゴム弾でも対人用じゃないのだ。」

「そうだったの!?!」

確かに「ゴム弾作つて」と言つて、「対人用ゴム弾作つて」とは言つてないけどさ。・・・やっぱりジャンヌは化け物だ!!・・・まあ、対人じゃなかったから倒せたのか？

「対人と思つてました。これ以降、人間には使いません。（人外には使います。）」

「わかつたらいいのだ!!」

「それで、貫通特化。作つてくれます?」

「もちろんなのだ。装弾筒<sup>A</sup>付翼<sup>P</sup>安定徹甲<sup>F</sup>弾<sup>S</sup>でいい?」

え?・25ミリの小口径で作れるの!?!

「費用無視の貫通特化50発と、費用を抑えた貫通特化を200発お願ひ。」

あ、費用無視したらどこまでかはね上がるかわからないし・・・。

「ああ、費用無視のほうは50発で3000万を目安にして。」

この程度なら支払えないことはないしな。最悪カジノで稼いでくればいいし。

「了解したのだ！」

「よろしくね〜」

俺は平賀さんの工房から出ていった。

：俺は疲れているんだろう。掛け軸が「直流こそ至高」から「直流を崇めよ」って変わっていることは、俺の見間違いだろう。そうに決まってるんだ。

寮に戻り、部屋の扉を開けようとする

ガチャリ

扉が向こうから開き、アリアが出てきた。

「アリア、どっか行くのか？」

俺はアリアに話しかけたが、アリアはフラフラと歩き、何処かへ歩いて行ってしまった。どうかしたのか？

俺は靴を脱ぎ、リビングへ向かった。

「ただいま。キンジ、お前またアリアとなんかあったのか？」

「起きたら殺すのか？アリアを。」

・・・え？

「殺さないわ。・・・あら、イブキ。おかえりなさい。」

「え？あ・・・ただいま。・・・何の話ですか？物騒な。」

すると、カナさん（キンイチさん）はソファで足を組み、

☒第2の可能性☒がある限り、アリアを殺さない・・・という事よ。」  
・・・詳しくはわからないが、今日のキンジとアリアを見てキンイチさんのアリア殺害計画は取りやめた・・・という事か？

「ある限り・・・ってことは、それが無くなったらまた襲うのか。何なんだ、その☒第2の可能性☒って・・・」

キンジはカナさん（キンイチさん）を睨みながら言った。・・・またってことは前もあったのか？いや、今日のか？殺気や殺意はなさそうに見えたが・・・。

「・・・ごめんね、教えてあげられないわ。ヘンに意識させたくないもの。」

そう言ってカナさん（キンイチさん）はソフアーからスクツと立った。

「創世記2章18・・・人、独りなるは善からず。我、彼に適うて・・・

バーーン

「主殿!! 漁師の者から初ガツオをいただきました!!」

「イブキ、農家の人からキュウリにトマト、山椒、そら豆、ミョウガを送ってもらったよ。」

「イブキ様、今日はごちそうですよ!! あら、キンイチ様、いらっしやったのですか?」

扉を思いつきり開けた音が聞こえたと思ったら、大きな発泡スチロールの箱を持った牛若、段ボールを抱えたエル、腕まくりをしたりサが入ってきた。

「イブキ、この前もらってきた酒があろう。あれを開けろ。」

「こいつあいい肴だぜ!! 竜ほどじやないがな!! ああ、エジソンは研究があるって言って血の涙を流してたぞ。」

師匠にベオウルフも・・・というかお二人、ほぼ毎日家で飯食ってない? エジソン・・・そこまで大事な研究があったのか・・・残念・・・。「初ガツオと聞いたなら黙っちゃいらねえ!! 良妻の意地、見せますとも!!」

「今までフアラオでしたのでビール造りは初めてなのですが・・・今日というハレの日のために作ってよかったです。」

すでに着物の上から割烹着セットの玉藻に、大きな甕かめを持ってきたミイラとメジエド様にニト・・・。ってニトそれ密造!!・・・まあ、バレなきやいいか。

「うむ!! 至高の肴には至高の酒よな!!」

ワインの瓶を両手に持ったネロまで・・・ってネロ!! あんたどこで買ったの!?

グーーーーーキュルルル

音が鳴ったほうを見ると、そこにはおなかを抑え顔が赤くなった力



ナさん（キンイチさん）が・・・

「食べてきますか？」

カナさん（キンイチさん）はコクリと頷いた。まあ、今日は華の金曜だし、酒解禁でいいかな。

「キンちゃん、実家から梅干しが来たよ。つて・・・キンちゃん・・・」

白雪が大きな壺を持って部屋に入ってきた。入った瞬間、瞳孔が開いたが・・・。

「ふっふっふ!!イブイブ、見よ!!この立派なビワを!!この理子を崇めよ!!」

立派なビワを持ってきた理子も入ってきた。・・・こいつは大宴会だな。一応アリアにも連絡しておくか・・・。そういえば・・・前もこんなことあったような・・・。

その後・・・酒を大量に飲まされ、酔っぱらったカナさん（キンイチさん）のカツラが取れたのは秘密だ。

若頭はないだろ・・・

キンジとアリアがまた喧嘩してアリアが部屋を出ていった。どうせ2〜3日で戻ってくるだろうとか思ってたなら、1週間たつても帰ってこない。こりや最高記録更新だな。アリアは「話しかけるな」というようなオーラを出しているためにキンジはカジノの件を話せないでいる。あ、そうだ。

「キンジ、カジノのあれあるだろ？俺も参加させてくれよ。」

「ん？お前単位不足してないだろ？」

「いや、ちよつとでかい出費があつてな。カジノで稼ぎながら、さらに金をもらえるってメチャクチャいい仕事と思わないか？・・・まあ、そのカジノに知り合いがいるからつてのもあるけどな。」

「お前・・・まあ、人数が心配だったから助かるけど・・・。」

「おう、まあ稼がせてもらおうわ。」

確実に3000万は吹っ飛ぶからな・・・稼いどかないと・・・。

さて、武偵高の夏休みは早い。何と7月7日には夏休みに入ってしまうのだ。で・・・だ。俺の前には二つの券がある。これは二つの違う商店街の福引でネロとベオウルフ、ニトの当てた旅行券だ。一つは海鳴温泉3泊4日の4人分券、そして、ロサンゼルス4泊5日の4人分チケット・・・。

このチケットのせいで、今年の夏の予定が決まった・・・が、2つ問題があつた。一つ、券が足りない。まあ、これはみんなでお金を出し合うという事で解決した。そしてもう一つ、俺の勘が

「行くなよ!!絶対に行くなよ!!絶対だぞ!!」

と言っているのだ。振りじゃなくてガチのほうだ。俺の勘は危機察知に関しては外れたことがない。なので行きたくないのだが・・・。

「主殿!!旅行楽しみですね!!」↑牛若

「日本の温泉は気持ちいと聞きます。楽しみですね。」↑ニト

「イブキ様!!今から準備しますね!!」↑リサ

「日本のテルマエに祭り・・・なんと楽しみであるか・・・。」↑ネロ

「折角だ。ハメを外すか。」↑師匠

「うふふ。滾ってきた……滾ってきましたよお」↑玉藻

「楽しいといいね、マスター」↑エル

「殴って蹴っていい汗かいて、汗を流す……。こいつあ最高だ!!」↑ベオウルフ

「旅行だ?!?しかもアメリカ!?開発を急がなくては!!耐久EXの本領を見せてやろう!!ぬっはっはっはっはー!!!」↑エジソン

これを目にして、行くのを反対できる人はいますか……。ということでは旅行計画が進行していった。

さて、俺達家族は7月7日に旅行に必要なもの(パスポートとか旅行靴とか……)を申請したり買いに行ったりしよう、そういう話になった。そして当日、新宿へ行こうと俺が玄関を出て外に出たところ、待ち伏せていた鬼塚中尉に拉致られた……。うん、なぜ?

「よおボウズ!!」

俺は今、C-11の中で第2中隊の面々に囲まれていた。

「……鬼塚中尉、なんで俺を拉致ったんですか?」

「梅干し作りの人手が足りなくてよ。だからお前を連れてきた。……あと、俺昇進したからな。」

そう言つて鬼塚中尉は襟章を見せた。……この人少佐になつてるよ。何があつたんだよ。

「ええ、私たちがあの後、色々やりましてね。結果昇進という事です。」

そう言つて神城さんも襟章を見せた。……中佐になつてやがる……。あれ、角山中隊長は?さすがに少将で中隊長はきついんじゃない?」

「この希信が説明しよう!!角山少将は今!!第4航空艦隊司令をやつていらつしやる!!」

ああ、少将になつたのか。……ん?では中隊長は?

「あの……じゃあ……。第2中隊中隊長は……」

「この希信である!!!」

そう言つて辻大佐(昇進してた)は軍刀を正面で杖のように持ち、い

つも以上の大声で言った。・・・この人が中隊長とか大丈夫なのかな・・・。

「・・・皆さん、昇進おめでとうございます。でも、言ってくれたらちやんと行きましたよ。なんで拉致ったんですか？」

「二」そのほうが面白いからな!!（ですね）（である!!）「三」

・・・俺がこんな部隊に所属していた、ということに改めて驚いたよ。

俺はそのままC―1で駐屯地まで拉致され、その日から4日間、梅干しが乗っている大量のザルを出し入れしたり、箸で1個1個丁寧に梅をひっくり返していたりしていた。

そういえば、雇った人にジミさんや博打仲間の山本さんとはともかく、両川さんはないだろ。両川さんは警官だぞ。・・・まあ、あの人勤務中に賭け事やつてる不良警官だけどさ・・・。

俺が帰った時、部屋の中ではいつも通りアリアがキンジをいじめている姿があった。よかった、アリアは戻ってきたのか

「イブキ、カジノ警備用の服が届いてるから試着しといてくれ。」

「おう、キンジありがとな。」

そう言っただ俺はキンジからビニールに包まれた服を受け取った。そのビニール上に紙が付いていた。たぶん演じる役でも書いてあるんだらうとでも思い見てみると・・・。

「やくざの若頭」

・・・黒のスーツに黒のワイシャツ、灰色のネクタイ、ごく丁寧にシール式の入れ墨まであらあ。

「おい!!これなんだよ!!やくざの若頭とか絶対警備に向いてないだろ!!」

「まあまあ、落ち着けて。」

「・・・なあキンジ、お前の役は？」

「青年IT社長。」

「キンジ、お願いだから代わってくれないかなあ・・・。」

俺がそう言うのと、キンジは俺の正面に立ち、両手を俺の肩に置いた。

「無・理。」

ですよねー。

月日は流れ、7月24日。俺とキンジは港区アクア・エデンにいた。今回の警備任務参加者は、俺、キンジ、アリア、白雪、レキ、ニトの6人。ニトは俺が誘った。何でも、キンジが「人数が足りない」と言ってきたからな。まあ、たぶんエジプト関係者が裏に居そうだから対策として連れてきた。で、その6人うちの女子のほうは早めに行くことになっているため、俺とキンジとは別行動だ。

「なあイブキ、ここの警備って本当にいるのか？中に入るだけでも大分嚴重だぞ。」

アクア・エデンに入るためには身分証明書、血液検査、持ち物のX線チェック、金属検査まである。武偵や警察、軍人は申請すれば銃刀の持ち込みはできるが、その申請にも一苦労だ。

「まあ、需要があるってことはいるんだろ。ちよつと早く着いたしなあ・・・。キンジ小腹が空いてないか？うまいカフェ知ってるんだ。」

そうやって俺たち二人はアクア・エデンの街を歩きだした。

「そういえばイブキ。若頭の役似合ってるぞ。周りの人たちがお前を避けていってるし。」

「キンジ、それは触れない約束だぞ。」

俺たちはアクア・エデンの一角にあるカフェバーに来ていた。

「キンジ、ここだ。ここのBLTサンドはうまいぞ。」

「へえ・・・、楽しみだな。」

カランカラン

俺は店の扉を開けた。

「いらっしやいませー。アレクサンドリアへようこそ……ひいひい!!」

「待って大房さん!!俺、俺だって。イブキだって!!」

青がかつている黒色の髪の毛のウエイトレスがあからさまに怯えた。俺は急いでサングラスを取った。

「あ、あれ?イブキさん?」

「そうです。イブキです。だからそんな露骨に怯えないで。ほら、他のお客さんこっちガン見してるから。」

俺がそう言うと、他の客は急いで視線を俺たちのほうから逸らした。

「……イブキさん。なんでそんな恰好を?」

「まあ大きな声で言えないけど……任務の都合上ね……。」

そう言ったら納得し、俺達をカウンターのほうへ誘導してくれた。

カウンターへ座ると、赤みがかつた茶髪で細目の色っぽいお姉さんが向かいに来て、水の入ったコップを2つ置いた。彼女はここのマスターだ。

「あらイブキ君。久しぶりね。」

「淡路さんご無沙汰してます。すいません、最近来れなくて。」

「いえいえ、軍人から武偵に転向でしょ。大変よねえ。」

相変わらず、しゃべってないのになぜか情報を持つてる……。

「……なあイブキ。ここってカフェじゃなくてバーか?」

キンジがジト目で俺に聞いてきた。キンジ君、確かにこの店は酒の瓶をドンと置いているし、俺は酒が好きだけど、さすがに昼間の仕事前からは飲まないから。

「うちは、昼間はカフェ、夜はバーをやってるのよ。二人とも、何を頼む?」

「BLTサンド4人分で。俺は紅茶、こいつにはコーヒーを。」

「ちよ……おま……。」

「かしこまりました。」

そう言って淡路さんは奥の厨房へ行ってしまった。

「イブキ、昼食ってるから2人分なんて食えないぞ！」

「何言ってるんだ、キンジ？俺が3人前食うんだけど？」

「キンジ、ここへ来た目的はBLTサンドともう一つあるんだ。」

そうやって俺は水を飲んだ。

「俺の勘がアクア・エデンで何か起こるって言ってるんだ。俺の勘の危機察知能力はすごいぞ。ビルに空港、エアジャック、全部外れたことがねえ。・・・まあ、結局避けられないんだけどな。」

俺がそう言うと、キンジは呆れたような表情で俺を見て言った。

「避けられないんじゃないぞ？」

「まあ・・・心持ちが違うだろう？・・・言ってる悲しくなるからそれ以上そのことは言わないでくれ。・・・で、だ。このマスターの淡路さんはアクア・エデンについて知らないことはない。情報のスペシャリストだ。」

「知らないことは知らないわよ。お姉さんは知っていることがちよつと多いだけよ。」

そうやって淡路さんは厨房から出てきた。

「BLTサンドはもう少しかかるから待っててね。」

そうやって淡路さんは紅茶とコーヒーを入れながらしゃべり始めた。

「イブキ君の連れてきた子は遠山キンジ君。イブキ君の幼馴染。両親ともに他界。兄はシージャック事件の時から行方不明。でも最近女装姿で再会したみたいね。」

キンジは目と口を大きく開けた。

「今日ここに来たのはキンジ君の単位取得のため、ピラミディオンのカジノの警備。イブキ君、若頭の役似合ってるわよ。キンジ君、砂糖とミルク入る？」

淡路さんがそう言うと、キンジは慌てながら「ブラックで」と言った。

「まあ・・・ありがとうございます。・・・淡路さん、単刀直入に言いますが、アクア・エデンで最近出たおかしい噂とかないですか？」

俺がそう言うのと、淡路さんは手を顎に当て、「そうねえ」と言いながら少し考えた後、

「最近、エジプト神話に出てくる頭がジャツカルのアヌビス？を見たって噂があるわね。それに海を走る人間や艦首と艦尾に長い柱をつけた船を見たっていう噂もあったわね。」

そう言っただ路さんは俺とキンジへ紅茶とコーヒーを置いた。うん、二ト連れてきて正解だったな。

「そうそう、日本では確認できない外来種のコガネムシが発見されたみたい。風紀班が全力で駆除してるみたいよ。このくらいかしら。」

うわあ・・・虫の駆除は大変だ。後で風紀班の二人に差し入れしておくか？

「淡路さん、ありがとうございます。」

「いえいえ〜常連さんだもの。少しはサービスしちゃうわ。」

「BLTサンド4人前、おまたせしました。ってイブキさん？お久しぶりです。」

ほんわかした声で紫がかった髪の毛のナイスバディなウエイトレスがBLTサンドを運んできた。

「やあ稲叢さん、久しぶり。最近色々あつてここに来れなかったんだ。

そうそう、こいつは遠山キンジ、幼馴染で仕事仲間。」

「初めまして、稲叢莉音です。」

「初めまして。」

すると淡路さんはくすつと笑い

「後は若い子たちに任せるわ。」

そう言っただ路さんへ去って行ってしまった。なぜニヤニヤしてたんだらうか・・・。

「稲叢さん、寮のみんなは元気かい？」

俺が稲叢さんに尋ねると、稲叢さんは少し顔を曇らせた。

「元気ですけど、エリナちゃん寂しがってましたよ。」

最近、忙しかったり怪我したりでアクア・エデンに来れなかったか



らなあ。

「最近、色々あつて時間がなかったんだ。で、今日これからカジノ警備の任務があつて、ちょうどエリナのとこのカジノで警備なんだ。稲叢さん、エリナは今日カジノにいる？」

俺がそう言うのと、稲叢さんは笑顔を浮かべた。

「今日、エリナちゃんは今カジノにいますよ。きつと喜びます。」

「それなら少し早めに行こうかな。・・・そうだ、風紀班の二人に伝言頼める？今俺武偵やつてるんだ。何か困ったことがあれば割安で依頼を受けるよつて。」

すると稲叢さんは首を傾げた。

「あれ？イブキさんつて軍人さんでしたよね。」

「武偵に出自になつたんだ。今は東京武偵高の二年生つてわけ。」

稲叢さんは納得したようだ

「イブキ、風紀班つてなんだ？」

キンジが俺に聞いてきた。

「あー・・・ここは賭博と風俗が合法の土地だ。そんな地だと治安が悪くなる。で、警察ができないようなことをして治安維持に努めるのが風紀班だ。」

本当は裏に吸血鬼とか人外とか関わってくるけど、そこら辺は軍機だからな。

俺と風紀班との関係は、俺がHS部隊に所属していた頃まで遡る。俺の所属していた第2中隊は海外問題の処理が主な任務だ。しかし、なぜかアクア・エデンは第2中隊の管轄だった。そのせいで何度かここでの任務があつた。その時、俺と歳が近いと言う理由で矢来さんや布良さんと協力して任務に当たっていた。

「なるほどな。軍関係で？」

「これ以上は軍機。」

稲叢さんとキンジと俺で雑談しながらBLTサンドを食べていたらそろそろ時間が近づいてきた。

「キンジ、少し早いけど行くか。」

「そうするか。ごちそうさま。」

「あ、長々と喋っちゃってすみません。」

「いいって。．．．とちようど100円玉しかないや。いいかい？」

「大丈夫ですよ。」

俺は財布から大量の100円玉を出した。

「行くよ。1、2、3、4、．．．．．13、14、あれ？今何時だい？」

「え？えつと．．．3時です。」

「24時制だと？」

「15j．．．」

「16、17、．．．．．よしぴったり。」

そうやって俺は稲叢さんの方を向くと、

「はい、確かに頂きました。」

そうやって稲叢さんは満面の笑みを浮かべた。おいキンジ、そんなに睨むな。からかっているだけだ。ちゃんと料金は払うぞ。

「稲叢さん、1枚足りないから。はい。」

「え？ちゃんと料金はもらいましたよ？」

「いやいや、もう一回数えてみなって。」

俺がそう言うと、稲叢さんはもう一回数え始めた。

「あれ？100円足りないです！」

「だから、はい。」

「ちゃんと数えたのに．．．」

そうやって稲叢さんは100円玉を受け取った。この子、ちよつと天然過ぎるんだよなあ．．．。心配だ。

「それじゃ、伝言よろしくね。ごちそうさま。」

「はい、ありがとうございました！」

金を貸すのもほどほどに・・・

アレクサンドを去った俺たちはピラミディオンに来ていた。ピラミディオンはアクア・エデンの中にあるホテル&カジノで、アクア・エデンでも屈指の大きさを誇る。形は大きなピラミッド状になっている。設計者曰く、「日本に漂着したピラミッド状の物体」をイメージしているそうなの。

さて、自動扉を開けて中に入るとクーラーが効いているエントランスホールに出た。うん、客が俺から遠ざかってゆく……。ここから、カジノホールへ向かう。

「両替を頼みたい。今日は青いカナリヤが窓から入ってきたんだ。きつと、ツイてる。」

キンジが先に両替をし、中に入って行った。俺が先に行くとは面倒になりそうだからな。

「両替を頼む。」

そう言つて俺が200万を出したところ、受付のお姉さんが涙目になった。そこまで怖いかな？

カジノホールに入ると海とつながっているプールが周りを囲っているある。これはバニーガールのお姉さんが水上バイクで移動するためのものだ。

「ドリンクいかがですかー。」

「カクテル、ウイスキー、コーヒー全て無料でお配りしてまいります。」

「ご注文の方は近くのウエイトレスをお呼びください。」

……俺はいま任務中。酒を飲むなんてことはない!!

「ウエイトレスさーん。ウイスキーください。」

知ってる？江戸時代は朝昼夜普通に飲んでたらしいぜ。

「はぁ……。イブキ!! 仕事中に酒をたしなむとはどういうことですか

!!」

そう言つて俺の後ろにバニーガール姿のニトがいた。あれ？やけに似合ってるね。

「い、いやあゝ。」

「だいたい、イブキは同盟者としての自覚があるのですか!!・・・」  
やくぎの前にバニーガールがズカズカと出てきて説教を始めてと  
いうので周りのお客さんが集まってきている。

「まったく。飲むのならこれにきなさい。」

そう言つてニトはビールを俺に差し出した。え？ビールつて酒で  
しよ？

「ビールであれば問題ないです。パンとビールを弁当にしていたのを  
よく目にしていました。」

それは古代エジプトであつて、日本じゃないと思うんですけど。  
まあ、いいや。いただきます。

「どうもすみませんでした。ありがたくいただきます。」

「ええ、そうしてください。」

そう言つてニトは去つていった。あのニトクリス陛下、当時ビール  
は冷やさなかつたつて言うのは知っていますが、今は冷やしたビール  
が一般的・・・冷えたビールを下賜してくれると嬉しかったなあつ  
て・・・。

さて、俺はビールを飲みほした後、特等ルーレット・フロアに行つ  
た。特等フロアでは掛け金の最低額が100万という膨大な金額で  
あり、特別会員パスが無いと見物だけでも金がとられる。・・・まあ、  
特別会員パス持つてるんだけどね。で、中に入るとそこには大きな  
ルーレット台につく、金ボタンのチョッキを着たレキがいた。うん、  
周りに人もいないしやりやすいな。

「やあ、ではやつてもらつていいかい？ああ、もう投げちやつていい  
よ。」

レキはコクリと頷き、球を投げた。

さて、ルーレットはディーラーが「ノー モア ベット」(NO M  
ORE BET)と言つてレイアウトの上に手をかざしたらその時点

でベット(台にチップを置くこと)は終了だ。なので玉が回っている間も「ノー モア ベット」(NO MORE BET)と言わなければ、ベットは続けて大丈夫なのだ。ついでに俺が最も得意なのがこのルーレットだ。師匠達との訓練のせいで目と状況把握が良くなったため、落ちるところをけつこうな確率で当てることができるようになった(8割程度)。今回、レキのボールはあまりにも素直な回転のおかげで予想がしやすい。これは……行ける!!

俺は25番に全額(200万)を置いた。

「NO MORE BET」

レキがそう言ってテーブルをなでるような仕草をした。やけに発音良いな。

カツン、カツ、カツ

玉が25番に入って行った。

「赤25。プレイヤーの勝ちです。」

……やつべ調子乗り過ぎた。配当は200万×36≒7200万。当初の目標の5000万と元金の200万差し引いても2000万はある……。よし、遊ぶ金もできたし、エリナのところで遊ぶか。

「レキ、なんかあったら知らせろよ。」

「はい。」

そう言つて俺はレキにチップを渡し、特等ルーレット・フロアを出ていった。

さて、カジノでは会員パスに一時的にチップを預けておくことは可能だ(簡単に言うとSuicaのようなものか)。盗難などを防ぐためでもある。なので俺は稼いだチップを両替機のような機械で会員パスに入金(?)をしようとしたところ……。

「クツソー!!また負けた!!」

「まあまあ。両さん、今日はついてなかっただけさ。」

聞きなれた声が聞こえる。俺はその声が聞こえたところへ行くと、そこには両川さんと山本さんがポーカーをしていた。

両川さんは亀有にある交番の警察官で鬼塚少佐の友人の一人だ。

この人、かなりの不良警官で、パトロール中にギャンブルは当たり前、副業をして本職（警察官）の給料より多い金額を稼いでいたりする。そのため、給料は一般の人よりだいぶ多いが、それ以上の借金をしているためにトータルマイナスという……。そんな問題児ではあるが、人望があつたり、肉体は某G以上の生命力があつたりと、さすが鬼塚少佐の友人だなあとと思う。今も制服を着てきているということは仕事をサボっているのだろうか。

山本さんは博打仲間だ。よくアクア・エデンで博打をしているため、部隊のみんなと仲良くなつた（その時メガネさんが大分慌てていたがなぜだろう）。歩き方がどうも訓練をした歩き方なので一般の民間人には見えない（軍人、警察、武偵などの訓練を受けたのか？）。時々、部下であろう人たちに捕まって強制的に仕事場へ連れていかれることもよくある。

簡単に言うと、二人とも博打仲間だ。

「両川さん山本さんお久しぶりです。両川さんまた負けたの？」

「お？村田じゃねえか、久しぶりだな。何だつてそんな恰好してるんだ？ところで村田、ちよつと金貸してくれないか？」

副業で結構稼いでるくせにギャンブルとおもちや、借金で給料がすぐ無くなるのが両川さんの悪いところだ。

「やあ、村田君。最近は見なかつたけど何かあつたのかい。」

そして山本さんは逆にギャンブルはめっぽう強く、トータルでマイナスになることがほとんどない。本人曰く、稼ぎ過ぎてモナコのカジノのブラックリストに入れられてしまったそうだ。今日も見える限りだいぶ儲かつてるな。

「いやあ、最近武偵に出向になつちやいました。任務の関係でこんな格好してるんですよ。まあ……。出向の後も事件だ怪我だで……。山本さん葬式に来てますから知ってますよね。」

「葬式い〜？」

「ああ、村田君は一回死んだんだよ。」

……。まあ、そうなるけどさ。その言い方は誤解を招くぞ。

「村田が死んだあ!?!じゃあ、ここに居るのは幽霊とでもいうのか!?!」

そう言って両川さんは俺に指をさした。

「両川さん、俺医者者の誤診で一回死んだことになっちゃったんですよ。」

俺がそう言っていると両川さんはくつついている眉をひそめた。

「そいつあ災難だったな。」

「まったくですよ。起きたら坊さんがお経あげてるんですよ。あと少し起きるの遅かったら燃やされてましたね。」

両川さんが引いた。

「ほんと、村田君が復活したときは驚いたねえ。」

「ほんと、起きたらお経読まれてるんですよ。何て不謹慎なっと思いましたがね。」

「そうだ村田。ちよつと金貸してくれねえか？10倍にして返すからよ。」

両さんが俺に両手を出した。

「両川さんまたスツたの？両川さんに貸したお金まだ返してもらってないんだけど。」

聞いた話だと両川さんのボーナスを巡って、ツケがたまってる商店街の人たちや借金取りと戦争してるとか聞いたけど……。でもまあ、色々世話になってるしな。

「はあ・・・両川さん、偶然さつきルーレットで大当たりしたんで財布に余裕が有りましたね。ちゃんと返してくださいよ。」

俺はそう言って百万のチップを両川さんに渡した。

「さっすが村田!!ありがとよ!!。」

「村田君、いいのかい？そんな大金。」

山本さんが心配した。

「百万なら・・・って思うくらい大当たりしたんで大丈夫ですよ。」

「山本!!早く席に着けよ!!村田も入るか!？」

両川さん・・・金が手に入ったらすぐく元気になるな・・・。

「いや・・・久しぶりに来たんでエリナのところでやろうかと。それに鈍ってるのに山本さんと勝負はきついですよ。」

俺がそう言うと、二人は「あゝ・・・」とでも言いそうな顔をした。

「村田・・・お前あいつにゾツコンだしな。」

「村田君、彼女と何時くつつくんだい？」

二人とも何を言ってるんだ？

「エリナとは友人の関係ですが？」

そう言う二人は「はあく」と大きなため息をついた。

「村田君はまだ若いからね。」

「そうだな。やるか。」

そう言っ二人は台に座った。・・・気にしないでエリナのところへ行くか。

「おー？おー！イブキー！」

台に行くくとバニーガールとディーラーの服を足して2で割ったような服を着た銀髪の少女・・・エリナが驚いた。

「久しぶり!!最近会わなかったから心配してたよ!!」

「いやあ、最近あまりに忙しくて。武偵に出向になっててね。ほんと、任務地と病院に行ったり来たりで・・・。」

「病院!?イブキ怪我したの!？」

「ちよ、触るなって!!」

エリナは俺の体をベタベタと障りだした。

「そこまで大きな怪我はしてないから。」

「よかった。」

そう言っエリナは体を触るのをやめた。

「それじゃイブキ、どうしよつか?エリナが相手してあげるから、お金かけなくてもいいよ?」

「イヤイヤ、ちゃんと売り上げに貢献するから。」

俺はそう言っチップを出した。

「おう、イブキ。今日は大分持っってきたね。」

「さっきルーレットで大当りしたからね。」

そう言っエリナが頬を膨らました。

「むく、イブキ。エリナに挨拶する前にほかの子と遊んでたんだ。」



あの新人の子かわいいもんね。」

・・・なぜ妬く。

「今日これたのは任務があつたからこれたんだ。それに支出が最近バカでかくて。そのせいでまず必要資金をルーレットで稼ぐ必要があつたんだ。」

そう言つてもエリナは不貞腐れたまんまだ。

「・・・今度からエリナのところへ先に行きます。」

「・・・いいよ。許してあげる。」

そう言つてエリナはにっこりと笑つた。

「ではエリナ。よろしくね。」

「うん、任せて!!」

俺は椅子に座つた。

「こうして勝負するのは久しぶりだね。今まで通りブラックジャックでいい?」

エリナは両手を台に着き、前かがみの状態で訪ねてきた。その体勢だと、ちょうど胸の谷間が・・・眼福眼福。

「ああ、よろしく。」

「それじゃ、さっそく。」

そう言つて慣れた手つきでエリナはシューターからカードを引いていく。

「ルール、忘れてないよね。」

「おい、そこまでの期間は開けてないよ!」

「にひひ、手加減しないからね。」

「久しぶりだから最初は手加減してくれると嬉しいかなつて。」

俺の前に二枚のカードが来た。ハートのAとクローバーの5だ。

「それじゃ、ヒット?ステイ?」

「ヒット」

「ほっほ、強気だね。」

楽しそうにエリナはカードを引いく。するとダイヤの4が来た。

Aは1か11かを任意で決めていいから・・・計20。これなら勝てるか?

「ステイで」

するとエリナは自分のカードを表にした。ハートのQとJ・・・。

Q、J、Kは10とカウントされるから・・・計20。

「20対20。初戦は引き分けだね。」

「エリナは運がいいな。」

まさか2枚で20出すとか・・・。

「よし、次はちゃんと勝つからね！あ、そうだ！お金とは別にまた罰ゲームかけて勝負しよか？」

そう言つてエリナはさらに前かがみになった。

「今度はもちろん、脱衣もありで。何だったら・・・その先でも、エリナは構わないよ？にひひ。」

「・・・エリナさんよ、前それやろうとして怒られたでしょ。それに今、遊んでるけど任務中なんだ。だからこんな格好してるんだよ。」

そう言つて俺はサングラスを指さした。すると周囲から異様な気配が・・・。襲撃か？つてエリナの後ろに何かいる!?

「それにもう勝負やつてる暇はないだろうしな!!」

そう言つて俺は立ち、台を飛びこえエリナを抱きしめながら14年式を発砲した。

「お、イブキは激しいのが好きなんだね。エツチなんだからもう。」

「そんなこと言ってる場合かよ!!エリナ!!ちゃんと隠れてろよ!!」

上半身裸で越布を巻いたアヌビスがワラワラと湧き出した。クソツ、民間人が大量にいるから迂闊に発砲なんてできない!!しかも障害物が多いから刀も使いづらい。俺は14年式をしまい38式と銃剣を出した。

「出ませい!!」

聞きなれた声が聞こえた。すると周囲のアヌビスがスーつと砂に帰っていった。

「まんまとやられました。やはり私はあまりに未熟の身。」

「二ト!!ここ頼めるか!？」

「ええ、任せてください。」

流石はフアラオ、何とかかなりそうだ。俺は民間人を避難させようとする……

「あー!!!わしの一千万!!!」

……聞きなれた声だ。そっちの方向へ向かうと両川さんが一体のアヌビスを追いかけていた。

「まてー!!!わしの一千万!!!」

あ、勝ったんだ。

「まてー!!!」

そうだ、避難させないと。俺は両川さんを追いかけた。

「両川さん、避難!!避難して!!」

「わしの一千万を返せー!!!」

コイツは聞いてないな。

両川さんが追っていたアヌビスは驚いたことに周囲にあるプールへ向かうと、水面を走りだした。すると両川さんが近くにあったアヒルさんボートに飛び乗ったので、俺も急いでそのボートに乗り込んだ。

「両川さん避難、避難してくださいって!!」

「ああ!!村田!!あの野郎に追いつけるように漕げ!!」

そう言っただけ両川さんはペダルを全力で漕ぎ出した。………シヨウガナイ、諦めよう。

「うおおおおお!!!」

二人で漕いだアヒルさんボートとアヌビスは一進一退の攻防を続けていた。ボートがスピードを上げればアヌビスもスピードを上げ、アヌビスがスピードを上げるとボートもスピードを上げる……完全に颯ごっこだな。

しばらくすると、アヌビスが水面から急にジャンプをした。なぜ?と思っただけ周囲を確認すると……目の前にでっかい異様な船が浮いていた。

長さは50メートルほどであろうか。細長い船体は金銀で装飾され、艦首と艦尾は塔のように上を向き、長い櫂が何本も横から生えて

いる……。ってぶつかる!?

「両川さん!!前!!前!!」

「ん?ってうわあああああああ!!」

みんな知ってる?船って簡単に止まらないんだよ。

ズドオooooooooo!!!

猛スピードのアヒルさんボートと謎の船が衝突し、アヒルさんボートが沈み始めた。

「わしの一千万——!!!」

両川さんは一千万のチップを取り返すために裝飾された謎の船に乗り込んだ。

「クソツ!!チクシヨウめ!!べらぼうめえ!!」

このままではアヒルさんボートと一緒に沈んじゃう。俺も謎の船に乗り移った。

乗り移った先には目と口を丸く開けたキンイチさんと、あちこち包帯にガーゼ、松葉づえをついたエジプトのフアラオっぽいものにコスプレした少女、転がってゆくチップを追いかける両川さんがいた。……なんてカオス。

起床ラツパはやメテ・・・

アヒルさんボートが沈んで行く・・・あれを弁償するのは誰になるのだろうか。あれって確か一隻80万以上したような気がするんだけど・・・。

「裏社会でイブキとジョニー・マクレーがいると計画が破綻するって言う噂は聞いたことがあったが・・・ここまでとは思わなかったな。」  
現実逃避をしていると、キンイチさんが我に帰ったのか喋り出した。・・・俺って裏社会で有名なのか。やだなあ・・・。

「それは違いますよ。たかが一人二人の異分子程度で破綻する計画を立てたほうが悪いです。」

そう言った瞬間、船が傾き始めた。

「お前がムラタイプブキか!!この妾の計画を邪魔しおって!!殺してやる!!まず生きたままm・・・きゃー!!!」

包帯ガーゼ・松葉杖のフアラオコスプレ少女は何か言っていたが、船が傾いたせいでバランスを崩したのだろうか?近くにあった棺(?)と共に海へ転がり落ちてしまった。

そして、フアラオコスプレ少女が海に転落すると、船が一気に傾いた。これ、沈むぞ?!

「ワシの一千万取り返したぞー!!!」

両川さん、あんたまだそれ探してたの!?

「キンイチさん両川さん!!避難、避難ー!!!」

「アリア、アリアー!!!」

そうして、俺と両川さん、キンイチさん、水上バイクで近くにいたキンジは海に引きずり込まれていった。

俺は海に引きずり込まれた後、必死に水面へ向かって泳ぎ出した。海軍で沈む船からの脱出方法、海に引きずり込まれた時の対処方法を

習っていてよかった。なんか、初めて軍に所属してよかったと思う。  
「プハッ!!」

水面に出て辺りを見回すと、角材に捕まる両川さん、浮き輪につかまって気絶しているキンジがいた。

「やつと村田も上がってきたか。」

両川さんが軽く手を上げて言った。キンイチさんとフアラオコスプレ少女は周りにいない。そのことを両川さんに聞いたが

「ん?そんな奴知らんぞ?」

あんた、船の上ではチツプだけを見てたのかよ……。まあ、キンイチさんは大丈夫だろう。フアラオコスプレ少女はキンイチさんの仲間みたいだし心配しなくていいか。

でっかい方の船が沈んで5分くらいだろうか、モーターボートが3隻ほどこつちへ来た。お?救助してくれるのか?

「こらあああああ!!!両川あああああああ!!!」

「ゲエ!!!部長!!!」

3隻のうち、先頭を走る1隻にチョビ髭の警察官が身を乗り出して怒っていた。両川さんはそれを確認するなり必死に泳いで逃走を始めた。

「サボってギャンブルをするとは何事だ!!!馬鹿者おおおお!!!」

「ひえええええええ!!!」

うん……。あの人は両川さんの上司、大田部長か。時々サボっている両川さんを叱って、そのまま交番へ連行してるのを見る。今回もサボってるのがバレたのだろう。

「イブキ君ほら手出して。」

「イブキ。手を出しなさい。」

「イブキ、心配したんだよ!!!」

俺は山本さんと二トに引き上げられた。エリナ、海水が苦手なのに良く来れたな。キンジのほうも別のボートで白雪に回収されてる。

「まああああああてええええええ!!!両川あああああ!!!」

「ほ、ほんの出来心なんですうううう!!!」

二人はまだ追いかけてっこをしているようだ。

「あの二人は放っておいて大丈夫なのですか？」

「ああ……。ニト、あの二人はよくこんなことやってるから。いつも通り放つとくのがベストだよ。」

俺達は二人を置いて、アクア・エデンに帰っていった。

「馬つ鹿者お!!!なんで貴様はそういつもいつも……」

「ビエく!!!部長、すみませんでしたく!!!」

俺たちはあの後、学園島に戻った。そこで俺はアリアが誘拐されたことを知った。どうしよう……。アリアはどこに連れていかれたかわからない。それにキンジもいつ起きるかわからない。結局、その日は寝ることにした。

「起きなさい!!」

なんかニトの声が聞こえるような気がする……。

「お嬢ちゃん、これをかければ一発だ。」

鬼塚少佐の声も聞こえる……。なんて夢だよ……。

ぱーぷぱーぱーぱーぱーぱーぱー……

起床ラッパ!!??

俺は急いで飛び起き、近くに置いてある着替えを探したが……。ない!?周りを見ると笑っているニトと鬼塚少佐が……。

「なんて起こし方するんですか!!」

起床ラッパで起こすとか心臓に悪すぎるぞー!

「うるせえ!!」

ガツン!!!

「グハア!!!」

俺は鬼塚少佐に殴られた。クソツ!この自走式暴力装置め!!

「・・・で、起こしたと言うことは何か進展でもあったんですか。それに、なんで鬼塚少佐がいるんです?」

チラリと部屋の時計を見ると朝の4時。すると、部屋の扉が開き理子が入ってきた。

「あ、イブイブ起きたんだ。おはよーございますー!」

ビシツと両手で敬礼・・・この理子式の敬礼は慣れないな。

「アリアの居場所が分かった。付いて来い。」

裏理子か・・・ふざけてられないか。

途中で合流したジャンヌと理子に連れられて、俺、ニト、鬼塚少佐は車輛科に向かいながら状況を聞いた。

「東経43度19分、北緯155度03分。太平洋、ウルップ島沖の公海。理子がアリアにつけといたGPSと白雪の占いはこれと同じことを言ってる。」

ち、千島列島ですか・・・。この世界の歴史では北方領土（択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島のこと）は太平洋戦争終結後も防衛戦として戦い続けたおかげで（アメリカの支援もあり）日本の領土となっているが、樺太・千島列島問題がロシアとあり、それで今も揉めている・・・。その問題の千島列島沖かよ。ハマすると第二次日露戦争になるぞ・・・。

「こいつぁー面倒な場所に連れて行ったものだな。」

「そして・・・アリアの状況だ。」

「アリアは今、パトラの呪いにかかっている。撃たれて24時間後確実に死ぬと言う呪いだ。逆に言うと、24時間以内なら生きている。」  
「なんで、そんな呪いを?」

「パトラはイ・ウーのNo2だったが素行が乱暴で退学させられたの



だ。」

すると今度は理子が喋り出した。

「パトラには誇大妄想のケがあるんだよ。自分は生れながらのファラオだと思い込んでいる。教授が死んだら……自分がイ・ウーのリーダーになって、自分の王国を作るための戦争を起こすつもりなんだよ。まずはエジプトを支配して、いずれは世界を征服しようとする。本気で。」

……とりあえず、一つわからないことがある、と言うことが分かった。

「なあ……その……丁寧に説明してくれたことは有難いんだが……その」

パトラ「って誰だ？」

すると二人は目と口を大きく開きそのまま固まってしまった。少し経ったら我に帰ったのだろう、勢いよく喋り出した。

「貴様!!パトラを知らないのか!？」

「いや……ホント誰のこと?」

「イブイブ……あの船の上でファラオっぽい人いなかった?」

「ん?……そういえば眼帯、包帯、ガーゼ、松葉杖の重傷者セツトつけたファラオのコスプレ少女がいたっけ?」

「そ、そんな人がいたんですか?」

ニトは引いた。

「ああ、なんか喋ってたような気がするけど、船が傾いた時に近くにあった棺と仲良く海に落ちてったぞ。」

「……イブイブ、多分その人。」

「イ・ウーってやっぱり変な奴が多いんだな。」

理子にジャンヌにヴラドにシャーロック……変人奇人ばかりじゃねえか!!

「だが……何故そんな包帯やガーゼを?」

ジャンヌが悩み出した。その時、理子は何か閃いたのか、急に自分の胸に手を入れ、ガサゴソと何かを探し、取り出した。玉藻からもらったお守りだ。……理子、お前どんな所にしまってたんだよ。……

と言うか、そのお守り変なオーラ出してると。

「そういえば、……これ持ってたらく近くに虫の死骸が山積みになってたんだよね。」

え？言われてみれば……もらってからずっとポケットの中に入れてたんだが、外のベンチに座って5分も経つとカナブンモドキの死体が山になってたな。

「理子もか？そういえば玉藻が呪術の無効と、かけた野郎に倍で呪術返しするものですって言ってたな。」

と言うことは、もしかして……あのお守り持ってた全員分の呪いが倍になって返ってきたと。自業自得だけど……同情が禁じ得ない……。

「ゴホン……で、パトラはイ・ウーのN02でな。名前から察しがつくだろう？パトラはクレオパトラの子孫だ。古代エジプト思想にかぶれた本人は自分がクレオパトラ七世の生まれ変わり」と称しているがな。」

イ・ウーのN02……ということは頑丈なんだろうなあ……。平賀さんから貫通特化の弾丸をまだ受け取ってないぞ……。って何かオーラを感じる!?俺は感じた方を見ると……そこには……俯いたニトが……。

「あの……ニトクリス陛下?」

「イブキ、私は未熟なアラオです。ですが、長きに渡ったエジプトを再建させようと努力した彼女を知っています。私は彼女を尊敬しています。エジプトは滅びましたが……それは運命だったのでしよう。この国で言うなら『盛者必衰』でしたか。」

うーん「栄枯盛衰」じゃなくて「盛者必衰」か……これはまた……。「エジプトは滅び異民族に支配されました。しかし彼らは……文字も文化も神話も忘れても……エジプトの再建ということを忘れませんでした。滅びてから何百年何千年かけて民は努力し、エジプトを再建・独立させることができました。その努力を……無意味なものにする!?私は未熟なアラオですが……それを許すことができません!!」

まさに王として、威厳をもってニトは言った。

なるほど・・・だから「盛者必衰」ね。平氏は壇ノ浦で負けて散り散りになったけど、平氏の血を引く織田（自称だけど）に羽柴（自称でその後、藤原も自称してる）が再び源氏を倒して、また負けても今度は倒幕で（有名人としては木戸孝允、後藤新平、小松帯刀）（でも普通に倒幕側に源氏混ざってるけど）再び国の中枢へ・・・そう考えると平氏って化け物だな。源氏も化け物だけどき。カッ

でもとりあえず・・・ここで言われても・・・。

「ニト。みんな見てるんですけど・・・。」

ニトはハツと我に返り、周りを見た。理子、ジャンヌ、鬼塚少佐がジーンとニトを見ている。ニトの褐色の肌が赤に染まっていく・・・。「なぜ止めなかったのですか!!?」

ガスツガスツガスツガスツ!

ニトは持っていた杖で俺を殴り始めた。ってちよつと待つて!!それ地味に痛いから!!そのクチバシ(?)みたいな部分で殴らないで!!「イヤイヤイヤ!!急すぎて止められなかったから!!」

「それでも止めるのが同盟者でしょう!!」

「ンな無茶な!?!」

ガスツガスツガスツガスツ

「え?ニトニトってニトクリスなの?」

理子が聞いてきた。ってニトニトってなんだよ。・・・って、もうバレてるようなものかね。

「どうする?ニト。」

「・・・もうバレてるようなものですし、知っても普通は信じないでしょう。」

そうか・・・。言われれば、普通は信じないよな。

「ニトは古代エジプトのファラオ、ニトクリス本人。生まれ変わりとかじゃないぞ。なぜか現代に蘇った。」

正確には俺が呼んだ・・・呼んだって言っただけなのか?俺がこのことを言うとき人はほかんとした。

「ボウズ・・・」

鬼塚少佐が深刻な顔をしながら訪ねた。

「さっぱりわからねえ……。」

「ですよ。……普通蘇る、とか理解不能ですよ。」

俺も当事者じゃなければ信じねえよ、こんなこと。すると、鬼塚少佐は深刻な顔のまま、ゆっくりと首を横に振った。

「そうじゃねえ……。最初から何言ってるかわからねえ……。」

「最初から!?!?」

え?イ・ウーって何?ってところから!?

「イブキ……あまり人にイ・ウーのことは教えたくないのだが……。ジャンヌがそつと俺に耳打ちをした。」

「いや……この人☒☒通りすがりのタコ☒☒だから。無関係じゃないぞ。」

と言った瞬間、バツと理子とジャンヌは鬼塚少佐から離れた。

「ちよ!!おい!!わかってないからってそこまで引くことないだろ!?!」

……三角諸島沖で潜水艦見つけたからって言って、辻さんと一緒にハッチこじ開けて中に入り……。イ・ウーの生徒たちを薙ぎ払いながら前進、シャーロックと二人がかりで押され気味だったとしても、己の肉体一つでシャーロックといい勝負してた化け物……。そう思うと、改めてこの人が化け物だって思えてくるな……。ん?俺?俺はそこら辺によくいる普通の軍人ですから。

「鬼塚少佐、三角諸島での潜水艦憶えています?」

「ああ。」

「イ・ウーって言うのはその潜水艦の乗組員や組織のことを言うんですよ。」

まあ、間違っていないだろ。すると鬼塚少佐からオーラが……。なぜか後ろに不動明王っぽいものが見える。

「あいつらのことかア……。あの時の宣戦布告……許しちゃねえぞ……!!!」

それは単に鬼塚少佐が勝手にそう受け取っただけでしょ。

「鬼塚少佐、次☒☒通りすがりのタコ☒☒やったら軍法会議って角山少将にきつく言われてますよね!!約束破るんですか!!」

「うっ……。だがよ……。」

「だがよ、じやないですよ!!あの事件、もみ消すのは大変だったって角山少将は愚痴ってましたよ!!」

そう言った後、俺は鬼塚少佐にそつと耳打ちをした。

「ブログ・・・この子達にバラしますよ。」

それを言った瞬間、鬼塚少佐からオーラが出なくなった。不動明王っぽい奴も見えない。

「そうだな。みんな、のど乾いてないか?ジュースを買ってこよう。」

そう言っつて鬼塚少佐はどこかへ行っつてしまった。・・・ブログはそこまで隠したいことなんだ。・・・これは使えるな。

「イ、イブキ・・・。貴様は何をしたんだ?」

「いや?これ以上やったら軍法会議ですよって言っただけだ。」

「パトラの戦い方ってどういうのなんだ?どうせ、耐久か体力が化け物なのか?」

「お前は何故そう考えるんだ。」

ジャンヌは頭を押さえた

「いや、だってな。今までイ・ウーと戦ってきそつとしか思えないんだよ。戦闘後、高度6000〜7000メートルを飛び降りて、そのまま海を10キロ程度遠泳した奴だろ。一発貫つたら上半身と下半身がサヨナラどころか木っ端微塵になる威力の銃をゴム弾とはいえ、何発も喰らってるのに肋骨数本が骨折するだけで済んだ奴だろ。拳の果てに何をやっても死なないHPチートだろ?イ・ウーは頑丈な奴ばつかりとしか思えないんだよ。」

おれがそう言っつと、ジャンヌと理子は顔をそらした。

「で、どんな戦い方をするんだ?」

するとジャンヌが説明をしたらした。

「パトラはピラミッド型の建物がそばにあると無尽蔵に魔力を使える・・・。お前のように言うなら・・・ブラドはHPチート、パトラはMPチートというところか。後はニトクリス陛下に聞いたほうが早いだろう。」

そう言つてジャンヌはニトを見た。

「ジャンヌよ。今の私はただの少女ニトクリスです。畏まらなくても結構ですよ。さっきのは私が未熟であるがゆえになつてしまったものなのです。」

「しかし……。」

「まあ、ジャンヌ。ニトは生前楽しめなかつた青春をここで楽しもうとしてるんだ。畏まられたら、楽しめないだろ。」

「そういう事です。」

そう言つてニトはにつこりと笑つた。

「わかりまし……いえ、わかつた。」

「よろしい。」

そう言つて二人は握手をした。うん……仲良きことは良いことだな。

「ジュース買つてきたぞ。」

鬼塚少佐が戻つてきた。

「そういえば、なんで鬼塚少佐が来てるんですか？」

「あ、そうだったな。お前に渡すものがあつてよ……。」

そう鬼塚少佐が言つた時、田中さん、岩下さん、メガネさんが走つてきた。

「整備終わりました。」

「おう。」

「あの整備つて……。」

「ああ。何故だか分かんねえが、連合艦隊司令長官の山本よおろく四十六大將から零式水偵をうち経由でお前に渡せて命令があつてな。何でも旧式だから何しても構わないつてよ。」

「え？俺、連合艦隊司令部との繋がりとかありませんよ。」

「俺もなんだよ……。お前たちもないよな……。」

鬼塚少佐が田中さん、岩下さん、メガネさんに聞いても。

「ないです。」↑田中さん

「ないツス。」↑岩下さん

「え？あの……カジノの山本さんでは……。」↑メガネさん

そうメガネさんが言った。え？

「何言ってるんだ？あの人は違うだろ。」↑鬼塚少佐

「違いますよね。」↑俺

「違うだろ、あのおっさんは。」↑田中さん

「どう考えても違うツスよ。」↑岩下さん

「え？・・・ち、違い・・・ますか・・・。」↑メガネさん

この世界では零戦（ゼロ戦、零式艦上戦闘機）と零式水偵（零式水上偵察機）はつい最近（と言っても1980～1990年代前半）まで生産、運用されていた長寿兵器だ。と言っても零戦は二人乗りにして初期練習機、零式水偵は水上機用の練習機&機上訓練機&カタパルト訓練機だが。零戦は着陸速度が遅く、癖がなく、安価な割に足が頑丈で無茶が効くということに使われ続けていた。零式水偵は3人乗りのため訓練機材を乗せるのに向いていて、滞空時間が長い、武装が無いに等しいので他国との問題にならない、などの理由だそうだ。そのため、零戦と零式水偵は結構有り余ってるんだが・・・まさかタダでもらえるとは思わなかったな。

「マジかよ・・・。」

「本当は私の乗ってきた~~機~~オルクス~~機~~でいかせてやりたいが、あいにく武藤がまだ整備中だな。」

ジャンヌがそう言うと、今度は鬼塚少佐が訪ねた。

「ちゃんとGPSにコンパスは正常に作動してる。ところでボウズ・・・飛ばし方、覚えてるよな。」

「覚えますよ。あんな小さいときに無理やり覚えこまされたんですよ・・・。」

鬼塚少佐との免許取得訓練はきつかったよ・・・。

「ところで・・・理子、ニト、なんで飛行服なんて着てるの？」

「もっちゃん!!イブイブと一緒に行くからだよ!!」

「相手はエジプト魔術の使い手です。私も行ってせつきよ・・・ゴホン。戦うのがいいと思いますか？」

・・・そう言われると反論できない。

「ほらよ。」

鬼塚少佐がそう言って、俺に何かが入ってる袋を渡した。

「なんですか？これ？」

「何って・・・。お前の飛行服と搭乗員セットだぞ。」

・・・マジでこいつで行くのか。

「ついでに弁当は稲荷ずしと巻きずしな。」

「ちよつくら着てきます。」

そつかり、寿司かあくならしょうがないかー。

俺はさつさと着替えて零式水偵に乗り、みんなに見送られながら、理子と二トと共にウルツプ島沖へ出発した。

私ことメガネは村田大尉を見送った後、隊舎に戻りパソコンを開いた。そして山本司令長官を検索した。

「うーん・・・。やっぱりカジノの山本さんと瓜二つなんですよね・・・。」

そう言つてパソコンの画面とにらめっこをしていたら

ガチャ・・・。

私の後ろに誰かが銃を構えている!?!私はずつくりと両手を上げた。

「メガネ君。世の中には知らないほうがいいこともあるんだよ。」

私の後ろにいた誰かはそう言つて去つていった。冷汗が止まらなかった。

「そ、そういえば少佐のブログはどうなってるんだろう?..」

少佐のブログを開くとそこには

「部下に水上機を届けに行きました。」



そして、部下の彼女さん達との写真です。」

という文字と、水上機から撮ったであろう風景、少佐と村田大尉、そして銀髪と金髪、紫の髪の3人の少女計5人が写った写真が上がっていた。

「自由な人だなあ」

今日も日本は平和だ。

水上機が陸上機に勝てるわけないだろ・・・

俺が連合艦隊司令長官からもらった零式水偵(零式水上偵察機)は、零式水偵改と呼ばれるものだ。零式水偵改は戦後生産型でアメリカからタダ同然で貰ったエンジン(プラット・アンド・ホイットニーR-1830、F4F ワイルドキャットのエンジン)を乗せた零式水偵だ。何でも日本の航空技術を退化させないため、当時の航空技術者全員を集めて改造したという逸話もある(同時期に零戦の練習機への再設計をしたらしい)。

そんなことはともかく、俺は今ちょうど青森沖を高度4000で飛行中だ。大体あと半分くらいか?で、後ろにいる二人は何をしているかというと

「グゥ・・・グゥ・・・」

イビキをかいて寝ている・・・。最初は

「トランプやろうぜ!!」

とか理子が言っていたが、持っていたトランプは風に飛ばされ、「お、オセロやろう。」

今度はオセロを出し、理子とニトの二人で対戦していた。が、2、3時間ぶっ続けでやって疲れたのだろう、そのまま寝てしまった。羨ましいことで・・・。

もちろんこの機体、自動操縦装置なんてない……。よって10時間以上俺がずっと操縦してなければいけない……。鬼塚少佐・・・GPS着けてくれたのはすごうれいんですが・・・自動操縦装置も着けてくれると嬉しかったなって……。俺はそう思いながら意識を失った。

ガツン!!!!

「いってえええええ!!」

いきなり俺は頭を殴られ、飛び起きた。

「な、何しやがらあ!!」

「イブイブ、寝てたよ。」

俺は後ろを振り向くと、そこには二トの杖を持った理子がいた。その後ろの二トもうんうんと頷いている。

「・・・もうちよつと優しい起こし方とかありませんでしたかねえ?」

「手っ取り早く起こすのがこれだったのですよ。」

「それよりもイブイブ、だいぶ流されてない?」

理子がそう言うと、俺は慌ててGPSとコンパスを見た。・・・あちやあ、これは1〜2時間程度遅れるな。だとすると・・・アリアのタイムリミット1時間前ぐらいには着くか?

「え〜・・・お客様に報告します。当機の到着は偏西風の影響により、到着が2〜3時間ほど遅れます。ご理解とご協力をお願いします。」

「イブキ（イブイブ）が寝てただけですよね!?!（だよね!?!）」

ガツン!!

イタイ・・・。

出発してから13時間が立とうとしてる。・・・空の上にいるとGPSのおかげで細かい作業が一切ない（多少の風による修正程度だ）がそろそろきついで・・・。と思った時、船が2隻見えた。お?と思っ少しスピードを上げて近づいていくと・・・。でっかいピラミッドを無理やり乗せた客船とコンテナ船が見えた。俺は客船よりもコンテナ船のほうに注意がいった。

コンテナ船は普段、コンテナを5段6段と山積みになっているが、そのコンテナ船は全て2段で平らになっている。それに艦橋も船の横についている・・・。そう、まるで空母のような・・・って殺気!?

俺は急いで操縦桿を傾けた。

「ちよつと!?!イブイブ!?!」

と理子が言った瞬間、機体の横を機銃と機関砲の雨が通り抜けた。俺は弾が飛んできた方向を見ると・・・スツーカー!?

「なんでここにスツーカーなんているんだよ!?!」

俺は急いで逃走を開始した。

スツーカー(ユンカース Ju 87 シュトゥーカ)は、ドイツにおいて第二次世界大戦中に使用された急降下爆撃機だ。後継に恵まれなかったこともあり大戦前に初飛行しているが、終戦まで使われた長寿兵器だ。で、このスツーカー、逆ガル翼を主翼とする複座機で、急降下爆撃に耐えうるために頑丈に設計されていて、安定した飛行能力、精密爆撃などの長所がある。短所は低速、防弾設備がほとんどない、航続距離が約1,000kmと短いぐらいか……。でも俺たちは今、この短所を攻めることができない。

低速↑こつちは下駄履き機(水上機)なのでそこまで変わらない(辛うじて零式水偵が優速)

防弾装備がない↑こつちの武器は拳銃しかない

航続距離が短い↑こつちも燃料が心もとない

……。なんて無理ゲー。

状況は悪化の一途だった。敵のスツーカーのパイロットは腕がめちゃくちゃいい。零式水偵改は戦後生産機なので最高時速400キロ以上出せ、旋回性能も自動空戦フラップのおかげで大分いい。その機体性能の差のおかげで素人パイロットが歴戦パイロットとタメを張れているのが現状だ。辛うじて互角の勝負をしているが、こつちに攻撃用兵器がない&時間制限付き……。なんてこつた。強いてあげがたいことを言うのなら、敵はスツーカーを一人乗りしているおかげで、スツーカーの後部機銃は火を吹かないってところか。

それにしても、このままではまずい。何か……。何か敵を落とすことができない物はないか……。?

「ホルアクティ!!」

二トはそう言つて光の玉(?)を飛ばしているが、お互いが空戦機動をしているために当たる気配がしない。理子も拳銃をスツーカー目掛けて撃っているが威力不足だ。俺は一瞬「四次元倉庫」に手を入れた。すると

ゴツ……

俺の勘が「こいつは使える」と言っているので慌てて触ったものを出した。それは平賀さんお手製の閃光音響筒だった。．．．攻撃兵器じゃねえよ．．．。チクシヨウ、こいつが手榴弾なら何とかなったのに．．．。

「当たり前ささい!!!」

ニトはそう言つてカーを出したがあたる気配がない．．．。ん?．．．当たる?カー?．．．。閃いた!!!

「理子!!ニト!!合図をしたら、目と耳をふさげ!!!」

二人ともなんか言つてたが

「説明する時間が無い!!」

この一言で黙らした。

攻撃開始はスツーカーが俺の真後ろを取った時．．．。そして、その機会はすぐ訪れた。．．．距離、大丈夫だな。

「オラアアアアア!!!」

俺は平賀さんお手製スタングレネードを上空へ投げた。

1．．．2．．．

「今だ!!!ふさげ!!!」

キイイイイイイイン

激しい音と共に、目を焼くような光が空中に現れた。俺が後ろを振り向くと、スツーカーのパイロットが目を塞いでいる。．．．かかったな!!

俺はその隙に機体を急旋回させヘッドオン（正面からの真つ向勝負の状態）にさせる。旋回させ終わった数秒後、スツーカーのパイロットの目が治ったのだろう、俺達を見て驚いた表情をしている。慌てて衝突を避けようとしているがもう遅え!!

「イピカイエー・マザーファツカーーーーーー!!!」

ドカーーーー!!!

俺は「下駄履き機」の「下駄（フロート）」をスツーカーに当てた。おかげで「下駄」の片方が落ちていったが、スツーカーの垂直尾翼と水平尾翼の半分を持って行った。スツーカーのほうを見るとパイロットが脱出しようとしている。よかった何とかになった．．．。

空に一輪の白い花が咲いた

なんか、あのパイロットこっちに敬礼してるように見えるが、俺の見間違いだろう。

「うー……気持ち悪い……」

「オエ……」

理子がダウンしてる。ニトは紙袋を口に当て、呻うめいていている。

さて、問題が一つ解決したが、今度は新たな問題ができた。「下駄（フロート）」が片方無くなってしまったため、海上に降りることができない。もう……これ答えは一つしかないよな。

「ニト、泳ぐことできる？」

「オエ……で、できますが……ウツ……」

フアラオとしてなのか、少女としてなのかは知らないが、いつそ吐いてしまったほうが楽になると思う。

「理子、ピラミッド状の建物があるとMPチートなんだよな。」

「そ……そうだよ……」

決定だな。

「二人とも、パラシュートの開き方は知ってるよな。」

それを聞いた二人はビクツと肩を震わせた。

「ほ……本気ですか!？」

「イブイブ、本気でやるの!？」

「だってそれ以外ないでしょ。ほら、そろそろ下りないと泳ぐ距離が多くなるよ。」

二人はいそいそと準備をしだした。

「イブイブのことは忘れないよ。じゃあね。」

「イブキ、ご武運を。」

そう言つて二人は零式水偵から飛び降りていき、空に白い花が二つ咲いた。・・・ちよつと待つて、なんか俺死に行くように思われてない!? カット

俺の作戦はこうだ。

- 1 零式水偵をピラミッドへぶつけるコースまで操縦。
- 2 コースに乗つてある程度したら、俺は脱出。
- 3 零式水偵がピラミッドにぶつかつて大きな穴をあける。
- 4 そこに俺が着地し中に侵入

これ以上ない作戦だろう。いやあ、俺のこの作戦立案能力はすごいなあ!!!・・・これぐらいの作戦しか考えられないんだもの。もう少し、ちゃんと学校で習いたかつたなあ・・・。

さて、零式水偵が急降下をしだした。流石は戦後生産機、たかが急降下したところでビクともしないぜ!!・・・さて、そろそろかな。

「イピカイエー・マザーファッカー!!」(本日二度目)

俺は零式水偵から飛び降りた。もちろん「パラシユートはただの飾り」だからつけてない。あれ、船の横に魚雷みたいな小さな潜水艇が横付けしてる。何故?

ブローン・・・ドカーン!!!

零式水偵がピラミッドにぶつかつて穴をあけた。あれ? 穴が意外に小さいんだけど・・・つてやべえ!!このままだと穴に入らねえ!!

横風が吹いていることに気づいた俺は必死で落下コースを変えようとしたが、努力も空しく、穴から10メートルほど離れた場所に落ちた。こいつは死んだな。

ズドーン!!

ピラミッドがメチャクチャ薄いベニヤ板で助かった。だから穴が小さかったのか。・・・まあ、普通考えればそうだな。船体ギリギリにでつかいピラミッド作るんだもの。鉄なんかで作つたらこんな外洋じゃすぐ横転するよな。

さて、あたりを見渡してみると、気絶したであろうアリア（ビキニ？着用）を抱えるキンジ（鼻血つき）、白雪をかばうカナさん（キンイチさん）、ふらふらと折れた松葉杖で立とうとするフアラオコスプレ少女がいた。こいつがパトラか。

「き、貴様は……ムラタイブキ……。」

「おう、とりあえず逮捕な。」

俺は松葉杖を突きながら逃げようとするパトラを歩いて追い、腕をつかんでそのまま逮捕した。

「時間は……また壊れてる。とりあえず殺人未遂で逮捕。」

ガチャ

他に余罪がありそうだけど、わかるのはこれぐらいだな。

「こ、こら!!何をしておるか!!妾は霸王……。」

「うるせえ!!」

「……パトラ、ピラミッドは神聖なものでしょう。静かにして、ね。」  
パトラはおとなしくなった。俺とカナさん（キンイチさん）の説得がうまくいったのだろう。

あれ？そういえばキンジと白雪がいる。なんで？

「キンジ、寝てたんじやないのか？」

「イブキが行った後起きて、白雪と一緒に魚雷でここまで来たんだ。」  
魚雷……？ああ、船に横付けしてたちっこい潜航艇のことか。そんなことを話しながら壊れたピラミッドを出て舳先に出た。ゆっくりと傾きつつあるからなこの船。いつでも脱出できるようにしないと。

舳先に出た時、ちょうどアリアが起き、そしてニトと理子が降りてきた。アリアのほうはキンジに任せよう。

「え!?もう終わっちゃったの!?理子の出番は!？」

「あ……あんなこと言ってやることがないなんて……。」

「まあまあ……俺だってやることほとんどなかったんだし……。」  
などと二人をなだめていたら、カナさん（キンイチさん）が急に焦



りだし、何か叫びだした。

「みんな!!逃げなさい!!」

すると理子が急に震えだした。どうした?

ズズズズ……

そんな音と共に、何かが浮き上がってきた。この感じからすると潜水艦か?それにしてもはかなり大きいな。

そして浮き上がってきたものは……お馴染み、イ・ウーのボストーク号。……と、なぜか隣に古めかしい潜水艦が。第2次世界大戦の物か?少なくとも日本のじゃなさそう。大きさからは伊号(1000t以上)じゃなくて呂号(1000t未満400t以上)クラスか?

「プロフェンオン教授……や、止めてください!!この子達と……戦わないで!!」

そうやってカナさん(キンイチさん)はキンジ達の前に出た瞬間パシユツパシユツパシユツパシユツ

銃弾が俺のほうに3発カナさん(キンイチさん)に1発……俺は急いで3発を刀で防いだ。そしてカナさん(キンイチさん)は吹っ飛んだ。こいつは結構な威力だ……拳銃じゃない。小銃クラスだ……撃った奴は……こいつか。

「……曾、おじい様……?」

アリアがかすれた声で言う。正解だよクソツタレ!!

「カナっ!!!カナっ!!!」

キンジが叫んでる。アリアと理子は呆然と立ち尽くしてる。おいつ!!もうここは戦場だぞ!!

俺が理子を伏せさせようとした瞬間、こっちのほうへ進む2つの青白い物体が……魚雷!?

「魚雷だ!!伏せろ!!」

ズドオオオオオオン!!

二つの水柱が空高く上がった。チクショウ!!この船はただでさえ

傾いてるんだ!!魚雷なんて喰らったら一瞬で沈むぞ!!・・・あれ?轟沈(一分前後で沈没)すると思ってたんだけど・・・。傾斜するスピードがちよつと上がっただけかよ。

「白雪!!(理子)艦尾に救命ボートがあるはずだ!!それを下ろせ!!」俺とキンジが白雪と理子に命令した。こう呆然としている奴には何か仕事を与えないと何もできないからな。

「キンイチ!!キンイチ!!」

びつくりしたことに、パトラはこのどさくさに紛れて手錠の鎖部分を切断し、カナさん(キンイチさん)のほうへ走っていった。逃げるつもりじゃ・・・ないな。

「キンイチ・・・ああ、キンイチ・・・。」

そう言つてパトラはカナさん(キンイチさん)の撃たれたところに手を当てると・・・そこが青白く光り始めた。

ドオオオオン・・・

ボストーク号とこの船が接舷したようだ。そしてその潜水艦から・・・男が一人、海面を凍らせこつちに来た。

「こいつもあんたの計算通りつてか?シャーロックさんよお?」

「いや・・・君の存在は推理になかったよ。」

オールバックの青年がそう言った後・・・。

「だが、イブキ君以外は・・・もう会える頃だと思つていたよ。」

シャーロックがこの船に降り立った。

「卓越した推理はやがて予知に近づく・・・それを僕は $\square\square$ 条理予知 $\square\square$

と呼んでるがね。」

シャーロックが何か説明しだした。俺は「影の薄くなる技」を使い、シャーロックの後ろへ移動する・・・。エアジャックの時のようになりませんように・・・。

シャーロックがアリアをひよいつとお姫様抱っこした・・・。ここだ!!俺はシャーロックに切りかかった。

ザシュ!!

切った!!と思つた瞬間俺は殺気を感じ避けた。

ガンガンガン!!

俺がいたところには3本の矢が刺さっていた……。は？

「つ……。流石だね……。僕の推理でも今のはわからなかったよ……。」  
と言いながら、シャーロックはアリアを抱え、ボストーク号のほうへひとつ跳び……。つち!!あの野郎、すぐ回復してやがる!!ブラドの回復力まで持ってやがるのか!?

「君は僕の推理をかき乱す……。だから……。君を隔離させることにした。」

シャーロックが言った瞬間、俺に向かって矢が!!避けようとしても追いかけてくる!?!俺は一瞬「影の薄くなる技」を使い、何とか矢を避けた。撃たれた方向を見ると……。タンカー!?!なんかすごく近くに  
いるし!?

ダンダンダン!!

今度は銃撃!?!俺は弾を避け、弾の飛んできた方向を見ると……。ボストーク号の隣にあった小さい潜水艦の上に、トンガリ帽子にマント、卍の眼帯に軍服、肩にカラスをのせた少女が立っていた。

「イブキ!!貴様の相手はこのあたしだ!!」

「えーつと……。仏教の方ですか?」

おそらく、ナチス関係の人なのだろうが、その関係の人が間違っ  
てはいけない物を間違っていたため、俺はそう聞いてしまった。

「貴様……。何言ってるんだ?」

「いや……。その眼帯……。時計回りじゃなくて、反時計回りだぞ。」

え?という言葉と共に、彼女はいそいそと手鏡を出して確認した。  
あ、顔が真っ赤になった。

ダンドンダンドン!!

彼女は顔を真っ赤にしながら、今度は拳銃を空に向けて撃った。眼帯は逆巾になってる。直したようだ。

「イブキ!! 貴様の相手はこのカツエ!! ぐら・・・」

「イブイブ!! 早く逃げよ!!」

理子が俺のほうへ走ってきた。とりあえず落ち着いたらしい。

「いや!? 今それどころじゃないって!!・・・で、何?」

俺はカツエ!! 某さんに聞いた。take2失敗で結局わからなかったし。

「・・・貴様の相手はこのカツエ!! ぐつらs・・・」

ブロロロロロロロ!!!

急に飛行機の音が聞こえる・・・俺は聞こえたほうを見ると・・・

スツーカー!? しかもG型!?

タタタタタタタタ・・・ドオオオン!!!

撃ってきやがった!?

俺と理子は機銃と機関砲から走って逃げた。逃げた先は小さい潜水艦の甲板の上だった。あのスツーカー乗り・・・わざとこっちに誘導したな!? あとついでに鉄の矢も俺のいた場所に刺さってるし・・・

あ・・・take3失敗・・・

カツエ!! 某さんは俯きながらプルプルと震えていた。そして顔を上げ、俺を睨んだ。

「イブキ・・・よくもあたしをコケにしてくれたな!! コロス!! コロシテヤル!!!」

ダンドンダンドン!!!

「いや待って!? 俺が何したの!?!」

ブロロロロロロ・・・タタタタタタ、ヒュンヒュンヒュン!!!

上空のスツーカーが火を吹き、2キロは離れてるタンカーから矢が飛んできた。

「イブイブの近くって、命いくらあっても足りないよね。」

「うるせえ!!理子!!手伝え!!」  
「あいあいさく!!」

大量破壊兵器は使っちゃいけない・・・

俺と理子の二人は大分苦戦していた。突っ込んでくるカツエⅡ某と手下数名、艦橋からその手下達の援護射撃、スツーカーからの援護射撃と矢の援護射撃・・・本来であるならば俺が突撃し、理子が支援するのが一番の理想ではあるのだが・・・理子ではスツーカーと矢の対処ができない。そのせいで、理子がフロントを守り、俺が支援するという変則的な戦い方をしていった。

いやぁ・・・どれかを狙わせないようにスツーカー、弓兵、手下の機銃手がうまい具合に連携してやがる。そのおかげで理子のほうへ援護が行ってないのはありがたいが・・・。理子のほうも6、7人いっぺんに来られてるから守るので精いっぱいだ。うん・・・これじゃジリ貧だな。

2キロ離れた弓兵・・・25ミリ機銃だと射程圏内だけど、しっかりと狙わないと当たらない。(そんな余裕はない)

スツーカー・・・25ミリ機銃で対処可能。潜水艦ごと俺をヤルことができるので早急な対処を

艦橋の機銃手・・・対処可能。しかし接近しなきゃいけない。その間、弓兵とスツーカーに狙われる

カツエⅡ某の手下たち・・・対処可能。しかし、接近させまいとスツーカーと弓兵、機銃手が頑張っている。

一番厄介なのはスツーカーか・・・あのスツーカー乗りは潜水艦ごとヤル、とまで考えてないようだ。俺と理子が潜水艦の甲板に乗ってから、あの巨砲は撃ってないしな・・・ん？潜水艦？・・・そうか、鬼塚少佐と同じことすれば何とか・・・

「理子!!スツーカーをやったら入るぞ!!」

「イブキ!!正気か!?!」

おっと、今は裏理子のようだ。でも何やるかは伝わったようだ。

「各個撃破するしかないだろ!?!安心しろ!!今まで2回こういうことやってるからよ!!」

ビルと空港な・・・それに今度は潜水艦も入るのか・・・。

「わかった!!」

了解したか。

「おらあああああああ!!」

俺は一瞬「影の薄くなる技」を使い理子の傍まで行くと、25ミリ機銃を連射しながら理子と戦っていたカツエⅡ某含む6、7人をふっ飛ばした。俺と理子はそのまま艦橋の元まで走る。今のうちに弾倉交換だ。

タタタタタ・・・ヒュンヒュン

スツーカーが超低空で俺たちの後ろから撃ってきた。矢も飛んでくる。

「ッ!!」

俺に今弾が当たった。そのままスツーカーは俺達を追い越そうと腹を見せ・・・ここだ!!弾倉交換が終わった25ミリ機銃をスツーカーに向けた。

ドンツドンツドンツドンツドンツドンツドンツドンツ!!

この至近距離、当たらないほうがおかしいぜ!!

ブロロロロロ・・・ドーン!!

スツーカーは主翼が折れ、そのまま海へ落ちてしまった。っへ、ざまあ見やがれてんだ。

ヒュンヒュンヒュン

「ッ!!」

俺の腿に矢が刺さった。クソツ、矢が当たらないところへ・・・。

俺と理子はタンカーとは逆側の艦橋の根元で小休止をしていた。

「イブイブ、止血した?」

理子は拳銃を撃ちながら俺に聞いてきた。流石は理子、俺が血まみれになっても驚かない。

「今してる。」

俺は「4次元倉庫」からガーゼと包帯を取り出し、止血を始めた。ありがたいうちに銃弾は全部貫通してる。

「ムンツ!!」

そして腿の矢を抜き、ガーゼを当てた。よし・・・これで止血は完

了。理子の援護のために立ちあがった瞬間

ガシツ!!

「は?」

俺の足が何かに捕まれたせいで俺は転んでしまった。俺は自分の足を見た。そこにはずぶ濡れの飛行服を着て、長い金髪を後ろで一纏めにした女性がいた。その女性の顔は、まさにヨーロッパ系といった感じに彫りが深く端正な顔だが、鼻に大きく横一線の傷があった。

え?もしかしてスツーカーのパイロット!?見た感じ、ケガがない。おい、飛行機ごと海に落ちたんだのに無傷とか鬼塚少佐並の頑丈さだな!?俺は呆気にとられてしまった。

すると彼女は立ち上がり、腰の拳銃を抜いた。そのまま俺に向けようど・・・ヤベエ!!俺は急いで彼女の拳銃をはたき落とし、組み伏せ、彼女の額に14年式を構えた。

「降参だ、降参。降伏する。」

彼女は体の力を抜き、抵抗を辞めた。

「捕虜取れるほど余裕ないぞ。」

こんな時に捕虜取っても逆に負担になる。

「何、お前達の後ろをついて行くさ。」

「お前何言ってるの!?!」

捕虜が戦闘中の敵前線部隊について行くなんて聞いたことないぞ!!

「ところでお前、アイチE13Aのパイロットか?」

E13A・・・?ああ、零式水偵の略語か。この人、話が飛ぶなあ。

「俺が零式水偵を操縦していた。」

「ほお・・・お前か・・・。」

そう言っつて、彼女は俺を値踏みするようにジロジロと観察し出した。

「イブキ!!何やってる!?!・・・って何やってるの!?!」

理子がこつちを見て言った。あ、傍目から見れば女性を組み伏せてる危ない人だ・・・。

「理子、チェンジ。この人スツーカーのパイロットで俺達に降伏するん



だってよ。武装解除お願い。」

「お前がやっても構わないぞ。」

うるせえ、ややこしくするな。

「え？降伏……？って、ハンナ・ウルリーケ・ルーデル!?パイロットつてこの人だったの!?!」

表理子と裏理子がごちゃ混ぜになってるぞ。

「お前、有名人なのか?」

「そうみたいだな。」

「イブイブ、この人は魔女連隊で最強の飛行機乗りの一人だよ!?!」

理子は銃を撃ちながらそう言った。

「その魔女連隊って何だ?」

「今戦ってる敵のことさ。」

ハンナさん?が答えてくれた。

「我々<sup>ルフトヴァッフェ</sup>魔女連隊空軍はテロを叩いて世界を平和に……という考えなのだが、<sup>レギメント・ヘクセ</sup>魔女連隊自体がテロになってきてな。この機会だ。降伏して<sup>レギメント・ヘクセ</sup>魔女連隊から抜けよう……とな。」

なるほどなあ。

「で、お前さん個人の意見は?」

俺はなんとなくだが、こいつは本心を言っていないような気がした。

「何、テロを叩ければそれでいい。特に赤ならもつといい。」

「アンタも大分あぶないな!」

「そうか?フフン。」

そう言つてハンナさん?が豊かな胸を張った。何か疲れた。でも、嘘は言っていないようだ。

「……で、どうする?捕虜にする?」

「……イブイブ、チェンジ。」

「了解。」

そう言つて、俺と理子の場所をチェンジした。

ダンダンダンダン

敵はうまい具合にハッチから頭を出し、俺達を狙ってくる。有難いことは真上の艦橋から何もしてこないってどこか。上から撃つたら

潜水艦にもダメージ行くからな……。

「つたく!!野郎!!」

ハッチの方へ行けば艦橋と矢の射線に入るからな……。だからといって、艦橋に侵入しようとするのとハッチからはいい的だしなあ……。あ。

俺は平賀さん特製のスタングレネードを2つ出した。ピンを抜き、艦橋とハッチへ投げ込んだ。ハッチへ投げたほうはキレイに潜水艦内へ入って行った。

キイイイイイイン!!

すると敵は撃たなくなった。今だ!!

「理子!!中はいろぞ!!」

「よし、分かった。」

「なんであんたが返事するんだよ!」

「イブイブ、こういう人なんだよ……。」

理子は大分疲れ切っていた。

艦橋を上り、上にいた機銃手をロープで縛りあげた後、ハッチにもう一回スタングレードを投げ込んだ。

潜水艦の中に入ると最初は発令所に出た。周りには呻いている人が10数人いた。そいつらをロープで縛りあげていると……。

「イブイブ、この後どうするの?」

「このまま艦首方面まで行って発射管室まで制圧、そのまま魚雷装填して、タンカーに向けて発射。簡単だろ。」

「うむ、実に良い作戦だな。」

ハンナさんが頷く

「……これ大丈夫かな。」

理子が天を仰いだ。

「そういえば自己紹介してないな。俺は村田維吹。あんたは?」

「私はハンナ・ウルリーケ・ルーデルだ。よろしく。」

俺とハンナさんは握手をした。

「ルーデルさん、あんたは陸戦できるか。」

「陸戦は逃げるのは得意だが、本職に負ける。それと、私のことはハンナと呼べ。」

「・・・なるほど、地上に落ちても逃げて基地に戻れる、くらいの能力はあるってことか。」

「・・・ハンナさん。銃の腕前は？」

「そこそこ程度だな。あと、ハンナと呼べと言っただろう。」

ジロリと俺を睨んだ。

「・・・了解、ハンナ。」

「うむ、それでいい。」

「そういえばイブイブ、艦尾のほうはどうするの？」

理子が焦ったように俺に聞いてきた。

「ああ、こいつを使う。」

俺はそう言っただけで二つの瓶を取り出した。

俺がまだHS部隊にいた頃、ある時山形の田舎町で訓練をした。その時、現地の高校生のお兄さんたちと仲良くなり、2種類の瓶を大量にもらった。その高校生達は町の駐在さんとイタズラ戦争をしているらしく、その時に使った余りものだそうだ。

一つは化学部を脅して作った世界一臭い液体で化学部曰く「人体にどういう影響があるか保証できない」

もう一つは仲間で作ったもので、牛乳、卵、納豆、クサヤ、ドブの水を材料に作ったものだそうだ。

当時、自分は軍人であったため、駐在さんへの悪戯の実行犯はあまりできなかったけど、楽しかったなあ・・・。自転車でレーダー測定器の前を車と一緒に走ったりとか。カット

「こいつを艦尾方向に投げ入れれば、そっちにいる奴らは絶対に手を出してこれない。あ、ちゃんと扉閉めといて。閉めないと死ぬ（嗅覚が）。」

そう言うと二人はドン引きした。

「イブイブ・・・化学兵器はまずいんじゃない？」

「・・・ジュネーブ条約違反ではないか？」

「イヤイヤ、これ数年前に普通科の高校通ってたお兄さんたちからもらったやつだから。」

そう言うと二人は安心した。俺は二つの瓶を艦尾方向の扉の向こうへ投げた

パリンパリン

そんな音と共に異臭が・・・

「二人とも急いで閉めて!!!」

キーラーガツチャン

急いで扉を閉め、ロックをかけた。すると艦尾方向から人が出しているいけないような悲鳴と扉をたたく声が・・・。

「イ、イブイブ・・・。これほんと大丈夫なの。」

「・・・俺も一回嗅いだけど、死にはしなかった。」

ずいぶん前、部隊のみんなでふざけてこの液体を演習場の一角にまいたら、すごい異臭でメガネさんと田中さん、鬼塚少佐が気絶して緊急搬送されたつけ。命は別状なかったみたいだけど、時々小さな小瓶見ると反応してるな。

艦首方向へ進むと、残りの敵が降伏してきた。艦尾での悲鳴が聞こえたのだろうか。俺は発射管室まで行ったが・・・

「クソツ!!魚雷がないってあり得ないだろ!!これ潜水艦だぞ!」

まさか潜水艦なのに魚雷を持っていなかった。正確にはあったけどデコイだった。・・・どうしよう。・・・あ。

「おい、その君」

「は、はい!!」

俺は降伏してきた少女の一人に尋ねた。

「この潜水艦の艦砲は使えるかい？」

「っ、使えます!!弾薬は発令所の下に・・・。」

「うん、ありがとう。」

甲板に乗っていた砲（90ミリクラス）は使えるのか。しかし、見た感じあれは大分古いぞ・・・。あそこまで古いのを使ったことない。

「問題は照準か・・・どうしよう。」

「・・・イブイブ、あの機関砲使えばいいんじゃない?」

理子は思い出したように言い出した。え?

俺は魚雷を分解し、盾を作った。それと砲弾を持って俺はハッチから出た。

ガンッガンッガンッ

矢が盾に当たるが、さすがに鉄板は抜けないようだ。俺は盾で身を隠しながら砲のもとへ行き、撃てる状態にセットする。

ガンガンガンガンガン

敵が連射してきた。俺は砲身に対して水平に25ミリ機銃をガムテープでくっ付ける。後でガムテープの跡を取るのは大変だな・・・。

ガンガンガンガンガンガンガン

盾が凹んできた。これは急がないとまずいな。俺は「4次元倉庫」から角形カニメ双眼鏡ガネを出し、25ミリ機銃に取りつける。

ガンガンガンガンガンガンガン

もう盾がベコベコだ。急がないと・・・。俺は砲を動かし弓兵を狙う。ここだ!!俺は25ミリ機銃を撃った。

ダアンダアンダアンダアン

ガンガンガンガン・・・ドン!!

「っ!!!」

とうとう盾に穴が空き、そこから矢が出てきて俺の腿に刺さった。その瞬間、25ミリ機銃の弾が弓兵の足もとに穴をあける。銀髪にブレザーの制服(?)、羽のついた帽子をかぶった弓兵の少女が一瞬口元を少し上げ、笑ったような気がした。馬鹿め、ここで逃げなかったお前の負けだ!!

「イピカイエー・マザーファッカー!!!」(本日三回目)

俺は潜水艦の艦砲を撃った。

ズドオオオオオオオン!!!

スポットティングライフル、又はレンジングガンというのを知ってい

るだろうか。無反動砲や戦車砲に同軸、又は直接つけられた銃のことだ。使い方は、そのくつついた銃を撃つて狙いを定め、そして本命の無反動砲や戦車砲を撃つ。簡単に言うとならレーザー照準器のなかった時代の、レーザー照準器代わりの物って思えばいい。俺はそれを25ミリ機銃をそのスポッティングライフル（レンジングガン）の代わりにしたんだ。

ドガアアアアアアン!!!

タンカーの一角が爆発した。爆発した後、矢が飛んでくる気配はない。

「敵沈黙……。イブイブ、やったよ!!!」

そう言っただけで艦橋で観測していた理子が俺に抱き着いてきた。

「イタイイタイイタイ!!!」

今俺の腿に矢が刺さってるの!!理子の足がその矢にぶつかってグリグリってなってるから!!

「ほお……。羨ましいいな……。」

俺は理子を離そうとするのに手いっぱいだった。

その後、甲板で気絶してるカツエⅡ某を含む7人と一匹（カツエⅡ某を捕縛しようとする）とカラスが襲ってきた。カツエⅡ某に乗っていたカラスだろうか）をロープで縛り上げると。

キー……。バツタン

機関部のほうのハッチが開き、そこから涙としゃくりが止まらぬ少女たちが這う這うの体で出てきた。え？ちよつと待つて……

「ゴホッ：ゴホッ!!!ちよつと待つて!!!なんでここまゴホオ……。異臭がしてくるんゴホオ!!!」

ちよつとこつちが風下であったせいで異臭がこつちに……。

その後、鼻栓にマスク、ゴーグルを必死（まさに必死）で「4次元倉庫」から探し出し、理子とハンナに渡し、それらを装着して機関部のほうから出てきた子たちを捕縛していった。……ここまでやって

も匂いがやばい。ママチャリさん・・・これ高校生が作っているもの  
じゃないぞ・・・。

槍なんていららないんですが・・・

俺たちは必死（まさに必死、そこ自業自得とか言わない）で艦尾から這い出てきた潜水艦の乗組員（全員女の子）を拘束した。

「この後どうするんだ？」

ハンナがマスク&鼻栓&ゴーグル装備のまま聞いてきた。うん、色々台無しだな。

「・・・すごい適応力の高さだよ。」

理子もその装備のまま呟いた。そうだよな・・・数時間前まで空戦やってて、20分前くらいまで俺達に機関銃に機関砲ぶっ放してたのに、普通に仲間のようにつけてる。それに対して疑問を抱かせなかつたしな。

「とりあえず、イ・ウーに殴り込むか。シャーロックにはちゃんと挨拶しなきゃいけないしな。」

それにキンジ達はすでに殴り込みに行ってるだろうしな。もし、あの程度兵がいたら苦戦してそうだし。

俺たちは鼻栓をしたせいで声が高く、しかもマスクにゴーグル着用で会議をしていた。他人が見れば不審者の集まりだな・・・。

2度目ともなると、どう行けばいいかある程度わかってきた。それに今回は案内人が二人いるから迷うことはない。ポストーク号に入りしばらくすると金の延べ棒に各国の紙幣が山積みになっている部屋にきた。

「理子・・・これある程度拝借していかないか？」

「何言ってるの!?今急いでるんだよ!?それに、そんなの持ってたら戦えないよ!!」

「ってことは時間がかからなくて、戦闘の邪魔にならなければいいってことか？」

「う・・・確かに・・・。」

理子が動揺しだした。流石は大泥棒の曾孫、泥棒集団の棟梁（リーダー？）の娘。血は騒ぐようだ。



「戦利品か・・・私の分け前もあるのか？」

ハンナさん・・・あんた敵だったんだよね？

「5秒もしないで終わるって。」

俺はそう言つて「四次元倉庫」の扉を延べ棒と紙幣の下に出し、扉を開いた。すると、延べ棒と紙幣はストンと「四次元倉庫」の中に入つて行つた。

「すごい魔術だな・・・あれはどこにでも出せるのか？」

「そうだけど・・・ハンナ、何に使うんだ？」

「なに、あれがあれば弾切れが無くなると思つてな。さらにテロにプレセントできる」

「・・・なんだかんだブレないね。」

俺と理子はため息をついた。

分け前は恨みっこなしの1:1:1で分けることになった。思わぬ臨時収入、何に使おうかなと考えながら進んでいくと、大きな教会のような部屋に出た。圧倒するような美しい教会だったのだろうが、あつちこつちに弾痕があるせいで台無しになっている。

「イブイブ!!この扉開かない!!」

理子はそう言つて鉄製の扉（自動扉の鉄バージョン）に手をかけ引つ張っているが、開く気配がしない。

「理子、どいて。」

俺は刀を抜くと扉に一閃、扉は切れてブロック状になり、そのままバラバラと落ちていった。

扉切りを何度か繰り返していくと、ICBMの部屋に出た。懐かしいな・・・これで辻さんと鬼塚少佐と俺で脱出したんだっけか。中に入ると、ICBMの扉に捕まった白髪交じりのシャーロックがいた。シャーロックは俺に気づいたようでこつちに手を振り、

「イブキ君!!僕が何年もかけて建てた計画をよくも壊してくれたね!!何とか緋弾は継承で来たけど、ここまで狂うとは僕の推理にはなかつ

たよ!!」

「てやんでえ!!人ひとりで狂う計画を立てるテメエが悪いだろ!!」

「いや、これは失礼。確かにそうだ。」

シャーロックがそう言うのと、俺に何かを投げた。それは俺の足元でズドンと刺さった。

「僕の推理を覆してくれたお礼にそれをあげよう。キンジ君にもそれをあげよう。」

ドスツ

刺さっていたのは・・・真っ赤な槍だった。

「俺、槍なんか使わないぞ。違うものにしてくれ。」

「イブキ君・・・それ女王陛下から借り受けたもので、大英帝国の至宝だよ。」

「つて言われてもなあ・・・。こんなの貰っても博物館に寄付するだけだぞ。」

使わないのに持つてるだけなら、博物館に寄付したほうが「世のため人のため」になるしな。

「それだけはヤメテ。」

シャーロックは真剣な顔で言った。

「わかった・・・これも君にあげるから・・・博物館へ寄付はやめてほしい。」

ドスツ

そう言つて、シャーロックが投げたのは・・・両刃で柄と鍔は青と金で装飾されている見事な剣だった。

「まあ・・・これなら使えるけど・・・。」

「いいかい・・・絶対に博物館に寄付はしないでね。」

シャーロックは真顔で言った。

がすつ・・・がすつ・・・

アリアは俺とシャーロックがしゃべっている間、小太刀を両手に握り、それをICBMに突き刺してロッククライミングのように登っていた。そしてシャーロックと何かしゃべった後、そのままICBMは

発射され、キンジも急いでICBMに掴まってそのまま空高くまで行ってしまった。

「イブイブ、追いかけてよかったの？」

「いや、走ってもどうせICBM発射されて終わりだし、アリアが登ってるの見えてたからな。せいぜいしゃべって時間稼ぎを・・・ってね。それに・・・」

そうやって俺は槍と剣を抜こうとした。って槍重っ!!俺は魔力で腕を強化し、やっと抜いた。

「アリアの曾爺さんなんだろ。捕まえる手柄はアリアにあげないとな。」

ボストーク号から出た俺たちは救命ボートに乗っている、二ト、白雪、パトラ、キンイチさんを発見した。キンイチさんは何とか生きていたようだ。よかった。

タンカーはそのまま逃げていたようで、俺達はカツエⅡ某の乗っていた潜水艦の見回りをしていた(途中キンジとアリアが空から降ってきたのは驚いた)。

ブロロロロロロロ・・・

飛行機の音が聞こえる。空を見上げるとUS-2が飛んでいた。大湊所属か？

ボーーーーー

汽笛が聞こえる、あれは・・・第5艦隊か？

俺たちはこの後すぐに救助され、第5艦隊の一部を指揮していた山口少将の手によってボストーク号とカツエⅡ某の潜水艦は回収された。

「村田大尉、君あの小さいほうの潜水艦何やったの？中に入った兵たちから防毒マスクとかボンベの使用許可をくれってうるさいんだけ

ど……。」

「え……えつと……民間人のお兄さん達からもらったイタズラ道具使っただけです。」

その後、単冠湾にいた車輛科秘蔵の水上機に乗り移り、一日がかりで東京に戻った。カツエⅡ某たちは大湊で尋問らしい。ハンナは大湊で司法取引をする予定で、やった後はそのままドイツへ帰国だそう  
だ。

「イブキ、ここでお別れだ。」

「ハンナ、なんだかんだあつたけど元気だな。」

なんだかんだあつたけど、なんか憎めないやつだったな。するとハンナは顔を赤くした。

「イブキ、私の後部座席はお前のために空けておこう。」

「はあ……?」

「と言ってもお前には伝わらないだろう。ちよつとこつちへ来い。」

俺はハンナに近寄ると、ハンナはいきなり俺の顔を両手で固定した。

「え! なつ!?!」

ガチツ

ハンナはそのまま俺へ顔を近づけキスをした。勢いをつけたせいで互いの前歯が当たり、すごい痛かった。

「さらばだイブキ!!」

そう言つてハンナは去つていった。……そういえば前世、中高は男子校、大学も工業系だったから彼女の一人もいなかっただよな。前世から数えても、これがファーストキスか……。ツ!! 口の中切れちやつてるし……。ファーストキスは血の味……。

水上機が飛んだあと、ニトと理子、操縦手の武藤が俺をボコボコにしたのは言うまでもない。

戻った翌日、家族にシャーロックからもらった槍と両刃剣を見せたところ、師匠が槍に興味を持った。そういえば師匠の使ってるのに似てるような……

「そうか……セタンタ……」

師匠はそうつぶやいた後、持っていた槍を俺に渡した。

「イブキ、それを使えるようにしろ。」

「え？あの師匠？俺もつばら銃か銃剣か刀で戦うから槍は使わないんですが……。まだこっちの両刃剣のほうが……」

「うるさい。久しぶりに稽古をつけてやろう。」

そう言っただけをつかみ、そのまま引きずりながら歩き始めた。

「ちよ、まって!!!俺まだ怪我人!!!」

「そのぐらいの怪我がなんだ。私を殺せるまで……とはいかんが、せめてセタンタ並みの槍の腕前にしてやろう。」

「え!?セタンタってだれ!?……不幸だー……!!!」

俺は某ツンツン頭の幻想殺しのような発言をしながら、闘技場へ連行された。

ところで、皆さんはパトラの船に突っ込んだアヒルさんボートを覚えてるだろうか。あのアヒルさんボートは両川さんが弁償することとなった。何でも、未成年にあんな大金を払わせることができないから。

それと両川さんの勝った一千万は勝手にコインを外に持ち出したということになり無効となった。

「そ、そんなああああ!!!」

「こら!!!両川!!!静かに仕事せんか!!!」

## 閑話：高校生活一学期編

1：免許取得

俺は鬼塚中尉に呼び出された。呼び出された場所は……トイレの中。俺が到着すると、鬼塚中尉は個室で踏ん張っていた。

「おい!!ボウズ!!お前確か免許持ってたよな?」

「え?はい。普通と特殊を持っています。」

「ん?お前、それは特殊って言わないで大特って言うんだ。」

すると鬼塚中尉は俺のほうに何かを投げ渡した。

「ボウズ!!外に軽トラ回しとけ!!」

それは部隊で使っている軽トラの鍵だった。

「え……?あの鬼塚中尉……」

「なにー!?運転できねえだど!?お前確か免許持ってるって……。」

「いやあ……。普通フグ調理師免許と海上特殊電波技師免許ですよ。」

「ンなもん分かるかアあああ!!」

ガツン!!

俺は鬼塚中尉に殴られたため、天井に頭をのめりこませることになった。

その後、鬼塚中尉に引つ張り出され、そのまま軽トラの運転席に座らせられた。

「つたくしようがねえ……。俺が運転を教えてやる。ボウズ!!エンジンかけろ!!」

俺は鍵をひねった。

キュルキュルキュル……ブロロロロロ

「お……おお……!!」

「そのままギアをDに入れろ。後はアクセル踏めば前に動く。」

ブロロロロロ……

軽トラが前進を始めた。

「ハッハッハ……。うまいじゃねえかボウズ。」

そうやって鬼塚中尉は俺のほうを向いた。

「・・・ボウズ。何やってるんだ？」

俺は席からずり落ちたような体勢でアクセルを踏んでいた。もちろん前は見えない。

「いや、こうでもしないとアクセル踏めないんですよ。」

「バ、バカヤロー!!席を前にすればいいだろうが!!」

「え?そんなことできるんですか?」

俺はそう言っただけでちゃんと席に座ろうとした。そのせいで、間違えてアクセルをベタ踏みしてしまった。

「ボウズ!!前、前!!」

ガツチャャーーン!!

軽トラは倉庫に激突・・・

「ウガアアアアアア!!」

「いつてえ・・・」

音を聞いて飛んできた田中さん、岩下さん、メガネさんの手によって救助してくれたおかげで大事には至らなかった。

その翌日、俺は鬼塚中尉に連行されていた。

「お、鬼塚中尉?・・・軽トラの件はワザとじゃないんです。」

「んなことは分かっている・・・。こうなりゃ下は原付、上は戦車に戦闘機動かせるようにみっちりしごいてやる。」

「え?それって大分時間かかるんじゃない?。あの、訓練は?」

「中隊長と参謀長の許可はもらっている。2週間でお前は立派な操縦士になるってわけよ。」

「え?2週間で!?無理ですよ!!」

「うるせえ」

ガツン!!

俺は気づいたら零式艦上初歩練習戦闘機に乗せられていた。

「戦闘機が動かせれば車なんて簡単よ!!」

「え?ちよ、ま・・・」

ブロロロロロロ・・・

北海道沖

ブロロロロロロ・・・

「つていう事があつて2週間で何とか車に戦車に飛行機の免許取ることができたんだよね。」

「イ、イブイブ・・・大変だったんだね。」

「うん・・・訓練中に、鬼塚少佐（当時中尉）の先輩の赤松少佐が来てね・・・。」

「だ、大分苦労したんですね」

2：私とあいつ

私はいつを始めてみた時、私は取るに足りない人間だと思つていた。正直言つてなんでナカジマ・ビル、J・F・ケネディ空港、それにタコ・イカ・ブイ襲撃事件・・・それを解決（又は実行）できたのは信じられなかった。

その後、あいつと何度か組んだことで、ある程度わかつてきた。純粹に巻き込まれ体質で悪運が強いのだ。そのせいで組んだ時に何度も巻き込まれ、そして何度か命を助けてくれた（あいつはそこまで気にしてなかったが）。だけれど、こいつがいると私の計画の邪魔になる・・・。私は自分の計画のためにあいつを・・・命の恩人を殺すことにした。

あいつは死んだ。流石に複数のガトリングによる掃射には耐えきれなかったようだ。私は棺の中のあいつに触れた。冷たい・・・。私は・・・自分のために、命の恩人を殺した。

「どうして生きてるの!?!死んだことは確認したのに!!」

あいつは白装束で旅客機に乗ってきた。最初は疲れているだけだろう。そう思ったが違った。あいつは生き返って私の前に立ったのだ!!

「思い出したよ。DNA、数字、イ・ウー。理子はブラドから解放されたいんじゃないか?..」

私はそれを聞いて頭が真っ白になった。あいつの黒い瞳はまるで私の全てを見ているようだった。理解できない・・・怖い・・・



「なあ、こんな犯罪を犯さないで自首しようぜ。俺もついていくからさ。ブラドのことも協力する。そうすれば理子はもう堂々とお天道様が見てるところを歩ける。」

なんて魅力的な提案だ。あいつならやりそう気がする……。

「なあ、キンイチさんだって生きてるんだろ。理子は誰も殺していない。情状酌量の余地は大いにある。」

ダアンダアンダアン!!

え？

私は、無意識のうちに銃を撃っていた。あいつの体から紅の液体がさらに出ていく……。ああ……。私は命の恩人を2回も殺してしまったのか……。それにあんなチャンスを逃すとは……。

「イ、イブキ!?なんで!?!どうして!?!ってパラシュートなんで切ったの!?!」

「てやんでえ!!テメエ!!手え差し伸べたら銃弾の答えとかふざけてるのか!!まだ拒否するならわかるけど、銃弾の答えはないだろ!!意地でも捕まえてやるよ!!」

「そのためにパラシュート切ったの!?!」

☒パラシュートはただの飾り☒だ!!」

「何言ってるの!?!」

あいつはあの後、旅客機から飛び降り、私を捕まえた。何でそこまでする?私はいつを恐ろしく思い始めた。

私は東京武偵高に戻るとすぐあいつを呼んだ。

「で、敵対した奴の前に現れる理由って言うのはなんだ?」

あいつの中では私は敵対者として見られているのか。私は胸が痛かった。

「イブキ、お前がいるといつも計画が破綻する。だから私の計画に関わるな。」

私は再びあいつを殺したくない。あいつにはブラドやイ・ウーと関わってほしくない。私はそっけなく要件を言って部屋から去るつもりだった。

「待て!!俺も一つだけ用がある!!」

私はいいつに腕をつかまれ、引き留められた。

ガツン!!

「ツ~~~~!!イブイブ!!何するの!?!」

私はいいつに頭を殴られた。

「これで銃の件はチャラだ。気にするんじゃないぞ。変に遠慮されたらこっちがまいっちまう。」

え?!

「これで終わり。もう、理子に同情もしない。友人としてなんかあったら呼んでくれ。」

何を言ってる?!

「なあに、友人がなんか困ってたら助けに行つてやつから、その計画とやらをやつて来い。じゃあな。」

私は・・・お前を殺したんだぞ・・・。

「何でここにイブキがいるんだ!?!なんでまた私の計画に関わる!?!」

あいつは紅鳴館にいた。私は・・・また敵対したくないのに!?!

「いやいやいや。俺もさ、さすがにあそこまで言われたら関わろうと思わなかったよ!!でも、その肝心の計画を知らないんだぞ!!まさか一緒に紅鳴館で仕事するなんて思いもしなかったもの!!」

確かに・・・言われてみればそうだ。

「イ・・・イブキ・・・どうしてここに・・・。」

「小夜鳴が怪しいと思つて念のためついてきたらこうなつてたんだよ!チクシヨウ!!」

ああ・・・イブキらしいな・・・。

「俺は今、結構頭にきている。あいつは、家族に親友虐めてたつて聞きやあ頭に来ないほうがおかしい。だから、俺はブラドにちよつと挨拶しに行きてえんだ。だけど理子、お前ブラドに恨み辛みあるだろ。どうする?そこで引きこもっているか、それとも一緒にやりに行くか。」

「なんで私にそこまでする。」

私はずっと抱いてきた疑問をイブキにぶつけた。

「友達だから……っていうのじゃ納得しないよな。お前、一緒に東京湾泳いだ時、いつでも俺をやれたはずだろ？なのに何もしなかったから……。あと一年の時の貸し、まだ返してもらって無いだろ？これでも足りないか？」

後半は言い訳だな。そうか……。私を身内と思っているからこんなによさしくするのか。私は胸が軽くなった。

「親友の大事なものが盗られたんだ。協力しろ。」

「てやんでえ!!あたぼうよ!!」

結局、私たちはブラドを倒し、私は晴れて自由の身になった。

「……神崎・ホームズ・アリア、遠山キンジ。あたしはもう、お前たちを下に見ない。騙したり利用したりする敵じゃなくて、対等なライバルと見なす。だから——した約束は守る。  
⊠Au<sup>バ</sup>re<sup>イ</sup>vo<sup>イ</sup>ir<sup>ラ</sup>·Me<sup>イ</sup>s<sup>バ</sup>ri<sup>ル</sup>va<sup>た</sup>ux<sup>ち</sup>·⊠あたし以外の人間に殺られたら、許さないよ」

「おい、待て。俺は!?!」

イブキ、お前は私の親友だよ……。流石にそんなこと、恥ずかしくて言えなかった。

その後、私はイブキがほかの女としゃべっているのを見ると、胸が痛くなった。そして、ハンナ・ウルリーケ・ルーデルがイブキにキスをしたとき、私はこの痛みの理由が分かった。

敵が多いけど……。イブイブの心、盗んでいくから!!

3：私とイブキ君

「明日から神棚作るわ。いや、時間としては今日か？」

「そうしたほうがいいよ。」

「ありがとう、いいこと聞いた。今日はぐっすり眠れるぞ!!おやすみ。」

イブキ君はそのまま寝室に帰っていった。

「将来のことを聞かれなくてよかった。あんなこと言えないよ……。」  
っは!?

眩いた時にはイブキ君はもういなくなかった。よかった……聞こえてない。

私はイブキ君を始めてみた時、驚いた。イブキ君はとても大きな何かに憑かれてる。ここまで大きなものに憑かれてるのは初めて見た。私はイブキ君を警戒していた。

次に会った時、イブキ君に憑いているものはさらに大きくなっていった。そして今日調べた結果、沢山の幽霊と強大な神様に取りつかれていた。強大な神様が自分のものにしようとイブキ君を狙って、それを防ごうと大量の幽霊が戦ってる……。そんな例聞いたことがない。それにイブキ君の将来……。

イブキ君は40代の丸坊主のおじさんと一緒にトラックに乗っていた。二人とも血まみれでボロボロだった。

「おっさん!!今度はA-10 がきやがった!!」

「坊主!!お前何とかしろ!!」

「F35やアパッチならともかくA10なんてどうやるんだよ!!つて、おっさん!!傾けろ!!!」

ブオオオオオオオオオオオオ!!

布が破ける様な音が聞こえる。発砲炎が見える。そして、視界は真っ赤になった後、暗くなっていた。

そして、もう一つ。みんなが寝た後、もう一度占った結果……。

二人の女性、一人の少女、獣耳の男性が囲んだ真ん中で、髪の毛の短い茶髪の少女（大きさは小学生くらい）がいったん裸になった（うまい具合に局部は見えない）。その後、体が光り、服が現れた。まるで魔法少女の変身シーンのような。

その後、その少女は杖を植えにあげ、

「夜天の光に祝福を！リインフォース、ユニゾンイン!!」

そう言うと、今度はその少女の服が光り、新たなものが出てくる

うん、イブキ君には絶対に言えない。A-10 に攻撃される将来。それに女の子、しかも小学生のような子の裸を見る将来・・・  
将来のことは聞かれなくて本当によかった。

4：僕と村田君

その日は暑かった。

「何、面白い少尉候補生がいる?」

僕は氷水に浸っている水まんじゅうに砂糖をかけながら答えた。

「はい、何でも幼年学校に入学と同時に海軍兵学校に飛び級し、今、実地訓練を受けているとか。」

宇垣君が報告ついでにそんな話を持ち掛けてきた。

「ふーん、そういうの時々いるけど。」

幼年学校や予備士官学校に入学と同時に士官学校の実地訓練に回されるのは珍しいが、決していない・・・というわけではない。僕は水まんじゅうをスプーンで切り分け始めた。

「ですがその少尉候補生、陸戦能力が化け物のように高く、柔軟な思考の持ち主で、高須中将、南雲中将、山口少将が目をかけているそうです。それに、ナカジマ・ビル、J・F・ケネディ空港の事件を解決した少年だそうで。」

「へえ・・・。」

切り分けた水まんじゅうを頬張った。うん、甘い・・・あの2つの事件を解決したあの少年か。最近ニュースでさんざん報道された・・・ん?

「彼は何で海軍に入ったんだい?そんなに陸戦能力が高ければ陸軍に行くだろうに。」

「実は・・・泥まみれになるより、ボタンを押すだけの海軍のほうが楽、だからだそうで。」

ブツ!!

僕は水まんじゅうを吹き出してしまった。

「ゴホツゴホツ!!なんだい?その理由は。」

「ですが・・・実際そうらしく。」

「ハハハハ!!そんな面白い子がいるなんてね!!うちは将来安泰だね!!」

「まったくです。」

ハハハハ!!久しぶりに彼と笑ったような気がする。

そんな話があった数か月後。僕はそんな少尉候補生の話など忘れていた。

「君、これで初めてなのかい?」

僕は仕事から抜け出し、アクアエデンのピラミディオンの少年とポーカーをしていた。

「いえ、多少はやったことはあるんですが・・・彼女と数回程度やっただけです。基本ブラックジャックかルーレットです。」

少年はじつくりと考えながら、僕に行った。

「フーン。このエリナがイブキを強くしたんだよ。」

こここのディーラーである銀髪の少女は胸を張って僕に言った。数回でここまでの腕前にするのは確かにすごい。彼の能力もあるだろうが、彼女の指導力が高いのだろう。僕は数時間も彼と一緒にポーカーにブリッジ、ブラックジャック、ルーレットとだいぶ遊んだ。

「おいボウズ!!帰るぞ!!」

「あ、鬼塚中尉!!」

軍服を着た厳つい中年男性が彼を呼んだ。

「すいません・・・そろそろ帰らなきゃいけないみたいで。」

「それは残念だね。」

視界の端に宇垣君、黒島君、三和君が見えた。僕のほうもそろそろ帰らないといけないようだ。

「そういえば君の名前は?」

「え?ああ言ってますでしたね。村田維吹海軍少尉です。」

へえ・・・こんな面白いのがうちにいたんだ。

「僕は山本っていうんだ。ある組織の・・・幹部つてところかな。今日は楽しかったよ。今度君に水まんじゅうをごちそうするよ。」

彼には連合艦隊司令長官として接してほしくないな。

「え!?それは楽しみです!!」

「おい、ボウズ!!早くしろ!!」

「すみません。それではまた。」

そう言っただけは去っていった。

彼を調べたところ、数か月前に話していたあの少尉候補生だったことが分かった。今はHS部隊の第2中隊にいるらしい。なるほど、あそこに居ればすぐに昇進するな。苦勞は絶えないけど。

それからというもの、HS部隊に監視をつけた。そして彼らがカジノへ行くと聞いたなら、僕は仕事を抜け出すようになっていた。

宇垣君、黒島君、三和君!!君たち僕を連れ戻すのはいいけどせめて軍服は脱いできてくれないかい!?

5：ある車椅子の少女

「ただいまあ・・・。」

図書館から家に帰ってきた。ただいま、といつても返事はない。この家は私しか住んでないのだから・・・。

「ってそんなの、考えちゃいかん。そやそや・・・。」

と言っただけ結局は空元氣。

・・・父ちゃん、母ちゃん。何で逝っちゃったんや。

「寂しいよう・・・。」

私が久しぶりに弱音を吐いた数日後、あらたな家族ができ、その一週間後にまた新たな家族ができることを、今のうちには知ることはない。

## 高校生活夏休み編

魔法少女リリカル〇のは 旅行にはトラブルが付き物だけどさ……

俺はボロボロのまま、高機動車を海鳴温泉旅行のために運転していた。そしてこの旅行、早速三つの問題が発生してしまった。

「師匠……。俺しか免許持ってないんだから、俺が運転するってわかってたでしょ……。昨日の修行、もう少しは優しくしてくれても良かったんじゃないですか？」

一つ目、出発が大幅に遅れたこと。俺は昨日、師匠と槍の修行を強制させられた（休みなしで）。しかも、終わったのは時間的に今日になった時……。その疲れのせいで、朝起きれなかった。結局、出発できたのは予定の9時から大幅にずれた昼過ぎだった。

「まあ、確かに張り切り過ぎたな。」

師匠も少しは反省しているようだ。

「槍の腕は上がりましたけど、旅行前は勘弁して下さい。」

俺はペットボトルに入ってるリサ特製の麦茶を口にした。

「ネロ、ニト、エジソン……。ロサンゼルスはこんな大量の荷物はダメだからね。」

「なんと!! (なんでですか!!)」

「これ……。10人乗りなんだよ……。で、全員で10人。このままだと荷物が入らないから辻さんに頼んでトレーラー1台借りてきたんだ」

俺はそう言いながら、ミラーで車の後部を見た。

「まさか追加でトレーラーもう2台必要になるとは思わなかったよ!! しかもそれでも乗せられないからって、屋根の上に乗せるってどういうこと!?!」

二つ目、荷物が多すぎてスピードが出せない。東京から海鳴市まで車で一時間半……。それなのに2時間以上経ってるのにつかない主な理由はこれだった。



「余は皇帝だし・・・」

「私フアラオですので・・・」

「発明に必要・・・」

「減らせ」

「二はい・・・」

3人はシヨボンと下を向いた。

「少なくともロサンゼルスの際は減らして。こんな量、船じゃないと運べないぞ。」

ハア・・・

俺はため息をついた。

「ねえ、ベオウルフ・・・百歩譲って屋根に荷物を置くのは認めようか。だけどさ・・・邪魔だからってアンテナ折らないでくれないかな!?カーナビの表示が自宅から一步も出てないことになってるんだけど!!」

三つ目、カーナビが壊れた。

「わ、悪かったな。」

「いや・・・時代考えればこんな物知らないよね。あのアンテナ普通に横に倒せるし、ネジでくつついてるから回せば取れるんだよね・・・。ごめんね、倒すか回して取るってことしないで、拳でへし折るなんて考えられなかったよ。」

そのおかげで海鳴の温泉旅館までの道のりが分からない。

「海鳴は横須賀から近いから何度か行ったことはあるんだ。そのおかげで海鳴まではカーナビなしでも行けるけど・・・旅館は現地の人に聞かないとわからないよ。」

「わ・・・悪い・・・。」

横須賀から車でちよつと行ったとこだから、海軍兵学校の実習時代に先輩に何度か連れていかれたなあ。まあ、横浜や鎌倉のほうが近いからそつちをよく連れ行ってもらったけど。

「まあ・・・チエックインには何とか間に合いそうだから。初めての旅行でこのぐらいの問題しかないのは上々なかな・・・。」

「あの・・・イブキ様? 荷物は☒四次元倉庫☒を使えば解決するので

は？」

助手席に座ったりサが小さな声で俺に尋ねた。「うん、運転中に気づいた。帰りはそうしよう。」

海鳴市に着いた。久しぶりだなあ・・・などと考えながらゆつくり車を進めていると、現地の人を発見した。近づいていくと何かおかしい。車椅子に乗った子供が動いてないのだ。

「すいませーんって、ああ・・・。」

車椅子に乗っている子は側溝に車椅子の車輪を引っかけてしまい動けなかったようだ。

「あの・・・手伝います。」

俺はそう言って車を降りた。

「え？・・・あ、ありがとうございます。」

車椅子に乗っていたのは関西系の訛りがある、茶髪の小学生ほどの少女だった。周りには彼女が持っていたであろう本が散乱していた。「いやあ・・・実は家族で海鳴温泉に泊まる予定なんだけど、カーナビが壊れちゃってね。」

俺は本を拾いながら少女に話しかけた。

「それは大変でしたね。」

少女の顔が一瞬曇った・・・ん？

「それで、旅館の場所おしえてくれないかい？」

俺は少女に本を渡した。

「えっと・・・この道まっすぐ行って突き当りを右に出て・・・そのまま行けばわかると思います。」

「ありがとう。どうせだ。君を家まで送っていくよ。」

彼女は寂しそうな眼をしていた。だから俺はついついそんなことを言ってしまった。

「いや、そこまでは・・・。」

「道教えてもらった子がまた立ち往生したら嫌だしさ。」

あ、これだけだと俺怪しい人か？俺は軍人手帳を取り出し彼女に見せた。

「俺はこういうものだから怪しくないよ。」

少女は少し考えた後

「じゃ、お願いします。」

俺はベオウルフを呼んで、少女を車椅子ごと高機動車に乗せた。そして俺は運転席に戻り発進させた。

「俺は村田維吹。気軽にイブキって呼んで。軍人だけど最近東京武偵高に出身になって、武偵もやってる。」

「八神はやってって言います。ひらがな三つではやてです。」

ほう、小学生にしてはまともに返答が来たな。

「それにしてもだいたい難しい本読んでるんだね。エジソンの伝記はともかくケルト神話大全にローマ帝国の栄光と滅亡ペーオウルフギルガメッシュ叙事詩源平盛衰記御伽草子古代エジプトの歴史。眠くならないの？」

「よく覚えてますね。」

「まあ、俺が拾ったんだしね。」

俺がこの子ぐらいの時・・・前世だと漫画くらいしか読んでないぞ。

「でもまさか六法全書まで借りるって・・・すごいね。」

「え?・・・あ、ホントや!!」

その後、他の家族と自己紹介して仲良くなっていた。

「あ、あの家です。」

はやてちゃんある一軒の家を指さした。俺はその家の前で車を止め、はやてちゃんを下ろした。

「あの、イブキさん。何日くらい止まるんですか?」

「ん?ああ、3泊4日だね。」

「良かったら明日案内しましょうか?」

え?俺ははやてちゃんを見た。

「夏休みで暇ですし、いいかなって・・・」

やはり寂しそうな眼をしている。なんかあるな、こりや・・・。

「明日、10時にココに集合で、いいかな?」



俺はこのトレーラー3つ分と屋根に置いてある大量の荷物をどうするか考えると、頭が痛くなってきた。

俺は荷物の問題を結局各自に任せた（一回苦労すればわかるだろう）。そしてみんなで荷物を運び終え、お風呂セットを取り出し、温泉に入った。

「「ああ〜・・・」」

俺、ベオウルフ、エジソンは同じ声が出してしまった。夏とはいえ、温泉はいいもんだ。

「エジソン、毛のせいで肩まで浸かれないのはきつくない？」

エジソンはそのライオン顔のせいで、肩まで浸かると毛がお湯に入ってしまうのだ。

「いや、半身浴もなかなかのものだ!!」

エジソン、風呂の中で大きな声出さないで。まあ、テンションが上がってるからだろう。まあ、ここで無粋なことは言わないさ。

「こんにちは〜。」

お湯に浸かってしばらくすると、若い二人の兄弟(?)に話しかけられた。

「こんにちは〜。」

この二人、結構できるな。

「武道を嗜んでいるんですか？」

「ええ、多少ですけど。」

俺のって武道って言うより、武術だし。というかほとんど実践形式だから、型とかほとんど習ってないし。

「お二人も結構鍛えていらっしやいますね。そう言う職業に？」

「いえいえ、喫茶店の店長をやってるんですよ。」

はっ。

「え・・・喫茶店? こう、武道喫茶とかそういうものですか？」

これだけ鍛えて・・・趣味ってもんじゃねえぞ!?

「普通の喫茶店ですよ。シュークリームが有名なんです。」

・・・最近は何騒になったから、これだけ鍛える人もいるのかな。

「弟さんも喫茶店で？」

「ああ、こっちは僕の息子です。」

ん？

「え？息子さんですか？」

「よく間違えられるんですよ。」

・・・見た目は息子さん17歳、お父さん20代前半。25歳とすると・・・8歳差、小学生の頃にできた子供・・・はありえないか。という事は・・・

「・・・中学生で孕ませるって。どこの3年B組ですか・・・。」  
リアルであるなんて・・・割とシヨックだ・・・。

「何か勘違いしてませんか？僕は37ですよ。」

息子さん17歳、お父さん37歳・・・19歳差。割とありえる。つて37歳!?!

「え？どう考えても20代前半、大目に見ても三十路前ですよ!?!」

「いやあ、よく言われます。」

超若作りで、めつちや鍛えている喫茶店のマスター……。絶対、喫茶店を襲にしたなにかだろ・・・。

俺はそんなことを思いながらこの人と長い間しゃべっていた。

温泉に入った後、酒と御馳走をたらふく食べ、寝ていたが急に目が覚めてしまった。どうしようか……。なぜか眠気が起きない。そこで俺は近くに置いてあった海鳴の地酒「海の鳴き声」の4合瓶とコップを手に取り、その二つを持ちながら散歩に出かけた。

夜の散歩もなかなか乙なものだ。俺はコップに入った酒を飲み、歩きながらそう思った。

「周りの音はあまり聞こえない。聞こえるのは砲撃音のみ。きれいな月と魔法少女らしき二人のビームが何とも・・・つて、え？」

俺は酔っていたからだろうか、やつと異常を認識した。

チュドーン!!!チュドーン!!!

なんかビームのせいで地面に穴あいちやってるし。

「・・・きつとこういう映画でも撮ってるんだろ、きつとそうに違いな

い。そういえばメガネさんが『魔法少女フィジカルこのえ　く友情の物理力で倒せ!!』が実写化するって言って嘆いていたっけ……。」

俺は武高に行く前、メガネさんが嘆いていたのを思い出した。

俺は近くにあったベンチに座り、ビームを着に酒を飲み始めた。そろそろ中身がなくなりそうになった時、俺は殺気を感じた。

ヒュン

俺はとっさにしゃがみ、頭の上に足が通った。

「あんた!!時空管理局の人間かい!？」

俺を蹴ろうとしたのは、スタイルがよく、額に宝石(?)をつけた獣耳の女性だった。そういえば、こんな女優は見たことないな。つて、あれ?・・・映画撮ってんだよね。いくら何でもエキストラを間違えるってまずくないか?

「いや・・・おれはエキストラじゃないですよおおお!!」

しゃべった瞬間、その女性は俺に近づき殴りかかってきた。

「おい!!テメエ!!このまま続けると傷害未遂と公務執行妨害で逮捕するぞ!!」

「アンタやっぱりそうだね!!」

そう言っただけ女性に襲いかかり、俺に拳を入れようとした。そこで俺はその腕をつかみ、きれいな一本背負いを決め、すぐさま手錠をかけた。

「映画だか何だか知らねえが、一般人を襲うたあいい度胸だな!!傷害未遂の現行犯で逮捕だ!!」

すると、女性の髪が急に長くなり、爪が伸び始めた。俺は慌てて女性から離れると、女性は狼(?)になってしまった。自分でも何言ってるかわからない……。立体映像技術って触れるくらいまで技術進歩してたっけ?

「なんだよこれ・・・魔法かなんかか?」

あのブラドだっただけ質量保存の法則(どんなことやったって全体の質量は変わらないという法則)は守ってあったらしく、人間形態と獣人形態の重さは一緒だったのに……。こいつ・・・狼になってからの重さと人間形態の重さは全く違うぞ!

「え？あんた魔法を知らないのかい？」

「お前・・・役に入りすぎだろ。この世に魔法はないぞ（厳密には違うが）」

ヒューン・・・俺と彼女（彼獣？）の間に木枯らしが吹いたような感じがした。おかしいな。今夏なんだけど・・・。

「え？あんた管理局の人間じゃないのかい？」

「お前、すごい役者だな。俺は海軍軍人だ。それと武偵も訳あつてやっている。」

なんかコイツ・・・役者じゃないような気がしてきた。だとしたらあの砲撃はなんだ？

「お前・・・何者だ。」

「・・・バイバイ」

そう言つて人間形態になつて彼女（？）は空を飛んで去つてしまつた。

「おい!!待てえええ!!」

俺は走つて追いかけたが、結局彼女（？）は金髪の少女と合流して完全に去つて行つてしまった。

「あの野郎・・・何者なんだよ・・・。」

俺はそうつぶやいた後、周りを見渡した。・・・周りには大きな穴が沢山。これどうすんだよ。

「あの・・・。」

白い服を着て、茶髪の髪を二つに縛つた魔法少女（？）が俺に話しかけた。

「ああ・・・君、映画かなんかは知らないけど、穴の処理どうするの？」俺は魔法少女（？）に話しかけた。

「穴は結界が解除されると元に戻るので大丈夫ですよ。」

魔法少女の近くにいたイタチ（それともカワウソか？）がしゃべつた。

「・・・君、将来の夢はいつこ〇堂かい？」

おかしいな・・・俺にはこのイタチ（？）がしゃべつたと思つたん



だが。

「え？・・・違います。」

「うん、俺疲れてるのかな・・・。質量保存の法則を無視した魔法に、イタチ(?) がしゃべるなんて・・・。」

流石に今日は疲れたようだ。まあ、長時間運転してたしな。

「えつと・・・これらは君たちが直してくれるのかな？」

「え？・・・はい。そうです。」

「そうか・・・今日は疲れた、寝よう。君たち、ちゃんと直しておくんだよ」

俺は旅館に帰ることにした。

俺は一睡した後、「魔法少女フィジカルこのえ　く友情の物理力で倒せ!!」を調べた。結果、演じている人たちは昨日見た彼女たちじゃなかった。まあ、よく考えたら当たり前だ。スタッフに監督、カメラに照明すらないんだもの。じゃあ、昨日のはなんだ？あの彼女(彼獣?)は魔術じゃなくて魔法を使っていた。なんか嫌な予感がするな。

俺はスマホを取り出した。

「もしもし。」

「おはようございます。メガネさん、朝早くすいません。」

俺はメガネさんに電話を掛けた。

「イブキ君ですかどうかしたのですか。」

「メガネさん。今、海鳴市にいるんですが、なんか色々とおかしいことが起こりまして・・・」

俺はメガネさんに昨日の夜に起きたことを話した。部隊のみんなは超能力や魔術があることは(鬼塚少佐以外)知っている。

「なるほど・・・海鳴市ですか。実は第一中隊のほうでも、今ちょうど海鳴を注目しているようです。なんでも高濃度の魔力保有物質が複数落ちてきたり、不可思議なことが起こっているそうですよ。」

「え？それ初耳ですよ!?!」

俺は驚いた。

「あまりのことで、情報統制されているそうですよ。なんでも監視カメラが一部の時間撮れていなくて、その間に道路や家の破壊、植物の以上成長とか起こっているようです。」

うん、そんなこと普通に流せないな。HS部隊第一中隊は国内問題が専門だ。そんなことが起こっているなら注目しないほうがおかしいか。

「そんなことが起こっているのです、うちにも協力要請が来ました。近々俺たちもそっちに行くんで、その時はよろしくお願いしますよ。」

第一中隊は国内問題が主な仕事なので、基本は諜報に工作、策謀で解決する。今回は事が事だから、海外問題を武力解決するうち（第二中隊）にも協力してほしい・・・ということか。

とりあえず・・・ただ温泉旅行なのにまた面倒に巻き込まれたってことか・・・。

「家族と温泉旅行に来たのに・・・。ハア・・・。了解しました。」

「旅行中でしたか・・・それは災難でしたね。『おい!!メガネいるか!?!』・・・では何かわかったら連絡しますね。」

「お願いします。」

電話が切れた。全く・・・俺は旅行に出れば何かしらに巻き込まれるなあ・・・。それに、昨日のあのビームの威力・・・地面のエグレ具合から相当な威力だろう。あんなのポンポン撃たれたら・・・。まあ、ありがたいことにあのビームは光速じゃないし、見てから避けることが可能ってくらいか。

「イブキ、どうかしましたか?」

俺は深く考えていたのだろう。ニトがいたことに気づかなかった。

「ああ・・・深夜、結果があつたみたいなんだけど・・・。」

「ええ・・・イブキも感じましたか。成長したようでうれしいです。」

ニトはにつこりと微笑む。

「え・・・あ・・・うん・・・。感じたというか・・・その場にいたつて言うのが・・・。」

「ほお、あの時イブキはその場にいたのか。」

ジャージ姿の師匠がいた。

「はい、そうです。」

二ト、期待を裏切つてゴメンナサイ。

「何か感じたことがあるだろう。」

師匠が聞いてきた。

「何というか……。今まで習ってきたのって、文系の中の理系？みた  
いな感じですよ。言葉や歴史、信仰を使って合理的に組み立てて効  
率よくする……。だけど、今回は最初から計算して作られていて……  
どちらかというところ、科学を組み立てて効率よくする……。そう感  
じました。」

「及第点だな。そうだ、あの魔術はこの星にない。」

え？この星にない!?

「じゃあ何ですか。使つてたのは宇宙人でもいうんですか？」

「あながち間違えではないだろう。」

マジかよ……。ん？そう言えばメガネさんが高濃度の魔力保有物体  
が落ちてきたって言つてたよ。もしかして宇宙から落ちてきたつ  
てことないよな……。宇宙から落ちてきたものを宇宙人たちが奪い  
合っている……。どんなアニメだよ。

ガシッ

「イブキ、朝餉の前に軽く運動でもするか。」

「あの師匠……。なんで襟首持つてるんですか？」

「なに、お主は逃げるから。両刃剣のほうも修行をつけてやる。」

「え!? 軽くですよ。ほんとですよね!？」

「ああ、吐かない程度にしておいてやろう。」

「はい!？」

俺は逃げ出そうとしたが、がっちり襟首を持たれているために逃  
げ出せない。

「玉藻に式神の使い方を最近習つてな。」

「実験台ですか!？」

俺はそのまま近くの公園まで連行され、式神(?)と戦わされるこ  
とになった。

魔法少女リリカル〇のは 高町一家怪しすぎだろ……

師匠ある程度は手を抜いてくれたようで、一昨日のようなきついものではなかった。朝ごはんを食べ、早速はやてちゃんちへ……つと思ったが約束の時間まではだいたい時間があつた。みんなでゆっくり行くかと、みんなで話しながら歩いていたら、昨日温泉で一緒だった年齢と見た目が全く違うお父さんに出会った。

「おはよう、イブキ君。絞られたみたいだね。」

「おはようございます。まあ、いつもよりは手を抜いてくれたからよかったですよ。今日帰るんですか？」

俺は大きめの荷物を持つ 土郎さん、恭也さん、美女美少女（美幼女）達を見た。

「長い間、店閉めるのはできないからね。」

「そうですね。」

ほんとに喫茶店経営してるのか……。俺はそう思いながら再び美女美少女（美幼女）達を見た。土郎さんの奥さんだと思われる美女（見た目20代前半）、恭也さんの彼女と妹さん。それに紫がかつた黒髪の少女、金髪の少女、昨日の魔法少女（？）、イタチ（？）が仲良くしゃべっている……。ん？なんでこの子がいる!?

魔法少女（？）のほうも俺に気づいたらしく、俺をガン見……。

「イブキ君……うちのなのはに興味があるんじゃないだろうね……。」

土郎さんからオーラが始めた。

「違いますよ!?! 昨日の夜、散歩してたらこの子に会ったんですよ!?! 迷子になってたみたいで!?! ねえ!?!」

俺は魔法少女（？）に慌てながら聞いた。

「え？うん。このお兄さんが送ってくれたの。」

すると土郎さんから出ていたオーラは消えた。

「そうだったのかい？僕はてつきり……。いやあ、送ってくれてありがとう。」

「いえいえく……。そういえば昨日自己紹介してなかったね。俺は村田維吹大尉。海軍軍人で、訳ありで武偵もやってる。気軽にイブキって呼んで。」

「えっと……。私は高町なのはって言います。聖祥大付属小学校の3年生です。」

「私は同級生のアリサ・バニングスです。」

「私は月村すずかです。」

3人組が名前を覚えてくれた。この「なのは」っていう子は要注意人物だな。あとでメガネさんに報告して、この子の背景を調べてもらうか。

「なのはちゃんにアリサちゃん、すずかちゃんね。袖振り合うも多生の縁だ。よろしくね。」

「だいぶ縁がありそうだしな。」

「「はい。」」

「それじゃあ士郎さん、喫茶店に行った時はよろしくお願いします。」  
そう言つて俺たちはその場を去った。

「イブキ、あのような体形が好みかい？ だったら創り変えるけど……。」  
「エルさん!?! あなたは今のままで十分美しいですよ!?! それに好みじゃないし!?! 夜に会った子かどうか確認するためにジツと見たんですよ!?!」

「まさかマスターがロリコンで捕まるかと思つたぜ。」

「ベオウルフ!?! おまえもか!?!」

「……。ということが高町なのについて調べてくれませんか?」

俺はみんなと歩きながら、メガネさんに携帯で報告をしていた。

「ちよつと待ってください……。出ました。高町なのは、私立聖祥大学付属小学校3年生で9歳。高町家の次女で5人家族だそうです。第一中隊と警察もこの子に注目しているみたいですね。ですが警察のほうは捜査をやめたようですね。」

え？

「どういうことですか？確かに第一中隊が動くほどですから危険なため……とかで捜査終了ですか？」

あの警察が……銭形警部がこんなこと起こって素直にあきらめるとは思えない。

「表向きはそうみたいです。政治家から圧力があつたみたいです。その意趣返しかどうかはわかりませんが、第一中隊に警察の一部が向しています。」

警察は政治家からの圧力に弱いところはある。しかし、軍だと文民統制の原則（軍のトップは政治家だよ、という原則）はあるけど、基本的に政治的圧力に強い（政治家は軍事のド素人なので）。

「その圧力をかけた政治家が過去に不破にボディガードを受けてもらっていたようです。」

「不破……なんでその一族と？」

確かに不破と御神はその世界ではだいぶ有名だが……なぜこの事件に関わってくる？

「高町なのはの父・高町士郎は婿養子で、旧姓は不破だそうです。今は足を洗って喫茶店を営んでいるのですが、前はSPや裏の仕事で有名だったみたいです。その政治家とも知り合いのようです。ついでにその喫茶店、結構繁盛していてシュークリームで有名だそうです。食えログでも高評価ですね。」

そうか……土郎さん、マジで喫茶店経営していたのか。てっきり冗談か、やっつけていても武道喫茶とか開いているのかと……。つて不破!?あの鍛えよう……。納得できるな。

「家族構成も複雑ですね。長男は高町士郎の内縁の妻との子、長女は姪に当たりますね。今の妻との子は高町なのは一人です。それについて最近まで居候が3人いたようです。そのうち一人は歌手のフィアッセ・クリステラです。」

フィアッセ・クリステラ……英国の有名歌手か……。日本好きで日本語もペラペラって情報は聞いたことがあるな。

「とりあえず、高町なのはの父・高町士郎が政治家に何らかの形で接触

し、その政治家が捜査の妨害をした・・・と。」

「そのようです。あ、今ちようど携帯会社の通話記録が出ました。・・・高町なのはが第一の現場の公園から帰ってきた後、すぐに電話をしているようですね。」

・・・高町家、怪しすぎるな。調べれば調べるほど怪しき満載だ。「少し脱線してしまいましたね。高町なのはについてですが、最近フェレットを飼い始めたようです。飼い始めたのが事件発生と同じ時期なのですが・・・このフェレットもおかしいことが多いです。」

あれ、イタチじゃなくてフェレットだったのか。

「何がおかしいんですか?」

「まず一つに、毎回事件発生の時に連れて行っているようです。それに偶然音声の記録が見つかったのですが・・・会話しています。」

「え・・・フェレットと?」

「そう考えないと理屈が合いません。一応腹話術かもしれないと思って音声を調べましたが全くの別物です。」

・・・あのフェレットはしゃべっていたのか。てっきり腹話術か、幻聴かと・・・。

「もう一つなのですが・・・あのフェレット、今までに見つかっている種類に該当しないそうです。要は未発見の種類です。」

「もしかしたら、地球のものではないかもしれない・・・と?」

「そうかもしれません。あの高町家、権力も武力もあります。くれぐれも慎重にお願いします。ほかにわかったことがあったら連絡しますね。」

「お願いします。」

「では。」

プー、プー、プー・・・

電話が切れた。それにしてもさらに面倒なことになったな。

「イブキ様、何を話されていたのですか?」

リサが聞いてきた。

「この地域で結構重大な事件が発生していてね・・・。もしかしたら、さっきの人たちが中心人物かもしれないって。」

俺がそういつた瞬間、みんなの空気が変わった。

「いや!!状況証拠だけでまだ犯人と決まったわけじゃないから!!?」

「余の旅行を邪魔するものがあるとはな……。」

「いいねえ……。殴って蹴って……。いい旅行になりそうじゃねえか。」  
「ネロにベオウルフ!?いま第一中隊が動いているからへんなことしちゃだめだからね!」

事件よりも先にこっちの問題のほうが深刻だな……。

ネロとベオウルフ、その他不安のある人達を説得していたら、すぐに目的地についてしまった。驚いたことに彼女は家の前で俺たちを待っていていたようだ。汗の量からだいぶ前から待っていてくれたのだろう。もつと早くにつけばよかったかな。

はやてちゃんは俺たちを見つけたら大きく手を振っていた。

「いやあ、案内してくれるなんてありがとね。」

「いえいえ、夏休みで暇なので。何処か行きたいところあります?」

車椅子の少女が外でずっと待機しているのに付き添いの人がいない。まして俺たち怪しい集団に娘を一時預けるのだ。親が出てくるのが普通なのに出てくる気配はない。

「まずは海鳴公園に行きたいんだけど。」

とりあえず第一現場に行ってみるか。

「タマモク、商店街に寄ってみたいなく。この翠屋って言う喫茶店は有名で行ってみたかったんですう。」

「あそこのシュークリームは美味しいですよ!!」

玉藻がそんなことを言うと、はやてちゃんも反応をした。

「まあ、昼に行けばいいでしょ。……それに第一現場だからね(ボソツ)」

「しようがないですねえ……。まあ、今行っても早いですけど。」

俺がボソツと言ったことが聞こえたのだろう。

「あそこ、最近ガス爆発があったみたいですけど……行きます?」

ガス爆発のせいになったか……。ガス会社の人、どうもすみません。



「お願いするよ。あと敬語いらさないから。」

「え?でも……。」

「仕事柄、敬語ばかりで疲れるんだ。オフくらいはそう言うのは……ねえ?」

「わかりまし……わかったわ!!こっちや!!」

はやてちゃんが指さした方向に俺は彼女の車椅子を押し進み始めた。

「あ、財布と水筒忘れた。イブキ兄ちゃんもどつて。」

「はやてちゃん、いくら何でも慣れるの早すぎない?」

「でも言ってたやんか。」

「いや、そうだけどさ。」

公園に着くと、広範囲で公園の木々は荒れ果て、舗装はメチャクチャになっていた。そしてあちこちに「KEEP OUT」のテープが……。うん、よくこれを情報統制できるな。

「さつきも言っただけど、ガス爆発してこんなんになったんやって。近くの動物病院にも被害が出たそうや。」

「KEEP OUT」のテープ内には警察と軍人が多数いた。

「爆発さえなければ綺麗な公園だったろうね……。」

「ここが第一現場か。実際にあのビームの威力を考えれば妥当か……。などと考えていると見知っている人を見つけた。」

「瀬島少佐く!!」

「ん?ああ、村田大尉か。それと私は昇進した。」

「ん?襟章を見ると中佐になつてる。」

「おめでとうございます。ん?っていう事は、今は参謀長ですか?」

この人は瀬島龍二郎中佐。第一中隊の幹部だ。ついでに辻さんの永遠のライバル。

「それが今、中隊長が不在でな。中隊長代理もやっている。ところで

辻大佐はいるのか？」

「いえ、旅行できたならこんなことになってました。」

「それは運がなかった。・・・まあ村田大尉らしい。」

「それはないですよ！」

っはっはっは。お互いにそんなことを言っただけで笑った。

この人は戦略家で、戦術家の辻さんとは思考が違う。そのせいでよく辻さんと衝突が起きて、俺が中隊長が仲裁していた。そのおかげか俺と瀬島中佐とは仲がいい。

「やっぱりM関係（魔術関係という意味の隠語・海軍式）ですか。」

「それ以外考えられない。これがガス爆発に思えるか？」

「どうやっても見えませんね。」

本当にガス爆発だったらこの地域が燃えている。

「マ関（魔術関係という意味の隠語・陸軍式）の専門家に聞いたが、このような術式は初めて見るそうだ。」

師匠も言っていたけど・・・マジで宇宙人かもしれないな。

「辻大佐から後で聞くとと思うが、情報統制されているため住民の避難はされてない。今うちで必死に犯人の特定をしているが何かあったら応援を頼む。」

そう言っただけで瀬島中佐は頭を下げた。

「頭を上げてください瀬島中佐!!協力するのは当たり前ですよ!!」

瀬島中佐は作戦や戦略のためなら物乞いにも土下座をするような人だ。

「そういえば瀬島中佐、昨日の深夜に大規模結界があつたのをご存知ですか？」

「ああ・・・知っているが・・・」

「自分、あの中にいます。中で高町なのはと金髪の少女に橙色の髪の毛が戦っていました。」

すると瀬島中佐は大きくため息をついた。

「やはりそうか・・・マークはしているが物的証拠がない。さらに後者の二人の身元は不明だ。」

ハア・・・俺と瀬島中佐はため息をついた。

「あの・・・ガス爆発って誰かがやったんですか？」

ん？俺と瀬島中佐が声のしたほうに振り向いた。そこには車いすを自分で進ませてこっちに来ているはやてちゃんがいた。

「お嬢さん、ガス爆発なんてそうそう起きない。だから我々は人為的なものかどうか調べているところだ。まあ・・・無いことを証明するのは難しいから面倒だ。」

「この人は隣の部署の幹部の人だね。結構お世話になっていたから声かけたんだ。」

俺と瀬島中佐ははやてちゃんに事実を隠蔽した。機密だしね。

「・・・そうですか。」

はやてちゃんはジト目で俺を見た。はやてちゃん、これ軍機だから答えられない・・・。

「瀬島中佐、お仕事を邪魔してしまい、すいませんでした。」

「ああ、村田大尉も旅行を楽しめるといいな。全く・・・こんな事件がなければ妻と娘で旅行に行けたのだが・・・。」

あ、これは話が長くなる。

「では、失礼します!!」

「ああ・・・今頃幼稚園かな・・・。この前のお遊戯会では・・・」

瀬島中佐の部下達が俺に「何しやがったこの野郎!!」みたいな視線を浴びせてきた。瀬島少佐は家族のことになると話が長くなるからな。最低でも1時間は嫁さんと娘の自慢と惚気話をしてくる。

「藤原、ちよつと来い。」

すると奥からふつくらした顔の青年将校が走ってこっちへ来た後、中佐に敬礼をした。

「中佐殿、なんででしょうか!!」

この青年将校は藤原石町少佐。同じ飛び級卒、そして隣の課ということで、良く俺の指導をしてくれた。俺の先輩って感じか。

「いや・・・最近仕事が忙しくてな、娘にちよつこしか会ってないっ  
ちや・・・」

瀬島中佐の愚痴が始まった。

「む、村田!!なんで親バカモードにしちやっただの!?!」

「うちの家族見たらこうなっちゃいました。」

お互い声を潜めてしゃべっているよ

「藤原、聞いているのか？」

「はい!!聞いております!!」

「全く・・・この前のお遊戯会も仕事で・・・」

俺は藤原少佐を尻目に急いでその場を離れた。藤原少佐、今度ブラドから貰った酒を送るんで勘弁してください。

『翠屋、海鳴市商店街にある大人気な喫茶店。ここのケーキは有名であり、遠出して買う人もいる。特にここのシュークリームは絶品で・・・』

適当なワードでググったら出るわ出るわ。翠屋についてたくさん出てきた。確かに、これだけを見れば俺も楽しみでしようがなかったはずだ。けれど、嫌な予感は当たるものだ。

「まさか、もう来てくれるとは思わなかったよ。」

問題の中心人物、高町士郎の喫茶店だとは思わなかったけどな!!いろんなブログに『店長さんが若い!!』とかあったけど、まさかこの人とは。

「ですよね。まさかここの店長さんだとは思いませんでした。」

「あれ、言っただけじゃなかったか？」

「喫茶店としか聞いてないですね。」

俺はそう言って紅茶を口にした。・・・うまい。俺は味や香りの違いで産地が分かるほどの舌と鼻は持っていない。が、いい茶葉を使っているのは俺のような素人でもわかる。

「これはダーズリンですか？」

「わかるかい？F&Mの高級品だよ。」

適当に言ったら当たるものだな。

そう思いながら俺はシュークリームをかじる。うん、うまいな。ど素人の舌でもスーパーの安売りシュークリームと別格なのはすぐわかる。

俺は問題を隅に投げつけ、紅茶とシュークリームを堪能した。

「イブキ兄ちゃん!!私の分は私が払うんや!!」

「いやいや、年長者の顔立てさせてよ。小学生一人分ですら割り勘にする高校生に軍人とか情けないからさ。」

シュークリームを堪能した後、商店街をぶらぶらと歩きまわり、夕方となった。

「私の家で夕飯食っていかへん?」

「旅館が夕飯を用意していると思うし大丈夫かな。」

「お茶だけでもどう?」

「ちよ、なにするのよ!!」

「助けてー!!!」

は?

俺たちは悲鳴の聞こえたほうを向いた。そこには今朝自己紹介していたアリサちゃんとすずかちゃんが誘拐されようとしている現場だった。

・・・M関係（魔術関係という意味の隠語・海軍式）の次は誘拐ですか。海鳴市、ここってそんなに治安悪かったっけ?

止まっていたハイエースに二人を黒服が素早く押し込み、ダンケダンケ・・・じゃなかった、急発進した。つてこのままハイエースが進むとはやてちゃんが危ない!!

俺は駆け出し、はやてちゃんを庇おうと・・・

「あぶな!!」

はやてちゃんは自分で車椅子を動かし、車を避けた。え?

ガッツ!!!

・・・俺はただ、車に轢かれに行っただけかよ!!!

俺は車の衝撃で吹っ飛びながら、薄れ行く意識の中でそうツツコミ

を入れた。

完

「シなわけあるか!!!!」

魔法少女リリカル○のは

誘拐犯弱すぎだろ・・・

「ンなわけあるか!!!」

俺はなぜか不穏な天啓が来たのでツツコミを入れた。

ガシッ!!

俺はフロントガラスと天井の境目のところに手をかけ、車にしがみついた。頭が裂けるように痛いし、視界が紅い……。こりや頭切つたな。

俺は操縦席側のドアへ移動し、体全体に魔力を這わせる。

「おりゃああああ!!」

俺は全力でドアを引くと呆気なく開いた。え? ロックかけてなかったの?

中にいる人はびっくりして固まっている。俺はすぐさま運転手をつかみ外へ投げ飛ばし、運転席に座る。幸いなことに助手席には誰もいない。俺はブレーキをベタ踏みし、サイドブレーキをかけた。

ギヤリギヤリギヤリ!!!

ハイエースは嫌な音を出しながら急停止した。俺は急いでキーを抜き、後ろの二人を確認する。シートベルトをしていなかったせいで前に飛ばされているが大きな怪我はないようだ。

「おい!!二人とも大丈夫か!!」

二人の口に貼られているガムテープをはがし、手足を縛っている縄を切る。

「イブキさん!」

すずかちゃんも驚いている。アリスちゃんは気絶しているようだ。決して急停止したせいで気絶したという事はないはず……。

「まさかこんな処で二人にもう会うとは思わなかったよ!!」

俺は二人を担いで外に出た。

「撃て!!撃てええええ!!」

ダダダダダダ・・・!!!

犯人たちが復活し、撃ち始めた。え? ちよつと人質はこつちにいるんだぞ!! 人質ごと仕留める気か!?

俺は急いで物陰に隠れた。ここは瀬島中佐に会った公園だ。近くに瀬島中佐達がいるはず……。運が良ければ今すぐに駆けつけてくれるか?・・・って、人っ子一人ここにいねえし来ねえよ。流石は公務員、もう帰ったのか!?・・・まあ、民間人に被害でないからいいか。

「そこ動くなよ!!」

「何するんですか!？」

すずかちゃんが聞いてきた。

「ちよつくら懲らしめにね!!」

そう言つて俺はシャーロックからもらつた紅槍を「四次元倉庫」から出して物陰から飛び出た!!

敵はそこまで上手くないようだ。銃のエイムはガバガバ、これなら「影を薄くする技」を使わなくても余裕だな。俺は一気に近づいて槍を一回転!これで銃を持っていた三人を全員気絶させる。・・・上手くないどころかド素人に毛がほんの少し生えた程度じゃねえか!!

俺はカシラだと思われる良質なスーツを着た男の首に槍を突きつけた。

「なぜソイツを助ける。」

スーツの男が聞いてきた。

「何故って・・・武偵で軍人だからだけど。誘拐を見逃すのはダメだろ。」

「お前はこいつらの正体を知らないからそんなことを言える!!こいつらは夜の一族だぞ!!」

「・・・こいつ大丈夫か？」

「吸血鬼は滅ぼすべき存在だ!!それに☒夜の一族の吸血鬼☒!!真っ先に殺すべきだ!!」

「・・・あゝ、こいつ頭逝つてるのか。」

「そうだね、とりあえず精神鑑定だね。」

俺はスーツの男に手錠をかけた。その男の胸元には十字架が……。偏見持ちたくないけど、こういう関係の人って結構狂信者が多いよね。まあ、人数が莫大だからそう思つてるだけかもしれないけど。



「この娘は、その一族の娘だ!」夜一族は滅ぶべきなのになぜわか」

「うるせえ!!」

ガツツ!!!

男は静かになった。男のタンコブは逮捕する時にできたついでう事にしよう……。しかし、「夜の一族」ねえ……。俺は第二中隊所属だったから国内はそこまで詳しくないけど、「夜の一族」なんて聞いたことがない。この男の頭がもし正常だったとしても、そこまで注目すべき一族ではないのだろう。

そんなことを考えながら銃を乱射していた犯人たちにも手錠をかけ、一味全員を近くの木に縛り付けた。縛り付けた後、警察と瀬島中佐、辻さんに電話をし、もう一件落着かな。

「おう、終わったぞ。出てきても大丈夫だよ。」

そうすると二人とも物陰から出てきた。アリサちゃん起きたんだ。

「あの……。聞いちゃいました?」夜一族のこと……。」  
「すずかちゃんが聞いてきた。」

「……。夜一族」つてやつか?あの男の妄言だろ?気にすんな。」  
そう言つて二人の頭を撫でる。

二人とも怖かったのだろう、撫で始めてしばらくすると二人とも抱いて泣き始めた。小学三年生で誘拐か……。むしろよくここまで我慢できたものだ。

しばらくたち、二人が泣き止んだ頃に急に殺気を感じた。

「ツ!!!」

俺はとっさ殺気を感じた方向に紅槍を構えた。……。そういえば最近師匠に槍を仕込まれていたせい、刀や銃剣付き小銃でなく槍を出すようになったよ。

ギイイイ!!

「貴様!!二人を誘拐するために近づいたのか!」

そこには小太刀二振りを持った恭也さんがいた

「いや、違いますから!!助けたほうですから!!それと銃刀法違反!!」

この人、軍関係でも武偵でもなかったはずだよな!

「恭也さん!!これ以上やるなら公務執行妨害と銃刀法違反と傷害未遂の現行犯で逮捕しますよ!!」

そう俺が言った瞬間

キキキキキキ!!

パトカーと装甲車、計10台ちよつとが俺と恭也さんを囲んだ。・・・うわあ・・・後ろから戦車まで来てるし。

「武器を捨てて手を上げろ!!」

パトカーと装甲車から降りた警察と軍人が銃を構えて俺達に叫んだ。・・・うん、今頃ですか。俺と恭也さんはすぐに武器を捨てた。

その後、犯人の一味と恭也さんは御用となった。なんかパトカーが来た後にすずかちゃんの姉とメイドさん達が来たが、警察の1人がその3人に対応してる。

「瀬島中佐。」

俺は近くにいた瀬島中佐に声をかけた。

「ああ、村田大尉、今回はお手柄だな。」

「ありがとうございます。瀬島中佐、少し独り言を言いますがよろしいですか?」

俺は瀬島中佐が何か言う前に独り言をしゃべり始めた。

「これはあくまでも独り言ですが・・・この海鳴市、M関係（魔術関係という意味の隠語・海軍式）の事件のせいで戒厳一步手前・・・いえ、秘密裏に戒厳されていてもおかしくないのではないかと思っっています。」

「・・・。」

瀬島中佐の目がギロリと俺を見た。

「そんな都市にこんな犯罪者が入れるとは思えません。」

「マ関（魔術関係という意味の隠語・陸軍式）の事件が発生する前からいたかもしれない。」

「いえ、犯人達の犯行はあまりにもおぞなりました。第一中隊の皆さんならすぐに発見、対処をしていたでしょう。しかし、放置されていた。」

俺は瀬島中佐の目を見る。

「ところで、M関係（魔術関係という意味の隠語・海軍式）の事件は高町家が関与している疑いがありますが、物的証拠が見つかってません。そんなときに高町家と親しい人間が誘拐される……。高町士郎と高町恭也は不破の一族で裏の家業をやっていた。ならば、親しい人が誘拐されたら自ら解決するはずです。何故なら、自分たちのやってきたことが公になってしまう可能性があるから。」

瀬島中佐はまだギロリと俺を見ている。流石は第一中隊、気迫が違う。

「誘拐犯が武器を持っているなら、解決するためには武装するのは当たり前です。不破は小太刀二刀流が有名、小太刀をもって解決に向かうでしょう。しかし、小太刀なんかを一般人が公の場で持っていたら銃刀法違反で捕まるのは当たり前。」

犯人達と恭也さんを乗せたパトカーが去っていった。

「高町家に誘拐されたことを伝え、高町家が解決しようと現場に来る前に確保し、あわよくば警察や軍人などの公務員を襲わせて捕まえる。事情聴取中にM関係（魔術関係という意味の隠語・海軍式）の事件のことも聞ければ一気に解決する。家宅捜査もテロの可能性があるため、とかの理由でできる。政治家からの猛烈な圧力があっても何日間か確実に拘留できる。」

あ、俺の家族とはやてちゃんが来た。このくらいで終わらせるか。

「瀬島中佐、自分はこの事件、誰かが企んでいたような気がします。そう思いませんか、瀬島中佐。」

「長い独り言だな、村田大尉。」

瀬島中佐はそう言った後、俺から目を離した。

「君の家族が来たようだ。家族は大事にするといい。」

瀬島中佐は軍帽を深く被りなおした。

「これは独り言ではあるが……。私は国のため、民のため、陛下のためならばどんな犠牲を厭わない。これは嘘偽りのない言葉だ。」

俺はこれを聞いて安心した。瀬島中佐は謀略を得意とし、証拠をほとんど残さない。しかし、この人の国を思う気持ちは本当なのは良く

知っている。・・・まあ、それも演技って言われたら目も当てられないけど。

「ほら、早く家族のもとに行くといい。それとひどい傷だ、海鳴大学病院にすでに連絡はした。治療と検査に行くように。以上だ。」

「はっ!!」

俺は敬礼をした後、心配していたであろう家族のもとに向かった。

「全身打撲に大量出血!!なんでこれで平気なんですか!!」

家族と一緒に病院に行き、銀髪の可愛い女医さんに診察してもらったらこんな御言葉をいただいた。

「あの・・・旅館にもどりたいんでs」

「ダメに決まっています!!今日一日は最低でも絶対安静です!!旅館に戻るなんてもつてのほかです!!」

・・・ウソだろ。

「そうですか・・・。はやて、イブキの分の夕食を一緒に食べませんか?」

おい、ニトクリス何言ってるやがる。

「そうやね、イブキ兄ちゃんあまり反省しとらんようやし。」

そう言ってる二人が黒い笑顔を浮かべた。

「イヤイヤ!!せつかくの旅行なのにうまい飯に温泉が無くなるとか嫌だぞ!!」

「村田さん!!病室に行きますよ!!」

女医さんが俺の腕をしつかりホールドし、病室に向かって歩き始めた。え?この人すごい力持ってるんですけど!!

「フィリス先生!!俺平気ですから!!だからやめてええええ!!」

なお、翌日に傷などが全て治っているのを見て驚くフィリス先生がいた。

魔法少女リリカル〇のは やつと原因が分かった……。

翌日フィリス先生から退院許可が出たので、家族が来るまでロビーでボーっとしていた。流石に病院のロビーで武器の整備なんてできないし暇だなあ……などと考えているとすずかちゃんと彼女の姉であろう人、メイドさんの3人がロビーに入ってきた。

「お？すずかちゃんか、ちゃんと眠れたかい？」

小学三年生で誘拐はトラウマものだろうに。

「はい！ぐっすり眠れました。」

「そいつあよかった。」

俺はそう言って頭を一撫でした。

「昨日は妹と妹の友人を助けてくださりありがとうございます。」

すずかちゃんの姉であろう人が俺に頭を下げた。

「いえいえ職務ですから。それとあなたは？」

「私はすずかの姉の月村忍と申します。」

ここで姉が登場するか。メイドを連れてきているところから良家のお嬢さんなのだろう。それなのに親が来ることができないうことは海外にいるか、黄泉の国にいるか……。

「自分は村田維吹大尉です。命令により東京武偵高に出向しています。」

「お見舞いの品を持ってきたのですが……退院祝いになってしまいましたね。」

「わざわざそこまでしていただかなくても……。大きな怪我はありませんし、念のための入院ですから。」

今の言葉、フィリス先生が聞いたらすっ飛んできて説教されるな、きつと。

忍さんはメイドさんの持っていた包みももらい、俺に渡してきた。

「急だったのでこの程度の物しか用意できませんでしたが……。受け取ってください。」

「ここは貰つとかないとダメか……。

「すいません、いただきます。」

「少し場所を変えてお話しませんか？」

「話？お礼はもらったし……ほかに話すことが？」

「そうですね、中庭にでも行きますか。」

俺たち4人は中庭に移動した。

「単刀直入に聞きます。☒☒夜の一族☒☒についてどこまで聞きましたか？」

中庭のテーブルに座つたとたん第一声がこれだった。……あれはあの男の妄言ではなさそうだな。忍さんは真剣な顔をしている。

「あの男の妄言をまともにしちやあいけませんよ。」

俺は肩をすくめた。

「ごまかさないでくれませんか？」

おお、怖い怖い。俺はお互いそんなことを知らなかった、ということで一件落着かせたかったのだが……。全く……。

☒☒夜の一族☒☒は吸血鬼。あの男の話だとその吸血鬼の中でも有名な一族であるらしいという事。俺の部署は海外担当だったが☒☒夜の一族☒☒は聞いたことがないから有名な国内の一族。だけれど、国内担当の名なだけ、又は落ちぶれた一族である……。ついでにアクア・エデンに行っていないとなるとだいたい歴史があるのだろう。あの男の証言をもとに考えるとこうなりますね。」

俺がそう言うのと忍さんは苦虫をこれでもかというほど噛み潰したような表情を浮かべた。

「あれだけでそこまで……。ほとんど考えの通りです。」

はあ、なんか嫌な予感がするんだよなあ……。俺はさすがちやんを見た。……。なんか目をキラキラさせてるんですけど、ナゼ？

「ところで、私たち☒☒夜の一族☒☒には掟があります。」

コイツが本題だな。

「掟とは……。どこかの小説のようですね。」

「正体を知ってしまった者は秘密を共有して生涯連れ添う関係を築くか……。記憶を書き換えるか。」

「ッ!!!」

俺はとつさに銃に手が伸びた。吸血鬼なら何かしらの特殊能力を持ち、力も一般人よりも強い。メイドさんは一般人や訓練された人と違う足取りだ。全く戦力が分からねえ。地の利も人の数も、純粋な力も負けてる……。ここで戦になったらきついな。

「ほう……。物騒ですね。」

結婚して身内になるか……。記憶を消されるか、かあ……。

「ええ、そうですね。」

いや、落ち着け……。俺は公務員だ。バックには日の丸がいる。向こうは力のない一族だ。今、戦いになっても逃げることは可能だ。それにこの都市は戒厳されていて行政に司法の一部か全ては軍にある。何かしようとしても向こうが不利になる。そして第二中隊のみんなに何かやられたって知られたら何をするか……。これは俺が面倒になるわ。

「両方とも拒否します。」

「え?」

向こうはそう答えるとは思わなかったようだ。

「憲法によって結婚の自由は保障されています。あなたには恭也さんという彼氏がいるようだ。となると、もし結婚するとなったらさすがちゃん。この歳で、しかも10歳近く年上の婚約者を持つのは可哀想だ。」

そう言っただけ俺はずかちゃんを見た。うん……。なんで悲しそうな顔をするんだい?」

「軍人は公務員です。法律のことは多少頭に入れさせられるんでね。」

そう言った後、再び視線を忍さんに戻す。

「記憶をいじられるのも嫌です。頭の中には機密がいっぱい詰まってるんで。これがバレたら最悪、俺と忍さんの首が物理的に飛ぶかもし

れません。」

忍さんとメイドさんは目を丸くしたままだ。そう言えば、恭也さんの彼女が忍さんだよな。恭也さんもこの掟とやらを知ってそうだな。「困りましたね。それでは私たちの面子が丸つぶれです。」

やっと回復したようだ。

「そう言われましても、法律を破るか、軍機をばらすか……。そんなに面子が大事ですか？」

「ええ、分家の方々はうるさい人が多くて……。」

ハア……。二人でため息をついた。彼女も大分苦労してそうだな。多少は妥協するか。

「もし、結婚するとなるとすずかちゃんと……。なるんですか？」

「そうですね……。分家の方々と……。というわけにはいかないのです。」

いや、分家のお年頃の人とも結婚しようとは思わないけど。

「これでどうです？ 『記憶の書き換えができなかったため、婚約ということになったがすずか嬢はまだ幼い。すずか嬢が結婚できる年齢になり、尚且つ大学・大学院を卒業してお互いに合意があれば結婚するということにした』……。なんか言われたら『これは軍の意向だ』って脅されて仕方なくこうなったとでもいえない。」

問題先送りの将来ご破算な提案だ。まだ結婚する気はないぞ。

「記憶の削除ができないって言うのはさすがに……。」

「できないでしょう？ 軍機のせいで。」

あ!! という声を忍さんが出した。彼女も納得したようだ。

実際は『記憶を（軍機のせいで）書き換えなかった』だが、分家の人には『記憶を（書き換えようとしたけど）書き換えができなかった。』と誤解させればいい。

「これでいいですか？」

「そうしましょう。」

俺と忍さんはグツと握手をした。

「すずかちゃんも形式上とはいえ、こんな婚約者持って迷惑だろう。ゴメンな。」

「いえ!! イブキさんを大学卒業までにオトすので大丈夫です!!」



は？

「イヤイヤ・・・多分年上の憧れとか吊り橋効果とか入っちゃってるから、それ。」

「いい女になるので待っていてください!!」

なんだこの子!!すごい気迫・・・!!

「あ・・・うん・・・。在学中にいい相手見つけるんだよ?」

「はい!!もう見つけたので、あとは磨くだけです!!」

・・・最近の小学生はマセテルンダナ。・・・いや、落ち着け!!大  
学卒業は大体23〜24くらいだ。となると今から13〜14年後。  
つまり俺は三十路だ。三十路のおっさんを好きになる事はないは  
ず・・・。

忍さんとの交渉（笑）が終わった後、全員ロビーに戻った。

「イブキさん!!好きな食べ物は何ですか?」

「・・・好き嫌いはないけど、寿司は好きだね。」

「そうですね・・・お嫁さんは料理できる人のほうがいいですか!」

「・・・職業柄、家はなれること多いからね。できるほうがいいよ  
ね。・・・ところですかちゃん。」

「何ですか?」

「なんでそんなにくつつくのかな?」

すずかちゃんは俺の腕をギュツと抱きしめている。

「イブキさんを落とすためです!!」

彼女は自分の胸(?)を俺の腕に押し当てているようだが、悲しい  
かな・・・(どこが、とは言わないけど)ペタンコなので肋骨が当たっ  
てる。

「うん、俺が社会的に死ぬからやめようか。」

「死んだら私が責任もって結婚するので大丈夫です!!」

最近の子はマセてるんだな・・・。

ダダダダダダ!!ダダダダダダ!!

急に携帯からターミネーターのBGMが流れてきた。鬼塚少佐か  
らの電話だな。

「ちよつと電話出てきます。」

俺は忍さんとすずかちゃんにそう言い、すずかちゃんの拘束から逃れた。

病院の外に出て電話を出ると、やはり鬼塚少佐が出た。

「よおボウズ!!ケガは平気だな!!」

怪我の心配はないんですか……。

「鬼塚少佐……。確かにケガは平気ですけど……。心配ぐらいしてくださいよ。」

「そのくらいケガに入らねえだろ?」

そんな……。全身打撲に大量出血だぞ。普通では大怪我で……。うん、今迄から考えるとケガのうちに入らないや……。おかしいな、平和に生きるために軍に入ったはずなのだけど……。大怪我ばかりして銃弾の雨に毎回呐喊してるような気がする……。

「……。ボウズ、急に黙ってどうした?」

「いえ……。人生儘ならないなと……。」

「?」

「……。ところで鬼塚少佐、急な電話ですがどうしたのですか?」

「そうだった!!ボウズ!!今どこにいる!」

「海鳴大学病院にいますが……。」

「よし!!そこで待ってる!!」

ツ……ツ……ツ……

電話を切りやがった。病院のロビーで待ってたほうがいいのか?

「おはようございます。」

目の前にアリサちゃんと執事さんがいた。電話中に来たようだ。

「おはよう。大丈夫?昨日は眠れた?」

この子は大企業を経営する家の一人娘。流石にすずかちゃんのような事は起きないはず……。はず……。

「はい。眠れました。昨日は助けてくださりありがとうございます。ありがとうございました。」

アリサちゃんはそう言って一礼。流石はお嬢様、礼一つとっても上品だな。

「いえいえ、軍人として当然のことをしてただけです。」

「鮫島。」

「はい、お嬢様。」

そう言って執事さんは手に持っていた物を俺に差し出した。

「このくらいの物しか用意できませんでしたが・・・受け取ってください。」

月村家の受け取ってバニングス家から受け取らないのはいけないよなあ・・・。

「こんな恐縮です。ありがとうございます。」

「イブキさんまだですか?・・・あ、アリサちゃん!!」

「すぐかちゃん病院から出てきた。」

「大丈夫か?昨日はあの後大丈夫だった?」

「大丈夫だったよ!!」

二人は仲良く話し始めた。うん、和やかでいいな・・・。

「にいちゃん!!」

はやてちゃんがタママモに車椅子を押されながら来た。

「にいちゃん!ケガ大丈夫?」

「そうだよ!!普通は心配してくれるようなケガだよな・・・。

「もう大丈夫。退院許可をファイリス先生が出してくれたよ。今日は何処へ案内してくれる?」

「え・・・?どないしよ!!考えとらんかった!!」

「キキキキキキ!!!」

病院の前に高機動車が止まった。

俺は高機動車の中で揺れていた。

「・・・あの、さすがにこのやり方は誤解を生むと思うんでやめてください。」

辻さん達は俺を拉致したのだ。俺は今、誤解を解くためのメールを打つので必死だ。

「イブキ大尉には悪いが・・・時間が無いため希信はあのような形に

なった。」

辻さんが焦り顔で言った。辻さんが焦るなんて珍しい……。これは何かヤバいな。

「本来はもう2〜3日後に海鳴に着く予定だったんですよ、村田君。」  
神城さんが説明を始めた。

「四日前まで大きな作戦についてました。休息をとっていたらM関係（魔術関係という意味の隠語・海軍式）の大きな事件に名家の娘の誘拐があったという報告を受けまして……。」

瀬島中佐はそこまで考えてたのか……。

「それで海鳴に今日の到着いたら早速結界が張られたようです。」

は？・結界が？

「イブキ大尉!!この日本に対しテロ行為など!!この希信が許さん!!!敵と会っているのだろう!!?情報を教えてくれ!!」

……。全く。あの時捕まえてればよかったな。

「わかりました。敵は……。」

現場に到着し、田中さんが結界を破り高機動車は結界内に入った。

「岩下、狙撃位置に行け、田中は偵察及び罠の有無、村田は田中が戻るまで待機だ。」

鬼塚少佐が流れるように命令をした。

「了解」

岩下さんと田中さんはそれぞれの得物を持って走っていった。大きな音が聞こえるから目標の位置はすぐわかるだろう。

田中さんは3分もしないで戻ってきた。

「目標10時方向に500mです。付近に罠はありませんでした。」

「おう、ボウズ行くぞ!!辻中隊長と神城参謀長も来られますか?」

「2当り前だ（です）!!!」

……。この二人は本当に元気だな、おい……。

現場に着くと、黒い服を着た少年が金髪の少女に電撃を撃ち、撃墜させた瞬間だった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

!!!!

後ろにとても大きなオーラを感じる……。後ろを振り向かないようにしよう。

「軍だ!!武器を捨て、手を頭に置き、地面に跪け!!」

鬼塚少佐が大声で叫んだ。その声で俺は少年に向けて三八式を構えた。田中さんは墜ちた少女の救助と手当をしている。

「ま、待て!!僕は時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ!!銃を下ろせ!!!」

は?時空管理局?大丈夫かコイツ?

「うるせえ!!10数えるうちに武器下ろして跪け!!10、9、8、7・・・」

少年の近くの空間にモニターが急に出てきて何か言ってるけど、手品か何かだろう。

「・・・2, 1, やれ。」

パシュツ!!

急にクロノ・ハラオウン(?)の両肩両ひざから血が噴き出した。

ダアアアアン!!

そして遅れて銃声が聞こえた。岩下さんがやったのだろう。岩下さんの狙撃は撃たれるまで気づかないからなあ……。敵ながら同情する。

岩下さんは軍で5本指には確実に入る狙撃兵だ。彼の絶対半徑キリングレンジは1347mで、レキと比べればとても短い。しかし、岩下さんの持ち味は高度の隠蔽と観察力だ。岩下さんは「影の薄くなる技」ができる人の一人で、そのおかげで目標に弾が命中する前に存在がバレたことは一度もない。岩下さん曰く

「狙撃しようとしてたら敵の護衛が俺のいる部屋に入って来たんツスよ。あの時は冷汗が出たツスね。」

そして観察力は目標の読んでいる文書すら読めるらしい(本人曰く)。

実際、演習だと岩下さんは何処にいるかわからない。そのため岩下さんの居そうなところに砲撃・爆撃がされるため、最初に死亡判定が出るか、最後まで生き延びるかの結果しか出していない。

クロノ・ハラオウン（？）が墜ちていく。

「確保おおおお!!」

鬼塚少佐、神城参謀長、辻さんが彼に一気に群がる。俺は高町なのはに接近した。

「やあ、昨日ぶりだね。なのはちゃん。」

「は、はい・・・。」

「ちよくと一緒に来てくれないかい？そこのフレットも。」

これでM関係（魔術関係という意味の隠語・海軍式）の事件も一気に解決できるかな。

俺は瀬島中佐の取り調べをマジックミラーで見っていた。

金髪の少女、高町なのはとフレット、少年の話は最初バカバカしく思った。魔法は隠さなきゃいけない？時空管理局は治安維持に司法と立法権の一部を有する組織？ジュエルシード？君たち、中二病で迷惑かけないでくれないかな。

「ジュエルシードは青い宝石のような形で、魔力が大量に入っていて危険なんです!!」

・・・あれ？最近そんなの見たような・・・。

「ん？これか？」

瀬島中佐は淡い青色のガラス（？）の粉を高町なのはとフレットに見せた。

「・・・え？」

「魔力の大量に詰まった宝石を処分した残りカスだ。藤原が頑張って潜って取ってきてくれた。」

藤原さんが無理やりスキューバダイビングの資格取らされたって愚痴ってたけど・・・お疲れ様です。

「11個の残骸がここにある。危険物というのはこちらも知っている。君たちの持っている分を渡してくれないか？無理やり奪うのは

気が引ける。」

その後、瀬島中佐は二人から5つジュエルシードをもらった。

月村家の問題とか時空管理局(?)などの事件があった翌日、海鳴旅行3泊目。俺は第2中隊第一小队と辻さん、神城さんで「時の庭園」にいた。

「・・・あの、辻大佐?」

「どうした、イブキ大尉。」

「他人の家庭問題に武力介入していいんでしょうか?」

「違う。我々、希信達は彼女の家庭問題を解決しようと個人的にしているだけだ。」

「・・・あの人、俺らに攻撃してきたんですけど。」

「それなら希信は自衛のために反撃するほかない。」

フェイト・テストアロッサに似ている少女が入っているカプセルを守るように立つプレシア・テストアロッサがめっちゃ切れているように見える。

「お兄さん、私見えてるんでしょ?」

そしてカプセルに入っている少女に似た、色素が薄い(そのままの意味)の少女が浮きながら俺の頬をつつく。

どうしてこうなった!?

魔法少女リリカル○のは 家庭訪問に武装はいらないだろ・・・

俺 達が「時の庭園」にいた原因は黒髪の少年に攻撃された金髪の少女の取り調べだった。この子はパスポートを持っており、リヒテンシュタインからの旅行・・・ということになっていた。なのでスイス大使館(リヒテンシュタインはスイス大使館が兼轄しているため)に連絡をすると、そのような少女はいない・・・と返答が来た。

よってこの少女はパスポート偽造をしたということが分かったが、理由が分からない。理由を聞いても

「お母さんがジュエルシードを取ってきて言っただから・・・」

これと、彼女が小学生ほどの見た目から支援者がいると考えていた。ちようどその時、彼女の保護者というものが現れた。その保護者というのがオレンジの髪をしたお姉さんで・・・ってコイツ!!

「てめえ! 時空管理局と間違えて俺を襲ったやつじゃねえか!!」

「あ、あんたは!!」

その後の取り調べによって、プレシア・テストアロッサの虐待を知った。

・・・で、その日は鬼塚少佐に無理やり飲み屋に連れていかれ、帰りがあまりにも遅いから臨時の隊舎で寝た・・・。

「おいボウズ!! 起きろ!!」

で、起きたのが天井、壁、廊下がすべて鉄でできている謎の場所・・・。知らない天井どころじゃねえよ!!!

「二鬼塚少佐!! ここどこですか!!」

ちようど起きた田中さん、岩下さん、メガネさんと一緒に詰め寄った。

「この希信が説明しよう!! ここは・・・」

俺たちは辻さんの説明が頭に入らなかった。何故なら・・・



「あれ？お客さん？おーい!?見える〜!?」

辻さんと鬼塚少佐、神城中佐の後ろにフェイト・テストロッサ似の少女（体が透けている）が宙に浮きながらこつちに手を振っているのだ。

「田中さん・・・俺・・・少女が宙に浮いているように見えるんですけど・・・まだ酔ってるんですかね？」↑俺

「お前も見えるか？体が透けているように見えるんだが・・・」↑田中  
「最近のホログラムって大分進歩してるツスね・・・」↑岩下

「近くに映写機はないですよ。」↑メガネ

メガネさんの一言で俺たちは顔が真っ青になった。

「・・・ん？お前らどうした？」

「・・・というわけで!!どうした？そんな表情して？」

鬼塚少佐と辻さんが俺たちの表情が変わっていることに気が付いた。

「う・・・後ろ・・・」

田中さんが後ろを指さしながら言った。二人が後ろを向いた。

「お客さん？用事は何?！」

「メガネさん曰くホログラム用の映写機はないそうです。」

サーっと二人の顔が青くなった。

「こ、こういうのって銃じゃ殺れねえんだよな!！」

鬼塚少佐は冷汗を滝の様に流しながら拳銃を握った。

「ん？なんのことだ？この希信には何も見えないぞ？」

・・・

「全く、君たちはまだ酔っているのか？」

「あの辻大佐、そこにいるフェイト・テストロッサ似の少女が見えないのですか?！」

俺は彼女(?)を指さしながら辻さんに聞いた。

「イブキ大尉・・・君はロリコンだからそんな幻覚を見ているのではないのか?！」

「俺はロリコンじゃないです!!」

そんな冗談が辻さんと俺の間で飛び交っているうちに、みんなの緊

張はほぐれたらしい。

「そ、そうだよな!!幽霊なんかいないよな!!・・・おい、ボウズ!!驚かすなよ!!」

鬼塚少佐が一番ビビッてたよな・・・。

「お〜い!!無視しないで〜!!」

幽霊(?)の彼女が両手を振って存在をアピールしているが無視しよう。

「ん?あんた達やつと起きたのかい?」

オレンジの髪のお姉さん(?)は俺達を案内しながら自己紹介をした。彼女(?)はアルフという使い魔らしい。彼女(?)は辻さんと神城さん、鬼塚少佐に説得され、「時の庭園」まで俺たちを連れて行ってくれたそうだ。・・・ってあれ?

「あの・・・重要参考人を簡単に釈放しちゃっていいんですか?」

「彼女は希信達にすべて話してくれた上に、本拠地まで案内してくれるそうさ。なので!!この希信と瀬島が司法取引を持ち掛けたのだ!!」

瀬島さんのところだけ小さく言って・・・。

「それにこの戦力の中で脱走はできないと希信と瀬島は決断したのだ!!」

・・・確かに。白兵能力が高い俺に、バレない狙撃兵・岩下さん。手持ちの爆薬で何でも破壊できる田中さん、戦闘ができるハッカー・メガネさん。それに加えて、作戦の神様・辻さん、突撃殴り込み大好きな神城さん、天災・鬼塚少佐。

・・・うん、俺でもこんな部隊から脱走は無理だわ。

ところで神城さん、笑いながら磨いている大きい筒は何です?え?パンツアーファウスト?殴り込むなら大火力を持って行かないといけない?・・・そうですか。

さて、色々アピールしている幼女の霊(?)を無視しつつ、案内された部屋に入った。そこには一つの椅子(玉座と言ったほうがいいか?)があった。

「おかしいねえ?ここにいるはずなんだけど・・・」

アルフが一言・・・。

俺達はこの部屋を探していると

「ここに扉があるぞ!!」

流石は田中さん、3分で扉を見つけた。俺達はそこに入るとガラスの円柱に入った幽霊(?)の彼女に瓜二つの少女と、黒髪の妙齡の女性がいた。

「狙え!!」

俺達は条件反射で女性に銃を構えた。

「ちよ!!母さんを狙わないで!!」

「うん、お願いだからあっち行ってね。」

「あ!!やっぱり見えてる!!」

思わず幽霊(?)の少女に反応してしまった俺は悪くないはず・・・  
そう思いながら三八式を強く握った。

「あなたはフェイト・テスタロッサの母親のプレシア・テスタロッサか!!?」

辻さんは大きな声で女性に尋ねた。

「貴様、愛娘のフェイト・テスタロッサに虐待とはどういうことだ!!」

・・・え?

「あの・・・辻さん?M関係(魔術関係という意味の隠語・海軍式)の黒幕を逮捕しに行くんじゃないんですか?」

「ん?この希信達はフェイト・テスタロッサの家庭問題を解決するために来ただけだ!!それに今回の事件の原因は事故による二次災害だ!!」

・・・ふあ!?

「我々、希信達はフェイト・テスタロッサの家庭状況に同情し!!個人的に!!家庭訪問しただけだ!!」

「じゃあなんで装備持ってきたんですか!？」

「( ) 丁寧に装備一式持ってきたのにきて家庭訪問!？」

「もちろん!! 家庭問題解決のためだ!!」

チユドローローン!!!

俺と辻さんの間に電撃（物理）が走った。発射元を見ると・・・妙齡の女性からだった。

「私のアリシアに!! 近寄らないで!!」

「・・・あの、辻大佐?」

「どうした、イブキ大尉。」

「他人の家庭問題に武力介入していいんでしょうか?」

「違う。我々、希信達は彼女の家庭問題を解決しようと個人的にしているだけだ。」

「・・・あの人、俺らに攻撃してきたんですけど。」

「それなら希信は自衛のために反撃するほかない。」

フェイト・テスタロッサに似ている少女が入っているカプセルを守るように立つプレシア・テスタロッサがめっちゃ切れているように見える。

「お兄さん、私見えてるんでしょう?」

そしてカプセルに入っている少女に似た、色素が薄い（そのままの意味）の少女が浮きながら俺の頬をつつく。

どうしてこうなった!？」

ゴゴゴゴゴゴ!!!

急に大きな音と共にロボット（?）が近くから出てきた。

「おおおおお!!! あれはMS-06C 初期量産型ザクII!! あっちにはMS-06E-3 ザク・フリッパー!!!」

「メガネさん、落ち着いて、落ち着いて・・・。」

メガネさんがなぜか興奮している。俺が落ち着かせようとする  
とバシユ!!!

・・!!ズドオオオオオオオン!!!

轟音と共に10体ほどのザク(?)が吹き飛んだ。

「やはり大火力こそ正義なんですよ!!!殴り込みはこうでなくては!!!」

神城さんが大声を出しヤバいことを言っている。・・・って神城さ

んの目が山口少将と同じ人殺しの目になってやがる!!!

「目標を確保せよ!!突撃イイイイ!!!」

「!!」  
「!!」  
「!!」  
「!!」

辻さんの命令に条件反射で突撃始めちゃったけど、これ家庭訪問な  
んだよね。

バシユ!!!

・・!!ズドオオオオオオオン!!!

「ヒヤッホオオオオオオオ!!!最高だぜええええ!!!」

神城さんが興奮してる。あの人、大火力砲の発射音とか聞くと興奮  
するのにな、頭はいつも以上に冴えわたるから立ち悪いんだよなあ・・・

「うう・・・そんなことがあったなんて・・・。」

「希信は・・・希信は・・・」

「チクシヨウ・・・前が見えねえ・・・」

神城さん、辻さん、鬼塚少佐はプレシア・テスタロツサから動機を  
聞き、滂沱の涙を流していた。

彼女曰く、事故で死んだ娘（アリシアという名前らしい）を甦らせ  
うとしてできた子がフェイトだそう。そして、プレシアはアリシア  
を甦らそうと無理をし過ぎたせいで、もう半月ほどしか生きられない  
そう。なのでフェイトにジュエルシードを集め、その力で伝説の  
アルハザードとやらに行くことに最後の希望を託したらしい。しか  
しアルハザードは伝説の場所であり、本当にあるかどうかからな  
い。なので自分とアリシア（の死体）だけで行き、フェイトと泣く泣  
く離れることに決めたそう。そのため、プレシアはフェイトが自分

についてこないように心を鬼にして虐待をし、嫌われようとしていたそうさ。(彼女曰く絶対に痕にはならないよう細心の注意をしていたそうさ。)

その話を聞いて、俺は近くをフワフワ飛んでいたアリシアに似ている幽霊に話しかけた。

「君、プレシアさんの娘のアリシアちゃんかい？」

「あ!!やっぱり私のこと見えてた!!!」

・・・ああ、そういえば無視してたっけ。

「妖怪の類ならよく見てきたけど幽霊の類は初めてでねえ。いやあ・・・ゴメンナサイ。」

アリシア(?)はちよつと不満そうな顔をしながらも謝罪を受け取ってくれた。

「で、君はプレシアさんのアリシアちゃんかい？」

「そうだよ!!私がアリシア・テスタロッサだよ!!」

・・・あの死体、やけに新鮮だよな。もし、運が良ければできるか？

突然だが、俺が第一次ブラド戦で使った☒☒反魂蝶☒☒の原理を説明しよう。あの技は冥界よりセクメト神(エジプト神話より)とアヌビス神(エジプト神話)の力を持った霊を召喚する技だ。セクメト神の力、「火のような息(人間を殺してしまう病の風)」の劣化版で敵を仮死状態にする。そしてアヌビス神の霊が冥界に敵の魂を運び、冥界の入り口で強制的に死者の裁判が始まる。そしてアミミット(エジプト神話)に心臓を食べられ、その結果本体は死ぬ。

とても面倒な工程で即死させているのだが、その分手を加えられるところが多く、応用が利く技だ。

ここでもし、冥界から呼ぶ霊をイシス(エジプト神話)とネフティス(エジプト神話)を呼べば、もしかしたら彼女は復活するかもしれない。

(エジプト神話にイシスとネフティスがバラバラに殺されたオシリス神の遺体を拾い、集めて復活させた・・・というエピソードがある。)

神話ではオシリスは復活した後、冥界へすぐ行ってしまったが：オシリスの遺体がバラバラだったからだと仮定すれば・・・遺体がキレイに残っているアリシアちゃんなら・・・。

「アリシアちゃん、もう一度生きたいかい？」

「え？急に何？」

「もしかしたらできるかもしれない。」

「え？」

「もう一度生きるということは、もう一度死ぬということだ。また死を経験するとしても・・・生きたいかい？」

俺が冗談で言ってるわけでないと感じたのだろう。アリシアちゃんは少し考えた後、頷いた。

「私は生きたい。例えもう一度、あんなに怖いのを経験するとしても、母さんとフェイトに抱き着きたい、お話ししたい!!お兄ちゃん!!私を生き返らせて!!!!」

「俺も初めてのことだから・・・失敗しても崇るなよ。」

「お兄ちゃん、失敗しても崇らないよ。むしろ生き返らせようとしてくれて、とても嬉しいよ!!」

「そいつぁ有難い。んじゃあお母さん説得してから始めるよ。」

俺はそう言ってプレシアさんに近寄ろうとすると

ガシツ!!

田中さんが俺の肩をつかんだ。

「おい村田。生き返らせるのは良いが・・・お前は大丈夫なんだろうな。」

流石は田中さん、こういう危険察知能力は化け物だな。確かに、~~魂~~反魂蝶~~魂~~は霊の仕事の対価として敵の魂を贖にする。だから俺は実質対価を払わなくていいのだが・・・今回復活させるためにアリシアちゃんの魂を贖にするわけにはいかない。

「心配しないでください田中さん。俺だって家族残して死ぬなんてことしませんよ。」

「そうか、気をつけろよ。」

そう言つて田中さんは俺の肩から手を離した。

「プレシアさん、もしかしたら生き返らせることができますが……どうしますか?」

「本当かボウズ!!!」

「鬼塚少佐、近い!!近いから!!!プレシアさん引いてますよ!!!」

鬼塚少佐のあまりの迫力にプレシアさんが引いていた。鬼塚少佐をなんとか離し、プレシアさんに再度聞いた。

「ええ……ジュエルシードもこれしかないのならアルハザードには行けないわ……生き返らせる方法があるの……?」

「自分も初めてなので成功するかわかりませんが……一応可能性があります。」

「お願い!!最後にあの子に会わせて!!!」

あんたも近い!!近い!!

プレシアさんを落ち着かせた後、儀式の準備を始めた。と言っても彼女の遺体に白の服を着せ、良く耕された畑の上に置き、近くにジュエルシードを置くだけだが。

「これでうまくいくの?」

「エジプトでは冥界の神と農耕の神は一緒なんだ。冬には枯れ、春に芽を出すのは、死と復活に見えたようだよ。それに芽を出すのは土の中から、つまり冥界からって言う考えもあるね。だから冥界に近い土の上、それに自分のテリトリーでもある畑だと力行使しやすと思うんだよね。」

「へー……」

アリシアちゃん……君の復活の儀式だよ?もうちょつと興味持とうよ。

さて、準備が終わった。今回の儀式で使う贄はジュエルシードだ。4つで足りてほしい。

「では始めませす。皆さん下がってください。」

みんな下がった後、俺はその場にルーンとヒエログリフを刻ん



だ。

「反魂蝶・改!!!」

そう言えば反魂の意味は『死者の魂を呼びもどすこと。死者をよみがえらせること。』……。むしろ今回のほうが意味合いは合ってるのではないか？カット

ルーンとヒエログリフを刻んだ場所から蝶が大量に出てきて、幽霊のアリシアちゃんを襲った。

「ちよ!!助けてええええ!!」

襲った後、蝶達はその勢いそのまま彼女の遺体に襲い始めた。……これ大丈夫だよな。

バリエイイイイイン!!!

4つのジュエルシードが割れ、蝶達は刻んだ場所に戻って行ってしまった。彼女の霊は何処にもいない。……え？失敗？俺が焦った瞬間

「うう……。」

彼女の遺体から声が聞こえた。すると遺体は目を開け、体を起こし、周りを見た。

「ア、アリシア!!!」

「母さん!!痛いよ!!」

プレシアさんは涙を流しながらアリシアを抱きしめる。よかった、成功したようだ。

「うう……。」

うちの部隊とアルフは感動で涙を流している。ん？俺はポケットに手を入れると知らない紙が出てきた。珍しい紙質の紙だ。日本ではほとんど流通してなさそうだな。その紙には文字が書いてあった

「?????????」  
「?????????」  
「?????????」  
「?????????」  
「?????????」  
「?????????」  
「?????????」  
「?????????」  
「?????????」  
「?????????」  
「?????????」  
「?????????」

……アラビア語が？さすがにアラビア語は読めねえよ……。後でニトか師匠に読んでもらおう。俺は紙をしまった

「ピーヒョロロロ・・・」

俺はふと空を見上げた。そこには快晴の青空をバックにトンビが2匹、俺達を見守るように輪を描きながら飛んでいた。

・・・今は午前中だっけ、今日も暑くなりそうだ。

「母さん!! 正座!!」

「ア、アリシア?」

「私のために沢山頑張って、体も壊したのは知ってる!! でも!! フェイトにあんな酷いことをしたのはひどいよ!!」

プレシアさんが落ち着いた瞬間、アリシアちゃんが説教を始めた。さっきまで霊体&遺体だったのに元気だな。

「でも、母さん、寿命が・・・」

「私を生き返らせてくれた神様が母さんの体を治したって言うってたよ!! それよりもフェイトが傷ついてるんだよ!!!」

・・・ん? 今すごい事言ってたぞ。

「あ・・・あの、アリシアちゃん。今体が治ったって言ったけど・・・。」  
「あ、お兄ちゃん? なんか生き返らせてくれた頭に椅子乗せてる神様と、頭に祠を乗せてた神様が母さんの体もついでに治したって言うってたよ。」

・・・代償が怖いんですけど。

「だから母さん!! フェイトをいじめちゃダメ!! それに・・・」

アリシアちゃんは説教に戻った。・・・これで一連のM関係（魔術関係という意味の隠語・海軍式）の事件は解決だな。

「ピーヒョロロロ・・・」

俺はまた空を見上げた。トンビが2匹、俺達を温かく見守るように輪を描きながら飛んでいた。

事件が解決したから、これでやっと海鳴観光ができるな。そうだなあ・・・翠屋のシュークリームと紅茶はうまかったから、そこで一服だな。それに温泉入って、うまい酒と飯食って・・・。

「そう言えば村田君。」

「神城中佐、どうしたんですか?」

「そういえば・・・君、今日帰る日だね。」

・・・あ??

「いや、私達がここに来たの昨日で、君その二日前に来たんだよね。三泊四日の旅行って私は聞いているよ。」

・・・フア!?

ブー・・・ブー・・・

その時、俺の携帯にメールが来た。そのメールは師匠からだった。

『イブキへ

帰りの準備は終わったから早く帰ってこい。

スカサハ』

「ピーヒョロロロ・・・」

俺は空を仰いだ。トンビが俺をあざ笑っているように見えた。

魔法少女リリカル〇のは 休みをください・・・

灰になった俺を辻さんと神城さんが無理やり高機動車に乗せ、俺達は留置所に向かった。辻さん曰く、留置所よって、高町家の皆様を送った後、俺を旅館に送っていくれるそうだ。

「ここ海鳴は温泉が有名ならしいな。希信達も疲れを取るべくみんなで旅館に泊まるか!!・・・どうしたイブキ大尉？自分の分？イブキ大尉の分はないぞ。帰らなければならないのだろう？」

・・・泣きそう。

留置所に着くと、俺達はフェイト・テストロッサ、高町兄妹とフェレット、クロノ・ハラオウンを拾い、ひとまず高町家に向かった

・・・留置所でテストロッサ家感動の再会が起きたがここでは割愛しよう。

高機動車は高町家に向かってゆっくりと向かっている。その間に今回の顛末を回想しよう。

銃刀法違反、公務執行妨害、傷害未遂、殺人未遂などの罪に問われた恭也さんは文書厳重注意で釈放となった。帯刀帯銃免許を恭也さんは取得しているのにも関わらず、免許を携帯せずに刀剣を帯び、他人に刀を振るうのは何事か・・・ということ、後日講習を受ける必要があるそうだ。・・・恭也さん、緊急事態とはいえ免許不携帯は弁護できないですよ。

そして、少女暴行の参考人のなのはちやんとユーノ君（フェレットに擬態していたのは驚いた。）は調書を取り、簡単な注意を受けて終わった。今回の事は大人に言っても相手にされなかっただろう・・・ということ、政治家からの圧力、証拠不十分などもあってそのまま釈放さうだ。瀬島さんはなのはちゃんに何かあつたら連絡するようにと携帯電話の番号を教えていた。・・・今後こういう事があつたら軍、警察に教えてね。

テストロッサ家は一切のお咎めなしだ。プレシアさんは事前に危険物を回収して、軍・警察の手伝いをしてきていた・・・ということになった。フェイトちゃんも同じだ。プレシアさんは今後、「時の庭園」やその他諸々も売り、そのお金で海鳴に住むようだ。家族三人、幸せに過ごしてください。

そして問題のクロノ・ハラオウンであるが、テストロッサ家が許したこと、未成年ということに嚴重注意となった。しかし、辻さんと瀬島さんは巡航艦「アースラ」艦長で、彼の母親であるリンディ・ハラオウンにそのことをひた隠しにして、彼女に恩を着せることができた。なんでも辻さんと瀬島さんが彼のために法を破るギリギリのことをやった・・・ということになっているそうだ。書類偽装は辻さんが、その他アリバイや証拠の処理は瀬島さんが・・・これならほぼ永遠にばれないだろう。リンディさんは釈放してくれたことに大変ありがたがっていて、辻さん、瀬島さんは時空管理局に伝手&貸しができたと喜んでいた。・・・まあ、お互いがいいならそれでいいです。

俺が<sup>現実逃避</sup>回想していると車が停止した。高町家の前に着いたようだ。

「お父さん!!」

「なのは!!」

なのはちゃんが士郎さんに抱き着いた。なのはちゃんの目元には薄っすらと水滴がついていた。流石に小学三年生で留置所一日体験はきついものがあるだろう。

「・・・」

「・・・」

恭也さんと忍さんはお互いに一言も発さず抱き合っていた。ツケ、リア充ガ・・・。

「イーブーキーさーん!!!」

そしてすずかちゃんは俺に向かって突撃・・・って、マジ

ドスツ!!!

ゴハア!!!!

すずかちゃんは肉体能力が一般人より高いのだろう。見事な頭突

きが俺のみぞおちに決まった。

ツハ!?

俺は一瞬気絶していたようだ。この子……子供と侮ったら……死ぬ!?

「イブキさん!!今日帰っちゃうんですか!?!」

……この子、ついてくるとか言わないよな!?

「あ、ああ……。今日帰っちゃうんだよ。残念だなあ……。」

「そうですか……。本当はついていきたかったんですけど……。お姉ちゃんに反対されて……。」

忍さん!!ナイス!!!

「でも……。イブキさんが許可するなら行ってもいいって言っていました!!」

……責任はてめえで取れってことか!?!忍さんよ!!

「い……。いやあ……。この後アメリカ行けなきゃいけないし……。(学校は)銃弾が雨の如く降る所だから……。あまり来て欲しくないかな。自分の身を守るので精一杯だと思うしさ……。」

「そうですか……。」

すずかちゃんは残念そうにしている。いや……。マジであなた来たら家が混沌になって、学校と軍にロリコンって噂立つから……。

「イブキ君、軍の皆さん……。家族が迷惑をかけてすみませんでした。」

士郎さんと恭也さんが俺達に謝ってきた。

「いえいえ、家族や友人が攫われたとなれば混乱しますよ。今後こういう事が無ければいいだけです。」

免許不携帯以外、謀られたわけだし……。まあ、大目に見ますよ。

「本当に……。すみませんでした!!!」

「士郎さん、頭を上げてください。」

そのまま五分ほど士郎さんは頭を上げず、俺たちはその対処に追われた。

何を言っても頭を上げないので、今後うまいコーヒー（紅茶）を入れてくださいということになった。土郎さんのことだしタダにしそ  
うだよな。．．．まあ、問題になるからこっちは意地でも払うけど  
さ．．．。

さて、すずかちゃんはとても名残惜しそうにしていたが．．．俺達  
は高町家を後にし、旅館へ向かった。時刻は11時過ぎ、チェックア  
ウトは10時半まで．．．せめて温泉にと思ったけど無理だな、ハハ  
ハ．．．ハア．．．。やってらんね。

旅館へ着くと家族のみんなとはやてちゃんが待っていた。

「イブキ兄ちゃん、仕事終わった？」

「海鳴旅行ほとんどパアにしたおかげで何とか終わったよ。ハハ  
ハ．．．。」

「ハハハ!!仕事ならばしょうがない!!」

エジソン．．．あなたはそうかもしれないけど俺は一般人だぞ。

「イブキ様、帰りの運転ですが．．．大丈夫ですか？」

．．．あ。運転があつた。

「うん．．．大丈夫．．．だと思う。」

「いつでもリサが変わりますよ?」

「あれ?リサ運転できたっけ?」

「免許はないですけど、運転はできますよ?」

それはいかんだろ．．．まあバレないだろうけどさ。変わってほし  
いのは山々だけど．．．。

「イブキは余を放っておいたのだろう．．．。そのぐらいできるよなあ  
?」

あの．．．ネ口陛下?あなたの笑顔が怖いのですが．．．。

結果、俺が運転することになったとき。．．．まあ帰って三日もす  
れば飛行機の中だ。存分に休めるさ。．．．休めるよね。．．．休め

るといいなあ。

俺は自分の高機動車を運転し、はやてちゃんの家の前に置いた。

「みんなさん、本当にありがとうございました。とても楽しかったです。」

「おいおい、水くせえな。」

ベオウルフが苦笑しながら言った。そういえば・・・はやてちゃんの両親は共に終始見ることがなかった。もしかして・・・。

「はやてちゃん、あまりこういうのは聞かないほうがいいんだろうけど・・・。君、親は？」

そういつた瞬間、はやてちゃんの顔が一瞬曇った。

「私の両親は2年前に交通事故で・・・。」

「そうか・・・保護者はいる？」

「えっと・・・グレアムさん？グレアムさんならイギリスに・・・。」

「ちよつと待って、海外？出張？」

車椅子の子を置いて出張・・・まあ、はやてちゃんはしっかりしているし、重要な仕事ならしやうがないのか？

「え？・・・えっと、グレアムさんには一回も会ったことなくて・・・。」

・・・はい？

「グレアムさんって本当に保護者なの？」

「た、たぶん・・・毎月お金送つてもらうてるし・・・。」

一回も会ったことがない外人から毎月お金が送られてくる・・・何それ、怖い。

「い、イブキ・・・これって児童虐待では・・・。」

「二ト、良く知ってるね。」

ハア・・・皆さん、お金だけ渡して放置は児童虐待になるんだよ!!・・・  
現実逃避をした  
などと考えた後、重い空気の中俺は口を開いた。

「はやてちゃん・・・それは、児童虐待だ。」

「え・・・あ・・・そう・・・ですね。」



児童虐待ということに気づいたようだ。

「イブキ様……。」

リサが言った。ニトと玉藻が俺を見た。……まあ、はやてちゃん一人ぐらいなら養育できるし、寮がダメでも俺の家のほうに住まわせれば何とかなる。

「はやてちゃん。言ったと思うけど俺は軍人だ。軍人は公務員だ。流石に公務員が児童虐待を見逃すことができない。だから……。」

はやてちゃんの目は絶望していた。

「だから……俺の家に来るか？」

「はい？」

まあ、唯一の問題はアメリカ行きの手ケットを一人分もう一枚取るかどうか……ぐらいだな。

「たまに、はやてちゃんの家に戻るし、どうする？」

「えっと……イブキ兄ちゃんの家？」

「今は寮暮らしだから寮のほうかな。嫌なら別にいいけど……。」

もし、拒否するのなら……孤児院に送るしかない。流石に小学生の少女一人で生活は認められない。はやてちゃんは深く考えた後、頭を下げた。

「よろしくお願いします!!」

「あたぼうよ!!はやてちゃん!!いや、はやて!!」

今日、新しい家族ができた。

悲しいお知らせがある。飛行機の手ケットは取れた。ビジネスクラスだったけど。はやてが家族になったその日から引越しが始

まったのだが……。

「イブキ兄ちゃん……大丈夫？」

はやての荷物全てを俺が運ぶことになった。

「なに、あれは修行だ。心配する必要はない。」

師匠曰く修行だそうだが……。

「でも……スカサハお姉ちゃん……。」

「ツ~~~~!!!!よ……よし、あっちでお菓子を食べよう。」

師匠……歳だからお姉ちゃんと言われたのが嬉しかったのか？

ドスツ

俺の足元に槍が刺さった。……すみませんでした。

荷物を運び終えた後、リサがお茶を入れてきてくれた。

「ありがとう、リサ。」

「いえいえ……ところでイブキ様。」

「どうしたの？」

「あの……四次元倉庫で運べばよかったのでは？」

あ……。

## ラッシュ◯ワー 海外にはこいつがいる・・・

俺達がロサンゼルスに行く2ヶ月前、香港マフィア、ジョン・タオから中国美術品を香港警察が取り返した・・・というニュースがあった。そして、俺達がちょうどロサンゼルスに行くとき、その中国博覧会でその美術品が展示されるそうさ。

「中国美術品か・・・楽しみだね。」

「ん？エルがそういうのに興味持つなんて意外だな。」

あのエルが美術品に興味・・・どういうこった？

「だって、そういう物を美しいというんでしょ？勉強になるよ。」

「うん、美つていうのは人それぞれだから、受け売りを鵜呑みにしないほうがいい。」

「そうなの？」

エルはそう言って首を傾げた。やっぱりわかってないな。

「私海外なんて初めてや!!機内食つて美味しいん!?!」

玉藻が押す車椅子に乗って、メチャクチャ楽しみにしている子が一  
人。

「あまり期待しないほうがいいぞ。元々の味は知らないけど気圧のせいで味覚が狂うんだ。俺個人の感想としては不味い。」

それに飛行機酔いが入ると最悪になる・・・。まあ、エコノミーとビジネス、ファーストによって断然違いが出るけどね。

「へえ・・・そうなんや。」

はやてはちよつとがっかりしたようさ。

「悲しむでない。きつと楽しい旅行になろう!!はやてよ。」

「ネロの言うとおりで。きつといい旅行に・・・なるよね・・・なるはず・・・なるといいなあ・・・。」

海外旅行かあ・・・ナカジマ・プラザにジョン・F・ケネディ国際空港・・・いや、こう考えるんだ。あのおっさんに会ったからこうなったんだって・・・。今回は会わないはず・・・。

「イブキ兄ちゃん・・・大丈夫？顔真っ青。」

「大丈夫だ・・・問題ない。」

「それフラグや。」

東京国際空港、またの名を羽田国際空港。ここは日本最大の空港だ。乗客乗降数は世界5位、年間の航空機発着回数は約38万4000回、航空旅客数は約6,670万人でそれぞれ国内最大。また、皇族や内閣総理大臣、国賓や公賓のための専用施設としてVIP機専用スポットや旅客ターミナルビルとは別棟の中に設けられた貴賓室がある。

で、その東京国際空港で手荷物検査をしているんだが・・・

「「サモア・・・。」」

手荷物検査近くで機甲師団所属の矢原<sup>やわら</sup>嘉太郎<sup>かたろう</sup>伍長とその弟さんがいた。

矢原さんとは、昔ある作戦で一緒になったことがある。彼は撤退戦において無類の力を持っているが、それ以外はヘタレ……。あだ名は某<sup>あ</sup>や<sup>あ</sup>○<sup>あ</sup>らか<sup>あ</sup>戦車<sup>あ</sup>より<sup>あ</sup>兄者<sup>あ</sup>柔軟<sup>あ</sup>か……。。

「兄者さん、何処か行かれるんですか？」

「あ、村田少尉、そうなんですよ。サモアですサ・モ・ア。南国の楽園、サモア・・・。」

「良いですねえ〜サモア。後、昇進して大尉になりました。」

「それはおめでとうございます。そうなんです!!南太平洋の潮騒を聞きながら、ゆったり白波と戯れて・・・訓練で傷ついた心と体を癒すんです……。どんなにか素敵なところなんだろう……。サモア……。」

すごい楽しみにしてるようだ。

「でも兄者?このチケットには<sup>あ</sup>サモア行き<sup>あ</sup>じゃなくて<sup>あ</sup>サマワ行き<sup>あ</sup>って書いてあるけど・・・。」

兄者さんがチケットを見た。

「あれ?ほんとだ。」

え?サモアじゃなくてサマワ?

「でも、サモアもサマワも響き的には同じようなものだし、気にすることはないんじゃないかなあ。」

「……確かイラクにサマワがあるんですが。」

「では、村田大尉。サマワに向かって行ってきます。南国の樂園に向かつて退却。」

「某しげるみたいに真っ黒に日焼けしてくるぞ！」

「いーねいーね!!」

そう言つて矢原兄弟は行つてしまった。

「あのイブキ様、サマワつて……。」

「うん……。埼玉とサマワに海はない……。楽しみにしているし、ワザワザ夢を壊す必要はないんじゃないかな……。」

手荷物検査で、ジミさんが空港の警備員をやっていた。

「あれ？ジミさん今度はここで仕事ですか？」

「お？村田じゃん。そうそう、今度はこの仕事。そういえばさつき兄者が来てたよ。」

「何でもサマワに行くそうですよ。」

「へえ〜サマワかい。南国の樂園だっけ？」

「……アンタもかい。」

「いえ、イラクですよ。」

「い……イラク？なんでそんなところに？」

「さあ？」

ビー!!ビー!!ビー!!

×線手荷物検査装置から激しい音が聞こえた。手荷物は牛若のだった。……おい。

「牛若……。君はなんてものを持ってきてるんだい？」

「いえ、主殿を守るために飛び道具が必要と思いましたが。」

俺達武偵は武器を預けさえすれば、他国に武器を持っていくことが可能だ。……まあ、審査や書類は特に面倒（特にアメリカは特段に厳しい）だ。なので、飛び道具は持つていくことが可能なのだが……。牛若……。飛び道具でも、こいつは無理だぞ。」

牛若丸が持っていたいこうとしたのが・・・パンツアーフアウスト。

「ダメなのですか？」

しかも一本どころではなく木箱三箱分。流石にアメリカだろうがどこの国だろうが無理です。

「威力過多すぎるだろ・・・。それにどこで買ったの？これ。」

「主殿の上司である神城殿が格安で分けてくれました!!」

神城さーっーん!!

「この威力・・・とても気に入りました。ただ、首も吹っ飛んでしまうのが難点なのですが・・・。」

神城さんの同志が着々と増えています。これは怖い。

「とにかく・・・持ち込み無理だから。処分しよう。」

この後、珍しく牛若が引き下がらなかったので☒4次元倉庫☒にしました。どうか、アメリカで使えませんように、バレませんように。

あれ？免税店の酒ってそこまで安くねえな。近くのスーパーよりも高えぞ。

「イブキ様、免税店は税金がない代わりに定価で売っているんですよ。」

「へーそうなんだ。リサは博識だなあ。」

まともに空港使ったのは12歳のクリスマスが最後だったからなあ・・・。あの時酒の値段なんて見てなかったな。

「でも、なぜイブキ様はお酒の値段を？」

「いやあ、安いのがあったら買っておこうと思って。」

「イブキ様は成人になってないので買えませんかよね？」

・・・そうだった。

ロサンゼルス空港に到着した。俺達は入国審査を受け、荷物受取場でスーツケースを待っていると、やけに見覚えがある白人の男が視界

に見えた。その男の頭は・・・スキンヘッド。なんか・・・前見たとき髪があつたはず・・・。その男が振り向いた。

「おっさん（坊主）かよ・・・」

その男はジョニー・マクレーだった。

「なんでおっさんがここにいるんだよ・・・。」

「仕事帰りに家族に会いに来たにきまつてるだろうが・・・。坊主こそ何だっここに。」

「家族旅行さ、おっさん。」

俺がそういうとおっさんは周りを見渡した。

「お前・・・あの時天涯孤独になつたんじゃねえのか？」

「いろいろあつてな。血は繋がってないけど家族だ。」

「そうかい。」

おっさんは俺を温かく見守るような眼で見た。

「おっさん、その目キモいぞ。」

「うるせえ、はっ倒すぞ。」

数年ぶりのおっさんとの掛け合い・・・。おっさんも変わつてないようだな。

「イブキ様、もしかしてこのお方は・・・。」

「ああ、リサの思っている通り、ダイ・ハード不死の男ジョニー・マクレー警部だ。」

俺がそう紹介するとおっさんはニヤついた。

「なんだ坊主、家族つて嫁でも貰つたのか。」

その瞬間、リサは真つ赤になった。

「ツクッ!!そんな・・・。リサにはもつたいたいんです・・・。」

「違うぞおっさん。リサは・・・。」

嫁ではないけど、メイドつて説明したらさらに面倒になる・・・。

「イブキ兄ちゃん、荷物全部出たよ。」

はやてが日本語で俺に行ってきた。

「坊主・・・子作りにはちよつとはやいんじやねえか？」

「ちげえよ!!!。」

俺たち家族とおっさんは税関に向かっていた。

「まあ、色々あって行き場のない子(鯖組)とか、ついてきた子(リサ)とか身寄りのない子(かなめ、はやて)とか拾ってたらこんな大家族になつてたんだ。」

「坊主・・・寂しいからって節操なさすぎじゃねえか。」

「・・・否定できねえ。」

寂しいから、天涯孤独だから、こんなに拾うか・・・。否定はできないよな。

「おっさんは元気にして・・・なさそうだな。頭見ると。」  
「うるせえ。」

ジョン・F・ケネディ空港の時は額のところが多少後退していたが、とうとうスキンヘッド・・・ストレス性か？

「マリーさんは元気か？」

おっさんの妻、マリー・マクレー。あの人にはナカジマ・プラザや空港の事件の後、色々世話してもらって頭が上がらない。

「ん？まあな。」

おっさんのことだ。家族サービスは苦手そうだな。今の返事からすると・・・今は冷え切ってるのかな？

税関を抜けた。以前、かなめに☒☒ロサンゼルス行くから仕事空いたら一緒に観光しよう☒☒とメールを送ったら、☒☒絶対に空ける☒☒とだけ送られてきた。もしかしたら迎えに来てたりしてなあ・・・などと考えながら出口を出たら・・・

「イブキにいいーいいー!!ここだよ!!ここ!!」

そこには☒☒ようこそロサンゼルスへ 愛しのかなめより☒☒と書かれたプラカードを持つかなめとぐったりしているGⅢがいた。GⅢの疲れ具合も気になるが・・・かなめ、恥ずかしいです。

「坊主・・・お前、ハーレムでも作ってるのか？」

「んなわけねえだろ。」

かなめは俺に抱き着いてきた。



「イブキにいい、久しぶり!!!」

「かなめ、大きくなったなあ。元気にしてたか？」

「イブキにいに会えばどんな状態でも元気になるよ!!」

そう言っただけかなめは俺の胸に顔をうずめた。

「・・・恥ずかしいから離れてくれないか？」

「ええ〜・・・。イブキ成分取るのに一番合理的なのに・・・。」

何だよ、お兄ちゃん成分って。かなめは離れてくれた。

「イブキ兄ちゃん、あの人は??」

「ああ、はやては初めてか。血は繋がってないが俺の妹だよ。」

「かなめお姉ちゃん初めまして!!私、八神はやてって言います!!ひらがな三つではやてです!!」

「ん?よろしくね。・・・お兄ちゃん、この子は・・・誰？」

かなめは声のトーンを1段階落とし、瞳孔を開きながら聞いた。

「虐待受けてた子を拾った。かなめの妹だ。」

嘘はついてない。

「妹キヤラが被る・・・でも私の妹ができるのはうれしい・・・。」

「かなめ・・・お姉ちゃん？」

「ツ~~~~!!!!よろしく!!はやて!!」

そう言っただけかなめははやてに抱き着いた。

「イブキにいい!!この子可愛いよお〜」

気に入ったようだ。

「フォース・・・会えたのなら帰っていいか・・・。」

疲れ切っているGⅢがかなめに聞いてきた。

「あ、サード、送ってくれてありがとう。あと私の名前はかなめだから。」

・・・あの疲れ具合、かなめが無理やり送らせたようだな。

「サード・・・かなめを送ってくれたんだろ?疲れてるのに悪いな。なんか奢るぞ。」

「いや・・・いい。それよりも早く寝たい。」

GⅢはトボトボと哀愁漂う背をこちらに向けて去っていった。

何とおっさんはホテルを取っていて、しかも俺たちの泊まるホテルと同じらしい（・・・なんでボニーさんに会うのにホテル取るんだよ）。なので俺達とおっさんは同じジャンボタクシーに乗ってホテルへ向かうことになった。

「すごいな・・・上下線ともに車がほとんど動かないなんて・・・事故でもあったのか？」

「ラッシュアワーだからね、イブキにい。しょうがないよ。」

「流石は車社会の国だな。」

まあ、日本じゃ車の代わりに電車やバスがヤバいけど。俺は前の車を見た。黒塗りの高級車だ。ぶつけたら何されるかわからねえな・・・などと考えながらボケーっとしてしていると

「主殿!!動き始めました!!」

車が動き始めた。

ある程度すると黒塗りの高級車と俺たちのジャンボタクシーは右に曲がり、脇道に入った。その瞬間・・・

キキキキキキ!!!

目の前にパトカーが急に進路を妨害するように入ってきた。そのパトカーから警察官が出てきて黒塗りの高級車に近づいて行った。

「坊主。」

「分かってるよ。」

俺とおっさんは事件が起きるんじゃないかと思い、いつでもタクシーから出れるようにした。その瞬間・・・

ダアンダアン!!

警察が発砲した。

「ツチ!!」

「出るぞ!!」

発砲した警察官は少女をとらえようと四苦八苦している。

「動くな!!武偵（警察）だ!!!」

ダアンダアンダアン!!!

その警官は俺達へ発砲し始めた。

「やっぱりおっさんが居るところだ!!」

「坊主が居れば毎回これだ!!」

お互いにそう言いながら物陰に隠れた。誘拐されようとしていた少女はそのすきに脱出したようだ。

ブオオオオオ!!

いきなり物陰からバイクが高速で出てきた。あいつも一味か!?ど  
んだけ用意周到なんだよ!!というかもうこの時点で詰みだ。バイク  
を無力化しても、慣性の法則でバイクの残骸はその高速のまま、前に  
進んでしまう。そしてバイクの残骸は少女を轢き殺してしまうだろ  
う。クソツ敵ながら天晴れだよチクショウ。

俺達はせめてもの抵抗として逃げていく小型トラック、バイク、パ  
トカーのナンバーを覚える以外、何もできなかった。

「ダイ・ハード不死の男とイモータル・スピリット不死の英霊がサンに接触しました。」

「噂に聞くあの二人が…か。噂とはいえ、今回の作戦は失敗できん。」

「殺りますか?」

「いや…ダイ・ハード不死の男はともかくイモータル・スピリット不死の英霊は日本の軍人  
だ。日本とは言え外交問題になると厄介だ。」

「ではどうしましょう?」

「…そういえば、香港の警察も来るそうだな。」

「はい、リーという男です。」

「彼は隔離することになっていたな。」

「ロス市警がお守りをするようです。」

「…ダイ・ハード不死の男とイモータル・スピリット不死の英霊も一緒にして隔離させてお  
け。FBIのラスにはそれとなく提案しろ。」

「承知しました。」

事情聴取を受けてホテルへ帰った。その日の夕方、FBIの捜査官が俺達の宿泊するホテルへ訪れ、近くのカフェに俺とおっさんを誘った。

「君達に勝手に捜査をされては困る。明日ロス市警の者が来るから、彼と事件が解決するまでロス観光でもしていてほしい。2〜3日で解決すると思われるので我慢してもらえないか？」

「……え？」

「俺、家族とロス観光したいんですが。」

「妻と子供に会いに行きたいんですが。」

「なんで俺達が勝手に捜査することになってるの？」

「そういう口実で捜査をされては困るんだよ。」

「あの……なんでこう……信用も信頼もないんですか？」

俺は言った。FBIに信用や信頼を失うような事なんて何もやってないぞ。

「ナカジマ・プラザ、ジョン・F・ケネディ国際空港……」

「……」

「確かに、あの状況なら一考の余地はあるが……今回は事が事なんだ。」

そうやってFBI捜査官はため息をついた。

「アメリカにとって中国は輸入相手国第一位、輸出相手国第三位のお得意様だ。」

「……もしかして、誘拐された女の子って。」

「今から言う事は他言無用だ。……被害者の名前はスー・ヤン。在口サンゼルス中国総領事の愛娘だ。我々FBIと合衆国政府はこの事件を外交問題に発展させたくない。」

「うわぁ……。また面倒な事件に……。FBIの気持ちもわかるわ。」

「おっさんどうする？俺は今回、事故だと思ってFBIに従うけど……。」

こればっかりはショウガナイよなあ……。めっちゃ楽しみにしているはやてとかなめになんて伝えよう……。

「そうだよなあ……。こればっかりは……。はあ……。」

おっさんは深いため息をついた。

「何ならおっさん、マリーさんに俺も説明しようか？俺もあの時のお礼をしたいし。」

ジョン・F・ケネディ国際空港での事件の後、マリー・マクレーさんにはとてもお世話になった。あの時もお礼入ったとはいえ、改めてお礼を言いたい。

「では、明日の10時にロス市警の者が迎えに来るのでよろしく。……ああ、そういえば、その総領事が本国から刑事を一人呼んだらしい。彼とも一緒に観光する予定だ。」

FBIも大変だな……。外部の、しかも外人の捜査協力はとても面倒だ。だからと言って、捜査に加えないとそれも問題になる……。ご愁傷様です。

「くれぐれも変なことはしないでくれ。……できることならその中国の刑事を中国領事館に近づけさせないようにしてくれると助かる。」

そう言っつて捜査官は椅子から立ち上がり、大きなため息をついた。

「はあ……。それでは……。」

彼はカフェを去っていった。……なんか苦労人な中間管理職みたいで、彼を見ていられなかった。

「なあ、おっさん。この事なんて説明する？流石にFBIによる強制ロス観光ツアーに行くことになったなんて言えないぞ。」

「俺だつてマリーに口が裂けても言えねえよ。……無難にFBIに捜査協力を依頼されて断れなかったつてのが一番だろ？」

「俺さあ……。ここに来る前、日本の海鳴ってところに温泉旅行行つたわけよ。」

「ツケ。いいご身分なことだ。」

「そうだったら、どれだけ良かったことか……。そこで事件に巻き込まれて……。初日しか観光できてないんだよ。そこで家族と一人離れて事件解決のため……。ってわけ。」

「その時も俺が言ったような言い訳を言ったのか。」

「……。ああ。」

俺がそういった瞬間、おっさんが笑い始めた。

「家族が一回二回そういう事があつたぐらいで嫌いになるかよ!!」

言われればそうかもしれない。俺の胸が軽くなったような気がした。

「それだから心も体も小っちゃいんだよ!」

……。確におっさんは180cmほど、俺は170cmない。体はそうだとしても心はないだろうに。俺はカチンと来た。

「おっさんはその言い訳使いまくったから、マリーさんと冷えてるんじゃないかねえのか?」

「……」

俺とおっさんは数秒間睨みあった。

「……。おっさん、お互い傷に塩を塗りたくるのはやめよう。」

「そうだな……。坊主、マリーへの説明手伝ってくれよ。」

「わかつてる……。おっさんも説明手伝ってくれ。」

「はいよ。」

今回は白雪特製御守りがあるから……。そんなにひどいケガは負わないはず……。

「はあく……」

俺達はお互い大きなため息をついた。

「ところでさ、おっさん。」

「なんだ?」

「あの捜査官のコーヒーとサンドイッチ、だれが払う?」

「……」

ラッシュユ○ワー やっぱり英語くらいは分かっているよな・・・

FBI捜査官のコーヒーとサンドイッチ代は結局、割り勘ということになった。・・・おっさん、大人だろうか？

「なに!?また一緒に行けないだど!?」

ネロ様がカンカンに怒った。

「イブキ兄ちゃん・・・。旅行中に仕事はないわあ・・・。」  
はやては呆れていた。

「さつきも言った通りなんだけど・・・FBIの捜査協力が断れないんだ。悪いのは分かっているけど・・・ごめんなさい!!!」

そういつて俺は頭を下げた。

「ちよつと聞いてくれませんか?自分は皆さん知っているとは思いますが、ニューヨーク市警のジョニー・マクレレーです。」

おっさんが間髪入れずにしゃべり始めた。

「今回の事件を知っているとは思いますが、被害者の女の子は他国の外交官の娘なんです。その国との外交問題やアメリカのメンツに関わってくるのでFBIは形振り構わず捜査してるんですよ。アメリカ合衆国のために、こいつを数日間貸してはくれませんか?」

そう言っておっさんは頭を下げた。おっさんのおかげか、みんなはシブシブ納得した。

「イブキにいと一緒の時間を減らすなんて・・・。後で調べて潰す・・・。」  
かなめのオーラがヤバいことになっているけど無視しよう。

俺の家族の説得が終わった後、今度はおっさんの妻のマリーさんに電話をかけた。

「あら!?イブキ君!?久しぶりね!!」

「マリーさんご無沙汰してます。今、ちよつと家族と旅行でロサンゼ

ルスに来たんですよ。しかも、ちょうど空港でジョニーさんに会いまして。」

「そう・・・イブキ君にも家族が・・・。結婚式呼んでくれたら日本まで飛んだのに。」

・・・普通、そう考えるよなあ。

「まだ未婚です!!身寄りのない子とか保護してたらいつの間にか・・・って感じで。」

「あら、そうなの?・・・で、ジョニーが電話しないととなると事件に巻き込まれたのかしら?」

流石は奥さん、夫のことはよくお分かりで・・・。こいつは下手に嘘ついたらすぐバレるな。

「・・・正直に言います。おっさんと一緒のタクシーに乗っていたら、目の前で誘拐事件がありました。その被害者が他国の外交官の娘さんだったみたいで・・・。その事件をFBIが全力で捜査してるんですが、そのFBIはビルや空港の時のように勝手に捜査して欲しくないように・・・。事件解決までFBIの監視下で大人しくしてろと言われまして・・・。」

「あら?空港はともかく、ナカジマ・プラザはFBIと市警が無能だっただけじゃない。」

・・・よく知ってるな。

「まあ・・・今回は外交問題やアメリカのメンツがかかっているみたいで・・・。念には念をって言う事らしいです。2〜3日で解決するだろうという事なんで・・・あまり、おっさんを責めないでください。」

マリーさんは少し間を置いた後

「・・・しようがないわね。ジョニーに後で自分の口で私に言いなさい」と伝えて頂戴。」

「了解しました。」

マリーさんもわかってくれたようだ。

「そういえばイブキ君。」

「はい?」



「ジョニーと会うと毎回事件に巻き込まれるわね。日本のことわざだと2度あることは3度あるでしたっけ？」

「・・・ハイ、合ツテマス。」

嫌な予感がした。

「またジョニーに何処かで会えば、その時も事件に巻き込まれるんじゃない？」

・・・それは言っちゃいけないよ、マリーさん。

次の日、シボレーのカマロSSに乗った自称FBIの黒人捜査官がホテルに来た。

「よお!!お二人さん!!俺はFBIのカーターだ!!・・・なんだシケたおっさんとガキかよ!!」

・・・ガキはともかく、案内役はロス市警じゃなかったっけ？

「ロス市警が来るって聞いてたんだが・・・。俺はニューヨーク市警の者だ。偽るなら捕まえるぞ。」

おっさんが怪しげにその捜査官を見ながら警察手帳を見せた。

「ウソウソウソ、冗談だって!!ちよつとしたロス・ジョークさ!!俺はロス市警のカーターだ!!手帳見るか!?!」

そう言つてFBI改めロス市警のカーター刑事が手帳を俺達に見せた。

「今日はガキのお友達かもしれない中国人も一緒なんだ!くれぐれも変なことしないでくれ!!」

この人、やけに陽気というかテンションが高いな。

俺達はカマロの後ろ座席に乗った。

「シボレーは初めて乗りますけど、結構乗り心地いいしカッコいいですね。」

ただアメリカ人仕様のせいかな、座席がでかい・・・。

「おう!!日本のガキのくせにGMのシボレーの良さがわかるなんてよくわかってるな!!今日はたまたまこいつだけけど、いつもはコルベットでもっといいやつなんだ!!」

「お？この人、もしかしてちよろい？」

「おお!!コルベットいつか乗せてください!そういえばカーターさん!」

「ん?どうした?」

「ロス市警の刑事がFBIから任務を受けるってことは、とても優秀な刑事さんなんですわね!!」

「ゴマすりゴマすり・・・」

「・・・分かつてるじゃねえか!!そうさ、このカーター様はロスで一番の刑事なんだ!!」

「めっちゃ機嫌がよさそうなカーター刑事」

「よくし、それじゃあ空港に行くぞ!!」

「カーター刑事はルンルンと車を動かした。」

「おっさん、この人ここまでお調子者だと思わなかったよ。」

「・・・だから観光ガイドに抜擢されたんじゃねえか?」

「それもそうだな。」

ロサンゼルス国際空港はカリフォルニアのロサンゼルス市にある国際空港だ。アメリカ西海岸の主な玄関口となる空港の一つで、航空旅客数は約5900万人で世界第6位(アメリカ第3位)だ。空港が大きく、9つのターミナルがある。なので、ターミナルの間と間をシャトルバスが通っており、それで移動する。流石アメリカ、土地は余ってるな。

ロサンゼルス国際空港の滑走路にて俺達は中国の刑事を待っていた。・・・滑走路で待つていいんだ。てつきり空港の施設の中で待つものかと思ってた。

ちっちゃな飛行機が車の近くまで来て、扉が開いた。そこから黒いスーツ、黒のワイシャツ、赤ネクタイを着たジャッキー・チェン似の・・・あれ?なんかこんなような映画、前世で見たような・・・。

『ラッシユアワーだからね、イブキにいい。しょうがないよ。』

ふと、かなめの言った言葉を思い出した。：：ラ、ラッシユ〇ワー!?! そうだラッシユア〇ーじゃん!! でも、あの作品は香港返還前後の話だ。となると、前世の記憶から一気に逮捕とかムリだ：：。いや：：ちよつと待て、ラッ〇ユアワーはダイ・〇ードより怪我は少なかつたはず：：。なら今回、怪我はしないかな? なんかちよつとホツとするな。

俺が思考を巡らせていると、カーター刑事とおっさんはその中国人刑事に近寄って行った。俺も慌てて二人について行く。

「おい、英語わかんだらうな?」

カーター刑事は中国人刑事に聞いた。中国人刑事はキョトンとしている。

「ワ・タ・シ・ハ・カーター・デス!! 英語話セマスカ!」

中国人刑事は近くにいた中国人機長と客室乗務員の顔を見た後、眉をひそめた。

「ワタシガ何テ言ツテルカ ワカリマスカ!」

・・・作り笑いをした。可笑しいな、派遣されたなら英語くらいはできると思うんだが・・・。シヨウガナイ・・・。

「自分は村田です。彼は、カーター。英語が分かりますか?」

俺は中国語で尋ねた。

「ああ、中国語ができるのかい? 私はリー警部。英語は少しだけ。・・・早口でわかんねえ。

「すみません。ゆっくりでお願いします。」

「・・・わたしはリー。英語は少し。」  
なるほど、リーさんか。

「カーターさん、彼はリー。英語は少ししかできないそうです。」

「坊主、お前中国語できるのか?」

おっさんが聞いてきた。

「片言しかできないけど。」

カーターさんはリーさんに背を向けた。

「冗談じゃないぞ!! クソツ!! なんでこの俺が中年とスシガキとチャー

ハン野郎のお守りをしなきゃなんねえんだ!!」

・・・カーターさん、聞こえてますよ。

「オラ!!こっち来い!」

そう言つてカーターさんは自分の車に向かった。

「来てください。」

そう言つて俺は歩き始めた。

「君は FBI?」

「違います。日本人の観光客でした。」

「??」

俺だつて☒☒?☒☒だよチクショウ・・・。

荷物のことでもすつたもんだあつて、ようやくロス市内に入った。

「なくにが特別任務だ。頼むよ警部、俺をこの任務から降ろすよう連中に行つてくれ。」

カーターさんは電話しながら運転していた。

「せめて観光ぐらいは・・・と思つてたけど無理そうだな、おっさん。」

「坊主、見る目がねえな。俺は最初から諦めてた。」

そう言つておっさんはタバコに火をつけた。

「早く事件が解決することを祈るんだな。」

プハくと煙を吐いた。

「俺をコケにしやがつて、許せねえ!!」

カーターさんは携帯をしまいながら叫んだ。すると、リーさんが何か名刺のようなものを出してカーターさんに見せた。

「中国領事館?・・・そこへは行けねえんだ。もし行ったら停職どころか首になる。」

すると今度は写真をカーターさんに見せた。

「スー・ヤン。」

その写真は被害者の女の子の顔写真だった。

「例の子かい?」

・・・。二人の間の空間を無言が占領した。

「おい、頼むよ！何か言えよ!!!・・・何が機密区分G40の任務だ！みんなバカにしゃがって!!こうなったら俺の手で事件解決してFBIを見返してやる!!」

嗚呼・・・神様仏様玉藻様、どうか国際問題に発展せず、ケガもなく速やかに事件が解決しますように・・・。

俺は☒☒神様なんてクソくらえ☒☒とと思っているのに、この時ばかりは神仏に必死に祈った。

ロサンゼルスの子ヤイニーズシアターに着いた。

「ここがチャイニーズシアターだ！なつかしいかあ？」

カーターさんはリーさんの肩に手を乗せながら、俺達にチャイニーズシアターを案内していた。

「どうだ？ほおら、お前さんらの故郷にそっくりだろお？俺は中国や日本に行ったことないが想像は付く。」

・・・まあ、日本の中華街なら似たようなものはあるか。

「おい見ろ。チャップリンだ！・・・チャップリン知ってるだろ？」

「チャップリン。」

リーさんもかの有名な俳優の足跡を指さして言った。

「あくそうだ、こいつを見ながらちよっくら待っていてくれ！お前の親戚が通るかもしれないぞ！すぐ戻る。」

そう言つてカーターさんは地図売りのところへ行ってしまった。

はあ・・・

リーさんは大きなため息をついた。

「リーさん。・・・落ち着いて。」

俺はリーさんに話しかけた。

「アメリカは中国と外交問題にしたくないと思っている。」

「どういうことだ？」

・・・聞くよねえ。カタコトの中国語で伝わるかな。

「捜査で中国の刑事死ぬ。外交問題になる。アメリカはそれを避けた  
い。」

「・・・君は 何者だ？」

「・・・あの二つの事件のこと言うか？ダメだ、俺の語彙で伝えられ  
ねえ。」

「観光で来たら、事件を目撃した人間です。」

☒俺は 伝えるのを諦めた!!☒

軍人って言えば余計に複雑になるし、武偵って言う単語知らない  
し・・・。

「FBIを信じましょう。あ、トム・ハン○スのやつだ。」

俺はそう言つてスマホを出し、パシヤリと一枚。まさに観光客。

「・・・坊主、楽しんでんな。」

「どうせまともな案内されないんなら、自分で少しは楽しめることし  
ないと・・・。せつかくの旅行だしさ。」

「・・・それもそうだけだよ。」

「お!?ハリー・ポッター演じた3人のやつじゃん!!リーさん!こつち  
こttt・・・」

そこには、リーさんの姿はなく、ただただ唯々観光客で溢れかえっているだ  
けだった。

「・・・リーさん?リーさん!!」

・・・逃げやがった!!俺の頭の中で

☒リーさんが逃げる

|| FBIに迷惑がかかる

|| FBIから信用を失う

|| アメリカから信用を失う

|| 軍人生活に支障が出る☒

という方程式ができた。

「おっさん!!」

「どうした?」

おっさんはじつくりと手形足形を見て回っていた。

「リーさんが逃げた!!」

「・・・なんだと!？」

おっさんもヤバいと思ったのか、二人してリーさんを探し始めた。

俺達は2階建てのバスから伸びる列に並ぶリーさんを発見した。

「おっさん!!あそこだ!!」

「ちっ!!面倒なことしやがって!!」

俺達は全力でバスへダッシュし、ギリギリ乗ることができた。

「ハア、ハア、ハア・・・。」

ドアにもたれかかるおっさん。観光客が俺達をガン見している。

「おっさん、刑事だろう?そのくらいで疲れたのか?」

「うるせえ・・・歳だよ・・・。鍛え直すか?」

「なんか言ったか?」

「なんでも・・・ねえよ・・・。探すぞ。」

1階を探し、いなかったなので2階へ向かった。そこにはカーター刑事撮影会とH o o r y w o o dと書かれた看板に捕まり、バスから脱出しているところだった。

「ん?お前らも逃げたのか!？」

「カーターさん!!後ろ後ろ!!」

カーターさんが振り向き・・・

「ちよつとあけてくれ!!」

そう言って走って階段を下りて行った。それと同時にリーさんはトラックに飛び降り、近くに泊まっていたキャンピングカーを経由し、タクシーに乗ってしまった。・・・鮮やかなスタントで。

「どうする?・追う?」

俺はそのスタント技を見て戦意喪失してしまった。いや、だって映画と同じスタントを超能力とか魔力の補助なしにやるって、流石のキングジでも・・・うん、あいつなら近い将来普通にできそうだな。▪

「これ以上・・・俺に走れってかあ!？」

おっさん、息がいまだに乱れている。

「おっさん、少し鍛え直したほうがいいぞ。」

「うるせえ、俺は・・・ビルや空港みたいな・・・限定的な場所で動く

のが得意なんだよ。」

「次は街中どころか大陸走り回るかも知れねえぞ。」

「・・・変なフラグ立てんじゃねえ。」

いや・・・もしダイ・〇―ド3とか4・0とかラスト・デイみたいな事に巻き込まれたらそうなるぞ。・・・もしその3、4・0、ラスト・デイ的な事が起こっても、俺は巻き込まれませんように。

バスが止まった。カーターさんが止めたようだ。

「カーターさんの（あいつの）車で待ってよう（待ってるか）。」

俺達はそのそとバスから降り、車に戻っていった。

おっさんはタバコをふかし、俺はスマホをいじって待っていた。

「なあ、おっさん。」

「どうした、坊主。」

俺は一つ疑問に思っていたことがあった。

「今回、おっさんはやけに静かだな。」

おっさんは確かに、勤務態度は勤勉とは言い難いだろう。しかし、正義感は一倍にある。だから孤軍奮闘してビルや空港の事件を解決してきた。だが、今回はなんだ？少女が目の前で誘拐されたのに、事件解決に動こうとしないなんて・・・。

「坊主だってそうだろう？」

そう言っておっさんはタバコを携帯灰皿に入れ、皺くちやの箱から新たなタバコを出し、ジツポで火をつけた。

「坊主と一緒に。情報を待ってるんだ。」

・・・わかってらっしゃる。俺はちょうど今、理子にハン領事と娘さんについての情報を送ってもらったところだ。国防に関係ないからメガネさんに調べてもらうのは悪いし・・・。ついでに、今のロサンゼルス時間は午後1時過ぎ、日本時間は朝の5時過ぎ・・・。理子にはいつもよりも多くお礼をしなきゃいけないな。

プルルル・・・

おっさんの携帯が鳴りだした。



「はい、こちらマクレー。……」

おっさんは携帯である程度話した後、電話を切った。

「坊主、お前は今回の事件どう考えている？」

おっさんは今時珍しいガラケーをしまい、俺に聞いてきた。

「……安直な考えだけど、ハン領事は在ロサンゼルス中国総領事になる前は香港特別行政区行政長官で、香港マフィアのジュン・タオから大量の美術品の奪還に成功した。そのことから、香港マフィアから相当恨まれていると思う。そして、明後日の夜から中国博覧会があって、ジュン・タオから奪還した美術品も数多く展示される。誘拐犯がうまく事を進めれば、ハン領事の面子を丸つぶれにすることも可能だ。このことから香港マフィア、とりわけその中でもジュン・タオによる犯行だと思ってる。」

俺はスマホをしまい、ペットボトルの水に口をつけた。

「ハン元香港特別行政区行政長官はジュン・タオ壊滅に力を入れていて、それ以外の事は今までの行政長官とほとんど同じ事しかしていない。まあ……13億の人口を抱える国だから、ちよつとしたことで何万人にも影響が出る。だから些細なことで恨まれていて、それが動機なら面倒だけど……そこまで考えなくていいと思う。」

そう言つて、ペットボトルのキャップを閉めた。

「俺と推理は一緒だ。坊主も成長したなあ……」

「うるせえ。……でも、容疑者を絞つてもそいつの居場所が分からないと意味ないよなあ……」

ビルや空港のように居場所が特定できて、しかも敵も簡単に脱出できないう状況なら楽なんだが……

「あのロス市警はロスをよく知っているだろう。あいつに協力して有力な情報が出るまで待つしかないな。」

そう言つておっさんはタバコに口をつけ、紫煙を吐いた。

「■■■■■■■■■■!!」

遠くからカーターさんと誰かが言い争っているのが聞こえてきた。

「よくも俺をだましたな!!」

「君がしゃべれないと決め付けたんだ。」

えっと・・・隣にいるのはリーさん？

「全くよく言うぜ・・・。もう頭きた!!中国人ならカンフーでかかってこい!!」

そう言っつてカーターさんはカンフーっぽいポーズを取った。

「英語が話せないとは一言も言っつてない。」

リーさんが英語しゃべっつてる!!しかも俺より発音が上手!?

「じゃあ、わざとしゃべれない振りをしたっつてのか!?!」

「話せるが話さなかつた、それだけのことだ。君はおしゃべりが好きみたいだねえ?だから君にしゃべらせといた!それに自分は黙つてたほうが相手のウソを見抜きやすい。」

そう言っつてリーさんはカーターさんに向かってドヤ顔。

「ちよ!ちよつと待っつてください!!」

俺は二人の間に入り、リーさんを見上げた。(リーさんは175センチ程度、俺は170ない。)

「リーさん!!英語しゃべれたんですか!?!」

俺はもちろん英語で尋ねた。

「ん?ああ、まあね。」

「じゃあ、俺のカタコトの中国語の翻訳いらなかつたんですか!?!」

これが一番恥ずかしい。相手は、英語を理解しているのに俺がしゃりやり出て、拙い中国語を使っつて翻訳者の真似事をする・・・。

「・・・大丈夫、君の中国語は日本語訛りがあるけど、香港でも通じるよ!」

そう言っつてリーさんはサムズアップ&白い歯を見せ、とてもいい笑顔。

「てやんでい!!このすつとこどつこい!!(日本語)」

「「??」」

ああ・・・恥ずかしい。

ラツシュ○ワー　お互い協力しようぜ・・・

「今すぐハン領事の家に入れてっけてくれ!!」

あの後、俺達はカーターさんの車で移動していた。

「ここは民主国家ではないんだ、お前は黙ってる! なっつんだよ偉そうに!」

え? アメリカは民主国家だよな?

「ん? 民主国家だ!!」

リーさんは眉を上げた後、反論した。

「んやあくそいつは違うね。・・・お前がいるのはジム・カーター様の国だ! 俺はこの大統領兼国王で、お前は家来。俺がジャイケル・マクソン、お前はペットの猿! 俺の命令に従え。」

「となると、おっさんがキジで、俺が犬かな。ちようど鬼退治ができる。」

「・・・」

急に車の中の空気が一気に冷えた気がする。

「・・・どうして捜査に参加できないんだ。」

俺の発言はなかったことになったみたいだ。

「FBIはお前が嫌いなんだ。当然さ! 俺もお前が嫌いだ。」

「私が来たのは! スーヤンのためだ!!」

カーターさんが彼女について何か言いそうだったので、俺はカーターさんがしやべりだす前に割り込んだ。

「あの子d」FBIはリーさんが事件で負傷するのを恐れているようですよ! それで外交問題になったら面倒だっけ!! 俺とおっさんも面倒ごとを起こすかもって思われて、ここにいます!!」

「・・・君たちは観光客じゃないのかい?」

リーさんは怪しげな視線を俺に送った。

「アメリカに来た目的はロス観光ですけど、自分は軍人で武偵です。おっさんはニューヨーク市警で、奥さんに会いに来るためにロスに来たそうです。」

「そのせいで妻とは冷え切っちゃった。」

「前からだろう。」

「うるせえ。お前だってそうじゃねえか。」

などと軽口を言い合っていると

「・・・どうして、そのことを教えてくれなかったんだい？」

良い笑顔（怖い方）でリーさんは俺に尋ねた。

「だって、~~武偵~~の中国語知らないし・・・。軍人と言っても、そのことについて中国語で説明できないですよ。余計に混乱しますよね？」

シーンと二人の間に静寂が支配した。

「・・・事件が解決して時間があつたら中国語を教えてあげるよ。・・・しかし、軍人で武偵って言うのはどういうことだい？」

「そう言えば俺も武偵になったのは分かったが、軍学校に通ってたんだろ？なんだって軍抜けて武偵に・・・」

そう言えばおっさんにも説明していなかったか。

「軍学校飛び級で卒業して、ある程度勤務した後に出向になったんだ。だから軍人で、東京武偵高校の生徒ってわけ。」

俺が説明すると、おっさんはため息をする様にタバコの煙を吐いた。

「物騒な世の中になったなあ。」↑おっさん

「全くだ。」↑リーさん

「同感だ。その軍で何やってたんだあ？スシ坊。」↑カーターさん  
カーターさんが聞いてきた。

「スシ坊はやめてください・・・。海軍入って憧れの艦隊勤務かと思つたら、陸戦隊で・・・。陸戦訓練やりたくないから海軍入つたのに、陸軍も顔負けの陸戦訓練とかさせられて・・・ハハハ・・・ハア・・・。」

特殊部隊のことは機密なので言わなかったが、それ以外は説明した。・・・そうだよ、安全な船の上を目指したのに、鉄火場の陸戦隊。しかも兵部省直轄の特殊部隊に配属なんて・・・。

「・・・坊主、今日はいいもん食わしてやる。」↑おっさん

「・・・ロスのうまい店紹介してやる。」↑カーターさん

「・・・香港に来たら一番の店に招待するよ。」↑リーさん

何時もなら有難いけど・・・今はその優しさが心に刺さる!!

「・・・ありがとうございます。」

心にグサグサ刺さってるのに、感謝の言葉を言えたのはすごいと思う（自画自賛）。

空気が悪くなったせいか、リーさんはカーステレオをいじった。

「おお!!ビーチボーイズだ!!」

カーステレオから音楽が流れた。

「・・・おい、ちよつと待った。」

「ファンなんだ!!」

リーさんは満面の笑みで答えた。ビーチボーイズか・・・年代差を感じるな。

「誰がラジオに触っていいって言った!?!」

「彼らはアメリカを代表するバンドだ!!」

「ビーチボーイズがあ!?!冗談はよしてくれ!!いいか、黒人様のラジオに勝手に触るな!ここは中国じゃないんだ!もし次触ったらブツ殺すからな!!」

そう言った後、カーターさんはカーステレオをいじりだした。

「本当の音楽ってのはな・・・」

ラップで流れていそうな音楽が流れだした。

「・・・これさ。これが本当の音楽だ。」

音楽が流れだした瞬間、カーターさんの肩はリズムに乗って動いた。

「ノリが全然違う。ビーチボーイズで踊れるか?おどれねえだろ!」

その音楽が流れたまま、車は道の端に止まった。カーターさんが車から出たので、俺達も出る。

「領事館へ行かないって何をする気だ?」

リーさんはカーターさんに聞いた。

「ガサイレってやつさ。これも捜査の一部だ。俺のお手並みをじつく

り見てるんだな。」

そう言つてカーターさんはボロいビリヤード場に入ろうとすると、リーさんがカーターさんの腕をつかんだ。カーターさんはすぐに振りほどいた。

「だったら私にも手伝わせてくれ。これは私の事件だ！」

するとカーターさんが急に笑いだした。そして、そのままリーさんの肩に手を置いた。

「ツプハハハハハ!!お前の!?!: わかった、まあ良いだろう。じゃ、中に入ったら俺の指示に従え! 口を挟むな! いいな? あんたらもそれでもいいな?」

そう言つてビリヤード場に入つて行つた。

ビリヤード場の中は煙が充満していた。タバコと... 何の臭いだ?

「ようニガー。」

そう言つてカーターさんはビリヤード場の片隅でタバコ(?) (なんか臭いが違う) を吸っている黒人の中年男性と拳をあわした。(リーさんも拳をあわそうとしたが避けられたが気にしないでおこう。)

「マリファナか!?!」

カーターさんはその中年男性からタバコ(?) を取り上げ、強めな口調で尋ねた。

「ああ...」

カーターさんはその煙を鼻で確かめた後

「医療許可証は?」

「ああ... まあ... 「見せて見ろ!!」

中年男性は慌てだした。

「だからね... 「どこにあるんだ!!」

男はしどろもどろになり、カーターさんの追撃はさらに激しくなつていく。

結局、マリファナはカーターさんが没収し、奥の部屋に入つて行く。俺達も中に入ると、幹部っぽい黒人たちが銃を向けていた。俺達も慌てて銃を出す。

「銃を下ろせ!!早く下ろすんだ!!聞こえねえのか!!・・・質問がある正直に答えろ!」

カーターさんが大声で叫んだ。

「おい、早くしまえ。」

すると真つ赤なスーツを着た、いかにもボスっぽい黒人が仲間と言った。

「おい、女の子は?」

カーターさんが言った。

「女の子?」

その赤スーツが答えた。

「少女だよ!」

「どこのだ!?!」

「中国人の子だ。」

「何の話だかさっぱりわかんねえ。」

「とぼけんのはよしてくれ!正直に言わねえとこいつらを全員ブタ箱にぶち込むぞ!」

「カーター、銃を下ろせ。」

「馴れ馴れしく名前言うな!!おれあデカだぞ!!・・・お前らのダチじゃねえんだ。勘違いしねえでくれ。」

なんか怪しい。この人数に対して俺達4人だけは不利すぎる。それにここの人たちとカーターさんはやけに馴れ馴れしい。今の言葉もカーターさんはこの人たちに言い聞かせるように言った。

「おい、3人とも外で待っててくれ。・・・ここにいと危険だ。」

・・・は?一人で残る気か!?

「質問に答え「リー!!!」」

「早くいけ、後は俺に任せろ。」

今の言葉で理解できた。この人たちとカーターさんは知り合いだ。しかも、銃を向けても大丈夫な・・・身内とかか?

「でも・・・」

「良いから早くいけ!!」

リーさんはまだ気づいてないようだ。

「リーさん、ここはカーターさんに任せていきましょう。」

「え？ちよつと待って・・・」

俺はリーさんを引きずってこの部屋から出した。おっさんはこの間ずつとタバコを吸って観察していた。

「なにをするんだ!!」

「気づいてないのか？兄ちゃん。」

おっさんが言った。

「いくらあいつでもあの人数を相手にできる分けねえだろ。こいつは情報源だ。情報源を見せてくれただけでも感謝しなきゃいけねえ。」

その言葉でリーさんは引いた。

「まあ、カーターさんに任せて俺達は待ってましょう。・・・気持ちはわかりますが。」

そう言って俺は店内にあるバーの椅子に腰を下ろした。するとバーテンダー（？）が出てきた。

「おじさん、バーボンちようだい！ロックで！」

ここはアメリカだ。本場のバーボンが飲めると思っただけウキウキしている。

「ん？」

バーテンダーは眉をひそめた後、グラスに氷を入れ、コーラを注いで俺に渡してきた。

「え？これコーラ・・・」

「少年、確かにここはマリファナや他の麻薬をやっている奴がいるが、お前のような年の子がアルコールやマリファナをやっちゃいけねえ。人生が灰色になるぞ。・・・カーターの知り合いだろ？こいつは金はとらねえから、これでも飲んで待ってろ。」

バーテンダーは無表情でそう言って、今度はリーさんのオーダーを聞こうとしていた。・・・意外にいい人だな。

「よっーニガー!!」

「・・・」

ビリヤード場の空気が変わった。



「・・・今なんて言った。」

「・・・よ！ニガー!! って言ったんだ。」

「リーさん!! その言葉は・・・」

俺が言い切る前に、バーテンダーはリーさんの襟首を持ってバーのカウンターにリーさんを叩きつけ、そしてそのままリーさんをひっくり返し、大きな腕で首を絞めた。他の客たちはビリヤードをやめ、ゆっくりリーさんに近づいていく。

「うがああああ!!」

リーさんはコーラの入ったグラスを掴み、そのままバーテンダーの額に叩きつけた。

「俺のコーラが!!」

そしてバーテンダーさんの善意が!!

「ゲホツ、ゲホツ・・・。後で・・・弁償・・・するからあ!？」

「テメエ!! なんて言ったんだ!!」

迷彩服を着た男がリーさんを掴み、ビリヤード台に投げた。リーさんはビリヤード台に転がり、そのまま台から落ちて、もう一つの台の角に喉元を激しくぶつけた。

「もう一遍言ってみろ!!」

ガタイのいい大男がリーさんに近づいてきた。

「もうやめろ!!」

そう言っつてその大男に向かって手の平を向けた。大男はそのままリーさんの手の平を掴み、握りつぶそうとしてきた。

「テメエもあいつの仲間か!？」

キューを持った男が俺に近づいてきた。

「ちよ、ちよつと待って!! そう言われればそうだけど!! 偉い人も話せばわかる☒って・・・。」

「問答無用!!」

ブンツ!!

男はキューを思いっきり振り、俺に叩きつけようとしてきた。

「ちよつと落ち着いてくださいって!! キューだって安くないんですから!! ね!!」

俺はキューを白羽取りして説得をしよう

「オラアアアア!!」

もう一人の男が俺をキューで殴ろうとしてきた。俺は説得を諦め、白羽取りをしていたキューを握り、そのキューを使ってもう一人の男からの攻撃を防ぐ。そのまま最初に襲ってきた男の股間に思いつき蹴りを入れる。

「ツ~~~~~!!」

股間を蹴られた男は声にならない悲鳴の後、白目を向いて倒れた。

・・・卑怯な戦い方だけど、体格の差がね・・・男としてゴメンナサイ。

俺は股間を蹴られた男のキューを奪い、そのまま流れるように居合の構えを取ってもう一人の男の眉間に一発。

「アアアアアア!!」

そして、おっさんと取っ組み合いしている男をキューで殴り、近くにあったジョッキの取っ手にキューを引っかける。

「ハアアアア!!」

そのままキューを振り、最後まで生き残っていた男に向けてジョッキを飛ばす。

バライイイン!!

その男にリーさんのキューと、ジョッキが頭に当たりK.O。

「頼むよ!!もうお終いにしてくれ!!」

「リーさん(テメエ)が言うの!?(のか!?)」

俺とおっさんは思わず言ってしまった。

「体に毒だよ!!」

リーさんは喧嘩に参加しなかったマリファナ中年からマリファナを取り上げ、それを床に叩きつけた。そしてカーターさんのいる部屋へ走っていった。

「そう言えばおじさん。中国人の少女が誘拐されたんだ。何か知らない?」

俺はそう言ってマリファナを拾って中年に返した。

「中国人?武器を最近たくさん買ってるって・・・。そう言えば販売人

が、中国人街がキナ臭いから近寄るなって言ってたような……。」

「この人から重要な情報が出てきた。」

「ありがとう、おじさんー!」

「気をつけな。」

すると奥の部屋からカーターさんとリーさんが出てきた。

「お前らもう帰るぞ……って何したんだ?」

死屍累々のビリヤード場を見てカーターさんは引いていた。

「リーさん（この兄ちゃん）に聞いてくれ。」

「え!?私?!」

あなた以外、誰がこの大惨事の原因だよ。

その後、車はアメリカのコンビニみたいなどころの前に止まった。

「……ここで何を?」

リーさんはカーターさんに訊ねた。

「とりあえずここで何か食おう。お前もスシ坊もカツ麺だったら食えるだろ?」

カーターさんは心配していそうな表情で俺達を見た。……怪しい。

「スシ坊は止めてください。」

「カーター、時間を無駄に使うのは止めよう。……スーヤンを助けるんだ。」

すると、今まで黙っていたおっさんが紫煙を吐き出すと同時に重い口を開いた。

「デメエ、事件を解決するとか言いながら、こんな時間を無駄にするようなことをしてやがる。……時間がもったいないとは思わねえか?」

「……。」

カーターさんは黙ってしまった。

「俺達四人は事件を解決したいと思っている人間が集まってる。その少女のためにもお互い協力しあわねえか?」

そういった後、タバコを啜えて黙った。

「分かってる・・・、分かってるさ。今みたいに時間を潰すような事をするくらいなら、情報を必死に探し出したほうがいいってことくらい分かってる。・・・だけど、こいつを中国領事館へ連れて言っちゃまうと停職処分になるんだ。」

「なあ、カーターさん。」

俺は思わず口を挟んだ。

「つい数日前、爆薬の販売人の逮捕で大分無茶してきたんでしよう？  
なのに今回はビビるんですか？」

「なんだと!!」

まあ。俺もビビったけどさ。まあ、よく考えれば元々ロス市警・FBI・アメリカ陸軍の面子潰してるし（ナカジマ・プラザ、ジョン・F・ケネディ空港の件）、気にする必要ないかなって。

「なあに、俺達だけで事件解決さえすれば停職処分になんてなりませんよ。俺とおっさんだつて事件解決したから殺人罪で訴えられてないんですから。」

「あの後、書類が大変だつたんだぞ。」

おっさんはため息をついた。

「お前ら（君たち）何やったんだ!」

リーさんとカーターさんはめちやくちや驚いた。

「改めまして、イモータル・スピリット不死の英霊村田イブキ海軍大尉です。今は武偵もやっています。ついでにこの二つ名は嫌いです。」

二人は目を見開いた。

「つてことは・・・。」

「おっさんはダイ・ハード不死の男ジョニー・マクレイ。」

「よろしく。俺もこの二つ名は嫌いだね。」

「ナカジマ・プラザの二人か!?!あの時大変だつたんだぞ!!」

カーターさんが文句を言った。

「まあ・・・あの時はすいませんでした。・・・で、どうしようか考え  
たんですが、リーさんに一人で領事館へ行ってもらいましょう。」

「はあ!?!俺が停職になっちゃまう!!」

「まあ、まずは聞いてください。」

俺はこの時、瀬島さん（HS部隊第一中隊、中隊長代理）だったらどうするか・・・を考えてみた。（辻さんと神城さんならイケイケドン作戦になるので参考にならない。）今回の場合、キーポイントはハン総領事だ。彼が俺たちのことを知ってもらわないと、俺達だけで解決してもFBIに揉み消される。

「で、リーさんには何とかして一人で行ってもらいます。その後、俺らがハン領事のところまで行ってリーさんが説明してくれればFBIはそういう事にすると思います。」

リーさんを捜査に参加させないように妨害してました・・・なんてFBIは絶対に言えないからな。逆にこつちが弱みを握っている。

「リーさんを捜査に加えないように妨害・・・なんてFBIは言えませんよ。下手すれば国際問題待ったなしです。弱みはこつちが握ってるんですよ！そう思わせつつも協力してやれば・・・自分たちで事件解決すればこの問題も吹っ飛びます!!」

まあ、解決できなかったら・・・マスコミにリークしてワザと国際問題に発展させるか？（辻さんの影響による思考の過激化）

「ハン領事はFBIに囲まれてるんだぞ！そんな中行っても途中で捕まって帰らせられるだけだ!!」

「大丈夫でしょ。」↑俺

「大丈夫だろ」↑おっさん

「なんとかするさ」↑リーさん

そう言えばカーターさんはリーさんの戦闘力を知らないんだっけ？

「ビリヤード場で倒れてた人はリーさんが短時間でやったんですよ。」

嘘はついてない。俺とおっさんもやったけど。

「マジかよ・・・って、おい!!何しやがったんだ!!」

「まあまあ、カーターさん、リーさんを領事館へ行かせないようにしつつ捜査は無理だ。ここはお互い協力してFBIの鼻を明かしてやりましょう!」

「そうしよう!!スーヤンのためにも!!」

リーさんも賛成した。

「・・・それともカーターさん。リーさんを領事館へ行かないようにしつつ、事件を解決して、FBIに手柄の横取りさせられないようにする方法はほかにありますか？」

むしろあつたら教えてくださいよ!!俺は飛び級のせいで、軍学校でまともな教育受けてないんだぞ!!作戦立案は苦手なんだ!!

「わあつたよ!!逃がした後、領事に会って、そこから俺達の手で解決すりゃいいんだろ!!」

カーターさんはやつと賛成してくれたようだ。

「カーターありがとう!!」

そう言つてリーさんは急いで領事館へ向かおうとした。

「あ、ちよつと待つてください。ちよつとスーツを汚してヨレヨレにしてください。カーターさんが頑張つて妨害したつてことにして。」

俺がそういうと、リーさんは砂をつかんでスーツにまぶし、手でシャツやスーツにしわを作つた。

「じゃあ行つてくる!!」

そう言つてリーさんはタクシーを呼んで中に入った。

「FBIから妨害を受けたつて仄めかしてくださいよ!!」

リーさんは窓から手を出し、ヒラヒラと振つた。

俺達三人はビーフブritoーを食べながら時間を潰していた。俺がふと近くの川を見ると水辺に水死体のようなものが・・・。

「ッ!!」

俺は急いで救助に行つたが・・・。

「なんだよこれ・・・。」

ごみの体に古びた緑色の木のお面・・・。完全に見間違いです。

「おいスシ坊!!何やってるんだよ!!」

カーターさんとおっさんは目を丸くして俺を見ていた。

「・・・何でもない。」

「どうせ水死体かなんかと間違えたんだろ。」

おっさんが言った。

「うるせえ……。」

「……プツ」

「笑うなあ!!」

二人は大笑いし始めた。誰だつて間違いはあるだろうに……。そう思いながら木のお面を拾い上げると……

「ツ!!」

何だこのお面!!すごい魔力が詰まってやがる!!海鳴であったジユエルシードと同じくらいかそれ以上は詰まってるぞ!!俺は☒☒四次元倉庫☒☒にそのお面をしまった。

「おい!!戻らねえとお前の分も食っちゃまうぞ!!」

カーターさんが俺のブリトーを持ちながら言った。

「待って!!今すぐ戻りますから!!」

そのビーフブリトーうまくて気に入ってるんだから。俺は急いで戻った。

その後、水死体に見間違えた事を10分ほど二人に揶揄われた。

ラッシュユ○ワー バンジーはやりたくない・・・

ビーフブritoーを食べて時間を潰した後、俺達はゆっくりと中国領事館へ向かった。それにしても、あの拾った木のお面は何なんだろう・・・。

領事館へ着くと、ボロボロの白人刑事が二人立っていた。

「できればここに来たくなかった・・・。おい!!東洋人が来なかったか!?!このぐらいの背の。」

そう言つてカーターさんは自分腰ぐらいの高さに手を置いた。・・・カーターさん、そのぐらいの大きさと子供並みの大きさとぞ。(ついでに俺、おっさん、カーターさん、リーさんの中で俺がダントツで背が低い)

「・・・さっさと失せやがれ。」

「今なんつった!?!」

今この刑事☒☒失せやがれ☒☒て言わなかった!?!リーさんにしたの!?!

「早く失せろと言つたんだ!」

「よくも俺にそんな口を!お前らこそサツサとドケエ!!どかないとブツ殺すぞ!!」

ボロの白人刑事がため息をついた後、もう一人の方に向かい

「・・・入れてやれ。」

・・・いや、ほんとすいませんね。二人は渋々シボレーを領事館の敷地へ入れさせた。

「ほおくれ見ろ。やつぱり俺が怖いんだ。」

違うと思うけどなあ・・・。

領事館の中に入ると白人刑事がお冠だった。

「自分の任務もわからないのか!?!」

この人が上司か?



「バスと追いかけてこするのが俺の任務か!？」

カーターさんは威勢よく言った。

「落ち着いてください。あんな戦闘力を持った人を半日拘束できたのは奇跡ですよ。」

俺はその刑事に向かって言った。

「君達にも協力してほしいと伝えていたはずだが……。」

「あの刑事を殴ってよかったのか? そうしたらFBIがもつと困るんじゃないねえのか?」

おっさんがそう答えた後、扉が開き、中からハン領事とリーさん、それと白人の男が入ってきた。

「この人たちは誰だね?」

「ご紹介し m 「カーター捜査官と事件の目撃者の二人です。私の捜査に協力を。」」

白人の刑事が言う前に、リーさんが間髪入れずに言った。

「自分は村田維吹、日本の軍人で訳あって武偵もやっています。彼はジョニー・マクレイ、ニューヨーク市警の刑事です。僕たちは観光でロサンゼルスに来たら、誘拐現場に偶々居合わせた……。ご息女を助けようとしたのですが……力及ばず……すいません……。」

「彼らはスーヤンを探すため必死でやってくれています。」

ナイス、リーさん!

「ええ……。私達で必ずお嬢さんを必ず救出して見せます。どうかご心配なく。」

カーターさんもナイス!! FBIの刑事に何も言わせちゃいけない。

「彼らは命がけでスーヤンを探し出す覚悟です。」

FBIの刑事は口がはさめず戸惑っている。

「ああ……。なんと礼を言えば……。」

ハン領事はカーターさんに握手した後、俺達を見た。

「あなた達も観光できたのに、ワザワザ協力してもらえるなんて……おや? もしや、ジョン・F・ケネディ空港の事件を解決したお二人では?」

「そうです。私たちが全力でリー刑事の捜査を手伝わせてもらいま

す。」

おっさんが言った。

「お二人の噂は中国にいた時でも耳にしています。．．．本当に、ありがとう。」

．．．噂って何だろう。考えたくねえ。

「君たちが、かの有名な二人か。」

ハン領事と一緒に部屋に入って来た男が俺達に言った。

「すいません、お名前は？」

「ああ。これは失敬。私はトーマス・グラント元警視長。彼の古い友人で、彼の力になれないかと思ってきた。」

男は笑顔で答えた。この人、何かおかしいな．．．こいつ、目が笑ってない。

「カーター捜査官ならリー刑事のお役に立てると思います。」

もう一人のガツシリした体形で額と頭頂部がスキンヘッドの刑事がハン領事に言った。

「そういえばラス捜査官？ハン領事に私の任務を説明しておくべきじゃあないのか？」

カーターさんは上司と思われる刑事に言った。そうか、この人がラス捜査官か。

「ぜひ。」

ハン領事も聞いてきた。ここまでくればFBIもリーさんの捜査妨害をお願いしてきました．．．なんて言えない。ここで言質を取っておこう。

「．．．カーター、君達、向こうで話をしよう。」

なるほど、ハン領事の前では言えないから場所を変えると．．．。だけどもう遅い。主導権はこちらにある。

「君と私とでか？」

カーターさんがラス捜査官に言った。

「そんなハン領事の前で言えないことを命令していたのですか？」

「俺達は休暇なのにワザワザ捜査に協力していたが、そんなに不味いことなのかねえ？」

俺とおっさんが言った。向こうの口は2つ、こっち4つ、このままいけばこっちが勝てる。

「・・・ああくそうか、機密区分G40の件だな！彼は機密好きなんです。」

カーターさんがハン領事とトーマス元警視長に言った後、

「その前に俺の上司に状況報告をしなきゃならない。話はその後だ。G40はもう一度考え直したほうがいい。・・・ハン領事、電話をお借りします。」

そう言つてカーターさんが部屋の受話器を上げようとした瞬間、電話が鳴った。カーターさんは受話器をそのまま上げた。

「誰だ？もしもし。」

カーターさんはスピーカーをオンにし、みんなに聞こえるようにした。

「FBIの人間と話がしたい。」

「おい、貸s「FBI!?!それなら俺だ。」おい、カーター。」

ラス捜査官はカーターさんから受話器を取り上げようとし、カーターさんは彼の手から逃げる。

「おまえがFBI?」

「ああ俺がFBIだ。」

「貸せ、カーター。」

すると部下の一人がヘッドフォンをラス捜査官に渡した。

「良いか、俺の話をよく聞け。」

「わかった、メモを用意する。」

するとハン領事がカーターさんにメモを渡した。・・・カーターさん胆がでかすぎだろ。そう思いながら俺はスマホのボイスメモをオンにし、手帳を出した。

「よし、いいぞ。」

「身代金の受け渡し時刻は今晚11時、それまでに現金5000万ドル用意しろ。」

「現金で5000万ドル!?!そんな大金何に使うんだ!?!」

「50ドル札以下の古い紙幣を用意してくれ。」

「わかった5000万ドルだな。問題ない、用意する。」

「内訳は50ドル紙幣で2000万ドル。」

「50で2000万。」

「20ドル紙幣で2000万ドル。」

「20ドルで2000万。」

「それに10ドル紙幣で1000万だ。」

「10ドル札で1000万。5ドル札はいいのか？」

「・・・お前の名は？」

やけに調子がいい声のせいか、向こうは疑問に思ったようだ。

「電話してきたのはそっちだぞ。お前が名乗るべきだろ。」

「俺はただ領事に忠告したかっただけだ。お前みたいなおしやべり雇ってると娘の命が危ないって。」

「わかった。しやべり過ぎないようにするよ。でもこれだけは言っておく・・・俺はお前の味方だア。」

・・・こんな交渉人ネゴシエーターは前代未聞だよな。

「金の受け渡し場所と方法は受け渡し時刻の30分前に連絡する。無事に金を受け取ったら娘は返す。ハン領事は予定通り中国博覧会へ行け。」

今日博覧会があるのか・・・可哀想に、ちゃんと喋れるのかな？

「大丈夫、必ずうまくいく。5000万ドル受け取ったら少しくれよ。ここは給料が安いんだ。」

向こうは切ったようなのでカーターさんは受話器を置いた。

「逆探成功。南ブロードウェイの620。」

ふくよか一部スキンヘッドの刑事が言った。

FBIは目標のビルに一目散に向かった。俺達もカーターさんのシボレーに乗ってFBIについて行った。

現場に着くと、FBIはそのビルに突入しようとしているようだ。

「突入するのは危険だ!!」

「俺もそう思う。やめるように言おう。」

「え？」

畏はしかけられてそうだけど、危険だから犯人がいたと思われるところに行きませんでした・・・なんて言えないと思うんですけど。

「機動部隊は畏の解除ぐらいできないのか？」

「・・・軍じゃねえんだよ。できても一握りだ。」

おっさんが答えてくれた。カーターさんとリーさんはラス捜査官とふくよか一部スキンヘッド刑事に抗議していたが相手にされていないようだ。すると俺達のほうへ戻ってきた。

「なんで君たちは抗議しないんだ!!」

「いや、だって相手にされないのわかってたし、危ないからって突入しないのもおかしいですよね？」

俺がリーさんに反論した。

「もし何かやるんなら、近くに実行犯がいるはずだ。怪しい奴を見つけてろ。」

おっさんが言った。その瞬間・・・

ズドーン!!

ビルの最上階が爆発した。

「なんてこったあ!!」

カーターさんが叫んだ。

「周囲を探せ!!」

俺とおっさんがとつさに叫び、二人はハッと我に返って周囲を見渡した。

「ッ!!!」

するとリーさんが急に走り出した。すると遠くにいる短髪で金髪の東洋人と銀髪のロングヘアで帽子をかぶった少女が走り出した。あいつらか!!

「追うぞ!!!」

俺が言うと同時に二人も走り出した。

二人は路地裏に入り走った後、二手に分かれてしまった。

「お前たち（君たち）はあっちだ!!」

リーさんとカーターさんは俺達に少女を追えと言った後、男のほう

へ走っていった。

少女がビルに入ったので俺達もビルに入った瞬間

ビュン!!

何かが飛んできたので、俺は銃剣を取り出しそれを落とした。

「矢?」

ヒュン!!

俺はもう一度落とし、射った張本人を見ると……。

「デメエ……潜水艦の時の……。」

イ・ウーの潜水艦捕獲した時に、タンカーから狙撃していた弓兵じゃねえか!!

ダアンダアンダアン

おっさんが発砲したが弾は当たらず。弓兵は逃げ出した。

「待てえ!!」

銀髪の帽子をかぶった少女は、時々俺達に矢を浴びせながらビルを上っていった。俺達は銃を撃ちながら追っているが弾が一切当たらない。まるで弾が自分の意思で避けるように……

屋上に着いた。

「もう逃げられねえぞ!!」  
すると

「ここまで死に近いのに死相が見えない。……あなたたちは何者?」

……何言ってるんだ?こいつ。

カラン

少女は何かを落とした後、

「これは使いたくなかった。だけど命令だから。」

ピ・ピ・ピ・ピ……

急にカウントダウンのような音が流れ始めた。音が出た方向を見ると

「爆弾!」

C4と大きく書いてある。しかも起爆まで30秒しかねえ!!少女

の方を振り向いたら、彼女はビルとの間を飛んで逃げようとして……  
「待ちやがれ!!」

俺は四次元倉庫から適当につかんだ物を掴み引き金を引いた。

「イピカイエー・マザーファツカー!!」

パシユツ……ドローン!!!

「……あ。」

それは牛若から預かっていたパンツァーフアウスト。弾頭は彼女を逸れて近くに当たったが、爆風で彼女は俺達の方へ吹っ飛びそのまま気絶。

「おい坊主!!何しやがった?」

おっさんは屋上にあった消化ホースを引きずりながら俺に尋ねた。

「……なんか爆発に巻き込まれて気絶した。」

ウソは言っていない。俺はそう言っただけで近くに転がっていた、少女が落とした何かを拾った。何だこれ?

「おい坊主!!早く持て!!」

「いや!大丈夫だああ!?」

俺は少女を担ぎ、飛び降りて脱出しようとして……するのをギリギリで止めた。何故なら、下は4車線もある道路で、車がビュンビュン通っていた。このまま飛び降りても車に轢かれるだけだ。

「坊主!!何やってんだ!!急げ!!」

残り10秒。俺は急いで少女の体にホースを結んだ。これで彼女が落ちる心配はない。

「チクシヨウ!!なんでまたこんな事しなきゃなんねえんだ!!」

「ナカジマ・プラザと同じだな!!もう仕事でも高いビル登るのやらな  
いって言ってなかったっけ!!」

残り1秒。俺とおっさんは腕にホースを巻いた。

「飛べ!!」

二人（三人?）で屋上から飛び降りた瞬間

ドカーンカーンカーン!!!

「うわああああああああ!!!」

ガンツ!!!

大量の熱風が俺達を襲った後、ビルの壁に激突した。俺とおっさんはビルを蹴って壁から離れた瞬間、

ダンダンダンダンダン・・・!!

拳銃で窓ガラスにひびを入れ、振り子の要領でガラスに体当たりバリーイイイイン!!

俺達は無事、屋上から生還した。

「スタントしにロスに来たわけじゃないのになあ・・・。」

「俺はあと何回、高いところから飛ぶんだ!?!」

俺達が嘆いた瞬間、ホースが巻いてあつたリールが落ちて行つた。すると、ホースが俺達を引っ張り始めた。俺は銃剣で急いでホースを切った。

「う・・・。」

そう言えばこの子がいたっけ。すげえ、あれだけのことがあつても弓を手放さないって・・・。弦は切れてるけど。

「とりあえず・・・逮捕。」

少女に手錠をかけた。後でFBIに引き渡しておこう。

「そう言えばおっさん、これなんだ?」

俺は拾っておいた銀髪の少女が落とした何かを血まみれのおっさんに渡した。爆発の時の破片やガラスで切つたのだろう。

「なんだこれ? 爆破装置か? アメリカ製じゃないが、何処かでちゃんと作られた奴だな。少なくとも素人にや作れねえ。」

うわあ・・・。国外製造のちゃんとした奴か、その道のプロの物か。

「それよりもまず、そのお嬢ちゃんを引き渡すぞ。」

「だな。」

俺は額を腕でぬぐつた。大量の血が腕についていた。・・・今頃になつて痛みを感じだしたぞ、べらんめえ!

俺達はFBIに少女を引き渡した後、カーターさんに電話した。

「もしもし、カーターさん?」

「スシ坊か!?! そっちはどうなつた!?!」



「・・・とりあえず確保してFBIに引き渡しました。そっちは大丈夫ですか？こっちなんて爆発に巻き込まれたんですが。あとスシ坊はやめてください。」

「こっちは逃がしちまった。向こう足が速くてなあ、こてて」そうですか。」

無駄に長くなりそうなので、無理やり話を切った。

「あ、そうだスシ坊!!アジトが中国人街の福州飯店チャイナタウン フーチャオレストランってわかった!!  
そこの近くで合流だ!!」

そこなら近い。

「中国人街の福州飯店チャイナタウン フーチャオレストランですね!!わかりました!!それとスシ坊はやめてください!」

・・・ピ。

電話を切った。

「おっさん。アジトが分かった。中国人街の福州飯店チャイナタウン フーチャオレストランだ!!その近くで合流だ!!」

「了解!」

おっさんはポリスバッチを手にとってタクシーを止めると

「警察だ!!中国人街の福州飯店チャイナタウン フーチャオレストランへ急いでくれ!!」

俺も慌ててそのタクシーに乗り、中国人街へ向かった。

タクシーが中国人街へ着いたと同時にカーターさんの車も着いたようだ。

「お前らも着いたか・・・って、その恰好どうした!?爆発にでも巻き込まれたのか!?!」

「・・・正解だよ、クソツタレ!!」

俺とおっさんは叫んだ。

「お、おう・・・。」

俺達の剣幕でカーターさんは怯んだ。

「・・・いや、すいません。そっちは爆発に巻き込まれたりしませんでした?」

「爆発に巻き込まれたり、ビルの屋上からダイブしたり・・・チクシヨウ！なんで俺がこんな目に遭わなきゃならないんだ！」

相変わらずのおっさんのぼやき。

「・・・こっちも落ちたんだ、二人して。」

リーさんが俺達を慰めるように言った。そっちは砂ぼこりが付いてるだけ、こっちは血まみれになって、爆発に巻き込まれる・・・これが主人公補正ってやつか？カット

「まあ、程度の差があれど、お互い大変だったみたいで・・・。そういえば踏み込まないんですか？」

俺がそういうと

「しばらく様子を見た方がいい。いきなり踏み込んでも撃たれるのがオチだ。」

カーターさんはまじめな声で言った。

「うあく・・・眠っちゃまうよ。」

リーさんは大きく伸びをした後、車から降りてボディに寄り掛かった。カーターさんも暇つぶしのためかカーステレオでラジオをかけ、車から降りた。おっさんもタバコに火をつけみんな思い思いの方法で時間を潰す。俺も簡単な傷の手当てでもしようかと4次元倉庫から救急キットを出した。その瞬間

「ふー いえあ わっいーず ぐーふおー」

リーさんがラジオで流れている歌(Edwin Starr) War(だそうだ)を歌い始めた。リーさんはうまくないが、聞いていられないほどではない。暇つぶしにリーさんの単独ライブでも聞か。

「あぶそりゆりー なっしん ゆーおーる」

ん？

「ふー わっいーず わっいーず ぐーふおー あぶそりゆりー なっしん ゆーおーる」

そこって y a l l i e の短縮だったから、合っていないわけではないけど。源は y o u a l l i e の短縮だったから、合っていないわけではないけど。

「わっ ふー いえあ ぐーふおー あぶそりゆりー なっしん」  
「この歌知ってんのか？」

カーターさんが不思議そうに尋ねた。

「誰だつて知ってる歌だよ!! ふー! いえあ! わっいーず ぐー  
ふおー! あぶそりゆりー なっしん! くつがー ゆーおーる!」  
「……初めて聞いたんですが。これが世代差というものなのか!」  
「you all じゃない y all!!」

カーターさんが指摘した。やっぱりそうだったか。つと俺の手当  
が終わった。

「おっさん、手当するから怪我したところ出してくれ。」  
「……準備がいいな。」

そう言っておっさんは後ろを向いてシャツを上げた。……うわあ、  
ガラスで切ったのか、背中血まみれだった。俺はおっさんの背中と  
腕、頭の手当をした。手当が終わって、リーさんとカーターさんの方  
を見たら……

「What is it good for? Absolute  
ly nothing. Listen to me!!」

二人は一緒に歌い、踊っていた。……観光客のみんなが見てるし。  
この二人、ここで監視していること忘れていいのか? まあ、とりあえ  
ず……

「仲良くなってよかったのか?」

「悪いよりはいいじゃねえか。……タバコが切れた。坊主、買ってき  
てくれねえか?」

俺17歳だから買えねえから!!!

おっさんがタバコを買いに行ったあと、リーさんによる敵の拳銃  
の奪い方( )の授業などで時間を潰した後(カーターさんとおっさんは  
真剣に教わっていた)、腹が減ったので中国人街にあるファストフー  
ド(?)の店でリーさんが適当なものテイクアウトして道端で食べて

いた。(カーターさんは店主ともめていたが別にいいだろう)

「こいつなんなんだ?」

おっさんとカーターさんがリーさんに訊ねた。

「ウナギだよ。」

「「ウナギ!?!」」

ウナギなんて食べるのはいつぶりだろう……。俺はそう思いながらウナギを食べ始めた。……うまいけど、蒲焼のほうがいいな。おっさんとカーターさんは箸が止まったままだ。

「……うまいのか?」

カーターさんがまた訊ねた。

「最高だ。日本人はウナギが好きすぎて、日本のウナギは絶滅寸前だそうだ。」

リーさんが言った。

「そうですね。俺もウナギを食べたのは何年振りか……。まあ、蒲焼のほうが良かったですけど、これはこれでうまい……。いらぬから貰いますよ。」

俺は二人の持ったウナギに狙いを定めた。すると二人は箸を動かさ始め

「……ん、悪くない!チリソースをかければもっとうまいだろうな。」

「……こいつはうめえな。」

日本だと高級魚だからなあ……。早く養殖出来るよう、科学者の皆さん頑張ってください!!

食べ終わるころ、スーツ姿の金髪の東洋人が福州飯店フーチャオレストランに入っていった。

「あいつか?」

リーさんが言った。

「え？おっさん、あいつって・・・。」

「警官の格好をして撃つてたやつだな。」

・・・顔バレしてますわ。

「そうだ！行こう!!」

「まあ、待て待て・・・。」

リーさんが突入しようとしたので俺達は全力で止めた。

「お互い顔バレしてるんですよ！慎重にいかないと！」↑俺

「顔バレしてるのに正面から行く気か!？」↑カーターさん

「今正面から言っても裏から逃げられるに決まってる。」↑おっさん

三人から止められ、渋々リーさんは引き下がった。

「で、どうします？三人も顔バレしてるんで客に混じって潜入なんて

できませんよ。」

俺が訊くと

「俺は顔がバレてないから先に行く。で、リーはあとから行く。お前

らは裏口から行く。これでいいだろ？」

カーターさんがそう言い

「わかった5分後に行く。」

「了解。」

俺達が頷いた後、

「あ、おい。身分証を貸してやる。」

そう言っつてカーターさんは自分の警察手帳と拳銃をリーさんに渡した。

「もしなんかあったら、こいつを見せて踏み込むんだ。」

そこにはアフロ姿のカーターさんの写真が・・・。すぐバレないか？

「本人じゃないってすぐバレちまう！」

リーさんが言ったら

「大丈夫だつて刑事っぽくやれば絶対にバレないさ。パツと開き、パツと閉じる。練習しとけ。」

そうカーターさんはリーさんに言った後、

「お前らもバレてるんだろ？」

リーさんはそう言ってシボレーのトランクを開けた。そこには……  
「カーターさん、こんな趣味あったの？」

俺は引いてしまった。

「趣味は認めるが……車に常に入れてるってどういうことだよ……。」  
おっさんも引いた。

「違う違う!!この前の事件での没収品だ!!」

慌ててカーターさんが言った後、

「これ使えば変装ぐらい簡単だろ!？」

カーターさん、………できれば使いたくないんですが。

「どうか？」

リーさんが手帳を一瞬見せて閉じた。

「上出来だ。お前らもそれ使って裏口行けよ!!」

そう言っでカーターさんはフーチャオレストラン福州飯店へ入ってしまった。

「……使うしかないのかあ。」

「……なんだってこんな目に。」

俺達は物陰に隠れてその変装道具を使った後、裏口へ向かった。

ラツシユ○ワー 締まらねえ・・・

「……………俺の名前は村田イブキ、17歳!!ピツチピチの漢女で、  
軍人なんだけど武偵もやっているの!!今、相棒のおっさんと一緒に  
福州飯店の裏口から乗り込むの!!」  
オエツ!!!

俺達はカーターさんの車にあった化粧品を使って女装(笑)をした  
のだが・・・どっかのキンジの様にまるで本物の女性の様にな・・・  
らなかった。俺達の女装は、よく言つてシャーロック・ホームズ(映  
画 シャーロック・ホームズ シャドウ ゲーム)の女装、悪く言う  
と恋姫○双の貂蟬・卑弥呼のようなものになってしまった・・・。  
「アハハ・・・観光に来たのに、爆発に巻き込まれて・・・。次は全く  
似合わない女装して突撃なんて・・・。」

「・・・坊主、口に出すな。余計に意識するだろ。」

「ハア・・・。」

俺達は大きな溜息をつきながら福州飯店の裏口へ立った。

トントントン

俺がドアをノックすると中年のコックと思われる人が出てきた。

「こんばんは。ごめんなさいね、こんな時間に。」↑俺

コックは怪しさいっぱいで俺達を見る。

「私達、こういうものなの。」↑おっさん

おっさんはポリスバッチをコックに見せた。

「おっさんと俺は、このお店が違法食品を使っているつて通報が  
来たから確認に来たわ。」↑俺

俺は吐き気を覚えながら言った。

「・・・え?いやいやいや!!私たちはそんなもの使つてませんよ!!」

コックが慌てながら言った。そりやそうだ、だつて嘘だもの。

「俺やおっさんだつて分かつてるわよ。あなた達が使つてないくら  
い。通報したのだからマークされてる過激な白人至上主義者からよ。  
でも通報が来たからには形式的にもやらなきゃならないの・・・。全  
く、この後俺達用事があったのにパーになつちやつたわ!」↑俺

俺はそこで溜息をついた。なんでこんな口調で喋んなきやなんねえんだよ。

「それは……」愁傷さまです。」

コックは俺達とあまり関わりたくないようだ。

「安心して、軽く見回つてすぐ出てく行くわ。上の人にわざわざ来てもらう必要はないわ。」↑俺

「ゴメンナサイね、迷惑かけて。」↑おっさん

うん、おっさんがオカマ口調で喋るとメツチャ気持ち悪いな……。

「いえ、お疲れ様です。どうぞ。」

コックが一切目を見ないで入れてくれた。

「ありがとう。じゃあ見させてもらおうわね。」↑俺

俺達は裏の厨房から福州飯店に潜入した。

フーチャオレストラン

俺とおっさんは店の中の人目のない廊下で案内役の若いコックを気絶させ、カツラを外し、やっと女装をやめることができた。

「もうやりたくねえ……。」

俺達はぼやいた。

「ハア……これ片付けないと……。」

俺は気絶した案内役とカツラを隠すために近くの部屋を開けると……

「うわあ……。」

「マジかよ……。」

その部屋には大量の手榴弾、大量のC4、拳銃やライフル、……重機関銃もあらあ。

「……戦争でもやる気かよ。」

俺はまたもぼやいた。……とりあえず起爆装置と雷管を破壊しておこう。そうすればC4は使えなくなる。

「……これはえらく古い銃だな。」

おっさんは重機関銃を見ていた。この機関銃は布製弾帯を使うようだ。ってことは最早骨董品だな。



俺達はそれらの武器を細工して部屋を出た。

俺達は廊下の角を曲がった瞬間

ドン！

角から人が急に表れてぶつかってしまった。

「いやあ、すいません。」

「おう！気をつけろよ！」

男は頭に袋をかぶせた子供を抱えていた。

「……………」

微妙な空気が俺達と担いでいた男の間を支配する。

「助けて!!」

その子供が叫んだ瞬間、その空気が吹き飛んだ。おっさんが男を殴り、その瞬間に俺はその子供を確保する。

「うがああああ!!」

男とおっさんが格闘している間に、子供がかぶせられている袋を取る。

「ひっ!!」

少女は俺の顔を見て怯えた。……メイク落としてなかったな。

「こんばんは、スーヤンお嬢さんだな？俺は武偵で君を助けに来たんだ。……このメイクは潜入のためで趣味じゃないぞ。」

少女は頷いた。スーヤンお嬢さんを確保。

「うらああああ!!」

ドン!!ガラガラガラ!!

おっさんは男を柵にぶつけ、やっと無力化したようだ。

「ハア……ハア……こういうのは、坊主の仕事だろお!!」

「いやあ、おっさんが先に動いたんで任せてもいいかなって。」

といった瞬間、

ダアンダアンダアンダアン

敵がもう二人現れて拳銃を撃ってきた。

「こっちは人質居るんだぞ!!」

おっさんがスーヤンお嬢さんを担ぎ、俺は14年式とワルサーP38を両手に持ち逃げ出した。奥から悲鳴が聞こえる。客も銃声で驚いたのだろう。俺達は角を曲がろうとすると・・・人の気配!?しかも二人!?チクシヨウ、やるつきやねえ!!

「動くな!!」

・・・そこには銃を構えたリーさんと驚いた顔をしているカーターさん、それとショートカットの気の強そうな女性がいた。

「リーさんとカーターさんか・・・スーヤンお嬢さんを無事確保しましたよ。」

「・・・キモツ!!」

ブチッ!

「うるせえ!!」

バキツ!!バキツ!!

俺達はついつい二人に手を出してしまった。

「元々これ持ってたのカーターさんじゃないですか!!てやんでえ!!」

「こっちだっただけ好きでやってねえんだよ!!」

俺達が喧嘩し始めた瞬間、

「動くな!!」

ライフルを持った男たちが俺らに向けて銃口を向けていた。一部の男たちは武器庫（仮）へ行った。そう言えばあの銃は・・・ってヤバイ!!

「隠れろ!!」

俺とおっさんは少女を担ぎつつ、三人を押し倒して近くの部屋に無理やり非難させた瞬間

ドカン!・・・ドカーン!!

男たちの方向から爆発音が聞こえた。予想以上の・・・可哀想に腔発（今回の場合、銃口を塞いだ状態で発砲による爆発）が手榴弾を爆発させたのか?

「何が起こってるのよ!!」

ん？　そういえば武器庫に一部行ってたよな……。　ってことは……。

「全員伏せろ!!」

「!?」

おっさん以外は気づいたようだ。

「急げ!!」

おっさんも言った。おっさんは絨毯に横になり、タバコとライターを出した。三人もシブシブ横になった。

「お嬢さんも横になって!!」

スーヤンお嬢さんも横になった。

「何やってんだ?」

カーターさんがおっさんに聞いた。

「待つてる間吸おうと思ってるな。」

おっさんのタバコに火が付き、紫煙を吐き出した瞬間

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダ!!

機関銃の掃射が始まった。壁の木片が俺達に降ってくる。

「あたしが何したつてのよ!!」

女性が若干ヒステリー気味だが無視しよう。

「おっさん、仕掛けたとこ覚えてるよな。」

「ちゃんとやってやる。・・・爆発に飛び降りに女装に、今度は機銃掃射かよ。」

「戦闘機に追われないからよかったじゃねえか。」

「フラグ立てんじゃねえ!!」

ダイ・○ード4。0で戦闘機に追われるから安心しろ。

機銃掃射が止まるまでの間、俺とおっさんが武器庫(仮)で何をやったか説明しよう。俺達はまずC4用の起爆装置と雷管を1セット残してすべて破壊した。その次に、おっさんは重機関銃を移動できないように床に固定する。俺は布製弾帯の真ん中のほうの銃弾一発を外し、代わりにカーターさんの車にあった口紅を入れる(ちょうどぴったりの大きさだった)。そして、ライフルに口径の違う弾丸を銃口に詰めて塞ぎ、ついでとばかりに銃身に火薬も詰めておく。5丁のライフルの細工が終わったらおっさんも重機関銃の固定が終わった。そ

して俺は残りのライフルや拳銃は窓から外に捨て、おっさんはC4と残った起爆装置と雷管で爆弾を作ってセットその部屋に隠しておいた。(その時、おっさんが起爆装置のリモコンを壊してしまったので手動でしか動かない)

それでやつと部屋を出たのだが・・・念のための細工がまさか全部使うことになるとは思わなかった・・・。

ダダダダダダダ!!カチンカチン!!

機関銃が止まった。

「おっさん!!」

おっさんは機銃掃射で空いた穴に銃を構えた。

「イピカイエー・マザーファッカー!!」

ダアン!!・・・ドカーーーーン!!!

壁が吹き飛び、熱風がまたも俺らを襲った。

「君たちはどんだけ仕掛けたんだ!!」

リーさんが文句を言った。

「ここまで爆発すると思わなかったんですよ!!」

実際、部屋一つ爆破する程度しか仕掛けてない。予想以上に性能が良かったようだ。

「逃げるぞ!!」

おっさんが言った。俺達は急いで立ち上がり、外へ出ようと

ダアンダアンダアン!!

まだいるの!?

「逃げ!!」

俺達は応戦しながらなんとか外へ出て、そこに止めてあったライトバンの車に乗った。

俺達がライトバンに乗って逃走したら、敵も車で追いかけてきた。

「チクショウ!!どんだけ湧いて出てくんだよ!!」

俺はハンドルを握りながら叫んだ。

ダンダンダン!!

敵は銃を撃ってくる。おっさんも応戦しているが、敵の数は減らない。

「あんた達何したの!？」

「落ち着いてくれ、これは捜査だったんだ。偶然店に君がいたんだ。」  
女の人とカーターさんが言い合っている。そういえばこの女性是谁だ？

「カーターさんこの人は!？」

俺はカーターさんに聞いた。

「彼女はジョンソン。俺の相棒だ。」

「ちよつと待って、私はあるたと組んだ覚えh「ジョンソンさん初めまして、村田維吹です!!捜査の協力をしています!!」

口喧嘩するくらいならさっさと応戦してほしい。

「スーヤン大丈夫だったかい!？」

「リー!!」

リーさんとスーヤンお嬢さんは感動の再開中。

「とりあえずこれを脱ごう。」

リーさんはスーヤンお嬢さんの上着に手を置いた。

「お前さんはロリコンだったのか!？」

おっさんが冗談を言った。

「ちがう!!爆弾のついた上着を脱がそうとしたんだ!!君たちも知っているだろ!!」

リーさん冗談だからね。

「スーヤン、脱がすよ。」

「ダメ!!」

・・・声だけだと逮捕案件だな。

「少しでも触ると爆発するって・・・。」

まあ、そのくらいの細工はするよな。

「・・・はあ、見せて。」

ジョンソンさんはスーヤンお嬢さんの前に座るとC4製上着を見た。

「触っちゃダメ!!」

「大丈夫、彼女は専門家だ。・・・早く脱がしてやってくれ！」  
ジョンソンさんは爆弾処理班出身なのか？

「ええ、でも慎重にやらないと。」

そういつて彼女は起爆装置の解除を始めた。その瞬間、前方から銃を撃ってくる5〜6両の車が・・・回り込まれた!?

「坊主!!回り込まれたぞ!!」

「知ってらあ!!」

今は陸橋の上を走っている。下には渋滞の車の列が見える。この時間でも渋滞かよ。ん？その渋滞の中に車を運ぶトレーラーやコンテナを運んでいるトラックが沢山いる。・・・迷っている暇はないか。  
「ジョンソンさん!!解体中止!!みんな何かにつままって!!」

俺は一気にハンドルを切った。

バキツ!!

俺達の車はガードレールを飛び越え、宙に飛んだ

「!!!うわああああ!!!」

車はうまくトラックの上に着地。そのまま無理やり前進させ、渋滞の中のトラック、トレーラー、そして乗用車の上(字のまんま)を進む。

バキバキバキ!!

「なにやってんだあ!!」

カーターさんが文句を言う。

「これ以外の方法があったら教えてください!!」

前も後ろも敵がいるんだぞ!!どうしろってんだ!!あ、ランボルギーニの車を潰した。

「ご請求はロス市警かFBI、中国大使館へお願いします・・・ってね

!!」

俺は叫んだ。

「.....始末書が大変ね。」

ジョンソンさんが他人事のように言った。・・・ロス市警の皆さんゴメンナサイ。

プルルルル

急に俺のスマホが鳴りだした。…かなめから電話!?

「もしもし!?!」

「あ、イブキにい?今私達、中国博覧会にいるんだけど、」

「中国博覧会!?!」

「ベキベキベキ!!」

絶賛、車を破壊中。むしろ俺達が捕まるんじゃないか?ええか?

「時間が空いてるなら一緒にどうかなんて?イブキにの招待状も来てたし。」

中国博覧会…:そういえばハン領事は予定通りそっちに行けって犯人に言われてたっけ?

「そっちにハン領事はいる!?!」

「え?…いるけど。」

ってことはFBIの人もいるな。

「いまからそっちに行く!!中で待って!!」

「本当!!いぶきに!!」

電話越しでもうれしそうなのが分かる。

「すぐに武装できるようにして待って!!あと民間人は避難させて!!ハン領事にお嬢さんを確保したって伝えて!!あと10分もしないで着くから!!」

ダンダンダン!!

敵は橋の上から撃ちだした。面倒な!!

「分かったよ!!あとさっきから破壊音と銃声がk…:…」

ピッ

電話を切った。

「今から中国博覧会へ行きます!!カーターさんどっち!?!」

バゴン!!

俺達の車は渋滞中の上(文字通り)を無理やり抜けて、反対車線に出た。反対車線は空いててよかったぜ!!

「そのまままっすぐだ!!」

「了解!!」

反対車線に出て数分でまた追手が来た。

「スシ坊！あそこだ!!」

目の前にガラス張りのタワーのようなビルが見えてきた。

「スシ坊はやめてください!!」

ピ。ピ。ピ。...

またスマホが鳴りだした。...かなめかあ。

「もしもし!?!」

「イブキにい？民間人の避難できたけど...」

「ああ、もう目の前だから！後正面玄関に誰も行かせないで!!」

ダンダンダンダンダン!!

敵の車の一台が回転している。誰かの撃った弾が敵の運転手に当たったらしい。

ドカーーン!!

敵の一両が建物にぶつかり爆発炎上。

「ちよ、イブキにい!!今のh」

「あ、い、今...電波が悪い...み、見たいで...」

...ピ。

俺は電話を切った。

「できたわ!!でも、まだ起爆可能よ!!」

ジョンソンさんが爆弾を解除したらしい。ジョンソンさんとリーさんは急いでスーヤンお嬢さんからC4製上着を脱がせた。

「ちよつとそれ貸せ!!」

おっさんがC4製上着を要求した。

「何に使うんだ?」

リーさんがおっさんに渡すと、

「...C4か、ビルを思い出すな。」

そう言いながら、おっさんは起爆装置をいじり始めた。

「この数どうしろってんだ!!こっちがハチの巣になっちまう!!!」

カーターさんが叫んだ。



「返品するぜ!!」

おっさんはいじっていたC4製上着を追って車に向かって投げた。

「伏せろ!!」

おっさんが言った瞬間

チユドローローン!!!

上着が爆発し、敵の車2〜3両が宙を舞った。

「…あんな威力の物をつけさせていたのか。」

「…失敗しなくてよかったわ。」

リーさんとジョンソンさんが引きながら言った。

「まるで映画だな…って、もう距離がねえ!!突入するからみんな何かに捕まれ!!」

俺は叫んだ。

ガシャーローローン!!

車は中国博覧会の正面玄関を突き破り、無理やり来場した。

「ご搭乗ありがとうございます。お降りの際は銃を携帯してお降りください。」

「坊主に運転させちやいけねえってよくわかったぜ。」

おっさんうるさい。

俺達が車から降りると、会場にいるのはハン領事とトーマス元警視長、会場スタッフとFBIの方々、俺の家族全員、それにマリーさんもいた。…なんではやてを避難させてないんですかね。

「パッパ!!」

スーヤンお嬢さんがハン領事のもとに駆け出そうとした瞬間、トーマス元警視長が銃を持ち、ハン領事に向けた。

「つい2か月前まで、ここにある美術品はある一人の所有物だった。…私だ。」

トーマス元警視長がハン領事に銃を向けながら笑顔で言った。

「私は生涯を賭け、ここにある貴重な遺産を少しずつ収集してきた。博物館のずさんな管理から遺産を守るためにね。…なのになんかたった

一晩で、私の手から奪われた。今夜は、そのお返しをさせてもらおう  
と思っていた!!」

その時、FBIの一人が腰の銃に手を伸ばした。  
ガチャチャチャ!!

会場スタッフが一斉に銃を俺達に向けた。うわあ…全員グルかよ。  
「その手を下ろせ!!この間抜け!!」

ふくよか一部スキンヘッド刑事がそう言った後、彼はゆっくりと銃  
を抜き、俺達へ構えた。

「ホイットニー、これはどういうことだ。」

ラス捜査官がふくよか一部スキンヘッド刑事を睨みながら訊ねた。  
そういえば、この刑事の名前はホイットニーっていうんだ。

「どういうことも何も…私はこのお方の部下だ。」

おう、FBIにまで潜んでたのかよ。

「私はこの優れた美術品を取り返すため、そして慰謝料をもらうため、  
綿密に計画を練っていたのだが…予想外なことにこの二人がここ  
に来るとは。不死の男!!ダイ・ハード不死の英霊!!イモータル・スピリット」

…ああん!?

ブチ!ブチ!!

何か切れた音がした。

「俺は悪くねえ!!」

「だいたいなんだあ!! たった数人で計画が倒れるって!! そんな計画建  
てる奴が悪いんだよ!!」

俺は叫んだ。

「そんなずさんな計画建てて、良く恥ずかしげもなく他人のせいにて  
きるなあ!! そもそも家族に会いに来たんだ!! こんな計画に巻き込み  
やがって!!」

おっさんも叫んだ。その時、

「ふふ、ふふふふ。フフフフフフ!!」

急に笑い声が響いた。笑い声は…かなめ!?

「へえ、そんなくだらない事のためにあたしとイブキにいの時間を  
潰したんだ! そんな非合理的なもののために!!」

みんなの視線がかなめに行った。俺はその間に「影の薄くなる技」を使いトーマス元警視長の近くに移動し、銃を持つてる腕をつかんだ。

「！！！！！！！！！！」

「あらよつとー」

俺は一本背負いの要領でトーマス元警視長を床にたたきつけ、そのままミゾオチに一発。

「グハツ！！」

トーマス元警視長は伸びてしまった。

「えつと…また時計が壊れてる。誘拐の罪で逮捕。」

俺は伸びたトーマス元警視長に手錠をかけた。…時計、もつと耐衝撃性の高いものにしたほうがいいのかな。

「！！！！！！！！！！」

「アンタらはどうすr、ツ！！」

ヒュン!!俺に向かって矢が飛んできた。飛んできた方向を見ると…ビルを爆破させた銀髪の少女だった。FBIの中にも敵は潜り込んでたんだよな。だったら逃がされるか。

「お前の名は？」

「これで三度目、名前は知っておきたい。」

「・・・セー」

リーさんが銀髪の少女の弓を蹴飛ばした。

「や、やれ!!」

敵が撃ち始めた。そうして乱戦が始まった。

乱戦は一分もしないで終わった。俺の家族全員がすぐ武装できるようにしたからな(リサはスーヤンお嬢さんと隅に隠れていたけど)。銀髪の少女(セー?)はリーさんがKOし、残りは一瞬で倒されていった。特にネロとはやてが凄かった。ネロは今までの鬱憤を晴らすかのように無双していた。そして、はやては巧みな車椅子捌き(ドリフトは当たり前)で敵の懐に入り、

「二夫多妻去勢拳!!」

ズドン!!!

そう言つて拳こぶしを股間に放つ。・・・やられた男には同情を禁じ得なかつた。

事件が終わつた次の日、やっと事件が終つて俺達は観光できる・・・はずだった。

「・・・ははは。4泊5日で2日は事件で潰れ、一日半は検査入院に書類や関係各所に謝罪とか。何のためにロスに来たんだろう。」

俺はぼやいた。

「坊主、書類と謝るのやめる代わりに損害賠償するか?額知りたいかあ?」

おっさんが脅してきた。おっさんも書類を必死に作っている。損害台数はざつと50台強。

「...黙つて作業します。」

車を何台も弁償するほどの財産はないからな...

検査入院、書類作成、関係各所への謝罪が終わつた後のロス旅行はカーターさんオスメの店で俺と家族全員、カーターさん、リーさん、ジョンソンさん、スーヤンお嬢さんにハン領事、おっさんとおっさんの家族でパーティーをやつただけだった。(なお、パーティー全額ハン領事持ち。よっ!!太っ腹!!)

「そう言えばはやて。」

「どうしたん?」

☒「一夫多妻去勢拳☒」つて言つて敵殴つてたけど、どこで覚えた?」

「タマモお姉ちゃんが私のためにアレンジしてくれたんや!!」

「...そうですか。」

羽田に着いた後、俺は家族と離れてそのままの足で兵部省へ向かつた。今回のことを報告するためだ。兵部省の階段を歩いていると

「村田大尉〜!」

煤けた矢原<sup>兄</sup> 嘉太郎<sup>者</sup>さんに会った。

「……ってことがサマワであつたんですよ。」

サモアだと思つていたらイラクのサマワに行つてしまい、現地の武装集団に襲われて来たらしい。…流石は撤退の柔らか良く生きて帰つてくれたな。

「……愁傷です。俺も……ってことがロサンゼルスであつて。」

その時、辻さんが通りかかった。

「ん?二人とも休暇に外国へ行つたと希信は聞いたぞ!!」

「二はい!!行つてまいりました!!」

「休暇はどうだ!」

「ロス(サマワ)で焼かれて(焼いて)来ました!!」

What is it good for? Absolutely  
nothing... say it again you a  
ll!!!

サッカー編 スポーツつてのもいいな……

ロスから日本へ戻った次の日、俺はキンジがオカシクなったことを知った。

「イブキ、サッカーやろうぜ！」

「……大丈夫？病院行く？」

「……なんか勘違いしてるだろ。」

なんでも、キンジは単位が足りてなかったそうだ。そこで緊急任務で、停学になったサッカー部の代わりに人を集めて出なければいけないらしい。そのサッカー部員たちはダムダム弾とロケット砲、対人地雷の密造のせいで停学になったらしい。…なんとも武偵高らしい理由だな。

「カジノの依頼で足りたんじゃなかったのか？」

キンジはカジノの依頼でギリギリ単位は足りていたはずだ。

「襲撃されたから単位が半分になったんだ。」

……それはご愁傷様。

「キンジ、人は足りてんのか？」

こいつは交友関係が狭い。最悪、11人も集まらないかもしれないかもしれない。

「…何とか集める。」

現状は足りてないな。流石にキンジが留年は悲しいものがある。

「俺も誰か声かけようか？」

サッカー大会なら爆発とか誘拐とかM関係（魔術関係という意味の隠語・海軍式）に会わないはず……はず……。

「俺の任務だし自分で人を集める。ありがとな。」

人数が集まるか不安だがそこまで言うなら……。

「わかった、頑張れよ。……あ、そういえば。」

「どうした？」

「それ普通のサッカーだよな？銃器使用OKとか超能力とか超次元とかじゃないよな!？」

まさかサッカー部の密造は試合で使うためだった!？」

「普通のサッカーだよ……病院行くか？」  
「てやんでえ!! 正常だ!!」

俺はキンジと別れ、マスターズ教務課で高天原先生にロスの報告をした。

その次の日、キンジに「サッカーの練習のため第二グラウンドに來い」と連絡があつたのでそこに向かうと……。

「……キンジ、留年おめでとう。」

「時間通りに集まつてないだけだからな。」

グラウンドにいたのはキンジ、アリア、理子、レキ、白雪、不知火、武藤の7人。俺を入れても8人しかない。

「そういえばイブキはサッカーの経験あるのか？」

「安心しろ！俺は足よりも早く手が出る。」

やったことはあるけど、素人同然だぜ!!

「……ボール蹴ってみてくれ。」

俺はリフティングをしてみると……12回で落ちた。

「お前下手だなあ〜」

武藤がからかって來た。

「野球ならある程度できるんだけどな。サッカーはあんまりだ。」

俺はそれに乗らずにスルー。野球は敵から奪つた野球ボールに偽装した手榴弾をトスバッティングの要領で敵陣に打ち込んだことがあるからそこそこできるんだが、サッカーはなあ……。

現在來ている奴らのポジションは、キンジとアリアがフォワードF、W、レキと不知火に俺がミッドフィルダーM、F、白雪と武藤がディフェンダーD、F、理子がゴールキーパーG、Kに決まつた。身長が一番でかい武藤がゴールキーパーG、Kのほうがいいんじゃないか？

「遅れてすまない。サッカーとは何なのか調べていたら手間取つてしまつてな。」

この声は……ブルマ姿のジャンヌだった。

「……いやね、君のコスプレ好きは知ってるし、いいと思いますよ。でも、まさかサッカーの練習でもコスプレをする……」

ベキツ!!

「これ以上しやべってみろ、今度は殴るぞ。」

「殴った後に言われてもなあ……。」

俺は殴られた頬を撫でながらいった。

「それにだ、これは日本の伝統的な体操着だ。文献にあったから、わざわざ特殊捜査研究科の友人に借りてきたのだぞ。」

……現在ではコスプレぐらいにしか使いません。

「いつの時代の文献を読んだんだよ……ていうかお前、この前未婚の女性は足を出すな」とか言ってただろ!？」

キンジがジャンヌを瞳に移さないようにしながら言った。

「遠山。私は、みだりにこのような服を着ているのではない。競泳なら水着、新体操ならレオタード。いかに肌が出ようと、スポーツウェアは正装として認められるのだ。」

「という名目でコスプレをしているわk……。」

バキツ!!

痛い……。

「皆様、遅れてすいません。」

「遅れちゃったかな？」

リサとエルがグラウンドに来た。

「二人もサッカーをやるのか？」

それは知らなかった。

「いえ、リサはマネージャーとして皆さんをサポートします!!」

フンツと気合を入れるリサ……ということとは

「イブキは僕とサッカーをやるのは嫌？」

エルは瞳孔が開いた瞳で俺を見ながら言った。正直不安しかありません。

「イエ、スゴク嬉シイデス。」

俺は自分の心を偽った。瞳孔が開いたエルが怖すぎる。

キンジがエルにボールを渡した。

「これをあのゴールに向かって蹴ってくれ。」

「これを蹴ればいいのかい？」

「ああ。」



エルはボールを地面に置き、そのまま軽く足を振り上げ  
「えい！」

パアアアン!!!

エルの足がボールに当たった瞬間、ボールは割れて木端微塵こっぱみじんになっ  
てしまった。

「どうだい？」

「「「「……………」」」」」

みんな引いてる。

「エル、ボールを壊さないでもう一回。」

俺はエルにボールを再度渡した。

「分かったよ。」

今度は道端の小石を小突くようにボールを蹴った。

ズドーン!!!

大砲を発射したような音が聞こえたと同時にボールは一瞬でゴー  
ルまで飛んでいき、ゴールネットを突き破り、明後日の方向へ飛んで  
行ってしまった。

「キンジ、とりあえずPK要員は決まったな。」

俺はキンジに言った。キンジは頭を抱えた。

キンジが何とか持ち直した時

ザアアア……

急につむじ風が起きた。

「…風魔……………」

キンジが呟いた。すると、つむじ風の中から手甲をし、手を忍者の  
ように印を組んだ黒髪の少女が現れた。

彼女は諜報科レサドの1年 風魔陽菜ひな。キンジの戦妹アミカだ。よく腹を空か  
せている赤貧少女で、バイトに精を出しているのを頻繁に見かける。

……これで11人にマネージャーまでついた。これで何とか試合  
はできるな。

キンジは風魔さんにボールを蹴らせようとしたところ……

ぐきゅー

「…し、師匠……任務の前に、何か兵糧を……」

そう言つて風魔さんは倒れてしまった。

「…やき、そば、パン……………」

その一言を吐いて風魔さんは力尽きた。リサが慌てて風魔さんを救護する。

「その…サッカーつてこんなに難しい競技なんだな。」

俺は不知火に愚痴った。

「…アハハ……………」

不知火も苦笑いするだけだった。

さて、まともな練習ができずに8月30日、試合当日になつてしまった。対戦相手は一般校・港南体育高校。なんでもそこは去年、都大会で優勝した強豪校らしい。しかもラフプレーも得意だそうだ。

「おいおい、かわいい子ばっかじゃねえか。」

「これは当たり前甲斐がありそうだな。」

「金髪の子プルプルしたい。」

「Eu<sup>緑</sup> que<sup>色</sup>ro<sup>の</sup> ser<sup>髪</sup> pisa<sup>の</sup> da<sup>女</sup> por<sup>の</sup> uma<sup>子</sup> garota<sup>子</sup>!!!」

「ハアハア…………ちっちゃいピンクの女の子のおみ足…………ハアハア…」

「おい、黒髪の子の写真を撮つておいてくれ!!言い値で買うから!!」

港南体育高校のチームはお揃いのユニフォームを着て武者震いをしていた。…武者震いだよね?

体操服にゼッケンをつけた俺達は陣を組み、キンジがひと言…

「いいか、俺達h:「俺達はまだキンジおもちゃに飽きてない!!一緒に進級させるぞ!!」

「…………おおー!!……………」

…いう前に武藤が号令をかけてしまった。締まらないねえ…………。

試合前半は悲惨だった。敵は女の子の胸や尻にわざと体を当ててくる。体格で対抗できる武藤は外人選手にぶつ倒されてしまい、不知

火には常に二人が守っている。一回、不知火が奇跡的に敵ゴールまで行きシュートをしたが2mぐらいある外人ゴールキーパーG Kに弾かれてしまった。結果、0対5でこっちが負けている。

リサがスポーツドリンクを配っていたが、キンジは受け取らずにフラフラと誰もいない控室へ行った。……ハア、このやり方は好きじゃないんだけどなあ。俺はキンジが向かった部屋に足を進めながら四次元倉庫から一冊の雑誌を取り出した。

「キンジ、何うなだれてんだ。」

「……わかつてるだろ。」

キンジは面倒臭そうに俺に答えた。俺はキンジの隣に座ると

「なあキンジ、勝つ確率が0から50までは上がる方法があるんだが。」

「……」

まともに聞いてないな。

「これ、どう思う?」

俺はそう言っただけ雑誌を見せた。

「ブツ!!」

キンジが吹いた後、

「……全く、こういうのが嫌いだって知ってるだろう?」

俺はキンジに雑誌エロ本を見せた。しかもメチャクチャきわどい奴を(武藤セレクト)。そのおかげでキンジは白馬の王子様モード武藤セレクトになったようだ。

「嫌いなのは知ってるが、進級を天秤かけたら嫌でもやるだろ。」

俺はそう言っただけ。

「後はよろしくな、キャプテン。」

そう言っただけ部屋を出た。

「あれ? 理子、お前なんでアリアの恰好してんの?」

「……何言ってるの?」

「とりあえずキンジは白馬の王子様モード武藤セレクトになったから色仕掛け

入らないぞ。」

「……なんでわかるの？」

「前も言ったと思うけど、お前の胸でアリアのかkk「セクハラだよ!!」」

その後、本物のアリアがキンジのいる部屋に行った。そして部屋から出てきたキンジは俺達一同を集め、二つ命令した。

・今までのポジションや理論はすべて忘れていい。

・自分らしくやれ。しかし港南高校を見習ってバレないように。

すると、俺と理子、エル以外は驚いた後、士気が高まった。キンジは何人かに個別指示を出した後、俺達は再びグラウンドに戻った。

風が少し強くなったような気がする。後半は俺達からのキックオフだ。センターサークルにはレキ、近くにエルがいる。

ピピピー!!

ホイッスルが鳴ったと同時にレキはエルに正確なパスを出した後、ズドーン!!!

エルが小突いたら、ボールは消えた。

「????」

ピー!!

ボールは敵のGゴールキーパーKごとゴールに入ったようだ。まずは1点。

「おい!!ユニカース!!」

「しっかりしろ!!!」

敵のキーパーは股間を抑えながら泡を吹いて気絶していた。それを見て慌てる敵チーム。

「さあ……今度はどこを切り落とそうか。」

エルは美しい笑顔をしながら言った。……何人もの男が股間を抑えたのは言うまでもない。

敵のキーパーが担架で運ばれていった後、港南高校のキックから始

まる。

ピッ

ホイッスルが鳴ると同時に俺、キンジ、アリア、不知火にD Fの  
武藤、G Kの理子までも敵陣へ走り出す。敵は笑いながら武偵高の  
ゴールへドリブルを…

「反撃の号砲は受け持とう……フォロー・ミー我に続け!!」

「ぐああああ!!」

急に地面から腕が出てきて敵の足を掴み、転ばせた。そこを前半で  
は動きの悪かったジャンヌが華麗な足捌きでこぼしたボールを奪う。  
それをホイッスルが鳴ってから一切動かないエルが見つめる…。

エルが最初のシュートさせた後、敵は絶対にエルへパスが回ら  
ないようにさせるだろう。なので俺はエルに一つ命令した。

「エル。」

「どうしたの?」

「次から敵がエルをマークするからボールはほとんど回ってこないと  
思う。だから、うまい具合に敵の妨害をしてほしい。」

「わかったよ。」

……あれ?妨害しろって言ったけど、この方法はヤバくない?……  
まあ、絶対にバレないけどさ。

「星伽!!」

ジャンヌの長い生足からジャンヌは白雪にパスを出す。

「行きます……えい!!」

白雪がそのパスをもらい、蹴るとボールは文字通り火の玉になり敵  
陣にいる武藤へ一気に飛んでいく

「グハッ!!」

そのボールを武藤は土手っ腹に食らい、サムズアップをしながら崩  
れていく。その崩れていく武藤の陰から理子が躍り出る。

「パスッ!!」

理子は不知火の方を向き……その逆方向に蹴る。

「ナイスパス!!!」

俺が影の薄くなる技を解き、フリーの状態で貰う。俺はホイッ

スルが鳴り敵陣へ向かう途中に影の薄くなる技を使つて潜んでいた。港南高校のメンバーは理子が前線に出ているために、誰も気づかなかつたようだ。

「お二人さんッ!!」

俺はキンジとアリアの中間の場所にボールをころがした。

「キンジッ!!」

「合わせろアリア!!」

キンジとアリアはボール目がけて左右から走り…

バシュ!!

交差しながら二人はシュートを放った。

ピーピー!!

敵 G Kは反応できず、棒立ちのままシュートが刺さった。……さ

とと、これで勢いはこつちのもんだ。

港南高校は一気に崩れた。セオリーにポジションを無視した変則的な動きに、エルによる強制転ばしと殺人シュート（文字通り）からの恐怖心……。むしろ、ここまでやって崩れなかつたら勲章物だ。

結果、キンジとアリアの交差シュートが面白いように入り、残り10分で5対4まで差を詰めた。すると港南高校はD F 5人にし、ダラダラと安全なパスばかりして徹底的に守りに入っている。……逃げ切るつもりか、べらんめえ!!

「お前たち!!それでも男か!!正々堂々勝負しろ!!」

ジャンヌは頭に来たのか敵陣に一人突っ込み、ボールを持っている選手とボールの取り合いをしている。

「クフフフ……。」

そこに理子も加勢した。すると理子の髪が不自然に動き…なるほど。俺は近くの審判とジャンヌとの直線状に立った。その瞬間

「うっ……。」

ジャンヌが思いつきり転倒した。

「ジャンヌ!!」

膝を押さえ、地面に付しているジャンヌに俺とキンジは走り近寄った。

「……うっ……くっ……。」

「ジャンヌ!! うわああああんジャンヌの足が折れたああああ!! バキッて言ったああああ!!」

「……君さ、ボールに夢中なのはわかるよ。だけど、これで一生足が動かなくなったらどうすんの? 体格差あるんだよ? その歳で責任とれるの?」

苦悶の声を上げるジャンヌに、その場にへたり込んで大泣きする理子、静かに敵選手に抗議する俺。プレーに必死だったDディフェンダー Fはボールを放って呆然とし、顔が真っ青になる。

審判は俺たち4人を見回し

ピッ

港南高校の反則とした。するとジャンヌと理子はスクッと立ち上

がり

「やったね!!」

ハイタッチをした。うん、やっぱりジャンヌはえげつない。

「イブキ。」

ん? ジャンヌが俺を呼んだ。俺はジャンヌの方を向くと……ジャンヌは俺の方へ手の平を向けていた。

「……意外だな。殴られると思った。」

パン

俺とジャンヌはハイタッチをした。

「貴様の協力もあつてできたことだ。……か、勘違いするな!!」

ジャンヌは顔をそむけた。……これがツンデレか。

「可愛いところあるじゃねえか。」

ドスッ

顔を真っ赤にしたジャンヌが審判に見えないように腹パンをした。

「貴様はいつも一言多いのだ!!」

……鳩尾みぞおちはないです。

「武偵高、フリーキックだ。」

審判がそう言うと……

「エ……エル、出番……。」

地味にダメージが残ってる……。

「イブキ、大丈夫?」

エルが心配してきた。

「大丈夫だ……問題ない。」

「それフラグ!!」

理子が何か言ってるが気にしない。

「わかったよ。」

エルはそう言っただけでボールの置いてあるところまで歩くと……

「……良い声を聞かせておくれ。」

そう言っただけで美しい笑顔を……。港南高校の選手たちは慌ててグラ

ウンドの隅に避難した。おい……キーパーも避難するんかい。

「……えっと……港南高校、それでいいの?」

審判が港南高校に聞いていった。審判さん、素が出てます。

「……ドゾドゾ!!」

港南高校の選手たちは怯えながら答えた。……うん、あのエルの

シュートの壁になりたくないのはよくわかる。

……ピッ

「えい。」

ズドーン!!!

エルは小突くように蹴ると、ボールはゴールネットを突き破り、そのまま壁に埋まってしまった。敵の選手たちは顔を真っ青にしている。まあ、これで5対5の同点、しかも残り時間は5分。このままいけば勝てるぞ。

得点が入ったので、港南高校のボールからだ

「『こつちだ!! ノールックパス!!』」

理子が敵キャプテンの声を真似し、敵は俺達にボールを渡してしま

う。それと同時に俺達全員攻撃の体制に移った。

この試合は引き分けになったら延長戦がなく、一次予選の勝ち点が多い方が勝ち上がるそう。……要は、引き分けは負けだ。



俺達は防御を明後日の方向に投げ捨て、突撃する。キンジの単位のため勝たなければならぬというのもあるが……純粹に勝ちたいんだよな。この世界に来てからこういうスポーツにはとことん縁がなかった。久しぶりにスポーツをやるんだ、どうせならば勝って終わりたい。

「イブイブ!!」

ボールを頭上に浮かした理子がオーバヘッドキックで俺にパスする。

「ナイス!!」

俺は影の薄くなる技を短時間に連続で使いながら敵を抜いていく。

「うおおおお!!」

敵の一人が俺に特攻をかけた。その瞬間、

「アリア!!」

俺はボールより前に出て踵で後ろに向かって蹴る。俺の体でも小さいアリアを隠すことは可能だ。そのままアリアはボールを受け取り、一気に左へドリブル。

「キンジ!!」

アリアのパスがキンジに届く。そのままキンジはドリブルで敵ゴールまでの突破を目指す。

「負けてたまるかああああ!!」

キンジに向かってDディフェンダー Fで港南高校のキャプテンが咆哮しながら突っ込んでいく。

キンジが港南高校のキャプテンとぶつかりそうになった時、キンジはその場で回転し、そのままキャプテンを抜いていった。

サッカーの素人である俺にでも、その技を練習なしの本番一発で成功させるキンジはすごいことがよくわかる。……だからあいつはすごいんだ。

「もううぞー」

そう言ってキンジはシュートを……大幅に外した。あ、終わった。……なんで右後ろに飛ぶんだよ。ボールの飛んで行った方向を見る

と

「忍!!」

風魔さん!? 風魔さんはボールに合わせてヘディングをし、ゴールに  
……

「おらああああ!!」

ゴールキーパー  
敵 G Kは何か反応し、ボールをはじいた。

「うかつ!!」

そう言っつて風魔さんが着地と同時に

ボン!!

地面を変な動きで踏み、砂煙を発生する。…忍者の家の秘伝の動き  
とかか?

宙に浮いたボールを一番に取ったのは俺だった。そのボールを  
オーバーヘッドシュートでゴールへ叩き込む。…あ、つま先に当  
たった。ボールは誰もいない、斜め前方へ吹っ飛んでいく。

「自分で蒔いた種は、自分で刈り取るでござるよ!!」

ボールの吹っ飛んでいく方向にある砂塵から風魔さんが急に出て  
きた。よかった、これでパスということにできる。風魔さんはノーバ  
ウンドでボールを蹴り上げた。

「師匠!! アリア殿!!」

そのボールをキンジとアリアが左右から飛び・・・ヘディング!  
ピーーーー!!

ボールがゴールの中に入り、笛が鳴った。……試合時間も終わった  
ようだ。

6対5で、都大会優勝したチームに勝った。ヒヤッハウ!! 最高だぜ  
!!!

防弾制服に帯銃・帯剣をした俺は、武偵高の第2グラウンドへ向  
かった。まだ、さっきまでの試合の興奮が冷めなかったのだろうか。

ポンポンポン……………

ボールの音が聞こえる。

「キンジか。何やってんだ?」

「ん？まあな。」

キンジが一人、何か考えながらボールを蹴っていた。

「あらよつと。」

俺はキンジに向かって走り、ボールを奪った。

「つてめえー！」

キンジは俺からボールを奪いに来る。

「武藤!!パス!!」

素人の俺ではボールの維持はできない。俺は偶然来ていた武藤にパスした。

「ナイスパス!!」

武藤はキンジからボールを守ろうと

「武藤君、後ろも警戒しないとダメだよ。」

背後から忍び寄った不知火にボールを奪われた。武藤は不知火からボールを奪い返そうと必死だ。

「不知火もな。」

俺は影の薄くなる技を使って近づき、一気に不知火から奪う。

「イブキは奪えても維持できないな。」

俺のボールをあつさり奪うキンジ。

「キンジテメエ!!」

「不知火パス！」

「させねえぞ!!」

武藤が不知火へパスが行かないようマークする……。

日が落ち黄昏時、俺達はボールを片付けた後、水道の蛇口に上半身裸になり頭から水を被った。

「うあああああゝゝゝ気持ちいゝゝゝゝ」

汗だくで火照った体に水をぶっかける快感を知らない人はいないはず。

「武藤水飛ばすんじゃねえよ!!」

武藤の水しぶきが俺に当たる。

「狭いからしょうがねえだろ!?!」

「まあまあ、村田君も武藤君も落ち着いて。」

「お前ら見苦しいぞ。」

不知火とキンジが止めにかかるが……

「うるせえ!!水も滴る良い男どもが!!」

「日頃の恨みを知りやがれ!!」

俺と武藤は蛇口に指をつけ、キンジと不知火に水をぶっかける。二人はたまらず逃げたようだ。

「はっはっはっは!!」

俺と武藤の勝利の笑い声もつかの間、キンジと不知火はホースを持ってきた。

「お、お前ら!!」

「それは卑怯だろ!?!」

「先にやったのはそっちだよ?」

「これでも喰らえ!!」

その後、俺達は別れて帰ることになった。

「全くパンツまで濡れちまったよ。」

「風邪ひくなよ。」

俺とキンジは同じ部屋なので、必然と一緒に帰ることになる……。

「……普通の高校生ってのはどうだった?」

「……。」

キンジは少し考え、重い口を開けた瞬間、横からタオルが出てきた。

「キー君、イブイブ、使って!」

フリフリの制服に着替えた理子だった。

「……そう言えば理子にお礼を言っただけじゃなかったな。」

「お礼?」

「単位のことだよ。この試合……というか任務は、お前のおかげで請け負えたんだからな。ありがとう。理子。今日は楽しかったよ。たまにはスポーツも悪くないな。」

キンジは顔を背け、理子に言った。

「……勘違いするな。あたしはお前たちとなれ合うつもりなんか、これっぽっちもない。」

理子の口調が鋭くなった。

「スポーツ？そんな下らない事どうでもいい。」

理子は俺達の前に歩き、くるつと俺達の方へ向く。

「この任務はキンジとアリアをより強く結びつけるために拾ってきた道具に過ぎないんだ。お前が3年に上がれず、アリアと疎遠になられちゃあたしが困る。あたしが倒したいアリアは、キンジというパートナーと結びついて完成する。」

「それでも、俺も今回の任務はとてもよかった。ありがとな、理子。」

俺も理子に礼を言った。軍学校卒業してからスポーツなんて無縁だと思ってたからな。理子の顔が赤くなった。

「なくに顔赤くしてるんだよ。」

俺は理子をからかった。

「う……うるさい!!」

「……ツプ」

俺とキンジは思わず吹いた。

「ちよ!!イブイブ、キー君!!これ以上はブンブンガオーだぞ!!!」

理子が俺の胸をポコポコと殴ってきた。……地味に痛い。俺は理子を無視して歩き出した。

「今日はリサが祝勝でご馳走を作ってくれるらしいから早く帰らないと。」

「ん?もうこんな時間か。」

俺とキンジは走り出した。

「待ってよ!!イブイブ!!キー君。」

たまにはこんな、武偵高

部屋に戻り、ご馳走を食べている時、キンジは携帯を見て震えだした。

「あんだ、どうしたの？」

アリアが心配そうにキンジに聞く。

「……足りない。」

「は？」

「0.1単位足りない!!」

……なんでも、俺から風魔さんへの最後のパスがオフサイドだったらしい。試合の後、港南高校の猛抗議により、最後の1点が消され5対5に。結果、一次予選で勝ち点が多い港南高校の勝ちになってしまったらしい。

「嘘だろ!!!」

……俺達らしいっちゃらしいな。

ガールズ&パンツァー

畑違いなんですけど……

8月31日、俺はある依頼を軍から受けたため、武藤の操縦するヘリに乗って移動していた。

サッカーの試合の二日前、サッカーの練習の休憩中に電話がかかってきた。相手は……辻さん!?

「もしもし。」

「はい!村田です!!」

「村田大尉!息災か!」

「はっ!ロスでの傷も癒え、元気いっぱいです!!」

「そうか!!……これは希信からの個人的な依頼なのだが、」

意外なことに、あの辻さんが口ごもった。そんなに危険な任務なのか?……いや、それなら辻さんは嬉々としてるな。

「……どんな内容ですか?」

「……希信は村田大尉にある学校へ行き、戦車道を教えてほしいのだ。」

「……え?」

『戦車道……かつては華道・茶道と並び称されるほどの伝統的な文化であり、世界中で女子の嗜みとして受け継がれてきた。礼節のある、淑やかで慎ましく、凛々しい婦女子を育成することを目指した武芸。そのなりたちは、日本では馬場馬場馬場馬場 欧州では馬場馬場馬場馬場であるという説がある』ということになっているが、実際は全く違う。

戦後、軍縮のせいで予算と人員が不足した陸軍が苦肉の策としてできたのが戦車道だ。

(第一次世界大戦後のドイツの

「これトラクターだから!!戦力じゃないから!!」

というのを参考に

「これスポーツだから!!戦力じゃないから!!」  
ということをしたらしい。」

なので、初期は男子が圧倒的に多かった。しかし、ある時~~〇〇~~過激な~~〇〇~~女権団体と結びついてしまい、男子選手が消え、女子の嗜みとなつてしまった。そのことで陸軍はブチギレ、資金援助など一切断つた。だが~~〇〇~~捨てる神あれば拾う神あり~~〇〇~~今度は文部科学省と国土交通省がバツクに着いた。(開発の理由に戦車道で街がぶつ壊されたから……つていい理由!!)しかし、維持費に弾薬費、試合中の大量破壊による住民への賠償などの莫大な資金がメリツトに合わない……などの問題で、近年お払い箱になってきている。そんな色々な問題を併せ持つのが戦車道だ。

でもさ、俺、海軍出身だよな……。

「あの……俺は海軍出身で、戦車戦は畑違いなんですけど……。」

確かに、戦車は操縦できない事はないけどさ……。

「希信も分かっているが……富士総合火力演習及び富士総合特種演習<sup>演</sup>で希信の信用している部隊は忙しい!希信自身もまた海外任務が入った!……だが!!希信の可愛い姪と西の娘の願いは聞いてやりた!!!!そこで!!今フリーである村田大尉を希信は指名した。」

西さんとは、辻さんの同期だそうだ。

「教導隊広報部は使わないんですか?」

富士学校富士教導団教導隊広報部とは日本で唯一戦車道を教える部隊だ。ついでに俺の親父が設立したらしい。

「あそこは信用ならん!!」

「そうですか。」

辻さんは教導隊広報部となんかあったのか?

「希信の頼みを……聞いてくれるか?」

「条件付きなら……。」

俺の提示した条件は

・人数及び人員はこつちで選ぶ。



- ・教えるのは8月31日だけ。
  - ・武偵高の単位が付くこと
- この三つだ。

「わかった!!早速希信が武偵高へ申請しておこう!!」  
ガチャッ!!ツーツーツー

俺はさっそく武藤へこの話を持って行った。

「8月31日?夏休み最後の日くらい休ませろよ。」

「残念だ武藤、戦車道は女の子が沢山なのに……。」

「イブキ様!!喜んでやらせていただきます!!」

まずは操縦手を確保。

次は砲手を確保すべくレキに話を持って行った

「すいません、その日は予定があります。」

「わかった。悪かったな。」

「いえ。」

……続かねえ。

その他不知火、理子、アリア、キンジ、ジャンヌに聞いたが断られてしまった。結局……

「おお!!これが☒☒へり☒☒というものか!!見よイブキ!!空を飛んでおるぞ!!」

「あ、主殿……高すぎませんか?」

飛んでいることに興奮するネロと高所恐怖症気味の牛若、

「え……あ、む……むら……。」

それに、偶然空いていた中空知さんの計5人。その5人は辻さんから送られた陸軍の軍服を着てへりで移動中……メチャクチャ心配です。そういえば、学園艦って日本だよな。学園艦に着いた瞬間から事件に巻き込まれるってことないよな。

「あと五分で着くぞー!」

やけにテンションが高い武藤が言う。

改めて、今回人選誤ったかなあ……。

三段空母の時の赤城に似ている船にヘリが着艦し、俺達が下りると二人の少女がヘリに近づいてきた。

「こんにちは、辻大佐の依頼により戦車道の一日コーチとなりました村田大尉です。」

なお、海軍出身です……とは言わない。……陸軍の軍服は初めて着たから違和感しかない。

「私は知波単学園戦車道隊長、辻つつじであります！こちらは副隊長の西絹代であります。」

長い黒髪をオールバックにして、額に一房の髪がくるんと巻かれたメガネの少女がいった。

「西絹代です!!」

長い黒髪でナイスバディな少女が元気よく答えた。

少女二人が敬礼したので俺も返礼をする。……あ、海軍式で返礼しちゃった。

「今回、大尉殿に来てもらった理由は……」

なんでも、この学校の戦車道の部員は『猪突猛進で堪え性の無い者が多く、時には各自で勝手な判断で突撃に走ってしまうという悪癖がある』そうだ。それを何とか克服し、次回の第63回全国戦車道高校生全国大会で勝利したいと考えているそうだ。……要は意識改革か。いや、よかった。戦車戦の戦術なんて知らないからな。意識改革なら俺にでもできる。だから辻さんは俺に振ったのか。

「分かりました。ではまず、実際の練習を見せてもらってもよろしいですか？」

「はっ!!こちらであります!!」

つつじさん（辻さんじゃ間違えるから）が案内してくれるそうだ。

「おい武藤。」

俺は武藤を小突く

「あんまり鼻の下伸ばすなよ……。」

「悪い悪い。」

武藤は西さんの胸をガン見していた。

「お前らも行くぞ!!」

あちこち見て回るネロ、やつとヘリから降りたことに安堵する牛若、なんもないところですつころぶ中空知さん……こいつら連れてこなくてよかったじゃん!!!

練習を見て思ったことは、一人ひとりの速度が高いことだ。流石に富士教導隊や北鎮師団、北海道の戦車部隊近衛師団の戦車兵に比べれば大人と子供の差だが、下手な戦車兵よりは断然うまい。……が、なんでかさつきから突撃の練習しかしていない。

「いったん集合してください。」

「はっ総員集合!!総員集合!!」

西さんが九七式中戦車についているマイクで伝える。

「武藤、そろそろまじめな顔をしてくれ。」

「おっと。」

ついでにネロと牛若は好きなようにさせている。面倒ごととは減らしておくべきだ。

今練習をしていた全戦車が集まり、乗員が俺たちの目の前で整列した。

「ひっ……!!」

「中空知さん、怖かったら後ろにいていいからね。」

なんかもごもごと中空知さんが言っているが、今回ばかりは無視させてもらおう。

「皆さん、軍から派遣されました村田大尉です。皆さんに戦車道を今日一日教えることになりました。よろしくお願いします。」

「総員敬礼!!」

ザツ!!

つつじさんの号令で全員が俺に向かって敬礼した。俺も条件反射で返礼を……また海軍式でやつちまった。

「今の練習を見ましたが……なぜ突撃練習ばかりなのでしょうか。あ

なたたちの戦車は他の学校の戦車に比べれば貧弱です。まともにならば一瞬で溶かされるでしょう。これらの戦車を使うなら待ち伏せ、隠蔽……これらは必須のはず。武藤、九七式に九五式は特段機動力に優れているわけではないですよね。」

俺はデレデレしている武藤に話を振った。

「あ、ああ。九五式なら機動力は悪くはないが、特段いいってわけではないな。」

まじめな顔に戻し、解説をしてくれた。

「何故、突撃の練習ばかりなのでしょうか？」

俺は質問を投げかけた。

「知波単魂であります!!」

「突撃はわが校の伝統であります!!」

やっぱりこう来るか。

「突撃して潔く散るためであります!!」

……あ？

「潔く散るのが本校の伝統であります!!」

「散ることが本懐であるからであります!!」

……ああ、陸軍で一般から戦車兵になった兵と、戦車道から戦車兵になった兵には溝があるってのは聞いたことがあつたけどこういう事か。こいつら、負けⅡ死つて思つてないからそんなふざけたこと考えられるのか。……まあ、スポーツだからそこまで考えなくてもいいんだろうけどさ。今回の任務は意識改革だし……大丈夫だよな。

……利根川さん、オラに力を分けてくれ!!

「てやんでえ!!ぶち殺すぞ、べらんめえ!!」

シューーン

俺は魔力を使い、威圧しながら言った。

「貴様らは勝負における本質を見失っている!!おまえらは負けてばかりいるから、勝つ事の本当の意味が分かっていないⅡⅡ勝つたらいいなⅡⅡくらいにしか考えてこなかった!!だから呐喊とっかんばかりし、負けることも是としたのだ!!いいか!!本来なら負けたら死ぬんだ!!死ぬなんていい方だ!!鉄の棺の中で腕や足がもげ、胴体を鉄片でズタズタにさ

れ、脳や腸をぶちまける!!これが本来の戦車戦だ!!」

知波単の生徒は顔を青ざめる。リアルに想像したのだろう。

「だから、今!!知波単は弱小校になり下がったんだ!!わかるか!?

☒勝ったらしいな☒じゃない!!☒勝たなきやダメ☒なんだ!!」

全員の目に火がともったような気がした。

「何故知波単で呐喊とっかんが持て囃されたかわかるか!?知波単魂?そんなもの狗に食わせる!!何故持て囃されたか……言うまでもない、ただその戦術で勝ったからだ!!勝てたから持て囃され!!その指揮官に兵は称賛されているんだ!!」

武藤が白い目で見てきた。……うん、そろそろ恥ずかしくなってきた。

「それらに比べお前らはどうだ!!あまりにも幼稚な呐喊とっかんだ!!否、呐喊とっかんとすらいえない!!本来の呐喊とっかんは

敵にその瞬間まで悟らせず!!

終わった後、一切の被害がなく!!

全弾貫通しなければならぬ!!」

ここまで言えばもう呐喊とっかんはしないだろう。俺はコインを出し、親指で宙へ飛ばした。皆の視線はコインへ行く。その瞬間に☒影の薄くなる技☒で集団のご真ん中に行き、それを解く。

「「「「「!!」」」」」

「今の技ができて、初めて呐喊とっかんが許されるのだ!!」

そろそろ終わりにしないと……俺の精神が終わる。

「貴様ら!!今まで突撃の真似事をし、戦車戦とまともに向き合わなかった負け組ども!!もう心に刻まなきやいけない!!勝つことが全てだ!!」

勝たなきやゴミ!!

勝たなきやクズ!!

1位以外はすべてビリと同じ!!

勝たなければ!!

勝たなければ!!

勝たなければ!!!」

最初は静寂が彼女たちの中を支配していたが、今は『勝つぞ!!』コールがやばい。

「勝つぞ!!」

「勝つてやる!!」

「今の技を絶対に覚えて唸喊とっかんで勝つぞ!!」

……この子達、将来詐欺とか簡単に引つかかりそうだな。俺はそろそろつらくなつたのでその場を離れた。

「武藤軍曹（仮）、車両の隠し方とか動かし方はよろしく。手取り足取り教えられるぞ。」

「おう!!任せとけ!!……お前あの演説はk」

「それ以上言うな。感情の赴くままやっちゃまったんだ。……あとはよろしくな。」

そう言つて俺は武藤から離れ、中空知さんの頭に紙袋をかぶせた。

「これなら緊張せずにしゃべれるでしょ。」

「すいません。ありがとうございます。」

「それじゃあ、通信のことについてレクチャーお願い。……可愛いのに顔隠すのはもったいないな。」

「むむむむむ村田く、村田君!そそそれ、ほほほほんと「後は自信持てばモテモテだぞ」ツツツツツ!!」

これでキンジにもアプローチできるようになるだろう。ツケ、結局は主人公か。俺はそう思いながらどこかに行つたネロと牛若を探そうと……

「村田大尉!!」

つつじさんと西さんが声をかけてきた。

「私!感動しました!!勝つという事を忘れておりました!!」

つつじさんが敬礼しながら言った。……辻さん、あんたの姪が心配です。

「……あ、うん。ほどほどにね。」

「自分もただただ唸喊とっかんだけしか考えておりませんでした!!これから勝利のためにさらに技術を磨いていきます!!」

「……うん、頑張つてね。」

俺はそう言ってネロと牛若を探し、指揮官候補生たちに作戦立案の方法を教えた。

翌年の第63回全国戦車道高校生全国大会において、知波単学園は優勝候補の筆頭・黒森峰女学園と一回戦で当たり負けた。しかし、パンターやティーガー・ティーガーIIを含む黒森峰10両のうち、7両を決勝まで出場困難な状態にさせ、2両を修理不可能の状態に持って行った。そして、その試合のフラッグ車である黒森峰女学園副隊長・逸見エリカの乗機~~XXXX~~ティーガーII~~XX~~を半壊させた。

『知波単学園侮りがたし』とさせ、再び強豪校の仲間入りをさせた辻つつじ隊長、西絹代副隊長、そして知波単学園の戦車道を改造した立役者・村田某を知波単学園の生徒たちが崇拜し、他校はその三人に注目するようになったのは言うまでもない。

「いや!!俺海軍出身だから!!あの時はただ感情的になってただけだから!!」

辻希信は村田イブキ大尉に告げた任務を東京武偵高へ申請した後、東京のとある料亭に向かった。

辻希信は苦虫を潰したような顔で料亭に入り、ある部屋に案内された。

「廉太！希信は料亭が嫌いというのは知っているだろう?!」

「希信兄さん、遅かったね。……下手なレストラんだと聞き耳されるからさ。我慢してよ。」

その部屋には、七三分けでメガネをかけた青年がいた。

「軍の寮舎を使えばいい!!」

「下手な役人が入れるわけないでしょ。」

「ム……。」

辻希信は不満そうに席に座った。

「廉太、本当に生贄になるつもりか？戦車道と学園艦のためだけに?」

「希信兄さんも分かっているでしょ？戦車道と学園艦の横暴さに。」

「知っている……知っているが!!なぜ廉太が生贄にならねばならん!!」

「……疲れたんだよ。『戦車道の試合のためだから』そう言って多額な住民への賠償金に膨大な維持費や弾薬を請求し、懐に収める戦車道。バブルの時に勝手に作って維持費が大変だからって国から多額な支援をしているのにもかかわらず、生徒達にまともな教育をしない学園艦。」

七三分けメガネは感情を押し殺すように言った。

「希信兄さん知ってるかい？金がないからって生徒に大々的に商売させるどころか、テントで寝させる艦まであるんだ。あんな大量にもらっているのだ!!『生徒の自主独立心を養い高度な学生自治を行う』そんなので育つか!!」

七三分けメガネはハッと我に返ると、再びトーンを落としていった。

「それに戦車道や学園艦と癒着する企業や政治家……僕はもう……疲れただ。だから生贄に志願した。」

「廉太、本当にそれでいいのか?」



辻希信が七三分けメガネに聞いた。

「うん、それに実家の炭焼きも誰かが継がないといけないうし。」

そうやって七三分けメガネがビールを辻正信に注ぎ、その後手酌をして飲み干した。

「戦車道のプロリーグを作る噂も僕が作ったんだ。戦車道や学園艦と癒着している政治家や企業のための誘蛾灯としてさ。このままいけば汚職が発覚、今後十年から二十年は戦車道のプロリーグを作るなんてことはできなくなる。」

辻正信が七三分けメガネのコップにビールを注いだ。

「廉太、この希信が聞く。本当にいいんだな？」

辻希信がギロリと七三分けメガネを見た。心の奥底まで見逃さないように……

「ああ、僕の国家公務員人生全てを賭けて、戦車道と学園艦を潰す。」

## 閑話：高校生活夏休み編

1：粉雪と俺と武偵

俺が戦車道の任務を受けた翌日、

「ただいまあ〜……。」

任務の人数を必死で集めたり、矢原嘉太郎やわらかたろう伍長から戦車戦のことに  
ついて教わって帰るのが遅くなった。

「違います。私は武偵高なんて大っ嫌いです。ここはお姉さまが星伽  
を出る原因となり、お兄ちゃんを何度も怪我を、挙句の果てには瀕死  
の怪我をさせた場所ですから。」

俺はリビングに入るとキンジと白雪、リサとTVを見ている粉雪が  
いた。……あれ？粉雪が何でここに？

「え……粉雪か？いやあ……大きくなったなあ、中三だっけか。」

ついでに美少女になってまあ……。

「お兄ちゃん!!」

粉雪が俺に抱き着いてきた。

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん!!」

粉雪は俺を呼びながら頭を腹に擦り付けてくる。しばらくそうし  
ていると、満足したのだろうか粉雪は離れた。そしてトロンとした顔  
を凛々しい顔に戻し

「お兄ちゃん!!正座!!」

「……え?」

「…お兄ちゃん、危ない真似はしないって言いましたよね。」

危ない真似はしないようにするって言ったような気が……。」

「……SE・I・ZAしてください。」

「ハイ……。」

瞳孔が開いた眼で脅されれば、誰だって言いなりになると思うん  
だ。

「お兄ちゃん!!何回危ない目に合ったんですか!!」

「……いつから数えてですか。」

……多すぎて何時からかを言ってくれないと分からねえ。

「武偵高に入ってからです!!」

……事件数を考えよう、そうしないとメチャクチャ多くなる。理子、ジャンヌ、ブラド、シャーロックで4つ。夏休みの2つを合わせて6つ……。多すぎねえか!?

「6回です……。」

「お兄ちゃん!!もつと危ない目に合ってるのは知ってるんですよ!!どれだけ心配したと……。」

それから粉雪の説教が始まった。俺は正座のまま延々と続く説教を聞いていた。

「……私が、お兄ちゃんが死んだって聞いた時どう思ったかわかりますか!？」

「……スイマセン。」

粉雪の目には涙が溜まっていた。……悪いのはわかってます、心配なのも分かっています。でも、俺は巻き込まれた場合が多いような気が……

「お兄ちゃん!!わかりましたか!？」

「……ハイ。」

ようやく説教が終わった。ああ……今日は疲れたな。家に帰りたい……ここじゃない!

「あの、キンちゃん、イブキ君。」

粉雪の説教が終わり、TVを見始めた粉雪を尻目に白雪が小声で話しかけてきた。

「粉雪は星伽の伝言を届けに来ててね……できそうなら私とイブキ君を武偵高から連れ出そうとしているみたいなの。だから武偵高ってどんなお仕事なのか……少なくとも悪い物じゃないってあの子に理解してもらった方が……ご、ゴメンねキンちゃん。私情も含めちゃって……。」

うん、ちよつと待とうか。

「白雪、なんで俺を連れ戻そうと?」

何で俺を連れ戻す?星伽に軍へ介入できる力でもあるのか?

「あれ?イブキ君は聞いてないの?イブキ君は粉雪と……」

「お兄ちゃん!!こつちに来てください!!」

俺は白雪から重要な部分を聞けず、粉雪に手を引かれてソファへ連れて行かれた。

「座ってくださいー!」

「はあ……」

俺はおとなしくソファに座った。俺の横に粉雪が座り、俺の腕に抱き着いた。

「こ、これは私を心配した罰なんですからね!!」

……顔お真っ赤にさせてTVを見ながら粉雪は言った。久しぶりに会った妹分だ、わがままには付き合おう。

「……粉雪、明日の午前中、付き合ってもらうぞ。」

武偵高の見学だっけか。

「ハイ……これはお姉さまのご命令ですから。私はお姉さまのご命令にはなんでも従います……が、条件があります。」

白雪が目を見開いた。

「お兄ちゃんも一緒じゃないと嫌です!」

……。キンジが俺を見た。……シヨウガナイ。

「俺も行く。これでいいか粉雪?」

「はい!!」

そう言えば白雪は何と言おうとしたんだろうか。

さて、武偵高校の施設はとても充実している。下手な軍学校より断然いい。もともと羽田国際空港の増設予定滑走路であった人工浮島のため面積はかなり大きい。その広大な面積に武偵庁や武偵企業からの援助があるからだ。……全く、羨ましい限りで。

例えば車ロ輛料ジだと15歳から普通免許が取得でき、情報科インフォルマ・通信科コネットだと最新のPCや携帯端末などを支給してくれるそうで……。

そういう事で、武偵高を見学した中学生は普通、気に入ってくれるそうさ。しかし……粉雪は不機嫌だった。超能力捜査研究科スは白雪が所属のためか多少興味を持っていたようだが、その他の学科は不機

嫌のまま……キンジをずっと睨んでいた。……まあ、粉雪はキンジじゃなくて俺に懐いていたからこうなのかもしれない。

「お兄ちゃん!」

「どうした?」

「次はお兄ちゃんの学科ですね!」

「……うん、そうだね。」

俺達が向かうのは、我らがキンジの古巣にて俺の所属させられた学科・強襲科だ。ここに所属する生徒は血の気が多いから気を付けないと……。

強襲科アサルトの黒い体育館のような訓練施設の前に着いた。

「粉雪、ここは薬莢がゴロゴロ落ちてるから足元気を付けて。結構な人数がこれで転ぶんだ。」

俺は粉雪に注意した。

「わかりました!」

そう言っただけ施設に入ると……

ガシツ バキツ ドカツ

「この野郎死にやがれ!!」

「てめえこそ死ね!!」

「そいつをよこせ!!」

5人ほどの1年坊主が軽装備で殴り合っていた。……水着写真集の取り合いでこうなっているようだ。

「……。」

粉雪は……ゴミを見るような目とはこんなこと言うんだなあ……。

俺はその集団に近づき

ダンドンダン!!!

14年式を天井に向かって発砲した。1年達は俺を確認し、急いで喧嘩をやめた。

「よお一年、随分元気が有り余ってるようだな。」

「す、スイマセン!!村田先輩!!」

坊主頭の一人が謝った。

「……スイマセン!!」

「いやいや、俺もこういうのは元気があっていいと思う。俺は否定しないさ。でも、今入学希望者の見学が入った。見えないところでやれ、いいな?」

「二二「ハイ!!!」」」

「総員駆け足!!始め!!」

脱兎の如く一年は施設を走って出ていった。俺は二人の元へ戻り「じゃ、見学開始しますか。」

夏休みで誰もいないため、見学はスムーズに終わった。映画の撮影所のような実物大の突入訓練室に、動物的のある射撃場、座学室では射撃に関する初歩理論をキンジがレクチャーした。

しかし粉雪は無関心、座学中でも俺にしゃべりかける。

「……以上で見学は終了だ。他に見たいところはるか?」

俺達は藁莖を踏まないように廊下を歩いていた。

「いいえ、もう充分です。」

粉雪は横に首を振りながら言った。

「武偵高がいかにも乱暴かわかりましたから。」

「……乱暴なのは否定できないけど、まあ暴力的でない学科もあつただろ?」

俺は一応この学校のフォローをした。

「いいえ、彼らも同じ穴のむじなです。そもそも、金銭のために武力を用いるという行為が卑しいものですし。清廉たるべきお姉さまとお兄ちゃんがそのような場所にいるなんて……私には耐えがたいことです!!」

うー……。確かに、分からないこともない。でも、今の時代で完全に無償で働くのはあまりいないわけ……。というか、近代の戦争は経済的な理由があることが多いわけで……。

「逆に考えてみるよ、粉雪。供給の逆には需要がある。金を払ってでも解決したい問題を抱えている人が、今の日本は増えているんだ。通り魔や強殺、ストーカーや窃盗と言った犯罪は増える一方だし、警察は人手不足だろ?だから世の中には武偵が必要n……。」

「逆に考えるべきは遠山様です!!」

キンジと粉雪が喧嘩を始めた。

「そんな問題に巻きk……。」

「お前ら落ち着けて。確かにどっちも正しい。巻き込まれないようにするのは当たり前だし、そうしていても事件に巻き込まれる。それでいいj……。」

「お兄ちゃん!!そんな事はどうでもいいのです!!とにかく私は!!武偵高が!!武偵が大っ嫌いなのです!!武偵高のせいでお姉さまは星伽を出て行ってしまい!!お兄ちゃんを危険な目に合わせて!!」

……ゴメン、武偵高でも軍でも危険と隣り合わせなんだ。まあ、頻度は多少上がったけどさ。

「粉雪、いったん帰ろう。ここは議論する場所じゃない。」

俺は移動を提案した。

「そうだな……忘れ物はないな?空葉莢に気をつけろよ。また救護科アンビュラスを見学する羽目になるからな。」

すると、粉雪は襟元を整え、雰囲気を変えた。

「はい……では、遠山様、お兄ちゃん。お仕事が終わったようですので、お伝えしたいことがあります。」

「……どうした?急に。」

「なんだよ。」

「実は昨夜、お二人についての~~託~~たく託が降りました。星伽の巫女の義務で、一昼夜のうちにお伝えしなければならぬ事になりますから……少々唐突ですが、今お伝えします。」

「……吉兆の一種だっけか?」

俺は昔、星伽神社で小っちゃい頃の粉雪がたどたどしく言っていたのを思い出した。

「そうです。」

そういった後、粉雪はすごく、すつごく嫌そうな顔をした。

「遠山様は今月中に求婚されます。」

「だ、誰にだよ。」

俺達は思わず聞き返した。

「知りません。ただ、間違ってもお姉さまではありません。それは確  
実です。」

「知りませんってお前無責任だn……」まあまあ。で、俺はどうだい  
?」

喧嘩の芽は早めに摘むのが一番だ。

「お、お兄ちゃんは……」

粉雪が顔を真っ赤にした。

「変態に会います。」

……

「へ、変態に会う?」

「……ハイ。正確にはさせてしまうというのがあってるかも……。」

……調教!?

「……お前そんな趣味があて……」ねえよ!!!」

……まあ、変態に会うのはあり得るとしても、させるってどうい  
うことだよ。

「今日は疲れたし帰ろう……うん。」

俺は足早に帰ることにした。

「お、お兄ちゃん、まってくだs……」

ズルッ

ドンッ

ベキッ

「ツ~~~~~!!!」

粉雪が藁莖を踏んで転び、そのまま俺の背中にぶつかつた。俺と粉  
雪はそのまま倒れ、俺の鼻と額は床に勢いよくキスすることになつ  
た。

「お、お兄ちゃん!!!大丈夫!!」

俺は粉雪に部屋で手当をしてもらった後、辻さんから送られてきた  
軍服の試着や、今までであったことを粉雪に話していると白雪が帰って



きた。

「お姉さま!!おかえりなさい!!」

そう言っつて白雪に張り付く粉雪。……ちよつと度が過ぎてるような気がしないでもないけど、仲良きことはいいことだ。

さて、白雪・粉雪・リサの飯を食べた後、粉雪は8時までには寝ないのは不衛生だと言っつて俺らを寝室に追いやった。キンジは諦めてベットに潜り、俺はシャーロックからもらった青と金で装飾された両刃剣を調べていた。

試しにその剣に魔力を通してみると発光することが分かり、以後その剣は懐中電灯代わりに使われていくことが多くなるが、そのことは割愛する。

剣のことが分かり、ベッドに潜っつてウトウトしていると

ポスツ

何かやわらかいものが倒れたような音が聞こえる。俺はそのそと起きてリビングを見ると、粉雪と目が合った。

「ツ~~~~~~~~!!!」

ファツションに疎い俺でもわかるほど、粉雪はおしゃれをして廊下に向かうところだった。

「粉雪。」

「……ハイ。」

「リビングで待っつて、着替えてくる。」

「え?」

俺は自室に行っつて着替えを始めた。……そうだな。俺の私服じゃ粉雪と釣り合わないし、たまにはこいつを着るか。

第二種軍装に着替えた俺はリビングへ戻った。そこにはソファ

に座ってうつむいている粉雪がいた。

「粉雪、明日帰るんだろ？」

「……ハイ。」

「じゃあ、今晚付き合ってもらえるか？実は東京のことをあまり知らなくてな。私服もTシャツとズボンぐらいしかない。……一緒に東京散策にでも行かないか？」

「……!?はい!!お兄ちゃん!!」

俺は粉雪を連れて夜の東京へ出た。

粉雪に切符の買い方を教え、モノレールに乗った。粉雪曰く、行先はお台場。

お台場に着くと粉雪は大量の付箋が付いたタウンガイドを出し、

「お兄ちゃん!!こっち!!」

俺の手を握りながら歩き出す。……背後からキンジと白雪の気配を感じる、心配だから来たのか？

「そんなに急ぐと転ぶぞ。」

俺はそう言いながらついていくことにした。

粉雪が向かったのは☒ウイーンスフード☒という女性向けのショッピングテーパークらしい。粉雪に連れられて来て初めて知ったよ。

粉雪は雑貨、靴屋、服屋などで大量の紙袋を量産した。……本来だったら奢ってあげるところなんだろうけど、額と数がね。銀行の武器用の口座を抜いた俺の全財産より粉雪の財布の中のほうが数倍も多かったし……。

俺は粉雪の大量の紙袋を持ち歩いた。すると、粉雪は休憩がてら洒落たオーブンカフェに入った。そこで粉雪は小さな塔のようなパフェを注文した。

「おいし〜〜!!」

「それはよかった。」

粉雪がパフェを食べて、ふにゆ〜つとした笑顔で両手で頬を抑える。うん、可愛い。俺はそう思いながら紅茶を啜る。

「お兄ちゃん!! あーん」

「え?」

「あくん!」

「……あくん」

うん、甘い。そういえばパフェを食べたのは何年ぶりだっただろうか。そう思いながら顔を真っ赤にする粉雪を見る。照れ隠しなのかパフェをパクパクと食べていく。……たまには、こんな風に癒されるのもいいなあ。紅茶はぬるくなっていた。

カフェの代金くらい俺に払わせてくれ。いいからいいから外に出て。……こんなにするのか。

そろそろ終電が近いので帰ることにした。自由の女神像を經由し、ホテル日航を回り込むように台場駅へ向かうそうさ。……こんながあったのか。俺はそう思いながら粉雪を見た。

「お兄ちゃん! 今日はとても楽しかったです!!」

「それはよかった。」

俺は大量の荷物を持ちながら粉雪に微笑んだ。始めて会った頃に比べて、粉雪はだいぶ成長した。粉雪は潮風に美しい黒髪をなびかせながら、名残惜しそうに東京の夜景を見ている。……彼女はもう、始めて会った頃の彼女ではないことを実感させられた。時が経つのも早いものだ。

「お兄ちゃん。」

「どうした?」

「……花火の時のこと、覚えていますか?」

「リヤカーに姉妹乗っけて行ったな。」

「私……今でも覚えてます、あの時の事。」

「あの後、別れるのが嫌で泣いていた粉雪も覚えてるぞ。」

「ちよ!! 忘れてください!!」

「てやんでい、あんなかわいい頃の事を忘れてたまるか!」

「……そういえばお兄ちゃん。」

「なんだ？」

「冗談はもうやめておこう。」

「星伽とお兄ちゃんの両親との約束って知っていますか？」

「……ごめん。分からない。二人とも死んじまつたし。」

「星伽が軍に協力する見返りに村田家から一人m……。」

「こんばんはー!! いっぱい買い物したねえ? お二人さん!!」

前方から6〜7人程度の団体（大学生か?）が声をかけてきた。

……大事な話をするときに邪魔すんじゃないよ。

「ちよつと悪いんだけどお金貸してくんない?」

「君可愛いね。こんな奴おいて一緒に遊ばない?」

おいおい、軍服姿の人間が隣にいるのにこんなことやるのかよ

……。あ、荷物のせいで軍服が見えないのか。

「の、退きなさい!! 星伽の巫女は悪従の威迫には応じません!!」

粉雪がキツと睨むと、男たちは一気に態度を急変し

「ああ!？」

「犯すぞおらあ!!」

「日本語しゃべれやクソガキ!!」

「ツヒ!!」

ハア……なんでこんな奴らに合わなきゃいけないんだ。そう思いながら俺は荷物を地面に置いた。

「おまえら、これ以上にしないとつ捕まえるぞ。」

「ツ!!」

やつとどんな奴に喧嘩を売ったのか分かったのだろう。……なん  
で向こうは拳銃を持つてるんだよ。ガラの悪い男たちの一人に銃を  
持った者がいた。あれはトカレフ系統の拳銃だ。劣化コピーもあり  
得る面倒な奴だな。

「その銃寄越してさっさと失せろ。お前ら捕まえて警察に突き出すの  
は面倒なんだ。」

終電に間に合わなくなるからな。俺は銃を持った男に近づくと

「それ!」

リーさん直伝、~~拳銃奪い~~（仮）~~で~~その銃（純正トカレフじゃな

いな)を奪った。

「……そ、それはやる。う、撃つなよ!!」

そう言つて男たちは逃げ出した。……こいつどうしよう。俺はとりあえず□□四次元倉庫□□にそのトカレフモドキを投げ入れた。

「お、お兄ちゃん……。」

粉雪は地面にフラフラとしゃがみこんだ。

「大丈夫だったか?」

俺は粉雪の頭をなでながら後ろの茂みと電柱の上を見た。やはり茂みにはキンジが、電柱には白雪がいた。俺は二人に目配せをした。「要人警護はともかく、民間人を危険から未然に防ぐことは警察にはできない。お役所だからね。だから、武偵も一概に悪くはないと思う。」

俺はそう言つて粉雪を立たせ、モノレールへ向かった。

そういえば、白雪は巫女服だったけど、あんなどこにいてパンツは見られないのだろうか?

「お兄ちゃん!!ほかの女の人のこと考えてたでしょ!!」

「え?……いや、巫女服って動き制限されるよなつて。」

「??」

嘘はついてない。

翌朝、俺とキンジの部屋に星伽の運転手のお姉さんが来た。すると粉雪は風呂敷包みを運転手に渡した後、廊下で正座し三つ指をついた。

「逗留中、何から何までお世話になりました。お兄ちゃん、お姉さま、遠山様、ごきげんよう……。」

締めまりが悪いので車まで見送ることにした。一階につくと、粉雪がキンジに話しかけた。

「遠山様、一つお謝りしたいことがあります。」

「謝る?」

「はい。私は武偵高と武偵を侮辱するようなことを言いました。」  
「あ、ああ。」

「でも、その……昨夜、私は認識を改めました。まだ好きに離れませんが……今の世の中では、このような仕事も必要になってきているのではないかと。」

昨日の件でわかったのかな。

「……そうか。まあ気が向いたらまた見学に来いよ。」

「はい、また来ます。今度は本当の☒学校見学☒に……。」

「本当の？」

ん？もしかして……。

「はい、お姉さまは結局、星伽に帰る御意思はないとおっしゃり、お兄ちゃんも星伽に来てくれそうにないので……私、逆に考えたのです！それなら、私が来ればお兄ちゃんとお姉さまと一緒にいられるのではないかと……。」

そう言って、今度は満面の笑みで俺の方に振り向いた。

「お兄ちゃんにふさわしい女になってまた来ます!!不束者ですが、何ぞとよろしくお願いします!!お兄ちゃん!!」

「てやんでい、あたぼうよ!!」

俺はそう言って粉雪の頭を撫でまわした。全く、この妹分は前に会った時よりも可憐に美しくなっていた。

あれ？結局、☒星伽と俺の両親との約束☒って何なんだ？  
嫌な予感があったのでその思考はやめた。

2：エキシビジョンマッチに至るまで

これは、翌年の第63回全国戦車道高校生全国大会の後の話。

知波単学園はエキシビジョンマッチ参加を受諾した。

「西殿!!村田大尉殿を呼びましょう!!」

「大尉殿に我々の成長をお見せしましょう!!」

「むしろエキシビジョンマッチに参加してもらいましょう!!」

「いや、それはさすがに……。」

それは無理だろうと絹代は思った。一人で動かせる戦車ないし……。

「そもそも一人で動かせる戦車がないぞ。」

「倉庫に眠っているくーげるなんとかがあるのです!!」

「クーゲルパンツァーか……。」

確かに、村田大尉殿に我々の成長を直に感じてもらいたい。そして、あの村田大尉殿がああ戦車をどう使うのか知りたい……。

「他の校の許可が出たら一緒に出てもらおう。」

「「「うおおおおお!!」」」

「い、いや。まだ決まったわけでは……。」

「「「バンザーイー!!」」」

後日、大洗、聖グロ、プラウダに問い合わせたところ許可が下りた。

(なんでもどの校が調べても、知波単を改造した村田某陸軍大尉の情報は見つからなかったそうだ。) そのため試合前日に知波単学園が戦車10両以上でイブキを拉致しに来たのは言うまでもない。

「先に言っとけよ!!!」というか俺、海軍出身!!!畑違いだから!!!何なの、そのくーげるぱんつあーくーって!?!」

3：八神家発足?

8月31日の夜、俺は知波単学園学園艦から戻った。

「ただいま。」

俺は寮のリビングに入ると見知らぬ4人組がいた。

ボタン

俺はリビングの扉を閉め、玄関まで戻り部屋番号を確認した。……

うん、合っている。

「イブキ兄ちゃん!!お帰りなさい!!」

リビングに戻ると、はやて、リサ、玉藻……そして見知らぬ4人組。  
……客か？

「ただいま。」

そういえば、はやては玉藻と俺の実家に住んでいる。玉藻が一人でさびしい&昼間誰も世話が出来ないためにそうなった。……うん、グレアミだったか、グレアムだったか、その人のこと批判できねえな。  
「えつと……玉藻さん？この人たちは？」

「はやてちゃんが呼んだサーウアントもどき……というか式神に近い存在ですわねえ。」

……はやて、君はどうやってそんな存在を呼び出したんだ？まあ、とりあえず挨拶を……

「はじめまして、村田維吹です。海軍軍人で、軍の命令により武偵に向中です。はやての兄です。」

深いことは言わないことにする。とりあえずさあ……睨むのやめてほしいなあって。ほら、警戒するのは分かるけど、初対面には笑顔で接しないと……ねえ。

「烈火の将、剣の騎士シグナム。」

ピンクの髪をポニーテルにした、胸が大きい女性が言った。……さつきからこの人が一番睨んでくる。

「風の癒し手、湖の騎士シヤマル。」

金髪ショートヘアでおっとり笑っているが、その目は一挙一動を見逃さないようにギロリと俺を見る。

「蒼き狼、盾の守護獣ザーフィラ。」

ガチムチの兄ちゃんが獣耳を付けている……多分、こいつがある意味一番の危険人物だ。

「紅の鉄騎、鉄槌の騎士ウィータ。」

はやてぐらいの、赤毛おさげの女の子が言った。

「ところで主ははやて、この男は信用できるのですか？莫大な魔力を持っています。」



……あれか？昔、聖杯を取り込んだからか？

「イブキ兄ちゃん私の家族や!!信用できないなんてありえへん!!」

「しかsh……」

「バーン!!」

「主殿!!宴会と聞き、漁師からアナゴとスズキをいただいてまいりました!!」

牛若がドアを蹴破り、発泡スチロールの箱を抱えて部屋に入ってきた。

「え、宴会？」

宴会なんて聞いてないぞ!?

「互いに分かり合うには、お酒飲んで腹を割って話すのが一番と、玉藻は思ったので。あと、旅行中は全員でほとんど食事は出来なかったですし……」

玉藻が言った。

その後、野菜を抱えてきたエル、ワインを持ってきたネロとジャンヌ、パンを焼いてきたニト、果物を持ってきた理子、それに教師陣の師匠・ベオウルフ・エジソンが来て宴会（酒あり）が始まった。

「あれ？そういえば何でお前らいるの？」

俺は理子とジャンヌに聞いた。

「む、イブイブは理子りんがいるとお酒がまずくなるの？」

「いや、そういう訳じゃないけど……」

「まあまあ、イブイブ、どうぞどうぞ。」

「いやあく悪いねえ。」

俺は考えるのをやめた。

「ほう……このワインはなかなかいいな。」

「そうであろう、そうであろう!!」

ネロとジャンヌは意外に仲がよさそうだ。

この宴会によつて4人組(ウォルケンリッターというらしい。)と仲が良くなった。それとシグナムさんの酔うと脱ぐ癖が皆に知れ渡つたのは言うまでも無い。

## 高校生活2学期編

キンジ、お前また女問題かい……

9月1日、一般であれば本日は防災の日だろう。しかし、武偵高では、世界初の武偵高……ローマ武偵高校の制服を模した<sup>デ</sup>防弾制服・黒<sup>ウ</sup><sup>イ</sup><sup>ー</sup><sup>ザ</sup><sup>・</sup><sup>ネ</sup><sup>ロ</sup>と言う真つ黒な制服を着るのが国際的な慣例だそうだ。

さて、講堂には大量に並べられたパイプ椅子に座った<sup>デ</sup>防弾制服・黒<sup>ウ</sup><sup>イ</sup><sup>ー</sup><sup>ザ</sup><sup>・</sup><sup>ネ</sup><sup>ロ</sup>の中に一人、黒の軍服を着たものがいた。……俺だ。8月、旅行に行く前に採寸し、発注したのだが業者で問題が起こり、遅れに遅れて9月4日に届くらしい。

……シヨウガナイから第一種軍装でいいや、同じ黒だし。

などと思つて行つたら、まあ目立つ目立つ……

「我が東京武偵高は……。」

校長が長々と話しているが、要約すると『留学生受け入れたから!!それを刺激に海外行つても負けんなよ!!』ということを行っている。……どこの校長も話は長いようだ。

「ようイブキ、キンジ。」

「武藤か……初日くらいビシツとしたらどうだ?」

「おはよう遠山君、村田君。隣いいかな?」

「おはよう。」

無精ヒゲを生やした武藤と、キツチリと制服を着た不知火が俺とキンジを挟むように座った。

「イブキ、その制服なんだ?」

「村田君の服は目立ってるね。」

二人が俺の服について尋ねてきた。

「業者が問題起こして今日までに制服が届かなくなっちゃったんだ。とりあえず黒だしこれでいいだろと思つて行つたらこうなっちゃった。」

「そいつは残念だったな……。そういえば聞いてくれよイブキ、キン

ジ。昨日乱射があつたみたいでよお……。俺の四駆サフアリの窓ぶち抜かれて、また保険会社に連絡しなきゃなんねえんだ。」

その時ピクリとキンジの肩が動いた。キンジ、お前なんかやったな……。

「そいつは災難だったな。今じゃソイツは日本で売ってないんだっけ？」

だいぶ前にニュースで見た覚えがある。

「そうなんだよ!!今じゃ日本で売ってないってのに!!」

武藤はそう言つて俺の肩をがっしり掴み、揺らした。

「ちよ!!揺らすなって!!」

昨日の宴会のせいで軽い二日酔いになってるんだ。

「まあまあ、それより遠山君。また女性関係でスキャンダル起こした？」

……キンジ、お前またフラグ建てたのか。

「またキンジかよ!!」

「ツケ!!結局は顔かい!!」

俺と武藤はキンジイケメンを妬んだ。……一瞬他人の芝は青いイケメンと言う言葉が頭の中をよぎったんだが気のせいだろう。

「大声出すなよ。始業式中で、しかもイブキのせいで目立ってるんだぞ。つていうか不知火、なんでそんなこと知ってるんだ？」

「知ってる……つていうか予想?さっき強襲料で剣道の朝練があつただけど、神崎さんが大荒れだったからね。多分これ、遠山君関連じゃないかなつて。」

「不知火……お前朝練出たのか。偉いな。」

俺は昨日の宴会のせいで起きるのが遅くなり、出るのは諦めた。

「そういえば蘭豹先生が怒ってたよ。村田君、後で補修だつて。」

「マジかよ……。」

「冗談さ。」

「不知火この野郎!!」

今マジで焦ったぞ!!

「落ち着けて。」

武藤が俺を羽交い絞めし、キンジは俺の肩に腕を置き落ち着くよう促す。

「あはは……ごめんごめん。話を戻すけど、一部ではポピュラーな話題だよ。今朝遠山君が、レキさんと一緒に女子寮から登校してきたって」

「……何やってんだよ!!というか、昨日帰ってこなかったのはそれが理由か!!」

「今度はレキか!……ああでも、根暗と無口でウマが合ったのか?」

武藤、それは言い過ぎじゃねえのか?

「キンジ気をつけろよ。レキのファン……というよりレキ教は狂信者が多いんだ。……死ぬなよ。」

俺はキンジに忠告した。

「マジか……。」

キンジが燃え尽きたように見えた。

「……こっちの方もポピュラーな話題なんだけど……神崎さん、レキさんと仲良かったから、友達と恋人、両方失ったワケだからね……暴れ回った後、軽く鬱入ってたよ。」

おい、不知火。燃え尽きたキンジにガソリン注いでさらに焼くとか、どんだけ鬼畜なんだよ。

「まあ、とりあえず狂信者とアリアに殺されないようにな。」

普通にありえそうだから怖い。

「イブキ……助けてくれえ!!」

悲愴な面持ちで俺を見て言った。

「いやいやいや……そう言われても、助ける方法なんて俺はわからねえぞ。家族除いて女の子とまともに縁ができたのは、武偵高こに来てからなんだぞ。」

軍隊で……しかも男所帯の特殊部隊の中で女の子と縁ができるか!!

「そこを何とか……レキからは求婚された後、狙撃拘禁こされるし……アリアはご立腹だし……どうすればいいんだよ……。」

キンジはFXで絶対に返せないほどの借金を背負ったサラリーマ

ン見たいな表情で俺に嘆いた。……おい、ちよつと待て。

「レキがお前に求婚?」

俺は思わず聞き返した。

「なんでも風風に命じられたからだってよ……。」

「二うわあ……。」

……うん、レキは好きとか嫌いとかの感情は薄いから求婚なんておかしいと思ったら、こういう事か。風風の命令……。うん、原作なんてもうほとんど覚えてないぞ。

「……とりあえず、キンジ。」

「……ああ。」

「……修学旅行Iで何とかしろ、それ以外は考えつかねえ。……いいかキンジ、これは冗談抜きで将来に直結することだ。今後の人生全てがかかっていると見え。」

「……おう。」

心なしか、キンジの瞳が若干光を取り戻したように見えた。

「そういえば遠山君と村田君はどういったチーム編成にするの?」

不知火が気を利かせたのか話を変えてきた。チーム編成……武偵高は2年生の2学期になると、2〜8人程度のチームを編成し、学校に登録するらしい。

これが意外と重要なようで、国際武偵連盟に登録されるようだ。

「ついでに俺は車両科と装備科から数人ずつ集めた兵站系だ。」

なるほど、武藤は兵站系に行くのか。

「俺はどうしようか迷ってるんだ。ネロ、牛若、エルは多分確定……というか他の奴が引き抜いても命令聞かないだろうし……。それにリサとニトは来るだろうし……。でもこれだとなあ。」

「何か問題あるの?」

不知火が不思議そうに聞いてきた。

「俺と牛若、エルは完全な前線部隊、リサとニトは後方支援。前線と後方をつなげる役がないんだよ……。ネロはできないこともないけど……本質は前線だし、適任じゃないんだよなあ……。」

下手すると俺と牛若が遊撃に回る可能性があるから、エルをサポート

トしつつ後方もできる人……オールラウンダーな人間が欲しいが、そんな人はいるのだろうか。

「まあ、俺は武偵高卒業したら軍に戻らなきゃいけないし、最悪適当でもなんとかやるんだけどな。」

「単位取得に必死でそっちは考えてなかったな。」

キンジ、それは怠慢とも言えないか？

「遠山君……次にこれ着る時はどうなってるのかなあ……。」

次着る時……それはチーム登録の時だ。……そういえばその時までに防弾制服・黒は届くよな。また問題起こったとかありませんように……。

「そうだキンジ。」

「どうした？」

講堂から解放された後、俺はキンジに声をかけた。

「ほら。」

俺は諭吉を一人キンジのポケットにねじ込んだ。

「どうせ学園島周辺は狂信者達に見張られてんだ。どっか遠いところで飯食うしかないだろ。」

「イ……イブキ!!」

「トイチな。」

「テメエこの野郎!!俺の感動を返せ!!」

「ちよ!!待て!!冗談だから!!その手を下ろせ!!なあ!!」

キンジと別れた後、俺は装備科棟へ向かった。平賀さんに会うためだ。俺はロサンゼルスから帰った後、『もう消化ホースバンジーはやりたくない(切実)』ので平賀さんにどこにでも引っかけられて、頑丈(すごく大事)なワイヤー装置を頼んでおいた。それとずっと前

に頼んでおいた25ミリ機銃の貫通特化（費用を抑えたほう）のうちの100発も今日出来上がったそうだ。価格は合わせて130万円。……高すぎないか？と思われるかと思うだろう。しかしパンツァーフアウスト3より少し高い値段と思えば、安く仕上がったと思うべきだろう。

俺はそれらを取りに行くため、人気のない近道を使っていた。……まあ、今日は水投げの日（どんな奴にでも徒手空拳なら喧嘩を売ってもいい日）なので、喧嘩から避ける意味もあるのだが……。

俺が細い道を歩いていると、小さい中学生ほどの少女がストローを吹き、シャボン玉で遊んでいた。……なんでこんなところで遊んでんだ？そんな事を思いながら俺は歩いていくと……

「お前、今5回死んだネ。」

「……ん？」

シャボン玉で遊んでいた少女が俺に向かって言ってきたようだ。

……5回？さっきのシャボン玉の数か？

「だけとお前、今シャボン玉自分の息で膨らましてたよな。まさかお前、吐いた空気が水素です……とか面白い冗談言うわけないよな。」

……。なんだかわからないが、しゃべりかけてきた黒髪ツインテールの少女との間に冷たい風が吹いたような気がする。

「……日本の武偵高、大したことないネ。けど、お前の観察は見事ヨ」  
その黒髪ツインテール少女は中国の民族衣装を着ていて、アニメでしか聞いたことのないような中国訛りっぽい日本語をしゃべった。

「お前さん、なんで中華娘のコスプレするかわからんけど、今時そんな喋り方はアニメでも見ないぞ。」

「何言うネ!!私<sup>ウオ</sup>は中国<sup>チヨンゴ</sup>人<sup>レン</sup>ネ!!」

俺に近づき、大きな声で反論した。……うわっ酒くせえ!!俺は思わず彼女の瓢箪<sup>ひょうたん</sup>を取り上げた。

「なにするネ!!」

「お前!!今何歳だ!?!」

俺は魔力を込めて威圧し、彼女に聞いた。



「ウツ…14ネ……。」

「お前さん、酒がうまいのはすぐわかる。けどな、ここは日本なんだ。飲酒で留学生を逮捕はしたくないんだ。」

俺はそう言っただけで彼女の手を取り、野口を一人握らせた。……今日は出費がかさむなあ。

「今回は見逃す。これは没収だ。その代わりつちやなんだが、その金でなんかジュースでも買え。おススメはカル〇スとサイダーな。」

俺はそう言っただけで瓢箪の蓋を開け、匂いをかいだ。……うん、酒だ。そして瓢箪をあおると……

ゴクツゴクツゴクツゴクツゴクツ…プハア!!

「うおっ!!辛え!!おい、これ中国産か!？」

俺は瓢箪を飲み干し、思わず聞いてしまった。

「……中国東北部の高梁酒ネ。」

「中国東北部……ああ、満州か!!秋山の爺ちゃんが満州の酒は辛かったって言っただけで本当なんだな!!」

秋山の爺ちゃんとは、俺の実家のはす向かいに住んでいる爺様だ。秋山の爺ちゃんは昔、騎兵隊でブイブイ（死語）いわせていて、老河口作戦（世界戦史における最後の騎兵の活躍）の時、騎兵第4旅団所属で大活躍したそうだ。

そして、あの爺ちゃんは自他ともに認める酒好きで、食器代をケチってまで酒をかう酒豪だ（なんでも茶碗は一つしか持っていないなかったらしい）。そして両親が死んだときに色々世話を焼いてもらった人の一人だ。

ついでに、俺の家の隣に住んでいる吉田の爺様と（自他ともに認めるタバコ好き）俺を酒好きに育てるか、タバコ好きに育てるかで意地を張っている……。

まあ閑話休題。今現在の満州の酒の感想は、その酒好きの爺様と感想と同じだった。

「うん!!これはこれでうまい!!……あ、お嬢ちゃん。俺は許可証があるから飲むだけだったら違法じゃないからな。」

「それはよかったネ……って違う!!」

「ん? どうした?」

「私の名前はココいうネ!! お前の名前も言うネ!!」

「村田維吹だ。」

「ちよつとお試しするヨ。 姫から離れたら、すぐ、イタイことあるネ」  
「ココはふらふら、ふらふら、と千鳥足で、倒れるような動作から、側転に入り、俺に飛び掛かってきた。 ……水投げか!! 面倒な!!」  
「ほら!!」

俺はココに向かって瓢箪を投げた。俺はそれと同時に影の薄くなる技を使いココの背後へ行く。瓢箪をキャッチしたココはそのまま俺が消えたことに驚いている。  
「よつと。」

俺は背後に回ると瓢箪を奪いつつ、足払いをしてココを転ばせた。  
「これでいいか?」

俺は瓢箪を振りながら言った。 ……うん、まだ結構残ってるな。まあ、没収品を捨てちまうのももったいないし飲んじまうか。

するとココはサツと立ち上がると、俺から距離を取った。

「ウ…私は万武ココ…万能の武人ネ。 イブキ、85点。」

「いや…手も出なかったのに格好つけるなよ。 ……というか、万能って器用貧乏だからそう言われたのか?」

「う、うるさいネ!!」

黒髪ツインテールが怒髪衝天……これはなかなかイジリ甲斐のありそうな子が来たもんだな。

「お前さんの所属は? 何なら案内してやろうか?」

うまい酒も手に入って機嫌がいい。平賀さんに会った後なら武偵高を案内してもいいぞ。

「やめとくネ。でも予想以上ヨ。 ……ココは大変満足ヨ。その瓢箪はやるネ。 再見。」

そう言つて路地の奥の方へ消えて行ってしまった。

「なんか傍若無人な奴だったな……」

俺は瓢箪を再び傾けた。 ……うん、辛いけど美味しい。秋山の爺ちゃんはこの片手に、馬と中国大陸を縦横無尽に走り回っていたの

だろうか？

平賀さんの作業室につき、ノックをした。

「開いてるのだー!!」

扉を開け中に入ると平賀さんがいた。

「費用を抑えたほうの25ミリ機銃の弾とワイヤー装置ができたんだよね。」

「出来てるのだ!!」

平賀さんはそう言って部屋の奥の方へ行ってしまった。少しするとデカイ金属の箱を乗せた台車を押す平賀さんが戻ってきた。

「まずこれなのだ」

そう言って台車で運んできたでかい金属の箱を開けた。……そこには25ミリ機銃の弾がぎっしりと入っていた。

「貫通特化の弾が100発入ってるのだ。これはRHA換算で100mの距離で150mmは抜けるのだ!!」

弾は真鍮の葉莖に円柱が付いており、円柱の先に針のようなものが付いていた。……確かにこれは装弾<sup>A</sup>等付翼安定徹甲<sup>F</sup>弾<sup>S</sup>だ。こいつが貫通150mmあるのなら、第一世代主力戦車の正面をぶち抜くことは可能だろう（まあ、当たり所によるが）。

「もう100発は一カ月しないのでできるのだ!!後、お金を無視したほうはまだできないのだ……。」

もう一つの方、50発で3000万程度を目安にした、費用を度外視した貫通特化の弾。単純計算で一発60万。でも量産品である戦車の砲弾が数十万〜100万円と考えると、一流の技術者によるハンドメイド弾が一発60万は安い方なのではないだろうか。

「平賀さん、無茶言っているのは理解しているから時間がかかってもショウガナイと思ってるよ。まあ……最悪来年までにはできると嬉しいけど。」

まあ、今年中にできるとは期待していない。来年の4月にできれば

御の字だろう。

「村田君!! 来年までにはできるから安心するのだ!!」

そう言って胸を張る平賀さん。彼女がそう言うなら、期待しよう。  
「こっちがワイヤー装置なのだ!!」

そう言って平賀さんが出したのは艶消しの黒で塗装された無地のバックルだった。ピンを使わない、バックルにある穴にベルトを入れて固定するタイプ。だけど……一般的なバックルより二回りほどでかい。

「これは最大60mの長さが出るのだ。ワイヤーの想定重量は250kgで、このフックならどこにでも引っかけられるのだ! それとセラミックとケブラー繊維で作ってあるからライフルの弾でも貫通はしないのだ!!」

そう言ってフックを伸ばしてワイヤーを出した。ほお、これはいい。

「ただ巻き上げの力は弱いのだ。」

「いやいや、これほどの物を作ってもらって……。ありがとう。」

消化ホースバンジーをやらないで済むのは本当に助かる。二回も消化ホースバンジーをやってるからわかる、安全なバンジーほどいいものはない。

「村田君、本当にこれでよかったの? もっといろいろな装置をつけられたのだ。」

「現状はこれで十分。何かあったらその時に平賀さんに頼むよ。」

実際、これ以外に必要な装置は思いつかない。

「それと村田君、これはサービスなのだ。」

そう言って平賀さんは腕時計を出してきた。どこのメーカーのものだ?

「これはワイヤー装置内蔵の腕時計なのだ。この時計はバックルに使った材料を使ってとても頑丈なのだ!!」

「ひ、平賀さん!!」

俺は事件のたびに毎回腕時計が壊していた。ある時はミリタリーウォッチ、ある時はJーショック……。理子によるエアジャックの

後、時計は壊れるものと考えて1000円腕時計を使っていたのだが……これで腕時計を事件後に毎回買いに行かなくて済む!!

「ありがとう!!平賀さんありがとう!!」

俺は思わず握手までして感謝した。

「ど、どうしたのだ!?!」

「毎回毎回、腕時計が壊れてね……。」

俺はそう言った後、バックルと腕時計をつけた。

「似合ってるのだ!!かっこいいのだ!!」

「バックルはちよつと重いな。」

腰に一本ナイフを挿しているみたいだ。

「これでもかなり軽量化したのだ。」

「ああ、そうだ代金。」

俺はそう言って☒四次元倉庫☒から封筒を出した。

「130万円、現金で一括。確認したけどそっちでも確認して。」

「わかったのだ。」

平賀さんは封筒を受け取り、中身を取り出すとカウンターにセットし、数え始めた。

「……130万ちようどあるのだ!ご利用ありがとうございますなのだ!!」

さて、じゃあ帰りますか。俺は銃弾の入った金属箱を持った

「銃弾出来たら連絡ちようだい。」

「了解なのだ!!」

俺は作業室を出ると新品の腕時計を見た

「2時過ぎ……ランチは終わってるなあ。」

俺は金属箱を☒四次元倉庫☒にしまった。さて、この後どうしようか。……あ、はやて達を車で送るんだった。完全に忘れてた。どうしよう……酒飲んじまったよ。

はやてとウォルケンリッター、玉藻と一緒に電車に乗って実家へ戻った。

さて俺の実家は、兵部省や陸軍省に大本営の設置されている新宿、東京の重要な場所を管轄する練馬駐屯地、陸海空の兵站中枢施設のある十条駐屯地、東部方面総監部のある朝霞駐屯地、そして中央特殊武器防護隊のいる大宮駐屯所に電車や車ですぐに行ける場所にある。

なので、レインボーブリッジ近くにある学園島からは電車を乗り継がなきゃいけないため面倒臭い。お父さん、もうちよつと東京から近くに家を構えてほしかったな……。

駅から実家に、はやての車椅子を押しながら向かうと、隣の家に住んでいる吉田の爺様の門に張り紙がされていた。

『聖地巡礼に行つてきます。 吉田。』

ああ、そう言えば今はもう9月だっけ。鷲宮神社のらき☆すた神輿見に行ったな。葉巻も好きだけど漫画も好き。葉巻はハバナ産にこだわり、漫画はのらくろから深夜アニメの漫画まで。そう言えばこの前、メールで夏コミの戦利品自慢してたっけか。……この爺さん、100歳越えてたよな？

俺達は実家に戻っていったん荷物を置くと、はす向かいの秋山の爺ちゃんの家に向かった。挨拶に行くためだ。

ピンポーン

「誰じゃあ?」

「秋山爺ちゃん、イブキです。帰ってきました。」

「おお!!イブキかあ!?!上がれ上がれ!!」

俺達は家に入ると(鍵かけとけよ爺ちゃん)、ガイゼル髭で垂れ目の好々爺がいた。

「イブキか!!よおく来た!!……?はやてちゃんは知つとんけど、そのねー達は誰ぞな?」

そう言った後、秋山の爺ちゃんは茶碗を飲み干した。ちゃぶ台の上には4合瓶が数本転がっている。……ちゃんぽんか。

「なんか、はやての親戚筋でリヒテンシユタインからの留学生なんだって。」

ということになっている。戸籍関係は辻さんが改竄した。犯罪を犯すか、海外行かない限りはバレないだろう。ウォルケンリッターが（ザーフィラは犬になっていた）自己紹介すると、ギロリと秋山の爺ちゃんの眼光が光ったような気がした。

「……………そういう事にして置くぞな。ねー達ははやてちゃんに忠義立てとるようじゃ。で、イブキ、その瓢箪ひょうたんは何ぞね？」

流石は秋山の爺ちゃん。鋭い観察だ。

「中国の留学生から貰った（嘘はついてない）満州産のカオリヤンチュウだそうですね。……………辛いけど美味かった！」

「カオリヤンチュウ……………高粱酒!?懐かしいのお……………多美!!」「はいー?」

台所で秋山の婆様（なんでも華族出身らしい）が返事をした。この人は上品で、俺はマナー関係の事は吉田の爺様と秋山の婆様に教わった。……………なんで秋山の爺さんこの人は結婚したのだろうか？

「たくあんを出せえ！」

「宴会でもやるんですか？」

……………たくあんが宴会かよ。相変わらずだな。

「そうじゃあ!!」

「なら、他の料理も出しませんと。」

……………婆様、スイマセン。

「おばあちゃん、手伝います。」

はやてがそう言って車椅子を台所へ動かした。

「はやてちゃん、悪いねえ。」

「いえいえ、ここにきて、いつも助けてもらってますから。」

はやてはそう言って台所へ消えていった。

……………あれ?この子小学生だよな?俺はそう思いながら瓢箪ひょうたんを秋山の爺ちゃんに渡した。

秋山の爺ちゃんはふたを開け、グビグビと飲んだ。

「プハッ!!確かに支那の酒じゃあ!!」

「たくあんをお持ちしました。」

そう言つて秋山の婆様がたくあんを俺がずっと前に送った皿に

盛って持ってきた。

「ほかの料理はもう少しお待ちくださいね。」

「いえいえ、急に押しかけて料理なんて……本当にすみません。」

「ねー達も飲むぞな!!」

そう言つて、秋山の爺さんは婆様の持ってきた茶碗に酒を注ぎ、みんなに渡した（ウィータにも）。

そして宴会になり、再びシグナムさんが全裸になったのは言うまでもない。（なお、そのシグナムは秋山の婆様にこつぴどく叱られたのも言うまでもない）

「そう言えば、14日に京都行くんで地酒買ってきますね。」

「いやあく悪いのおく。」



なんでこいつらがいるんだよ……

さて、秋山の爺ちゃんのところまで飲んだ後、実家で一泊してから俺は寮へ戻った。

そして9月14日、俺は新幹線のぞみ101号に乗っていた。この2週間の間に護衛の依頼があり、ボロボロになったのは割愛しよう。……なんで新型戦車導入するだけでドンパチするんだよ。それに、その抗争中にはかの組織が来てシージャックするし……。戦車道なんてもう絶対関わらねえからな!!

俺はカバンから旅のしおりと書かれたプリントを出した。

『場所 京阪神（現地集合・現地解散）』

1日目 京都にて社寺見学（最低3ヶ所見学し、後程レポート提出）

2日目・3日目 自由行動（大坂か神戸の都市部を見学しておく事）』

……さすがは武偵高、適當すぎだろ。それはともかく、京都の社寺見学か。絶景かな絶景かなで有名な南禅寺の三門は見学に行きたいな。それと社寺と関係ないけど月桂冠大倉記念館、黄桜伏水蔵の見学は外せねえ。

「というわけだから、この3つだけは見学させてくれ。……黄桜伏水蔵の見学は予約が必要だからもうやっておいたぞ。」

「……もっぱら酒ばっかだな。」

キンジは呆れながら言った。

「秋山の爺ちゃんに土産に酒買ってこると言っちゃったし。」

「おい、公務員。法律破っていいのかよ。」

「まあ、俺が買って飲むってわけでもない。買ったなら近くの郵便局で送るよ。……上司も秋山の爺ちゃんと吉田の爺様にお土産買うのは許してるし。」

何故か法律にうるさい辻さんがこの二人のために、酒や煙草を買うのを許しているのだ。

「……まあ、バレるなよ。武偵3倍刑に公務員の法律破りはだいぶ刑が重くなるぞ。」

「だから俺は今私服なんだから。バレやしないさ。」

俺はTシャツにスラックス姿だ。それに偽造免許書（理子製）もある。……良い子は真似をしちゃいけない。

「俺も一緒に行く条件として、3つ行きたい場所に行かせろ。てのキンジが呑んだんだから行かせてくれよ。」

「分かってる。」

「……」

俺とキンジの話をレキはジー……ツとみている。

そう、俺はこのキンジとレキのチームに入って今回の京都旅行に行くことになった。アリアとの復縁のため、そしてチーム編成としても自分とレキ二人だけでは難しいとキンジは考え、俺に泣いて頼んできた。

「なんで俺に頼むんだよ!？」

「イブキがキャラバン・ワン修学旅行Iで何とかしろ。て言っただろ!?俺一人じゃ何もできそうにないんだ!!頼む!!」

「……いやね、キンジ君。お前さんの気持ちはわかるよ。だけど俺も機嫌を損ねたくない子がいるんだよ。」

「俺がイブキのチームに謝りに行くから!!頼む!!」

「シヨウガナイ……。」

その後、チーム予定のネロ・エル・牛若・ニト・リサにキンジが謝りに行った。

そのようなことがあり、俺はこのチームに入れさせられることになった。

「イブイブ、お茶ちよーだい!!」

「……ほら。」

俺は理子のコップに水筒のお茶を注いだ。理子は旨そうにそのお茶を飲むと

「プハア!!やっぱりリサのお茶は美味しいよ!!」

「……そうか。ところで、」

「どうしたの?」

「なんで理子がいる!?!」

「なんで理子がいるんだろう……とか考えてたら、こいつもチームの一員だったらしい。」

「私が頼みました。」

レキがぼつりと言った。……ハイ!?

「レキが頼んだのか!?!」

キンジも驚きを隠しきれない様子だ。

「はい。⊠⊠風⊠⊠の命令です。村田さんは不幸を呼ぶ。なので村田さんともう一人で不幸に対処せよと言われました。」

「……不幸を呼ぶのは置いとくとしても、何かあったら理子とどうにかしろ……と?」

「はい。」

うん、別に理子と一緒に戦うのは構わない。イ・ウー戦の時も理子と一緒に戦いと戦いやすかった。そっちは問題がないが……レキの淡々とした口調で不幸を呼ぶって言われるのは、大分傷つく……。いやね、分かっているさ。俺が不幸を呼ぶくらい。

「なあ理子。」

「どうしたの?」

「俺ってそんなに不幸を呼ぶかなあ……。」

理子は目をそらした。俺はキンジを見た……こいつも目をそらした。

「チクシヨウ!!それだったら特大の不幸を呼んでやる!!」

「それだけはやめろ!!」

キンジは焦って言った。

京都駅に着いた。キンジは自分の荷物を持って降り、その後ろからレキがハイマキと一緒に付いてきた。本当にキンジからレキは離れないんだな。そして、その姿を他の生徒に見られてヒソヒソと何か小声で喋ってる。

「とりあえず見に行こう!!南禅寺、無鄰菴、知恩院、八坂神社のルートで行けばだいぶ楽しめるぞ!」

俺はそう言つてタウンガイドを出した。

「……準備良いな。」

「てやんでい!!こっちは旅行行つたら絶対事件に巻き込まれて観光できないんだ!!楽しみじゃないわけないだろ!!」

「お、おう……。」

キンジが引いてるが、なぜなのだろう。

「イブイブ隊長!!タクシー乗り場はこっちです!!」

理子がそう言つて俺に敬礼した。

「良くやった理子曹長!!ではタクシー乗り場へ出発だ!!」

「ちよつと待て!!タクシーは高いんじゃないか!?!」

キンジが俺に聞いてきた。

「タクシーだと一番早くて、料金は一台1500円〜2500円だ。それを四人で割ると意外と高くないぞ。2400円だとすると、一人600円。そこまで高くないだろ?」

「た、確かに……。」

「それにほかの生徒に移動中は会わなくていい。……というか、南禅寺から八坂神社のルートだとあまり人はいないんじゃないか?」

せつかく京都に来たんだ。定番の清水寺に金閣銀閣を生徒たちは見るんじゃないのか?

「タクシー乗り場は何処だ?」

キンジはタクシーでの移動を選択したようだ。

「よし!!理子曹長!!」

「はっ!!」

「タクシー乗り場へ案内せよ!!」

「アイアイサー!!」

南禅寺は臨済宗南禅寺派大本山の寺院で、日本の全ての禅寺のなか

で最も高い格式をもつそうだ。そして、ここの三門は歌舞伎の  
楼門さんもんごさんのきり五三桐の二幕目返して石川五右衛門が「絶景かな！絶景かな  
！」というセリフで有名だ。（でも石川五右衛門の死後に再建されて  
いる）

「確かに絶景だな。」

キンジが思わず声に出した。俺は京都を一望できる景色に圧倒さ  
れた。

「絶景かな、絶景かな！春の眺めは値一億たあ小せえ、小せえ！このイ  
ブキには値一兆！最早 陽も昇り、誠に秋の真昼に花の盛りもまた一  
層……。全く、綺麗な眺めだなあ。」

俺は石川五右衛門のセリフを真似て、言ってみた。これで紅葉だっ  
たら、夜景だったら一兆なんて安いもんだろう。

「よっ!!村田屋!!」

理子が俺に向けて言った。

「……。」

レキは三門楼上内の仏像を見ている。……心なしか目が輝いてい  
るようにも思える。やっぱり、来て正解だ。

さて、そのまま南禅寺から無鄰菴・知恩院・八坂神社を回り、今度  
は京阪本線で祇園四条駅から中書島駅へ行き、月桂冠大倉記念館・黄  
桜伏水蔵の見学（たんまり買った酒は郵便局で郵送、アルコール以外  
の土産は四次元倉庫へ）が2時半前に終わってしまった。

「……………どうしようか？」

「ああ、ノルマの社寺3カ所に月桂冠と黄桜の見学もあったのにまだ  
2時半か。」

伏水蔵のエントランスホールのソファーにキンジとレキ、もう一方  
に俺と理子が座って休んでいる。

「イブイブたくさん買ったね〜。」

「まあね。吉田の爺様はともかく、秋山の爺ちゃんはたくさん飲むか  
らなあ。」

「秋山の爺ちゃん？」

「実家のはす向かいに住んでいる爺ちゃん、色々世話焼いてもらったんだ。ついでに爺ちゃんは最低でも毎日5合は飲む。」

「……………」

キンジと理子がジーツと俺を見た。…………な、なんだよーその爺さんいてこの孫ありみたいな目は!!

すると、レキがキンジの方をギロリと向いた。…………こええ。

「キンジさん。私と歩きながら、他の女子のことを考えていましたね。」

「おおく!!修羅場であく!!」

「理子、今回だけは止めとけ。」

俺は理子の口を手でふさいだ。キンジは慌てている。

「アリアさんの事ですわね?」

「…………な、なんで分かるんだ、そんなことお!」

キンジの声が裏返った。

「ムー!!ムー!!」

理子が何か言ってるがそのまま口を塞いでおこう。

「さつきそこの廊下で含み笑いをしていた顔が、アリアさんに見せる笑い方と一緒にしたから。」

さつきの廊下?…………ああ、地ビール醸造所見学のところか。うん、どうやってそこでアリアを思い出したんだろう?

「そつ、それは…………まあ、1学期はあいつと組んでたからちよつと思出し笑いをしたただけだ。」

「アリアさんには近づかないでください」

レキは青白い火の如く怒っているように見えた。…………れ、レキが、怒ってるのか?

「ムー!!ムー!!」

まだ理子何か言ってるが、そのまま口を塞いでおく。

「レキは、怒ってるのか?」

キンジはイライラしているのかレキに強めの口調で言った。確かにキンジの気持ちはわかる…………キンジ拉致して勝手にチーム登録、そしてアリアに近づくなとはなあ…………。キンジ、ご愁傷様。

すると、レキは力無さげに首を横に振った。

「私は、怒ることはありません」

レキは静かに言った。……怒ってる奴ほど怒ってないっていうんですよレキさん。

「ホントかよ。」

「キンジさんも、村田さんも、峰さんも私のあだ名はご存知かと思いません。」

レキのあだ名?……ああロボット・レキだっけか?俺はあまり好きじゃないんだけどなあ。

「人に陰で言われている通り、私は人並みの感情を抱くことは、ありません。感情は、人の感情を好みませんから」

……このままだと、キンジ解放の交渉ができなくなるな。感情を好まない事は否定しなくちやいけねえ。

「レキ、俺も感情に縁があるが……感情を好まなかった覚えはないぞ。」

ああ……爆弾による爆風、消化ホースバンジーの風切り音、落下傘なしの空挺の時の風切り音……あれ?感情を好む好まないはともかく、俺を殺しに来てるのか?

「村田さんにも、感情の声が聞こえるんですか?」

「……うん、声というか、意思が何となく。今思えば……よく俺生きてたなあ……。」

「ムー!!ムー!!ムー——!!」

あ、理子の口押さえたまんまだった。俺は手を離れた。

「プハツ!!いい、イブイブ!!理子りん死んじゃうところだったよ!!」

「いやあ、ゴメンゴメン。」

「口はともかく、なんで鼻まで抑えるの!?!」

「いや、ほんと悪かったって。」

「理子、そのぐらいにしとけて。レキ……大坂に行くぞ。修学旅行の目的の一部でもあるし、買いたい物もある」

キンジが理子を止めてくれた。

「はい」

レキの眉が少し下がったように見えた。……気のせいかな？

「大阪かあ……。大阪と言えば天下の台所で食い倒れの町か。たこ焼きやお好み焼き、串カツ、イカ焼きに……。」

俺はタウンガイドを出して大阪の名所を調べだした。

「イブイブ。」

理子が俺の袖を引いた。

「二人行っちゃったよ。」

「キンジ、あの野郎!!」

俺と理子は走ってキンジたちを追いかけた。

さて、京都・中書島駅から大阪・心斎橋駅までは1時間弱で着いた。時刻は3時半過ぎ。地下鉄の駅から階段を昇り、心斎橋の地を踏んだ。

……街を見てみると若者が大勢歩いている。いや、俺たちも若いんだがな？こう、若者の街みたいなのがする。東京という渋谷とか原宿みたいな雰囲気に近い。周りには、うんざりするくらいある服屋にアクセサリーショップ……。

まあ、そんなところに防弾制服に身を包んだ二人、月桂冠大倉記念館のTシャツに着替えた俺、ロリータ制服で秋葉原に居そうな服を着た理子……俺達は浮きまくっていた。

「来たのは、いいが……この街の流行とか、分からないな」

……おい、キンジ。お前はここに来たのにそんなこと言うのか。

「私입니다」

……だろうね。

キンジとレキはそのまま黙ってしまった。キンジは目で俺と理子に助けを求めてくる。

「レキユはどんな服を持ってるの？」

理子がレキに聞いた。



「私服はありません」

「はあ!？」

「はい!？」

「……え？私服がないってことは、制服が一張羅!？」

「え、私服ないって……制服しか持ってないのか？」

俺は思わず聞いた。

「はい。」

これ……俺達じゃどうにもならねえよ。俺とキンジは理子様にならねえよ。俺とキンジは理子様にす  
がった。

「よし、理子りん隊長についてきなさい!!」

俺達は理子様についていくことにした。

……風さん。理子様を連れて正解だよ。あれ？でもこいつのせ  
いで問題が起きてるんだよな。

理子の足が止まった。

「ここで選ぼう!!おっ!!」

その店の名前はシャトンb明らかにならな女性向けの店だ。

「理子りんは服を探してあげるから、イブイブはどこかで時間潰して!!」

「おう。」

俺は近くにある絶品たこ焼き屋に行くことにした。なんでもミ  
シユランにも選ばれるほどらしい。俺はそのたこ焼きを堪能してい  
ると、ちっこいピンク色の髪が見えた、そのピンク髪はシャトン  
bの方へ向かっている。

……ここでキンジとレキにばったり会ったら……面倒な事になるよ  
なあ。

俺はたこ焼き片手にアリアに声をかけた。

「よおアリア。こんな所で何やってんだ？」

「イブキじゃない。……ママの裁判のための機材を取りに来たの。」

アリアのママ……神崎かなえさんだっけか。ジョン・F・ケネディ空港であつたなあ……って裁判?!聞いてねえぞ?!

「かなえさんが捕まったって俺聞いてないぞ?!」

「え?イブキに言つてなかつたっけ?」

「一切全く聞いてないぞ?!」

「いつ捕まったんだよ!」

「……イ・ウーの罪をかぶせられたのよ。呉で裁判があるの。」

「……知らんかった。……そうだ、たこ焼きでも食わねえか。奢るよ。」

俺は思わずそう言った。

「誘ってくれるのは嬉しいわ。でも急いでのの」

そう言つてどこかに行こうと……つてそっちはシャトンbの  
とこだ!!俺はアリアの腕をつかんだ。

急いては事を仕損じるアリア、お前疲れてるだろ?見りやわかる。……せっかく食い倒れ街 大阪に来たんだ。たこ焼き食いながら一休みして英気を養え。」

すると、アリアは何か思い出したような、懐かしいような顔をした後

「……そうね。少し休憩しましょうか。」

「おう、そうしよう!」

俺は最後の一個のたこ焼きを食った後、アリアと再び列に並びたこ焼きを買った。

「……意外と美味しいじゃない!」

アリアが舌鼓を打った。

「ミシユランにも選ばれたそうだぞ。」

「そうなの……イブキつてキンジと違って優しいわね」

アリアの顔に影ができた。……キンジ、後でなんか奢れよ。

「キンジは確かにぶつきらぼうだ。けれども、悪気があつてあんな態度取つてるわけじゃねえと思つてる。」

……キンジの援護射撃をするか。

「そうなの？」

アリアが顔を上げた。

「キンジは、女の子が何故か苦手だ。だからと言って同性愛者でもない。それに小学校の頃までは普通に女の子と話せてた。……ってこたあ、中学の頃に何かトラウマができたんじゃないかと思う。」

キンジは、無理やり███白馬の王子様モード███にさせるのを嫌がる。サッカーの時もそうだった。中学の頃、無理やり███白馬の王子様モード███にさせられたか、███白馬の王子様モード███で黒歴史量産したか……。

「トラウマ……。」

そう言っただけアリアは考えだした。

「まあ、それと……なんだ。アリアのタイミングが悪い時もある。」

「あ、あたし？」

アリアは大きい目をまん丸にして俺を見た。俺はたこ焼きを一つ食った後

「俺が見る限り、問題が起こった時にちょうどアリアが居合わせて、勘違いの後の爆弾発言……。まあ、どう考えても誤解するような場面が多いから、シヨウガナイっっちゃシヨウガナイんだが……。それで向こうもテンパってるからそれに釣られて誘爆するんだ。」

俺はそう言っただけ、またたこ焼きを口にした。うん、うまい。

「……どうすれば、いいかしら。」

アリアは楊枝で皿をいじっている。

「まあ、どっしり構えて聞くこと聞いてから判断するつきやないだろうな。███動かざること山の如し███ってな。それ以外ないだろう。」

「分かってはいるんだけど……カッって来て……。」

アリアはそう言っただけ、楊枝でたこ焼きをいじりだした。「気持ちわかるが……冷静になんないとな。戦闘だってそうだ。カッとしたまんまじゃうまく戦えないだろう？ 戦闘の練習と思って一旦、起こっている事を他人事と思ってそこから判断してはどうだ？ 俺はそうしてる。」

俺はそう言っただけ焼きを食らう。……なくなっちゃった。

「お互い話せれば、互いを多少は理解できるはずだ。……アリアならうまくいくだろ。」

「ほ、本当?」

「まあ、変わる意識をもって行動すれば何とかなるだろ。Que Sera, Sera……それにキンジの中でアリアは特  
別なようだぞ。」

……そろそろ時間的に大丈夫だろう。

「ふえ!?」

アリアは真っ赤になった。

「そういえばアリア。」

「ななななな、なによ!!」

俺は真剣な顔をした。

「実はな……」

ゴクリ、アリアが唾をのんだ気がした。

「呉に地酒があつてだな……買って来てほs……。」

「未成年は買えないわよ!!!」

バシンツ!!

俺はアリアに叩かれた。……まじめな話をして恥ずかしかったのもあるが、呉の地酒が懐かしいってのもあるんだよな。ついでに江田島の酒も買って来てほしかったけど。

さて、アリアと別れてキンジ達と合流すると、服を変えたレキと理子に驚いた。

「あれだな……レキはともかく、理子が清楚な服って……意外だな。」

そしてすごく似合っている。

「イブイブ!!どういう事!」

ちよつとしたイザコザがあつたが、そのあと、キンジが予約した民宿に向かった。場所は比叡山の奥の方。レトロな感じがする民宿  
はちのこに「泊するようだ。……このレトロな感じは良いな。」

その民宿の前にワンボックスカーが止まってあって、俺達が小型バスから降りると同時に、そのワンボックスカーから男5人組が出てきた。声と体と額の大きい大男、ホームビデオを持った離れ目メガネ、帽子を被ったモジャ男、学生服を着た男2名。……この怪しい集団、見たことあるんだよなあ。

「さあ!!今回の宿!!民宿☒☒はちのこ☒☒に到着です!!」

声と体と額の大きい男がカメラに映らないところから言った。

「おい、藤崎君。君、最初有馬温泉に行くって言ってなかったかい?」

モジャ男が言う。

「実はですね……有馬温泉で部屋が取れませんでした!!」

「ここの温泉はあるんですよね?」

顔は2枚目雰囲気三枚目の学生服を着た男が聞いた。

「そこは大丈夫です!!ここは温泉と御飯が最高だそうです!!」

「それは楽しみですねえ。」

「お、お腹すいた……。」

学生服を着た顔が濃い暗そうな男が付かれてそうに言った。あ

……絶対、蝦夷えぞテレビの人たちだ。ロスで会ったぞ。

ロサンゼルスでスーヤンお嬢さんを誘拐した場所を偶然撮っていたため、FBIにビデオを提出させられたそうだ(その後、感謝状を贈ったとラス捜査官が言っていた)。その時にこの4人組を知ったのだが……なんか一人増えてる。

俺は一通り撮影が終わった後、ディレクターの藤崎さんの肩を叩いた。

「ん?おお!!!」

声でかつ!!

「どうしたんだい藤崎君……ってああ!!!」

「いやあ、これはこれは……。」

「ん?どうしたの陽ちゃん?」

「……!!!」

ロスで会った人は全員驚いている。

「いや、お久しぶりです。ロス以来ですね。」

「いや君、僕たちは今度何を撮ったって言うんだい!？」

モジャ男の和泉陽司いずみようじさんが驚いて言った。

「いえいえ違いますって。俺達も同じ宿に泊まるんです。」

「ええ!!じゃあ何だい!?!前の様にFBIとか警察に色々説明とかしなくたっていいんだね!？」

「まあ、おそろく……。」

事件が起こらなかったらな。

「い、イブイブ……この人たち……。」

「ああ、この人たちはロス旅行で知り合ったんだ。えっと、初めまして村田維吹です。軍人で、今は東京武偵高に出自しています。」

俺は初めて会った顔が濃い暗そうな人に自己紹介をした。

「あ、ご丁寧にも安浦憲之助やすうらけんすけです。」

この顔が濃い暗そうな人の名前は安浦さんというのか。

「え……確か北海道で超有名な……。」

「え? そうなの? でもホームビデオで撮影のテレビ番組だぞ?」

ぶつちやけロスでFBIとこの集団の通訳やって、その時テレビだって初めて知ったぞ。……というか、こんなにディレクターがしゃべる番組あるかよ。

「おい藤崎君、やっぱり言われてるぞ。可笑しいんだよ、やっぱり。こんなちんけなカメラで撮るのはさあ。」

「じゃあお前が担げよ!!この☒☒テンパ☒☒!!」

「なんだと!!この☒☒うどん☒☒!!」

藤崎さんと和泉さんが喧嘩をする。

「いや、ごめんなさいね。こんな醜いおっさんの喧嘩みせちやつて。」  
鈴藤すずふじさんが俺達に謝った。するとガラガラと民宿の玄関が空いた。

「あらあら、おいでやす。」

うるさくて女将さんが出てきちゃったよ。

「あ、えっと……ネットで予約してた遠山です。」

「予約しておいた藤崎ですが。」

キンジと音野さんが言った。和泉さんと藤崎さんはまだ喧嘩している。

「そう言えば村田君。」

「はい?」

鈴藤すずふじさんが俺に声をかけてきた。

「この子は彼女かい?」

そう言つて理子を指さした。

「そうです!!」

そう言つて理子は俺の腕に抱き着いた。腕に心地よい柔らかさを感ずるが……

「違います。」

「イブイブ、間髪入れて言うのは酷いよ……。」

「アツハツハツハツハツ!」

ここは混浴であつたため、女達、むさい男たちの順で入つた後（この温泉は最高だつた）、ご飯が運ばれてきた。

「アツハツハツハツハツ!!」

キンジとレキは部屋に御膳が送られたのだが、俺の取つた部屋と藤崎さん達の部屋は大広間で食べるようになっていた。で、俺と理子は同じ部屋だつた（レキが決めた）ため……藤崎さん達と酒盛りが始まつたのは必然だろう。

「おう!!村田くくん、峰ちやくくん。君たち未成年じゃないのかい?」

相変わらず藤崎さんの声はバカでかい。

「俺は許可証あるんで、藤崎さんが奢ってくれるんなら大丈夫ですよ!!」

「理子りんも持つてるので!!いえうい!!」

「どうせ理子のは偽造だろ!」

「アツハツハツハツ!!」

こんな風にみんなで酒を飲み、全員が気持ちよくなつているところ

……

ガシヤヤアン!!

窓ガラスが割れた音がした。

タアアアアン!!

じゅ、銃声!?……え!?

ダダダダダダ!!

そう言つて大広間の窓が割れた。

「全員伏せろ!!」

「なんだよ、なんだよ!!どうなってるんだよ!!ここ日本だぞおい!!」

「和泉さん伏せて!!」

俺は急いで和泉さんを伏せさせる。

「そう言えば和泉さん!!」

「な、なんだよおおお!!」

頭を押さえながら和泉さんが言った。

「また警察に説明しなきゃいけないですね。」

「うるさいわあああ!!まだ藤木君の拉致のほうがいいわあああ!!」

「アツハツハツハツハツハツ!!」

藤木さんの胆は大きいようだ。



山の登り下りは辛い……

俺と理子は蝦夷テレビの5人組を急いで大広間から脱出させた。

「つて安浦さん!?なんでパンツ一丁なの!」

大広間に来たときは全員浴衣だったのに、なんで今は浴衣を着てないんだよ!!

「いや、脱いじやったから……。」

「それは分かりますよ!!」

だから、なんで脱いだかを聞いてんだよ……シウウガナイ。俺は

☒四次元倉庫☒から防弾制服を出した。

「安浦さん!!これ着てください!!」

「いやあ……悪いねえ……。」

大広間から廊下に出て少しのところに女将さんが電話を持って呆然としていた。

「女将さん!!頭を下げて!!」

「は、はい!!」

女将さんは我に返ったのか急いでしゃがんだ。

「女将さんと藤崎さん達の安全は俺達が保証します。女将さん警察に連絡してください。」

「はい!!」

女将さんは元気よく返事をする。と高速で電話をいじりだした。

「おい、あれかい!?村田君に会おうと毎回ドンパチがあるのかい!」

和泉さんが俺にぼやいた。

「今の状況で軽口言えるなら大丈夫ですね。拳銃貸すんで周辺の警戒をお願いします。」

「き、きみい!!僕がそんなことできると思っているのかい!?ほかあね、同級生から……」

「冗談ですから!!」

和泉さんをこのまま話させていたら長くなりそうだったので無理やり切った。

「理子、狙撃兵だけだと思おうか?」

「……それはないと思う。」

裏理子で返答してきた。

「イブキ!!理子!!」

キンジとレキが部屋から出てきた。

「つてお前たち!!浴衣着てんのか!？」

あ……。やつべそうだった。

「私は中にちゃんと着てる。」

「え!?マジかよ!？」

俺なんて浴衣以外はパンツだけだぞ!?防弾制服も安浦さんに貸しちゃったし。

「連絡しました!!」

女将さんが言った。

「キンジ、俺と理子はまず民間人を避難させる。そっちは何とか犯人を引きつけといてくれ。」

俺はそう言いながら、嫌な予感がしたところに拳銃を撃った。落ちてきたのは……。黒の艶消し塗料が塗られた短機関銃搭載のラジコンヘリだった。

「い、和泉君……。今回の旅は波乱万丈だねえ。」

「波乱万丈どころじゃないよ!!文字通り絶体絶命だよ!!」

藤崎さんと和泉さんが何かしゃべってるが無視しよう。……。音野さんはビデオ回してるし。あんたが一番すごいよ。

「分かった。」

キンジが言った。

「民間人を警察に保護させたら援軍に行く。……。ついでに狙撃の方向から、敵狙撃兵は比叡山の山頂近くで撃ってる。気をつけろよ。」

「ああ!!」

「皆さんは俺と金髪の子についてきてください!!」

俺達は玄関までたどり着いた。俺はあたりを見ると……。ラジコンが3台

ダンダンダンダン!!

多少の無駄撃ちがあつたが、ラジコンを全て落とすことができた。

「藤崎さん、車借りますよ。」

「どうぞ。」

俺は藤崎さんから鍵を借りると外に出た。

……撃つてこない。俺は急いでワンボックスカーのカギを開け、大きい方のドアを開けた。

「大丈夫です!!皆さん、走れ!!」

「僕が先だ僕が先だ!!」

「……!!」

和泉さんと鈴藤さんは我先にと走り出す。

「ちよ、二人とも待つてよ!!」

「クソツ!!ハゲでうどん好きはダメなのかよ!!」

「キヤアアア!!」

……なんだか、絶体絶命で危険な時なのに、蝦夷テレビの人達見るとまるでコントだな。俺は不謹慎にもそう思ってしまった。

……ツ!!

俺はいきなり危険を感じ、後ろを振り向くと同時に銃剣を振るう。

ガアン!!

俺の銃剣が弾を引き裂いたようだ。……チクシヨウ狙つてきている。

俺は全員乗ったことを確認すると同時に車に急いで乗り、発進させた。

「えくただいま我々は旅館で襲撃を受けたため、必死で逃げております。」

「鈴藤さん!!あんた今この状態でよく実況できるな!!」

俺は思わずツツコミを入れてしまった。

「マスター、これはどうせお蔵入りだよ。ワザワザ無理してやる必要ないんだよ?」

和泉さんも鈴藤さんに言った。

「いやね、これやらないと我を忘れそうで怖い。さつきまでジツと

してたら、妻と娘が脳裏に浮かんできて……。」

鈴藤さんの目には涙が……。

「マスター……でもさ、こんな銃声の中で音拾えるかい？」

「分かんない。」

音野さんが言った。

「ほんと緊張感ないなあ!!」

俺はまたツツコミを入れた。

「アツハツハツハ!!」

藤崎さんの大きな笑い声も、幾らか元気がない。

「イブイブ!!漫才やってないで運転して!!」

理子様がお怒りのようだ。

「落としても落としても湧いてくるよ!!」

理子がラジコンヘリを落としているが、わんさか出てくる。

ダダダダダダ!!

ツち!!窓ガラスが割れた。

「じゃあ一気に抜けるぞ!!何かに捕まれ!!」

「イブイブ!!ここには比叡山ドライブウェイしかないよ!!」

「誰がほかの道で行くと言った!?!」

バキッ!!!

俺は思いつきりハンドルを切り、ガードレールを突き破った。

「抜けると言ったんだ!!」

ガタガタガタガタ!!!

俺達の車は道なき道を走り出した!!

「いやあく今のセリフかつこいいですなあ!!」

藤崎さんが和泉さんに言った。

「聞いたかい!?今のセリフ!!……誰がほかの道で行くと言った!?抜けると言ったんだ!!まさか主人公が言うセリフだねえ。僕も一回はこういうセリフを言ってみたいよお。」

和泉さんもしゃべりだした。

「村田君が主人公ならヒロインは峰ちゃん、我々は主人公の愉快的仲間たちですな!!」

「となると藤崎君は一番先に死ぬね。☒☒うどん取ってくる☒☒って言ったまま帰ってこなくて、僕と村田君が助けに行くか行かないかで口論に……」

「そんなに元気なら運転代わってくれませんか!？」

俺は思わずまたツツコミを入れた。

「ゴメンナサイ……。」

「……ツプ」

なお、TV放映時には襲撃シーンなどはカットされたものの、DVD版には襲撃シーンをいれられることになるのは、この時誰も想像しなかったのである。

犬（山犬？なんで今の時代に）を大量に轢きながら（動物愛護協会の方ゴメンナサイ）道なき道を突き進むと川沿いの道に出た。そして、そのまま一気に山を下りると、交番が見えた。俺は車を交番の前でドリフトさせながら止めた。

「終点、交番前、交番前でございます!!お忘れ物がないようお願いします!!」

「……忘れ物しかないよ。」

安浦さんがぼやいた。

「衣服の着忘れなんて前代未聞ですから。」

俺は思わず言った。

その後、交番の人たちが急いで出てきたので民間人6人を保護してもらい、俺と理子は再び比叡山へ車を出した。

「理子、あのラジコンはお前と手口が似てるんだが……。」

「ああ、おそらくツアオ・ツアオの犯行だろう。」

裏理子が……。

「ツアオ・ツアオ?……ココか!?……中国人の小っちゃい子だっけ?」

「そうだ。」

あの子、気前よく酒をくれた子（嘘ではない）だったな。

「理子、そいつならどこを警戒する？」

「ここなら……道は絶対警戒だ。それに山にも警戒装置か何かはあるだろう。」

「面倒な……ならここならどうだ？」

俺はある移動手段を言った。

「そんなのバレるに決まってるよ!!」

今、表理子に戻った。……そんなに驚くことか？

「理子、確かにこれは使うが、乗り物は使わない。足で移動だ。」

「……確かに今日は新月だからバレないかも。」

「それじゃ行くぞ!!」

俺はボロボロになった車を飛ばした。

俺達は今、空にいた。

「ハアハア……いい、イブイブ、やっぱり無理だよお……。」

「理子だって賛成しただろ？がんばれって！後、バレるから静かに。」

比叡山の頂上付近に陣取る敵にどうやって近づくか。頂上へ向かう道も獣道も山にも警戒装置がある。ならどうする……？

答えは比叡山には頂上に向かう公共交通機関のケーブルカーとロープウェイを使う。しかし、勝手にそれらを動かしたらすぐにバレる。ならどうするか……。徒歩で線路を歩き、ロープウェイのワイヤーを綱渡りするしかないよね（なお、使う叡山ケーブルはケーブルカーで日本最大の高低差がある）。今夜は新月なので月明りでバレることもない。

……うん。おそらく、最も愚かな選択だと俺は思う。もし俺が敵なら思いついても外すからな。ケーブルカーはまだしも、ロープウェイを綱渡りで渡る馬鹿なんて普通じゃない。カット

時を少し戻す。蝦夷テレビ一行と女将を交番に届けた後、俺達は叡山ケーブルのケーブル八瀬駅に車を止め、線路に出た。

「……靴履いてなかった。」

今の装備、浴衣、帯、パンツの三点セットのみ……。

「理子のは貸せないよ?」

「……わかってるよ。」

靴なんて☒四次元倉庫☒にも入れてねえよ!!俺は諦めて、三八式歩兵銃を出し、艶消し黒で塗られた銃剣ゴボウ剣を着剣した。……ああ、そういえばナカジマ・プラザのおっさんも裸足だったな。あの時の様に割れたガラスが散乱してなきやいいけど。

俺は銃剣をつけた三八式を持ちながら、高低差日本一のケーブルカーの線路を歩いて上り、ケーブル比叡駅に着いた。……足が痛え。ケーブル比叡駅に到着すると、近くにある叡山ロープウェイ・ロープウェイ比叡駅に行く。三八式のスリングベルトを肩にかけ、ロープウェイのワイヤーにしがみついてさらに上を目指す。

そして今、やっとロープウェイの3分の2まで来たところだ。……理子、俺だつて文句の一言二言ぐらい言いたいんだよ。確かに俺が提案したけどさ、これ以外何があるんだよ。道もダメ、獣道も、山にも警戒装置があるなら、公共交通機関を歩くしかないだろ?しかも俺は裸足に浴衣だぞ?いくら9月でまだ暑いとは言え、この格好は寒いんだぞ?寒いのに素手素足でワイヤーにしがみついて登るんだぞ。痛いつてもんじゃねえよ。

「なんだつて俺がこんな目に……。」

「イブイブ、バレルるよ!あとあそこ見て。」

もう少しロープウェイを上った場所の真下に、大量の機材の近くに少女が狙撃銃をもって何か狙っている。

「あれがココだよ。」

「……ここは世界遺産の比叡山。文化財保護のためには、銃をあまり使いたくない。……白兵戦しかないな。」

「……真上まで登って、そこから一気に奇襲しよう。」

「い、イブイブ!?この高さで落ちたら死んじゃうよ!?この支柱から降りようよ!?!」

「大丈夫だつて、なんなら理子抱えて降りようか?」

「……わかったよ。」

なんか理子は真っ赤になりながらも覚悟を決めた顔をした。

「何顔真っ赤にしてんだよ。」

「う、うるさい！」

俺達は必死になって再びワイヤーを登り、ココの真上に着いた。俺は何とかして理子を抱えると、命綱替わりの手錠（ベルトとワイヤーを手錠でつないでいた。）を外して下に落下した。

「うわあああああああ!!」

理子うるさい。

着地すると同時にココが俺達に気づいた。

「ど、どこから来たネ!?!」

「空からだ!!」

俺はそう言っつて三八式を持ち、突撃して銃剣をココへ突く。

ギイイイン!!

俺の銃剣をココが狙撃銃で防いだ。その瞬間……

パアアアア!!

突然、探照灯が照射されたかのように俺とココの間が光りだした。

せ、閃光弾か!?!

「イピカイエー・マザーファッカー!!」

目は見えなくても、ある程度の気配でわかる!!!俺はココを銃床で

殴った。殴ったと同時に……

ギイイイイイイイン!!!

今度はココと俺の間に音響弾が……

「チクシヨウ!!なんだって俺がこんな目に!!!」

俺はそう言いながら、気合でその爆音に耐えつつココのマウントポジションを取って殴りつけた。

……あれ?前回会った時は格闘戦に白兵戦はある程度できると思っていたのだが、こんなに弱いのか?疑問に思いながらもココを殴り続けた。



「うがあああああ!!」

理子が、女の子が言っただけにはいけない様な声で叫んでいるが無視しよう。

目と耳が回復すると、そこには気絶しボコボコにされたココがいた。

「ハア…ハア…ハア…時計が壊れてねえ!!…午前3時34分、えつと…殺人未遂の容疑で現行犯逮捕だ!」

よく見るとココの股がビチョビチョに濡れている…。彼女の尊厳のためにこれ以上は言及しないでおう。

ハア…なんだって裸足と半裸で比叡山を登山し、ワイヤーにしがみつき、拳銃の果てには閃光と爆音でボロボロになんなきやなんねえんだよ!!

俺はそう思いながらココの襟首を掴んで引きずりながら、耳を塞いでゴロゴロ転がっている理子のもとに行った。

「おい、理子…大丈夫かあ?」

「む、無理いいい…。」

俺は理子が回復するまで背をさすってあげた。

数分後、理子も回復したようだ。

「イブイブ…ありがとね。」

理子は真っ赤になりながらお礼を言った。

「まあ…相棒だそうだし…。」

なんだかこつちも恥ずかしくなってきたぞ。そう思った矢先

バラバラバラバラ…

ん?へりの音?なんで比叡山の山頂近くでへりの音が聞こえるんだ?

バラバラバラバラ…

次第に音が大きくなってゆく…。近づいてきてるようだ。

「なあ、理子。」

「な、なに?」

「今、メチャクチャ嫌な予感がするんだけど……。」

俺の第六感が危険を伝えている。……十中八九、このへりのことに  
関してだろう。

「あ、やっぱり？ 理子もそう思うんだあ……。」

「お互い似たもの同士だな。」

「アハハハハ……。」

バラバラバラバラ……!!!

すると、俺達を何かサーチライトが探照灯で照射した。それは……

「UH-60!？」  
ブラックホーク

理子がそう叫んだが……そんな優しいもんじゃねえぞ!？」

「違  
う!!」

MH-60L Direct Action Penetrator  
だ!!逃げろ!!」

HS部隊にいた時、アメリカの特殊部隊と共同で任務を遂行してい  
た 時 に 教 え て も ら っ た こ と が あ る 。  
MH-60L Direct Action Penetrator  
はただの兵員輸送ヘリじゃない。米軍特殊部隊が使用する、兵員輸送  
もできる攻撃ヘリコプターだ。武装はM230 30mmチェーング  
ンにハイドラ70ロケット弾、M134 7.62mmガトリング機  
銃、ヘルファイア対戦車ミサイル……下手な攻撃ヘリコプターよりも  
恐ろしい。しかも赤外線装置もあるため、影の薄くなる技が一切  
使えない……。要は……八方ふさがり、絶体絶命。

俺は気絶しているココを小脇に理子と一緒に逃げ出した!!  
ドドドドドドドド!!

敵が30mmチェーングンを撃ち出した。

「何だってこんな裸足で山の中走り回らなきゃならねえんだ!!」

「イブイブの消える技は使えないの!？」

「あれは人間の脳を騙して消えてるように見せかけるだけだ!! 赤外線  
装置なんかから逃げられるはずねえだろ!？」

ババババババババババ!!!

チクショウ!!ガトリング機銃まで撃ち始めたぞ! 俺達は転がるよ

うに森林へ逃げ続けた。

途中で襲ってきた犬達を倒しながら一気に山を下っていく。

ババババババババババババババ!!!

「ウツー！」

俺が弾をもらったようだ。その時、目の前に洞窟が見えた。

「いったんあそこに避難するぞ!!!」

「わかったよ!!!」

バシユシユシユシユシユ!!

ウソだろ!? 敵は無誘導ロケット弾を斉射し始めた。

「逃げこめ!!!」

俺は理子も抱えて洞窟へ飛び込んだ。

ズドドドドドドローン!!!

「うわああああああ!!!」

俺は大量の鉄片を浴びながらも、何とか洞窟へ入った。

「イブイブ!! 大丈夫!?!」

「大丈夫なように見えるかあ!?!」

……まあ、アドレナリンのせいとか、痛みはあまり感じないが。俺は三八式を四次元倉庫へしまい、今度は25ミリ機銃を出した。  
「理子、ちょっと落としてくる。」

俺はそう言いながら、弾倉に曳光弾と平賀さん製の装弾等付翼安定徹甲弾を込めた。

「イブイブ!?! 囧になる気!?!」

「そんなわけあるか!?!」

俺はそう言って弾倉を銃に差し込んだ。……いつの間にか、帯も無くなってるよ。もはや文字通りパンツと浴衣だけか。

「あの自信家に灸をすえるんだ!?!」

俺はそう言って洞窟の出口に足を運んだ。

そう、向こうはいつでも俺達を殺せるはずだった。それなのに甦る

様にしか攻撃しない。……パイロットは舐めてやがる。

俺は無駄だと思いなながらも影の薄くなる技を使つて洞窟の外に出た。

……ババババババババ!!!

少し遅れたな。俺は近くの大木に隠れた。そして25ミリ機銃の二脚を立てながら、一息休む。

「こっちだよ!!」

理子が洞窟から出てきた。あ、あいつ!!へりが理子の方へ向いた。それと同時に転がるように大木から出た!へりは急いで俺の方へ向きなおす。

……ババババババババ!!!

向こうが撃ってくるが気にしない。

「イピカイエー・マザーファッカー!!」

ダンドンダンドンダンドン!!

俺はへりのローターの軸にすべての弾を叩き込んだ。……ッ!!また被弾か!!  
ベキツ

ローターの軸が折れたと同時にへりが落ちて行く。俺は急いで大木に隠れた。

ドカーーーン

へりは墜落と同時に大爆発。その爆風によってまたも鉄片を浴びたが、致命傷はなかったようだ。

……そう言えば、敵のへりの操縦手がココと瓜二つだったのはどうしてだ?

俺達は再び、急いで下山していた。途中で何匹も犬が襲ってきたので返り討ちにしながらも進んでいく。

「あそこに街灯が見えるよ!!」

理子が叫んだ。犬が襲ってくる以外は敵からの攻撃はない。……流石にもう襲撃はないだろう。そう思いながらその大きな道に出た

瞬間

キキキキキキッ!!

真っ赤なオープンカーが突っ込んできた。……轢かれる!?

「危ない!!!」

俺は理子とココを投げ飛ばした。

バキッ!!

……今日は踏んだり蹴ったりだ。狙撃兵と短機関銃搭載サブマシンガンのラジコンヘリに追い回されながら急いで下山して、その後ケーブルカーの線路を徒歩で登り、ロープウェイのワイヤーにしがみついて自力で登って……。敵を倒す間にも閃光弾に音響弾で目と耳をやられて、敵を倒してきたと思ったら武装ヘリと犬に襲われて……。最後は車に轢かれるのかい。しかも半裸の不審者姿で……。せめて何か服を着させてくれ……。

俺は薄れ行く意識の中でそう思った。

完

「ンなわけあるか!!!」

俺はそう言いながら起きると、そこは知らない部屋であった。え? どこ!?

試験かよ……

「んなわけあるか!!!」

俺はそう言いながら起きると、そこは知らない部屋であった。え？どこ!?

俺は周りを見渡した。……俺はどうやら広い和室に敷かれた布団に寝かされていたようだ。

今度は俺自身を見た。怪我を治療してもらったのか包帯が至る所に巻いてある。衣服は民宿できていたのと違う浴衣だ。俺は急いでパンツも見る。……こんな柄のパンツを俺は持ってない。

俺は部屋を出た。……捕まったのか？それにしてもこの屋敷は純和風過ぎる。

「村田様？」

俺は声のする方向を向いた。そこには、巫女さんが……もしかして「風雪か？」

風雪は白雪の一歳下の妹だ。ついで海外の教会や寺院との外交担当でもあるらしく、HS部隊にいた時は時々会っていた（そのことについて粉雪はすごく悔しそうにしていたが……何故だ？）。

「もう立っておられるんですか!？」

……あれ？そういえば風雪はクールな性格だった覚えがあるが……すごく慌てている。

「とりあえず部屋で寝てください!!お医者様をお呼びしてまいります!!」

「あ、ああ……。」

なんであんなに慌てているんだろうか？俺はそう思いながらいったん部屋に戻った。

するとすぐに若い女医さんが俺のいる部屋に駆け込んできた。

「おう、早く見せろや!!」

フチなしメガネの女医さんは銃を俺に突きつけながら言った。

「……見せるんで銃を下ろしてください。」

何で医者に銃を突きつけられなきやいけねえんだ。

俺はおとなしく、女医さんの診察を受けた。

「なんであんな傷がこんな短時間でここまで回復するんや?」

不思議そうに俺の体を見た。

「……そんなに重傷だったんですか?」

すると、女医さんは深刻そうな顔をしていった。

「銃創5カ所、17の鉄片を取り出し、全身打撲、捻挫と脱臼、そして大量出血だ。手術が終わった後、良く生きているなど感心したほどだ。」

「……重傷だ。普通なら死んでいるだろう。だけれど

「そのくらいですか。」

「そのくらい!?!」

理子にやられて傷に比べたらなあ……。

「お前どんだけ傷負ってたん!?!」

「……色々ありました。」

……かれこれ十年前の地獄のような高層ビルに閉じ込められたあの日から、俺の☒ツいてない☒人生は始まった。……結局、いろんな場所で何度も死にかけた。今度は比叡山かあ?

俺の目はきつと瞳孔が開き、ハイライトは消えていただろう。

「……相談に乗ったるさかい、言ってみい。」

女医さんの肩が下がったような気がした。

「……言うとう覚しそなんでもいいです。」

「そうかい……。」

女医さんがモルヒネを打ち、出ていったと同時に理子が俺に飛び込んできた。

「イブイブ!!大丈夫!?!死んでない!?!」

「大丈夫、大丈夫。モルヒネが効いてるから。」

俺はそう言いながら抱き着いてくる理子を離した。……モルヒネ

効いてると言ってもさすがに痛い。

「ここは何処だ?」

なんとなく予想は付くが確認はした。

「ここは星伽神社の京都分社だよ。それよりもイブイブ!!本当に大丈夫?!最後は轢かれたんだよ!」

「大丈夫だって、慣れてるから。」

……海鳴旅行でね。

「慣れてるって何!」

「いや落ち着けて。」

「理子りんはそんなの聞いてないよ!」

「いや、だって夏休み中にやったし。」

というか報告しなきゃいけないのか?

「なんで教えなかったの!」

「なんで教えなきゃならねえの!」

あと、キャラブレすぎ!!……などと思いながら理子と話していると、外が騒がしくなってきた。

俺と理子は口論を止めてその騒がしい原因のところに行く……。

「和泉さんだ!!サインください!!」

「そして料理も作ってください!!」

「安憲<sup>やすけん</sup>だ!!」

☒0<sup>レイウ</sup>uちゃん☒の中の人だ!!」

「マスターだ!!」

「インキーマスターだ!!」

蝦夷テレビの5人組が鳥居の前において、彼らをこの見習い巫女の子達が囲んでいる。なんでこんなにこの5人が人気なんだ?……ああ、本社は青森にあるからギリギリ蝦夷テレビが見えるのか。

「いやあくさすがは天下の和泉さんですなあ!!」

「やっぱり僕たちは有名人なんだよ。やっぱり京都はいいね。時代は京都にあり。1000年の古都・京都。京都は最高だね。」

……藤崎さんと和泉さんは相変わらず漫才のような話を続けている。



「いやね、やっぱり京都の人は本物を見つける目があるんだよ。」

「この子達は基本青森出身ですから知ってるんじゃないですか？」

俺は和泉さんに言った。

「え……そうなのかい？」

和泉さんは思わず見習い巫女の子たちに聞いた。

「私はそうです！」

「私は違うけど、青森にいた時見ました!!」

結局全員青森にいた時見たから知っているようだ。

青森 出身!!

……なんかテロップが流れたような気がする。すると、安浦さんが出てきた。

「村田君、制服ありがとう。……ケガは大丈夫かい？」

そう言つて安浦さんは紙袋を俺に渡してきた。中には……折りたたまれた制服が入っていた。

「そうだよお〜村田くうくん。何でも比叡山にへりが墜落したって話題になつてたよおおお!!」

藤崎さんが大声で俺に聞いてきた。

「まあ、あの後……俺は裸足と浴衣だけで、理子と一緒にケーブルカーの線路を足で登つて、ロープウェイのワイヤーにしがみついて自力で登つて……。その後何とか犯人を押さえたら、その件の戦闘へりに追い掛け回されて……。野犬(?)に襲われながらも何とかそのへり落としたら、最後は車に轢かれましたよ。」

俺はよく生きて帰れたなあ……。

「アハハ……ほんと、イブイブとよくあの山降りてこられたよね。」

「アハハハハ……」

俺と理子はカラ笑いをしていた。

「あ……あの……」

すると、風雪が俺達に何か言いづらそうにしていた。

「どうした？」

「……捕まえた犯人なんです。」

「俺達が必死に捕まえたよね？」

「イブイブが引かれた後、警察に引き渡したよ。」

俺は理子に聞いた。……やつぱりちやんと捕まえてる。まさか理子の時の様に襲撃されて脱走なんて……

「連行中にパトカーが襲撃を受け、犯人が脱走したようです。」

犯人 脱走!!

またテロップが流れたような気がするが、それを気にしているどころの騒ぎではない。

「……ゴメン。よく聞こえなかったようだ。」

「……かざちやん、理子りんも聞き間違いだと思うんだあ。」

俺達は、『きつと今の言葉は間違いだ、間違いに違いない、間違いであってくれ』と思っていただろう。

「村田様と峰様が捕まえた犯人は、連行中に襲撃され、犯人は脱走したそうです。」

犯人 脱走!!

俺は、知らないうちに膝を地面につけていた。……俺のあの努力は無駄だったのか?ここまでケガを負ったのに?

「……ねえ、イブイブ。」

「……なんだあ?」

「……私達の努力って何だったのかなあ。」

「てやんでい……俺は一回お前にやられてらあ……。」

俺はエアジャックの時に、理子を捕まえたのにその後脱走された経験があった。

「……イブイブ、ごめんなさい。」

そう言つて理子は土下座した。

「おお……理子お……もう終わったことだろお……。蒸し返すな、余計に落ち込む。」

もう……考えたくないよ。

少し経つと、俺と理子は何とか立ち直った。

「では皆さん!!最終試験はここでやろうと思います!!」

藤崎さんが言った。……最終試験？何のことだ？

「……藤崎君、確かに今日が最終試験の日だ。だけれど昨日襲撃があつたんだよ!?!だから生徒達は復習できなかつたんだよ!!このままやれば、ぼかあまた四国へ行くことになるんだぞ!!」

和泉さんが慌てた口調で言い出した。

「それは我々も分かっていきます。なので……ここにお二人のノートがあります!!」

そう言つて藤崎さんは2冊のノートを出した。

「今から1時間後に試験を開始します。そして、ここにいる方の中で4人参加してもらいます!!」

……ここにいる中で4人。俺達の中で4人か？

「あのく藤崎さん。」

「峰ちゃん!!何でしょう!?!」

「ここにいる中で4人」つて、理子りん達の中から4人つてこと?」

「はい!!そうです!!」

藤崎さんが元気よく答えた。

「つてなると藤崎君!!生徒たちが満点取れないと僕は四国へ行くんだよ!?!さらに人数増やして、余計に四国へ行く確率が増えたことになるだけでないのか!?!」

和泉さんが焦りだした。

「わかつております。そこで……今から1時間、和泉校長に直前対策講座を開いていただき、全員8割以上取れば合格とさせていただけます!!」

……とりあえず

「……風雪。」

「なんででしょう?村田様。」

いま、フリーなのは俺と理子だけだ。4人に足りない。

「星伽関係者は出てもいいのかい?」

「さつき確認したところ、出てもよいと本社の方々が言っております。そして」私たちは藩士なのでサインも欲しい」という事です。

……藩士とはファンの総称か?というのか、いいのかよ星伽神社さ

んよ。

「あ、イブキ君！立てるようになったの!？」

「い、イブキか!？」

俺を呼んだ方向を見ると、巫女服姿の白雪と寝間着姿のキンジが驚いていた。

「んあ?……白雪とキンジか。おう、モルヒネが効いてっからピンピンしてるぞ。」

俺はそう言っつて肩を回す。……少し痛い。これ、モルヒネ切れたらメチャクチャ痛いだろうな。

「お、お前!!だつて車に轢かれたんだぞ!!それに戦闘ヘリに犯人逮捕だつて……。」

「キンジ。」

俺は真剣な顔をしてキンジを呼んだ。

「……犯人のことは俺と理子の前で言わないでくれ。マジで。」

「あ、ああ……。」

……さて、嫌なことを忘れよう。

「藤崎さん、試験つて何をやるんですか？」

俺は聞いた。

「今回は日本史のセンターレベルの問題をやってもらいます!!範囲は戦国時代です!!それで8割以上取れなかった場合、和泉さんに四国八十八カ所を巡礼してもらいます!!」

……俺達に何かあるわけでもないのか。

「キンジやろうぜ、この企画。」

「何でだよ。」

キンジは嫌そうに言った。

「お前、一般高校行ったら勉強しなきゃいけないんだぞ。その勉強をワザワザ、タダでやってくれるんだ。これほどうまい話はないだろう。」

するとキンジはしばらく考えた後

「参加します。」

そう言った。

ゴロゴロゴロゴロ……

見習い巫女達が黒板やゴザ、机に座布団を持ってきた。……授業は外でやるのか。

「では参加する皆さん!!席についてください!!」

「しゅくしゅりよおおくくく!!!」

藤崎さんの大声が星伽神社京都分社の前に響いた。……もう一時間たったのか。

「イブイブ……。」

「理子、どうした?」

「あの人、ふざけた声で喋ってたけど分かりやすかったね。」

和泉さんの授業は意外にも分かりやすかった(でも、変な声&覚えづらいゴロがあるが)。

「意外だよな。」

俺もうなずくと

「和泉さんはですねえ、教員免許を持ってるんですよおおお!!!」

藤崎さん、うるさい。

「高校の地理と日本史を持っております。」

そう言つて和泉校長(?)が色付き眼鏡をクイツと上げた。……意外だ。

さて今回、この実力試験(?)を受けるのはこの6人。

「緊張するなあ。」

なんか、オチになりそうな鈴藤さん。

「今度こそは!!合格して見せます!!!」

やけに意気込んでいる安浦さん。この人は違う意味でオチになりそう。

「キンちゃん!頑張ろうね!!」

おそらくこの中で一番成績の良い白雪。

「ああ、これならできるかも……。」

珍しく気合いを入れているキンジ。

「イブイブ、理子りんの本気を見せちゃうゾ！」

……理子。面倒だから関わらないでおこう。

「……間違っても和泉さんが八十八カ所回るだけですよね。テレビ的には間違えたほうが……。」

そして俺。

「イヤイヤイヤ!! 高校生の皆様には是非とも満点を取ってください!!」

藤崎さんが言った。

「村田君、君は四国の恐ろしさを知らないからそんなことを言えるんだよ!」

和泉さんも慌てて言った。

「でも四国八十八カ所ですよね? 大体2週間程度で回るんじゃない?」

「僕たちはね……五日で回ったんだ。幽霊も引き連れてねええ!」

……い、五日!? 普通の半分のペースで!?

「四国はね……魔の島だよ……。ずっと同じ景色で山道を走らされるんだ。酔いながらねええ!!」

やべえ……。和泉さんからオーラが見えるぞ。

「昼も夜もずうつと回らなきゃいけないんだよおお! それを僕たちにまたやらせるって言うのかい?」

「アツハツハツハ!!」

和泉さんの脅しに藤崎さんの笑い声……これ本当にテレビかよ。

「和泉君、そろそろいいかい?」

藤崎さんが和泉さんに聞いてきた。

「……では皆さん。準備の方はいかがなもので御座いませうか?」

……安浦君!!」

和泉さんは仕切り直し、安浦さんに聞いた。

「はい……大丈夫です!」

そう言って安浦さんは何か決心したように、ノートを両手で和泉さ

んに渡した。

「頂戴いたします。」

和泉さんはそう言ってノートを安浦さんから受け取った。

「鈴藤君の方はどうですか?」

「はい……このほか、こういう事をしばらくしてなかったものですから……若干緊張しております。」

そうやって鈴藤さんはノートを渡した。……確かに、笑顔が張り付いているように見える。

「緊張していますかwww。……では、飛び入り参加の諸君!!」

……俺らの事か。

「二二はいい!!一時間で……(この一時間……)(分かり易い……)(変な声で……)二二」

「一気にしゃべるなよ!!」

「アツハツハツハ!!」

全員のノートを回収すると、今回の試験の説明を始めた。

「えく……とにかく皆さんは全力を尽くしてもらえれば、必ずいい結果が生まれる……」と思っております!では……試験のほう、説明させていただきます!と思います。」

そうやって和泉さんは全員の顔を見た。

「今から10問の、問題が出ます。そして、皆さんにはあくまでも満点を取っていただくと……。もし3問、間違えてしまった場合は……その時点でその方は、四国行き、決定!!ただし、飛び入り組の皆さんの場合は私だけが!!四国行き……と。私は信じております!全員満点を取って、家に帰ると……という事を私は望んでおります。……安浦君いいね?顔が歪んでるよ?」

安浦さんの顔は、顔芸と間違うばかりの顔つきだった。

「では……試験についての質問!!ありますか?」

「二二……ないです!!」二二」

試験を受ける6人は威勢よく言った。

「……大丈夫だね!!行きます!!それでは……~~二二~~どうでい・日本史く

信長の統一編く~~く~~参りたいと思います。……第一問!!」  
そして、試験が始まった。

「第十問!!」

意外なことにみんな健闘しており、鈴藤さんと安浦さん、キンジが2問間違えりーち。俺と理子が1問間違えギリギリセーフ。白雪はさすがの0問ミス……。

『第十問：次の戦国大名ア〜エについて、守護から戦国大名になった者を下から一つ選べ。』

ア 北条早雲

イ 武田信玄

ウ 上杉謙信

エ 毛利元就 』

(みんなも考えてみてね)

「これはちよつといやらしいねえ〜」

藤崎さんの声が響く。

ゴクリ……

解答者だろうか、見ている見習い巫女達からだろうか……つばを飲み込んだ音が聞こえた。

「できました!!」

安浦さんの声が聞こえる。俺もできた。流石に大丈夫なハズ……。

「皆さんできましたね?……では、答えをどうぞ!!」

その声と同時に俺達はフリップを回した。

「ア」 ↑ 藤崎さん

「ウ」 ↑ 安浦さん

「イ」 ↑ 白雪

「イ」 ↑ キンジ

「イ」 ↑ 理子



「イ」↑俺

「わ、分かれましたねえ〜」

藤崎さんの声が聞こえてくる。

「確か……北条早雲は伊勢氏、上杉謙信は長尾景虎だから長尾氏、毛利は国人出身だったと思うんですよ。」

俺が思わず言った。前世で一時期、歴史物の小説にはまっていたからな。この時代は得意だ。

「あ……」

藤崎さんと安浦さんの声が聞こえた。和泉さんが慌てている。

……え？まさか。

「ふ、藤崎君！答えは!!」

和泉さんが震えた声で藤崎さんに聞いた。

「第十問……イ!!」

「二うああああああ!!!」

和泉さん、鈴藤さん、安浦さんが叫びながら倒れた。

校長先生

マスター

安浦君

四国決定!!!

……今絶対テロップが出たな。

「色々ありまして8割合格にしましたが、今回も卒業生が出ませんでしたな〜。」

藤崎さんがからかう。

「とうるか、飛び入り参加組が全員合格なのに、二人は落ちるって……。」

音野さんが珍しくしゃべった。すると、和泉さんがフラフラと座りなおした。

「うーん……試験に出るどうでいいは難しいですなあ……。だって、今まで通りにやってたら二人ともすぐ落ちちゃうんでしょ？あんなことがあったとはいえ……。」

和泉さんがぼやいた。

「え〜……特別ルールのおかげで善戦しましたが、今回も純粋な合格者は出なかったと……。☒どうでいゼミナール☒留年と……。という事でね、次回!!☒☒どうでいゼミナール☒があれば、この二人で頑張っしていきたい……。という風に思っております。」

和泉さんが閉めの言葉をしゃべり始めた。

「私はもちろん!!四国行き決定!!そして鈴藤君、安浦君も一緒に四国に行くという事で……。一人よりも二人!!二人よりも三人で!!受験生の合格を祈りたいと思います!!案ずるな 受験生!!今年は三人で行くぞ!!どうもありがとうございました!!」

四国八十八カ所3 withマスター&Ou!!

……。ここで次回予告でも入るんだろうなあ。

この後、俺達は東京に戻らないといけない。何故なら、神崎かなえさんの裁判が再開されるため、それに備えるためにイ・ウーと戦った俺達は弁護士との事前打ち合わせを予定していたからだ(なお、エル、牛若、ニトは不参加。戸籍改竄がバレないように、念のためだ)。

そのために俺達は今日の夕方に新幹線に乗って東京に戻らなければいけないのだが……。藤崎さんが新幹線代を奢ってくれた。何でも、ギャラの代わりとしてもらって欲しいそうだ。なので俺達は有難くいただいた。ついでに、和泉さん・安浦さんは東京での初舞台があるため、俺達と同じ新幹線で戻るそうだ(絶対ついでに買っただろ)。

それが、和泉さん・安浦さんの悲劇につながるとは誰が思っただろうか。

一般人に爆弾って……

俺達4人と和泉さん、安浦さんは東海道新幹線のぞみ246号、東京行きに乗った。キンジと白雪、和泉さんと安浦さんは16号車、俺と理子は15号車に乗ることになった。なんでもそこしか取れなかったらしい。

俺と理子が指定された席に座ろうと……

「あら、イブキと理子じゃない。ここの席なの？」

俺達の席の後ろにアリアがいた。

「ああ、まさかアリアの前の席だとはなあ。」

俺はそう言いながらアスピリンを四次元倉庫から出して煽った。モルヒネが切れたのか、体が痛くなってきたためだ。ついでにこのアスピリンはアメリカ土産だ。アメリカはアスピリンの大量消費国で、おっさんが勧めてきた。

「すまんアリア。昨日ココに襲われて疲れてるんだ。寝かしてくれ。詳細は理子が言う。」

俺はそう言っただけで眠りに入った。昨日はなんだかんだあって、朝の5時まで戦ってたんだ。起きたのも10時くらいであまり寝てない。ここで体力を回復させてくれ……。

周りがうるさくなくなって俺は起きてしまった。

「なんだあ？こんなにうるさくなって……。」

『お客様に お伝えしやがります。』

アナウンスが流れてきたが……何故ボーカロイド？嫌な予感しかない。

『この列車は どの駅にも止まりません 東京駅まで ノン ストツプで 参りやがります アハハ アハハハ!!』

……おい、ウソだろ!?

『列車は 3分おきに10キロずつ 加速しないと いけません さもないと、ドカーーン！大爆発!!しやがります アハハ アハハハハ』

ハ!!』

……戦闘ヘリに追っかけられて、車に轢かれて、次は  
特急列車乗っ取りかよ!!  
エクスプレス・ジャック

「なんで俺がこんな目に……。」

……ぼやいても始まらないか。これは理子の起こした事件にすぐ似ている。しかし、これは理子がやったものではない。

「理子!!心当たりは!?!」

「やられた!!ツアオ・ツアオ……。もう、動いたのか。あの守銭奴め!!!」

鋭い目つきで、理子は呟いた。

「……因果応報だな、~~武偵殺し~~さんよ。」

キンジは理子の肩を叩く。

「ツアオ・ツアオは……子供の癖に悪魔染みた発想力を持った、イ・ウーの天才技師だ。莫大な金と引き替えに、魚雷やICBMを乗物に改造したり……。キンジ、お前のチャリに仕掛けた~~減速爆弾~~の作り方を教えたのもツアオ・ツアオだ。これはその改良版……。~~加速爆弾~~!!!」

……おかしい。何だって今日の早朝に逃げて、午後にはしかけられるんだ!?!

「イ・ウーの……爆弾戦術の講師ってところね。理子、アンタ……。生徒ならこの爆弾の基本構造は分かってるんでしょ、すぐに起爆装置を探し出して解除しなさいよ」

アリアが言った。すると理子は、齒軋りをしながら両膝の間に手を突っ込んで、シートを探る様に動かしあと、

「何故だ!?!私の席に仕掛けがない!?!」

理子が叫んだ。

「どういう事!?!」

アリアが聞いた。

「私はこの爆弾の基本構造を知っている。だから私に何か仕掛けをして、動けないようにするのが定石だ!!」

俺と理子の切符は藤崎さんが手配した。そして、キンジと白雪、和泉さんと安浦さんの切符も藤崎さんが手配した。しかし、俺と理子、

キンジと白雪は普通に立っている。……もしかして。

「16号車へ行くぞ!!」

俺と理子が同時に言った。

和泉さんと安浦さんは爆睡していた。

「和泉さん!!安浦さん!!起きてください!!」

俺は二人をたたき起こした。

「なんだい?ぼかあ、疲れてるんだ。もう少し寝かせて……。」

「……脱いだほうがいいですか?」

何で安浦さんは脱ぎたがるんだよ!!

「緊急事態です!!二人とも座ったまま足を上げてください!!」

俺は無も言わずに二人の足を上げさせると、理子と一緒に二人の座っている椅子の下にあるカバーを外す。

「うわあ……。」

そこには、爆弾が二つあった。しかも感圧スイッチが座席についている。……もし、二人がこの席から立ってしまったら、木っ端微塵になっちゃおうだろう。

「な、何なんだよ!!何が起こってるんだよ!!」

和泉さんはやつと周りの異常性に気がついたのか、いつも以上に慌てている。安浦さんも周りをキョロキョロと見回している。

「和泉さん、安浦さん、悪い方とすごく悪い方のどっちの情報か聞きたいですか?」

「悪いのしかないじゃないか!!あれかい!?君たちは疫病神か何かかい!?」

和泉さんがぼやく。

「それなら確実に、疫病神はイブキだな。」

裏理子が答えた。

「俺は何があってもそれは認めねえぞ。」

「……とりあえず、すごく悪い方からお願ひします。」

安浦さんがどっしりとした態度で聞いてきた。

「……さすがは大人。貫禄がありますね。」

「もうね、どうにでもなれって感じよ。」

安浦さんはそう言つて、ペットボトルのお茶を一口、口にした。

「……和泉さんと安浦さんの椅子の下に爆弾が置かれています。しかも感圧スイッチがついているので、席から立ったとたん…爆発です。」

二人の顔は真っ青になった。

「悪い方は……。」

ガンガン！ガキイン！

何回かの金属音が響いた後、周り乗客たちが悲鳴を上げながら通路を駆け逃げ出した。音のしたほうを見ると……誰かが運転室の内側から扉を叩き割つて出て来た。

「你好、キンチ。ここで立直ネ」

「ニココ!!」

「ツアオ・ツアオ!!!」

キンジとアリアも16号車に来たようだ。清の民族衣装を身に纏ったココは、ウイंकをした後、身の丈に合わない鉈のような物を振り回し始めた。

「この列車、お前たちの棺桶なるネ！きひっ！」

ザンツツツ!!

先頭の座席を簡単に叩き割る。あれは、多分青龍刀だったつけ？幅広で、重い中国刀。日本刀が鋭く切る為の□□人切り剃刀□□そして、青龍刀はその重さを以って肉と骨を砕き割る□□人切り包丁□□だ。

まあ、そんなことはともかく……

「……悪い方はこのように、列車がジャックされたってことですかね。」

「じゃあ、あれかい？ほかの客のように僕たちは逃げられないんだね？」

和泉さんが聞いてきた。

「そうですね。」

「この爆弾は外せないのかい？」

「今全力でやっている。」

裏理子が爆弾をいじりだした。

「理子、頼む。」

「任せとけ。」

俺はココのほうへ向いた。

「10分だけ遊んでヤルヨ。ココはデートの約束あるネ」

と言うココの後ろ…二重扉の先にある、運転席には女性運転士が半ベソで振り返っており、助手席には誰も居なかった。どうやらココは、助手席に乗り込んでいたようだ。

「てめえ!!一般人を人質にしゃがって!!」

「え!?何でイブキがいるネ!?爆弾で身動きができないはず……。」

うええええん……

すすり泣く子供の声が聞こえた。声が聞こえたほうを向くと、16号車中央付近で、まだ避難出来ていない妊婦さんに子供が抱き着いていた。

この16号車に残っている一般人は、彼女らと例の二人だけだった。

見れば妊婦さんは大きなお腹を抱え、苦しそうに脂汗をかいている。このパニックの中で、ストレスによる体調不良を引き起こしたようだ。

……クソツツ!!これ以上妊婦さんにストレスを掛けられん!!そう思ったとき、アリアが俺を走って抜いていった。

「白雪!!彼女と子供をセーブして!!」

アリアは日本の刀を抜き、下段でクロスさせ、突撃する。

「おう、君たち安心しろ。悪い人たちは兄ちゃんたちが倒しちゃうからな。」

俺はその間に子供たちを安心させようとする。

「なんたって、ここには☒存知、和泉陽司☒がいるからな!!」

「何だつて僕に振るんだよおお!!僕が何をできるってんだい!?!」

「和泉さんもお笑い芸人なら気の聞いた言葉をしゃべってくださいよ

!!

「ほかあ俳優だ!!」

……え? そうなの?

「キンジ! セーブ・フォロー!! イブキも!!!」

「お、おうっ!」

星伽が妊婦さんを支え、さっきので笑顔になった子供を俺が抱き上げて15号車へ走り、背後をキンジに守ってもらいながら移動する。

ガキイイイン!!

後ろで金属同士のぶつかり合う音が聞こえる。アリア、そっちは頼むぞ。

「謀ったわね、卑怯者!! 初対面の時にはココと名乗っておきながら……偽名だったとはね! ツアオ・ツアオ!!」

「それは欧州人の間違った呼び名ネ。イ・ウーではシャロック様がそう呼んだヨ、だからココは皆にそう呼ばせてたネ。曹操、これ、魏の正しい発音アルツ!」

「おいおいおい!! 危ないって!! 僕に当たるから!! 待って落ち着いて!! 話せばわかるって!!」

「いやね、陽ちゃん。どうでいって危険な企画つてのは知っていたけど、シェフ・和泉企画以上に危ない目にあうとは思わなかったよ。」

「って、なにお前は堂々とタバコ吸ってんだよ!!」

「何でこの状況で漫才やってんのよ(やってるネ)!!!」

……俳優じゃなくて、お笑い芸人だろ、絶対。

子供たちと妊婦さんを何とか15号車へ非難させた。

「白雪、悪いけどこの人たちを頼む」

俺はそう言っつて銃剣を取り出した。あんな狭いところじゃ刀も3



8式も使えねえ。

「乗客の中に医者がいないか探すんだ。俺達は4人で、アイツを逮捕する」

キンジも妊婦さんを支える星伽にそう告げる。

「は、はい！でも気を付けて、キンちゃん、イブキ君。あの犯人、普通じゃない感じがするの。」

……普通ねえ？

「普通じゃない？それはいつもの事だろ。」

「てやんでい、こちとら毎回毎回、普通じゃねえ敵と戦ってた。」

「だから、普通だ。」

星伽にそう言いつつ……俺とキンジは16号車へ向かう……。

16号車に戻ると、アリアとココがほぼ同時に膝蹴りを繰り出し――互いの腰を蹴る形になって、飛び退いた。

その瞬間、ココは青龍刀を放り投げ、床を蹴り、アリアの膝、腰、胸を垂直に駆け上がる様になり、ビシィッ！と絹布の靴でアリアの顎につま先蹴りを叩き込んだ。

「アリアッ！」

キンジがバタフライナイフを構え、通路を駆ける。俺も影の薄くなる技~~技~~を使って一気に接近する。

「……ッ!!」

よろめいたアリアが数歩後退した。その向こうで、運転室を背にしたココはバク転をしながら、バタバタと両袖の長い袂をヒレのように羽搏かせた。そして、その袖の中から、香水の容器のような物を取り出し……

「泡爆珠ッ!!」

シュツ……と霧吹きみたいな音がした。小さなシャボン玉(?)がココの周りが出てきて、周囲に拡散していく。

「アリア避けろっ!!」

「泡爆<sup>バオバオ</sup>は気体爆弾だ！あたしはイ・ウーで見た！シャボン玉が弾けて中身が酸素と混じると——爆発するぞッ！」

キンジと理子が慌てて忠告する。

「!?」

それを聞いたアリアは、キュツ！と足元を鳴らし、俺は諦めて突っ込んだ。

バチイイイイツ!!!

アリアと俺の眼前で弾けたシャボン玉から、激しい衝撃と閃光が上がる。

「きやう…！」

アリアが車に撥ね飛ばされた様に吹っ飛ばされ、

「ッ!!」

俺は逆にココの方へ吹っ飛ばされた。

「この野郎!!」

「イ、イブキ!」

バキッ!!

俺は爆風の勢いを使い、ココを殴った。俺はそのままココのマウン

トポジションを取り

ザクッ!!ザクッ!!

銃剣をココの首元にクロスさせるように床にぶっ刺した。

「た、救命<sup>助けて</sup>……。」

「すまん!!」

ドスッ!!

ココの鳩尾<sup>みぞおち</sup>に力いっぱい拳を叩き込んだ。すると彼女は体中の力が抜けた。気絶したようだ。

ジヨワア……

彼女の股間が濡れ始め、下半身から液体が出てきているが、彼女の尊厳のため無視しよう。

「猛妹<sup>メイメイ</sup>!!」

もう一人のココが運転室から出てきた。やっぱり……そっくりさんが何人もいて、それを一人だと勘違いさせていたのか。さすがは世

界で最も多い民族。3〜4人そっくりさんが出てきても不思議じゃないぞ。

もう一人のココは慌てながら気絶した方のココを見た後、アリアを見てニヤリと笑った。俺もアリアを見ると、アリアは立ちあがれず、膝をガクガクと震わせて……刀を手放してしまっている。

すると、ココは~~□□~~前ならえ~~□□~~の様に腕を前に突き出し、袖からヌンチャクのような物を2本取り出した。

……違う!! 小型ロケットだ!!

ロケットの先端同士をカチンと合わせ、ココが左右にソレを離すと、先端同士の間ワイヤーが1本、ピイツと張られて伸びた。まるで、ヌンチャクのような形に……。

「シャンホートンアージン双火筒縛禁!!!」

鋭い噴射音を上げて平行に飛んだ2発のロケットが、キンジとアリアの左右を通過した。そのロケットの間に張られたワイヤーがアリアとキンジに引っかかる。

「うゆっ!?!」

アリアとキンジでワイヤーを固定されたロケットはグルグルツとキンジたちの周囲を勢いよく回り、二人を拘束していく。

「あッ……あ……!!」

「う……お……ッ!」

カキンツ!

二人の腕、胴、脚をグルグル巻きにしたロケットは、甲高い音を立ててワイヤーを切り離し、床に転がった。燃料を使い果たしたのだから。

「きゃあっー!」

その転がったロケットをアリアが踏んで、キンジと一緒に倒れる。その衝撃のせいで、キンジはバラフライナイフを手から放してしまった。

……チクシヨウ! キンジとアリアを助けてやりたいが、俺がそうすればココが襲ってくるだろう。

「きひっ。無駄ヨ……そのワイヤーはちよつとやさつとじゃ切れない

アル」

「おいおいおい!!大ピンチじゃないか!!ほかあまだ死にたくないよ!!明日の東京初舞台に出るんだ!!お嬢ちゃん、落ち着いて一緒に話そうじゃないか!!」

相変わらず、口が閉じない和泉さん。

「うっひっひっひ……(ヌギヌギ)。」

ビールを山ほど飲みまくり、服を脱ぐ安浦さん。

……あれ?ここは戦場だよな?

「う……ふえ……ツアオ・ツアオ……!!」

その言葉に、ココが動きを止めて顔を向ける。この声は理子の声だ。

「…びええええええ!!理子はイ・ウーの仲間だったじゃーん!!同期の桜じゃーん!!理子は助けてええ!!理子だけは助けてえええ!!びええええええ!!」

理子が大声で喚き始めた。

「おいおいおい!!峰ちゃん何すぐ裏切っちゃってんの!?僕達の爆弾を解体してよ!!ほかあね、一般人だぞ!!一般人を巻き込んでもいいのかい!」↑和泉

「うっひゃっひゃっひゃっ!!(グビグビ)(パンツ一丁)」↑安浦

……あれ?ここは戦場だよな(2回目)?ここまでコントのような戦場は初めてだ。

理子のウソ泣きのおかげでココが俺から目をそらした。俺はその間にキンジのバタフライナイフを蹴ってキンジの手の届くところに送り、再び影の薄くなる技を使いロケットを発射したほうのココへ接近する。

「峰理子、ウソ泣きやめるネ!!ウソ泣き通用する相手、男だけヨ!」

「チッ!!」

理子はウソ泣きを止めて舌打ちをし、そしてアツカンペーをした。

ココは理子から視線を外し、アリアを睨む。

Aria the scarlet amm  
「緋弾のアリア」

……なんだそれ？  
Aria the scarlet amm  
○  
……緋色の弾薬のアリア。いや、  
緋弾のアリアか……。

「何もかも、お前のせいネ。イ・ウー崩壊した、世界中の結社、組織、機関、パワーバランス崩れたネ。乱世、これから始まるヨ」

ココが、罪人を見るような目でアリアを見る。俺はその間にココのそばまで回る。

「お前、  
緋緋色金喜ばせた。これも乱の始まりアル。緋緋色金と  
リ  
璃  
璃  
色  
金、仲悪いネ。緋緋が調子づいた事感付いて、  
璃  
璃。百年振り  
に怒たヨ。怒って見えない粒子撒いて、世界中の超能力者、力、不安  
定になった。」

……イロカネが、超能力を狂わせる？イロカネのことは兵部省で知ったけど……  
璃璃色金が超能力者を狂わせる事は聞いたこと……  
待て、確か辻さんに連れられて（強制）会議に出た時、聞いたような気が……。

「これから超能力者、役立たずになるヨ。その時、銃使いの価値増すネ。」

ココが、キンジを指差す。

「キンチは超能力者ちがう。でも、高い戦闘力持つてる良い駒ネ。  
イ  
ク  
オ  
テ  
イ  
ス  
主  
戦  
派、  
研  
鑽  
派、ウルス、みんなキンチ欲しがってる。」

どうやら……キンジはそういう業界で随分と人気らしい。確かに、キンジはフリーだからな。どこの組織でも欲しいはずだ。

「一番キンチに手出すの早かたの、  
ウ  
ル  
ス  
ある。璃璃色金、  
姫に直接指令を送って、キンチを取りにかかったネ。でもキンチは、  
ココが横から貰うアル」

ココは実に嬉しそうに、ピヨンピヨンとその場で跳ねる。

「それに、イブキも気に入ったネ。ウルスのレキも、イブキも、アリアも、ココが貰うヨ。優れた狙撃手、暗殺に使うもよし、売るもよし、緋色金は高く売れるヨ。イブキは戦うもよし、その回復力を研究機関に売るもよしヨ。」

……ほう、俺を売るとは……だいぶ大きく出たな。

「キヒツ……乱世、ビジネスの好機ネ……この新幹線乗っ取りも、サイドビジネスある。さつき、日本政府に身代金として300億人民元要求したヨ。払えば良し、払わないなら……どっかああん!!!」  
ツインテールが跳ねる程の勢いで、上を向いて甲高く叫ぶ。

「列車粉々にして、パオパオのデモンストレーションにするネ!」

……また金が目的か。定番だけど……つまんねえ……

「キヒビ……さつきのパオパオ、ほんの1ccネ。この列車には1? 積んだアル」

1ccは1?。なので

100×100×100=100万

よって、さつきの100万倍の威力の爆弾か……。新幹線なんて文字通り木っ端微塵になるぞ!?

「泡爆、目に見えない爆弾アル。何処にでも隠せる、誰にも気付かれな  
い名品ネ。派手にふっ飛ばせば、注文、世界中から来るネ。ココ大儲  
けで、藍幫の女帝の地位買うヨ。」

さて、そろそろ襲いますかね。

「キンチ、レキ、イブキ、香港の藍幫城へ連れて行くネ。アリア、買い

t……」

「ココ……こんな言葉を知ってるか? 捕らぬ狸の皮算用ってな  
!!」

……修学旅行Iの前に受けた護衛対象の口癖が移っちゃったな。  
バキツ!!!

俺は安浦さんの飲みほした日本酒の瓶でココを殴った。彼女の頭  
から血が流れ出る。

「おお!!村田君!!テロリストを早くやっちゃって頂戴!!あ、峰ちゃん。  
まだ解体できない?」↑和泉

「あ……。それ、僕の日本酒……。(パンツ一丁)」↑安浦

「これ空のやつですから!!」

……本当にこの人達、俳優なんだよな?

俺は日本酒の瓶を捨て、銃剣でココの首を切り飛ばそうとした瞬間、ココが青龍刀を突き出し、その斬撃を何とか阻む。

ギヤイイイイイン!!!

甲高い音を立て、火花を散らす。

「後ろから襲うのは卑怯ヨ!!」

「後ろ取られる方が悪いんだよ!!」

青龍刀を俺に突き刺そうとするが、俺は銃剣で軌道を反らし、足払いをかける。ココはそれを飛んで避ける。

ココは座席に着地し、今度はその座席を蹴って俺に接近してきた。

「アイヤー!!」

ココが青龍刀を俺に振り下ろす。あれをそのまま受けたら銃剣が折れるな。

俺は左手の甲をココの手首にぶつける。それでココの斬撃を止めさせたと同時に、右手の銃剣の峰をココの左手首に思いつきりぶつける。

「アウト!!」

ツチ!!軍務だったら今の攻撃でココの指を切り落とせたのに!!武偵の不殺は面倒だな!!

のけ反ったココを追撃しようと思は前が出る。……下!?

ココはのけ反った体制から俺の顎に蹴りを入れようとしてきた。俺は両腕でそれをガードする。

ココは今の攻撃を失敗すると、俺から距離を取り、体制を整えた。

「どうした?俺を売るんじゃないのか?」

俺は手の中の銃剣をクルツと一回転させる。

「……ツ!!アイヤヤヤヤツ!遊んでたらこんな時間ヨ!ココ、デートの準備あるネ!」

そう言ってココは気絶した方のココを背負って前もって開いてたらしい天井の扉に続く簡易梯子を昇っていき、車外に出ていった。

……追いたいが、ここでいったん体制を立て直そう。

キンジはいつの間にかワイヤーから抜け出していたようだ。

「イブキ、見つけたぞ」

キンジの目つきと雰囲気が変わっている。☒白馬の王子モード☒  
になったな。

「何をだ？」

「1?の泡爆だ」  
バオバオ

1?なんて量はカバンなんかには入らないだろう。どこかの部屋に隠されているのか？

「何処だ？」

「この洗面室に満たされてるんだ」

「そうか……。」

そこに風船でも入っているのか、それとも完全密室になっているのだろう。

「……き、キンジ!!」

アリアが叫んだ。

「あ、あんた!!許さないk……。」

キンジとアリアがじゃれ合っているが無視しよう。

「理子、解体終わったか？」

俺は理子に聞いた。

「相当時間がかかる。ツアオ・ツアオめ、複雑なものを仕掛けたようだ。」

まだ裏理子か。

「まだ僕たちは立てないのかい!？」

和泉さんが聞いてきた。

「そのようですね。」

「それに洗面室に爆弾があるんだろ!?!そっちの方も解体できないのかい!?!」

そんな無茶な……。



「いやあく……。自分は戦闘専門でした。」

「……グゥ……グゥ……」

「何寝てるんだよ!!」

安浦さんがいびきをかいて寝ていた。

「……おお!!……東京着いた?」

「着いてねえよ!!」

宙づりなんて絶対やんねえ……

俺は15号車に戻ると、妊婦さんを高齢の女医さんが冷静に診察を  
していた。

……良かった。HS部隊にいた時、衛生兵の真似ごと程度はできる  
ようにさせられたから、最悪の場合は俺がやると覚悟していた。

「イブキ、武偵は俺達を合わせて10人だけだ。」

武藤が息を切らせながら言った。

「軍人や警察もいないのか？」

「元軍人のおじいちゃんが2人いたよ。戦うから武器寄越せって言っ  
ているよ。」

やれやれと不知火が言った。……この国の老人は元気だな。  
すると、キンジとアリアも戻ってきた。

「キンジ、武偵は俺達合わせて10人。軍人・警察は爺様が二人だそう  
だ。」

俺がそう言うと、通信科コネットの女の子3人が走ってきた。

「爆弾は見当たらないわ。」

「警察にも通報したけど……。」

「犯人も見つかってない。」

なるほど、となると洗面所の爆弾と、俳優(?)二人の席にある爆  
弾だけか。

「もうどっちも見つけた。こっちで作戦を立てよう。」

キンジはそう言いながら白雪に手を回し、もう片方の手で手招きを  
した。

15号車と16号車の間を簡易作戦会議室にした俺達はキンジが  
ざっと状況説明をした。

「どこからか犯人が車内に戻ってきた場合の事を考えて……鷹根、早  
川、安根崎の3人は1号車、4号車と5号車の間、11号車と12号  
車の間、白雪は此处を守ってくれ。不知火は対テロリスト訓練の経験

が豊富だから、7号車と8号車の間……中央を守ってほしい。理子は一般人に仕掛けられた爆弾の解除をやっている。それが終わり次第、加勢する。」

キンジは素早く配置を決めていった。

「それと待機中、鷹根たちは武偵高・警視庁・鉄道公安本部に連絡して爆弾の解除方法を模索してくれ。」

「爺様達にも手伝ってもらおう。予備の38式と44式騎銃がある。」  
俺が言った。

「一般人にも武装させるのか!?!」

武藤が慌てて言った。

「……新幹線は1000人とちよつとが定員なんだろ?ぎつと計算しても1000人を10人で守るなんて無茶だ。少しでも人員は欲しい。それになんかの会員証で確認したんだろ?」

「ちゃんと確認した。」

不知火が俺の目を見て言った。

「俺達の命令に従うことを条件に渡す。それに会員証があるなら予備役だ。有事の際は手伝ってもらわなきゃな。」

俺はそう言って予備の38式・44式騎銃そして弾を通信科の子たちに渡す。

「……わかった。それで、俺はどうするよ。」

武藤は理解してくれたようだ。

「もう新幹線の運転士がグロッキーなんだ。武藤、操縦を代わってくれ。3分に10キロの加速だ。……繊細な操作だ、できるか?」

キンジが武藤の配置を言った。

「出来るに決まってるんだろ?車輛科なら1年だって出来るぜ。」

「それは安心だ。……武藤、爆弾は運転席の真後ろだ。いいのか?」

俺が武藤に聞く。

「お前なら逃げるか?」

武藤は満面の笑みを浮かべた。

「……こいつなら大丈夫だろう。」

「よし、始めよう。アリア、イブキ、行くぞ。銃刀法違反と監禁の容疑

で、ココを逮捕する。あの子に、子供はもう家に帰る時間だって事を教育してやろう。」

その言葉を聞き、俺は腕時計を確認すると、18時22分を指していた。

……3分に10キロの加速をすると……おおよそ1時間ほどの時間しかないのか

「う、うんー」

アリアはキンジと目が合うと、コクコクと頷いていた。

「さて、それじゃあ行くか。イピカイエーってな。」

俺はそう言っただち上がった。

有難いことに、通信科の3人は片耳に挿すタイプの骨伝導式インカムを複数持っていたようだ。それらを受け取った俺たちは互いに連絡を取れるようにと周波数を合わせた。

その後、全員が配置についたのを確認していると、不知火から通信が入った。

『遠山君、7号車にどこかのTVスタッフが数人乗ってて、カメラ機材も持つてる。これが事件だと分かってからは、ずっと車両の無線LANを使って放送していたらしいよ』

『この状況で放送を?』

『うん、嬉しそうにしてる。スクープ現場に居合わせることができて』  
全員の命が掛かっている状況なのに、実に楽観的な連中だ。

『不知火、それってホームビデオのようなもので撮影してないよな?』

違うとは思いますが、蝦夷テレビの残りの3人(藤崎さん、音野さん、鈴木藤さん)だったら、冗談抜きで漫才が16号車に響くぞ!』

『え?……そんな人はいないよ?』

良かった。ある意味災害は避けられたわけだ。

『……放っておこう。報道は、自由だ』

キンジはそう言いながらこの車両の先頭へと進んでいく。

……マスコミはいつも道理か、面倒な。

さて、車両の先頭についた。

「キンジ、イブキ、あんた達もヒールフックを使いなさい。」

アリアがそう言いながら白いスニーカーを履き直していた。

不安定な足場に出る場合に備え、武偵は常にチタン合金の鉤爪かぎづめを携帯しているようだ。ベルトのバックルやホルスターの奥に秘匿されるその金具は、変形ロボットみたいに形状を何種類かに組み替える事が出来る。

……HS部隊でも支給して欲しかったなあ。

アリアはそれを靴底にセットし、新幹線の上から転落しない為のスパイクにしていた。

「バスジャックの時はルーフに打ちこんでワイヤーの支点にしたけど、今回は白兵戦よ。ワイヤーを切断される恐れがあるわ」

「……正しい判断だ」

「……あれ？」

☒☒四次元倉庫☒☒を探したがどこにもない。俺はポケットを探し、ベルトのバックルやホルスターを探すが……ない。

……あ、比叡山の旅館の部屋に置きっぱなしだ!!……落ち着け、俺。今、俺が履いている靴は陸軍が採用した戦闘靴だ。新幹線から落ちることはないはず……。そういえば、ジョン・F・ケネディ空港の時、普通のズックで滑走する飛行機の翼の上で格闘したんだ。しかもあの時は雪が降っていて、コンディションはさらに悪かった。よし、大丈夫だ行ける!!

俺は靴ひもを結びなおした。

「イブキ、終わったか？」

「ああ、準備万端だ。……理子、あとどのくらいだ？」

『もう少しでできるが……最後が面倒だ。』

「了解。」

理子の後ろで何かの声が聞こえたが……和泉さんがしゃべっているのだろう。

アリアは自分の両頬を両手でばしばし叩いて気合いを入れている。

「行くわよ。」

「おう。」

さっそく梯子に飛びこんだアリアの手を、キンジが包み込むように握った。

「なっ何っいきなりっ!!手、手っ手っ……」

赤面したアリアのスカートを、キンジは小指でピン、と弾いた。

「梯子や階段を上る時だけは、レディー・ファーストの例外だよ。」

「……先行かせてもらおうぞ。」

キンジとアリアのイチヤイチャを見て、さっきまでのやる気が無くなっちゃったよ……。しかも、体があちこち痛くなってきた。アスピリンが切れたな。

俺が急いで梯子を上ると……

「キヒッ!!」

……このココは股が濡れている。気絶したほうのココか。キンジも急いで出ると同時にもう一人のココがキンジを襲ってきた。

「小便漏らしてそんな顔できるとは……ね!!」

「う、うるさいネ!!」

14年式で（何とは言わないが）股間が濡れているほうのココを撃つが、青龍刀で弾く。何発も撃っていると……

カチンカチン

弾が無くなったようだ。

「キヒッ!!」

股間が濡れているココは青龍刀を持ち、待ってましたとばかりに姿勢を低くして突っ込んできた。

「覇ッ!!」

濡れているココは青龍刀を上段に構え、叩きつける様に振る。

「6時過ぎだ！もうお家に帰りな!!」

俺はシャーロックから貰った紅槍を出し、斬撃を防ぐ。

「キヒツ!!」

ガギイイイイ!!!

紅槍と青龍刀から火花が出る。

「キンジ!!漏らしてない方は頼んだぞ!!」

「ああー」

「いちいちそう言うナ!!」

俺はいったん後ろに下がり、距離を取ると突撃をする。

ギイイン!!

ココは青龍刀で突きを受け流すが、俺はその勢いのまま一回転し、再び斬撃をココに喰らわす。

ギユイイイン!!

『武藤だ！あと10秒で加速する！落っこちるなよ!!!』

『どうなってるのよ！出入り口が開かないわ!』

武藤とアリアは同時に言った。

「敵のそっくりさんが二人だ!!それ以上いる可能性がある!!」

俺はそう言いながら再び突きを連続で喰らわせるが、ココは何とか青龍刀で防ぐ。

「手加減不要ヨ、<sup>マイマイ</sup>猛妹!!殺すもやむなしネ!!」

「<sup>シ</sup>是!殺すもやむなしネ!!」

ココはいったん距離を取ると、青龍刀を構えて一直線に突っ込んできた。時速250kmの追い風を受け、普段ではありえない速度で突っ込でくる。

……でもなあ、師匠に比べればそこまでもないんだよなあ。

ココの斬撃を槍の柄で受け、俺はその力を利用して後ろに下がる。

「せいや!!」

俺は再び突撃し突きを放つ。ココは青龍刀で突きを受け流した。

「これでも喰らえっ!!」

俺はその場でクルツと一回転し、石突きでココの手を叩き、穂先で

青龍刀を弾き飛ばす。

「アウツ!!」

青龍刀を落としたココは驚愕している。俺はそのまま石突きで薙ぎ、ココを戦闘不能にしようと……

ダツ!!

ココはとつさに姿勢を低くし、距離を取った。

……仕切り直しなんてさせねえよ!!

ベキツ!!

俺は穂先を新幹線の屋根に突き刺し、棒高跳びの要領で一気に近づく。

「おらあああ!!」

俺は、空中で一回転し頭の上から槍を振りぬく。

「ヤイヤイヤツ!!」

ココは両袖から大きな扇子を出し、俺の一撃を防いだ。

……鉄扇か!!

ココの使っている鉄扇は、檜扇の形をしていて、ふちは刃になっているようだ。

「おらあああ!!」

俺はさらに力を入れココを押し。

ココがバランスを崩し、転びかけた瞬間……

ガクツ!!

新幹線が加速し、ココが転がり落ち……なかった。ココはクナイのようなナイフを出し、新幹線の屋根にぶっ刺して何とか落ちないようにした。

「猛妹!!」

ダダダダダダダ!!

漏らしていない方のココが短機関銃サブマシンガンを2丁両手に持ち、俺とキンジへ発砲してきた。

「クソツタレ!!」

俺は槍を回し、銃弾を弾く。

……これがなければ漏らしたほうのココを仕留められたのに!!



キンツキンツキンツ!!

ココの使っている短機関銃サブマシンガンにはドラムマガジンが使われているせいで、なかなか弾切れが起きない。

シヤアアアアアア

カーブに差し掛かったのだろう。新幹線が左に傾く。

高速走行をする列車ではカーブの時、遠心力の影響で脱線しないようにするため、車体を斜めに傾むかせてカーブを曲がっていく……。

ダダダ…カチンカチン

カーブが終わると、やっとココ（漏らしていないほう）の弾が無くなったようだ。俺はキンジの相手をしていた方のココを潰そうとした瞬間、ココは（漏らしていない方）急にその場にしゃがみ、屋根にへばりついた。

「噂どおり、イブキは計画をぶち壊すネ。オマエ、危険ヨ。ここで……殺すネ!!」

すると、後ろの方から声がした。俺は急いで振り向くと、ココ（漏らしたほう）が立ち上がり、袖から何かをサツと取り出した。

……何か嫌な予感がする。

俺は急いでココ（漏らしたほう）に向かって突撃をする。

「花火の時間ネ!!」

ココは泡爆バオバオのシャボン玉を出す小さな小瓶を出した。

……あの気体爆弾かよ!!俺は銃弾を弾いたり、避けたりすることはできても、面攻撃のような爆弾や爆風は避けることができねえぞ!!

「泡爆小龍鎖!!」

ココ（漏らしたほう）が叫びながら腕を左右に細かく振り、まるで龍が進むが如くシャボン玉の集合体が、俺達に向かって襲ってくる。

……うん、こいつあ逃げられないな。ならば、漏らした方のココ、テメエも道連れだ!!

「キンジ!!後は頼んだぞ!!」

「何を言って……」

俺は自らその竜に突っ込んでいく。  
ザクッ!!

「ウガアアアア!!」

槍の穂先がココ（漏らしたほう）を捕まえたようだ。俺は急いでベルトのバックルからワイヤーを出し、フックを新幹線に引っかけた。

「一緒に空中デートはどうでい？」

ドッ!!ドドドドドドドッ!!

連鎖反応のようにシャボン玉は連続で爆発していく。

「うわあああああ!!」

俺はココ（漏らしたほう）と一緒に空中へ投げ出され、列車から落ちて行った。

俺は列車から落ち地面に……

「グオオオオ……。」

何とか落ちなかつたようだ。しかし、背中と足が地面に掠った。

「イツテエ……。」

アスピリンも切れたのか、昨日の傷も痛いし……。足には生暖かい液体が結構な量、流れている感触がする。

ガシッ!!

何かが俺に掴まった。俺はそれを見ると……

「……てっめえ!!」

漏らした方のココが俺にしがみつき、さらに登りだした。

「よくもやったネ。」

ベキッ!!

ココ（漏らした方）が俺の顔を殴った。

「この野郎!!」

俺は新幹線の壁にココの頭を思いっきりぶつけた。

グンッ!!

さらに新幹線が加速したようだ。

「うわあ!!」

俺とココはその衝撃で、二人で新幹線の窓にぶつかつた。

……通信科の子の、安根崎さんだっけか？その子と目が合ったような気がする。なんでここにいるんだ？

「双蛇刎頸抱!!!」  
シャンシューケイケイバ

ココは俺の腰に両足でしがみつき、長いツインテールで俺の首を絞めてきた。

「グ……ウオ……。」

ココは俺の背中から首を絞めてくる。

……つてコイツ!!ただ首を絞めてるんじゃないやなくて、首の骨を外しに来てるぞ!?

「キヒヒッ!!イブキ!!初めから中華の姫に勝てるわけなかつたネ!!平和ボケの日本人!!!」  
リーベンレン

「ウガアアアア!!」

俺は何とか左手を首に巻き付いた髪の内側に入れ、締めるのを防ぐのと同時に、右手でココの後頭部の髪を掴み、思いつき引つ張つた。

「アアアアアア!!」

ブチブチブチッ!!

ココが首を絞めるのをやめた。俺は急いで首を絞めていた髪をほどいた。

……右手に結構な量の髪の束を握つていた。女の子は髪が命なんだっけ?すまん!!

「イブキ!!よくも髪ヲ!!」

ココは拳、肘で俺の顔を滅多打ちにしてきた。

俺は再びココのツインテールを引つ張り、俺から引き離す。

「イダダダダダダ  
痛痛痛痛痛痛!!」

俺はココの顔面に頭突きをし、よろけたところで今度はココの頭を掴み、勢いをつけて再び叩きつける。

「このろくでなしめ!!スットコドツコイ!!ちよつとは大人しくしやがれ!!」

ベキッ!!バキッ!!

俺はココを殴り返す。

「アッ……アッ……アッ……阿ッ……阿ッ……」

「イピカイエー・マザーファッカー!!!」  
「ドスツ!!!」

この一発が決まったのだろうか。ココはグツタリとしてそのまま落ちて……つてヤバイ!!俺は急いでココの腕をつかみ、落ちるのを防いだ。

……危なかった。武偵は殺しちやいけないんだった。

俺は気絶したココの帯と俺のベルトを手錠で外せないようにした。これでこいつが落ちることはないだろう。

今度ココの服を触り、武器になりそうなものを処分する。決してやましい事はしていない。

「……こいつ、とんだけ持つてるんだよ……。」

まあ出るわ出るわ……。俺はそれを四次元倉庫に仕舞う。

……こいつ、また漏らしてやがる。俺のズボンにもついてるし。……傷口に入って化膿しませんように。

「ハアハアハア……チクショウ。体中がイテエ……。鎮痛剤を……。」

肩で息をしながら、俺は四次元倉庫からアスピリンを出し……

ドオオオオオオオン!!!

「ぐおっ?!」

新幹線はトンネルに入ったようだ。その時の風圧のせいで、俺はアスピリンの入ったボトルを落としてしまった。

「チクショウ!!……ハア……ハア……とりあえず……連絡するか。」

俺は耳の骨伝導インカムに手を当てた。

「こちらイブキ!!ココを一人確保した!!どうぞ!!」

……何にも聞こえない。

「こちらイブキ!!ココを確保した!!」

インカムからはザーという音もしない。

「べらんめえ!!壊れやがった!!」  
俺はインカムを投げ捨てた。

話が変わるが、シャーロックから貰った紅槍は有難い事に、魔力を込めて戻れと思うと勝手に飛んできて戻ってきてくれる。

……これは投げ槍だったのだろうか？

俺は落とした紅槍を呼び寄せて四次元倉庫に戻し、銃剣を一振り取り出した。

このワイヤー装置は巻き上げ機能が低い。だから自分で登って戻らなければいけない。しかし、左手でココを抱きかかえているために自由に使えるのは右手だけだ。だから右手で銃剣を新幹線の壁に突き刺し、ゆつくりと前進していく。

「……チクショウ!!レンジャー訓練じゃねえんだぞ!!」

昨日散々ケガして、今も体中血だらけでこんなことやるなんて……。

「バスジャックにエアジャック、そしてエクспレスジャック……次はシージャックでも来るんだろうなあ……。」

俺は何とか16号車と15号車の間に着いた。

「……もう仕事でも!!移動中の列車の外に出てやるか!!」

まあ……どうせ、必要になったら辻さん、神城さん、鬼塚少佐に強制的にやらされるんだろうけど。

そう思っていた瞬間、  
ボウツ!!

俺の真横にある、車両と車輛の間の幌ほろから縦一直線に火が噴き出た。

「ウソだろ!?!」

俺は壁を蹴り、ワイヤーを一気に緩めて離れた。

「チクショウ!!どうなってやがるんだ!!」

俺の服にも火が付き、火傷もしたが、激しい風圧のおかげで火がす

ぐに消えた。

16号車と15号車が切り離されたようだ。その新幹線の間にある幌ほろの切り口、15号車側に白雪がいて、驚愕していたが何故だろうか……。

……それよりも火を避けるためにワイヤーを伸ばしたせいで、また頑張つて戻らなきゃいけない。さっきまでの努力が水の泡になった。しかも、今度はワイヤー渡り……。さっきよりもさらに辛くなった。

「なんてこった……。」

ドウウウウツ!!

何かの爆発音とともに、レキが空を飛んでいた。……なんているんだ？

俺は時間をかけて、やっと16号車にへばりついた。気絶している、2回も漏らしたココがとても重かったのは言うまでもない。

「……帰ったら、浴びるほど飲んでやる!! 天下の酒豪もびつくりなくらい飲んでやる!!」

俺がそう言った瞬間、16号車の屋根から桃色の煙がブワアアッと流れていくのと同時に、顔に湿布を張りまくったココが落ちてきた。そして俺にしがみついた。

……こいつ!? 比叡山で捕まえたほうのココじゃねえか!!

「イ、イブキ!？」

「ダメエ!!俺が必死に捕まえたのに逃げやがって!!」

俺はココ(比叡山で捕まえた方)の持っていた狙撃銃を蹴落とし、殴り始めた。

「てめえ!! 必死で捕まえて!! へりに襲われて、轢かれるのも助けたのに逃げやがって!!」

ガスツ!!バキツ!!ドカツ!!

「アツ……アツ……アツ……アツ……アツ……アツ……アツ……アツ……アツ……アツ……」

「これでも食らえ!!」

ドスン!!

鳩尾を殴るところこちらのココも気絶し、股が濡れ始めた。  
……もうやだ、こいつら。

俺は二人のココを両脇に持ち、切られた車両の後端から何とか入った。高速で地面にかすり、二人のココと超近接戦闘をやったせいで、俺はもうぼろぼろだ。

「おおうい。」

「!!?!」

理子と和泉さん、安浦さんが俺を見てギョツとしている。

「二人を捕まえてk……」

「おいおいおい!!村田君は新幹線から敵もろとも落っこちたって聞いたよ?!なんだってここに居るんだい?!ここに居るのは幽霊化なんかかい!」

「……え?イブイブ?」

「……………(日本酒のビンを落として固まる)」

和泉さんは俺の脚を触って幽霊でないことを確認し、理子と安浦さんが固まっている。

「む、村田君。僕たちは君が死んだって聞いたよ?」

安浦さんは素晴らしいながら俺の体を触ってくる。

……メチャクチャ痛いんですが。

「……ワイヤーでぶら下がって何とか戻ってきたんです。この二人と戦いながら……。あと体中痛いんで止めてください。」

俺は二人が触るのをやめさせると、抱えていたココ(二人)を地面に降ろし、適当な席に座った。

「イブイブツ!!」

理子がダツと走り出し、俺の腹に思いつきり抱きついた。

「ぎゃあああああああ!!」

全身に激痛が走り回り、俺は意識がなくなった。

「イブイブ!?生きてた!!生きてた!!……うわああああん!!!」

「あれだね、青春だね。僕も彼ぐらいのときは散々もてたねえ。毎日とっかえひっかえでき、バレンタインデーの時には……」

「それよりも捕まえたこの子達どうするの? (パンツ一丁)」



誰かこいつらを引き取ってくれないか……

俺は3分程度気絶していたようだ。その間に平賀さんが別の新幹線から乗り移ってきて、気体爆弾の気体を回収していたらしい。

ギイイイイイイ!!

耳を劈く音とともに、新幹線が急ブレーキをかけた。

「ツ~~~~!!」

俺はとっさに理子を抱えた。慣性力のせいで傷口が圧迫される。これがめっちゃくちゃ痛い。

今までで最も激しい衝撃が、新幹線を襲った。

バスン!!

爆発音があった。音の方向を見れば、洗面室の窓が吹き飛んでいる。しかし、気体爆弾は爆発しない。

……本当に速度落としたら爆発してたんだな。

平賀さんが使ったであろうボンベが壁際まで勢いよく転がって行く。そのボンベが爆発しないようにと祈りながら……

「うう……………」

俺はこの強烈な慣性力に耐えていた。

窓の外では、車輪とレールから上がる火花が美しく舞っていた。まるでドラゴン花火のように……

「ククツ……………」

「……………どうしたの?」

俺が急に笑いだしたので、理子が心配したようだ。

「いや、昔こんなことやったなああって……………」

俺がまだHS部隊に入りたての頃、山形の田舎で訓練をしていた。その時、地元の高校生の兄ちゃん達と仲良くなった。

その兄ちゃん達は、地元の駐在さんとイタズラ戦争をしていた。まあ、俺は軍人であったから、あまり実行犯はできなかつたけど。

しかし、数少ない実行犯として参加したイタズラに、カーチェイスならぬチャリチェイスで、駐在さんに向けてロケット花火を発射するというものがあった。最初は順調に進んだものの、花火を調達した人

が花火大会をする勘違いしていたためロケット花火をあまり買っておらず、すぐ無くなってしまった。結局、最終的にはドラゴン花火を駐在さんに向けて噴射していた。

「……なんてことがあってさ、あの時のドラゴン花火に似ているなあって。」

「ククク……。」

理子も笑いを抑えるので精一杯のようだ。

「ついでに、イ・ウーの時の異臭は、そのイタズラ戦争の産物だ。」

「ツ!!あつはははは!!」

そんな風に理子と馬鹿話をして笑いあっていると

ギイイイイイイイイ……ギイ……

という重厚な音と共に——窓の外に、JRの駅名表示板が見えた。

——東京——

車体の下からモクモクと上がる白煙の向こう。そこにあるJRの駅名表示板は止まって見える。

……停車、できたのか。

俺は額を腕で拭った。……べったりとした血が薄くなっている。汗もかいていたようだ。

……って、ヤベエ!!

俺は慌てて理子を離れた。理子の服や肌には血が付いている。おそらく、俺の血が付いたのだろう。

「理子すまん!!クリーニング代は出す!!」

俺は頭を下げた。血は簡単に落ちないんだ。それは散々理解している。理子は自分の服や体を確認した後、下から俺の顔を除いた。

「イブイブ、クリーニング代はいらない。けれど……。」

……タダより高い物はない。何を言うんだ?

「いつか、理子のお願ひ、何でも聞いてくれる?」

「……クリーニング代を払います。」

こういふお願ひは……何があるか分からねえ……。

「イブイブ……これ理子の自作なんだあ……。ここまで血がつい

ちやうと落とせないよお〜？捨てるしかないなあ〜。」

……脅してきたな。でも、何もできねえ。

「……ワカリマシタ。」

「くふふっ!!言質は取ったからね!!」

理子の見惚れるような笑みが、悪魔の笑みに見えた。

東京駅の新幹線ホームには、前もつて人払いがされて、無人だった。爆発した際の盾にするつもりだったのか、駅には無人の車両が多数密集して停められていた。

さらに停止標識の周囲には土嚢が積み重ねられており、駅の壁という壁には補強用のシャッターが設置され、駅のいたる所にバリケードが展開している。

……念には念をってところか。

アリアとキンジが新幹線から降りた後、俺は漏らした二人を引きずりながら理子と一緒に降りた。

「……東京〜東京〜つと。」

俺はそう言つてココ二人をホームに転がす。

……この二人の目が潤んでいるのはなんでだろう。

「アツ……」

「お降りの際は忘れ物がないようお願いしますつと。」

後から降りてきた武藤も、もう一人のココ（漏らしてない）を同じ場所に転がした。

……こっちは近づいたらかみつきそうな目で見てる。

「あはっ！作業料として、これはもらつていくのだー！あややがイタダキなのだ！」

後ろから平賀さんが、泡爆パオパオの詰まったボンベを無邪気に抱きかかえて出かけた。

「……火遊びは程々にな」

キンジが苦笑いしながら、商魂逞しい平賀さんの頭に手を置いた。  
「……」

次にドラグノフを肩に担いだレキが下りてきた。そして……

「ぼかあ今回、生きた気がしなかったよ!!なんだってロケで襲われて、新幹線でジャックに合わなきやならないんだい!!」

例の二人が降りてきた。

「まあまあ……とりあえず明日の公演に間に合ってよかったじゃない  
(パンツ一丁)。」

安浦さんが和泉さんをなだめる。

「その代わり僕の寿命は縮んだよ!!ぼかあ拉致や命の危機をあの人  
のせいで経験してきたけれど、ここまでじゃなかったよ!!」

「拉致や命の危機を感じるテレビって……どんな企画ですか……。」

俺は思わず聞いてしまった。

「ぼかあね、ラジオ番組中にアメフト部に拉致されたり、カブでウイ  
リーしたんだ。企画でねえ!!」

……ああ、一般人ってそれで命の危機を感じるのか。確かに、前世  
だったらそうだろうなあ。

「何、懐かしそうな顔してるんだい？」

「いやあ……パラシュート無しで空挺とか、弾幕の中の突撃とか、上司  
に拉致されてそのまま敵潜水艦に乗り込んだりとか……。一般人か  
らすれば、自殺モノなんだなあ……と思って……。」

俺は、HS部隊の無茶ぶりを思い出した。

「君こそ何があつたんだい!？」

「それは……ご愁傷様……。(パンツ一丁)。」

俺は和泉さんと安浦さんを見て思い出した。

「安浦さん、そろそろ着てもらわないと、逮捕案件になるんで。」

「あ、そうだった。」

安浦さんは抱えた自分の衣服をイソイソと着始めた。

「武藤くん！こつちから出られるのだ！」

「後は任せませ！そいつらは尋問科にでも引き渡してこつてり搾つてもらえ！」

一刻も早くパオパオを分析したい平賀さんと、駅弁目当ての武藤がホームから小走りで出ていった。

……このような状況で駅弁なんて売ってんのか？

アリアは砲娘パオニヤンの袖から鉤爪やら、ナイフやら、スモークやら……様々な武器を取り出して回収している。キンジはアリアが取り上げた道具に興味を持っているようだ。

俺は近くにあったベンチに座り、体重をあずけた。連戦や血の流しすぎで疲労困憊だ。

「ハア……。」

俺は大きな溜息をついた。その瞬間

ドカーン!!ベキベキベキ!!

俺の真横の壁から装輪装甲車が出てきた。

……は？装甲車!?なんで!?

装甲車は俺の真横に止まり、そこから誰かが出てきた。それは……新しいココだった。

……ココはあと何人出てくるんだろう。

「姉ちゃん!!撤退するヨ!!香港戻るネ!!」

メガネをかけたココが車体から上半身を出して言う。それと同時に装甲車の砲塔が俺達の方へ向く。

……つてこれはM1128 ストライカーMGSじゃねえか!!

こいつの主砲はロイヤルオードナンス系の105ミリ砲が付いている。この主砲は第2世代主力戦車に使われている砲だ。

「二機娘!!」ジニヤン

カチャ!!」

「レキ動くダメネー！」

ドラグノフを構えようとしたレキに機娘ジニヤンが拳銃を構えて警告をした。レキはピタリと動きを止め、ジツと機娘ジニヤンを見ている。

「二機娘!!私は帰らないネ!!日本に残るヨ!!」ジニヤン ウオ

……え？

「イブキ先生シエンシヨンに殴られた時、私ウオはこの方に仕えるべきだと気がついたネー！」

「イブキ先生シエンシヨンに殴られた時、ここまで気持ちいいことはなかったネ。」

……？俺の拳には矯正する力があつたと？

「だから香港に戻らないネ!!」

二人ジュンユ（狙姐メイメイと猛妹メイメイだったか？）が芋虫の様にノソノソと俺の足元までやってくると

「イブキ先生シエンシヨン、私私を踏んでくださいを踏んでください??着我!!」

「イブキ先生シエンシヨン、私私を蹴ってくださいを蹴ってください?☒我!!」

……俺は理子に目で助けを求めた。理子は目を背けた。

……今度はキンジに目で助けを求めた。キンジは目を背け、ため息をついた。

……俺はまだ正常な方のココパオニヤン（炮娘パオニヤンだったよな？）に目で助けを求めた。彼女はブツブツと独り言を言っていた。

……蝦夷テレビの二人に目で助けを求めた。二人は開いた口が塞がず、こつちに気が付いてない。

……アリアに目で助けをm……いや、アリアは真っ赤になつてるし無理か。

「イブキ!!姉ちゃんに何したネ!!!」

「俺が聞きたいよ!!」

「ハア…ハア……」

おかしい方のココ二人は俺の足に顔をこすりつけ、息が荒くなつて  
いる。

「俺も変態だけど……上には上がいるんだねえ……」

安浦さんが真っ黄色の被り物を被りながら言った。

「そうだねえ……。ぼかあ、安浦以上の変態がいたのは驚k……なん  
で簡易レイウ0レイウuちゃんつけてんだよ!!」

「いや……さつきまで裸だったから、体が冷えちゃったみたいで  
……」

「なんでそんなになるまで裸になつてんだよ!!」

「このままじゃ明日の公演きついかも……。」

シユボツ

安浦さんはその真つ黄色の被り物をつけたまま、タバコに火をつけた。  
た。

「安浦タバコ吸ってんじゃねえよお前!!<sup>レイウ</sup>0uちゃんのイメージ悪いだろ!!」

「いやね、俺だつて吸いたくて吸ってるわけじゃねえんだよ。この意味わからない現実から逃げたいんだよ。」

グイツ

そして、安浦さんは日本酒の瓶をラツパ飲みした。

「テメエだけ現実から逃げるなんて許さねえぞ!!俺にも寄越せ!!」

……和泉さんと安浦さんはまた漫才をしているようだ。

「アツハツハツハ!!」

「次は何呑む!？」

「ぼかあやっぱ~~り~~~~り~~大法螺~~だ~~~~だ~~だ。……つてなんで北海道の地酒があるんだい!？」

「まあまあ、いいじゃない。」

「アツハツハツハ!!」

「……俺にも一杯くれませんか?」

俺も現実から逃げたい。

「……風、レキをよく躡けた。人間の心、失わせてる。この戦いでよおーく分かったヨ。お前、使えない女ネ。だからもう、お前、いらない」

「……」

レキはギロリとココ（装甲車に乗っている方）を見る。

「仕切り直そうと思っっているのは有難いけど……この姉ちゃんたち何とかしてくれよ!!」

俺の足元には二人の変態がまだ蠢うごめいている。

「ハア……ハア……ウツ!!」

「ハアハア……アツ……アツ……アアアア!!」

ついでに、離れたところでは北海道のおっさん二人が酒盛りをしている。

「アッハツハツハ!!」

「レキ……お前、まだ弾を持つてるはずネ。それで死ぬ。今、ここで。」  
「無視かよおおお!!」

装甲車に乗ったココを倒そうと思っても、この足元にいる二人のせいで何もできない。ある意味詰んでる。

「お前死ぬば、キンチは殺さないネ。キンチは使える駒ヨ、ココも殺したくない。でもイブキは殺ス。」

ギーっと装甲車の砲塔を微調整して、砲身を俺に合わせた。

「機娘止めるネ!!イブキシエンシヨン先生は私を躡ウオけてくれるご主人様ね!!」

「機娘止めるネ!!イブキシエンシヨン先生は私をイジメてくれるご主人様ね!!」

庇かばってくれるのは嬉しいけど、靴舐めるの止めてくれませんか?

「ココ。あなたが言う通り……私はあと2発、銃弾を持っています。私が自分を撃てば、キンジさんを殺さないのですか」

「待って、それだと俺殺されちゃうんだけど!!」

「よせレキ!どうせアイツは俺を……」

俺とキンジが焦って言う……

「キンチ、イブキ喋るな!!……レキ、今の話は曹操コウコウの名にかけて誓ってやるネ」

キンジの声に、ジュジュが声を被せてくる。

「……ココ、藍髻ランバンの姫。」

レキはそう言って、自分の足元にドラグノフのストックを置いた。

「ウルスの蕾姫レキが問います。今の誓い……キンジさんを殺さない事、守れますか?」

「バカにする良くないネ。ココ、誇り高き魏の姫ヨ」



「だったら誇り高き魏の姫の姉ちゃんたちを何とかしてくれよ!! 誇り  
のかけらもねえぞ!! あとレキさん、俺はどうなってもいいの!?!」

「……誓いを破ればウルスの46女が全員であなを滅ぼす。かつて  
世界を席卷したその総身を以て、あなたの命を確実に貰う。分かりま  
したね?……村田さん。」

「何?」

「村田さんは……死なないと信じていますから。後は、お願いしま  
す。」

そう言いながら笑みを浮かべたレキが、背を伸ばし、銃口を自らの  
顎の下につける。

「よせ……レキ!」

「レキ止めろ!!」

俺とキンジは叫んだ。

「ハアハア……ハア……イブキ先生……」

「こいつらのせいで空気が台無しだよ!!」

俺はこの変態のココ達を足蹴にし、何とか離そうと……

「イブキ先生……もつと……」

「もつと……蹴ってほしいネ……」

ゾンビの様に俺にすり寄ってくる。

「て、てやんでい!! 近づくんじゃねえ!!」

俺はさらに蹴って離そうとしても、近寄ってくる。

「ですが、コレは造反には当たらないことを理解して下さい。なぜな  
ら……」

レキが言った。クソツ……そろそろマズいぞ!!

俺は思いつきり足元の変態を蹴り、距離を取った。

「アツ!!」

「……よせ……」

「レキ!! 止めろ!!」

そして、俺はレキに走り寄った。

「イブキ!! 動くナ!!」

ダンダンダン!!

装甲車に乗っているココが拳銃を撃ってきたが構うものか!!

「……私は、一発の銃弾……」

素足になった足の指を、ドラグノフの引き金に掛ける。

「お前は銃弾なんかじゃない!」

キンジと同時に叫ぶが、その叫びも虚しく、レキはドラグノフの引き金を……

「間に合え!!」

バキッ!!タアーン!!

銃声が、東京駅に響いた。

「……!」

レキの目が、再び見開かれた。その瞳はハッキリと、驚きに見開かれていた。

「……今日何発目の被弾だチクショウ。」

間に合ったのだ。俺はレキが撃つ寸前にドラグノフを蹴り上げ、照準を狂わせた。

……でも銃口が俺を向いたせいで、俺に銃弾が飛んで被弾したけど。

「今度は肩に被弾かあ?このやろう……。」

ダンダンダンダン!!カチンカチン!!

俺はいつの間にか倒れていた。

「た、弾ガ!!」



ココの慌てた声が聞こえた。

俺の目の前にはドラグノフの弾倉が見える。俺がドラグノフを蹴り上げた時に外れたのだろう。

「イブキ!!」

キンジは俺に近寄るが

「俺はいい!!それよりレキだ!!」

俺はレキの弾倉をキンジに渡し、影の薄くなる技を使い、姿をくらました。

……レキの弾以外にも何発か被弾している。もう、そんなに長い時間戦えないな。

「……キンチー!」

機娘は一瞬で、この状況の変化を把握したようだ。彼女は基本前線に出ないのだろう。彼女は拳銃の弾倉の替えを必死に探している。また、もし彼女が装甲車についている主砲や機関銃を撃つてしまえば、姉たちに被害が出る。

……要は、ココ達は詰んだ。

「……レキ。二度と自分を撃つな」

キンジはそう言いながら、レキの目の前で弾倉から弾を取り出し、両手でぎゅつと握りしめた。

そして、キンジはレキを睨んだ。

「これは命令だ。お前、俺の命令を聞くって言ったろ?」

「……」

……さつさと襲って終わりにしたいが、今回の手柄はキンジとレキに譲ろう。

俺は機娘ジーニヤンに近寄り、何が怒ってもいいように待機した。

「……さあ、生まれ変わるぞ!!」

キンジはレキにそう告げ、弾倉をドラグノフに差し込み、装填した。  
「……レキ。撃つべき相手は、あの敵だ。もう一度、俺を信じろ。」

キンジはレキにそう告げると、振り返ってレキを庇う様にジュジュを睨む。

「キンチー!」

機娘はやっと拳銃の弾倉を交換し、キンジ目掛けてトリガーを引いた。

「ダアン!!」

すると、キンジは、両手を前に押し出して、人差し指と中指だけを重ね、#のようにしていた。

「……おい、もしかして銃弾を掴む気か!？」

ココの発砲した銃弾はキンジの指の四角形の中に吸い込まれるように入っていった。

「……………ッ!」

「バシユツ!」

銃弾は軌道が逸れ、キンジの頬を掠めるように通っていった。

「ガシヤンツ!」

銃弾は後ろの自販機に着弾したようだ。

「……あいつ、本当に人間辞めてるな。銃弾を掴むってあり得ないだろ。」

「き、キンジ……あんた、今……」

「アリアも装甲車の上のココも啞然としている。」

「……………ここは暗闇の中、」

その声はレキだった。レキがドラグノフを機娘に向かって構えていた。

「二筋の、光の道がある……光の外には何も見えず、何も無い。私は……………」

レキの狙撃の詩が変わっている。まさに、生まれ変わったか。

「……………光の中を駆ける者。」

「ダアン!!」

レキの銃弾は、ジーニヤン機娘の頭部を掠めた。  
「キヒッ！」

……あのレキが外したのか!?  
惚けていたジーニヤン機娘は我に返ったようだ。

……シヨウガナイやるか。

俺はジーニヤン機娘の前に出た。

「イブキ!？」

「あらよつと!!」

俺はリーさん直伝の拳銃奪いをし、ココから拳銃を奪った。その瞬間、

「……? ? !?」

よろよろつとジーニヤン機娘はよろけ、自分に何が起こったのか分からないという様な表情で、ころんと倒れた。

ダツ!!

すぐさま、ホーム下の線路に隠れていたのであろう理子が飛び出し、ジーニヤン機娘の背中に張りついた。

「みつ、峰理子ツ！」

「ツアオ・ツアオ!!?あれもツアオ、これもツアオ。くふふ、4人もいたんだねえ!!くふふつ!!」

理子は両足でジユジユの胴体にしがみ付き、両手で両腕を羽交い絞めにし、二つの髪束でジーニヤン機娘の首を絞めつける。

この技は、ワイヤー上でメイメイ猛妹が使っていたつけ。理子も使えたのか。

「ツアオ・ツアオ!!あたしにこの技を教えたのが仇になったな!!姉の技で眠りな!!」

「……ツ!!」

ジーニヤン機娘は何とか理子の拘束から逃れようと、羽交い絞めにされた両腕をなんとか動かすが、意味がない。

俺はジーニヤン機娘の真正面に近づき

「ニイピカイエー・マザーファッカー!!!」

俺はジーニヤン機娘の腹に拳をぶつけた。

「ゴフツッ！」  
機娘は、装甲車の上で気絶した。

「アリアが理子を機娘から引き剥がし、グルグルと縛り上げていく様子にキンジは苦笑している。」

「その間、俺は装甲車から降りると、そのタイヤを背もたれにして地べたに座り込んだ。」

「あく……きつつ……。」

緊張が解けたせいとか、意識が朦朧としてきた。血を流しすぎたしなあ。

「もう……聞こえないのです。」

レキの声が聞こえた。

「何がだ？」

「風の声が……もう、聞こえない。風はもう、何も言いません。」

「……そういえば、今回のレキとキンジの騒動は風風の命令だったんだっけ？」

「風はもう何も言わない……か。それは自分で考えろってことじゃないのか？」

キンジがレキに言った。

「私には、分かりません。これからどうすればいいのか。これから、一人で……。」

「いいさ。風は気ままに吹くもんだろ？それに……一人じゃない。俺が一緒だ。なんとたつて、お前が学校にチーム登録を提出しちまったからな。この間、勝手に」

東京駅に、一陣の風が吹いた。

「anururus wenui…… 永遠」

この歌声は……レキの声か？

「——Celare claiatol tupte ire,  
urusc laia…… 天空——」

レキの声は、音量こそ慎ましいが、音階はピタリと一致しているの  
だろう。レキの美しい歌声は一切の不快感を与える事無く、俺の朦朧  
としている頭にすつと入っていく。

「—Raïos Zallo Ado… Ясни, ясни на  
Небездвёды—」

…ロシア語だろうか？朦朧とした意識の中では訳せないが…  
別れの曲の感じがする

「—Celare claiia ol… tu plute i  
re, urus claiia 天空—」

歌がリフレインするパートで、キンジがどこからか見つけてきた花  
束を吹き流し、宙へ放った。それらの花は風によつて花びらになり  
…まるでレキを祝福するかのように舞っている。

「—anu urus wenuia… 永遠」

…これは、いい夢が見られそうだ。

俺は静かに目を閉じた。

「ブラボー!!すごいよ!!これはもう歌手デビューしても問題ないよ  
!!」

「あれだね、この子が今日の汁物なんて歌っちゃったら陽ちゃん  
のCD売れなくなるね。」

「何で綺麗に終わろうとしてるのに出てきちゃうの!?酔っ払いの二人  
!!」

「ニブキ先生…シエンシヨン」

「何でこうなるんだよ!!」

俺はそう言った後からの記憶が一切ない。

「え? イブイブ? イブイブー!! き、救急車早く!!」

「理子なに慌てて……ってすごい血じゃない!!」



パロディのチーム名は勘弁してくれ……

俺は裁判所にいた。しかも被告側に

「村田維吹を、ボディービルダーの刑に処す。」

裁判長と思われる人が木槌を打ち鳴らし、俺に判決をいきなり言った。

「何だよ!!その刑は!!その前に俺が何をしたんだよ!!」

俺は文句を言うが、俺の横にいた謎の二人が俺の脇を抱え、無理やりその部屋から出されてしまった。

「ボディービルダーの刑って何だよ!!」

俺は、黄色いパンツだけを履かされ、牢屋に投げ入れられた。

「ちよつと待て!!ここから出してくれー!!」

俺は牢屋の鉄格子に捕まって抗議するが、その二人はそのまま去っていった。

「新入りかい?」

俺の斜向かいの牢屋から声が聞こえた。

「あ、あんたは……?」

「俺は……ウエイトレスさ!!」

……ウエイトレスのコスプレをした鈴藤さんがいた。

「まさかボディービルダーが捕まるとは思いませんでしたな!!」

正面の牢屋から、違う声が聞こえた。

「あんたは……」

「私はですねえ……カミナリです!!」

……鉄腕アトムのようなカツラに子供の人形を背負った藤崎さんがいた。

「俺たちを忘れちゃ困るぜ……」

他の声が聞こえた。まさか……

「俺は筋肉だ!!」

「俺はマッドサイエンティストだ!!」

……筋肉の書かれた服を着て、その上からスーツを着る和泉さん

と、爆発した髪・瓶底メガネ・汚れた白衣を着た安浦さんがいた。

「……………このコスプレって刑罰なんですか？」

「……………お前、それを知らないで来たのか？確かに、ボディビルダーの刑は軽いからな。」

また違う声が聞こえた。

……………この声はまさか!!

「キンジか!？」

「……………いや、深窓の令嬢だ。」

……………目つきの悪い女性が、牢屋の中の椅子に腰をかけていた。いや、こいつは女装をしたキンジだ。

「俺もいるぞ!!……………まあ、お前よりは軽いけどな。」

「武藤!？」

俺は声が出たほうを向くと、

「いや、俺は消防士だ!!」

……………武藤が消防士のコスプレをしていた。

「うるせえなあ……………気持ちよく寝てたのに起きちゃまったじゃねえか。」

ドスの聞いた声が聞こえた。

「この、裸スーツ様を起こすとはなあ!!」

……………裸の上に、マーカーでスーツを描いた音野さんが起きてきた。

「ガリガリガリガリ!!」

音野さんは自分の鉄格子の触れると、顎でガリガリと柵を削っている、最後はその柵をへし折った。

「よくも俺の安眠を妨害しやがったなあ!!!」

「う、うわああああああああ!!!」

「うわあああああああああ!!!」

ガバツ!!

俺は辺りを見回した。ここは武偵病院だ。俺は何度も入院しているからわかる。

「……よ、よかった。」

あれは夢だったようだ。

俺は何とか息を整え、周りを見ると、俺の体に点滴と何かの機械のコードがくっついていていた。よくドラマや映画である脈を測る機械じゃねえか？

時間は3時14分、周りが暗いので午前のほうか。

俺はナースコールを押してしばらくすると、血相を変えた矢常呂先生とナースたちがやってきた。

しばらく俺を検査すると、矢常呂先生が説明してくれた。なんでも、昨日の20時前に急患で運ばれてきた俺を処置したが、結局死んでしまった。俺の仲間には明日言うはずだったが、まさか俺が蘇生するとは思わなかったようだ。

「……きつと矢常呂先生は疲れていたから死亡判定間違えたんですよ。」

「私が!!二度も間違えるわけないでしょう!!」

「まあまあ落ち着いてくださいって。」

その後、プンスカと怒る矢常呂先生を何とかなだめ、俺は4日間の入院の後、俺は何かと退院できた。

その入院中に、家族に軍の皆さん、官僚の方に粉雪が見舞いに来てくれ、大騒ぎになったことは割愛しよう。

俺は何とか退院でき、自分の部屋に戻ることができた。

「ただいまあ〜。」

俺はそう言いながらリビングに入ると……

「も〜!!」

「ンモ〜!!」

理子と白雪が四つん這いで頭突きをしていた。そして……

「声援を上げよ!!ファイター!!」↑ネロ

「……(ニコニコ)。」↑エルキドゥ

「二人とも頑張りませい!!このファラオたる私が応援していますよ!!」↑ニトクリス

「あ、主殿!!(俺に抱き着く)」↑牛若丸

「イブキ様!!おかえりなさいませ!!」↑リサ

……ゴメン、どうということだい?

白雪がキンジのお世話を嬉々としてしている時に、理子が<sup>からか</sup>揶揄つていたそうだ。

さて、理子がそんな事をやったり、和泉さんと安浦さん達が出演する劇を見たりして幾日かたつた後、俺達はある問題に直面した。

「え〜、第2回チーム名考案会議を始めます。」

キンジと白雪がいない時、俺・ネロ・エル・牛若・ニト・リサ・理子によるチーム名を考える会議が始まった。

「え〜、昨日の第一回は結局酒飲んじやつて有<sup>う</sup>耶<sup>や</sup>無<sup>む</sup>耶<sup>や</sup>になっちゃったから今日でチーム名を考えるぞ。……とところで理子。」

「何イブイブ?」

理子は小首をかしげた。

「なんでいるの?」

「あれ？イブイブのチームに入るって言ってなかった？」

「昨日、理子殿が私たちのチームに入るとおっしゃっていましたよ？」

牛若が答えた。

「……そうなの？」

昨日はみんないい感じになった時に理子が来たから、理子の発言は全く覚えてない。

「イブイブ。理子りんの言葉覚えてないの？」

「昨日だいぶ酔ってたから覚えてねえ……。まあ、そんなことはとりあえず、チーム名を決めよう。とりあえず意見がある奴は挙手をした後、何でもいいから言ってくれ。」

すると、ニトがスツと手を上げた。

「はい、ニト。」

「やはり、チーム名には神の恩恵があるといいと思うのでああメジエドさまっ」などはどうでしょう。」

「いや、それパロディーになるから!!似たような題名のアニメがあるよ!!」

俺が思わずそう言った。リサは備えてあったホワイトボードに

ああメジエドさまっと書いた。

「そうなのですか？」

「そうなの!!」

次にエルが手を上げた。

「はい、エル。」

「なら、Nice Action Clans からチームNOCsに……。」

「それ、一昨日に和泉さんと安浦さんの出る演劇みだからそうなったんだよね!?多分それで登録したら、その二人以外にも抗議されるから!!」

俺がそう抗議しても、リサはホワイトボードにチームNOCsと書いた。

今度は、牛若が手を上げた。

「……牛若。」

「はい!!いろんな☒☒きーばんと☒☒が集まっているので☒☒／Granded Order☒☒はどうでしょうか?」

「別に俺達は人理継続とかやらないからね!?多分それだと面倒なことになるよ!?!」

俺がは思わずそう言ったが、リサはホワイトボードに☒☒／Granded Order☒☒と書いた。

……いやね、意見を出しまくった後に議論するのが当たり前だし、さつきから意見を出したすぐ後に反論出すのはマナー違反でもあるけど……パロディー臭が半端ないんだよ!!

「はい!!」

「……理子、お願いだからまともなのだしてくれ。」

「イブイブ任せて!!せっかく7人の武偵がいるから……」

☒☒七人の武偵☒☒か?」

「イブイブ!!ひどいよ!!先に言うなんて!!」

……まだ、さつきまで上げられたやつよりはいいけどさ。

リサはホワイトボードに☒☒七人の武偵☒☒と書いた後、手を上げた。

「リサ……信じてるからな?」

「……?わかりました!!皆様は過去や現在の、また親族が勇者様とお聞きしましたので☒☒伝説の勇者様達の伝説☒☒はどうでしょうか?」

「……リサまでも裏切るなんて。」

「え!?!イブキ様!?!リサが何かしましたか!?!」

リサがオロオロと慌てだした。

「……とりあえずホワイトボードに書いといて。」

「え?……あ、はい。」

リサは若干手が震えながら、ホワイトボードに☒☒伝説の勇者様達の伝説☒☒と書いた。

「イブキ?さつきから否定してばっかりだけど、イブキの案はあるのかい?」

エルが聞いてきた。

「ああ、ネタと真面目なの、どっちがいい?」

「イブイブ!!ネタから!!」

理子が勢いよく言った。

「相手を沈黙できるように☒☒沈○の鉄拳☒☒ってのがネタの方。」

リサはホワイトボードに☒☒沈黙○鉄拳☒☒と書いた。

「真面目なのは、今日は9月22日だから、☒☒0922隊☒☒でもいいかなって。」

「☒☒☒えく……☒☒☒」

みんなは気に入らないようだ。

……俺にまともなネーミングセンスがあると思っっているのだろうか?☒☒四次元倉庫☒☒や☒☒影の薄くなる技☒☒だって、もともと仮の名前だったのに、まともな名前がないからそれが正式名称になっちまっただぞ?

リサは渋々、ホワイトボードに☒☒0922隊☒☒と書いた。

「ふっふっふ……。」

唐突にネロが笑い出した。

「ここは至高の芸術家たる余が!!皆をあつと言わせるチーム名を発表しよう!!」

ネロはダンツと机に手をつき、立ち上がった。

「余たちは酒を酌み交わすことが多い!!そこで!!」

ネロはリサからマーカを奪い取り、ホワイトボードにでかかど書いた。

『COMPOTO』

☒☒COMPOTO☒☒はラテン語で☒☒酒を飲みかわす☒☒という意味だ!!余たちにピッタリであろう!!」

……あれ?意外といいじゃん。正直に言っつて、ネロの案は期待していなかったから、この案は意外だ。

「これ良くない?」↑俺

「そうですね。よいと思います。」↑二ト

「そうだね。わかるとも。」↑エル

「主どのが良いと言っつたので、いいと思います!」↑牛若

「ネロっち!!ナイスアイデア!!」↑理子

「流石です!!ネロ様!!」↑リサ

「そうであろう!そうであろう!!」↑ネロ

……さて、ではチーム名も決まったことだし、由来道理にしますか。

「じゃあ!!チーム名決定を祝い!!今日は飲みかわすぞ!!」

「」「」「おおく!!」「」「」

「お前ら何飲んでんだよ!!」

「おおくキンジ帰ったか。お前も飲むか?」

「俺は未成年だ!!」

「しょうがねえなあ……。」

すっ

「なんだこれ?」

「サラトガ・クーラー。ノンアルコールカクテルだ。」

「……ありがとな。」

「おうよ!!リサク、ラム持ってきてく!!ハバナクラブでく!!」

宴会をやった数日後、俺達『COMPOTO』は探偵科の屋上にいた。ここでチーム編成・登録・撮影をするためだ。

俺は再び申請書を見た。

『チーム名COMPOTO』

メンバー

◎村田維吹 (強襲科)

○峰理子 (探偵科)

・ネロ・クラウディウス (強襲科)

・源牛若 (強襲科)

・ニトクリス (超能力研究科)



・エルキドウ（超能力研究科）  
・リサ・アヴェ・デュ・アंक（救護科）  
以上七名が申請します。』

牛若だけは面倒回避のため、苗字を使っている。

さて、このチームは良い編成だと俺は思っている。前線を張る俺、牛若、エル。前線に行ってもよし、援護もよし後方警戒もよしのネロと理子。前線支援、魔術的なものへの対処、救護もできるニト。救護に補給、交渉、情報分析などの、ある意味最も必要な人材であるリサ。……ぶつちやけ言つて、このチームなら長期戦も可能だ。

俺は~~デ~~防弾制服・黒~~ネ~~のネクタイを直しながらそう思った（俺の~~デ~~防弾制服・黒~~ネ~~はギリギリ間に合った）。

「イブキよ!!何を見ているのだ?」

ネロはそう言つて俺の手にある申請書を背伸びして覗いてきた。「申請書だよ。……我ながらいいチーム編成に洒落た名前だなと。」

……銃弾ではなく、酒を飲み交わせるような世の中にしたいものだ。

「ふっふっふ!!そうであろう!!流石であろう!!」

ネロはそう言つて胸を張った。

「おい、次早くしろ!!……イブキ達か。」

師匠が急かしてきた。俺は近くにいたベオウルフに申請書を渡した。

「ほお〜……特化型じゃなくてバランス型か。これはこれで殴り甲斐のあるチームだな。」

「……お願いだから腕試しとか言つて潰さないですよ?」

「お、おう……わかつてらあ!!」

……だったら、目を背けないでくれないかなあ。

「まあ……いいか……チーム~~コ~~COMPOT~~ト~~村田維吹が直前申請  
します!!」

俺はそう言つて

「そうか……よし、笑うな!!斜向け!!」

これは武偵の習わしで、正体を微妙にぼかす目的で、真正面を向か

ないそう。全員黒服なのも、そんな理由だそうで……  
「9月23日10時14分、チームCOMPOT……承認、登録!!」

パシヤ!

我が師匠の持っているカメラからフラッシュが出た。

後日、師匠に撮ってもらったチーム全ての写真がブレすぎていて、撮り直しになったのはご愛敬だろう。

「ちやうちやう、こうやった後、こうするんや。」

「こ、こ、こうか?」

パシヤ!!

「これだとピント合っていないやん!!」

「むう……最近の機械はわからん。」

「婆ちゃんか!!」

「……あ?」

「いや……なんでもないです、はい。」

師匠に蘭豹が仲良くカメラを教える姿が見られたとかなんとか。

チームを登録したその日、軽い夕立があった後、カラツカラの雲一つない快晴になり、沈んでいく太陽が東京の西の空を橙色に染め上げ、東の空が紫に染まり始めた。

その時、学園島の西端の海を望む転落防止柵の外に、俺とキンジ、理子とレキ、ハイマキ（狼）がいた。

何でも、前に俺を轢いた狼ことハイマキは比叡山で俺達を守るために囷になり、野犬（ココ達がそれで俺達を襲わせていたらしい）と大立ち回りをしたらしい。その時キンジは、ハイマキに魚肉ソーセージ箱買いの約束をしたそうだ。なので、キンジとレキはその約束を果たすため、俺と理子は知らない間に囷になってもらったお礼として、俺達は魚肉ソーセージのビニールを必死で剥がしていた。

「……ほら、食べよ。これ全部ビニール剥くの面倒だったんだからな。」

「助かった。ありがとな、ハイマキ。」

俺とキンジで重い箱をハイマキの足元に置く。

「流石だよ。ありがと〜」

理子は満面の笑みで、ハイマキをムツ〇ロウさんのようにわしゃわしゃとなでる。ハイマキはよだれを垂らしながら魚肉ソーセージをギロリと見た後、

「ウオオンッ!」

一吠えして頭をソーセージの山に突っ込み、ガツガツと食い始めた。ハイマキの白い尻尾はプロペラの如くブンブンと振り回されている。

「……………」

レキはハイマキの傍らに膝を揃えてしゃがみ、その背中を撫でてやっている。レキの尻尾が少し下がっているような気がする。

……全く、初めてまともに観光できたと思ったらあんなことになるなんて……まあ、蝦夷テレビの人たちの方がもっと不幸だろうけど。

「そう言えばアリアの奴、ポジションまで勝手に申請してやがったぞ。知ってたか?」

キンジのその言葉は俺を驚かせた。

「アリアは真面目だなあ。ポジション申請は義務じゃねえつてのに。」  
俺はポジション申請を書くのが面倒だったので放り投げた。

「前衛が俺とアリア……アリアが先駆<sup>P</sup>けで、俺が隊長<sup>U</sup>。……で、白雪とレキが支援<sup>サポート</sup>。……そういえばイブキ。」

「なんだ？」

「アリアが理子を取られたの悔しがつてたぞ。後尾役<sup>テール</sup>が取られたつて。」

……理子はアリアの誘いを蹴つて来てくれたのか。理子には感謝しないとな。

「ふっふくん。理子りんはイブイブの物だから、アリアには渡さないよお〜!!」

……。

「……いらぬからやろうか？」

「え？ちよつと!!ひどくない!!？」

理子は俺の背をポポポと叩きだした。

……完治してないところに叩くのはやめてほしい。

「冗談だ、冗談だからな。」

実際、本当にやろうとは一切思っていない。理子が居なかつたら、このチームの撤退戦は冗談抜きで~~島津~~島津の退き口（敵に突撃して、そのまま突破して逃げる）~~が~~が主力戦法になっていただろう。俺は撤退戦はできなくないがあまり得意ではないし、上司も~~イ~~イケイケドンドン突撃ヒヤッハー!!~~な~~な人ばかりだから教わる事もほとんどなかった。

……あれ？俺もあの上司たちに染まってきたのかなあ？

「……大丈夫？」

俺が急に遠い目をしたので、理子が心配したようだ。

「ああ……自分も同類になってきたのかなあ……つて。」

「??」

俺は大きなため息をついた後、ハイマキを一撫でしてキンジとレキに背を向けた。

レキが何か話したそうにキンジを見た後、俺と理子を見ていた。レキはキンジと二人で何か話したいのだろう。邪魔者は退散するに限る。

「んじや、用事もあるし、ちよつと出かけてくる。キンジも飯前には帰れよ?……そういえばココ達は司法取引のあと中国に帰ったつてよ。」

見舞いに来た官僚の人が言っていた。全く、変態あんなの二人が家に居たら、気が落ち着かないつたらありやしない。

「…そうか。飯前には帰る。」

「じゃあなレキ、また明日。理子いくぞー。」

俺は理子の腕を掴むと歩き出した。

「はい」

「ちよ、イブイブ!?腕痛い、痛いから!!叩いたのそんなに根に持つてるの!?!」

……別に、理子の拳が、まだ完治してない場所に当たりまくったわけではない。

「あしくたがあるくさ、あすがあるく……」

観光もまともにできず、毎回何かの犯人に会うほどツイてなくて、いつも傷を負って、変態に気に入られ、ヤバい上司達の考えに染まっていた事なんて歌を歌って忘れよう。

坂〇九の☒☒明日が〇るさ☒でも歌えばもう陽気になる。なんとつて俺はまだ若いんだ。ウル〇ルズもいいが、俺達学生には坂本〇の方が似合っている。

……明日があるさ、だから、明日はさらにいい日になりますように。

「イブイブ!!そろそろ不味いつて!!う、腕の感覚が……。」

……ゴメン理子、歌ってたら忘れてた。

その後理子に散々文句を言われ、服を数着買わされた。その数日後、俺は二つの書状が届いた。一つはジャンヌから、もう一つは兵部省からだ。

……なんだか面倒なことになりそうだ。

俺の直感がそう告げた。俺は諦めて兵部省からの手紙を開いた。

『勤務召集令状』

村田維吹海軍大尉

右勤務召集ヲ令セラル依テ左記日時ニ武装ノ上参着シ此ノ令状ヲ以テ当直ニ届出スベシ

到着日時

・平成〇〇年九月三十日午後十一時三十分

到着地

・旧羽田空港滑走路延長用人工浮島A

召集部隊

・兵部省直属特殊戦部隊第二中隊』

……有難いことに兵部大臣（兵部省の大臣）と事務次官のハンコまで押してあらあ。でも、なんだって書状で？普通に電話やメールでもいいだろうに。

俺は封筒を見た。その封筒には、よく見れば封筒には結界がつけられており、該当者以外には開けられないようになっていた。

………なんだってこんなに嚴重なんだ？

兵部省<sup>H</sup>直属<sup>S</sup>特殊<sup>部</sup>戦<sup>隊</sup>部隊<sup>第</sup>二<sup>中</sup>隊<sup>隊</sup>は俺の所属する部隊だ。ちよつと辻さんや神城さん、鬼塚少佐が電話一本かければすぐ行くつてのに……。

……それに、集合場所の旧羽田空港滑走路延長用人工浮島Aってどこなんだ？

俺は-google先生で検索をかけると……空き地島じゃん!!なんでそんなところに!?

待て待て待て……勤務招集は基本、予備員を一定期間艦隊勤務に就かせる制度だ。そもそも俺が何で!?

俺は考えることをやめ、ジャンヌの手紙を開けることにした。このジャンヌの手紙は昔の手紙のようにロウで封がされており、筆記体で *Jeanne d'Arc* と書かれていた。

俺はペーパーナイフで封筒の上を切ると手紙が二枚出てきた。一枚目は……達筆な筆記体の仏語で書かれていた。

……この野郎、人に読ませる気があるのか?

感覚としては、外国人に日本語の草書体で書いた手紙を送ったと思ってくれればいいだろう。

……リサと理子によって厳選されたフリッツフリのドレスでも着させて、顔を真っ赤にしたところを写真に撮ってやる。

ジャンヌは顔もスタイルもいいから何でも似合うのに、本人自覚ないんだよなあ……そんなことを考えながら、その手紙を解読しようとした時、手紙の下に小さな日本語が書いてあった。

『どうせ貴様は私の達筆な字は読めないだろうから、二枚目に日本語でも書いてやる。』

……返答を草書で書いてやろうか?

俺は二枚目を見た。

『村田維吹殿』

10月1日 夜0時

空き地島南端 曲がり風車の下にて待つ

武装の上、一人で来るように

ジャンヌ・ダルク』

……短ツ!!わざわざ手紙で書くことか!?

いや待て、なんでこいつも、軍の命令書と同じ場所、同じ時間を指定したんだ?

俺はジャンヌに電話をかけた。

「村田か？ 読んだようだな。」

「ああ、その……ジャンヌすまん。その日、なぜか軍の召集があるらしくてな、同じ場所です。」

「ほう……。」

ジャンヌは言葉の一片ですら聞き逃さないように雰囲気を変えた。

「だから、告白はその日の翌日にしてくれ。」

俺は冗談を言った。手紙で<sup>からか</sup>揶揄ったお返しだ。

「な!? ……き、貴様!! この手紙が告白だと!!!」

「お前さんが勇気を出して書いてくれたのはわかるが、軍務でな。」

「い、いや!! 武装した告白なんてあると思っているのか!?!」

ジャンヌは大分慌てだした。

「武偵高ならあり得るだろう？ キンジとレキの求婚騒動だって、お互い武装中だったそうじゃねえか。」

「い、いや、ちよつと待て!!」

「ジャンヌのような可愛<sup>かわい</sup>くて、いい女に慕<sup>した</sup>われるったあ、俺は幸運だな。」

「か、可愛い……って村田!! 貴様は誤解をs……。」

「じゃあな。」

ピッ

俺は電源を切った。ジャンヌから何度も電話がかかってきたが無視をした。

俺は辻さんに電話をかけると<sup>内容</sup>内容は軍機で言えない。黙ってきてくれ。武装は忘れるな<sup>と</sup>と言われた。何があるんだろうか……? ?



公衆の面前で振られるなんて……

時は過ぎ、9月30日23時10分。俺は戦闘服を着て、腰にホルスター二つと刀に弾薬盒を佩<sup>は</sup>き、戦闘帽を被り、万全の体勢で武藤の妹・武藤貴希待っていた。本来なら兄の方に頼むのだが、なぜかいじめていたため触<sup>ふ</sup>らぬ神に祟<sup>た</sup>りなし触<sup>ふ</sup>という事で妹の方に頼んだのだ。

……勤務招集令状で呼び出され、ジャンヌにも武装の上で来いと言われた。いったい何をやるんだ？

俺は刀の柄頭をグツと握った。

「先輩、遅れてすいません!! って……どこか戦争でも行くんですか!？」  
貴希が来たようだ。

……流石に武偵高の制服じゃなくて、軍の戦闘服を着ていれば誰だっておかしいと思うか。

「すまないな、こんな夜中に。まあ……軍の召集があつてね。」

俺は手配してもらったボートに乗り込み、エンジンを始動した。  
あ、忘れてた。

俺は懐から封筒を取り出し、貴希に渡した。

「これレンタル料な。真夜中だから色付けといたぞ。」

「ありがとうございます、先輩!!」

貴希は封筒を受け取ると、小躍りでもしそうなくらいテンションが上がった。

「……そこまで大したものが入ってないぞ?」

「先輩は色付けてくれるって有名ですよ!! 値引き交渉はあまりしないし、それどころかボート一隻貸すだけで色付けてくれるなんて!!」

……こんな夜中に貸し出してもらうんだ、色を付けて当然だろうに。

「先輩、今度もよろしくお願いします。」

「……おう。」

俺は喜ぶ貴希を尻目にボートに乗り込んだ。

借りたボートの舳もやいを係船柱けいせんちゆうに結んで船から降り、錆びた梯子を登って浮島へ上がった。人工浮島の上は暗く、濃霧に包まれていた。「なんだってこんな時間に……。」

俺は思わずぼやいた。あたりを見回すと、浮島の濃霧の中で照明がついている場所がある。ついでにトンカンと何かを建てている音も聞こえる。

……あそこにいるのだろうか？

俺は勤務召集令状を片手に、その照明がある場所へ向かった。

「イブキ大尉!!時間前に来るとは!!希信は嬉しいぞ!!」

「あの……これはどういう事でしょうか？」

そこには、掘立小屋を作っている工兵隊の皆さんと、辻さん、それに空軍の制服を着た士官が一人いた。辻さんは勤務召集令状を俺から受け取り、ポケットに突っ込んだ。

……召集令状をそんな雑に扱っていいのかよ。

「イブキ大尉は、これから起こることは知っているか？」

辻さんはいきなり、ウキウキと俺に聞いてきた。まるで、買った玩具おもちゃを自慢するように……。

「……何が起こるんですか？」

「戦争だ……世界規模の大戦争だ。」

辻さんはニタアと笑った。

なんでも、イ・ウーが倒されたことで裏社会のバランスが崩れ、師団ディーンと眷属グレナダに分かれて戦争が起こるそうだ。

そして、その宣戦布告とチーム分けをする場所がここ、空き地島でやるらしい。

「その戦争は我が軍も参加する。その宣戦布告の使者3人の護衛としてイブキ大尉が必要だった。だから希信が兵部省に働きかけたのだ！」

「俺、撤退戦苦手ですよ？矢原嘉太郎兄者さんが適任では？」

「というか、辻さん一人いれば大丈夫だと思うんだが。」

「希信達の逃げる時間を稼いでくれればいい。それに、矢原は他の任務でいないのだ。」

なるほど、それなら理解できた。理解できたけど……

「辻大佐!!設置完了しました!!」

「ご苦労!!では駐屯地に戻ってくれ!!」

「はっ!!」

工兵隊の隊長が辻さんに報告をして、そのまま工兵隊の皆さんは帰って行った。

「あの、辻大佐？」

「なんだ？わからないことがあれば希信が聞くぞ!!」

「……工兵隊の皆さんが建てたこの小屋は何ですか？」

柱と屋根があるだけの小屋には、カウンター席とテーブル席があり、カウンターには魚の切り身が入っているガラスケース、カウンターの後ろには、まな板とおひつがあり、おひつからは酢の香りがほのかにする。そして、柱と柱の間に暖簾のれんがかかっており、そこが入り口だとわかる。その暖簾のれんには「寿司 多門丸」と書いてある。

「これは!!ほかの使者たちをもてなすため!!建てた寿司屋である!!」

「……いるんですか？」

「最近はお・も・て・な・しが流行っていると希信は聞いているのだが？」

……それ、結構前じゃないですか？

「それに陸海空全てがこの案に賛成している!!」

……え？まじで？

「君が今日の護衛か？」

空軍の軍服を着た士官（見たら大佐）が俺に声をかけてきた。

「はっ!!護衛の村田海軍大尉です!!」

俺は敬礼をしながら答えた。

「君がああの部隊のホープか……僕は加藤空軍大佐、今日はよろしく。」

この加藤大佐は、懐が大きいような男に見える。辻さんが陸軍代表な

ら、加藤さんは空軍代表なのだろう。それだと、海軍代表は誰になるんだ？

「はっ!! 全身全霊でお守りします!!」

「それはそれは……この時間だと寒いだろう？ 辻大佐、せっかく建てたのだし一杯やっつていこう。」

「加藤大佐、今は勤務中であるぞ!!」

「使者達に飲んでもらうために酒を持ってきたのに、僕たちが飲まないとなると痛くない腹を探られる。飲まないにせよ、寿司ぐらい食べよう。少将殿が握る寿司なんて今後もないだろうし。」

……少将が握る寿司？ しかも店名が☒☒寿司 多門丸☒☒ 嫌な予感しかししない。

「まあ、希信もそうは思うが……イブキ大尉!」

「はっ!!」

「寿司は好きか!」

辻さんが俺に聞いてきた。

「大好物です!!」

「……寿司でも食べるか。希信が許可する!!」

辻さんがそう言うと、加藤大佐と辻さんはその寿司屋の暖簾をくぐった。俺も二人に倣<sup>なら</sup>って暖簾をくぐると、そこには、明らかにカタギでない人がいた。

「……らっしやい。」

「流石は山口少将、寿司屋の大將が板についていると希信は思いますなあ。」

「これはこれは……。」

そこには、布袋<sup>ほてい</sup>のような朗らかな顔つきではあるが、目つきは殺人鬼の様な、おっかない人が板前をやっていた。ちょうど今、この明らかにカタギではないような板前さんが、布巾で包丁を拭いていた。まるで……包丁に付着した血油<sup>ちあぶらい</sup>を拭きとるように……

「……え？ 山口少将?」

山口多門丸少将は北方を守る第5艦隊の参謀長だったはず……。それが何で、こんなところで寿司を握ってるんだ!? というか、この人

の雰囲気は恐ろしすぎて気軽にネタ頼めないだろ!?

「どうした? イブキ大尉? 寿司を食べることを希信が許可したぞ?」

辻さんが不思議そうに俺を見た。

「どうした大尉?」

加藤大佐は隣の席をポンポンと叩く。

「え、あ……ハイ、スイマセン。失礼シマス。」

俺は考えるのをやめて席に着いた。

「では希信にはキスを!」 ↑辻さん

「僕にはエンガワをお願いします。」 ↑加藤大佐

「……スイマセン、ヒラメをお願いします。」 ↑俺。

すると、板前・山口少将(?) がギロリと俺達を見ると

「……ヘイ。」

そう言つて、包丁を拭くのをやめると、寿司を握り始めた。

……重い空気がこの寿司屋(?) の空間を占領したような気がする。

「……お待ち。」

そう言つて板前・山口少将(?) は寿司下駄と共に、頼んだ寿司が

2貫乗つていた。

「……いただきます。」

俺はその寿司を手に取り、醤油に軽く触れさせた後、頬張った。

「ああ……。」

誰かから感嘆の声が上がった。

……うまい。俺は漫画や雑誌の様に料理の美味しさを多様な語彙で表現したり、一流料理人のような細かな違いが分かる舌を持っていない。しかし、この寿司を食べた感想が美味<sup>うまい</sup>以外の感想が見つからないという事がよくわかった。

……つて違う!!!

「大将、とてもおいしいです!!……ところで山口少将、少将は第5艦隊参謀長であったと記憶していますが……。」

俺がこの重すぎる空気を破り、発言した。

「……聞いてなかったか。私はこの大戦中、第5艦隊からHS部隊に転属になった。」

俺の顔から血の気が引いていくのが分かった。

……少将クラスの転属だ。この部隊は特殊で、大佐で中隊を率いる。という事は山口少将は中隊長以上の階級、となるとHS部隊隊長以外ない。部隊長の顔を知らない部下など、どうなるかわからない……

「す、すいませんでした!!」

俺は席から立ち上がり、頭を下げて謝罪した。

「分からなかったのも無理はない。今回の大戦のため今の今まで軍機だった。」

……極秘で転属か。

「村田大尉、このことは許す。寿司でも食って忘れろ。」

「ありがとうございます!!」

「ところで少将。」

「なんだ？それと、ここでは大将と言え。」

「大将、なぜ大将自身が寿司を握っているのですか？」

「使者達をもてなすためだが？」

「いえ、職人に頼んで、出張してもらってもよかったですのではないかと……。」

「資材は空軍、人手は陸軍が出した。食材と職人が海軍が出す。それで、海軍の将官自ら寿司を握ればこれほどのもてなしはないだろう。」

「……はい。」

そう言われちゃそうだけどき。

「それに最近はおもてなしが流行っているから、将官自らやった方がいいと加藤大佐が言っていたぞ。」

俺は加藤大佐を見た。加藤大佐は満面の笑みを浮かべていた。

……黒幕はあんたか!!

俺は諦めて少将の握る寿司に舌鼓を打っていると、次第に人が増えていった。

「ここいいか？……つて貴様!!」

「イブキも来てたのか？」

白銀の鎧を着たジャンヌと武偵高校の制服を着たキンジが来た。

「お、二人とも来たのか。ああ、ここ空いてるぞ。」

俺は隣の席をポンポンと叩いた。ジャンヌは顔を真っ赤にしながらそこに座り、キンジもジャンヌの隣に座った。

「イブキ大尉の知り合いか？」

辻さんが聞いてきた。

「二人とも武偵高校の同級生です。」

「ほう……。」

辻さんは観察でもするかのように二人を見た。

「む、村田……。」

ジャンヌは真っ赤になりながら俺を呼んだ。

「どうした？」

「この前の手紙のことだが……確かに、私は貴様を悪からず思っている。しかし好きだとは……こう、友人としては好きではあるが、男として貴様を多分好いてはいないと思うのだ。……私のことを可愛いとか、いい女と言った時、確かに私は舞い上がったしまった。貴様が本心で言ったことは分かる。だが、こう……私は……まだ恋やら愛やら経験したことがないのでよく分かっていない。だから……今の私は貴様に告白などできない。貴様から告白されても私は、きつと断ってしまうだろう。……勘違いさせた事については謝る。仮に今の状態で、恋人同士になどなってはいけないのだ。貴様を期待させてしまつてすまない。だが、可愛いとか、いい女と言われて嬉しかった。……自分勝手だとは思いますが……今まで通りに接してくれると嬉しい。」

ジャンヌは顔をトマトの様に赤くしながら、俺に言ってきた。

「……え？あの冗談の件、真面目に受け取っちゃってたの!？」

「……え？あ……うん。分かった。」

ガヤガヤとしていた☒寿司 多門丸☒がシーンとした。

「……。」

山口少将（大将）は無言で大トロを俺の寿司下駄に置いた。

「……辻大佐。大尉に今日ばかりは飲ませてもいいんじゃないか？」

加藤大佐が俺の肩をポンポンと叩きながら言った。

「……イブキ大尉、希信は本日、宣戦会議のせいで部下を監督する暇がなかったようだ。希信は何も見えていない。」

そう言つて、辻さんは俺の目の前にビール瓶とコップを置いた。

……なんか、凄く虚<sup>むな</sup>しい。確かにあれはブラックジョークだったかもしれない。けれど、告白してない美少女に、しかもこんなに人がいる目の前で振られるなんて……。

俺はジャンヌを見た。彼女の顔は真っ赤だった。

……策略でやってるわけではないのだろう。という事は素やったんだ、ジャンヌは。

「アハハハハ……。」

俺の虚しい笑い声が、☒寿司 多門丸☒に響いた。

「まあ……その、なんだ。注いでやる。」

トンガリ帽に逆正の眼帯をつけ、肩にカラスを乗せた少女が瓶ビールの栓を抜き、俺の目の前にあるコップに注いでくれた。

……そういえば、こいつ夏に俺と戦ってたよな。確か名前は……カツエー某。

「ムラタさん、あなたに主のお導きがあらんことを。」

巨乳のグラマラスな体を、金糸の刺繍を施したロープで隠した美女が、ロザリオを手に、俺の隣で祈ってくれた。

「……フオースの事で世話になってるからな。食えよ。」

GⅢが俺の手にトマトを渡した。

……GⅢ、オマエも来てたのか。

「……強く生きなさい。」

カナさん（キンイチさん）が俺の背をさすってきた。

……あんたも居るのか。これでかなめも居たら遠山一家勢ぞろい



だな。

「……泣く、ダメ。」

頭に生花を挿した、角のついた小学生ほどの少女が椅子を台にして俺の頭を撫でた。

……これが最後の一押しとなった。

「チクショウ!!今日は飲んでやる!!」

俺はコップのビールを一気に<sup>あお</sup>呷った。

「「「「おおく!!!」」」」

「そういえばトンガリ帽の魔女さん。」

「なんだ?」

「前回ちゃんと名前聞いてなかったからさ。俺は村田維吹。よろしく。」

「ああ、そうだったな。アタシはカツエIIグラッセだ。よろしく。」

俺とカツエさんは握手をした。

「そういえばカツエさん、逆逆。」

俺はそう言って自分の目を指した。

「え?……ツ~~~~!!」

カツエさんは急いで手鏡を見て確認した。

「お、おめえ!!嘘つきやがったな!!」

「いやあ、前回は前回だったし。」

「てめえ!!ぶっ殺してやる!!」

ギロリ!!!

「「ツ!?!」」

圧倒的な圧力を俺とカツエは感じ、お互いその圧力を感じた方向を見る……そこには

<sup>ほてい</sup>布袋のような優しい顔とは裏腹に、般若も逃げ出すような眼光を光らす山口少将（大将）がいた。

「お客さん……ここは暴力沙汰、禁止ですよ?」

「「すみませんでした。」  
俺とカツエは土下座した。」

「想定外のこと起き、開始時間が遅くなってしまったが……始めよう。各地の機関・結社・組織の大使たちよ。宣戦会議……イ・ウー崩壊後、求める者を巡り、戦い、奪いあう我々の世が……次へ進む為に。」  
ある程度時間がたち、騒ぎも落ち着いてきた所で、寿司屋の中にあった司会者席みたいな台にジャンヌは立ち、ここにいる全員に聞こえるように言った。ついでに、ジャンヌの顔はまだ若干赤い。

——Go For Next——

キンジは、バラバラに唱和したその一夜限りの飲み仲間達を、ヤケクソ気味に睨みつけていた。

……これが戦争への第一歩、宣戦会議か。辻さんが張り切っているってことは……メチャクチャ危険な戦争なんだろうなあ。なんだってこんな目に……。

俺はヤケクソ気味にイクラをほおぼった。憎たらしいぐらいに美味かった。

## 2.5 その1

……俺の名前は村田維吹、17歳。聖グロリアーナ女学院の学園艦にある高級テラー<sup>1</sup>Men Kings Men<sup>2</sup>の仕立て屋だ。本日はこの学校のとある生徒の依頼で、聖グロリアーナの学園艦のパブで待ち合わせをしている。

「……これ絶対似合っていないよなあ。」

俺は支給された衣服（高級スーツ）を見た後、エールを一口飲んでため息をついた。

さて、俺が何故こんなお嬢様学校の学園艦でこんな変装をしているのかというと、教務課<sup>マスタース</sup>直々の依頼のせいだ。内容は『聖グロリアーナ次期戦車道隊長<sup>3</sup>田尻凜<sup>4</sup>の護衛をせよ』というものだ。期間は一週間。

なんでも、新型戦車導入を阻止しようと、このOG会が最近、不穏な動きを見せているようで……。なので念のため、俺を護衛に就かせるそうだ。

で、なぜ俺がこんな似合わない高級スーツを着ているかということ、その護衛対象本人<sup>たち</sup>達での願いで、架空の高級テラー<sup>5</sup>Men Kings Men<sup>6</sup>の仕立て屋に変装して欲しいそうだ。

……絶対映画見たよな。確かに面白かったけどさ。

俺は再びため息をつき、あたりを見回した。今の時間（午後2時過ぎ）のせいでほとんど人はいない。居るのは他校の制服を着て、亜麻色の髪を三つ編みにし、それを頭の後ろで巻いた（ギブゾンタックだっけか？）髪型の少女。そして、聖グロでも亜麻色の髪の子とも違う制服を着て、サンドイッチをガツガツと食べている真っ赤な髪の少女だけだった。身長や制服から考え、彼女らは学校見学に来た帰りだろうか？

「……全く、なんだって新型戦車導入ついでだけで護衛がいるんだか。」  
エールがコップの4分の1を切った。俺はパブだから喜んでエール<sup>ショウガナク</sup>

ル(ノンアルコール)を頼んだのだが……ノンアルコールとは言え、仕事前に2杯3杯も飲むのはまずいだらう。

カランカラン

すると、パブのドアが開き、金髪を三つ編みにし、それを巻き上げた(ギブソンタックだったよな?)髪型をした、聖グロの制服を着た淑女が入って来た。写真で見た護衛対象とそっくりだ。やつと来たのだろう。

……彼女が田尻凜か、結構な別嬪さんだな。

彼女は俺を見つめ、俺の真正面の席に腰を下ろした。

「こんにちは、お嬢さん。俺はKing's Menの仕立て屋、村田維吹です。あなたが田尻凜様ですか?」

すると、淑女が微笑んで言った。

「ええ……私が依頼主のダーズリンですわ。」

……ダーズリン? 今回の依頼主は田尻凜たじりりんだったはず。

ちゃんとフリガナも書いてあった。ならば……こいつは誰だ?

「失礼、今回の依頼主は田尻凜様だったはず。ダーズリン様とは聞いてないのですが?」

俺はそう言ってジャケットの中に手をつ突っ込んですぐ銃を抜けるようにし、そのダーズリンに魔力で圧力をかけた。すると、彼女の額には冷汗が出てきた。

「……せ、聖グロでは、幹部クラスや幹部候補生はニックネームで呼びあっていますの。是非とも、今後はダーズリンとお呼びください。」

……嘘をついている様には見えない。

「学生証を見せてもらっても?」

するとダーズリンは上品な財布をだし、そこから学生証を出して俺に渡した。そこには田尻凜と書かれていた。

……なんだ、警戒しすぎたか。

俺は魔力を解き、圧力をかけるのをやめた。

「いや、失礼しました。成り代わりが来たのかと思って警戒してしまいました。」

「いえ、私も勘違いさせてしまい、すみません。」

すると、カウンターからマスターが出てきた。

「お客様、ご注文は？」

「では……エールを。」

「かしこまりました。」

……意外だな。この学園の生徒が紅茶を頼まないなんて。

「次期戦車道隊長のダージリンさんがこんなところでエールを飲んでいいんですか？」

「せっかくパブに来たんですもの、エールを頼まないで。それに、ここへ来たのは数年ぶり。……毎日紅茶ばかりでは飽きてしまいますわ。」

ダージリンさんは心なしか、ウキウキしているように見えた。

「ダージリン様!?!」

すると、パブにいた二人の中学生(?)が~~ダ~~ダージリン~~ダ~~という言葉に反応した。二人は首をグルンツと回してダージリンさんを見ると、驚きと喜びを合わせたような表情をした。そして、その二人はダージリンさんに駆け出してきた。

「ダージリン様ですか!?!」

「え、ええ……。」

ダージリンさんは二人の勢いに圧倒されているようだ。

「私!!ダージリン様にあこがれてここに来ました!!」

「あたしもダージリン様のカッコいい姿にあこがれてきました!!」

二人がダージリンさんを捲<sup>まく</sup>し立てるように話す。ダージリンさんは慣れていない様で慌てている。

「エールです。」

マスターがダージリンさんの前にエールを置くと、逃げるようにカウンターに戻ってしまった。巻き込まれたくないのだろう。

……助け舟でも出すか。

「二人とも落ち着きなって、ダージリンさんがあわて……」

バァン!

パブの入り口のドアが、叩きつけられたように思いつきり開けられた。

俺達4人は音の方向に顔を向けると……そこにはいかにもヤンキーな青年達が10人ほどいた。そのヤンキー達は俺達4人を見つけると、ズカズカとこっちに近づいてきた。

「この子がターゲットの☒☒ダージリン☒☒ちゃんかあ？」

「結構可愛いじゃないの？」

「回しちゃってもいいって聞いてるぜ。」

「☒☒ギヤハハハハ!!」☒☒

……おい、典型的な悪役じゃねえか。しかも序盤での踏み台役のよ  
うな悪役だ。

「この二人の嬢ちゃんも可愛いなあ。」

「お前、ロリ専だもんな。何がいいんだか。」

「わっかんねえかな？無知なところを、調教していくのがいいんじゃないか！」

丸坊主の長身の男がそう言うと、

「ツ……!!」

ダージリンさんのファン(?)である中学生二人が、涙目でダージリンさんにしがみついた。当のダージリンさんは優雅にエールを……

ブルブルブルブル

エールを持つ手が大きく早く震えている。彼女の額からは大粒の汗が流れている。

……良く表情を崩さないもんだ。

俺は感心した。俺は一口エールを口にした後、

「よう、ここは手を引いてくれないか？」

「ああ？」

髪を茶髪にして軽いパーマをかけた、リーダー格であろう男が俺を睨んだ。

「この学園艦には駐在所が一つしかない。警官も一人だけだ。この人数を拘束するとなると数日間、簀巻きのまま放置だつてあり得る。あんたたちも仕事のようだが……もう一度言う。ここは手を引いてくれないか？」

調べておいたことだが、学園には駐在所一つが基本らしい。となる  
と警察官は一人……一人で拘束した10人を預かるなんて難しい  
……。

……全く、面倒だったらありやしない。

俺はエールを飲み干した

「黙つてろ。怪我してえのか?」

茶髪パーマが答えた。

……交渉決裂か。そう言えば、ダーズリンさんはきつと映画を見た  
からKing's Menに変装させたんだよな。ちようど、あ  
の映画のワンシーンの様に演出してやるか。

「ちよつとどいてくれ。」

俺は支給された蝙蝠傘を握ると、パブの入口へ向かった。

「え?」

ダーズリンさんと亜麻色の髪の少女が、絶望したような声を上げ  
た。

「ちよつとあんた!!何逃げてんのよ!!それでも玉はついてんの!?!この  
玉無し!!イ○ポ!!皮被り!!」

……赤髪の嬢ちゃん。その口調で聖グロに入ろうとしてんのか?

「援交相手ならほかで探せよ、玉無し!」

リーダー格の茶髪パーマが俺の頭をひっぱりたい。

……敵の実力も分からない雑魚つてのは面倒なんだ。まあ、向こう  
が最初に叩いてきた。だから、これで向こうから喧嘩を仕掛けてきた  
という口実ができるけど。

俺は大きなため息をつく

ガシャン!!

パブのドアの鍵を閉め始めた。

「Manners」

ガシャン!!

「make th

ガシャン!!

「Man」

ガシャン!!

入口にあるカギはおおよそ全てかけた。

……たまには俳優を気取るのは悪くない。まあ、俺は大根役者だけど。

「訳せるか?」

俺はパブの入り口のドアの隣にある鏡でこのヤンキーたちの動向を探る。ヤンキーたちは全員俺の方へ向いたようだ。

「「「えつと……。」」」

「マナーは人を作る、でしたわね。」

……ダージリンさんが答えちや意味ないだろうに。

「意味は分かるか?」

俺がヤンキーたちに聞いた。

「こいつ急にそんなこと言って馬鹿じゃねえの!?!」

「「「ぎやははははは!!」」」

……何がそんなに面白いんだか。

「では、講義を始めますかね。」

俺の目の前の机に飲みかけのジョッキが置いてある。俺は蝙蝠傘の先を握り、曲がっている柄をジョッキに引っかけた。

「あらよつと!!」

俺はそのまま蝙蝠傘を一気に振り、ジョッキを勢いよく真後ろに飛ばした。

バリーイン!!!

「うっ!?」

茶髪パーマの額にそのジョッキが命中し、茶髪パーマは崩れ落ちるようにぶっ倒れた。他のヤンキーはリーダー格を見て呆然とする。

俺はゆっくりヤンキーたちに近づいていった。

「どうした? 案山子かかしの様に棒立ちしてるか? それとも数に任せて戦うか?」

俺は棒立ちしている残りのヤンキーたちを睨んだ。

「うらあああああ!!」

がっしりした体形の坊主頭が俺に拳を振り上げてきた。



「よっー!」

俺はその男の拳を避けるのと同時に腕を掴み、そのまま背負い投げの要領でその男を投げた。

バリーイイン!!!

男はパブのドアと一緒に店外へ投げられた。

「「うあああああ!!!」」

乱闘が始まった。

ヤンキー達は強制的にパブの床で寝る羽目になった。

……とりあえず、これで大丈夫だろう。

俺はダーズリンさん達三人の元へ戻った。

「大丈夫だった?」

「ええ……。」

ダーズリンさんは表情を変えずに言った。

……流石だな。まあ、目尻に薄っすら涙がたまってるけど。

「あ、ありがとうございます!!」

亜麻色の髪の子が頭を下げてお礼を言った。俺は思わずこの子の頭を撫でた。

……何この子、可愛い。

「う、後ろ!!!」

赤髪の子が俺の後ろを指さした。

……わかってる。ヤンキー達のリーダー格・茶髪パーマが起き上がったんだろう?俺はゆっくり後ろを向いた。

「こ、このくそ野郎……。」

茶髪パーマはズボンの中から、でっかいリボルバーを出して俺に向けた。

……あの拳銃はS&W M29だろう。一昨日見た映画で、主役がその拳銃を使ってたのを覚えている。

「そこでやめとけ。今なら銃刀法違反と傷害罪と名誉棄損だけだ。大人しくその銃を渡せ。」

……構え方を見るに、素人だ。そんな奴がバカでかいマグナムを片手で撃つて当たるはずがない。

男はワナワナと震えながらその拳銃を俺に向け、

「死ぬ!!!死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ!!!」

ダアンダアンダアンダアンダアン!!!

発砲した。

「つち!!!」

ギイイイン!!

俺は腰から銃剣を出し、ダーズリンさん達と俺に当たりそうな弾をそれで弾いていった。

カチンカチン!!

弾切れになったようだ。俺は茶髪パーマに一気に近づくと、銃剣の峰で茶髪パーマの首元を殴って気絶させた。

俺は、ヤンキー達全員を縄で縛りあげ、ダーズリンさん達のところへ戻った。

「う、うう………うううううう……。」

亜麻色の髪の子が俺に抱き着いて泣きだした。一般人の中学生があんな目に合えば、泣くのもしょうがないだろう。

「ありがとうございます。村田さん。」

ダーズリンさんは俺に頭を下げて礼を言った。

「まあ、これもKing's Menの仕事ですからね。しかし、OG会がこんなの雇うなんて……ハア……。」

……ここは女子高の学園艦。若いヤンキーの男たちが10人も入れるわけがない。となると、裏で手を引いている奴がいる。OG会ぐらいしかないだろうな。

俺はそんなことを考えながら、大きなため息をついた。

「お兄さん!!」

「ん？」

赤髪のお嬢ちゃんが俺を呼んだ。

「カッコいい!!どうやったたらあんなカッコいい事できるようになるの!?!」

赤髪のお嬢ちゃんはキラキラした目で俺に聞いてきた。

「そうだなあ……その前に……。」

泣き止んで顔が真っ赤になった亜麻色の子を引き離し、ハンカチを渡した。そして俺の両手を赤髪のお嬢ちゃんの頭に乗せ、

「俺の事、お嬢ちゃんなんて言っただけえ〜?」

ミシミシツ!!

その手に力を入れて、赤髪のお嬢ちゃんの頭に圧力(物理)を思いつきりかけた。

「イ、ダダダダダダ!!」

「なんて言っただけえ〜?」

俺はあの時、お嬢ちゃんの言った言葉を覚えているぞ。

「ゴメンナサイ!!ゴメンナサイ!!」

俺は赤髪のお嬢ちゃんの頭から両手をどかした。

「ウウ……。」

赤髪のお嬢ちゃんが涙目で俺を睨んでくる。

「高級テラー King Men の従業員には、ああいう技術が必要になってくるんだよ。」

嘘はついてない。従業員、今のところ俺一人だし。

「そうなの!?!」

「……え?冗談なんだけど、気づいてる?」

「とりあえず、警察に連絡だな。」

俺はスマホを出し、聖グロの学園艦の駐在所に電話をかけた。

電話をかけて数分もしないうちに警官が来た。

「女の子を襲おうとしたんだって?」

聖グロの学園艦唯一の警官は年を取った好々爺だった。

「そうなんですよ。俺が武偵だったんで何とかして……。」

「ええ、彼のおかげで私は助かりました。」

俺とダーズリンさんが好々爺の爺さんにそう話した瞬間、

プルルル!!

パブの電話が鳴った。

「はい、こちらパブ・アーサー……。」

すると、パブのマスターが電話の受話器を差し出した。

「村田様にお電話です。」

俺は受話器を受け取った。

「はい、もしもし?」

「やあ、君がダーズリンの雇った護衛かい?」

……おかしいな。高級テラー Kings Men のはずなんだが

「俺は高級テラー Kings Men の従業員だ。」

「……そういう事にしよう。さつき不良を10人倒して、そこにはダーズリンと駐在官と中学生二人がいるだろう?」

「ツ!!」

……監視されてるのか!?

俺は思わずパブを見回した。

「ここにいる全員に話をしたい。スピーカーにしてくれ。」

「……ああ。」

俺はパブのマスターにスピーカーカーモードにしろもらい、それと同時にスマホの音声メモをオンにした。

「何だってスピーカーにしなきゃなんねえんだ?」

「……パブの目の前に航空機用のハンガーがあるだろう?」

電話の相手は急に話を変えた。

……確かに滑走路を挟んで目の前に、連絡用飛行機の格納庫があるが、それがどうしたんだ?

「確かにあるが……。」

「では見ていてくれ。」

電話の相手がそう言った瞬間、

ドカーカーカーン!!!

格納庫が大爆発を起こした。

……は？

俺達5人は口が開いたままだった。

「今、綺麗に爆発しただろう？これの10倍の爆弾を聖グロリアーナのとある校舎と、学園艦のどこかに設置した。」

……ウソだろ!?格納庫が木っ端みじんになったんだぞ!?その量の10倍が爆発したら、生徒の骨すら残らねえぞ!?

「我々は午後6時にそれを爆発させるようにセットした。……それとは別に、教員や生徒を避難させようとしたら爆発するようになっていく。変なことはしないことだ。……止めるには一つ、方法がある。」

……なんてこった。この学園艦には駐在さんが一人に俺一人。何にもできねえぞ!?

「どうすればいい!!!」

俺は叫んだ。

「ダージリンと護衛君、そしてそこにいる中学生二人に命令を与える。」

「待て!!ダージリンさんにこの二人は一般人だぞ!!」

……なんだって民間人3人も巻き込まなきゃなんねえんだ!?

「話の腰を折らないでくれ……ダージリンとその護衛君、それにその中学生二人は艦首付近のAC—224589Dの部屋に置いてある携帯電話に25分後に出ろ。」

俺は時計を見た。今は午後2時15分。

……そう言えば、まだ昼飯食ってないなあ。

カット。

「てやんでい馬鹿野郎!!少なくとも中学生の二人は聖グロと関係ねえんだぞ!!」

「静かにしてくれないか護衛君。それ以上言うなら、さつき以上の爆弾が爆発することになる。」

「ッ!!!」

「では25分後。くれぐれもその駐在官を連れてこないように。」

ツー、ツー、ツー

電話が切れた。

……敵はこつちを監視している。ならば、この3人を連れて行かないとすぐバレる。

「ハア……駐在さん、誠にすいませんが聖グロの生徒を校舎から出さないで、一カ所に集めてください。それと本土の警察にも連絡を。」

すると、好々爺の駐在さんの顔つきが一気に変わった。

「若えの……それだけか？」

学園艦の駐在さんの眼が鋭く光る。

「言い忘れていましたが、俺は軍から武偵へ出向しているものです。軍のツテがある。軍の爆弾処理班とその他を入れる許可をください。警察がヘリで来るよりかは早いかもしれません。」

……本来なら駐在さんの許可なしでも大丈夫だが、現場を混乱させないようにするためだ。

「分かった、許可する。住民の方もこつちがやっておく。……全く、今日は3時から孫とボコのショーを見る約束だったんだがなあ。」

駐在さんは大きなため息をついた後、携帯電話を出した。

「連絡先だ。おめえのも見せろ。嬢ちゃんたちもだ。」

「は、はい!!」

俺達は電話番号を交換すると、

「行ってこい若えの!!こつちは任せろ!!!」

「よろしくお願いします。……すまないみんな、協力してくれるか?」

「はい!!」

……彼女たちは迷いもなく頷いた。

「じゃあ、一緒に来てくれ!!」

俺達は走り出した。

俺は近くに置いてあったベントのEシリーズを拝借し、3人を乗せ

るとアクセルを踏んだ。

「ダーズリンさん!! AC—224589Dはどこですか!？」

俺はさらにスピードを上げながら聞いた。何とか昨日で学園艦の地図は覚えたが、そんな部屋は知らない。

「甲板から2階降りた場所にある4番艦の5条の89番の倉庫よ!!」

「距離は?」

俺達のいる場所は比較的艦尾付近の場所だった。そこから艦首は大分遠いぞ!?

「ここからですと……10キロくらいかしら?」

「もつとスピード上げるぞ!!」

俺はアクセルをさらに踏みこんだ。

俺は中学生二人の名前を知らないことを思い出した。

「そういえば中学生の二人!」

「は、はいい!!」

……声が上ずってる。こんなことに巻き込まれたら当たり前か。

「俺は村田維吹大尉、海軍から武偵高校に出向中に任務で聖グロに来たら巻き込まれた男だ。二人の名前は?」

「と、橙辺夕子ですう!!」

亜麻色の髪を編み込んだ少女が涙目で答えた。

「あたしは矢場蘭!!」

赤髪の少女は逆に目をキラキラと光らせていった。

……事の重大さが分かってねえのか?

「三人とも安心しろ!!俺は7歳のクリスマスからテロリストと戦ってきたベテランだ!!つい2、3週間前にもテロリストと戦ってた。お前らの安全は俺が保証するぞ!!」

……アメリカの中国総領事の娘誘拐の件な。何だつてこんなに巻き込まれるんだ?

俺がそう気休めを言うと、ダーズリンさんと橙辺さんは落ち着いてきた。

「なんだつて俺は不死の英霊だからなあ!!……この二つ名は嫌いだ

けど。」

「あ、そこ左で。」

ダージリンさんが言った。

「了解!!」

俺はスピードを維持したままハンドルを傾けた。

イモータル・スピリット  
「不死の英霊!! あんたホントに不死の英霊なの!!」

矢場さんが飛び上り、俺の肩を揺らして聞いてきた。

「おいこの野郎!! ゆらすな!!」

「本当に本物なの!?!」

「ここで嘘ついてどうすんだよ!!」

「ま、前!!」

ダージリンさんと橙辺さんが指をさして叫んだ。前には右から左へ動く車列が……

「……ッ!? しっかりつかまれ!!」

俺はさらに車を加速させ、動く車の間を何とかすり抜けた。多少擦ったのはショウガナイ。

「う、運転中に揺らすな!!」

「ご、ごめんなさい……。」

矢場さんはシュンと落ち込んだ。

「……で、本物だけど、どうした。」

「ファンなんです!! あとでサインしてください!!」

……俺にまさかファンがいたなんて。

「傷ついても傷ついても、敵に立ち向かう姿にあこがれてました!!」

……俺はただ、ボロボロになってカッコ悪く敵を倒していただけなんだが。

「この事件が終わったら山ほど書いてやるよ!!」

「やったー!!」

矢場さんが飛び上がって喜んだ瞬間、

「そこ右です。」

「はいよ!!」

車には強い遠心力がかかり……



ドスツ!!

「痛い……。」

飛び上がった矢場さんは車のドアに思いっきりぶつかつた。

「……シートベルトしような。」

「……はい。」

三人はイソイソとシートベルトを締めた。

## 2. 5 その2

俺は車で移動中に軍へ要請を出した。本土から距離があるため、空挺部隊が40分以内に到着、本隊は1時間半以上かかるそうだ。ただ運がいいことに、近くに駆逐艦4隻が航行していたため、その4隻を大急ぎで向かわせるらしい。その駆逐艦の到着が20分後。

俺はそのことを大急ぎで駐在さんに伝えたと、とても喜んでいた。当たり前だ、生徒と住民の避難を一人でできるわけがない。

そして午後2時36分、俺が散々飛ばしたおかげでダーズリンさんと橙辺さんはグロッキーになっているが、なんとかAC—224589Cという倉庫にたどり着いた。

俺はその倉庫のドアを蹴破り、拳銃を持って警戒しながら中に入ったが誰もいない。俺は3人を倉庫の中に入れた瞬間、

プルルル!!

倉庫の床に落ちていた携帯電話が鳴りだした。俺はスピーカーにしてその電話に出た。

「やあ、時間以内に到着したようだね。関心関心。」

電話の主はパブにかけてきたのと同じ声だった。

「で、民間人も巻き込んで何をしたい。」

「なに、私は君達とゲームをしたいだけだよ、護衛君。」

電話の相手はキザツたらしく言ってくる。

「では命令を与える。この学園艦にあるローマ劇場に30分以内に向かえ。」

ツー、ツー、ツー

電話が切れた。俺はその携帯電話を投げ捨てた。

「……はあ、この学園艦にローマ劇場なんて場所があるんですか?」

俺はダーズリンさんに聞いた。

「そんな名前の場所はないですわ。」

ダーズリンさんが言った。

「チクショウ!!どこだ!?!ローマ劇場つてのは……。」

……ローマ劇場、聞いたことがある。具体的には先週の土曜日に。  
「えっと……ローマ劇場つて、古代ローマ時代に造られた半円型の劇場でしたよね?」

橙边さんが首をかしげながら聞いてきた。

「そうだ!!それだ!!」

……先週の☒☒世界ふ○ぎ発見☒☒でやってたな!!

「え……何それ?」

矢場さんは分からないようだが、もういい。

「艦尾付近にセレモニー用の半円の劇場がありますわ!!でも……。」

「どうしたんです!?!ダーズリンさん!!」

「ここから30分じゃ無理です。森や校舎を迂回しなければなら  
ないわ。」

俺は学園艦の地図を思い起こした。

……そう言えばでっかい校舎と校庭のせいで迂回しなければい  
けないはず。……そうだ!!

「急いで車に乗ってくれ!!」

俺は三人を車に戻すとアクセル全開にした。

「で、どうするんですか?」

橙边さんが俺に聞いてきた。目の前には聖グロリアーナの敷地  
あることを示す柵が迫ってくる。

「……緊急事態だから多少壊してもショウガナイよな!!」

俺はそう言って☒☒四次元倉庫☒☒から、牛若から没収したパンツァー  
ファウストを出し、片手でそれを持って窓の外に出して発射した。

バシユ!!……ドカー……ン!!

なんとという事でしょう。これまで裝飾が施された上品で立派な柵  
が、俺の<sup>たくみ</sup>手によって見るも無残な姿へ変身してしまいました(某ビ

フオーアフター風)。

「……………」

三人は大きく口を開いたままだ。

……おい、聖グロの淑女。口を大きく開くのは品がない事じゃないか？

「こうすればまっすぐ行けるだろ!？」

車はさらにスピードを上げて聖グロの敷地へ入って行った。

……柵の残骸がタイヤに刺さらないか心配だったが、大丈夫なようだ。よかった。

車は敷地内の木々を抜け、校庭を抜けると今度は校舎が迫ってきた。

「こ、今度はそうするんですかあ!？」

橙辺さんは涙目で聞いてきた。

「今度もバズーカ!？」

矢場さんはキラキラした目で俺を見てきた。

……あれはバズーカではないんだが。

俺はハンドルを傾け、校舎を沿って進むと、校舎と校舎の間の渡り廊下が見えた。

「流石に校舎は壊さないぞ?。」

渡り廊下に車をつつませる。

「「キヤーキヤーキヤー!!!」」

渡り廊下の柱二つがギヤリギヤリと車の左右を擦った。

「わ、私まだ生きてます?。」

ダーズリンさんは泣きそうになりながらもそう言ってきた。

「ピンピンしてますよ!!」・

俺は運転しながら言った。

「聖グロって凄くヤンチャな学校なのね!!」

「それは違うと……。」  
橙辺さんは矢場さんに突っ込んだ。

車は半円の野外ステージに滑り込んだ。俺は車から急いで降り、ステージ内を見ると……小さな少女がぬいぐるみを抱えて席にポツンと座っていた。

……こいつが犯人か!?

俺は銃を抜いて、いつでも撃てるようにした。

「お嬢ちゃん、両手を上げてゆっくり後ろを向け。」

俺は恐る恐るぬいぐるみを抱えた少女に近づいた。

……おかしい。ぬいぐるみを抱えた少女の姿勢や重心が一般人の域を出ない。

少女は首をかしげながら後ろを向くと、俺の銃に気が付いたのかビクツと震え、ぬいぐるみを強く抱えて涙目になった。

……可哀想だが、犯人かどうか分からない限り、銃は下げられねえ。

「お嬢ちゃん、どうしてここにいる?」

この野外ステージにはぬいぐるみを抱えた少女以外、人っ子一人もいない。

「ぼ、ボコ……。」

少女はぼつりと呟いた。

「ボコ?」

ボコってなんだ?

「ボコのシヨールがあるから……。」

少女の目尻には大粒の涙が……

……嘘をついてはいないようだな。ということは何にも知らずにシヨールを待っていた少女だったのか。

俺は銃をジャケットの中のホルスターにしまった。

「ごめんお嬢ちゃん。今、爆弾魔の事件があつてな、その爆弾魔の指定した場所がここなんだ。銃を向けてしまつてすまない。」

俺はそう言つて頭を下げた。

「その楽しみにしているショーも、爆弾魔のせいできつとないぞ。」

「そんな……。お爺様と一緒に見るつて約束してたのに……。」

ぬいぐるみを抱えた少女はorzの体勢になった。

「む、村田さーん!!」

顔が真つ青のダージリンさんの背をさすりながら、橙辺さんと矢場さんが戻つてきた。

このローマ劇場（仮）に着いた時、ダージリンさんは近くの草むらに顔を真つ青にして走つて行つた。そんなダージリンさんを心配して中学生二人もついていったのだ

俺と涙目の少女を見つけると、口元を押さえたダージリンさんと橙辺さんは驚いた顔をした。

「ああ……ダージリンさん、大丈夫?」

「ええ、大丈夫ですわ。……こ、こんな格言をsh……」

「ダージリン様は盛大にゲロ吐いてたわ!!」

矢場さんが大声で乙女が知られたくないであろう秘密を暴露した。

ダージリンさんの顔色は真つ青から真つ白に変わった。

「……俺は何も聞いてないぞ、うん。」

「……大丈夫?」

俺とぬいぐるみみの少女が放つた言葉がダージリンさんの心をえぐつたのだろうか?

「……グスッ。」

ダージリンさんはシクシクと泣いてしまった。

プルルル!!

ステージから電話の音が鳴つた。俺は泣いているダージリンさん

と、ダーズリンさんの頭を撫でていたぬいぐるみの少女を小脇に抱えてステージへ走りだした。

ステージの上に置いてあった携帯のところで二人を下ろし、俺は電話に出た。

「はい!!もしもし!?!」

「やあ護衛君。時間ギリギリじゃないか。」

キザツた声が聞こえる。

「俺はいつだって時間ピツタシだ!」

「そうかそうか……。ではスピーカーにしてくれ。」

俺はその携帯をスピーカーにした。

「では早速だが命令だ。イギリスで最も有名な提督の噴水に模した場所に爆弾を仕掛けた。15分以内に爆弾を解除しないと爆破する。なお、護衛君と淑女三人のほかにも、そのぬいぐるみを抱えたお嬢様も一緒に行くこと。」

「ふざけるな!!なんだってさらに民間人を増やすんだ!!」

「……こいつはどれだけ民間人を巻き込めば気が済むんだ!?!」

「まあ落ち着け、護衛君。ここで一人残すより君達とついていった方が安全だろう?こんなところで一人ポツンといれば変な輩に誘拐されかねない。」

確かにそうだが……。

「では15分後。」

ツー、ツー、ツー

電話は切れた。

……このぬいぐるみのお嬢さんも連れて行かなければならないのか。

俺は頭が痛くなった。すると俺の袖が引つ張られた。俺は引つ張られた方を見ると……ぬいぐるみの少女が俺の袖を引つ張っていた。

「……協力する。」

その瞳は強い意志がこもっていた。

「ボコのシヨールのためなら頑張る。」

……最近の子供ってのは大人びてるんだなあ。

俺は海鳴で出会った少女達を思い出した。

「すまない、協力してくれ。」

「うん!!」

さて、協力な助っ人（笑）を加えた俺達五人は車に走って戻った。

「イギリスで最も有名な提督って誰だ!？」

「ネルソン提督じゃないですか？」

橙辺さんはそう言っただけで車に乗り込んだ。

「ネルソン提督の噴水と言えどトラファルガー広場だと思います。ロンドンの中心部にある有名な場所ですよ。」

「橙辺さんは博識だなあ。」

俺は思わず感心した。

「トラファルガー広場を模した広場がここから5分の場所にありませわ。」

流石はダーズリンさん。学園艦のことをよく知ってらっしゃる。

「案内よろしく!!」

「ええ、もちろんですわ。」

ダーズリンさんは何処からか出したティーカップを持って答えた。俺はダーズリンさんの言葉に頷くと共に、アクセルをベタ踏みした。

そういえば、ぬいぐるみの少女の名前を知らない。

「俺の名前は村田維吹。お嬢ちゃんの名前は？」

「……私は愛里寿。」

橙辺さんが凄く慌てているが何故だろうか？そう言えばダーズリンさんも、ティーカップ（何処から出したんだ？）の紅茶をビチャビチャとこぼしている。

……いいところのお嬢ちゃんなのだろうか。



「じゃあよろしく、愛里寿ちゃん。」

「……うん!!」

俺はハンドルから片手を離し、愛里寿ちゃんと握手をした。

「あたしは矢場蘭。よろしくね愛里寿ちゃん。」

「……よろしく、矢場おねえちゃん。」

すると、矢場さんは感極まつて愛里寿ちゃんを抱きしめた。

「ああ!!可愛い!!妹がいたらこうなんだろうなあ!!」

「や、矢場おねえちゃん……ちよつと苦しい。」

するとダーズリンさんは白目を向き、橙辺さんは気絶した。

「おい大丈夫か!!二人とも!!」

俺は運転しながら駐在さんに少女が巻き込まれたことトラ  
ファルガー広場(偽)へ向かっていること☒を携帯で伝えた。駐在さ  
んからは☒駆逐艦4隻が到着し、その乗員が必死になつて学校の爆弾  
を探していること☒☒空挺部隊がもう少しで到着すること☒☒を教え  
てくれた。

……早く校舎に仕掛けられた爆弾が見つかることを祈ろう。

そう思った瞬間、ダンプカーの列が俺の運転する車の目の前を横  
切った。

キキキキキキ!!

「あ、あぶねえ……。」

俺が慌ててブレーキを踏まなかったら衝突してた。ダンプカーは  
履帯のついた何かをキャンバスで覆つて、運んでいた。

……いったい何を運んでるんだ?

車はトラファルガー広場(偽)に滑り込んだ。俺は車から降りて噴  
水へ走ると……あつた。噴水の腰を掛けられるぐらいの淵にスツ  
ケースと、ウォーターサーバーに使われていそうなデカイボトルが大  
小合わせて二つ置いてあつた。

「こ、これが爆弾ですか……?」

橙辺さんは後退あとずさりりしながら言った。

「……………(ゴクツ)」

ダーズリンさんと愛里寿ちゃんが唾を飲み込んだ。

「……………(キラキラ)」

矢場さんはまるで映画のワンシーンだと思っっているのか、ワクワクしているのがよくわかる。

「全員、車の後ろで隠れてろ。爆発する可能性がある。」

俺は4人が車を盾にして隠れたのを確認してからスーツケースを恐る恐る開けると……………大量のC4と起爆装置、携帯電話が入っていた。

ピピッ!

起爆装置が鳴った。

『起爆装置が作動しました。残り299秒』

「おい……………ウソだろ!」

起爆装置が作動しやがった!?

プルルル!

今度はスーツケースに入ってあった携帯電話が鳴った。俺はその携帯を手を取った。

「もしもし!」

「やあ護衛君。今度も間に合ったようだね。ではスピーカーにしてくれ。」

俺は4人に再び来てもらおうとスピーカーにした。

「スピーカーにしたぞ。」

「では紳士、淑女の諸君、そこに10Lと6L入るボトルがあるだろう。」

確かに、スーツケースの隣にはボトルが二つ置いてあった。

「ああ、あるな。」

「では命令だ。そこに重さを感知する装置がある。そこにピッタリ8Lの水を置け。そうすれば起爆装置が止まる。」

……………なんでそんな遊びをするんだ?

「起爆装置が無事解除されたらまた電話する。」

ツー、ツー、ツー

電話が切れたようだ。

……残りは4分。そう言えば、なぜこんな事を犯人はやらせるんだ？この学園艦には、軍人警官が、俺合わせて二人。もう一人の警官である駐在さんは生徒や住民の避難で手一杯だ。駆逐艦の乗組員も応援に来たが、爆弾探しと避難の誘導で精いっぱい。俺も爆弾探して学園艦を探し回っている……。ってことは……治安維持をする人間がない!?

もし、奴らが空き巣をしたとして、それが気付くのはいったい何時になる!?奴らは空き巣でもしようってのか!?

カット。これ以上は爆弾を解除してからだ。

「わかったわ!!」

矢場さんが大きな声を上げた。

「6Lのボトルを満杯にして、10Lのボトルに移して……今度は6Lのボトルの3分の1を入れればいいのよ!!」

……え?

「矢場さん!犯人はピッタリ6Lって言ってましたよ!」

橙辺さんが矢場さんに言った。すると、俺の袖が引つ張られた。

……愛里寿ちゃんか。

「……村田お兄ちゃん手伝って。」

「分かったのか?」

「……(コクリ)。」

俺は矢場さんと橙辺さんからボトルを奪った。

「で、どうすればいい?」

「……まず、6Lのボトルをいっぱいにして、10Lのボトルに注いで。」

俺は6Lのボトルを噴水に沈めて満杯にさせ、その水を10Lのボトルに注いだ。

「注いだぞ。」

「……もう一回6Lのボトルをいっぱいにして、10Lのボトルに注

いで。そうすると6Lのボトルに2Lの水が残るわ。」  
なるほど、その残った2Lと、6Lの水を足せばぴったり8Lになるのか。

「ああ、分かった。ダージリンさん、ボトル押さえてくれないか？」  
「ええ、分かりましたわ。」

そうして6Lのボトルの中に2Lの水が入り、それを空にした10Lのボトルに入れ、もう一度6Lの水を入れて、8Lの水が入ったボトルができた。爆発まで残り……157秒、2分半か。

淑女たち4人は互いにハイタッチをして喜んでいる（聖グロの淑女がそんなことやっていいのか？）中、俺は慎重にそのボトルを装置の上に置いた。

ピピー！

『爆発まで残り、15秒』

……ウソだろ!?なんで短くなってんだよ!!しかも解除されないし!!

「みんな逃げろ!!あのビルまで走れ!!」

俺は爆弾の入ったスーツケースを噴水の中に投げ入れ、走り出した。みんなも慌てて走り出す……。

ビタン!!

俺が振り向くと愛里寿ちゃんが転んでいた。俺は急いで戻り、愛里寿ちゃんを抱きかかえてビルへ走る。

……あと、少し!!もう5歩でビルへ逃げれる!!

ドカーカーカーン!!!

爆発音とともに、石や金属片が俺の背中にドスドスとぶつかる。

「うあああああ!!」

俺は爆風に飛ばされた。

爆発が収まったようだ。背中が燃えるように痛い。

「よ、よお愛里寿ちゃん。ケガ無かったかい？」

腕の中の少女を見ると、擦りむいた時の怪我だけなようだ。

「う、うん……む、村田お兄ちゃん……血が……。」

「あ?ああ……このぐらいなら日常茶飯事だ、大丈夫。……擦りむい

ただろ？見せて見な。」

俺は四次元倉庫から救急キットを出して、愛里寿ちゃんの擦りむいた場所を処置する。

……この爆弾でわかったことがある。確かに愛里寿ちゃんの答えは正解だ。それなのに爆発した。これは俺達を殺しに来たor負傷による無力化を狙って爆発させたのだろう。何故そうしたか……俺の考えが合っているはずなら、奴らは空き巣をしているはず。そう言えば、連絡用飛行機の格納庫の下には、戦車用の整備室や戦車用格納庫があったような覚えがある。おい、もしかして!?

俺がそんなことを考えながら愛里寿ちゃんの処置をし、それがあらかた終わった頃に3人が恐る恐るビルから出てきた。

「3人とも大丈夫だったか？」

俺は3人に声をかけた。

「む、村田さん!!ち、血が!!」

橙辺さんは泣きそうになりながら言った。

……あ、そういえばこの服、聖グロの支給したスーツだった。これ弁償になるのかなあ。

「橙辺さん、このぐらいなら大丈夫だ。……スイマセン、ダーズリンさん。スーツをボロボロにしちゃって。」

「え、ええ……緊急事態ですもの、しょうがないわ。」

流石はダーズリンさん、弁償はしなくていいのかな？

「ご、ごめんなさい!!」

すると、愛里寿ちゃんが急に謝ってきた。

「どうしたの?」

矢場さんが膝を曲げ、愛里寿ちゃんの目線と自分の目線を同じ高さにして聞いてきた。

「私の答えが、間違ってたから……。」

……あの答えは合ってたのに、わざわざ謝るなんて。

俺は思わず愛里寿ちゃんの頭を撫でた。

「愛里寿ちゃんの答えは合ってた。気にしなくていいよ。あれは

……俺達を殺そうとしていたんだ。何を置いても爆発する。」

その言葉に4人は驚愕の表情を浮かべた。

「なあダージリンさん。連絡用飛行機の格納庫の下って、戦車用の格納庫か何かありましたよね？」

「ええ……あります。そういえば村田さん。」

「はい？」

「かしくまった口調は似合っていないわ。いつも道理の口調で喋ってくれません？」

……おい、ダージリンさんや。俺は一応、King's Menの従業員で、ダージリンさんが顧客ってことになってるんだが。

「いや、名目上King's Menの従業員ってことになってるんで……。」

「私とは同い年でしょう？ 畏まられては、こつちが困ってしまいますわ。……雇い主の命令でもダメかしら？」

「……了解、ダージリンさん。」

「ダージリンでいいわ。」

「了解、ダージリン。……俺もイブキって呼んでくれ。」

「ええ、分かったわ。」

ダージリンがにっこりと笑った。

……話が脱線してしまった。話を戻そう。

「とりあえず時間がない!! 適当な車を見つけて連絡用飛行機の格納庫へ向かう!!」

さつきまで乗っていた車は爆発の影響で動かせなさそうだし。俺はそう言っただけをした愛里寿ちゃんを抱えて走り出した。

今度はベンツの四駆を見つけ、その車を拝借させてもらった。

「じゃあ、話を戻すぞ。この学園艦には軍人警官がほとんどいない。しかも今は避難と爆弾探して治安維持の人間は全くいない。要は……空き巣がやり放題の状況だ。ところでダージリン、戦車用の格納

庫ってセキュリティって頑丈でしたよね？」

俺は事前に理子が調べてもらった時の報告書を思い出しながら言った。

「ええ……3重のロックがあります。」

「で、真上の飛行機用格納庫があんな大爆発が起きればセキュリティも故障する。そうなれば盗み放題になる。……さつきダンプの列が通ってたが、あの荷台には履帯がついた何かを運んできた。」

パリン！

その言葉を聞き、ダーズリンさんはカップを落としてしまった。

「この仮説があつてるか調べるために俺は格納庫へ行く！4人は駐在さんの所で待っていてくれ!!」

……さつきの爆発で俺達は死んだと犯人は思っているはず。4人には危ない橋を渡らせてはいけない。

「分かりましたわ。イブキさん、ご武運を。」

ダーズリンさんが言った。

「……村田さん、生きて帰ってきてください。」

橙辺さんが言った。

「……村田お兄ちゃん、死なないでね?」

愛里寿ちゃんはクマ(?)のぬいぐるみをギュツと抱えて行った。

「おう、あつたりめえよ!」

俺が威勢よく言った。

「何かあつたらあたしがすつ飛んで助けに行くわよ!!」

「……そうならないように頑張るよ。」

矢場さんが来てても何もならないと思うが……。

俺は駐在さんに連絡し、連絡用飛行機の格納庫近くの校舎で駆逐艦の乗組員に4人を預けた。

ここは聖グロの学園艦にあるとある一室……

「全く、この聖グロにクロムウエルやブラックプリンス、コメント、ましてはチャレンジャーやトータスを配備するなんて言語道断ですわ。」

「その通りです。チャーチルこそ至高であるというのに……。」

「クルセイダーの方が最高ですよ？……しかし、あの田尻とかいう小娘をあそこまでするのはやり過ぎではなくって？」

コンコン

ノックと共に、その部屋には数人の男たちが入ってきた。

「報告にきました。」

そう言って短髪の男が三人の女性に近づいた。

「報告ご苦労ですわ。で、田尻とかいう小娘はどうなってます？」

「報告は二つあります。一つはダーズリンとその他4人は爆発で死亡しました。もう一つは……。」

ダダダダダダダダ!!!

後ろにいた男たちは手にしていた銃でその3人の女たちをハチの巣にした。

「もうお前らは用済みだということだ。」

パン!!パン!!パン!!

短髪の男はゆっくりと出した拳銃で、ハチの巣になった三人の女性の眉間に一発ずつ鉛玉をプレゼントした。

「さあ、計画はあと少しだ。護衛がいたのは計算外だったが、二人も別嬪さんが増えるとは思わなかった。お前たち!!無事逃げられたら、この子以外は好きにしていぞ!!」



そう言つて短髪の男はぬいぐるみを抱えた少女の写真を他の男たちに見せた。

「「「「「おおく!!!」」」」」

2. 5 その3

俺は4人を預けた後、一人で格納庫へ向かった。

俺は滑走路に車を止め、連絡用飛行機の格納庫へ走って向かうと、そこには工事の人間が複数いた。

……怪しい。今は住民全員避難させているはず。

すると、現場監督っぽい人が俺に気が付いた。

「やあすまない。武偵の者なんだが、この中を見せてもらってもいいか?」

俺はそう言って武偵高の手帳を見せた。

「分かりました。上の者に聞くので少しお待ちください。」

すると、現場監督っぽい人が無線で話を始めた。

……なんか怪しい。現場監督っぽい人は、俺を観察するようにジロジロとみる。

「許可が下りました。案内するのでついてきてください。」

俺は現場監督(?)の人の後について中に入ってしまった。

中に入ると案内人が増え、5人ほどに囲まれながら俺は進む。

……どうしようか。殺しはご法度、この5人をすぐに無力化できるのか?

「そういえば避難指示がされているはず……なんで避難しないんですか?」

俺は現場監督(?)に訊ねた。

「滑走路の邪魔になるから早く片付けないと……本土からの物資も届きませんから。」

一理あるが……まるで初めから定められたような答えだ。

「下の戦車用の格納庫は大丈夫でしたか?」

「爆発の衝撃でセンサーが逝ったそうです。幸い床がこれ以上崩れる

事はないようです。」

現場監督（？）が飄々ひょうひょうと答えた。

……うわあ。床に穴が開いて、戦車用格納庫が丸見えだ。

「戦車に被害は？」

「ええ、戦車には被害がないと我々は知っています。」

カチャツ

俺の背中に銃が付きつけられた。

「やれ。」

ダンダンダンダン!!

現場監督（？）の言葉でその銃は発砲された。

「この野郎!!」

俺は数発貫つたがこの包囲を抜けて壁に隠れ、14年式を脇のホルスターから出し応戦する。

カランカラン

すると、俺の目の前に手榴弾が転がってきた。

「ウソだろ!」

俺は走って逃げだした。

ダダダダダダダ!!

……敵は機関銃まで持ってんのかよ!!

ドカン!!ドカーン!!

手榴弾の爆発と共に俺も吹っ飛ばされた。

「う、うう……。」

俺は何とか壁に隠れて、敵の銃弾の嵐から身を守る。

……2度の爆発で体はボロボロだ。こいつらをやらないと死ぬ!!

俺は拳銃をしまい、四次元倉庫から紅槍を出した。

俺は影の薄くなる技を使って一気に敵へ接近した。俺はリー

ダー格であろう現場監督（？）に狙いを定め、槍を思いつきり振った。

「うああああ!!」

現場監督（？）は野球ボールのように飛んでいき、壁に勢いよくぶ

つかると、そのまま気絶した。

「お、お前どうしてここに!？」

「や、やれ!!」

俺は銃弾を槍で弾きながら一人ずつ吹っ飛ばしていく。

何とか最後の一人になった時、

「へ、へへ……これでみちづれ!？」

バコン!!

「アニメじゃねえんだ!!セリフ全部言ってから倒すなんてことはやんねえんだよ!!」

俺は最後の男がセットしていたものを見ると……爆弾!?トラファルガー広場（偽）にあった爆弾の10倍は少なくともあるぞ!?あの野郎何処から持ち出した!?

『残り30秒』

「チクショウ!!なんでこんな目に!!」

俺は一目散で逃げだした。

俺は何とか格納庫跡から出た瞬間、

ドカーーーーーーン!!!!

「うわああああああ!!」

爆風と共にまた吹き飛ばされた。

「い、生きてるのか……?」

俺は何とか死なずに済んだようだが……全身が痛い。

「ッ!!」

俺は左手を骨折したようだ。ついでに胸と足も尋常じゃなく痛い。ヒビでも入ったのか?

「ハア……とりあえず連絡だな。」

俺はヒビだらけの携帯を出して駐在さんに電話した。

「やっとながったか!？」

駐在さんは大分慌てている。

「爆弾を見つけて解体中だが、それ以上のことが起こった!!」

「どうしたんです?」

爆弾の発見以上にやばいことだって!？」

「例の嬢ちゃん達が攫さらわれた!!」

……は? 駆逐艦の乗員達に預けたはずだが。

「おめえが預けたあと、敵に襲われたんだ!! 軍人たちは死んじやいねえが重症だ!!」

「分かりました!! 探します!!」

ピッ!!

俺は電話を切った。

……何処だ……どこにいる? 敵はもう、あらかたの戦車は運び出している……。待て、どうやって運んだ戦車を学園艦の外に出すんだ? あんなものを運ぶなんて……。ランプウエーで揚陸するくらいしか……。そうかランプウエーだ!! ほかの船を横付けさせて、そこにランプウエーを渡せば簡単にできる!! 古代ローマのコロウスと同じようにすればいい!! 学園艦の右舷には駆逐艦がいるから……。左舷か!!

俺は学園艦の左舷にあるランプウエーに向かおうと、車に乗り込……。めなかつた。車が爆風の影響で横転している。

「クソツタレ!! 大事な時に使えないなんて!!」

俺は周りを見渡すと……。あつた。爆風の影響で荷台からずれ落ちている戦車が……。

俺は走って近寄った。

……この戦車は……。クルセイダーだったっけ?

俺はソロバン玉のような垂直砲塔を見ながらそう思った。見た感じ損傷はしてないようだ。

急いで操縦席に乗り込み、エンジンをかけようとするが……。かからない!!

「クソツタレこの野郎!!かかりやがれ!!テメエは戦車だろうが!!」

ドウルン!!

俺が口悪く罵った瞬間、この戦車は眠りから覚めた。

「ハハハ……相棒!!この学園に全く相応ふさわしくない、泥臭い戦い方するぞ!!」

ドドドドドドドドドド……!!!

戦車は勢いよく荷台から飛び降り、風になった。

「鬼塚少佐直伝の操縦技術なめんなよ!!」

……喋つてないと鬱になりそうだ。

戦車はランプウエーがある船倉前に着いた。俺は相棒クルセイダーを船倉に入る扉の前で止め、ゆっくり扉を開けた。

そこには、大量のダンプと荷台に乗った戦車があった。

……ここで発砲すれば跳弾しちまう。

俺は38式と銃剣を四次元倉庫から出し……しまった。

……たまには使つてやらねえとな。

四次元倉庫から、師匠から貰った紅の日本刀を出した。今回は無力化と銃弾回避だ。俺一人ならともかく、多人数を守らなきゃいけないなら日本刀のほうがいいだろう。

そろりそろりと歩いていくと、ぐもった声が聞こえた。俺は影の薄くなる技を使いながら必死で声が聞こえたほうへ進む。

そこには……猿轡さるむすわに縄で縛られた愛里寿ちゃんと、下着姿にひん剥かれているダージリン、橙辺さん、矢場さんがいた。

……ヤバイ!?

俺は影の薄くなる技を解き、ワザと大きな音を立ててこつち

に注目させた。

「て、テメエ!!何もんだ!!」

「てやんでい!!高級テーラー King Men の従業員でい!!」

俺は3人の服を破いていた5人を峰で一気に無力化し、4人の縛られている縄を切った。

「これでも喰らえ!!」

俺は発煙弾とママチャリさんから貰った液体の入った瓶数本を投げ、姿をくらます。

「4人とも、逃げるぞ!!」

……毒ガス（笑）から逃げるために!!

俺は4人を抱えて走り出した。

何とか異臭がする船倉から逃げ出した。俺はさらに発煙弾とママチャリさんの液体が入った瓶をもう6, 7発投げ入れて扉を閉めた。

ガシツ!!

「二二うわあああああ!!」

4人が俺に抱き着いて泣きだした。

……怖かっただろう。下手すれば犯されてたんだから。むしろ良く我慢していただろう。

「ああ、もう大丈夫だ。」

俺は痛む左手も使って4人の頭を撫でた。

4人は何とか泣き止んだ。俺は駐在さんに連絡した後四次元倉庫から上着3着を何とか探し、下着姿の3人に着せた。

「敵が追ってくる。逃げるぞ!!」

俺はそう言って4人をクルセイダーに乗せた。俺も操縦席に座ったその時、

ドカーーン!!!

クルセイダーの後ろの扉が爆発し、そこから戦車が飛び出てきた。

「に、逃げるぞ!!」

クルセイダーは轟音を上げて逃げ出した。

ドン!!ドン!!ドン!!…ヒュン!!

敵4両が砲弾を撃ってくる。

…あつぶねえ!!今砲弾がかすったぞ!?!しかも戦車道用の砲弾  
じゃなくて実弾使つてやがる!?

敵の使っている車輛はT-54かT-55のどっちかだ。HS部  
隊にいた時よく見てたからわかる。

T-54/55は最新の主力戦車に比べたら雑魚だ。しかし、歩兵  
だけの部隊やクルセイダーにしたら脅威でしかない。機動力・加速力  
が良好で、西側の90ミリ戦車砲クラスの貫通力がある。しかも西側  
の90ミリよりも口径が大きいので、榴弾の威力は西側よりも高い。

以上が実際に体験した時の感想だが…とりあえず、クルセイダー  
より☒☒早くて、機動力があつて、砲は強くて、装甲もすごい☒☒とい  
うのがT-54/55だ。今でこそ敵との距離は開いているが、次第  
に縮んでいくだろう。

「俺が降りてやるしかないか…。」

俺がそうつぶやいた瞬間、

ガチャ

愛里寿ちゃんが砲塔から身を乗り出し、敵戦車を眺めていた。

「愛里寿ちゃん!!危ないから中に入つてろ!!」

「…村田お兄ちゃん、私の言つた通りに動かせる?」

…愛里寿ちゃんの雰囲気が変わつた。まるで歴戦の兵が如く。

「やれるのか?」

俺は思わず聞いた。確かに、今のままだとやられるのは目に見えて  
いる。

「私の言つた通りにできるなら。」

俺はバツと後ろを振り向いた。そこには…高速起動で吐きそう



なダージンさん、涙目で震えている橙辺さん、闘志を燃やす矢場さん、オーラが半端ない愛里寿ちゃんがいた。

俺はなんとなく、愛里寿ちゃんの命令で敵を倒せると思えた。

「……ああ!!~~自~~自走式暴力装置~~で~~天災~~の~~鬼塚少佐と矢原<sup>兄</sup>嘉太郎<sup>者</sup>さん直伝の腕を見せてやるよ!!」

……まあ、武藤には全く及ばないけど。

「私をこんなにしやがって!!生爪剥いだ後○○を××して××してこの世の絶望を味わせてやる!!」

……おい、聖グロ志望校の矢場さん。言葉が汚すぎだろ。

「……やーってやる、やーってやる、やーあてやーるぜ……」

愛里寿ちゃんが歌い出した。その歌声で緊張が解けた気がする。

愛里寿ちゃんがひとしきりうたった後、

「私が合図したら、左ターン、225度。矢場おねえちゃん、砲塔を10時方向。」

ゴゴゴ……

砲塔が動いた。

「やってやるぞ、こんチクショウ!!」

……矢場さんは本当に聖グロが志望校なのか？

戦車が地下を抜け、広場に出た。

「……今。」

愛里寿ちゃんが合図を出した

「くらいやがれ!!」 ↑俺

「死ねカスども!!」 ↑矢場さん

「や、やってやる!!」 ↑橙辺さん

戦車が急反転をし、激しい遠心力がかかる。

「イピカイエー・マザーファッカー!!」 ↑俺&矢場さん

ドオン!!ドオン!!ドオン!!ドオン!!

1秒以内に砲が装填され、クルセイダーが連射する。

ドカーーン!!!

4面が爆発し、真っ黒な煙が上がった。

バキイ!!ベキベキベキ!!

嫌な音がした。俺は戦車を動かそうとしたが動かない。駆動系が逝かれたようだ。

「ハア……やったな。」

……それにしても、すごい早い装填だったな。

俺は後ろを振り向いた。そこには砲弾を握る橙辺さんがいた。

……あの強い遠心力の中、あんなに早く装填するなんて。全弾当てて貫通させた矢場さんもすごいけどさ。

俺がそう思った時、

ギュラララララ!!

履帯が擦れる音がする。

……敵にはまだ戦車がいたのか!!

この戦車は駆動系が壊れ、今はただの砲台でしかない。

……今度は俺の番か。

俺はため息をついた後、

「今度は俺が活躍しますかね。」

そう言つて、痛む体を無理やり動かして操縦席から出た。

戦車から出た俺が最初に見たのは、履帯と転輪が吹き飛んだ相棒クルセイダーの痛々しい姿だった。

「ありがとな、今度は俺の番だ。」

俺は相棒クルセイダーを撫でた後、四次元倉庫に残っていた最後のパンツアフアウストを握りしめた。

……あ、ダージリンが顔真っ青にして茂みに向かっていった。

俺はダージリンの後姿がとても痛々しく見えた。

敵戦車は3両、T-54/55のようだ。

俺は影の薄くなる技影を使いながら、敵が接近するのを待つ。

……100m、まだだ。もう少し待たなければ。

……50 m、もう少し、もう少しだ。

……30 m、あとちよつと、ちよつとだけだ。

……20 m、ここだ!!!

俺は引き金を引き、その後2両目に走り、張り付いた。

ドカーーン!!!

パンツァーフアウストで狙っていた一両が爆発した。俺は2両目の砲塔に上り、ハッチを開けた。そして、~~四~~四次元倉庫~~四~~からママチャリさん特製の異臭瓶4発を戦車内に投げ込んで、すぐにハッチを閉めた。

「ぐおおおおお!!!」

2両目の戦車の内部から人間が出してはいけないような声が、聞こえてくるが無視する。

ダダダダダダ!!

3両目がやつと気が付いたのか、機銃を俺に撃ってくる。

ドスドス!!

……被弾した!?

俺は弾の威力のため、一瞬のけ反った。

「……べらんめえ!!この野郎!!」

俺はなんとか体勢を立て直し、最後の一両に張り付いた。

「くらえ!!!」

俺は再びハッチからママチャリさんの異臭瓶数本と平賀さん特製のスタングレネードを投げ入れ、蓋をした。

キュイイイイイン!!

激しい音と、まぶしい光、そして異臭が最後の1両から溢れ出てきた。

……やつと終わった。

俺は戦車から振り落とされていた。

……全く、学園艦に来て早々、なんて日だよ。

カチャ!!

誰かが俺に銃を向けた。

「やあ、護衛君。まさか君が不死の英霊イモータル・スピリットだとは思わなかったよ。……

良くもやってくれたなあ。」

……こいつ!!電話の奴か!!

「一緒に来てくれないか?」

そう言って、電話の主は~~男~~右を見ろ~~男~~というジェスチャーをした。そこには……再び掴まっている4人がいた。

俺は領くしかできなかった。

俺達は再び左舷ランプウエーがある船倉（異臭がひどい）に来了た。

「全くなんてことをしてくれたんだい?護衛君改め不死の英霊?計画は丸つぶれ!!そして私の部下はこの二人だけになってしまった!!」  
そう言って電話の主は俺を抱え、こめかみに銃を突きつけた。

……チクシヨウ。血を流し過ぎた。意識が朦朧とする。

「不死の英霊?君はもうくたばる様だが、もう少し待っててくれ!!この3人をお前の目の前で殺すから!!それをお前に見てもらいたい。」

電話の主で、今回の主犯であろう短髪、身長180越え、鼻が高く、イケメンの男が言った。残りの部下は拳銃を4人に突きつけている。「なあ?聞いているのか?護衛君。」

電話の主が被弾した左肩に銃をグリグリと押し付けた。

「ぐああああ……。」

俺は思わず呻いた。

「護衛君の墓にはこう彫ろうか?世界で最も計画を潰した大迷惑な男~~男~~って!!どうだ!」

……こいつは完全に油断している!!

俺は電話の主が持っている銃を握った。

「てやんでい!!イピカイエー・マザーファッカー!!」

ダァン!!!

俺は電話の主が握っている拳銃の引き金を思いつき引き、俺の肩

越しに電話の主に発砲した。

「グアア!!」

電話の主が倒れる。

「っち!!」

「この野郎!!」

電話の主の部下が拳銃を俺に向けて発砲する。

ダァンダァンダァン!!

俺は何発か喰らいながらも、一気に接近した。

「はあ!!!」

俺は電話の主が持っていた銃を鈍器にして、その部下二人を殴った。

バタン!!バタン!!

部下達は気絶した。俺はフラフラしながら四次元倉庫から手錠三つを取り出した。

「……午後5時18分、逮捕だ。」

3人に手錠をかけた。そして淑女たち4人の縄を解き、俺は壁に寄りかかってズルズルと座った。

「む、村田さん!!」

橙辺さんが走って俺に来た。

「大丈夫ですか!!」

橙辺さんは大粒の涙を浮かべながら俺に聞いてきた。

「ああ、今回は医者死亡判定が無かったから大丈夫だ。」

「ッ!!」

すると、橙辺さんは泣き出してしまった。

ダッ!!

すると今度はダーズリンが俺に抱き着いた。

……すごく痛いんですけど。

「よ、がっだ!!よ、がっだ!!う……う……う……。」

ダーズリンは俺に抱き着いたまま抱き始めた。俺は右手で彼女の頭を撫でた。

ガシッ!!

愛里寿ちゃんがダーズリンと逆の場所に抱き着き、静かに泣き始めた。

……すつごく痛いし、汗と血の匂いがするから抱き着いてほしくないんだけどなあ。

俺は激痛がする左手を置き、痛みを我慢しながら愛里寿ちゃんを撫でた。

「村田さん!!」

……矢場さんか。

俺は声が聞こえた方向に顔を向けた。矢場さんは、まるで憧れのヒーローを見るかのように俺を見ていた。

「どつてもかっこよかった!!」

矢場さんは俺をキラキラとした瞳で見ながら言った。

「……ああ、右手は骨折してないからサインはできるな。」

……そう言えば約束してたよな。

ドオン!!

扉が蹴破れる音と共に、空挺部隊と水兵達が小銃を抱えながら、船倉に入ってきた。

「動くな!!」

「動くな!!」

そうやって俺らに銃を向ける。

「待て!!若えのと嬢ちゃんたちは味方だ!!」

駐在さんが大声でそう言った。兵士たちは俺らを見無視し、この船倉の搜索に入った。

「村田さん!!」

橙辺さんが大泣きしながら言った。

「村田さんはどうかしてます!!」

「どうかしてるって……?」

俺は思わず聞き返した。

「自分まで撃つなんて!!」

……確かに、言われてみればそうかもなあ。

「あの時はあれが最善だと思ってね。」

そう言つて俺は周りを見た。兵たちは必死に周りを搜索をしている。

「みんなには言わないでね。」

「村田さんは自分を大事にしてください!!」

そう言つて橙辺さんは俺を抱きしめた。

……全く、修学旅行Iの前にこんな大怪我をするなんてなあ。そう

言えば、今日は護衛の初日、残りの六日間は誰が護衛をやるんだろう？

俺はそんなくだらないことを考えた。

驚いたことに、この学園の駐在さんは愛里寿ちゃんのお爺ちゃんだったらしい。何でも、駐在さんの一人息子が名家に婿養子に行き、その子供が愛里寿ちゃんだそうだ。その息子さんは事故で亡くなつてしまい、その息子さんの残した孫<sup>愛里寿ちゃん</sup>を駐在さんは溺愛しているらしい。

なので俺は駐在さんにとっても、とっても感謝された。具体的には、その大切な孫の婿になつてほしいと……。

流石に丁重に断らせてもらったが。

護衛の件は学園艦が外洋に出ていたこともあり、3日目からは俺が再び護衛をすることになった。内地到着は2日後、初日から数えると5日目……。俺は包帯と三角巾姿でダーズリンさんの後ろでずっと立たされることになった。

……なお、俺が偶然出したカップ麺とスナック菓子を、ダーズリンとアツサムさん(ダーズリンの同級生らしい)がとても興味を示し、泣きながらそれらを食べていたのは驚いた。

橙辺さんと矢場さんは特待生として来年、聖グロに入る事が決まったようだ。二人は喜んで俺に報告してくれた。そして、聖グロのクラブハウス「紅茶の園」の入室許可とニックネームをダーズリンから貰ったそうだ。(報告してくれたのは俺が救護室のベッドで寝ていた二日目の時)

橙辺さんは~~ニ~~オレンジペコ~~コ~~矢場さんは~~ロ~~ローズヒップ~~ピ~~というニックネームだ。俺には今度からそう呼んで欲しいと二人は言った。

「えっと……オレンジペコ、ローズヒップ。今日は見舞いに来てくれてありがとう。」

二人は俺に抱き着き、俺はあまりの痛さに気絶した。

そして、数か月後、俺は愛里寿ちゃんに呼ばれて映画館に来ていた。しかも貸し切りで……。

「あなたが村田さん？」

愛里寿ちゃんとそのお姉さんらしき人が映画館の前で待っていた。「すいません遅くなって。自分が村田維吹です。……えっと、愛里寿ちゃんのお姉さんですか？」

するとお姉さんは愛里寿ちゃんの口をふさいだ後、愛里寿ちゃんの耳元で何かを呟いた。そしてから、



「ええ、愛里寿の姉の千代です。」

まるで貴婦人のような雰囲気のまま、笑顔でそう言った。

クイツ

俺の手を愛里寿ちゃんが引っ張った。

「あの時のお礼に、村田お兄ちゃんに見てもらいたいものがあるの!!」

愛里寿ちゃんはそう言って、俺の手を映画館へ引っ張っていく。

「愛里寿が頑張って作ったの。見てくださいな。」

千代さんもそう言って俺の手を取り映画館へ引っ張った。

放映されたのは☒☒ボコられグマ☒☒というアニメ映画で、シージャツクされた船の中で、主人公がただボコボコにされ、ボコるのに飽きた犯人達が警察に出頭していくという内容の映画だった。題名は『B O K O H a r d』。

……あの時の事件を参考にしたのか？

「村田お兄ちゃんをモデルに書いたのよ!!」

愛里寿ちゃんが☒☒どう!?!面白いでしょ!?!すごいでしょ!?!褒めて褒めて!!☒☒という瞳で俺を見てくる。

……あれ、俺ってただボコられただけだっけ？

「愛里寿が必死で台本を書いたの。村田さんのためだっけ。」

千代さんが嬉しそうに言った。

……あ、愛里寿ちゃんが必死で作ってくれたものなんだよな。あんまり嬉しくないけど。

「あ、ありがとう、愛里寿ちゃん。」

俺は考えるのをやめて愛里寿ちゃんの頭を撫でた。

「ところで村田さん。」

「なんですか?」

「愛里寿を嫁にどうかしら。」

千代さんが爆弾発言をした。

「な、何言ってるんですか!?!」

「あら、この子は良い嫁になると思いますよ。胸だって私のように大きくなるだろうし。」

「いやいや!!そういう問題じゃないですから!!」

すると撫でていた手を愛里寿ちゃんがグツと掴み、自分の胸に俺の手を置いた。

「……ペタンコのほうがいい?」

「胸の問題じゃないからね!」

俺は何とかその場を有耶無耶にした。

さて、4人との個人的な話はさておき、聖グロ内ではどうなったかを話そう。今回の事件はOG会のマチルダ会・チャーチル会・クルセイダー会が原因という事が分かり、その三つの会は発言権が地に落ちた。その結果、戦車道のOG会は資金を出すだけの組織へと成り下がってしまった。

これを機にダージンさんは学園の掌握に力を注ぎ、俺が送ったスナック菓子とカップ麺を使って聖グロのほとんどの組織を買収・掌握することに成功した。そのおかげもあり、クロムウエルの他に、チャレンジャー、コメット、TOG2、ブラックプリンス、トータス等の戦車が導入されることになった。

翌年の第63回戦車道全国高校生大会準決勝において、聖グロは優勝筆頭の黒森峰女学園に善戦した。試合中、聖グロは黒森峰のフラッグ車・赤星小梅選手が操るパンターG型以外全て殲滅できた。しかし、そのパンターが放った流れ弾がビルの崩壊を起こし、聖グロの戦車全てがその瓦礫の下敷きになってしまい、聖グロは惜しくも敗退し

てしまった。

『い、イブキさん!!これはどういう事!?!』

「え?ダーズリン!?!いい、いや……この前送られてきたティーセットと手紙のお返しで、送ったんだけど……。いや、スナック菓子とカップ麺の箱は冗談だからね!?!本命は小さいほうのはk……」

『イブキさん!!』

「はい!!」

『スナック菓子とカップ麺、ダース単位で送ってもらっていいかしら!!言い値で買うわ!!』

「お、おう……。」

## 極東戦役：極東編

宣戦会議ってこんな混沌としてるのか……

「宣戦会議バンデイーレに集いし組織、機関、結社の大使達よ」

夜の人口浮島・空き地島の~~〇~~寿司 多聞丸~~〇~~にある司会者席で、甲冑姿のジャンヌが異形の集団に語り掛ける。

……なんというか、宴会の幹事みたいだな。

俺は不謹慎にもそう思ってしまった。

「まずはイ・ウー研鑽ダイオ・ノマド派残党のジャンヌ・ダルクが、敬意を持って奉迎する」

その声は、喉奥に刃を秘めている様な感じがする。ジャンヌの口調は歓迎するものでは到底ない。そして、それに対抗するかのようによ、此処に集う者たちの殺気がピリピリと伝わってくるが……

……ここ、寿司屋なんだよなあ。

場の空気と場所がチグハグすぎる。

……この場をちよつといじればドリフのコントにもなりそうだ。

俺は思わず頬がほころんだ。俺の場違いな表情に数人がギロリとみる。

……ごめんなさい。表情を元に戻します。

俺は顔の表情を無表情にした。

さて、正体不明の武装集団に遭遇した場合、敵の総戦力を把握する必要がある。しかし、今は気配だけで考えなければいけない。また、誰が敵で、誰が味方か分からない。

……この大人数で辻さん、加藤大佐、山口少将を守りきらなければならぬのか。

ジャンヌ、キンジ、レキ、カナ、GⅢ、から襲撃されないとと思うが……念には念を、俺は全員に襲撃された時の対処法を頭に浮かべる。

……あれ？詰んだ？

「初顔の者もいるので、序言しておこう。かつて我々は諸国の闇に自

分達を秘しつつ、各々の武術・知略を伝承し……求める物を巡り、奪い合ってきた。イ・ウーの隆盛と共にその争いは休止されたが……イ・ウーの崩壊と共に、今また、砲火を開こうとしている」

……なるほど、辻さんが説明したとおりか。

すると、さつき俺のために神様に祈ってくれた、ナイスバディなシスターさんが席を立った。

「……皆さん。あの戦乱の時代に戻らない道はないのですか」

温和そうで、何処か艶のある甘い声。そして、一同の中で最も穏やかな、青く、潤んだ瞳。一般人が見れば、彼女のことを天使と見間違えるに違いない。……が、ここでは違う。ここはあらかじめ決められていた、宣戦布告をする場所だ。そんなところで組織の代表が平和を唱えるのは余りにおかしい。

俺は何か裏があると思いつつながら彼女を見た。

「バチカンはイ・ウーを必要悪として許容しておりました。高い戦力を有するイ・ウーが、どの勢力と同盟するか最後まで沈黙を守り続けた事で、誰もが☒☒イ・ウーの加勢を得た敵☒☒を恐れて、お互い手出しが出来ず……結果として、長きに渡る休戦を実現できたのです。その尊い平和を、保ちたいとは思いませんか」

シスターは手を合わせて、十字架を握りしめている。

……確かに、平和は尊いものだ。だけれど抑止力が無くなつちまったら平和なんてすぐ崩れるんだぞ。

「私はバチカンの戦乱を望まぬ事を伝えるに、此処へ参ったのです。平和の経験に学び、皆さんの英知を以て平和を成し、無益な争いを避けることは……。」

「……出来るワケねえだろ、メーヤ。この偽善者が。」

シスター（メーヤさん？）の話をカツエがぶった切った。

「おめえら、ちつとも休戦してなかったろーが。デュツセドルフじやアタシの使い魔を襲いやがったクセに。平和だア？どの口でほぎきやがる。」

カツエは苛立たし気にシスター（メーヤ？）を睨む。

「黙りなさい、カツエ！グラッセ。この汚らわしい不快害虫。」

豹変した口調で、眉を吊り上げシスター（メーヤ？）は罵った。  
……ああ、彼女も安定の十字教狂信者だったのか。

「お前たち魔性の者共は別です。存在そのものが地上の害悪。殲滅し、絶滅させるのに何の躊躇いもありません。生存させておく理由が旧約、新約、外典を含めて聖書のどこにも見当たりません。しかるべき祭日で、聖火で黒焼きにし、屍しかばねを八つに折り、ソレを別々の川に流す予定を立ててやっているのですから!!!ありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございます。ほら!!言いなさい!!!ありがとうございます!!!ありがとうございます!!!」

さつきとは打って変わり、カツエの首を締め上げながらシスター（メーヤ？）は叫ぶ。

ギロリ!!

「!!!「ッ?!」「!!!」」

……空気が一気に重くなった!?

俺は思わず振り向くと……そこには山口少将が仏陀スマイルで彼女たちを見ていた。

「お客さん……喧嘩すんなら外行ってくれませんか？」

「……はい。」

二人はおとなしく席に着いた。

「……とりあえず、うちはバチカンとの戦争は待ちに待ってた絶好の機会だ。このチャンスは逃せねえ。……ヒルダはどうだ？」

カツエは背中から大きな翼を生やしたゴスロリ女に話しかけた。

「……そうねえ、私も戦争は大好きよ。いい血が飲み放題になるし。翼を生やした蝙蝠女の犬歯は緋色の金属でコーティングがされていて、かなり牙が突き出ている。」

……吸血鬼のコスプレ?まさかこんな典型的な吸血鬼はいないだろう。

「ヒルダ……一度首を落としてやったのに、あなたもしぶとい女ですね」

シスター（メーヤ？）さんは鋭くカツエと蝙蝠女を睨みつけていた。

……隣人を愛せつつてキリストは言ったはずなんだがなあ。

……まさか!これがカト○ツク的な愛し方!?!殺し愛が当たり前なの

か!?

カット。

「……首を落とした位で、ドラキュリアが死ぬとでも？バチカンは相変わらずおめでたいわね。お父様が話して下さった何百年も昔の様子と、何も変わらない。」

ほほほっ、と赤いマニキュアをした指を口にあてがい、縦ロールの金髪ツインテールを揺らして笑う蝙蝠女

……うそお。こんな典型的な吸血鬼がいたよ。

でもブラドほどの威圧感もないし、ラスボス感もない。

……ブラド以下の実力しかないのか？

「和平、と仰りましたが……メーヤさん？」

呑気な感じの声を挟んできたのは、色鮮やかな中国の民族衣装を着たスマートな男だ。丸眼鏡の奥に、糸みたいに細い目をニコニコさせている。

……これまた典型的な中国人が出てきたな。

「それは、非現実的というものでしょう。元々我々には長江チヤンジャンのように長きにわたり、黄河ホアンホーのように入り組んだ因縁や同盟の誼よしみがあったのですから。ねえ？」

糸目の男は顔を上げて、カウンターの端っこに座るレキを見た。

レキは黙って、狙撃銃を抱えながら寿司を食っていた。

「……私も、出来れば戦いたくはない。」

……字ずらだけ見ればかつこいいんだけど、頬に米粒がついてるぞ。レキさんや。

ジャンヌが碧い瞳で一同を見回しつつ、言った。

「しかし、いつかこの時が来る事は前から分かっていた事だ。シャーロックの薨去こうきよと共にイ・ウーが崩壊し、我々が再び戦乱に落ちること  
はな。だからこの宣戦会議パンテイレの開催も、彼の存命中から取り決めされていた。大使たちよ。我々は戦いを避けられない。我々は、そういう風に出来ているのだ。」

抑止力であったイ・ウーが崩壊したら……残った他の組織はその目的や欲望で動き出すのは目に見えてわかる。

……面倒なことになったもんだな。

「では、古の作法に則り、まず三つの協定を復唱する。86年前の宣戦会議ではフランス語だったそうだが、今回は私が日本語に翻訳したことを容赦頂きたい。」

第一項。いつ何時、誰が誰に挑戦する事も許される。戦いは決闘に準ずるものとするが、不意打ち、闇討ち、密偵、奇術の使用、侮辱は許される。

第二項。際限なき殺戮を避けるため、決闘に値せぬ雑兵の戦用を禁ずる。これは、第一項よりも優先される。」

組織同士での戦闘はするが、総力戦はしないという事か。こいつは有難い。間違つて民間人を殺したら目も当てられないからな。

「第三項。戦いは主に<sup>デイン</sup>師団<sup>グレンダ</sup>と<sup>グレンダ</sup>眷属<sup>グレンダ</sup>の双方の連盟に分かれて行う。この往古の盟名は、歴代の戦士たちを敬う故、永代、改めぬものとする。それぞれの組織がどちらかの連盟に属するかは、この場での宣言によつて定めるが……黙秘・無所属も許される。宣言後の鞍替えは禁じないが、誇り高き各位によりそれに応じた扱いをされることを心得よ。」

続けて連盟の宣言を募るが……まず、私たちイ・ウー<sup>ダイオ・ノマド</sup>研鑽派残党は<sup>デイン</sup>師団<sup>デイン</sup>となることを宣言させてもらう。バチカンの聖女・メーヤは<sup>デイン</sup>師団<sup>グレンダ</sup>、魔女連隊のカツエ<sup>グレンダ</sup>、それとドラキユリア・ヒルダは<sup>グレンダ</sup>眷属<sup>グレンダ</sup>よもや鞍替えは無いな?」

ルールを語り終えたジャンヌが、問題児（笑）3人組を指名した。

「嗚呼……。神様、再び剣を取る私をお赦しください……。」

スツと十字を切つたメーヤは、

「はい。バチカンは元より、この汚らわしい眷属共を討つ<sup>デイン</sup>師団<sup>グレンダ</sup>殲滅師団の始祖です」

白いレースの長手袋をした手で、カツエと蝙蝠女を指さした。

「ああ。アタシも当然<sup>グレンダ</sup>眷属<sup>グレンダ</sup>だ。メーヤと仲間なんかになれるもんかよ」

……うわお。やっぱりカツエはシスター（メーヤ？）さんと犬猿の仲か。



「聞くまでもないでしょう、ジャンヌ。私は生まれながらにして闇の眷属……グレナダ眷属よ。玉藻、あなたもそうでしょう?」

……こっちはこっちでキャラづくり大変そうだな。

蝙蝠女がそういうと、さつきからお稲荷さんをムシヤムシヤ食べている狐耳と尻尾のついた小学生ほどの少女が顔を上げた。

……ん? 玉藻?

「すまんのう、ヒルダ。儂は今回、ディーン師団じや。未だ仄聞のみじやが、今日の星伽は基督教会と盟約があるそうじやからの。パトラ、お前もこっちやこい。」

……まさかの、流行りのロリ婆という物か?

すると、デカイ水晶玉を油と酢で汚れた指でクルクル回していたパトラは、

「タマモ。かつて先祖が教わった諸々の事、妾は感謝しておるがのう。

イ・ウー研鑽派イオの優等生共には私怨もある。今回、イ・ウー主戦派イグナティス

は眷属ぢや」

アヒル口でそう返した。

ツルツ!! バリン!!

……やっぱり、そんな手で水晶玉なんていじってるから。

水晶玉が床に落ちて割れてしまった。

「!!!」

また空気が重くなった。

「お客さん……ごみの処理は自分でお願いします。」

「……………ハイ。」

パトラは山口少将の威圧に負けたようで、涙目になりながら渡されたハウキとチリトリで水晶玉の破片をかき集める。

「あー……お前はどおするのぢや、カナ。」

パトラが水晶の破片をかき集め、山口少将にハウキとチリトリを返した後、テーブル席の正面にいるカナさん(キンイチさん)に尋ねた。

「創世記41章11——『同じ夜に私達はそれぞれ夢を見たが、そのどちらにも意味が隠されていた』——私は個人でここに来たけれど……」

そうね。☒無所属☒とさせてもらおうわ。」

……最悪の場合は襲われる可能性があるのか。

俺は3人を逃がす策を必死で考える。

「そうか……それが道理ぢあろうなあ……。」

パトラはシユンとしよぼくれてしまった。

「ジャンヌ。リバティー・メイソンは☒無所属☒だ。暫く様子を見させてもらおう。」

寿司を箸で上品に食べるトレンチコートの男装少女は、それを言っ  
たつきり何も言わない。

「……L O O ……」

今度は体育座りをしていた人型ロボットがしゃべった。立ち上  
がったら3mはあろうかという鋼鉄の二足歩行戦車のようなソイツ  
は、ボディのあちこちから照準器、アンテナ、榴弾砲、発煙弾発射器、  
その他諸々をジャキジャキ突き出していた。

「L O O ……L O O ……L O O ……」

……うん、何言ってるか全くわかんねえ。

「……L O O よ。お前がアメリカから来ることは知っていたが、私は  
ルウお前をよく知らない。意思疎通の方法が分からないままであれば、ど  
ちらの連盟につくかは☒黙秘☒したものと見なすが……いいな？」

全く物怖じしないジャンヌにビシツと言われたL O O (? ) は、

「……L O O ……」

そう言って頷いた。

……なんとなくだが、中に人が入ってるな。浪漫あるじゃねえか、  
アメ公も。

「……☒グレナダ眷属☒なる！」

いきなり元気な声を張り上げたのは、トラジマ模様の毛皮を着た、  
俺にある意味とどめを刺した鬼幼女だった。幼女は叫んだあと、足元  
に置いていた大斧を持ち上げ、そのバカでかい斧の派手な羽飾りをつ  
けた石突きで地面に突くと、足元に微震が起きた。

ギロリ!!!

「「「ツ!?!」「」」」

また山口少将か!?

「お客さん……地面を揺らすのはやめてもらいますか?」

「……あい。」

鬼幼女は斧を持って店外へ出ていき、戻ってきたときには斧を持っていなかった。

……外に斧を置いたんだろうな。

「……ハビ……グレナダ眷属」

鬼幼女はそう言った後、チビチビと寿司をかじっていた。

「遠山。バズカバスカービルバズカはどちらに付くのだ。」

ジャンヌに話を振られたキンジは慌て始めた。

……キンジはバズカバスカービルバズカ代表として来てたのか。

「な、何だ。何で俺に振るんだよ、ジャンヌ。」

「お前はシャーロックを倒した張本人だろう」

ジャンヌが間髪入れずに行った。

「そ、それならイブキだって!」

……バツカ野郎!!俺に振るんじゃねえ!!

俺は腕でバツテンを作つて、キンジにアピールする。

「遠山、貴様にどんな理由があろうとも、抑止力であったイ・ウーを壊滅させ、戦争の口火を切つたのだ。」

「ッ!!」

キンジは気づいたのだろう。己がしでかしたことを、そして……その大きさを。

「貴様はバズカやったバズカのだ。ならばその責任を取れ。……男だろうか?」

「クソツ……クソツ!!……なんで、なんでこんなことに。」

ダン!!

キンジは拳をカウンターに叩きつけた。

「……遠山キンジ、村田イブキ、お前たちはディーン師団バズカそれしか有り得ないわ。お前たちはグレナダ眷属バズカの偉大なる古豪、ドラキュラ・ブラ

ド——私のお父様の、仇なのだから。」

……へえ。あのブラドの娘なのか。

「……それでは、ウルスは<sup>デイン</sup>師団<sup>デイン</sup>に付く事を代理宣言させて貰います。私は既に<sup>デイン</sup>バスカービル<sup>デイン</sup>の一員ですが……同じ<sup>デイン</sup>師団<sup>デイン</sup>になるのですから問題ないでしょう。私が大使代理になる事は、既にウルスの許諾を受けています」

レキが寿司を食べる手をいったん休め、いった。すると、糸目の中華男がニヤリと笑った。

「藍幫の大使、諸葛静幻が宣言しましょう。私たちは<sup>グレナダ</sup>眷属<sup>グレナダ</sup>。ウルスのレキには、先日ビジネスを阻害された借りがありますからね。」

糸目の中華男が言った後、辻さんが勢いよく立った。

「希信達!!<sup>デイン</sup>日本陸海空軍<sup>デイン</sup>は今回合併し!!<sup>デイン</sup>日本軍<sup>デイン</sup>として<sup>デイン</sup>師団<sup>デイン</sup>につくことを!!この希信が宣言する!!」

その言葉に、山口少将と加藤大佐が頷く。

……ザワザワザワ。

すると、大使たちがざわめき始めた。何か予想外なことが起きたのだろうか。

「まだ宣言していないのは、そちらの方々だが……早く言って欲しいな。」

加藤大佐が笑みを浮かべて言った。

すると、ピエロのような恰好をしたGⅢが、聞いていた携帯音楽プレイヤーを地面にイヤホンごと捨てた。

「……チッ。美しくねエ」

GⅢの顔は、どこかの戦闘民族がやる戦化粧のようなフェイスペインティングに彩られている。

「ケツ……バカバカしい。強えヤツが集まるかと思って来てみりや、何だこりや。要は使いつ走りの集いつてワケかよ。どいつもこいつも取るに足らねえ。使い走りつてわけか。」

「なあ、一応俺の義理の弟なんだから。お願いだからそんなこと言わないでくれ……。中二病こじらせた痛い奴が義弟なんて俺は耐えられねえぞ。」

俺は思わずそう言ってしまった。すると、GⅢは顔を真っ赤にした。

「ふ、ふざけるな!!誰がテメエの義弟になったんだ!!」

「だって、戸籍上GⅣかなめは俺の妹だぞ。そうなら、お前は義弟だろうに。」  
「こ、この野郎!!」

GⅢが拳を振り上げて俺に近づいた瞬間  
ギロリ!!

「「「ツ!」」」

我らが山口少将が威圧をかけた。

「お客さん……喧嘩は外でやれと何回も言っていますが?」

「……。」

GⅢは渋々自分の席に戻った。

「GⅢ、ここにいないのは大使だ。戦闘力で選ばれていない。お前の求める物がいないのは認めるが……このままでは☒無所属☒になるぞ。」

ジャンヌが仲裁するように言った。

「なあ、これ以上義兄兄ちゃんにストレスを与えないでくれよ……頼むから。」

するとGⅢ、は猫背になり、

「……☒無所属☒だ。……お願いだからフォースつながりで喋るのはやめてくれ。」

疲れ切ったサラリーマンのような声を発し、ビールを啣あおった。

「これで全員済んだみたいね。そうよね、ジャンヌ?」

蝙蝠女がしゃべった。

「……確かにその通りだ。最後に、この宣戦会議バンデイレの地域名を元に名付ける慣習に従い、極東戦役……FEWと呼ぶことを定める。

各位の参加に感謝と、武運の祈りを……。」

ジャンヌが閉めに入ったようだ。

「……じゃあ、いいのね?」

蝙蝠女がジャンヌに聞いてきた

「……………もう、か?」

「いいでしょう、別に。もう始まったんだもの」

「待て。今夜は……ここではお前は戦わないと言つてなかったか？」

「そうねえ。ここはあまりいい舞台ではないわ。でも……気が変わったの。せっかくだし、ちよつと遊んでいきましようよ。」

ギロリ!!!

「「「ツ!?!」「」」」

またも山口少将が威圧をかけた。

「お客さん……喧嘩は外でやれと何回も何回も言っておりますが？」

すると、蝙蝠女は涙目になった。

「……でも、血を見なかった宣戦会議バンデイエーレは過去になかったと……。」

「お客さん……喧嘩は外でやれと何回も何回も言っておりますが？」

「……ハイ。じゃあ、戦いたい者は店外に来て頂戴。」

蝙蝠女は涙目になりながら店を出ていった。

「……ありがとうございます。またのお越しを。」

山口少将はそう言つて蝙蝠女を見送った。

……うん、山口少将は適任だったな。

俺はこの拔擢はつてきに感心した。

「軍を辞めた後は、寿司屋にでもなるか。」

俺は山口少将のつぶやきをしっかりと聞き取れた。

……少将が寿司屋開いたら、店主が怖すぎて誰も近寄らないだろうな。

結局、山口少将が店じまい滞りなく終わり、3人が帰るころには全員空き地島から帰っていたので、俺の仕事は全くと言っていいほどなかった。

これは変装じゃないだろ……

俺は山口少将・加藤大佐・辻さんを、迎えに来た第一師団の皆様に取り敢えずお話を聞かせてもらって、家に帰ることにした。

……あれ？俺って居る必要あったのか？

俺は寮に着くと……その寮の入り口でウロウロしているシスター（めーや？）が見えた。

……ウソだろ!?もう襲いに来たのか!?同じ師団デインの仲間だろ!?まさか、同じチームだから隣人を殺し愛せアイをアしに来たのか!?

俺は腰の日本刀に手を置きながらシスター（めーや？）に近づいた。

「あ!!ムラタさん!!」

彼女は重そうなコンビニのビニール袋を持っていた。

「……どうしてここに?」

俺は恐る恐る彼女に聞いた。

「キンジさんのお部屋に行かなくてはならないんですが……迷ってしまつて……。」

……なんで俺とキンジの部屋に来るんだよ!!あれか!?今日の暴飲を咎めに来たのか!?

「なんだって部屋に行かなきゃならないんですか?」

「トオヤマさん達と今後のことでお話を……。」

……嘘はついていないようだ。無駄に警戒したなあ。

俺はため息をついた後、

「キンジと俺は同室なんです。案内しますよ。……あとその袋は俺が持ちましょう。」

「え?そこまでしなくとも……。」

「まあまあ……。美女には格好つけたいんで。」

俺はそう言つて袋をひつたくるように取つた。

……ないと思うが、爆薬でも入っていたら目も当てられねえ。

カランカラン

すると、瓶の擦れる音が聞こえる。



……酒瓶？

その袋の中には、大量の酒瓶と菓子パンが入っていた。

「ふふっ……。」

するとシスター（メーヤ？）が天使のように頬を緩ませた。

「……どうしたんですか？」

俺は思わず聞いてしまった。

「いえ、私を女扱いする人は居ないものですから……。それもお世辞  
とはいえ美女だなんて……。」

「少なくとも、俺から見れば今までの人生の中でも5本指には入る美  
女ですけどね。」

……見てくれはな。

実際彼女は☒外見だけは☒絶世の美女だ。イタリアだったら常に  
ナンパされていそうだが……。

「そんな事、軽々しく言っただけはいけませんよ。」

シスター（メーヤ？）は顔を真っ赤にしながら言った。

「そうですか……じゃあ着いてきてください。」

俺は彼女を自分の部屋に案内した。

俺は部屋へ案内する間、シスター（メーヤさんというらしい）と互  
いに自己紹介をした。

「ただいま。」

俺はメーヤさんの重い荷物を持ちながら扉を開くと……キンジが  
アリアをソファアに寝かしているところだった。キンジの隣には玉  
藻（？）とかいう幼女がいる。

「イブキ様、おかえりなさいませ。」

リサはまだ起きていたのか、エプロン姿のままキッチンにいた。  
リサはキッチンでお茶と茶菓子の用意をしている。

……ごめん。どういう事？

なんでも、アリアは山口少将が店じまい中に空き地島に突撃していたらしい。その時、敵に緋弾の~~弾~~殻金~~弾~~という物を外されてしまったそう。その~~弾~~殻金~~弾~~7枚のうち、5枚を敵に奪われてしまい。その5枚を奪い返さないといけないらしい。

……山口少将が店じまいしている間にそんなことがあったのか。

「ん〜!!これは美味じゃのう。」

それらを説明してくれた玉藻とかいう少女は今、リサ特製のプリンを食べて頬がとろけている。

「……おい。」

キンジは呆れたように、その少女を睨む。

「そう急かすな、儂も疲れたんじゃ。少しぐらい甘いもんを食べさせい。」

そう言って少女玉藻(?)はリサ特製のプリンを頬張った。

少女玉藻(?)がプリンを完食すると、今度はキンジの顔をジーツと観察するように覗いた。

「な、なんだよ。」

「これが今代の遠山か……。かつて那須野で会った遠山と瓜二つじやのう。……ちよつと昼行燈ひるあんどんな根暗ねくらのようじゃが。」

……こいつ?今なんて言った?

「キンジの先祖を知ってるのか?」

「数代前の遠山侍、星伽巫女と少しな。」

……流石は妖怪化け物の類たぐい。何年も生きてるんだな。

「ん?」

すると今度は、少女玉藻(?)は俺の顔をジツと見始めた。

「う〜む……。」「

「ど、どうした?」

「ああ!!」

少女玉藻(?)は何か思い出したような表情をした。

「お主、名前は?」

「え?……村田維吹って言うが。」

「そうかそうか……、お主の先祖をチラツと見た覚えがあるわ。」

……へえ、俺の先祖をねえ。

「誰なんだ？」

俺は思わず聞いた。

……ずっと前に理子が、俺の先祖に有名人はいないとか言っていたけど。まさか誰かいたのか!?

「謙信公の軍にお主に似た足軽がいたのを思い出したわ。」

………足軽ですか。当時、足軽は基本農民だから……ご先祖様はただの農民だったのか。

「確か……~~〇〇~~なんで俺がこんげな目に~~〇〇~~とか言って敵兵相手に無双していたのう。あの足軽の目におぬしはそっくりじゃ。」

……俺のご先祖様も苦勞してたんだあ。……とりあえず、俺のご先祖は新潟だったのか。

「………そうですか。」

……キンジは遠山の金さんの家系、アリアはシャーロックホームズ。白雪は脈々と続く神社の巫女さん、理子はリュパンの子孫……。そんな有名人の子孫に囲まれる、足軽雑兵の子孫が俺か。

「いいやい、いいやい……俺は飛び級卒業だから短剣貰ったし……。」

「お茶をお持ちしました。夜遅いので麦茶にしました。」

リサはそう言つて俺達の前に湯呑を置いた。

「メーヤさんには栓抜きとコップをお持ちしましたが……。」

「いえいえ、お構いなく。」

メーヤさんはそう言つてリキュールの入った瓶を開けると、コップになみなみ注ぎ、一気に飲み干した。

「……あれ？メーヤさん結構いける口？」

彼女の飲みっぷりを見て、さっきまでの鬱は吹き飛んでしまった。

「……仰りたい事はわかります。確かに修道女はお酒を飲んで  
おっしや  
シスター  
はなりません。」

「いや、別にいいんじゃない？」

……いや、酒飲んでることをとがめたわけじゃないし。

「え!？」

メーヤさんはギョツと俺を見た。

……そんなに驚くことか？

「だってワインは~~キ~~リストの血~~キ~~なんだろう？ワインは良いのに他の酒はダメなんてちゃんちゃらおかしい……。まあ痴態をさらさなきや、いくら飲んだっていいだろ。」

……どっかのシグナムのように、真っ裸になるとかなければな。すると、メーヤさんは感極まったように両手を胸の前で祈るように組んだ。

「……まあ、でも飲酒は二十歳以上か許可証が無いとだめだけどな。」俺は恥ずかしくなった。

「ムラタさん、大丈夫です!!許可証は持ってますし、一切酔わない体質なので!!」

彼女はそう言っただけで俺の手を両手で包み込みながら握った。

……今日は踏んだり蹴ったりな日だ。誰かと飲み明かしたい。

「……味も分かるんだな?」

俺はメーヤさんの目を見て言った。

「私達、I種超能力者<sup>ステルス</sup>は戦った後は大量に何かを摂取しなければならぬのです。私の場合はアルコールなので、お酒を大量に飲むのですが……ちゃんと味わって飲んでいきます。」

メーヤさんは至近距離で俺の目を見て言った。

「へえ、そいつあ楽しみだ。」

「アツハツハツハ!!」

「ふふふ……。」

俺とメーヤさんの酒宴が始まったのは言うまでもないだろう。

「この梅酒おいしいですねえ。」

「そうだろう!!流石はメーヤさんだ!!こいつあく(軍の)敷地の梅を使

い、秘密裏に部隊うちが作ってる秘蔵の梅酒だ!!」

俺とメーヤさんは互いに酌み交わしていたら、いつのまにか意気投合していた。

「不思議ですねえ。私一度も酔ったことがないのに、村田さんと飲んでたらとても気分が良くなってきましたあ。」

彼女の目はトロンとしている。

「へえ、そいつあ不思議だ。そう言えば日本酒飲んでみるかあ?」

俺はそう言っ、酒蔵部屋空に酒を保管してたら、いつの間にか部屋満杯に酒が保管されたのでこんな名前になったから日本酒の一升瓶を持ってきた。

「こいつあ松乃井つて言う新潟の地酒だ!!ちようど俺のご先祖も新潟らしいしなあ!!」

キユポン

俺は松乃井つの栓を開け、メーヤさんのコップにナミナミと注いだ。するとメーヤさんはそれをグツと飲み干した。

「うわあ。日本酒は初めて飲みますけど、おいしいですねえ。すつきりとした辛口に柔らかさがありますねえ。」

「さすがはメーヤさん!!ちゃんと味わってらっしゃる!!」

俺も自分のコップに注ぎ、飲み干した。

……美味しい!!これはどんな料理にも合う、スッキリした辛口!!ここにリサの手料理が無いのが残念だ。

「私のことはメーヤと呼んでくださいねえ。……そう言えば村田さあ。」

ついでに、キングは酔っ払い二人に絡まれるのを避けるため、自室に引きこもってしまった。幼女玉藻(?)はメーヤさんに2つ3つ何かを伝えると部屋を出て行ってしまった。

「なんでい、メーヤ。俺のことはイブキと呼んでくださいえ。」

俺はそう言っ、メーヤのコップに再び松乃井つを注いだ。

……俺もまあ酔ってるな。そろそろ飲むのを控えるか。

「イブキさんはあくまるで悪魔ですねえ。」

「あ、悪魔?」

……キリスト教の中で☒悪魔☒は結構ヤバイ表現では？

酔いが少しさめたような気がする。

「ダメですよお、<sup>シスター</sup>修道女をたぶらかしちゃう。私は主に使えてるんですよお。」

……多少お世辞言い過ぎたのかね。

「お世辞が過ぎましたかね。でも実際イタリア帰ったらナンパとか結構されるんじゃないんですか？」

「帰ってもされないんですよ。それに<sup>シスター</sup>修道女は恋愛禁止ですし……。イブキさん、私を連れ去ってえ。」

……この<sup>シスター</sup>修道女もだいぶ酔っていらっしやるな。そろそろお開きにするか。

俺はコップに入っていた日本酒を飲み干した。

……今度、新潟に行ったときは絶対にこれを買おう。

俺はそう決心した後、口を開いた。

「バチカンの敵になんてなりたくないですよ。☒我らは神の代理人。神罰の地上代行者。我らが使命は……☒とか言いながら襲われるなんて嫌ですよ。」

……『HELLSING』のアンデルセンはいないにせよ、そういう人はいそうだしなあ。

「あれえ〜イブキさん何で知ってるんですかあ〜？ 言いましたっけえ〜。」

「マジでいるのかよ!!」

完全に酔いがさめた。

……いるんだ!! アンデルセンのような奴!!

その後メーヤは酔いつぶれてしまい、俺とリサで彼女を寝室の空きベッドに運んだ。メーヤを運んだあと、俺とリサも眠気に耐えられなくなってきた。リサは寝室のベッドで寝て、俺は自室のハンモックで寝ることになった。キンジはアリアが心配なのでリビングで寝るそうだ。

「エロキンジイイイイイイイイ!!」

俺はアリアの怒鳴り声で目を覚ました。

「相変わらず朝からうるさいなあ。」

俺がのそのそとリビングへ向かうと……キンジがアリアにボコボコにされていた。

「……なんだ。いつもの事か。」

俺は部屋に戻ろうと……

「イブキ!! 助けてくれ!!」

「……こんな言葉を知ってるか? 触らぬ神に祟りなし

そうは言っても、流石に助けないとヤバイ。

アリアの声で起きたリサとメーヤも加わり、アリアに事情を何とか説明するまでキンジはボコられ続けていた。

メーヤはリサの朝食を食べた後、成田空港行きのバスに乗り、バチカンへ帰って行った。

その日の4時間目、俺はLHRが行われる体育館へクラスの皆と移動していく。

「ああ……面倒だ。」

「どうしました? 憂鬱なようですが?」

ニトが俺の顔を覗いてきた。

「ああ……あの変装する奴……変装食堂リストランテ・マスケだけ。あれが面倒だなんて。」

「そうですか？私は変装初めてなので楽しみです!!。」

そりゃあ、フアラオが変装するなんて、お忍びで城下へ向かうぐらいの時しかないんじゃないか？

ズガアアアン!!

「よオーし!!ほんなら文化祭でやる変装食堂リストランテ・マスケの衣装決めやるぞッ!

俺とニトが体育館へ着いたとたん、蘭豹先生が天井へ威嚇射撃をして、生徒達を静まらせた。

……そういえば、ジャンヌの奴がいないな。どこへ行ったのだろう。

「じゃあ、各チームで集まって待機イーゴホツゲホツ!!」

綴先生の言葉に従い、俺のもとにネロ、牛若、エル、ニト、リサ、理子が寄ってきた。

俺達は適当に無駄話をしてしていると、キンジ達のチームがくじを引く番になったようだ。

で、キンジが今引いてる箱の中には、文化祭でやる変装食堂リストランテ・マスケで各々が着る衣装を決めるくじが入っている。

変装食堂リストランテ・マスケとは、カッコいい名前がついているが、結局はただの코스プレ喫茶だ。しかし、変装食堂リストランテ・マスケは生徒の潜入捜査技術の高さを一般にアピールする機会も兼ねている。真面目にやらないと教務課マスターズオールスターでのお仕置きがあるらしい。

そんなこともあり、俺は、あるお題だけは絶対にやりたくなかった。

……女装だけはやりたくない。

俺はおっさんとロサンゼルスにて一緒にやった女装を思い出した。

ここで女装なんて引いたら……俺は文化祭をボイコットして制裁を受けるか、吐き気のする女装をしてお仕置きを受けるかの2択しかない。

……何この地獄。いや待つんだ、女装を引かなきゃいい話だ。

「神様仏様玉藻様……どうか女装だけは勘弁してください……。」

『ん？今なんでもとおっしやいました?』



「言つてねえから。」

玉藻の声が聞こえたような気がするが……気のせいだろう。

「やったああああああっ!! やったよアリア!! ある意味ハマリ役だよ!! きやはははは!!」

理子がアリアの引いたくじを覗き見て大爆笑をしている。

……理子、アリアの足元で転げまわって笑うのはどうなんだ? その前にアリアは何を引いたんだ?

あの白雪も耐えられなかったようで、土下座するみたいに伏せて、忍び笑いをしながら床を叩いている。

「うぐ、くく……ハッ!」

キンジは一瞬笑ってしまい……急いで止めたが、もう遅い。

俺が目を向けると同時に、アリアはホルスターからガバメントを抜き取った。

「今のは無し! 無し無し無し無あああああしツ!! まずアンタは死刑!!」

風魔目掛けて二丁拳銃を突きつけたアリアを、キンジが飛びついて押さえる。

「止めるアリアツ!! 蘭豹もいるんだぞ!」

「諦めなよ! 小学生! アリアちゃん!! 理子が衣装作り手伝ってあげる!! ふっ!! ふひひひ!!」

理子はアリアを指さしながら、まだ笑い転げている。

……アリアは小学生を引いたのか、ご愁傷様。

「誰がアリアちゃんよ! 風穴! 風穴流星群! 風穴ビッグ・バーンツツツ!」

ばたばた暴れているのにも関わらず、確実にガバメントの銃口をくじ引きの箱を持った風魔さんへ向けているその技術に俺は驚いた。

「風魔さん!! 次は俺達だ!! 早く来い!!」

「しよ、承知ツ!! 師匠、しからばこれにて!! 御免!!」

煙幕を展開しつつ、風魔は一目散に俺達のチームに来た。

「村田先輩、助けていただき、感謝申し上げます!!」

風魔さんは俺に土下座するように礼を言ってきた。

「いや……うん、お疲れ様。じゃあ引かせて。」  
「ははあく!!」

……うん、献上するように箱を渡さないでほしいんだけど。

「引き直しは一度だけ認められているでござる。……ではござる武運を。」

……どうか、いい役が出ますように。

俺は箱の中から四つ折りの紙を一枚取り出した。

『女装（ビキニ）』

俺は無言で箱に戻した。

……むさい野郎がどうやってビキニで女装すんだよ!!

「チェンジすると一枚目は無効。2枚目の衣装が強制になるでござる」

「……了解。」

俺は……最後のくじに全てを賭けた。

「こいつ!!」

『ボディビルダー』

……確かに、女装よりはいいけどさあ。

俺は思わず膝をついた。

「……ハハハッ」

目の前が真っ白になった。

……変装の前に体づくりしなきゃいけないなあ。

次に、理子が女子用の箱からくじを一枚引いた。

「泥棒? えー…コレじゃつまんなーい!」

……いいじゃねえか。お似合いじゃねえか。俺だって『海軍士官（第2種軍装）』が良かった。持つてるしさ。

理子は似合っているはずのくじ『泥棒（漫画・キャッツアイ風）』を戻し、新しく引き直す。

『ガンマン（西部開拓時代）』

「おー!! やるやる!!」

その後、ほかのメンバーもくじを引いていき、ネロが『体操服（ブルマ）』、エルが『女学生（大正浪漫風）』、牛若が『振袖』、ニトが『メ

ジエド（エジプト神話）、リサが『提督』という結果になった。

……俺の様にどうしようもできないお題は誰一人いなかった。チクシヨウ!!

ついでにアリアはその後、体育館で「小学生ヤリマス」と言い続けるロボットになるまで、何回も蘭豹先生にジャーマン・スープレックスを食らい続けていた。

俺はくじ引きが終わった後、部屋にすぐに帰った。というか、不貞寝ふてねしようと思った。

「ただいまあ〜。」

無論、部屋には誰もいない。

……今から鍛え直すしかないのか？

俺がそう考えた時、

プルルルル

俺の携帯が鳴った。電話は……藤崎さんからだった。

「はい、もしもし。」

「やあ〜村田君!!比叡山以来ですなあ〜!!」

……電話越しなのに、なんでこんなに声デカいんだよ。

「実はですねえ!!今度のロケは羽田空港からなんですけど、ちょうど東京武偵高の文化祭の日に近いんですよ!!」

……え?もしかして。

「なので、我々も見に行かせてもらいます!!」

「いやいやいや!!待ってください!!」

俺は『ボデビルダー』の変装のせいで最悪死ぬかもしれない  
ということ伝えたところ……

「分かりました!ボデビルダー!うってつけの物があるんで送

ります!!では!!」

「え!!ちよつと!!」

ツー・ツー・ツー……

電話は切れてしまった。

……ほんとにあの4人（5人？）が来るのかよ。

俺は憂鬱になった。

なお、翌日に蝦夷テレビから新品の黄色のボディビル用パンツと『マッスルボデーは傷がつかぬ!!』というDVDが送られてきた（なお、主演は安浦憲之助さん）。

……これでどうしろと? いや、パンツ代が浮いたのはよかったけどさ。

くじ引きの数日後、俺達は21時過ぎだというのに教室に残って作業をしていた。理由は、その衣装作成のためである。

衣装が間に合わなければ、もちろん教務課マスターズオールスターからのキツイお仕置きが待っている。なので、メ切前日には教室に集まって徹夜で衣装を完成させる風習仕上げ会が創られたそうだ。だからこんな夜中にわざわざ学校にきて、皆で最後の仕上げをする。

……俺は衣装はほとんどいらないけどな。

俺はそう思いながら体に茶色い塗料を塗っていく。なんでも、筋肉の陰影をはつきりさせるためにボディビルでは褐色の塗料を肌に塗るそうだ。

……こんな傷だらけの体を見せつけなきゃいけない場面が来るなんて。

俺は傷だらけの体に塗料塗りたくっていた。

ウイイイイイイン!!

ズダダダダダッ!!

機関銃のような音が教室内に響き渡る。しかし、この音は理子とり

サが凄まじい速度でミシンを自由自在に操っている音だ。

……流石はプロ。あんな速さのミシンを使うなんて俺には無理だ。理子とリサはミシンを使って、ただの布切れを美しい装飾品や小物に変えていった。

「どうよイブイブ!!これが理子りんのおくミシン技術!!恐れ入ったか!!」

「イブキ様!!これがメイドの力です!!」

理子はその豊満な胸を張りながらドヤ顔で、リサは細い腕の上腕二頭筋を叩きながらムフーとした顔で俺に言った。

「恐れ入りました。」

俺は、ハハア〜というように彼女達に頭を下げる。

……あの技術はもはや職人だ。

実はこの衣装、自分で作るのがルールなのだが……我がチームではこの二人がみんなの分（一部は自作）を作っている。

俺と理子にリサを除いたチームメイト、ネロ（皇帝）、牛若（武将）、エル（大地の分身）、ニト（皇帝）……この4人は裁縫と一切縁がない。そんなの人たちが体操服に振袖、袴、メジエド……そんなものを作れるわけがない。まあ、ネロとニトは自力で頑張るそうだが……。

なので理子とリサは合わせて4人分作っているのだが……4人分はすでに作り終わり、それどころか小物まで作っている。

……相変わらず器用な二人だ。

牛若とエルはこのプロ二人が作ってくれるからいいとして（材料費は何故か俺）、ネロとニトが心配だ。

……自分で作るって言っていたが……大丈夫か?だって二人とも皇帝だぞ!!

バァー……バァー……!!!

教室の扉が思いつきり開けられた。全員が扉の方向へ向く。

「体・操・服である!!余も着飾ってはいられぬと用意したが……うむ!!心身ともに軽くなったようだ!!どうだ、似合っているであろう!!」

ネロは赤のハチマキを頭に巻き、赤のブルマを履いて、胸のゼツケンには『ねろ』と書かれていた。

……誰だ？このコスプレ美少女？

その後ろには、ウサギ耳の生えたメジエド様がいた。

「私ハ、メジエド……。頭ヲタレナサイ、不敬デアルゾ!!」

……あれ？この二人皇帝だったよな？あれえく？

俺は二人の再現度の高さに口がふさがらなくなった。

「どうだイブキよ!!余は☒☒万能の天才☒☒ゆえに!!この☒☒体操服☒☒も美しくできているであろう!?!うん!?!」

「崇メヨ……。」

「お二人ともお似合いで御座います。」

俺はサイド・チエスト（横向きになって胸を強調するポーズ）をしながら頭を下げ、そう言った。

……俺も塗り終わったから、ボディビルダーの真似をしないとな。

マスターズ  
教務課から、『教室で衣装を着る時は最低一時間その役を練習すること』とのお達しが来ている。だから、俺は衣装（塗装？）を着終わったので☒☒ボディビルダー☒☒の役を演じなくてはいけない。

ガシィ!!

俺はボディビルのポーズ（モストマスキュラー）をとるが……みんな引いている。

「……イブキよ。余も様々な戦士や剣闘士を見てきたが……そなたほどの傷を負ったものはほとんど見なかったぞ。」

ネロは俺の右わき腹にある縫痕ぬいあとを指でツツーとなぞる。

……くすぐったいから止めてください。

「流石です!!主殿!!武士の勲章ですね!!」

牛若が褒めてくれるが……俺は武士じゃねえ。

「……。」

エルはいつも通りの笑顔でニコニコ笑っている……いや、その笑顔は大分ひきつっている。

「……メジエド様のご利益がありますように。」

ニトは白い布越しに俺の背中をさする。

「……イブイブ、ゴメンナサイ。」

理子は俺に土下座した。

……まあ、この傷の3割以上は理子のせいだし。

「うん、許してるから。俺キレイサッパリ水で流してるから土下座は止めてくれ。」

俺は無理やり理子を立たせる。

「……(ジー)。」

リサは俺の体をジッとガン見している。

……リサさん、その目つきが怖いです。

「……お前も苦労してるんだな。」

遠山警官(キンジが警官の変装をしている)がポンと肩に手を置いた。

「……そろそろ泣きそうになるから止めてくれ。」

……おかしいなあ。なんだってこんなに怪我する事ばかりに巻き込まれるんだよ。

俺はキンジの肩をガシツと掴んで言った。

「あ、ああ……。」

キンジは相変わらず、不憫ふびんな物を見ているような目で俺を見ていた。

さて、俺のボディビルダー姿は見るに堪えない事がよくわかり、そして牛若とエルも変装し終わった頃、

バァー……バァー……!!!

「みんな、おっはよー!!」

扉が勢いよく開けられ、ガンマン姿の理子がやってきた。

……理子の奴、外で着替えてきたのか？

理子の姿はテンガロンハットを被り、厚手のブラウスを胸の前で結び、ヘソは丸出し。革のチョッキとブーツを身に着けて、デニムのスカートスカートの裾には短い革紐がビッシリ並んでいる。拳銃は見たところシングルアクションのリボルバーを使用。

……芸が細かいなあ。俺なんて黄色のパンツと塗料だけだ。

我がチーム△×COMPOTO△×の面々は器用な奴が多い事が判明した。

「ほら早く!!絶対ウケるって!!!可愛いは正義だよ!!!」

理子はドアの裏側に居る誰に声をかけながら、その腕を引っ張っている。

「ツーーーーー!!!」

人の可聴域を超えた高音で叫んでいる人物の足がズルズルと見えてきた。

真っ赤な靴に、ピンクと白の縞々靴下が見えた。ソックスの上縁には、ヒラヒラした白いフリルが付いてるようだ。

……おい。もしかして。

俺はこの場にいないピンク髪の暴君が引いたお題を思い出した。

「や、や、やっぱり!!!いゝゝゝやゝゝゝよゝゝゝツ!!!」

……ああ、やっぱり。

理子に引きずられてきたのは小学生<sup>アリア</sup>だった。小学生は左右の胸の上部にでかいボタンをつけたブラウスを着て、丈が非常に短いスカートを履いている。当の本人は腕関節が外れるんじゃないかという勢いで理子に抗っていた。

……アリアもここまで芸が細かいなんて。

我らが小学生<sup>アリア</sup>ちゃんは赤いランドセルを背負っている。これをアリアが作ったとは思えない。

……どつちが作ったんだ？

俺はリサと理子を見た。……二人とも俺と視線が合ったらドヤ顔した。二人が協力して作ったのだろう。

……この二人は計5人分の衣装と小物を作ったなんて……どんだけ器用なんだよ。

「アリア、諦めろ。それより衣装の細部を作り込んでおかないと、後で市中引き回しの刑をやられるぞ。その服で……オフツ」

キンジは思わず吹いてしまったが、すぐに咳き込むような手つきで誤魔化した。



……キンジ、どうなつても知らねえからな。

アリアをもう一度見れば、ランドセルの右側に『4年2組 かんぎきアリア』と書かれた名札を付けている。

「っ!!ククク……」

俺は思わず笑いだしてしまった。

「よ、4年2組……!!」

俺は床をバンバンと叩いた。

……なんだって真ん中の4年生をチョイスしたんだよ!!もう笑うの我慢できねえよ。

褐色のボディービルダー（傷多し）が床を叩いて笑っている姿をアリアはギロリと見る。

「ハイ!!アリアちゃん!!お裁縫箱はこっちでちゅよ!!アリアちゃん!!」

理子は星伽の裁縫箱を勝手にアリアの足の上に乗せた。

「アンタね……それ絶対、アリアちゃん、って言いたいだけでしょうが……ッ!!」

ツン!!

アリアの額を穏やかな笑顔で白雪（教師の変装か？）がつついた。「ダメでしょ、アリアちゃん？小学生がそんな口調で喋っちゃ。」

星伽は聖母のような（でもなぜか黒い）微笑みを浮かべてアリアに言った。

……役作り1時間のことを言っているな。

「……うぐう……!!」

「はい、それじゃあ、道具を貸してもらったら御礼を言いますよね？」

……あ、あれ？白雪先生？アリアの眉間に置いた指、爪立ててません？

「……あ、あ、後で覚えてなさいよ……!!」

アリアは地獄の底から響くような声を出すとともに、顔の筋肉を痙攣させ、サーベルタイガーのような笑顔をした。

「が、ぐ……は、はいッ！あ、いいがとうございますッ！せん、せーッ

！」

「あ、あ×××いい×××がとうございます……!! あっはははは!!! ゴホツ!! カハツ!!」

……小学生ちゃん!! あんたは笑わせに来たのか!?

「か、風穴アアアアア!!!」

「うわあ!!」

アリアが殴りかかってきた。俺は床から飛びあがり、サイドトライセツプス（背中を腕を組み、横から見た上腕三頭筋を含めた腕の太さと脚の厚みを強調するポーズ）をしながら走って教室を出た。

……一応この教室内は役を演じないといけないってのが面倒だ!!

俺は教室を出ると一目散に逃げたように見せ、実際は、×××影の薄くなる技×××を使って扉の真横で教室内を観察する。

俺が恐る恐る教室内を見ると、キンジと白雪がアリアを羽交い絞めにしていた。

……キンジ、白雪、今度なんか奢るな。

アリアが鎮まった（誤字ではない）後、俺はノソノソと教室に戻った。

その後、俺は傷痕を隠すために思考錯誤（パテを盛ったり、メイクで隠してみたり）したが、無意味だという事が分かった。

……どうやってお仕置きから逃げられるんだ？

俺はその事で頭を痛めることになる。

場所考えろよ……

タンタン

木槌の音が裁判所内で響いた。

「被告人、神崎かなえを……懲役536年の刑に処す。」

東京高等裁判所第八〇〇法廷に響いた判決に、弁護席に座っていた俺は口が塞がらなかった。

……死刑や終身刑では後回しにされると言う『主文』を裁判長は最初に言わなかった。だから良くない判決が出るであろうとは予想はしていたけど……

執行猶予のない、重い判決をこのハゲ裁判長は下した。

……裏で何かあるな絶対、絶対に。

「……。」

隣に座るスーツ姿の理子がギロリと検察側を睨む。

宣戦会議から音信不通になったジャンヌ、長野のレベル5拘置所に拘置中の小夜鳴は不参加だったが、この裁判は勝てるかと誰もが予想していたのだが……。

……敗訴以外の何物でもない。

一審の時より多少は減刑されている。しかし、それでも……アリアの母であり、俺の母の友人である☒かなえさん☒の事実上の終身刑には変わりはないのだ。

……まあ、あの時の悪夢の様に『ボデイビルダーの刑』とかにならなかったのは救いか？

カツト。

しかし、この裁判には吐き気がする。何か仕組まれているのは明白だ。なぜなら、傍聴人は一人も居らず、マスコミだって誰一人来てない。実質、密室裁判と変わりが無い。

……辻さんとメガネさんに今度聞こう。

何か大きなものが蠢うごめいているに違いない。

「不当判決よ!!!」

ガタンツッ!

椅子を鳴らして立ち上がったアリアが金切声を上げた。

「こんな……どうして?! こんなに証言、証拠が揃っているのに……どうしてよ!!! ママは……ママは潔白だわ!! どうして?!」

スーツ姿のアリアが、床を蹴って検察側に駆け出そうとした。すると、慌てて若い女性弁護士・連城黒江が抱き着くようにして押さえる。「騒ぐなアリア!! 次の心証が悪くなる!! 即日上告はする!! 落ち着け!!!」

次となると、最高裁しかない。そこで終身刑にされたら……再審という手もないことはないが、実際は最高裁の判決で最終決定になる。「放しなさいっ!! 放せ!!! アタシはアンタに怒ってるんじやあないわっ!! アンタは有能で、全力でやってくれた!! おかしいのはコイツらだわ!!!」

検察官たち、更には裁判官まで指さしながら、アリアが泣き喚く。「やり直しなさい!! やり直せッ!!! アンタたち全員入れ替えて、やり直すのよ!! こんなもの、茶番だわ!!! アンタたち全員が結託して、ママをつ!!! アタシのママを!! 陥れてる!!! 陰謀だわ!!!」

「やめろアリア!! まだ最高裁がある!! 確定じゃない!!」

キンジが暴れるアリアを押さえにかかると……元武偵の連城弁護士との2人がかりでも、手に負えないようだ。周りには……警備員たちが手錠を手に、アリアを囲むようにきている。

……気絶でもさせて無理にでもこの場を収めるか。

俺はスツと席を立った瞬間、

「……アリア、落ち着きなさい。」

被告人席から発せられた、静かな一言で……アリアが我を取り戻した。

かなえさんの放った言葉がアリアの暴走を止めたのだ。

「ありがとう、アリア。あなたの努力……本当に嬉しかったわ。まさかアリアがイ・ウーを相手に、ここまで成し遂げるなんて。あなたは……大きく成長したのね。それは親にとって何よりの喜びよ」

落ち着いていた。かなえさんは、この場の誰よりも……落ち着いて

いた。いや、これは……

「遠山キンジさん。貴方にも心から感謝しています。アリアは、とてもいいパートナーに恵まれた。直接それを見届けられて、幸せです。でも……」

かなえさんはふっと、その表情を全て消し、目を閉じた。

「……こうなる事は、分かっていたわ」

かなえさんは悟りを開いたように、すべてを諦めているように、俺は見えた。

かなえさんのカメラが付いた銃を抱きしめて泣き続けるアリアを慰めようとしたのだろう。連城弁護士は自分のアウデイにキンジ、アリア、理子に乗せた。俺はお古の高機動車にリサを乗せ、2両の車はかなえさんに乗せた護送車が高裁から出るのを追うように発進した。

護送車・アウデイ・高機動車の順に通行止めを避けて内堀通りにでた。

きっとあのアウデイの中ではアリアは泣き続けているのだろう。

裁判に勝ち自分の母親をシャバに出すために、アリアは自分の青春を投げ打って、世界中を駆け回り、理子やジャンヌと戦い、ブラドを捕らえ、パトラやシャーロックを退けて、証拠をそろえた。

激戦の結果得たものは……理子とジャンヌ、ブラドの分の減刑だけだ。他のメンバーの罪については、弁護側の証拠不十分。

……世界中に散ったイ・ウーの残党全員捕まえて、裁判所まで引き連れてきやがれっか？

連城弁護士は時間稼ぎをするだろうが、最高裁には間に合わない。

……政治家に官僚は何を考えてこんなことをするんだ？

高機動車の中で、ベートーベンの第九が重く響いた。

護送車とアウディは上野方面へ向かった。高機動車もそれに続く。すると、前方を走るアウディが信号の停止線からかなり離れた所で止まった。

「どうしたんだ？」

「い、イブキ様……信号が……。」

リサはそう言って指をさした。

「おい……マジかよ……。」

信号が消えている。3色全てついていない。歩行者用の信号ですらついていない。

俺は一瞬~~□□~~ダイハード4. 0~~□□~~を思い出したが、その考えを捨てた。

……ハツカー爆殺事件はないし、ジヨニー<sup>おっ</sup>・マクレ<sup>ん</sup>は日本に来ていないはずだ。となると……なんだ？

見れば、左右のビルからサラリーマン達が困り顔で出てきている。昼間だから気付くのが遅れたが、ビルの一階にあるコンビニやカフェの中が薄暗い。

「………停電？」

何か嫌な予感がする。

「リサ、とりあえず車の中に居ろ。」

俺はそう言って高機動車から飛び降りた。

高機動車を飛び降りると、異常なものを捉えた。停車中の護送車の下から……アスファルトの地面に、黒い物が広がっている。……こつちに向かつて。

………影!?

ヘリの音は聞こえない。皇居の近くだ、飛行船だって飛んでないだろう。となると……

………敵襲だ?! 皇居前だぞ!?

影はみるみる内に、アウデイの下を覆っていく。

バチバチバチバチッ!

閃光に続いて、車を包むような激しい放電音が耳を劈いた。アウデイから連城弁護士の驚く声と、アリアの悲鳴が外へ漏れる。

車は落雷を受けても中の人は無事というのは知っているので、なかの4人は平気だと思うが……敵にどうやって対処する!?ここは皇居前だ。うかつにドンパチなんてできねえぞ!?

ボンッ!!

ボンネットが勢いよく開き、そこから煙と炎が出ている。

……引火なんてしたら目も当てられねえ!!

俺は~~四~~次元倉庫~~四~~から日本刀を出して、扉を切り裂いた。それと同時に、逆側ドアが勢いよく蹴破られ、キンジたちが飛び出してきた。

……うん、切るのはいらなかったか。

キンジ達の安全が確認出来たので、視線を前に戻すと護送車からも煙が上がっているのが見える。タイヤも全て潰れている様だ。

「かなえさん!!」

護送車にキンジとアリアが駆け寄ろうとした時

バライツ!!!

護送車の後ろで放電が起こった。

……罨か!!

あたりを見れば……影は既に無くなっている。

……極東戦役!?もう仕掛けてきやがったのか!?こんな場所では!?どんだだけの自信家なんだ!?

「ヒルダ……!!」

俺とキンジは思わず声に出した。何時の間にか護送車の上に立ち、くるくるとフリフリの日傘を回す……退廃的で、何処か不吉な印象の、ゴシック&ロリータ衣装の蝙蝠女。

「……ヒルダ!!写真では見てたけど……会うのは初めてねッ!!!」

反射的に拳銃を抜くアリアに、ヒルダは鼻を鳴らす。

「アリア!!拳銃を捨てろ!!ここをどこだと思っていやがる!!」

俺は日本刀の峰でアリアの拳銃を叩き落とし、日本刀を四次元倉庫にしまった。

「逃げろ!!あいつは犯罪者だ!!」

俺はそう叫びながら14年式に空砲をつめ

タアン!!

上空に向けて撃った。

その直後、静まり返っていた町に爆発のような悲鳴が木霊し、蜘蛛の子を散らす様に人々が我先にと逃げていく。

「何するのよ!!」

「アリア落ち着け!!」

俺はそう言いながらキンジにモールスである言葉を伝える。

『コ・ノ・エ』

キンジはこの言葉だけでどういうことか理解したようだ。キンジはアリアを必死でなだめる。

ヒルダはその様子を、瞼を半開きして欠伸をしながらじつくりと眺め……不敵に笑いながら俺の方を見た。

「武偵というのも大変ねえ……あんな塵芥みたいな存在たちを一々気に掛けなきゃいけないなんて……。」

「俺は逆にアンタの考えが分からねえな。なんだってこんなところでドンパチをしようとすんだ?」

俺は思わず聞いてしまった。

「イヤねえ……粗野ねえ……。私、今はそんなに戦う気分じゃないのよ?日の光って、キライだし。」

日傘の柄を抱くように頬へ寄せながら、俺達1人1人の顔を舐め回す様に見てきた。

「でも、つい手が出ちゃった。だってえ、タマモの結界からノコノコと出てくるんだ……」



ベキイ!!!

ヒルダがぶっ飛ばされた。

「この畜生が!!陛下の目の前でドンパチやるとはなあ!!!」

「死ねえ!!!死ねえええええ!!!」

「汚物は消毒だアアア!!!」

「死ねえ!!メス豚がああああ!!!」

「キイエエエエエ!!!」

ドカツ!!ベキツ!!グシャツ!!!

ヒルダがぶっ飛ばされたと同時に、汚れや皺一つないキレイな軍服を着た集団が現れた。その集団は地面に叩きつけられたヒルダに群がり、彼女を銃床でタコ殴りにしながら己の軍服を血で染めていく……。

「「うわあ……。」」

キンジとアリアはともかく、さっきまでしゃがんで震えていた理子ですら引いていた。

「……流石は禁闕守護きんけつしゆごの責を果たす、最精鋭部隊。近衛師団だな。」

……うん兵部省直轄特殊作戦部隊へいぶしょうちくかくとくしゆさくせんぶたいでも、ここまでの士気はない。

俺は改めて近衛師団の恐ろしさを知った。

続々と血走った目をした兵が集まり、ヒルダを殴ろうと一点に押し掛ける。

「なあ、アリア。」

俺はアリアに声をかけた。

「な、なによ……。」

「拳銃、払い落として正解だろ?」

すると、アリアは思い出したかのようにガバメントを拾うと

「……そうね。ありがと。」

アリアは小さな声で言った。

ヒルダが不死身で、しかも傷がすぐ回復する事を近衛師団の兵達は理解したようだ。なので、彼らはさらに嬉々としてヒルダをタコ殴りにしていく。

その姿を尻目に、俺達は近衛師団の士官から軽い事情聴取を受けていた。

「村田大尉殿、拳銃を撃った理由は？」

汚れ一つない軍服を身に着けた中尉が、調書を取るために質問をする。

「民間人に危険を知らせるために上空へ向けて撃ちました。使用したのは空砲です。」

……空砲にしておいてよかった。

「そうですか。ご配慮ありがとうございますm……。」

ドカーン!!

俺と中尉は音がした方向へ顔を急いで向けた。そこには……白銀のICBMが道路に突き刺さっていた。

「ICBM!？」

俺と中尉は声を上げて驚いた。なんで皇居前にICBMが落ちるんだ!?

……このICBMは爆発しない。となると……乗り物の方か!?

俺はイ・ウーで見たICBMを改造した乗り物を思い出した。

ICBMは白煙を上げながら側面のハッチが開いていた。キンジャやアリアも事情聴取をいったん止め、ICBMを唾然としながら見つめている。

「……少し、手遅れだったか。君がアリアだね？一目でわかったよ。」

日の光を背に☒☒Polaris 05☒☒と描かれた白銀のICBMから姿を現したソイツはどこか海外の武偵高の制服だと思われる、灰色のブレザーを着た男装少女だった。

その男装少女は清潔感溢れる艶のある黒髪をひらめかせ、タツとハッチから地面へ降り立った。

そしてやつと、今の状況を男装少女は理解したようだ。

「……………え？」

男装少女は周りを見渡した。そこには……………血走った眼をし、紅の戦化粧を体全体にした千を越す兵士がギロリと獲物を捉えた。

「クク……………クククククク……………」

「獲物が増えたあ……………」

「今日は祭りだなあ……………」

「カカカカ……………」

兵の中から歓喜を押し殺す声が聞こえてくる。

……………ご愁傷様。

俺は思わず男装少女に手を合わせた。

「……………ご、誤解だ。誤解なんだ……………」

男装女子はその兵達の異様に高まる士気のせいか、後ずさりをした。

「確保おおおおおおお!!!」

俺を聴取していた中尉が体の奥底から叫んだ。

「ヒヤツハアアアアアアアアア!!!」

「今日は祭りだああああ!!!」

「ロケットをこんな場所に落とす不届き者めえええええええ!!!」

「コロス!!アイツコロス!!!」

「キイエエエエエエ!!!」

「う、うわああああ!!!」

ヒルダをあまりボコせなくて鬱憤が溜まっていた一部の兵達はこぞって男装少女に群がっていく。男装少女は泣きながら白銀の剣を振り回すが……………意味がない。

……………あ、男装少女の持ってた剣が吹っ飛んだ。

そうして、彼女の姿は人波に消えていった。

……………あの男装少女、アリアの事知っていそうだったんだが。誰だったんだろう。

俺はそう思いながら、皇居前にICBMを落とした男装少女どっしりやうもないバカの冥福を祈った。

その後、駆けつけた警察に状況を説明し、改めてやってきた護送車に乗せられ拘置所へ向かうかなえさんを俺達は見送った。

「……あの、ちよつといいかい？」

「はい？」

一人の中年刑事が俺に声をかけてきた。

「……あれ、どうすればいい？」

その中年刑事の指さす方向には……2点に群がって、血祭りをやっている集団がいた。

「……さらに上の者を呼ばないと止まらないと思いますよ？」

近衛師団は忠義が厚いのも有名だ。そんな集団が、皇居近くでテロを起こそうとしたバカICBMを落としたデホ  
ヒルダと男装少女を許さないはずがない。

「……それしかないよなあ。」

中年刑事は大きなため息をついた。

「頑張ってください。」

俺はその言葉をかける以外はできなかった。

虎ノ門まで歩いて帰る連城弁護士、電車で帰るキンジとアリアと別れ、俺はリサと理子を連れて高機動車で戻ることにした。なんでも、アリアとキンジは話があるらしい。

「あのヒルダが……あんなに簡単に……。」

理子はヒルダのやられっぷりに衝撃を受けたのだろう。理子はポツリと言った。

……理子は吸血鬼親子に虐待されてたんだっけか。

「日本の最強部隊の一つだしなあ……あのぐらいは普通じゃないか

「？」

俺もあのヒルダの純粋な戦闘力は低いと見ている。

……ただ、あの影(?)の力は厄介だけど。

「まあ、なんだ。ヒルダが運よく近衛師団から逃げて襲ってきても守ってやつから……。気にすんな。」

「……うん。」

高機動車に☒☒俺ら東京さ行くだ☒☒が響いた。

「……雰囲気と曲が合っていないですね。」

リサがぼつりと言った。

「……なんで戦闘前には第九が流れたのに、今はこれが流れるんだよ。」

「……クク。」

理子が笑いを押さえていた。

翌日、

『L・Watson』

と、包帯とガーゼでグルグル巻きにされ、端正な顔も痣あざで見られるのも痛々しい姿になった男装少女が黒板に流暢りゆうちやうな筆記体で書いた。

「「「「キヤー!!!」」」」

と、クラスの女子が黄色い声を上げた。あまりの歓声に、高天原先生は教壇から足を踏み外した。

……あいつ、あんな事してよく釈放されたな。

俺はクラスの女子とは違う意味で声を上げた。

数分前、高天原先生が

「それでは皆さーん、スペシャルゲストの転入生を紹介しまーす!!マ

ンチエスター武偵高から来た、とーってもカツコイイ留学生ですよー!!」

とニコニコ顔で喋っていたが……まさかこいつだとは思わなかった。

「エル・ワトソンです。これからよろしくね。」

男装少女ははそう言つて一番後ろの席に着いた時、朝のホームルームの終了のチャイムが鳴った。それと同時に歓声をあげて女子達がワトソンの席を取り囲む。

「ごめん、ちよつとどいてもらつていいかな。」

男装少女はぎこちない笑顔で囲んだ女子達を掻き分け、俺とキンジ、アリアの座る席へ来る。

「アリア、トオヤマ……そして君がムラタだね？ちよと話があるんだ。屋上へ来てくれないか？」

「で？なんか用でもあるのか？戦争になつてもおかしくないことをした犯罪者さんよ。」

「……それは誤解なんだ。本当だ、信じてくれ。」

俺達3人はワトソンに連れられ（よく屋上への通路を知つてたな）、屋上に出た。

「アリアの危機と知つて急いで向かつたら、そこだったんだ!!決して日本と戦争したいなんて思つてない!!……それに、イギリスは日本に対して多大な賠償をすることに決まつた。僕もこの任務が終われば降格処分さ。」

ワトソンはやけっぱちに言った。

……イギリスも甘いんだなあ。それとも日本の交渉人の能力がなかったのか？

「何しにここへ来たんだ？」

キンジはぶつきらぼうに聞いた。

「僕は……許嫁のアリアと、義理の母親を助けに来た。それだけだよ……。」

ワトソンは髪をかき上げそう言った。

「……許嫁？」

キンジは捻りだすように、何とかその単語を口に出した。

「ああ……アリアは、僕の婚約者だ。」

「顔に大きな痣<sup>あざ</sup>作<sup>つく</sup>ってカツコつけてもなあ。」

「……………」

冷たい風が、一陣吹いた。

さて教室に戻り、一般科目の授業が始まった。その一限の英語はともかく、数学、生物、挙句の果てには日本史に至るまでワトソンはしっかりとついてきた。

ワトソン曰く

「少し予習してきたからね」

……うん、英語に数学、生物は英語を訳せばできるだろうけど、よく日本史を勉強したな。結構ニツチな範囲だぞ？

休み時間になると自分を囲む女子たちに、いろんなことを苦笑しながら言うワトソン。

……女子たちは、ワトソンが女だつてことをわかっているんだろうか？どう考えても重心の位置から考えて女だし、筋肉のつき方を見ても異常な胸の盛り上がり……。わっかんないもんなのかねえ？

俺はHS部隊のメガネさんにメールを打ちながら考えていた。

さて、一般授業は終わり、一般校区から専門校区へ移動するため、巡回バスをキンジと待っているのだが……全然来ない。



高機動車はちよつと歩いた場所に置いているため、取りに行くのは面倒なのだが……。

「キンジ、とつてくるわ。」

「ああ、頼m……。」

俺が高機動車を取りに行こうとした瞬間、目の前に黒い車が止まった。

……外車？

俺はボンネットのエンブレムを見ると……ポルシェしかも左ハンドル。運転席を見ればワトソンがいる。

……日本の道は左側通行だから、右ハンドルの日本車……又は英国車のほうが楽だろうに。

すると、ワトソンはサングラスを外し、

「やっぱリトオヤマとムラタか。」

そう言った。

「バスは来ないぞ。前の交差点で強襲科アサルトの生徒同士が車内で乱闘していた。駆けつけた蘭豹先生が怒ってバスを横転させていたから、しばらくは通行止めだよ。」

「おう、伝えてくれてありがとよ。」

俺は頭を押さえながら言った。

……また強襲科アサルトか。頭が痛い。うちは公共交通機関の中では大人しくすることもできないのか。

「乗れ、二人とも。徒歩でも間に合うだろうが……探偵科インケスタと強襲科アサルトまで送ろう。君たちとは少し話したいことがあるからね。」

そう言ってワトソンはドアを開けた。

「お、ありがとな。助かるわ。」



俺は大人しく後部座席に乗り込んだ。

「お、おい!!」

「車の中で何かしようとは思わんだろ。」

キンジは渋々ワトソンのポルシェに乗り込んだ。

「……君たちはそう見えて、女たららしいな。」

車が発進し、しばらくしてからワトソンは呟いた。

「そう言われているらしいな、女子には。」

キンジはそう言っただアに膝をつき、頬杖をついた。

「……キンジはともかく、俺も言われているのかよ。俺なんてこいつのような甘い言葉なんてしゃべれねえのに。」

「おいこの野郎……。」

キンジはミラー越しに俺を睨むが……

「否定できるのか?」

「……いつも適当に茶々入れるか、汚い英語言うもんな。□□イピカイ  
エー・マザーファッカー□□だっけ?」

「おう、やるのか?」

「君たち……これは新車なんだ。喧嘩はやめてくれ。」

ワトソンの言葉に俺達は渋々喧嘩を収めた。

「僕は、そう言うのが一番嫌いだ。じよ……女性に対する……その、ふ  
しだらさ。それは最も良くない。非常に最悪だよ。」

そう言いながら、ワトソンはハンドルを握る手に力を入れた。

「お前さんの性別からしたらそう感じるだろうけど、おr……。」

キキー!!!

ハンドルが思いつきりブレた。車はスピードの出たまま蛇行運転  
をする。

「ば、馬鹿野郎!!運転が下手なら見え張って高級車を高速運転すん  
じゃねえ!!!」

俺は思わず叫んだ。

「君が動揺させたんだろう!!」

ワトソンがそう言い返した。

……シートベルトが無かったら、今頃地面に叩きつけられていたぞ!?

俺はワトソンの運転が一気に恐ろしくなった。

「……まあいい。……だからアリアには、君たちの部屋に住むのはやめろと言っておいた。」

「ありがたい話だな。俺は迷惑してたんだ。」

そう言つてキンジは鼻を鳴らし、頬杖のついたまま外を眺めていた。

「なんとなく、君とは気が合わないみたいだな。」

「なんとなくじゃない、俺もそう思うからな。」

ワトソンとキンジは互いにそっぽを向きながらそう言った。

「こんな言葉を知ってるか? 嫌よ嫌よも好きのうち

「ちがう!!!」

キキ——!!!

またワトソンのハンドルがブレた。

「うわあああああ!!」

なんだかんだありながら、やっと探偵科インケスタの前に着いた。

「アリアとは、お互いに成人してから正式に組む予定だったが……その前にまず、トオヤマをアリアから遠ざける。アリアは君を気に入っているようだからな。」

ワトソンはむつとしながら言った。

「勝手にしろよ……。送ってくれてありがとな。」

キンジはそう言いながらワトソンのポルシェポデオから脱出した。

……いいなあ、俺も早く脱出したいんだが。

「よく覚えておけ。アリアのベストパートナーは僕だ!!」

ワトソンは宣戦布告するようにキンジに言うど、車を再び発進させた。

「そう言えば聞きたいことがあるんだが……。」

俺はワトソンに話しかけた。

「なんだい?」

「何だつて男装して、アリアの婚約者を演じているんだ?」

キキー!!!

ワトソンはまたハンドルを思いっきりブラした。

……いま、対向車とギリギリですれ違ったぞ!?

「ぼ、馬鹿野郎!!!ちよつとやそつとでハンドルをブラすんじゃない!!!」

「ぼ、僕は男だあ!!」

「それは関係えねえだろうが!!」

……俺は本日数度目の命の危機に会った。

「……まあいいや。百歩譲ってワトソンが男だとしよう。テメエがアリアを寝取る理由が見つかんねえ。どういうことだ?」

キキー!!!

ワトソンのポルシェは蛇行しながら急ブレーキをかけ、何とか強襲科アサルトの前に止まった。

「ぼ、僕は寝取りとかそう言……。」

「わかった!!わかったから!!人の趣味をどうこう言わないから!!」

俺はフラフラとしながら、何とか車を脱出した。

「全く……男装しても容姿端麗ようしたんれいで可愛いんだ。女の姿でも十分可愛いとは思うんだがなあ。」

……まあ、中身は結構黒そうだけどな。

俺がそう呟いた。

「か、かわいい!?!」

ワトソンは顔を真っ赤にしながら俺に言った。

「何顔赤くしてんだよ。」

「う、うるさいなあ!!」

ワトソンはそう言ってフラフラと車を発進させた。

……ちよつとした言葉で動揺するって、あいつ大丈夫なのか?

俺はそう思いながら強襲科アサルトの校舎に向かって歩き出した。

キキー!!!ベキ!!!ドカーカーン!!

「あいつ!!本当に大丈夫か!？」

音の方向には、電柱柱に突っ込んだポルシェが煙を吹いていた。

「おい!!ワトソン!!!大丈夫か!？」

俺は電柱柱に突っ込んだポルシェに駆け寄った。

男装バレバレなんだけど……

ワトソンのポルシェが電柱に突っ込み、廃車になってしまった翌日、

バキツ!!

「ぐおお!!」

4時間目のバレーボールの授業中、体育館のコートの中でキンジのうめき声が響いた。

ワトソンのスパイクが、キンジの顔面に突き刺さったのだ。キンジの顔に突き刺さったボールは、ワトソンのチームへ向かって宙を飛ぶ。

「えいつ!!」

再び、ワトソンのスパイクが俺とキンジのチームのコートへ向か

……

パァン!!

「ゴフア!」

わなかった。ワトソンのスパイクは再度キンジの顔面に当たり、またもワトソンの陣地へボールは飛んでいく。

「キンジ (キンジ君) !?」

キンジによる2度の顔面ブロックに、同じチームの俺・武藤・不知火は思わず声を出す。

キンジは……何とか立っていた。キンジの意識は朦朧もつろつろとしており、顔を真っ赤にし、鼻血を垂らしながらも……己の意思で、地面をしっかりと踏みしめていた。

今は14対14の同点、時間は20秒もない……。キンジは、醜態しゅうたいをさらしても勝とうと必死だった。

「やあああああ!!」

パァン!!!

ワトソンのスパイクが再び俺達のコートを襲う。

ズバァアアァン!!!

キンジは今度も顔面で何とかボールを拾った。キンジが必死に

拾ったボールは俺達のコートの上に浮いている。

ボタン……。

俺の近くで誰かが倒れた。きつと……漢が力尽きたのだろう。

……お前の死は、無駄にしねえ!!!!

俺はキンジが己の命に代えてでも拾ったボールをトスする。

「行けええええ!!!武藤おお!!!」

「うらあああああ!!!」

ズドオオオオオン!!!

武藤の渾身のスパイクは敵のブロックを抜け、地面にぶつから……

「負けるかああああ!!!」

敵がスライディングをしながら武藤のスパイクを拾った。

……嘘だろお!?

敵はボールをつなぎ、再びワトソンがスパイクをする。

スパーン!!

……チクシヨウ!!ワトソンの球は取れない!!負けるのか!?

ズドン!!!

ボールは鈍い音ともに、宙へ跳ね上がった。

「え?」

そこには……倒れてもなお、顔面でボールを拾ったキンジがいた。

「き、キンジーーーー!!!」

俺は思わず叫んだ。キンジは、死んでも俺達のためにボールを顔面で拾ったのだ!!

キンジの顔面で拾ったボールは虚しくもまた敵チームのコートへ飛んだ。

「ええええい!!」

ワトソンが何度目かのスパイクを放つ

ズドン!!

ワトソンの放ったスパイクは再びキンジの顔面にぶつかり宙へ舞う。

「これでも喰らえ!!!」

ワトソンがまたもそのボールにスパイクを打つ

ベキ!!!

キンジは何度も顔面でボールを拾い、顔は鼻血で真っ赤になっている。

ポーン……

ボールは敵陣の奥の方へ飛んでいった。

「武藤!! 不知火!! キンジと一緒に勝とうぜ!!」

俺は二人に叫んだ。

「おうよ!!」

「……村田君、知らないよ?」

俺と武藤と不知火は白目をむいたキンジを抱え、持ち上げた。まるで、キンジの顔でブロックするように。

「これで終わりだアアアアア!!」

ワトソンが最後の力を振り絞り、スパイクを撃とうと……

「キンジ行けえええええ!!」

「防げえええええ!!」

「遠山君、ゴメンね。」

メキイ!!

キンジは顔面でそのスパイクを防いだ。ボールは敵陣に落ちていく。

ポンポンポン……

キンジの顔に当たったボールは、そのまま敵陣に落ちた。

ピーーーー!!!

「「「「うおおおおお!!」」」」

この試合を見ていた全員がキンジへ走り出した。

「「「「キンジ!! キンジ!! キンジ!!」」」」

担架たんかに乗せられたキンジをみんなで神輿みこしの様に担いだ。

「「「「キンジ!! キンジ!! キンジ!!」」」」

キンジの乗った担架たんかを揺らしながら、興奮する集団は医務室へ向かっていった。

この日、キンジは武偵高の伝説となった。彼のその雄姿はみんなの心に刻み込まれた。……キンジは今も、みんなの心の中で生き続けている。

「つてなるからさ……。やったねキンジ!! 今日から有名人だ!!」

「ああ!?!」

俺・武藤・不知火はあの後、学食にて席に座るキンジの前で、床に正座をしていた。

「いや……。流石に最後のは悪かったけどよ……。結果として飯奢ってもらえたじゃねえか。」

武藤はそう言つてキンジに弁解する。

そう、今日の体育の講師が気持ち悪いぐらいに機嫌がよく（なんでもカジノでぼろ儲けしたらしい）、バレーの試合で勝ったチーム全員に昼飯（1000円以内）を奢ると約束したのだ。

それを聞いた、いつも飢えている男子高校生達が全力を出さないわけがない。一時は銃で勝敗を決めようとしたようだが、  
「銃とか刃物使った奴は蘭豹先生と綴先生に好きにしていって突き出すぞ。」

この講師の一言で、珍しく健全にバレーの試合が行われた。……恐るべし、蘭豹と綴。



「キンジだって金がねえって言ってたじゃねえか。確かに最後のは悪かったけどよ……飯と相殺できるだろ？」

俺はキンジに言った。

……そろそろ足が痺<sup>しび</sup>れてきた。

「俺は飯欲しさに体を売ってねえ!」

キンジはそう言ってガーゼと包帯だらけの顔を指さした。

「まあまあ遠山君……。」

不知火がキンジを落ち着かせようとするが……

「不知火、お前も関与してたのはよく覚えているからな？」

「……アハハ」

不知火は苦笑いをした。

キンジは大きなため息をつき、二枚カツ丼大盛(980円)を頬張った。

「もういい。」

「ほんと悪かった。今度奢る。」

俺はそう言って立ち上がった。

「神戸牛の霜降りステーキが3食も食えるのか。ありがとな。」

キンジのその言葉に俺達3人は固まった。

……神戸牛の霜降りステーキは学食で一番高い奴じゃねえか!!

「「ちよ t t t……」」

「ああ!」

「「……分かりました。」」

俺達は倒れこむように椅子に座った。

……出費がでかいなあ。

俺はそう思いながら箸を持ち、そば付き天丼大盛(890円)を食べ始めた。

「でもなんだってキンジの顔面ばかりワトソンは狙ったんだ？キンジに恨みでもあるのか？」

俺はそう言った後、そばを啜すすった。

……ああ、やっぱり逆二八だな。

「俺もそう思ってたんだ。あんなに顔面にぶつけるなんて、よっぽどの事じゃないとやんねえぞ!」

武藤は二枚カツカレー大盛(950円)を頬張った後、大声で言った。

「そうだね。正確に遠山君の顔にぶつけられる技量があるんだ。彼だったらこの試合は余裕で勝てたはずだ。」

不知火も海鮮丼(990円)を食べ、ちゃんと飲み込んだ後そう言った。

「恨み……?そういうえばアリアの婚約者だからって、俺に宣戦布告してたな。イブキだって見てただろ?」

「え!?あれだけ!」

俺はキンジの言葉に驚愕した。あの後なんかあったと思ってたんだが……。

「うわあ……今度は神崎さんを遠山君と彼で奪い合うんだ。」

不知火はニコニコと……満面の笑みで言った。

……不知火は他人の色恋沙汰、好きだよなあ。

「今までキンジの取り合いだったのになあ。……こいつあ飯がうまいぜ。」

武藤はこれまた旨そうにカツカレーを頬張る。

「あつっ!!」

武藤は口を押えた。揚げたてのカツか、カレーのルーで火傷でもしたのだろう。

……天罰でも落ちたのか?

俺はそう思いながら天井をかきこんだ

俺はパパッとそば付き天井大盛（890円）を食べ終え、今度はリサお手製の弁当を出した。

「ムラタ……君は結構食べるんだね。」

「んあ？」

そこには、ステーキ・プレートセットのトレイを持ったワトソンがいた。

「ここ、いいかい？」

そう言いながらワトソンは、俺達が有無をいう前に座った。チラリとキンジを見ると、さつきまでブスツとした顔をしていたが、さらに不機嫌になっている。

「ムラタ、君はちゃんと味わって食べてるのかい？早食いは体に悪い。」

ワトソンはそう言った後、胸の前で十字を切り、ナイフとフォークで上品にステーキを切り始めた。

「江戸っ子はせっかちだ。しかも軍にいたから余計に早食いになっちまったんだ。」

俺はそう言っただけで弁当を開けた。

……ああ、今日も旨そうだ。

「パーティーに呼ばれた時はゆっくり食べる。でもここはそんな堅っ苦しいところじゃないだろ？」

俺はそう言っただけで卵焼きをつまんだ。

……うん、出汗がすっかりしていて旨い。

「そうか。」

そう言っただけで、ワトソンはニコニコとキンジを一切見ずに一口大の肉を口に運んだ。

……空気重くなった。

昼食の時間、俺達のテーブルはワトソンが時々しゃべる他愛のない話以外はシーンとしていた。

武偵高では、2学期でも月1回は屋内プールで体育をやることになってる。ワトソンとの昼食の数日後、そのプールで体育をする日になった。

水泳の授業でワトソンが何か仕掛けてきたら、今度は反撃するときンジは言っていたが……肝心のワトソンは見学だそう。

……なんだってワトソンは男装してるんだ？アリアと結婚していないことは……資産？ワトソンは金をだいぶ持っていそうだしこれはない。貴族の格？たかがそんなために、すぐにバレる男装をするのか？

俺はそんなことを考えながら準備運動をしていると、黒い長袖長ズボンのスポーツウェアのワトソンが現れた。ワトソンはグラサンをかけ、パイプ椅子を取り、埃をポンポンと入念に払ってからテーブルの横に広げた。

そして、その椅子に膝を揃えて上品に座ってから、何かに気付いたような素振りをした。ワトソンは慌てて、足を組んだ。

……別に膝をそろえて座ってもいいと思うがなあ。

「よしガキ共!!? プールを20往復しろや!!! サボった奴は射殺やから!!!」

ズドオオオン!!

蘭豹はそう言いながら、スターターの代わりにS&W M500を撃って、すぐいなくなってしまった。

……相変わらずだな、武偵高は。監督しないのかよ。

生徒達は一斉にプールへ飛び込み、横向きに20往復した。縦か横か蘭豹は言わなかったからな。

20往復が終わった後、大分時間が余った。俺は武藤がロッカーから持ってきた雑誌の束から居酒屋特集が組まれた雑誌を取り、ワトソンの傍にあるパイプ椅子を拝借して座った。

「……ん？」

俺はふとワトソンを見た。ワトソンは俺をジッと見たまま固まっていた。

「……。」

……最近、ボディビルのコスプレのために鍛え始めたのだが……そこまでガン見する物か？本職のボディビルダーに比べたら全然筋肉はついていないのだが。

俺はワトソンの顔を覗きこむと、ワトソンは顔を真っ赤に染めた。

「……ワトソン。」

俺はワトソンに声をかけた。

「ひゃ、ひゃい!!!」

ワトソンの声は上ずっていた

「おまえの性別上ショウガナイんだが……男に興味があると思われるぞ?」

「ぼ、僕は男だ!!」

ワトソンはそう言って俯うつむいた。ワトソンの耳は真っ赤になった。

「……まあそうだとしても、そんなに見るような体じゃないだろ？傷だらけだしな。」

俺はそう言って自分の体を見た。俺の目には、痛々しい縫い痕や銃痕が映った。

「それがいいんじゃないか……。」

「……は?」

……今ワトソンこがこれこがいいことか言わなかったか!?傷痕に興奮するDSなのか!?

俺は思わず距離を取った。

「な、なんで距離を取ってるんだい!？」

ワトソンはそう言いながら俺の体をじろりと見る。

「いや……傷痕に興奮するドSなんだろ?」

「ち、違う!!!」

ワトソンはそう言って手をバタバタした。

「……おい、ワトソン。体調悪いんなら救護科アンビュラスにでも行けよ。」

そう言ってキンジは映画雑誌を手にしながら、近くのパイプ椅子に座った。

「あれ、どうしたの?ワトソン君、調子悪い?」

律儀に縦20回に相当する横34回の往復を終え、濡れた髪をかき上げながら不知火がやってきた。

「う、あ……!？」

ワトソンはそんな不知火を見て後退りをしようとして……

バタン!!

椅子ごとひっくり返ってしまった。

「……今日は帰って寝ろ。そもそもあんな怪我して、しかも大事故起こしたのに平気なわけないだろ?」

俺はそう言ってワトソンを引つ張り上げた。

……あんなことあったのに、よくバレーは出れたよなあ。

俺はワトソンの回復力に感心した。

「あわわわ……」

ワトソンは慌てたような声を上げた後、俺の腹筋を見つめながら顔を真っ赤にして静かになった。

「おいイブキ!!キンジ!!これAKB全員載ってるぞ!!!不知火も来いよ!!総選挙やろうぜ!!!」

今度はプールサイドを歩きながら武藤が堂々とグラビア雑誌を広げながら歩いてきた。

「4人じゃあ総選挙は無理じゃないかなあ」

不知火は苦笑いをしながら雑誌を覗いた。

……不知火の奴、乗り気だな。

「お前らなあ……そんな事して、何の得があるんだよ。」

キンジもそう言いながら、武藤の雑誌に近寄って行った。

「好みのタイプが分かるくらいか？」

俺もそう言いながら武藤の雑誌を覗く。

「じゃあ、一人につき5票な。おいワトソン、お前も選べよ」

プシュ!

武藤はそう言った後、コーラの缶を開けて口をつけ、雑誌をテーブルに開いておいた。

「こ、断る!!そ……そ、そんな本!!公共の場で広げるな!!」

こつちを見ない様に俯いていたワトソンが、プイッとそっぽを向いて言った。

「お、ありがとな。」

武藤が俺にコーラの缶をくれた。俺は口を付けないように一口飲み、不知火に渡した。不知火はありがとう、と小さくお礼を言うのとコーラを一口飲み、キンジに渡した。

「まあまあ、そう言うなって!!こんだけ居りや、絶対一人は気に入る子がいるもんだぜ!!騙されたと思って、全員ザツと見てみるよ!!」

武藤はそう言いながらワトソンと無理矢理肩を組み、と引き寄せる様にして写真を見せた。

「キヤツ!!」

武藤の胸に顔を寄せる様になったワトソンは、短く悲鳴を上げた。

……あいつ、本当に男装するつもりあるのか？

サングラスがズレた先にあるワトソンの目は、若干潤んでいる。

「な、なんだよ女みてーな声出して!!……じゃあやんなくていいよ。てか……ちと熱っぽいんじゃないかねえのか？ほら、コレやるよ!!熱あるときは気持ちいいぜ!!」

武藤はそう言いながら、キンジが持っていたコーラをひったくり、ワトソンに渡した。ワトソンは手渡されたコーラを両手で受け取り、

「で、でもこれはさつき、君たちが……」

「量が少ないってか？」

「ち、違う!!く、口をつけた物を!!」

「男同士で何言ってるんだ。」

俺はため息をついた後、ワトソンの持っていたコーラを奪った。

……男装しているからシヨウガナイが、セクハラだからな。

「武藤、こいつぁ外国人で、しかも貴族様だ。文化的にそういうのは受け付けないんだろ？」

俺はそう言って助け舟を出した。

「あ、ああ!!そうなんだ!!おばあ様がそう言ってたんだ!!!」

ワトソンはこれ幸いと手をブンブン振りながら言った。

「そ、そうか。」

武藤は渋々引き下がった。俺は武藤にコーラを返し、

「ワトソン、蘭豹に言っとくから帰って寝ろ。……付き添いはいるか？」

ワトソンにそう言った。

「あ、ああ!!ありがとう!!だ、大丈夫さ!!帰らせてもらうよ!!!」

声変わりしていない様な高い声でワトソンは言い、脱兎の如く走りプールを去った。

……なんだって、あんなにずさんな男装をするんだ？

俺は不思議で仕方がなかった。

ズルツ!!ビタン!!!

「おい、大丈夫か!？」

……あんなに勢いよく走るから

ワトソンはプールサイドで勢いよく転んだ。

「ツ~~~~~!!」

ワトソンはさらに顔を真っ赤(恥ずかしさと鼻血のせいで)にし、ス



クッと立ち上がると再び走り出した。

その放課後、俺は銀行強盗達をボコボコにし、お縄にし終わった時に携帯電話が鳴った。携帯を見ると……平賀さんからだった。

……弾ができたのか？結構早いな。

「もしもし？」

『あ、村田君!! 96式25ミリ機銃の弾が73発できたから、その連絡なのだ!!』

案の定、平賀さんからの電話だった。

……ああ、やつとできたのか。修学旅行Iで6発消費したから、今は94発しかない。そこで新たに補給できるのは有難いが……

「……あの、平賀さん。俺は200発注文したから27発分少ないんだけど。」

俺は200発注文し、100発をすでに受け取った。なので残り100発……27発分は何処へ行った？

『実は弾の製造が予定より遅れそうなのだ。だから今できている分を先に渡しておきたいのだ。』

……製造が遅れる？材料調達に不備でも出たのか？

「珍しいな。なんかあったのか？」

『教務課からの緊急依頼で校舎の修繕を頼まれたのだ!!』

「……校舎の修繕？そんなに美味い依頼じゃなかったよな？」

……車輛科や装備科では、学校の備品などを整備・修繕する仕事が生よっちゅう回ってくるらしい（原因はだいたい強襲科生徒だ）。だがその修繕の仕事は、1年や単位・金が不足している奴が主に請け負うと聞いている。あの平賀さんが単位や金が足りないとは思えない。

『ワトソン君がお金を出してくれて、あややを指名したのだ!!! 今月、あややは大忙しなのだー!!』

……ワトソンが平賀さんを? ……なるほど、キンジや俺の兵站を潰しに来たか。

「……そいつあシウガナイや。平賀さん、修繕頑張つてね…つとー!」  
銀行強盗の一人が袖口から針金を出したので、俺はそいつの手を蹴り、針金を明後日の方向に飛ばした。

『ありがとうございますますなのだ!!』

ツーツーツー

電話が切れた。

……平賀さんとの会話でわかったことがある。ワトソンはキンジと俺（俺はまだ不確定だが）を目の敵にしているという事だ。理由はアリアとの関係。しかし、ワトソン本人は女性なのだ……

「あ……」

俺は銀行に貼ってあったポスターのおかげでわかった。

そのポスターには、自然の中にある綺麗な湖と山<sup>ゆ</sup>百合<sup>り</sup>があった。

「……同性愛か? いや……両刀か?」

……同性愛を考えたが、プールサイドで俺達の姿（パンツ一丁）を見て真っ赤になっていた。きっと、アリアが本命の両刀なのだろう。

「……面倒になったもんだ。」

ピーポーピーポー

やっと警察が来たようだ。

ワトソンの両刀疑惑が浮上した翌日、トイレから戻ってきた俺にキングがドヤ顔で

「ワトソンの弱点を見つけたぞ!!」

なんて言ってくるので聞いてみると……くじ運の悪さらしい。

「俺達も運はすこぶる悪いぞ。」

……悪運は強いけどな。

キングはその言葉でorzの体勢になった。

俺がトイレに行っている間、ワトソンの変装食堂リストランテ・マスケのくじ引きをやっていたそうぞ。

1年が休み時間に持ってきたクジ引きの箱のくじを引いたワトソンのお題は……

『女子制服（武偵高）』

……男装少女が女子制服を着るなんてなあ。

分かり易く言うと、某女性だけの劇団宝○歌劇団の男役が女役をやるぞ……うん、違和感ないな。

「Strategy is trick. . . . If you do n't wanna be suspected, you should show it.」

……直訳すると、『戦略は策略だ。疑われたくないなら、それを見せよ』。いや、今回の場合は策略よりだまし合いと訳したほうがいいかもな。要は、『男装バレるくらいなら、見せちまえ!!』。でも、その言葉をここで言うのは、どう考えても悪手だぞ？

「……イヤだなあ。イヤだけど……まあ、やらないと教官に絞られるそうだし。クジを引いたからには、やるよ。すぐに着替えるのかい？」

ワトソンのこの言葉で女子たちは狂喜乱舞。大喜びで自分たちの制服をワトソンに押し付けようと、我先にジャージ片手にトイレへと消えていった。

男子は男子で「ついに三次元で男の娘が見れる」等と意味不明な事

を叫びつつカメラを構えている。

……女の子が、女の子の格好をするだけなんだがなあ。

その後、女子から制服を借りたワトソンは教室を出ていった。

暫く待っていると、

ガタン

教室の天井のパネルがずれた。

「せっかくの変装だから、少しサプライズで登場するね。」

そんなワトソンの声が聞こえたと思ったら……

パツ…スタツ!

天井の穴から教壇へ、制服姿の美少女が降り立った。

ショートカットのボーイッシュな美少女はSIGを構えながら

ウインクをした。

「うおおおおお!!」

今度は野郎共の野太い歓声が上がった。

……素材は良いと思っていたが、ここまでだとは思わなかったな。そう言えば、最近見てくれない子ばかり会うな。メーヤとかヒルダとかワトソンとか……騙されないようにしよう。

さて、この一件以降、ワトソンを快くなくないと思っていた一部の野郎共がワトソンに優しくなっていた。全く、現金な奴らだ。

まあそんなことはともかく、ワトソンは晴れてクラス全員の寵児となり、どんどん友達を増やしている。

そのワトソンと険悪な関係のキンジや俺（なんだって俺もなんだよ）……居場所を奪われ始めていた。

武藤曰くホームパーティーなんかにも誘われたらしく、うまい物をたらふく食ったと……。

ワトソンは俺とキンジの外堀を埋めてきたようだ。キンジはワトソンのやり方を小汚いと言っているが……汚い・卑怯は負け犬の遠吠えでしかない。ワトソンの策も立派な戦術だ。

この日の夜、俺とキンジは暇だった。リサはやっと部屋をあてがわれ、自分の荷物を置きに行つてそのまま一泊するそうだ。ネロやエル、牛若、ニトもその手伝いに行つてしまった。

キンジは今、リビングでベレッタとデザートイーグルのオーバーホールで時間を潰している。

「キンジ、ちよつと部屋にこもるわ。」

「ん？あぁ。」

俺は自室に行き、25ミリ機銃を整備用の台へ置いた。そしてパソコンとプリンターを起動し、メガネさんと辻さんから送られてきたメールをコピーした。流石に同居人の親友でも、軍からの情報は見せられない。

「ワトソンの情報とかなえさんの件、そして今後の事か。」

俺はその文章を読みながら、25ミリ機銃の簡易整備を始めた。

『 エル・ワトソンと神崎かなえについて

時間が無いので単刀直入に書きます。

エル・ワトソンについて

・秘密結社「リバティー・メイソン」の諜報員

・貴族出身で子爵の地位にあり、シャーロックホームズの相棒、J・

H・ワトソンの曾孫である。30年ほど前から凋落傾向ちようらくにあり。

・「西欧忍者」・「全身武器」などの二つ名を持ち、薬などを使った戦

術、又は奇襲を得意とする。

・ワトソン家はエル・ワトソン以外子供がいなく、そのせいで男装をしている。

日本と英国の取引と神崎かなえについてはまだ調査中です。

メガネより」

……なるほどなあ。嫡子がいなから男装すると。アリアに固執する理由については……ワトソン家の凋落ちようらくを防ぐため？それだけだと弱い気がするなあ……アリアに恋したとすれば納得がいくな。ワトソンはやつぱり両刀だな。

俺はそう思いながら25ミリ機銃の分解が終わり、部品を見ると……

「撃針をそろそろ変えないとなあ……替えはまだあつたつけ？」

撃針が痛んでいた。俺は棚を探し、25ミリ機銃用の撃針を見つけた。

極東戦役

「残り4本か……FEWもあるし、他の部品と一緒に発注しとくか。」  
25ミリ機銃は撃針とエキストラクター、尾栓が傷みやすい。俺はどの部品を発注するか考えながら25ミリ機銃を組み立てていると……

コンコン

ドアがノックされた。俺は急いでメガネさんと辻さんのメールを印刷した紙をしまい、パソコンを閉じた。

「イブイブ、いる？」

理子が来たようだ。

「ちよつと待ってくれ。」

印刷した紙をしまった棚に鍵をかけ、俺はドアを開いた。

「理子か、どうした？」

「イブイブ、一人寂しく銃の整備ですかあ？」

理子は俺を下から覗き上げるように見てきた。

「なんだよ、こんな夜更けに……」

俺は自室の椅子に座り、25ミリ機銃の組み立てを再開する。

……理子の様子がおかしい。理子の笑顔はぎこちなく、耳には禍々

しい気配を放つ蝙蝠の形のピアスを着けていた。何かあったに違いない。……我ながら全く情けない。てやんでい、何が「守つてやる」だ。

俺は大きなため息をつくと同時に、25ミリ機銃を組み立て終えた。

「ム……なに? イブイブはこんな美少女がワザワザ来てくれたのに嬉しくないの?」

理子はプクくと頬を膨らます。

ブシュツ

俺は両手で理子の頬を強めに潰し、某天才無免許医師の漫画に出てくるアツチヨンブリケの顔にした。

「ムウー!!」

その変顔が面白かったので、俺は理子の顔でしばらく遊んでいたら理子が怒ったような呻き声を出し、腕をブンブンと振り出した。

「こいつあたまらん」と俺が手を放すと、理子の頬が再びプクくと膨らんだ。

「理子、飲酒許可証持ってたよな。」

俺は理子が飲酒許可証（偽造）を持っているのを思い出した。

「え? あれは偽z……」

「俺が見た時は本物だったような気がするんだよなあ。一杯付き合つてくれないか?」

俺は呆けながら言った。

……俺は酒が無けりや、何があつたかも聞けないのか。本当に情けない。

俺は自己嫌悪と共に、酒蔵部屋に向かった。

俺は貰い物のテキーラ ホセ・クエルボ 1800 アネホとシヨットグラス、岩塩とライムを持ってきた。

「テキーラ、苦手か?」

「……うん。」

「そうか。」

そして、俺は銃剣でライムを8等分にし、皿に盛った。

次に、俺はそのテキーラをショットグラス2つに注いだ。そして左手の甲の人差し指と親指の間の部分を、ライムで湿らし、岩塩を乗せる。その塩をなめ、口の中一杯になったしよっぱさをショット一杯分のテキーラで胃に流し込み、最後にライムをかじった。

理子はその様子を凝視していた。俺と目が合うと、理子は同じように、そして上品にテキーラを飲んだ。

「いい飲みっぷりだな。」

俺はそう言つて、また二つのショットグラスにテキーラを注いだ。

「イブイブもね。」

理子はそう言つて腕で口を拭ぬぐった。

俺は再び同じようにテキーラを流し込んだ。

「何があつたんだ。」

「……………」

理子は無言だった。俺は三杯目のテキーラを飲み干した。

「言いたくなかつたら……………いい。ゴメン。」

俺はそう言つて、再び自分のショットグラスにテキーラを注つぐうとする……………理子はその瓶をひつたくるように奪った。そして、理子は注いであつたテキーラを一気に飲み干し、もう一杯注いで勢いよく煽あおった。

「お、おい……………」

「……………イブイブ。」

理子はユラリと立ち上がり、俺に抱き着いてきた。

「……………忘れさせて……………全部忘れたいの。昔の、事……………アイツ見てから、毎晩思い出すの……………もう、耐えられない……………」

理子はそのまま静かに泣き始めた。

俺は理子の背に手を回し、抱きしめた。

「……………」

理子はさらに力を入れて俺に抱き着き、俺の服を濡らしていく。嗚咽おえつが聞こえる。



俺は理子の頭を撫でた。さらに泣く勢いが強まる。

……俺も辻さんが居なかつたら、理子と同じ目にあつていたんだろうか？

俺は理子が泣き止むまで、抱きながら頭を撫でていた。

「うう…頭が痛い…気持ち悪い……」

理子が泣き止むと、顔を真っ赤にしながらそんなことを言い出した。

「酒に慣れてない奴がテキーラのショット三杯、しかも一気に飲んだらそうなるだろ？」

俺はそう言ってテキーラとライム、塩、ショットグラスを片付け、水の入ったコップを渡した。理子はそれを受け取り、ゆっくりと飲み干していく。キンジはもう寝たようだ。

……勧めた俺が悪いのだが、一気に3杯も飲むとは思ってもいなかった。

「うう……」

理子は頭と胃を押さえながらうめき声を出す。

「酔い止めと水だ。これ飲んで寝るぞ。」

理子はそれを受取ろうとした瞬間、

「イブイブ……ゴメンね……」

理子はガシッと俺の体を掴んだ。

「はっ？」

オロロロ r……

「おい!!馬鹿野郎!!トイレで吐けっ!!」

あえて何をやったとは言わないが……理子は俺に向かって盛大にやった。

「……なんだよ、うるさいな。」

キンジが目をこすりながらリビングに来た。

「き、キンジ!!雑巾!!雑巾持って来て!!!早く!!!」

オロロロ r……

その果物は人を殺せるから……

翌日の朝、二日酔いのせいでいまだに頭が痛い理子のために、リサはシジミの味噌汁を作ってくれていた。

「うう……。ツ~~~~!!」

理子は頭がまだ痛いのだろう。頭を押さえていた理子は俺を見かけた瞬間、トイレに駆け込んだ。

……理子ってこんなに酒が弱かったっけ？

俺は疑問に思いながら、シジミの味噌汁を啜った。

後日聞いたところ、空きつ腹に強い酒を一気に飲んだことが原因だそうで……。ゴメンナサイ。

俺は強襲科アサルトで戦徒志望アミカの一年から逃げ、その後教室で『戦略Ⅰ』を受講し、キンジと一緒に帰路についていた。

俺は基本、戦徒アミカはすべて断っているのだが……教務課マスターズの命令により、どうしてもという子はエンブレムをやって落として落としている。……そもそもなあ……教えられることなんてないからなあ。

俺は今までの訓練を思い出した。落下傘なしの空挺から始まり、真冬の山のサバイバル訓練（衣服一着のみ可）、遠泳（訓練名：八丈島より泳いで参った!!）、行軍訓練（辻さんが地図に定規で引いたラインの走破）、機銃掃射を避ける訓練（時々実弾）、……。これ以外にもキツイ訓練を山ほど思い出した。あんな訓練をさせられない。

「イブキ、大丈夫か？」

キンジが怪訝な目で俺を見てきた。

「あ、ああ……軍の頃思い出して……。」

俺はきつと今、遠い目をしているのだろう。よく生きてるなあ、俺。

「軍の授業に比べたら簡単だったか？」

……あ、そっち？

「まあ……初歩の初歩だからな。」

まだ授業は3回も超えていない。それなのに難しいことを講義はしないのは当たり前だろう。

俺は高機動車に乗り込み、エンジンをかけようとした時、隣の通信科コネットの棟から出てきた数人の女子たちがハウキヤチリトリを柵の向こうに投げ込んだ。

「なっちー、後はヨロシクねー!!」

そう言つて女子たちは商店区へ歩いて行った。

「……あ、は、はい……。」

林の中から声が聞こえた。この声は……

「中空知さん？」

「中空知、か？」

林の中の人影はその言葉で、ビクつと身震いをした。この反応を見ると、中空知さんなのだろう。

バサツ!!

「そ、そその、その声は……む、むら、むた、むたら、むらた君!!!……と、おと、とおやま君!!!」

中空知さんはそう言いながら落ち葉の入った袋を落としてぶちまけ、尻もちをついた。

……気弱な中空知さんに掃除面倒事を押し付けて遊びに行ったのか。子供かよ……

俺はため息と共に高機動車のエンジンを止め、ズカズカと林の中に入った。

「ひっ!!」

中空知さんは怯え、尻もちをついたまま、後ずさりをした。

「……え?そんなに怖い?」

俺はシヨックを受けながらホウキとチリトリを拾った。

「ちやつちやと終わらせようぜ。」

俺はそう言っつて、中空知さんがぶちまけた落ち葉を集め始めた。

キンジもホウキを一つ拾い上げ、

「武偵憲章1条だ、手伝うよ。」

その言葉と共に落ち葉を集め始めた。

「あ、あ!!いいんです!!別に、いいんで……ひっ、ひっく、ひくっ!!!」

中空知さんは緊張のあまりしゃっくりが出始めた。

「まあまあ、知波単の時の借りもあるし。」

辻さんによる知波単学園戦車道指導の依頼の人数が足りなくて、中空知さんには無理を言っつて来てもらった事がある。その借りをこんなので返せるとは思えないが……少しでも恩は返さないと。

……それに☒☒義を見てせざるは勇無きなり☒☒だ。☒☒触らぬ神に祟りなし☒☒という言葉もあるが。

俺は集めた落ち葉をゴミ袋に詰めた。

「はひっ……ひくっ!!あ、ありがとうこいしますっ!!あいがと、ございましゅ!!」

中空知さんはスクッと立ち上がり、カラクリ人形のようにカクカクと頭を何度も下げた。

「チャチャツと終わらせようぜ。」

「は、はひっ、ひくっ、ひっく!!」

「……大丈夫かなあ?これ。」

なお、5分もせず落ち葉を拾い集めた。

落ち葉の処理が終わった後、☒乗りかかった船だ、☒と中空知さんを高機動車に乗せ、送ることにした。

「今日はそ、その……ありがとうございます……。」

……☒ありがとうございます、☒の間違いか？

「ちよつと手伝っただけだろ？ いいよ別に。」

助手席のキンジがそう言った。

「そこまで気にしなくていいよ。」

俺はそう言いながらハンドルを握りなおした。

……それに、サボリを見逃した罪悪感もあるからな。

ああいうのは、見ている第三者も気分が悪い。本当に止めてほしい。

「わ、私、誰かに、こ、こ、こ、こ、こういうの、手伝ってもらったの……は、初めてでしたから……。と、友達とか、ジャンヌさん、ぐらいしか、いないので……。」

中空知さんは相変わらずビクビクしながら言った。

……そんな悲しいこと言うなよ。ってジャンヌか。

俺は宣戦会議でフラれてから、ジャンヌの姿を見ていない。

「……ジャンヌがどこにいるか知らないか？」

キンジが中空知さんに聞いた。キンジもジャンヌが心配なんだろうか？

「今、ですか？ わ、私の部屋に、と、というか、私とジャンヌさんの、女子りゅ、女子寮の、相部屋していて……いますよ？」

「え？」

「へ？」

「き、昨日帰ってきて……け、欠席、欠席しました。怪我をしていたので、へ、部屋に、います。」

ジャンヌは……帰ってきていたのか、しかも怪我をして……。

……なんだかんだあっても、心配だな。

「ちよつと、そこに寄っていいか？」

俺は中空知さんに聞いた。

「へ!?ひゃ、ひゃい!!」

俺は野菜や青果が売られている購買の前に高機動車を止めた。

「……一番高いの買ってたけど、これはどうなんだ?」

助手席のキンジが顔をしかめながら言った。

「……これ以外の果物が黒ずんだバナナしかねえんだぞ!?……流石は武偵、リンゴやミカンぐらいあると思っただが……。」

高機動車の窓を全開にしても匂いが伝わってくる……。圧倒的に臭い。中空知さんはあまりの臭さに白目を向き始めた。

「中空知さん、ジャンヌの見舞いに行ってもいい?」

「え、あ、ひゃい……、ひゃう……。」

中空知さんはそう言っただけで絶望した。

……とりあえず、許可は取ったな。

白目を向いた中空知さんと<sup>ド</sup>果物の<sup>ア</sup>王様<sup>ン</sup>を乗せた高機動車は女子寮へ向かった。

異臭のする高機動車は、ジャンヌと中空知さんの部屋がある第3女子寮に着いた。

俺は異臭のする箱を持ちながら、二人の部屋に上がると……

「おお……」

「うお……」

俺とキンジは思わず声を上げた。そこには……音響機器がびっしりと集められていた。

黒塗りの防音壁に大量の、種類の違うヘッドホンがかけられてい

る。他にも古今東西の通信機、無線機、携帯電話すらある。

……モールス用の電鍵ですら10以上あるぞ!?おい、これはベルの発明した世界初の電話のレプリカじゃねえか!?

失礼なことではあるが……多種多様な通信機に囲まれた部屋をキョロキョロと見ていた。すると、その部屋にある唯一の機械でない物……観葉植物と小さなサボテンを見つけた。観葉植物には□□トオヤマクン□□と書かれた小さなプラカードが刺さっており、サボテンの小さな植木鉢には□□ムラタクン□□と書かれた可愛いシールが貼られていた。

……見なかったことにしよう。

俺は視線をそらした。

「ちっちゃっ違います!!!しょ、植物に、話しかけたりとかしてましえん!!!  
そ、そこまで孤独じゃありませんよっ!!!」

中空知さんはヘッドホンの空き箱で観葉植物を隠し、同時にサボテンを持って背中に隠し、涙目で弁明を開始した。

「……いや、珍しい種類の植物育ててるんだな。」

俺はそう言っただけ目をそらした。

「ガサ入れしに来たわけじゃないから……ジャンヌは?」

「ジャンヌさんは!!そち、そちら!!です!!」

キンジの言葉を聞き、中空知さんは涙目でドアを指さした。そのドアは古城にでもありそうな、上品な雰囲気醸し出す、木目調のドアであった。

……一目でジャンヌの部屋ってわかるな。

俺は□□果物の王様□□の箱を抱えながら扉をノックしたのだが……



反応はなかった。

……寝ているのか？

俺は思わず抱えている箱を見た。相変わらず異臭がムンムンとする。

……枕元に置いたらどんな反応をするんだ？

俺はそんなくだらないイタズラを思いつき、そつとドアノブに手をかけた。

ドアを開けると、マホガニーの机、ガス灯のような古風なルームランプなど……一流企業の幹部や政治家が高級ウイスキーやブランドーを傾けていそうな、シックで洒落た部屋だった。

本棚にはフランス語に英語、日本語の歴史書や小説、少女漫画、○ーガレット……。

……コスプレが好きだと知っていたけど、こういうのも好きなのか。

この部屋にはベッドが無い。どこにいるんだろう……と、キョロキョロすると、

ごそ……ごそ……

その音の方向を見ると、もう一部屋あった。そこで寝ているのか？

俺はそーっと開けると……そこには大量のフリフリな服がウォークイン・クローゼットの様にかけてあった。

……コスプレが趣味なのは知ってたけど、ここまでのガチ勢だとは思わなかったぞ!?

俺は戦慄を覚えながら□□衣装のジャングル□□を潜り抜けた。

「フフツ……やはり良いな。」

……おう、いきなりですか。

そこには、ジャンヌがウエイトレス姿で、キリっとした顔で立っていた。

全身が映る大きな鏡の前で、膝に片手をつけて前かがみになり、振り返りながら背中の子供の大きなリボンの細かい調整したり、腰に手を当てたりしてポーズをとっていた。

「フツ……私はこんなにも愛らしい……フツ……。ん？変な臭いにおが……。」

鏡のジャンヌと目が合った。

「……。」

時間が止まったように感じた……。

数秒か、数十秒か、数分だったかもしれない。お互い鏡越しに目を合わせたまま、二人とも動くことができなかった。

ドスン！

俺は手汗のせいで、**果物の王様**の入った箱を落としてしまった。

「……やべっ!!」

「ツ~~~~ツ~~~~ツ~~~~!!!!」

銀髪美少女ウエイトレスは拳を握って俺に振り向いた。

「待て、落ち着け!?すぐ可愛いから!!美少女待ったなしだから!!だから暴力系美少女になるのだけはやめよう!!……な!」

俺は必死になって**命乞い**をするが……ジャンヌは顔を真っ赤にしながら俯き、

チャキ……

背中から魔剣デユランダをゆっくり抜いた。

「ちよ、ちよと待て!!どうやってそんなでかいの隠せるんだよ!物理的におかしいだろ!」

……そんな細い体にどうやって仕込んだんだよ!」

「……この部屋を見た者はいない。ここは私だけの秘密の花園だったのだ……。そして……今後もこの部屋を知る者はいないだろう……。」

チャキ……

ジャンヌはスツと魔剣デユランダを振り上げた。

「……私とて慈悲の心はある。辞世の句を聞いてやろう。」

……え!?マジで殺す気!?

「……………クールな美少女が顔真つ赤にして、コスプレするのっついよね!!このギャップがいい!!」

俺はサムズアップしながら、ここ数カ月で一番の笑顔をした。すると、ジャンヌは聖女のように、すべてを包み込むような笑顔をした。

「生者の為に施しを……」

死者の為に花束を……

正義の為に剣を持ち……

悪漢共には死の制裁を……

しかし我等聖者の列に加わらん……

……サンタ・マリアの名に誓い、全ての不義に鉄槌を!!!」

そう言つて聖女は魔剣を振り下ろした。

「ちよつと待つて!!それウエイトレスじゃない!!婦長だから!!!」

バキッ!!!

ベキ!!バキ!!ズドン!!!

俺は魔剣デユランダによつてぶつ飛ばされ、ドア2枚を破り、廊下に落ちた。

「……お、おいっ!!大丈夫か!?!」

キンジは俺が吹っ飛んできたのを見て一瞬固まった後、走り寄つた。

「……………フフフフ。」

ジャンヌは左手に果物の王様人を殺せる果物を持ち、右手で魔剣デユランダを引きずりながら、ゆつくりと歩いてきた。ジャンヌの瞳孔は完全に開ききつており、口は三日月形に笑っている。

……おい待て!!果物の王様は人を簡単に殺せるんだぞ!?

「待て!!落ち着け!!可愛い子がそんな物持っちゃだめだから!!」

「フフフフ!!」

ジャンヌが果物の王様を振り下ろした。

「……………ッ!!」

俺はドリアンを持ったジャンヌの左手に、自分の右の拳をぶつける

ようにして、攻撃を防ごうとした。

すると、果物の王様が重かったのだろうか……急に止めたせいで慣性が働き、ジャンヌの手から果物の王様がこぼれた。

そのドリアンは勢いよく俺に向かって……

ドスッ！

「ぐう……!!」

右胸に衝突した。俺はその衝撃や痛みを無視し、ジャンヌの左手を握り、一本背負いの要領で地面に投げた。

俺はジャンヌに馬乗りになり、四肢を動けないように抑えた。

「ジャンヌ落ち着け!!ジャンヌは可愛いから!!めっちゃジャンヌは可愛いから!!お前は可愛くないと思っけていても、俺はジャンヌのことを可愛いと思ってるから!!だから恥ずかしくない!!」

……今は亡き我が母親の秘技を褒め殺し!!!

俺は可愛くを連呼し、死んだ母親が良くやっていた褒め殺しを使って何とかジャンヌを無力化しようとする。

「わ、わかった!!わかったから!!もうやめてくれ!!」

ジャンヌの顔は桃色から朱色に変化した。

何とかジャンヌを褒め殺し、無力化することに成功した。

「……見舞いに来てくれたのは有難いが、この手土産は酷いな。」

ジャンヌはそう言って、鼻を押さえながら果物の王様を持ち上げた。

「これ以外の果物が黒ずんだバナナしかねえんだよ。東京武偵高には……。」

俺はため息をつきながら言った。

……流石に半額どころか7割引きのシールが付いた果物渡すわけにはいかねえなあ。

「……まあ、気持ちには貰っておく。」

ジャンヌもそう言ってため息をついた瞬間、

ピピピピピ……

ジャンヌのポケットから携帯の着信音が聞こえた。

ジャンヌはポケットから携帯を取り出し、発信者を確認した。

「……中空知だ。」

「中空知？中空知は隣の部屋にいるだろう？」

キンジは不思議そうに言った。

「あの中空知さんだ。面と向かって話せないだろ、あの性格だし。」

「……なるほどな。」

俺達はそんな話をしている間、ジャンヌは携帯に出てしばらく話していた。その後、

「うむ……わかった。村田、遠山、お前たちは向こうの部屋で待っている。お前たちを見ると中空知は本領を發揮できなくなる。彼女はこの携帯で話せ。」

ジャンヌはそう言ってさっきまで話していた携帯を渡してきた。

「ん？ああ、分かった。」

俺はそう言って、ジャンヌの携帯を受け取った。

「先週、中空知に何か以来したらしいが……それか。」

キンジはジッとジャンヌを見ながら言った。

「……え？そんな事やってたの？」

「そうだ。エル・ワトソンの会話を盗聴させている。私は奴を疑っているのだな。」

俺は二人が話している間、多人数で話せるように設定した。男二人が一つの携帯に耳寄せるなんてことはやりたくない。

設定した後、ジャンヌの携帯をキンジに渡し、俺は自分の携帯を耳に当てた。

「奴は動いたらしいぞ。アリアとリサが一緒に話している。」

……リサだと!?

俺は頭の回転が一瞬止まった。リサは昨日できなかった掃除をす

ると張り切っていたはずだ。仮に買い物に行っただとしても……リサには自衛能力が皆無だ。ワトソンはリサを簡単に拘束できる。

……あいつなら、人質にする可能性があるぞ!?!  
とても嫌な予感がする。

「ッ……!!!!」

「おい!!イブキ!!」

俺は血がにじみ出てきた胸を押しさえながら、ジャンヌと中空知さんの部屋を飛び出した。

目の前の柵を飛び越えて一気に1階へ飛び降り、高機動車に飛び乗った。

俺は高機動車のエンジンをかけるとともに、携帯用のヘッドセットを起動した。

「中空知さん!!二人は何処にいる!?!」

『今、店内です。台場1-9-1。ホテル日航東京3階、コンチネンタルレストラン、テラス・オン・ザ・ベイです。』

「了解!!」

高機動車は白煙を巻き上げながら第3女子寮を後にした。

俺は運転をしながら、ワトソンの選ぶ戦場を考えていた。

……もし、ワトソンがこの辺でドンパチやるにはどこを選ぶ?ワトソンはすでに上野でやらかしている。人が多い場所でドンパチするとは思えない。

『……音声、ワトソン、アリア、リサ、車内にいます。車種はトヨタ・クラウン・RS。都道482号線を北東に走行中。』

……流石にワトソンも高級外車を短期間で2両も買えないか。

『ワトソン、アリア、リサに話しかけています。アリア、リサ、ともに返答無し。眠っている模様。』

すると、キンジが疑問を抱いたようだ。キンジはどんな眠りかを聞

く……投薬、麻酔などによるものである可能性が高いと中空知さんは答えた。

「やってくれるじゃねえか。」

俺は思わず呟いた。

……なるほどな。☒イギリス人は恋愛と戦争では手段を選ばない☒か。ダージリンの言うとおりだな。

『目的地特定できました。場所は建設中のスカイツリーです。』

「流星は中空知さん!!ありがとうございます!!」

俺はさらにアクセルを踏み込んだ。

……その戦争、高値で買い取らせてもらうぜ?

高機動車はさらに加速する。その時、

プルルル……

俺の携帯が鳴りだした。発信者は……メガネさん!?

俺はヘッドセット操作し、電話に出た。

『た、大変なことが分かりました!!』

メガネさんは銃声や爆音をバックに慌てた声で言ってきた。

「どうしたんですか?」

『ひ、ヒルダが!!上野で事件を起こしたヒルダが逃げたんです!!!』

「……はい!」

俺は思わず耳を疑った。

……え?あの近衛師団だぞ!?逃げたりしたら……東京はどうなるんだ!?

『昨日、警察に引き渡した後に脱走したようです!!今、近衛師団が血眼で探しているようです!!』

「……ほ、本当ですか?」

……下手したら、あの近衛師団化け物ともは警察庁と警視庁に殴り込みするんじゃないか!?

『本当です!!見つけたらすぐに連絡してください!!最悪巻き込まれます!!』

「わ、わかりました!!」

ピッ!!ツー、ツー、ツー……

俺は今の状態を整理した。ワトソンとの戦闘、ヒルダの脱走、蠢く近衛師団……きつと警察もメンツをかけて動くだろう。なんせ皇居前でテロやったヒルダを逃がしたのだから……。

「……………とりあえず、ワトソンが先だ。」

俺は……考えるのを止めた。

高機動車は急ブレーキによって、強力な慣性力が車内を襲った。俺はそれに耐えた後、車から降りた。

見上げた先にある東京スカイツリーは……魔王の居城のようにそびえたっていた。

この付近に人の気配はない……となると、ワトソンは上にいるのだろう。

☒☒毒を喰らわば皿まで☒☒……か。」

東京スカイツリーの階段と、エレベーター乗り場に監視カメラがあった。

……流石に東京スカイツリーの柱を伝って登るのは無理だ。となると、階段かエレベーターしかない。

俺はエレベーターに乗り込んだ。

エレベーター内には監視カメラがない。……油断しているのか、それとも時間が無かったのだろうか。しかし、これは好都合だ。

俺はエレベーターの天井を外し、そこからエレベーターの外に出



た。そして、紅槍を使ってボタンを押し、エレベーターを作動させた。

ボタンを押して少しすると、エレベーターは上に向かって加速していった。その加速のせいで強烈なGが体にかかる。それは果物の王様ドリオンでの傷も圧迫するわけで……。

「グウ……。」

……めっちゃ痛い。

たった数秒が、数十秒にも感じる。

チーン!!

その音と共にエレベーターが開いていく。

……俺なら、エレベーターが開いた瞬間に機銃掃射や爆弾を作動させるが……ワトソンはどうする？

エレベーターが開ききった。その瞬間、

ズドン!!ズドーン!!!

爆発音とともに数千発の鉄球がエレベーター内を襲った。

「ツ~~~~!!!」

鉄球の数発はエレベーターの天井を貫通し、俺に当たる。

ダダダダダダ!!!

そして、煙が収まる前に機銃掃射が始まった。

……うわあ、予想道理かよ。チクショウ。

機銃掃射が終わると、俺は☒影の薄くなる技☒を使いながら、その階に降りた。

ダァン!

すると俺の目の前、30センチほどの場所に弾痕が新たに作られた。

……バレてるってことか。

俺は弾が来た方向に銃剣付きの38式を構えた。

「……出てこいよ。コソコソ隠れてねえでサシで決着着けようぜ。それともエージェントはコソコソ戦わないと勝てねえか？」

俺がそう言うのと、柱の影からゴーグルをかけたワトソンが、H&K MP5を構えながら出てきた。そのゴーグルは暗視装置か、それに準ずる何かだろう。

「まさかムラタが先に来るとは、全くの想定外だよ。」

……想定外、ね。よく言われるな。

俺は38式を強く握った。

「リサに何をした？」

「どうしたと思う？」

ダァン!!

俺は38式を発砲した。

「……あ、危ないじゃないか。」

ワトソンの髪が数本落ちて行く。

「俺はリサの安否を聞いてるんだ。……なれない事はしない方が身のためだ、二枚舌の飯マスエージェントさんよ。」

俺がそう言うのと、ワトソンはため息を吐いた。

「君はバカか？……その古びた38式歩兵銃、ボルトボルトアクションライフルを引いて装填するまでに、ボクは10発以上君に穴をあけることができる。」

カチャ……

ワトソンはそう言ってH&K MP5を構えなおした。

「それに……イギリスでは武偵の自衛のための殺人は認められている。そして僕は、治外法権を認めr……。」

「ゴチャゴチャしゃべるな、御託は良いんだよ。……どっちがここで生き残るか、それだけだろうよ。」

俺は空薬莖が薬室に入ったままの38式を構えた。

ダダダダダダ!!

ワトソンは発砲した。

MP5は比較的早い発射速度、そして異常に高い命中率が売りの

サブマシンガン短機関銃だ。その命中精度は100m以内であれば狙撃銃に匹敵するほどだ。

……そのおかげで弾を避けやすいけどな!!

俺はジグザグに動き、体に当たりそうな弾は銃剣で弾きながらワトソンに接近していく。

ガチャ…ガコン!!

38式の装填は終わった。俺は突撃しながら狙いを定める。

ダァン!!

「うつ……。」

俺はH&K MP5に向けて発砲し、それを破壊した。

「うらああああ!!」

銃剣の突きをワトソンは右に避けた。

……右へ避けるのは悪手だぜ!!

俺は、右に避けたワトソンの頭に銃床を思いっきりぶつけた。

ベキッ!!

「ぐあ……。」

ゴーグルは割れ、ワトソンの頭から鮮血がほとぼしる。

「糞袋くそいぶくろになる覚悟はできてるんだらうなあ!!」

ワトソンは銃床で殴られたのと同時に、カウンター気味にククリナイフを突き出してきた。

……この距離では避けられねえ!!

ザクッ!!

「チツ……!!」

すでにケガをしている右胸に、さらにナイフによる一本の線を刻み込まれた。

俺は痛みに耐えつつワトソンの腕をつかみ、38式でその腕を押し

え、肘を無理やり外した。

「ああああ!!」

そして、その苦痛の表情を浮かべるワトソンの顎あごに、アッパー気味に銃床で殴りあげた。

体の軽いワトソンはそのまま数メートルほどぶっ飛び、そのまま動けなくなった。

……右胸が痛すぎる。

俺は軽く右腕を回しながらゆっくりと、動かないワトソンへ近づいていく。

「……よう、立てよ。寝る時間にはまだ早いぜ。」

ワトソンは動かない。……いや、動いていない。師匠や軍で鍛えられたおかげで、意識の有無ぐらいはすぐにわかる。

……こういう場合は、敵は奇襲を仕掛ける場合が多い。しかも、ワトソンは地力で負けていることぐらいは理解しているだろう。となると、毒などの薬品・爆薬を使うことが考えられるな。

俺は警戒しながら、ゆっくり近づいていく。

……千日手だな。

俺はワトソンの奇襲を警戒して動けず、ワトソンも俺が警戒しているせいで動けないのだろう。

俺はこの時、薬室にはまだ空薬莢が入っていることを思い出した。

ガチャン!!

俺がボルトを引いた瞬間、ワトソンは目をカッと開き、紅の唇をすぼめ、吹き矢のようなものを2本、俺に向かって発射した。

……なるほど、これか。

俺は首を傾けて、針のような矢を避け、もう一本はゲートルが巻かれている部分に当たった。

ガコン!!

ジャキン!!

38式の装填が終わると同時に、ワトソンの袖からスリーブガンの要領で拳銃を出した。

ダダダダダダ!!

ワトソンは拳銃を連射しながら距離を開ける。俺は38式を発砲し、ワトソンの拳銃を破壊した。

「……ハア、ハア。さ、流石その年でCIA、ペンタゴン、FBI、MI6、ロシアのSVR……それにRAF、FARCにマークされるだけあるよ。」

「マ、マジかよ……。」

それは知りたくなかったな……。

「第三次世界大戦<sup>社</sup>を起こせる男の下にいる切り札<sup>ジョーカー</sup>の一つなら警戒しないわけがない。」

……辻さん、あんただんだけ警戒されてんだよ。

俺は少し涙が出てきた。

「だが……実際戦ってみて分かった。その上で言わせてもらおう。……僕の勝ち揺るがない!!」

「……大丈夫か?」

確かに毒矢と思われるものは2本飛んできて、一本は顔へ、もう一本は足に向かってきて、足の方は刺さってしまったが……ゲートルに阻まれ、肌<sup>ヒダ</sup>に刺さっていない。

「無味無臭無色の揮発性の毒さ……平衡感覚やあらゆる感覚を狂わせ奪う薬でもあ……あれ?」

ワトソンは、やっと俺が……毒矢が効いていないことに気が付いた。

「……え?あ?う、嘘だ!!針は刺さっているはずだ!!」

「確かに刺さったが……ゲートルに阻まれたがな。」

俺がそう言つて一歩前へ出ると、ワトソンは後ずさりをした。

「う、うわあああああ!!」

チャキチャキチャキ……!!!

ワトソンは全身から金属音を出しながら、肘、膝、ブーツの踵から短いナイフを出し、ククリナイフを持って俺へ突撃してきた。

俺は銃剣の先を使ってククリナイフを払い落とし、そのまま胸に銃剣を刺した。

ドスツ!!

鈍い音と共に、銃剣はワトソンの胸に突き刺さ……らなかつた。

……防刃チョッキを着ているのはわかつてたぞ!!

「ゴフツ……」

防刃チョッキを着ていても……そのエネルギーを防ぐことはできない。

ビリビリビリ……ボタン

ワトソンはそのまま倒れていった。その際、銃剣に服が引っかかり、破れてしまった。

……あちゃあ、防刃チョッキも破れちまつた。

その結果、可愛いブラが露出したまま、仰向けに倒れていた。

……気絶してるのはわかるから、とりあえず武装解除か？

俺はワトソンの武装を解除しながら、こいつの戦闘能力を考察していた。

……戦った結果、ワトソンは強かった。強かったが……相性が悪く、しかも俺の土俵の上で戦った結果、こいつは持ち味を全く発揮できず負けたんだ。

こいつの戦い方は暗器や毒などを使った奇襲・ゲリラ戦法だろう。それを一切せずに、俺に正々堂々(?)戦えばこうなることはわかっていたはずだ。

毒矢はともかく、暗器やナイフのような短い得物で、銃剣をつける  
と160センチにもなる38口径式と戦うなんて不利に決まっている。

本気で勝つのなら、序盤で使った指向性対人地雷をこの階全てに設置し、それらを爆発させながら一撃離脱を繰り返せばいいのに……何故こんな戦い方をした？

俺はそう考えながらワトソンの体を調べて武装解除をし、口に指を突っ込んで暗器がないか調べる。

……まるで変態だな。

俺はそう思いながら口内をまさぐると……

「うわあ……。」

出るわ出るわ……。暗器が出てきた。

左手でワトソンの口を無理やり開け、右手で口内をまさぐって3つ目の暗器が出てきた時、ワトソンは意識を戻したようだ。

「……あ？へあ？……ッ!!ッ~~~~~!!」

ワトソンは顔を真っ赤にして暴れ出した。

「……ちよつと待つてなく。これで最後か？」

口内から4つ目の暗器を摘出し、開放すると……ワトソンは一気に距離を取った。

「ムムムム、ムラタア!!き、君はなんてことをしたんだい!!貴族の、しかも未婚の淑女の口に!!あ、あんなことを!!」

ワトソンは涙目で俺を睨んだ。

「……ああ、とりあえずこれ着てから話してくれ。」

俺はそう言って☒☒四次元倉庫☒☒から上着を出し、ワトソンに投げ渡した。

ワトソンはゆっくりと自分の姿を確認し……

ビクッ!!

急いで上着を拾い、羽織った。

「ごんな、ごんなに傷物にして……お、お嫁にいけない……。」

ワトソンは俯き、ヒックヒックと嗚咽が漏れ始めた。ワトソンの足元には……ポタリポタリと水滴が落ちて行く……。

……え？ガチ泣き!?

「え？ちよつと待って!!裸になったのは戦闘での結果だし、口に手を入れたのは武装解除のためだからね!」

「……エグツ!!ヒクツ!!」



## 獲物の横取り……

俺は必死にワトソンに謝り倒し、何とか泣き止ませた。

……下手すりゃ訴えられるからな。それだけは勘弁してくれ。

「……で、リサは何処にいるんだ？」

俺を上着で上半身を隠し、女の子座りをしながら涙目で睨むワトソンに聞いた。

「……上にいる。安心してほしい、傷一つついてない。」

「そうかい。」

俺は38式を杖のように使い、立ち上がった。そして、階段の方へ歩きながら、四次元倉庫から実包を2発取り出して装填した。

「……ムラタ、君は聞かないのか？なぜ僕がこんなことをやったのか。」

ワトソンはポツリと言った。

「なんだ、聞いてほしいのか。」

俺がそう言いながら振り向くと……ワトソンはコクリと頷いた。

……確かに気になる。敵はもういないだろうし、いいか。

俺はワトソンの前まで歩き、ドカツと胡坐をかいた。

「何だって男のフリをしてアリアに近づいたんだ。」

俺は頬杖を突きながら言った。

「アリアをワトソン家にいれるためだ。僕と結婚すれば、アリアをワトソン家に入れられる。だから……僕はずっと男として育てられた。」

ワトソンは俯きながら、ゆっくりとしゃべった。

「……そんなのすぐバレるだろうに。アリアの事が好きなら、同性婚ができる国でやりやあいいのによ。」

「……え？」

「……え？」

空気が一気に固まった様な気がする。

「ワトソン、一つ聞いてもいいか？」

「うん、君は何か誤解をしている。」

「……………アリアのことが好きじゃねえのか？もちろんLoveのほうな。俺はワトソンが百合か両刀かどっちかだと思ってたんだが。」

ワトソンの顔はゆっくりと赤くなっていく。

「そ…その、百合か両刀って…………。」

「レズビアンか、バイセクシャルか…………って言えば分かりやすいか？」

…………この反応を見るとやっぱり

「ち、違う!!ば、僕は男装はしていても!!普通の恋愛感情を持つてる!!」

ワトソンは俺の襟首を持ち、揺らしながら叫んだ。

「わ、分かったから止めて…………痛い、メチャクチャ痛いから!!」

握っている拳が傷に当たってるから!!

「…………と、とにかく!!ちようらく凋落傾向にあったワトソン家は、アリアの誕生を知った先々代の当主がホームズ家と密約を結び…………ちようどその冬に生まれる予定だった僕の許嫁にしたんだ。」

ワトソンはそう言っただけの襟首を話した。

「でも、生まれた僕は女子だった。リバティーマイソンの規則では養子は認められなかったから、結婚しかなかったんだ。…………ハハッ」

ワトソンはそう言いながら…………空元気を出すように笑った。

…………それらをやろうとして、両想い（笑）であるキンジが邪魔だったのか。しかし、なぜ俺も狙った？

「なあ、キンジを狙った理由はわかるが…………なんで俺も狙ったんだ。」

「そ、それは…………」

ワトソンは顔をさらに赤くし、俯いた。

「…………トオヤマの次にアリアに近い男だから…………」

…………なんか嘘をついているような気がする。いや、嘘はついてないが本当の理由ではないような気がする。

「本当か？」

俺はワトソンの顔を覗き込んだ。すると、ワトソンは目をそらし、

さらに顔は真っ赤になる。

「ち、近い近い!!」

「は、はあ……?」

ワトソンは両手で俺を無理やり遠のけた。

ちようどその時……作りかけの東京スカイツリーから一望できる世界最大の巨大都市の灯りが、ポツリポツリと消えていく。

「え?」

「……!?!」

その代わりに……俺達の上、第二展望台付近に探照灯の光源のように、激しく発光しているものがある。

俺はメガネさんの言葉が頭によぎった。

『ひ、ヒルダが!!上野で事件を起こしたヒルダが逃げたんです!!』

そして発光体は……ゆっくりと俺達の方へ落ちてきた。

「Watch out!!High!!」

「うるせえ!!逃げるぞ!!」

俺はワトソンの手を取り、抱え走り出した。

俺達の体よりも大きい発光体はゆっくりと落ちて行き、地面に接触した瞬間……

バチバチバチ!!

激しい放電音と共に視界が真っ白になる。

……ヒルダが、~~球電~~球電~~球電~~を使うだ?!

球電とは、空中を発光体が浮遊する自然現象、あるいはその発光体だ。知名度があまりにも低いので、この現象をUFOなどと誤解することがある。メカニズムはわかっていないが、大きなエネルギーを持っている。直撃して死んだ人もいるそうだ。

……そんな事、士官学校での補修の時に雑談で言ってたっけ。

「うわああああ!!」

俺はそんなことを思い出した後、思考を手放した。

時間は戻り、その日の昼時。

葛飾区にある公園前の交番に、角刈りで眉が繋がっている警察官が、あくびをしながらパトロール（笑）から帰ってきた。その警官は求人雑誌を脇に挟み、耳に鉛筆を挟んでいた。警官はそのままの姿でガラガラガラつと交番の扉を開けた。

「戻ったぞく。」

その警官は自分の机にドカツと座り、求人雑誌を開いた。

「ああ、金がない!!……こうなったら新しいバイトを探すぞ!!」

警官はそう言つて鉛筆で雑誌に何かを書き始めた。

「両ちゃんまた?」

婦警が呆れた目でその警官を見ながら言った。

「……先輩、まだ給料日から一週間も経っていませんよ。」

黄色い制服を着た警官も呆れながらそう言った。

ダツダツダツ!!

すると、チヨビ髭を生やした警官が紙を握りしめ、交番に駆け込んできた。

「ぶ、部長?!」

「ゲツ!!部長!」

警官は急いで求人雑誌を背中に隠した。

「りよ、両川!!貴様というやつは……まあいい。今日は大目に見てやろう。」

ちよび髭の警官は、手に持っていた紙を机の上に広げた。

「なんです?これ?」

「皇居前でこの前テロを起こした犯人が……たった今、脱走した!!」

「ええ〜!!」

婦警と黄色の制服の警官は驚いたが……眉毛が繋がっている警官は鼻をほじっていた。

「あんなの公安と軍が血眼になって探すに決まってる。そんなに慌てることはない。」

眉毛つながりの警官は鼻糞をピンツと外へ飛ばした。

「バツカもーろーん!!!」

チヨビ髭警官の怒号が交番に響く。

「貴様はどうして……まあいい。この犯人は近衛師団が捕まえ、警察に引き渡した後、脱走したそうだ。後、言いたくないのだが……両川。」

「なんです?」

「捕まえたら……特別ボーナスが支給されるらしい。」

すると、その言葉を聞いた眉毛つながりの警官は目の色を変えた。

「と、特別ボーナス!?……この女ですわね!!!」

「あ、ああ……。」

「では、市民の平和のため!!パトロールに行つてきます!!」

眉毛つながりの男は自転車に跨り、またがビューンと去っていった。

「……ただ事ではないですね。しかも捕まえれば特別ボーナスだなんて……。」

黄色い制服を着た警官はポツリと言った。

「そんな話、今まで聞いたことがないわ。」

婦警もそう言った。

「警察のメンツがあるからな。警察庁と警視庁に兵部省から抗議文が送られたらしい。」

「うわあ……。」

場所は変わり、東京の某所。

ある一室に、椅子に座り、パイプを啜えながら必死に机にかじりつく将校がいた。

「……全く、面倒なことになったねエ。なんだい？  
HS部隊第1中隊の中隊長になって数日で、こんな大事件が起こるなんて……。少しはこっちの都合も考えてほしいもんだねエ。」

鈴木敬次大佐はボヤキながら、地図にずっと何かを書き込んでいた。「とは言っても……あんな大罪人、放っておくわけにもいかないしねエ……。しかも、まさかあの近衛師団が頭を下げてくるとは思わなかったしねエ……。」

プハア……。……

鈴木大佐はため息交じりの紫煙を吐き出した。

「しかも警視庁が特別ボーナスを出すなんてねエ……。あの両川勘吉を使うってことじゃあない。東京がどうなってもいいってんのかねエ……。」

そして、地図の一部にグルツと円を描いた。

コンコン

「瀬島中佐、入ります。」

ノック音と共に、瀬島中佐の声が聞こえた。

「……入れ。」

鈴木大佐はダラツとした顔を引き締め、襟元を整えた。

「犯人の脱走後について報告しに来ました。」

瀬島中佐は敬礼をしながら言った。

「おいおい瀬島君、そんなに畏まらなくてもいいから。こっちまで緊張しちゃうぜ？」

鈴木大佐は笑いながら言うが……空気はとても重い。

「いえ、性分なので。……この報告書を見てください。」

鈴木大佐は張り付けた笑顔のまま、その報告書を受け取り、読み始めた。

「……………瀬島君、この報告書よくできてるじゃあない。」

「ありがとうございます。」

「だけど、ここまでできるんだから、犯人の居場所や行動くらいすぐわかるだろう?」

鈴木大佐は報告書を机の上に投げ、啞えていたパイプを右手に持ち紫煙をまき散らす。

「……いえ。」

「そうかい?」

そう言つて鈴木大佐はパイプを啞えた。

「本来であれば解説をしたほうがいいとは思うんだけど、時間が無いから……。……奴は深夜、ここに来る。……いや、正確にはここに誘導する。」

そう言つて地図で丸を付けたところに鉛筆の先を置いた。

「しかし……。私達には第2中隊ほどの力はありません。捕まえるのはm……」

「大丈夫だ。当てはある。」

鈴木大佐はスクツと立ち上がった。

「近衛師団を使う。こつちが工作をしておびき寄せるんだ。あとは向こうが勝手にやってくれるさ。」

再び紫煙がまき散らされる。

「ここまで高く喧嘩を売られるなんて、めつたにないぜ? 本当の謀略を奴に教えてやろう。……いや、奴は最期になつても気づかんだらうけど。」

瀬島中佐が全員を呼ぶために退室した。それを確認した鈴木大佐は襟のボタンを外し、だらりと椅子に座つた。

「……。全く。瀬島の野郎は情報収集と分析能力がバカ高いのに、その後がまだできないんだよねエ……。2年、いや3年で使えるようになけりやマズいねエ……。」

鈴木大佐は今まで吸つていたパイプを置き、新しいパイプに煙草を詰め始めた。

「それに第2中隊がいなくて助かつたねエ……。あいつらは何をするかわかつたもんじやないしねエ。全く、給料に対して仕事の量が多

すぎるんだよねエ……。」

シユボ!

鈴木大佐はマッチに火をつけ、そのマッチでパイプに火をつけた。

「……まあいい。日本俺らの最強戦力を叩きつけられて、訳もわからず消えちまえ。」

紫煙を囲まれながら微笑んだ。

俺は数秒気絶していたようだ。

「う、うう……。」

近くには気絶したワトソンがいた。球電の威力で気絶したのだらう。

「おい、起きろ!!」

俺はワトソンを揺さぶった。その時、

チーン!!

☒エレベーターが階に着いた時の音☒が聞こえた。

……チクシヨウ、敵が降りてきたのか!?

エレベーターは確認できただけでも3つはある。例えば、一つエレベーターがぶつ壊れても人や物の移動は普通にできる。

……上から敵が降りてきたのかもしれない。

俺は急いでワトソンをコンクリートで囲まれた部屋に運んだ。

「うう……む、ムラタ?」

「ワトソン、ここで休んでろ。敵が来たかもしれない。」

俺はマル焦げのまま、14年式を取り出した。ワトソンはキョロキョロと周りを見る。

「あ、ありがとう……。そ、それより……アリアとりサは上だ。そこにはヒルダがいる。僕には……二人を連れてきた責任g……。」



「静かにしろ。もう敵はこの階にいる。」

俺はワトソンの口をふさぎ、耳元でささやいた。ワトソンは顔が再び真っ赤になる。

「いいか、ここで休んでろ。」

コクコクコクコク

ワトソンは頭をブンブンと振った。

「じゃあ、行つてくらあ。」

カ…チャン…

俺は音がほとんど出ないようにボルトを引いた。

俺は影の薄くなる技を使い音がしたほうへ向かうと…東京武偵高の制服を着た男がいた。

…こいつ、キンジか？

背格好はまんまキンジなのだが…霧囲気がまるで違う。

俺は念のため、キンジ(?)の後頭部に銃を突きつけ、影の薄くなる技を解いた。

「手を頭の後ろへ置け。」

キンジ(?)はゆっくりと後頭部へ手を置いた。

「よし、ゆっくりこっちへ向け。」

振り向いたその顔は…やっぱりキンジだった。

しかし、霧囲気が全く違う。まるで…どうも寧猛な獅子の様であった。

「なんだ、イブキか。」

そう言ったキンジの目は鋭い。

…念のため、カマかけとくか。

「キンジ、この前俺が奢ったステーキ、うまかったか？」

もちろん、顔面バレー(笑)の授業のあと約束したステーキはまだ奢っていない。

「…イブキ、何を言ってるんだ？まだ奢ってもらってないぞ。」

「なんだ、本当にキンジだったのか。」

俺はそう言いながら14年式を下ろした。

「雰囲気が違うから誰かが変装したのかと思ったぞ。」

俺はそう言いながらエレベーターへ向かう。

「……まあな。……ワトソンは？」

「俺が倒した。」

すると、キンジの雰囲気がさらに険悪になる。まるで……敵討ちかたぎうに  
来たのに、その敵がもう死んでいるような……。

「だけど……」

ビクン!!

キンジはその言葉で反応した。

「アリアトリサは上にいるらしいが……そこにはヒルダがいる。今  
さつき球電が落ちてきた。そんなことができるのは……ヒルダぐら  
いだらう?」

「……わかった。」

キンジの目はさらに鋭くなった。

第二展望台へ行くエレベーターに俺達は乗り込み、さらに上の階へ  
行く。

……ヒルダは自信家だ。奴は指向性対人地雷M18クレイモアや爆弾で一気に倒す  
なんてことはしないだろう。

俺はそう思いながら金属物を全て☒☒四次元倉庫☒☒にいれ、代わり  
に紅槍を出す。

師匠曰く、この紅槍は骨で出来ているそうだ。骨なら電気が通りづ  
らいはずだ。

チーン

第二展望台に着いたようだ。俺達はエレベーターを降り、しばらく歩くと……

「……キンジ、イブキ。」

アリアの声が出た。俺達はその声の方向へ向くと……鉄骨の陰からアリアが出てきた。

「アリア!!」

キンジが声を上げた。

……いや、こいつはアリアじゃねえ。

ワトソンがアリアとリサをここへ置いた時……何かで二人を拘束するに違いない。起きて変な事でもされたら困るからな。

そして、この二つが一番重要なのだが……アリアなのに胸がサラシのような物で抑えられているようで、しかも耳には禍々しいオーラを放つ蝙蝠のピアスがある。

「……理子、何やってんだ?」

ビクツ!!

アリア(偽)はその言葉に反応した。

「……いや、だって胸がなあ。やっぱり理子のその胸でアリアの変装

h……」

「セクハラだよ!!!」

アリア(偽)はそう言った後、ハッと俺達を見る。

「……。」

……ああ、やっぱり理子か。

俺がそう思った瞬間、

バチバチバチ!!!

「「ぐああああああ!!!」」

いなつま  
電が走り、俺達を襲った。

バタタタン!

俺達三人は床に転がることになった。

「理子?何をしくじっているの?」

その言葉と共に現れたのは……ゴスロリ姿の大罪人ヒルダであった。

「理子?お前には私にはない技術と能力があるわ?私はそれを評価

し、お前を遺伝子としてではなく、我がドラキュラ家の次席に取り立てようと思っていたのに……。」

……理子が裏切った!?

俺は理子の目を見た。理子は……ヨロヨロと立ち上がった。

理子の目は……怯えていた。理子は……強制されているのだろう。いや、強制はさせられていなくても、そのような状態で交渉されたのだろう。

「理子、お前はうr……。」

キンジが口を開いたが、俺はそれにかぶせるように言った。

「理子……分かってるだろう？理子がそっちへ行ったら、俺は理子と戦わなきゃいけない。」

俺は紅槍を杖代わりにし、ヨロヨロと立ち上がった。

「俺は理子ともう戦いたくねえ。それに……これ以上そいつといれば、日本にすらいられなくなる。お前だつてわかるだろう？」

俺は紅槍に寄りかかりながら……なんとか立っている。

「理子、もう過去を振り返ることはやめなさい。そのピアスは……ドラキュラ家の正式な臣下の証。外そうとしたりすれば……私が一つ念じれば弾け飛ぶ。そうなれば、中に封じた毒が傷口に入り……10分で死ぬわ。これはうr……。」

「道理で醜いピアスだぜ。テメエのような化け物気取りの小悪党には十分似合う。だけど理子には似合わんなあ。」

俺はヒルダの口上に被せていった。ヒルダは俺を睨む。

ボタン!!

俺は不自然にならないように、ワザと倒れた。

「イブイブ……。」

理子は……無表情の能面を被ったまま、俺に言った。

「理子も……色々考えたんだよ？」

理子は無表情の能面のままだが……目は助けを求めている。

「理子はもともと、怪盗の一族。イブイブたちとは違う……闇に生きる、ブラドやヒルダ側の間人だったんだよ。それがいつの間にかイブイブ達のそばにいた。」

……全く、本心じゃねえくせに。

俺は二人に見えないように銃剣を取り出し、地面にルーン文字とヒエログリフを彫っていく。

理子は……目に涙が浮かんでいた。しかし……理子は気が付いていないのか、無表情の能面をつけたまましゃべる。

「ヒルダは闇の眷属。生まれながらの悪女だよ。でも……自分を貫いてる。ブラドが捕まって、最後のドラキュラ家になったのに……誰の庇護もなく、戦い続けてる。理子よりもずっと自分が何者か分かってる。それに……」

「もういい。」

……仕掛けは終わった。

俺は銃剣をしまい、ゆつくりと紅槍を持って立った。

「そんな表情で言われても……何にも説得力はねえよ。」

俺はゆつくりと理子に近づく。

「それに生まれなんて関係ねえよ。俺のご先祖様は江戸っ子になる前は、新潟で米作ってたつてよ。その末裔が血生臭い軍人やってるんだぜ？一族云々言ったら俺は農業高校に通っているはずだ。」

俺は理子の目を見た。

「あと……そんな目でしゃべるなよ。涙が出てるぞ。」

理子はやつと泣いていることに気が付いたようだ。

「あつ……」

俺は理子の目の前まで歩いた。

「……理子。こんな枷なんていらねえだろ？」

俺は理子の耳についているピアスに触れた。

「……!?な、何故!？」

「対化け物用の結界だ。魔術関係は一切使えねえぞ。」

俺はそう言ってピアスを外し、

グシャ!!

それを踏み潰した。

ブロロロロ……

「どうする？ 枷が外れても……向こうに着くか？」

「……イブイブ、酷いよ。」

理子はそう言って涙をぬぐった。

「死を覚悟してたのに……その決意を無駄にするんだもん。計画が台無しだよ。」

理子はそう言って拳銃を持ち、ヒルダに向けた。しかし、理子の足は……ガタガタと震えている。

ブロロロロ……

「……よく言われるな。」

俺はそう言って紅槍をヒルダに向けた。

ブロロロロ……

「おいおい……俺を忘れるなよ。」

キンジもそう言いながら拳銃を構えた。

ブロロロロ……

「そう……理子、あなたもムシケラと同じなのね。」

ヒルダ挑発的な笑みを浮かべながら棺桶を踏み台にし、

バサッ!!!

大きく羽ばたき、照明をバツクに3mほど飛び上がった。

ブロロロロ!!!

……さつきから何の音だ？

バイクの音のようだが……何故か近づいてきている。

……ここは東京スカイツリーの展望台だぞ？ まさかバイクが来れるわけないしな。

俺は羽ばたいたヒルダに向かって槍を振り上げた。その瞬間、

「オラオラオラアア!!!」

「いたぞ!!あれが犯人だ!!!」

白バイに跨またがった二人組が展望台の外側(!?)から飛び出てきた。

ギャリギャリギャリ!!

「ぎやああああ!!!」

ヒルダは空中で白バイに轢かれ、その白バイの運動エネルギーをもらい地面に激突した。そのままヒルダは何回もバウンドし、鉄骨にぶつかってやっとなまった。

「……………」

俺達三人は……状況が理解できず、固まっていた。

白バイも着地し、任侠漫画の主人公のような運転手が降りると、

「……せ、せんぱうい。こんなことやって大丈夫なんですか?」

いきなりナヨナヨしだした。

……え?本田さん?

本田さんは葛飾署の交通機動隊に所属する白バイ隊員で、よく両川さんの下っ端としてコキ使われている。そしてバイクのハンドルを握ると人格や顔つきが変わり、ヤクザもビックリなぐらい攻撃的になる。

ついでに、時々アクア・エデンのカジノに両川さんが行くときの足にされる。

「亀有金の平和金のため、お前金を逮捕金する!!!」

両川さんは本音をダダ漏れにしながら、白バイから飛び降り、履いていたサンダルを飛ばした。

ヒューーーン!

ベキツ!!

サンダルはヨロヨロと立ち上がろうとしたヒルダの眉間に当たり、ヒルダは転倒した。

ヒューーーン!!

「おりやああああ!!!」

両川さんは一気に距離をつめ、ヒルダと取っ組み合いを始めた。

ヒューーーン!!!

……さつきから聞こえる複数の風切り音はなんだ？まるで爆弾や砲弾が落ちてくる音に似ているが……

俺が疑問に思った瞬間、

ドストドストドス!!!

「ぐえええええ!!!」

「ゴフツ!!」

空から気をつけの姿勢のまま、兵士たちが十数人文字どおり降ってきた。そのうち軍刀を佩いた下士官は両川さんとヒルダの上に勢いよく落ち、二人をクツション替わりにしている。

「ヒヤツハアアアアアアアアア!!!」

「ウヒヤヒヤヒヤ!!!」

「畜生風情ノ化ケ物ガアアアア!!!」

「死ネ、死ネエエエ!!!」

「キィエエエエ!!!」

……まさか、近衛師団!?

ヨロヨロであちこち汚れているが、確かにこの軍服は近衛師団の物だった。

近衛師団の兵たちは、『むしろお前らが吸血鬼じゃねえの?』と思うほど目が充血している。その真つ赤な眼球で獲物を捉えると、一目散にそれに接近していき……

バキ!!ベキ!!グシャ!!ベチャ!!

獲物にひたすら攻撃を加えていく。

「……………」

俺は……開いた口が塞がらなかった。

視線を感じたので、俺はその方向へ向くと……さつきとは違う意味で助けを求める目をした理子がいた。

……ごめん、俺もどうすればいいか分かんねえよ。アニメや漫画なら、ここは俺たち三人が戦って勝利した後、軍や警察が来るもんだろ?

「わしのボーナス!!!」



近衛師団に踏まれ、その後には蹴られて転がってきた両川さんは立ち上がり、近くに置いてあった棺桶を思いつきり投げた。

チユドooooooooon!!

ベキベキベキ!!

あの中身は爆弾だったのかは分からないが、両川さんが投げた棺桶は兵とヒルダのいる場所に着弾し、大爆発を起こした。

「待てえええええ!!!!」

そして両川さんは突撃していった。

「……うん、リサとアリアを探そう。」

「うん……。」

「……ああ。」

俺達三人は現実から目をそらし、当初の目的であるリサとアリアを探した。

二人はすぐに見つかった。俺達は拘束を解き、二人を起こそうと

……

ベキベキベキ……!!!

その時、異様な音と共に床が傾き始めた。

「な、なあ……。」

「おい……嘘だろ?」

「アハハ……。」

ゆっくりとだが……確実に床が傾いている。

「ム、ムラタ!!」

ワトソンが体を引きずりながらやってきた。

「な、何が起こってるんだい!」

「俺も分かんねえよ!!」

……というか、わかりたくもねえよ!!

このやり取りの間、両川さんと近衛師団の戦いは続いている。

ベキベキベキ!!!

「に、逃げるぞ!!」

俺とキンジは気絶リサとしている二人を背負い、エレベーターへ走ったのだが……

「べらんめえ!!この野郎!!」

「クソツ動かないなんて!!」

電気回路が逝かれたのか、エレベーターはウンともスンとも言わない。

俺はエレベーターの扉に手を引っかけ、力任せに引っ張る。

「うおおおお!!」

ドリアンでできた傷口が悲鳴を上げるが無視する。

扉を開けると銃剣を2本取り出し、扉が閉まらないよう、ストツパー代わりにした。

「キンジ!!先に行け!!」

すると、キンジの表情はこわばった。

「……マジでやるのか?」

「それ以外にお前は方法があるのか?」

……俺は方法があるが、お前はできねえだろ?

「……わかった。」

キンジはワイヤーでアリアを背中に固定し、エレベーターのワイヤーにしがみついた。

「うわああああああああああ……」

ベキベキベキ……ギギギギ!!!

キンジの悲鳴が聞こえなくなった時、大きな異音と共に一気に傾き始めた。

……ヤバい!!倒れる!?

俺はベルトのワイヤーを使い、リサを前で固定した。

「……イブイブ、もしかして」

理子は、悟さとった様な顔で俺に聞いた。

「理子は慣れてるし大丈夫だろ？」

ワトソンはこのやり取りを不思議そうに見ていた。

「……………？つてうわあ!!」

「……………やっぱりかあ」

俺はそのワトソンと理子を抱え、エレベーターとは逆方向、真っ暗な闇夜が広がる外側へ走り出した。

「ちよつと、ムラタ!!何するんだい!!」

「うるせえ!!ジタバタすんな!!」

ギギギギ!!

東京スカイツリーは倒れていく。

ダツ!!

俺は3人を抱えたまま、世界最大の巨大<sup>東京</sup>都市の夜空へ飛び出した。

「「うわあああああ!!」」

ズドーーーーーン!!!

俺達の後ろで、とうとうスカイツリーは伐採<sup>倒</sup>されたようだ。

俺達が着地してしばらくすると、サイレンの音が聞こえてきた。警察や消防が来たのだろう。

「こらあああああ!!両川あああああ!!」

「この声は……………大田部長!？」

「ゲエ!!!部長!!!」

近くにいた両川さんはその声で立ち上がり、走って逃げ始めた。

「両川あああああ!!貴様という奴はあああああ!!」

「ゴ、ゴメンナサーーーーーイ!!!」

大田部長と両川さんの鬼ごっこが始まった時、もう一つ声が聞こえた。

「まてええええ理子おおお!!!」

パトカーから体を出し、拡声器で叫んでいる銭形警部がいた。

「げっ!!! 銭形の叔父様!!!」

理子の顔は歪んだ。

「逮捕だああああ!! 理子おおお!!!」

「イブイブ!! 逃げるよ!!!」

「え!? なんで俺もなんだよおおお!!!」

理子は俺の襟首を持ち、走って逃げだした。

「待てええええ!!! 両川あああ!!!」

「待てええええ!!! 理子おおお!!!」

「吸血鬼なんてもうコリゴリだあああ!!! (だよ!!!)」

黒歴史を量産させられるなんて……

俺と理子・両川さんはその後現役の警察官捕まった。そして、多数の警察・消防・軍の皆様の前で説教を受けたのは想像できると思う。

「あの……銭形の叔父様？」

「ん？なんだあ？」

「追いかけた時、逮捕であ〜!! っつて言ってたよね？」

理子はおずおずと銭形警部に聞いた。

「いや、その……昔のクセで……」

銭形警部はそう言いながら頬を指で搔いた。

「クセでそんなこと言わないでくださいよ!!」

俺は思わず叫んだ。

……逮捕と言われて死ぬほど焦ったんだぞ!?

ついでに、スカイツリー<sup>倒</sup>木関連の事故の損害賠償などは両川さんが払うことになった。爆発物(?)の投擲が事故の原因と分かったためである。

「そ、そんなあ〜!!」

「こら両川!! しっかり謝らんか!!!」

ヒルダは警察(両川勘吉)の手によって再逮捕することができた。今は留置所にいるようだが、近々網走監獄に収監されるらしい。……大丈夫だよな。『ある人間がアイヌの金塊の在処を伝えるために、収監された網走監獄で囚人達(ヒルダも含め)の体に金塊の隠し場所を示す入れ墨を彫り、脱獄させた。』なんてことはないよな？

事件の翌日、俺は総務省と法務省の役人にそのことを聞いて、そんな予感がしたのだが……気のせいだろう。

そもそもあんな回復力があるんだ。入れ墨なんて彫れないだろうし……。

事件の数日後、あのドリアンの傷のせいで三角巾を着けているアンビュラス(救護科の脅し付き)俺の目の前で、キンジとワトソンは美味そうに神戸牛のステーキを頬張っていた。

……いいやい、俺のは現役女子高生(メイド)お手製の弁当だい。

「ああ……この炊き込みご飯!!キノコの香りがとてもいい!!まるで秋を食っているようだ!!!」

「イブキ……とうとう狂ったか?」

「……ムラタ、奢ろうか?」

キンジはともかく、ワトソンは本気で心配してきた。

「いや……いいから。……うん、ごめん。」

俺はそう言った後、かぼちやの煮つけを口に入れた。

「……アリアとの婚約は破棄したよ。ワトソン家の事情についてもほとんど話した。」

ワトソンがぼそりと呟くように言った。

「怒らなかつたのか、あいつ?」

キンジはそう言った後、肉汁がしたたり落ちる分厚いステーキを口に入れた。

☒そんな事だろうと思ったわ☒、だそうだよ。ちよつと安心した様な表情にも見えただけど。」

「アリアらしいな」

俺とキンジはそう言った。そして俺は再び炊き込みご飯を頬張った。

……なんか無性にサンマが食いたいな。リサにリクエストしようかな。

「ただ、その……ボクがじよ、じよし……」

「あー、なんだ。ワトソンの家の方は大丈夫なのか？」

……そう言えばキンジはワトソンが女の子であることを知らなかったな。

面倒事を避けるために、俺はワトソンの発言に被せていった。

「うん……向こうはどうするか保留しているらしい。結構問題を起こしたから……どうなるか分からない。」

「そうか……」

空気が重くなった。

……うん、話題を間違えたな。

「ま、何とかなるだろ。ワトソンの能力なら一人でもなんとかなる。」

「そ、そうだね……」

ワトソンの顔も少し明るくなった。

昼食の後、ワトソンが車（まだクラウン）で強襲科アサルトと探偵科インケスタへ送ってくれることになった。

キンジを探偵科インケスタで下ろした後、ワトソンは道端に車を止めた。

「……ん？どうした？」

「その……ムラタ。君は本当にあれだけでいいのか？」

ワトソンは前を向いたまま言った。

「……何の話だ？」

「ボクは……トオヤマとムラタを陰湿おとしに陥れていたのに……謝っただけで君は許した。トオヤマのステーキで手を打つのも罪悪感があつたのに……」

そう言つてワトソンはメーターに視線を落としました。

「そう言われてもなあ……そこまで実害はなかったし……」

……一番きつかったのは、 平賀さんに頼んでいた銃弾 の製造が遅れたぐらいだな。

「そこまで実害が無くて、誠心誠意謝ったんなら……それで許すだろ？」

……これがキンジや武藤・不知火ぐらいだったら、じゃれ合い程度で殴ったり、飯を奢らせたり、無茶ぶりさせたりするが……そこまで親しいわけでもないしなあ。

「でも……ボクを恨んでいるだろう？」

「いや、別に？……これっぽっちもねえぞ。」

俺はそう言っただけでポケットに入っていた8mm南部弾の空薬莖を見せた。

「ダメだ……ダメだ!!ムラタ、何か復讐しろ!!これじゃあボクの気が収まらない!!」

「そう言われてもなあ……」

……意外に面倒な奴だな、こいつ。

俺は考えるポーズを見せ、どうやってこの場を切り上げようか考えた。

「何をしても構わない!!縄で縛って叩いてもいいんだぞ!!……むしろそのぐらいしてくれ!!」

……一瞬、ちらりとココ姉妹を思い出した俺は……悪くないと思う。

「ワトソン……お前、そんな趣味が……」

「え？」

「……え？」

ワトソンはキョトンとした後、一気に真っ赤になった。

「ち、違う!!ボクはいたってノーマルな……って何言わせるんだ!!」

「痛い、痛いから!!拳が傷に当たってるから!!」

「ドMは私達の専売特許ネ!!」

「ポツとでの小娘にはドMキヤラは渡さないネ!!」

……一瞬、ココ姉妹が脳裏に浮かんだのだが……気のせいに違いな



い。

車が再び移動し、選択教科棟の前に止まった。すると、ワトソンが「ついてきてほしい」と言うので、俺はワトソンの後ろをついて行った。

選択教科棟には美術室、音楽室、書道室などが集められた建物だ。芸術系統は武偵高この学生に人気がないのか、いつも人気がない。

「……なんでこんなところ？」

確かに密会するにはうってつけの場所だが……何のために？

「その……」つ頼みがあるんだ。盗人ぬす猛々としいが……。」

「……はい？」

すると、ワトソンは周囲を確認した。

「僕が……女子であることを、誰にも言わないでほしいんだ。」

「いや……別に言うつもりはないぞ。言ったところで誰も信用しないだろうし。」

俺がそう言った瞬間、ワトソンは俺の手を取り走り出した。

「痛い痛い!!なんでケガしている右手とるんだよ!!」

「……あ、ごめん。」

美術準備室に入らされると……ワトソンは扉の鍵を閉めた。

そして……ワトソンはジャケットを脱ぎ、ネクタイを外し、ベルトを外し、靴を脱いだ。

俺と目が合うとワトソンは顔を真っ赤にし

「あつちを向いてる!!」

そう言ってワトソンは背を向けた。

……え？ハニートラップ!?

俺は慌てて窓を開け、脱出しよう……

ザクザク!!

顔の横にククリナイフが2本飛んできた。1本は鍵の部分に刺さって、窓の鍵を壊してるし……。

「に、逃げるな!!ボクの方が逃げ出したい気分なんだ!!」

「だったらやめようぜ!!お互いに利益はないだろ!!」

俺はそう言って銃剣を出し、窓を割ろうとした瞬間、

「こつちを向けムラタ!!撃つぞ!!」

カチャ!!

銃を構えた音が聞こえた。

俺は諦めて、銃剣を持ったままワトソンの方向へ向くと……ワトソンはパンツとシャツだけの姿だった。胸はサラシか何かで抑えていたのだろう。さつきよりも膨らんで見える。

「ボクの父は……男子として生きるように厳しくしつけた。だから……自分が女であることを忘れようと思っていた。」

そう言った後、床に置いてあった紙袋にワトソンは手を伸ばした。

「でも……13か14の頃から……恋愛小説や映画を見るたびに、女性の登場人物に感情移入して……やっぱり自分は女だって感じたんだ。」

ワトソンは純白の下着を出し、背を向けてつけ始めた。

「女性らしさに憧れて、女っぽい仕草をしたことがあるが……幼少期のトラウマが蘇るんだ!……ボクは、まだ怖いんだ。」

ワトソンはそう言った後、深呼吸をし、意を決したようにこつちへ向いた。

「……。」

お互い目を合わせて……固まった。

「その……。」

ワトソンが視線を離した。

「ボクは女らしくなりたい。でも……トラウマで出来ない。だから……ショック療法で!!ば、僕のトラウマを直す。む、ムラタに……その行為を持って償いをしよう……。」

「て、てやんでい!!ダメエは自分の体を大切にしやがれ!!」  
何をやればいいのか理解した俺は思わず叫んだ。

……完全にハニートラップじゃねえか!!しかもトラウマを直したのは本心みたいだから余計にたちが悪い!!

「ムラタ……ひよつとしてボクを気遣っているのか?それは……いいんだ。こんなタイミミングで言うのは最低だが……ボクは、君なら……君が、いいんだ。」

ワトソンはそう言って俯いた。顔は真っ赤になる。

「こういつちやなんだが……会って数日で関係を迫られてみる。どう考えたってハニートラップにしか考えられねえだろ。……ゆっくり、そのトラウマを直せばいいんじゃないか?」

「俺はそう言って壁伝かべづたいにゆっくりと進んでいく。  
壊れていないもう一つの窓から脱出しよう……」

ドスツ!!

出来なかったよ。無事だった窓がまた一つ鍵が壊れた。

「……確かに一理ある。君は軍の暗部に所属していたから……ハニートラップを警戒する気持ちは分かる。」

ワトソンはそう言って、再び紙袋に手を入れ、ガサガサと中を探し始めた。

「……じゃあ、ショック療法じゃなく……リハビリにしよう。」

「……は?」

ワトソンは紙袋から武偵高のセーラー服を出した。

「そう、名付けるなら……~~女~~女の子訓練~~女~~をする。要は……ロールプレイだ。僕が女の子を演じ、君が対応する。」

そう言ってワトソンはセーラー服を着るため、俺から視線を外した。

……今だ!!

俺は~~影~~影の薄くなる技~~影~~を使い、書置きを置いて、バレないように

に扉を開けて逃げ出した。

書置きには

『後日時間がある時に付き合いますので、帰らせてください。』  
と書いておいた。

……チクシヨウ、最初からこれで逃げればよかった!!

数日後、リハビリという名の□□おままごと□□につき合わせられることになったのだが……ワトソンが□□重い女□□だったとは思わなかった。

ワトソン・ハニートラップ事件から幾日か過ぎ、10月30日の金曜日、東京武偵高の文化祭当日。この文化祭は30日・31日が文化祭、11月1日が片付けという日程だそうだ。

文化祭の目玉の一つ、2年生による変装食堂……これが俺の頭痛の種だ。2年生全員にお題が出され、そのお題を完璧に演じないと蘭豹先生か綴先生・南郷先生によるお仕置きが待っているらしい。

しかも、俺のシフトは30日の午前、お題は『ボディビルダー』……最悪の場合、ボコボコにされてから文化祭を楽しむことになる。

俺は憂鬱なまま衣装を着替え、最悪の場合の時のための最終兵器を片手に持ち、閻魔大王蘭豹の待つ審査場へ向かった。

「こんなボロボロの体のボディビルダーがいるかあ!!!」

「ま、待ってください!蘭豹先生!!アピールはまだです!!」

俺がそう言うと、蘭豹の鉄拳が止まった。やっぱりこの変装はダメだったらしい。

……そもそも、『ボディビルダー』の変装なんか短時間でできねえんだよ。

「……ほう、そんな自信満々にいうなんて、なんかあるんか？」

……最終兵器、使うしかないのか。

「はっ!! 必ずや蘭豹先生が満足すると思います!!」

「……見せてみい!!」

「はっ!!」

俺は持ってきた最終兵器<sup>ラジカセ</sup>の電源を入れ、ある音楽を再生した。

チャン、チャチャ〜チャラン♪

ラジカセからは軽快な、今にでも踊りたくなるような音楽が流れる。蘭豹先生はその音楽を聴いた瞬間、目を大きく見開いた。

……よし、情報は本当のようだな!!

俺はその音楽が流れると同時に、黄色のパンツ一丁の姿のまま踊り始めた。蘭豹先生はその踊りを見ると……前のめりで俺を見た。

……蘭豹、テメエが『マツスルボデーは傷がつかぬ!!』の大ファンなのは知ってるんだよ!!

チャチャンチャンチャン♪ 『あゝの子ゝの素敵な大胸筋……♪』  
そう、『マツスルボデーは傷がつかぬ!!』のEDテーマ、『ハツスルマツスルブギ』だ!!

「おお……おおおおお!!」

蘭豹先生は大興奮。周りの審査待ちの生徒たちはドン引き。

……俺はまだ、死にたくねえんだよ!!

俺は必死に、笑顔で一曲踊りきった。

「いやあゝ、村田!! 最高だったわ!! 流石軍隊上がりや!!」

蘭豹先生はご満悦のようで、俺の背中をビシバシと叩く。

……うん、上半身裸だからメチャクチャ痛い。

「イエ……満足シテモラエテ嬉シイデス。」

……ああ、死ぬほど恥ずかしい。

俺は早くその場を切り上げたかった。

「そーや!! 村田!!」

「はゝ。」

「客の前で、それ、踊れ!!」

「……はい？」

同時刻、東京武偵高校門前。

「木曜どうでい、をご覧のみなさんこんばんは、鈴藤です。我々  
はですね……今、東京武偵高校にきています!!」

マスターこと鈴藤は、音野さんの持つビデオカメラの前で笑顔で  
言った。

「今回の企画はですね……前々回、『試験に出るどうでい・日本史編』で  
大変お世話になった東京武偵高校の生徒の皆様にお礼と言っては何  
ですが……美味しい料理を食べてもらおうと思っています。」

プシュー、プシュー

「では、その美味しい料理を作っていたたくシェフを紹介しましょう。  
料理といえばこの方!!シェフ和泉です!!」

「え、皆さんこんにちは、シェフ和泉です。」

鈴藤の紹介の後、シェフ姿に変装した和泉陽司が登場した。

「今日は前回助けてもらった東京武偵高校の皆さんにですね、数々の  
お料理をお見舞いしていきたいと思っています。」

「おい、うまいものとは言わねえから放送できるもの作れよ。」

ディレクターである藤崎がカメラの外から大声で言った。その言  
葉に和泉はムツとし、

「なんですか？あまり余計なことをいうと、あなたからお見舞いしま  
すよっ。」

「まあまあ……くれぐれも恩をあだで返さないようお願いします。」

鈴井も仲裁するように言った。

「いやね、彼らのことを命の恩人だつて言ってるけどね……僕に  
とっては疫病神なんだよ!!試験に出るどうでいあと、ぼかあ東  
京で初舞台があるから安浦と新幹線で向かったんだ。そうしたら、  
乗ってた新幹線がジャックされるは僕と安浦の座席には爆弾がセッ  
トされるわ……。警察に聞いたら、武偵高生徒に仕掛けたはずが、間

違えて俺たちの席にセットしたらしいんだよ!!!銃撃に爆弾に……次は戦車にでも襲われるんじゃないか!?

和泉はそういった後、今度は藤崎を指さした。

「で、その新幹線のチケットを取ったのが藤崎なんだよ!!」

「ジャックが起こるなんてわかるわけねえだろ!!」

「なんだと!!カブトムシ!!うどんの汁替わりに樹液でもかけてなさいよ!!」

「うるせえスズムシ!!」

和泉と藤村の言い合いがヒートアップする。

プシュー、プシュー

「まあまあ、そろそろバッテリーが切れちゃうから……では、今回スペシャルゲストがいます!!黄色い憎いやつ、O u ちゃんです!!」

鈴井の紹介と共に、黄色い着ぐるみが颯爽と飛び出してきた。

『蝦夷テレビのマスコット

安浦さん O u ちゃん』

登場した着ぐるみは軽快に多種多様なポーズをとった。

「いやあくこれがどれだけすごいか!!完全にプロの動きですもの!!」

和泉は興奮しながら紹介した。和泉の言葉に反応してか、着ぐるみはさらに大きく・素早くポーズをする。

「アッハッハッハ!!」

『本日のお品書き』

・サラダ：サケのサラダ

・本日のパスタ：ひき肉と秋野菜のスパゲッティ

・スープ：トムヤンクン風オニオンスープ

・デザート：アツプルパイ』

和泉は『本日のお品書き』が書かれた紙を出した。

「……おい、本当にこんな種類作れるのかよ!!」

藤崎は大声で言った。

「今回は時間が5時間あるということ、多めに……コースで出していろいろと思います。」

そういった後、和泉は意気揚々と料理の説明をした。

「では……我々の恩人、東京武偵高校の生徒の皆さんに会いに行きましよう。」

鈴藤がそう言つて締めた。

「そういうえば、ちゃんとしたキッチンはあるんだろうね。ぼかあくちやんとしたキッチンがないと作らないよ?」

和泉は疑問が生じ、聞いてきた。

「大丈夫です!!和泉さんには東京武偵高校恒例、『武偵高料理対決』に出場してもらいます!!そちら、最近多額の寄付があつたよう設備は充実しているそうです!!許可もとっています!!」

藤崎さんは相変わらぬ大声で説明した。

「よおうくし、お見舞いするぞおく。」

和泉は堂々と東京武偵高校の校門をくぐつた。それに続き黄色い着ぐるみも校門をくぐろうと……

「あ、安浦君、ちよつと待って。……君には特別な衣装があるから。」

藤崎は着ぐるみに待つたをかけた。

「……はい?」

15分後、リストランテ・マスケ変装食堂内

「……あの、なんでこれ着るんですか?」

安浦はローブ姿でテーブル席に座っていた。

「村田君がなんでも☒とある☒「スプレをしなければいけないみたいなので、その応援をしてもらおうと思います。」

藤崎は相変わらぬ大声で説明した。

「安浦、何着たんだ?」

和泉は不思議そうに聞く。

「まあまあ……それは後のお楽しみということ……。」

「それにしてもかわいい子が多いじゃない。」

鈴藤は嬉しそうにそう言う。



「おい、奥さんにどやされるぞ。」

和泉はジト目で注意すると

「アハハハ……」

鈴藤は笑いながらごまかした。

「そもそも……」

テーブル内で話は弾んでいく……

同時刻、リストランテ・マスケ変装食堂内・別テーブル

「あの……村田さんに一言伝えなくてよかったのでしょうか……。」

「大丈夫よ、オレンジペコ。これはサプライズです。」

そう言ってダーズリンは紅茶を飲む。

「……あら、いい茶葉使ってますわね。」

「あ、そのこのシート被ってる人、チャーハン大盛を追加で!!……ですわ。」

ローズヒップの注文に、「フケイデアルゾ」といった後、メジエドは厨房へ向かった。

数分後、メジエドは大盛のチャーハンを持ってきた。

「ありがとうございます!!……ですわ!!」

ローズヒップはそういった後、チャーハンを掻き込む。

「あら、意外とパラパラでうまい!!……おいしいでございますわ。」

「今回は恩人のイブキさんに美味しい手作りの料理を食べてもらおうと思っているの。だから二人にも来てもらったわ。」

「ですが……本当にここに村田さんはいるんですか?」

オレンジペコは不思議そうに聞く。

「ええ……アツサムが身を粉にして調べてたのよ?」

「……アツサム様、ご愁傷さまです。」

「……(ガツガツムシヤムシヤ)」

チャン、チャチャ〜チャラン♪

ちょうどその時、食堂内に軽快な音楽が爆音で流れ始めた。

「!?」

「……（ガツガツムシヤムシヤ）」

食堂内の明かりが必要最低限まで消え、その代わり食堂内の舞台にスポットライトが……

タツタツタツタツタ!!

そして、舞台に黄色いパンツ一丁の青年が小走りでてきた。

「……。」

「？」

チャチャンチャン♪ 『あゝの子ゝの素敵な大胸筋……♪』  
なんと!! その黄色いパンツ一丁の青年はその、音楽とともに踊りだした!!!

「む、村田さん!?（イブキさん!?）」

「……? おおゝ!!」

「アツハツハツハツハ!!」

違うテーブルから爆笑が聞こえる。その爆笑するテーブルにいるローブ姿の男はローブを脱ぎ、同じ黄色のパンツ一丁の姿になった後、舞台へ駆けあがり一緒に踊り始めた。

「……村田さん。何やってるんですか？」

思わずオレンジペコは呟いた。

「……カッコイイ」

「ダージリン様!?!」

ゲテモノじゃないはず……

俺が『ハッスルマツスルブギ』をリストランテ・マスケ変装食堂の舞台で踊っていると……安浦さんが同じ格好で一緒に踊り始めた。

「「おおおおお!!」」

蘭豹先生とごく一部の男子生徒は大興奮。

……今こいつらに銃弾当てても、きつと笑って許すだろうな。

そこまでの大興奮。一部生徒は暴動にならないように監視までしている……。

ひとしきり踊り終わった後、

「Thank you, Brother。」

安浦さんはそう言っつてハイタッチを求めてきた。

「OK, Brother。」

パン!

俺はそう言っつてハイタッチをすると……

「「「キャー!!!」」」

大興奮していた一部に加え、女子の一部も一緒に叫んだ。

「冬コミのネタは決まったわね!!」

「まさか村田×安浦なんて……」

「安浦×村田かもしれないわよ!!」

そんなことを話している女子の前に、きんこつりゆうりゆう筋骨隆々な男子生徒10数人が立ちはだかった。

「俺達はBLには全く興味はないが……今のを作品にするのなら協力する。」

「ああ……まさか、『マッスルボデーは傷がつかぬ!!』の方が出るなんて……」

「筋肉のためなら力を貸すぞ!!」

「ああ……筋肉のためだ!!なんだってする!!」

ムキムキムキ!!

そして、男子生徒は女子たちの前でボディビルのポーズを取った。  
「……確かに、私達はあんな筋肉を描いたことはない……リアルさに欠けるわ。」

「しよがないわね……今回だけよ!!」

ガシツ!!

女子と男子が堅い握手を交わした。

このことにより、男子ボディビル愛好家達と女子BL愛好家達による謎の共闘がはじまるのだが……蛇足なのでここまでにして置く。

さて、大好評(ごく一部)だった『ハツスルマツスルブギ』が終わり、俺は13時まで必死に接客に勤めていた。

その時、蝦夷テレビの皆さん、ダージリン達に会ったのは驚いた。

「勇者の登場です!!」

「アツハツハツハ!!」

「色々言いたいことあるんですが……とりあえずケーキ10個、シュークリーム20個、ぜんざい5杯、まんじゅう20個、コーヒ―5杯……本当にこれでいいんですか?」

「大丈夫大丈夫!!全部この魔人が食べるから!!」

「え?何言ってるんですか?」

「……え?」

しかも全部食べ終わった後、うどんと大福・まんじゅうを注文するディレクターがいたのかなんとか……。

「イブキさん!!」

「村田さん!!」

ダージリンとローズヒップはキラキラした瞳で俺を見ながら言った。

「とてもかっこよかったです!!」

……マジか。

「え……うん……あ、ありがとう。」

「写真撮ってもいいですかでございます!？」

ローズヒップはそう言ってスマホを構えて自撮りをしようとした。

「ローズヒップ、撮ってあげるわ!!」

「ダージリン様!!」

ダージリンはそう言ってローズヒップのスマホを奪うように取った。ローズヒップはその言葉に感激したあと、俺に抱き着いてピースを取った。

「はい、チーズ!!」

パシャツ!!

……某ネズミーランドのネツズミーの中の人はこんな気持ちなんだな。

ダージリンが数枚写真を撮った後、

「次は私ね!!」

そうやって俺に抱き着いてきた。

「ダージリン様!!あたしが!!……わたくしが撮って差し上げるですわ!!」

そう言ってダージリンのスマホをもらい、10枚20枚とっていくローズヒップ……。

二人から解放されると、今度はオレンジペコに掴まった。

「村田さん……何があつたんですか?」

「うん……この変装食堂の変装は……」

俺は事の顛末<sup>てんまつ</sup>を伝えると……

「村田さん……愁傷様です。……何か食べます?」

俺は……オレンジペコの慈悲の表情と優しさに感無量だった。

「あ、ありがとう……ありがとう……。」

「え……む、村田さん!!ちよ、泣かないで!!」

俺はオレンジペコの手を両手で握り……涙が出てきた。

「…………(ギロツ)!!!」

「!!」「アツハツハツ!!!」「!!」

「む、村田さん!!ちよ、ちよつと落ち着いてください!!!」

「グスツ!!!」

その後、はやてとウォルケンリッター、高町一家と月村姉妹・アリサちゃんたちにも接客をすることになった。

「はあ……やつと終わった。」

13時過ぎ、俺はやつと解放された。

普通の生徒はもう少し長いのだが……転校生・中途転入生は勝手がわからないだろうと短めにシフトが組まれるのが伝統だそうで……。

「お疲れ様です」

俺はそう言つて更衣室へ撤退しようとする……

「おい、村田あ!!」

蘭豹先生に掴まってしまった。

……また変な事やらされるんじゃないやねえだろうな

「はい!!」

俺はそう思いながら返事をする……

「お前、料理できたよなあ?」

……厨房でもやらされるのかな?

「ある程度の料理はできます!!」

「この後、暇だったよなあ?」

「はっ!!この後シフトは入ってません!!」

……家族と一緒に回ろうと思つてたのに。

『料理対決』に欠員が出てなあ……出るはずの田口と渡辺が病院送り

になったんや。」

……ん？昨日その田口君・渡辺君は蘭豹にしごかれていたよなあ？

「村田、お前、『料理対決』に出ろや!!」

「……は？」

ドドーン!!

「始まりました。『東京武偵高校料理対決』実況は私、中空知美咲と……」

「うむ!!この至高の芸術家にして、最高の料理人たる余が!!実況するぞ!!」

実況席には中空知さんの写真とネロがいた。

「解説者には……現役メイドで『提督』のリサさんです。」

「は、はい!!よろしくお願いします!!」

中空知さんの言葉に、リサは上ずった声で敬礼をした。

……緊張しているんだろうなあ。左右逆だし。陸式だし。

「では今回の選手たちを紹介しましょう。」

「うむ!!まずは一人目!!『小学生なれど腕は一流：八神はやて』だ!!」

ネロの言葉と共にプシューと入場門に白煙吹き出し、はやてとその車椅子を押すシグナムが入場した。

「よ、よろしゅうお願いします。」

はやてはそう言っておずおずとお辞儀しぎをした。

「うむ!!はやては余と張り合いができるほど料理が美味であるからな!!余も楽しみだ!!」

「そうですね。はやて様もリサの料理をすぐ覚えてもらえるので……教えるほうも楽しいです。」

ネロとリサははやての料理が楽しみのようだ。

「さて、もう一人の一般枠『お嬢様学校は伊達<sup>だて</sup>じゃない・田尻凜』さんです。」

プシュー!!

「……ダーズリンですわ。」

「ん？余の紙には田尻凜と書かれているが……」

「ダーズリンですわ!!」

「……ハイ」

……す、すごい威圧。

「……ダーズリンさんの出身は聖グロリアーナ女学院という事で、英国風の校風を持つそうです。」

中空知さんがそう言う……

「イギリスですか……イギリス料理はまずいと有名ですが……おいしい物もあるので期待ですね。」

リサは笑顔のまま……あれ？笑顔が硬い。

「次は教師枠『強襲<sup>アサルト</sup>科の頼れる姉御：スカサハ』先生です!!」

プシュー!!

「ふむ、たまにはこういうのも悪くないな。」

師匠は長そでのセーターにエプロン、ポニーテール姿で出てきた。

「「おおおお!!」」

一部男子による歓声が上がった。うん……確かにあの格好はグツとくる。

「余はスカサハが料理をしたところは見たことがない。どれほどの腕前だ？」

ネロは不思議そうにリサに聞いた。

「リサも……見たことがないので……。」

……俺は師匠との山籠もりの時に一回だけ食べたことがあるが、栄



養重視だったつけ。

「うむ、次は生徒枠『死なない男・村田維吹』だ!!」

プシュー!!

……俺の番か。この二つ名はやめて欲しい。

俺は門をくぐると……おい、音野さんがカメラ構えてるよ。放送できるもの作らないと……。

「よろしくお願いします。」

俺はそう言っただけでボディビルのポーズを取った。(まだこの役はやらなければならぬらしい)

「情報によると……料理は上手いのですが、時々ゲテモノが入るとあるのですが……。」

「う、うむ……。時々……時々ではあるな。しかもゲテモノと気づいてない場合が多くて……な。」

中空知さんの言葉にネロは……テンションをだいぶ落としていた。

「そうなんですか?」

リサは不思議そうに言った。

……あれ?ゲテモノなんて入れてたつけ?そう言えばリサが来てから料理はしてないな。

「最後にまさかの特別ゲストが登場です。『北海道のアイドル：シエフ・和泉陽司』さんです。」

プシュー!!!

「いらっしやいまほ。今回はですね、審査員の皆さんにお見舞いしようと思います!!……打ち抜くぞおお!!」

「「「「うおおおお!!」」」」

和泉さんの言葉に大歓声が上がった。

「えくと……『和泉陽司さんは北海道を代表する超大物お笑い芸人』だ

「そうだ!!」

ネロが自信満々に言った。

「ちよつと待つて!!ばかあ俳優だ!!タレントだ!!」

「……え? そうなの?」

「では審査員の紹介です。強襲科アサルトよりベオウルフ先生」

「おう!!美味しい物を期待してるぜ!!」

ベオウルフはそう言つて両手を上げた。

「装備科アムドの絶対的権威、エジソンだ!!」

「トーマス・アルバ・エジソンである!!!顔のことは気にするな!!!」

エジソンはその顔で咆哮ほうこうした。

「生徒からは遠山君と峰さんです。」

「……よろしく願ひします。」

キンジは死んだ魚の目で挨拶をした。

「……あれ? キンジは17時までのシフトだったような。」

「イエーイ!!みんなの理子りんだよ!!」

「!!!理子りーん!!!」

理子の挨拶と共に声援が沸き上がった。

「そして特別ゲスト、蝦夷テレビ『木曜どうでい』より鈴藤さん、藤崎さん、音野さんである!!」

「いや〜……緊張するなあ〜」

「アツハツハツハ!!」

「……。 (ビデオカメラを構えながらサムズアップ)」

「……ああ、やっぱりこの人達が出るのか。」

「では特別ゲスト☒☒シェフ・和泉☒☒さん。意気込みをお願いします。」  
中空知さんの声が聞こえた。

……中空知さんはどこにいるんだろう？

俺は周りを見渡したが……どこにもいそうにない。

「ええ……本来はですねえ……」

和泉さんはそう言っつてポケットから紙を取り出した。その紙には『本日のお品書き』と書かれていた。

「僕たちを助けてくれた武偵高の皆さんに、ここに書いてある美味しい料理を……っつて聞いてたんですけどねえ。……村田君!!」

「は、はい!？」

なんで俺を呼んだ!？」

「何だっつて君は作る側なんだよお!!おかしいじゃない!!」

「いやいやいや!!俺だっつて急遽きゆうきよ代役で出ることになったんですよ!!」

「そもそもだねえ……」

「さて、それではルールを説明します。」

中空知さんは和泉さんのコメントを無理やり切った。

「うむ!!今回何を作っても、どれだけ作っても構わぬ!!そこにある食材を使い!!5時間以内に作るように!!」

「そこにはない食材も1年生たちが買える範囲であれば大丈夫です。」

ネロが指さした場所には、大量の食材と10人ほどの1年生たちがポーズをとっていた。

「では始めるとしよう!!」

「そうしましょう。」

「プレイボール!!」

ドワ~~~~ン!!

大きな銅鑼どらの音が高らかに響き渡った。

俺は肉が置いてあるところへ向かったのだが……お目当ての物が  
ない。

「お〜い、一年生。早速仕事だ。」

「は、はい!!」

すると丸刈りの男の子が走ってやってきた。

「……………を買ってきてくれないか？」

「……………え？」

一年坊主の顔は引きつった。

……………そんな変なものか？

「もう一回言おうか？……………を買ってきてくれ。」

「……………マジですか？」

「…そんな変な食材か？」

「いえ……………買ってきます。」

そう言って一年坊主は走っていった。

……………とりあえず、パパツと作っちゃおうか。

俺はキュウリを薄切りにし、トマトを茹で始めた。

「あら、パイ生地がありませんわ。」

ダーズリンが食材置き場でそうつぶやいた。

「……………ん？なんだいお嬢ちゃん、パイ生地が欲しいのかい？」

すると鮭サケの解体に悪戦苦闘していた和泉さんが声を上げた。

「え、ええ……………パイ生地が無いと作れない料理で……………」

すると和泉さんは何処からか、ビニールに入った生地を出した。

「僕と同級生にイタリアンのシェフがいてねえ……………。彼に頼み込んで  
パイ生地を練ねってもらったんだ。」

「……………おおく……………」

会場に驚きの声が出る。

「これをお嬢ちゃんに分けてあげよう。」

「あら、ありがとうございます。シェフ。」

ダーズリンはにつこりと笑うと……………

「いやあく、照れちゃうなあ〜……」  
「……おい、おっさん。」

そしてダージリンはパイ生地とニシン、サンマ、数種類の野菜を持って、自分のキッチンへ向かった。

……あれ？　そう言えばパイ生地って練らないような？

「あ、あの……。」

「ん？　どうしたのだ？」

解説のリサがおずおずと声を出した。

「パイ生地って練らないような……。」

「ん？　そうなのか？」

ネロは不思議そうに聞いた。

「そうですね。パイ生地は折り込み製法を用いて作られるそうです。」

今度は中空知さんの声が会場に響き渡る。

「ああ、これはですねえ、彼に直接頼んだ特注品なんですよ!!　イタリア風のパイ生地です!!」

和泉さんが堂々と言った。

「え……イタリアでもそんなものは……どちらかと言うとフランス……。」

「君はちゃんとした料理を知っているのかい!?　ぼかあね、大学時代に……。」

リサの言葉を無理やり切り、長々とした和泉さんの話が始まったのだが……カットする。

さて、俺はキュウリを薄切りにし、トマトの湯むきを終え、三杯酢を作り終えた。ちょうどその時、買い物に行って来てくれた一年坊主が戻ってきた。

「ハアハアハア……買って、来ました。」

「ありがとう。そこで休んでいていいよ。」

俺は袋を持って舞台袖へ行く。

「「「「?」」」」

バキ!!バキ!!メリメリ……

「村田さんは袋を持って行った後、何やら音がするのですが……どうしたのでしょいか。」

中空知さんが不思議そうに聞いた。

「……ああ、最初から出すのだな。」

そう言ってネロは右手で頭を押さえ、倒れるように座った。

「い、イブキ様に何が起こってるんですか!?!」

リサは慌てて聞いた。

「大丈夫だ。あとでわかる。……頭痛薬は持っておらぬか?」

「え!?!あ、はい……。」

「村田さんが戻ってきました。手には……ウナギ?でしょうか……」

……さて、解体が終わった。これは骨が多いからな。

俺はそう言って骨切り包丁を使ってハモのように切っていく。

切り終わった後、串を刺し、ウナギのように焼いていく。焼き終わった後、タレに付け、細かく切る。

そして、小鉢に薄切りキュウリとトマト、焼いた $\square$ アレ $\square$ を盛りつけ、三杯酢をぶっかけた。

「できました!!」

「最初の一品目は村田選手からです!!」

「ああ……できてしまったか……。」

……なんでネロは頭を押さえてるんだ?

「おお!!これは何ですか!?!」

俺が審査員の人達一人一人に小鉢を渡していると、藤崎さん(蝦夷テレビディレクター)が聞いてきた。

「ああ、ウナギを使わない☒☒うざく☒☒です!!……最近ウナギは高いですからね。これを使えば安くて美味しいですよ!!しかも☒☒うざく☒☒はパパッとできますからね。」

すると藤崎さんは真顔に戻り……

「……で、何を使ったんですか?」

「まあ……それは食べてからののお楽しみという事で……。」

全員に小鉢が行き渡り、試食が始まった。

「☒☒「ほおく……」☒☒」

「白身魚……と言うか鳥のササミに近い?」

「まあ……これはこれで……。」

「骨は多いけど切つてあるから食えるな。」

この☒☒うざく☒☒は好評なようだ。

全員が小鉢を食べ終わった。

「村田さん、ウナギの代わりに使った物を教えてください。」

中空知さんの声が聞こえた。

「はい、これはアオダイショウ。……アオダイショウの☒☒うざく☒☒です!!」

俺が高らかに宣言した。

シーン……

……あ、あれ?

「……に、日本ってへビも食べるんですね。初めて知りました。」

「いえ……食べません。」

リサの言葉を中空知さんが否定した。

「え?……食べないの?」

俺は思わず言った。

「☒☒「食べねえよ(ないよ)!!!」☒☒」

……おっかしいなあ? 訓練中に獲れるジビエの中で高級の部類だったんだが?

その後、散々文句を言われて意気消沈し、渋々キッチンに戻った。  
「お主……初心者にへビはきつかるう?」

師匠が寸胴鍋を煮込みながら言った。

「そうですねえ?……へビなんて爬虫類ほうちゆうるいの中でも高級品なのに……」

「そうか……どこかで間違えたか……」

「なんか言いました?」

「いや……」

そう言つて師匠は大きなため息をついた。

……なんかおかしい事言つたか?

さて、俺が再び食材選びを始めると……

「あの……グラタン皿は何処かしら?」

ダーズリンはキッチンの戸棚を必死に探していた。

「はい!!ここにあります!!」

一年の少女はダーズリンに駆け寄り、皿を出した。

「あら、ここにあったの?ありがとう。」

「……!!はい!!」

そしてパイ生地をそのグラタン皿に敷き、具と魚をつめた後……

「あの……私、オーブンを使ったことが無いの。どう使うのかしら?」

いきなり不安な言葉を言った。

……おい、大丈夫か?

その後、ダーズリンはオーブンの使い方を教わった後、余熱をせずにパイを焼き始めた。

俺はフグを取り、さばいている時……



チーン!!

トースターの音が会場に響いた。ダージリンはトースターからトーストを出し、何かを塗った後、皿に違う何かとトーストを盛り……

「できましたわ!!」

堂々と宣言した。

「ダージリンさん、一品目の完成です。」

中空知さんの声が再び響いた。

「うむ……何故かあれも食欲がわかぬ……。」

ネロは再び頭に手を当てた。

審査員にそれと紅茶が行き渡り、食すると……

「俺は好きだけよ……癖があるしなあ……」

「元宗主国の料理か……」

「……人によつては上手いだろうな。」

「帰りたいよう……」

「うん……ワカサギの活造りに比べたら……まだ……。」

「和泉さん以上の物があるなんて……」

審査員たちのハイライトは一人（ベオウルフ）を除き、消えていった。

「ゴフツ……だ、ダージリンさん……この料理は……」

中空知さんは何かを吐いた様な音がした後、この料理を聞いた。

「イングリッシュ・ブレックファスト……ベーコンエッグとブラックプディング、マーマイトを塗ったトーストですわ!!……お昼を食べてないと思つて手間をかけた料理ではないの……ごめんなさい。」

シー……

ダージリンの料理にはコメントはそれ以上出なかった。

ダージリンは小首をかしげ、キッチンへ戻った。

「今度は村田さん、ふぐ刺しでしようか。」

俺がフグを捌いているのを、中空知さんは目ざとく見つけた。

「うむ!!あれは美味いからな!!楽しみである!!」

一食も食べてないネロはヨダレを垂らしながら言った。

俺は盛り終わった後、茶碗にご飯を大量に盛った。

「「「「おおおお!!」」」」

俺はふぐ刺しを一切れポン酢につけ口に放ると…………ご飯を掻き込んだ。

「「「「………… (ゴクツ!!)」」」」

俺は再び一切れつまみ、ポン酢につけて食べる。

「…………あの、村田さん。」

「…なんです?」

中空知さんの質問に、俺はご飯を掻き込みながら答えた。

「そのふぐ刺しは…………」

「ああ…………俺の昼飯です。」

「「「「昼飯!?!」」」」

審査員たちは目をひん剥き、叫んだ。

「え?…………いや、俺まだ昼食ってないんで。簡単に済まそうと…………」

「それを出しなさいよ!!アオダイショウじゃなくてさあ!!!」

藤崎さんは泣きながら叫んだ。

「いや…………俺は『普通フグ調理師免許』しかないんで。二親等までにしか食べさせられないんで。」

俺はそう言って美味そうにふぐ刺しを平らげた。

…………流石に法律違反は犯したくないしなあ。

審査員たちは血の涙を流しながら、このふぐ刺しを見ていた。何故だろう…………。

俺が~~が~~まかない~~の~~ふぐ刺しを食べ終わった後、カラカラカラ…………と揚げ物のいい音が聞こえた。

「ふんふんふーん♪」

はやては鼻歌を歌いながら揚げ物をしていた。会場に揚げ物のいい匂いが広がっていく。

はやては揚げ物をしながら、キャベツの千切りをし、その後鍋に味噌を溶き始めた

グウ……

誰かの腹が鳴った。

はやては揚げ物を新聞紙が敷かれたバットに入れ、入れ終わると漬物を切り出した。

「出来た!!」

はやては堂々と宣言した。

審査員の前には、はやて特製の定食が広がっていた。

「お腹空いてると思うて、すぐできる物にしたんやけど……品数が少なくなってしまうました。ごめんなさい。」

はやては申し訳なさそうに審査員たちに言う。

「何言ってるんだ!!」

「これほど旨そうなものはない!!」

「あんなへびにゴミを食わされたんだ!!そんなのに比べれば……」

「おい、キンジ。今度はマムシの丸焼き食わせるぞ」

俺は思わず言った。

……マムシの丸焼きに比べたら☒☒うざく☒☒ほげテモノじゃねえだろうが!!

「「「「いただきます!!」」」」

審査員たちはそう言つて、ガツガツと定食を食べ始めた。

「うめえ!!……うめえ!!」

「ああ……やつと美味しいものが食べられる……」

「ああ……これが☒☒おふくろの味☒☒かあ……」

「……………(必死に掻き込む)」

「唐揚げがカラッと揚がっていてとてもおいしいですね。これは  
☒シエフ・和泉☒にはできないですね。」

「これは美味しいよ。」

ベオウルフ、エジソン、キンジに理子、鈴藤さん、音野さんに大好  
評のようだ。

「……グスツ。……うう」

藤崎さんに至っては涙を押し殺し、おえっ嗚咽が漏れている。

「あ、あの……どうしたんですか？」

鈴藤さんは、泣き出した藤崎さんに声をかけた。

「み、味噌汁が……お袋の味そっくりなんです……」

そう言って藤崎さんはメガネを取り、涙をぬぐった。

「名古屋出身と聞いたんで、藤崎さんのだけ八丁味噌の味噌汁にさせ  
てもろうたんです。」

はやては申し訳なさそうに言った。

!!!  
……はやて、出身まで調べて味を変えるなんて。なんて恐ろしい子

俺ははやてに戦慄を覚えた。

「たまには実家……帰ろうかな……」

藤崎さんのひそや呟きは会場に響き渡った。

おいパイ食わねえか……

「もう、はやてちゃんが優勝でいいんじゃない？あいつの料理は食いたきやねえよ!!!」

藤崎さんは大声で言った。

「おい!!カブトムシ!!お前からお見舞いするぞ!!」

和泉はその言葉を聞き、指を藤崎さんに指して反論する。

反論する和泉さんの鮭は……ぐちゃぐちゃサクになっっている。

……あれ、食いものか？

「お前そんな物食わす気かよ!!」

「これが料理でしょ!!つべこべ言っていないで黙って待つてなさいよ!!あんたからまずお見舞いしてやるから!!」

藤崎さんと和泉さんの口喧嘩はどんどんヒートアップしていく。

「これどう考えても人が食うもんじゃねえだろ!」

「うるせえな!!最初の見た目はどんな料理だってこんなもんなんだよ!!」

「まあまああ!!」

鈴藤さんがやっと間に入った。

「藤崎は味が分からない男ですから!!」

「……出してもいいか?」

師匠は呆れながら言った。

「スカサハ先生、料理が出来上がったようです。」

中空知さんの声が会場に響き渡った。

審査員たちの前にはシチューとマッシュポテト、薄い黄金色の水が配られた。

「アイリッシュシチューとマッシュポテト、蜂蜜酒の水割りだ。生徒の分は蜂蜜を薄めたものだ。」

師匠は☒☒ムフー☒☒とでも言うように、豊満な胸を張って言った。

「……いただきます。」

審査員とネロ、リサはスプーンを取り、シチューを啜った。

「ああ……うめえ……。」↑ベオウルフ

「おかしいな。目から水が……。」↑エジソン

「シチューってこんなに美味いんだ。」↑キンジ

「やつと美味しいものが食べれるよお……。」↑理子

「いやあくここまで美味しいスープは初めてです。」↑鈴藤

「これはうまいですなあ!!この蜂蜜酒もまた!!(グビグビ……)」↑  
藤崎

「うまいなあ……。」↑音野

審査員たちは大絶賛。藤崎さんに至っては、蜂蜜酒を5〜6杯は飲んで  
いる。

……こいつあ負けたくねえな。

俺の闘志に火が付いた。

俺は鮭<sup>サケ</sup>や他の魚を大量に持ってくる、三枚におろし、あらを大鍋  
に全て放り入れた。

その時、チラリと横を見ると……何とか鮭<sup>サケ</sup>を解体(骨とゴミのほう  
が正しいか?)した和泉さんがいた。

「和泉さん。その鮭<sup>サケ</sup>の骨使いますか?」

「ん、何だい?敵から食材を奪おうってのかい!」

和泉さんの手には……湯向きされたトマトがあった。

……あれ?和泉さんは鮭<sup>サケ</sup>の解体にかかりつきりで、湯向きする時間  
はなかったような。

俺は自分のキッチンを見渡すと……『うざく』の時に使った湯向き  
トマトがない。

「い、和泉さん!!あんた俺のトマト盗っただろ!!」

「な、なにを言ってるんだい!!なんの証拠があつて……」

「音野さんが証拠を撮ってたんだよ!!」

V T R

……  
村田君が魚を捕りに行っている間に、トマトを盗む和泉陽司の姿が

「まあまあまあ!! 鮭の骨あげるから!!」

「せめて一言言ってくださいよ!!」

……あのトマト、使うつもりだったのに。

俺は鮭の骨を受け取ると、流水でくつついている鱗を落とし、これも大鍋にぶち込んだ。

その大鍋を煮ている間に、醤油と砂糖を入れた小鍋に火をかけた。そのまま数分、野菜を切って待っていると小鍋が煮立つ。

煮立った小鍋に三枚におろした身の一部を入れてそのまま待つと……魚は美味しい具合に煮あがった。

煮あがった魚を皿に盛り、煮汁に大根おろしを入れ、温まったらその大根おろしを魚の上にかける。

「できた!!」

俺と和泉さんは同時にできたようだ。

審査員の目の前には、煮魚と……鮭のほぐし(?)が乗ったサラダが置かれた。

「うむ……イブキのはともかく……これは……。」

ネロの目のハイライトがゆっくりと消えていく……。

「あの……シエフ・和泉? これは一体……。」

中空知さんは思わず聞いた。

「こちら、『鮭のサラダ』でございます!!」

和泉さんは堂々と胸を張って言った。

「おい……。」

「なんでしよらう?」

「おめえ、一品にどんぐらい時間かけてんだよ!!」

藤崎さんは怒鳴る。

「僕が料理に時間がかかることぐらいわかってるでしょ!!そもそもこのサケだ!!普通は捌さばかれてあるつてのに……なんだい!?丸々一匹捌さばかなきやいけないつてのがおかしいんだよ!!ただでさえ時間がかかるつてのに、捌さばくのにも時間がかかるんだから!!」

「え?……そこまで時間かかりませんか?」

俺は和泉さんの言葉に思わず反応すると……

「君のように特別な訓練は受けてないんだよ!!」

「いやいやいや!!俺は普通ですから!!」

シーン……

……え?

「俺……普通ですよね。」

「」「」「……。」「」

「できた!!」

はやても料理が出来上がったようだ。

審査員の前には『俺の煮卸におろし』、『和泉さんのサラダ』、そしてはやて作『きんぴら&ひじきの煮物、キュウリとワカメの酢の物』が……

「さっきのが重かったので、軽い物と思うて作りました。」

はやては満面の笑みで言った。

……うん、可愛い。

「うむ……とりあえず食べるぞ……。」

ネロの顔は……暗い。

「……覚悟を決めましょう。どうせ鮭サメられないんですから（ダジャレ）。」

シーン……

鈴藤さんの言葉に、全員言葉を失った。ダジャレが面白くなかったのか、それとも現実を目の当たりにしたからか……。



「……毒を食らわば皿までだ!!」

そう言つてベオウルフは和泉さんのサラダを一気に口へ流し込んだ。

……意味は間違えてるけど、ある意味あつてるな。

その様子を見ていた他の審査員たちも意を決し、サラダを口に入れる。

「……ここまでののは久しぶりだな。」↑ベオウルフ

「栄養は取れるが……オエツ……」↑エジソン

「野菜は美味しいな……野菜は……」↑キンジ

「……生臭い。」↑理子

「……鮭サケいらぬいなあ。」↑鈴藤

「……。」↑藤崎

「……。(オエツ)」↑音野

審査員たちの顔は青くなつていく。

「お、おめえ!!この鮭サケ、鱗うろこ入つてんじゃねえか!!」

藤崎さんは鱗うろこを吐き出し、叫んだ。

「素人が鮭サケの解体できるわけないでしょ!!次の料理が待ってるから早く食べなさいよ!!」

和泉さんはそう言った後、食材を取りに行った。

「まあ……2時間も鮭サケをいじくつてれば、ここまで生臭くなるよなあ……。でも、ワカサギに比べれば……」

鈴藤さんはそう言つて遠い目をした。

「……ワースト1位だ、コレ。」

音野さんはぽつりと言つた。

「あんたらどんな料理食つてんだよ。」

キンジが思わずそう言う……

「とりあえず、村田君の料理が高級レストランの料理に思えるかなあ。」

「そうですねあ……ゲテモノ使つても味は美味しいですし。」

鈴藤さんと藤崎さんの言葉に、他の審査員たちは口が塞がらなかつた。

「うるさいなあ!!……お見舞いするぞ!!」

「アオダイショウはゲテモノじゃねえだろ!!」

「次はイブキのを試食するぞ!!」

ネロはワクワクする気持ちを表に出しながら言った。

「魚のアラの出汁が必要だったので……身の部分で作った『魚の煮卸し』です。」

俺の言葉に審査員たちは一瞬固まった。

「い、イブイブ……この魚は、何?」

理子はすがるような目で聞いてきた。

「……?そこにあった魚を~~箱~~ぎつくばらん~~箱~~に煮ただけ……。」

俺のその言葉に審査員全員は安堵した。

……なんだってそんなことを聞くんだけ?

審査員は『魚の煮卸し』を口に入れると……

「しつかり煮てあってうめえじゃねえか。」↑ベオウルフ

「大根おろしに魚の風味が乗っていて美味しい!!」↑エジソン

「……あれ?意外にうまい。」↑キンジ

「……料理、習おうかな。」↑理子

「いやあ、これは美味しいよ。鰹も~~歯~~鯛もいいなあ!!(ダジャレ)」↑  
鈴藤

「……ちゃんと染みていて美味しいですなあ」↑藤崎

「……。(無言のサムズアップ)」↑音野

審査員たちの評価は良いようだ。

「では続いて、はやてちゃんの料理です。」

中空知さんの声が響く。

「これはこれでうめえじゃねえか。」↑ベオウルフ

「素材の味がしつかりと出ている!!」 ↑エジソン

「ホツとする味だな。」 ↑キンジ

「ハヤちゃんの料理はおいしいよ!!」 ↑理子

「……懐かしい味だなあ。僕がまだ小学生だった時……」 ↑鈴藤

「あの……鈴藤さん。大丈夫ですか？」 ↑藤崎

「……。 (無言のサムズアップ)」 ↑音野

審査員たちは大好評。鈴藤さんに至っては唯々<sup>ただただ</sup>涙を流し、昔の話をしている。

「あの、はやてちゃん。君、(毒を)盛ってないよね？」

和泉さんはそう言ってきた。

「何言ってるんですか!!」

俺は思わず言ったが……

「和泉さんほどじゃないですけど、愛情はちゃんと盛ってます。」

「……。」

……小学生にしてこの返しか。

俺は思わずはやてを撫でた。

「イブキ兄ちゃん!!髪が!!髪がぐちゃぐちゃになるわあ!!」

3人の料理を食べ、審査員たちの気分がよくなった頃……

「さて、私はそろそろデザートの方を作らせていただきます。」

和泉さんは張り切った声で宣言した。

「今回はですね……シンプルにアップルパイを食べてもらおうと思っております。」

和泉さんの手には $\square$ 真つ赤なりんご $\square$ と $\square$ パイ生地(?) $\square$ が握られていた。

「時間が押してるので……今回パイはあまり手の込んだ物は作れないだろうと。」

……残り2時間とちよつと。確かにパイを焼くとなると余熱とか

が必要だ。確かに時間が無いな。

「それですね。今回はリングをコレで豪快に包み込もうと。」

和泉さんはそう言い、丸いリングをパイ生地(?)で一気に包み始めた。

「「いやいやいや!!」」

蝦夷テレビの審査員3人は思わず声を上げた。

「アップルパイってそういうものですか!?!」

藤崎さんは思はず聞いた。

「あれって……ただのリングアップルとパイでしょ!?!」

鈴藤さんは訂正した。

リングはパイ生地(?)に包まれ、白い物体になった。和泉さんはその白い物体をオーブンに投げ入れ……

「……? オーブンの使い方を教えてくれないかい? ほかあオーブンは使ったことがないんだ。」

……俺、審査員じゃなくてよかった。

俺は思わず安堵し、

「……アチツ!!」

……火傷した。

その後、はやては『肉じゃが』、『茶碗蒸し』、『卵焼き』、『ほうれん草のおひたし』、『ポテトサラダ』などの家庭的な~~お~~~~ふ~~~~く~~~~ろ~~~~の~~~~味~~~~お~~~~ふ~~~~く~~~~ろ~~~~の~~~~味~~で審査員たちを唸うならせて言った。

師匠は、アイルランド料理『ギネスシチュー』、『生カキとスモークサーモン』、『シエパーズパイ』、『アイリッシュオムレツ』で審査員たちを攻めていく。

ダーズリンは典型的なイギリス料理『ウナギのゼリーよせ』、『油ギトギトのフィッシュアンドチップス』、『黒コゲのスコッチエッグ』で、審査員たちを攻撃(間違いに非ず)していった。

俺は軍や知人から教わった料理『リスとウサギのアイヌ風タルタル

ステーキ(チタタプ)、『心臓の丸焼き』、『ルイペ(凍ったアイヌ風刺身)』、『サツマイモのつるの油炒め』を出しながら、大鍋を必死にかき回す。

和泉さんは……何をやっているんだ？野菜切るだけなのに、大量の時間を使っているのだが……。

時間は瞬く間に過ぎ、残り15分。料理人たちは最後の料理に手をかけ始めていた。

「このパスタの茹で時間は3分ですから、3分後には上げちやいまず。」

和泉さんは細いパスタをグラグラと煮えたぎる鍋にぶち込むと……

「え、匂いをつけるためにですね…フランベを。今からここでフランベします。」

野菜と肉が入っているフライパンを持ちながら言った。むろん、その野菜と肉は十分に火が通っている。

「……え？……いやいやいや!!!」

審査員たちの制止を振り切り、和泉さんはライターを借りてきた。そして、ブランデーをドバドバと注ぎ、IHなのに無理やりフランベをしようとする。

カチツ…ボンツ!!!

和泉さんのフライパンからは、2mを超す火柱が立った。

「うわあ……。」

「燃えますなあ……アツハツハツハ!!」

蝦夷テレビの3人は落ち着いてみているが……審査員どころか観客も口が塞がらなかった。

「できた(できましたわ)!!!」

火柱が上がった時、はやてとダージリンの声が聞こえた。

審査員の前には、

・『はやて作・ラザニアとデザートプリン』

・『ダーズリン作・スターゲイジーパイ(黒コゲ)とデザートのスコーン』

この4つが並べられた。

「「「「……。」」」」

ラザニアとプリン、スコーンは美味しそうなもの……スターゲイジーパイは真っ黒こげ、魚の頭は炭化を通り越し、灰になっている部分すらある。

審査員たちはあえてそのスターゲイジーパイを見ない様子にながらラザニアに舌鼓を打った。そして……

「……では、ダーズリンさんの料理を試食です。」

「これはイギリスの伝統料理、『スターゲイジーパイ』ですわ!!」

中空知さんの声が……俺は死刑を宣告する声のように聞こえた。

……本当に、本当に!!審査員じゃなくてよかった。理子、キンジ、お前たちの骨は後でちゃんと拾うぜ!!

俺は心の中で合掌しながら、鍋に隠し味である鷹の爪油・缶詰の桃・福神漬の汁・ニンニク醤油・コーヒー・ワイン・多種多様なソース類などを入れていく。

審査員たちは死んだ魚のような目をしながら、『ダーズリン特製スターゲイジーパイ』を口に運んだ。

「……食えなくはないな。味を無視すれば。」↑ベオウルフ

「……こんな風にできるとは、むしろ才能があるのでは!」↑エジソン

「外は黒コゲ、中は半生……」↑キンジ

「……。(一口食べた後、水で流し込む)」↑理子

「ワカサギに比べれば、まだ……」↑鈴藤

「女子高生の手料理っていう、僕が学生時代に思い描いていた夢をか  
なえてるんですけどねえ……。全然嬉しくないんだよなあ……。」「↑  
藤崎

「……。(一口食べた後、こっそり藤崎のさらに移す)」「↑音野

審査員たちが『ダーズリン特製スターゲイジーパイ』を何とか食べ  
終わった。

デザート『はやてのプリン』、『ダーズリンのスコーン』そして、『ス  
カサハのアイリッシュチーズケーキ(某パイの試食中に完成)』によつ  
て何とか審査員たちのハイライトが戻っていった。

「できました!!」

俺はやつと鍋をかき回すのを止めた。

審査員たちの前には、ご飯の上にスパイスの香りがする茶色い液体  
がかけられた物と、デザートなしの梨なしが置かれた。

「本来、海軍カレーは前日から仕込みを始めるんですけど……。時間が  
無いので。魚のあらで出汁を取った『即席海軍カレー』と『梨なし』です  
!!」

俺は海軍兵学校の実地訓練時代に偶然教わったカレーを作った。  
あらで出汁を取り、十数種類の隠し味を入れ、さらにアレンジを加え  
たカレー……。美味くないはずがない。

審査員たちが試食すると大好評。俺の作った料理の中では最高の  
評価だ。

「そう言えば村田君。」

「なんです、鈴藤さん?」

「この肉団子の肉、何?」

鈴藤さんの言葉で、全員のスプーンが止まった。

「何ってやだなあ……。まあ、実はチタタプの残りで作った肉団子な  
んです……。」

リス肉とウサギ肉だな。別々に分けてある。

「」「」「……。」「」「」

……。あれ?審査員たちのテンションが下がったような気がする

る。

「俺は別に気にしねえけど……。」↑ベオウルフ

「……食材には感謝しなければ。」↑エジソン

「美味しいのが腹に立つ。」↑キンジ

「美味しいんだけど……美味しいんだけど……。」↑理子

「最初は驚いたけど、美味しいんだよなあ……。」↑鈴藤

「これがマズかったら非難できるんですけどねえ……。マズくないどころが美味いんだよ、コレ。」↑藤崎

「うまいよ、コレ。」↑音野

……みんな、ジビエは食い慣れてないのか？

俺はやつとそのことに気が付いた。

「残り5分になったぞ!!」

ネロが宣言すると……和泉さんは慌ててパスタをフライパンにぶち込んだ。

……あ、あれ？そう言えばパスタを上げた後、5分くらい放置してたような。

高さ20センチは超す大量の山盛りパスタを、ソースと混ぜようとするが……

「お前またドームになってんじゃねえか!!」

藤崎さんは声を荒げて叫ぶ。

「うるさいなあ!!おめえのだけ山盛りにするぞ!!」

和泉さんはそう言いながらパスタと混ぜようとするが……混ざり気配がない。

和泉さんは混ぜるのを諦め、パスタを皿に盛り始めた。

「残り3分です。」

中空知さんの声で残り時間が知らされた。

和泉さん以外の4人は料理が終わっているため待機しているが

……和泉さんはメチャクチャ焦っている。

「そう言えば和泉さんのアップルパイは……」



俺は疑問に思っ、和泉さんに聞いた。

「ああ!!」

和泉さんは大慌てでオーブンを開けた。そこから取り出されたものは……リンゴが3分の1露出し、何かの液体がしみ出て、変なおいがするアップルパイ(?)だった。

和泉さんはそのパイを肉切り包丁で力任せに切っていく。

「残り1分だぞ!!」

「そう言えば和泉さん。スープのほうは……」

ネロと鈴藤さんの質問が同時に会場へ響き渡った。

「忘れてた!!」

和泉さんは急いで食材置き場へ行き、冷凍のエビと玉ねぎ、大量の

青唐辛子、レモン汁を持ってきた。

それらの食材を全てミキサーに放り入れていく。

……嫌な予感しかしないんだが。

俺の額には冷汗がしたたり落ちる。

ウイイイイイン……ベキベキベキベキ!!!

ミキサーから、出してはいけない音が大音量で出ている。

俺は審査員たちを見ると……全員顔が青い。

「残り10秒だぞ!!」

ネロの声が、ミキサーの音で消される。

「5」

「4」

「3」

「2」

「1」

「できたあ!!」

ジャーンジャーン!!

料理終了の銅鑼どらが響き渡った。

……トータル5時間の料理か。とても長かったぜ。

和泉さんの料理  
処刑執行を待つ審査員たちを視界に収めずにそう思った。

『ひき肉と秋野菜のスパゲッティ』、『トムヤンクン風オニオンスープ』、『アップルパイ』です。」

審査員たちの前には、皿に盛られた伸びたパスタ、コップに入れたスースムージープ、異臭のする焼いたリンゴとパイが置かれた。

「あの……」

キンジは手を上げ、発言した。

「これ、スープじゃなくてスムージーじゃないd……」

「スープです。」

「いや……煮込んでn……」

「スープです。」

「……そうですか。」

キンジの手はゆっくりと降りていった。

……キンジ!!そこで諦めるなよ!!絶対これスープじゃねえだろ!?

審査員たちは『トムヤムクン風オニオンススムージーープ』を避け、『ひき肉と秋野菜のスパゲッティ』、『アップルパイ』を先に食べ始めた。

「不味いんだが……く、食べなくはねえな。」↑ベオウルフ

「……のびたパスタ、異臭がする焼きリンゴとパイ。食べられなくはないが……マズい。」↑エジソン

「食べなくはないんだ……食べなくは……」↑キンジ

「……もうやだあ」↑理子

「うん……うん……。」↑鈴藤

「も、モチヤモチヤ言ってますけど……。」↑藤崎

「……。(顔が真っ青)」↑音野

審査員たちはそれ以上言葉を発さずに、パスタとアップルパイを食べた。

「あの……皆さん?スープが残ってますよ?」

和泉陽司<sup>執行人</sup>の声が会場に響き渡る。

「「「「「……。」」」」」」

審査員たちは膝に手を置いたまま動こうとしない。

数秒か、数十秒か……数分かもしれない。静寂が会場を支配していた。その時、二人の漢<sup>おとこ</sup>がこの静寂を破った!!

「俺は止まんねえからよ……だから、止まるんじゃねえぞ……!!」

「私の屍を超えてゆけ!!」

ガッ!!

ベオウルフとエジソンはスー<sup>スムーヅ</sup>プの入ったグラスを持ち、一気に飲み干し……

ボタン……

椅子ごと背中から倒れた。

二人の体は薄くなっていき、体からキラキラと光るものが……つて霊基が損傷してるじゃねえか!!

二人は師匠とニト、そして玉藻（見に来てくれた）によって保健室へ運ばれていった。

「「「「「……。」」」」」

残された5人は……動けずにいた。

「おおい、安浦くうくんいるんだろお？こっちへおいでええ。」

「こんな時だけ呼ばないでくれる？」

簡易O<sup>レイウ</sup>uちゃんに着替えた安浦さんが舞台袖から出てきた。

「……おい、スープ食わねえか!？」

和泉さんはそう言っ<sup>スムーヅ</sup>てスープの入ったグラスを渡した。

「……………」

安浦さんは悟った様な目をした後、毒<sup>グラス</sup>杯に口をつけた。  
パコッ

変な音がしたと思ったら、安浦さんは3秒ちよつとで飲み干していった。

「コレ……人が食うもんじゃねえって!？」

安浦さんが倒れなかったため、残った審査員たちに希望が見えよう  
だ。

審査員たちは覚悟を決め、スープスムージュを飲むと……

「うくん……。そのまま気絶」↑キンジ

「……。顔を真っ青にし、トイレへダッシュ」↑理子

「案の定……コクが無く、生臭く、唯々ただただ辛い……」↑鈴藤

「……ククククツ」↑藤崎

「これすぐくマズい……。」↑音野

審査員たちは死屍累々。ベオウルフとエジソン、キンジは救護科行アンビュラスき、理子はトイレに引きこもることになった。

この料理対決、残った審査員（鈴藤、藤崎、音野）3人による厳正  
な審査（一人100点）の結果、

1位：八神はやて 300点

2位：スカサハ 287点

3位：村田維吹 177点

4位：ダーズリン 123点

5位：和泉陽司 98点

という点数になり、はやてにはトロフィーと、5万円分の商品券が  
渡されることになった。

「イブキ兄ちゃん!!勝ったよ!!」

「おめでとう!!はやて!!」

「兄ちゃん!!髪がぐちゃぐちゃになるわあ〜」

俺ははやてを抱きしめ、ワシヤワシヤと頭を撫でた。

☒木曜どうでい☒の歴史において、『トムヤムクン風オニオン  
スープ』は『ワカサギ懷石』、『エビチリ』、『グレーリング飯』と並び、  
シェフ・和泉の四大料理となるのだが……閑話休題。

ついでに、キンジは後日エビアレルギーを発症し、生のエビが食べられなくなった。

俺ははやてを撫でまわした後、そろそろ寒くなってきた（パンツとエプロンのみのため）。なので制服に着替えるため、舞台袖へ向かうとすると……

「おう〜い、村田くうくん。どこへ行くこうつていうんだあ〜い。」

「イブキさん。まだ私の料理わたくしが残っていますわ。」

ガシツ!!

二人が俺の肩を掴んできた。

「え……いや……俺、審査員じゃないし……」

「ぼかあ、君のために料理を作りに来たようなものなんだよお〜。主賓が食べないなんておかしいじゃない。」

「私もイブキさんのお礼に料理を作りに来たの。レデイのお願いを断るの?。」

二人の手にはパイがあった。

「村田くうくん……」

「イブキさん……」

「おい、パイ食わねえか（パイお食べになりません）!?!」

俺は……その後の記憶がない。

数週間後、某学園艦にて……

「ねえノンナ。」

録画していた番組を見ていた☒小さい暴君☒が思わず声を上げた。「どうしました?」

すると、身長が高く、黒髪のロングヘアースタイルのいい女性が来た。

「なんで聖グロが出て、北海道の私たちが出てないのよ!!」

☒小さい暴君☒はプリプリと怒りながら言った。

「学園艦は青森所属ですが?」

「私たちは網走出身よ!!」

「あの番組に出たいのですか?」

「そ……そんなわけじゃないけど……。」

「出たいのですか?」

「………で、出たい。」

シーン……

☒小さい暴君☒は俯うつむきながら言った。

「わかりました。」

12月上旬、☒小さい暴君☒のわがままによって、シェフ和泉の☒犠牲者☒が増えることになる……この時誰も思っていないかったのである。

お前も食べるんだから……

「こっかんぱくいい!!」

俺とジョニー・マクレーン、それに鈴藤・藤崎・音野・安浦の蝦夷テレビの4人、黒髪の美女と金髪の美少女、そしてカラフルな髪の色をした5人のアイドル(?)達は、その声と同時にグラスを高々と掲げた。

会場はクリスマスの装飾が施された洋館。外は吹雪いているようだが、会場はとても暖かい。

Oh, the weather outside is frightful……

ヴォーン・モンローのLet it snow! Let it snow! Let it snow! Let it snow! がBGMで流れ、粋な雰  
囲気を醸し出す。

「いやあくとても華やかですなあ〜」

蝦夷テレビの「髭」はケーキをガツガツ食べながら呟いた。  
「女の子なんて出ないからねえ〜」↑鈴藤

「いつも出るのはおっさんだけでしょ?今日は華があるじゃない」↑  
安浦

「……(コクコク)。」↑音野

鈴藤・安浦は美味そうにワインを飲み、音野さんはカレーを飲みながら(間違いに非ず)カメラを回す。

「……まったく。何だってこんなところに……。」  
ジョニー・マクレーンはそう言ってタバコをふかしているが……頬は緩んでいる。

「おっさん、なんだかんだ言っても鼻の下が伸びてるぞ。マリーさんはいいのかよ?」

俺はそう言ってラム酒の瓶を飲み干した。

……銃弾やナイフが全く飛んでこない美少女達が大集合しているんだ。目の保養になる。

俺はそう思いながら女の子たちの会話を盗み聞きする。

「初めまして!!まんまるお山に彩を!!丸山彩でーす!!」

髪がピンク色の少女はそう言いながら変なポーズをとった。

「の、ノンナ!!」

「はい、カチューシャ。」

すると金髪の幼女チビは黒髪の美女に肩車してもらい、そのまま自己紹介をする。

なんとまあ、微笑ましい彼女たちの交流だろうか。

バタタン!!!

「は?」

その時、洋館の壁は崩れ落ち……吹雪の中に立たされてしまった。俺は周りを見渡すと……みんな口から☒☒何か☒☒を垂れ流しながら倒れていた。

「やあ村田くうくん」

「しえ、シェフ和泉……」

俺の目の前に、シェフ和泉が立っていた。彼は☒☒何か☒☒を盛った皿を手をしている。

「パイ食わねえか?」

「う、うわあああ!!!」

そう言っつてシェフ和泉は……俺の口に無理やり☒☒何か☒☒を詰め込み……

「イブイブ、イブイブ!!起きてく!!!」

理子はそう言っつて膝の上で寝ている犠牲者イブキを揺さぶる。



「いやあくよく眠ってますなあ〜……」↑藤崎

「パイ二つ食べたくらいで気絶するなんて……根性が足りないんじゃないかい？」↑和泉

「いやいや!!パイ食べるのに根性が必要なのはおかしいよ!？」↑鈴藤

「……そろそろ飛行機出るんで先に帰ります。お疲れ様です。」↑安浦  
「「「お疲れ〜」」」

安浦はそう言っつて車から降りた瞬間……

「うわああああ!!!」

ベキツ!!!

「ツ〜〜〜!!!」

飛び起きたと同時に、額に強い衝撃と激痛が走り……俺は悶絶もんぜつすることになった。

痛みが多少引き、俺は額を押さえながら周りを見ると……そこはハイエースのようなワンボックスカー内だった。

その車内には蝦夷テレビのメンツ（和泉、安浦、鈴藤、藤崎、音野）が爆笑している。

「うう〜……………」

俺の隣には、理子が呻うめきながらアゴを押さえている。時計を見ると……夜の7時。

「……あ、あの。なんでここに？」

目の前には『東京国際空港』という文字が書かれた建物がある。

「俺は確か……武偵高で料理をして……。その後……そ、その後……」  
俺は何があつたかを思い出そうとすると……激しい頭痛と吐き気がし、冷汗が止まらない。心臓が不規則に鼓動を打ち、息が荒くなる。平衡感覚が失われていき、視界が歪む。

「おめえのせいでトラウマになってるじゃねえか!!」↑藤崎

「……い、いやね。ぼかあここまでだとは思わなかったよ。」↑和泉

「あれね……人間が食べられるものじゃないよ……本当に」↑安浦

「い、いや……思い出さなくていいから……」↑鈴藤

「大丈夫かい？」↑音野

俺は思い出すのを諦めると、さつきまでの体調不良は一気に消えた。こんな体調は初めてだ。

「で、なんでここにいらっしゃるんですか？」

……何故、俺と理子は羽田なんかにいるんだ？

「実はですねえ。これからロケがあるので序盤だけ手伝ってもらえないかなあと思ひまして……」

藤崎さんは和泉さんを車の外に追い出した後、説明を始めた。外では和泉さんがぼやいているが……無視する。

「明日、用事があるんで……そこまで長くは付き合えませんよ？」

「あ、イブイブ。それは大丈夫だよ？」

理子はそう言っ、ガサゴソと車の荷物をあさり……

「これを引くだけでいいって。」

☒☒はがき(?)☒☒が大量に入っている透明な箱を出した。

「え?」

俺は思わず藤崎さんを見た。藤崎さんはコクコクと顔を上下に振っている。

……え?何のロケなの……これ?

「さて、和泉さん。我々の恩人である『武偵高の生徒さん』に料理をお見舞いしたのですが……そっちがメインではございません!!我々は旅に出ます!!」

「僕はもう満足だから帰ってもいいかい?あのヒゲも東京名物の甘味を大量に買い込んでるんだよ?」

「アツハツハツハ!!」

鈴藤さんと和泉さん、藤崎さんの掛け合いが始まり、その様子を音

野さんが撮っていく（安浦さんはラジオがあるために帰った）。

☒木曜どうでい☒☒を長い間続けてますが……我々、何か忘れていることがあるんじゃないかと。」

ダダン!!

『忘れていること』

……今、テロップかなんか出ただろうなあ

俺と理子は音野さんの後ろに待機している。……実は他のお客さんにジロジロ見られる。

☒木曜どうでい☒☒と言えは旅番組です。」

「もちろんです。」

「もちろんですよお〜!!」

鈴藤さんの言葉に二人は頷く。

この時、俺はこの番組が旅番組であることを初めて知った。

「旅と言えはやっぱり……美しい風景。美しい風景を楽しみたいわけですよ。」

「……やつとこの番組は、そこに気が付いてくれたんだねえ。僕は一番最初から言ってきましたよ? 『なんで乗り物しかのらないんだ』って……。今までがチャンチャラおかしかったわけだよ。唯々ただただ乗り物に乗ってね、疲れたタレントを映して、ヒゲが笑うなんて……旅じゃないんだよ。ぼかあ君たちのk……」

和泉さんは今までの愚痴を吐いているが……俺は気が付いた。

俺は車に戻り、透明な箱に入っている☒☒はがき(?)☒☒を一枚とり、裏返した。そこには……『美しい棚田の中に、よくわからないアートが置かれている写真』があった。隅には『新潟県十日町市 大地の芸術祭』と小さく書かれてある。

……この写真の場所に行くのか!?

中には小笠原諸島の写真もある。たった3日で小笠原に行つて帰れるのか!?

「イブイブ……そろそろ行くよ?」

理子が俺の肩を叩き、伝えた。

「わかった。」

まあ、俺は行かないし……別にいいか。

「今回はですね。お見舞いしてしまった彼らに最初の一枚を引いてもらおうと思います!!」

「いえ〜い!!」

「あ、どうも。」

鈴藤さんの紹介の元、俺と理子はカメラの前に躍り出た。

「こいつの料理、酷かっただろ?」

藤崎さんが聞いてくる。

「アハハ……イブイブはともかく、キー君はヤバいらしいから……」

「理子はトイレへ何度も往復してい……痛い、痛いから!!」

ベキ!!バキ!!ドスツ!!

理子は本気で俺を殴り続ける。

「アツハツハツハ!!」↑藤崎

「お、女つて怖いなあ……」↑和泉

「流石にデリカシーはないけど……村田君は尻に轢かれそうだねえ

〜」↑鈴藤

「さて、では気を取り直して二人に引いていただきましょう!!」

「りよ〜〜かい!!」

「……………はい。」

鈴藤さんの言葉に、笑顔いっぱいの子とボロボロの俺（後で確認したら、顔に青あざができていた）が透明な箱に手を突っ込んだ。

二人で『絵はがき』を混ぜながら、「あーでもないこーでもない」と選んでいると……

「流石に『時計台』は抜いてあるだろ?」

「もちろん入ってます!!」

和泉さんの言葉に、藤崎さんは威勢よく返事をした。

「それ引いちゃったら……ただ武偵高の皆さんにお見舞いして帰

るだけですよ!？」

「我々もね、シエフ和泉の攻撃で満身創痍ですから……。時計台を引いたら……さすがの僕達も企画、辞めちゃいますよ!!」

鈴藤さんと藤崎さんはそんな冗談を言いながら笑い合う。

「イブイブ、これがいいんじゃない?」

「……紙質もいいし、これにするか。」

「じゃあ、いくよ〜」

「せーの!!」

ダン!!

俺達が引いた『絵はがき』は……

「……………アツハツハ!!」

『雪化粧の札幌時計台』

……あ、やつちまった。

さて……一悶着会った後、蝦夷テレビの皆さんは札幌へ帰った。旅立っていった

次の日、俺はフリーなのでみんなと文化祭を楽しもうと思っていたのだが……異常なほどの腹痛が発生。血便まで出たのだが……何とか後夜祭までには回復することができた。

……おつかしいなあ?俺は昨日そんな変なのは食べてないはず……はず……

頭痛と吐き気がしたため、それ以上思い出すことは中止する。

さて、武偵高では文化祭の打ち上げで武偵鍋という物を囲むのが習慣だそうだ。

武偵鍋とは……各自食材を持ち寄り、それをまとめて煮る。要

はただの闇鍋。チームの親睦を深めるために毎年、必ずチームごとで行わなければいけないらしい。ここまでだと、楽しそうな鍋大会なのだが……

普通の具材を持ってくるアタリ担当、普通は入れない具材を持ってくるハズレ担当、この二つに分かれて具材を持ち寄るそう。ついでに、持ち寄る具材は直前まで秘密にするそうで……

……うん、馬鹿じゃねえの？

苦しみを共有し、親睦を高めるのは理解できる。軍ではよくある手法だ。しかし……食べ物はずいदार、食べ物は……。

さて、今回のアタリ担当とハズレ担当、そして調味料担当（奇数人の場合のみ有り）だが……

アタリ担当

・ネロ

・牛若

・エルキドウ

ハズレ担当

・イブキ俺

・ニトクリス

・リサ

調味料担当

・理子

特別参加特別ゲスト（二人の打ち上げは寂しいだろう……という事で道連れ）

・ワトソン

この8人で☒武偵鍋☒を囲むのだが……我々『COMPOTO』常

識人すべてがハズレ担当なのだ。

正直言つて……牛若は万に一の確率で普通の具材を持つてきてくれるかもしれないが、ネロ・エルの二人は一切期待できない。

それに加え……調味料係が理子なのだ。理子が自重するとは思えないので……道連れ<sup>衛兵</sup>としてワトソンを連れてきた。ワトソンは嬉しいやら恥ずかしいやらで頬を赤めていたが……うん、ゴメンナサイ。

はやてとウォルケンリッター・玉藻を急いで帰し（犠牲者を減らすため）、体育館へ向かうと……全員集まっており、リサが鍋を軽く炒めていた。

……え？炒める？鍋だろ？

「あ、イブキ様!!」

リサは俺に気づいたようで大きく手を振る。すると、彼女の胸も大きく……いや、何でもない。

「汗、少くないか？」

土鍋で具材を炒めているのだが……大丈夫か？

「あの……理子様がだし汁を少なくするようにと言われました。」

……え？あの理子が？そんな指令を!?

俺は理子を見ると……~~ムフー~~豊満な胸を張っていた。

「何でも、火を入れた後に煮るとおっしゃっていましたよ？」

リサはそう言つて水筒を取り出した。その中にはだし汁が入っていた。

「イブイブも来たことだし、そろそろやるよお〜」

理子はそう言つて瓶を取り出した。その瓶には……『SPIRIT US』……す、スピリタス!?

スピリタスはポーランド原産のウォッカだ。こいつのアルコール度数は96度。世界最高純度の蒸留酒であるため、火気厳禁である。

「え〜まずはですね、フランベします。（和泉の声を真似る）」

理子はそう言つてコンロの火を切り、スピリタスをドバドバ入れ、

ライターで火をつけた。

ボン!!!

巨大な火柱が上がった後、メラメラと火は燃える。他のチームは俺達を見てギョツとしている。

「くふふ……!!火は消さないかねえ」

理子は☒☒生クリームのスプレー☒☒5本で消火をしようと試みるが……余計に火の勢いが強くなる。

理子は鍋に蓋ふたをして消火をした。そして黄色のボトルと小さな小瓶を取り出し……

「ここにですね、よくわからないスパイスとレモンを入れます。(和泉の声を真似る)」

ドバドバツと☒☒よくわからない文字(インドかタイか?)で書かれたスパイス☒☒とレモン汁を鍋に投入する。

「「「「……」」」」

我々『COMPOTO』(+1名)は口がふさがらない。

「だし汁ちよくだい!!」

「は、はい!!」

理子は水筒を受け取り、だし汁を鍋にぶち込むと……色は茶色と黄色に……これ、人が食えるものなのか?

「ぼ、ボク……用事を思い出しちゃったよ!!今日は招待してくれてありがとう!!じゃあ!!」

「おい待てワトソン!!」

俺は帰ろうとしたワトソンの手を掴んだ。

「む、ムラタ!!離してくれ!!ボクはまだ死にたくない!!」

「何のためにお前を呼んだと思ってるんだ!!お前は道づら……衛生兵としても呼んだんだぞ!!」

「今『道連れ』と言おうとしたら!!ボクは帰らせてもらおう!!」

「待て待て待て!!」

俺はワトソンの腕を思いつきり引いた。するとワトソンの軽い体は簡単に動き、俺の胸元にストンと収まる。ワトソンと俺の目が合った。



「お前がいなきや……ダメなんだ（道連れ&衛生兵として）!!!」  
「え……………」

ワトソンの頬は赤くなり……そして、耳まで赤くなっていった。  
……あれ？ワトソン何か誤解してるんじゃないか？

ワトソンは顔が真っ赤のまま、その場にペタンと割座女の子座りをした。そのままモゴモゴと独り言を呟いている。

「「「……………」」」」

「ッ……………」

俺は殺気を感じ、その方向へ向くと……『COMPOTO』全員からの殺気であった。

「……………味が足りないので、もう少し追加します（和泉さんの声真似）」

理子はそう言いながら笑顔で（目は笑っていない）レモン汁・スパイス・白ワインをドクドクと加えた後……

「く〜さ〜やく液!!!」

異臭を放つ濁った醤油の様な液体を鍋の中に投入した。鍋からはくさや特有の臭いを放ち、体育館にその匂いが充満していく。

理子はその匂いをモロに喰らっているはずなのに……顔色一つ変わっていない。

「くふふ……………!!!そして〜シユールストレm……………」

「もういい!!もういいから!!」

理子は~~黄~~黄色と赤で塗装された缶詰~~と~~缶切りを持っていたので、俺は慌てて拘束した。

「理子待ってっ!!これ以上はマズいから!!」

「イブイブ……………」

「な、なんだよ……………」

「人間はね…………意地でもやらなきやいけないことがあるんだよ!!!」  
「こんなことで意地張るなよ!!!」

何とか理子を諦めさせた後、リサは塩と胡椒・砂糖を使って何とか

味を整え……

「すいません……リサには、これが精いっぱいです……」

そう言つて、器に全員分を平等によそつた。俺の器の中には……よくわからない肉（2種類）・丸焦げの御飯・焦げた何かが入っていた。臭いをかぐと……激しい異臭の中にアルコール臭が混ざっている。

俺は恐る恐る箸をつけ、口に入れると……

「……あれ？」

……確かにくさやの激臭とアルコール臭さがあるが、味はそこまでマズくはない。奇跡的に俺達の持つてきた食材がお互いに邪魔し合っていないのだろうか……食べれる料理だ。

「リサつて凄いんだな……」

俺は思わず言つた。だつてあんな混沌カオスとした料理を塩・胡椒・砂糖だけで食える物にしたなんて……

「いえいえ……私はほとんど手を加えてませんよ!？」

リサの仕草を見る限り……謙遜ではないようだ。俺は思わず理子を見ると……

「イブイブく褒めてもいいんだよお？」

……なんか癩しやくだな。

「そう言えばみんなは何持つてきたんだ？」

俺は理子を見無視しながら、インスタントのマーボー丼の袋を出した。鍋に入れても辛うじて食べれるだろう（おじやのようになると思つて）と思つていたのだが……まさか最初にフランベされるとは誰が思つていただろうか……

「うむ、余はロマーノチーズを持つてきたぞ!!」↑ネロ

「私はちらがとやらを持つてまいりました!!」↑牛若

「ボクはコレ。（エンドウ豆とその他野菜を見せる）」↑エル

意外なことに、不安アタリ担当な3人が（まだ）真つ当な物を持つてきているとは……予想外だ。

「私はハト肉を……」↑二ト

「リサはマッシュポテトを……」↑リサ

……あれ？以外にみんな、まともな物を持ってきているぞ？

「えー、みんなつまんなーい」

理子がそう言つて不貞腐れる。

……こいつがいなければ美味しい鍋が食べたのか

何故だかわからないが……少し腹が立ってきた。

「……え？イブイブ？ど、ドウシタノ？」

「いやあーな、食いもので遊ぶ悪い子にはお仕置きが必要だなあ……と。」

「ちよ……いい、イブイブ？今日はお祭りだよ!? 少しくらい羽目を外してm……いい、イタイイタイ!!!」

俺は理子にヘッドロックをかました。

「料理対決の料理よりはまともじゃん!!!」

「あっちは悪意がないから怒れねえんだよ!!!」

武偵鍋  
ごつた煮を食べ終わった後、ネロのリクエストによりトマト鍋を  
をつつくことになった。

無論、鍋をつつきながら酒盛りに発展。ほどほどに楽しんだ後、解散となった。

その翌日11月1日、文化祭の片付けのため俺は学校に行ったのだが……片付けは1年生の仕事という事を初めて知った。お役御免な俺はさっさと退散しよう……

「お!? 村田あー、ワザワザ手伝いに来るなんて良い先輩やなあー!!!」

「……え!? いい、いや……偶然学校に用があっただけで……」

蘭豹に捕まってしまった。俺は何とかやり過ぎそうと……

「え!? 本当ですか!!!」

「流石は村田先輩!!!」

「ありがとうございます!!」

「村田先輩、一生ついて行きます!!」

「さすが村田先輩!!そこにシビれる!あこがれるウ!」

「……………お、おう。」

出来なかつたよ。

懇願する様な瞳を持つ、大量の1年生たちに「NO」という事が  
できず……………結果、夕方まで俺もこき使われることになった。

俺は片付けでボロボロになった後、学校から寮へ高機動車で帰って  
いた。憎たらしいぐらいに強い夕日の光が運転を阻害してくる。

……………サングラス、壊しちゃったしなあ。

この前、俺が間違えて踏み潰してしまった。思わずため息が出る。  
高機動車を駐車場に置き、階段を登る。自分の部屋の前に着いた時  
……………

パパパーパーパッパパ……………!!

携帯から「艦〇れの『昼戦』が流れ出した。この音となると……………

神城さんか。

「はい、村田です!!」

「村田君!!すぐに武装して1時間以内に目黒地区に来てください!!復  
唱はいりません!!」

電話の主は神城さんだった。神城さんは焦りが3割、興奮が7割と  
いう荒ぶった声だった。

「は、はい!!」

「急いできてください!!」

ツーツーツ……………

……………神城さんのあの興奮具合から考えるに……………本格的に始めるの  
か、極東戦役を……………。しかし、あの焦り度合いはなんだ?どんな無理  
や無茶な状況でも、どんな予想外・想定外が起こっても笑って過ごし  
ていた化け物が……………何に焦る?

俺は急いで部屋に戻ると、戦闘服に着替えながらこの状態を考察す

る。

……もしかして、敵による侵攻か!? 日本の総人口1億人のうち、首都圏(東京Ⅱ横浜)で3800万人……。約4割弱がいることになる。それに加え、日本の経済・政治が一極集中している。ここを攻められ、落とされたりしてみろ……。日本は死ぬぞ!?

俺は部屋から急いで出て、一気に1階まで飛び降り、車に飛び乗った。エンジンをかけ、サイレンを鳴らす。

……いや、本格的な侵攻だったらあれ以上焦っているはずだ。となると……

高機動車は一気に加速し、目黒へ向かう……。

電話から30分もしないで目黒地区についた。すでに門の前で第二中隊第一小隊が待っていた。

「以外に早いじゃねえか。」

鬼塚少佐は腕を組みながら、威圧感を出しながら言う。

「少しは背が伸びたんじゃねえか? イブキ大尉殿? ……いや、イブキ武偵?」

「田中さん、からか 擲揄うのは止めてくださいよ……」

田中さんはそう言って俺をからか 擲揄う。

……ツケ、この中で一番背が低いのは俺ですよ。

俺はそう思いながらも、久しぶりのこの空気に懐かしさを感じた。「では……我々希信達は全員そろった。」

辻さんの一言によって、隊の空気が一気に締まる。

「希信達の前に客が来た……。手厚く××おもてなし××しよう!!!」  
「××××ハッ!!!」

俺達はトラックに乗せられ、品川方面へ向かっていた。トラックの中、第一中隊の藤原さんが連絡将校として来ており、今回の件の説明を開始した。

「第一中隊の藤原少佐です。今回の敵は『ジーサード・リーグ』、GⅢをトップとした独立組織で、今はアメリカに飼われています。ですが……今回は独断で動いているようです。GⅢについての情報ですが……4年前にロシアラモスの被験者を第二中隊が救出した時の生き残りの一人です。今はアメリカの最先端科学を集約した武器を使い、戦うそうです。」

藤原さんはそう言った後、写真付きの書類を渡してきた。書いてあるのはGⅢやその部下の写真・経歴だ。その書類を見ると……アメリカやロシアの特殊部隊出身がとても多い。

「また、近々違う複数の組織が攻勢をかけてくるそうです。その時にはまた皆さんの力を借りることになります……よろしくお願いします。」

藤原さんがそう言って頭を下げたと同時に……トラックはゆつくりと止まった。目的地に着いたようだ。

俺は音が出ないようにトラックから降りると……目の前には成金趣味が漂うビルが目の前にあった。近くには見慣れたクラウンが置いてある。

「敵はこのビルの七階、屋外劇場にいます。……では、皆さんの武運を祈ります」

藤原さんはそう言ってトラックに戻ろうと……

ガシツ!!

藤原さんの肩に……佐官連中化け物共の手が置かれた。

「ん？藤原は何でトラックに戻ってるんだ？」↑鬼塚

「連絡将校なんですよね？我々の事は詳細に伝えてもらわないと」↑  
神城

「ここまでついてきたのだ。希信達と一緒に行きたかったのだろう？」↑辻

「え!?!……いやいやいや!!僕は戦闘服じゃなくて、ただの軍服ですよ

!?装備だつて刃引きされた軍刀と拳銃だけですし!」↑藤原

藤原さんは顔を真つ青にし、佐官連中化物共から逃げようとするが……

「第一中隊もある程度訓練してんだろ?逝いける逝いける」↑鬼塚

「なあくに、勇気と気合があればどんなことだつてやれますよ」↑神城  
「大和魂さえあれば弾ぐらい避けられる!!希信達の後ろにいればいいのだ!!どうにでもなる!!」↑辻

「それで何とかなるのはあなた達だけですつて!!僕は戦闘じゃなくて情報収集や工作が専門ですから!!……いや、ほんと足手まといになつて野垂れ死ぬだけですから!!む、村田あ!!助けてk……」↑藤原

藤原さんは懇願するように俺を見てくるが……

「……無理です。勘弁してください。……今度美味しい物ご馳走します。」

俺はそう言つて藤原さんに合掌。どうか……藤原さんが死にませんように。

藤原さんは俺の行為合唱を確認すると、ヤケになったようで……

「だから任務が知らされた後、みんながやけに優しかったのか!!飯を何度もおごつてもらつたり、遺書を書いてけとか言われたし!!チクシヨウあいつら!!覚えてろ!!」

藤原さんは……神城さんと鬼塚少佐に肩を組まれ、逃げられそうになかった。

……藤原さん、あなたの犠牲は忘れません!!

俺は……藤原さんの雄姿ゆうしに思わず敬礼をした。

「僕はまだ死んでないよ!」

藤原さんの声が聞こえたような気がしたが……気のせいに違いない。

俺はビルに向かつて歩きながら刀を佩はき、38式黒塗りの銃剣に着剣した。

久しぶりの第二中隊……

「岩下、お前は狙撃位置で待機。田中、お前は先頭で罠があるかどうか見ろ。メガネ、お前は俺達と一緒に行動しながら好きなようにハックしろ。村田、お前は田中が見つけた敵の排除だ。行け!!」

「二ハッ!!」

鬼塚少佐が命令すると俺達は行動を開始した。

「藤原少佐は私たちと一緒にです!!」

「希信達に離れないように!!」

「……アハハ」

死んだ魚の目をした青年将校が後ろにいるが……無視しよう。

「村田あくばかあ許さねえぞお」

……俺に何ができるっていうんですか

成金ビルに入ると、人型ロボット(?)に乗った人間・キツネ耳の妖怪(?)・銀髪オッドアイの少女等を無力化しながら俺達は7階の外劇場へ向かう。

「いやあくこれはすごいですね。メガネのままインターネットが繋がられて、しかも無線のように通話もできるなんて……。」

メガネさんは敵から奪ったメガネ(?)モドキをタブレットにつなげ、中の情報を奪っていく。

「この情報があれば……ちよつとスペックは落ちるし、大きさもヘルメットぐらいになりますけど……秋葉原で10万あれば作れるように……!!」

メガネさんはタブレットに表示されるアルファベットと数字の暗号を見ながら大興奮。メガネさんのメガネは妖しく光り、口元からヨダレが……

「このロボットもアメリカにはいい線行ってますね……。あ!!なるほど……こういう考えはなかったな。……これは!!!……おつと、ヨ



ダレが」

「……おい、メガネ、そろそろ……」

「め、メガネさん？お、落ち着いてください……」

俺と田中さんは異様なオーラを出すメガネさんに声をかけるが……彼は「ふへへ」と笑いながらタブレットを叩き続ける。

「……堀!!」

「ハイッ!!」

辻さんの一喝によってメガネさんは直立不動の体勢を取ったが……手はタブレットを叩き続けている。

「……堀。それらは後日希信の責任で好きに使ってもいいが、今は任務中だ。」

「ハッ!!わかりました!!」

メガネさんは奪ったメガネとロボットスーツから奪った機械をリュックに詰めた後、タブレットを高速でたたき始めた。

「そうですね、せっかくですし……安いバイアグラや出会い系でも教えてあげましょう。……ハハッ!!」

メガネさんは笑いながらタブレットを叩く。

「怖え……」

そのメガネさんの狂気な姿に……俺と田中さんは恐れおののいた。

「おめえら、さっさと行け!!」

「ハイッ!!」

鬼塚少佐の一声によって俺達は正気に戻り、罠と敵を排除していく。

俺達は7階の屋外劇場の壁に着いた。

「田中」

「わかっていますよ。」

鬼塚少佐のが呼んだだけで田中さんは何をすればすぐわかる。相変わらぬ阿吽の呼吸は今も健在のようだ。

田中さんは壁いっぱい爆薬をつけた後、聴診器を壁につけ、向こ

う側の様子を音で判断する。

『……中には重傷で横たわっている少女が4人、また4人の男女がにらみ合いを続けています』

田中さんはハンドサインで情報を伝える。

『田中は準備ができたなら爆破、その瞬間希信達が突入する。奴らは殺すな。』↑辻さん

『私は援護のほうがいいですね。頑張ってください』↑神城さん

『了解!!』↑俺

『ハハハ……俺まだ生きてる』↑藤原

俺達はハンドサインで会話をし、命令を受けるが……藤原さん、あなたよくこんな短時間でハンドサインが分かったな。

『一応、情報や諜報が専門だからね……。お願いだから安全に……』

ズドーン!!

爆風によって藤原さんが何を言ったのか見えなかった。何を伝えようとしていたのだろうか……。俺はそう思いながら38式を強く握る。

「とつげきいーろーろー!!!」

「!!」

辻さんを先頭に、俺達は屋外劇場に突入した。

屋外劇場には……ぐったりと倒れた理子・アリア・白雪・レキ、呆然としているキンジとワトソン、そしてGⅢと……誰だ？

「……チツ!!」

「鬼畜米英がああああ!!!」

「おらあああああ!!!」

辻さんと鬼塚少佐はGⅢに突撃していく。田中さんは倒れた4人の手当に向かう。となると……俺はこいつか。

俺は猫耳フルフェイスヘルメットを被った少女に一気に近づき、銃剣を刺そうとする。

「えっ……え、ちよつと待って」

「問答無用!!!」

バキッ!!

敵は青色に発光する150センチほどの刀で、38式の先についている銃剣を切り落とした。

猫耳ヘルメットから聞き覚えがある声が聞こえるが……気のせいだろう。

……それよりもあの刀だ。敵は最先端の科学技術が使われた武器を使うらしい。そしてこの切れ味……熱で切り裂いたわけではないようだ。となると……原子レベルでの薄い刃かなんかだろう。ならば……刃の向きには気を付けなければ……

俺はそう考えながら、銃床で敵の刀の柄を殴りつける。すると刀は発光しなくなつた。

そのまま前フオアグリップ床を鏢つばに引っかけ、刀を明後日の方向へ飛ばす。「待って、イブキん……」

敵は俺の名前を知っていたようだ。なるほど、向こうもある程度調べていたのか。

俺は銃口を向け、敵の胸元へ発砲した。すると、敵の腰からふよふよと布のようなものが出てきて、銃弾から身を守つた。

……面倒な!!

俺は38式を棍棒こんぼうのように叩きつけようとするが……布のようなもので防がれた。俺は38式を捨て、腰の日本刀でを居合の要領で抜刀し、その布を引き裂いた。そのまま返す刀(峰)で敵の頭を殴ると敵は倒れた。その時……

ズドーン!!!

床に大きな穴が開き、そこからさつき倒した人型ロボット(?)に乗つた人間フレーム・レディエイションが現れた。

「火炎放射!!」

そう言つて人型ロボット(?)に乗つた人間は腕の機械から炎を噴射し……

「アヒヤヒヤヒヤ!!!」

ピュー……チュドーン!!!

狂ったような笑い声をBGMに巨大なロケット弾が人型ロボット(?)に乗った人間に着弾し、大爆発を起こしてロボットを粉砕した。

俺は敵を押さえつけた後、ロケット弾の発射元を探すと……直径50センチ弱の筒に次弾(小学生ぐらいの大きさの砲弾)を装填する神城さんがいた。

「やっぱり大口径は良いですねえ!!! 噴進砲なのは不満ですが、この大威力!!!これが漫画で言う『勃起』ですか!?!」

神城さんは早口で喋りながら次弾を装填し、数百キロはあろう巨大な筒を担ぐ。担いだその時、粉碎されたロボット(?)からヨロヨロと這い出る人が……

「死にぞこないがああああ!!!くらえええええ!!!」

ピューー……チュドーン!!!

……な、なんてオーバーキル。

俺はロボット(?)の操縦者へ心の中で合掌した。

ひと段落したため、周りを見渡すと……呆然とするキンジ・引いているワトソン・救護をする田中さん、そして……頭を抱えて縮こまったGⅢをボコボコにしている辻さんと鬼塚少佐。

……あれ? 部外者から見れば俺達が悪人じゃねえか?

俺はそう思いながら猫耳ヘルメットに手錠をかけた。

「く、苦しいよ……イブキn……」

……殺気!?

俺は猫耳ヘルメットを押さえつけながら振り向くと……道中で倒した銀髪の少女が何かを持って振りかぶっていた。

ドスツ!!ドスドス!!

銀髪少女が何かを投げようとした瞬間、彼女の体から着弾音が聞こえた。

タンタンターーン!

遅れて銃声の音が聞こえる。岩下さんの狙撃によるものだろう。弾が貫通してないことからゴム弾等の狙撃であることも分かる。

銀髪の少女は弾の威力のせいで仰向けあおむに倒れていくが、手に持っていたものは辻さんと鬼塚少佐のほうへ投げられてしまった。投げられたものは……手榴弾!?

手榴弾はGⅢの方向へ飛んでいき……

「……クソツ!!面倒な!!」

鬼塚少佐はGⅢから離れ、手榴弾を蹴りあげて明後日の方向へ飛ばした。

その時を待っていたのだろう、GⅢは辻さんから離れ……

「ガンヒット作戦をプロセスローに移す!!HSSを使いこなせるようにしてこい!!」

そう言い捨て、姿が透明になっていく。

……光学迷彩か!?まさかそこまでできてるなんて!!

GⅢの姿が完全に消えた。

消えてから数秒立った時、辻さんは目をカツと見開き……

「キエエエエエ!!」

叫びながら手に持っていたMG3機関銃を全力であらぬ方向へ撃ち始めた。

ベキツ!!ベキベキツ!!

すると……弾の着弾音と共に、黒い布を持った青年がいきなり現れた。布の一部は透けていて反対側の景色が見える。

……GⅢか!?見えないのによく見つけられたな。

GⅢは布を捨て、逃走を開始した。辻さんは弾が切れたMG3機関銃を捨てると……

「田中は倒れている犯人の確保!!残りはこの希信についてこい!!」

「」「ハッ!!」「」

「え?ちよつと待って!?お、鬼塚少佐!?なんで僕の襟首掴むの!?僕は田中曹長と一緒に犯人逮捕がいいんだけど!?僕がいても足手まとい

だよ!？」

命令を下しながら軍刀を抜刀し、GⅢを追い始めた。田中さんを残し、俺達も辻さんに追従してGⅢを追う。

「……ツチ!!面倒な奴らだ!!」

GⅢはそう言い、ビルから飛び降りた。俺達もGⅢを追うため、次々と7階から飛び降りる。

「この希信から逃げられると思うなあああ!!」↑辻さん

「まだ撃ち足りない!!的になってくださいよおおお!!」↑神城

「待ておらああああ!!」↑鬼塚

「出会い系には興味ないんですかねえ?だったら~~く~~そみそ~~く~~画像でも送りましょうか」↑メガネ

「いやあくやっぱりこの雰囲気、懐かしいなあ」↑俺

「何飛び降りちやってんの!?!ここ7階だよ!?!命綱なしに飛び降りたら死んじゃうから!!待って、手を離し……ああああああ!!」↑藤

原

俺達は夜明けまでGⅢを追ったのだが……結局逃げられてしまった。

「もうやだ!!ほか絶対<sup>あなた</sup>に第二中隊と一緒に任務なんてやりませんか  
ら!!」

「お、落ち着いてくださいよ、藤原さん」

「おう村田あり、よくも僕を見捨てたなあ!!」

「………瀬島中佐に無茶ぶりされたら助けてくれます?」

「……うん、ゴメン。……今度なんか奢ってよ?」

「わかってますって」

「……ハア」

そこには……上司に逆らえない部下が二人いた。

追跡を諦め、一時解散となった。俺は目黒地区に戻って高機<sup>車</sup>動車を取りに行き、それに乗って10時過ぎにやっと寮に帰ってきた。

俺は眠い目をこすりながら着替え、布団へ倒れた。そして完<sup>全</sup>熟<sup>睡</sup>中<sup>に</sup>ジャンヌからの会<sup>議</sup>ラ<sup>ブ</sup>への招<sup>待</sup>ル<sup>コ</sup>で無理やり起こされ、俺はイヤイヤ会議場所のファミレス・ロキシীরオープンテラスへ向かった。

さて、話が変わるが武偵高にも『ハロウィン』があるらしい。本来は10月31日なのだが……その日が文化祭等で潰れた場合には、文化祭片付けの後の初登校日にそれをやるらしい。つまり今日だ。リサに言われるまで知らなかった。

しかも……ちゃんとやらないと教師陣による制裁もあるそうだ。普段だったら楽しんでいただろうに……今はその祭りが鬱陶<sup>うっとう</sup>しい。

俺は礼服を引っ張り出し、リサに簡単なメイクをしてもらい、何とか吸血鬼モドキが完成した。

俺は吸血鬼（モドキ）のコスプレをしたまま、会場であるファミレス・ロキシীর向かった。

ファミレス・ロキシীর緑から紅に変わり始める美しい楓<sup>かえで</sup>並木の中にある店だ。しかも洒落<sup>しゃれ</sup>たオープンテラスを張りだしていて、そこ出席者たちの姿が見える。

俺は眠気覚ましの紅茶（ティーバック3つ入り）を片手に丸テーブルの席に座った。

「全く……軍の代表者は俺のような下っ端じゃなくていいだろ。」

俺はぼやきながら渋い紅茶を啜った。

「GⅢと直接対峙<sup>たいし</sup>して無傷だったのは貴様らだけだったからな。他に

軍の連絡係は別に来るそうさ。しかし……派手な仮装をしてきたな。」

目の下にキラキラの雪印のシール、黒いトンガリ帽に魔女っ娘ステッキを握ったジャンヌが言った。

……ジャンヌのコスプレ、なんかエロゲでありそうだな。例えば

☒サノバウイテ……

「貴様、それ以上考えるな。」

「いや……何言ってるんのジャンヌ？」

「これ以上考えたら……」

ジャンヌは懐から☒デュランダル☒を出し、刃をちらつかせる。俺はそれ以上考えるのをやめた。

「お主ら、ここでじゃれ合うな。それとも……☒イチャイチャするな☒と云うのがあつておるかの？」

「イチャイチャしてねえ（ない）!!!」

赤いミニスカート風の和服を着たタマモ（尻尾は出ている）が俺達を<sup>からか</sup>揶揄うが、即座に否定した。

「……………ムラタ、会議中にイチャイチャするのはよくないと思う。」

「だからイチャイチャしてねえ!!……………ってワトソン？」

「ああ、ボクだよ。」

ジャック・オー・ランタンのカボチャをすっぽりと被った変質者は……ワトソンだったようだ。

『イブキさん……ふしだらですよ?』

「……………ハイ」

置かれているタブレットからメーヤが女神の微笑み（怖）で言ってきた。どうやら俺の援軍はいないようだ。

さて、約束の15時までこのメンバーで雑談をして時間を潰すが……キンジと軍の連絡役が現れる気配がない。



俺は紅茶のお替りをもらいに行き、帰ってくると……黒いフードを被った変人がテーブルに加わっていた。この背格好から考えるに……キンジだろう。

「キンジく遅いぞく」

「ん？ああ……すまん」

キンジはそう言って平静を保っているが……若干、右膝を気にしている様に見える。怪我でもしたのだろうか。

「さて……あと一人来ていないが師団会議デイン・カンフを始める。先日、師団のバスカービルg……」

「いやあ、遅れてすまない。」

ジャンヌの言葉を聞き覚えがある声さえぎが遮った。この声だと……藤原さんだろう。

「あ、藤原さんだったんですか……!?!」

「!?!」

そこに居たのは……頬は痩せこけ、大きなクマに充血した目玉をギョロギョロさせ、ヨレヨレの深緑の軍服を着た藤原さん惨敗兵の幽霊がいた。

「!?!」

「……ど、どうしたの?」

「!?!」

「ほんと参ったよ……。あの後、徹夜で報告書やら何やら書き終わったのが11時過ぎ。それでやっと寝れると思ったら瀬島中佐上に捕まって3時間愚痴を聞かされて……。愚痴から解放されたら今度は別部署への報告、そのままファミレス・ロキシーこへ行けて命令さ……。ちくしょう!!こんなところ辞めてやる!!」

藤原さんはそう言って砂糖たっぷりのドーナツを頬張り、顔をしかめた。そしてコーヒーで砂糖を洗い流す。きつと甘すぎたのだろうか。

「さて、人がそろったな。師団会議デイン・カンフを始める。」

ジャンヌは藤原さんの愚痴を無視して会議を始めた。

ジャンヌ曰く、昨日やられたのは**バスカービル**の女子全員と**COMPOTO**の理子で、全員奇襲による各個撃破によるものだったらしい。

「……いくら寡兵とは言え、許し難いな。不意打ちとは」

ジャンヌの言葉に俺と藤原さん以外が頷く。

「ん？そうか？だって極東**戦役**だぞ？宣戦布告はやってるんだ。民間人に被害がない限り奇襲しようが各個撃破しようが問題はないだろ？」

「村田、ここには人種も宗教も環境も違う人間が集まっているんだ。そういう考えもある。」

俺が思わず口にした疑問に藤原さんは間髪入れずに答えた。

「で、どうする？今、GⅢとGⅣは別々に動いている。戦るか？」

キンジの言葉で……テーブルは静寂に占拠された。みんなの表情は……重い。

「仲間をやられた気持ちは分かるがの、儂をあまり失望させるでない。

……遠山の、策はあるのか？」

「そ、それは……」

タマモはメロンソーダを飲んだ後……目つきを変えてキンジに聞いた。

「君が遠山君か……」

「え？あ、はい……」

藤原さんはさっきまでの疲れ切ったサラリーマンの様な雰囲気ガラリと変えた。その雰囲気は……まるでジョン・エドガー・フーバーの長官の様に、全てを見通す様な暗い目をしていた。

「確かに君たち**バスカービル**は壊滅的な被害を受けたが……

**師団**としては想定内の被害だ。それに君たちは良い威力偵察をしてくれた。」

「……」

藤原さんの言葉に……キンジは睨んだ。しかし藤原さんは歯牙にもかけず、薄く暗い笑顔のまま言葉を紡ぎ続ける。

「彼らはまだ無所属だ。彼らと総力戦をしてもいいが……勝てるだろうが被害が大きくなるのは必至。取り込んで味方にした方がいい。」

「バ……バカ言うな!! あんな奴らどうやって取り込むって言うんだ!!」

キンジは猛反対するが……藤原さんは笑って話を続ける。

「その方法は後で話す。少なくとも極東戦役を続けたいなら彼らと総力戦は避けるべきだ。被害が大きすぎるうえに……彼らに勝ったとしてもポンサーはアメリカだ。何をされるか分からない。……君たちも分かるだろう?」

テーブルの空気はさらに重くなった。藤原さんはコーヒーに口をつけ、再び口を開いた。

「戦術はともかく……感情で戦略は変えられない。遠山君、反論しないなら……理屈と利をもって反論しなさい。」

藤原さんはそう言ってポケットに手をつ込み、小さな紙箱とデユポンのライターを取り出した。

そして、その小さな紙箱から小さな葉巻を取り出して啜え、キーンと澄んだ音を鳴らしてライターの蓋を開けて火をつけようとし……周りを見て渋々それらをポケットにしまい込んだ。

「藤原さん、煙草吸ってたんですね。」

「うん……今日の様な理不尽ばかりな時に気分転換で時々吸うんだ。任務中に酒は飲めないし……」

藤原さんは雰囲気を変え疲れ切ったサラリーマンに戻し、大きなため息をついた。

「……で、どうやって仲間にするんだ。」

キンジは不満そうに呟いた。

「それなんだが……」

ワトソンは困った様な、不満な様な口を開いた。

「<sup>ジーフォース</sup>G IV……いや、かなめか。彼女はムラタの戸籍上の妹で、トオヤマの血縁上の妹だ。彼女はトオヤマとムラタに会えたことをとても喜んでいた。」

……なんか、嫌な予感がする。

「……単刀直入に言う。ロメオだ。」

「ロ、ロメオっ……!?!」

「ろめお……?」

さあさドレスに着替えて……♪

ちようどこここでロメオが喫茶店で流れていた。

「……カラオケパーティーでもするのか?」

「はあ……」

『ち、違うと思いますよ?』

俺の疑問にジャンヌは大きなため息を、メーヤは引きつった笑顔で否定した。

「男版のハニートラップだ。それを貴様らにやってみよう。」

「……はあ!?!」

「ふざけんな!! 義理の妹にハニトラするとかどこの世界の話だよ!?!」

「俺に何しろってんだよ!!」

ジャンヌの言葉を聞いて、俺とキンジは言葉を荒げて反論した。

何しろと言うか……ナニをすればよいのじゃ」

「二人とも頑張つてね、応援するよお。いやあく今晚は良い肴ができた。」

タマモと藤原さんは『会議は終わった』とばかりに席を立つ。

「……藤原さん、昨日の事怒ってますよね。」

「いやあくそんなことはないよお。……あ、奢る件はチャラでいいからね」

藤原さんはそう言って、自分のカップと皿を返しに行った。

「さて……私たちも帰るか。」

「……そうだね。二人とも、ボクはアリア達を看護する。」

ジャンヌとワトソンもそう言って自分のカップを片付けに行く。

『アハハ……私たちの方でも皆様方に支援物資を送るので。イブキさん、フアイトです!!』

そのままタブレットはプツツリと切れた。メーヤがアプリを切ったのだろう。

俺はここで……やっこの会議は仕組まれたものだという事が分かった。仕組んだ者はやっぱりあの人しかない。

「ふ、藤原さんの裏切者おとおお!!」

「はっはっは!!会議の前に~~×~~根回し~~×~~しておくのは基本だよお村田あゝ」

藤原さんによる高らかな勝利宣言かえでかえで楓並木に響いた。

「あの、お客様?」

「……はい?」

「軍服を着たお客様からプレゼントだと……」

店員さんから渡されたのは……ドーナツの詰め合わせだった。その箱にはメモが貼られており……

『いやあゝごめんね。今度奢るからさ』

b y 藤原石町』

……こういうところがあるから憎めないんだよなあ。流石は第一中隊だ。

俺は店員さんにお礼を言ってその箱を受け取った。

俺は理子達のお見舞いに行こうと思ったのだが……礼服、すごく動

きづらしい。それにこんな高価な一張羅いっちようら、汚したら一大事だ。

また、他の生徒たちを見ると……全員が全員妖怪やお化けに仮装しているわけではない（仮装はしているが何でもいいようだ）。

……適当に軍服でも着て軍人のコスプレとでも言っておこう。俺はそう思いながら寮に戻り、ドアを開けた。

「ただいま。」

「おかえりなさい!!イブキにいく!!」

「……ふあ!?!」

制服にエプロン姿のかなめが俺に抱き着いてきた。

……なんでもうここにいるんだよ!!いや、家族だけどき!!

頼むから喧嘩はやめてくれ……

「か、かなめ……?」

「イブキにいっ!!昨日は酷いよ!!あんなに激しくするなんて……。腰が抜けそうだったよ?」

「……………」

かなめのそんな言葉より……もつとヤバいものが部屋にあった。

……この大量のごみ袋は何だ?

ごみ袋には理子やアリア達の私物が入っているのだが……それら全てが無残な姿になっている。

理子の積みゲーは全て割られ、アリアのコーヒーカップは金継ぎに出せないほど粉々、白雪の桐タンスに至っては薪に変わっている。

……あれえ?この状況、俺殺されるんじゃないか?

「いぶきにいっ……今のでドキッって来ると思ってたけど」

「……部屋の変わりように驚いて、さっきのセリフが霞かすんでんだよ!!」

白雪のタンスは数百万ぐらい余裕で越えるだろうし、アリアのコーヒーカップもいい値段はするだろう。理子の積みゲーが一番被害金額は少ないと思うが、それでも枚数が枚数だ。数十万はするだろう。

ずっと昔にイ・ウーから奪った金は三分割した後、俺と理子のが辻さんと神城さんにバレ、99%以上が国庫へ逝った。手元に残った金は弾薬に変身したため……

要は、弁償できない

……俺の私物はどうなってるんだ!?

俺は思わず自室へ走った。自室は……変化はないし、侵入された痕跡もない。酒蔵部屋も……大丈夫なようだ。

「イブキにいっお兄ちゃんお姉ちゃん達のは手を付けてないよ?処分したのはイブキにいっやっお兄ちゃんを誑たぶらかすメス豚共のだけだよ?」

俺の背後から……やけに響く声が聞こえた。俺は冷や汗を流しながら後ろをゆっくり振り向くと……かなめが居た。

かなめの目は……とても、とても冷たかった。

ダンテ・アリギエーリ 作：

『La Divina Comedia』というイタリアの古典を知っているだろうか？

主人公（ダンテ）がウエルギリウスと言う案内人と共に地獄・煉獄・天獄を行脚していく話だ。

その中……地獄の最下層・裏切者の地獄は『受刑者（？）が首まで氷に漬らされ、涙も凍る寒さに歯を鳴している』そうだ。

かなめの瞳は……その裏切者の地獄の様であった。

ただ物理的に寒気がするだけではない。精神的にも、思考も……何もかもが冷たかった。

「ねえ……イブキにい。なんでそんなに怖がってるの？」

かなめは首を傾げた。よく見れば……彼女のエプロンには返り血が付いている。右手には真っ赤な血が付いた肉切り包丁が……

「あ、お兄ちゃんサードの事？ GⅢの命令でアルカナム・リユオ双極兄弟アルカナム・リユオのためにイヤヤやっているだけで……お兄ちゃんサードには形式的にやっているだけだよ？ あたしはアルカナム・リユオお兄ちゃんサードよりイブキにの方が好きだし、HSSになる可能性が高いと思つて……」

俺はかなめの瞳を再び見た。裏切者の地獄を覗き込んでいるような気分になった。

「俺はちよつと着替えるから!! あつちに行つていてくれ!!!」

俺はそう言つてかなめを部屋から締め出し、鍵をかけた。

そして10秒も満たないうちに着替え、ダッシュしてその寮の部屋から出た。

俺は駐車場まで飛び降り、高機動車愛車に転がり込んでエンジンをかけようとするが……

キュルキュルキュルキュル……



「チクショウ!!なんだってこんな時に!!」

俺は思わずバックミラーを見た。そこには……裏切者の地獄の瞳が二つ、夕方の暗い影の中から俺を見ていた。

目が合った……

「動け!!動けってんだよ!!頼むから動いてくれよ!!!」

キュルキュルキュル……ドロン!!!

俺はアクセルを全開にし、逃げ去る様に車を走りさせた。

逃げ去る間も、二つの瞳がずっと俺を見つめていた……様な気がする。

「チクショウ!!俺が何やったって言うんだ!!」

俺は武偵病院の敷地に高機動車を滑り込ませ、A棟に逃げ込んだ。

……さ、さすがに、ここまでは来ないだろ。

俺は柱にもたれ掛かりながら息を整える。……周りの視線は無視する。

何とか息を整え終え、受付へ向かった。

「こんにちは。峰理子さんの部屋は何処ですか?」

「えくと……A棟の3階、303号室ですね。峰理子さんのお見舞いですか?」

「そうです。」

「今さつき、郵便が来まして……峰理子さんに渡してもらえませんか?」

そう言っただけで対応してくれた中年のナースさんが渡したのは……理子宛の現金書留と手紙だった。

……おい、一応部外者だぞ?俺に渡していいのかよ。

「えっと……俺に渡していいんですか?」

「武偵病院じゃあいつも通りですよ。それに武偵高の誰かかは……すぐにはわかりませんし。」

ナースさんはジロリと、俺を観察するように見た。

……え？何それ、怖い。

「……………ありがとうございます。」

俺は諦めた。

理子宛の現金書留と手紙を手にし、頭を下げた。

「悪いわねえ、手伝ってもらっちゃって。」

笑顔でそう言っていたが……瞳は笑っていなかった。

……看護師さんって、遅<sup>たくま</sup>しいんだな。

流石……武偵御用達の病院、看護師達も遅<sup>たくま</sup>しければやっていけないのだろうか……。

俺は階段を登りながら……その現金書留と手紙を観察していた。

両方とも……ヒルダからだった。俺は現金書留を見ると……

『損害要償額：3280円』

北海道網走市×網走監獄

ヒルダ・ドラネュリア』

……320円しか入っていないのに、なぜ送るんだ？ヒルダには莫大な資産があったはずなのに。

そんな疑問が沸き上がった後に……俺はあることとお思い出した。作業褒賞金だ。

作業褒賞金とは……刑務作業の報奨金であり、労働基本法には触れないものだ。

ヒルダの場合……まだ入所して一カ月。彼女の××月給××は700〜800円ほどだったはず。現金書留は1通430円なので……月給全部じゃねえか!!

「どうしたの？イブイブ？」

「……………ッ!？」

いつの間にか、俺の隣には……額や腕・太ももに包帯を巻き、騎兵銃<sup>カービン</sup>

サイズの散弾銃を皮のベルトで担いでいる理子がいた。

……全然気が付かなかったぞ!?

俺はそこまで集中していたようだ。

……まあいいや、さっさとこの封筒を渡そう。

俺は二つの封筒を理子におずおずと渡した。

「……理子に渡してくれって」

「イブイブ、ありがとね!!」

理子は可愛い笑顔で封筒を受け取り……封筒の宛名を見て真顔に戻った。

理子は冷たい瞳で無言のまま封筒の上部を破り、手紙を出して読み始めた。

読み終わった後、封筒二つをスカートのポケットへ乱暴に入れた。そのまま……無言が続く。

……く、空気が悪い。どうしろってんだよ。

そこで……俺は理子がコスプレをしていないことに気が付いた。

こんなイベントの時に、理子がコスプレをしていないとは珍しい。

「り、理子がコスプレしないなんて……なんかあったのか?」

「色々やってたら飽きて……な」

裏理子になり……呆れるように笑った。

「イブキ……場所を変えるぞ」

理子は売店へ行き、イチゴ牛乳とポツ〇ーを買った。そして談話室へ向かい、そこにある席の一つに座った。俺も理子の後について行き、隣に触る。

「こいつ……親族がいないんだよ。だからか分かんないけど……アタシに手紙が送られるんだ。」

そう言っつて、理子は皺くちやにした手紙を机に放り投げた。

手紙・現金書留の両方とも封が開けられていた。

「アタシは返信を一回もしたことがないのに、ほとんど毎週送るんだ

……」

理子はそう言つてポツキーをガツと掴み、バリボリとむさぼり始めた。そして口の中に沢山残っているポツキーをイチゴ牛乳で流し込む。

「ほんと……変な女。一切私物は持たされずに、薄い官品の服のまま11月の網走だ。それなのに……アイツの事はおくびに出さないで、あたしの心配ばかりするんだ。毎週手紙を出して、金まで渡すんだ。」  
プハツ……と飲み干したイチゴ牛乳のパックを……理子は遠い目で見ていた。

「アイツラに……アタシの10年が奪われたのに、今までひどい事されたのに、ヒルダを恨み切れないんだ」

理子はそう言いながらイチゴ牛乳の紙パックを握りつぶした。そしてチラリと俺を見た後、握りつぶした紙パックを振りかぶってゴミ箱へ投げた。

ボンツ……

紙パックはゴミ箱に当たり、床に落下した。

「……」

理子は席から立ち上がり紙パックをちゃんとゴミ箱に入れた後、何もなかったように席に座った。

……なんか言つて欲しいんだろなあ。しかしまあ、こんな時に何と言つていいものか。

ヒルダの今までの言動からして……おそらく、彼女は人間を人間として見ていなかったのではないだろうか。俺はヒルダの言動や☒☒理子を心配した手紙☒☒とやらを聞いてそう考察した。

もしも、自分の犬が人間の言葉をしゃべり始めたら……その犬を犬として扱うことができるだろうか。

その犬に冷たい固形物の餌を与え、その犬の前でA5ランクの肉のステーキを美味そうに食べることはできるだろうか。

しゃべる犬を……人間と同じ待遇にさせるだろうか。

ヒルダにとって、その喋る犬が理子だったのだろう。可愛い愛犬理子を心配し、自分の事を気にさせないように痩せ我慢をしているのだろう。

そして……理子も薄々気づいているはずだ。

……さて、どうしたものか。

「無難ちゃあ、無難だが……時間はあるんだ。時間をかけて自分で決めるしかねえだろ？」

秘技『問題先送り』!!これによってどんな困難な問題でも一時的に悩まなくてもよくなる!!

我ながら……最低である。

「網走監獄だから逃げ出す恐れもないし……吸血鬼だから人間よりも長く生きる。理子が生きているうちに答えを決められればいいんじゃないか？」

実際、理子が受けてきた仕打ちを俺は細かく知らないし……俺が答えを出すのは無粋で場違いだろう。

「結局はアタシで考えなきゃいけない……か。」

理子は背もたれに寄りかかり、天井を見上げた。

「……イブイブは厳しいね」

「俺が答えたところでどうなるってんだよ。それで納得するのか？」

「そうだけど……ね」

辻さんや神城さん・鬼塚少佐なら涙を流しながら話を聞きき、解決しようとかちこち暴走する回るんだらうけど……俺はそんなことはできない。

……我ながら薄情な奴だなあ

俺が自己嫌悪に陥おちいった時……理子は勢いよく立ち上がり、俺の前数センチまで顔を近づけた。

「さ、イブイブ!! A病棟303号室にご案内します!!」

「お、おう……」

理子はそう言った後、俺の耳元に近寄り……

「ありがとう」

「……ッ!!」

「ぎ、行く!!」

理子はそう言って俺の手を取り、強く引つ張り始めた。

……ケツ。ズルいったらありやしねえ。

「そんな引つ張るなよ」

俺はため息をついた後席を立ち、理子に引かれるままついて行った。

……自分が必死に悩んでいるのに、そんな中で他人を思いやるなんて。

リユパン3世の伴侶、つまり理子の母親は多数の男の心を射止めたらしい。確かに、その娘を見ればよく分かる。

リユパン3世をも虜にした女性……今度、銭形警部に聞いてみようかな。

「あ……理子。ポツキーの箱そのままだろ」

「……あ」

「……」

……シリアスな雰囲気か台無しである。

理子の案内の元、303号室に入ると……そこにはケガしたアリ

ア・白雪・レキの他に平賀さんとキンジがいた。

『女子・男子Ⅱ4:i』という男子が夢に見るハーレムな状態ではあるが……俺は全く羨ましくなかった。

怪我  
コスプレした美少女達の 手には……  
汎用機関銃、  
M60機関銃、  
対物ライフル  
武偵弾の箱詰め。そんな少女たちに囲まれたキンジは顔を真っ青にしていた。

「あ、村田君!!ちようどよかったのだ!!頼まれていた弾の製造が終わったのだ!!」

「え?マジで!!」

校舎の補修はまだまだあるって聞いてたのに……ありがてえ!!

たった27発分ではあるが……ないよりはあったほうがいい。

「平賀さんありがとな。後で取りに行くよ」

「わかったのだ!!」

俺はそう言つて、流れるようにこの危険な部屋から出ようと……

「イブキ、どこ行くんだ?」

「キンジ、テメエ……」

キンジは俺の手をガシツと掴み、俺を妨害した。

そのキンジの顔は『ようこそ、道連れ君』とでも言いたそうな表情をしていた。

「……キンジ、帰らせてくれよ。ここは『バスカービル』の部屋だろ? 部外者はさっさと退散するからよ」

「何言つてんだ馬鹿野郎。理子もいるんだろ? だったらイブキも当事者だろうが。」

「こんな火薬庫の様な部屋にいられるかってんだよ。キンジ、お前も分かってるだろ? こいつらのオーラが半端ねえって」

理子も含め、かなめにボコされた4人は殺気をムンムンと振りまいている。もしこの世界が漫画やアニメなら、彼女たちの後ろには阿修羅やら白虎やらが描かれているだろう。

「こんな火薬庫でファイヤーダンスを踊ってる様な部屋に居られるかよ。触らぬ神に祟りなしだ。」

「そんなの俺だつて分かってるんだよ。俺と一緒に道連れにn……」  
俺とキンジが言い争っている時……

「そう言えばイブキ」

「ひゃ、ひゃい!!」

アリアと呼ばれ、俺は思わず声が裏返った。全員の視線が俺に向く。

俺は思わずキンジを見た。キンジは……『してやったり』と、したり顔をしていた。

……キンジこの野郎、ワザと口論させて時間を使わせたな!?

「……あんたは『ミニチュアボトル』届いた? あたしの『パステル』は届いたけど、キンジの『カクテル』は届いてないらしいの。」

「……『ミニチュアボトル』?」

ミニチュアボトルとは、酒が50mlほどの小瓶に詰められたものだ。インテリアとしても使えるが……そんな物は送られていない。

「いや?送られてないけど……何それ?」

「バチカンからさつき送られてきたのよ。武偵弾よ。キンジの9mmパラベラム弾は小さいから時間がかかるのは分かるけど……そう言えばイブキの使う弾も小さかったわね。」

アリアはそう言っって色とりどりに着色された、45ACP弾の武偵弾詰め合わせセットを見せてきた。

その武偵弾の薬莖にはバチカンの国章の一部である『聖ペテロの鍵』が小さく彫られてある。弾頭には武偵弾の種類を示す国際基準のマークが色鮮やかに描かれてある。

……メーヤの言っっていた支援物資っって子の事だったのか。流石はバチカン、資金が豊富だな。

武偵弾は一発数百万、腕のいい職人によっっては数千円するらしい。それを十数種類詰め合わせて送るなんて……いくらかかるんだ!?

「そうだな……俺が使うのは9mmパラベラム弾に十四年式拳銃実包だ。しなあ……。」

「イタリヤの銃弾職人は腕がいいのだ。一度留学してみたいのだあ。」

平賀さんはその武偵弾を一つ手に取り、様々な角度から観察している。

……25ミリ機関銃で第1世代主力戦車、下手すれば第2世代主力戦車の正面装甲を貫通できる弾丸を作る平賀さんもすごいと思うけどなあ。

俺はそう思いながら、この部屋に飾られている花瓶に向かった。その花瓶には美しい花々が飾られている。

俺はその花瓶を手に取り……

「俺、花瓶の水換えてくるな。」

「さつき飾ったばかりだから換えなくていいぞ。」

……クソ、キンジめ。分かってやがった。



渋々、花瓶を元に戻した。

キンジはそれを確認した後、周りを見て溜息を吐いた。

「……ていうかお前ら。病院で何やってんだよ。ちゃんと養生しろ。」  
キンジは呆れたようにそう言う……

「これは強化合宿よ!!やられっぱなしはダメでしょ!!」↑アリア

「キンちゃんに一番近い存在は私なの!!あんな女はダメ、ダメ、絶対!!」↑白雪

「武偵は一発撃たれたら、一発撃ち返すものですから」↑レキ

「くふふ……。こういう女子会、面白くってさあ……」↑理子

……なるほど。かなめにこっぴどくやられたから、理子が煽り、アリアが音頭を取り、白雪は私怨のために、レキはプロ意識と私怨で参加したというわけか。

この4人は対かなめ戦で固まっているのだが……  
ディールンの総意は『かなめ達を取り込む』という事で決定している。

しかし、この強烈なオーラを放つ4人に『かなめと敵対はしない』という事を言わなければいけないのか。

……言ったら俺に銃口が向きそうだな。

俺は覚悟を決め、口を開こうとしたとき……

「ニッツ!!!」

4人は驚きながら各々の得物の銃口を303号室の入り口に向けた。  
おのおの

……チクショウ!!なんだってこんな時に来るんだ、かなめ!!

そこにはかなめが武偵高の制服を着て立っていた。彼女の  
絶  
対  
零  
度  
コキユートスの瞳は俺をじっと見ている。

「イブキにいいと、お兄ちゃん、ここにいたんだあ。あたし、心配して探してたんだよ?」

かなめはそう言うてにっこりと微笑むが……瞳は冷たいままだ。

「えっ……イブイブ、どういうこと？」イブキにいって……」

理子がそう言うって俺に詰め寄ってきた。俺はキンジに助けを求めようと……だめだ、キンジはアリアに殴られている。

「えっいや……、一応戸籍上の妹だ……」

「そう、戸籍上だから血はつながってないんだよ」

かなめはそう言うって理子を無理やりどかし、俺に抱きついてきた。

かなめはそのまま俺の首に手をかけ、無理やり俺の頭をかなめの顔まで近寄らせ……

「！！！！！！！！」

俺の目の前、数センチにかなめの藍色の瞳がある。俺の口の中に湿った柔らかい物体が入り込み、暴力的に侵略する。

「プハッ！！」

かなめの口の周りが濡れていて、目は潤んでいる。頬は興奮しているのだろうか、真っ赤だ。

……き、キスされた!?

「ああ……しゅーい、しゅーいよお……!!キスしただけでこんな……やっぱりお兄ちゃんじゃダメイブキにいじゃないと……」

周りからは殺気を含む視線が俺に集中している。

「い、イブキ、あんた裏切っ……!!!」

「！！……ッ！！！！」

アリアが猛抗議をしようとした時、俺は……鬼を見た。その鬼は美しい金髪を逆立て、文字通り怒髪衝天だった。

彼女の周りには殺気四割、怒気四割、その他二割によるオーラが発生している。もしアニメや漫画なら、彼女の周りには『スーパー○○人』の様な黄色いオーラが描かれているはずだ。

理子はゆっくりと、一步一步踏みしめる様に俺に近づいた。

「ねえ……イブイブ、何やってるの?」

「は、はっ!!!義理の妹にキスされました!!!」

軍の時のクセで……自分に起こった事を敬礼しながら理子に報告してしまった。

……改めて言葉にすると生々しいったらありやしねえ。妹にキス

ですか。セカンドキッスは恐怖の味……

「おいブリツ子、何イブキにいに近づいてんだよ。」

怒髪衝天の理子の肩に……コキユートス絶対零度の瞳のかなめが手をかけた。

「お前らにも言っておくがな……イブキにと今まで、どんだけラブコメをやったか知らないけどな……」

かなめは……まるでキンジが怒っている時と同じような口調で言った。

……環境は一切違えども、ここは血の繋がった兄弟なんだな。

俺はそう思いながら現実逃避をしていた。

「妹は最強なんだ!!お前らよりも固い、絶対の繋がりなんだ!!」

……うん、逃げよう。問題先送りだ。

俺は影の薄くなる技技を使いながら303号室から逃げ出した。

……チクショウ!!今日はなんて日だよ!!

「あ、村田さん。」

「は、はいいいい!!!」

俺に声をかけてきたのは、理子の封筒を渡してきたナースさんだった。

「峰理子さんに届けてくれました?」

「は、はい!!もちろんです!!」

「そう、ありがとねえ。あと病院は走っちゃだめですよ」

ナースさんはそう言った後、書類を抱えながら去っていった。

……あ、あのナース影の薄くなる技技を使っているのに俺が分かったのか!?

武偵高の病院って言うのは……なんて恐ろしいところなのだろうか。

俺は何度も入院しているのに、今日初めてそのことを実感した。

俺の酒が……

俺は病院から逃げるように去り、寮の自室に戻った。  
……なんか今日は逃げてばかりだなあ。

「ただいまあ……」

俺は心身ともに疲れ切った体でドアを乱暴に開けた。  
靴を脱いでそろえ終えた時、リビングからパタパタと足音がした。

……この足音だとリサだな。

我が家の健気なメイドさんの姿を見て癒されようかな。

ガチャツ

「あ、イブキ様!!おかえりなさいませ!!」

そこには、我が可愛いメイドさんが……

……え?

リサはエプロンをしていた。料理をしていたのだろう。

奥からスパイスのいい香りがするので、今晚の夕飯はカレー系統のものだという事が推察されるのだが……問題が一つあった。

リサのエプロンは血まみれだった。

しかも、リサの可愛い顔にまで返り血が付いている。

「イブキ様?どうされました?」

……かなめに理子に、今度はリサか。

俺の意識は段々と薄れていき、体に力が入らなくなっていった。

「え?イブキ様?!イブキ様——!!!」

「ほう、これがちきんかれえか。……うむ、美味である!!かなめよ、よくやった!!」↑ネロ

「ええ、少し老いた鶏のようですがちやんと処理してありますね。煮込みも完璧です。」↑ニト

「……（ガツガツ）」↑牛若&エルキドウ

我らが『COMPOTO』の面々に大好評のチキンカレー。何と、これを作ったのはかなめだったのだ!!

「絞めるのに手間取りましたが……よく頑張りましたね。素晴らしいです!!」↑リサ

「えへへ……。リサお姉ちゃんが付きっ切りで教えてくれたから」↑かなめ

リサがべた褒めし、かなめは顔を真っ赤にして頬を掻いた。

経緯はこうだ。

リサが懇意にしていた鶏卵農家から卵を産まなくなった鶏4羽をもらってきたらしい。

この鶏をもらってきて今晚の夕飯を考えている時にかなめが到着。かなめの提案によってチキンカレーに決定。リサはチキンカレーの足りない食材を買いに行き、かなめは鶏を絞めることになったのだが……それに手こずり血まみれになったそうだ。（リサが買い物に行った後、絞める前に大掃除破壊活動をしたと考えられる）

その後リサの指導の下、かなめは本日使う残りの分の鶏を絞めて解体し、チキンカレーを作ったそうだ。

チキンカレーが出来上がったのでかなめは俺を探しに行き、その間にリサは残りの鶏を絞めていた時に俺が帰り、気絶したそうだった。

……良かった、本当によかった。リサが人を殺したのかと思った。

俺はこのくそ美味いチキンカレーを口にしながら、ホツとしていた。

「そう言えばイブキ」

「なんでい……」

キンジはため息を吐きながら言った。

「俺に妹がいるっていうの……今まで冗談だろうなああって思ってた

ら、本当にいたんだな。」

「おう……俺が今まで嘘を言ったことがあるかあゝ」

「何度もあるな」

「……………」

……いやあ、このカレーは美味しいなあ。

若鶏と違い、古い鳥は肉が硬く少ないのだが……旨味が段違いだ。その肉を圧力鍋で一気に煮込んだおかげで鶏肉はホロホロと崩れ、鶏の旨味がカレーに染み込んでいる。

軍艦のカレーカレールガチ勢に比べたら一步劣るが……たった数時間で作ってこの味だ。最高と言ってもいいだろう。

しかも俺の味覚をピンポイントに攻めてくる。これがマズいはずがない。

☒☒イブキにい☒☒☒お兄ちゃん☒☒美味しい？」

かなめはニコニコと笑顔で聞いてきた。

旨い、確かに旨いのだが……素直に認めたくない気持ちも少しある。

「旨いけど……少し塩分が多いのか？ご飯が進むから良いけど」↑キ  
ンジン

「ちよつと煮込みが少ないな。短時間でここまで旨いものを作れたのはすごいけど……海軍カレーガチ勢のに比べたら一步劣るな。」

するとかなめの口は☒☒への字☒☒に曲がった。俺はその表情を見て罪悪感が沸わいてくる

その時、リサがかなめの肩にポンスツと手を置いた。

「かなめ様、次で挽回しましょう!!」

「ツ……………うん!!!」

かなめはスツと姿勢を直し、リサと熱い握手を交わした。

……ああ、美しきかな姉妹愛

俺はそう思いながらカレーを頬張り続けた。

夕飯の後、もちろん☒かなめ帰還の酒宴☒で俺達は大いに盛り上がった。

その酒宴がお開きになった後、『初めて会った兄妹どうし、積もる話もあるだろう』という事でキンジにかなめを擦り付け、俺はそのまま寝ようと……

プルプルプル……

俺の携帯が鳴り始めた。俺は携帯を手に取り、発信者を見ると……  
蝦夷テレビの藤崎さん!?

「はい、もしもsh……」

『あ、村田君ですか!!いやあくこの前はありがとうございまして!!』  
電話から特徴的なでかい声が聞こえてきて、俺は思わず携帯を耳から離れた。

『あの時の視聴率がいい具合でして!!また一緒にやってもらおうと思ってます!!』

彼の興奮度合いはすさまじく、ただでさえ声は大きいのにさらに声が大きく聞こえる。

俺は思わず音量を確認したところ……通常通りの音だ。

次に、スピーカーモードになってないか確認し……なってない。

……藤崎さん、あなたの声帯はどうなってんだよ。

『12月の上旬になると思うんでお願いしますね!!こっちでチケットの方は手配しておくんで!!』

「ちよ、藤崎さん待ってください!!いくら何でも急すg……」

『東京武偵高そちらの方には申請しておいたので単位は出ると思います!!細かい日程は後日伝えますね!!』

ピッ……プー、プー、プー……

……まるで嵐のような男だな

俺はため息を吐きながら携帯の通話をオフにした。

「いやあ……君も悪い男だねえ〜」↑インキー

「和泉君じゃないんですから、女子高生二人の相手なんて俺達にできる分けないですしねえ〜」↑藤崎

蝦夷テレビの会議室で藤崎はそう言い、ため息をついた。

やっと『和泉シェフの料理対決』と『絵はがきによる旅』の編集が終わり、一息ついていたところで……蝦夷テレビの部長に無理難題を押し付けられるのだ。

『あ、藤崎？12月の上旬は暇か？』

『……今のところ予定はないですよ？』

『なんでも副社長の知人の子がお前の番組の大ファンらしくてなあ……』

『……はあ？』

『12月の上旬に一緒にロケに行きたいそうだ。』

『え……？』

『女子高生二人、よろしくな。じゃあがんばれよ〜』

『ちよちよちよちよつと待つてくださs……』

このことを音野・鈴藤に相談すると……

『あの子達も呼んじやえはいんじやない？』↑インキー

『そう言えば~~絵~~絵はがきによる旅~~の~~最終夜がクリスマス特番のせいで遅くなるんだったよね？』↑カメラ

『『それだ!!』』

「まあ、なんとかなるでしょ」

鈴藤インキにそう言って、藤崎は東京武偵高の電話番号を打ち込み始めた。



「はあ……ほんとあの人は縁があるな」

俺はため息を吐いた後、携帯のアラームをセットし、寝よう……

「イ〜ブキにいつ?!」

「ひゃ、ひゃい!!!」

かなめの声で飛び起きた。

俺は声が出た方向を急いでみると……ピンクのパジャマを着たかなめがベットの近くに立っていた。

「いぶきにい、一緒に寝よ!!」

「て、てやんでい馬鹿野郎!!何言ってるやがるんだ!!」

「……?でも兄弟は一緒に寝るんじゃないの?」

「何言ってるの!?!」

かなめは緋色のサングラス(?)をかけており、そこからコードが伸びている。コードの先にはピンセットのようなものがあり、そのピンセットは理子の私物『妹ゴス』のDVD-ROMを挟み読み込んでいた。

「ぶりっ子から奪った妹ゴスだとそうあるけど……」

「創作物と現実は違うからな!?!」

「なくんだ、使えない」

かなめはそのDVD-ROMをピンセットから外し、ゴミ箱へ投げた。フリスビーのように飛ぶDVD-ROMは綺麗な軌道を描き、ゴミ箱へ……

ドスツ……カランカラン

ゴミ箱のふちに当たり、そのまま床に落ちた。

「……………」

静寂が俺とかなめの間を支配する。

「……かなめ、そう言えばなんだった人様の物を勝手に処分したんだ?」

俺はその静寂を切り捨て、疑問に思っていた事を口にした。

「だってイブキにいに近づくメス豚共だよ？イブキにいの近くにあんなメス豚共の臭いがする物を置いておけないよ？」

かなめは常識を問われたかのように、不思議そうに答えた。

「はあ……」

俺は大きなため息をついた。

かなめは俺達と1年ほどいたのだが……それまで研究所暮らし、俺達と別れてからはサードのところに行ったそうだ。研究所やサードのところでは常識を身に着けることはできないだろう。たった1年で常識を身に付けろって言うのが厳しいか……？

「流石に本人不在の時に私物を捨てる様な盗人まがいなことはやめろ。」

「……？」

かなめは理解できていないのか首をかしげている。

「人の物を盗るのはいけないって分かるだろ？」

「……うん」

「かなめは人の物を盗み、それを壊したんだ。お前の大事なものを同じようにされたら……嫌だろう？」

「…………うん」

かなめはやっと己のしでかした事を理解したのか……シユンとした表情のまま俯いた。

「あいつらの事が気に入らないってんならそれでもいい。けど悪いことはするな。かなめだけじゃなくて他の人にも迷惑がかかるからな。」

俺はそう言ってかなめの頭を撫でた。するとかなめはしよんぼりした表情から一転、気持ちよさそうに目を細めた。

……こんな説教してる自分の胸が痛い。

俺はその心の痛みをかき消そうと、かなめの頭を力強く撫で続けた。

「ふにやあ〜〜」

「……ハア」

俺はかなめの頭から手を離した。

「……………あ」

かなめは名残惜しそうに俺の手を見るが……………俺はあえてそれを無視した。

「とにかくだ。悪いことはするな。いいな?」

「う、うん……………」

かなめはコクリと……………何かをひどく恐れるようにうなづいた。

……………何をそんなに恐れてるんだ?まさか嫌われるとか思っているのか?

「わかったよ。何が悪いことか勉強して……………もう悪いことはしないようにする。」

俺はかなめの言葉で頭が痛くなった。

かなめは……………常識を知らないのか。GⅢのところで常識は身につかなかったのかよ。

「で、でも!!」

その時、かなめは俺の手をとり、意志の強そうな瞳で俺の目を見た。

「イブキにいの女の趣味は悪いよ!!ぶりっ子にチビ、カマトト、ダンマリ……………あんな色物ばかり飼ってるなんて!!」

「飼っていないからね!?それにその4人はキンジのほうだからな!」

「……………え?」

「え?」

俺はあの4人が男子寮に来た経緯や、キンジにご縁があることを詳細に説明した。

「チビにカマトト、ダンマリはともかく……………ぶりっ子が危険か」

「あ、あの……かなめさん？」

説明した後、かなめがブツブツと独り言を شدだした。しかも絶対零度の、瞳孔が開いた目をしながらの独り言のため……下手なホラーよりも恐ろしい。

「……とりあえずぶりっ子は警戒sh……どうしたの？」

「あの……大丈夫ですか？」

「えっと……とにかく、イブキにい!!」

「は、はい!!」

かなめは俺の目の前に人差し指を立て、プリプリと怒り出した。

「イブキには世界一素敵なおにいちやんなの!!なのにイブキにはその自覚がありません!!あんな女達は釣り合いませーん!!非・合理・的!!」

「……はあ？」

俺はそこまで尊敬される人間でないことは自分自身がよくわかっている。そのせいでさらに胸が痛くなる。

「とにかく!!あんなのがイブキにいの彼女とかありえないから!!!だから約束して!!」

「何をd……」

「あたし以外の女子と、触ったり抱きしめたりしないって約束して!!」

「あの……『COMPOTO』は俺以外女ばかりなんだけど……」

するとかなめはグイツと自分の顔を近づけた。

☒お姉ちゃん達☒は例外だけど……それ以外の女に近づかないって誓って!!」

かなめの絶対零度の瞳は俺の目を貫くようにジッと見ていた。  
「いや……それに平賀さんに頼んだ弾薬も貰いに行かないと……」

平賀さんに頼んだ200発のうち、まだ100発分の金しか払っていない。なので平賀さんには絶対に会う必要があるのだが……  
……ここでかなめに誓ってみろ、色々と詰むことになるぞ!!  
すると……かなめはある酒瓶を取り出し、俺に見せてきた。

「イブキにい……これなくんだ？」

「か、かなめ……お前え……!!」

かなめは俺の秘蔵のラム酒『ハバナクラブ RITUAL』が握られていた。

『ハバナクラブ RITUAL』とは、キューバで作られているラム酒の銘柄の一つで、キューバとスペインでしか売られていない貴重なラム酒だ。

俺はこの酒を近所に住む吉田の爺様から貰った時、飛び上がるほど喜び、よっぽどの良いことが無いと飲まないと誓った。

そんな大変に貴重なものがかなめに握られていた。

「イブキにい……？誓ってくれないと……」

かなめはそう言つて『ハバナクラブ RITUAL』の酒瓶を思いつき振り上げた。

「誓います、誓いますから!!それだけは勘弁を……!!!」

俺は思わずベッドから飛び起き、土下座をして叫んでしまった。

……そんな人質貴重な酒を取るなんて卑怯だぞ!?

チクシヨウ!!あれを取られて誓わない人間なんていねえぞ!?

「万一イブキにいとベタベタしている女がいたら、メツタ刺しにして殺してやるから」

「て、てやんでい!!軽々しく殺すなんて言うなってんだ、べらんめえ!!人様に迷惑かけるなってんだ!!」

俺がスクツと立ちながらそう言う……かなめは意外なことに、素直に頷いた。

「……い、イブキにい」

「何だよ」

俺はジト目でかなめを見下ろすと……彼女の頬が真っ赤に染まった。

「ヤバイ」

かなめは絞り出すようにその言葉を発した。

「……なにがd」

「かつこいい……かつこいいよイブキにい!!その鋭い目が……イイ!!」

濡れちやう!!これが二人つきりだと思うと……ダメ、疼うずいちゃう!!!これだけでヒスれそう……!!!」

かなめは自分の頬を両手で押さえながら興奮気味に言った。

……あれ?

かなめの手には酒瓶が……ない。おい、もしかして……

「イブキにいい、好き、好き、大すく……」

……バリエイイイン!!!

「……………」

寝室に虚むなしい破壊音が響き渡った。

視線を下方に移すと……床に琥珀色の海が広がっていた。その琥珀色の海の中に尖った水晶がキラキラと光を反射している。

大きく鼻で息を吸った。ああ……強いアルコール臭にラム酒の甘い香りとバニラの様な香りが鼻いっぱいに広がり、脳味噌がとろけそうな幸福感に包まれる。

心地よい香りに包まれた俺はしゃがみ、琥珀色の海に指をつけてそれを舐めた。さつき鼻で感じた香りが口いっぱいに広がり、思わず頬が緩む。もう一回琥珀の海に指先を浸すと……

「痛っ……」

人差し指の腹に……ガラス片が刺さっていた。指先からは緋色の血がスーッと流れ出てくる。

「……おい、マジかよ。」

指先の痛みで……俺はやっと残酷悲惨な現実な結果を直視した。

「ゴメンナサイッ!!ゴメンナサイッ!!ゴメンナサイッ!!」

俺が現実に戻った時、かなめが額を床に擦り付け謝っていることに気が付いた。

長時間謝っていたのだろう。かなめの声は掠かすれ、顔の下には透明な

水たまりができています。

「かなめ、もういいから」

俺は無理やりかなめの顔を上げた。整った顔はグシャグシャ、顔中から汗しるという汗しるが垂れ出ており、俺の手に滴したたってくる。

「そ、そんなつもりなくて……ただパフォーマンスの為で……」

「……なあ、かなめ」

俺が呼びかけると……かなめはビクリと体を緊張させ、一言もしやべらなくなった。

「……人の物を盗つちやいけないって言ったよな？」

「……ご、ごめんなさい!!お、同じの買って……」

「これなあ……価格はそこまで高くはないんだ。だけど……キューバとスペインでしか売られていない貴重な物なんだ」

その一言で、かなめの顔は真っ青から黄土色に変わった。

「形あるものいつか壊れる……俺はなあ、かなめ？」

俺はできる限り、優しい笑顔を作り、かなめと目を合わせた。

かなめは怯えた顔から悟さとったような顔に変化した。

「そりやあ俺だつて人間だ。大事にしていた酒を台無しにされたら怒りも湧く。けどなあ……まさか叱つてすぐに、人の物盗るつてのが許せねえ。」

俺は溢あふれ出る怒りを無理やり押さえ込み、必死に冷静さを保ちながらしゃべる。

「かなめ、人呼んで来い。そうだな……リサがいいな。まずはコレを処分してからだ。」

かなめは寢室からすつ飛んで出て行った。

かなめの形相ぎやうそうを見たのか、この部屋に住んでいる全員が集まってきた。そのおかげで割れた酒瓶はすんなりと片付いた。

「な、なあ……」

「あ？」

割れた酒瓶を片付けた後、俺達はリビングへ移動した。

そして移動してすぐ、ソファア―に座る俺にキンジが声をかけてきた。

「たかが酒だろ？それでかなめを殺s……」

「なんだって？」

「い、いや……なんでもないです」

キンジはスゴスゴと下がった。

……流石に殺しはしねえよ、殺しはよ。

流石に酒瓶を片付け終わる頃には怒りも収まっていた。しかし……かなめは常識が欠如してるとは言え、人の物を盗むのはやっぱり許せない。

言ってダメなら……体で覚えさせるしかない。

「かなめ、来い。」

かなめは何かを悟り、覚悟したような面持ちでやってきた。

俺の前に来るとかなめは正座し、青色に光る短刀を俺に差し出してきた。

……あれ？この刀、見覚えがあるぞ？

「イブキにい……いえ、イブキお兄様。あたし……私のした事、お詫びの言葉もございませぬ。ですが……一思いに、お願いします。」

……なんか誤解してねえか？

「本当にやるのか？」

キンジは心配そうに俺に聞いてきた。

「これは躰だ。……なあキンジ。嫌なことに、俺は小っちゃいころは親に殴られてばっかりだったよ」

「そうだったけ？」

「そうだ」

俺は……もうほとんど覚えていないが、前世(?)の両親を思い出した。



小っちゃい頃は殴られてばかりだった。しかし、それは虐待とかではなく、子の成長を願っての躰しつけという事は……今の俺にはよくわかる。

その前世（？）の両親のおかげで常識や善悪を知り、今世（？）の両親（故）にはあまり殴られずに済んだ。

「キンジ、お前も親やキンイチさんに殴られた覚えはあるだろ？……でもな、かなめは殴ってくれる親はいなかったんだ。居たのは己の欲のために虐待する研究者ぐらいだ。」

俺はキンジの目をしっかりと捉とらえて言った。

「かなめが俺達といた一年間……俺達はかなめを可愛がっていたさ。だけど……そこで俺達はほとんど叱らなかつた。そのツケがここに来てたんだ。だから……責任は取らなきゃいけないんだ」

「わかったよ。」

キンジはそう言った後……かなめから目をそらした。他のメンバーはかなめを凝視している。

「やるか……」

「ッ……!!!」

俺は膝の上で腹ばいになるかなめのパンツとスカートを握り、一気にひん剥いた。

バシッ!!バシッ!!バシッ!!……

「ごめんな……ごめんなs……」

俺は……泣いて謝るかなめを見て心を痛めつつ、彼女の尻を叩い

た。

……前世の両親には散々やられたなあ。

これは……やる方も胸が痛い。『某春日部の嵐を呼ぶ幼稚園児の母』は改めて尊敬する。

「あ……あ……アツ!!!」

俺は手に魔力強化などをかけず、素手でかなめの尻を叩いた。そのせいでかなめの尻と俺の手は互いに腫れていく。

「かなめ……もう人の物は盗むな!」

「アツ……アツ……」

……なんか、俺の太ももが濡れている感触がするんだけど。

バシツ!!バシツ!!バシツ!!……

「アツ……も、もう盗らn、アヒイ……!!!」

俺は無心のまま……ひたすらかなめの尻を叩き続けた。

「イブキにい、ゴメンナサイ……」

「……もう人の物盗るんじやなえぞ。」

「……うん」

俺はかなめを背負い、ベッドへ運んでいた。どうも尻を叩きすぎて腰が抜けたらしい。

「イブキにい……」

「……なんだ?」

「……ちゃんと弁償するから……嫌わないで」

背中からかなめが怯えているのが伝わってくる。

「あんなことぐらいで嫌いになるかってんだ。」

「……うん。……同じの、買ってくるから」

「期待しないで待ってる」

アメリカに飼われている組織が、キューバの物を簡単に手に入られるはずがない。複数個、少なくとも1つは他国を介さないと手に入らないはずだ。

……ああ、飲みたかったなあ。

今は亡き酒の味を思いつつ……ベッドにかなめを置いた。

「イブキにいに立てなくなるほど激しくされて、ベッドまで運んでもらえるなんて……」

かなめはそう言つて真つ赤にした顔を頬で抑え、イヤンイヤンと顔を横に振る。その仕草が癩しやくに障さわる。

「てやんでえ、べらんめえ……反省してねえのか？」

「ごめんなさーい!!」

かなめは不利を悟さとつたのか、頭まで布団をかぶった。

……やっぱり、妹には勝てねえわ。はやてに同じことされても嫌えないだろうしなあ。

「……ハア、おやすみ」

「おやすみ〜!!」

俺は寢室のドアをゆっくり閉めた。

俺はその後、酒蔵部屋から『ハバナクラブ3年』（ラム酒）を持ってリビングに来た。

かなめの前では格好つけたが……『ハバナクラブ RITUAL』を台無しにされたのは大分だいぶんシヨックだった。

飲んで今日の事は忘れよう……違う銘柄ではあるが、ハバナクラブでも飲んで気持ちよくなるうと思っていた。

「……つたく、今日はなんて日だ」

朝までGⅢを追いかけ、午後はファミレスでハニトラをすることに  
なり、夜に大事な酒が台無し……か。

「……ハア」

俺は大きな溜息をつきながらグラスに酒を注ごうと……

「イブキ様、飲み過ぎは体に毒ですよ」

リサが俺の酒瓶を取った。リサの顔は……プリプリと怒り、頬を膨らましていた。

「今日ぐらいいは深酒したいんだ。許してよ」

するとリサは俺のグラスを奪い、酒を注いで一気に飲み干した。

「私も付き合いますから、あまり飲まないでくださいね」

「……ああ!!」

ラジオからは「さだまさし」の『関白宣言』が流れていた。

「かなめ様を呼ぶのは良いんです。ですが、人が増えれば御飯の計算が狂うんですよ!」

「ハイ……スイマセン……」

リサはそう言うのと再び酒をグラスに注ぎ、一気に飲み干した。

「ほかにも!!ズボンに薬莖を入れっぱなしにしなさい!!洗濯機が壊れます!!」

「……ゴメンナサイ」

リサは自分の握っている酒瓶を見た。酒は瓶の4分の1ほど残っている。それを確認したリサは酒瓶に口をつけ、一本空けてしまった。

「俺、ほとんど飲んでないだけd……」

「イブキ様!!ちゃんと聞いていますか!?!」

「……聞イテイマス」

部屋には、「さだまさし」の『関白失脚』が寂しげに響いていた。

金は天下の回りもの……

リビングで寝ていた俺とリサは、かなめに『妹目覚まし（おたまでフライパンを叩く）』によって……頭痛を覚えながら起きた。

「うう……頭が痛いです」

「リサ、とりあえず水とアスピリンな」

俺はリサに水の入ったコップとアスピリンの錠剤を渡した。

……新幹線でアスピリンのボトルを落とした後、代わりに薬局に行って探したつけ。アメリカほど安くないし量もないけど……それでも重宝している。

「あ、ありがとうございます」

リサは顔を真っ青にしながら、薬を飲んだ。リサは飲み干したコップをキッチンに戻そうとし……固まった。

「ん？……どうした？」

リサの視線の先をたどると……壁時計があつた。時刻は7時28分。

「あ……」

何時も朝食は7時20分ぐらいに食べ始める。そしてこの時間……朝食を作る時間が無い。

「……キヤアアアア!!」

リサの悲鳴が部屋に響き渡った。

俺達の目の前にはトーストとベーコンエッグ、サラダ、オレンジジュースが色鮮やかに広がっていた。

トーストは全粒粉を使用してある食パンを使い、ベーコンはカリカリ一歩前という絶妙な焼き加減……うん、俺の好みにベストマッチ。

「リサお姉ちゃんがぐっすり寝たから、代わりに作ったんだ」

エプロン姿のかなめはそう言いながら、全員分の料理をテーブルに

置き、椅子に座った。

「かなめ様すみません。リサが飲みすぎたばかりに……」

「……俺も止められなかったから同罪か。すみません」

……でも、昨日あの迫力。普通は止められねえよ

俺はそう思いながら座った。テーブルにはリサの悲鳴で起きてきた面々が眠たそうに座っている。

「……いただきます」

俺はそう言っかじてパンに齧りついた

「ほお？ 貴様……」

ネロはとてご立腹のようだった。

「……なんでしょう？」

ニトもアラオオーラ全開でネロと張り合う。

「目玉焼きにはケチャップであろう!!」 ↑ネロ

「ソースに決まっています!!」 ↑ニト

俺はその喧嘩じゃれ合いをボケくつと見ながら、目玉焼きに醤油をかけた。

……今度クレ○ジーソルトも試してみようかな

午前の授業中、ノートだけは取っておいた俺は急いで荷物をまとめた後着替え、学校から出ようとしていた。

「イブキ何やってんだよ、軍服なんて着て……。一緒に学食行かねえか？」

俺は校舎を出ようとした所で武藤に捕まってしまった。

「武藤悪いが……。これから用事があったな。」

「なんだよ、単位はそろってるそうじゃねえか。連れねえなあ……」  
「平賀さんへの代金がまだ作れなくてな……」

俺の言葉に納得したのか、武藤は□□なるほど□□と頷いた。

「お前って値切らないし、色も付けるからなあ……平賀さんや貴希がお前から仕事貰うとホクホク顔してるぞ。」

「下手に値切って技術者から恨まれたくないしなあ。……まあ、その代わり仕様と納期を守らなかつたら文句言うけど。」

……当たり前だ。わざわざ言い値で買うんだ。正当な理由がなければ、仕様以上の物で納期を守ってくれなければ困る。

俺のその言葉に武藤は顔が青くなった。

「……そうだった。お前の車高機動車の改造……相当手こずったしな……。ま、頑張つて来いよ」

ずつと前に俺の車高機動車の改造を武藤に依頼し、追試のせいで納期が守れなかつたため……数日間作業場ピットに監禁したのを思い出したのだろう。あの時は『全額返すから帰してくれ!!』つて言つてたっけか。

……まあ、高めの料金に加えて結構色を付けたが。

「ああ、行ってくる」

俺は革靴を履き、校舎を出た。久しぶりに来た軍服は……この時期にはまだ暑かった。

「あの……ここにイブキにいを呼んでくれませんか？私かなめつて言います。」

□□イブキにい□□……？村田君の事かな？」

「あ、はいっ!!そうです!!」

イブキが急いでクラスから出て行ったあと、かなめが弁当を持ってここに来た。

「おい……あれって噂うわさの……」

「あれが……確か遠山の妹で、村田が育てたっていう……」

「何あの子、めっちゃ可愛い!!」

「村田……あんな顔して□□光源氏計画□□なんてしてやがったのか……」

「あいつ……あんな顔してそんなことを……うん、あり得るな。」

クラス内でのイブキの評価が大暴落・ストップ安にまで落ちている中、キンジはため息を吐きながらかなめの下へ向かった。

「あ、お兄ちゃん!!イブキに知らない?」

かなめのその言葉に周りも色めきだつ。

「おい、マジで遠山の妹だつてよ」

「ツケ……勝ち組かよ……」

「とうか……村田つて……ロリコン?」

「……あり得るな」

イブキの株価が大恐慌を起こしているが……それを無視して、キンジはかなめに答えた。

「あいつ、用があるつて言つてどつか出かけたぞ?」

「え!?ホント!」

そう言つた後、かなめは勢いよく鼻で息を吸つた。まるで何かの香りを感じるかの様に……

「いぶきには……こつちかな?」

そう言つてそのまま……臭いを辿つてどこかへ行つてしまった。

……臭いでたどるつてどんだけだよ。

キンジは自分が標的にならないことに安堵していた。

俺は港区アクア・エデンに来ていた。

アクア・エデンとは、日本でカジノや風俗が許される数少ない場所の一つで……吸血鬼などの人外人口島でもある。

そのため、その人工島には身分証が無いとは入れなく、入るための交通手段が鉄道だけだ。まるで監獄島アルカトラスの様ではあるが……人と人外の住み分けができて国内でも希少な場所の一つだ。

なお、なぜか管轄は国内担当ではなく、海外担当第一中隊(うち)である。



さて、俺がここに来た主な理由は金のためである。平賀さんに頼んだ25ミリ機銃の弾（費用を抑えた方）100発（90万円）の資金が用意できない。

金がないならどうするか……90万の依頼など簡単に受けられないため、カジノで稼ぐしかない。

有難い事に、書類上では第二中隊所属であるために比較的簡単にアクア・エデンに入ることが出来る。

ついでに……第二中隊の面々が金に困り始めたら『敵の観察及びその他観察力の向上訓練』と称して、アクア・エデンのカジノで荒稼ぎしている。

……まあ、それだけじゃないけどな。

ここで知り合った人達の挨拶周りや情報収集も一応は兼ねてはいる。

……藤原さんが『近々違う複数の組織が攻勢をかけてくる』と言っていた。もし俺が敵なら……東京に近く、問題を起こしやすいアクア・エデンをまずは狙う。

俺はそう思いながら周りを見る。アクア・エデンは夜の街であるため、お昼時の今は人が少ないのだが……それでも、ちよつとした町に比べたら断然人は多い。

……まあ、まずは飯だ。

俺は空腹を訴える胃を押さええながら……目当ての店に向かって歩き始めた。

俺はアクア・エデンの一角にあるカフェバー『アレクサンドリア』の扉を開け、中に入った。

カランカラン……

扉を開け、中に入ったが……前回のよう到大房さんによる接客が無かった。周りを見渡してみたところ……誰もいない。

……まあ、大房さんはいないか。

アクア・エデンは夜の街であるので……この住人の生活サイクルが昼夜逆転している。この住人からしてみれば……普通の人の昼12時が夜12時に当たるのだ。

しかし……それを考慮したとしても、誰もいないのはおかしい。

俺はいったん外に出て扉を再び確認すると……そこにはOPEN Nという看板が下げられている。

……あれ？

俺は立ち往生していると、店の奥から物音が聞こえた。音が聞こえて十秒もしないうちに、店の奥から赤みがあった茶髪で細目の色っぽいお姉さんが来た。

彼女は『アレクサンドリア』のマスター・淡路萌香<sup>あわしもえか</sup>。他にも色々兼業しているのだが……今は割愛。

「イブキ君、久しぶりね。まだ開店前なんだけど……」

「え？すでにOPENになってましたよ？」

「間違えちゃったのかしら？……まあ良いわ。そろそろ開店時間だし。」

淡路さんは首をかしげながら、カウンターに水の入ったコップを置いた。

「すいません、開店前に……。BLTサンド4人前と紅茶をお願いします。」

「はいはい」

数分後、俺の目の前にはうまさそうなサンドイッチが山になっていった。昼はまだ食べていないので……腹がペコペコだ。

俺がBLTサンドにかぶりついて数分、すでに山は消え去り、サンドイッチは残り一つになっていた。

「相変わらず食べるのが早いよね」

「まあ、仕事柄そうなんで……。ところで、アクア・エデンで変な事や噂とかありませんでした？」

「……イブキ君、ここは一応カフェバーなんだけど？」

淡路さんは肩をすくめ、呆れながら答えた。

「このマスター・淡路さんはアクア・エデンで知らないことがない、情報のプロでもある。」

「いつもここに来たらそう言うわね。……まあいいわ。ここ最近だと

……新興の麻薬組織が潰れたぐらいね。」

……その麻薬組織は潰されたのだから、脅威ではないはず。

「あと、最近は中国系や多国籍の人達が何かコソコソしているみたいね。」

「……そうですか。」

藤原さんが言っていた事と関係ないといいが……

「そう言えばイブキ君、極東戦役の方はどう？」

俺はその言葉で思考を止め……思わず拳銃に手が伸びた。

「藍幫ランバンのココ姉妹を倒したら気に入られて……今度は『ジーサード・リーグ』に行った妹のかなめちゃんに言い寄られて……あら、話しすぎちゃったかしら？」

「ええ、全く……」

俺は警戒しながら……拳銃にそえた手を戻す。彼女の表情は変わっていないが……殺気はない。

俺はため息を吐きながら残りのサンドイッチを一気に食べ、紅茶を流し込んだ。

「お詫びに一つ、重要なことをお姉さんが教えてあげる。」

俺は淡路さんの目を見た。彼女の顔は微笑んでいるが……彼女の細目は笑っていない。

「イブキ君の相棒が近々来るそうよ？……お願いだから来る間は

アクア・エデンに來ないでね？私はまだアクア・エデンを沈めたくないわ。」

……何を言っているんだ？

俺は淡路さんの顔をジツと見た。……彼女の目は真剣だ。

「流石にアクア・エデンを沈めるなんてことできませんよ。……ごちそう様でした。お会計はここに置いておくんで。」

俺は勘定を済ませ、店を出た。

俺は『アレクサンドリア』から『ピラミディオン』のカジノへ向けて歩いている途中……淡路さんの言葉の意味を考えていた。

……俺の相棒だつて？しかも近々来る？

今までの中で、 海外在住で一緒に戦った人間 を思い出してみた。

最初に思いついたのは……初めて一緒に戦い、その後重大事件に一緒に巻き込まれるあの疫病神。ニューヨーク市警の

 ジョニー・マクレ だ。

確かに、ジョニー・マクレが東京なんかに来てみる……何が起こつても不思議ではない。

だが……俺がジョニー・マクレを疫病神と思っているのに対し、ジョニー・マクレも俺を疫病神だと思っている。

ジョニー・マクレが好んで日本に来るとは思えない。

次に……俺・理子と一緒にイ・ウーのポストーク号へ潜入した ハナ・ウルリーケ・ルーデル を思い出した。

彼女は魔女連隊レギメント・ヘクセの魔女連隊空軍ルフトヴァッフェに所属していた凄腕パイロットだ。

俺達と一緒にポストーク号へ潜入した後、日本と司法取引をし、本国へ帰つたと聞いている。彼女の性格からしてひよつこり日本へ来

そうではあるが、アクア・エデンを沈めるほどの戦力ではないはず……ないよね、ないといいな……うん。

ロサンゼルスでの中国総領事の娘誘拐事件では、ロス市警のカーターさん、香港警察のリー警部と一緒に戦ったが……あの二人組と俺・ジョニー・マクレーのタッグによる2チームが協力して戦ったような感じだ。淡路さんが彼らを相棒とは言わないはず。

……ハンナだったら面倒事は起きると思うが、流石に命のやり取りにまで発展することはないか。心配して損したぜ。

俺は薄暗い思考から脱却し、晴々した気持ちで『ピラミディオン』に入った。

十数日後、俺の予想を大きく裏切り、最悪な事件に巻き込まれることになるとは……この時、俺は想像もできなかった。

その後、俺は『ピラミディオン』のカジノのルーレットで大勝した。平賀さんへの代金を差し引いても十分に遊べる量だ。

……さて、今日は色々遊べるな。

俺はその余ったチップの一つを弄んでいると……

「だああああ!!!これでどうだあ!!!」

「あ、両さん悪いね。また僕の勝ち。」

「うわああああ!!!」

聞きなれた声がかジノで響き渡った。俺はその声の方向へ向かうと……そこにはOTLの状態で号泣する両川さんとホクホク顔でチップを取っていく山本さんがいた。

「今月のワシの給料が……」

「フワア……。カンキチは弱いから勝負しなきゃいいのに。」

「う、うるせえ!!男が負けっぱなしでいられるか!!」

ディーラーの銀髪少女・エリナがアクビ交じりに言った言葉がグサリと刺さったのだらう。両川さんは顔を真っ赤にして反論した。

この様子から考えるに……両川さんはまた給料をスツたのだらう。まあ、いつもの事でもある。

「山本!!もう一回勝負だ!!」

「……でも両さん、すかんびん素寒貧の状態で何をかけるってんだい?両さんの制服や拳銃、警棒なんていらないよ?それに……僕の貸したお金、そろそろ返してよ。」

「うっ……」

両川さんはその言葉でつまり、助けを求めるように周りを見回し始め……

……ヤバい、目が合った。

「おい、村田あ!!ちよつとでいい、10万……いや3万でいい、金を貸してくれ!!」

この場の全員が俺に目をやった。

「いや……両川さん、前貸した100万そろそろ返してくださいよ。その100万がないせいで今日稼ぎに来たんですから」

「ちや、ちゃんと返す、返すから……3万、いや!!2万でいい、貸してくれ!!」

両川さんはそう言って俺の足にすがり付いた。両川さんが大声で言うため……この様子を見に客が来るわ来るわ……。

「……はあ。」

俺は両川さんに5万円分のチップを握らせた。この5万、ドブに捨てたと思おう。

「さっすが村田だぜ!!さあ、山本もう一丁勝負だ!!」

両川さんはそう言って席に着き、テーブルにそのチップをバーンと置いた。

「俺も入らせてもらっていいですか?」

エリナに山本さん……強敵ぞろいだ。絶対に気分よく遊べるはずだ。

「もちろんだ、村田君!!……5月の例の件以来だっけ?君の腕が鈍っ

てない事を祈るよ」

山本さんは快くテーブルに入れてくれ……

「イブキー!!全然来なかったから寂しかったんだよ!!」

エリナは頬を膨らましていた。

「アメリカで人質救出した時ケガしたって聞いたから……心配だったんだよ!!」

「いや、一応メールで『大丈夫です』って送ったけど……」

「メールだけじゃなくて……直接顔を出して欲しかったよ!!」

「まあまあ落ち着いて……」

山本さんがエリナをなだめ、渋々エリナはディーラーをやり始めた。

「何する?……さつきまでポーカーやってたけど……」

エリナはご機嫌斜めな態度をとりながら聞いてきた。

「そりや、ポーク……」↑両川さん

「ブラックジャックで行こうか」↑山本さん

「ブラックジャックがいいな」↑俺

見事に意見が分かれたようだ。

「さつきまでポーカーやってたんだ、ポーカーでいいじゃねえか」

「いや、村田君とやるならブラックジャックじゃないと……」

「俺も山本さん相手じゃブラックジャックじゃないといい勝負ができませんよ……あつ!」

俺は思わず山本さんの顔を見た。山本さんも俺の顔を見てにやりと笑う。意見が一致したようだ。

「『そう言えば両川さん(両さん)、お金返してk……』」

「そうだな!!ブラックジャックだよな!!ポーカー飽きちゃったしな!!」

さて、4人でブラックジャックを1時間ほど楽しんだ。結果は……

俺：ギリギリ黒字、トントン

山本さん：ボロ勝ち。8万ちよつとの黒字

両川さん：大負け。9万の赤字（途中で足りなくなったため、強制<sup>善意</sup>で俺と山本さんが貸した）

さて、もう一勝負行こうとした所……山本さんに向かって紺色<sup>こん</sup>のスーツを着た不機嫌そうな人が近づいてきた。歩き方は……軍や警察で訓練されたような歩き方をしている。

その不機嫌そうな紺<sup>こん</sup>スーツは山本さんの隣に立った。

「長かn……大しよ……山本さん、また抜け出したんですか。ハア……仕事してください。」

「宇垣君……もう一勝負、もう一勝負だけだから……」

「長かn……大しよ……山本さんがいないと会議が進まないの……行きますよ。」

不機嫌紺<sup>こん</sup>スーツは一切表情を変えずに山本さんの襟首を掴み、そのまま引きずり始めた。

「ちよ、ちよつと待つて!!せめてチップは回収させt……」

「黒島と三和が回収するので……。長かn……大しよ……山本さん、駄々こねないでください……行きますよ。」

「行く、行くから!!せめて立たせてええええ!!!」

山本さんは鉄仮面不機嫌紺<sup>こん</sup>スーツによって引きずられていった。（山本さんが見えなくなった後、二人のサングラス紺<sup>こん</sup>スーツがチップを回収していった。）

このまま解散かなあ……と思いつながら周りを見ると……両川さんがいない!?!



俺は急いで探すと……イソイソとカジノを出る両川さんがいた。

……あのどさくさに紛れて逃げる気だな。すでに大分距離はあるし、人ゴミを分けなきやいけな。これは追いつけねえな。

俺はため息を吐きながら席を立った。もう3時半、金の用意ができなし……帰って平賀さんに代金を払おう。

「イブキー」

「ん？」

エリナは寂しげな表情のまま、イタズラを思いついた時の様なワクワクした声で俺を呼び止めた。

「イブキがケガしたって聞いて……ミウもアズサもリオもニコラも……みんな心配してたんだよ？」

「お、おう……」

エリナがそのチグハグな表情と声のまま……俺に近づいてくる。

「だから……寮に来て顔を出すぐらいしてもいいと思うんだよ？」

エリナはグツと俺の襟元を掴み、至近距離で言ってきた。

俺が武偵高に向向する前、テロリスト狩りの任務でアクア・エデン潜入のためにアクア・エデンの学校（人外も可）に転入したことがある。その時エリナ達と同じ寮で2〜3週間一緒に過ごしたのだが……今は部外者だ。流石に寮の出入りはマズいだろう。

（その時、俺は~~××~~吸血鬼~~××~~として入寮し、寮の全員に~~××~~人間~~××~~とバレた経緯がある）

「い、いや……流石に急に行くのはマズいだろ。もう部外者だぞ？」

「イブキの部屋は残ってるし……リオも時々間違ってイブキの分、作るんだよ？」

リオとは稲叢莉音、『高校生活一学期編 若頭はないだろ……』に登場。本日は会わなかったが、カフェバー『アレクサンドリア』で働いている。

そして、矢来美羽・布良梓、そしてエリナ、ニコラたちが住む寮の

家事を一人でこなす健気な女の子だ。なお、巨乳。

……でも、なんだって俺の分作るんだよ。寮を出てもう一年は経つてるぞ？

「いや……流石に急に行ったら迷惑だろ……」

「……コナイノ？」

俺が答えた瞬間、エリナの瞳はハイライトが消えた。俺は背筋が凍るような……恐ろしい雰囲気を感じる。

「い、いや……流石に迷惑だし……いいかなって……」

「イブキー……迷惑ト思ッテナイヨ？ダカラ……来テ？」

「……は、はっ!!」

俺は思わずエリナに敬礼した。おかしい、エリナはこんな子じゃなかったような気がする。

「ダー、じゃあエリナも仕事終わりだし……着替えてくるから、待っててね？」

「りよ、了解!!」

そして、エリナ満面の笑みを浮かばせ、その後『STAFF ON LY』と書かれた扉をあけ、向こう側へ行ってしまった。

俺はエリナの姿を敬礼しながら見送った後、姿勢を崩した。

「やっぱりあれか？あまり会ってなかったからk……ッ!？」

俺は……一瞬殺気を感じ、感じた方向を見たが……そこには誰もいなかった。

……まさか、監視されていたりしてな。

俺はその考えを明後日の方向に投げ捨て、ため息を吐きながら歩き始めた。警戒のしすぎだろう……そうに決まってる。

……『ピラミディオン』のロビーで待ってしよう。後、リサに帰るのが遅くなるって伝えるか。

「お、おい……」

「このスロット……なんか潰されてるぞ!？」

「しかも……なんか人が無理やり握りつぶしたような感じが……」

「ば、馬鹿野郎!! 人間がスロットこれを潰せる訳ないだろ!？」

……ん？なんか後ろが騒がしいが……どうしたんだろう？

いつ撮ったんだよ……

俺はエリナと一緒にアクア・エデンの寮へ行くと……寮のみんなは驚きつつも喜び、歓待してくれた。

そこで夕食（生活サイクルが逆なため、メニューは朝食）をいただいた後、俺は家路についた。

さて、カジノでボロ勝ちした翌日の放課後、『一緒に映画を見たい』と駄々をこねるかなめを何とか説得し……俺は110万の入った封筒をポケットに忍ばせながら平賀さんの作業室へ向かった。

本来は25mm機関銃の弾薬100発分・90万円ではあるが……残りの20万は忙しい中で作ってくれたお礼だ。

コンコン

「あ、開いてるのだ〜!!」

俺は平賀さんの声を聴いた後、扉を開けた。そこには……大きな箱に頭から突っ込み、足をジタバタさせている平賀さんがいた。平賀さんは汚れたツナギを着ていた。……なんだかんだ言っても技術屋なんだなあと思う。

俺は平賀さんを引っ張り出し、万札がびっしり入っている封筒を渡した。

「平賀さん悪いね。教務課マスターズからの依頼もあつた中、作ってもらつて。」

「イブキ君はお得意様で、納期に厳しいから頑張つたのだ。」

「いや……流石に教務課マスターズからの依頼だったら俺も納得するぞ!」

平賀さんは注文していた最後の27発を俺に納品した後、笑顔で封筒から万札を出して紙幣カウンターにセットした。

「……まあいいや。そう言えば平賀さん」

「何なのだ?」

「確か銃検をやってるって言ってたよね。」

俺がそう言った瞬間、平賀さんの目はギラリと光った。

「そうなのだ!! あややは今月から銃検の代理申請サービスを始めたの

だ!!」

銃器検査登録制度（略して銃検）とは……公安委員会が発行する登録証だ。民間人はこの登録証がなければ銃器を所持することができない。俺は軍人なので銃検を登録しなくてもいいのだが（その代わり軍への申請が必要）、武偵高に向中のために登録することになった。武偵法9条で~~殺~~殺人禁止~~と~~と定められているため、それを守れない武器は銃検で登録ができない。なので前回は辻さんに協力してもらい、俺の25ミリ機関銃を登録してもらった経緯がある。

「平賀さん……対戦車ロケット弾や無反動砲の申請とかできる?」

アメリカ旅行の時、牛若から没収したパンツァーフアウストを使った。その時、あの汎用性能に何度も助けられたことがあった（一発で多数の目標を爆破できる利点がいい。それは25ミリ機銃には不可能だ）。

今後、極東戦役<sup>F E W</sup>においてこれを使わないなんてありえない。

なので所持のため、軍への申請はすぐ通るのだが……銃検がすんなり通ると思えない。そこで平賀さんに相談したわけだ。

「大丈夫ですのだ!! 不可能なことは無い!! どの武器かわかればすぐ申請するのだ!!」

「いやあ、そいつあ有難い」

さて、今度時間を見つけて辻さんと相談する……辻さんは極東戦役<sup>F E W</sup>の工作のために海外にいるんだっけか。神城さんと今度相談するか。

「あれ? 村田君、20万ほど多いのだ。」

「ああ、急いで作ってくれたお礼だ。遠慮なくもらってくれ。」

「いつもご鼻屑にしてくれてありがとうでございますなのだ!!」

平賀さんはそう言って嬉しそうに頭を下げた。

「じゃあ、詳細が分かったら連絡するよ。ありがとね。」

俺はそう言って平賀さんの作業室を出た。

……平賀さんの作業室の掛け軸が『交流を消せ!!今こそ直流の時代!!』ってなってたんだが……どこで手に入れてんだろ？

後日、俺は神城さんと相談し……その武器を平賀さんに伝え……平賀さんはドン引きしていた。

平賀さんに代金を渡した後、俺はしようがなく映画館に向かった。映画館でかなめと待ち合わせ……ということにさせられたからな

道中、『ふええ……』と涙目で道に迷う水色の髪の子高生の道案内をしたせいもあり、待ち合わせ時間ギリギリについた。

「イブキにいく!!遅くいい!!」

かなめはそう言っただけで俺に抱き着き……

「……他の女のおいがするんだけど」

抑揚のない声で問いかけてきた。

「いや……平賀さんに料金を払いに行くって言ったろ？まあ、あと道に迷ってた人がいたから案内をしたぐらいk……」

「イブキにい……他の女のためにアタシとの時間ヲ潰シタノ？」

「だって……スマホ片手に顔真っ青、涙目状態でオロオロしてたら案内してやるだろ。」

俺がそう言うと、かなめは抱き着いたまま顔を上げ、頬をプクくと膨らました。

「イブキにい!!そういうところがダメなの!!だから他の女が寄ってくるの!!」

「はあ……？ほら、さっさと映画のチケット買うぞ」

俺はかなめを無視しながら歩き始めると……かなめはムキになったのか、俺に引っ付いたまま引きずられ始めた。

……正直、邪魔だ。

「かなめ、どいてくれ。」

「むく……じゃあイブキにい、誓って!!」

「何をだよ。」

「お姉ちゃんたち以外の女に近寄らないで!!」

「……なあかなめ、人口の半分は女性なんだぞ？俺に引きこもれって  
いうのか？」

俺がそう言う……かなめは□□その発想はなかった□□とばかりに  
驚いた表情に変化した。

「じゃあ!!アタシが一生イブキにいを世話するから!!部屋に引きこ  
もって!!」

「……べらんめえ、監禁じゃねえか。……俺が選ぶぞ？」

俺はかなめを適当にあしらいながら、映画チケットの販売機でチ  
ケットを買おうと操作し……

……あれ？なんか胸騒ぎがする。

俺は思わず操作の手を止めた。この映画館で放映される、俺好みの

映画は……

『Die Har ds』

『P a r i e e r l / 米 国 を は め た 男  
A m e r i c a n M a d e』

『超○速！参勤交代』

……下二つはアメリカ行つた時の飛行機で見たから内容が分かる  
が(面白かった)、『Die Har ds』ってなんだ？

あらすじを見ると……『超高層ビルが占拠された!! □妻に会  
いに来た男□□□両親に連れられてきた少年□□のツイてない二人が  
テロリストに立ち向かう!!』と書かれている。

……おっかしいなあ？7歳のクリスマスの時に似たような事を体  
験しているような気がするんだけど。

俺は冷汗が止まらなくなった。

「ねえ、イブキにい、私こっちがいい」

「あ、ああ。」

俺は思考を放棄し、かなめが選んだ『我が妹よ　く禁じられた恋』という映画のチケットを買うことになった。

『地上40階!!そこは戦場になった!!』

(白人の男と黄色人種の少年が必死にテロリスト達と戦うシーン)

『今年のアクション映画の最高傑作!!』

『Die Hards』

「イブキにい、面白そうな映画だね。今度一緒に見に行こうよ!」

「え……あ、うん。ああ……」

俺は映画が始まる前の宣伝で冷汗をかいていた。

……そう言えば第二中隊にいた頃、訓練でヘトヘトになった時に英語の書類にサインさせられたような気がする。まさか……

同日、ニューヨークにて……

「つたく、なんだあ?映画のチケットなんて……」

ジョニー・マクレーは停職中(犯人逮捕の時、被害が大きすぎたため)で暇なので、映画会社から送られてきたそのチケットを使って映画を見ようとしていた。

「……この前の懸賞が当たったのか?この俺がかあ?」

ジョニー・マクレーは首をかしげながら、映画館の椅子に座った。送られてきた映画のチケットは……『Die Hards』

くジョニー・マクレー、映画鑑賞中く

「これって……坊主との話じゃねえか……!?!」



ジョニー・マクレーンは数年前、始末書に紛れてあつた書類にサインしたことを思い出した。

「イブキにいい、面白かったね!!」

「……あれが、か?」

かなめと一緒に見た『我が妹よ　く禁じられた恋』は……見ていられないほど重かった。

内容は……~~生~~生き別れの実の妹と知らずに恋に落ち、葛藤する~~と~~という、ありきたりな内容だった。しかし……エグいぐらいに濡れ場を強調したり……主人公が途中血の繋がってない義妹をレイプし、そのままズルズルと肉体関係に陥<sup>おちい</sup>ったり……最後には『School days』の様な~~nice boat~~ nice boat オチ。

……映画くらい頭空っぽにして楽しめる方がいいじゃねえか。ド派手なアクションとかコメディとかさ。

こんな映画見るぐらいなら……まだ『Die Hards』を見たほうがよかった……などと思いつつ、かなめを見た。

かなめは楽しそうに

「あのシーンのあそこだけがCGだ」

「○○と同じく手法を取り入れていたから、ああいう風になった」

などと、まるでキンジが言いそうな事をしゃべる。

……環境は違えど、かなめとキンジは血のつながった兄弟なんだなあ。

「そう言えばイブキに……はい!!」

「……何これ?」

かなめは急に自分の武偵高指定カバンから、紙袋を出して俺に渡してきた。紙袋にはご丁寧なことに、緋色で『LOVE』と手書きで書

かかれている。

「あ、ありがとな。かなめ……手、どうした？」

俺は……絆創膏が何枚も巻かれたかなめの手から紙袋をもらった。

「え!?……プレゼント作ってるときに針で刺しちやって……」

「そっか……え？」

俺は紙袋から中の物を出すと……~~ぬいぐるみ~~が出てきた。

ぬいぐるみは……白の軍帽、第二種軍装に身を包まれていたのだが、あちこちに赤黒い血がこびりついている。

……え?俺を模したぬいぐるみ!?

「か、かなめ……俺、いつもこんなボロボロだったっけ?」

確かに何度も死にかけたけどさ……ボロボロの俺モドキと思いつながらぬいぐるみを引つ張り出すと、さらにかなめを模したぬいぐるみが出てきた。二つのぬいぐるみの手は、赤い糸でグルグル巻きにされている。

「イブキにはいつも……いつもボロボロになって、あたし達を心配させる。だから……イブキにいをあたしが守る。今のあたしじやイブキにいほど強くないけど、HSSになれば……」

「HSS?」

某旅行会社の聞き間違えではない。~~HSS~~……~~High~~  
School Student いや絶対違う。

「それはともかく!!イブキにいと約束、あたしはちゃんと守ってるから!!……イブキにいもちゃんト約束、守ツテネ?」

「約束……?」

「お姉ちゃん以外の女に近づかないって約束!!」

「いや……だからそれは無理だつて言ってるd……」

「ねえ、イブキにい……あたし、今日は確かめたかったの」  
かなめの声は急に冷たくなった。

「あたしが……イブキにいに愛されてるかどうか。イブキにいは予定があつたのに、一緒に映画を見てくれた。」

「……まあ、支払いだけだったし」

……支払いの後は予定がなかったしな。

「そして、映画館で……イブキにいは手を繋いでくれた。あたし、嬉し

「かつたんだよ？」

あの映画見てるとき、そんなことやってたのか。感情を殺してみたらから……全然気づかなかったぞ？」

「あの時間が……永遠に続けばいいなって思ってた。永遠にイブキにはあたしを見てくれて、あたしはイブキに永遠に愛する。」

E t e r n a l l y . . . . . E t e r n a l l y . . . . .  
永 遠 速 永 遠 速  
E t e r n a l l y . . . . .

かなめは愛おしそうに……俺が持つ血まみれの人形茶髪の人形を撫でた。

映画館を出て、総合シヨップینگセンターから出ようとしていた時、

「ふええ……出口どこお……」

顔を真つ青にしながらキョロキョロしている、水色の髪の少女にまた出会った。

……映画を見る前に道案内した子だよな、あれ。また迷ってるのかよ。

「……あの、また迷ってるんですか？」

「ふええっ!?!……む、村田さん!?!」

ビクツつと彼女は肩を震わせた後クルツとこっちへ向き、安堵の表情を浮かべた。

彼女の名前は松原花音。この喫茶店に行こうとして迷っていたところを俺が案内した。

「で、出口が分からなくて……」

「俺も出ますし……一緒に来ますか？」

「ふええっ!?!……いいんですか?」

「いや……別に構わん……」

俺は……急に殺気を感じたため後ろを向くと……

「……………」

かなめは瞳孔が開いた眼で俺達を見ていた。

「か、彼女さんと一緒だったんですね……。お、お邪魔しましt……」

「いえ、妹です。」

「い、イブキにいい!!酷いよ!!」

多少かなめは不機嫌だったのだが、俺は松原さんをちゃんとシヨツピングセンターの出口まで送り届けた。

かなめと映画館へ行つた数日後、俺は英語の授業をポケットと受けていた。

『We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain unalienable Rights, that among these are Life, Liberty and the pursuit of Happiness.』。田口、これを訳せ。」

「……分かりません」

「これは~~ア~~アメリカ独立宣言書~~の~~有名な一文だぞ。……じゃあ、『all men are created equal』この文章を訳してみろ」

「ええつと……」

……一昨日、テレビで『ナショナル・トレジャー』をやってたから、その影響だろ。

俺はアクビを噛み殺しながら黒板の文字を書き写した後、カバンから書類を出した。メガネさんからの報告書だ。機密文書でもないの和訳するだけの授業で、暇な時間で読んでしまおうと思っていた。

コツツ……

読もうとした文書の上に、丸めた紙屑が飛んできた。

……なんだよ、コレ。しかもこの紙、水に溶ける特殊な紙だぞ。

俺はその紙屑を開くと、中には文章が書かれてあった。

『3の正体が割れた。情報共有をするから17時に美術準備室に来てくれ。』

P. S. ついでにリハビリをやらないか

L. Watson』

俺は銃剣を取り出し、刀身を鏡替わりにして後ろを確認すると……ワトソンは顔を真っ赤にしていた。

……リハビリ、やりたくねえなあ。

思わず大きなため息が出た。

「村田あ……銃剣その手入れは俺の授業の時は止めてくれ」

「……あ、すみません。」

「ついでだ村田。次の文章を訳してみろ」

「はい。」

……次の文章、メチャクチャ長いんだけど？カンマで八つの文に分けられてんだけど!？」

「……『あれらの権利を確保するために、政府は人々の間で始まります。統治者の同意によって……』」

……チクショウ、感覚的には分かるんだけど、和訳が面倒だ。

……さて、適当に射撃訓練と素振りをやった後、美術準備室へ向かい

「ムラタ……なんで君はボクのメールをよく無視するだろう」

ワトソンに衣装が入っている紙袋で殴られた。

「ムラタはリハビリの文字があると絶対に来ないからな」

ワトソンが頬を真っ赤にしている通り、確かに俺はリハビリの誘いのメールを無視している。だけど、あんなのをやるぐらい

なら、無視して信頼を失うほうがまだいい。

「リハビリ」とは……女性としてのふるまいにトラウマを持つワトソンへの社会復帰訓練だ。

そのために……ワトソンが彼女役・俺が彼氏役でおままごとをするのだ。

ここまでなら別に問題が無い。しかし……ワトソンは細部までこだわり、しかも重いのだ。

分かり易く言う……『クレオンしんちゃん』のリアルおままごと の様な事を、ワトソンと二人つきりでやる。

「だってさあ……ストーリーが重いんだよ。この前なんて『貴族の娘と平民の男の逃避行』だぞ。あんなのやってられっかよ」

「そ、それは……」

ワトソンはボソボソと何かを言いながら俯いた。

「まあいいや……。手紙にあった『3』ってサードのことだろ？何か分かったのか？」

「……そうだ。だから……後でちゃんとリハビリに付き合うんだぞ？ボクはずっと楽しみにしていたんだから」

俺に釘を刺したワトソンは、かばんの中から紙束を出した。

「リバティー・メイソンの『非翼賛者名簿』……『勧誘したがメンバーにならなかった人間の名簿』にジーサードの名前があった。米国では有名らしいね」

俺はワトソンから書類を受け取り、目を通すと……其米国初の黒人大統領を護衛するジーサードの写真があった。

……流石はアメリカの紐付き組織ってところか。

他のページにも目を通してみるが……藤原さんやメガネさんの報告と一緒に、それ以下の情報しかない。

……共闘しているとはいえ、別組織の人間にわざわざ情報を与える必要もない……か

「あいつは元々アメリカの武偵だったんだ。それもSランク……」

「確かRランクだったよな。それは知ってる。」

ところで……武値の『Sランクは特殊部隊一個中隊を相手にでき、Rランクであるなら小さな国一つを落とすことができる』と評されているが……その評価は過大評価であると俺は思っている。

歩兵1個中隊は約150〜200名ほどで、3〜4小隊が合わさってできている。そして、俺が所属している特殊部隊H S部隊第二中隊第一小隊は慢性的に人数不足であるが……それでも7人はいる。あの部隊三つ分を白馬の王子様モードのキンジヤアリア、レキが一人で相手できるなんて……全く考えられない（まあ、殺害前提と捕縛前提という違いはあるが）。

それよりもさらに強いRランク？辻さんと鬼塚さんがボコボコにしてたぞ？

……まあ、過大評価も問題だが、過小評価も問題だ。油断しないようにしよう。

俺はそう考えながら四次元倉庫にワトソンから貰った書類を投げ入れた。帰ったら燃しておかないと。

「ワトソン、情報ありがとな。じゃあ、またあし……」

「ムラタ、どこへ行くかうというんだい？」

俺はそのまま部屋を出ようとしたが……ワトソンが俺の腕を握り、制止させた。

「い、いや……ちよつとトイレに……」

「じゃあ、僕も一緒に行こう。男っていう事になってるから問題ないだろう？」

「……分かったよ。」

俺は諦めてワトソンのリハビリに付き合うことにした。

「今日のプレイだが……前は不評だったからな。今回は部活動もので……女子マネージャーと選手という設定はどうか。シナリオにセリフは全部このノートに書いてきたんだ。」

そう言っただけで俺にノートを渡した後、後ろを向きシユルツと制服を脱ぎ始めた。俺は慌ててワトソンに背を向ける。

「ムラタは何部がいい？ボクはベタに乗馬部がいいと思うんだけど」  
「乗馬部がある高校なんてめったにねえよ!!」

……確か陸軍士官学校に乗馬部だか乗馬同好会があるって聞いたことはあるが……俺、海軍だぞ。しかも飛び級でほとんど学校行つてねえし。

「無難に野球部とかどうだ？」

「野球？……」  
「B a s e b a l l」の事だっけ？確か

「C r i k e t」の親戚の様な物だったよな？」

……そうだった。イギリスだとメジャーな競技じゃないんだっけ。

「……いいや、乗馬部で」

……近所に住む秋山の爺さん（酒好きの方）が気分よく騎兵について語つてた事があつたから……分からなくはない。

「……着替えはまだなのか？」

「s h i t!!……スカーフを外したらブラのホックが外れた!!」

「……お、おう」

数分後、俺の前にはセーラー服を着た美少女がいた。

「……じ、ジロジロ見るな。い、いや!!見てくれ!!」

ワトソンは顔を真っ赤にしながら……潤んだ目で俺を見てきた。

「そんな趣味があつたのか？」

「ち、違う!!……君はボクが好きなんだからね。それに僕は女子だ。このような視線も戸惑つてはいけない……」

「……何言つてんだ？」

「シナリオ上そうなってるんだ!!ムラタはちゃんとノートを見たのかい!!」



「ゴメン、見てねえや」

俺はワトソンから貰ったノートを開け、該当ページを見つけたのだが……

……ナニコレ、設定だけで3ページを真っ黒に埋め尽くしてるし。俺は早々にノートを読むのを諦めた。

「じゃ、じゃあ……始めるぞ」

ワトソンは緊張した面持ちで1歩2歩と俺に近づいてきた。俺の靴とワトソンの靴がぶつかる……ワトソンはクルツと半周した後、俺に寄りかかってきた。

……クソツ。ボーイツシユな子が女子らしく振舞うってだけで、そのギャップが高得点なのに……それに加え、こいつから良い香りがする。香水でもつけてるのか？

「む、ムラタくん。……今日も馬たちは元気だね」

「そ、そうだな……大砲をいつもより早く運んでいるし、他の部員もいつも以上に射撃練習を頑張ってるな。」

「え？」

「……え？」

……あれ、何か間違えたか？

「……ムラタ、乗馬部って設定だよな？」

「ああ……そうだけど？」

「なんで乗馬部に大砲や銃があるんだい？」

……秋山の爺ちゃん（酒好きの方）曰く『大事なのは大砲や機関銃を運び、それによって敵をズタズタにする事だ。それでやっと突撃ができる』って言ってたんだけど。

「……？ああ、そうだよな。大砲はおかしいよな」

「……何を勘違いしたんだい？」

「いや……近所に騎兵出身の爺様がいてな。よく話をしてくれたんだ。……そうだよな。今だと儀礼用だから剣だけだよな」

「いや、普通の乗馬部に剣はないだろう!？」

……なるほど、そりやそうか。普通の高校で軍事訓練なんてしないよな。

「や、やあワトソン。今日は部員がいつも以上に弓の引きが良いな」  
「……やるとしたら流鏑馬やぶせめだよな。伝統は大事だ。」

「……………そ、そうだね」

ワトソンは呆れたような表情で言った。

「……………あれ？何か違うか？」

「いや……………それでいこう……………あ、あと、この姿の時は『エツレ』って呼んでよ」

⊠L・Watson⊠の名前⊠L⊠を『エル』と呼ぶと、我が家のエルキドゥと被るため、イタリア語読みの『エツレ』と呼ぶことを前に決めたのだ。

「……………ああ、『エツレ』」

すると、ワトソンエツレは満面の笑みを俺に向けてきた。

「今日はボク……………行けそうな気がする。頑張るよ」

「……………お、おう。頑張れよ」

……………べらんめえ、可愛いじゃねえか

「よ、よし……………覚悟は決めたぞ……………!!」

「な、なんのだよ……………!?!」

ワトソンは一気に俺の首に手を回し、俺の顔を力任せに寄せた。そのまま流れるようにベタツと……………湿ったものが俺の頬に引つ付いた感触がした。その時、同時に一部固いものが当たり、そのせいで俺の頬が軽く切れた。

「……………え？」

「ああ……………甘い……………。む、ムラタ!!成功だ!!ボクは今……………心がフワツと、すごく幸せな気分だ!!も、もつとしよう!!」

ワトソンエツレはそう言って俺を押し倒した。

「ま、待てワトソン……………いや、ワトソン!!落ち着け!!」

「好きだ!!好き……………大好きだ!!……………し、シナリオに書いてあるか……………」

ワトソンはゲリラ豪雨もビックリなくらい顔にキッスを降らしてくる。ちようどその時……………

コツツ……………

扉の外から何かを落としたような音が響き渡った。

「ツ……!!」

ワトソンは飛び起き、急いで着替えようと……

「ワトソンまだ着替えるな!!」

「で、でも……」

「いいから!!」

俺はそう言っただけで着替えをやめさせ。ドアに近づき、ゆっくり開けた。

……もしこの場を見られても、最悪『ワトソンは文化祭でやった女装に目覚めた』と言い訳できる。

扉の外には誰もいない。さっきの音は何かかひとりで落ちた音か何かだろう

……ん？あれはなんだ？

ドアの前にある窓のサッシに小指の爪ほどのカメラが置いてあった。俺はそれを拾い、足元に転がして潰した。

……監視カメラか何か？なんだってここに？

俺はため息を吐いた後、扉を閉めた。

「……カメラがあった。破壊したが……人が来るかもしれない。着替えてさっさと退散しよう。」

「……あ、ああ」

俺はワトソンに背を向けた後、ハンカチを水で濡らし、ベトベトの顔をぬぐった。

……やっぱり☒りハビリ☒なんてやって、いいことがねえや

「イブキにい……アクア・エデンの件だけでもアウトなのに、エル・ワトソン……アイツは女だったんだね。」

「アタシは約束を守ってるのに……なんでイブキには……。やっぱり、アタシがイブキにいを保護しなきゃ」

「イブキにいを、泥棒猫達カラ守ラナキヤ……」

☒☒HSS☒☒ってなんだよ……

俺はワトソンとの☒☒リハビリ☒☒を終え、心身共に疲れた状態での扉を開けた。

「ただいまあ……」

……今日も奥からスパイスの香りが漂ってくる。またカレーか。ここ数日間、俺達の夕飯はずっとカレーだ。

確かに、かなめのカレーは日々進歩していて、昨日なんかガチ勢のカレー海軍カレーにあと一步まで迫っていた。

……でもなあ、それでも毎日飽きるんだよ。

俺はため息をつきながらリビングへ入ると……かなめが一人、キッチンでカレーを作ってた。

「あ、イブキにい!!おかえりなさい!!」

「おう、ただいま」

俺はそのままソファへ直行し、深々と座った。

……やっぱリ☒☒リハビリ☒☒は精神的に来る。

俺はボケーっと天井を見ていると……正面のソファにかなめが座り、ジツと俺を見てきた。

「……どうした?」

「イブキにい、おしゃべりしよ!!可愛い妹とおしゃべりタイムだよ!!」

「……自分で☒☒可愛い妹☒☒ですか」

そういうのは理子で腹がいっぱいなのだが。

「この前……イブキにいの部屋覗いたんだけど、エッチな本とか持ってないの?全然見つからないんだけど。」

「な、なに言ってるやがんだ!!」

「あ、軍関係のは触れてないよ?」

「ああ、ならよかった……ってなるか!!」

ついでに、今時は紙媒体よりも電子である。なにを言いたいのかというところ……とある物は、メガネさん特製の秘密フォルダの中に入っている。メガネさん曰く『自分で作って何ですが……コレをどうやって

破るのか見てみたいです』だそうで。

「とにかく!!イブキにはエツチな本とか持ってないの?」  
「も、持ってたましえん!!」

……嘘はついていません。嘘は……

「そんなのおかしいよ!!……それにイブキに、目が泳いでる!!」

「そ、それは……あ、あれだ!!最近視力が落ちてきたから、遠近体操やって視力回復しようとしてるんだよ!!」

かなめジトーつと俺を見てくる。

「……手が震えてるよ?」

「こ、これは……疲れのせいで筋肉が痙攣してるんだ!!いやあ、今日は疲れたなあああ!!」

かなめは諦めたのか、ひとつため息をついた。な、何とかごまかせたのか?

「まあいいや……ところでイブキにの好みって何?見たところ……女の好みに統一性がないから……」

「……はあ!?!」

……落ち着け、俺。さつきから爆弾発言ばかりで処理し切れなかったが……ここは落ち着いて、ゆっくり対処するんだ。

「……そんなのどうだっていいだろ?」

「イブキにいがどういう事で興奮するか把握しておきたい。それでイブキに好みの妹になりたいんだよう……」

ロスアラモスでかなめを保護して半年間、俺達とかなめは同じ家に住んでいた。だが……その時、かなめは確かに俺にべったりくっついてきていたが……今は、どこか焦っているような気がする。

俺はかなめと目をしっかりと見据えて言った。

「何だってそんなことするんだ?」

「……アルカナム・デユオ双極兄弟~~☒~~理論上存在するとされる最強の兄妹。兄妹が

相互にHSSににできる関係になれば……地上最強の相棒パートナーになる。  
……だけど、私は☒お兄ちゃん☒より☒イブキに☒の方がHS  
Sになりやすそうだし、あたしもその方がいいから……イブキにいを  
相棒パートナーに選んだ。」

かなめは俺から目を離さずに……ゆつくりと説明する。

「だから……厳密に言うとな☒双極兄弟☒にはならないけど……

SSS級危険人物

☒辻希信の切り札☒で☒FBI・USA米国陸軍に泥を塗った少年☒

イモータル・スピリット

☒不死の英霊☒と呼ばれるイブキにいと、HSSによって最強にな  
るあたしが組めば……どんな相手にも負けない!!もう……イブキ  
にいが☒あんな男☒と一緒に戦って死にそうになるなんてことも無  
くなるの!!!」

最後は叫ぶようになめは説明した。

……なんとなくだが理解した。毎回……俺は☒三途の川でコサツ  
クダンスしている☒のような事をしてるから、かなめは心配だったのだ  
ろう。だから……その『HSS』になって、俺の負担を軽くさせよう  
と……。

そこで一つ疑問が生まれた。これはとても重要な話だ。

「なあ、かなめ。一つ聞いていいか?」

「……うん」

『HSS』って……なに?」

「えっ?」

「……えっ?」

HSS (ヒステリア・サヴァン・シンドローム) とは!!性的興奮を  
すると中枢神経が劇的に活発化し、戦闘能力が向上する状態である!!  
この能力は遠山家だけに伝わる能力である!!

……うん、初めて知った。キンジがエロ本やら何やらを見ると、『白

馬の王子様モード』になると強くなるのはそのせいだったのか。

『性的興奮』とあることから……『子孫繁栄の本能の異常体質』と仮説を立てれば、キンジが『白馬の王子様モード』の時に性格が変わるつても説明がつく。

「なるほど、遠山家つてのはそんな体質があつたのか。」

「うん……」

……しっかしまあ、そんなチート能力があつたなんて。俺の一族なんて、何の能力もないつてのに。

強いて言うなら「ツイてない事と負けん気」ぐらいか……と思いつながら、かなめの説明を聞く。

「HSSは戦闘では強者になる代わりに……恋愛では弱者になるから。HSSになると性格が変わるなんて……こんな体質は普通理解なんてされないし、己でも嫌悪する……。で、でも……」

かなめは俺に近づき手を取り、顔をギリギリまで近づけ、さすがような目で俺を見てきた。

「でも……イブキにいらきつと受け入れてくれると思つて……。あたしを最初に受け入れてくれて……こんなワガママ言つても、こんなに迷惑かけてるのに許してくれて……だから、だからあたしは!!!」

……迷惑かけてる自覚はあつたのか。

「……ちよつと考える時間をくれないか。一辺整理したい。」

「分かったよ。……急でごめんね。」

かなめはそう言つて俺から離れ……

「……ところでイブキにい。あたしとの「約束」破つてない?」

「……え?」

……「約束」? 確か『家族以外の女に近寄らない』だったっけ?

「いや、だから……無理だつて言つてるだ r……ッ!？」

ガキッ!!

かなめは焦点が定まらない目のまま、包丁で切りかかってきた。俺は慌てて「四次元倉庫」から銃剣を取り出し、その斬撃を何とか逸らす。

「な、何しやがる!!」



「ねえ、イブキにいい？何回約束破ったの？正直に言えば……破った数だけ刺すだけで許すけど。でも隠したら……隠した分の10倍刺す……」

プルルルル……

俺とかなめの間に……携帯電話の着信音とバイブ音が響く。

「……」

「電話……出てもいいか？」

「うん……」

かなめもさすがに興が冷めたようだ。

「はい……もしもし……」

「イブキさん、ごきげんよう。木箱を送ってくださり感謝していますわ。」

「あ、ああ……代金は貰ってるしな……」

……なんでこんな時にダージリンから電話が来るんだよ!!

ダージリン 田尻凜とは……『閑話：高校生活2学期編 B O K O H a r d

2. 5』で知り合った聖グロリアーナ女学院の次期戦車道隊長である。

俺は彼女から金をもらい……聖グロリアーナ女学院の学園艦へ『木箱 スナック菓子やカップ麺の入った箱』という暗号』を密輸<sup>仕送り</sup>している。

……そのお礼の電話は嬉しいが……なんでこのタイミングで電話してくるんだよ!!

「そのお礼と言っては何ですが……再来週、学園艦が横浜に寄港するの。その時お茶会でもどうかしら？」

「え、ええ!?そ、そいつあ嬉しいけど、断r……」

「では楽しみに待ってますわ。詳細な日程はまた後日。」

ツ……ツ……ツ……

俺は……背筋が凍った。後ろには……般若がいた。

「ねえ……イブキにい？今の電話、女の人からだよね？なんですぐに約束を破るの？」

「いや!!だからそもそも約束してねえだ r……!!」

ギイイイン!!

かなめが握っている包丁は、白雪の私物の包丁で……どこかの有名な刀工が作った物らしい。そのせいで、包丁は見事なくらい『折れず、曲がらず、よく切れる』を体現しており、刃こぼれはほとんどない。

……そのせいで命の危機なんだけどない!!

刃こぼれする銃剣を持ちながら……俺はかなめを睨む。

「あたしは約束を守ってるんだよ？なのにイブキには約束を守らないなんて非合理的だよ？」

「だからって!!かなめの言っていることは無理なんだよ!!」

「どうして……ッ!!」

ギイイイン!!

「……ドウシテ、分カツテクレナイノ!!!」

ベキツ!!ザシユツ!!

「ッ……!!」

とうとう銃剣は折れてしまい、包丁は俺の右腕を切り裂いた。

……表面を切り裂いただけだ。そこまで重症じゃない。

かなめは包丁に付いた血を指で拭い、それを美味そうに舐めた。

「ねえ……イブキにい。あたし、全部見てたんだよ？アクア・エデンの4人、エル・ワトソンに……今の女。エル・ワトソンって、女だったんだねえ……。非合理的イ！」

「……」

……かなめが俺をつけていた？いや……監視カメラなどで俺を監視していたのだろう。美術準備室の前で見つけた監視カメラは……かなめが設置したに違いない。

俺は新しい銃剣を左手に持ち、右手を背中でかなめから隠した。  
……今のままはマズい。とりあえず逃げないと。

俺は隠した右手を皿にし、そこへ滴り落ちる血をためる。

「イブキにいの手足を壊して……部屋に閉じ込めて……。うん、そうだね。それが合理的だね。あたしがイブキにいの全てをお世話して……」

かなめは両手で真つ赤になった頬を押さえながら興奮気味にしゃべり、その後包丁を構えた。

「イブキにい……ごめんね。でも……約束を破ったイブキにいがいけないんだよ？」

かなめは再度俺を切りつけてきた。

ガキツ!!ベチャツ……

俺はかなめの包丁を銃剣で受け止め、それと同時に右手の血をかなめの目に向かって放った。

「うああああ!!」

俺はかなめの視界を奪い影の薄くなる技を使つて部屋から脱出した。

……チクシヨウ!!俺達から別れた後何があつたんだよ!!

俺はかなめから逃げ、第二中隊の隊舎に駆け込んだ。

「なるほど、そつちも色々大変なんですね」

「すみません……いきなり来て、しかも手当てまでしてもらつて」

駆け込んできた俺を見て第二中隊の面々は驚いたが……温かく受け入れてくれた。神城さんにいたつては、第二中隊参謀長かつ中隊長代理で忙しいのに……わざわざ手当てまでしてもらつた。

「なるほど……そのHSSSというのは、『生殖本能の異常体質』である」と仮説ができますね」

「やっぱり神城さんもそう思いますか？」

「まあ……性的興奮でなくても、何かしらの興奮によって能力や士気が向上するって例は身近にありますし。第二中隊の辻大佐とか……あ、これオフレコでお願いしますよ。」

「わかってますって」

……ほかに、大砲や大型ロケット砲に興奮し、頭のキレが良くなる参謀長とかいるしな。

「村田君の友人であるキンジ君がそのせいで、キザな性格になると言うのは理解できますが……かなめさんは本当に強くなるんでしょうか？……あ、処置終わりましたよ」

神城さんは包帯を巻いた俺の腕をポンとたたき、包帯やガーゼなどを戻し始めた。

「イテテ、ありがとうございます。……で、それってどういうことですか？」

「HSSによって思考力、視力、聴力などが劇的に向上するらしい。それなのに強くない？……どういうことだ？」

「あくまで仮説なんです……結局は『生殖本能』が強いだけじゃないでしょうか？キンジ君が、キザな性格になるのも、『オスがメスを囲もう』とする本能の表れだと思っんです」

「……ライオンの群れのように『自分の子孫を多く残そうとメスを囲む』ってことですか？」

ライオンの群れ（プライドと言う）には5〜6頭のメスにオスが1頭だそうだ。

ついでに、そのプライドを奪おうと他のオスが狙っており、奪われたオスは放浪するか死しかないそうで……閑話休題

「例えとして合ってるかどうか微妙ですが……そういうことです。HSSという本能によって、自分の女を守るために男は好戦的になります……女は果たして好戦的になるでしょうか？」

神城さんは救急セットを片付け、自慢のちよび髭をなでながら言っ

「私は動物に詳しくはないですが……オスがメスを奪い合うのは知っています。メスがオスを奪い合う動物を知りません」

「思考能力やその他が劇的に上がるが……性格が変わり、そのせいで戦闘以外にその能力が使われる可能性がある……」

「そういうことです」

「……なるほど。かなめがHSSに目覚めても、強くなる可能性は低い……という事か。」

「HSSについては分かったんですが……義妹との関係修復はどうすれば……」

「そんなの簡単ですよ」

「……え？」

俺がぼやいた瞬間、神城さんの雰囲気さがらりと変わった。

「突撃あるのみ!!!殴り込んで落とせばいいんです!!!」

「……はい？」

「壁ドンでもキスでもやり!!かなめさんを興奮させればいいんですよ!!!」

「い、いや……!!何言ってるんだ……」

「殴り込み、しおらしくなればそれでよし!!もし肉食になったら誘惑に耐えて逃げればいいんです!!!」

「……あ、あの」

「当たって砕けろ!!Go for broke!!!」

「イヤイヤイヤ!!砕けちゃだめですよ!?!」

「……でも、確かにありだ。男は女を守る性格になるのなら……女は男が守りたくなるような性格になるはず。そんな女が肉食系なわけではない。」

その仮説が正しければ……かなめが興奮すれば、大人しく引くだろう。ただし、男を誘惑する様な性格（意識・無意識問わず）になるという危険性はあるが……。

「……まあいいや、すいません相談に乗ってもらって」

「頑張ってくださいよおおお!!!」

「……暑い」

「そう言えば神城さん。こう……使い捨てができて、威力の高いロケット砲や無反動砲とかありませんか？」

俺が話を交えた瞬間……神城さんの目がキラリと光ったような気がする。

「ほう……。村田君もやつと大砲の魅力が分かる様になりましたか!!」

「いえ……。そう言うわけじゃなくて……」

「では来てください!!」

神城さんは俺の腕を取り、走り始めた。

……美少女ならともかく、おっさんが手を引くなんて

「何を!? まだ私は30代ですよ!」

「……10代の俺にしたら十分おっさんですよ!」

第二武器庫についた。ここは最新・運用中の武器庫ではなく、旧式の武器や第二中隊第一小隊の隊員が個人で使う武器が保管されている倉庫だ。

「いやあくさすがは村田君!! いえ、村田大尉!! 大砲……しかも巨砲のロマンが分かるなんて!!」

「いや、そういう意味じゃないんですけど……」

神城さんは鼻歌を歌いながら扉を開け、ズンズンと倉庫内を歩いて行った。

「やっぱり初心者にはこれでしょう!!」『8・8cm Flak 18』です!!!」

俺と神城さんの前には……一つの高射砲が堂々と置いてあった。

「……冗談ですよ」

「……騙されませんでしたか」

「これが無難じゃないですか?」

神城さんが見せてきたのは……3mほどのミサイルを見せてきた。

「……なんですこれ?」

「超高速で飛翔する、炸薬ではなく運動エネルギーで戦車を破壊するミサイル『LOSAT』です!!!」

『LOSAT』とは……簡単に言うと『戦車の砲弾をミサイルで超音速で飛ばしたら、砲身とか必要無いじゃん!!』を体現したミサイル(Made in USA)。無論、個人運用の兵器ではない。

「……こう、小型で汎用性の高い奴がいいんですが」

俺の言葉に……神城さんの口はへの字に曲がった。

「……これがいんじゃないですか?」

「ちよつと大きいですね」

神城さんがぶつきらぼうに言って説明したのは……パンツァーファウストを二回り大きくしたようなものだった。

「デイビー・クロケットです」

「で、デイビー・クロケット!?なんでここにあるんですか!?!」

☒M388 デイビー・クロケット☒とは……戦術核兵器だ。無論  
『made in USA』

「ロスアラモスの時に鹵獲してそのままですね」

「さつさと廃棄しましょうよ!!!こんな物騒なもの!!!」

「……どうやって廃棄するんですか?日本には核兵器がないことになっっているんですよ?」

「………なんで鹵獲したんですか?」

「冗談はさておき……無難なのはこれでしょう」

そう言っただけ出したのは……パンツァーフアウスト、パンツァーフアウスト3、そしてバカ

でかいロケット砲の計3種類だった。

「この二つは知っていると思うので説明は省きますが……これは四式20センチ噴進砲です。」

神城さんはバカでかいロケット砲を指さしながら答えた。

「……どう考えても250キロは越えますよね」

「227・6キロです。25ミリ機関銃を担いでいるならこれくらい簡単でしょう?」

「……それ以前に博物館行きの武器ですよ? 弾薬費もかかるだろうし……」

「それは大丈夫です!! 今私が独断でやっている計画がありまして、20センチ砲弾の大量生産が始まっています!! それにですね……」

その後……神城さんの説得によってパンツァーフアウストと20センチ噴進砲を所持させられることになった。

「あと少し……この実験が成功すれば、晴れて『技術実験艦』として戦艦が建造できるよう……」

村田大尉を隊舎へ送った後……私は自室へ向かい、そこにある戦艦の図面と試製大型艦砲の図面を見ながら言った。

俺は用意された部屋のベッドメイクを済ましたあと、携帯を取り出し、平賀さんに電話をかけた。

「あ、平賀さん? パンツァーフアウストと四式20センチ噴進砲を銃検に通してほしいんだけど」



「……………村田君、さすがにそれは無いのだ。」

翌日、俺は隊舎から学校へコソコソ向かった。

そして、上履きに履き替えるために自分の下駄箱を開けると……ハートのシールが貼られた手紙が入ってあった。

……これは、まさかのラブレターか!?

俺は慌ててその手紙を上着のポケットにねじ込んだ。

……ラブレターなんて、生まれて初めてもらったぞ!?

俺は軽いステップで教室へ向かった

「おう!!おはよう!!」

「……」

クラスメイト全員が変質者を見るような目で俺を見てきた。

……え?俺なんかした?

俺は大人しく席に着くと……武藤と不知火がやって来た。

「なんだなんだ?そんなにテンション高いなんて珍しいな」

「村田君、何かあったのかい?」

俺は手をちよいちよいと動かし、二人を近づけた。

「まあ……二人とも見てくれ。こいつが下駄箱に入ってたんだ」

俺はあの手紙を机の上に置いた。

「ラブレターなんて初めてもらったぜ」

「い、イブキテメエ!!お前だけは俺と仲間だと思ってたのに!!!」

「村田君、おめでどう」

武藤の歪んだ顔が……いやはやここまで心地がいいとは……。これが悦という物か……。

「残念だったな武藤、俺はお前より先に大人の階段を登るわ」

「く、くそおおお!!」

俺はそんな武藤を尻目に封筒を開けると……和紙に近い手触りの便せんが出てきた。太い字で、しかも裏抜けしてしまっている……さて、生まれて初めてのラブレター。なんて書いてあるんだ？俺はワクワクしながら便せんを開くと……

『村田維吹殿』

本日昼休み、体育館裏ニテ待ツ。武装シテ来ルベシ』

達筆な文字で……大きく書かれてあった。

「……」↑俺

「ゴフツ……お、大人の階段ね……。ククツ」↑武藤

「ツ……!!!」（必死に口を押える）↑不知火

「アツハツハツハ!!!」↑武藤&不知火

「べらんめえ、てめえら!!表に出やがれ!!!」

それでも二人の笑いが止まらなかったの……とりあえず二人に拳を一発ずつ入れておいた。

「……お前ら何があったんだ？」↑キンジ

「……うう……ククツ……」↑苦悶の表情を浮かべつつも、目は笑っている二人

「……」↑机に肘をつけ、頭を抱えるイブキ

くさいセリフは似合わない……

さて、運命の昼休み……俺は覚悟を決めて体育館裏に向かった。  
……さて、誰が待ってるんだ？

俺は刀の柄を強く握り、気合を入れた。その時、道中にある学食から……空腹を誘う、旨そうな香りが漂ってきた。

グウ~~~~~……

……腹が減ったな。

昨日は夜分遅くに第二中隊の隊舎に行っただため、俺の朝食は用意されていなかった。

みんなは自分たちの分を少しずつ出し合い、俺の分を捻出しようとしていたが……流石にそれは気分が悪い。俺は断り……近くのチエーン店で朝食を食べた。

……久しぶりに朝○ツク食ったが、やっぱり足りなかったなあ

俺は……下駄箱に入っていた手紙を再度読んだ。

……細かな時間を指定してないし、飯食う時間はあるよな。

宮本武蔵も巖流島の戦いでワザと遅刻したらしいし(諸説あり)、これも戦術だ、戦術。それに~~腹~~腹が減っては戦ができぬ~~腹~~って言うし、兵站で一番大事なのは食料だ。

……今日のメニューはなんだろうなあ

俺は学食へ向けて歩き出した。

「……遅いなあ」↑金髪少女

学食で腹いっぱい食べ、時間を見ると……昼休み終了まで残り30分。

……飯を食ってすぐ動いたら腹を痛めるな。ここは少し休んでから行くか。

俺は温かいお茶を買い、ティータイムを優雅に過ごす。

「……お腹すいた（体育座り）」↑金髪巨乳少女

昼休み終了まで残り10分。俺はイヤイヤ体育館裏へ向かった。  
……さて、そろそろ真面目にやるか

俺はため息をついた後、感覚を研ぎ澄ませていく。

……半径50m以内には4人。全員殺意無し。  
俺は警戒しながら歩んでいく。

俺はそのまま体育館裏へ向かうと……かなめ(?)がいた。

……こいつ、かなめにしては胸が大きい。しかも、今のこの状態でも大きいのに……サラシか何かで胸を無理やり抑えているのが分かる。

「イブキにい……来てくれたんだ。」

「……理子、何やってんだ?」

俺はかなめ(モドキ)の正体がすぐに分かった。理子は変装の才能があるが……その豊満なものに、その声色ですぐわかる。

「イブキにい、何を言ってる……」

「バレバレだぞ?……毎回言ってるが、理子が貧乳に化けるのは無理がああ……」

「セクハラだよ!!!」

かなめ(偽物)はそう言った後……慌てて口を押えた。  
……やっぱり理子か。

俺は警戒を解いた。周りには理子の気配意外にはないし……手紙を出した理由も予想できる。

何か俺に直接会って話したいことでもあったのだろう。何故果

たし状したのかは分からな……からか 擲ったな、こいつ。

「理子、こんな手紙を送るなんて珍しいじゃねえか。直接言ってくればいいのに。」

「……かなめの件でな」

……裏理子か。裏理子で来るときは……だいたい面倒なことが起こる。

理子はかつらとフェイスマスクを破り捨て、素顔をさらけ出した。

「……理子なら調べればすぐわかるだろ？かなめは師団の会議によつて敵対しないことが決まった」

「……それは分かつてる。だが……あたしはどうなる？」

……？

「何のことだ？」

COMPOTOの事だ。……あの中で、あたしだけが部外者だ。そこにかなめが加われば……部外者のあたしはどうなる？」

「どうもこうもないだろ？……理子はいつも道理に、COMPOTOの副隊長だろ？」

すると……理子は一気に近づき、軍用ナイフを一気に抜刀した。

ギイイイン!!

俺は銃剣を抜き、峰でそのナイフを防ぐ。

「……違う!!かなめが来れば……あたしはどうなる!!部外者のあたしが居なくても回る!!」

「……」

「あたしはもう……一人になりたくない!!」

ギイイイン!!

俺は……理子の半生を思い出した。彼女の両親が死に……一人になったところをブラドによる虐待を受けたのだ。彼女にとっては……孤独がトラウマに違いない。

それに俺は身内には甘いから……『かなめのわがままも許し、理子を排斥する』と思っているのか？

「……お前が居なければ!!一人を、孤独を耐えられたのに!!お前が居なければ!!こんな思いをせずに済んだ!!」

「てやんでえ!!べらんめえ!!」

ギイイイン!!バキツ!!

俺は理子のナイフを弾き飛ばし、その勢いそのまま理子を掴み、投げ飛ばした。

……流石に身内には甘くても、仲間を捨てるなんてクズに成り下がることはしねえぞ?!

「誰がてめえの様ないい女を捨てるって言うんだ!!」

「でも、お前は……!!」

理子は立ち上がり、俺に殴りかかってきた。

「あたしはもう一人になりたくない!!一人になるくらいなら……お前を殺し、あたしも死ぬ!!」

「だったら俺と一緒にやらあ!!」

俺は理子を再び投げようとし……足がもつれて一緒に転んでしまった。

「誰が理子を一人にするかってんだ!!俺が一生一緒にいてやらあ!!」

「……!?!」

地面に倒れた理子に覆いかぶさるような体勢のまま……俺は勢いのまま言い放った。

「理子がイヤだって言おうがなんだろうが!!俺がずっといてやる!!後悔すんじやねえぞ!!」

「…………ツ~~~~!!」

理子に覆いかぶさったまま宣言して、長い時間がたった時……理子は顔を真っ赤にし、抵抗しなくなっていることに俺は気が付いた。

気が付いた後……俺は冷静になり、さつき勢いで言ってしまった事を思い出した。

……ヤバい、勢いに任せてすごく恥ずかしい事言ったぞ!?

思考回路が全く機能していない。それに……もう11月下旬なのに猛暑日並みに暑い。

『では☒☒ギムレットには早すぎるが、テキーラにはちょうどいい☒☒  
んのリクエスト、☒☒QUEEN☒☒の☒☒I Was Born T  
o Love You☒☒』

『I... Was Born, Too... Love You...♪』  
ああ……校内ラジオのBGMのせいで余計に恥ずかしい。

……クソツタレ!! なんだって俺の好きなバンドの曲がこんな時に  
!?! しかも理子はフランス系だぞ!?! なんだってイギリスの歌手の曲が  
!?!

「……」

俺と理子は自然に離れていき、2mほど離れた位置でお互い体育座  
りをした。

「……いい、イブイブ、さっきの言葉って……こくはk……」

「……わ、忘れてくれ」

実際、なんだかんだで多少性格が歪んでいるが……理子は、自分の  
意見はちゃんと言い、それでいて気遣いができて優しく、器用で家事  
も平均以上、それに外見もよし。これほどの好物件はなかなか見つか  
らないだろう。

……ヤバい、すごく恥ずかしい。

余計に意識してしまう。さて、落ち着け……

「……まあ、さっきのは無かったという事で」

俺は急いでこの場から逃げようとし……理子に腕を掴まれた。そ  
のまま理子は何処にそんな力があるのか……力任せに俺を引っ張っ  
て抱き着き、腹に顔をうずめた。

「……イブイブ、あたし……ちゃんと聞いたから。一生離さないって  
……凄くうれしかった。」

「……いや、だから……さっきは勢いで言っただな……」

言い訳する自分が情けない。何だってあんなこと言ったんだよ!!  
……確かに本心だけだよ!!

「なあ〜んて!!あれえ〜イブイブウ〜、何焦ってるのお〜?」

理子は顔を上げ……面白がるように、からかう様に俺を見てきた。「りこりんが〜イブイブのことを〜あんな風に思ってるって勘違いしたのお〜??」

プツン……

「……帰る」

「え……う?ちよ……」

「帰る。」

俺は脱兎の如く、その場から逃げ出した。

……自分だって最低ってことは分かっているけど、この場にいたくねえんだよ!!

『『一生一緒にいる』かあ……。あの表情から考えるに、きつと……。頬が熱くなっていくのが自覚できる。』

「あたしは泥棒の娘で……。イブイブは高潔な軍人……。でも、やっぱり……」

思わず……。お母様の形見のロザリオを握りしめた。「それでも……。あたしは……」

……。さっきのイブイブの言葉はスマホで録音しておいた。うまく録音しているか確認しないと……

思わず自分の股間を触り、そこでやっと下着を洗濯しなければならぬと気が付いた。

俺は強襲科棟<sup>アサルト</sup>で、25ミリ機関銃の射撃訓練<sup>ハつ当たり</sup>をしたあと、寮へ戻つ



た。

……神城さんの考察は、理論上合っているのだが……やっぱりやりたくない。

『故意にかなめを性的興奮させることにより、彼女の性格を一転させ、己を守る』……どこかのエロゲーでありそうなネタである。

「……ただいま」

本日はスパイスの香りはしなかった。そして、リビングには電気が付いているから誰かはいるはずだ。

……ん？廊下が濡れてる？

水滴は脱衣所からリビングへ向かって落ちていた。

……またネロが良く拭かないで風呂を出たのか？

俺はため息をついた後、リビングの扉を開けた。

「ネロくまたちゃんと拭かないで出てきたr……!？」

「あ……あ」

「あ……」

そこには……バスタオルで頭を拭きながらガリ○リ君をかじる、パンツとブラ姿のかなめが居た。

「……」

かなめは目を見開いて驚いた後……クスリと笑い、妖艶な雰囲気を出し始めた。体中の血の温度が一気に上がるような気分になる。

「か、かなめ……お前……」

「……イブキにい、何を考えても無駄だよ？体と心は別物だよ？」

かなめはペタ……ペタ……つとゆっくり俺に近づいてきた。

「イブキにい……考えなくていいんだよ？ただ……イブキにいがやりたいように押し倒せb……」

かなめはブラのホックを外し、肩の紐も外して……腕だけでブラを押しさえる状態になった。俺は……もう我慢できなくなった。

「べらんめえ!!それは俺のアイスだろうが!!!」

「そつち!？」

……うん。理性を保つために、さっきの言葉を放ったが……煽情的なかなめの前でどれだけ耐えられるか……。

俺はため息をついた後、覚悟を決めた。

「……とりあえず、これ着ろ」

俺はそう言つて制服の上着を渡した。

「う、うん……」

かなめがそれを羽織ったのを確認した後、影が薄くなる技を使った。使つてかなめの後ろへ移動した。

……やるしかない、か

俺は影が薄くなる技を解き……あすなる抱きをした。

「ツ~~~~!!」

「……どうしたかなめ? そんなに固くなって……。お前がそう願つてたんだろ?」

俺はかなめの耳元で……HSSになったキンジが言いそうな言葉を、少ない語彙から引つ張り出していく。

……いいか、俺はHSSになったキンジだ。

俺は身近なモデルを必死に演じていく。

「そんなに緊張してたら……何にもできないぞ?」

俺はクルツとかなめを半回転させ、そのまま右手で壁ドンをし、左手でかなめのアゴを軽く持ち上げた。

「イブキにいがあたしだけを見てる……イブキにい、怖い、怖いよ……。あたしが……あたしが消えてくような……」

「安心しろ……俺がいる。怖がらなくてもいい……ゆつくり受け入れていけ」

俺は左手で唇を触り……そこからうなじ、肩、わきの下、脇腹、腰

へゆつくり移動させた。

「ッ……」

左手が太ももにまで移動したとき、かなめのトロンとした目が急に見開いた。そして、自分の胸の前で組んでいた手を……俺の胸に当てて抵抗してきた。

……予想はできていたから耐えられるが、何の対策も無かったら……最悪、かなめに溺れていたかもしれないねえ。

「だ、ダメ……ダメだよ……イブキにい、こんな事したら……」

かなめは抵抗していたが……彼女は乾燥した小枝のような抵抗だった。俺がそのまま押し倒そうとしても……簡単にできるほどの抵抗だ。

「たとえ義理でも……兄弟でそんなことしたらダメだよ……」

かなめの目から涙がハラハラと落ちて行く。

「ヒクッ……グスッ……」

かなめは崩れ落ち、手の甲で涙をぬぐうが……それでも彼女の慟哭どうこくは止まらない。

……仮説通りの結果になったか。

俺はかなめを見下ろした。かなめは……弱弱しく、静かにシクシクと泣いているが……心の慟哭がひどく伝わってくる。

……しかし、今のかなめは……鼻<sup>ひい</sup>目に見ても、狂おしいほどに可愛かった。

……『恋愛では弱者』か。言い得て妙だな。

俺はかなめを寝室に放り込んだ後、酒蔵部屋の酒を手にしなが  
ら思った。

異性の前になると、違う性格……いや、他の人格になり、  
それによって異性に好かれる。

『本来の自分を好きになつてくれないかもしれない』、『こんな異常を

受け入れる以前に、理解されないかもしれない』……これらの気持ちを抱きながら生きるって言うのは、どれだけ辛い事なのだろうか？  
常に異性を疑っていないといけない……ってこともあり得るか。

……それらを代償にし、最高の戦闘力が得られるキンジに対して……かなめは……

☒☒ハニートラップ☒☒などのスパイ活動には有益だ』と思う、軍人としての俺に……吐き気がする。

……今日は飲もう。

リサヘメールで『夕飯はいらぬ』と送った後、寢室を覗いた。そこには……触れたら壊れてしまいそうなほど可憐な美少女が、ベッドの上で体育座りをし泣いていた。こんな状況……普通の男性なら絶対に彼女に声をかけるだろう。

……よくもまあ、手を出さなかったものだ。

俺はそう思った後、酒瓶片手に寮を出た。

「……それで仕事中の僕を無理やり連れてきたのかい？」

そう言つて、第一中隊所属の藤原石町少佐はため息を吐きながらウイスキーを傾けた。士官クラブのカウンターにカランと氷とグラスがぶつかる音が響いていく。

「いいじゃないですか、残つてた仕事は☒☒来週までに提出の書類にサインする☒☒だけでしたし」

「……そうだけどさあ。……それにしても、村田も（第二中隊に）染まってきたねえ。」

「……否定できません。」

俺の言葉に……藤原さんは眉をひそめた。

「いつもは否定するのに……それに今日だつて『奢りますから来てください』って……。そんな言葉初めて聞いたよ？」

「……あれ、そうでしたっけ？」

「そうだよ？いつもは『奢ってくれないんですか？』ってからか揶揄うじゃないか」

確かに……。いつもそう言った後、割り勘にするんだっけか。

「……何かあった？」

「ええ……まあ……」

俺は事の顛末を藤原さんに話すと……

「……簡単な話だ。君は兄なんだろ？どっしり構えて受け入れてやればいい。」

「ですが……」

「村田、それ以上は同情になる。遠山君も彼女もそれは求めてない。」

……確かに。

「…………ハア。なんかウジウジしてたのがバカバカしくなってきましたよ。」

俺はダークラムのロックを一気に飲み干した。多少の罪悪感もあったが……この仕事柄、罪悪感を忘れるのは慣れている。

……面倒な仕事についたなあ

思わず大きなため息が出た。こりやあ……いい死に方しないな。

「村田、ここでウジウジしている時間はないぞ？」

……全く、この先輩には頭が上がらない。

「藤原さん、ありがとうございました!!この酒は貰ってください!!」

俺は酒蔵部屋ブラドから貰ったから持ってきた戦利品の酒と諭吉二人を置き、俺は寮へ駆け出した。

「……俺はいい死に方しないだろうな」

思わずため息が出た。

我々は……前大戦の事もあり、アメリカの御威光を無視できない。  
今回の件……アルカナム・デユオ双極兄妹はともかく、GかなめのIVHS S化IVは絶対  
だった。

そのために……村田と遠山君を人柱にするあてがう事は政治家達によって決  
まっていた。最悪……彼らはアメリカへ連れ去られても文句は言え  
ない状況ではあったが……遠山君はともかく、村田はその状況を覆し  
た。

……相変わらず、運がいい奴だ。

上手くいけば軍の力を弱めるための布石の一つにするつもりだっ  
たのだろうが、その計画も潰れたようだ。本当に計画を潰すのが得意  
だな。

さて、さつさとIV僕IVに戻ろう。いつまでも罪悪感に縛られては  
いけない。

……そう言えば村田が置いていった酒はなんだろう？

『響 30年』

「……フア!？」

……年に2000本しか売られない高級品だったはず!？」

IV俺IVは……余計に胸が痛くなった。

「早く、IV僕IVに戻らないと……」

それでも……貧乏性なのか、IV俺IVはその瓶をずっと離さなかつ  
た。

ガチャ……

もう0時前、みんなは寝ているようだ。俺は音をたてないようにリ  
ビングへ向かうと……目を真っ赤に腫らしたかなめに会った。

グウ~~~~~……

二人同時に腹の虫が鳴った。かなめも夕飯を食ってないのだろう。

「……そばでも食うか？」

「……（コクツ）」

俺は冷蔵庫から☒☒茹で蕎麦☒☒を取り出し、電気ポットのお湯を鍋に入れて茹で始めた。

数分後には簡単な☒☒かけそば☒☒を二つができ、その一つをかなめの前に置いた。

ズルツ……ズズズ……

そばを啜る音だけがリビングに響いている。

「イブキには断り切れない性格だと思ってたんだけど……違うんだね」

「……俺はこう見えても、ちゃんと断るときは断るぞ？」

でも、だいたい上官命令だから断り切れないけど。

「そうなんだ……。実は……イブキにいが☒☒あすなる抱き☒☒してから記憶が無くて……。」

☒☒H S S☒☒ってそうなるんだな。」

「……うん」

ズルズル……ズズツ……

「……いきなり、迷惑だったよね。いきなり戻ってきて、イブキの人間関係メチャクチャにして、大事なものの壊されて……」

「……まあ、強いて言うなら『帰る』の一言は欲しかったな。迎えのこともできやしねえ」

俺は☒☒かけそば☒☒の汁を啜った。安物の麺つゆにしては良いだしを使っている。

「あたし……恋愛ってよくわからなかったから、他の女を遠ざけて独り占めしたら愛してもらえるのかなって……」

「………映画、好きなんだろ？せめてそれで勉強して来いよ」

「………そうだよね」

かなめは丼ぶりを持ち上げ、汁をチュルチュルと飲み干した。

ドンツ!!

「……あたしってどうすればいいかなあ」

かなめは強めに井ぶりを置いた。その井ぶりの中に滴がポタポタと落ちて行く。

……義兄の仕事でもするか

俺はため息をついた後、かなめに近づき……頭を乱暴に撫でた。

「……え？……あ、え？」

「悪いことしたんなら謝りに行くぞ、明日朝一で。一緒に行つてやるから」

「……え、でも……あたし、イブキにいにこれ以上迷惑かけらr……」  
「バカ言うんじやねえよ。家族なんだろう？多少迷惑な方が可愛げがあるつてもんだ。」

「………」

「……」

静寂が俺の心に砲撃をかけてくる。

「……あ、あのかなめさん？なんか反応してくれない？勢いでくさいセリフ言つて恥ずかしいんだけど……」

かなめはスツと顔を上げた。……無表情だった。

……黒歴史決定、ありがとうございました。なあキンジ、俺はお前のように~~ク~~くさいセリフ~~ク~~は無理だよ。

『銃剣で腹切れるかなあ』などと考え出した時、かなめは急に俺に抱き着いた。そのまま……俺の服を濡らし始めた。

「……グスツ。イブキにい……イ、ブギに……い!!!」

「……」

俺は泣きついてきたかなめの頭を撫で始めた。

……兄らしいことはできてるのかな

神棚の鏡が、兄妹を淡く映していた。



……あ、最近忙しくて神棚の掃除してねえや  
神棚の鏡は……ホコリのせいで兄妹を淡く映していた。  
……明日、掃除したら高級酒を置いておこう。  
心なしか……神棚の鏡はキラんと光ったような気がした。

泣き止んだかなめは……目も顔も真っ赤に腫れていた。

「ほら、さっさと寝るぞ。明日は早いんだから」

「……うん」

かなめは寝室に向けて歩き出し……数歩歩いたらクルツと半回転。  
俺の方に向いた。

まだ顔と目は真っ赤だった。

「イブキにい……あたしのわがままだっただけわかってるけど、もう一回  
言わせて？」

「なにをだ？……」

かなめはダダツと助走し、俺に飛びついてきた。

「あたし、イブキにいの事が好き……」

かなめは頬に触れるだけのキスをしてきた。

「おお、さすがイブイブ。義理とはいえ妹も攻略したなんて!!」

「……!!!」

リビングの扉には……トランクケースを持った理子が、ニヤニヤと  
そこに立っていた。

☒かなめちゃん☒☒だっけ、理子の事は☒お姉ちゃん☒ってよん  
でいいからね!!」

「……なんだよ、ぶりっ子。」

「イブイブと理子は『一生一緒にいる』って誓い合った仲だから、

☒かなめちゃん☒は理子の☒義妹☒になるのかな〜って」

俺は慌てて理子を見ると……目が合った。

……こ、こいつ!?完全に面白がつてやがる!?

『なんて日だ!!』って思わず叫びそうになった。今日一日で何個の黒歴史ができた事か……。

「さあ、言つてごらん!!『理子お姉ちゃん』って!!!」

「イブキにい……あそこに頭の狂った女がいるから、楽にさせるね!」

バァーーン!!!

「三人とも!!うるさいですよ!!!今何時だと思っているのですか!?!」

扉を勢い良く開け、寝間着姿のリサが勢いよく入ってきた。

「……り、リサお姉ちゃん、こいつが……」

「え、えつと……挨拶しよっかなあ〜って……」

「……え、俺も?」

「朝ごはん抜きにしますよ!?!」

バァーーン……

リサは勢いよく扉を閉め、寝室に向かっていった。

「……寝るぞ」

「……はい」

「……うん」

……ベッドとは言わねえ。何時になったら布団で寝れるんだろ。

俺はため息を吐きながら、ハンモック寝床の用意を始めた。

## 高速の神輿は危険……

翌日の早朝、俺とキンジ・かなめの三人（キンジは無理やりたたき起こした）はアリア・白雪・レキ・ジャンヌの部屋に突撃し、初手から玄関前で土下座して謝る△△という最終手段をとった。

その際、白雪とジャンヌは許してくれたもの……アリアは口を△△への字△△に曲げて不機嫌そうに、レキは無表情だった。

さて、その日の放課後。『デートに行きたい』と言って抱き着いてくるかなめを無理やり離し、『もう一人の兄ちゃんも寂しがっているから偶には構ってやれ』とキンジに預け、俺は兵部省のとある会議室へ向かった。

本日午後2時から日本陸海空軍が極東戦役での戦略・戦術を俺たちに伝える重要な会議があるのだ。

「今回、進行役を担当させていただきます兵部省直属特殊部隊第一中隊中佐の瀬島龍二郎です。どうぞよろしく。」

瀬島中佐がペコリと挨拶をした。

「……。（イライラ）」

俺の前の席に座っている辻さんは……後ろからでもわかるほど不機嫌だった。

辻さんと瀬島中佐は△△犬猿の仲△△きつと瀬島中佐が進行役なのが気に食わないのだろう。

挨拶をした後、瀬島中佐はこっちのほうを向き……一瞬ドヤ顔をしてきた。すると、辻さんはさらに不機嫌になり、周囲の空気が歪んで見える。

……嫌な始まり方だな、おい。

「……ハア」

俺と通路一つ空けて隣にいる藤原さんは……思わず大きなため息が出た。

まずは現状報告と今後の展開について説明があった。瀬島中佐曰く……

・『欧州戦線は~~██~~師団~~██~~が~~██~~順調に~~██~~負けている』

・『極東戦線は国内の敵対組織を一網打尽したあと、藍幫<sup>ランパン</sup>の上海・香港・マカオ支部を落とし、放置』

・『その後、欧州戦線へ転戦』

・『北米戦線は放置』

だそうだ。

……欧州で何が起こってるんだ？それに一気に三都市落とす？どうやるんだ？

「では質問のある方は挙手し、所属と名前を言ってから質問をお願いします」

俺は勢いよく手を上げた。ほかにも複数人が挙手する。

「では、空軍の君」

「第521航空隊の江草少佐です。空軍は支援だけでしょうか？」

神城さんよりも若い、優しそうな人が質問した。

「343空が本土に戻ってくるまで、空軍は本土防衛を主軸とします。その後、多少は欧州戦線や対藍幫<sup>ランパン</sup>戦に引き抜かれるかもしれませんが、今は断定できません。」

「……了解しました。」

江草少佐は不満そうに椅子に再び座った。

「……では、第二中隊の君」

「HS部隊第二中隊の村田大尉です。」

やっと俺の番が来た。俺は自分の名前を言うと、周りがざわめいた。

……何か悪い事でもしたか？

「質問は二つです。」

・『欧州戦線が~~██~~順調~~██~~に負けている』とはどういうことか

・上海・香港・マカオ攻略はどの部隊が行くのか  
の以上です」

俺がそう言うところ……辻さんが勢いよく立ち上がった。

「その質問にはこの希信が説明しよう!!!」

「うるさいんだよ辻、でしやばるな。」

瀬島さんは苛立たしそうに言い放った。

「なんだと瀬島!!この件の担当はこの希信だ!!希信ほどの適任者がいるのか!」

「会議の邪魔だからでしやばるな」って言っている!!分からないのか狂人!」

「……ああ!」

辻さんと瀬島中佐は互いに近づき、胸元を掴みあった。

「つ、辻さん!!ここで喧嘩はマズいですから!!俺が……自分が悪かったんで、止めてください!!」

「せ、瀬島中佐!!中佐殿!!落ち着いてください!!」

俺と藤原さんは二人を羽交い絞めにするが……それでも暴れる二人を拘束できない。

「二人とも静かにしろ」

「はっ!!」

山口少将がとうとう頭にきたのか……人殺しの様な目で二人を威圧しながら言い放った。そのおかげで、二人は喧嘩を止めて元の場所に戻った。

……もしFateの世界で山口多門丸少将が召喚されたらルーラーのクラスだろうな

俺はそんな下らない事をつい考えてしまった。

「辻、欧州戦線のことを説明しろ」

「ハッ!!」

「た、隊長!!それは……」

辻さんの顔は歡喜に、瀬島中佐の顔は驚愕の表情を浮かべた。

「まあまあ……いいじゃない。担当が話したほうがいいだろうし」  
「し、しかし……」

「そのくらいの度量も無いと将官にはなれないぜ？ほら、落ち着けて」

「……」

最近HS部隊第一中隊中隊長に任命された鈴木敬次大佐が瀬島中佐をなだめ、何とか説明できる空気になった。

「では!!この希信が説明しよう!!今回の☒極東戦役において……」

辻さんの説明を要約すると、

『将来、交渉の席に置いて主導権を得るために……☒日本が欧州戦線に参加し、それによって勝利した☒という実績が欲しいそうさ。そのため辻さんが工作し、矢原さんが援軍として欧州戦線で撤退戦をやっているそうさ。なお、最終防衛ラインは☒ダンケルク☒』

……☒撤退の柔らか☒こと 矢原兄弟嘉太郎さん(高校生活夏休み編 ラツシュ○ワー 海外にはこいつがいる……で登場)が撤退戦を指揮しているなら安心だ。兄者さんなら2〜3年ぐらいは遅滞戦術で耐えられるんじゃないだろうか。

そして、対藍ランバン幫戦は……

『上海は第二中隊が、香港は☒バスカービル☒と村田衛大尉で落とすことになっている。マカオは第一中隊の鶴見中尉が工作をし、派閥争いによって破壊する』

と瀬島中佐が説明してくれた。これにより……俺の☒修学旅行・II☒は強制的に☒香港☒に決まった。

ところで、☒修学旅行・II☒は上海・香港・台北・ソウル・シンガポール・バンコク・シドニーから選んで好きなどころを行けるそうさ……

……嘘だろ!?!グレートバリアリーフが、オペラハウスが、カンガ

ルー肉のハンバーガーが遠ざかっていく……。

「村田大尉、分かったか？」

「……………了解しました」

俺は……………自分の椅子に倒れこむように座った。

……………あれ？シドニーってグレートバリアリーフないじゃん

「では、第一中隊の君」

「はい、HS部隊第一中隊少尉、小野田です。敵対組織の一網打尽の件ですが……………」

……………早く終わんねえかなあ。

俺はあくびを噛み殺した。

8時間半弱による会議（乱闘有り）をやっと終え、俺は肩のコリをほぐしながら会議室を出た。

「おいボウズ!!たまには飲みに行かねえか!？」

「うわっ」

会議場を出てすぐ、俺は鬼塚少佐に肩を組まれ、飲みに誘われた。

……………俺の顔にヒゲがジヨリジヨリ当たって痛いんですが

「い、痛い。痛いですから!!……………まず連絡するんで待っててください」

俺は携帯の電源を入れると……………キンジから何度も電話が来ていた事に気が付いた。

……………なんかあったのか？

俺はキンジに電話をかけた。

「……………キンジ、どうかした？」

『イブキやつとつながったか!?!白雪とかなめが☒ランバー Jacket☒』

をやることになったぞ!!』

「……ランボージャック?」

「……え、何? 理子のやったチャリジャックは知ってるけど、ヒューマンジャックなんて聞いたことがない。それに……ラ○ボーをヒューマンジャック?」

「……映画に出れるなんてよかったじゃねえか。駄作になりそうだけど」

『違う!? あれだ……決闘だ、決闘!! とにかく急いで戻ってこい!! 10時半に始まるからな!』

ツー、ツー、ツー……

時計を見ると……10時半まであと6分。兵部省がある新宿から学園島まで6分で行けるわけがない。

「……ん? どうしたんだ?」

「……なんか、かなめが決闘やるみたいで」

「ほお、あのかなめちゃんか!!」

辻さん、神城さん、鬼塚少佐が反応した。そう言えばこの三人、かなめのこと知ってたな 新人軍人編 休日くらい上司から離れたい……より)。

「あの子が星伽と決闘とは!! この希信、興奮する!!」 ↑辻

「これは良い肴になりますね。早く行きましょうよ!!」 ↑神城

「おう、ボウズさっさと行くぞ!!」 ↑鬼塚

「いやいやいや!!! 5分でどうやって学園島まで行くんですか!」 ↑俺

すると辻さんは携帯を出し、タクシーを呼ぶと……

「総員走れ!!」

「ハッ!!」

「いや、どうやったって間に合わん……ちよ、鬼塚さん襟持たないで!! 走れます!! 走りますから!!」

俺は鬼塚さんに襟首を掴まれ、そのまま引きずられていった。

「村田君、愁傷様……」



「ふ、藤原少佐……彼がイモータル・スピリット不死の英霊COMPOの村田大尉ですか？」

「そうだぞ、小野田……。彼に近づくと色々と巻き込まれる。気をつけろよ?」

「そう言う割には、少佐は面白がって関わってますよね。」

「まあね。」

どんな魔法を使ったのか分からないが……10時27分、学園島に到着した。しかも、かなめと白雪をCOMPOバスカービルCOMPOのメンツと理子が囲みCOMPOが近くで酒盛りしている目の前にタクシーは止まった。

……え? 何があつたの? 2分弱……いや、1分ちよつとでどうやってここまで来れるの!?

「ジョーンズ殿!! この希信、誠に感謝感激である!! ありがとう!!」

「アリガトゴザマシタ」

タクシーの運転手(外人)はそう言つて缶コーヒーを開け、チビチビと飲み始めた。チビチビとそれを飲んではいるが……その姿は様さまになつていて格好いい。

……何この運転手、渋くてかつこいい。そう言えば、トミー・リー・COMPOに似ているような気が……

決闘が始まったので、俺はそんな考えを捨てて、二人の戦いを観察した。

『この惑星の住人は常に時間に囚われ、急いでいる。急ぐ事などそれほど無いはずだ。』

さて、決闘の結果……かなめの長刀は折られ、負けてしまったが……みんなとは和解したようだ。

和解の祝いとして……相変わらず俺達は酒を飲み交わす(許可証の

ない人はソフトドリンク)。

……確かに手に汗を握る決闘、そして感動の和解、確かによかった、よかったんだけど……

「うう……希信は、今!!猛烈に感動している!!」↑辻

「良かったですなあ、かなめさん……。」↑神城

「うう……前が見えなあ……。」↑鬼塚

……号泣しながら感動するこの3人が居なければ……断然よかったです。ただ……

俺はこの三人を尻目に、グイッと酒を飲み干した。

……あ、コレ俺の酒じゃね?

よく見ると……酒蔵部屋にあった一斗樽がドーンと置かれている。それを確認し……俺はため息をつきながら空を見上げた。居待月(18日ごろの月)が夜空にポツンと浮かんでいた。

『ただ……この惑星の☒☒仲直り☒☒は、美しい。』

「あ、イブイブ!!グラスが空いてるよ!!」

「……え?あ、ありがとな」

理子はそう言っただけのグラスに酌をしよう……

「イブキにい!!可愛い妹がお酌してあげるね!!」

かなめは理子に体当たりをしたあと、俺のグラスに酒を注いだ。

「……へえ、カツちゃんはそう言うことするんだ。」

「……あれ?☒☒理子お姉ちゃん☒☒いたんだ。ここは家族団らんの場合だよ?さっさと部外者はどいたら?」

「ふくん……りこりんはイブイブに告白されて、『一生一緒にいる』って誓ってくれたから……家族の一員だよ?」

「……あ?」

……あの黒歴史……一生イジられるんだろうな。

思わずため息が出た。憎たらしいほど……月は輝き、俺達を眺めて

いた。

さて、その後のかなめは、毒気が抜けたのか……普通の学生生活を  
しているようだ。

我が寮内でも甘えては来るが、以前ほどベタベタすることがなくな  
った（よく理子と喧嘩しているけど）。

「……以上で御座る。」

「いや……ほんとありがとう。風魔さん、助かった。……余りは取っ  
ておいて。」

俺は風魔さんにかなめの動向を観察してもらった。かなめはちや  
んと学生生活を送っているようだ。

俺はホツとしながら、風魔さんに封筒を渡した。封筒の中には依頼  
の2割増しの金額が入っている。

彼女は封筒を開けて金額を確認し……感激したように目をキラキ  
ラさせながら俺を見てきた。

「む、村田先輩!!こんなに沢山……!!」

「それと……軍の横流し品なんだけど、古々米の玄米いる?カビが生  
えてないのは確認したk……」

「ぜひっ!!!」

「お、おう……」

その後、風魔さんは封筒を胸元に入れた後、米俵2俵（約120キ  
ロ）を担ぎ上げ、スキップをしながら帰っていった。

……風魔さん、どんだけ飢えてんだよ。

俺は思わず涙が出た。

風魔さんからの報告を受けた翌日……俺はため息をついた。

「……チクショウ。俺ばかり狙いやがって」

「ゴフツ……」

俺はボヤキながら……本日23人目の相手を無力化した。

今日は東京武偵高の体育祭だ。さて、ここの体育祭は……第1部と第2部がある。

第1部は東京都教育委員会の監視があるため……我々生徒達は  
美しい青春を生きる、爽やかな高校生を演じながら、マスタース教務課の指定した競技を行う。ついでに俺は水球だった。

そして第2部……教育委員会の監視が無くなるために、過激な競技が始まることになる。今年、男子が『実弾サバゲー』、女子は『水上騎馬戦』だそうで。

『実弾サバゲー』とは、文字通り実弾でサバゲーをやるのだが……ルールは『完全な無力化』だけ。一応……『地面に背中が付いたら負け』とはあるが、全員それを守っていないため、形骸化している。

……つけ、キンジはうまく逃げやがって。

俺は乾パンの袋を開けながら、ため息をついた。

キンジは……女子の『水上騎馬戦』に参加するバスケビルビルの監督役で難を逃れたらしい。全く……羨ましい限りだ。

……水着の女の子を見れなんてうらやま……いや、サバゲーから逃げやがって。

ここの生徒達は積極的に参加するため……無論、何人もの生徒が俺を狙ってきた。

……ゆつくり飯を食えたもんじやない。

俺はため息をつきながら乾パンをかじる。本来は体育祭の後に飯だそうだが……腹が減っては戦ができぬぬ食える時に食わねえと……。

……半径40m内に3人、敵意アリ。

俺は袋に入っていた金平糖をかみ砕いた。

昨日は体育祭があつたため、本日は振り替え休日だ。俺は体中から痛みがするが……それを無視して惰眠を貪ろうとする。

さて、昨日の『実弾サバゲー』で32人抜きした俺は……その後ベオウルフに当たり、ボコボコにされたのだ。そのせいで体中が痛い。……チクシヨウ、体中が痛くて眠れねえ。

俺は諦めてハンモックから降り、服を脱いで自分の体を確認すると……アザという花が咲き乱れていた。

……こりや眠れねえはずだ。というかこんなにアザ作るなんて久しぶりだな。……鈍ったか？

俺はため息をつきながら着替え始めた。

俺はリサ特製の朝食を食べ、お茶で一服していた時……

バァン!!!

悪魔が扉を蹴破つてきた。

「村田!!いるかあ!?!」

「りよ、両川さん!?!」

扉を蹴破つた悪魔は……両川勘吉巡查長。彼は俺を見つけるや否や襟をつかみ、引きずる始めた。

「ちようどよかった!!人数が足りてなくて困ってたんだ!!」

「ちよ……ま、待って!!襟は止めて襟は……」

俺は……両川さんに拉致られた。

「第5回海上神輿大会!!」

「……イエー!!!」

俺は両川さんに城南島海浜公園に拉致られた後、衣服をはぎ取られ、真っ白な六尺褌一つで神輿の前に立たされた。

「……………」

……和泉さん、木曜どうでいアメフト部に拉致られたのを笑ってごめんなさい。『警察官(笑)に拉致られ、褌一丁にさせられる』のも相当恐ろしいです。

「今回!!!城南島海浜公園からお台場海浜公園までのやk……………」

城南島海浜公園からお台場海浜公園までの約10キロの海上を、男四人で重さ20キロの御神輿おみこしを担いで渡るといふ競技だそうだ。

ついでに……1位にはその年の福男という事で賞金1000万円貰えるそうで……

「……あの、左近寺さん。なんで俺が呼ばれたんですか?」

左近寺さんは葛飾署に勤務する警察官で、筋骨隆々なマッチョな体格の持ち主だ。ついでに、趣味はテレビゲームとフィギュア収集。最近はPCゲームに手をつけたそうで……

「本田が風邪で寝込んだ」

「……納得しました」

……本田さん、ご愁傷様です。できれば今日じゃなくて明日に風邪を引いてほしかった。

俺達の神輿には、両川さん・左近寺さん・ボルボさん・俺の計四人が担ぐ。単純計算して一人当たり約5キロ。巻き足まきあしをしたら5キロの重りなんて屁でもないが……それを10キロ先に届けるなんて……流石にキツイ。

「では皆さん位置についてください!!!」

……なんで俺、こんなことやってんだらう?

俺は諦め、神輿を担いだ。

開始から2時間半、トップを独走しているのは『築○場外市場連合チーム』。しかも前回優勝した強豪チームである。

第2位はどこかのテレビ局がバックにいる『お祭り男子衆チーム』。黒ぶちメガネの男性が威勢を張って頑張っている。それを撮る船の波が邪魔だ。

第3位は我が『新葛飾署チーム』。1・2位を必死に追っているが少しずつ離されていく。

「クソツ……!!!このままだと離される!!」

両川さんは悔しそうに言うが……左近寺さんとボルボさんは肩で息を吐いて、スピードが出ない。

ドドドド……

そんな時……小さなボートが近づいてきた。

……波は体力を奪うんだぞ?!

俺は思わず舌打ちをした。

「おいボウズ!!奴がやっとなれたぞ!!」

「……は?」

……鬼塚少佐?!なんだってここに!?

鬼塚少佐はゴムボートの上で腕を組みながら立っていた。

「やっとなGⅢが出てきた!!そんなことやっとないでさっさと準備しろ!!」

「ちよつと待つて鬼塚!!」

両川さんが反論した。

「ただでさえ負けてるってのに、人を抜くだど!」

「待つて両川、代わりの人員は連れてきた」

鬼塚少佐はそう言ってゴムボートの後ろを見て合図をした。俺達も視線をそこへ向けると……

「……ヤッホー!!」

ゴムボートには鬼塚少佐のほかに、浅黒い肌にアフロのダンディー

(笑)なおっさんが居た。

「ジミ!? (ジミさん!?)」

「軍からの日給に1000万でしょ、やるやる。」

彼は『ジミさん（又はジミおじさん・ジミなど）』。超有名なギタリスト~~ジミ~~ジミ~~オン~~に似ているためそう言われている。本名は不明。そして鬼塚少佐の大親友で、身体能力はバケモノ<sup>鬼塚</sup>以上。両川さん並みだ。

ついでに、ジミさんはよく職が変わる。（職が変わる＝ジミるなんて言われたりもする）

ジミさんは揺れるゴムボートの上で柔道着を脱ぎ、禪一丁になるとそのまま海に飛び込んだ。そのまま俺の近くまで泳いでくると……

「ほら村田!! さっさと変われ!!」

「ゴフツ!!」

ジミさんは俺を蹴って無理やりどかし、神輿を担いだ。

「ほら両川!! 1000万は俺達の物だ!!」

「当たり前だ!! 行くぞジミ!! 左近寺!! ボルボ!!」

「「おう!!」」

すると『新葛飾署チーム』の神輿はスピードをグンと上げ、第2位の『お祭り男子衆チーム』を軽々と抜き去った。

「うわあああああ!!」

「うおおおおおお!!」

……あれ? そう言えば『お祭り男子衆チーム』の黒ぶち眼鏡、なんかの番組で見たことある様な……。カッ

俺はゴムボートに上り、タオルで体を拭き始めた。もう11月の下旬、海の中はともかく……海から上がると途端に寒くなる。

「鬼塚少佐、GIIIはどこですか?」

「奴はこの先、~~船~~船の科~~館~~館~~近~~近くの海だ。……ほらよ。」

鬼塚少佐はそう言って拳ほどの大きさのものを俺に投げてきた。

……あの神輿の進路上に居るのか。

俺はそう考えながらそれを受け取った。手にズシンとくる。



俺は思わず確認すると……それは超小型の酸素ボンベだった。何故これを渡してきたのか全く理解できない。

「……なんです、コレ？」

「見りやわかるだろ？酸素ボンベだ。それと……これな。」

そう言つて鬼塚少佐がさらに渡してきたものは……ゴーグルと銃剣。嫌な予感しかしない。

「少佐……俺の戦闘服に装備はどこですか？」

「だから………それだ」

「……は？」

……おい、ちよつと待て。名も無きブイ（新人軍人編 私事に部下を巻き込まないで……）じゃねえんだぞ？

「坊主……俺達は奴らの飛行機に潜入し、奴らの仲間を無力化する。そのために坊主は囷となつてGⅢと戦つてもらおう。」

「……はい。それでなんでこの装備だけなんですか？」

俺はそう言つて手に持つ三点セット（酸素ボンベ・ゴーグル・銃剣）を見た。

「奴らは水中の警戒は怠おこたつてる。だからだ。」

「いやいやいや!!だからつて禰一つはないd……」

「うるせえ!!さつさと行け!!」

バキッ!!……ポチャッ

鬼塚少佐はさつさと行かない俺にイライラしたのか……俺の頬を殴り、海に落とした。

……クソツ!!この自走式暴力装置め!!

俺は痛む頬を無視しながらゴーグルと酸素ボンベ・銃剣を装着し、

船の科○館へ向かつて潜水した。

キンジは激怒した。必ず、かの邪知暴虐じやちぼうぎやくのGⅢを除かなければならぬと決意した。キンジには戦略がわからぬ。

キンジは日本の武偵である。姫アリアの銃弾や、その他の女難から逃げ暮して来た。けれども正義に関しては、人一倍に敏感であった。

キンジは『かなめのカレー（睡眠薬入り）』を食べ、戦闘に出遅れてしまった。ワトソンのクラウンで☒品川火力○電所☒に向かいながら、ジャンヌがTV電話によって送られてくる戦場の情報を見ている。

アリア・理子・レキを倒したGⅢは不機嫌そうにかなめを見ていた。「サード、殺す必要はない。ば、バスカービルは……師団ディーンは敵じゃない」

かなめは声を震わせながら……海上に立っているGⅢに意見し、「……フォース、これは命令だ。」

えつき、ほいさ……  
GⅢはそれを……威圧しながらかなめの命令を無視した。

「でも、サード……」  
「フォース!!!命令を聞けんのか!!!」

えつき、ほいさ……  
かなめはスクツと背筋を伸ばし☒☒回れ右☒☒をしてジャンヌの方向へ向いた。

「あ、あたしは……」  
かなめの顔は……恐怖の表情で歪む。声と手は震え、息は荒い。

「……自分より強い者には、絶対逆らわない……それは、非合理だから……」  
かなめは震える両手を交差させ、腰の刀に置いた。

その時だった。海上から高速で☒ある物体☒が、威勢よくGⅢに突っ込んできた。

「「「えつきあ、ほいさ!!!」」」

「「「テメエら!!!後ろが追い付いてきたぞ!!!気合を入れろお!!!」」」

「「おう!!!」」

バキッ!!!ヒュ〜……ポチャ……

GⅢは……神輿に轢かれ、海に落ちた。

「「「……………」」」

GⅢは重い武装のせいで浮かぶのがやつとのおようだった。GⅢは半分溺<sup>おぼ</sup>れている様な泳ぎをして移動し、目に見えない何かに掴まった。

「……海水のせいで壊れた」

さつきまでLEDの様な物が光っていた装備は、いまでは何の光も発しない。

ドドドドドドドドドドドドド!!!

GⅢは~~□~~どっこいしょ~~□~~と海上にある見えない何かに登った瞬間

……

バキッ!!!

「ボルボ、左近寺、ジミ!!トップに追いつくぞ!!!」

「「おう!!!」」

新たな神輿がGⅢを襲った。GⅢは海に落ち……不幸なことに後続の神輿の進路へ落ちてしまったのだろう……。その後も神輿に何度も轢かれ続け、瀕死の状態になってしまった。

「……強い、のか?」

キンジは……GⅢの強さと今の状態のギャップのせいで、思わず

つぶやいた。

「君には分からないだろうけど……日本って国は異常だよ。」

「……」

ワトソンは遠い目をし、画面越しのかなめは目を背けた。

寒さは恐ろしい……

度重なる神輿のせいで瀕死になったGⅢは、どこからか出てきた  
☒GⅢの仲間たち☒によって救出された。

その間にキンジが到着し……GⅢとキンジは互いに睨み合う構図  
になった。

「……カナ!!何でそこにいる!!」

キンジは周りを見て……クレーンの上で座っているカナ(金一)を  
見つけた。

「私は極東戦役の一つの可能性を見に来ただけ。それに……私は☒無  
所属☒自衛はともかく、誰とも戦う義理はないわ」

カナはそう言ってキンジから目をそらし……GⅢを見た。いや  
……『観察を始めた』のほうが正確だろうか。

「でもGⅢ。あなたは☒バスカール☒と敵対し、☒日本軍☒を挑  
発した。戦役に参加した者は☒死ぬか、敵の配下になる☒それを見  
にk……」

「そんなの構わねえ!!」

GⅢは威勢よく言うが……戦化粧は海水で溶けてドロドロ、自慢の  
武装は東京湾に違法投棄棄し、見るに堪えない姿だ。

「とうとうこれで☒Gの血族☒が揃ったなあ!!……だが使えねえ奴は  
切る。今はキンジとフォースが怪しいところだ。」

GⅢはそう言って……海上を歩いてキンジとかなめの方へ来る。  
GⅢの桁外れの威圧感と溶けた戦化粧が狂気を醸し出す。

「おい、フォース。何故殺さない!?これは戦争だ!!」

「かなめ!!かなめは利用されているだけだ!!命の恩義だか知らないが  
……『かなめを☒GⅢが☒助けた』のは自分の道具にするだけだろ  
!?」

GⅢとキンジの言葉に……かなめは覚悟を決めた様な、ギロツとし  
た目をし、柄に手を置いた。

「……フォース、☒かなめ☒と言われていい気になったのかは知らん  
……」

かなめは回れ右をしながら抜刀し、GⅢへ突撃した。

「あたしは……あたしは☒かなめ☒だああああ!!!」

「フォース、やっぱり使えなかったか……」

「特攻するかなめを……GⅢは『失望した』とでも言いそうな表情で見た。GⅢはその表情のままゴツゴツした大型拳銃をかなめに向けた。

ブオン!!!

「かなめ!!!」

キンジは思わず叫んだ。GⅢの大型拳銃から☒☒光の線☒☒が伸び、かなめの喉のどを貫いたからだ。

「フォース……その短い命、無駄に散らすか」

GⅢはその大型拳銃を海に捨て、腰から☒☒光る剣☒☒投げ……かなめの腹に刺さった。かなめは崩れ落ちるように倒れ……なかった。

「……!!!」

かなめは目をカツと見開きながら足を踏ん張った。そして姿勢を低くし、刀を構える。

「うおああああああ!!!」

「……!?!」

姿勢を低くした状態で再び突撃を始め、GⅢに刀を振るう。

ビュン……

「散らしてみろおおお!!!」

「ぐ……!?!」

GⅢは慌ててナイフで応戦しようとしたが間に合わず、かなめに右手を斬られる。

「散らしてみろおおお!!!」

かなめは再び刀を振るい……GⅢは来ていたマントで刀を巻き込んで何とか防ぐ。

ザバア……

「あたしは不死身イフキにいの妹だあああ!!!」

かなめは刀を捨て、腰のナイフを抜いてGⅢを刺したが……同時にGⅢの鉄拳を喰らった。

かなめは何回もバウンドし……キンジのもとに転がった。キンジは慌ててかなめを抱き上げる。

「何でこうやったかわかるか!？」

GⅢは肩で息をしながら大声で言った。それと同時に、キンジの雰囲気が変わっていく……

「オメエがそうなるのを待ってたんだよ!!俺は!!」

「……俺はもう優しくくないぞ」

キンジはまだ無事だった白雪にかなめを預け、GⅢをギロリと見た。その時……

ベキツ!!

「……死ねよ、テメエ」

やっと……ゴーグル・小型酸素ボンベに禪一丁の変態イブキが現れた。海から上がった変態はその恰好のままGⅢを後ろから殴った。

「……え?あれ……イブキ君?」↑白雪

「……イブキには……あ、あんな変態じゃな……ウツ……(白雪の胸の中で気絶)」↑かなめ

「か、かなめちゃん?……かなめちゃん!」↑白雪

「テメエ……よくもかなめを……!!!」↑イブキ

「……俺が言うのもなんだけど、とどめ刺したのお前だぞ!」↑GⅢ

かなめを白雪が搬送した後……

「……来いよ。キンジ、イブキ!!」

GⅢは濡れたマントを翻ひるがえそうと左腕を振り(濡れてるせいで出来なかった)、そのまま歩き出した。

……あそこまで重症を負っているのに、なぜあんなに隙を作っている?…

俺は警戒しながらゆっくり歩きます。東京湾の風が……西部劇の決闘決闘のように強く吹いている。

……いいか、俺。落ち着け。身内がやられたからって冷静さを失えば自分自身が死ぬんだぞ?冷静沈着……沈着冷静に。

「……イブキ、行くぞ」

アリアと一言二言交わしたキンジが俺のもとへ来た。

「わかってらあ……。久しぶりに二人で大暴れしよ……。ビエックシ  
!!」

「……………イブキと組むと何処か締まらないんだよなあ」

「ビエックシ!!……ビエックシ!!」

キンジの溜息とイブキのくしゃみ、それと遠くから響く祭りの掛け  
声が東京湾に響き渡った。

俺は寒さを無視し 四次元倉庫 から出したタオルで体を拭きな  
がら……キンジと一緒にGⅢを追った。

海上の透明な謎の物体の上……ポツンとマンホール（透明でない）  
の様な穴が開いており、その周りでGⅢとその仲間達が言い争って  
いた。

俺達が近づくと……その仲間達はGⅢに敬礼し、陸地へ向かって  
いった。GⅢはそれを見送った後、

「……来いよ」

GⅢはそう言っつて、マンホールの様な穴に入って行った。誘って  
いるのだろうか……行くほかない。

俺とキンジはその穴に潜った。

「飛んで火にいる夏の虫だ!!突撃いいいい!!」

「「だ、誰だ……!!」」

「アハハ!!!40センチ噴進砲は気持ちいいですねえ!!!」

「もうちよつと骨を見せろおお!!」

「練習にもならねえな」

「敵狙撃兵もいない狙撃なんて、ただの的ツス」

「もうちよつとサイバー攻撃の対策したらどうですか?（カタカタカ  
タ）」

……第2中隊の面々が血祭りをしている音を聞きこえてくる。相変わらず血の気が多いな。

マンホールの穴に俺が潜り、その後キンジが潜るころ……悲鳴が聞こえなくなった。辻さん達がGⅢの仲間を……1分もたたずに捕縛したのだろう。

……ほんと、化け物ばかりだな。グリーンベレーやらネイビー・シールズに所属していた奴らもいたのに。

俺がそう思った時……乗り物が揺れ、体中に何かの力(慣性力?)がかかる。窓がないから詳細が分からないが、まさか……

「飛んでるのか!？」

「……そうみたいだな」

キンジはドロツとした目でうなずいた。俺は銃剣で壁に無理やり穴をあけ、外を見ると……すでに高度100mは超えていた。

「米軍のおもちゃか……」

「次世代ステルス機の試作機さ。暗号名はコードネームガリオンGalion。低探知性能じゃ世界一だろうよ。……つっても製造コストのせいで量産は出来ねえらしいぜ」

キンジの言葉にGⅢはスラスラと答えた。

「……つと重量オーバーだ。」

GⅢは急にドアを蹴破り、そんなことを言い始めた。

「なんだよ、俺たちに降りろって言うのか?」

「たつた三人で重量オーバーってどう考えても欠陥機じゃねえか。ライト・フライヤー世界最初の飛行機じゃねえんだぞ?」

俺たちの言葉を見無視し、GⅢは一抱えはあるビニールの梱包物を次々に投げ捨て始めた。そのビニールの梱包物は……ベンジャミン・フランクリンと独立記念館が印刷されている紙束』が透けて見える。

……ベンジャミン・フランクリンに独立記念館って、100ドル札じゃねえか!?なんてもったいない!?



日本の一億円（一万円札×1万枚）は約32cm×38cm×10cm……GⅢが投げ捨てているビニールの梱包物もそのぐらいの大ききがある。

……という事は、100ドル札が1万枚ってことだから、約100万ドル!?

俺は慌てて四次元倉庫を開き、次々と落下するビニールの梱包物を回収する。

「……まだ重いな」

ビニールの梱包物を数个投げ捨て終わったGⅢはそんなことを言い、今度は金塊を投げ捨て始めた。

……なんという事でしょう!?俺の懐が温かいどころか真っ赤に燃え上がって!!!

「……イブキ、何やってんだ?」

「いや、あんなにくれるなんて……なあ」

キンジはGⅢを拝むイブキを白い目で見た。

なお、もちろん辻さんはこのことを知っており、GⅢの贈り物は翌日に没収され……残ったのは『フランクリン3人』と『100兆ジンバブエドル（＝約20円）5枚』だけだった。

……なんだってGⅢはジンバブエドルなんて持ってたんだよ。

俺は『ハハハッ、ざまあ!!』という視線を送ってくるフランクリンを、すぐに論吉に変換した。

さて寄付が終わったGⅢに案内され……俺達は機内の美術室を通り、機外に出た（その時、GⅢは芸術で性的興奮するとう事を知った）。

高度は約1000m。約150キロの速さで進む機体は米軍のB

2の様な全翼機で、光学迷彩のおかげで翼には東京の夜景が映し出されている。

「ここなら広いだろう？」

「いや……これでも狭い。ぐ退場願おうか、GⅢ。……ところで、お前って意外と優しいんだな」

「なんだとお……!!」

さて、キンジとGⅢが何やら話しているが……俺には一切頭には入らなかった。

さて、急に話が変わるが……高度が上がれば上がるほど温度が低くなるというのは知っているだろうか。1000m上がると気温は約0.6℃下がると言われる。

地上の温度は約10℃ほど、それで高度1000mなので……現在の気温は4℃。

それに時速150キロの物体の上に乗っているので……時速150キロ（約42m/s）の風が当たる。そのため、体感温度は余裕でマイナスを下回る。

そんな体感温度がマイナスの場所で……禪一丁の人間はどうなるか。

……メチャクチャ寒い!!

俺は慌てて四次元倉庫から着れる物を探したのだが……あったのは制服の上着軍手靴下白のマフラーしかない。

急いでそれらを身に着けるが……それでも寒い。

……ヤバい!!このままだと凍死する!!!

敵と戦って戦死はともかく、戦う前に凍死なんてごめんだ。

……何か、何か温かい物が無いと死ぬ!!!そ、そうだ火だ!!

俺は四次元倉庫からマッチを出して火をつけようとするが……もちろんつかない。

寒さは思考力を奪う……。例え、普通に考えれば当たり前な事でも思いつかないこともあり得る。また……。馬鹿なことをしでかす可能性もある。

……そ、そうだ!! 発煙筒はあつたはず!!

四次元倉庫から発煙筒を出し、着火すると……。真つ赤な火が体を温めていく。俺は足元を銃剣で穴をあけ、4く5本の発煙筒をぶつ刺して着火した。

……ああ、あつたけえ。

俺は四次元倉庫の中になぜかあつた灯油やらサラダ油やら、ま油を火に突っ込み、ウオツカを飲んで体を温め始めた。

「……つてお前何やってんだよ!!」

ウオツカ2本目を開けた時、キンジとGⅢが目をひん剥いて言ってきた。

「いや、寒いから火で温まってたんだ……」

「これ木材も使ってたぞ!! 燃え移ったらどうすんだ!!」

「も、木材!?!」

木材はレーダーを反射しにくく、『F-117 ナイトホーク(世界初の実用的なステルス機)』にも使われている。

そのため、この機体にも一部使われていても不思議ではない。

さて、火は……。油を入れた時の数倍の大きさで、飛行機の翼の上で燃えている。きつと火が木材に移ってしまったのだろう。

……チクショウ!! なんだって木材使うなら不燃処理しねえんだよ!!

『ふざけんな!! 燃料タンクはともかく、翼でキャンプファイヤーを想定して設計はしねえよ!!』by 設計者一同

ヤバい、幻聴が聞こえてきた。だいぶ酔っているようだ。

「しよ、消火しないと!!」

俺は慌てて持っている瓶の中身（ウオツカ）を火にかけ……

ボン……!! プツン……

さらに火が大きくなった。すると何か切れた音がし、光学迷彩が機能しなくなった。そのせいで……真つ黒な機体が露わあらになった。

「イブキ!! それウオツカだろ!!」

「……あ、やっべ」

俺達は慌てて消火しようとし……GⅢはそれを見て笑った。

「いいじゃねえかこのままで!! 燃え落ちる姿……これも芸術じゃねえか!!」

……あれ? そう言えばGⅢは 芸術で性的興奮する っつていつてたよな。うわあ、敵に塩送ってるじゃん

俺は消火を諦め、千鳥足でGⅢに向き合った。

……空きつ腹にウオツカを一気に流し込んだら流石に酔うか。

「話を戻すが……お前は勝てないと思ったから仲間を置き去りにし、生活を送れるように金を落とした。」

キンジは座った眼をしながら……GⅢに言い放った。

「誤解も甚だしいぜ。俺はっ……」

「誰もお前の真意に気づいてないさ。俺以外はな……」

GⅢは次第に顔が赤くなっていき、真つ赤な頬を搔き始めた。

……え? そうだったの!?

「ゴメンGⅢ。本当にごめん」

「いや、急にどうし……」

「あの……GⅢの仲間は多分第二中隊辻さん連が血祭にあげていると思う。それはともかく……ほら」

俺はそう言って 四次元倉庫 からGⅢが投げ捨てた金塊を出して見せた。

「……」

「いや……こんなもの捨てるなんてもったいないから、回収したんだ。」

うん……そんな真意があつて捨てたなんて気が付かなかつた」

俺はそう言つて10mほど先に四次元倉庫の入り口を作つて、そこに金塊を投げ入れた。そして今度は手前に入り口を作り、投げ入れた金塊を出して手に持った。

「……………」

三人の間に静寂が占拠した。

「……イモータルスピリットの他にPlan Crusherと呼ばれるだけあるぜ!!」

GⅢはそう言つてH&Amp;K USPを出した。

「時間がねえ、早く来いよ」

「……………後悔すんなよ!!!」

キンジはナイフと拳銃を抜き、俺は銃剣を握つた。

キンジとGⅢは銃撃戦をしている間、俺は影の薄くなる技を使い接近しようと……

「…………丸見えなんだよ!!」

首を落とそうとした一撃を……GⅢは当たり前のように防いだ。

「幽霊のように殺しに来るつて噂は嘘のようだな!!!」

GⅢは俺の攻撃をナイフで防ぎ、キンジに発砲していく。

……………どういふことだ!?!影の薄くなる技が効かない!?

確かに……赤外線カメラ等によって影の薄くなる技が無効化することはできる。しかし、GⅢは裸眼……赤外線が見えるなんて情報もない。

俺はもう一度影の薄くなる技を使い接近してみるが……まるで普通の攻撃のように対応される。

そこでやっと……原因に気が付いた。酔っているせいで……影の薄くなる技が未完成になり、逆に目立ってしまったている。

……………うわあ、完全にやらかした。

俺が心で頭を抱えた時、キンジとGⅢは弾切れになったのだろう。キンジも俺と一緒に接近戦をするが……どうにも倒せない。

「こいつはどうだ!!」

GⅢの足元から……やけにでかい鉄の筒が4本出てきた。その筒はケツから炎を吹き出し、明後日の方向へ飛んでいき……大きく旋回してキンジに1本、俺に3本突っ込んできた。

……嘘だろ!?!短距離空対空ミサイル、サイドワインダー!?

俺は急いで四次元倉庫から銃を出そうとするが……間に合いそうもない。

……クソツ!!銃剣一本でやるつきやないのか!?

俺は覚悟を決め、銃剣を構えたその時……3本のうち2本が急上昇を始め、爆発四散した。

「村田君!!遅いから助けに来ましたよおおお!!」

「希信達が迎えに来たぞおおお!!」

「ボウズ!!何やってんだ!!」

なんと、辻さんと神城さん、鬼塚少佐が降ってきた。

俺達が戦っているガリオンよりも2000m上空、高度3000mにはC-1輸送機が飛んでいる。きつとあれから空挺(落下傘なし)をやったのだろう。

ミサイルの爆発の原因は……辻さんと神城さんの手には軍刀が握られており、それでミサイルを叩き切ったようだ。

……1本ぐらいなら、余裕だ!!

俺は銃剣に多少の魔力を乗せ、ミサイルに投げた。銃剣はミサイルに当たり、ミサイルは蛇行し始め……俺から5mほど離れたところで爆発した。ミサイルの破片が俺の体を切り裂いていく。

……多少破片をもらうが、問題はねえ!!」

「二助けに来たぞおおお!!」↑辻・神城・鬼塚

……心強い援軍の到着か、これは勝ったな。

辻さんと神城さんはスタツとガリオンの上に立つ……

ベキベキベキ!!

立たなかった。辻さんと神城さんはガリオン<sup>Galion</sup>の翼に穴をあけ、そのまま海へ落ちて行つた。

……さて、鬼塚少佐はどうなったんだ……

俺は辻さんと神城さんのことをすっぱり忘れ、鬼塚少佐を探し……ケツをガリオン<sup>Galion</sup>の先端にぶち抜かれ、全身紫色の人間っぽい物があった。

「……………GⅢ!!よくも辻さん、神城さん、それに鬼塚少佐を!!!!」

「……………自滅だよな、あれ。」

キンジも何とかミサイルを何とか攻略しようだ。

「時間がねえからな……『流星<sup>メテオ</sup>』で千切らせてもらうぜ」

そう言つてGⅢは体をひねり、両手を突き出す動きを始めた。

……ヤバい、何か来る!?

俺は無理やり体勢を崩し、その拳の射線から逃げよう……。

ズドン!!

……拳が音速を超えるだ!?

GⅢの左手には円錐水蒸気<sup>ペイバークォン</sup>(マツハ0.8〜1.3程度で起こる現象)が見えたと同時に……俺の左わき腹がえぐり取られた。

「……………ツ!」

……クソ!?!酔っぱらった状態でどうやって戦う!?!酔う……そうだ、

酔拳<sup>酔拳</sup>!!

俺はロサンゼルスで会った香港の刑事・リーさん(高校生活夏休み編 ラッシュ<sup>ラッシュ</sup>○ワ)を思い出した。後で知つたのだが……彼は中国でも5本指には入る拳法家だそうだ。

ロサンゼルスで共闘し、事件を解決した後……リーさんに中国語と共に酔拳<sup>酔拳</sup>を軽く教えてもらった。

……出血量がマズい。クソツ!!イチかバチか酔拳<sup>酔拳</sup>をやつてやる!!!

俺は朦朧<sup>もろうろう</sup>とする意識の中……四次元倉庫<sup>四次元倉庫</sup>から日本酒の一升瓶を出した。

……景虎つて銘柄か。上杉謙信の初名が長尾景虎だったよな。こいつあ縁起がいいじゃねえか。どうか毘沙門天のご加護がありますように。

俺は瓶に口をつけ、日本酒を胃に流し込む。一口飲むたびに……思考速度は速くなるが、思考の理論がめちゃくちゃになっていく。

『……呼んだか?』↑山口多門丸少将

……毘沙門天を多聞天と呼ぶことがあるけど、そっちじゃねえよ!!

俺は日本酒を飲みながら、そんな幻覚を見た。

一升瓶の半分ほど飲んだ頃……GⅢは俺の雰囲気が変わったのが気が付き、突撃してきた。GⅢは拳を振るうが……その姿がまるでローモーシヨンのように見える。

俺は一升瓶をGⅢの目の前で割り、猫騙しをしたあと、眉間に一発拳を入れた。

「……おう、GⅢオゥゥまるで子供のお遊びだぜええ??……ウエヘへへ!!」

俺はGⅢの拳や蹴りを受け流し、逆に向こうの腹に蹴りを入れて強制的に距離を取らせた。

「さあ〜見せてやりやしよ、この酔拳!!飲めば飲むほど怪力にい〜!!拝観料はかなめの敵討ちだ!!……オエツ」

俺は胃からこみ上げた来た物を火の中に吐き酔拳の人差し指と親指でお猪口を持つ様な独特の構えをした。

……キンジがない、落ちたか。

俺は心の中で黙禱する。

「コイツ……!!」



GⅢは足元からトイレットペーパーの芯ほどの大きさの筒を蹴り上げて手で握り、その筒から光の刃（ビームの刃）を出した。そしてそれを持って俺に向かって突撃する。

「ゑへへへ……」

俺は千鳥足で体を左右に振ってその刃を躲し、GⅢの手首を殴りその武器を海へ落した。そのまま流れるように高速で7〜8発殴った後、股間に蹴りを入れた。

「グオオオオ……!!!」

「金的拳……ルール無用のおくく戦いには必須でええい!!……ゲ  
プツ」

GⅢは股間を押さえてしばらく蹲うすくまっていた。少し待つと、GⅢは苦悶の表情を浮かべ、股間を押さえて立ち上がった。

「来いよおGⅢ、武器なんて捨ててえかかってこい。」

俺はそう言つて☒☒四次元倉庫☒☒から新しい酒を出し、目の前で飲んだ。もちろん、空いている手の指をクイクイとさせ、挑発するのも忘れない。

「……こいよおGⅢ。怖えのか?」

「……へ?」

GⅢは一瞬呆けた後、憤怒の表情に変わっていく。

「この俺が、完璧な人間兵器ヒューム・アモがテメエを怖がるだど?誰がテメエなんか……テメエなんか恐かねえ!!」

GⅢは腰に巻いてある帯をナイフごと捨てた。

「野郎、ぶっ殺してやらあ!!」

GⅢが再び殴りかかってきた。俺は体の力を抜き、倒れるようにしゃがんでGⅢの拳を避けた。俺はそのまま回転する。2回転目で立ち上がり、回転の勢いをつけてGⅢを蹴った。

「千鳥足拳!!ただの酔っぱらいと見せての回転蹴りいい!!」

今度はその場で何度も側転し、逆立ちの時に顔面に蹴りを入れる。

「泥酔拳!!目にもとまらぬ高速回転蹴りいい!!」

GⅢは顔面を蹴られ、数mほど転がった。

……やっぱり付け焼刃じゃうまくいかねえな。

GⅢはヨロヨロと再び立ち上がる。この付け焼刃の~~ガ~~酔拳~~ガ~~リーさんには初歩しか教わっていないため……確実に仕留められるほどの決定力が無いのだ。

……これがチンピラ程度なら何とかなったんだが、  
まともに通用したのは『金的への一撃』ぐらいか。

俺の後ろで気配を感じた。この気配……キンジだろう。

……全く、落っこちたのにどうやってまた戻ってきたんだよ。相変  
わらず化け物だな、キンジは。

「いよおくくくキンジくうくん!!遅いじゃねえかく。おい!!」

「……酒臭いぞ。何やったんだよ」

キンジはボロボロの状態で……白い目で俺を見てきた。

「なあに、お前の『性的興奮』代わりに、俺は飲んだだけさあ!!」

「知ったのか。……それと臭いから近寄るな」

「そいつあく酷えじゃねえかあく?キンジくうくん!!」

「……………」

「……分かりました」

キンジは本気で言っているようなので、俺は大人しく離れた。

……そんなに臭いか?

俺は自分の腕を鼻に当てて嗅いでみるが……よくわからない。

「なあイブキ……」

「どうした。」

「……あとは俺にやらせてくれ。」

俺はキンジの目を見た。キンジは冗談を言っていない。

確かに、かなめの仇を取りたい。だけれど……酔っている状態の俺  
だと、GⅢを倒すには時間がかかる。GⅢを倒す前に炎が広がり、

~~ガ~~ガリオン<sup>G a i l e o n</sup>~~ガ~~が爆発するだろう。

「分かった。」

パチン

俺はキンジとハイタッチをし、下がった。

……キンジ、見せてもらうぜ!!

その時だった。急に横風が吹き、GalieonガリオンGalieonが大きく揺れた。流星に最新鋭の飛行機とはいえ……翼が炎上し、第二中隊の化け物辻さんと神城さんに大穴を開けられたら、体勢の維持は難しいだろう。

酔っぱらって千鳥足だった俺はGalieonガリオンから転げ落ち、ジェットエンジンで一瞬焦がされた後、東京湾に落ちた。

……さ、寒さ対策で酒なんて飲むんじゃないか?!

今頃後悔しても遅い。大量出血大量出血酒の酒の一気飲み一気飲み……俺は着水と同時に意識を失った。

「や、矢常呂先生!!患者の息と心臓が止まっています!!」

私はアンビュラス救護科のとある生徒だ。ちょうど中学生のインターンの子が患者の状態を見てパニックを起こしている。

確かに、私も最初は驚いたが……今ではもう慣れてしまった。経験則から……どうせ彼は復活する。

未だに矢常呂先生は疑問を持っているみたいだけど……悟ればストレスをためないで済むのに。

「あ、とりあえず傷塞いで、ベッドに放置しとけばいいから。」

「い、いやでも……AEDとか心臓マッサージとか……」

「まあまあ、落ち着いて。どうせ明日にはピンピンしてるんだから」

「……はあ!?!」

インターンの子は……翌日、その患者が禪一丁で走り、中間テストを受けに行く姿を見て卒倒した。

テストは絶対受けよう……

俺は目が覚めると……夜の校庭で寝ていた。

……え、ここどこ!?

慌てて起きあがり周りを見ると……全く見たこともない学校だ。

「は……?はい!」

「うるさいわね、静かにしてて」

俺の目の前には、紫色の髪の美少女が対物狙撃銃を握り、何かを狙っていた。

「え、いや……お嬢さん、助けてくれたのか」

「ええ、NPCじゃなさそうだし、保護したわ。」

紫色の髪の美少女は銃を離し、俺の方を向いた。

「俺の名前は村田維吹……お嬢さんは?」

「……あたしは仲村ユリ、みんなは親しみを込めて☒☒ゆりっぺ☒☒って呼んでいるわ」

「これが……死んだ世界戦線との出会いだった。」

「いや、やっぱり俺死んでねえよ!!!」

俺は飛び起きると……そこは見慣れた武偵病院の病室だった。

……頭が痛い。こりや二日酔いだな。

俺は近くにあったウォーターサーバーの水をがぶ飲みしていると……病室のドアが開いた。

「……あ、イブキにい!!」

扉を開けたのはかなめだった。かなめは包帯がグルグル巻きであつたが……ケガを感じさせない軽やかな足取りで俺に抱き着いてきた。

……いや、良かった。本当に良かった。俺はかなめが死んだのかと……

俺は思わずかなめの頭をなで始めた。なぜか目と鼻がすごく熱くなり、視界がゆがむ。

……かなめの仇を取ろうと思って、結局グダグダになって……情けねえ兄貴だよなあ。

「あ、そう言えばイブキにい!!」

かなめは頭を俺の腹にグリグリと押し付けた後、パツと顔を上げていった。

「今日、中間テストだったよね。」

……中間テスト……中間テスト!?

「……………え?!」

思い出した。学力的に点数は問題ないのだが……サボったら俺が死ぬ。

具体的に言うと……師匠・エジソン・ベオウルフにボコボコにされ、  
上官の辻化け物三人衆・神城秋山の爺ちゃん・鬼塚と吉田の爺様による特別訓練、保護者（自称）で近所の爺様から説教。

俺は……自分の顔が真っ青になっていくのが自覚できる。

俺は時計を見ると……8時15分。試験開始まで残り15分。そして、武偵病院（しんじょう）から校舎まで走って10分以上。

よって、5分以内で医者を探し、退院許可をもぎ取らねばならない。

……着替える時間もねえ!!

俺は四次元倉庫から紅槍を取り出し、穂先に着替えを括りつけ、禪一丁で医者を探しに走り出した。

「どこだあ!!!どこだ矢常呂先生いいいいいい!!!」

「あ、イブキにい!!あっちにいたよ!!」

「ありがとな!!!」

俺は何とか矢常呂先生を探し出し、かなめと一緒に校舎へ走り始めた。

道行く外国人からは『wow!! Japanese HIKYAKU!!!』などと言われながら写真を撮られ、クラスメイトからは『変態』と白い目で見られたのは言うまでもない。

数日後、中間テストを無事に終え、北海道で蝦夷テレビの口ケに付き合わされた俺は……師匠（スカサハ）に酔拳の修行をつけてもらっていた。（俺は飲んでない）

「よ……と……うわあああ……ゴフツ」

「……………ハア」

俺を簡単にボコボコにした師匠は槍をグルグルっと回し……石突（穂先の逆側の部分）で地面をたたき、大きなため息を吐いた。

「基礎がまるでなつとらん。いや……一部が全くできてない。だからこの程度だ」

師匠はそう言って槍を地面に刺し、通徳利かよいとつくりに入った粕取り焼酎を出し、飲み始めた。師匠は徳利を両手に持ち……その見た目の年齢には似合わない、可愛い飲み方で酒を飲む。

ドスツ!!!

俺の目の前5センチ以内に槍が着弾した。

「……………どうかしたか?」

「いえ……………何でもありません」

俺は酔拳の基礎ができていない理由を考え始めた。

……やっぱり、半日……いや数時間で基礎をすべて習うのは無理が

あるよなあ。

帰る日の当日、飛行機が出るまでの5時間ほど……リーさんに中国語を習いながら酔拳の基礎を教わったのだが……リーさん曰く『君のはまだ未完成だから』だそうで。

……我流でやるか、香港まで教わりに行くか、どっちかだな。

「そもそもお主、なんだって酔拳なんざ身に着けようとする？」  
「……俺、この極東戦役でわかったことがあるんです。……俺は今まで、襲う側ばかりで襲われる側は経験がありませんでした。」

「ほお……」

師匠の紅い眼がギロリと俺を捉える。

襲われる側はいつ襲われるか分かりません。それこそ酒を飲んでいる時でも……。『酒に酔って対処できませんでした』って言うのは理由になりません。だから……酔っぱらっても対処ができる酔拳を身に着けよ……」

「……酒を飲まなければよいだ」

「酒を飲まないなんてありえませんか!!!」

師匠の溜息が響き渡る。その時……

「おう、村田あゝ。」

蘭豹が不機嫌そうにやってきた。蘭豹は師匠の姿を確認すると、踵かかとをそろえて敬礼した。

敬礼が終わった後、首を持ち……

「お前に依頼や。」

引きずり始めた。

「え、ちよ、待って!!待って!!待って!!せめて自分で歩かせてください!!!」

今日、あたし達は学校見学に来た。何故だかわからないけど……あたし達はなぜか、銃器が手になじむ。だから……東京武偵高校を

見学に来た。

学校見学の時……教師に襟首を掴まれ、引きずられている生徒を見た時……なぜか知り合いの様な、そんな気がした。初めて会った顔なのに……

「おい☒☒ゆりっぺ☒☒ 早くいこうぜ!!」

「え、ええ……」

「なんだよ、今の生徒に見惚れたか!」

「……………フンツ!!」

「イテテテテ……………!!!」

俺は応接間に放り投げられた。俺はヨロヨロと立ち上がると……そこには、メガネをかけたスーツ姿の女性と、金髪で背の低い美少女がいた。

「村田あ、この子の護衛せい!!」

「……………え?」

……………いや、今極東<sup>F</sup>戦役<sup>E</sup>中<sup>W</sup>なんですけど!?!軍からの許可は得てるの!?!俺は色々と思いを巡らせるが……理解できない。

……………まあいい。とりあえずは挨拶だ。

「えつと……………村田維吹です。」

「白鷺<sup>ししはく</sup>千聖<sup>ちせい</sup>です。」

俺は彼女の『美しい笑顔の裏にある腹黒さ』を見抜き……悟った。……………こいつ(この人)とは馬が合わねえな(ないわね)。

「よろしくお願いします」

俺と彼女は……『何かを隠す黒い笑顔』のまま手を握った。

……………全く、軍は何を考えてやがるんだ!?!

あれ?そう言えば『ノンナさん』と声が似てないか?



さて、場所は東京の某所。

ある一室にて、HS部隊第一中隊の中隊長、鈴木敬次大佐は紫煙と一緒にため息を吐いた。

「……全く、東京へ侵攻はまだ千歩譲って許すとしても、  
P a s t e l \* P a l e t t e s に危害を加えるなんて……」

鈴木敬次大佐は手に持っていたパイプの灰を掻きだした後、あるDVDを出した。

「イヴちゃんに危害を加えようとは……!!!」

鈴木敬次大佐は、ハッピとハチマキをつけ、DVDを再生した。DVDは……P a s t e l \* P a l e t t e s のライブ映像を撮影した物だった。

「イヴちゃん!!! イヴちゃん!!!」

「あの……藤原少佐、中隊長の部屋からまたあの音が……」

「小野田、無視しろ。気づかないふりをしておけ……」

「し、しかし……だいぶ音が漏れているんですが……」

「下手に触れば鶴見のように飛ばされるぞ」

「は、はい!!!」

藤原少佐は漏れる音を無視して仕事を始めた小野田少尉を見ながら……ため息をついた。

……まあ鶴見の場合には自由にやりたいからワザと触れて海外に飛ばされたんだろうけど。

藤原少佐は……マカオで工作を行っている鶴見中尉を思い浮かべた。

マカオにて

「チャンくうううん!!!これはいい☒入れ墨人皮☒じゃないか!!!」↑  
鶴見

「我、頑張ったネ!!!」↑チャン

「月島あ!!これを☒キニー45☒の前に置いてこい!!!」↑鶴見  
「ハッ!!」↑月島

## 閑話：クリスマス特別編 上

12月10日午前1時過ぎ

北海道札幌市内の某所にて

「時間は1時15分をとうに過ぎたところで御座います。テレビを見ている皆さまもね、このぐらいの時間かと……」

「そうですね！きつと今ちようど回っているんじゃない……」

俺は眠い眼をこすり、あくびを噛み殺しながら……和泉さんと鈴藤さんの掛け合いを眺めていた。

なぜ俺がこんな深夜に札幌にいるのかというと……藤崎さんが東京武偵高に任務の依頼をしたからだ（極東戦役・極東編 俺の酒が……より）。ついでに依頼料は0000円、交通費（新幹線の自由席）と1000円……

……あれ？一応俺、Sランクの武偵だったよな。

なお、蘭豹&綴先生から『サイン貰ってこい』と脅されているため……拒否権はない。

音野さんが撮るカメラの横にいる藤崎を一睨みした後……俺は再びため息をついた。

「皆さんもね、眠たい眠たいと思われるかもしれませんが……我々も!!」

「……ククク」

「……全くだ」

「同じ環境に、身を置いて!!収録やって行こうと思っっています」

俺は周りを見ると……00ちゃん（安浦憲之助）死んだ目をした理子、金髪幼女と黒髪の保護者(?)がいる。

理子もあの藤崎から直々に指名されたらしい。死んだ目をしてるのは……シェフ和泉の料理にダウンして……まだ1か月とちよっとしかたつてない。まだトラウマが治ってないのだろう。

……安浦さんと理子はともかく、この二人はなんだ？

金髪幼女は目をキラキラして二人の掛け合いを見ている。もう一人の黒髪美女（保護者？）は冷たい瞳で見ているが……心なしか、ワクワクしているように見える。

……というか、何なの黒髪美女!!胸がでかい!!リサを超え……白雪クラス!?あんなスラッとした身長にそれは凶悪すぎd……

『イブキにい?』『お兄ちゃん?』『これが放置プレイ……啊啊!!』

かなめに粉雪、ココ姉妹の幻聴が聞こえ、理子が死んだ目そのまま俺を見てきたため、考えることを中断した。

『大人の女性が好みなら……私がいるぞ』

……おい、ハンナ（高校生活一学期編 大量破壊兵器は使っちゃいけない……より）。変な冗談言うんじゃないよ。久しぶりの登場だからってはいやいでんのか？

『私のことをわかってるじゃないか……それならば結婚をsh……』

……HS部隊よりも波乱万丈になりそうだから嫌です。

おかしい、ハンナの幻聴まで聞こえてきた。疲れているのだろうか。

「テレビをご覧の皆様は……今、12月24日。和泉さん、その日はなんでしょうか？」

「知りたくもないね」

「まあ……世間一般ではクリスマススイブです」

藤崎さんの笑い声が蝦夷テレビの社屋に響き渡る。

「テレビをご覧の皆さんもこれからパーティーなんかするかもしれませんが!!我々『木曜どうでい』も皆さんと一緒に、パーティーを!!」

「!!」「おお!!」

「気の合った仲間達と!!『木曜どうでい』の全スタッフ、集まってパーティーをしようと思っっています!!」

「俺達はこんな時間に呼ばれて、パーティーなんて……別に昼にやってもいいでしょ?」

鈴藤さんの言葉に、俺と理子・幼女と保護者(?)が思わず歓声を上げた。

……そうか!!パーティーか!!パーティーなら銃撃戦になったり、あんなものを食わされ……食わされ……

急に気分が悪くなった。俺は思考を停止し、落ち着こうとすると……なぜか気分がよくなる。

……俺は一体、何があつたんだろう。

また気持ち悪くなってきたので、無心で二人の様子を見る。

「パーティーと言えば……豪華な料理!!」

鈴藤さんの言葉に、俺はその言葉にうんうんと頷く。

何故だかわからないが……嫌な予感があるのは何故だろうか。

「料理と言えば……思い出すのは君です。和泉さん!!」

「……………そうでした。」

……え?

「今日は打ち抜かれに……お見舞いされにやってきました」

「よし、理子。……帰ろう」

「うん、イブイブ。……あ、依頼料どうする?」

「丸々返す……いや、むしろ色付けて返してやろう。金払ってでも出たくない」

「じゃあタクシー呼ぶね。」

「俺は飛行機か新幹線の予約するわ」

鈴藤さんが衝撃の言葉を放った瞬間、俺と理子は急いで帰る準備を始めた。

……当たり前だ!!見ているだけでもあんなに酷ひどかったのに、食べるなんt……

また気持ちが悪くなったので、考えることを止める。俺達は急いで荷物をまとめ、蝦夷テレビの社屋から出ようと……

「アツハツハツハ!!」↑藤崎

「大分失礼なこと言ってるけど……二人の気持ち、すつごく分かるんだよね」↑和泉

「いやいやいや待つて!!待つてつて!!」↑鈴藤

俺達は鈴藤さんに無理やり連れ戻され、イヤイヤこの企画に参加されることになった。

「大丈夫!!大丈夫だから!!もう『シェフ和泉』はあんなひどいの作りませんから!!」

「……なんですか?僕の作ったのがマズいとか?お見舞いしますよ?」

……何この人、ヤバいの作る気満々じゃん。

「……帰る」

「アツハツハツハ!!」

その後、もう少し二人の掛け合いが続いた後……

「さて今日は……スペシャルなゲストをお呼びしてます。」

「まあ、もうバレてますけどね」

「まずはこの方……O u ちゃんです」

鈴藤さんの紹介と共に……O u ちゃん安浦さんが渋々カメラの前に出ていった。そう言えば……今日すごくテンションが低かったな。

「さつきの村田君や峰ちゃんよりもやる気がないのはこいつですよ!!だってこいつ誕生日が今日なんだもの」

……なんてかわいそうに。

俺と理子は思わず同情した。誕生日にあんなもの食わされるなんて……

「それとですねえ……さらにビツクな方が来ております!!」

「そう言えば可愛らしい子が来てるけど……彼女達は一体誰なんだい？」

和泉さんも知らなかったらしい。

「実はですねえ、我々のロケに同行したいという物好きな方がいました……」

藤崎さんの言葉に、俺と理子は頷いた。

比叡山で武装ラジコンに追い回され、シェフ和泉のクソマズい飯を食わされ……挙句の果てには、どこへ行くかわからない旅に行かせられる(行先は絵はがき次第)。『サイコロで決める時もある。』と藤崎さんから聞いた。

……この人達が全国のテレビに出てみる、きっと世界で『絵はがきによる旅』をしそうだぞ? いや……『マグネットによる旅』だったりして

俺は……和泉さんが持っている箱から鈴藤さんがマグネットを引いている姿が目に見えた。

「まあまあ、こんなおっさんだらけの番組に綺麗な華が来たんですから……。ではご紹介しましょう!! 第62回戦車道全国高校生大会優勝、プラウダ高校の隊長と副隊長!! 『カチューシャ』さんと『ノンナ』さんです!!」

すると、金髪幼女は黒髪美女に肩車してもらい……そのままカメラの前へ出た。金髪幼女は肩車をされながら……薄い胸を張り、自己紹介を始める。

……え? つて言うか高校生!?

俺は二人を見た。金髪幼女はむしろ小学生に見えるし……黒髪美女は逆に大学生を飛び越え、大人に見える。

……なんて凸凹な二人なんだ!?

「このカチューシャが来たからには視聴率が100%を超えるわよ!!!」

「計算上、越えませんかよ」

「さて、和泉君はともかく……ピチピチの女子高生達の対応は、僕達にはとてもとても……」

「そもそも☒ピチピチの女子高生☒って言う言葉がもう死語だもの」  
「アハハハハハ!!」

カチューシャさんとノンナさんの自己紹介の後、再び二人の掛け合いと笑い声が響き渡る。

「彼女達が参加すると聞き……我々は困り果てました。そんな若い子の話に我々はついて行けるのだろうか……。その時、閃いたんです!!我々には☒高校生の仲間☒がいたことを!!」

「……そんな三文芝居しないで早く紹介しなさいよ。さっきのでもうバレてるんだからさあ」

「アハハハハハ!!」

……要はこの☒凸凹コンビ☒の相手をしろと。

確かに同い年で、俺は☒戦車道☒の共通点があるが……完全に他人なんです。理子に至っては共通点すらない。

「では、我々の頼れる助っ人、☒村田君☒と☒峰ちゃん☒です!!」

「……どうも」

「……イエーイ、りこりんだよ」

俺達はテンションが低いままカメラの前に登場した。

「二人とも!!テンション低いですねえ!!」

「藤崎さん、分かってるでしょ。」

「……あんな料理食べさせられて2カ月も経ってないんだよ?」

「二アツハツハツハ!!」

俺達の言葉に……☒蝦夷テレビ☒の面々は爆笑し☒凸凹コンビ☒は羨ましそうに見てくる。

……確かに傍目はためで見たりや面白いだろうけど、実際は地獄だから!!



「ではスタジオの方に向かいましたよ!!」

「あれですよ? 僕はそこらの料理番組であるような、チンケな厨房じゃ作らないよ!!」

「大丈夫ですよ!! あなたにピッタリなのを用意いたしましたんで……行きましょう!!」

鈴藤さんのその言葉と共に……俺と理子は、処刑場に連行され、  
デコボコ凸凹コンビは夢の舞台へ向かっていった。

「さっきつからねえ、扉が開いてるから煙いんだよ!! この匂いである程度予想できちやうんだよねえ!!」

「俺……最初はまだ楽しい宴会で、スルメやら鮭トバやら炙るのかなあ……って思ってたのに」

「イブイブ……それは考えが甘いよ」

「ふあ〜〜」

「眠いのでしたらベッドを用意していますよ。」

「ね、眠くなんてないわ!!」

俺達の目の前には……焚火台の上で燃え上がる炎を、運動会でよく見かけるあの天幕で囲んでいる場所（ここ、駐車場だよな!?!）に連れていかれた。

「これが用意された……セットですよ!!」

「何この貧乏くさくて……クソ寒いセット!!」

天幕の中には会議室にありそうな細くて長い折りたたみの机とパイプ椅子が雪の上に直接置いてある。

……ヤバい、メチャクチャ寒そう。

俺は思わずマフラーを首に巻いた。

「「「カンパニー!!!」」」

俺達は席に付き、ワインの入ったグラス（ノンナさんはぶどうジュース）を掲げて乾杯をした。

……あれ？きつと一本500円以下の安ワインかと思ったら、まああいいのを使ってるな。

俺は口に入れた時の芳醇な香りでそのことを理解した。

さて、今の状況は鈴藤さんがトナカイ安浦さんが簡易0  
うちゃんマスクを被り……俺・理子・ノンナさんはサンタの赤  
帽子を被っている。

「え、1名足りませんが始めさせてもらいましょう」

そう、カチューシャさんがいない。彼女は何処にいるのかというと……  
焚火の近くでノンナさんの隣、ソリ状の箱型ベッド（まるでベ  
ビーベッド）の中で毛布にくるまり、夢の世界を楽しんでいる。

……いやはや、見た目相応で可愛いじゃないの。

この子が戦車道大会でプラウダ高校を優勝に導いたなんて信じられるだろうか。

……でも、有能な人ほど癖があるからなあ。

有能で癖のある上司達を思い出し、ため息が出た。

「では、そろそろシェフに料理をお願いいたしましょう。シェフ!!」↑  
鈴藤

「よっ!!」↑俺

「リベンジだよ!!」↑理子  
「待ってました（目を輝かす）」↑ノンナさん

鈴藤さんがそう言う……コックの格好をした和泉さんがゆっく  
りと向かってきて、一礼をする。

「メリークリスマス……」

「「「「メリークリスマス!!」」」」

「~~ピ~~ピストル和泉~~へ~~へようこそ。打ち抜くぞおお!!」

「……（目をキラキラ輝かせる）」

和泉さんのその言葉に……ノンナさんはまるで、少年がスーパーヒーローに出会った時の様な目で和泉さんを見ていた。

……ノンナさん、結構冷たそうな印象があっただけ、全然違うんだな

俺はワインを飲み切り、ウオツカを飲み始めた。

このウオツカはプラウダ高校の学園艦の名産品らしく、ノンナさんが手土産として持ってきたものだ。（何故未成年が手に入ったのかはあえて触れない）

「ええ今回、とてもいいエビが手に入ったので……私が腕を振るい、『シェフ和泉風のエビチリ』を作らせてもらおうと思っております」

「あの（えっと）……」

和泉さんの言葉に……俺と理子は同時に口を開いた。

「食べられるものになるんですか?」

「……もちろんでございます。失礼な」

和泉さんはムツとした表情でそう言った。

「前回のを見たらそうなるんです」

「アツハツハツハ!!」

「ツ~~~~!!」

俺と理子の言葉に……藤崎さんは大爆笑し、ノンナさんは必死になって笑いを押さえていた。

……あれ? さっきまで、ノンナさん冷たそうな、ずっと無表情だったけど……このギャップがすごく可愛い

俺はそう思った瞬間、理子に横腹を殴られたため……無理やり思考を停止させられた。

「あれかい? 酒の肴かなんか欲しいかい?」

シェフ和泉がエビチリを作り始めて30分、まだエビの処理をしている時にそう言った。

「二」そうだね（ですな）!!!」

「だってもうワインは疾とつくの疾とうになくなって、ノンナちゃんの土産のウオツカも飲み干して、すでにOとuとちゃんとと村田君と峰ちゃんとは日本酒でいってるから」

「「いえーい!!」」

藤崎さんの言葉に、俺・理子・安浦さんは日本酒の入ったコップで再び乾杯をした。理子や安浦さんの憂鬱すずそうな表情は何処へ行ったのか……陽気な表情で笑い合う。

「あれですねえ、ノンナさんが飲むなんて意外ですねえ」

「ノンアルコールウオツカです。」

ノンナさんはそう言つてウオツカの瓶（自前）を口に付け、ゴクゴクと水を飲むように飲んでいく。

……ノンアルコールウオツカつて、ただの水じゃね？

俺はそう思いながら日本酒を啜すずる。何故かわからないが……ノンナさんはそのノンアルコールウオツカを飲む量と比例して、頬がどんどん赤くなっていく。

「エビの塩焼きがおいしい」

「……馬鹿じゃないのアンタ?」

この番組のプロデューサーの要望を、和泉さんはバツサリと切り捨てた。

「エビチリを作るって言ってるのに、なんで（エビの）塩焼きなんか作っちゃうの?」

「ツ~~~~!!!」

和泉さんの言葉にノンナさんは口を押え、顔を真っ赤にして笑いをこらえる。

……このギャップ、なんて可愛い娘なんだ……

理子が腹パンしてきたため、思考を中断する。腹パンをした後、理子はふくれっ面のまま日本酒をグイッと飲む。

「あのカップルはともかく……このエビチリ用のエビを焼いちやうの

「かい？あの焚火たきびで？」

「「「「「イエーイー（いいじゃない）！！」「」」」」」

シェフ和泉の言葉に俺達は歓声が沸く。

……当たり前だ。この人に手間がかかる料理をさせてみる、食えない物質が出来上がるぞ!？」

その事をノンナさん以外の全員は理解しているため……

「このぐらいでいいかい？（5匹を焚火たきびの上の網に置く）」↑シェフ和泉

「もつと、もつと焼いちやおう!!」↑鈴藤

「足りないって!!」↑安浦さん

「俺、エビチリよりも塩焼きのほうが好きなんですよ!!」↑俺

「まだ失敗しても軽い塩焼きのほうがg……」↑理子

俺は慌てて理子の口をふさいだ。

「あれですよ和泉さん!!塩焼きの様なシンプルな料理のほうが、シェフの素晴らしい（上手いとは言っていない）腕前が存分に発揮されるんですよ!!」

「……そうかい？」

俺は理子の口をふさぎながら言った。俺の言葉に……和泉さんにはやける。

「悪いね、手かけなくてね」

「「「「「いやいやいや!!」「」」」」」

和泉さんはグラスのワインを飲み干した後、焚火たきびにエビを15匹ほど載せ始めた。

カチン、シュボ!!、カキン……

シェフ和泉が焚火たきびにエビを乗せ始めたと同時に、金属音と燃え出した音、そしてタバコの香りが……

匂いをたどると……安浦さんがタバコを吸っていた。

「おし○u!!タバコ吸ってんじゃねえよ!!イメージ悪くなるだろ!？」

「アッハッハッハ!!」

藤崎さんが笑いながら突っ込んだ。俺達もその言葉に思わず笑ってしまう。

「……お前何してんの？食事前に喫煙して味分かるわけないでしょ!？」

和泉さんの言葉に、安浦さんは口をへの字に曲げた。

「俺だって別に、やりたくてやってねえんだよ。人の誕生日、夜中に呼び出しておいてよお……」

安浦さんはそう言った後、タバコを美味そうに吸った。

「お前、今『クリスマス0uちゃん』が売れてr……」

「いいからエビ焼け!!エビ焼け!!」

「アッハッハッハ!!」

その時、俺は殺気を感じた。慌ててその方向を見ると……ノンナさなんだった。

「安浦さ……いえ、Ouちゃん。カチューシャの前で喫煙とはどういうことですか？」

「……え?」

ノンナさんはゆっくりと席を立ち、ヤバそうなオーラを放ちながら安浦さんの方へ向かっていく……。

「まあまあ!!落ち着いて!!」 ↑鈴藤

「アッハッハッハ!!」 ↑藤崎

鈴藤さんのとりなしにより……なんとかノンナさんの怒りを鎮めることに成功した。

……別に吸っても、カチューシャさんまでの間に飛散してほぼ0になると思うんだけどなあ。

ノンナさんに絶対零度の視線で睨まれたため、考えを止めることにした。

「そう言えばノンナさん」

俺はノンナさんに話しかけた。

悲しいことに……悲しいことに!!俺と理子は『木曜どうでい』の準レギュラーを勝ち取ってしまった。

そんな俺達の話よりも、今回初登場のノンナさんやカチューシャさん（寝ているが）の話のほうが、視聴者は楽しめるだろう（俺達が話せることと言えば義妹との闘争劇ぐらいだし）。俺はそう思って声をかけた。

「戦車道」をやっているって聞いたんですけど……ノンナさんはどの車両に乗っているんですか?」

……うわあ、なんて無難な話題。

「Я на ИС—2（訳：IS—2に乗っています。）」「……」

……「IS—2に乗っている」でいいのかな?

ノンナさんの流暢な発音に思わず驚いてしまった。

日本人（網走出身）でロシア語をそんなに流暢に話すなんて……どれほど努力したのだろうか。俺の様な「ギリギリ会話ができる程度」の言葉「」の何倍も努力していることがすぐに分かる。

「や すりしやる しゅと ИС—2 うぞーく。えと ぷらづだ?」

（訳：IS—2は狭いと聞いてます。本当ですか?）」

俺は日本語訛りがきつすぎるロシア語で何とか返答した。

「Да это конечно узко. Вы оскоро ляете меня с высокими ростом?（訳：はい、確かに狭いです。私の背の高さで侮辱しているのですか?）」

俺の質問に、ノンナさんは絶対零度の視線で睨みながら言った。

無論、俺はそんなつもりで言ったわけではない。自分がしゃべれる簡単なロシア語のできる質問をしたただけだ。

……ヤバい、完全に誤解している。

俺は慌てて席を立ち、頭を下げた謝った。

「めにえじやる いえに いめえる づどうたく りーし!!（訳：すいません、そんなつもりはありませんでした!!）本当にごめんなさい

!! (訳：本当にごめんなさい!!)」

……ノンナさんは俺よりも背が高い。だから純粋に『狭い I S—2 だと大変じゃないか?』という意味で言ったんだよ!?  
すると……ノンナさんの顔は無表情から笑顔にフツと変わった。

「冗談です」

クールビューティーな彼女から、見惚れるような笑顔を見せる。俺は思わずドキツとした。

……なんでだろう。これが理子なら頭にくるが、なぜかノンナさんだと許せる。

ベキツ!!!

俺がそう思った瞬間、理子の飛び蹴りを喰らい……雪置き場に頭ごと埋まってしまった。

「何すんだよ!!」

「……知らない!!」

何とか脱出し、文句を言う……理子はピイツとそっぽを向く。

「「アツハツハツハ!!」」

「フフフ……」

……何が面白いんだよ、チクショウ!!

俺は雪を払い、ヤケクソ気味に酒を飲み干した。

「エビがいい具合に焼けてきましたよ!!」

シェフ和泉はそう言つて、焚火たきびの上のエビを取り上げ、皿たきびに盛り始めた。

『「エビの塩焼き ロサンゼルス風」です!!」

カット野菜が盛られた皿に、焼きたてのエビをシェフ和泉は盛つて、自信満々に俺達に出してきた。

「「どこがロサンゼルス風……?」」

俺に理子、鈴藤さんが思わず言う……

「なんかこう……アメリカっぽいでしょ?」

「「「……」」」



余りにも馬鹿っぽい答えに、俺達は言葉が出なかった。

さて、俺達は覚悟を決め、シェフ和泉作『エビの塩焼き ロサンゼルス風』を口にする……普通のエビの塩焼きだった。

「美味しい、美味しいよ!!」 ↑ 鈴藤

「……!! (手でOKのサインを出す)」 ↑ 安浦

「ウソだろ!? あのシェフ和泉の料理だぞ!」 ↑ 俺

「……あの時はどうしてあんなのを食べさせられたんだろ?」 ↑ 理子

「……ほお」 ↑ ノンナさん

とうとう日本酒も少なくなり……俺はラム、理子はテキーラのつまみでエビの塩焼きを食べるが……これがとても美味しい。

きつと材料がいいのだろう。

……流石は北海道。シェフ和泉の腕を、素材の良さで揉み消すとは。

これを東京で食べるとしたら……築地で直接仕入れるしかない。

……今度リサを連れて築地へ行こう

後日、リサの買い物に丸一日つき合わされ、疲労困憊になったイブキがいたとか……。

シェフ和泉はエビチリの調理をいったん止め鳥の丸焼き用の肉を取り出した。

「これはまあ……」

何をしでかすか分からないシェフ和泉でも……流石に鶏肉(丸々1匹)はさすがに持て余すようだ。

「……あれだね、とりあえずこの中に何か入れたくなるね」

シェフ和泉はそう言って、内臓等が入っていた腹の中に手を入れた。

「俺の母親（故）はそこに☒☒パンとベーコン、野菜☒☒をつめてましたね。鳥の肉汁が染み込んで美味かったなあ」

アメリカのジョン・F・ケネディ国際空港（ニューヨーク）で死んだ母親を俺は思い出した。

母親（故）が張り切って作った☒☒鳥の丸焼き☒☒……の腹のパンが好きだったなあ……と思いながら、俺はシェフ和泉が持っている鶏肉を眺める。

「普通この中って御飯とか入るでしょ？」

シェフ和泉は何か閃いたように言い出した。彼はまな板の上に肉を置き、ポケットをまさぐる。

「『鮭ハラスおにぎり』がいいと思うんだよね」

和泉さんはそう言って、ポケットから潰れた☒☒コンビニおにぎり（鮭ハラス）☒☒を出した。

『どうでい軍団』は爆笑しているが……俺と理子には冷汗が止まらない。

「お、おにぎり入れるんですか?! しかも☒☒コンビニおにぎり☒☒を!」  
「しようがないでしょう!?! ほかにご飯がないんだから……。それに村

田君、これ1個300円は下らない高級品だよ!?!」

「そう言う問題じゃねえよ!?!」

俺はおにぎりについて抗議をするが……シェフ和泉は俺の言葉を無視して、おにぎりの包装をむしり取る。

「え……あの……海苔もっ…」

包装をむき終わり、付属の海苔のりを巻き始めたシェフ和泉に……理子は恐る恐る聞いた。

「当たり前でしょう? おにぎり入れるって言うんだから、海苔のりが入るに決まってるでしょう!?!」

「っていう事は、鮭もはいr……」

「当然でしょ? だって『鮭ハラスおにぎり』だもん。」

シェフ和泉はおにぎりの海苔のりを巻きおえ、今度は……何かのハーブを出した。

「こちらローズマリーね。香りづけにいれようかと……」

「入れるのは良いけど……ちゃんととれよ（とつてよ）!?!」

俺と理子は……恐怖で怯えながら言った。

「何言ってるの!?!だってこれ食える物入れるんだから……出さないでしょ?」

シェフ処刑執行人和泉の言葉に……俺達は絶望した。

……軍の訓練の時さえ、もうちよつとはましなものだったぞ!?

「いいかい?これがメインだよ!?!」

シェフ和泉はそう言つて潰れたおにぎりを持った。

『おにぎりの包み焼き ニワトリ風』だよ!!」

余りの恐怖に……俺と理子は互いに抱き合った。

「では……ニワトリの肉汁が染み込んだおにぎりを食べるんですね?」

「そうだよ、お嬢ちゃん……だから周りは捨てるよ」

シェフ和泉はノンナさんと会話をしながら……用意したものを鶏肉の中に詰めていく。

しかし、俺と理子はそんな事を無視し、互いの装備の確認をする。この任務、互いにフォローしないと……最悪死ぬからだ。

「……鎮痛薬と頭痛薬、それに正露丸はある。理子は?」

「ああ、胃薬と整腸剤は……。クソツ、睡眠薬も持つてくるべきだった!!」

……なるほど、その手があったか!!

睡眠薬を飲んで、酔いつぶれたとすれば……食べずに済む。

「和泉君、卵入れたらどうだい?そのまま」

「ウズラの卵しかないけど……これでいいかい?」

「アツハツハツハ!!」

あの笑い声が……どうしても悪魔の笑い声に聞こえてくる。

「どうかされましたか?」

「ああ、睡眠薬を持ってくればよかつたって……ノンナさん!」

「……ッ!!」

俺達の会話に……ノンナさんは自然に入ってきた。

……おい理子、なんでナイフに手を置いて警戒してんだよ。

俺は何とか理子を落ち着かせ、ノンナさんの方へ向いた。

「……で、ノンナさん、どうしたよ」

「今回、カチューシャの願いで『木曜どうでい』のロケに同行しましたが……流石にあんなものをカチューシャに食べさせるわけにはありません」

「二でも、ノンナさん（ノンノン）も結構楽しんでましたよね（楽しんでたよね）」

「……」

ノンナさんは明後日の方向へ向いた。超ヘタクソの口笛も（……これは、カチューシャか?）も吹いている。

「……俺達は あの料理を食いたくない。そちらは『カチューシャさんにあの料理を食べさせたくないから、共闘できる』……と考えて話しかけたのか?」

「はい」

「カチューちゃんは寝てるから心配しなくてもいいんじゃない?」

理子はぶつきらぼうにそう言い放った後、テキーラのシヨットを一気に飲み干した。

「それだといいのですが……カチューシャは本日、いつもよりも長く昼寝をしています。もしかしたら……そろそろ起きてしまうかもしれません」

「確かに……あんな小っちゃい体であんな物食ったら、普通に致死量行くな。」

カチユーシヤさんは平賀さんよりも小さな体の持ち主だ。俺達は平気でも……彼女にとつてみれば致死量という可能性すらあり得る。

「タダとは言いません」

ノンナさんはそう言つて……『1円』と書かれた小切手を俺達に一枚ずつ渡してきた。

「好きなだけ〇〇〇〇を書いてもらつて構いません。依頼料です」

……え？何？最初の〇〇〇〇は書いたから、後は10円でも100万円にでもしてくれつてことか？

俺は理子を見ると……理子は肩をすくめていた。流石に、理子もこんな依頼人は初めてなのだろう。

「学生一人が払える料金にはならねえぞ」

「心配してくださらなくても結構です。カチユーシヤのためなので」  
俺と理子は思わずため息をついた。

……依頼を受ければ必然的にアレを食わされ、断つてもアレを食わされるのか。なんて貧乏くじだ。

渋々ノンナさんの依頼を受け、ため息をついた俺達は、嫌な現実を忘れようと……互いに盃をぶつけ、そのまま飲み干した。

「さあさあさあ……中断していたエビチリの方、再開しますよお」

「アッハッハッハ!!」

処刑執行人『悪魔軍団』の笑い声が……俺と理子の心で、残酷に響き渡つた。

## 閑話：クリスマス特別編 下

「さあさあさあ……中断していたエビチリの方、再開しますよお!!」  
「アッハッハッハ!!」

そう言えば、和泉さんが作り始めて結構時間が経っているような気がする。腕時計を見ると……すでに午前3時を過ぎていた。

「シエフ和泉……。すでに3時を過ぎています」

「アッハッハッハ!!」

ノンナさんの言葉に、さすがの『どうでい軍団』も笑いを隠せない。  
「じゃあちよつと急がないと」

シエフ和泉はコップ一杯の日本酒を飲んだ後、シヨウガやニンニク、ネギを刻み始めた。

「おおく!!!」

和泉さんは……あの料理からは想像できないほど上手に材料を刻み始めた。その光景に俺達は思わず歓声を上げる。

「じゃあ、一番!!イブキ、マラカスやります!!」

酔っ払い、そして死期を悟った俺に怖い物は全くない。

俺は第2中隊に所属していた時に覚えた宴会芸<sup>マラカス</sup>を披露する。披露する曲は俺の十八番、映画『マスク』で有名になった『Cuban Pete』だ。

「They call me Cuban Pete! (訳：みんな俺をキューバン・ピートって呼んでるぜ!!)」

「いいぞお!!」

「よっ、村田屋!!」

「アッハッハッハ!!」

途中、理子にフリ……。理子は嬉しそうに、ノリノリで一緒に歌い、踊ってくれた。

心なしか……。理子の気分がよさそうなのは見間違いに違いない。

「では二番、ノンナ……歌います」

俺の後はノンナさんがロシアの歌曲『カチューシャ』を、とても流暢なロシア語で歌い上げた。

途中から俺のマラカスも入れ、歌っていたノンナさんは……とてもノリノリで歌っていたのは印象的だった。

さて、俺とノンナさんの熱唱の後……藤崎さんが呟いた。

「そう言えば安浦君ってまだバイトしてるの？」

その言葉に鈴藤さんが答えた。

「安浦君ね、これ早く終わらせて……バイト行こうと思ってるから!!」

「二「アツハツハツハ!!」二」

「ヤスケンは朝もやってるの？」

理子は安浦さんに聞くと……

「そらあ当然だよ」↑安浦

「いや……安浦君は、セコイ人間だからね。『自分は今でもバイトしてるんです』って言うのが売りなんだよ」↑鈴藤

「違う違う……実際ね、この鈴藤社長の下だと食べないだよ!」↑安浦

「二「アツハツハツハ!!」二」

俺達は思わず笑ってしまった。

「あれですよ、安浦さん。軍なら衣食住は心配ないですよお」

「武偵もアルバイト以上に稼げるよ!!」

「プラウダの学園艦でも衣食住が保証されていますよ」

「俺……役者じゃなくてそっち行こうかな。」

「二「アツハツハツハ!!」二」

「あれ？安浦さんって役者だったんですか？」

「……和泉とヤスケンって芸人じゃないの？」

俺と理子の疑問に……社長鈴藤と社員和泉・たち安浦は黙ってしまった。

さて、調理が進み……シエフ和泉がエビを油で炒めようとするのだが、全然炒める時の音がしない。

「音が鳴りませんなあ……」

藤崎さんがそう言うが……それもそうだろう。火と言えばたきび焚火と、さつき持ってきた卓上コンロの2種類。

たきび焚火は『おにぎりの包み焼 ニワトリ風』で使われているため、卓上コンロによる調理となるのだが……極寒の外の札幌(夜)でエビを炒めるほどの火力はない。

その結果、エビを油で焼茹でる焼という異常事態が発生した。

「……マズそうだなあ」

「……………」

藤崎・鈴藤さんの言葉と、なかなか赤くならない白いエビを見て……俺・理子・ノンナさんの顔は青くなっていく。

シエフ和泉は焼白いエビ焼(ちゃんと火が通っていないという意味)をフランベしようとして失敗し(寒すぎてアルコールが蒸発せず)、焼白いエビ焼を皿に移した。

そして空いたフライパンを使い、ソースを作り始めた。

「パパッと作りますからよく見てて!!まずニンニクとシヨウガ、これを入れます」

シエフ和泉は刻んだニンニクとシヨウガをフライパンの中に入れて……それらが焦げるいい匂いがする。

……ここまでは大丈夫だ。ここまでは。

俺は不安を拭い去る様にラムを飲み干した。

「次にケチャップを入れます。ポイントとしましてはケチャップをあまり多く入れないください……あ」

ケチャップがチューブの4分の3入ったのだが……シエフ和泉は



無視して先に進む。

「ここで豆板醤を入れます。」

豆板醤がビンの半分ぐらいの量がフライパンに落ちて行く。

俺のグラスを持っている手が震えているように見えるのだが……きつと気のせいに違いはない。

「紹興酒も入れます。ちよつとだけ入れm……あ」

紹興酒がドバドバとフライパンに注がれた。1合以上は入ったはずだ。

「そして先ほどエビの頭で出汁を取ったスープを……すつかり濁っています、入れます」

白濁しただし汁をフライパンに回し入れ、中の物をゆっくりとかき回していく。

そしてシェフ和泉は出来上がったソースを味見し……「ん〜？」という疑問の声を上げながら、いろんな調味料を握り始めた。

「……テレビでは面白かったのですが、実際はこんなにひどかったのですね」

「あんた分からないで来たのかよ!？」

「はい。ただ大きさにリアクションしていると思っただけですが……」

ノンナさんはクールにそう言っているが……俺はそれを見て確信した。

……この人、有能そうに見えて何処か抜けている人だ。だって……前回の『料理対決』を見ていたら分かるはずだ。

10月とはいえ、外で2時間も生のシヤケをいじり倒し、野菜と冷凍のエビ（生）<sup>スミージ</sup>でスープを作る人間だぞ!？」

ノンナさんが問題発言をしても……シェフ和泉の料理の手は止まらない。

「……えくと、何を入れましようか？」

ノンナさん以上にヤバイ発言をしながら……シェフ和泉は塩、コ

シヨウ、レモン汁をどっさり入れ、豆板醤のビンを持った。

「いまいちなんて豆板醤を足しまsh……」

そう言つてフライパンに豆板醤を入れようとし……ビンの中蓋なかぶたが入つて行つた。

「ちよつと待つて!!今何か入つたよ!」

「何入れちやつてんの!」

藤崎さんと鈴藤さんがフタのことを気にしているが……そつちよりも豆板醤の量だ。

シェフ和泉はフタが入つてしまったことに驚いたのか……一瞬間まつてしまった。そのせいで、豆板醤全てがフライパンに入ることになつた。

「しよ、紹興酒もちよつと足しまsh……うわあ!!」

シェフ和泉はウオツカを一気に飲んで気持ちを落ち着かせた後、紹興酒を入れようとした時に足がもつれて転んでしまった。その時……紹興酒のビン（口は開いている）は見事な放物線を描き、フライパンの中へ入つた。

シェフ和泉は慌てて立ち上がり、紹興酒のビンを救出するが……

⊠時すでに遅し⊠紹興酒のほぼ全てがフライパンの中に入つた。

「アッハッハッハ!!」

『どうでい軍団』はこういう事に慣れているのか、笑つて流している。しかし、俺・理子・ノンナさんの表情はさらに青くなつた。

「では、ソースこれがグラグラツて来たら……最後にエビを入れて完成です。」

そう言つて10分後、一向にグラグラツと来ないソースに見切りをつけ、火があまり通つてないエビを放り入れて『エビチリ』が完成した。

……結局何を入れたんだ？

『シェフ和泉のエビチリ

材料

- ・火がほぼ通つてないエビ
- ・ニンニク、シヨウガ

・ケチャップ（4分の3）

・豆板醤（ビン1本）

・豆板醤のビンの中蓋なかぶた

・紹興酒（720ml）

・エビのダシの白濁スープ

・塩、コショウ、レモン汁（大量）

……思い出さなきゃよかった。

俺は頭と胃が痛くなる。この料理、どう考えても……美味しくなるはずがない。

「理子、胃薬くれないか？」

「イブイブ、その代わり頭痛薬ちようだい？」

「……私にもください」

「どーぞどーぞ」

俺・理子・ノンナさんは薬と一緒に……水みず盃さかずきを交わし合った。

「そう言えば、中華って音なるじゃん。」

藤崎さんが呟いた。すると、シエフ和泉は盛りながら反論を始めた。

「だからそれが火力なんだって……。こんなコンロにそんな火力あるわけないでしょ？」

「火が通ってないエビも入ってたけど……。本当に食える物なのかい？」

「しようがないでしょ!?こんなコンロしかないんだから!!……煮込みじゃってんだもの、グツグツと!!弱火で!!」

そして、シエフ和泉は盛りつけられた大皿を持ってきた。

「しかしですね、これ絶対美味しいよ!!……エビチリで御座います!!」

「「「おぉく!!!」」」

声色を変え、自慢げにその大皿を出してきた。

レタスの上に盛られたエビチリは鮮やかな朱色をしており、確かに見た目は美味そうだった。あの☒☒白いエビ☒☒もソースのせいで赤く見える。

……でも、材料から考えるとクソマズそうなんだよな。

「それでは実食です」

小皿に分けた後……顔が青いまま箸をつけようとしないうちに見て、鈴藤さんが笑顔（目は笑ってない）で食べ始めた。

俺達が固唾かたずをのんで見守る中……エビチリを口に入れた鈴藤さんは目を閉じ、ゆっくりと何回も咀嚼してから飲み込んだ。

「……コクはなく、うま味もない。ただ、後味が辛いから」

鈴藤さんは、ゆっくりと感想を述べた。

……え？ソースはともかく、あのエビは食えるのか？

というか、鈴藤さんは吐き出しもしなければ……顔をしかめることもしていない。そこまで余裕があるのか!?

「いやいや、きつとそんなことないはず……」

「安浦エビ好きだったでしょ？これきつと気に入るから!!」

今度は安浦さんがエビチリを頬張ると……

「フフフフ……」

急に安浦さんが笑い始めた。

「お前これ……高血圧で死んじゃうよ!!」

「なんで!?!」

安浦さんもそんな事を言っているが……ちやんと飲み込んでいる。

……マズいが、食えないって程じゃないのか？

俺は意を決し、エビチリを口にした瞬間……

「うゝおおおおおおお!!」

まずエビの生臭さが口の中いっぱいに広がり、紹興酒がその生臭さ

をさらに引き立てている。その次にケチャップの風味がわずかに香った後、以上なほどの酸味と塩気が襲ってくる。最後に豆板醤の辛さが喉と舌の細胞を破壊し始め、胃が飲み込んだ物に対して拒否反応を起す。

……マズいどころの話じゃねえぞ!?

俺は思わず席を立ち、雪上で吐いた。

「アツハツハツハ!!」

「吐いちやったよ!!」

『どうでい軍団』はそんな俺を見て、嘔し立てて笑っている。

……なんでこんな物食って平気なんだよ!!

俺は……胃の中の物全部を吐き出した。

とりあえずトイレの洗面台で口をゆすぎ、席に戻る途中……顔を真っ青にした理子が入違いざまにトイレへ駆け込んだ。

……あ、理子も食ったんだな

女子トイレからは……女の子が出してはいけないうめき声と、流体が零れ落ちる音がするのだが、気にしないようにしよう。

さて、席に戻ると……ノンナさんが無表情で、しかし悲壮感を漂わせながら覚悟を決めて食べようとしていた。

ノンナさんはエビチリを口に入れた瞬間……白目を向いて痙攣を起こし、ぼったりと倒れてしまった。

「ちよ、ノンナさん!? ノンナさん!!」

「お前が作るものはおかしいんだって、やっぱり!!」

焚火の近くに簡易ベッドを作り、ノンナさんを寝かした後……藤崎さんがシェフ和泉を非難した。

「そうだよねえ!? マスター?」

「うん、やっぱりおかしい」

藤崎さんに同意を求められた鈴藤さんも……同じ感想を言う。

「ああ、分かったこいつの味覚はおかしいんだ」 ↑安浦

「前は酔ってなくても悲惨だったんですから、少なくとも飲みながら作っちゃまずいでしょ」 ↑俺

俺と安浦さんも同意した瞬間……俺達に向かってシイタケが飛んできた。

「くあwse d r f t g y ふじこーp!!!」

とうとうシェフ和泉の堪忍袋が破裂したようだ。藤崎さんや鈴藤さんにもシイタケを投げながら咆哮する。

「お前ら作ってみろよ!! なんだ!? この小っちゃいガス台で作ってみろよ!! 誰がどうやったってこうなるんだよ!!!」

「でも豆板醤と紹興酒の件はガス台関係ないですよね?」

「お前早く食えよ!! この残ってるやつ全て、お代わりもあるから全部食えよ!!」

俺の余計な冷やかしに……シェフ和泉は余計にヒートアップする。しかし……これがまずかった。このシェフ和泉の声で……『眠れる暴君』を起こしてしまったのだ。

「ふああ〜……。あれ、ノンナ?」

カチューシャさんは隣で寝<sup>気絶して</sup>ていたノンナさんのほつぺたをツンツンと人差し指で突いて遊んだ後、エビチリを見つけてしまった。

「……ああ!! 料理ができてるじゃない!! 何でカチューシャを起こさなかったのよ!!」

彼女はそう言つてベッドから降り、こつちに向かってきた。

……この☒エビチリ☒を食べる気か!?

彼女の身長は130cm以下である。その身長と彼女の細い体から……体重は25kgほどしかないと予想できる。

そして毒物の致死量と体重は比例する（個人差はあるが）。カチューシャさんは俺（約75kg）の3分の1しかないため……俺が耐えられる量の3分の1ほどこしか耐えられない。

何を言いたいのかという……一口で俺がダウンしたのだから、カチューシャさんが耐えられるわけがない。というか最悪死ぬ可能性も……

「うおおおおお!!」

「え、村田君……?え?」

俺は急いで☒☒エビチリ☒☒の大皿抱え、一気に口へ流し込んだ。胃が拒否反応を起こし、思考力が麻痺<sup>マヒ</sup>していくのが自覚できる。

「アツハツハツハ!!」↑藤崎

「死んじやう、死んじやうから!!」↑鈴藤

「無理しなくていいから!!」↑安浦

「ほら、やっぱりハマる人にはハマるんだよ!!」↑和泉

「………ん?」↑ノンナ

俺が大皿の☒☒エビチリ☒☒を食べ終わった時、起きたノンナさんと目が合った。

『ノンナさん……俺、やったよ』

『感謝します。同志ムラタ』

目線で彼女と会話し、俺はサムズアップをしながら……ゆつくりと雪上に倒れていく。

「か、カチューシャの分が……」

「お嬢ちゃん、お代わりあるから気にしないでいいよお?」

「本当!?!」

………え?まだあったの?

俺は冷たい雪の上で気を失った。

俺はエキシビジョンマッチにおいて、クレーゲルパンツァー玉戦車に乗っていた。

「クソツ。最初に会った時とは打って変わって雰囲気全然違うじゃねえか!!」

ドンツ!!カキン……ドカーン!!

俺は~~東京~~東京での大事件~~の~~の時に出会った少女が乗っている戦車に追い回されていた。キューポラから乗り出す彼女の瞳は鷹のように鋭く、いにしえ古の名軍師のように深い。

俺はそんな彼女が乗る戦車から放たれた砲弾(7発目)を刀で弾く。

「華さん、何度も外してますがどうかしたんですか?」

「いえ、確実に当たっているはずなのですが……」

戦車道のルールでは『搭載される予定だった部材を使用した装備品のみ』使用可能というルールがある。

しかし、クレーゲルパンツァー玉戦車は謎が多く……出自・武装・利用方法等が一切分かっていない。分かっていることは『満州で鹵獲されたこと』・『装甲が5ミリであること』だけだ。

以上より、このクレーゲルパンツァー玉戦車に何を搭載しても大丈夫なのだ。

(ただし、一人乗りで戦車も小さいため……搭載できるのは『兵一人で持てるドイツ・日本製の武器』・『通信ケーブル』に限られるが)なので刀を使っても問題はない。

「ハハハッ!!どうだ当ててみやがれ!!」

カチン!!

「沙織さん、機銃を前の戦車に向けて撃ってください」

ダダダダダダ!!!

「え?ちよ、待って!」



この玉戦車は機関銃の弾も抜けるほどの紙装甲なので……  
「どうか生身の人間にも当たるから!!待って……ゴフ」  
俺は爆発した戦車から転げ落ち、彼女の戦車に轢かれ……

「うわあああああ!!」

ガッツ!!

俺は悪夢から目覚め、飛び起きた瞬間……額に何か固いものがぶつかった。

「ぐおおおお!!」

「二アツハツハツハ!!」

何とか痛みが引き……俺は周りを見ると、『顎を抑えている理子』。  
朱色の何かを口から垂れ流しながら、白目をむいて気絶しているノンナさん』がいた。

天幕のほうでは、カチューシャさんと『どうでい軍団』が楽しそうにニワトリの丸焼きを食べている。

……ノンナさん、お代わりあの分を食べてこんな姿に

俺はノンナさんの尊厳を守るため、ハンカチで彼女の口周りを拭いて瞼を閉じさせた。そして自分の上着を彼女にかける。

「うう……」

「……理子ごめん。大丈夫か?」

俺は理子を立たせ、一緒に席に戻った。

俺達が席に戻ると……シェフ和泉は待ってましたとばかりに『おにぎりの包み焼 ニワトリ風』を取り分け、それを出す。

「……」

俺と理子は☒☒エビチリ☒☒のトラウマがあるため……どうしても食べたくはない。

……というか、ちゃんと焼けよ

鶏肉は表面がカリカリ、中は鮮やかなピンク色をしている。焚火たきびなので火の調整が難しいのは分かるが……せめて表面は焦げてもいいから中まで火を通してほしい。

「そういうえば、あんた達」

俺のはす向かいに座っていたカチューシャさんが急に食べるのをやめ、ナイフを理子に向けて訪ねてきた。

「……?」

すると彼女はナイフとフォークを品よく置き、頬を朱に染めた。

「その……カチューシャの代わりに☒☒アレ☒☒を食べてくれたんでしょ?」

「……理子も食ったのか?」

「……イブイブほどの量じゃないけどね」

理子は☒☒アレ☒☒を思い出したのか……目は朦朧もろろとしており、皮膚が黄土色に変わっていく。

「その……ありがと」

「おお……」

「いいよ、カチューシャちゃん!!それで仲良くなれるよ!!頑張つて!!」

カチューシャさんの言葉に……藤崎さん・安浦さんが歓声を上げ、鈴藤さんはまるで☒☒子を見守る親☒☒の様に応援する。

「……」

……流石にノンナさんがあんな風になったら気付くか

俺と理子は目で会話した後、互いにハンカチを手にし……

「口についてるぞ(ついてるよ)」

カチューシャさんの口を拭いた。すると、カチューシャさんは顔を真っ赤にしてカンカンに怒る。

「ちよ、何するのよ!!」

「アッハッハッハ!!!」

……なるほど、ノンナさんがカチューシャさんを可愛がる理由がよ

くわかる。

その後、俺と理子はカチューシャさんを<sup>からか</sup>揶揄い、彼女の反応を楽しんだ。

理子はカチューシャさんの肉（なぜかそれだけは火が通っている）を切り、フォークで彼女の口元に運ぶ。

「カチューちゃん!!アーンアーン!!!」

「だから、アーンアーンはいらぬわよ!!」

「クククク……カチューちゃん!!冷めちゃうから早く食べなきやだめだよ!ほら、アーンアーン」

「……………アーン」

カチューシャさんはその肉を食べた後、俺はすかさず彼女の口元を拭く。

「汚れてるぞお〜」

「分かってるわよ!!!」

「アツハツハツハ!!!」

「ここは会社の駐車場ですよ!」

その時……シエフ和泉が女性を連行してきた。彼女は俺達のやっているパーティーを見てパニックになっている。

「何燃やしてるんですか!」

「彼女はですねえ〜。朝のニュース番組『おはよう 北海道』のニュースキャスター、<sup>いしだ あおい</sup>石田葵です!!」

シエフ和泉は彼女を落ち着かせ、『おにぎりの包み焼 ニワトリ風』を食べさせるが……石田さんはむせて、顔が真っ青になる。そして口を押さえ、小刻みに震えている。

……あの部位はほとんど生のところだ。早朝からあんなもの食べさせられて可哀想に。

俺はカチューシャさんの口元を拭きながら、心の中で合掌した。

「いつまで拭いてるのよ!!痛いじゃない!!」

「あ、ごめん」

「二アツハツハツハ!!」

その後、通りかかる『朝のニュース番組のスタッフ達』に料理を  
喰らわせ  
ふるまい……とうとう時刻は午前5時、やっと俺達は地獄から解放さ  
れる時刻だ。

「じゃあ皆さん、お疲れさまでした。」↑俺

「おお!!もうそんな時間ですか!」↑藤崎

「あ、もう5時か」↑鈴藤

「気をつけて帰りなよ?」↑安浦

「また今度も喰らわせるかr……」↑シェフ和泉

「……あ?」↑理子

シェフ和泉の言葉にとうとう理子はキレてしまい……裏理子で対  
応してしまった。

「おまえ!!あんなもの食わせといてそんなk……」

「理子!!落ち着けて!!テレビの前だから!!なあ!!」

両手にナイフを持ってシェフ和泉を襲おうとする理子を羽交い絞  
めにし、俺は何とか落ち着かせる。

「……りこりん・ジョークだよ?……てへっ」

「」「」「……」

理子は何とか落ち着き、ぶりっ子のようになぶるまうのだが……殺気  
丸出しで襲おうとした理子を見ているために全員ドン引きしている。  
シェフ和泉なんて腰を抜かしたのか……雪上の上で尻もちをついて  
固まっている。

「ああ……シェフ和泉の腕は次回期待しましょう。流石に本人も  
酔っぱらって作ったら悲惨なことになることは理解できただろうし」

「そ、そうですね……」

俺の言葉に鈴藤さんが声を上ずらせながら答えた。

「いやぁ本日はありがとうございます。………あ、和泉さん。後で社屋裏に来てください」↑俺

「バイバイ!!………ちゃんと社屋裏に会いよ?」↑理子

「アッハッハッハ!!」

さて、俺達は痛む胃腸を無視し……地下鉄の駅へ向かおうとする  
と、何かに服を引っ張られた。その方向を向くと……カチューシャさ  
んが俺達の服を引っ張っていた。

「カチューちゃん、どうしたの?」

「……トイレは向こうだぞ?」

「違うわよ!!!」

カチューシャさんは怒鳴った後……右手を俺達に出してきた。

「……ん!!」

「………?」

俺と理子は視線で会話した後……理子はハンカチ、俺は消毒用アル  
コールを出してカチューシャさんの右手を拭き始めた。

「そう、右手が汚れてたn……ってアホか!!」

「おおくカチューちゃん!!とうとう乗りツツコミを覚えましたか!!」

「そんなに成長して……俺は嬉しいよ……」

「あんたはあたしの親じゃないでしょうが!!」

……一々反応するから<sup>から</sup>揶揄<sup>から</sup>われるのに

俺はそう思いながら消毒用アルコールをしまった。すると、カ  
チューシャさんはそっぽを向き、小さな声で呟き始めた。

「今日は楽しかったわ。その……ありがとう」

「……こちらこそ」

俺と理子が笑顔でカチューシャさんに握手をすると、近くに小さな  
乗用車が止まった。その乗用車は今ではなかなか見られない古い夕

イプの車だが……隅から隅まで丁寧に整備されていることがすぐに分かる。

その車から金髪美女（スタイル良し）が下りてきて、俺達の方へ向かって来た。

「カチューシャ様、お迎えに上がりました」

「あ、クララー!!」

「ノンナ様は……眠ってらっしやるようですね」

「ああ……」

俺と理子は気絶しているノンナさんを見た。遠目から見れば、安らかに眠っている美女に見えるのだが……近くから見れば、寝顔が恐怖で歪んでいるのがよくわかる。しかも時々呻うめいているし……。

「困りました。まさかノンナ様が寝るなんて……」

小さな乗用車には誰も乗っていない。金髪美女一人で来たのだろう。彼女の細腕で気絶眠っしているノンナさんを運べるとは思えない。

俺はため息をついた後、ノンナさんに近づいてお姫様抱っこお姫様抱っこをした。

……普通だったらこの状況、嬉しいのになあ。

ノンナさんの顔は恐怖で歪んでおり……またお姫様抱っこお姫様抱っこの時に口が開いてしまい、そこから泡を吹いている。それに薄目を開いており、そこから見える白目が怖い。

「おおく!!」

「村田君、以外にプレイボーイだね!!」

「青春だね」

後ろの声を無視して俺はノンナさんをその乗用車の後部座席に乗せた。そして薄目を開いている瞼と口を閉じさせ、口元を拭く。

そう言えばノンナさんに俺の上着をかけていたのだが……このままでもいいか。どうせ軍の横流し品で、タダ同然で貰ったものだし。

「ありがとうございます。……えつと」

「村田です。……カチューシャさん、ちゃんと歯磨けよ?」

「カチューちゃん、風邪ひかないようにね?」

「だから!!あんた達は親か!!」

カチューシャさんは腕をグルグル回して俺に攻撃しようとするので、俺は彼女の頭に手を置いて腕を届かないようにする。その様子を見ている金髪美女は目を白黒（白碧？）しているが……無視する。「うう〜……!!!」

「じゃ、カチューシャさん。またいつか。」

俺と理子は再び歩き始めると……再び俺のすそを引っ張られた。振り向くと……やっぱりカチューシャさんが裾を引っ張っていた。

「あんた!! 同い年なんだからカチューシャ様さん様はないでしょ!!

……カチューシャ様様と呼びなさい!!」

「……じゃあな、カチューシャちゃん様」

様様でしょ!!」

俺は未だに裾を引っ張るカチューシャさんを無理やり離れた。

「来年も優勝したら呼んでやるよ。カチューシャちゃん様」

「……後悔しても知らないわよ!! 来年もカチューシャが優勝するんだから!!」

「期待してるよ」

俺達は歩く速度を早くし……地下鉄の駅へ向かった。

俺が『カチューシキ様様』と言うことになったかどうか……『ガールズ& amp ;パンツァー』の内容を知っていれば分かると思う。

「カチューシャ様? あの人達は……」

「カチューシャの友達よ!!」

「……（ブクブクブク）」

なお、俺と理子は地下鉄の駅のトイレにこもり、その後も札幌駅のトイレに引きこもった。そのせいで『札幌く新函館北斗』行きの特急に乗り遅れたのは言うまでもない。

「これで問題はなくなったわね。」

とある学園艦の一室で、美少女は紅茶を飲みながら呟いた。

「問題……ですか？」

ギブソンタツクの髪型をした幼い少女はポットを持ちながら聞いた。

「ええ、わが校はプラウダへ紅茶を売り、そのお金で☒☒彼☒☒から『木箱』を買っているのは知っているわね。」

「はい、村田さんから送ってもらっているそうですね。」

「でも……このままではイブキさんだけ儲かってしまうわ。わが校の予算も潤沢と言うわけではないの。」

そう言った後、美少女は優雅に紅茶を飲んだ。

だが、今の言葉で幼い少女は理解できなかつたようだ。

「ですが、それがなぜ村田さんとプラウダを親密にさせることになったのですか？」

「彼はお酒が好きでしょう？『木箱』で得たお金でプラウダからウォッカを買う（正確には寄付）ことで、『プラウダ↓グロリアーナー↓イブキさん↓プラウダ』というお金のサイクルができるのよ」

美少女はそう言うと、再び紅茶を飲んだ。その姿はまるで一つの完成された美しい絵画の様だった。

「イピカイエー・マザー○アツカー!!動きやがれですよ!!」

「ろ、ローズヒップ!?なんて言葉を!」



「でも……この掛け声が無いとこの子は動かないのですわ」

幼い少女には今の事は理解できなかつたようだ。そこで窓の外を見ると……金髪美少女に怒られている紅髪少女がいた。

「……ローズヒップさんの口癖は治りませんね」

「多分一生治らないと思うわ」

実はイブキにとって『木箱』の利益はほとんどなく、そこまで効果が無かつたそうで。

## 閑話 極東戦役：極東編

1：新人歓迎

これはまだ……イブキがHS部隊第二中隊に入隊し、一年目の新人だった頃の話である

どこの職場にも悪しき風習という物はあるもので……ここ、HS部隊第二中隊に入隊一年目の人間は忘年会の余興で、一つ芸を披露するのが伝統だそうだ。

……クソ!!滅んでしまえ、そんな伝統!!

俺は思わずため息が出た。もちろん、そんな余興のネタなんて持ってない。

……影が薄くなる技のネタは使えないしなあ。

影が薄くなる技は同じ部隊の狙撃兵・岩下一等兵曹もできるため……見慣れているだろう。

「……どうしたらいいんだ!!」

久々の休みの日、俺は駐屯地のベンチで頭を抱えた。どうせあの鬼上官達だ。面白くなかったら訓練で半殺しにしてくるだろう。島流しからの遠泳か、冬山に置き去りか、登山道無視の直線行軍か、1対数百の数日間連続鬼ごっこもあつたっけ……

……最悪、裸踊りでもするしか……ない!?

しかし、裸踊りなどしたことがない。

「どうした?村田?」

「……あ、ジミさん」

今日は清掃員の服装ではなく、ピエロの格好をしていた。また仕事変えたようだ。

「悩みがあるんなら聞くよ?」

「実は……」

俺は……忘年会の余興のネタがない事をジミさんに相談すると。

「なくんだ、村田。そういう事か」

ジミさんはそう言つて、一枚のチラシを渡してきた。

俺はそのチラシをもらい、見てみると……

『君にも余興の芸がすぐ身につく!!忘年会前の特別講座』

という文字と共に、『ジミさんがマラカスを持ちながら大玉に乗り、額で皿回しをする』写真が載っていた。

「……なんですか?コレ」

「年末になるとこういうので悩む人が多いんだよ。最近の仕事はこれ。」

そう言つた後……ジミさんはジーツと俺を見た。

「……なんですか?」

「……村田!!」

「は、はい!?!」

「君にはマラカスの才能がある!!マラカスをやらないか!?!」

俺はそう言われ、ジミさんに襟首を掴まれ……そのまま引きずられていった。

「……え!?ちよつと待つて……マラカス!?!」

その後、俺はなんだかんだあつて週2回・1回2時間の授業をジミさんにしてもらい……マラカスを覚えていった。(なお月謝30万)

「では、村田少尉!!マラカスをやります!!」

忘年会当日、俺は気合を入れてマラカスを握つた。ジミさん曰く『プロは無理でもアマチュアならいいところまで行く』そうだ。

俺はその言葉で自信をつけ、堂々と……壇上へ上がる。壇上へ上がると、部隊のみんなは可哀想なものを見る目で見てきた。

「お、おい……イブキ少尉?まさかお前……ジミに教わつたのか?」

「……?そうですけど?」

田中さん(田中曹長)の質問に答えると……部隊の全員が大きなため息をついた。

「どのぐらい払つたんすか?」

「えつと……30万ほど……」

みんな入隊一年目の時……ジミさんに唆そされ、高い金を払って微妙な宴会芸を教わったらしい。

……アレ？言われれば、マラカスに月30万ってぼったくってるだろ。

俺は心がブルーのまま……マラカスを振り始めた。意外にもマラカスが好評だった。

この3年後、イブキが武偵高校に出向した年の年末。あるテレビ番組『紅白歌の祭典』においてジミさんがマラカスだけで出場し、一夜にして名声を勝ち取ることになるのだが……その話はいずれ。

## 2： 果物の王様

武偵高校男子寮の屋上で、俺・ジャンヌ・キンジ・中空地さん・ワトソン・リサは□□あるもの□□を中心に、円形なって座っていた。「なあジャンヌ。俺は□□これ□□を□□君のために□□プレゼントしたんだ。それを返品だなんひどいじゃねえか」

ジャンヌは俺の言葉を聞くと、鼻で笑った。

「こんな高価なものを一人で独占するのはもったいないと思ってな。貴様もこんなものは食べたことがないだろう？」

……確かに、食べたことはない。食べようとも思わないが。

俺は□□それ□□を意識してしまい、思わず臭いを防ぐために鼻をつまんだ。

そう、俺たちの目の前にあるものは……『果物の王様・ドリアン』だ。

ドリアンとは……主に東南アジアで栽培される、栄養豊富な果物

だ。その栄養豊富さから、昔の王が精力増強として食しており、そこから果物の王様となつた……という説もある。

目の前にあるそれは……俺とキンジがジャンヌへのお見舞いの品として贈つたものだ。

しかし、そのドリアンは送つたところよりも臭いがきつくなり、色も緑から褐色に変化し、割れ目も見えている。これらは熟している証拠だ。ジャンヌは見事に追熟に成功したようだ。

「呼べるだけ呼んでみたのだが……これしか来ないとは」

「友達少ねえんだな」

……クソツ。ジャンヌの友達が多ければ、一人当たりのパイがさらに少なくなつて……

ドスツ……!!

「ぐおお……」

ジャンヌの腹パンを受け、俺は腹を抱えながら苦悶の表情を受け取る。

『緊急の話があるから』って聞いて急いできたんだが……帰つていいか?」

「キンジ、お前だけ逃げるなんて卑怯だぞ。」

急いで逃げようとするキンジの足首をつかみ、俺は逃げられないようにする。

「離せ!!イブキが送つた奴だから俺には関係ないだろ!」

「名義上は俺とキンジなんだよ!!諦めろ!!」

俺がキンジを羽交い絞めに行っている間……リサは黙々とドリアンを切り分け、小皿に分配した。

「皆さん、好きなものを取ってください。」

リサの言葉に俺とキンジ以外は急いで量の少ない皿を奪い始める。俺とキンジは急いで喧嘩を止めるが……すでに量が多い物しか残つてない。俺達は渋々、量が多い皿を選ぶ。

「あ、イブキ様!!リサの分もどうぞ!!」

「え?ちよ、待つて……」

リサは自分の皿の半分を俺に分けてきた。俺はリサの顔を見ると、彼女の顔に悪意は一切ない。

「ドリアンは栄養豊富なんですよ!!最近お疲れのイブキ様にはもってこいです!!」

「お、おう……」

リサは悪意が一切ない☒晴天の避暑地に咲くひまわり☒のような笑顔を俺に見せてきた。俺はその笑顔を見て、少しでも疑ったことへの罪悪感に襲われる。

……でも有難迷惑ありがためいわくなんだよなあ。

俺はクリーム色の果肉を見ながらため息をついた。

「うっ……」 ↑ジャンヌ

「ゴフツ……」 ↑ワトソン

「……」 ↑中空知さん

ジャンヌとワトソンは今にも死にそうな表情をしながら食べている。それに比べて中空知さんは無言で、しかも心なしか美味そうに食っている。

「……お？」

俺も意を決し食べてみると……口と鼻に異臭が広がっていくが、舌には癖になるような甘い味が広がっていく。

……臭いと味のギャップがひどい。

この匂いに耐えられた者にしか味わえない、最高の味だ。確かにこれは☒果物の王様だ☒

……好んで食べようとは思わないが。

何とか自分の分を完食し、貧乏性の俺は今にも死にそうなワトソン衛 生 兵とジャンヌ騎 士 様の分を『もつたいない』と食べようと……

「……(ジー)」

「あの、中空知さん……食べる？」

「え……あ、むら……むたら君。い、いいの？」

「……うっ」

ジャンヌとワトソンは自分の皿を俺と中空知さんのそばに置くと、そのまま気を失った。

「ちよつと!?!ワトソン!?!ジャンヌ!?!」

俺は二人を慌てて救護科へ連れていく後ろで……中空知さんが残ったドリアンをむさぼっていたそうだ。

その後……月に1回、スキップをしながらドリアンを買う中空知さんが見られるらしい。

3： ミニチュアボトル

「すいません、お届け物です」

「はい」

俺は荷物を受け取ると……流暢なラテン語で書かれている。

『Statu Civitatis Vaticanae』?……バチカン市国!?!」

まさかラテン語を使うことがあるとは……と思いつつ、俺は箱を開けた。すると中には、弾頭がカラフルに塗装された10発ほどのライフル実包が入っていた。隠語が『ミニチュアボトル』だった理由も、ライフル実包特有のくびれで理解できる。

……これが武偵弾か。

メーヤが『支援物資を送る』と言っていたのを思い出した。アリアの45ACP弾、キングの50 AE弾はすぐに届いたが……俺の分はなかなか届かなかった。

俺は一発持ってその弾を観察してみると……自分が使っている実包と形が全く違う。俺は慌てて38式実包を出してみるがやっぱり形が違う。

武偵高の教科書を引っ張り出し、その実包を調べると303ブリテイツシュ弾であることが分かった。

……こんな弾を使う銃なんて使ってねえよ。

俺はパソコンを開き、メールでメーヤに連絡すると……パソコンにテレビ電話の通知が来ている。俺はそのアプリを起動させると……メーヤからだった。

『おはようございます……イブキさん』

メーヤは寝起きだったのか、あくびをしながら目をこすっていた。彼女はネグリジェを着ていたため、その豊満な体が……

……いいか俺？向こうはシスター。下手なことをすれば『HELL SING』のアンデルセンがすっ飛んでくるんだぞ？

俺は鉄の意志で男の欲をねじ伏せる。

「ああ、おはよう。あのさ、メーヤ。武偵弾、届いたのはいいんだけど……」

『それは良かったです』

メーヤは眠たそうにしながらも、聖母の様な美しい笑みでうなずく。その仕草で彼女の豊満なものがたゆんと揺れ……

……おい、どうした鉄の意志!?

俺は急ぎ鉄の意志（ペラペラに薄い）で視線を戻す。

「あのさ……弾薬が違うんだけど……」

『……うーちゃんと武偵弾を送ったはずですけど……』

「いや、そうじゃなくて……303ブリティッシュを俺は使ってた……」

ゴーン……ゴーン……

パソコンから荘厳な鐘の音が聞こえる。その瞬間、メーヤはハッと眠たそう目を見開き、ネグリジェに手をかけた。

「えっ!ちよつと!」

『ああ!!礼拝の時間なのでまた後でお願いします!!』

プツン……

メーヤは急いで着替えながらテレビ電話を切った。

……これ、どうしよう。



俺は武偵弾ミニチュアボトルに目を向けた。やっぱりその箱には、303ブリ  
テイッシュ弾が入っている。

武偵弾は一発で数十万〜数百万はするらしい。それを『もう一回送  
れ』というのも気後れきおくする。

……この弾を使うのは、『リーエンフィールド』・『ルイス軽機関銃』・  
『ヴィツカース重機関銃』とか。そう言えば『ウインチェスター』も使  
えたっけ？

機関銃は銃剣つけて振り回せないし、38式があるから『リーエン  
フィールド』も『ウインチェスター』もいらぬ。

結局薬莖を外し、弾頭を投げるか自爆かのどちらかになったのは言  
うまでもない。

#### 極東戦役：欧州戦線にて

「これでどうやって戦えばいいんですか!!」

兄兄弟者者矢原嘉太郎さん臨時少尉（野戦任官で昇進）がリバティーマイソンからの  
補給品である『リーエンフィールド』骨董品の銃を地面に叩きつけた。

「いつの時代の戦いだと思ってやがるんですか!?!べらんめえ!!」

まだ『リーエンフィールド』ならいい方で、バチカンから『マスク  
ト銃と黒色火薬』を送られてきたときは10分ほど呆然としてしまっ  
た。

「少尉、荷物が届きました。」

リバティーマイソン所属の少年が小包こつみを持ってきた。兄兄弟者者矢原嘉太郎  
はさつきまでのいら立ちは何処へ行つたのやら、（作り）笑顔でその  
小包こつみを受け取った。

「なんです？コレ？」

その箱には……弾頭がカラフルに装飾された38式実包が10発  
ほど入っていた。

#### 4：新巻のお兄さん

とある商店街にて、少女たち5人が話しながら歩いていた。少女たちは『Afterglow』というガールズバンドを組んでいる。

「ねえねえ、クリスマスカード発売中!! だって」

「「「ああ〜……」」」

灰色の髪の毛のマイペースな少女が声を上げた。クリスマスカードという言葉を聞き、4人があることを思い出した。

「ふふふつ、クリスマスカードと言えは……」

「そう言えば、昔はサンタさんにみんなの手紙を届けに行ってたっけ」

茶色気味の黒髪ショートカットの少女とピンク髪の毛の豊満（何処がとは言わない）な少女が声を上げた。

「あはは!! そうだったな」

「そう笑っているけど……最初のきっかけは巴だからね？ 迷子になりかけて……その後、郵便局で強盗にも会って……。ほんと大変だったじゃん」

「え？ あれは蘭だろ？」

「あれは巴が……!」

「はいはい、それまで」

赤髪の毛の長身少女と黒髪赤メッシュの少女が喧嘩になりそうだったので、灰色の髪の毛のマイペース少女が止めにかかった。

「ふふ、懐かしいね。初めて5人だけでサンタさんにお手紙出しに行つて、『新巻のお兄さん』に会った時の事」

「あの年に私達5人、友達になつたんだよね」

茶髪少女とピンク髪の毛の少女が話題を膨らませていく。

「そっか、あの年が色々初めでだったんだ。」

「そだよ。蘭とあたし達が出会って、友達になつた年……。あたしは昨日の様にはつきり覚えているよ」

黒髪赤メツシユ少女の言葉に、「灰色のマイペース少女はあの時を思い出すような遠い眼をして答えた。

「クリスマスの日、『新巻のお兄さん』がテレビに映ってたよなあ。確かテロリストを倒したんだっけ……」

「そうそう!!あの時はすごく驚いたよね!!」

赤髪少女の言葉に、ピンク髪の少女は激しく同意した。

「今思えば……『新巻のお兄さん』ってあたし達と同じくらいの年なんだよね」

「あの後、『新巻のお兄さん』にお礼を言おうと思っても全然会わなかったんだよね」

黒髪メツシユ少女と茶髪少女の会話を尻目に……灰色髪のマイペース少女は『新巻のお兄さん』のことを思い出した。

……『新巻のお兄さん』って名前じゃないし、そのあと何度かテレビでニュースになってただけだねえ」

約十年前、のちに『Afterglow』を組む少女たちがまだ小学生になっていない頃の話。

幼女5人はサンタさんへの手紙を書き、郵便局へ手紙を出しに行くことになった。

幼女たちにとって郵便局までの道のりは長く、誘惑がいっぱいある。おもちゃ屋や文具屋の誘惑を我慢して進んできた幼女たちだが……食欲には勝てることができず、パン屋の前で道草を食べ始めた。

「わあ、パンのにおいがするよ」

「ほんとだ!!みて、トナカイのパンがあるよ!!」

「何見てるの?あ、そりのパンだ!!」

灰色の髪幼女、ピンク髪の幼女、赤髪幼女はクリスマス限定のパンを見てキヤツキヤツと楽しく話し出す。

「みんな、ゆうびんきよくに行かないと……」

茶髪の幼女が道草を止めにかかるが……それでも3人の話は止ま

らない。

「モカちゃんほどのパンがいい?」

「モカはねく……」

「……グス、行かないきゃ……サンタさん……」

黒髪幼女が泣きだしそうになりながら、呟いた。

「らんちゃん、大丈夫?」

「はやくゆうびんきよく、行かないきゃ……しまつちやう。……そしたら、サンタさんに手紙、渡せない……」

「……」

「う……グス……サンタさん来ない……えくん!!」

黒髪幼女が泣き出したのにつられ……幼女たち全員が泣き出した。

「……ふえくん……やだあく!!!」

幼女たち5人の鳴き声が商店街にこだまする。

幼女たちが泣き出した時、彼女達より年長な少年が新巻鮭あらまきじやけを背負い、大きな白いビニール袋を持った少年がパン屋に向かって歩いていった。

「……ハア。普通、小学生に12月下旬のアメ横に一人で買い物行かせるか?どう考えても小学生が持つ量じゃないだろ、コレ。」

少年の持つビニール袋にはエビやコンブ・スルメ……それにオマケで付いてきたズワイガニ1杯が入っている。どう考えても小学生一人が持てる量ではない。

こんな量を持ちながら、人があふれかえるアメ横での買い物は……想像を絶するものがあつただろう。

「と言うか……今時、袋詰めされずに藁縄わらなわ一本で吊るされている新巻鮭なんて初めて見たぞ?でも、なぜかそれが一番高かったんだよね……」

そんな大きなビニール袋を持ちながら、3キロは優に超える新巻鮭(そのまんま)を背負う少年は異様であった。

「……最後は山吹ベーカリーで『ナッツが入ったライ麦パン』か。……近場のパン屋で買ってもいいだろうに」

少年の母親がその『ドイツパン』が好きなため、1〜2カ月に1回は買っている。しかし、クリスマスに旅行を控えているため、荷造り中の母親に代わって少年が買い出しに向かったのだ。

少年は母親から渡されたメチャクチャヘタクソな地図を頼りに歩くと……やつと目当てのパン屋が見えてきた。

少年は本日放送の『ドリ○ターズ 再放送スペシャル』が始まるまでに帰宅したいので、必然的に早足になる。

「「「ふえくん!!」」」

少年がパン屋の前に付いた時……5人の少女が大泣きしていた。少年は少女を無視して店内に入ろうと……できなかつた。

流石に少女達が泣いているのを無視するのは、少年にはまだできなかったのだ。

「……お嬢ちゃん達、どうしたんだい?」

少年は重い荷物を地面に置いてしゃがみ、少女達と同じ目線になって訪ねた。すると黒髪の少女は少年の顔を一瞬見た後、さらに泣き出した。

「俺……そんなに怖いのか?」

自分の顔を見てさらに泣かれるという事に、少年は地味にショックを受けた。

「サンタさんにお手紙とどけなきやいけないの〜!!」

するとピンク髪の少女が泣きながら理由を伝えるが……少年には全く意味が伝わらない。

少年はため息を一つつき、地面におろしたビニール袋から好物のスルメを取り出した。

「ほら、泣き止んで!!スルメ上げるから!!」

少女達は一瞬泣き止み、少年が手にしているスルメグロテスクな物に注目し、再び泣き出した。というか、さっきよりも強く泣き出した。

「おにいさくん、ゲソちよくだい?」

「え?あ、うん……」

灰色の髪の子女は泣きださず、ゲソをもらって喜んでかじっていたが。

少年が他の子女達を必死になだめようとした時……後ろから大きな影が現れた。

ガツツ!!!

「イツテエエエ!!!」

「君!!なにイジメてるんだ!!」

少年の脳天にゲンコツが落ちた。少年は頭を押さえながら声の方向を見ると……和服の男性がカンカンに怒っていた。

「いや、俺はイジメてなんかないですよ!?!」

「イジメは良くないというのは知っているだろう!?!」

「おにいさくん、もっとちやうだくい」

叱る和服男に弁明する少年、泣きわめく子女達とイカを食べる子女がいた。

「本当にすまなかった。てつきり娘を……」

「いえ、いいですよ。誤解も解けましたし……。それに見知らぬ子供を叱るって今時中々いけませんよ。親の鏡ですね」

「しかし……」

「スルメ買ってもらってすいませんでした。それで充分です。」

何とか誤解を解き、~~山吹ベーカー~~で『ナッツが入ったライ麦パン』を買った少年は乾物屋で『らんちゃんのお父さん』にスルメを買ってもらった。

「おいし〜」

実は灰色の髪の子女に食べられたスルメの補填も兼ねている。

仲良し子女5人組に『新巻鮭を背負った少年』・『らんちゃんのお父

さん』は郵便局に向かっていた。

「君まで来て……いいのか？」

「まあ、なんか嫌な予感がしたので……。」

「そうか……。じゃあ君達、手紙を貸してくれるか？」

「……ハイ!!」

郵便局に付いた時、『らんちゃんのお父さん』は幼女達から手紙を預かった後、郵便局の窓口へ向かった。そして『らんちゃんのお父さん』は窓口で『年賀はがき』を買っていた。

「まあ、ワザワザ切手買うよりは直接親に渡した方が良いよな」

俺はそうつぶやいた後、ソファアに座った。

「ちゃんとサンタさんにとどくかなあ」

「お父さんならちゃんと届けてくれるもん！」

「えへへ、楽しみだなあ」

「おにいさくん、もうちよつと」

「モカちゃん、それ、おいしいの？」

「……もう2枚目だぞ？」

そんな時だった。目出し帽を被った黒服の青年3人が走って郵便局に入ってきた。

見るからに怪しい黒服の3人組は窓口へドストスツと向かい、ボストンバッグを置くとそこから拳銃を出した。

「……動くな!!」

一人は窓口の女性、もう二人は他の客に向けて銃を構えた。

「おい、このバッグに詰めれるだけ金を詰めろ。」

「後その黒髪の少女。……そうだ、お前だお前。こつちにこい!!」

「お前……流石にあの年齢の子は可哀想だろ。」

一人は窓口の女性を脅し、二人は黒髪の幼女（らんちゃん？）を人質にしようとしていた。

「わ、私がお人質になります!!だから娘は!!」

「いや、おっさんぐらいだと抵抗されたらアウトだもん。それにおっさんに近寄られるぐらいなら幼女の方が良いし」

「……お前、薄々思ってたけどロリ通り越してペドだったんだな。」

「違うからな!？」

『らんちゃんのお父さん』の奮闘も空しく、黒髪の幼女(らんちゃん?)が人質になってしまった。

「また強盗ですか?……ハア」

「またってなんだよ……」

「今日2回目なんですよ、強盗」

「え……?」

「午前中に来て、偶々お客さんに警官と軍人がいたから何とかなつたんですけど……もうお腹いっぱいなんですよ!!隣町にも郵便局あるでしょ!?!そっち行つてくださいよ!!」

「いや、あの……」

「何で配属初日に2回も強盗が来るんですか!?!なんかの祟りですか!?!結婚できないのもこのせいですか!?!」

「いや……はい、すみません」

「いいからさっさと金詰めてもらえよ!?!」

窓口で漫才をやっているのを尻目に少年は壁にかかっている時計を見た。時刻は午後4時半前。**快速**に乗れない場合、6時半から始まる『ドリ〇ターズ 再放送スペシャル』に間に合わない可能性が出てきた。

少年は意を決し、冷凍ズワイガニと新巻鮭を持って強盗<sup>漫才師</sup>3人組に死角から近づいていく。

「えーん!!えーん!!!」

「ほら泣かないで!!アメあげるから。……ナオヤ!!早く金詰めてもらえよ!!**カワイ子ちゃん**が泣いちゃっただろ!?!」

**カワイ子ちゃん**ってやつぱりお前……」

「いや、分かっているって!!お姉さん……いえ、お姉さま。今回はスイマ



センが我慢していただいて、お金を詰めて貰えませんか？」

「ええ!!そんなチンケな銃なんて怖くはないわ!!2回目だから!!さっきの強盗なんてランボーみたいが大男がバズーカやらロケット弾やら背負って、戦争で使っていそうなごっつい機関銃を向けてきたのよ!?!」

こんな漫才をやっているため、少年は簡単に近づけた。

仲間を疑いの目で見ている強盗の一人が少年に気が付いたと同時に、少年は手に持った冷凍スワイガニで顔面を殴った。

「ぐおおお!!?!!カハツ!?!」

顔面が血だらけになりながら強盗は倒れた。少年は血だらけの強盗の股間を思いつき踏み込み、落とした拳銃を拾いながら『らんちゃんを人質にする強盗』に新巻鮭を振るった。

ドスツ!!

「ゴフツ」

3キロ以上の重りが振るわれれば……子供の力でも大人を昏倒できる。少年は昏倒した『ペドの強盗』の腹に銃口をくっ付け、発砲した。

「喰らいやがれ!!」

シユタタタタタタ……

「イデデデ……!!!!」

強盗が持っていた銃は電動ガンだったようで、銃口からはBB弾が何十発も発射される。少年は電動ガンでは威力不足と考え、もう一度新巻鮭を振るった。すると『ペドの強盗』は大人しくなった。

「この野郎?!!」

窓口で交渉していた最後の強盗が少年に銃を向けた瞬間、窓口の女性が机を飛び越え、強盗に飛び蹴りをした。

「ガハツ……ちよ、待って、ギブ、ギブ!!」

「2回も強盗が来てこっちは慣れてるよ!!」

窓口の女性は強盗に馬乗りになり、そのまま鋭い拳を浴びせる。

Bannon

「警察だ!!動くな!!」

それと同時に警察が到着し、『冷凍ズワイガニ』と『新巻鮭』の犠牲  
によって強盗はお縄になった。

「君!!強盗と戦うなんて危ないだろう!」↑らんちゃんのお父さん

「坊や!!勇気は認めるけど危なかったのよ!」↑窓口の女性

「よくやったけど、そう言うのは大人に任せなさい」↑警官

「……ハイ、スイマセンデシタ。(早く帰りたい)」↑少年

なお、1時間の説教の後に少年の両親が現れ、その場で3時間ほど  
説教されたため……『ドリ○ターズ 再放送スペシャル』が一切見れ  
なかつたそうだ。

その年の日本時間12月25日19時ごろに速報が入った。

『ロサンゼルス、ナカジマプラザでテロリストによる人質事件が発生  
し、たった今、偶然その場に居合わせた警察官と日本人の少年の二人  
によって事件は解決されました。』

「あ、新巻のお兄さんだ。」↑黒髪幼女

「ほんとうだ〜」↑灰色髪の子

「……………え?いや……………え?」↑らんちゃんのお父さん。

……その後も、『アメリカの空港でテロリストと戦った』のもテレビ  
でニュースになってたし、最近だと『アメリカの中国総領事の娘の誘  
拐事件』を解決したってあったなあ。

灰色の髪の子はそんなことを思いながらニヤリとし、

ついでにスルメが食べたくなくなった。

「きつと今はイケメンになってそう!!」

「いや……そうなるかは分からないでしょ」

ピンク髪の少女の言葉に、黒髪赤メツシユの少女は突っ込んだ。

「でもすごいよね。一人で強盗と戦うなんて!!」

「きつと今は武偵高校に通ってたりしてな!!」

茶髪少女と赤髪少女がさらに話を膨らめます。そしてこの5人『Afterglow』はさらに話が弾みながら、家への帰り道を歩いて行った。

そのころ、『新巻のお兄さん』は……新幹線のトイレにこもっていた。

「ぐああああ……」

札幌でシエフ和泉に食わされた~~エ~~エビチリ~~リ~~によって腸が大暴走していたそうだ。

## 5：人命救助の結果

### 『黒森峰、決勝戦で敗北』

黒森峰女学園はあの大会に優勝すれば、10連覇という前代未聞の金字塔を打ち立てることができたはずだった。

少女はその試合中にフラッグ車を放置して川に落ちた仲間を助けた。『命を落としていたかもしれない仲間の危機を救った』というだけなら美談で終わっただろう。

だが、皮肉にも『その仲間の命』の代償としてフラッグ車は敵に打ち取られ、10連覇を逃してしまった。

その後、何ヶ月もの間、マスコミ・チームメンバー・OGなどから

の批判に耐え続けていたが……少女にはそろそろ限界であった。

『黒森峰、10連覇を逃し決勝戦で敗北』

久しぶりの休日、少女はずっと自室に引きこもっていた。この空間だけは……自分を非難しない、安寧で平穏な場所であった。

しかし、少女は学生だ。いつまでも休むことはできない。学園艦が出港する10分前、少女は乗船用のタラップの列にイヤイヤながら並んだ。足を一歩づつ踏みしめ、学園艦に近づくと同時に、批判され続けた数カ月を思い出す。

『戦犯』・『裏切者』・『黒森峰の面汚し』・『西住流のできない方』

違う事を考え、気を紛らわそうとすればするほど……あの数カ月の頭の中で再生される。少女は頭が痛くなり、胃がムカムカし始めた。

「うあああああ!!」

少女は叫び、無理やり思考を真っ白にした。少女はハッと周りを見ると……沢山の生徒・学園艦の住民に、絶対零度の視線による集中砲火を喰らっていることに気が付いた。

「ちよつとアンタ!!大丈夫!」

「……え?あ、い、いや……いやあああ!!!」

少女は同級生の手を払いのけ、一目散に学園艦から逃げた。あの大きな学園艦鉄くずが見えない場所へ……

『黒森峰、西住みほ選手が原因で敗北』

「ウ……オエ……」

少女は鉄道に乗り、学園艦が見えなくなるところへ向かった。途中何度か乗り換えをし、着いた先は……福岡は新門司港、また港である。

少女は港に泊まっていたフェリーを見て、ターミナルのトイレへ駆

け込み、胃の中の物を吐いた。途中でも吐いていた少女は……出るものは胃液ぐらいしかなかった。

「うう……」

「あんた!!大丈夫!？」

トイレから出てきたボロボロの少女に、ターミナルの係員のおばちゃんが駆け寄ってきた。

「……だ、大丈夫です。」

「じゃあ早く急ぎな!!もうフェリー出ちやうよ!!」

「え……いや……」

「もう出港なんだから!!ほら、駆け足!!」

少女はそのままフェリーに乗せられ、そのまま九州を後にした。

フェリーの風呂で体を清め、コインランドリーで服をきれいにした少女は近くのソファで数ヶ月ぶりに安眠で来た。そのせいで徳島を通り越して東京まで行ってしまったのだが。

無賃乗船で東京に着いてしまった少女はもう、どうでもよくなってしまった。もうどんな罪を犯しても怖くはない。

戦車道に憑かれ、そして疲れた自分への最期のご褒美だ。東京を回った後、ここで死のうと……。

少女はそう考えると少し楽になった。そして東京へ歩き出した。自殺の地

少女は知らない。東京に付いた日に、大規模なテロ事件が起こることなど。そして命の恩人二人と☒☒自分のもう一つの可能性☒☒に見えた親友に出会うことなど……。

俺のいちばん長い日 With Bang Dre  
am!

有能な人間は癖がある……

護衛対象  
白鷺千聖との顔合わせをした翌日、俺は東京のとある商店街にある『羽沢珈琲店』へ向かっていた。

ところで、俺や藤原さんなどの『飛び級組』は『同期』との関わりがとても薄い(何年も寝食を共にした人と比べたら……)。なので『飛び級組』は同じ『飛び級組』と集まる傾向がある。

その『飛び級組(関東)』の集まりがおおよそ1〜2カ月に一回あるのだが……もともと数が少ないうえ、奇人変人忙人が多いせいで人になかなか集まらない。そのため☒藤原さんと俺☒が士官クラブか安居酒屋で飲んで解散という流れがほぼ毎回だった。

しかし、今回は後輩・笹井純少尉ささいじゆんがセツティングをするという事で楽しみだったりする。

笹井純少尉は空軍戦闘機部隊 343空所属のパイロット。普段は海外や離島で訓練をしているのだが……今回は珍しく東京に戻ってくるそうだ。

俺はどこか見覚えがある商店街を歩くと、洒落た喫茶店が見えてきた。看板には『羽沢珈琲店』と書かれてある。

……昼間っから酒が飲める喫茶店なんて珍しいな  
酒好きの俺と藤原さんが来るんだ、まさか飲めない店に呼ばないだろう。

俺はそう思いながら扉を開けると……カランカランと心地よい音と共に、銀髪でスラツとした美少女が近づいてきた。

「ヘーイ!!ラッシエーイ!!」

「……ああ」

最近は変わった喫茶店が多いらしい。きつとこの喫茶店もそのよ  
うな類たぐいの物なのだろう。

「何握りやしよるかー!!」

俺はその言葉で『寿司とコラボの喫茶店』という事に気が付いた。

……笹井も面白い店を調べるじゃないか。

俺は周りを見ると……足を組みながら本を読む、濃紺の背広の軍服  
を着た貴公子がいた。そいつが笹井純少尉だ。

「待ち合わせしてるんだ。それとコハダを」

「ハイ!!『こはだ』ですわね!!」

「ちよ、イヴちゃん!?ここ喫茶店だよ!?!」

すると、店の奥の方から茶髪の少女が慌てて出てきた。

「んく?違うのですか?」

「ここは寿司とコラボした、『寿司カフェ』とかじゃ……」

「違います!!」

俺は茶髪の少女に説明を受けた後、俺は貴公子の座る席の対面に  
座った。

「……笹井、お前それが理解できるのか?」

「んく?……ああ、村田先輩。やっと来たんですか?待ちくたびれまし  
たよ。それと……勿論じゃないですか。」

俺はため息をつきながら聞いた。すると、その言葉でやっと俺に気  
が付いたように笹井はふるまう。その仕草一つ一つがまるで二枚目  
のイケメン男優の様で腹に立つ。

近くの席に座っていた『ピンク色の豊満な少女』や他の高校生と思  
われる女性達が笹井を見てキヤーキヤー言っている。正直ウルサイ。  
そんな笹井が読んでいる本は『神の数式 この世の全てを一つの式  
に』と言う題名だ。普通の人間には理解できそうにない内容で、チ  
ラツと見たのだが……本に書いてあった式が完全に意味不明だ。

『神の数式』……この世全てを一つの数式で表そうってことだろ?」

「そうですねよ先輩。」

笹井はそう言っただけで顎に手を当て、カツコつけながら言った。しかし……俺はこいつの本性を知っている。

「……ゲージ対称性<sup>①</sup>で説明できるか?それが分からなきゃ理解できないと思うんだが」

「……………」

笹井は目を泳がせ、口をパクパクとさせた後……ポケットに本をしまった。

「ちよつと、先輩!もうちよつとで女の子から声をかけてもらえそうだったのに!!何するんですか!?!」

「……だからやけに女子高生が多いのか。」

俺はため息をついた。俺は周りを見ると……目を光らせている女子高生が沢山いる。

この笹井と言う後輩……部類の女好きなのだ。パイロットになった理由も、飛び級した理由も……『若い戦闘機パイロットってモテそうじゃないですか』と大真面目に語っていた。

彼の叔父である『とある空軍の幹部』は女癖を止めさせるため、笹井に許嫁<sup>いいなすけ</sup>をつけたそうだが……さらに女癖がひどくなったとか。

しかし、幸か不幸か……笹井は普段、離島の基地(軍人以外はほぼいない)や海外の基地で缶詰のために問題は起こしてはいないのが救いだ。

……問題は起こしていないけど、何回交番や警察署へ笹井を迎えに行ったことか。

しかし、笹井がナンパしている姿は多いのだが……今回の様な受けに回るのは珍しい。

「笹井、受けに回るなんて珍しいじゃねえか。なんかあったのか?」

「……坂井小隊長に『警察に迷惑になったらコロス』と言われまして。」



だったら向こうから声をかけてくれるなら問題にはならないはず……と思ひまして」

俺はその☒坂井小隊長☒に心の底から感謝した。普段のこいつなら……きつと手あたり次第にこの店の女性に声をかけ、俺と藤原さんが頭を下げる羽目になつていただろう。

ため息をついた後、俺はメニューに目を通すと……見事に☒酒☒がない。

……そんな馬鹿な？

メニューを裏返すと……そこは食べ物やお菓子のメニューだ。他のメニュー表も見てみるが……季節限定のお菓子のメニューしか書かれていない。

「おい、笹井……お前……」

「あ、みんな来てたんだ。いやあく遅れてごめん。……なんだ、二人とも僕を待つて飲まずにいてくれたのかい？ 悪いなあ……」

ヨレヨレの軍服を着た藤原さんがやってきた。藤原さんは笹井の隣の席にカバンを放り、俺の隣の席に座った。

「あの、ご注文はどういたしましょうよう？」

さつき『ラッシーイ!!』・『何を握りましょう？』と答えた銀髪の店員(?)が俺と藤原さんの前に水の入ったコップを置いた後、注文を聞いてきた。

「とりあえず生3つで。村田はともかく笹井も飲むだろ？」

「え……ういや、藤原さん。あの……」

「いやあく藤原先輩、ゴチになります!」

「ほかあく奢らないぞ」

「えつと……☒なま 3つ☒ですな?かしこまりました」

銀髪の店員は注文を確認した後、店の奥に向かった。

「笹井が戻ってくるってことは343空も戻ってきたんだよね? どうだい、久しぶりの本土は」↑藤原

「二昨日の夜に帰ってきましたよ、昨日は新宿で赤松中佐と一緒に新宿

でナンパしてたんですよ!!」↑笹井

「赤松少佐……中佐に昇進したんだ。と言うか、帰って来て早々ナンパかよ……」↑イブキ

俺・藤原さん・笹井は話が盛り上がっていく。

俺はため息を吐きながら水を一口飲み、メニューを見た。食べ物の方には……つまみに向いている物は一切ない。

……ギリギリ、テーブルに置いてある塩がつまみに向いているぐらいだよなあ。

「赤松中佐と新宿でナンパしてたら……40くらいのおじさんもナンパしてたんですよ!!その人と意気投合しちゃって……もっこり☒☒☒て言うのを教わっていたら、3人まとめて交番に連れていかれて……」↑笹井

「いやあく相変わらず空軍はやることが派手だなあ」↑藤原

「……やっぱり警察にお世話になったんだ」↑イブキ

笹井の武勇伝に頷いていたら……茶髪のエプロンをかけた少女が近づいてきた。少女は困ったように俺たちを見ている。

「あの……お客様?うちではビールを取り扱ってないのですが……」

「え……?そうなの?」

藤原さんは不思議そうに尋ねた。

「おい笹井、お前もしかして……(酒があるか)ちゃんと確認してないだろ」

「え?……確認しましたよ?女子高生に人気の店だって」

俺が笹井に酒の有無を調べたかどうか聞くと……己の欲望に忠実な答えが返ってきた。

その答えに、俺と藤原さんは大きなため息をついた。笹井は不思議そうに首をかしげる。

……そうだよなあ。あの笹井が酒の有無なんて調べないよなあ。

「そういうえばさつき☒☒お好み焼き屋☒☒があったし、そっちで飲もう。すいません、ご迷惑をお掛けして。」

「いいですねえ。久しぶりに☒☒もんじゃ☒☒でも食べたくまりましたよ。ほら笹井行くぞ。」

俺と藤原さんは席を立ち、この店を出ようとしたのだが……笹井はテーブルにしがみ付き、意地でも動かない。

「イヤです!!俺は女子高生に声をかけてもらうんだ!!」

「……………」

俺と藤原さんは口が開いたまま……固まってしまった。

「今まで離島か基地に缶詰めだったんですよ!!会えるのは野郎か同性愛者か姉御肌かおばさんしかないんですよ!？」

「……………ハア」

俺と藤原さんはため息をつき、席に座った。

笹井の気持ちはわからないでもない。俺の場合はまだ酒があればなんとか我慢できるだろうが……笹井は大の女好きだ。今までの缶詰生活は相当きつかっただろう。

『村田、二次会行くよね?』

『もちろんです!!』

藤原さんとアイコンタクトで二次会が決定された。俺は水を一口飲み、メニューを見ると……

「これだ!!」

『カフェ・ロワイヤル』・『ティー・ロワイヤル』と書かれている場所に指を置いた。藤原さんも気が付いたようだ。

『カフェ・ロワイヤル』とは……ブランデーをしみこませた角砂糖に火をつけて溶かし、その後コーヒーに入れて飲む方法だ。ナポレオンが愛飲したことでも知られている

そして、コーヒーを紅茶に変えれば『ティー・ロワイヤル』になる。

何を言いたいのかという……この店には酒ブランデーがある!!

「あの……ご注文は……」

さつきまで固まっていた茶髪の少女（店員）が口を開いた。

「お嬢さん、僕にはブレンドのホットコーヒーをブラックで。ところでお嬢さん、この後時間がありますk……」

「店員さん!!『カフェ・ロワイヤル(ティー・ロワイヤル)』の火無しっでできますか!?!」

「は、はい!!き、聞いてきます!!」

茶髪の少女(店員)が奥へすつ飛んでいき、すぐにそこから中年のおじさんが出てきた。

「『カフェ・ロワイヤルの火無し』という事は、コーヒーや紅茶にブランデーを垂らすということでしょうか?」

「ええ、願います。割合は『モントゴメリー将軍』で……いや、『逆モントゴメリー将軍』でできますか?」

俺がそう注文すると……中年の店員は困ったような表情をした。

アーネスト・ヘミングウェイの小説『河を渡って木立の中へ』で、主人公はマティーニを注文する時、『モントゴメリー将軍で』と注文するのだ。

それは『ジン：<sup>イギリス</sup>ベルモット115:1』という意味で、モントゴメリー将軍は戦力比15:1になるまで攻撃をしなかったことに由来する。

以上より、『逆モントゴメリー将軍』は『紅茶：<sup>イギリス</sup>ブランデー11:15』の割合。カップ一杯の量は120〜150mlなので、ブランデーたっぷりのカップに紅茶を5〜6滴ほど……。

ここまですると、もはや紅茶ではない。紅茶の香りがするブランデーだ。

☒ヘミングウェイ☒ですか……。値段が3倍ほど上がるのですがよろしいですか?」

「え?」

言ったのは俺だが、まさかできるとは思わなかった。

「じゃあ、『逆モントゴメリー將軍』のコーヒーと紅茶を一つずつ、それにブラックコーヒーだったよね？」

「……それとミルクと砂糖を持ってきてくれませんか？」

藤原さんの言葉に、笹井は遠慮がちに言った。

実はこの笹井……大の甘党なのだ。ブラックコーヒーなんて珍しいと思っていいたら……格好つけたただけだったようだ。

『逆モントゴメリー將軍』のコーヒーと紅茶、ブラックコーヒーとミルクと砂糖ですね。少々お待ちください。」

中年の店員はそのまま店の奥に消えていった。

「まさか、あんなものを注文できるなんて……」

「流石だね、ここの店主は」

藤原さんは店長を褒めながらガサガサとポケットをあさり、シガリロとリュポンのライターを出した。

「先輩たち、相変わらずですね。肝臓は大丈夫なんですか？アル中になりますよ？」

笹井は呆れたように、ため息をつきながら俺達を見てきた。

「俺が死ぬときは、肝臓が死ぬ時だ」↑俺

「辛い任務を笑い話にするために、僕は飲むのさ」↑藤原

俺と藤原さんはそう言って、目の前の水を飲み干した。ああ、逆モントゴメリー將軍紅茶風味のブランデーが待ち遠しい。

俺達のそんな姿を見て笹井はため息をついた後、メニューをみた。

「あ、お嬢さん。追加で『サンタさんと雪のフワフワケーキ』をお願いします」

笹井は茶髪の少女の店員さん呼び、恥ずかし気にケーキを頼んだ。

「あ、はい！『季節のケーキ』ですね？……あと、うちは禁煙なんです」

「……え？」

シガリ口を咥え、火をつけようとした藤原さんは渋々ポケットに喫煙セットをしまった。

「ここって喫煙席とかは……」

「ないです」

茶髪の少女(店員)は笑顔のまま……若干キレていた。俺達三人が……だいぶこの店に迷惑をかけているからだろう。

「……スイマセンデシタ」

俺と藤原さんは思わず謝るが……笹井は気が付いていない様だ。

「お嬢さん、この後予定は？近くに美味しいレストランがある……」

「お客様？(いい笑顔)」

「……何デモアリマセン」

やっと笹井も状況を理解したのか、大人しく下がった。

さて、俺は『逆モントゴメリー將軍』の紅茶、藤原さんは『逆モントゴメリー將軍』のコーヒー、笹井はブラックコーヒーに砂糖とミルクを大量に足した物を啜りながら、互いの情報を交換し合っていた。藤原さん曰く、『東京への侵攻勢力は複数であるが、なぜかほとんどの組織が一つの共通目標を持っている』ということ。

笹井曰く『上官達がやけにピリピリしていて、赤松中佐とじゃないとナンパができない』ということ。これは聞かなくてもよかった。

俺は『ジューサード・リーグ』を下した』こと、『上司がウキウキしている』ことを話した。

「そう言えば、村田の『義妹事件』はどうなんだい？」

「なんで今その話題を振るんですか!？」

確かに藤原さんが気になる気持ちは分かるが……笹井女好きの前で話すことはないだろ!？」

「え!?!藤原先輩!?!どういうことですか!?!」

『村田の義妹の『かなめちゃん』と村田の禁断の恋』をやったって

ところかな」

「全然違うからな!？」

しかし、笹井は羨ましそうに俺を見てきた。

「いいなあ!!妹ですか!?!しかも義理!?!完全にエロゲーじゃないですか!?!ヤリ放題じゃないですか!?!」

「実際は血みどろヤンデレ義妹だからな!？」

「いいなあ、僕は一人っ子だし……従兄弟は男ばかりですし……。いいなあく!!!」

「代わられるなら代わって欲しいよ……」

俺がため息交じりに『逆モンゴメリー將軍』を飲み干すと同時に、力強く扉が開けられた。そこからお面を被った三人組の人間が拳銃を腰から出しながらズカズカと店内へ入る。

「動くな!!強盗だ!!」

俺と藤原さんはその二人を見て大きなため息をつき、笹井は目を輝かせた。

「今時あんなハイリスク・ローリターンな、アホな事をする奴らがいるんですね!!」

笹井は小説やドラマのような状況にワクワクしているようだが

……俺と藤原さんはむしろ、そのような感性が羨ましいと思った。

……このようなアホのために俺達は頭を痛めているんだよなあ。

というか……ここらは治安が良かったはずなのだが。

「さっさと金を出せ!!」

「ほら!!早くしろ!!」

「動くな!!静かにしろ!!」

一人はレジにいた中年の店員に銃を突きつけ、もう二人は客に銃を突きつけている。

「村田、笹井」

「はい」

藤原さんが暗いドロツとした目をして俺たちを呼んだ。休日なのに面倒事が起こって切れているのだろうか。

俺は返事をすると同時に腰の刀に手を置いた。

「村田は鎮圧、笹井は客の保護、僕は援護する。合図したらやれ」  
「了解」

「お前、お前だ!!」

一人の強盗が黒髪メツシユの少女を立たせ、人質にした。

「……お前、人質なんて足手まといになるだろ!」

「いや……この子の鋭い眼がこう……グツときて」

「……Mだったんだお前」

強盗三人がしようもない会話をしている。その時だった。

「やれ」

藤原さんの声が静かに響いた。俺はその声が聞こえたと同時に、放たれた砲弾が如く強盗へ突撃した。

「……ッ!? ヤロウ!!」

強盗の一人が気が付き、銃を構えようとしたとき、俺は抜刀した。刀は強盗の拳銃を切り裂き、真っ二つにさせる。

さらに接近し、切り裂かれた拳銃に驚いている強盗の腹に左拳を叩き込む。拳を入れられた強盗はそのまま倒れていく。

「チツ……なんでここに!」

レジで金を要求していた強盗が慌てて銃を構えるが、もう遅い。俺は刀のリーチよりもさらに接近し、『拳銃奪い(リー刑事直伝)』をしながら蹴りを入れた。

「あ……ゴメン」

「ツ……!? カハツ……」

俺よりも身長が高かったせい、蹴りが強盗(その2)の股間に入った。

決して、『俺より身長が高いから』と言う妬みで入れたわけではない。『180センチ越えの身長羨ましい』とか思っていない。

「動くな!! 動くと撃つぞ!!」

残ったのは『黒髪赤メツシユの少女』を人質にしている強盗だけだ。



しかし、その強盗は人質の少女に銃を向けていた。その人質の少女は表情が固まって呆然としている。

「武器を捨てろ!!早く!!」

俺は刀と奪った銃を床に置き、蹴って強盗へ渡す。

「よし、そのまま跪k……!?!」

強盗が武器に視線を向けた時、俺は影の薄くなる技を使って姿をくらます。

「よつと」

「え?……は?え?」

俺は一気に接近し影の薄くなる技を解きながら強盗の拳銃を奪う。そのまま強盗を掴み、背負い投げで床に叩きつけた。

強盗はいきなり俺が消え、急に現れたように見えたのだろう。強盗は目を白黒させながら投げられ、気絶した。

「さてと、二人は……」

俺は投げた強盗を縛り上げつつ、周りを見渡した。藤原さんは俺が倒した強盗を無力化・捕縛しながら警察に電話をしている。笹井は……

「君達、心配しないで。僕がいる限り安心だ。」

「ハイ……!!」

ナンパしていた。もはや呆れて何も言えない。

「……………あ」

ストーンと言う音がしたので、その方向を向くと……人質になっていた少女が呆然としながら床に崩れ落ちていた。

「……………大丈夫?」

「……………え?あ……………はい」

しかし、少女は立ち上がろうとしない。腰を抜かしたのだろうか。……まあ、確かに人質にされたんだ。民間人なら無理もない。

俺は黒髪赤メッシュの腰を抜かした少女の持ち上げ、そこらの椅子に座らせた。

「蘭!?大丈夫か!」

「蘭!?怪我無い!」

「蘭ちゃん!?大丈夫!」

「おおう、あの時と一緒にですなあ」

すると、黒髪赤メツシユの腰を抜かした少女に友達であろう『三人組+店員一人』が駆け寄ってきた。

その友人であろう少女たちに囲まれ、そこでやっと自分の置かれた状況に気が付いたのか……人質だった黒髪赤メツシユの少女の目尻に滴が溜まり始める。

……いいなあ。普通は人質にされたら心配するよなあ。

軍人達に武偵高の教師・生徒達だったら……逆に『なんで人質になってるんだよ!!』と制裁を喰らっていただろう。

……やっぱり俺、仕事間違えたかなあ。

黒髪赤メツシユの少女と仲間達、そして笹井のナンパを視界にいれ……俺は思いつきりため息をついた。

バーン!!

その後、警察が来て強盗が連行されようとした時、この『羽沢珈琲店』の扉が勢いよく開けられた。

「笹井……『警察に迷惑になったらクロス』って言ったよなあ……!!」

↑坂井

「アハハ……ゴメン、ここまで怒ってる坂井隊長は初めてだ」↑西澤

「これは無理ですね。笹井さん、諦めてください」↑太田

「さ、坂井小隊長に西沢少佐!太田中尉まで!」↑笹井

笹井は急いで逃げようとしたが……殺気を放つ空軍佐官(坂井中佐?)に襟首を掴まれ……そのまま引きずられて店外へ連れていかれた。

「ふ、藤原先輩!?村田先輩!!……た、助けてください!!」

「笹井……これは無理」

「う、裏切者おおおお!!!」

上官に引きずられる笹井を見送った。

「あんなこと起こしたんだ。村田、この商店街のお好み焼き屋なんてムリだよ?」

「分かってます。☒土官クラブ☒でいいですか?」

「たまには違うところがいいなあ」

俺と藤原さんはそんな風に話しながら、スーツと立ち上がった。

……さて、面倒なことが起こる前に逃げないと。

称賛などいらぬ。今欲しいのは酒だ。

俺と藤原さんは店員に声を掛けられるがそれを無視し、代金よりも少し多いお金を置いて店を出ていった。

「笹井、よくも俺の約束を破って警察に迷惑かけたな。」

「ち、違うんです!!あれは……そう、不可抗力!!不可抗力だったんです!!大人しくしていたら強盗が……」

「その間もナンパしてたって聞いたが……まあいい。確かに強盗は不可抗力だな。」

「そう、そうなんですよ!!だからこの鎖をほどいて下さい!!」

笹井は鎖でグルグル巻きにされ、坂井中佐が操縦する輸送機に乗せられていた。

「安心しろ。今から南国の島に連れて行ってやる。残りの休暇はそこでゆっくり過ごせ。」

「本当ですか!?!」

笹井はビキニのお姉さん、褐色の肌、白い砂浜と水着の美女などを思い浮かべていた。

しかし、飛行機が到着したのは火山性ガスが噴き上げ、あちこちに鉄の残骸が残っている島だった。

「あのここは……」

「硫黄島だ。ここでゆっくり羽を伸ばせ」

なお、硫黄島では民間人は基本立ち入り禁止だ。もちろん水着姿の美女などいない。

「さ、坂井隊長!!」

「じゃ、休暇を楽しめ」

笹井の目の前で……輸送機は飛び立っていった。

「ち、チクショウ!!!!せめて鎖はほどいてくれよ!!」

しかし、笹井の欲望は底なしだったようだ。

笹井は『硫黄島く小笠原諸島（父島）』約260キロを泳ぎ切り（サメが徘徊しているため本来は遊泳禁止）、何とか水着（正確にはウエットスーツ）の美女を見ることに成功したとか。

「お前……化け物かよ!!八丈島から東京まで270キロを訓練で泳がされたけど、途中の島で休んでるんだぞ!!」

笹井の先輩で、今は武偵高に出向しているHS部隊隊員はその話を聞き、啞然としたらしい。

形あるもの、いつか壊れる……

「チクショウ!!なんだってこんな目に!!」

俺は愛車である☒☒高機動車☒☒で必死に追手から逃げていた。

ズダダダダ!!

ガンガンガン……

敵が銃を撃ってきているようだが……有難い事に拳銃弾を撃っている様だ。防弾板を貫通する心配はないが、それでも心臓に悪い。

「あんたの護衛をしてからヤケに襲撃が多いんだよ!!テメエは疫病神かなんかか!」

白鷺千聖の護衛を始めてから三日……ナイフで刺されたり、銃で撃たれたり、バンジーの紐が切れたり、生傷が絶えない。

「あら、私を護衛してくれる契約でしょ?どんなことが起こっても守ってもらうわ?」

助手席に座る白鷺千聖護衛対象は澄ました声で話す……目尻には涙が溜まっており、笑顔が引きつっている。

「な、なんで銃に撃たれるのおおお!?」

「あ、彩さん!?頭を下げてください!!」

「おお……ルンツてしてきた!!」

「イブキさん!!ブシドーで頑張ってください!!」

後ろで白鷺千聖護衛対象以外の☒☒Pastel\*Palettes(通称: パスパレ)☒☒メンバーが悲鳴を上げているが、あえて無視する。

俺は車のサイドミラーをちらりと見ると……追手の車の屋根が開き、そこから対戦車ロケットを担いだ人間が……

「ウソだろ!」

……ここは町中だぞ!?なんてものを出してやがるんだ!?

俺は慌ててハンドルを切った。横や後ろから悲鳴が上がるが無視する。

バシユ!!

目の前にロケット弾が通り過ぎていった。何とか避けたようだ。

しかし、急にハンドルを切ったせいだろう……スリップし、車体が

回転ヨイソク（上下を軸にして回転）し始めた。

「「「キヤーーーーー!!!」」」

「おおく!!!」

俺は何とか立て直そうとするが……なかなかうまくいかない。俺は車ロジ両科ではないため、運転技術は高くないのだ。そのまま俺の高機動車は路肩に止まっていた車にぶつかった。

そして高機動車は宙へ跳ね上がり、ゴロゴロと10台前後の車の屋根を回転ローリング（前後の軸に対して回転）し、転がっていく。

「「うわああああ!!!」」

「「キヤーーーーー!!!」」

「すげーい!!!」

……なんだってこんな目に。

俺はハンドルを握りながら、ここ最近で何があった振り返った。

俺と藤原さんは笹井を笑顔で送り出した後、適当な店で焼き鳥を頬張った。そして、結局最後は士官クラブで飲んで解散となった。

「ただいまあ」

寮に帰り、ふとキンジの部屋の扉を見ると違和感を感じた。そうだが、普段なら『キンジ』と書かれた板切れがあつたはずだ。

俺は不思議に思い、ドアをノックするが……返事がない。そこで、俺はキンジの部屋に入ると、そこはもぬけの殻だった。

「……………俺には言わなかったか」

俺はこの部屋を見てすべてを理解した。キンジは武偵高を辞めたのだ。

キンジが特秘任務シールドクエストの準備としてコソコソと何かをしていたのは知っていた。だが、まさか退学準備だったとは夢にも思わなかった。

……キンジが特秘任務シールドクエストの準備をしていた時、俺は酔拳の修行で『蝦夷テレビの招待』を忘れようとしてたからな。それで気が付かなかつたか。

一応、幼馴染（自称）として一言は欲しかったなあ……と思いつつ、元キンジの部屋に入った。

部屋を見渡すと……備え付けの棚に、複数の小さな木箱と紙箱が置いてある。

なんだ忘れ物か……と思いつながらそれを持ちあげると、その箱には付箋が張り付いてあり、『イブキへ 要らないからやる』と書いてあった。

「なんだ？この箱？」

俺は木箱を開けると……そこには『米軍横流しの9mmパラベラム弾』が入っていた。この弾はキンジの愛用していた物だったはずだ。

……本当に武偵を辞めたんだな。

俺はこの弾丸を見て、キンジが辞めたことをストンと実感した。さつきまで頭では理解していたのだが……心のどこかでは納得していなかったようだ。

キンジは近接戦専門で、近接戦では銃弾を大量に使う。そして予備の弾丸を置いていくという事は、キンジは自衛以外では銃を握らないという意思表示だ。

「俺も一応ワルサーP38を持ってるから、この弾は使うな」

……最近、ワルサーP38いは実戦で使っていないな

俺はそう思いながら紙箱の方を開けると……『鉄薬莖の9mmパラベラム弾』が入っていた。

……あれ？この前の体育祭の景品として配られた安物弾丸じゃなかったか？

俺はここでやっと……処分が面倒な物を渡されたことに気が付いた（銃弾の処分は意外に高い）。

「ぎ、キンジ!! テメエ!!!」

なお、後日射撃訓練で鉄薬莖を使ったら……見事に排莖不良ジャムを起ここ

した。

翌日、俺は階級章を外した第一種軍装を着て、護衛対象白鷺千聖との待ち合わせ場所に向かって高機動車を運転していた。

今回の護衛は、護衛対象白鷺千聖の学校でも護衛をして欲しいそうだと。そのため、護衛対象白鷺千聖が通う~~花咲川高校~~、偽装転校をする必要がある。そして、それらの手続きは護衛対象白鷺千聖の所属する芸能事務所が手配する契約だった。~~花咲川高校~~は最近女子高から共学になったため、比較的楽に転校工作はできたそうだが……制服までは手が回らなかったらしい。

……まあ、第一種軍装でバレねえだろ。

~~武偵高~~の制服~~では~~は護衛だとバレやすい。しかし、俺は~~武偵高~~以外の学生服を持ってない。そこで、俺は第一種軍装を着た。

以外なことに、第一種軍装に似た学生服の学校は結構ある。そのため、階級章を外せばバレないはずだ。着慣れた服なので戦闘の時に問題にならない……という理由もあるが。

さて、待ち合わせ場所の小さな公園に車を止めると、すでに護衛対象白鷺千聖は待っていた。

「あら、遅かったわね」

「予定時刻の10分前には到着しているんですけど」

「護衛対象が到着する前には到着する必要があるんじゃないかしら」

「そんなこと言われても、書面上の待ち合わせは10分前だからなあ……」



俺はため息をついた。白鷺千聖護衛対象は扉を開けて助手席に座り、シートベルトをつける。

……正直に言つて、面倒臭い

藤原さんが喫煙をする理由がよくわかる。ここでストレス発散として飲酒なんてもつてのほかだが、喫煙ならまだ許される。

……実家の隣の吉田の爺様に美味しい煙草でも教えてもらおうかな。

俺はため息をつきながら車を運転し、学校近くのコインパーキング車を止めた。

さて、俺が白鷺千聖護衛対象と一緒に校門まで歩くと……今時珍しいことに、持ち物検査をやっていた。

「あら、まさか持ち物検査を今日やるなんて……」

「……お前、分かってただろ」

「あら、そんなことはないわよ?」

「その演技でわかるんだよ、べらんめえ!!」

俺は白鷺千聖護衛対象の仕草を見て、ワザとこの日から護衛を始めただろうと予想が付いた。

さて、校門では青緑色で長髪の少女（風紀委員?）が張り切つて持ち物検査をやっている。銃や刀は学校の許可を得ているため、大丈夫だと思うのだが……心配だ。

……いや、念のために四次元倉庫の中に武器弾薬はしまつておこう。ん? そうだ、四次元倉庫か

俺はあるイタズラを思いついた。ポケットやカバンに四次元倉庫の出入り口を設けたらどうなるんだろう。あの風紀委員は必死になつて最後まであさるのだろうか。

「何をニヤニヤしているのかしら?……気持ち悪い」

「小さく言ったのも聞こえてるからな。……なに、『持ち物検査で予想外なものが出てきたらどう対応するんだろう』って思つてな」

「人には見せられない物でも持つてきているのかしら? 変態ね」

「そんな想像をするお前の方が変態だよ」

俺は大きなため息をついた。護衛任務は両手の指で数えられるほどしかやっていないが、ここまで敵意むき出しの護衛対象は初めてだ。

……俺、何かコイツにやったか？

と言うか、顔合わせの時と朝以外にコイツと会ったことがないので、理由が見つからない。

……性格が元々こんなツンケンしているのか？

何か理由があるにしろ、素であるにしろ、面倒なことには変わりがない。今日何度目かのため息がこぼれる。

……そもそも女子が護衛対象なら、女子の武偵が護衛すればよかつただろうに。

俺は周りにジロジロ見られながら、持ち物検査の列に並んだ。

この護衛依頼が来た時、酔った蘭豹と綴が回転式ダーツで生徒を決めたことは……イブキは一生知ることがないだろう。

さて、並び始めて数分、ジロジロとみられる視線にも慣れ始めた時だった。

「あ、千聖ちゃん!!」

☒☒肩にかかるほどの長さのピンク髪の少女☒☒が護衛対象白鷺千聖に声をかけてきた。

俺は一瞬そのピンク髪の少女を警戒したが……すぐにその警戒を解いた。そのピンク髪の少女は護衛対象白鷺千聖が所属するアイドルユニット☒☒Pastel\*Palettes（通称：パステル）☒☒のボーカルだからだ。

「あら、彩ちゃん。どうかしたの？」

「千聖ちゃん!! 今日転校生が来るんだって!! 楽しみだなあ」

「あら、そうなの?」

「……君の後ろにその☒☒転校生☒☒がいますよ。」

俺は周りの男子生徒を見るが……俺のとは全く違う制服を着ている。意外と気づかない物なのだろうか。

「あ、彩ちゃん? 後ろにいる方がその人なんだけど……」

「え? そうなの!?!」

ピンク髪の少女が勢いよく振り向いた。ピンク髪の少女は白鷺千聖と違い、年相応な精神年齢をしていて、目も白鷺千聖と違って夢に輝いている。

「……このピンク髪の少女の護衛がよかったなあ。こんな大人の世帯を覗いて、黒くなった白鷺千聖護衛対象によりは断然……」

俺がそう思った時、白鷺千聖護衛対象は拳を振るってきた。俺はその拳を余裕で避ける。

「何か変な事でも考えているのかしら?」

「おい、☒☒思想・良心の自由☒☒って言葉を知っているか?」

「え?……え?……え?……」

俺は白鷺千聖護衛対象に軽くチョップを入れ、強制的に黙らせた。白鷺千聖護衛対象は頭を押さえて涙目になる。

「転入生の村田です。よろしく。」

「え?! え、えっと……『まんまるお山に彩を!! 丸山彩です!!』」

「お、おう……」

ピンク髪の少女は、今や懐かしい☒☒ゲッツ☒☒の様なポーズを取りながら言った。

白鷺千聖護衛対象の所属する☒☒パスパレ☒☒に所属しているため、ある程度の情報を調べてある。そのため、ピンク髪の少女☒☒丸山彩☒☒の仕草もある程度知っているのだが……まさか、本当にこんなポーズをとるとは思わなかった。

さて、俺が☒☒丸山彩☒☒の時調的なポーズ唾然あぜんとし、空気が悪くなっ

て互いに手出しができなくなった。そして数分後、やっと持ち物検査の順番が来た。

……今時持ち物検査って、空港の手荷物検査じゃねえんだからさ。俺はそう思いながら、カバンを風紀委員であろう生徒の前にある机に置いた。

「あなたは……今日転入する村田さんですか？」

「はい、よろしくお願いします。先輩。」

「……あなたとは同学年ですよ？」

俺は先輩だと思つて頭を下げると……青緑色の長髪少女は微笑みながら答えた。

……笑顔が美しいが、この子にイタズラを仕掛けるんだよなあ。

俺は少し罪悪感を感じながら、カバンとポケットに四次元倉庫の扉を開けた。

「……イワシ？」

「大きなパーティー用サングラス……」

俺の目の前には玩具やらゴミやらが山のように積みまれており、俺のカバンやポケットを必死であさる生徒や青緑色の長髪少女は顔が引きつっていた。

「これは……牛肉？」

「それは景品で貰った豪州産のステーキ用肉だ。そんなところにあつたのか……」

「あ、網？」

「あ、訓練の時に拾った漁網だ。使うと思つてしまつていたんだよな」俺のカバンやポケットからはありえない物が多数出てきて、風紀委員たちは驚いている。

「……なんであんなものが入っているのよ」

「あんな大きいものが入るんだね」

「ブシドーです!!」

「武士道と関係ないと思うんですが……」

「キラキラドキドキする!!」

「ハア!？」

周りの生徒達も何が出るのかと注目している。

「音が鳴るゴムのニワトリ」

「……一時期、儀杖隊の訓練をやるうとしてたから隠したんだけど、ここにあったんだ」

「い、一升瓶!? 日本酒!？」

「許可は貰ってますよ」

日本酒が出てきた所で予鈴が鳴った。それを聞いた生徒たちは急いで玄関口へ向かっていき、青緑色の長髪少女（風紀委員）は重いため息をついていた。

「村田さん、このようなものをどうやって入れるんですか？」

「……いやあ、最近整理してなくて」

「ぶ、物理的に入らないと思うんですが……」

さて、この花咲川高校への転入は特に変わったことがないので割愛する。強いて言えば、多数の生徒にジロジロ見られたことくらいだ。

午前中は授業を受け、午後からはドラマの打ち合わせがあるらしい。なので俺と白鷺<sup>護衛対象</sup>千聖はその打ち合わせ場所であるとあるビルに向かった。

そのビルのエレベーターに二人で乗り込もうとすると、すでに先客がいたようだ。

「おはようございます」

「おはようございます」

先客は長袖のカラーシャツを腕まくりした、長身の好青年だった。その好青年は重そうな段ボールを持っている。

「白鷺さん、珍しいですね。マネージャー以外の人と来るなんて、しか

も男性と。」

「ええ、事務所に脅迫文が届いたので。私の護衛をやってもらっているんです。」

「そうなんですか。」

好青年は白鷺千聖護衛対象と話しながらちらりと俺を見てきた。俺はその好青年と目が合った時、思わず銃剣を握った。

……な、何だ!?こいつ!?

その好青年の目は汚染しきった池のヘドロの様にドロドロとしていた。ここまで狂った目をした人間は片手で数えられるほどしか会ったことがない。

……しかもこんな目をしたやつらは全員、重要抹殺対象だった。

俺が警戒している間も、白鷺千聖護衛対象と好青年は談笑を続ける。

「護衛さん……ですか、ディレクターの江戸門えどもん 健けんです。よろしく」

ある程度話した後、江戸門と言う男はその濁り切った瞳を歪ませながら、笑顔で握手を求めてきた。

「すいません、勤務中なので答えられません」

俺は護衛を理由にして、江戸門の握手を拒否した。

……こういう奴は何をしでかすか分からない。握手などの肉体的接触だけでどんな人間か分かる奴もいるんだ。

「そうですか、職務中に失礼しました。」

江戸門は濁り切った瞳をさらに歪ませ、申し訳なさそうな顔をする。俺はその濁り切った瞳を再認識し、鳥肌が立つ。

キーン!!

エレベーターが階に付いた時の鐘の音が、俺には神の慈悲に聞こえた。

「じゃあ、頑張ってください」

江戸門は笑顔でエレベーターを降りていった。俺は江戸門が視界から消えるまで、銃剣を離すことができなかった。

そして無事に打ち合わせが終わり、俺と白鷺千聖護衛対象が再びエレベーターに乗り、扉を閉めようとした。

「待ってください!! 乗ります!!」

江戸門が慌ててエレベーターに飛び乗ってきた。そして江戸門はポケットをあさり始めた。

「白鷺さん、忘れ物がありましたよ?」

そう言って江戸門が出したのは……特大の肥後守だった。流れるように刃を出し、白鷺千聖護衛対象へ刺そうと……

……刃渡り5寸(約15センチ)以上だと!?

俺は慌てて江戸門と白鷺千聖護衛対象の間に体を滑らせた。

ドスツ!!

「チツ!!」

「……ツ!!」

「……え」

そして俺の腹に肥後守がめり込んだ。江戸門は不快な表情をする。白鷺千聖護衛対象は何が起こっているのか理解できないようだ。

……防刃チョッキ着てくればよかつたなあ。

俺は肥後守を持つ江戸門の右腕を上から握って動けなくした。もちろん、腹からは鮮血が溢れ出ているが、肥後守を抜いたら余計に血が出る。

ところで、第一種軍装・第二種軍装は防弾・防刃処理は一切されていない。理由は金がかかるからだそうだ(なんでも防弾防刃にすると値段が3倍ほど上がるらしい)。

そのため、危険地帯に行くときは中に防弾・防刃チョッキを着たり、外から着たりする。

「邪魔なんだよ、お前。白鷺さんのそばにいてよお。……白鷺さん、今この男から解放してあげますよ」

江戸門はそう言って狂おしそうに、その~~窓~~濁り切った瞳~~窓~~で白鷺千聖護衛対象を見た。白鷺千聖護衛対象は震えながら床に崩れ落ちていった。

「さつさとコイツを殺して、白鷺さんを老化から解放しないと……。まず腐りやすい内臓を……」

江戸門は☒☒濁り切った瞳☒☒を歪ませ、左ポケットから再び肥後守を取り出して俺の首に刺そうとしてきた。

「ふっざけんな!!この野郎!!」

俺は肥後守を叩き落とし、江戸門の喉元に鉄拳をくらわす。

「ゴフツ!!」

「……ツ~~~~!!」

……この野郎!?腹に刺さっている肥後守をグリグリとさせやがって!!

しかし、江戸門はすぐに意識を回復し、俺の腹に刺さっている肥後守を無理やり抜いた。

「……ハハツ!!どうしたんですか武偵さん!!あんたは俺を殺せないでしよう!?でも俺はあんたを殺せるんですよ!」

……確かに、実際殺すとなると面倒なことになる。それに、ここで殺して白鷺<sup>護衛対象</sup>千聖がトラウマになったらさらに面倒だ。

こんな密室、跳弾の恐れがあるので拳銃は使えない。俺は懐から銃剣を抜き、肥後守を引き裂いた。江戸門は驚いた様な、楽しんでいそうな顔をする。

俺はそして、柄頭<sup>つかがしら</sup>で何度も殴ると……

キーン!!

鐘の音と共にエレベーターの扉が開いた。

扉の外には……血まみれの男二人を見て、驚いている人が多数いる「た、助けてください!!この人が襲ってきて!!」

「何言っただ、てめえ!!」

江戸門は表情を変え、いかにも自分が襲われている様にふるまった。

結局、エレベーター内の監視カメラと白鷺<sup>護衛対象</sup>千聖が携帯で録音していた音声によって江戸門は逮捕された。



「みんな!! 奴を殺せ!! 奴は女神をアガペーで納豆しようt……!!」

江戸門は明らかに心神喪失を装い、喚きながら警察に連行されていった。

……なんて胸糞わるい

「あ、あの……ケガをしているので病院へ……」

「仕事があるんで大丈夫です。応急処置と鎮痛剤打ってもらっていいですか?」

俺は救急隊員に応急処置と鎮痛剤を撃ってもらい、護衛対象白鷺千聖と一緒に次の仕事場へ急いで向かった。

文字数の都合上、その他の事件を詳しくは書けない。

一日目はその江戸門の事件の後、熱狂的なファンにナイフで切られるという事件が2件起こった。

二日目は映画のロケに同行した。その時、スタントマンが体調を崩して欠席だったので、なんだかんだで代わりに俺が飛び降りることになった。しかし、その際にバンジーのゴムが切れるという事件が発生した(特に怪我はない)。そのほかに銃撃を受ける事件も発生し、さらにボロボロになった。

三日目はパスパレの練習だけだったので、今日こそ何もないと思っていた。しかし、パスパレのメンバーを家まで送ろうとしたところ、最初にある通りカーチェイスが発生した。

……後半、雑過ぎだろ!?

俺は突っ込みながら、高機動車と一緒に転がっていく。

ギギギ……ドスン!!

ローリング  
回転（前後の軸に対して回転）していた我が愛車は奇跡的にタイヤだけで接地して止まった。

俺はアクセルをベタ踏みし（高機動車はA T）、今度は追いかけてくる車の方へ前進した。

「な、なんで敵の方に行くのよ!!」

「お前は島津の退き口って知ってるか!」

隣に座る白鷺千聖が涙目で反論してきた。

「関ヶ原の島津は中央突破して撤退なんてしてないわよ!!!」

「誰が中央突破すると言った!」

高機動車が敵の車（ロードスターか?）に正面衝突する寸前、俺はハンドルを思いっきり切り、脇道に突っ込ませた。

脇道に入ると、我が愛車の両側面からガリガリ削れる音が響く。そして……行き止まりの壁にたどり着いた。

……チクシヨウ。これ以上は進めねえ。

俺の我が愛車が止まった瞬間、後にはトヨタ・2000GT（日本最高の旧車）が追い付いた。

……高機動車の意地、見せてやろうじゃねえか。

俺はギアをRにし、アクセルを踏み込んだ。すると、高機動車は全速力で後退を始める。

「え………待って!!?2000GTを廃車にする気か!」

「ウソだろ!」

我が愛車は2000GTを踏み、その上を爆走する。もちろん2000GTは踏み台になるため、ボンネットや屋根が潰れていく。

ベキ!!メキメキ!!

「ああああああ!!!」

外から聞こえる悲鳴を無視し、我が愛車は2000GTを乗り越えた。

「あ、あいつ!?2000GTの価値をわかってないのか!」

「と言うか早く逃げろよ!!お前の車もあれと同じになるぞ!」

「や、ヤバッ!!」

高機動車は爆走し、2000GTの後ろにいたマツダ・RX-7（もちろんすでに生産終了）を引き潰して悲鳴を上げさせる。

……なんで戦闘するのにそんな貴重な車で来るんだよ。

車に詳しくない俺でも、潰した2両の車は珍しい車だという事は分かる。

高機動車は脇道から這い出て、大きな道路で再び逃げ出した。

ダダダダ……!!

後ろには4台ほどの車が追いかけて、銃撃を食らわせてくる。

「……（白目）」

「彩さん!?!すっかりしてください!!」

「ルルルンッ!!てしてきた!!」

「これがツリノブセですね!!」

後ろが騒いでいるがそれを無視し、俺は四次元倉庫からパンツァーフアウストを取り出した。そして適当に撃つと、敵の1台の近くに着弾した。その1台は運転を誤ったのか蛇行運転を始め、近くの2台は巻き込んで爆発する。

……な、何て運がいい。神棚を磨いたかいがあったな。

安心したのも束の間、最後の一台が急加速して高機動車の右に横付けしてきた。

……なるほど一騎打ちしようってか？

俺は四次元倉庫から大型の銃を取り出した。

高機動車の隣に横付けしたスポーツツーカー（改造されていて最早わからない）と同時に窓を開け、銃を互いに突きつける。

「喰らえこのヤr………は!?!」

敵の車の助手席に座っていた男が拳銃を出して威嚇し………そして

こつちを見て驚愕した。

……当たり前だ。拳銃のような□□ちっぽけな銃□□なんて屁でもねエ!!

俺の25ミリ機関銃の銃口が、敵の車に向いていたからである。敵の車は慌てて避けようとしているがもう遅い。

「イピカイエー・マザーファッカー!!」

ダンドンダンドンダンドン!!!

ボーーン!!!

俺は戸惑いなく引き金を引いた。25ミリ機関銃の掃射を受けた敵の車は大爆発を起こした。

「うおおあああ!」

爆発の熱風を俺はもろに喰らい、思わず目を閉じた。髪がチリチリと焦げていくのが分かる。

「ちよつと!?!前、前!!」

「……なんだよ、つうわあああ!?!」

白鷺千聖護衛対象の声に、俺が熱風を受けながら目を開けると……目の前に壁せまが迫っていた。俺は慌ててブレーキとサイドブレーキを使い、ハンドルを切る。

この操作が悪かったのだろう、高機動車はいきなりブレーキを踏んで方向転換をしたせいか、再び回転ローリング(前後の軸に対して回転)して、ビルの壁に激突した。

「お、俺の車がああああ!!」

この日、とうとう俺の高機動車が廃車になった。

……おれ、次の日からどうやって移動すればいいんだよ。

消防や警察が来た時、俺はボロボロの高機動車を見てそう思った。

ついでに、シートベルトのおかげでパスパレの皆さんは無傷、俺は軽傷ですんだ。

高機動車が廃車になった翌日の早朝、武偵高の車輻科の倉庫を武藤と一緒に搜索し、倉庫の隅に眠っていた光岡・ビュートを見つけた。

ボンツ!!ドツドツドツドツ……

「お!?動いた動いた!!これなら使ってもいいぞ!!」

「……む、武藤?お前正気か?」

このビュート、当時は藍色でレトロな感じの洒落た車だったのだから。

しかし、今の姿はホコリまみれ、多数の弾痕や穴が開いており、あちこち錆びつき凹んでいる。そして運転手側のサイドガラスには弾が貫通したらしい大きな穴とヒビがあり、助手席側のサイドガラスやドアには赤黒い物（インクであることを祈る）が多数こびりついている。

……あ、ある意味、武偵高らしい車だな。

「どうせお前、壊すだろ?」

「……………否定できねえ」

武藤は『何を当たり前な事を言っているんだ』とでも言いそうな表情で俺に言ってきた。

俺は反論しようとしたが……実際に昨日は高機動車を廃車にしており、今日も襲われる可能性があるために反論ができなかった。

「別にこれなら壊してもいいからよ!!……………これ、乗ると死人が出るって曰くつきなんだよな」

「おい武藤!!今なんて言った!?!」

俺は武藤に掴みかかった。

しかし、『すぐに貸せて・壊してもいい車』はこれしかないそうで……。

……再び軍から貰うなんて無理だしなあ

『高機動車をプレゼントするため、手回しが大変だった』と神城さんがぼやいていたのを思い出した。

結局、俺はこの~~レ~~レトロと言うよりは退廃的~~な~~なボロボロのビュートを借りた。

ドツドツドツド……プスン、ドツドツ……

……ほ、本当にこの車は大丈夫なのか？

ボンネットから白煙を上げ、時々エンジンが一瞬止まるビュートを運転しながら、俺は不安になった。

……せめてラジオでも流すか

「えっ……は!? つまみが取れた!?!」

頭が痛くなったのは……二日酔いのせいではないと思う。

まともな会議をしてくれ……

さて、俺は車を見てドン引きする白鷺<sup>護衛対象</sup>千聖と、その他<sup>会場</sup>パスペレ<sup>メンバー</sup>を無理やり乗せ<sup>参加型演奏用施設</sup>C i R C L E <sup>会場</sup>の向かった。

なんでも、この<sup>会場</sup>C i R C L E <sup>会場</sup>で5バンド合同ライブをやるらしく、その会議をそこでやるらしい。

……あれ？こういう仕事って普通マネージャーがやるものじゃないか？

俺は疑問に思いつつ、<sup>会場</sup>C i R C L E <sup>会場</sup>の駐車場に車を停めた。

ボロボロのビュートを駐車場に停め、ボンネットを開けてエンジンの状態を確認した後、一緒に<sup>会場</sup>C i R C L E <sup>会場</sup>へ入って行った。

<sup>会場</sup>C i R C L E <sup>会場</sup>の中は自分が予想していた小さなライブ会場とは全く違っていた。内装は白を強調させ、ポスターは2枚ほどしか張られていない。日光を淡く反射させる木の床は、隅々までキレイにされている。

……へえ、ここまでキレイなライブ会場があるんだ。

確かに、この施設は建設されてから結構立っているだろう。しかし、軍艦の甲板ほどではないが、適当な軍の施設ほどにはキレイにさられていて、清潔感が半端ない。

会場はまだ準備が終わっていないらしい。なので暇な<sup>会場</sup>パスペレ<sup>メンバー</sup>は椅子に座り、適当に時間を潰していた。

俺もポケットから本をだし、時間を潰そうとしたら……

「イブキさん!!<sup>会場</sup>ブシドー<sup>会場</sup>を教えてください!!」

<sup>会場</sup>パスペレ<sup>メンバー</sup>の一人、若宮イヴが目を輝かせながら俺に頼んできた。

この『若宮イヴ』という少女、ハーフの帰国子女で日本の文化に人一倍の興味があるそうだ。特に~~〇〇~~武士道~~〇〇~~にたいして並々ならぬ興味を持つている。

そして、この少女は~~〇〇~~羽沢珈琲店~~〇〇~~でバイトをしており、俺が強盗をボコボコにしたところ間近で見ている。そのせいで……俺のことを『現代に生きる武士』として見ているのだ。

……俺はそんな高潔な人間じゃないんだけどなあ

俺は思わずため息をついた。自分は欲にまみれた俗物なのだ。若宮イヴちゃんの~~〇〇~~純粋な目~~〇〇~~を見て、罪悪感が湧き出でる。

「俺はそんな立派な人間じゃない。それに強いて言うなら~~〇〇~~武士~~〇〇~~と  
言うか~~〇〇~~忍者~~〇〇~~に近いかr……近いのか？」

HS部隊にいた頃は、暗殺・破壊工作がメインだったのだが……陰に~~〇〇~~忍んで~~〇〇~~いたとは言えない。むしろ堂々と突撃して、力づくで落としていた。

……あれ？やっていることは~~〇〇~~忍者~~〇〇~~よりなのに、やり方は~~〇〇~~武士~~〇〇~~よりだぞ？

そもそも海軍なのに陸戦って……などと、自分の進んだ道が理想と正反対に位置していることを知って、俺は落ち込んだ。

「これが~~〇〇~~ケンソン~~〇〇~~ですね!!ですがイブキさん、あの時の行為は  
~~〇〇~~ブシドー~~〇〇~~です!!」

若宮イヴちゃんの~~〇〇~~純粋な瞳~~〇〇~~をみて、余計にあの時の真意を言えなくなつた。

……あの時、喫茶店を黙って去っていったのは、酒を飲みたかつたからだ。そんなこと言えるかよ。

こんな情けない理由を若宮イヴに伝えることは、俺にはできない。

「あゝ……こう、すぐに身に付くものでもないし、学がないから単純な言葉で教えられないかr……」



「じゃあ、剣術を教えてください!!」

「いや、ここでやったら危ないぞ?」

会議場の準備が終わり、開場したときには……俺は若宮イヴちゃんに短刀銃剣の使い方を教えるという約束をさせられた。

「ここは関係者以外立ち入り禁止なのですが。」

「……ん?」

俺はパスパレに当てられた席の後ろの壁にもたれかかると、この前お世話になった花咲川高校の風紀委員がいた。

「……スイマセン、お名前は?」

「Roseliaの氷川ひかわ紗夜さよです。あなたはこの前転校してきた、

村田 維吹むらた じぶきさんですね?」

「……よく知ってますね」

氷川紗夜さんはその翡翠ひすいの瞳で俺を見てきた。

……正直に言っつていい物なのだろうか

契約に『護衛の件を秘匿せよ』という文章も、暗喩する文章も無かった。しかし、ここで教えると……白鷺護衛対象千聖ちせいの学生生活に問題が出る恐れもある。

……さて、どうしたものか。

マネージャーとか言っつて誤魔化しても、どうせすぐにボロが出る。

氷川紗夜さんの賢ひさしそうな翡翠ひすいの瞳がそれを逃さないだろう。

俺は白鷺護衛対象千聖ちせいをチラリとみると……白鷺護衛対象千聖ちせいは俺と氷川紗夜さんのやり取りをニヤニヤと見ていた。

……うん、別にバラしてもいいか。また持ち物検査やられた時に面倒事にならないだろうし。

「……パスパレに脅迫状が届いた。その護衛です。」

俺は姿勢を変えないまま、何でもないので、サラツと言った。

実際は『白鷺千聖へ脅迫状が届いた』のだが……まあ、彼女の所属するアイドルユニット：Pastel\*Paletteに脅迫状が届いたと言っても間違いではないだろう（実際の文章を見せて貰ってはいないが）。

俺の言葉に、氷川さんと白鷺千聖護衛対象が固まった。

「俺が見た限り……氷川さんは聡明なようだ。この事を打ち明けた理由をあなたは理解できるはず」

「そ、そうでしたか……。という事は転校の件も……」

「ご想像にお任せします」

「お、お疲れ様です」

氷川さんは頭を押さえながら『Roselia』と書かれた席に座った。

……ああ、なんか向こうも苦勞しているんだな。

さて、俺のことを黒い笑顔お嬢様で睨む白鷺千聖に弁明でもするか。

「……」

「……ち、千聖ちゃんがむくれている所、初めて見た。」

俺は適当な軽口で白鷺千聖護衛対象の文句を流した。その結果、いつも（形だけは）笑顔な白鷺千聖護衛対象の顔は子供の様に頬を膨らまし、不機嫌さを表現している。

……しっかし、まあ……流石は元子役今は女優こんな事をしても見てくれは良い。

俺がため息を吐くと同時に、会場の扉がバーンと開かれた。そして、金髪の長髪少女やオレンジ色の短髪少女宝塚にいなそうな少女がが堂々と入ってきた。

……あれ？あの水色の髪って……松原さん？

『極東戦役：極東編 いつ撮ったんだよ……』で登場した松原さんも申

し訳なさそうに、ピンク色のクマと一緒に入ってきた。

「へえ、最近を着ぐるみもバンドにいるのか。………つて、着ぐるみ!」

「……あ、やっぱりおかしいですよ。これって」

「じゃ、しゃべった!」

……え? 着ぐるみつて喋らないんじゃないの!?! というかバンドに  
着ぐるみ!?!

俺は思わず蝦夷テレビのOuちゃんオウちゃんを思い出した。簡易Ou  
ちゃんや酒を飲んだ時以外、基本はしゃべらなかつた。というか、  
そもそもバンドに着ぐるみつてどういうことだ?

俺が混乱している間に着ぐるみ(ミッシェルと言うらしい)は  
金髪少女に一言告げた後、部屋から出ていった。

……バンドに着ぐるみつて初めて聞いたぞ? えつと……こう  
いう常識破りの事をロックつて言うのか?

『着ぐるみ||ロック(?)』という、新たな常識を知り……俺はうろた  
えていた。

そんな時、さつきミッシェル(?)と話していた金髪少女が  
不思議そうに俺を見てきた。

「あら、あなた初めて見るわね」

「は、はい。つい最近花咲川に転向してきた村田です。い、今の  
着ぐるみは……」

この金髪少女の名前は弦巻ヒナマキこころ。彼女は裕福な大富豪一家  
『弦巻家』の一人娘である。性格は無邪気で自由奔放・天衣無縫・好奇  
心旺盛で、何をしでかすか分からないそうだ。

ついでに、『花咲川高校』と検索し、すぐに『弦巻こころ』という名  
前が出てきた。あだ名は花咲川の異空間  
着ぐるみ?」

「あの熊みたいなのはなんd……」

「ミッシェルって言うのよ!!」

「ああ……蝦夷テレビのO uちゃんみたいなマスコットの様な物ですか?」

俺は適当に流して花咲川の異空間から脱出しようとした時、俺のO uちゃんと言う言葉に興味持ったのだろう。弦巻ころの瞳はキラキラさせ、俺を見てきた。

「O uちゃんって何かしら!」

「蝦夷テレビのミッシェル(?)の仲間みたいなものか?黄色で丸い酒好きなマスコットだ」

「なんて素敵なのかしら!!ミッシェルの仲間がいるなんて!!」

……ん?なんか間違えてないか?

「O uちゃんとは他には何ができるのかしら!!」

弦巻ころは好奇心旺盛な、キラキラとした純粋な瞳を俺に向けてきた。正直に言っつて、その瞳は心に刺さるからやめて欲しい。

「酒好きで、牛乳の一气飲みとか、(パーティー用の)バズーカ撃ったり……ロックが好きみたいだぞ」

「そうなの!?大砲を!」

俺は早く彼女との会話を終えたいためO uちゃんと言っつより、<sup>ヤスケン</sup>中の人の特徴を上げた。

その様子をジーツと見ていた、会場の扉の離隔に立っているサングラスとスーツの女性達が何か電話を急いでかけている。俺はその姿を見て、嫌な予感がするのだが……気のせいに違いない。

イブキはまだ知らない。後日、この失言によって<sup>ヤスケン</sup>O uちゃんに俺に災難が降りそそぐことなど……。

「みんな!!今日は集まってくれてありがとう!!」

「以前からお話をさせて頂いていた『CiCLE合同ライブ』ですが、この度皆さんの賛同を得ることが出来ました。なので本日第一回目の打ち合わせをしたいと思います」

『Poppin, Party』と書かれた席に座る黒髪少女と黒髪ショートカット少女の発言によって、会議が始まった。

「ここ最近、なんでも最近はガールズバンドと言う、女子だけのバンドが流行っているらしい。」

「そこで、この地域で有名なガールズバンド達が集まり、この『ライブハウス CiRCLE』で合同ライブを開催するそうだ。もちろんガールズバンドであるからには、この部屋にいるのは女子だけなので……」

……全く、肩身が狭いつたらありやしない

俺は思わずため息をついた。

この場にいる『Poppin, Party』、『Afterglow』、『Pastel\*Palette』、『Roselia』、『ハロー、ハッピーワールド!』という5バンド全て、女性だけで構成されている。

しかも、『Afterglow』というバンドには……2話前の『有能な人間は癖がある……』で人質になっていた黒髪赤メッシュ少女がいる。おそらく、助けた人物が俺であることを分かっているのだろう。その『Afterglow』のメンバー5人は俺をジッと見ており、時々俺を見ながらヒソヒソと話し合っている。

……ああ、早く帰りたい。

帰るとなると、あの武偵高のビュートを運転しなければならぬ。運転中に一瞬エンジンが止まり、カーエアコンからはカビた風が出

て、時々何処からか異音がする車を運転したいだろうか。

……もう疲れた。

俺は再びため息をついた。

『ため息をつけば幸運が逃げる』と言われるが……もし本当なら、今頃この人生全ての幸運が逃げ出しているはずだ。

そんなことを考えている俺を置いて、会議は進んでいく。

「ああ〜そうだ!!ライブする順番でも決めましょうか!!」

『Poppin', Party』の席に座る☒☒ポニーテールの少女☒☒が慌てて提案した。

「あたし達は自分たちの演奏ができればいいから順番なんて……」↑  
『Afterglow』

「最後は私達に決まっているわ」↑『Roselia』

「すみません、その日は仕事が入っているので最後にしてもらえると……」↑『Pastel\*Palette』

「ラストにあたし達の歌で、ドーンツェリボンのシャワーを撃ったら、みんな笑顔になれると思うの!!」↑「ハロー、ハッピーワールド!」

「最後に全員・25人で、☒☒きらきら星☒☒歌いたい!!」↑『Poppin', Party』

「……やっぱり、あたし達も最後がいいかな」↑『Afterglow』  
……こんな個性的な5つのバンドをまとめるって大変だな

俺は☒☒我関せず☒☒とばかりに、☒☒四次元倉庫☒☒から水筒を出して水を飲んだ。

「あの……そこで立っているあなたはどう思いますか?」

そんな俺を、『Poppin', Party』の席に座っている☒☒金髪ツインテールの巨乳少女☒☒は目ざとく見つけて尋ねてきた。

「すいません。自分は音楽に疎いのでよくわかりません」  
俺はシレッと答え、再び水を飲んだ。

「……どうしよう沙綾ちゃん!!」

「じゃあ、タイトル!!タイトル決めましょう!!」

『Poppin', Party』の席に座るポニーテール少女が再び提案するが……順番もまともに決められないのだから、さらに重要なタイトルなど決められるはずがない。

大いに荒れる会場を尻目に、俺は大きなあくびをした。

……次の予定はなんだ？

俺は懐から予定表を取り出した。

その予定表によると、次は『Pastel\*Palette』全員  
羽田空港で取材』と書いてあった。

何でも、地方テレビの番組で東京観光の番組をやっているそうだ。その今回のゲストがPastel\*Paletteらしい。

『初めてのテレビ撮影、緊張する〜!!』と、ピンク髪のPastel\*Paletteのボーカル・丸山彩が嬉しそうに話していたのを思い出した。

……あの白鷺千聖も、丸山彩ぐらい純粹だったらよかったn……  
ドスツ!!!

俺の顔の右、5センチほど離れた場所にボールペンが突き刺さった。俺は思わず前を見ると、白鷺千聖がギロリと俺を睨んでいた。

……白鷺千聖より、丸山彩や若宮イヴの方が純粹なのは事実だ  
r  
……

今度は顔の左、5センチ以内の場所に鉛筆が突き刺さった。ボールペンはともかく、鉛筆は壁に突き刺さるほどの強度を持たないはずなのだが……。

これ以上面倒事にさせないため、俺は降参だ**〇**とばかりに両手を上げた。白鷺千聖護衛対象はその結果に満足したのか、見惚れるような美しい笑顔をして混沌とした会議に戻る。

……それにしても、この**〇**羽田空港**〇**なんか嫌な予感がするんだよな。

俺は予定表を見ながらそう思った。

何故だかわからないが……凄く嫌な予感がする。こう、『ナカジマ・ブラザ』や『ジョン・F・ケネディ国際空港』の時の様な嫌な予感がする。

……まさか、あのジョニー・マクレーンおっが日本に来ないだろう。なら、誰が来る？

とりあえず、一番困るのは**〇**シャーロック**〇****〇**ハンナ・ウルリツヒ・ルーデル**〇**だが……アイツらが簡単に日本に来れるか？

そんな風に思考を巡らせていた時だった。

「みんな……」

「香澄……」

『Poppin, Party』と書かれた席に座る**〇**猫耳少女**〇**が大声発し、全員の注目を集めた。

彼女は大物政治家でも出来ないような重厚なオーラを纏まとっている。

……なんだ!? こいつ!?

俺は思わず身構えた。会議に参加していた他のメンバーたちもその少女に注目する。

『Poppin, Party』と書かれた席に座る**〇**猫耳少女**〇**は右手を後頭部、左手を腹に当てた。

「わたし……お腹すいたかも」



「じゃあ、ファミレス行く?」

「いいねえ」

少女の言葉に反応し、この会議場にいるほぼ全員が席を立ち、会場を出ていこうとした。

「会議は踊る、されど進まず……か。普通の高校生はこういう会議が普通なのか?」

俺はため息をつきながら呟いた。

俺は一応士官の端くれなので、時々会議に出席するのだが……ここまでひどい会議は一度もなかった。まあ、出席者の平均年齢が30〜50歳という事もあるだろうが。

……さて、移動開始まであと20分。それまでに終わるだろうか。

さて、ファミレスで打ち合わせはもちろん行われず、のんびりとした時間が過ぎた。

出発時間が迫ったので、俺はPastel\*Palettesのメンバー5人を無理やりポロポロのビュートに詰め込み、次の場所の羽田空港へ向かった。

(ビュートは5人乗りなので、もちろん定員オーバー)

「では東京ぶらり旅!! 今回のゲストはアイドルユニットPastel\*Palettesの皆さんです!!」

「「「こんにちは!!」」」

俺達は今、羽田空港の国際線到着ロビーにいた。何でも、今回は『日本に戻ってきて最初に寄りたい店』をテーマに取材をするらしい。

俺はこのロケを撮るカメラの後ろにいた。俺はポケットと到着ロビーへ入ってくる外国人や日本人を見ていた。

……この嫌な予感、ただの勘違いだといいたが

そう思っていると……180センチほどの身長を持つ、スキンヘッドの白人の男性が到着ロビーに入ってきた。そして……その男と目が合った。

「……はあ!?なんでいるんだよ!?」

俺は思わず叫んだ。このロケの関係者全員が俺を見てくるが……そんなことを気に掛けないほどの衝撃が俺を襲ってくる。

あのスキンヘッドの白人はジョニー・マクレーンだ。俺の相棒であり、疫病神でもある。

ジョニー・マクレーンも俺のことを相棒or疫病神と思っ  
るので、俺に会わないように日本へは来ないと思っていた。

……なんで、あんな不幸を呼ぶ男がここにいるんだ!!  
ジョニー・マクレーンも俺を見つけたのだろう、苦々しい顔つきになっ  
た。

「(英語) ジョニー、どうしたの?……あらイブキ君じゃない!!」

隣にいるジョニー・マクレーンの奥さん: マリーさんも俺を見  
つけ、大きく手を振ってきた。

「(英語) イブキ君!! また大きくなったわね!! 夏以来かしら!!」

マリーさんは駆け寄ってくると、俺を我が子の様に抱きしめた。

俺は母親の愛に久方ぶりに触れ合ったため、受け入れそうに  
なり……慌てて突き放した。

「(英語) 何するんですか!？」

「(英語) 私にとって、イブキ君はヒーローで息子よ?」

マリーさんは俺の手を振り払い、再び抱きしめた。正直に言っ  
て……恥ずかしいからやめて欲しい。

「(英語) マリー、こいつも男だ。そろそろ止めておけ」

「(英語) 何? この子は私にとってルーシーやジャックの  
弟よ?」

……恥ずかしいからそろそろやめて欲しい。

俺は必死になってマリーさんの抱擁ほうようから抜け出した。 < r b >

P a s t e l \* P a l e t t e s < / r b > < r p > ( < / r p > < r t > パスパレ < / r t > < r p > ) < / r p > < / r u b y > のメンバー5人が俺を注目しているのがよくわかる。

「(英語) なんでジョニー・マクレおっーが日本にいるんだよ!!」

「(英語) うるっせえなあ……。偶然日本行きチケットが当たったんだよ!!俺も来たくなかったよクソツタレ!!」

「(英語) ……………で、どこに泊まるんだ? お願いだから遠くに行つてくれ。」

「(英語)   アクア・エデン   のホテルだ。」

アクア・エデンとは……身分証が無いとは入れない、出入りがヤケに厳しい人工島だ。そして、日本でカジノや風俗が許される数少ない場所の一つだ。

……あ、淡路さんが『アクア・エデンを沈めたくない』って言っていた理由ってこれだったのか!!

『極東戦役・極東編 金は天下の回りもの……』で、『アレクサンドリア』のマスター：淡路萌香が言っていた言葉を思い出した。その時だった。

「なんであんた達が私の近くに来るのよ!! なんで……なんであの人を殺した二人が!!」

白鷺千聖護衛対象は俺とジョおっニー・マクさクレんを見て、情緒不安定になり、持っている物を俺達に向かって投げつけ始めた。

……なんだ? どうしたよ!?

俺は急いで白鷺千聖護衛対象を拘束し、気絶させた。

「「「……………」」」」

空港のロビーには重苦しい空気が充満する。

「…………白鷺千聖さんは体調がすぐれない様です。」

「…………は、はい!! ロケ中止!! 中止!!」

その後、俺はP a s t e l \* P a l e t t e sの4人を家まで送った。今は、ビュートの車内は助手席で寝ている気絶して白鷺千聖と俺だけだ。……恨まれるのは仕事柄覚悟していたが、実際に会うと精神的に来るな。

俺はため息をついた。

俺は白鷺千聖を護衛対象を気絶させた後、急いで理子に連絡し、彼女のことについて調べて貰った。

その結果……家族も妹もピンピンに生きているようだ。しかし、彼女が子役を演じる初期から世話になっていたディレクター：斎藤浩二が死んでいた。

そのディレクターはウインザー114便に搭乗していたそうだ。ウインザー114便は、『ジョン・F・ケネディ国際空港での事件』で墜落し、乗員乗客約200名は全員死亡した。

……その『ジョン・F・ケネディ国際空港での事件』を解決したのは俺とジョニー・マクレーンだ。俺達を恨む理由は分からなくもない。俺は大きなため息をついた。

あの時、テロリストに反抗したのは『空港を管轄するハゲ署長』だ。確かに俺とジョニー・マクレーンも反抗したが、ウインザー114便の墜落は『空港を管轄するハゲ署長』への見せしめだ。

……責任はあのハゲ所長に擦り付けることはできるが、確かに俺も責任を背負っている。

プスン……プスン……

そんな事を考えていた時だった。ボロボロのビュートがボンネットから白煙を吹き出し始めた。俺は慌ててスピードを緩め、ブ

レーキを停めた。

俺はボンネットを開けて中を見ると……ウオツシャー液の管が割れ、そこから漏れ出た液がエンジンによって蒸発していたようだ。

……全く!!心配させやがって、このボロ車!!

俺はそう思いながら横を向くと、そこは霊園だった。ここの霊園には俺の親父・お袋が眠っている。全くなんて巡り合わせだ。

……俺はあの時、最善を尽くした。結果的には親父とお袋を亡くし、沢山の人達が死んだけど……俺とジヨニー・マクレーンは最善を尽くしたはずだ!!

「なあ、そうだろうか……そうじゃないと困るんだよ、チクシヨウめ」俺は爪を手の平に食い込ませ、ビュートのタイヤを蹴飛ばした。

バコツ!!カランカラン……

「……」

俺がタイヤを蹴ったせいでホイールキャップが外れてしまった。

……このボロ車!!

俺はため息をつきながらホイールキャップを取り付け、運転席に戻りエンジンを掛けようとした。

キュルキュルキュル……

「ふざけんな!!動けよボロ車!!いい加減にしろよ!!」  
キュルキュルキュル……

10分後

「お願いだから、機嫌直して……ゴメン、悪かったって」

キュルキュル……ドウルン!!ドツドツドツド……

……俺が謝った瞬間、すぐにエンジンが動いたぞ!?どうなってやがるんだこのボロ車!?

俺はこのボロ車が怖くなった。そもそも曰く付きの車だ。どんなことが起こってもおかしくはない。

ドツドツ……プスン、プスン

「悪かったから、~~ボロ車~~ボロ車~~ボロ車~~と言ってスイマセンデシタ!!」

ドツドツドツド……

さつきまで不調だったエンジンは、いきなり滑らかに動き出した。そして、夕焼けの光を自慢げに反射させ、ビュートは東京を走っていった。

高級中華食い放題（手土産付き）……

「……ん」

快調に動くビュートを運転して15分後、隣で寝絶して白鷺千聖がやつと起きたようだ。

「ここはd……」

「車の中だ。」

俺の言葉に、白鷺千聖はギロリと俺を睨んできた。

「お前、あの空港でやった事を覚えているか？」

「……」

白鷺千聖の目は俺を視界から外した。プロ意識の高い女優である彼女には、自分がやらかした重さをよく理解できるはずだ。自分の我が儘でロケを中止させたという事を……

「まあ良い。それよりも……お前の事を調べさせてもらった。斎藤浩二って言うディレクターにお前は世話になっていたみたいだな。」

「……ッ」

白鷺千聖は再び俺を睨みつけてきた。俺はその視線を無視し、車を運転する。

俺とジョニー・マクレーはあの時、最善を尽くした。それだけは胸を張って言える」

キキーツ!!

ビュートにブレーキをかけ、白鷺千聖の家の前に停めた。ボロすぎるせいか、ブレーキ音がやけに響いた。

「俺達が居ても居なくても、ウィンザー14便はテロの手によって墜落させられていただろう。あのハゲ署長、平時はともかく……緊急時に対しては無能だったしな。」

「………今日は送ってくれてありがとうございます」

白鷺千聖は張り付けた笑顔をしながらシートベルトを外し、ドアを開けた。

「ただ、これだけは聞いてくれ。……お前にも女優のプライドが

ある様に、俺にもプライドってものがある。『ジョン・F・ケネディ国際空港で死んだ両親』の仇<sup>かたき</sup>だろうと、任務なら死ぬ気で守る。」

「……そう」

護衛対象 白鷺千聖は☒貼り付けた笑顔☒で、しかし目は俺を射殺<sup>いころ</sup>さんばかりに俺を見てきた。

「俺はこの任務を降りるつもりはない。護衛を変えたければお前が願  
い出る。」

「……………今日はありがとうございました。」

バタン!!!

護衛対象 白鷺千聖はビュートの扉を勢いよく閉め、自宅の門を開けた。

……………これで、明日からはお役御免かな

俺は本心を言ったが……………彼女には☒彼女の筋<sup>すじ</sup>☒がある。彼女と俺は相いれないだろう。

俺はため息をついた。

バキツ!!……………バリッ!!

護衛対象 白鷺千聖が勢いよく閉めた時、何か壊れる音がした。

俺が慌てて運転席から出て、音がした場所に向かうと……………助手席側のドアミラーが落下し、割れていた。

「て、テメエ!!この車がボロいのは分かってただろ!?なんで勢いよく閉めたんだよ!!」

「うるさいわね……………あんなぐらいで壊れるなんて普通思わないわよ!!」

俺が護衛対象 白鷺千聖に怒鳴ると、彼女もキレてしまった。

「何で物を大事にできねえんだよ!!見ろよ、鏡が完全に割れてるじゃ



ねえか!!」

「今の空気で優しく扉を閉めるなんてことができるかしら?そもそもこんな古ぼけた車で来るんじゃないわよ!」

「ば、馬鹿!!お前……そんな事言ったr……」

ポーン!!

ボロ車から爆発音が響き、ボンネットから白煙を吹き出した。もちろんアイドリング状態だったエンジンはストップしている。

「機嫌損ねちゃっただろ!?!何してくれてんの!?!」

「な、何を言っているのかしら?」

白鷺千聖は女優としてのプライドなのか、明らかに焦っていて冷汗をかきながらも……美しい笑顔で答えた。

「と、とりあえず養生テープかガムテープ持ってきてくれ!!」

「わ、分かったわ!!」

俺は急いで運転席に戻り、ボロ車の機嫌を取り始めた。

「いや……アイツも苛立つてつい言っちゃたみたいで、ゴメンナサイネ。機嫌戻して……ね」

キュルキュルキュル……

エンジンがかかる気配がしない。俺はため息をついた。

とりあえず、白鷺がガムテープを持ってくるころまでには、機嫌が戻ったことをお伝えする。

翌日の朝、『任務中止のメールか電話』が来ると思っていたのだが

……そう言うものは一切なかった。

……ただ連絡が遅れているだけか？

俺は待ち合わせ場所にボロ車ビュートを止め、『連絡が来ているかの確認』のために携帯をいじりだした時だった。

コンコン……

「ん？」

そこには、ひびが入った運転席の窓を叩く白鷺がいた。俺はめんどくさそうに窓を開ける。

「なんだ……護衛を変えなかったのか？」

「あなたにもプライドがある様に……私にもプライドはあるのよ？」

彼女は~~貼~~貼り付けられた美しい笑顔~~を~~をしながら、勝手に助手席の扉を開け、席に座った。

「今日は学校の後、パスパレのみんなでレッスンの。今日も護まもつてくれるかしら？」

「昨日と態度が一切違うから、逆に怖いんですけど……」

「ウフフ……」

俺は白鷺の態度の変わりように逆に怖くなり、冷汗をかいた。

「……ゴメン、マジで変わっていい？」

「あら、あなたにもプライドがあるんじゃないかなかったかしら？」

「べらんめえ!!誰だって急に態度が変われば警戒するわ!!」

ボロ車ビュートはやけに快調に前進していった。

授業バが終わり、俺はアイドル事務所で  
Pastel\*Palettesレのレッスンをボケーと見ていた。

そのレッスンが始まる前、白鷺はPastel\*Palettesレのメンバーに頭を下げてた。

「昨日はごめんなさい。せっかくの初テレビだったのに」

「……村田君とあのおじさんに何かあったんでしょ?いいの?」

すると、Pastel\*Palettesレのメンバーの一人：氷川日菜が聞いてきた。

「……ええ、私の中で決着をつけたから」

「ふーん………自分よりも不幸な人でも見つけたの？」

「……ッ!？」

……いやあ、アイドルって大変だなあ

その時俺は、昨日割れたドアミラーの鏡の補修をしながら適当に聞き流していた。

レッスンは終わり、『今日はまだ襲撃を受けていないなあ』と思いがらボケ々としていると……

「分かんないよお……」

Pastel\*Paletteのボーカル：丸山彩が泣きべそを書きながら、プリントの問題を解いていた。

……出発まで残り10分。どうせ今は暇だから、面倒を見てやるか。

「分からない問題でもあるのか？」

「い、イブキ君!!これ分かる!？」

彼女も同じ花咲川高校に通う同級生だそう。最初の頃は互いに丁寧語でしゃべっていたのだが……今はもう面倒なので碎けてしゃべっている。

俺は丸山彩からプリントを受け取り、問題を見てみると……そこには斜方投射の簡単な問題があった。

「これって……高1どころか、最悪中学でやりそうな問題なんだけど」

「……」

「おい、そっぽ向いてないでこっちを見る。」

すると、丸山彩は涙目で俺を見てきた。

「だって、物理は苦手で……」

「……ッ!？」

流石は現役アイドル、涙目での破壊力は俺の想像をはるかに超えていた。

……白鷺の様な貼り付けた笑顔や営業スマイルの完成形ではできない、素の顔でこの破壊力なんて!？」

俺はたじろいだ瞬間、後ろから投射物の気配を感じた。俺は振り向き、それをキャッチすると……

「……広辞苑!？」

「……いま何を考えていたのかしら?？」

白鷺がどす黒い笑顔で俺達に近づいてきた。

「俺が何を考えてようが勝手だろうが!？それよりもお前、なんて物投げてんだよ!!これで人を殺せるんだぞ!？」

「私もあなたの事は調べさせてもらったわ。このぐらいの攻撃じゃ死なないでしょう?？」

「だからってやっていい事と悪いことがあるだろう!？」

俺と白鷺の言い合いを聞きつけ、慌てて残りの  
P a s t e l \* P a l e t t e s メンバーがワラワラと出てきた。

「どうかしたんですか!？」

「イブキさん!!今のはどうやって取るんですか!？」

P a s t e l \* P a l e t t e s メンバーの大和麻弥、若宮イヴが出てきた。

ついでに大和麻弥が2年生、若宮イヴが1年生だそうだ。ため口でしゃつべて欲しいのだが……向こうはこの喋り方が素であるらしい。「みんなくどうしたの?もう時間だよ?？」

氷川日菜の言葉に時計を見ると……もう出発時刻であった。白鷺との口喧嘩で相当時間を食っていたらしい。

「また今度教えるから……」

「本当!？約束だよ!!」

丸山は涙目で俺の手を握ってきた。

……そこまで切羽詰まってるのかよ。ヤバイ、実はこれ面倒事に首

突っ込んだか？

俺は思わずため息をついた。

その後、俺はP a s t e l \* P a l e t t e sのメンバーをポロ車に詰め込み、家まで送った。

余談であるが……後日、丸山と白鷺（実はこいつも理解していなかった）に『物理の解き方』と『微積分』を強制的に叩き込んだのは言うまでもない。

俺はアクビをしながら車を運転していた。

「なんだ、襲撃がないなんて護衛して初めてじゃないか？」

そう、本日は奇跡的に襲撃が一切なかったのだ。すでに他のP a s t e l \* P a l e t t e sのメンバーは家に送っており、白鷺を送れば今日の護衛は終わりになるのだが……あと5分も経たないで白鷺の家に付く。

ところで、いつもは最低でも一日一回は銃撃やら斬撃やらがあった。なので襲撃のなかった今日は逆に気分が悪い。

「そもそも、毎日襲われるのがおかしいわよ」

「……確かにそうだ」

俺の呟きに白鷺が反応した。

……あれ？そもそも毎日襲撃を受けるっておかしくないか？

日々警察の皆さんやHS部隊第一中隊の皆さんが必死に働いている。そのおかげもあり、治安が悪くなったとはいえ、日本は先進国の中で最低ランクの犯罪率を叩きだしているのだ。

「やっぱりお前は俺の疫病神だ。」

「あら、調べたら結構問題を引き寄せているそうじゃない。疫病神は果たしてどっちかしら?」

「あれはジヨニー・マクレールか上官のせいだ。俺は基本それに巻き込まれただけなんだよ」

キキーツ!!

ボロ車は白鷺の家の前に止まった。ボロいせいだろう、相変わらずブレーキの音が大きい。

俺が周りの気配を探るが……敵意は一切感じない。今日は本当に襲撃がないようだ。

「明日こそ護衛が変わるのかな?」

「さあ?どうかしら」

ボタン

白鷺は惚れそうな美しい笑顔を向けた後、前日の件を反省したのか……優しくボロ車のドアを閉め、家に入って行った。

……ハア、見た目は絶世の美女なんだけどなあ

俺はそう思った時、バチカンのシスター：メーヤを思い出した。

彼女も見えた目の絶世の美女ではあるが、人外や異教(?)の者には一切の容赦がないという二面性を持つ。

……綺麗な花には棘があるか。よく言ったものだ。

俺はため息をつきながらアクセルを踏み、ボロ車を発進させた。

……何だって、ここ最近ワトソン・ココ・メーヤ・かなめ・白鷺

と地雷持ちの女ばかりと会うんだ。

俺は頭を振り、無理やり思考を止めさせた。不幸を嘆いたって仕方がない。今後のことを考えよう。

……そういえば、こいつは借りものだ。今度の車はどうするか。

ドツドツ……プスン、プスン!!

いきなりボロ車の調子が悪くなった。

俺は帰路につき、俺はゆつくりとご機嫌斜めのボロ車ビュートを走らせていた。その時、前方で馬に跨またがって走っている人物を目撃した。

……と、東京に馬!? しかも乗馬!?

確かに、乗馬の場合は道路交通法により『軽車輛（自転車やリヤカー）に相当し、公道を走ってもよい。しかし……東京で見るのは初めてだ。

……あれ? この騎手の背中、やけに見覚えがあるぞ!?

赤信号のため、その馬の後ろにボロ車ビュートを止め、騎手を見て……やつとわかった。

……この騎手、俺の実家のはす向かいに住んでいる秋山の爺ちゃんおぢだ。

この『秋山の爺ちゃん』は世界最後の本格的な騎兵戦闘・騎馬突撃である老河口作戦に従軍したそうだ。そしてソ連侵攻の際ときは、少数の騎兵（文字通り）で大いに暴れまわり、ソ連の侵攻を半月ほど遅れさせたらしい。だが……その話をしていた時は酒を飲んでいたので、それが本当かどうかは分からない。

とりあえず俺の実家のはす向かいに住み自称保護者で、俺の頭が上がらない人の一人だ。

秋山の爺ちゃん!?

「……ん? イブキか!! 大きゆうなつたなあ。……その車は何ぞね? 違う車持つとつたはずぞな。」

やはり、その馬に乗っていたのは秋山の爺ちゃんだった。

「つい最近、襲われて前の車が廃車になって……この車は借りてんだ。ところで、爺ちゃんが馬に乗っている所なんて初めて見たぞ!」

「遠山は近くに住んどつたのに、それ知らせなんだ。それつを今知つて、そこへ行くぞな。今で言う『サプライズ』じゃ。」

秋山の爺ちゃんおぢは80歳越えとは思えない、スラツとした姿勢で答えた。

……と、遠山ねえ。なぜか、そんな苗字の幼馴染がいるのだが、きつ

と気のせいに違いない。

それよりも、問題はこの馬だ。爺ちゃんが馬に乗っている所は初めて見た。

「その馬は何処で借りたの？初めて乗馬しているところ見たぞ!」

「近衛師団から借ったぞな。意外にすんなりと借れるぞ。」

☒秋山の爺ちゃん☒はそう言っつて、水筒の中の物をグイツと飲んだ。

……あれ？近衛師団から借りた!?!あの近衛師団から!?!

近衛師団は『極東戦役：極東編 場所を考えろよ……』で分かると思うが……とても狂暴な部隊だ。その部隊が☒退役軍人☒とはいえずんなり物品を貸すなんて予想できない。

……そ、そんなことより☒秋山の爺ちゃん☒が今飲んだのは酒か!?!

☒秋山の爺ちゃん☒は俺以上の酒好きだ。爺ちゃんの水筒の中身が酒なんて普通にありえる。

☒秋山の爺ちゃん☒!?!その水筒……!?!

「……ん？(酒の)搾りかすを水で薄めたものが入っただけじゃ。アルコールは1%以下じゃけん法律には触れてなか。ほうじゃけん心配するな。」

そう言いながらグビグビつと再び水筒に口をつけた。

……まあ、法律に触れてないなら別にいいけどさ。

そんな時だった。東池袋を通る時、とある塾の前で喧嘩が起こっていた。その喧嘩をしているのは……キンジ!?!

「キンジ!?!」

「……なんぞな。あの喧嘩しとる奴はイブキの知り合いぞね?」

「あいつは親友だ!!」

俺がそう言った時だった。キンジの傍そばにトヨタのセンチユリー(トヨタの超高級車)が止まり、そこから筋肉質の男6人ほど出てきた。

……喧嘩で1対1、ギリギリ2対1までは許せるが、5対1はただ



のリンチだろ

「助けるけ？」

「……流石に見捨てられないでしょ」

キキーツ!!

俺はため息をつきながら車を止め、ギアをPパーキングに入れ、サイドブレーキをかけた。

「喧嘩は久しぶりじゃのお。腕が鳴るぞな!!」

「……え？爺ちゃんも？」

「当り前ぞな!!」

秋山の爺ちゃんは馬から降りクリスマスプレゼントを開ける子供の様な笑顔を浮かべた。

「よおキンジ。相変わらず厄介なことに巻き込まれてるなあ」

「い、イブキ!？」

キンジは顔がこわばっていたのだが……俺の声を聴いた瞬間、ほんの少しではあるが表情を崩した。流石のキンジも6人の相手はキツイと覚悟していたのだろう。

「何じゃあ小僧ども!!集まらな戦えんのか!？」

黒の乗馬靴に藍色の乗馬ズボンとコートを着た秋山の爺ちゃんが鋭い眼光で睨みながら挑発してきた。

「うるせえジジイ!!引っ込んでろ!!」

一人が秋山の爺ちゃんに突っかかっているのだが……相手の力量が分からないのか？

「おい、イブキ。あの爺さんは……」

キンジは秋山の爺ちゃんの実力を理解したのだろう。さつきよりもさらに顔がこわばっている。

秋山の爺ちゃんはヤバいぞ。なんたって酒が入ってなくてもこの実力なんだ。」

この爺さん、酒が入っている時は手加減が無いのだ。この人にもどれだけ絞られたことか……

☒秋山の爺ちゃん☒は胸ポケットからボールペンを3本取り出した。

「こりゃ説教じゃのお」

☒秋山の爺ちゃん☒はペンを持って腕を振った。その瞬間、リーダー格のスキンヘッドの肩と太ももにボールペンが深々と刺さっていた。

「ぐおおおお!!」

リーダー格の男は倒れ、泣き叫ぶ。その瞬間に☒秋山の爺ちゃん☒は一気に接近し、もう一人を掴み、太ももと腕にペンを刺しながら投げ飛ばした。

「ぐああああ!!」

もう一人もあまりの痛さに叫んでいる。

「泣きわめくのは覚悟がなかっただけぞな。」

☒秋山の爺ちゃん☒は再び胸ポケットからペンを出し、その先端を無傷の男たちに向けた。

「おい、小僧ども……。わしの様なジジイ見たら、(戦争の)生き残り思え!!」

「じ、ジジイ……!!クソツ!!ぶっ殺す……ぶっ殺してやる!!やれえ!!」  
「うおおおおお!!」

6人中、2人が脱落したため残り4人。その4人全員が俺達を襲おうとした時だった。

ヒヒーン!! ベキツ!!バキ!!

ドツドツドツ!! ドスツ!!グシャ!!

☒爺ちゃんの馬☒と☒ボロ車☒がその集団に勢いよく突っ込み、撥ね飛ばしていった。

……うわあ、あつちには運がねえな。爺ちゃんの馬に俺のポロ車ビュートに轢ひかれるなんて。……え？

俺は確かにエンジンを掛けっぱなしにしていたが、ちゃんとギアはPパーキングに入れ、サイドブレーキも掛けていた。その状態で車が動くはずがない。

「何で動いてるんだよ!!このポロ車!!」

ポーン!!

俺が『ポロ車』と言った瞬間、ポロ車ビュートは爆発音と共に、ボンネットから白い煙を出して止まった。

「……つてヤバ!?!」

俺は急いで運転席に乗り込み、キーを外した。そしてギアやサイドブレーキを確認すると……見事にDドライブに入っており、サイドブレーキは外れている。

……なんで勝手に外れてるんだよ。

俺はため息をつきながらボンネットを開けると……問題があるように見えない。

そうなると、白煙を上げた理由は一つしかない。俺はいまだに納得できていないが……このポロ車ビュート特有の問題だ。

……機嫌を損ねた!?

俺は運転席に戻り、ポロ車ビュートへ必死に謝りながらエンジンを掛けようとしていた。

「イブキはがいにすごいジじゃじゃ馬持つとるようじゃのお。」

秋山の爺ちゃんは『よしよし』と馬を撫でながら、『必死に謝りながらキーを回すイブキ』を見て笑っていた。その時だった。

「……じ、ジジイ!!」

秋山の爺ちゃんの背後で最最初にペンで刺さされた男が

ゆっくりと立ち上がり、腰から拳銃を抜いた。

「……何じゃあ。覚悟はできてるのか？」

「死ねえ!!」

「最初にペンで刺された男が引金を引こうとした瞬間、キンジがその拳銃を蹴飛ばした。そのまま流れるようにキンジはその男を投げ飛ばし、そして男の首元に持っていた傘の先端を突きつけた。

「これ以上大事にさせたいのか？」

「……………」

これで一段落……かと思いきや、駅の方角から警笛の音が聞こえる。

「こらあ!!何をやっ取るかああ!!」

警察が必死になって人混みを分けながら走ってくる。

『馬や車が撥ね飛ばす』ようなことが起こったのだ。通報されて当たり前だ。

「おじいさん、キンジ……イキってる鉄砲玉共のいい薬になったわ。ありがとう。」

すると、停まっていたトヨタ・センチュリーの後部座席から、改造和服を着た美少女が出てきた。

「頭なら兵隊を手中に収めなあかんぞな。」

「全く、反論のしようがありません。お詫びに夕食をご馳走します。

遠山もどう?……今の遠山は、断らない遠山だよね?」

改造和服美女は切れ長の瞳でスツとキンジを見た。

「分かつ……」

「いやあ、僕達も一緒に御馳走になってもよろしいですか?お嬢さん」  
改造和服美少女の後ろに、カーキ色の軍服を着た二人が急に現れた。秋山の爺ちゃん以外はその2人を警戒する。

軍人2人は秋山の爺ちゃんに敬礼をした後、再び改造和服美女の方を向いた。

「藤原少佐、さすがにこの入り方は警戒されますよ。」

「小野田、いいのいいの。歓迎してもらったら逆に困るんだから。」

「……あ、アンタは」

キンジはこの軍人のうち、一人に見覚えがあった。

「ああ、遠山くん。すまないね、旧友と食いに行こうとするのに邪魔しちゃって」

「我々は鏡高組へ警告をしに来ました。できれば、あそこに居る村田大尉も一緒にお話をさせていたただきたかったです……」

「ごめんね。機嫌直してね。お願いだから……」

藤原少佐と一緒に来た小野田少尉は『車に対して謝りながらキーを回すイブキ』をチラツと見た後、それを無視して改造和服美少女に言った。

「分かりました。全員招待しますが……この車では全員を乗せられません。おじいさんとお二人はあちらの車で来てもらってもよろしいでしょうか？」

改造和服美少女が指を刺した先には……へコミや錆だらけのビュートがあった。

キュルキュルキュル……ボン!!ドツドツド!!

「よっしやあ!!かかった!!」

エンジンがかかって大喜びをするイブキもいた。

「村田大尉……何やってるんですか……」

「村田……相変わらずだなあ。」

二人はため息をついた。

「なんじやあ。諜報か？」

「はっ!!閣下の想像通りであります。」

藤原さんに小野田少尉はボロ車ビュートに乗り秋山の爺ちゃんは馬に乗りながら話していた。

「その話し方は止める。体がかゆうなるぞな。」

「し、しかし……」

「小野田、閣下が言っているんだ。」  
そんな風に話していると……会食の会場である、いかにも中華風でケバケバしい看板の店に着いた。

このレストランの名前は『紅寶石』。一見さんお断りの店で、  
鏡高組かがたかくみが運営する店だそう。藤原さんがそう言った。

……いやはや、赤ばつかりだな。  
カーペットに壁・机・シャンデリアすべてが赤く、金の刺繍ししゅうがされている。

「おい、お前たち。バックにいな。」

改造和服美少女は幹部たちにそう言った後、俺達をVIP専用であろう部屋に案内した。

そこには……数々の豪華な料理や酒が置いてある。

「姐さん……この人達は……」

幹部の一人が俺達を見た後、改造和服美少女に耳打ちをした。  
「ええ、いい男でしょ?」

改造和服美少女は何でもないようにそう言うが……幹部たちの顔真っ青だ。

「いただきます」

俺と秋山の爺ちゃんおやぢは席に付くと同時に箸を持ち、美味そうな中華料理をむさぼり始めた。

「あの……村田大尉? 閣下?」

小野田少尉が唾然としながら俺たちを呼ぶ。まあ、確かにこのような重苦しい空気、料理をむさぼる奴はいないだろう。しかし……俺と秋山の爺ちゃんおやぢには関係ない。

『毒が入ってないか』ぐらいすぐわかりますよ。それに、こんな

めつたに食べませんし。ビールはないんですか？……つてそうだ!!  
俺運転手だった!!」

「毒盛れば、どがいな報復されるか向こうも分かるぞな。酒はどこ  
じゃあ!!……つて飲酒運転になるぞな!!」

俺と☒秋山の爺ちゃん☒が酒を飲めない事に意気消沈している横  
で、話し合いは進んでいく。

「兵部省の藤原石町、少佐です。こちらは副官の小野田です。」

「小野田少尉です。」

藤原さんの紹介に、小野田少尉は頭を下げた。

☒鏡高組☒組長の鏡高かがたか菊代きくよです。」

藤原さんは軽く周りを見た。

「随分と羽振りがよさそうですね」

「ええ。一発逆転をかけて中国マフィアと共同でマカオのカジノ経営  
に手を出したら、この結果です。もちろん合法ですよ。」

すると藤原さんはポケットからシガリ口を出し、口にくわえて火を  
つけた。フーツと美味そうに煙を吐き出した後、『ドロツとしたヘド  
ロのような目』に変わった。

☒外患誘致罪☒

「……ッ!?」

藤原さんがポツリと言った言葉に、鏡高菊代や幹部たちが反応し  
た。

『刑法 第八十一条 外国と通謀して日本国に対し武力を行使さ  
せた者は、死刑に処する。』これが適用されるのは☒外国☒であり、

☒外国マフィア☒ではない。適用させるとしたら☒テロ等準備罪☒  
か。」

「……それがどうかしたのですか? ☒鏡高組☒は違法行為を全て

御法度ごはつとにしているのですが。」

鏡高菊代は懐からキセルを出し、紅の唇で啞くわえた。

「さっきの『塾の前の喧嘩』でもそうですが、儲かっているとはいえ……あなたは下の者まで統制がしっかりできていますか？」

「……………」

藤原さんと鏡高菊代は互いににらみ合う。

「まあまあ……藤原少佐、喧嘩はよしませうよ。とりあえず、我々はあなたがどこで何をしようかどうかでもいいですが、テロを呼び込まれては困ります。ただでさえ東京ことうはお上のお膝元。日本の喉元です。」

小野田少尉はやんわりとした口調で言った。藤原さんはシガリ口に口をつける。

「あなた達も裏の顔我々がある様に、軍にも裏の顔我々がある。合法で無害ならともかく、問題を持ってきたら……。『内部抗争の末、共倒れ』なんて事が起きないことを祈ります。」

藤原さんが煙を吐きながらつぶやいた。鏡高菊代は笑顔で対応しているが……目が笑っていない。きつと彼女のハラワタが煮えくり返っているだろう。

さて、俺と秋山の爺ちゃん我々は交渉に参加せず、何をしていたのかと言うと……

「……そうだよなあ。我々エビチリ我々つてこういう味だよなあ。やっぱリシエフ泉の腕がおかしい。」

「この我々フカヒレ我々香港で食ったものよりうまいぞな!」  
『酒が飲めない気晴らし』もかねて片っ端から皿を空けていく。そして時々我々鏡高組我々の幹部らしい人たちにお代わりを持ってこさせていた。

「何かあったらその村田大尉のような人物が我々対応我々させてもらう



ので、そのつもりd……」

小野田少尉はそういつて俺のほうを示した

「すいませーん、サイダーあります!」

「わしは茶がほしいぞな!!」

「村田大尉、閣下……もう少し、緊張感をですね……」

小野田少尉はため息をついた。俺はそんな小野田少尉を見て、不思議そうに答えた。

「……え? 交渉事なら藤原さんに任せたほうがいいですし。……ああ、彼女に自己紹介してませんでしたね。村田です。どうぞよろしく」

「わしはただの老いぼれじゃあ。特に覚えんでもええぞな」

「そ、そうですか。……おい、お客様が飲み物をご所望だ。早くしろ。」

鏡高菊代は俺と爺ちゃんの後若無人さを見て顔を引きつらせつつ、幹部達に命令を下す。幹部の一人が急いで部屋から出て行った。

「さ、サイダーとお茶です。」

「ありがとうございます。……あ」

「だんだん。……アツツ!!」

パリン、パリン……べちやあ

俺はサイダーのコップを手から滑らせてしまい、☒秋山の爺ちゃん☒は熱くなったカップから思わず手を離れた。

その結果、サイダーとお茶はテーブルやカーペットにこぼれてしまった。

「な、なにやってるんですか!!」

「いやあ、すいません。手が滑っちゃって……」

「すまんのお、猫舌なんじゃ」

小野田少尉は苛立ちながら俺と☒秋山の爺ちゃん☒を非難してくる。

「いえいえ、こちらの不手際です。熱いお茶に塗れたコップを出してしまいすいません。……早く代わりのものを!!」

鏡高菊代は笑顔(目は笑っていない)のまま、口だけで謝ってきた。「すいません、こんな高級そうなカーペットを汚してしまつて。」

「まっことすまんのう」

俺と秋山の爺ちゃん申し訳なきように、再び皿に箸をつけ始めた。

さて、腹いっぱい『高級中華』をたいらげ、軍人4人組は『紅寶石』から出た。キンジはまだ残り、中学で同級生でもあつた鏡高菊代ともう少し話すらしい。

秋山の爺ちゃんは馬に乗り、俺・藤原さん・小野田少尉はポロ車に乗って移動していた。

「ああ!!もう!!二人ともなにやってるんですか!!交渉がめっちゃくちゃだ!!」

小野田少尉は苛立たしげに大声で叫ぶ。

「あんなことすれば舐められるに決まってる!!絶対に面倒なことが起きますよ!!」

「……なんじゃあ、小僧。理解できんぞね?」

「……ッ!?!」

秋山の爺ちゃんは少し殺気をこめ、小野田少尉をにらんだ。小野田少尉は八つ当たりをやめ、冷や汗を流し始めた。

「はあ……。閣下、小野田はまだ学校を出たばかりなので勘弁してください。……村田、あの組はヤレるか?」

藤原さんは腕を組み、目を閉じながら……ドス黒い声で俺に聞きました。

「あれは個々の戦力はカス同然ですが……あそこの強みは兵の数でしょう。第二中隊だと目標撃破は朝飯前ですが、殲滅戦だと

撃ちもらし多数出てきます」

「なるほど」

「しかし、中国マフィアの方は不明です。」

そう、俺や爺ちゃんがただ腹いっぱい『高級中華』を食べていたわ

けではない。ワザと幹部たちを動かし、その仕草を観察していたのだ。

「あの組織はもう終わりじゃのお。しかも、あのお嬢さんはそのことおそらく理解しとるはずぞな。」

「……え？爺ちゃんマジで？てつきりミカギあんな無能バカ達を使っていたから人選能力が無いと思ってた。」

「鏡高組の幹部を鏡高菊代に紹介してもらったのだが……センチュリーの運転手兼護衛ミカギの人物以外の全員が……鏡高菊代を見限ミカギっているように見えた。」

そんな人間を幹部に据えているのだ。いつ謀反を起こされてもおかしくない。

……しかし、その事を理解している？理解していて、そんな爆弾を抱えているのか？

「あそこまでの人数、肅正することはできません。それに『一発逆転』によった。たいがい、成功して求心力上げようとしたのじゃろう。」

「……失敗したときは？」  
「奪われるくらいなら解体ぞな。」

……なんでもあの鏡高菊代は俺と同じ年だそうだ。あの華奢な体で、大きな覚悟をしていたのか。

俺は思わずため息をついた。小野田少尉は無表情のまま、俺達の話聞いてる。まさか俺と爺ちゃんがそこまで考えていたとは思わなかったのだろう。

「そう言う事だ。小野田、こうやって相手を観察する方法があるんだ。……まあいい。村田、ちゃんと詰めてくれた？」

「もちろんです。小野田少尉の分もありますよ」  
俺は運転しながら鏡高組四次元倉庫ミカギを開き、タツパーを4つほど取り出した。その4つを後ろの二人に渡す。

「いやあ、助かる!!今日の夕飯は困らないね!!」  
「……………え？何ですこれ？」

藤原さんは嬉々としてもらい、小野田少尉は混乱しているようだ。

「……何って、さつき中華だよ?」

「ちゃんと詰めとききましたよ。……ああ、タツパーは返さなくてもいいです。」

「な、何やってるんですか!？」

小野田少尉は顔を真つ赤にして叫んだ。

「だって、あんなことしてたら料理は食べれないし」

「あの☒幹部達☒も☒鏡高菊代☒も気が付いてませんよ?それにあんな量を食えるはずないじゃないですか。爺ちゃんと2人で約10人前ですよ?」

「わしもタツパーに詰めたぞな。手土産は完璧じゃのお」

「……もうやだ。こんな軍隊」

小野田少尉はポツリと呟き、☒死んだ魚の目☒をした。

「……いらなら俺が食べますよ?」

「……いただきます」

小野田少尉はタツパーを持った手を一切離さなかった。

藤原さんと小野田少尉を巣鴨駅で降ろし☒秋山の爺ちゃん☒と一緒に『遠山』の家へ向かうと……

「イブキにい〜!!」

かなめが抱き着いてきた。

……あれえ?なんで☒かなめ☒がここにいるんだ?

俺は目が点になる。何故か分からないが、この家にはレキにGⅢ、キンジの祖父祖母がいる。

……え?☒秋山の爺ちゃん☒が言ってた『遠山』って、キンジの

祖父？

「閣下!?!なぜここに!?!」

「遠山あり!!なんでここに住んどると知らせなんだ!!」

キンジの祖父は慌てながら敬礼をしている。レキはボクつとこの光景を見ているのと対照的に、GⅢは「何でここにダイハードが2人もいるんだ」といいながら頭を抱えている。

「ねえイブキにい?お姉ちゃん達でも、ぶりっ子理子でもない女の臭いがするんだけど?」

……もうヤダ。帰りたい。

このカオスな状態はキンジが戻るまで続いた。

Die Hard 3 in Tokyo 俺の  
一番長い日の始まり……

さて、俺と秋山の爺ちゃんは遠山家の夕飯に招待された。

遠山家の夕飯時、俺の席の隣にはもちろんかなめが座っていた。そのかなめの絶対零度の瞳に見つめられ、俺はずっと『蛇に睨まれた蛙』の様になっていた。

かなめが俺を睨んでいる理由は……俺が『白鷺千聖』を護衛をしているために、彼女が俺を取ったでも思っているのだろうか？

……だけどかなめに護衛の件をしゃべってみろ？ただでさえ毎日襲われているのに、かなめにも襲われることになるぞ!?

俺は心を鎮めるため、水を飲んだ。喉が渴いていたのか、コップの水はすぐに飲み干してしまった。

「ねえ、イブキにい？なんで、他の女の臭いがするの？」

「な、なんだっていいだろ……」

「ねえ、なんで？」

「……………」

「イブキにい？」

「……………」

かなめは絶対零度の瞳で俺の顔を覗き込んだ。俺は顔をそらそうとすると、かなめは俺の頭を両手で固定してきた。

「なんで教えてくれないの？」

「……教務課からの依頼で、同年代の女優を護衛することになりました。」

「へえ……………」

今度は俺の左腕を力いっぱい抱きしめてきた。爪が食い込み、地味に痛い。

「複数の臭いがするんだけど？」

「その護衛対象がアイドルを兼任しており、そのアイドルユニットの

少女達の送り迎えもやっているからだと思われれます。」

「近距離にいるみたいだけど……なんで？」

「5人乗りのボロ車ビュートに、自分を合わせて6人を無理やり乗せているせいだと思われれます。」

……いやあ、俺は家族義妹には隠し事ができない、純粋な心を持っているらしい。

結局███任務内容███をかなめに話してしまい、俺は思わず現実逃避をしてしまった。

「イブキにい、あたしも一緒に行ってもいい？」

「物理的に無理です。屋根にでも載せたら俺が捕まります。」

「……………しょうがないかあ〜」

かなめが力いっぱい腕を抱きしめるせいで、とうとう感覚がなくなってきた。

「……俺、帰ってもいい？」

「イブキにい、今日は泊って？」

かなめが俺の左腕に胸を押し当ててるが……もう感覚がなくなっているため、何にも感じない。

「いや、明日も仕事があるし。」

「お爺ちゃん達を放っておいていいの？」

かなめが指を指した先には……一升瓶が5〜6本・洋酒の四合瓶4〜5本が転がり、気分がよさそうな███秋山の爺ちゃん███と、絡まれるキンジの祖父がいた。

……███秋山の爺ちゃん███今日はいつも以上に飲んでるなあ。

俺はそう思いながら、今だ手をつけていない味噌汁を啜った。

「……………」

……味がおかしい。

俺はかなめを見ると……かなめの表情は変わってないが、口元が歪んでいた。

俺は理解した。かなめが何か薬を盛ったという事を……

「お、お前!?!何盛った……」

「イブキにいが悪いんだよ?なんで泊まって行ってくれないの?」

俺は意識がかすれていく中……かなめが~~コ~~絶対零度の瞳~~ス~~で俺を  
狂<sup>愛</sup>おしく見ている姿がとても印象的だった。

……ん？

俺は腰の方に何か触感があり、起きてしまった。俺は眠い目をこすりながら、原因を探り……

「……あ」

「……………おい、さすがにそれは無いわ」

俺のベルトを外し、ズボンを下ろそうとしているかなめと目が合った。かなめは目をそらし、何もなかったように再び俺のズボンを下ろそうと……

「何やってるんだよ!?!」

俺は慌ててズボンを押さえ、かなめを蹴り飛ばした。

かなめは「ああん」と残念そうな声を発して壁にぶつかった後、四つん這いで俺の方へ向かう。

かなめは胸元を緩めているのだろう。四つん這いをしているため、シャツの隙間からブラジャーが見えている。

「夜這い……………」

かなめは四つん這いのままそう言って、『なんでそんな当たり前な事を聞くんだ?』とばかりに首をかしげる。

「うるせえよ!!どこに薬盛ってまで犯そうとする妹がいるんだよ!? ゲームの世界じゃねえんだぞ!?!」

「でも……義理だし~~兄~~兄妹や姉弟の結婚~~は~~普通だよ? 『イザナギ・イザナミ』・『オシリス・イシス』、他には……」

「そう言う問題じゃねえよ!!」

するとかなめの目元に滴<sup>しずく</sup>が溜まり始めた。

「……………あたし、今まで誰かと一緒に寝たことなく。偶々おじいちゃんに挨拶しに来たら、イブキにイも来て舞い上がっちゃって……。迷惑だった……。よね」



「うつ……」

かなめは涙目ですが継るようになってきた後、しよんぼりと部屋を出ようとした。俺はさっきの言葉とこの姿を見て、罪悪感で一杯になる。

……あながちあり得なくはない話だし、そんな寂しい気持ちも理解できる。それに、かなめはHSSになつたら俺を犯すことなどできないはずだ。

相変わらず、身内には甘いなあ……と俺はため息をついた。

「……何にもしないなら、一緒に寝るか?」

「……!? うん!!」

かなめは『帰ってきた主人に飛びつく忠犬』のように俺に抱き着いてきた。かなめは自分の頭を俺の腹にぐりぐりと押し当てる。

「変なことしたらたたき出すからな」

「やっぱり、兄妹は一緒に寝るのは合理的い!! イブキにい、大好き!!」  
「ハイハイ……」

……明日も早いから、もう寝ないといけない。久しぶりに秋山の爺ちゃんと一緒に痛飲したかつただけだなあ。

俺は部屋の電気を消し、布団にもぐった。そしてかなめに背を向ける。

「~~~~~♪」

かなめは俺の背中に抱き着き、鼻歌を歌っていた。かなめの感触と熱が背中に伝わってくる。

……湯たんぼ代わりにはちょうどいいか。

「おやすみ」

俺はそう言って、目を閉じた。

12月の日本家屋、さすがに布団だけでは寒いが……かなめがいれ湯たんぼばなかなか暖かい。今日はいい夢が見れそうだ。

翌日の早朝、かなめが部屋から叩き出されている所をキングは目撃

した。

高級中華料理食べ放題から3日後の早朝、俺と白鷺はアクア・エデンにいた。なんでも、このカジノ街で映画の撮影があるらしい。

アクア・エデンとは……日本でカジノや風俗が許される数少ない場所の一つであり、吸血鬼などの~~人外~~のため的人工島でもある。そのため、その人工島には身分証が無いとは入れなく、入るための交通手段が鉄道だけだ。

まるで監獄島アルカトラズの様ではあるが……人と人外の~~住み分け~~ができていいる国内でも希少な場所の一つだ。

ついでに、アクア・エデンはHS部隊第一中隊国内担当の管轄ではなく、第二中隊海外担当の管轄である。

スタッフが急いで道路の一角をセッティングしているのを見ながら、俺はあたりを警戒していた。何故だかわからないが……嫌な予感がするのだ。

……そもそも、ここで襲われてみる？ どうやったって逃げられないぞ？

前述のとおり、この島から脱出するためには鉄道しか手段がない。なので自慢の（皮肉）ボロ車ビュートは本土に置いてあり、この人工島にはない。

……しかも、ここには観光で来日したジヨニーおっ・マクレーンさもいるんだ。何が起こつてもおかしくない。

俺は周りを観察した後、ため息をつきながら白鷺千聖を見た。

今朝も襲撃があり、そのせいで俺はガラス片が頭に当たって出血しているのを見ているのに、彼女はその事をなんとも思わず仕事に励んでいる。

……と言うか、P a s t e l \* P a l e t t e s の全員が、血生臭い事に慣れちゃったんだよなあ。

彼女達は毎日襲撃されるせいで、銃撃戦など受けても悲鳴をあげることとはなくなつた。それどころかメンバーの一人：氷川日菜に至つては敵の銃を奪い取り、笑いながらその銃で反撃する始末……。

……おかしいなあ。どう考えても護衛の意味をなしていないような気がする。

まあ、あくまでも P a s t e l \* P a l e t t e s の護衛であつて、  
か？

そんなことを考えていた時だった。いきなり俺の勘が警鐘を鳴らした。俺は第六感が告げる警鐘に従い、白鷺を抱きかかえて地面に伏せた。

「ちよ!?何やつt……」

ズドーーーーーン!!!

「ぐあああああ!?!」

白鷺千聖がいた車道（ロケのため封鎖中）に面しているビル2つが爆発したのだ。その破片が俺の体に降り注ぎ、刺さっていく。

「ぎゃあああああ!!!」

「耳元で叫ぶんじゃねえ!!!」

……ああ、なんて最悪な一日だ。

これが俺の『一番長い日』が始まる狼煙のろしとなった。

「……ッ!!!」

「はいはい、我慢なさい。男の子でしょ?」

俺はアクア・エデンの風紀班本部で治療を受けていた。病院は重傷者で一杯のため、軽傷である俺はここで刺さった破片を麻酔無しで抜いてもらっているのだ。

さて、風紀班とは警視庁直属の『特区管理事務局』という組織の一部だ。

この『特区管理事務局』は単純に言うところ、『化け物には化け物を』。アクア・エデンなどの☒人外☒が集まる場所の治安を守る ☒人外☒による組織』（もちろん人間も所属している）だ。

そして、風紀班の仕事は、簡単に言うと警察の『生活安全課・地域課・刑事課』を混ぜたような仕事をしている。一見仕事量が膨大だと思われがちだが、基本は『警察の補佐』又は『警察ができない捜査』を担当するため、警察よりは仕事が少ない。

その風紀班と第二中隊<sup>俺達</sup>は何度か一緒に仕事をしているため、互いに顔は知っている。そして、その風紀班に所属し、俺と顔なじみで同い年の矢来<sup>やらい</sup>美羽<sup>みう</sup>と言う少女に手当してもらっているのだが……。

「……なかなか取れないわね」

「ツ~~~~~!!!」

「……。」

その矢来さんがピンセットで力任せに破片を取るせいで、俺は声にならない悲鳴をあげていた。そのエグい光景を見ないように、白鷺はそっぽを向いている。

ついでに、白鷺は無傷だ。女優である彼女に傷がつかなくてよかった。

「やっと取れた。……うわ、大きなネジね」

「もうちよつと優しくできねえのか!？」

「うるさいわね……私だって初めてなのよ。それにただでさえ寝ようとしたところで呼び出されて!!」

ガシツ……ザクツ!!!

「ツ~~~~~!?!」

「……。」

さて、俺が治療（？）を受けている間にも自体は進行している。俺達の目の前で、風紀班の皆さんは必死になって対応をしていた。

「アラン!! 警視庁の爆弾処理班と特殊部隊、警察庁と軍にも連絡しろ!!」

「羽切と里島は病院へ行つて負傷者を収容!!」

「呉田は特区の建設課に被害を報告させろ!!」

「誰があのホテルを吹き飛ばしたがるんだ?」

「どうせカジノで負けたからじゃない?」

「主任!! 警察庁から電話です!!」

風紀班の主任：枘形兵馬が電話に出た後、俺を睨んできた。

……どういうことだ?

ブチッ!!

「ぐおお……………」

「ある程度はこれで取れたわね」

……や、矢来の奴、覚えてやがら

ベチャ…………

「後は消毒ね」

「グウ……………ッ!!」

「……………大丈夫かしら?」

俺は白鷺の気遣いに背筋が凍り、そして痛みで熱くなった。

矢来さんによる☒愛のこもった☒治療を受けた後、俺は彼女から包帯を奪い取って自分で巻いた。

包帯が巻き終わった後、俺は白鷺と分かれて別室に案内された。

……全く、なんて一日だ。

俺はため息をつきながら部屋に入ると……そこにはやさぐれた  
ジョニー・マクレーンがいた。

「(英語) おっさん!?なんでここに!?!」

「(英語) ああ?……昨日はSAKEを飲んでいい気分でした。つ  
てのに、こんな早朝に飛び出してよお。……坊主、アスピリンはない  
か?」

ジョニー・マクレーンは無地のTシャツにジーパン姿をしていた。彼  
は吐き気と頭痛がひどいらしく、まるでボロ雑巾の様だった。

「(英語) ……ほどほどにしとけよ、おっさん。もう若くねえんだから。  
……ほら」

俺は四次元倉庫からアスピリン錠を出し、ジョニー・マクレ  
ーンに一粒渡した。

「(英語) もう1つ……いや2つだ」

おっさんは頭を押さえ、ダルそうにアスピリンを受け取った。

「(英語) おっさん、これの用量は1回1粒だ。」

「(英語) うるさあい。1粒じや足りねえ痛さなんだよ」

俺はため息をつきながら薬剤包装から錠剤を取り出そうとすると、  
部屋の扉が開いた。その扉から、無表情の藤原さんとスーツを着た3  
人(一人は白人)が入ってきた。

「藤原さん……どうかしたんですか?」

「まあね……まさかここまでだとは思わなかった。」

藤原さんとスーツの3人は俺達の対面にあるソファに座った。

「(英語) ジョニー・マクレーンさん、藤原石町と申します、どうぞよろ  
しく。」

「(英語) え?……ああ。」

藤原さんはそう言って、ダルそうなおっさんと握手をした。

「(英語) その隣が公安の玉串、外務省の畠山、駐日ア  
メリカ合衆国首席大使のクラークさんです。」

「(英語) よろしく」

「(英語) ……ああ。」

「公安」外務省の人間はジョニー・マクレーンに頭を下げた。「むらたサン、ハジメマシテ。ヨロシクオネガイシマス。」

「え？……あ、はい。よろしくお願いします。」

駐日アメリカ合衆国主席大使のクラークさんは笑顔で俺に握手をしてきた。

……まさか、首席公使と握手することがあるなんて。どんなやばいことが起こったんだよ。

首席公使とは、大使館でN.O. 2の階級を持つ人だ。そんな人がこんな場所に来るということは……なにか重要な事件が起こったに違いない。

「(英語) さて、村田は知っていると思うけど……ジョニー・マクレーンさん、今朝この島で爆発事件があったことをご存知ですか？」

「公安」の玉串さんが『碓ゲンドウ』の様な『机に肘をつき、手を組む』ポーズをとりながら言った。彼のメガネが蛍光灯の光を反射しているため、結構迫力がある。

「(英語) ああ？ 誰かがクラツッカーでも鳴らしたかと思っただぜ。」

「(英語) 俺はそのせいでボロボロだよ」

ジョニー・マクレーンはタバコを取り出して火をつけ、俺はため息をついた。

「(英語) そして、その事件のすぐに警察庁・兵部省・外務省・駐日アメリカ大使館にこのような声明の電話がきた。ジョニーさんには英語に起こした文章を。」

「外務省」の畠山さんがジョニー・マクレーンに一枚の紙を渡した後、ボイスレコーダーをテーブルの上に置き、再生のボタンを押した。

「サイモン」が言ったとき、俺にそのパイ全て寄越せ、出なければ

頭をカチ割るぞ？

アクア・エデンでの爆破は我々の警告だ。今、そのアクア・エデンに村田維吹という日本の軍人とジョニー・マクレーというアメリカの刑事がいるはずだ。我々は彼らに恨みがあるのでね、彼らとゲームがしたい。

ゲームの内容はSimon says…日本で言う命令ゲームだ。今回はサイモン<sup>村田維吹</sup>の命令を<sup>村田維吹</sup>と<sup>ジョニー・マクレー</sup>に実行してもらおう。

ああ、もちろん罰ゲームもある。命令に失敗、もしくは従わなかった時、再びこうky…

〔(独語) Ein B・r k a m h e r a u s!!〕

〔(スペイン語) D u e l e , D u e l e !! A y , a y !!〕

グオオオ!!グオオオオ!!!

ダアン!!ダアン!!ダアン!!

少し待ってくれ。……………ああ、もういい。罰ゲームの件だが、再び公共の場で爆発が起こる。1時間後に再び電話をする。それまでにその2人を呼び寄せておけ。では……

〔(独語?) くあwse d r f t g y ふじい!!〕

〔(独語) I h r J u n g s , o k a y ?〕

ガチャ、ツ、ツ……』

この部屋の空気がいつきに凍った。

……と、とりあえずドイツ語にスペイン語が聞こえたな。

ドイツ語、スペイン語に関係があり、俺達を恨んでいる奴らは……『ナカジマ・プラザ』に『ジョン・F・ケネディ空港』で戦ったテロリスト共だろう。他にも、もしかしたらあるかもしれないが……これが最も可能性がある。

そしてもう一つ分かったことがある。

〔(英語) クマに、襲われたんですね……〕

〔(英語) 冬ごもりしなかったクマは、飢えてるからね……。テロリス



トが減つてよかつたけど、人道的には……」

俺と藤原さんは遠い眼をした。

俺も、諜報が専門の藤原さんも冬山の恐ろしさをよく知っている。藤原さんとはともかく、俺の場合は衣服のみで冬山に置いてきぼりにされた。あの時に出会ったクマなんて……もう、思い出したくもない。

「(英語) そう言うわけです。ジョニー・マクレーさん、この事件の捜査に協力してくれませんか?」

公安の玉串さんははげげとゲンドウポーズを解き、頭を下げた。

「(英語) ……俺は休暇を楽しんでいたんだ。何だつて他国の事件に首を突っ込まなきゃいけないんだ。」

ジョニー・マクレーは顔を歪め、ため息と一緒に紫煙を吐いた。

「(英語) マクレー君、どうしても協力してくれないか? ……ああ、忘れていた。これはニューヨーク市警の命令書だ。」

駐日アメリカ合衆国首席大使のクラークさんは困ったように、ある紙を机に置いた。ジョニー・マクレーは面倒臭そうにその紙を読んだ。その後、ジョニー・マクレーはタバコをいっぱい吸った後、灰皿に吸殻を投げ込んだ。

「(英語) ……ツケ。どっちにしろヤレつてことか。」

「(英語) そう言わないで欲しい。我が合衆国も残党共を追うのに苦勞しているんだ。こんな一網打尽の機会などめつたにない。報酬は出るし、断る自由はある。」

「(英語) 断る自由はあるが、断ったら降格か。」

ジョニー・マクレーはため息と一緒に紫煙を吐き出し、紙を机の上に放り投げた。

「(英語) マクレー君、中央情報局や国家安全保障局、国防情報局が苦戦していた敵が目の前にいるんだ。もちろん報酬も出る。」

「(英語) どうせ口止め料でしょう? ……分かった、分かりましたよ!! やりやあ良いんでしょ!!」

ジョニー・マクレーが投げやり気味に言い放つた時、部屋の扉がバーンと開かれた。中に入ってきたのは……俺に愛をこめて治療してくれた矢来さんだった。

「おい君!!ここは立ち入り禁止だぞ!!」

外務省の畠山さんが苛立たしそうに声を張り上げた。しかし、矢来さんは一切臆おくすることはない。

「犯人からの電話です!!内線で繋がられます!!」

「何!?!」

「what's!?!」

矢来さんの言葉に、外務省の畠山さんと駐日アメリカ合衆国主席大使クラークさんは声を裏返して驚いた。

「落ち着いてください、二人とも。」

「内線をつないでくれるか?」

藤原さんと公安の玉串さんは落ち着いて対応した。

……と言うか、この玉串さんはすごいな。ずっとゲンドウポーズのままだぞ?」

「やつと来たな……、逆探の準備!!」

公安の玉串さんはそう言って眩くらき、メガネを外した。その玉串さんの厳げんつい顔からメガネを外すと……クリクリの目がそこに合った。

「……ツ?!?クククツ~~~~!!」

俺とジョニー・マクレンは笑いを押さえるのに必死だった。

『やあ、やつとあの役人どもが君達を説得したようだね。イブキ君ジョニー君初めましてサイモンと呼んでくれたまえ』

部屋にある固定電話をスピーカーモードにし、そこから犯人と思われる男の声が発せられた。

「(英語) おい、俺は日本語は分からねえんだぞ。」

「おっさんが日本語を聞き取るなんてできるはずねえだろ?お前、本当に俺達を知っているのか?」

俺とジョニー・マクレンが抗議をすると、固定電話からため息が聞こえた。

『(英語)ジヨニー君△△せつかく日本に来ているんだ。少しぐらい勉強をしたらどうだい。』

「(英語) 余計なお世話だ。俺はそもそも来たくなかったんだよ」

「(英語) そう言えば……クマに襲われた部下は大丈夫だったのか?」

藤原さん以外の3人が何かジェスチャーしているが無視し、俺は雑談に走った。

『(英語) ああ、二人が犠牲になった。あいつは良い奴だった……△△イブキ君△△ そうやって情報を抜き取ろうとするのは止めたまえ。つい興奮して爆弾のボタンを押してしまうかもしれない。』

「(英語) どんだけ短気なんだよ。いやだねえ、これがキレ症か?」

「(英語) カルシウム足りてねえんじゃないか? 牛乳もいいが、煮干しもいいぞ? あとちゃんと野菜も食べるよ?」

『(英語) 余計なお世話だ』

……なぜ、二人も犠牲になったのに△△あいつ△△なんだ? もう一人はどうでもいいのか?

俺は軽口を言いながら、頭を回転させる。

『(英語) ここには△△藤原君△△と△△玉串君△△と△△畠山君△△と△△クラーク君△△もいるようだね。やあ、初めまして。相変わらず玉串君は△△ゲンドウポーズ△△をしているようだな。』

「……!!?」

その言葉で、この部屋にいる全員が固まった。

……監視されているのか?

俺は冷汗をかき、ジヨニーおっ・マクレさーは水を飲んだ。

『(英語) さて、ではそろそろゲームを始めようか。』

△△Simon says……村田維吹、ジヨニー・マクレーの二人は東京タワーへ行け。着いたら外で待っているように△△

ああ!! もちろん、警察や武偵は10ブロック以上離れているように。』

ガチャ、ツー、ツー……

「逆探はどうだった？」

「ダメです。妨害がされていて分かりませんでした。」

「公安の玉串さんはその答えを聞き、机を蹴った。」

「……それにしても、どういうことだ？」

藤原さんは苛立たしそうにポケットをまさぐり、シガリ口とライターを取り出した。

「……藤原さん、どういう意味ですか？」

俺は藤原さんが放った言葉に疑問を持った。藤原さんはシガリ口を咥えて吸った後、ため息と一緒に紫煙を吐いた。

「ナカジマ・プラザの時の『東側系テロリストの残党』、空港の時の『南米麻薬組織の残党』、そして中国マフィア藍幫の3つが別々に動いていると思っていたんだ。クソツ、偽情報を掴まされてた!!」

ダン!!

藤原さんは拳を机に叩きつけた。その衝撃で灰皿から吸殻が飛び散る。藤原さんは再びシガリ口を咥え、紫煙を吸い込むと同時に落ちて着きを取り戻す。

「(英語) 今回の事件の解決に当たって不殺云々は言ってもらえません。二人にはこれを渡します。」

藤原さんはドロツとした目をして雰囲気を変え、隣に座る公安の玉串さんに合図をした。

「(英語) 本当は部外者に渡したくないんですけどね。……あくまでも、犯人やその一味だけです。民間人を撃ったら……どうなるか分かりますね。」

玉串さんが机の上に二枚の紐付きカードを出し、俺とジョニー・マクレーの前に一枚ずつ置いた。

「(英語) なんだ、これ？」

ジョニー・マクレーは不思議そうにそれを手に取り、不思議そうに観察している。しかし、俺はジョニー・マクレーと違い、冷汗をかいて固まった。

……殺人許可証だ?! は、初めて見るぞ!?

そのカードには、日本語で『殺人許可証』と書かれていた。

確かに、俺は第二中隊にいた頃は暗殺任務もあつたが……それらの件は国（自国・他国問わず）が揉み消していたため、『殺人許可証』を持つ必要が無かつたのだ。

……殺人許可証を部外者に渡す必要があるほどヤバい事件なのか!?

俺は震える手でそのカードの紐を首にかけた。

（英語）マクレイさん、銃はこちらをお使いください。では東京タワーへ向かいますよう。」

ジョニー・マクレイの前にベレッタを置き公安の玉串さんは席を立った。

「……ん？　そう言えば藤原さん。俺、白鷺千聖の護衛任務があるんですけど」

「え？　……ああ、そう言えばそうだった。こつちから連絡入れるし、違約金も払う。彼女は何処へ送ればいいんだい？」

「それじゃ、彼女の事務所をお願いします。本来だったら撮影の後、事務所でレッスンだったので。」

「分かった。こつちで送っておくよ。」

俺は白鷺がいる部屋にいったん戻つた。

「あら？　会議は終わったのかしら……!？」

白鷺は俺を見て軽口を叩こうとし……黙つた。彼女は恐怖と驚愕を混ぜ合わせたような表情をしていた。

「白鷺、大事件が起きた。悪いが事件が解決するまで護衛を降りさせ

てもらいたい。事務所へは軍か警察が手配してくれるはずだ。」

俺は『此れ幸い』とばかりに口を開き、そして部屋を出ようとした。

「ちや、ちゃんと!!帰ってくるのよね?!」

……何心配してやがる。お前は俺のことが嫌いだろうに

俺はため息をつき、背を向けながら片手をあげた。

「俺はイモータル・スピリット不死の英霊だ。チャチャツと片付けてくらあ」

……ああ、胸が痛い。

俺はやっぱりこの二つ名は嫌いだ。鳥肌が立つ。

さて、『閑話 極東戦役・極東編』において、無銭乗船によって東京まで来てしまった西住みほは東京を満喫していた。

彼女は有明の東京港に降りた後、最初に向かったのは東京タワー東京タワーだった。

西住みほは浜松町で電車から降り、東京タワーへの坂を上っていた。そして、東京タワーの特徴的な赤色が見えると、彼女の足は軽くなる。

坂道を登り切り、東京タワーへの入り口が見えてきた。

「……………え?」

少女は目を疑った。東京タワーの入り口付近には、異常に殺気だったスキンヘッドの白人と坊主頭の少年がいた。

少女は一瞬戸惑ったが、『東京にはいろんな人がいるんだなあ』と思い、無視して東京タワーへ入ろうと……

「こんにちは」

「こ、こんにちは」

少年と目が合った。少女は嫌な予感がした。

俺とジョニー・マクレーンはアクア・エデンから出る電車に乗り、本土に着くとポロ車で浜松町へ向かった。浜松町でポロ車を降り捨て、走って東京タワーへ向かう。

『(英語) 村田、マクレーンさん、健闘を祈る』

耳に付けたインカムからは藤原さんの激励の言葉が発せられた。俺とジョニー・マクレーンはその言葉にため息で答えた。

「(英語) クソツ、日本に付いてすぐこれか。……なんだあ、これは？ 日本にエッフェル塔でも作ったのか？」

「(英語) 東京タワーっていうんだ。」

俺達は適当に話しながら警戒する。

……サイモンは何故東京タワーの外へ行くように命じたんだ？

周りにはビルが多いから狙撃も監視も楽だろう。殺そうと思えばすぐに殺せるはずだ。

そんなことを考えていると、丘の方から『黒色の軍服風の制服を着た少女』が歩いてきた。その少女は一般人の歩き方と違い、特殊な訓練を受けた人間の様な歩き方をしていた。

……敵か？

「こんにちは」

「こんにちは」

俺は確認のため、少女に話しかけた。少女はビクツと体を震わせた後、普通に挨拶を返してきた。

……殺気は感じられない。多分普通の女子高生の可能性が高い。しかし今日は平日だ。なんでこんなところにも？

そんなことを考えていると、目の前にハイエースが止まった。ハイ

エースのドアが開くと、そこからいかにもそんな男たち8人が出てきた。

「へえ、このおっさんと坊主頭をやればいいんだな？」

「こんな雑魚をボコせば大金もらえるなんてなあ。」

「そこにいるお嬢ちゃんも可愛いじゃん。後で、マワしちまおうぜ!!」

ガタイはいいヤンキーの男たちは手にバットや小さなナイフを持ち、下品な笑い声をあげる。

……歩き方・姿勢・仕草から判断して、どう考えてもただの不良。話から察するに雇われしかも気が付いていないのようだ。……クソツ!!そっちの方が面倒臭い!!

俺は思わず舌打ちをした。

不良で、しかも雇われだとしても……奴らは民間人。

殺<sup>マルダー・ライセンス</sup>人許可証<sup>を</sup>貰ったとは言え、奴らを殺せば面倒になるのは確かだ。

「(英語) おっさん、殺<sup>や</sup>つたら面倒だつて分かるよな？」

「(英語) ああ。分かっている」

俺はおっさんに話しかけると同時に、黒色軍服(?)少女の腰に手をやり、抱き寄せた。

不良たちが睨んでくるが、そんな問題ない。

「Discretion is the better part

of valor!! (訳:逃げるが勝ちってな!!)」

「三十六計逃げるに如かずだああ!!」

俺は少女を小脇に抱え、おっさんと一緒に回れ右をし、敵に背を向けて逃げ出した。

「「「……えっ。」」」

ヤンキー達はその『華麗な逃げっぷり』に呆然としたが、すぐに我に返って追いかけ始めた。

「「「待てゴリアアア!!」」」」



でこの殺気って……

「(英語) た、タクシー!!」

「タクシー!!! こっちだ!!!」

俺とおっさんはヤンキー共から走って逃げている時、運よくタクシーを捕まえることができた。

「お客さん、行先は……」

「(英語) うるせえ!! 早く出せ!!」

「ああ、警視庁に。いや、警察庁まで!! 早く!!」

「は、ハヒ!!」

俺とジョニー・マクレーンは運転手に怒鳴りつけた。運転手も緊急事態だと理解したのだろう、一気に加速させた。

「……私、なんでこんなことになってるんだろ。そもそも大会でやっちゃって、熊本から東京に無銭乗船して、今度は事件に巻き込まれたんだあ」

俺が小脇に抱えていた少女は『この世に絶望した目』をしてボソボソ独り言を言っている。

……『命を救ったから感謝しろ』とは言わねえけど、あの場にいたら最悪『誘拐されて強姦』の可能性もあつたんだぞ？

俺はそう思いながら後ろを振り向くと……ヤンキー共が乗っていたハイエースが爆走して追って来ている。

ヤンキーの一人がハイエースから身を乗り出し、短機関銃サブマシンガンをタクシーに向けてきた。

「(英語) 伏せろ!!」

「伏せろ!!!」

俺は少女の頭を押さえつけながら伏せた。

「ぐぎゅ……」

少女から苦しそうな声が聞こえるが、そんなことを気にしている場合じゃない。

ダダダダ……バリン!!バリン!!

「な、なんで撃たれるんですか!?……く、くそおお!!なんて日だ!!!妻は出て行って!!家出した!!息子!!か!!娘!!になって戻ってきて!!」  
……タクシーの運転手、今日一日で何があったんだ?

俺は思わずタクシーの運転手を見た。中年のタクシーの運転手はギリギリまで姿勢を低くして運転をしているが、その運転はとても滑らかだ。きつとこの運転手はベテランなのだろう。

「(英語) クソツ!!だから坊主と一緒にいるのは嫌なんだ!!」

「(英語) こつちだつて一緒だよ!!なんだつてこんな目に!!」

ジョニー・マクレーンはベレッタで敵のハイエースを撃つが、全くダメージを与える様子が見られない。

「(英語) 防弾になってやがる!!」

「(英語) 流石にタイヤは違うだろ!」

俺は四次元倉庫から38式歩兵銃を取り出し、タイヤを狙って発砲するが……銃弾は無残にも弾かれた。

「(英語) グオ!」

ジョニー・マクレーンは後ろへ倒れた。左腕から血がドクドクと出ている。被弾したのだろう。

「(英語) おっさん!?俺に任せろ!!」

俺は38式をしまい、代わりに25ミリ機関銃を取り出した。

ガチャ!!ガチャツコン!!

「(英語) 喰らいやがれ!!」

ダンドンダンドンダン!!!

俺は何発が被弾しながら25ミリ機関銃を撃ち、ハイエースのタイヤを打ち抜いた。

ハイエースはスリップし始め、ガードレールにぶつかって運動エネルギーを減らし、そして電柱柱にぶつかって止まった。見た感じ、ハイエースの人間以外に犠牲者はいないようだ。

……クソツ!!普通こういう撃ち合いの時、主人公は無傷だろ!?

俺は四次元倉庫に25ミリ機関銃をしまい、弾が貫通した左の二の腕再び出血した頭部右わき腹に応急処置をしていく。

「……東京へ逃げるくらいなら熊本で引きこもっていた方がよかったなあ」

「……なんかあったのか？」

少女はずっとぼやいていた。普段だったら俺は無視するのだが……『華の高校生(?)』が死んだ魚の目でブツブツとぼやいていたらさすがに気になる。

俺は思わず聞くと、少女はピントの合わない瞳孔が開いた眼で俺を見てきた。その瞳で喋るのはやめて欲しい。

「大きな大会で大失敗して、ずっとそれで責められて逃げ出したんですけど……こんなのに巻き込まれるくらいなら熊本にいたほうがよかったですって思ってたんです。」

「……お前も大変だな」

……大きな大会で失敗してずっと責められるのか、結構陰湿なところだったんだな

俺は処置をしながらそう思った。

〔英語〕サツのところまで信号無視で突っ走れえ……〕

おっさんは痛そうに運転手に命令したが……運転手には英語は通じない様だった。

東京タワーの展望台、そこで双眼鏡片手にカーチェイスを眺めていた男がいた。その男は背が低く少し太り気味で、丸メガネをかけ、頭頂部だけ髪がなく、口ひげを生やした初老の人物だった。

「おお。うまくやっている。」

その初老の男は事件の始まりを見て、片方の口角を上げながら静かに笑った。

「劉先生、そろそろお時間です。」  
「そうか。」

初老の男は青年に声をかけられ、そのまま東京タワーの展望台から降りようとし……歩みを止めた。

「そう言えば、この作戦草案を書いたのは君か？名前は……」




「司馬 鵬です。劉先生」

「今回は没にしたが……君の草案は努力の跡がみられる。それがいい」

初老の男は片方の口角を持ち上げて微笑みながら言った。  
司馬 鵬という青年は無表情で頭を下げる。

「努力は良い。鉄砲玉だった俺が、努力に努力を重ね……龍頭閣下に認められ、やっとここまで上り詰めた。人は氏ではない。育ちであり……努力だ。」

「……は」

そして、初老の男は片方の口角を持ち上げつつ、から  
しかめっ面に顔を変えた。

「それを静幻……、龍頭閣下のご意向を無視し、勝手に戦を始めて……  
!!」

「……」

「……すまない。君は静幻に拾われたのだったな。」

初老の男は顔を戻し、司馬 鵬という青年の肩に手を置いた。

「ただこれだけは覚えておけ。『人間に優劣はない。努力するかどうか、したかどうか』だ。」

初老の男はそう言って、東京タワーのエレベーターに乗り込んだ。

俺とジョニー・マクレイは警察庁の職員に簡易的な処置をしてもらい、『黒色軍服風制服の少女』は調書を取られていた。

なんでも彼女は熊本の名門校に在籍しており、いじめ(?)が原因で家出をして東京まで流れ着いたらしい。

……あんな可愛い少女にそんな行動力があつたとは思わなかった。俺は数メートル先で調書を取っている少女をまじまじと見た。

〔英語〕誇大妄想の典型的な例ですな。対象よりも絶対的有利に立ちたいという強い願望を持ち、彼らの全て……行動・意志・感情さえも支配したいと思っている。」

手当てを始めて数分後、東京に住む『日本の心理学の権威』の教授が警察庁に到着した。その教授は犯人の今までの行動や言動を分析し、その結果を俺とジョニー・マクレイに説明してくれるのだが……専門用語ばかりで理解できなかつた。

〔英語〕二人の隠れた大ファンってわけだ」

藤原さんが揶揄いながら、俺とジョニー・マクレイにホチキス止めのコピー用紙の束を投げ渡した。

〔英語〕ファンなら可愛い女の子の方が良いですよ……いや、性格に難ありとか勘弁してほしいですね。」

俺は思わず『かなめ』『ワトソン』『ココ姉妹』を思い出した。そして溜息を吐きながらその紙束を拾い上げて読む。

〔英語〕花束でも送られるかな?……アスピリンをくれないか?」

ジョニー・マクレイは渡されたアスピリンと水を飲んだ後、紙束を読み始めた。

〔英語〕パンジーが好きだと伝えてやりましょう。さて、今回の犯人ですが……」

藤原さんは冗談を言った後、『疲れ切ったサラリーマン』のような雰

困気から『ドロツとした気配』に替え、説明を始めようとした。

「(英語)安心しなさい、犯人は同性愛者じゃない。残念な事にとても冷酷ですな。」

心理学者の教授は『落ち着け』とばかりにジヨニー・マクレーンと俺の肩に手を置いた。

……『冷酷なテロリスト』よりまだ『パンジー』の方がよかつ……いや、よくねえや。

英語のスラングで『pan sy』は女みたいな男・女々しい男・男性同性愛者を意味する。また、男らしくない・勇気がないなどの意味で男性を侮辱するときにも使われるのだ。

以上より、野郎に追われるのは勘弁だ。まだ冷酷なテロリストの方が良い。

「(英語)まあ、どっちだとしても……二人に興味を持っているのは確かです。紹介がまだでしたね。こちらは河井教授で……」

「(英語)心理学者……でしよう?」  
俺とジヨニー・マクレーンは藤原さんが紹介する前に、相手を言い当てた。

「(英語)おお!!ご名答!!さて、殺気も話していた通りだ。犯人は誇大妄想で……おそらく分裂的性格の傾向がある。すなわち……」

「(英語)先生、難しい話は結構。俺とどんな関係があるんだ?」  
心理学者の教授は面白そうに犯人の分析結果を離していた。しかし、専門用語が多すぎたためにジヨニー・マクレーンは話を止めさせ、単刀直入に聞いた。

「(英語)教授、俺も……日本語ならともかく、英語で心理学の専門用語を言われても分からないです。」

俺も申し訳なさそうに教授へ行つた。

「(英語)そうだな……簡単に言うと、理由は分からんが『二人を深く

恨んでおり、二人を踏み潰したい』と思っている。」

心理学の教授は人差し指をピンと立て、机の周りを歩きながら解説を始めた。

「そして、散々君達を弄もてあそび……最後に二人を殺すだろう。」

そして俺達の正面までくると歩くのを止め、心理学の教授は俺達の目を見て真剣に答えた。

「(英語)フアンの上にサイコかよ……。◯かなめ◯と若干キャラが被るし……」

俺は大きな溜息を吐きながらソファーにもたれ掛かり、天井を見ながらぼやいた。

「(英語)残念だが……この手合いは本名で名乗ることが多い。誰が復讐しているか知らせたいからだ。だから◯サイモン◯も本名か、それに近い何かだろう。」

その教授の言葉を聞き、藤原さんの目と口は三日月状に歪んだ。

「(英語)◯サイモン◯は基本男の名前だそうだ。よかつたじゃないか村田、これ以上ヒロインが増えないで……。ところで誰が本命なんない？最近は◯かなめちゃん◯以外にも◯エル・ワトス……」

「(英語)黙ってください。藤原さんも色々やっているそうじゃないですか。」

俺が睨みながら言い返し、藤原さんは『参った』とばかりに肩をすくめた。

「(英語)全く、なんてサイコだ」

「(英語)それも爆弾に詳しいサイコだ。」

ジョニーおっ・マクレさーがぼやいたと同時に、HS部隊第二中隊の田中曹長がそう言いながら敬礼して室内に入り、アタッシュケースを重そうに運ぶ。

「(英語)これを浅草の◯花◯しき◯で見つけた。」

田中さんは乱暴にアタッシュケースを机の上に置いた。藤原さんが文句を言うが……田中さんは何でもないようにアタッシュケースを開けた。中に入っていたのは◯赤◯で着色された液体◯と、◯透明◯な液体◯が入った2種類のケースがあった。

「(英語) 2006年にイギリスで爆破テロの未遂事件があったら？  
英語で言おうと……」

「(英語) 『ロンドン旅客機爆破テロ未遂事件』だな」  
ジョニー・マクレーが助け舟を出した。

「(英語) そう、『ロンドン旅客機爆破テロ未遂事件』で使われる予定  
だった『TATP』過酸化アセトンを使った爆薬だ。原料はアセトン・過酸化水素水・  
硫酸を混ぜればすぐ完成。薬局でも売ってるものばかりだ。」

田中さんはそう言って $\square\square$ 実験用の注射器 $\square\square$ と $\square\square$ ドライバー $\square\square$ を  
取り出した。

数秒後、田中さんはドライバーをいじり、そして注射器で $\square\square$ 透明な  
液体 $\square\square$ を取り出した。

「(英語) 簡単な構造だ。警察でも有名じゃないか？……片方だけなら  
何の問題もないただの液体だ。」

田中さんは注射器を押し、透明な液体を机の上に1滴ほど出した。  
そして近場に置いてあった紙束で思いつき叩いたが……何の反応  
もなかった。

「(英語) だが、混ぜ合わせれば……」

田中さんはポケットからゼムクリップを取り出し、端を曲げて針金  
状に戻した。その針金(?)の先端で $\square\square$ 赤い液体 $\square\square$ をほんの少し付  
着させた後、机の上に出した $\square\square$ 透明な液体 $\square\square$ も付着させる。

「(英語) 危ないぞ」

田中さんはそう言って部屋の隅に針金(?)を投げた。

ズドーン!!

轟音が響き渡り、部屋の隅は軽くえぐられていた。俺と  
ジョニー・マクレーは啞然とする。

「な、何をするんですか!?!」

藤原さんが声を裏返して怒鳴ったが……相変わらず田中さんは涼  
しげな顔をしている。

「(英語) 今のでわかったでしょう? 単純な原料だが、トリニトロトルエン TNTよりも



断然不安定だ。だからこそ素人には扱えない。」

田中さんはそう言ってそのかばんを片付け始めた。

「(英語)  $\square$ トラウズル値  $\square$ の……いや、トリニトロトルエン TNTの70〜80%ほどの威力なのにこの爆発だ。それがこのバックに入っている分全部が爆発すれば……どうなるかわかるはずだ」

田中さんはカバンを片付け、机の上にキツチリと置いてため息をついた。

「(英語)それに混ぜ合わせる時に熱を発生し、さらに爆発しやすくなる。そんな代物を秋葉原で、しかも二束三文で売っている部品で完全に混ざる機械を設計して運用できる奴はほとんどいない。」

「予想通りか……アセトンと過酸化水素水、硫酸が大量に盗まれていないか調べてくれ!!」

藤原さんは大声を上げ、隣の部屋の刑事たちに命令した。

さて、藤原さんは俺達に振り返り、さつき投げ渡した書類の説明を始めた。

「(英語)書類の1ページ目を見てください。」

俺とジヨニー・マクレーンおっさはその書類を見ると……そこには『ガタイがいい男』と『首に傷がある美女』の写真があった。

「(英語)男は『マシアス・タルゴ』、女は『カティア・タルゴ』。このハンガリー人の夫婦は以前  $\square$ 南米の麻薬組織  $\square$ で働いていましたが組織が壊滅したため、今はフリーのテロリスト、契約で働いています。今雇っているのは『ピーター・クリーク』という組織。特にこの『マシアス・タルゴ』は爆薬物の専門家です」

「(英語) 夫婦そろってテロリストかよ」

「(英語) ……まあ、そういう奴も居そうだよな。」

俺は  $\square$ アカ  $\square$ を叩くのが趣味の『戦闘狂の女性パイロット』を思い出した。そんな人間もいるんだ、夫婦でテロをやるのは不思議では

ない。

……そう言えば、ハンナは今何をやってるんだろ？

いや、多少なりともあいつの事を思い出したら厄介なことが起こりそうな気がする。目の前の問題に集中しよう。

『なんだ、私のことをそんなに思ってたのか？ならば  
Japanに向かうとするか。』

……さつさとお帰りください。

俺は思考を戻し、情報を整理し始めた。とりあえず、書類にある二人は『ジョン・F・ケネディ国際空港』で戦った麻薬組織の残党で、爆薬のプロらしい。

〔英語〕3ページ目を見てください。彼は旧東ドイツの陸軍大佐、特殊部隊の隊長で、今は『ピーター・クリーク』というアカのテロリスト集団の隊長をしています。彼のいた特殊部隊は『バルジ大作戦』で投入された部隊のようなもので、母国語の様に英語……」

〔英語〕ああ、映画を見た。」

藤原さんの説明をジョニー・マクレーンは鬱陶しそうに妨げた。

〔英語〕とりあえず英語に仏語、そして日本語が堪能です。そして彼の名前は……『サイモン・ピーター・グルーバー』。」

〔英語〕……そうか!!」

〔英語〕……何のことだ?」

ジョニー・マクレーンは何か重大なことを思い出したような驚愕の表情を浮かべるが……俺は何のことだかわからない。

〔英語〕『サイモン・ピーター・グルーバー』は二人が初めて協力したロサンゼルスL.Aの『ナカジマ・プラザ』の事件の首謀者、『ハンス・グルーバー』の兄だ。」

「!?!」

……ああ、思い出した。あんな事、忘れるわけがない。

俺は藤原さんの言葉で……随分と昔の記憶を掘り出した。

そう、『ハンス・グルーバー』俺が生まれて初めて☒人を殺した事件☒でジヨニー・マクレーと初めて共闘した事件の首謀者だ。その首謀者『ハンス・グルーバー』の死に際の際の表情は今でも鮮明に覚えているr……多少記憶が擦れていいるせいで脳内編集をされているかもしれないが、今でも覚えている。

……なるほど、そいつの兄貴ってわけか。

確かに、俺とジヨニー・マクレーを恨んでいそうだが……どこか腑に落ちない。

あくまでも勘ではあるが……この『復讐』という傘で何かを隠そうとしているのではないだろうか。

〔英語〕二人とも気が付いたようですね。その人物が今、残党共をまとめ上げて……」

☒サイモン☒から電話です!!」

「逆探始めろ!!」

藤原さんが命令を言ったのと同時に、俺とジヨニー・マクレーは大きなため息をついた。

〔英語〕☒サイモン☒か?」

電話機をスピーカーモードにし、藤原さんが☒苦虫を噛んだ☒ような表情で言った。この部屋には俺・ジヨニー・マクレー・藤原さん・心理学の教授・田中さんがいる。

『(英語) あの二人は生き延びたようだな。確かに、あのようなヤンキー共にやられるとは思ってもいないが……多少はがっかりする。ところで3匹の鳩は今どうしている?』

〔英語) 鳩だと?」

『(英語)僕の飼っていた3羽の鳩、ある日突然飛んでった。……白と黄色のオスと、黄色のメスがどうして逃げたのか、僕にも君にもわからない。』

「(英語)……ジョニー・マクレーさんと村田の事か?」

『(英語)それにもう一人、懐かしいパンツァージャケットを着た少女がいただろう?彼女と話させてくれないか?』

藤原さんは田中さんに視線で合図を送った。田中さんは頷き、静かに部屋を出た。

そして1分もしないうちに、田中さんは『黒色軍服風制服の少女：西住まほ』を抱えて部屋に入ってきた。

『やあ、君には悪いことをしたね。まさか私の計画に巻き込まれるとは……』

「計画がずさんすぎるんじゃないですか?こんな一般人が簡単に巻き込まれる計画を作って恥ずかしくありませんか?バカですか?」

西住みほは「死んだ魚の目」をしながら、無表情で言い切った。

……うわあ、完全にグレてる。

『い、いや……しかし、今日は平日のはずだ。お嬢さん、学校をサボるのはどうか?……』

「問題をずらさないでください、参謀気取りさん。」

ガチャ……!!!

サイモン「電話が切れてしまった。」

俺はヤレヤレと西住みほを見て……背筋が凍った。彼女からは一般人ではあり得ないほどの……歴戦の古参兵並みの殺気を放っていた。

……こ、こいつ!!一体何者なんだ!?

彼女は『黒森峰女学院』高等部の一年生、で『戦車道の副隊長』を務めていたらしい。

彼女は「東京タワーでのカーチェイスで『大きな大会で大失敗して、ずっとそれで責められた』と言っていた。一年生でレギュラーどころか副隊長だ、『ずっと責められていた』原因はその事への嫉妬も原因の一つであろう予想できる。しかし……ここまで殺気を出

せる人間を、使わないなんてありえないだろう。

「西住みほさん、国民の命がかかっている。苛立つ気持ちは分かるが、彼を怒らせないで欲しい。」

「……そうですか、すいませんでした。」

☒仕事モード☒の藤原さんは『ドロリとした目』で西住みほを捕らえ、警告した。しかし、西住みほは『死んだ魚の目』で藤原さんを睨みつけて反抗する。

……本当にこいつ、一般人なのかよ!?そこまで☒戦車道☒はヤバいのか!?……ヤバいか。

俺は依然知り合った☒戦車道☒の人間たちを思い出した。

『知波単学園の突撃癖を持つ生徒達』、『聖グロリアーナのダーズリンとゆかいな仲間達紅茶中毒達』、たった2校であるが、癖が強い変人奇人ばかりだった。ならば、『黒森峰女学院の戦車道』もこのようなヤバい奴らがいてもおかしくない。

以上の考察より……

……『黒森峰女学院』って、どんな殺伐とした学校なんだよ!?何、弱肉強食の世紀末な学園艦なの!?

イブキは大きな勘違いをした。

「(英語) 逆探は?。」

「逆探知、敵の妨害で特定できませんでした!!」

「(英語) ……妨害されてダメだったようです。」

ジョニーおっ・マクレイきがボソツというと、田中さんが訳して答えた。  
「再びかけてくれますかね?。」

俺は伸びをしながら☒心理学者の教授☒に尋ねた。

「ああ、来るよ。賭けたっていい」

☒心理学者の教授☒は笑顔を浮かべ、俺の質問に答えた。

プルルルル……

ちようどその時、再び電話が鳴った。藤原さんがスピーカーモードにして再び出た。

「(英語)もしもし、サイモンが？彼女の言葉には責任は持てない。君も分かるだろう？」

「(英語)全く不愉快だ。こんなことは二度とないようにしたまえ。」

「サイモンは『苛立ちを無理やり抑えた様な声』で再び話し出した。

『それで名前は？お嬢さん？』

「人に名前を尋ねる時は、自分からですよね？」

俺と藤原さんは大きなため息をついた。ジョニー・マクレーンも日本語は分からないが、西住みほの雰囲気と声色から何を言ったのか察したのだろう……頭を押さえ、ため息をついた。

『失礼。お嬢さんには多少叱ってから解放しようと思っていたが……気が変わった。(英語)お嬢さんにもゲームに参加してもらおう。』

「分かりました。札幌市街の公衆電話です!!」

「中国？香港!？」

「マカオ!?クソツ!!妨害されています!!」

「逆探専門の人たちが必死になってサイモンを探すが……どうもサイモンの方が上手だったようだ。」

「(英語)さて、電話会社とのお遊びは終わったかな？では、そろそろゲームを再開しよう」

「サイモンの言葉に、この部屋にいる人間全員(一人を除く)が凍り付いた。」

『(英語)Simon says……村田維吹、ジョニー・マクレーン、そしてお嬢さんの三人は新宿御苑管理事務所近くの公衆電話へ行け。15分後にそこへ電話をかける』

無論、警察・軍・武偵などを近くに寄越すな？電話に出られなければそっちの負け、ドカンだ。ルールは分かったかな？」

「(英語) ああ、わかったよ!! 子供遊びが好きなのサイコだつてことをな!!」

ジョニー・マクレーンが苛立たしそうに大声で発した。

……二日酔いでまだ頭が痛いんだろうな。

俺はなんとなく理解した。

「(英語) まあまあ、落ち着け……」

「(英語) まあそうだろう? 俺達に恨み辛みがあるんだろう? なら何でこんなことをする。」

「

俺は思わずため息交じりにサイモンへ抗議する。俺の言葉に続き、ジョニー・マクレーンも口が開く。

「(英語) 全く、何をやった? スリか、万引きか……覗きでもやったか? 男なら一対一で勝負しやがれ!! サシの勝負だ!!」

「(英語) まあまあ、ジョニー。まあ落ち着けて……。」

「(英語) 無関係な人間巻き込んで恥ずかしくねえのか? 軍人崩れ。」

俺もジョニー・マクレーンに続き、サイモンを挑発する。

「(英語) ……崩れになろうとも、誇りを捨てる気はなかった!! あの中国人が!!」

『……バキツ!!』

電話からくぐもった声と共に、何か壊れたような音がした。俺・ジョニー・マクレーン・藤原さんはその『早口でひどいドイツ訛りの小言』を聞き取ることができなかった。

『(英語) フー……フー……。とにかく15分後、新宿御苑管理事務所近くの公衆電話だ。ジョニー・マクレーン、村田維吹、そしてお嬢さんフロイラインを行かせる。ためらうようなら花や○きで拾ったカバンを思い出せ』

ガチャ!! ツー、ツー……

電話が切れてしまった。

「(英語) 教授、分かったことはありますか?」

藤原さんはドロツとした雰囲気のまま、心理学者の教授に質問する。

「(英語) 確実に分裂症の傾向がある。それにドイツ訛りの言葉をしゃべり、日本人ではないだろう。ただ……二人を確実に殺そうとしているが、他にも目的があるかもしれない。」

藤原さんはため息をついた後ポケットからシガリ口を出し、口にくわえて火をつけた。その吐いた紫煙が部屋に広がっていく。

……ん? 何時ものシガリ口の香りじゃない。上品で重厚な……

俺は藤原さんの持つシガリ口を見て気が付いた。今持っているシガリ口は~~□□~~いつもの物~~□□~~よりも長く、色が濃かった。

「(英語) 3人とも早く行ってください。時間が無い。」

藤原さんはそう言うと、今度は西住みほに顔を向けた。

「西住みほさん、犯人からあなたも行けとの命令だ。行ってもらいます。」

藤原さんは今まで以上にドロツとした雰囲気を出し、西住みほに命令した。

「……な、なんで私が巻き込まれなきゃいけないんですか?」

西住みほは一瞬怖気づいたようだが……すぐに我に戻り、藤原さんの目を見て反論した。

「君があんなに挑発したからだ。」

藤原さんはシガリ口を啜えながら、無表情で淡々と言っていく。

「あまりこういう手は使いたくないのだが……君の挑発によって捜査を邪魔されたのも事実。適当な建前たてまえで逮捕ができる。実家がそのことを知ったら悲しむだろう?」

藤原さんはそう言い切った後、美味そうに葉巻を吸い始めた。西住みほはその言葉を聞き、目をそらした。

「時間が無い。急いで行ってください。警察の方がそこまで送ってくれます。」



藤原さんがそう言うと、スーツ姿の人が部屋に入ってきた。

「急いでください。我々が送ります。」

そして、俺・ジヨニー・マクレ<sup>おっ</sup>・西住みほ・藤原さんは黒いセダ<sup>さ</sup>ンに乗せられ、新宿御苑へ向かわされた。

「そう言えば藤原さん。浜松町の近くにボロ車<sup>ビュート</sup>を路駐したんですけど……大丈夫ですよね」

「あく……うん。大丈夫じゃない？多分、きつと……」

イブキはまだ知らない。すでに『駐車違反』のステッカーが張られており、結局違反金を払うことになるなど……。

越しの再会……

「……なんでこんな目に。」

〔英語〕「この嬢ちゃんは何んて言ったんだ？」

〔英語〕『なんでこんな目に』だって。まるで俺達と一緒だな。」

新宿御苑へ向かう車の中、西住みほは真っ赤になった顔を手で押さえ、うずくま蹲っていた。

「あの時イライラして、頭が真っ白になって……だからあんなことを……」

「ああ……」

苛立ちとパニックのせい……警察庁での大惨事を起こしたそうだが、あの時出した殺気は今でも覚えている。少なくとも一般人が出せる殺気ではなかった。

〔英語〕「今度は？」

〔英語〕「パニックになってあんなことやったんだってよ」

〔英語〕「あんな殺気出しておいてそれはねえだろ？」

〔英語〕「……おっさんもやっぱりそう思う？」

俺は西住みほが英語をあまり理解できない事をいいことに、適当な事をしゃべりながら……『黒森峰女学院Ⅱ世紀末』と言う仮説を信じ始めていた。

こんな風に雑談をしていると、新宿御苑に付いた。時間は残り7分。俺達は車から降り、歩いて公衆電話へ向かった。

「何してるんだろ。無銭乗船で東京まで来て……今度は事件に巻き込まれて……」

〔英語〕「ツイてないのは俺も同じだ。俺は久しぶりの休暇を楽しんでいたんだ。ホテルで飲んで、カジノで遊んで……」

ジョニー・マクレーンおっも日本語は分からないが、西住みほが言った言葉

をなんとなく理解したのだろう。宥めつつ、同時にボヤいた。

「俺だって……なんで朝っぱらからあんな爆破に巻き込まれなきゃいけないんだよ。俺はただ護衛の任務をしていただけで……あれ？」

……俺、ただの護衛だよな？なんで毎日最低一回は襲撃に会ったんだろう？

考えを止めよう。これ以上考えたら嫌な事を自覚しそうな気がする。

俺はため息を吐きながら、今回巻き込まれた少女・西住みほを見た。彼女の顔を見て、俺達はまだ自己紹介をしていないことを思い出した。

「……そう言えば自己紹介がまだだったな。俺は村田維吹。海軍所属で今は武偵高に出自中だ。で、こっちはジョニー・マクレー。ニューヨーク市警の警部。ついでに日本語はしゃべれないし、理解もない。」に、西住みほです。よろしくお願いします。」

西住さんは慌てて頭を下げた。ジョニー・マクレーはその様子を怪訝そうに見つめる。

「(英語) 何やってるんだ？」

「(英語) 自己紹介だよ。おっさんの事も紹介しておいた。ツイてないへボ刑事だって」

「(英語) 少なくとも坊主よりはツイてるに決まってるなあ。」

「ま、マクレーさん!!」

そんな風に俺とジョニー・マクレーが適当に雑談していると……

西住さんが大きな声でジョニー・マクレーの名前を呼んだ。

「あ、あいあむ『西住みほ』。ないすとうみいちゅー」

「(英語) ジョニー・マクレーだ。よろしく」

西住さんは頭を下げ、右手を差し出しながら拙い英語でジョニー・マクレーに自己紹介をした。ジョニー・マクレーは一瞬驚いたようだが、すぐに彼女の手を取り、握手をした。

指定の時間まで残り三分。俺達は新宿御苑管理事務所近くの公衆電話を見つけた。見つけたのだが……一つ問題が発生した。上品そうなお婆ちゃんが公衆電話を使って長話をしていたのだ。お婆ちゃんを無理やりどかさないと電話に出れないだろう。

「すいません、お婆ちゃん。武偵の者ですが……電話がかかってくるんです。代わっていただけませんか？」

「武偵さん……う？もう少し待ってもらってもいいかしら？」

「え？……はい、スイマセン」

俺はその平穩で優しそうなお婆ちゃんの雰囲気にかけてしまった。

ガチャ!!

その時、目のハイライトを消した西住さんが無理やり電話を切った。

「あら？電話が……」

「(英語) すいません!!警察の者です!!電話を貸してくれ!!」

「ひいひいひい!!」

そして、おっジョニー・さマクレーンが大声でしゃべり、無理やり受話器を奪った。その行為に恐怖を感じたのだろう。上品そうなお婆ちゃんほうほうは這々の体で逃げだす。

……うわあ、罪悪感で心が痛い。

外人の大男が訳の分からない大声を上げ、受話器を奪い取ったのだ。恐怖を感じない方がおかしいだろう。

俺は思わずため息を吐いた。

プルルル……

そして幸か不幸か、俺が罪悪感にさいなまれてすぐに電話が鳴り始めた。

俺はおっジョニー・さマクレーンに目で合図し、おっジョニー・さマクレーンが受話器を上げた。

『(英語) 白豚黒豚は仲がいい。ハツカネズミにドブネズミ、どうして仲が悪いのか?』

「(英語) 下らねえ。どうだっがいい。」

ジョニー・マクレーンがサイモンと話を始めたのだが……一つ問題が起こった。

「(英語) おっさん!! 聞こえない、聞こえないから!!」

「あ、あの……」

ジョニー・マクレーンの身長は180センチを超えている。しかし、俺は170センチ未満で、西住さんに至っては160センチを下回っている。

そんな身長差でおっさんが普通に受話器を取ると……俺達が聞こえない。

「(英語) うっせえなあ坊主。これだから体も小さいし、心も小さいんだよ。」

「(英語) うるせえ。さつさと聞かせるって言うてんだよ。」

「あ、あの……マクレーンさん、背を低くしてもらっても……」

俺はともかく華の女子高生の言葉聞き(通じてはいないが)ジョニー・マクレーンは渋々しゃがんだ。

俺は公衆電話の音量を最大まで上げた後、西住さんと一緒に受話器へ耳を寄せる。

……中年の親父、青年、女子高生が一つの受話器に耳を寄せる光景とか、はた目から見たら気持ち悪いよなあ。

俺はそんな事を考えてしまい、思わずため息をついた。

『(英語) 話し中だったな。どこへかけていた?』

「(英語) 豚さんのお家だ!!」

サイモンとジョニー・マクレーンの会話を聞き、西住さんは困った様な顔をした。

「なんて言ったんだ……」

「あく……『電話をかけたけた時、話し中になっていたのは何故だ』だって。」

「あ、ありがとうございます。」

俺はサイモンの言葉を意識して西住さんに伝える。

『(英語) 真面目に話してほしいものだな。』

「(英語) 知るか!!今着いたところなんだ!!」

『(英語)ババアが電話中だったから追い払ったところだ』と云えばいいんだ!!』

「……!?!」

「えつと……今のは……」

……サイモンは俺達のことをずっと見ていたのか!?

俺とジョニー・マクレーンは周りを見るが……俺達を監視するような人間はいない。ビルが近くにいくつもあるため、そこから監視しているのだろうか。

……いや、もしかしてこの監視カメラか?

ダンダンダン!!

俺は監視カメラを見つけた。俺は14年式を握り、その監視カメラを破壊した。隣で西住さんがドン引きしているのだが……無視する。

「敵が俺達を監視していたんだ。」

「……え!?!」

サイモンが監視していたことを西住さんに伝えると、彼女は驚き、そして怯え始めた。

……藤原さんとタメ張っていた西住さんは何処に行ったんだよ。

俺は思わずため息をついた。

『(英語) おいおい村田君。いきなり発砲するなんて酷いじゃないか。』

「(英語) うるせえ!!覗き魔が!!!」

そして、俺はサイモンへ今までのストレスをぶつけるように言い放った。

『(英語) まあいい、今の時間は9時45分だ。1分後、品川駅の1番線に山手線の列車が入ってくる。その列車に爆弾を仕掛けた。』

……や、山手線だと!?!

東京をグルッと一周する有名な路線だ。もちろん利用者は断然多い。その路線の列車に爆弾を仕掛けられてみる。どれだけ損害が出る!?!

『(英語) ☒ Simon says……10時9分までに、要はその爆弾を仕掛けた列車が鶯谷駅うぐいすだにに到着するまでに、鶯谷駅2番線のホームの公衆電話へ行け。☒』

もちろん警察の車を使つてはいけないし、列車の運行を止めさせてもいけない。そんなことをすれば電車を爆破する。ああ、もちろん乗客を避難させてもいけない。では、約25分後にまた会おう。』

ガチャツ!! ツー、ツー……

……新宿御苑から鶯谷駅うぐいすだにまで25分程度で行けだど!? 確かにルート検索だと20〜30分ぐらいで行けると出るが……実際は渋滞や信号のせいで優に40分を超えるぞ!!

「む、村田さん!! なんて言つたんだ……」

「今、品川駅から出た山手線に爆弾を仕掛けられた!! 鶯谷うぐいすだにに着いたら爆発だそうだ!!」

『なんだつて!?!』

俺は西住さんと藤原さん(藤原さんは無線)で事件のことを伝えた。

「(英語) おっさん!! とりあえず車だ!!」

「(英語) 分かつてる!!」

俺とジョニー・マクレーは新宿御苑から走つて出て、車道わどに躍り出た。

「武偵だ!! 止まれ!!!」

「(英語) 止まれえええ!!」

車道に出た俺達にト○タ：センチユリーが突っ込んでくる。俺とジョニー・マクレーはその車を、体を張つて止めようとし……

バキツ!!

「ゴフツ……」

撥ね飛ばされ、そして地面にたたきつけられた。

「(英語) ぐおおおお……嘘だろ?……おい」

「もうヤダ……なんて曰だよ……」

辛うじて軽傷で済んだ俺とジョニー・マクレーはヨロヨロと立ち上がり、轆いたセンチュリーへ近づいていく。

すると、黒塗りの高級車からいかにも☒ヤ○ザ☒な男たちが二人出てきた。

……あれ? と言えばこの二人、何処かで見たことがあるような?

「おい、テメエ!! なに車道に出てくるんだこらあ!?!」

「車が凹んでいるじゃねえか、ボケエ!!」

○クザ(?)の二人はそう言って怒鳴り散らしながら俺とジョニー・マクレーに近づいてくる。

「what!?! (訳: 何だって!?!)」

「武偵だ!! 緊急事態だから車を借ります!!」

おっさんはヤク○(?)の言っていることが理解できないらしい。俺はため息をついた後、要件を伝え、車を借りようとヤ○ザ(?)を退けようとする……

「何してんだゴラア!!」

「修理はどうするんだ、ゴラア!!」

……話にならなねえ

バキ!!ベキ!!

俺とジョニー・マクレーは○クザ(?)二人の無防備な顔を殴った。二人はそのまま崩れ落ちる。

「Do you think I understand a word you're saying!?! (訳: 言葉が通じると思うか!?!)」  
「うるせえ!! さっさと貸しやがれ!!」

俺とジョニー・マクレーは黒塗りの高級車に急いで近づき、中にいた人たちを無理やり外へ出した。



「……………ん？あなたは鏡高さん」

「え、ええ……………」

黒塗りの高級車は『俺のいちばん長い日 With BanG Dr eam! 高級中華食い放題（手土産付き）……………』で高級中華をご馳走してもらった鏡高組組長：鏡高菊代さんのものだったらしい。

……………そうか、だからあのヤク〇は見覚えがあるなと思ったのか。

「とりあえず車借りますんで、さっさと降りてください。いや、降りろ!!」

「（英語）警察だ!!緊急事態で車を借りる!!」

「は、はい!!」

鏡高さんは切羽詰った俺たちを見て驚き、着物が着崩れるのも気にせずに急いで車から降りた。

俺とジョニー・マクレーンは全員が降りたことを確認し、車を発進させようとし……………あわてて止めた。

「（英語）何ポーつとしてんだ!!」

「西住さん!!早く乗って!!」

「は、はい!!」

西住さんは歩道の柵を乗り越え、走って車に乗り込もうとして……………

ビタン!!

すっ転び、顔面から地面にぶつかかった。

「……………」

すると西住さんはユラリと立ち上がり、幽鬼が如く黒塗りの高級車に乗り込んだ。

「（英語）……………お、おい。大丈夫か？」

「は、鼻血出てるよ？」

俺とジョニー・マクレーンが後ろを振り向き、西住さんを見た。おれはティッシュを出して渡そうとするが……………西住さんは一向に受け取らない。

「フッフ……………」

西住さんは鼻血が滴っているのにも関わらず、下を向き、不気味な

笑い声を上げている。彼女からは藤原さんとタメを張った時のような『真っ黒いオーラ』が見える。

「(こ、怖え〜……)」

「どうしたんですか？行かないんですか？」

「Yes ma'am!!」

「は、はい!!」

ジョニー・マクレーンはアクセルを踏み込み、黒塗りの高級車を勢いよく発進させた。

「おい、お前ら。さっさと代わりの車を手配しろ。」

イブキ達に車を貸し出した後、鏡高菊代が幹部達に高圧的に命令した。その時だった。

バチバチバチ!!

「ツーン!?!」

「もう我慢ならねえ。計画とは違うがいいだろ？」

ホスト風の姿の幹部がポケットからスタンガンを取り出し、鏡高菊代に電気ショックを与えた。

「ああ、多少計画がずれるがいいでしょう。中国の先生方も分かってくれるはずですし。」

東大卒の幹部はシガリ口に火をつけ、倒れこんだ鏡高菊代を乱暴に拾い上げた。

「劉先生、こちらです。」

「ああ、ありがとう。」

劉 翔武は司馬 鵬の案内のもと、黒の高級バンに乗り込んだ。

「劉先生、本当にこんなのでよかったですか？」

「セダンだと足元が狭い。老人にはこの車の方がゆったりと出来ていい。」

劉 翔武は席を倒し、リラックスした状態になった。そして、片方の口角を持ち上げる笑みを消し、司馬 鵬へ顔を向けた。

「君、まだ案を没にしたのを気にかけてるのか。」

「…?!いい、いえ」

その言葉で司馬 鵬は劉 翔武を睨んでいた事に気がつき、慌てて視線を外した。

「まあいい。君の案は『とても努力し、とても意欲的な案』だった。

『村田 イブキを海上に追いやり、その船を撃沈させる。その間に

YAKUZAZAと猴・静幻で遠山キンジを潰す。そして、アレをやる。』

そこまでの過程も細かくあり、努力の跡があつてとても良かった。だが…それではダメだ。」

劉 翔武は暗い…とても暗い笑みを浮かべた。もちろん、口角は片方しか持ち上がっていない。

「村田 イブキを『天下無双』など…」

「君は遠山キンジを評価しているようだが…俺は村田イブキの方が脅威だと思う。…つと、話がそれた。」

劉 翔武はそう言つて、『わかば(タバコ)』を取り出し口にくわえた。司馬 鵬は間髪入れず、ジツポでタバコに火をつけた。

「フ……。安いわりにはまあまあか。…まず、着眼点がいい。シャーロックがやった『村田イブキを隔離し、その間に目的を遂行する』と言うのは一定の成果があった。それを踏襲するのは良い。」

劉 翔武はポケットから缶コーヒーを取り出した。

「だが…君のでは警察は動かない。それが理由だ。アレが成功する可能性がとても低い。村田イブキ・遠山キンジの抹殺はあくまで

も副目標だ」

劉 翔武はタバコを半分ぐらい吸った後、灰皿にすっていたタバコを捨て、缶コーヒーを開けた。

「それに村田イブキの事だ。どうせ生き残るだろう。しかも、予想外なことにジヨニー・マクレーまでいた。」

劉 翔武は缶コーヒーを啜った。そのとき、劉 翔武の携帯電話が鳴った。

「ハイ……なに!?もう鏡高菊代を捕縛しただど!?……ああ、良い。分かった。」

劉 翔武は苛立たし気にメガネを外し、タバコを咥え、マッチを取り出して自分で火をつけた。

「……声帯模写が上手いものがいたな。そいつで鏡高菊代の真似をさせろ!!」

メガネをかけ、缶コーヒーを飲み干してゴミ箱に投げ捨てた劉 翔武はタバコを思いっきり深く吸った。

「クソツ!!だからあの頭でつかち共は勉強ができる頭が回るは違う!!」

司馬 鵬は劉 翔武にバレないようにため息をついたが……劉 翔武にはお見通しだった。

……よし、司馬 鵬はまだ『真の目的』に気が付いていないな。劉 翔武は慌てる演技をしながら、心の中で笑った。

「(英語)で、どうするんだ坊主!!」

「(英語)とりあえず真つすぐ進んでくれ!!……藤原さん!!」

俺はジヨニー・マクレーにそう指示すると、無線のスイッチを入れて藤原さんへ連絡する。

『どうした村田。いま道路の規制を始めようと……』

「東京駅でその列車に乗ります!!なので近衛師団に手回しをお願いします

ます!!」

『おい、まさか……』

「千代田区を一気に横断します!!」

『分かった。手回しはするが、携帯で近衛師団の電話番号にかけてくれ。無線でつなげるのは難しい。』

「分かりました!!……つてうわああああ!!」

ジョニー・マクレーンが赤信号を突っ込み、トラックの車列の間をすり抜けた。車の右側がトラックと擦り、ギャリギャリと音がする。

「(英語) なんて運転だよおっさん!!」

「(英語) 坊主はこれより早く運転できるのか!？」

そんな軽口をたたき合いながら、俺は急いで携帯を出して電話をかけた。

プルルルル……ガチャ

『はい、近衛しd……』

「HS第二中隊の村田大尉です!!緊急事態なので師団長につながてもらえませんか!？」

『(バ)用件は?』

「今起こっているテロについてです!!早く!!」

『では少々お待ちください』

……ああ、クソ!!これだからお役所仕事は!!

電話を待っている間、俺の考えた作戦を話そう。

俺は『俺達は鷺谷うぐいすだによりも前の駅でその列車に乗り、爆弾を搜索しよう』と考えた。

例えば鷺谷うぐいすだに駅の公衆電話に間に合ったとしても、爆弾を外さなければいつでも××サイモン××が爆発させることができる。なので、いち早く爆弾を取り除くことが必要となる。また、鷺谷うぐいすだに駅に着く前に爆弾を解除してしまえば向こうは爆発をさせることはできない。

それに加え、××サイモン××は『三人で』とは言っていないかった。最悪一人でもいいかもしれない。

しかし、これを実行するに一つ問題が発生する。人が多い千代田区を横断しなければならぬのだ。なので時間短縮のために……千代田区の、そして東京の中心で、人混みが最も少ない場所、旧江戸城を横断しようというわけだ。

旧江戸城を横断しないで行くことも確かに可能だが……時間ギリギリになるため、どうも信用できない。

……ああ、クソ!!な、何て畏れ多い。

俺は頭を抱え、他の案を出そうと必死に考えるが……これ以上の案が浮かばない。

……山手線の列車の全長は約200メートル超。それを二人で、しかも人混みの中を短時間で爆弾を探すなんて、大分きついぞ!!

『もしもし、聞こえるかね? 師団長の林 藤十郎だ。』

保留中のメロディーが消え、意外にも澄んだ声が携帯から聞こえた。

「林師団長!! 単刀直入に言います!! 半蔵門から坂下門までの通行許可をください!!」

『……………許可できない。』

「何ですか!?! 今日起こったテロの件は知っているでしょう!?!」

『だからだ。禁関守護のため、何人たりとも入れることはできない。』

『首都高速都心環状線や代官町通りではダメか?』

「あそこは常に混んでいるでしょう!?! あと3分で半蔵門に付くんですよ!?!」

あの近衛師団でも、たった数分で首都高速都心環状線や代官町通りを交通整理できるとは思えない。

……だけど、向こうの気持ちも分かるからなあ。

俺はため息をついた。

『しかし、前例が……ちよつと待て。おい、これは本当か!?!』

電話からくぐもった音がし、俺は聞き取ることができない。10秒



「(英語) あ、危ないだ r……!!?」

「ダァン!! カキン!!」

「ジョニー・マクレーンが窓から乗り出して文句を言った瞬間……車の後方から銃声の音と、車体が何かを弾いた音がした。」

「……え、嘘だろ!? もしかして……」

「俺とジョニー・マクレーンがゆっくりと後ろを向くと……ハイラックスの荷台に重機関銃を取り付けたテクニカルが数台、猛スピードで向かってくる。」

「(英語) 坊主!!」

「その赤メツシユの子、早く乗って!!」

「……え? は? え?」

「ダダダダダダ!!!」

「追手のテクニカルは弾薬を湯水の如く撃ちまくっている。このままでは混乱している黒髪赤メツシユ少女に弾丸が当たってしまうだろう。」

「西住さん、無理やりでいいから乗せて!!」

「え!? あ、はい!!」

「……!? ツー!?」

「西住さんは彼女の上着を掴み、グイッと車に乗せた。」

「(英語) 行くぞ!!」

「ジョニー・マクレーン黒髪赤メツシユ少女を收容したのを確認すると、センチュリーを急発進させた。」

「(英語) 坊主!! 真つすぐでいいのか!?!」

「(英語) ああ、真つすぐだ!! 真つすぐ行けば日本式の門があるからそこをくぐれ!!! そうすれば先導車か何かあるはずだ!!」

「俺はそう言ってトヨタ：センチュリーの窓から身乗り出した。後ろには5台のトヨタ：ハイラックスが見える。」



……これが本当の☒T o o t a W a r ☒ってか!?

俺は14年式を一番先頭のハイラックスに向けて発砲し始めた。しかし、確実に命中しているのだが、効いている様子が見えない。

……クソ!!14年式じゃ威力不足だ!!当たっても当たっても全く効かねえ!!

俺は弾切れの14年式の弾倉を交換する間に、ワルサーP38出して撃ちまくった。しかし、それでもハイラックスは何ともないように追いかけてくる。

〔英語〕坊主!!何やってんだ!?

〔英語〕ト○タの堅実な設計を実感してるんだ!!

……クソツ!!なんて頑丈さだ!!

ワルサーも撃ちきり、再び14年式を発砲し始め……弾倉が空になるギリギリでハイラックスの1台が火を吹き、敵の車列から離れ始めた。

……拳銃だと効率が悪すぎる!!

俺は助手席から、西住さん・涙目の☒黒髪赤メツシユ少女☒のいる後部座席に移動した。俺は西住さんともう一人の少女の間に陣取り、そして25ミリ機関銃を取り出した。

「二人とも!!伏せて、耳を塞げ!!」

西住さんは慣れているのだろうか、自然に耳を塞ぎ、☒黒髪赤メツシユ少女☒は慌てて耳を塞いだ。

「喰いやがれ!!」

ダアンダアンダアンダアン!!!

25ミリ機関銃の弾丸はセンチリーのリヤガラスをぶち抜き、敵のハイラックスへ向かう。

25ミリ機関銃は敵のハイラックスを1台ずつ、確実に破壊していくのだが……ハイラックスの設計陣は優秀だったのだろう。下手な軍用車よりも多くの弾丸を撃たないと破壊できない。

……チクシヨウ!!面倒な!!

銃を持つ手に、思わず力を入れた。

あたしは華道の集会を終え、お父さんと別れて家に帰る途中だった。青信号を渡っていた時、黒い車が突っ込んできたのまでは覚えていた。その後……何故か分からないが車に乗せられていた。

「……………え？誘拐!？」

「ち、違います。……………って伏せて!!」

茶髪のショートカットの女の子があたしを押し倒した。

「え!?!ちよつとなn……………!?!」

ダダダ!!バリンバリン

映画でしか聞いたことがない銃声と窓ガラスが割れる音が聞こえ、そして前部座席が穴だらけになっていく。

「これに巻き込まれそうになったんです!!」

☒茶髪のショートカットの女の子☒の言葉にあたしは背筋が凍った。

「(英語) 坊主!!真つすぐでいいのか!？」

「(英語) ああ、真つすぐだ!!真つすぐ行けば日本式の門があるからそこをくぐれ!!!そうすれば先導車か何かあるはずだ!!」

運転席と助手席でよくわからない会話が聞こえる(英語か…………?)。会話が終わると助手席に座っていた人が窓から身を乗り出し、拳銃を撃ち始めた。

……………え?あの人!?

あの人はこの前、私を強盗から救ってくれた人だ。彼は頭から血を流し、服を血で汚しながら反撃している。

……………あの会議の時、『パスパレ』側にいたから、『パスパレ』のマナージャーか何かと思つてた。

「(英語) 坊主!!何やってんだ!!」

「(英語) トヨ○の堅実な設計を実感してるんだ!!」

すると、運転手の顔がちらつと見えた。スキンヘッドの白人の男だが……不幸そうな、そしてタフそうな顔つきだ。

……あれ?あの顔って

あたしは幼稚園の頃、ニュースで ☒新巻のお兄さん☒と一緒に移っていた白人男性』を思い出した。

ズドン!!

何かの爆発音が聞こえたとともに、助手席で拳銃を撃っていた青年が後部座席に無理やり移動した。彼はあたしと ☒茶髪のシヨートカツトの女の子☒の間に陣取り、どこから出したのか、とても大きな銃を取り出した。

「え……?」

彼の顔が近くで見えるとともに、幼稚園の頃に『新巻のお兄さん』に助けてもらった記憶がよみがえる。

『喰らいやがれ!!』

記憶の『新巻のお兄さん』と彼が重なった。多少成長と共に顔が変わっているが、根幹は変わっていない。

☒新巻のお兄さん☒……?」

彼は聞こえていないのか、ただ銃を撃っていた。

やつと合計4両を破壊し、弾倉を変えながら最後の1両に25ミリ機関銃を向ける。

「(英語) あの門で良いのか!」

ジヨニー・マクレーの怒鳴り声で、もう半蔵門の手前に来ていることを理解した。

……クソツ!!半蔵門に入る前にはあの車を処理しないと!?だが、間に合うか!?

俺は平賀さん特製・超徹甲弾を25ミリ機関銃に装填しようした時だった。

バシユ!!……ドカーン!!!

最後の敵車輛がいきなり爆発した。それと同時に……

「ヒヤッハー!!!」

「皆殺しだあああ!!!」

「キエエエエ!!!」

制服がキツチリと整えられた歩兵たちがテクニカルの残骸に集まり始めた。

……こ、近衛師団!?

その時、『極東戦役・極東編 場所考えろよ……』で俺を事情聴取した中尉が敬礼した後、抜刀して突撃する。

それを見送ると同時に、俺達の乗るセンチューリーは半蔵門を通過した。

……な、何とかなかったか。

俺は後部座席に倒れこんだ。肩の荷が下りたような気がした。

半蔵門を過ぎ、装輪装甲車で先導してもらっていた時だった。

新巻のお兄さんですか?」

巻き込んでしまった黒髪赤メツシユの少女が俺の上着の裾<sup>すそ</sup>を引き、尋ねてきた。しかし……『新巻のお兄さん』と言う人間は全く知らない。

「いや……俺は村田で新巻ではないんですけど……。ああ、村田維吹です。巻き込んでしまってすいません。」

俺はそう言っって頭を下げながら新巻をつく人物を思い出してみる。

……新巻か。そう言えば武偵高の食堂のおばちゃんの一人が

「新巻」だったような。

「えっと……10年前のクリスマスの前の時、郵便局で強盗があったのを覚えていますか？」

「10年前？」

「……10年前のクリスマスはおっさんと一緒に『ナカジマ・プラザ』でテロと戦ったのを覚えている。それよりも前で、『郵便局で強盗』だと……あ、あれか？」

俺は買い出しを頼まれ、その帰りに郵便局で強盗に会ったことを思い出した。

俺は「黒髪赤メツシユの少女」の顔をマジマジと見る。俺がズワイガニと「新巻」で強盗をボコした時、人質になって泣いていた『黒髪ショートカットの女の子』の面影が「黒髪赤メツシユの少女」には見える。

「君の名前は？」

「美竹蘭です。」

「美竹さんは……あの時、人質だったりした？」

「やっぱり……」

10年越しに少年と少女が出会った時、何かが起こる……

キキー!!

「グベツ!？」

「ジョニー・マクレーンがいきなりハンドルを切ったため、俺はドアに叩きつけられた。顔面からぶつかつたため、鼻血が出る。それと同時に、東京駅の特徴的な赤レンガの駅舎が見えてきた。」

「(英語) あれが東京駅か!？」

「(英語) そうだよ、クソツタレ!!」

「だ、大丈夫ですか!？」

俺は西住さんからティッシュを受け取り、鼻に詰めた。

Die Hard 3 in Tokyo 爆風は  
避けられない……

『村田!!ちようど僕も東京駅に着いた!!』

無線から藤原さんの声が聞こえてきた。

『鶯谷までは消防車で僕たちが先導する!!目的の車両は4番線の9時59分発の列車だ!!』

「了解です!!」

キキーツ!!

車が急停止し、東京駅に着いた。東京駅の目の前には消防車が多数止まっている。☒サイモン☒から警察の車は使つてはいけなと言われたため、消防車で先導するのだろう。

〔英語〕ハハハツ!!『新宿御苑』から『東京駅』まで11分、ダントツの新記録だぜ!!」

俺はジョニー・マクレ<sup>おっさ</sup>の言葉で時計を見た。今の時間は9時56分。59分発の列車に間に合うはずだ。

俺はそう思いながらセンチリーから出ようとした時、鶯谷駅での電話の事を思い出した。

……あ、爆弾を外す事だけ考えてて、電話の件を忘れてた。

俺は思わず頭を抱え……西住さんが戦車道をやっている事を思い出した。戦車道をやっているなら、車の運転もできるかもしれない。

「西住さん、『戦車道やってる』って言ってたよな!」

「……え!?あ、はい。」

俺は怒鳴りつけるように西住さんに聞くと、彼女は慌てだした。

「車の運転できる!」

「えっと、う、運転ですよね。あ、あの……」

「出来るのか!?出来ないのか!」

「で、できます!!」

西住さんは覚悟を決めたのか、キツと俺の目を見ていった。

「この車を運転して鶯谷駅の2番ホームにある公衆電話まで向かって

電話に出てくれ!!~~△~~サイモン~~△~~は『三人で』とは言っていなかったから大丈夫なはずだ!!」

俺はそう言つて、センチユリーから降り、ドアを閉めた。すると、慌てて西住さんはドアを開けて外に出た。

「な、なにをする気ですか!？」

「列車に乗つて爆弾を外す!!」

「死ぬ気ですか!？」

「分業だ!!どっちか失敗してもカバーし合える!!とにかく西住さんは鶯谷の公衆電話まで行け!!」

「りよ、両方失敗したら……」

西住さんが地面を向いた。きつと、戦車道大会での失敗を思い出したのだろう。

「大丈夫だ!!死んでたまるかよ!!いいから西住さんは早く鶯谷へ!!消防車が先導する!!2番線だから!!」

「(英語) 坊主!!何やってるんだ!!」

「(英語) ああ、今行く!!」

「……やっぱり熊本にいたほうがよかつたなあ。」

俺は~~△~~ジョニー~~△~~・マクレ~~△~~ーと一緒<sup>おっ</sup>に山手線へ走り出し、西住さんは~~△~~座~~△~~つた眼~~△~~をして車を発進させた。

「……ああ」

西住みほは車を出発させた後~~△~~黒髪赤メツシユの少女~~△~~を見つけた。

「え?あの……爆弾つて?」

「ア、アハハハ……」

西住みほは答えに詰まった。



俺達は東京駅の改札を飛び越え、エスカレーターを駆け上って4番線のホームへ向かった。

4番線のホームに足をつけた時、山手線の列車のドアが閉まるところだった。

「ウソだろ!?!」

「(英語) クソツ!!」

ホームの黄色い線を踏んだと同時に列車の扉とホームドアが完全に締まり、発車し始めた。

……クソツ!!やるしかねえ!!

「うわあああ!!」

「(英語) 最悪だ!!」

俺とジョニー・マクレーンはホームドアを足場にし、何とか最後尾の列車の屋根に飛び乗った。

「(英語) おっさん!!さっさと行ってくれ!!」

「(英語) 分かってる!!」

おっさんは車掌席の窓を蹴破り、無理やり車内に入った。俺も後に続いて車内へ入る。

「イツテ!?!」

車内にはいる時に割れたガラスを引っかけ、左脇腹を切ってしまった。

「あ、アンタら何もんだ!?!どうしてここに!?!」

「(英語) 警察だ!!爆弾を探させてもらう!!」

30代はいつてない若い車掌はいきなり列車に入ってきた俺達に驚いて腰を抜かした後、ギャンギャンと喚き始めた。

「武偵です!!『この列車に爆弾が仕掛けられた』と連絡がありました!!」

『そして運行を止めると爆発させる』と言っています!!」

「え!?……………は?」

若い車掌は床に崩れ落ちたまま、目を白黒させていた。

「もう一回言います。この列車に爆弾が仕掛けられたと連絡がありました。そして運行を止めると爆発させると言っています。くれぐれも列車を止めないでください!!」

バン!!バン!!ベキツ!!

ジョニー・マクレーンは車掌席の扉を蹴破り、客のいるほうへ向かう。

「(英語) 坊主!!早くしろ!!」

「(英語) 分かってる!!」

俺は急いでジョニー・マクレーンを追いかけた。

「Excuse me, excuse me!! (訳:どけ!!どいてください!!)」

「すいません!武偵です!!そのバッグの中身を見せてもらう!!」

俺達は焦る心を押さえつつ、爆弾を探していく。

『次は上野、上野。お出口は左側です。』

……………クソ!!早すぎる!!

俺は時計を見た。時刻は10時5分、ちょうど御徒町駅を過ぎたところだ。

俺とおっさんはがいるのは一番後ろから数えてまだ三両目。通勤ラッシュの時間は過ぎたとはいえ、それでも乗客が多い。そのため、爆弾探しが遅々として進まなかった。

『上野、上野です。お降りの際は……………』

列車が止まり、ドアが開いた。乗客が行き交うため、さらに爆弾探しが遅れる。

「(英語) 残り2分だ!!」

「(英語) クソツ!!人が多すぎる!!」

……………とうとう次が鶯谷だ!!

3両目をほぼ調べ終え、4両目に行こうとした時だった。優先席の横に大きな青のスーツケースが置かれていた。近くには老人が二人だけ。

「武偵です!!このスーツケースはあなた達のですか!？」

俺はそこに座っていた老人二人に大声で尋ねた。

「何だつて?」

「もう一回大声で言ってくれないかい?」

……クソツ!!埒らちが明かねえ!!

俺が老人二人を訪ねている間、ジヨニー・マクレマクレはそのスーツケースを慎重に調べる。



「このカバンはあなた達のですか!？」

「何だつて?」

「4年前に近所の鈴木さんが持っていたカバンに似てるのお」

……ああ、面倒な!!

俺は老人二人を無視し、ジヨニー・マクレマクレがスーツケースを開けるの見守った。

中身は……とが入った大きな筒と、電子機器だった。

「(英語) ……当たりだ。」

「(英語) 時間が無い!!おっさん解除できるか!？」

『ドア閉まりまーす。』

俺よりもジヨニー・マクレマクレの方が爆弾や爆弾処理についての知識や経験がある。

俺はジヨニー・マクレマクレが爆弾解除できる事を期待するが……

「(英語) こんな短時間でできるわけないだろ!？」

「(英語) ……クソツ!!車掌席から投げ捨てるぞ!!」

俺とジヨニー・マクレマクレでスーツケースを持ち上げ、来た道に戻り始める。

「じいちゃん!!ばあちゃん!!危ないから今すぐ前の方の車両に移動し

ろ!!早く!!他のお客さんも早く!!」

『次は鶯谷、鶯谷です。』

「わたし、戦車道やってるんですけど、その大会で失敗しちゃって……。それもあって九州から家出して東京まで来たら、爆弾テロに巻き込まれちゃって。」

「ば、爆弾テロ!?!」

「そうなんです。わたし、その犯人を怒らせちゃって……。そのせいで巻き込まれちゃって」

西住みほは『黒髪赤メツシユの少女・美竹蘭』に事の顛末を説明しながら、車を運転をしていた。西住みほの運転技術は戦車道のおかげか、さつきまで運転していたジョニー・マクレイよりも上手だ。

「西住さんでしたっけ?」

「はい。」

「家出するほど……辛かったんですか?」

美竹蘭の質問に、西住みほは苦笑いを浮かべた。

「わたしのせいで10連覇を逃しちゃったんです。その事をお母さんにも、チームのみんなにも非難されたんですけど……今のように命の危機にあってるわけじゃないから。アハハ……どうしてあんなことを……」

そう言った後、西住みほはカラ笑いをした。虚しい笑い声が車内に響き渡る。

「友達とかは……」

「仲が良かった子はいたんですけど……友達とかは……。アハハ

……」

西住みほのカラ笑いが再び車に響き渡る。

……なんか、あたしに似てる。

美竹蘭はそう感じた。

美竹蘭も、中学の時、幼馴染4人と違うクラスになってしまったことがあった。☒クール☒☒☒ぶつきら棒☒☒☒言葉足らず☒☒彼女の性格もあり、知り合いもないクラスで孤立してしまったのだ。

「あたしも、中学の時……」

美竹蘭は思わず、自分の中学の頃の事を話し始めた。

話し始めて数分後、美竹蘭は色々と西住みほに暴露していたことに気が付き、思わず口を閉じた。美竹蘭は自分の頬が熱くなるのを感じる。

「あの!!」

西住みほと美竹蘭が同じタイミングで喋り出し、そして口を閉じる。

「美竹さんが先に……」

「西住さんが先に……」

一瞬、静寂が車内を占拠した後、笑い声が響き渡った。

「美竹さん」

「西住さん」

「友達になってください!!」

戦車道  
実家と向き合い、そして逃げ出した少女・西住みほ。実家に反発して逃げ、今は向き合う少女・美竹蘭。この二人の少女が出会った時、今度こそ何かが起こる……?」

その時、目の前の消防車が停車した。鶯谷に着いたようだ。

「蘭ちゃん、行ってくるね」

西住みほはそう言って車を飛び降り、藤原少佐と合流して改札を飛び越え、走って公衆電話を探し始めた。

西住みほが鶯谷駅の改札を飛び越え、間違えて3番線のホームに向かおうとした時……

「みほ!! 2番線はこっち!!」

「蘭ちゃん!」

美竹蘭は西住みほの手を掴みんだ。

「あ、あたしも……と、友達だし……」

美竹蘭は顔を赤くさせて伏せながら……しっかりと西住みほの手を取り、2番線のホームまで案内する。

「何をしているんだ!! 早く!!」

そして、藤原少佐青年将校の大きな声が構内に響き渡った。

ビーツ!! ビーツ!!

「(英語) 嘘だろ!」

「(英語) おっさんどうした!」

スニーカーの電子機器からブザー音を発し始めた。

「(英語) 爆薬が混ざり始めた!!」

「(英語) 嘘だろ!」

俺はおっジョニー・さマクレン慌ててスニーカーを覗き込むと……赤と透明の液体が混ざり始めていた。

「(英語) なんでもう混ざり始めるんだよ!!」

ついさつき上野から出たばかりだ。上野く鶯谷間の半分も来て

いないだろう。

「武偵です!!皆さん早く前の方へ移動してください!!爆弾が爆発する!!」

……あと20m弱で最後尾だ。

俺は喉が潰れそうなほどの大声を上げた。

俺達は何とか最後尾の車掌席までついた。きつと今頃、先頭車両は鶯谷駅のホームが見えてくる頃だろう。

ダンドンダン!!

俺は14年式を発砲し、窓ガラスをぶち割った。

「車掌さん!!早く逃げろ!!爆発するぞ!!」

「う、うるさい!!ここが俺の、俺の仕事場で『お客様の安全を守る』のが職務だ!!は、離れるもんか!!ああ!!」

若い車掌は足をガタガタと震わせ、涙目になり、声も震えているが……意地でも車掌席から避難しようとしなない。

「(英語)おらあ!!」

おっさんは壊した窓からスーツケースを投げ捨てた。そしてスーツケースが宙を舞っている時……

チュドーン!!!

俺とおっさん、そして若い車掌は爆風で壁に叩きつけられた。

西住みほと美竹蘭(と藤原石町少佐)はホームを駆けずり回り、やつと公衆電話を見つけた。

プルルルル……

公衆電話からベルの音が聞こえる。西住みほはこの状態を一度見ているが、美竹蘭は初めて見たために驚いた。

ガチャ……

西住みほは深呼吸した後、ゆっくりと受話器を持ち上げた。

「もしもし……間に合いましたよ?」

『ああ、お嬢さんフロイラインか。イブキにジヨニーは何処だい?』

「……あとから来ます。……運動不足で足がなまっているみたいで」  
『そうか、私は彼らとも話したかったのだが……。とても残念だ。さようなら』

ツー、ツー、ツー……

電話が切れたと同時に、西住みほは背筋が凍った。その時、列車がホームに滑り込んでくる。

「ど、どうだった?」

「美竹さん!!逃げて!!」

西住みほは美竹蘭の手を引き、階段の裏側に避難させた。

「おい、まさかそれって……」

青年将校はその様子を見て、そうつぶやいた瞬間……

チユドーン!!!

鼓膜が破れそうなほどの大爆発音と共に、列車が急加速する。最後尾の列車がホームに乗り上げ、その莫大ばくだいな運動エネルギーを使ってホーム上の物体をなぎ倒していく。

「ああ!!クソッ!!」

青年将校藤原少佐は二人の少女に覆いかぶさった。青年将校藤原少佐に破片が降り注ぐ。

ズドドド……!!ドカーン!!

そして、階段にぶつかるのと列車はその勢いを止め、横倒しになって止まった。

爆発が収まり……数分、いや数十秒、もしかしたら10秒も経っていないかもしれない。今、この場は爆音も怒号も響き渡らず、静寂がこの場を支配していた。



「い、生きてる?」

美竹蘭は自分が生きていることに驚きながらゆっくりと立ち上がった。彼女の気に入っていた服がホコリで汚れてしまったが、命には代えられない。どうせ、洗えばどうにでもなる。

「アハハ……こんなのに比べたら……」

「イツテエ……」

美竹蘭の隣で西住みほは女の子座り割座をし、皮肉的にも思える快晴の空を見上げながらぼやいていた。その隣では、ホコリまみれの青年藤原少佐将校が横うめになって呻うめいていた。

「……大丈夫?」

「あ、ありがとう……」

美竹蘭は西住みほの手を握って引つ張り、立たせた。その時、西住みほの頭から、爆弾を外すためにこの列車に乗った二人の男二人の男二人を思い出した。

「……む、村田さん?マクレールさん?」

西住みほの頭には『失敗』という二文字に支配された。

戦車道で失敗した時、死人は出なかった。しかし、今回の失敗のせいで二人は……

西住みほは吐き気を覚え、崩れ落ちた。美竹蘭は西住みほの背を擦さすりながら声をかけるが、本人には聞こえない。

そんな時だった。

「ゴホッ!!カハッ!!」

ドン!!バリン!!

何かを叩く音、ガラスが割れる音がホームに乗り上げ、横倒しになった列車から聞こえた。

西住みほはハツとその列車を見上げた。

「ふっひっひっひ……」

その横倒しになった列車から、若い車掌・ジヨニー・マクレールおっ、そして村田イブキが笑いながら這い出てきた。3人は血まみれ、服もあちこち破け、焦げているが……五体満足のようなだ。

「村田さん!!マクレールさん!!」

「新巻のお兄さん!!」

西住みほと美竹蘭は這い出てきた3人に駆け寄った。

「(英語) ふっひっひっひ……なんだあ? くつくつく……」

「へへへ……大丈夫だ!! って言っただろ? くつくつく……」

「ははは……生きてる、生きてる!!」

俺はガラスの破片でさらに傷ができるのを無視して何とか這い出た。そして血と汗とホコリで汚れたで二人の頭を撫でた。

数分後、俺は『二人の頭を撫でた行為はセクハラではないか?』と  
思い始め、二人の動向にビクビクしていたのはナイショだ。

「おい、野次馬を下がらせてくれ!!……構内は怪我人だらけです。幸い死人は出ていませんが、妊婦が破水したのと、心臓発作による重体が1名ずつです。」

刑事が俺とジョニー・マクレ、そして藤原さんを手当てしている  
バンに来て報告してくれた。

「(英語) 死人はいなかったらしい。重傷者は2名だと。」

俺は刑事さんの報告を訳し、ジョニー・マクレに伝えた。

「(英語) 全く、死人が出なくてよかった。二人は大丈夫か?……って  
痛い、痛いから!! もうちよつと優しくやってくれ!!」

藤原さんは手当をされながら訊ねた。

ついでに、藤原さんは爆発が起こった時、西住さんと美竹さんに覆

いかぶさって二人を守ったらしい。

「(英語) ああ、耳鳴りがひどい。」

ジョニー・マクレーンは冗談っぽく笑って言った。

「(英語) 血を流し過ぎて、少しボーっとしますね。」

「い、イブキ様!! 動かないでください!!」

「ムラタ!! 君は普通死ぬような目に会ってるんだぞ!」

俺も首を回し、笑いながら言う……手当をしていたリサとワトソンから叱責をもらった。

俺達のおかげで何とか死者は出なかったものの、大量の負傷者は出た。そのために警察や救急だけでは人が足りず、東京武偵高の救護科・衛生科、そしてその生徒たちを運ぶ車両科もここに居るのだ。ついでに、この事件が起こったと聞かされ、リサとワトソンは慌ててここまで駆けつけてくれたのだ。他のみんなは……『いつもの事だ』笑って流していたらしい。

……『どうせ大丈夫だ』と信用されて嬉しいやら悲しいやら俺は思わずため息をついた。

「(英語) 全く、君達と車掌はよく生きてたね、奇跡だよ……いいいい!! 痛い!! 痛いから!!」

「(英語) ああ、それが問題だ。」

ジョニー・マクレーンはメチャクチャ痛がってる藤原さんを無視し、咳くように言った。

「(英語) 何か問題でもあるのか?」

俺は何が問題だか分からなかった。ジョニー・マクレーンは、刑事としての長い経験から何かを感じ取ったのだろうか?

「(英語) その奇跡ってやつだ。あの時間で普通ここまでやれるか?」

「(英語) 無理だ。だからやらせたんじゃない……」

俺の言葉に、ジョニー・マクレーンはゆっくりと首を横に振った。

「(英語) さつき地図を見せてもらったが、あの時間じゃ無理だ。きつ

と俺達がゲームに勝とうが負けようが、結局爆発していた。」

確かに、上野を過ぎてすぐに爆弾は混ざり始めた。『Die Hard 3 in Tokyo 一般人でこの殺気って……』で田中さんが証明した通り、混ざり合った爆薬はとても不安定で少しの揺れでも爆発する。そんな危険物を車内に置いたらどうなるかは……少し考えればわかるだろう。

〔英語〕ここを狙った理由は?」

〔英語〕分からんが……必ず何かあるはずだ。……イツツ」

おっさんはポケットからグシャグシャのタバコを取り出し、ジツポで火をつけた。

〔英語〕なるほど、考慮しておきm……待つて!!何そのぶつとい注射!!待つて!!やめて!!」

〔うるせえ!!〕」

「ああああああ!!」

藤原さんの抵抗は虚しく、ぶつとい注射を打たれたとき。

「藤原さんつて注射、苦手なんですか?」

「うん……」

「予防接種の時や採血の時はどうしてるんですか?」

「そういう時はあらかじめ知ってるからね。護摩焚いて、精神統一して、自己催眠かけてそれで行くんだ。」

……マジで苦手なんだ。

手当が終わった後、俺とジョニー・マクレーン・藤原さんは違うバンに案内された。そのバンには西住さん・西住さんそして……HS部隊第一中隊長国内担当：鈴木敬次大佐と副隊長：瀬島龍二郎中佐、その他スー

ツ姿の男数人がいた。

「……ッ!?!」

俺と藤原さんは慌てて敬礼をすると、二人は返礼をしてきた。

「村田大尉、藤原、気を張らなくていい。楽にしろ。」

瀬島中佐からそう言われ、俺と藤原さんは深く椅子に座った。

「そうそう、気張ったって何にもなりやしないぜ?……そう言えば村田君とちゃんと話すのは初めてだっけ?鈴木敬次、服を見ればわかると思うが陸軍所属さ。」

鈴木大佐はヘラヘラと笑いながら俺に手を差し出し、握手を求めた。しかし、俺へ向ける鈴木大佐の圧は藤原さん以上だった。

「ハッ!!よろしくお願いいたします」

……ヤバい、下手したら『辻・神城さんクラス』はあるぞ!?

俺は冷汗をかきながら鈴木大佐と握手を交わした。

「お、お母さんぐらい怖い人、初めて見た。」

西住さんがボソリと言った独り言が、俺には聞こえた。

……おいちよつと待て西住さん!?あんなこういう人に今まで非難されてたの!?

のちに西住さんの母親・西住しほさんが黒森峰女学院で戦車道の指南をしていたと知り、『黒森峰女学院Ⅱ世紀末』と確信するようになった。

バン!!

バンの扉が閉まり、車内は完全に密室になった。

「(英語)こんにちは!!鈴木敬次です。ところでこの人物を見たことあるかい!?!」

「この人物を見た事がありますか?」

鈴木大佐と瀬島中佐はそう言って☒☒写真が印刷された紙☒☒を俺と

ジヨニー・マクレ、西住さん・美竹さんに回した。

紙に印刷されていた写真には……諸葛静幻の他に『丸メガネをかけ、口ひげを生やしたハゲ老人』、『老け顔の苦勞していそうな青年』がいた。

……あれ？このメガネハゲ。芸人&映画監督の『ビート板たかし』に似てないか？

「(英語) 知らないな」

「知りません」

俺以外の3人は即答した。俺は余計に言いづらくなった。

「(英語) 諸葛静幻は極東戦役の宣戦会議で。その他は知りません。」

「(英語) ああ村田君、さすがにそれは分かっているさ。それ以外を聞いているんだぜ？」

俺は鈴木大佐の言葉に、首を横に振って答えた。

「(英語) この二人、中国マフィア・藍幫の幹部クラスさ。『ハゲメガネ』のほうが劉翔武老け顔の方が司馬鵬。今回の事件の首謀者だと見ている。ま、ほぼ当たりだろうね。」

「彼らは中国マフィアの幹部で、今回の事件の首謀者と考えられています。」

鈴木大佐と瀬島中佐説明を始めた時、車のドアを叩かれ、扉を開けられた。

サイモンから電話です!!」

扉を開けた女性刑事(?)の言葉に、車内は騒然となった。

「(英語) 俺達の事は伏せてくれよ?」

「私達の事は伏せてくれると嬉しい。」

鈴木大佐と瀬島中佐がそう言った後サイモンからの電話を繋げた。

『(英語) やあ!!まさかあんなことをして、二人が生きているとは思

もよらなかつたよ。それに近衛師団も説得して……どんな魔法を使ったんだい？ ジョニー君？ イブキ君？」

「サイモン」の陽気な言葉が車内に響きわたる。

「(英語) 信心深い結果だ!!」

「(英語) 日頃の行いの結果だ。神様がそれを見てくれたんだろ？」

ジョニー・マクレ<sup>おっ</sup>レー<sup>き</sup>と俺はバカバカしそうに「サイモン」に答えた。

「(英語) まあ良い。バンの中にいるのは誰かな。当ててみよう……軍の鈴木君に瀬島君。警察の丹波君と相川君。外務省やその他に矢部君に満島君かな？」

「サイモン」の言葉に、車内の巻き込まれた俺達四人以外の全員が何らかのポーズを取った

「……ああ」

……おい、嘘だろ!? このバンにいる全員を「サイモン」は監視している!?

俺は車内を見渡すが……怪しそうなものは一つもなかった。

「(英語) さて、そろそろ役者がそろったな? では、リハーサルは終わりだ。さて、首都圏には小学校・中学校・高校・大学・短大・専門学校など様々あるが……その一つに2トンほどの爆弾を仕掛けた。タイムで午後3時ジャストに爆発するようにセットしてある。」

「……」

西住さんと美竹さん以外の全員は、驚きのあまり何もしゃべることができなかつた。

……学校にだと!?

俺は小学校に通う家族『八神はやて』を思い出した。

「(英語) 沈黙は「理解の証」ととるよ?」

「……今、2トンの爆弾と言ったのか? しかも小学校に?」

瀬島中佐の緊迫した声が車内に響き渡った。

瀬島中佐は大の「親バカ」で、長女が確か小学生だったはずだ。

「ああ、そうだ。余計な口を挟むな。」

「サイモン」は日本語でそう答えた。そのおかげで西住さんと美竹さんはやつと事態の深刻さを理解したようだった。

西住さんは悟りの境地までいったのか、無表情のままドツシリと椅子に座り、美竹さんは混乱している。

『(英語) Simon says……学校から生徒達を避難させようとするれば無線で爆破する。止める手段は一つ、ジョニー君とイブキ君、そしてお嬢さんフロイラインに新しい命令を与える。』  
「(英語)おい待て!!西住さんはお前の弟と関係ないだろ!?!何故関わらせる!!」

俺は声を荒げて反論した。

『弟のことまで調べられたとは感心感心。まあ……私は根に持つタイプだね。彼女にはまだ参加してもらおう。……ああ、もう一人巻き込んだようだが、そつちの方は解放してもいいぞ?私を怒らせてないからね。』

『サイモン』の言葉に西住さんは『虚ろな目』をしながらカラ笑いをし始め、美竹さんはキョトンとしている。美竹さんは西住さんが『サイモン』を怒らせるところを想像できないのだろう。

『(英語)では命令を与えよう。旧芝離宮恩賜庭園の中島に携帯を置いてきた。40分以内に向かえ。余裕で着くはずだ。君達が利口ならそこにある爆弾を探し出し、解除できるだろう。……おっと、忘れるところだった。起爆装置が安物だね。警察や軍で使われる無線の周波数に反応し、誤作動を起こしやすい。なるべくなら無線を使わない事をお勧めするよ?では。』

ツー、ツー、ツー……

電話が切れた。その時、空しい笑い声と共に、ボヤキが聞こえ始めた。

「私、またあんなことしなきゃいけないんだ。さつきも死にかけたのに……アハ、アハハ、アハハハ!!!」

「みほ!?!大丈夫!?!」

美竹さんは西住さんの肩を持って上半身を揺らす……悲しいことに笑い声がさらに大きくなっていく。



「(英語) 警察庁長官は?」

スーツ姿の一人が尋ねた。英語で話しかけたのは、女子高生二人に話を聞かせないためだろうか。

「(英語) ただいま不倫疑惑について記者会見中です。何時来られるか分かりません。」

「「「……は?」」」

俺は急いでスマホを出し、ニュースを見ると……不倫疑惑についての記者会見をやっていた。

……サイモンめ!!これを狙ってやりやがったのか!?

「(英語) 昨日、ある雑誌にやられて……スイマセン。」

「(英語) しかも18歳未満だったので余計に問題になりました……」  
俺は頭が痛くなってきた。四次元倉庫からアスピリンを1錠取り出して飲む。

「(英語) とりあえず呼べる幹部職員を集めようぜ。」

鈴木大佐は重苦しいオーラを放ちつつ、飄々ひょうひょうと言う。

「(英語) 管轄がどうとは言わないだろうな。」

瀬島中佐も鈴木大佐に負けないほどのオーラを出し脅迫きようと云われてもしようがないような声色で言い放った。

「(英語) 私も大学に息子、中学と小学校に娘が通っている。外務省はいくらでも手を貸そう。私が責任を持つ」

瀬島中佐の言葉に、スーツ姿のメガネをかけたガリガリの中年男性がどっしりと構えていった。

「(英語) 警視庁は今すぐ3000ほど出せる。緊急動員で……14時以降までには8000はでる。」

スーツ姿の小太りの男は時計を見ながらそう言った。

今の時刻は11時30分前。8000名を動員するには2時間半以上はかかるのだろうか。

「(英語) 藤原君、軍こっちはどうだつて?」

鈴木大佐の言葉で俺は藤原さんを見た。藤原さんは今まで携帯で誰かと話をしていたようだ。

「(英語) 第1師団全て、近衛第2旅団と近衛工兵大隊が動かせます。」

横須賀・厚木・横田・入間周辺は海軍と空軍が。1時間以内に宇都宮の第14師団が首都圏北部で搜索を始める様です。」

藤原さんは「どす黒いオーラ」を放ちながら報告した。

「よし、じゃあ始めようぜ。あんなクズ野郎に俺達が負けるわけがない。そうだろう?」

パン!!

鈴木大佐はそう言って手を叩いた後、俺とジョニー・マクレー、そして西住さんを車外へ追い出した。

「(英語)村田君、西住君へ説明しておいてくれよ?……何かあったら電話だ。交換台を通して話せるはずさ。なるべくなら軍の方が良いな。……頑張れよ?」

「(英語)ハッ!!」

「(英語)ああ……」

鈴木大佐の言葉に俺は敬礼し、ジョニー・マクレーは無言で頷いた。

「さあ行くぞ、西住さん。大丈夫、まだ地獄の一丁目だ。」

「(英語) つたく、なんだってこんな目に会わなきゃなんねえんだ」

「アハハ……もうヤダ、帰りたい……」

俺とジョニー・マクレーは西住さんの手を引き、鏡高組から奪ったセンチユリーに投げ入れようとした所……美竹さんが駆け寄ってきた。

「(英語) なんだあ?お前はもういらないうって言われたらどろ?」

「美竹さん、どうした?」

俺とジョニー・マクレーの言葉をかけられた美竹さんは俯いた後、赤面しながら俺達に向き合った。

「みほも、新巻のお兄さんも、おじさんも、死なないで、無事に戻ってきてください……」

小さい声ではあったが、俺達の耳にはちゃんと答えた。西住さんも

その言葉を聞き、虚ろだった目に光が宿る。

「「ああ!!」」

俺達はそう言った後、センチユリーに乗り込んで勢いよく旧芝離宮恩賜庭園へ向かった。

プルルルル……

出発してすぐ、俺の携帯が鳴り始めた。その相手は……藤原さん!?

「はい、もしもsh……」

『村田かい? 鈴木大佐H S部隊第一中隊中隊長から伝言だ。第一中隊の本気を見せてやる。だそうだ。』

「……え?」

学校の爆弾と犯人は心配するな。僕達に任せろ!!」

ツー、ツー、ツー

電話が切れた。俺は鈴木大佐の伝言と、藤原さんの言葉が己の心に響き渡った。

……ああ、やってやるさ。今までの様に信用できない警察や軍じゃないんだ。

俺はナカジマ・プラザ ジョン・F・ケネディ国際空港  
ロシアの中国総領事の事件を思い出した。

……あの時は地元警察も、軍も信用できなかった。しかし、今回はどうだ?

「(英語)なんだって!?!」

ジョニー・マクレーンがハンドルを握りながら聞いてきた。

「(英語)『援護は任せろ』だど!!」

俺の言葉に、ジョニー・マクレーンはにやりと笑った。

「(英語)なんだ、いつも以上に頼りがいがあるじゃねえか!!」

ジョニー・マクレーンも同じことを考えていたようだ。

イブキ達が車で旧芝離宮恩賜公園へ向かい数分後、鶯谷うぐいすだに駅えきにいた警察車両はごく一部を残し、ほとんどが爆弾探しへ向かっていった。その警察の様子を近くのビルの屋上から観察していた白人の男性がいた。

「撒き餌まきえりにつられたな。」

その白人の男性は双眼鏡を外し、観察を止めた。

「始めろ」

白人男性はニヤリと笑いながら、作戦開始の合図を告げた。

Die Hard 3 in Tokyo 『ボコ』  
仲間……

ほとんどの警官は爆弾の捜索に向かい、うぐいすだにえき鶯谷駅に残ったのは数名の警官と刑事一人だけだった。

「はあ、なんてことが……」

ブオオオオオオ!!

その居残りの刑事が頭を抱えた時、ディーゼルエンジンの特徴的な音が鶯谷駅に響き渡った。

「……え？」

刑事がその爆音がする方向を向いた。そこには……大型ダンプ・トラック20台近くが向かってくる。

「えっ……どういふこと……って言うか止まれ、おい!!」

刑事が必死にダンプの車列を止めようとするもダンプはそれを無視し、東京国立博物館側側へ向かっていく。

それと同時に1台のセダンが刑事の前に止まり、紺色のスーツを着た白人男性が出てきた。

「すいません刑事さん。『ボブ・トンプソン』、J〇の者です。被害状況の調査へやってきました。調べさせてもらっても？」

白人男性はそう言って刑事に名刺を渡す。

「ずいぶんお早いですね……ではついてきてください。」

刑事は〇Rの仕事の速さに驚きながら、そのスーツ姿の白人男性の案内を始めた。

「ええ、ここは世界の東京 TOKYO それも山手線ですから。沢山の宝が眠っています。それに……公共交通機関ですからね。うるさい方々が多くて……東京都長もJ〇社長も無視できないんですよ。」

スーツ姿の白人男性とその部下約10名、そして刑事は鶯谷駅を見

渡せる橋についた。

「うわあ……これはひどい。」

スーツ姿の白人男性はそう言った後、軍用の大型双眼鏡を取り出して駅の状態を観察する。

「全く、派手にやったものだ。」

スーツ姿の白人男性はそう言ってにやりと笑った。そして観察を終えたのか、刑事の方を向いた。

「部下に中の様子を見せてもらえませんか？早急に山手線を復旧させなければなりませんので。」

白人男性はビジネススマイルを浮かべながら刑事に頼んだ。

「……ええ、いいですよ？おい、その二人、案内させるから一緒に来てくれ。」

刑事は少し考えた後、意外にあっさりと許可を出した。

「では行きましょう。」

刑事一人と警官二人は『やけに体があつしりしている男たち』に鶯谷駅の案内を始めた。

『ボブ・トンプソン』と名乗っていた白人男性はサングラスをかけた後、ダンプに乗っていた一人からアタッシュケースをもらい、そのカバンを持ちながら『東京国立博○館』へ歩いて向かう。

「うん、やはり裏門が弱くなっている。」

スーツ姿の白人男性はそうつぶやくと同時に、紺色のセダンが横に止まった。その車からガタイのいい、スーツを着た白人男性5人が出てきた。

「よし、行くぞ」

サングラスをかけたスーツを着た白人男性はそう言って、休館中の『東京国立博物○』へ向かった。

ジリリリリ……

『東京国○博物館』の本館ではあちこちでベルが鳴っていた。鶯谷駅での爆発によって警報装置が破損したのだろう。

「こんにちは。手鳥<sup>てどり</sup>さんに『ヴァン・デアフルーク』が来たと願います。」

☒ヴァン・デアフルーク☒さんですね？少々お待ちください。」

鶯谷駅で刑事に『ボブ・トン普森』と名乗っていたサングラスをかけた白人男性はそう言って、ロビーの職員に声をかけた。

ロビーの職員に声をかけて5分後、ベルが鳴り止んだ。それと同時に小柄な男性が足早にやってきた。

「ヴァン・デアフルークさん、列品管理課長の手鳥<sup>てどり</sup>です。お待ちせして申し訳ございません。山手線で爆発騒ぎがあつたもので……。非常ベルがうるさかったでしょう？」

そう言って手鳥はサングラスをかけた白人と握手を交わした。

「被害はございませんでしたか？」

「大丈夫です。被害は皆無です。……日本語がお上手ですね。」

手鳥はサングラスの白人が母国語の様に日本語をしゃべるのに驚いた。

「もう何年も日本にいるので。」

「そうですか!!……寄贈の件でしたよね。」

「ええ……。祖父が日本の物を集めていましたが、つい先日亡くなりまして……」

手鳥とサングラスの白人が話している間に、白人の部下達が動き始めた。

「全く、酷いもんだ。『霞ヶ関』の時と同じぐらいですよ。強いて言うなら死人が出なかつただけマシですが。」

鶯谷駅で刑事と警官二人は『ボブ・トンプソン』の部下達に構内の案内をしていた。

「ひどい瓦礫だ。それにこの水は……」

「水道管も破裂したんです。大丈夫だとは思いますが、2番線と3番線の通電は念のため停止させてます。」

刑事と『ボブ・トンプソン』の部下の一人が話している時、他の部下たちは警官の首筋に麻酔銃を撃っていた。

ガタツ!!

『ボブ・トンプソン』の部下の一人がミスをしたのだろう。大きな音を立てた。

刑事はその音で振り向き、警官に麻酔銃を撃っているところを見た。

「おい、お前!!」

刑事が慌てて拳銃を出そうとした瞬間……

ダンドンダン!!!

『ボブ・トンプソン』の部下の一人：太眉の男に拳銃で何発も撃たれ、階段から転げ落ちいった。

「おい!!何をしているんだ!!」

「(ポーランド語) 仕方ないだろうが!!」

「よせ、日本語で話せ!!それに銃声が聞こえるだろう!?!」

『細身で筋肉質の男』と『太眉の男』が口論を始めた。

「まあまあ、こいつは日本語が話せないのさ」

仲間の一人が喧嘩の仲裁をした後、警官の制服をはぎ取り始めた。

「おい、あいつは誰が連れてきたんだ?」

「タルゴさ。あいつの部下だ。」

『ボブ・トンプソン』の部下たちは警官や刑事から制服や手帳をはぎ取り、身に着け始めた。



同時刻、事務所に戻った白鷺千聖は所属するアイドルユニット『Pastel\*Palette』と共に『ライブハウス・CiRCLE』において、『Roselia』と一緒にライブのリハーサルをし、ちやうど終わったところだった。

「おねーちゃん!!」

「ちよっ?!?日菜?!?」

ロビーで氷川日菜（Pastel\*Palette、妹）と氷川紗夜（Roselia、姉）の双子の姉妹によるじゃれ合いは例外とし、残りは互いに反省点を指摘し合っていた。

「<sup>ア</sup>「<sup>イ</sup>「<sup>ド</sup>「<sup>ル</sup>「<sup>パ</sup>「<sup>レン</sup>「<sup>ド</sup>」<sup>本</sup>格派バンド」と言う違いはあるものの、その視点の違いは互いのためになるはずだった。

カランカラン……

「あ、いらっしや……?!?」

その時、白人や黄色人種の男たち10数人が『ライブハウス：CiRCLE』がいきなり押し寄せてきたのだ。

彼らは訓練されていたのか、10秒もかからないでCiRCLE内にいた全員の首元に麻酔銃を打ち込みんだ。

男たちはCiRCLE内全員を無力化したのを確認し、『Pastel\*Palette』・『Roselia』のメンバーを誘拐した。

白鷺千聖は気を失う前、イブキの顔を思い出した。

「い、イブキ、助k……」

『ボブ・トンプソン』・『ヴァン・デアフルーク』などと名乗った白人は<sup>東京国立○物館</sup>にて、別室へ案内されていた。

「ああ!!すみません。そっちは管理室行きのエレベーターです!!」

「それは失礼。方向音痴なもので……」

「やめてください。さっきの爆破事件で警報装置が壊れてしまい、今は電源を切っている状態なんです。」

「全く、不用心ですなあ」

プルルルル……

その時、『ボブ・トンプソン』『ヴァン・デアフルーク』などと名乗った白人のポケットから携帯が鳴り始めた。

「失礼、電話に出てよろしいですか?」

「あ、はいどうぞ。」

手鳥列品管理課長から許可をもらったため、その白人男性はポケットから携帯を取り出し、電話に出た。

「(英語) 終わったか?」

『(英語) 駅の占拠が終わりました。駅から博物館まで誰も入れません。また、もう一つの方も成功したと連絡がありました』

「(英語) よくやった。」

ピッ……

『ボブ・トンプソン』『ヴァン・デアフルーク』などと名乗った白人は電話を切り、携帯をポケットにしまった。

「手鳥さん、寄贈の件なのですが……そちらが我々に寄贈してもらう事になりました。」

「……へ?」

その言葉と同時に、一緒に来ていた部下が手鳥列品管理課長の首元に麻醉銃を撃った。

「30分以内に無力化しろ」

「ハッ!!」

男はそう言ってサングラスを取った。その顔は……実行犯とされる『サイモン・ピーター・グルーバー』の写真と瓜二つだった。

俺とジョニー・マクレ、西住さんは車から出て旧芝離宮恩賜公園へ入り、中島へ向かった。

「大人1人、高校生2人です。」

「450円になります。」

「……はい」

旧芝離宮恩賜公園は入園料がかかるため俺がお金を払ったのは言うまでもない。

「ここが旧芝離宮恩賜公園!!」

「……有名なのか?」

西住さんが今までと打って変わり、目を輝かせて周りを見ていた。

「はい!!『ボコ』の68〜74話のモデルになってるんです!!」

「……へえ。あの『ボコ』か」

……『ボコ』ねえ。

俺は『閑話：高校生活2学期編 BOKO Hard 2.5

その2』で会った愛里寿ちゃんを思い出した。彼女もまた、『ボコ』のファンだったはずだ。

……もしかしたら愛里寿ちゃんも旧芝離宮恩賜公園にいるかもな。

「……ボコ!?知ってるんですか!?!」

西住さんはボコファンを見つけ興奮しているのだろうか?

西住さんは食い気味に話し始める。

「……え?いや……まあ。」

「私、ボコが大好きで!!最近上映された『BOKO Hard』もすぐに……」

「え?『BOKO Hard』!?!」

「(英語)ん?『Die Hards』?」

……『BOKO Hard』も『Die Hards』も黒歴史なんだよなあ。

『BOKO Hard』は、俺が聖グロでテロリストと戦った事件をモデルに愛里寿ちゃんが台本を書いた映画……らしい。しかし、『ボコ』であるために主人公は殴られるだけなのだが。

『Die Hards』は俺が7歳の時、ジョニー・マクレーンと一緒にテロを倒した話がモデルになっているアクション映画だ。

……やったあ、俺沢山の映画のモデルになってるく

俺は思わずため息をついた。

さて、そんな雑談をしながら中島に着き、石の上に置いてある携帯を見つけた。その数分後、それに電話がかかってきたので、西住さんはスピーカーモードにした。

『(英語) ちゃんと着くとは感心だな。』

『タン!!タン!!』

『(英語) 次は東○館と平○館だ!!急げ!!』

サイモン<sup>の</sup>声のほか……それと共に銃声、や怒鳴り声小さく聞こえる。向こうで何かしているのだろうか？

『(英語) 次は何をする!!』

ジョニー・マクレーンは怒鳴りながらサイモンに訊ねた。

『(英語) 仙人が住み、徐福が着いたとされる地は何処だ？日本の竹取物語にも出ていたはずだ。』

ツー、ツー、ツー……

『(英語) おい!?なんだって!?!』

ジョニー・マクレーンはサイモンに向けて話すが……電話が切れてしまった。

『(英語) 仙人ってなんだあ?』

おっさんは苛立たし気に携帯をポケットに入れたながら尋ねた。

『(英語) 仙人はともかく、爆弾があるのはここだよ』

俺はそう言い、靴の先で地面中島を叩いた。

……仙人が住み、徐福が目指した地は『蓬莱』、そしてこの旧芝離宮恩賜公園中島には『蓬莱山』を模して造ったそうだ。

俺は中島を周り、この島の頂上にある石塔の近くに大きめのアタツシユケースを見つけた。俺を追いかけたジヨニー・マクレーンと西住さんもその不審なアタツシユケースを見つけたようだ。

「あ、あれが爆弾……ですか？」

「多分……」

西住さんは不安そうに俺に尋ねてきた。

「(英語) 坊主、取ってきてくれ」

「(英語) 分かつて……いやいやいや!! おっさんの方が爆弾に詳しいだろ!」

ジヨニー・マクレーンは『醤油を取ってきてくれ』と言うような気軽さで言っただけ、俺は普通に取りに行こうとしてしまった。

「(英語) 俺は開ける坊主は運ぶそれとも嬢ちゃんに爆弾を運ばせる気か？」

ジヨニー・マクレーンは西住さんを見た。西住さんは英語を理解できないせいか、コテンと可愛く首を傾げた。

俺はため息をついた後、石塔にあるアタツシユケースに向かって歩き出した。

「(英語) それでも年上かよ……」

「(英語) 年上の年下も関係ねえ。……それに、持ってくるより開けるほうが危ねえよ。」

……まあ、確かに。つて言うか、これはなんだ？

アタツシユケースの横には小学生が虫などを入れるプラスチックの水槽中島が大小二つ置いてあった。

……ゴミか? こんなところに捨てるなんて。

俺はアタツシユケースを慎重に持ち上げ、ゆっくりと戻ってきた。

ジョニー・マクレーはそれを受け取ると赤子を扱うかの様にアタツシユケースを地面に置き、ゆつくりと開ける。

「あ、開けて大丈夫なんですか?」

西住さんが不安げに、俺のボロボロの上着を引つ張って聞いてきた。しかし……俺は爆弾に詳しくないため、どう答えていいものか。「おっさんがやってるんだから大丈夫だろう。電車の中の爆弾も開けるのはできたし。」

俺は適当な事を言っつて西住さんを安心させるが、その言葉に根拠はない。

「「……」」

俺と西住さんは、ジョニー・マクレーが開けるアタツシユケースを注目する。

ジョニー・マクレーがアタツシユケースを開けると……赤と透明な筒の大きめの端末計りがケーブルによつて繋がっていた。

そして大きめの端末に文字が浮き出てくると共に、ブザー音が発せられる。

『I a m a b o m b . y o u h a v e j u s t a r m e d m e . (訳：爆弾が起動しました。)』

「な、何やってるんですか!?!」

西住さんも文字にされた英語は分かったのだろう。西住さんは俺の背に隠れながら、意外に大声で非難した。

プルルルル……!!!

その時、ジョニー・マクレーのポケットからベルの音が鳴り響いた。ジョニー・マクレーはさつき拾った携帯を取り出し、スピーカーモードにして通話に出た。

『(英語)もう少し手こずると思っていたが、予想以上に早く見つけれられたな。上出来だ。』

電話の相手はもちろん、サイモンからだった。

「(英語)へっ、簡単すぎるぜ!!もつと難しいのを出しな!!」

「(英語)……解いたの俺なんだけど。」

ジョニー・マクレーはサイモンに軽口をたたき、俺はため息をついた。

『(英語)さて、その爆弾には特殊な感知器が付いている。逃げようとするれば爆発するぞ。』

「(英語)……分かってる、逃げやしないよ!!」

「(英語)そんな探知機つけるぐらいなら安物の起爆装置を使うんじゃないよ」

今頃、警察に軍、きつと武偵も血眼になって学校に仕掛けられた爆弾を探しているだろう。そして無線が使えず、大混乱しているはずだ。

……どうせ混乱させるためにそんな起爆装置を使ったのか、それともブラフを言ったんだだろうが。

俺はため息を再びついた時、袖を引っ張られた。俺はその方向を見ると、予想通り西住さんが袖を引っ張っていた。

「あ、あの……」

……ああ、西住さんは英語が分からないものな。

『あの爆弾から逃げれば爆発する』だそうだ。」

「あ、ありがとうございますー」

「(英語)どうすれば爆弾を止められる!!」

ジョニー・マクレーは俺と西住さんを見つめ、サイモンに怒鳴りつけるように尋ねた。

『(英語)石塔に水槽が二つあっただろう。5Lと3Lの容量だ。その水槽に4Lの水を入れ、そいつを計りの上に置けば起爆装置は止まる。もちろん量は正確に、ピツタリ入れないと爆発するぞ?生きていれば5分後に電話をかける。では……』

ツー、ツー、ツー……

電話が切れた。ジョニー・マクレーが俺に『西住さんに今のを訳せ』と目で言ってくる。

俺は西住さんに伝える前に、石塔近くに置いてある水槽を取りに

行った。

「西住さん、大きい水槽が5L、小さいほうが3Lだ。それで4Lの水を作り、このアタツシケースにある計りに置いたら解除だそうだ。」

俺は持ってきた水槽を抱えながら西住さんに説明した。

水槽にはちゃんと油性ペンで線が書かれている。しかもごく丁寧な事に、その線の上には『3L』・『5L』と書かれてある。

「前に ☒平成○育委員会☒ でやっていたような……」

西住さんはそう言った後、顎あごに人差し指をあて、考え始めた。

「に、西住さん!! 答えは覚えてる!？」

「えつと……あ!!」

西住さんは答えを思い出したのか、大きな声を上げた。

「あ、あの時、答えの前に消灯になって……スイマセン」

「……………うん、それはシヨウガナイよね。」

俺はジヨニーおっ・マクレきーにそのことを伝え、互いにため息をつき、

考え始めた。

「(英語) 警察は出払って、俺は公園でガキのナゾナゾか」

「(英語) おっさん、愚痴ぐち言っちてないで考えてくれ!!」

「え、えつと……4Lってことは……」

そのころ ☒東○国立博物館☒では…… ☒サイモン☒ ☒達は学芸員全員を気絶・捕縛し、完全に警報が切れている事を確認すると…… ガラスを乱暴に破壊し、文化財を効率よくトラックに運び出していた。 「(独語) 見ろ!!これが国宝の『童子切安綱』・『小烏丸』・『大包平』だ!!これだけでどれほどの価値がある!?!アメリカ連邦準備銀行の金塊を盗もうと考えたことがあったが……ここほど警備が薄く、ローリス



ク・ハイリターンなどころはあるか!？」

「サイモンは興奮しながら、国宝・海磯鏡 法隆寺献納宝物 中の2枚一組の鏡)の一枚を部下に投げ渡した。部下は慌てて受け取り、ニヤニヤしながら木箱に詰め、その箱をダンプに乗せていった。

「(独語)金はレートが決まってて、しかも買い叩かれる可能性があったが……日本の文化財なら大金を出しても買う奴がいる!!」

「サイモンは刀剣以外にも、仏像や絵画、金工・陶磁器・染織が運ばれていく様子を見てさらに興奮する。

「(独語)大佐、例の物を持ってきました」

部下が布に包まれた大きな棒状の物を持ってきた。サイモンは無言でそれを受け取り、布を取ると……見事な日本刀だった。

「サイモンは日本刀をゆつくりと抜くと……刀身が付いていなかった。そのままサイモンは手早くそれを分解すると、展示されていた刀身の一本にそれらを装着していった。刀身が置かれていたところにあつた説明文には……『三日月宗近』と書かれていた。

ところで明日から『東京国立○物館』では、刀剣男子が活躍するゲームの人気のもあり、『特別展：日本の刀』のために様々な日本刀が展示される予定だった。

もちろん、国宝・重要文化財級はともかく、御物(皇室の私有物)までもが集められていたのだ。

「(独語)日本のコスプレは芸が細かいな。調整もいらず、使いやすい」

「サイモンは柄をもって日本刀を持ち、軽く振るが……目釘(刀身と柄を固定するもの)が壊れる様子もなく、実戦に耐えられそうであつた。

「サイモンはその刀を鞘にしまい、腰に佩いた。そして再び陣頭指揮を執り始めた。

「(英語)分かったぞ?!まず3Lの水を5Lの容器に移す。そして3Lの容器3分の1の水を……」

「(英語)ダメだおっさん!!それじゃあ正確じゃない!!」

おっさんが一番ダメな方法を言ったため、俺は反対した。

そもそもこの容器、 $\square \times \square$ 直方体 $\square \times \square$ ではなく $\square \times \square$ 末広がりの容器 $\square \times \square$ のため、『高さ3分の1 $\parallel$ 容積3分の1』という理屈が通らない。

……いいか、3Lの容器はあるんだ。という事は後1Lを何とかして作れば……

俺がそんな風に考えている時……

「違います!!」

「(英語)なんだ!?お前さんだってわかってないだろ!?早くそれを貸すんだ!!」

「嫌です!!早くそつちのを貸してください!!」

「(英語)やり直しだ!!」

ジョニー・マクレ<sup>おっ</sup>ーと西住さんは英語・日本語という $\square \times \square$ 異なる言語 $\square \times \square$ で喧嘩をしていた。

……ある程度は意思疎通ができていることを喜ぶべきかな。

俺はそんなことを考えながら、俺はスマホを出して答えを検索……できなかった。

俺のスマホの画面は粉々、一部は中の基盤すら見える。そして、電源ボタンを長押ししても画面が真っ黒のままだ。

……ああ!!クソどうすれば!?

そんな時だった。救世主が現れた。

「わあ〜!!!」

髪をサイドテールにし、『ボコ』のぬいぐるみを抱えた美少女が目を

輝かせて旧芝離宮恩賜公園を眺めていた。

……愛里寿ちゃん!?!なんでここに!?!

サイドテールの少女の名前は島田愛里寿。『閑話：高校生活2学期編』において巻き込まれた少女の一人だ。そして『ボコ』のファン。

「……隊長は何でここに来たかったのかしら」

「何でもアニメのモデルになったらしいわよ。」

「目を輝かせている隊長、可愛い〜!!」

後ろには大学生であろう美女が三人ほどいるのだが……愛里寿ちゃんのお姉さんだろうか。

まあ、そんなことはどうでもいい。重要なのは愛里寿ちゃんの手には『ボコ』のぬいぐるみの他に、『未開封の500mLペットボトル』が握られていたのだ。

「(英語) おっさん!!ちよつと行ってくる!!」

「(英語) ……!?!坊主何を!?!」

俺は猛ダツシユで愛里寿ちゃんの前まで走った。

「……村田お兄ちゃん?」

愛里寿ちゃんも俺に気づいたようだ。しかし、何故ここまでボロボロになりながらもダツシユで来たのか理解できなかったのだろう。愛里寿ちゃんは可愛く、コテンと首をかしげて聞いた来た。

「ハア、ハア、あ、愛里寿ちゃん……いや、武偵の村田です。そのオレンジジュースをください。」

「……え?」

愛里寿ちゃんは涙目になった。俺が愛里寿ちゃんを他人のように接しているからだろうか。

……だけど、そんな事を気にしている時間はねえ!!

俺は急いで財布を取り出し、1000円札を愛里寿ちゃんに握らせ、オレンジジュースを取……れなかった。愛里寿ちゃんは何処からそんな力が出るのか、万力の様にオレンジジュースのペットボトルを握っていた。

「ちよつと!!何やってるの!？」

「隊長のジューズを奪おうとするなんて!!」

「羨ましい!!」

愛里寿ちゃんの保護者(?)の大学生3人も加勢し、俺を責め立てる。

「い、いや……事件解決に必要で……」

俺も反論するが、愛里寿ちゃんの保護者(?)の大学生3人は勢いづけ、さらに

責め立てる。

「そもそも本当に武偵なの!？」

「武偵高校の制服じゃないわよね!!」

「隊長とどんな関係なの!？」

……ああ!!緊急事態だっっていうのに!!

「うるせえ!!緊急事態なんだ!!それとも爆死したいのか!？」

「……ッ!？」

俺は殺気を込め、大学生3人に忠告した。彼女達はその殺気を受けて怯えている。

「村田お兄ちゃん……また何かあったの?」

しかし、愛里寿ちゃんは俺の近くにいたのに平然としていた。

……嘘だろ!?!なんで平気なんだ!?!

「ああ、また爆弾事件だ。」

俺は平然としている愛里寿ちゃんに驚きつつも答えた。

「私も行く。」

愛里寿ちゃんはギロリと、鬨志と決意と殺気が込められた瞳で俺を見てきた。その目力は、普通の大人でも出せないほどの物だった。

……嘘だろ!?!『暴走した西住さん』ぐらいの圧を出すなんて!?!

「……危険だ。爆発するかもしれない。」

「……じゃあ、これは渡さない」

俺は力を入れ、ペットボトルを引っ張った。しかし、愛里寿ちゃんの手は離れず、余計に圧を強くする。

……ああ、クソッ!!時間がねえ!!

俺は愛里寿ちゃんを小脇に抱え、ジョニー・マクレーンと西住さんのいる中島へ走り出した。

「……誘拐!?!」

「隊長が誘拐された!?!」

「待てえ!!あのロリコン野郎!!」

保護者(?)の女子大生3人組が俺を追いかけたのは言うまでもない。

「(英語)坊主!!どこ行ってたんだ!!誘拐するぐらいなら少しは考えろ!!」

「離れたら爆発するんですよ!?何してるんですか!?!……って何誘拐してるんですか!?!ロリコンだったんですか!?!」

俺が中島に戻ると、ジョニー・マクレーンと西住さんはカンカンに怒っていた。

「俺はロリコンじゃねえ!!とにかく愛里寿ちゃん、ペットボトル貰うぞ!!」

俺はなぜか頬を膨らます愛里寿ちゃんからオレンジジュースのペットボトルを受け取り、銃剣を取り出して液面の部分に傷をつけた。そして開封してジュースを一気飲みした後、そのペットボトルで池の水を汲み始めた

「(英語)これ一本で0.5?だ!!」

俺はそう言って5Lの水槽にペットボトルで汲んだ水を注いだ。それを見ていたジョニー・マクレーンと西住さんは俺のやっていることを理解したようだ。

何をしたのかと言うと……

Q. 5 Lと3 Lの水槽があります。これを使い4 Lの水を計りなさい。

A. 500 mLのペットボトル2本分(1 L)と3 Lの水を汲み、合わせれば4 L。

サイモンもまさかこんな荒業でクリアするとは思っていません。かっただろう。

「これで二本目だ!!」

(英語) これに3 Lの水を足せばいいんだな!」

俺が1 Lを注ぎ入れ、ジョニー・マクレーンが3 Lの水を注いだことにより、無事に4 Lの水を完成することができた。西住さんは残り2分を切った爆弾の計りに4 Lの水が入った水槽をゆっくりと置く。

ピピピ、ピー

『DISARMED』

「二よっしゃー!!!」

俺・ジョニー・マクレーン・西住さん・愛里寿ちゃんが思い思いにハイトッチをして喜ぶ。

プルルル……

すると、あの拾った携帯が鳴りだした。

俺達三人は笑顔が消えたため息をつき、事情を知らない愛里寿ちゃん  
は首を傾げた。

ジョニー・マクレーンはポケットから拾った携帯を取り出し、通

話ボタンを押し、スピーカーモードにした。

『(英語) おめでとう、しぶとく生きていたな。』

「(英語) ああ!! やったよ!! だからさっさとこの学校か言え!! 約束だぞ!!」

ジョニー・マクレーンは苛立たしそうに答えた。

『(英語) 慌てるな。時間はたっぷりある。あと……2時間と37分も残されている。まだまだ君達の知恵が試せさ。』

「(英語) おい!! テメエ!! 今日の俺は二日酔いでメロメロなんだ!! こそお!! もう下らねえ!! なぞなぞ!! は十分だ!! 爆弾は何処だア!!」

ジョニー・マクレーンは堪忍袋の緒が切れたのか、大声で怒鳴り散らした。

「(英語) ふ、ふざけるな!! こんなこと時間稼ぎをして何が楽しい!! 弟の敵討ちなら他人を巻き込まず正々堂々とおおお!!」

俺もサイモンに怒鳴り散らした時、背後から殺気を感じた。俺は慌てて振り向くと……愛里寿ちゃんの保護者(?)の女子大生三人が、闘牛が如く俺に突っ込んできた。

ジョニー・マクレーンと西住さんはその殺気に恐れたのか、愛里寿ちゃんを抱えて俺から急いで離れる。

……え!? なに!? どういう事!? と言うか二人とも何俺をあっさり見捨ててるんだよ!?

ここで、俺は愛里寿ちゃんを『誘拐に近い形で』連れて行ったことを思い出した。そんなことをすれば……保護者(?)の女子大生三人はどうなるか……。

女子大生三人は俺から3mほどのところで一気に踏み切り、飛んだ。

「バミューダアタック!!」

ゲシツ!!

俺は女子大生三人による蹴りによって、全運動エネルギーが腹と胸に伝わる。すでにあちこち怪我をし、血も足りない俺は痛みを感じた時には宙を舞っていた。そして『蹴りによる痛み』と認識したころには池に落ちていた。

ところで、今日は12月中旬とはいえ、結構冷えた日だった。そんな時に池に落とされれば……

「ツ~~~~!?!」

痛みに寒さ、そして窒息が俺を襲ってくる。俺は慌てて上着とズボンを水中で脱ぎ、ボロボロの体を無理やり動かして中島まで向かう。何とか中島までたどり着いた俺は陸に上がり、三人に文句を言おうと……

ゲシツ!!ベキツ!!バキツ!!

文句を言う前に三人から袋叩きに会った。

「隊長を誘拐して!!」

「このロリコン!!」

「死ねえ!!!」

俺は三人から殴られ、蹴られ続けた。池に落ちた寒さよりも、痛みによる熱さが勝るなど初めての事態だ。

『(英語) ……何が起こっているんだ?』

☒サイモン☒は思わず質問した。

「(英語) ……ああ。」

ジョニー・マクレーンおっはこんな状況に呆然としたままだった。

『ふ、お嬢さんフロイライン? そっちでは何が起こっているんだい?』

「……えっと、村田さんが誘拐犯だと思われて、襲われています。」

西住さんはハイライトを消し、淡々と告げた。西住さんが抱いている愛里寿ちゃんからヤバそうなオーラが出ているが……西住さんは無視する。

『……と、とりあえず爆弾が置いてあった石塔の中に手紙が入っている。そこに書いてある場所に行け。それと村田君に☒それは私によるものではない。ご愁傷様☒と伝えてくれ。』

ツー、ツー、ツー……

電話が途切れた。西住さんはいまだにボコられているイブキを無視し、石塔まで登り手紙を取ってジョニー・マクレーンおっに渡した。



「えつと……、『さいもん せつず、ごーひいあ』」

「(英語) ありがとな……『明治神宮球場のホーム側ダックアウトへ行け?』、なんだってこんな事……」

ジョニー・マクレーは英語の手紙を読み上げ、ため息をつきながら西住さんに尋ねた。

「あー……あい どんと のう。そーりー」

ジョニー・マクレーは、拙い在必死に英語で伝えようとする西住さんに愚痴ることはできなかつた。

「(英語) それにしても……坊主をどうする?」

ジョニー・マクレーはポケットから煙草を取り出し、火をつけながら訪ねた。いまだにイブキは女子大生三人にボコボコにされていた。

「おい……お前ら……」

その時、島田愛里寿小大な鬼がイブキをボコボコにしている女子大生三人に向かって歩き始めた。

じゃなくて『盗み』かよ……

「すいませんでしたー!!!」

「……（ガタガタガタ）」

女子大生三人が土下座している目の前で、俺はパンツ一丁のまま毛布くるに包まって震えていた。

別に俺が特殊な性癖に目覚めたわけではない。☒冤罪☒でボコしていた女子大生三人が愛里寿ちゃんに叱られ、俺はその間に☒四次元倉庫☒から毛布を急いで取り出して暖を取っていたのだ。

「……真剣に謝ってるの？」

女子大生三人の後ろで、愛里寿ちゃんは圧をかける。その圧に比例して、女子大生三人が地面に頭を擦る回数が増えていく。

「……いいや。もう、いいから。だ、誰だって、間違いはあるから。」

俺は寒さに震えながら、絞り出すように言った。

周囲にいる人達の俺を見る目がとても痛い。俺は早くこの場から

逃げたかった。

「ははあく!!!」

「……………」

俺はこの場から去ろうと立ち上がり、急いでこの場から離れようとしてできなかった。

「……村田お兄ちゃん、行くの？」

俺が包くるまっている毛布を掴み、目を潤ませながら愛里寿ちゃんは聞いてきた。

「……実質毛布これ一枚だから、掴まないで欲しいんだけど。」

「あ、あ……ビエックシ!!!」

俺は愛里寿ちゃんを安心させるため、少し格好つけて言おうとして……寒さのせいで失敗した。

「無事に帰ってきて……ね」

愛里寿ちゃんは抱き着いた後、とても小さな声でつぶやいたが……俺にはしつかりと届いた。

……こんな小学生ほどの子に心配されるなんて、俺はそんなに信用できないか？

一瞬そう思ったが、今までの戦闘を思い出した。いつもいつもボロボロになって帰ってくるため、信用できるはずがない。

「……ああ、少なくとも死ぬ気はねえ。大丈夫、ちゃんと戻ってくるから。」

俺は愛里寿ちゃんの頭を軽く撫でた時、愛里寿ちゃんはその手をガシッと掴んだ。

愛里寿ちゃんはまだ片方の手で頭のリボンをほどいた後、そのリボンを俺の手首に結わいた。

「……お、御守り!!」

愛里寿ちゃんは顔を真っ赤にしながら言った。土下座している女子大生三人が殺気を放っているが……そこまで怖くないので無視する。

「……ありがとな。じゃあ、行ってくる。」

俺はそう言っただけで歩きだした。

（英語）何やってるんだアイツ？裸に毛布で。」

「……あ、アハハハ」

ジョニー・マクレーと西住さんの言葉で現実に戻った。裸に毛布の男とロリ少女……変態と騙されている幼女にしか見えないだろう。

俺はジョニー・マクレーの言葉で……心に大きな傷を負った。

その後、俺は四次元倉庫から着替え（武偵高校の制服）を取り出し、トイレで着替えた。そして、シャツに血が染みるのを無視しながら、俺は二人と合流した。

「ああ……何やってるんだろ、俺……」

ついさつき俺は黒歴史を作ったため、悶々としながら旧芝離宮恩賜公園を出ようとしていた。

「（英語）坊主、戦争映画の主人公にでもなったつもりか？」

ジョニー・マクレイは揶揄うネタができたと笑いながら言った。

ついでに、ジョニー・マクレイの手にはさつき解除したアタツシユケースの爆弾がある。民間人を巻き込ませないため、渋々持ってきたのだ。

「（英語）……実際、本当に映画の主人公になってるだろう？」

俺はため息をつきながら言った。前話でもある様に、俺とジョニー・マクレイは映画『Die Hards』の主人公のモデルになっている。

「（英語）そりやそうだったな。」

「（英語）いつまでもニヤけてるんじゃないやねえよ。いい年こいた親父がよ……」

俺とジョニー・マクレイが軽口を叩きあっている中、西住さんは

……慈愛（？）の目で俺を見ていた。

……なに、この『同志よ、歓迎します』みたいな瞳は。

俺はそこで、西住さんが警察庁で『犯人を煽る』と言う黒歴史を作っていたことを思い出した。

……うわあ、変な仲間意識持ってやがる。

俺はため息をついた。

「そう言えば、どこから着替えを出したんですか？」

西住さんは不思議そうに聞いてきた。

「ゴメン、機密なんだ」

……  
☒☒四次元倉庫☒☒なんて言っても理解できないだろうしなあ

さて、俺達三人は旧芝離宮恩賜公園を出て、鏡高組から奪<sup>借り</sup>ったセンチュリーに乗り込もうとした時だった。

「おい!!待てえ!!このクソガキいいい!!万引きだア!!」

俺はその声が聞こえた方向を見ると……学生服を着た中学生三人が俺達の方へ走って逃げてきた。その中学生達の手には……スナック菓子や菓子パンが握られている。

「(英語)なんだ?アレ?」

「(英語)万引きだつて」

俺とジヨニー・マクレ<sup>おっ</sup>ー<sup>ん</sup>ため息をついた後、その万引き中学生二人の襟をつかみ、残った一人に足をかけて転ばせた。西住さんは転んだ中学生に馬乗りになり、背中に腕を回して取り押さえた。

ポキッ……

「い、いてええええええ!!!」

西住さんが取り押さえている少年が悲鳴をあげた。その少年の腕は……可動範囲外まで引つ張られている。

……西住さんも大分アグレッシブになったな。

俺がそう思った時、襟をつかんでいる少年達が暴れ出した。

「おい、離せこの野郎!!!」

「このハゲ!!離せ!!」

バキッ!!ベキッ!!

『体罰?何それ?』とばかりに、俺とジヨニー・マクレ<sup>おっ</sup>ー<sup>ん</sup>は捕まえた少年を殴った。そのおかげか、さつきまで暴れて逃げようとしていた万

引き中学生二人は大人しくなった。

「(英語) こんな菓子と引き換えに少年院にぶち込まれたいか?」

ジョニー・マクレーンは落としたスナック菓子を拾い、呆れながら言った。

「こんなのを盗んでどうなる? 遊び半分で少年院にでも行きたいのか?」

俺はジョニー・マクレーンおっ さの言葉を諭すさとように訳して言った。

「いや……あの、石川君が『今は警察がいらない』って……」

『今なら盗み放題だ』って……」

少年達は俺達の顔を見ず、地面を向いて小さな声で言った(西住さんに取り押さえられている一人を除く)。

「その~~石川君~~が命令したら何でもするのか? ……って、おい!! 今警察がいらないから盗み放題』って言ったか!」

「……ハイ」

俺はあることが引つかかった。上野には『東京国立博○館』・『国立科学博物館』・『国立西洋美術館』・『東京都美術館』・『上野動物園』など貴重な物を収める博物館が多い。その上野の一つ隣、爆発が起こった鶯谷も博物館から近いはずだ。今、東京中……いや、首都圏中の警察が爆弾探しをしているため……博物館の物が盗まれやすくなっている。

俺は慌ててスマホを持ち、鶯谷の駅を調べようとしたが……自分のスマホが壊れて使えない事を思い出した。

「おい!! スマホ持っているか!」

「え……?」

「いいから早く!!」

俺はスマホを受け取ると、『Google Map』を開き、『鶯谷駅』を検索した。その結果……『鶯谷駅』は『東京○立博物館』にとっても近いという事が分かった

……おい、もしかして東京国立博物館の展示物が盗まれるとかねえよな!?

俺は『東京国立○物館』のホームページを検索すると……明日から

『特別展・日本の刀』が開かれるそうさ。その特別展は日本全国から刀が集まり、『天下五剣』『天下三名槍』などの有名な物だけでなく、御物すら展示されるそうさ。

……盗む。俺が犯人だったら絶対盗む。

俺の勘も『博物館』へ警報を発している。

〔英語〕おい、坊主……」

〔英語〕おっさん、犯人の居場所が分かったかもしれないねえ。おっさんの携帯は繋がるか？」

〔英語〕ああ……。場所は？」

〔英語〕……博物館だ。」

俺は事の重大さに気が付き、冷汗を流しながら……スマホを少年に返した。

俺はその☒☒万引き三人組☒☒を店員に引き渡した後、西住さんにゼンチュリーの鍵を渡した。

「西住さん。☒☒サイモン☒☒は今、『東○国立博物館』で物色している可能性がある!!『東京国立博○館』は鶯谷駅近くで、しかも明日から全国から集めた日本刀を展示する予定だったらしい。俺なら……絶対それらを盗む。」

その言葉を聞き、西住さんは困惑していた。

「え……でも、確信はないんですよね!？」

「ああ、確信はないが……その可能性が高い。すまないけど、神宮球場へは一人で行ってくれ!!何かあったらおっさんへ連絡だ!!何もなかったら俺達も神宮球場へ向かう!!」

俺はそう伝えると、浜松町駅に路駐してあるボロ車ビュートへ向かって走り出した。旧芝離宮公園から浜松町駅は目と鼻の先、歩いて1〜2分かからない。

〔英語〕残り2時間半だ!!気をつけろよ!!」

ジョニーおっさん・マクレイマクレイは旧芝離宮恩賜公園で拾ったスマホを西住さん

に投げ渡し、走って俺を追いかけた。

「え……う？は？……なんで一般人にこういう重大な事を任せるんですか!？」

……西住さんは『一般人』じゃなくて、『逸般人』だろ。

俺はボロ車ビュートにたどり着き、車のキーを探し始めた。

俺はポケットからキーを探し出し、運転席のドアの鍵穴に差し込もうとした時……『駐車違反』のステッカーを発見した。

「ウソだろ!?!なんで違反になってるんだよ!!緊急事態だぞ!？」

〔英語〕坊主!!早くしろ!!」

ブオオオオオ……!!!

俺はボロ車ビュートを猛スピードで運転し、『東京国立○物館』へ向かっていった。しかし……車の量が多く、道も広いとは言えない。そのため、スピードは出しても移動速度は遅い。

……ああ!!イライラする。

〔英語〕なんだって博物館に行くんだ?」

ジョニーおっ・マクレーンんはそう言いながら助手席の窓を開けた。そして胸元からタバコを取り出し、火をつけた。

〔英語〕おっさん、この車は借りものなんだけど!？」

〔英語〕ここまでボロいんだ。タバコの臭いだってバレやしねえよ。』  
ジョニーおっ・マクレーンんはお構いなくタバコの煙を吐いた。煙は開けた窓から逃げていく。

俺はため息をつきながら、ボロ車ビュートの窓全てを全開にした。

〔英語〕おっさん、鶯谷駅で爆発があっただろ?」

〔英語〕午前中の、あの列車の件か?」



ジョニー・マクレーはそう訊ねながら、タバコの灰を外へ捨てた。

「(英語)おつさん……。まあいい。その爆発現場近くには『東京国立○博物館』がある。とりあえず、『日本最大の博物館』と思えばいい。」

「(英語)☒☒スミソニアン☒☒みたいなものか?」

「(英語)☒☒スミソニアン☒☒ほどじゃないけどな。そこで、明日から日本全国から集められた『日本刀の特別展』が開かれるらしい。」

ジョニー・マクレーはため息交じりの紫煙を吐き出した後、携帯灰皿を取り出して吸殻を捨てた。

「(英語)……そいつは盗むな。」

「(英語)だろ?……それに日本刀だけじゃない。仏像・壺・茶碗・絵画も貴重なものが沢山あるうううう!」

俺は前の車を追い抜くために反対車線に入った瞬間、目の前に☒☒黒のバン☒☒とギリギリですれ違った。

プルルルル……

そんな時、ジョニー・マクレーの携帯が鳴った。

「(英語)はい、もしもし!」

『ま、マクレーさんですか?!ハア……ハア……。私です……西住みほです!!神宮球場に着きました!!』

「(英語)なんだ?早いじゃねえか。」

ジョニー・マクレーはスピーカーモードにし、俺に聞こえるようにした。

……ん?やけに早くないか?

俺達と西住さんが分かれてから5分ちよつと。俺達は猛スピードを出し、やつと行程の半分を過ぎたところ。

ところで、旧芝離宮恩賜公園から俺達が向かう『東京国立○博物館』までの所要時間は約20分。そして、旧芝離宮恩賜公園から西住さんが今いる神宮球場への所要時間も約20分かかる。要はだいたい同じ距離なのだ。

それなのに……西住さんはもう明治神宮に着いているという事は……

……え!? どうやったたらそんな魔法ができるんだよ!? 戦車道やつて  
いけば走<sup>レ</sup>り屋<sup>ヲ</sup>並<sup>ミ</sup>みの運<sup>テ</sup>転<sup>シ</sup>技術<sup>ヲ</sup>持<sup>テ</sup>てるの!? 西<sup>ノ</sup>住<sup>ミ</sup>みほは化<sup>ケ</sup>け物<sup>カ</sup>  
!?

「に、西住さん!? どんだけ飛ばしたんだよ!! ケガしてないか!」

『……え? 特に怪我はありませんよ?』

俺は思わず大声で聞いたが……西住さんは不思議そうに答えただけ  
だった。

「(英語) なに大声で叫ぶんだよ。余計に頭が痛くなる。」

ジ<sup>ョ</sup>ニ<sup>ー</sup>・マク<sup>レ</sup>ーは鬱<sup>ウツ</sup>陶<sup>トウ</sup>しそうに俺へ文句を言った。

「(英語) お、おっさん!! 西住さんの場所俺<sup>レ</sup>達<sup>ガ</sup>行く博物館<sup>ニ</sup>  
の距離はだいたい同じなんだよ!!……しかも俺達はやつと半分を過  
ぎたくらいだ!!」

「(英語) ……!? おい、嬢ちゃん!! 大丈夫か!」

『…? あー……いえす、いつつ おーけー』

ジ<sup>ョ</sup>ニ<sup>ー</sup>・マク<sup>レ</sup>ーは西住さんの声を聴いた後、頭を押さえた。

『と、とにかく!! 指定された席に向かったらトランプのジョ  
ーカ<sup>ー</sup>二枚が置かれていました。両方とも穴が開いていて Game  
Over について書かれています。』

……トランプのジョ<sup>ー</sup>カ<sup>ー</sup>? 穴が開いていて Game O  
ver が書かれている? という意味だ?

「分かった!! そっちは危険だから『東京国立○物館』に向かってくれ!!  
そこで落ち合おう!!……くれぐれも安全運転で。」

『分かりました!!』

ツー、ツー、ツー……

電話が切れた。ジ<sup>ョ</sup>ニ<sup>ー</sup>・マク<sup>レ</sup>ーはそれを確認すると、スマホを  
自分の懐にしまった。そしてタバコを啜え、火をつけた。

「(英語) で、なんだって?」

「(英語) トランプのジョ<sup>ー</sup>カ<sup>ー</sup>が二枚置かれてたってよ。両方と  
も穴が開いていて Game Over について書かれてあったそう  
だ。意味が分かるか?」

「ジョニー・マクレーンはタバコを啜えながら肩をすくめた。ジョニー・マクレーンも意味が分からないようだ。」

「(英語)とにかく先を急ごう。……って坊主、嬢ちゃんに運転負けてんのか?」

「(英語)うるせえ。西住さんは今までこういう事をずっと習って来てるんだよ。」

とは言え、西住さんが『東京○立博物館』に到着する前には着きにくい。

俺はボロ車をさらに加速させた。

「(英語) 坊主!!前!!前!!!」

「(英語) うわあああああ!!!」

首都高速上野から降りた後、上野公園通りを爆走し『東京国立博物館』の敷地に入ろうとした時、急にトラックの車列が現れた。

俺は慌ててハンドルを切り……左のドアミラーが吹っ飛んだが、何とかトラックとの衝突を避けることができた。

「(英語) 坊主!!ちゃんと前を見ろ!!」

「(英語) 見てこれなんだよ!!」

ボロ車はトラックの車列にぶつかりそうになりながらも、『東京国立博物館』の敷地に滑り込んだ。

俺は時計を確認し……12分で到着したことを知った。

……何とか無事に到着したな。

俺とジョニー・マクレーンはヨロヨロと車から降りた。その様子を、この警備員たちは遠目から見ているだけだった。

……おかしい、なぜ俺達に駆け寄らない。

いきなり不審な車が敷地に入り込んだのだ。普通なら警備員

たちは不審な車ビュートに近寄って確認を取るか、武器を取り警戒するはずだ。

しかし、この警備員たちは呑気に見ているだけ。しかも一人は無線機を使い誰かと話している。

……絶対におかしい。ここは国立博物館だ。少なくとも無線の使用は禁止という事は伝わっているはず。

〔英語〕おっさん……

〔英語〕ああ……限りなく黒黒に近いぞ……

俺とジョニー・マクレーおっさんは警戒しながら、博物館の本館へ向かった。

サイモンはトラックに乗っていた。

さつき『東京国立博○館』を出ようとした時、ボロ車ビュートと衝突しそうになったのだが……有難い事に事故が起こらなかったため、ホツとしていた。

その時だった。無線に報告が入った。

『奴らです……奴らが来ました。』

この声は、『東京国○博物館』で警備員に変装しているギンターギンターの声だった。

「奴とは……？誰のことを言っているんだ？」

ギンターは最近入った隊員であるため、報告が不明瞭だった。そのためにサイモンはギンターに聞き返した。

『マクレーと村田です。さつきぶつかりそうになった古い車に乗っていました。車から降りて本館の方へ来ます。』

サイモンは頭が痛くなってきた。

『最終的に神宮球場で村田とマクレーを狙撃によって殺す』計

画だったのだが、来たのは██巻き込んだ少女██だけだった。██サイモン██は██巻き込んだ少女██に手をかけず、神宮球場にいる部隊を引き上げさせたのだった。

確かに、あの二人ならば狙撃から逃れ、生き延びることも考えていた。しかし、██村田██と██マクレイ██が『東京国立博○館』に来るなど……完全に想定外だった。

「ああ、全く予定外な事ばかりだ。」

██サイモン██はそう言った後、懐からアスピリン錠を取り出して水と一緒に飲んだ。

「(独語) 構わん!! 殺させろ!! 遊びは終わりだ!!」  
「……」

運転中の██マシアス・タルゴ██は苛立たしそうに大声で言い、その妻██カティア・タルゴ██は無言だった。

██サイモン██が雇ったこの██タルゴ夫妻██は……正直言って面倒だった。

夫の██マシアス・タルゴ██はそこらにある物で繊細な爆弾を作れるのだが……性格は真逆で大雑把・浅慮・脳筋だった。その性格のせいで時々██先生██に考えてもらった計画の邪魔をしてくる。

妻の██カティア・タルゴ██は美女で、無口であり人と関わらないタイプの人間なのだが……血の気は多いのか、ナイフを持って敵へ██イの一番██で突っ込んでいく。そのおかげで計画にはない殺傷沙汰も多かった。

「そこで眠ってもらおう。ロビーの██カール██には俺から連絡しておく。██カール██以外の部隊は全て撤収だ。引き揚げろ。」

『了解しました。』

俺達が本館のエントランスに入ると同時に、警備員達は近くに止めてあった青のセダンに乗って何処かへ行ってしまった。

……おい、警備員達が警備を放棄して何処かへ行くなんて、絶対に怪しいぞ!?

俺は思わず腰の銃剣を握った。

「(英語) 何か? 本日は休館ですが。」

俺が銃剣を握ったと同時に、階段を降りていた学芸員(?)に声をかけられた。

……おかしい。この学芸員はやけに体格が良くて、しかも歩き方が軍人・警官・武偵の様な訓練された人間の歩き方だ。

「(英語) ジョニー・マクレー、警察だ。」

「武偵の村田です。」

すると学芸員はゆっくりと近寄ってきた。

「(英語) その怪我、大丈夫ですか?」

学芸員はジョニー・マクレーの格好を見て、笑顔で聞いてきた。

「(英語) ああ……まあな。」

ジョニー・マクレーはそう答えた。

ついでに、俺はさつき着替えたために服装はキレイなままだ。多少シャツや上着に血のシミが出来始めているが。

「(英語) ご用件はなんですか? マクレー警部補、村田大尉?」

……俺は武偵と言ったはずだ。それにおっさんも警察としか言っていない。それなのに『俺の軍の階級』『おっさんの階級』を当てられるはずがない。

俺はさらに警戒する。

「(英語) 今朝から変わったことはないか?」

ジョニー・マクレーはごく普通にその学芸員(?)に質問した。

「(英語) ええ、山手線のb……」

「(英語) もちろん『山手線の爆発』以外の事です。そうだな……午後から変わったことはありませんか?」

俺はそう言いながら周りを見た。

よく見ると……床がキラキラと輝いている。きっとガラスの細かい破片が散乱しているのだろう。もちろん、『普段もガラス片が床に散らばっている』ことなどありえない。

「(英語)別に? 爆破騒ぎから外は警官であふれています。ご心配なら一緒に中を見回りますか?」

そう言つて学芸員(?)はエレベーターの方へ向かつて歩き出した。

「(英語) ああ、ぜひ頼む。」

ジョニー・マクレーンおっは鋭い目で回りを見ながら言った。

「(英語) それは有難い。」

俺はそう言いながら、その学芸員(?)を見た。やはり……訓練された人間の歩き方だった。

「(英語) 全く、酷い寒さですね。」

「(英語) ああ、全くだ。」

学芸員(?)の言葉に、ジョニー・マクレーンおっは頷いた。

「(英語) この後きつと、降るでしょうね。」

そして、エレベーターの前に着いた。そこには……他の学芸員が4人にスーツ姿の男が一人いた。

「(英語) お仲間です。彼は、えつと……オットー刑事

案内をしてくれた学芸員(?)はスーツの男を紹介した。

「(英語) よろしく!」

「……。」

その刑事は無言で俺達と握手をした。しかし、その刑事は……何かおかしかった。

……なんだ? こいつ?

この刑事、名前も見た目もほぼ外人……しかも、スーツの胸ポケットに警察手帳を引っかけ、バッジを見せびらかすかの様に身に着けていた。まるで『自分は警察だ』と主張したいかのよう……。

俺はその刑事を見て確信した。ここは敵陣だと……

「(英語) おっさん……」

「(英語) 分かってる。ゴチャゴチャ言うな」

キーン……

ちようどその時、エレベーターが着いたようだ。ドアが開くと学芸員(?)が『先どうぞ』とばかりにエレベーターを指した。

俺とジョニー・マクレーンが先にエレベーターに入った後、学芸員達や刑事が入り、俺達二人を囲むようにエレベーターの隅に陣取った。

「(英語) 運動のため、普段は階段を使っているんですが……こんな寒い日にはつい $\square\square$ リフト $\square\square$ に乗ってしまいます。」

最後に、俺達を案内した学芸員(?)が入り、 $\square\square$ 二階 $\square\square$ へのボタンを押した。そしてエレベーターのドアがゆっくりと閉まり始める。

……ヤバい!? こいつら自然に俺達を囲みやがった!?

改めて観察すると……俺達を囲む学芸員(?)達と刑事は、俺達を優に超える身長を持ち主だった。俺は170cm未満の身長、ジョニー・マクレーンは180cm強の身長なのだが……それを超える身長となると、180cm後半以上と算出される。

……ガタイでも、人数でも負けている。そうになると、奇襲しかねえ!!

「(英語) おい、警察庁長官の名前はなんだっけ? 未成年との不倫で今問題になってるんだろ?」

「そう言えば、今年のプロ野球はどこが優勝してるか覚えてます?」

『上へ参ります』

エレベーターのドアが完全に閉まると同時に、ジョニー・マクレーンは英語、俺は日本語で他愛もない質問を投げかけた。しかし、誰も答えることができなかった。

「(英語) なんだ、そんなことも知らねえのか? 今見せてやるよ」

「みんな知らないんですか? なんだ、調べるしかないかあ」



ジョニー・マクレーンと俺は手を懐にやった。

……さあ、奇襲の始まりだ!!!

ダアンダアンダアン!! ザシユツ!!

ジョニー・マクレーンは上着越しに敵目<sup>学芸員</sup>がけて発砲し、俺は銃剣を抜き刑事（偽）と学芸員の顔を斬った。

「ぐああああ!!!」

「ツツ!!」

撃たれたor斬られた敵<sup>奴ら</sup>は悲鳴をあげ、無事だった学芸員の一人が銃を慌てて握った。

ついでに、俺はジョニー・マクレーンの撃った弾が跳弾し、横っ腹に被弾したのだが……無視する。

（英語）チクシヨウ!! クソツタレ!!

「ああ!! 降る降るってのは血か!？」

ジョニー・マクレーンは暴れる最後の一人に掴みかかった。そして俺は銃剣で顔を切り裂いた二人の首を落とした後、ジョニー・マクレーンと掴みあっている最後の一人の背中に銃剣を刺した。

俺が背中を刺した時、最後の一人の動きが一瞬止まった。ジョニー・マクレーンはそれを見逃さず、敵の頭に銃口をつけて発砲する。

ダアン!!

俺とジョニー・マクレーンは返り血で真っ赤に染まった。

キーン

『二階です。』

俺達は血まみれになりながら、何とかエレベーターを出た。

西住みほはセンチユリーを飛ばし、『神宮球場』から『東京国○博物館』

館』までを7分ほどで到着した（普通は20分以上かかる）。

途中トラツクの車列にぶつかりそうになりながらも、東京国○博物館に滑り込んだ。西住みほは車から降りると……博物館がやけに静かな事に気が付いた。

……もしかして、村田さんとマクレーさんは死んだかも……

嫌な考えが脳裏をよぎる。

西住みほは……目の前にある、見事な帝冠様式の『東京国○博物館本館』へ走った。

本館へ入ると、中は静かだった。まるで中には誰もいないような

……

……なんだろう、これ。

やけに床がキラキラと光り輝いているために疑問が生じた。西住みほは床に顔を近づけて観察すると……細かなガラス片があたり一面にバラまかれていた。

……なんでガラス片が……

ダアン!!キーン!!

上の階でエレベーターの音が聞こえた。西住みほはその音の元へ走って向かった。

〔(英語) はあ、はあ……なんでこんな目に……〕

〔(英語) チクシヨウ!!おっさんがいるといつもこうだ!!〕

俺達は返り血を浴び、ボロボロの体で何とかエレベーターから這い出てきた。

すると、ジヨニー・マクレーは死んだ敵達の所持品をあさり始めた。何か証拠品や敵につながる物を探しているのだろう。

カツツ…カツツ…カツツ……

「ジョニー・マクレーンが所持品をあさり始めた時、階段から足音が聞こえた。」

「……もしかして、残党か？」

「俺はため息をつきながら銃剣をしまい、代わりに14年式拳銃を取り出した。」

「おっさん、行ってくる。」

「……ああ。気をつけろよ?」

「分かってらあ……」

「ジョニー・マクレーンは敵の所持品の確認で忙しい。それに、俺は敵の所持品から情報を得るなんてことはできない。そのため、俺が残った敵の対処に行くのは必然だろう。」

「……軍じゃなくて警察に入るべきだったかな。」

「俺は足音を消し、そう思いながら音がする方へ移動した。」

「カツツ…カツツ…カツツ……」

「敵が至近距離に来た時……俺は14年式拳銃を構えて、敵の前に出た。」

「動くな!!両手を上げろ!!」

「え!!……待って!!待ってください!!」

「靴音の主は西住さんだったらいい。西住さんは慌てて両手を上げ、無抵抗の意思を俺に伝える。」

「俺は西住さんだと確認すると、14年式の銃口を天井へ向けた。」

「……お、驚かすなよ。」

「俺は14年式をしまいながら……ホッと胸をなでおろした。」

「……って村田さん!?その血は!?!」

「すると、西住さんは俺が血まみれな事に気が付いたらいい。彼女は慌てて俺に近寄ってきてその部分に触れようと……」

「大丈夫、ただの返り血だ。……手が汚れるぞ」

「俺は西住さんの手を払いのけ、ハンカチを取り出して血をぬぐう。」

「な、何があったんですか!?!」

「あつちにおっさんがいる。その場を見ればわかるさ。」

俺はそう言つてジョニー・マクレーンを指さした。西住さんがその方向へ走つて向かうのを確認すると、俺は近くのベンチに倒れこんだ。

……ああ、血が足りねえ。

俺はボーつとする頭を押さえた。

今はアドレナリンやら脳内麻薬やらで痛覚がマヒしているが……あちこち被弾し、多数の打撲を受け、血を流し過ぎた体はもう限界だ。「え!?これ……し、死んでる!?!」

〔英語〕ああ、そうだ。……おい、嬢ちゃん。これはなんだ?」

「……『入港証』?」

〔英語〕なんだつて?……まあ良い。目的は復讐じゃない、盗みだ。さっきのトラック達に乗せたんだろう。追いかけるぞ!!」

「わ、分かりました!!」

奥でジョニー・マクレーンと西住さんの話が聞こえてくる。

……はあ、あのトラックの車列を追いかける必要があるな。こんなところで寝てる場合じゃない。

俺は重い腕で自分の頬を二回叩き、強制的に意識を覚醒させる。

……これじゃ足りないな。

俺は四次元倉庫からラム酒を取り出し、それを傷口にぶつかけた。

「ぐ……ウア……」

痛みで脳が刺激され、さらに意識がはつきりする。

……ああ、クソツツ!!今日はなんて日だ。

俺はため息を吐きながら立ち上がった。

〔英語〕坊主、さっさと行くぞ」

〔英語〕ああ、分かつてるよ。」

重い体を動かし、ボロ車へ向かった。

「劉先生、~~サイモン~~が例の物と人を確保したそうです。」

「よし……腹ごしらえもすんだ。そろそろ調布へ向かうか。」

劉翔武御一行は東京のラーメン屋にいた。

そのラーメン店は狭くて汚いのだが、知る人ぞ知る有名店だ。そのラーメン店に劉翔武と司馬鵬、そしてサングラスに黒スーツ数人がラーメンを啜っている光景は……完全にコントだった。

「あの……劉先生？こんなところでラーメンを食べててもいいのですか？」

司馬鵬はそう言いながらも……美味そうにラーメンを啜る。

東京は……敵の懐の中。警察・軍・武偵が慌てて爆弾探しをしているが、それでも襲撃の危険性はある。

「日本では~~腹~~が減っては戦が出来ぬ~~と~~言うらしい。何をやるにもまずは~~腹~~ごしらえ~~だ~~。せつかく日本に来たのだ。日式拉麵でも食つていこうじゃないか。」

劉翔武はそう言った後、美味そうにラーメンのスープを飲み干した。そして『食った食った』とばかりにティッシュで口元を拭き、爪楊枝を啜えた。

「司馬鵬、お前は鏡高組本部へ行け。諸葛静幻が心配だろうか？」

「……しかし。」

そして、劉翔武は雰囲気を変えて司馬鵬へ言い放った。

司馬鵬は『諸葛静幻に拾われた過去』があつた。そのため、司馬鵬は遠山キンジと戦う諸葛静幻のもとに向かいたかつたのだが……『劉翔武の護衛』が今回の任務であつたため、向かう事が出来なかつたのだ。

「いい、調布飛行場まで襲撃があるとは思えん。それに諸葛の方へ向かいたいだろう？……ただし、飛行機が出るまでには戻れ。」

「……分かりました。」

司馬鵬はラーメンのスープ一滴も残さず完食すると、走って店を出ていった。

劉翔武は『若いっていいなあ』と思いながらその背中を見送った後、財布を探し始めが……見つからない。

「お、おい。お前たち財布は知らないか？」

「財布なら司馬鵬様が管理しているはずですが……。」

サングラス黒スーツの一人が『何を言っているんだ』とばかりに不思議そうに答えた。

「……お、お前たちの中で財布を持っている者は？」

その言葉に……全員が首を横に振った。劉翔武は冷汗をかき始めた。

「し、司馬鵬を呼び戻せ!!早く!!」

1時間後、財布を返しに来た司馬鵬が戻るまで劉翔武御一行は店で皿洗いをやっていた。

そのせいで軍に劉翔武の居場所がバレてしまったのだが……それを劉翔武御一行はまだ知らない。

……

「(英語)エレベータにいた全員、これを持ってやがった。」

ジョニー・マクレーンおっ きは神妙そうな顔つきで『何かのカード』を渡してきた。

「(英語)……『東京港の入港証』?」

それは『東京港の入港証』だった。

俺はこのカードを観察してみるが、これが本物か偽物かわからなかった。しかし、これによつて☒サイモン☒は東京港へ向かうことが予想できる。ということは……

「(英語)『東京港』?……港か!!」

ジョニー・マクレーンおっ きも気が付いたようだ。おそらく☒サイモン☒は大量の奪った物品を船で持ち出すつもりなのだろう。

「よし、西住さん!!『東京港』行きながらあのトラックを探すぞ!!シートベルトはしっかりな!!」

俺はそう言つてボロ車のアクセルを踏み込んだ。

「あの……ここで脱落つていうことはできませんか?」

「気持ちに分かるけど……西住さんもマークされてるはずだぞ?まだ一緒にいたほうが安全だ。」

「ですよ。アハ、アハハ……」

ボロ車では、ハイライトが消えた西住さんの虚しい笑い声が響いた。

「乗つても地獄、降りても地獄かあ……」

「西住さん!! さっさと立ち直ってシートベルトつける!! あぶねえぞ!!」

『鏡高組から奪ったセンチユリー』でのカーチェイスの時、俺はシートベルトをつけなかったおかげで多数の怪我を負ったのだ。

西住さんも同じ目に会って欲しくないため忠告し、俺もシートベルトをつけようした。

プチッ!!

その時、布が裂ける様な音がした。シートベルトの金具に伝わる  
⊠巻き戻るバネの力⊠を一切感じない。

俺は恐る恐るシートベルトを見ると……運転席側のシートベルトが千切れていた。

カチン!!

「このボロ車ああああ!!!」

プスン! プスン!!

俺が苛立たし気に叫んだと同時に、ボロ車のエンジンの調子が悪くなった。

……ヤバい!! 機嫌が悪くなった!?

このボロ車は……何故だかわからないのだが、悪口を言うとは機嫌を損ねてどこか調子が悪くなるのだ。そして謝り続けると⊠なぜか⊠機嫌が直る

……こんな時にエンジントラブルとかシヤレにならないぞ!?

俺は片手でハンドルを擦りながら謝り始めた。

「ごめんね。ほら……言葉の綾で、いきなりシートベルトが切れたから……いや、本当にごめね。機嫌直してねえ……」

「アハハ……私、生きて帰れたら東京タワー限定『タワー・オブ・ボコ』をかうんだあ……」

車内では『必死に謝る少年の声』と『空笑いをする少女の声』が響く。

「(英語)……お前ら、何してるんだ?」



ジョニー・マクレーンはタバコに火をつけ、ため息と紫煙交じりにつぶやいた。

「サイモンは『村田とマクレーンを殺した』という報告を待っていた。しかし、いくら時間がたっても連絡が来ない。無線からはノイズ音ばかりが聞こえる。」

「カール どうした？まだ殺れないのか？」

「サイモンが無線機越しに尋ねた。その時だった。」

「(英語)残念!カールはくたばった!!もう一度繰り返すカールはくたばった!!カールのお友達もだ!!」

ジョニー・マクレーンの大声が無線から放たれた。タルゴ夫妻はキツと無線機の方へ視線を向けた。

「(英語)……ジョニー、我々は今とても重要で崇高な目的のために動いている。博物館にはまだまだ展示物があつただろう?我々が盗んだという事にするから……それで手を打たないか?」

「(英語)俺の条件を言ってやる!!隠れている岩の下から這い出してくな!!踏み潰してやるぜ!!」

『あれだ!!あのトラックだ!!』

ジョニー・マクレーンの声と共に、村田イブキの声が聞こえた。

奴らは自分たちのトラックに追いついたらしい。サイドミラーを確認すると、奥の方にボロボロの車が見える。

「カールを待ったためにゆっくりと進み、途中パーキングエリアで休憩を取ったのが仇<sup>あだ</sup>となったようだ。」

バン!!

「サイモンは思いっきりドアを殴り、苛立つ心を押しつぶして無理やり平静を保つ。」

「サイモンは思い出した。『軍服風の制服を着た少女のあの煽あおりよりはマシじゃないか』と……」

「やってくれるじゃないか……!!」

「サイモンはそう言っただけで無線を切った。」

「だから早く殺せと言ったんだ!!」

「……。」

夫：マシアス・タルゴが怒鳴り散らし、妻：カティア・タルゴは目をつむった。

「サイモンは頭が痛くなってきた。マシアス・タルゴの怒鳴り声が頭に響く。」

「ご忠告ありがとうございます。」

「サイモンはそう言っていると胸元からアスピリンを取り出し、水と一緒に飲んだ。」

ジョニー・マクレーと村田イブキがカール達から逃れ、自分達を補足するとは予想もしていなかった。

「大丈夫だ。今度こそ奴は死ぬ。……必ずな。」

「サイモンはそう言っただけで己を落ち着かせ、無線機を持った。」

「ニルスは奴らが来た。ここで必ず殺せ……いいいな?」

『ええ、分かっています。安心してください。』

無線機からはニルスからの頼もしい声が聞こえた。

俺はボロ車ビュートに謝り続け、何とかエンジンの調子が戻った。そこで俺はシートベルトをしない代わりに戦闘用ヘルメットを被り、首都高を爆走していた。

「(英語) 坊主!! 本当によつちでいいのか!」

ジョニー・マクレーンはそう言って拳銃を取り出した。そして弾倉を取り出し、残弾を確認している。

「(英語) 遠回りしていなければこっちで行くはずだ!! 最悪、東京港で待ち伏せすればいい!!……それよりもおっさん!! 軍でも警察でもいいから連絡してくれ!!」

ジョニー・マクレーンは拳銃を急いでしまい、携帯を出した。

「(英語) 番号は!？」

「(英語) ええつと……」

俺は自分のスマホで電話番号を調べようとし……壊れて電源が入らない事を思い出した。

……ああ、クソ!! 特別回線の番号を教わればよかった!!

無線が使えない今、警察通信司令部110番や兵部省の電話受付は普段の業務に加えて『警察や軍の情報』を一手に引き受けているのだ。電話回線は混線しているに違いない。

……俺が個人の番号を覚えているのは……第二中隊の面々と、第一中隊の藤原さんぐらいか？

第二中隊は田中曹長以外の全員が上海にいるから不可。となると、藤原さん一択だ。

「(英語) 坊主!! 早くしろ!!」

ジョニー・マクレーンが急かしてくる。俺は藤原さんの電話番号を伝え始めた。

「(英語) ……ああ!! 『090……』」

「(英語) 『090……』」

ジョニー・マクレーンがスマホに電話番号を打ち込み、相手の応答を待っていた。

「カール、どうした? まだ殺れないのか?」

その時、『東京国立○物館』で敵から奪った無線からサイモンサイモンの声が聞こえてきた。

「(英語) 坊主、持ってる。」

ジョニー・マクレーンはそう言って運転中の俺に携帯を投げ渡した。

「(英語) え!? おい何やって!!」

俺はハンドルから手を離し、その携帯を受け取った。そのせいでポロ車がグラグラと蛇行する。

俺は慌てて右手をハンドルに戻し、左手で携帯を耳に当てて反応を待つ。

……蛇行のせいでポロ車が大きく揺れたけど、西住さんは大丈夫か？

俺はバックミラーで後部座席にいる西住さんを確認した。

「アハハ……お家帰る……」

西住さんは………姿勢よく座り、ボヤいているため大丈夫そうだ。きつと、大丈夫なはずだ。目のハイライトが消え、時々カラ笑いの声が聞こえるが……大丈夫に違いない。

……まあ、死んでないからいいか。なんだかんだ言っても西住さんは強いし。

俺はそう自分に言い聞かせた。

「(英語) 残念!! カールはくたばった!! もう一度繰り返す!! カールはくたばった!! カールのお友達もだ!!」

ジョニー・マクレーンが無線機越しにサイモンへ挑発する。その間、俺はおっさんの携帯を耳に当て、藤原さんが電話に出るのを待つ。

……クソツ!! 忙しいのは分かる。知らない電話番号だから出るのに躊躇するの分かる。だけど早く出てくれ!!

俺は八つ当たり気味に携帯をさらに強く握りしめ、ポロ車のアクセルをさらに踏み込み、無理やり苛立ちを押しえつける。

「(英語) 俺の条件を言ってやる!! 隠れている岩の下から這い出してきた!! 踏み潰してやるぜ!!」

ジョニー・マクレーンがそう言った時だった。奥の方にダンプやトラックの車列が見えた。

……あれだ!! 『東京国○博物館』で衝突しそうになったトラック車

列だ!!

「あれだ!!あのトラックだ!!」

俺は思わず声を上げた。ジョニー・マクレーは『どれどれ』とばかりに前方を覗き込む。

『やってくれるじゃないか……!!』

サイモンの言葉が無線機から発せられたが、俺達には届かなかった。そんな物より目の前のトラックだ。

ボロ車はゆつくりと、しかし確実にトラック10数台の車列に近づいていく。

「(英語)もつとスピードは出ないのか!?アクセルを踏み込め!!」

ジョニー・マクレーはイライラしながらダツシユボードをバンバンと叩く。

「(英語)こいつはバイクカーだ!!スポーツカーやアメ車の様なバカ馬力じゃねえからスピードには縁がないんだ!!……それよりもダツシユボードを叩くな!!壊れるだろ!!」

俺がそう言った時、やっと携帯が繋がった。

『もしもし?藤原ですg……』

「藤原さんですか!!俺です!!村田です!!」

『え……?村田!?君いつの間に機種変更したんだ!?』

携帯からは藤原さんの声と共にサイレンの音や喧騒が聞こえる。きつと藤原さんも爆弾探しに駆り出されているのだろう。

「してません!!おっさん……ジョニー・マクレーの携帯からかけてるんです!!それよりもサイモンの狙いは復讐じゃありません!!強盗です!!」

『……なんだって?』

携帯越しでも、藤原さんの『ドロツとしたオーラ』が伝わってくる。『東京国立○物館』の展示品がごっそり盗られました!!翌日から開催される『特別展』の日本刀もです!!敵は今『展示品を詰め込んだトラックやダンブ』で首都高上野線を南下中!!今本町を過ぎました!!倒した敵の所持品から東京港へ向かっていると推測されます!!」

『……酒で酔ってないな?』

藤原さんの重い声から圧を感じる。流石に藤原さんもこんな荒唐無稽こうとうむけいな話を信じられなかったのだろう。

「朝から一滴も飲んでません!!……こんな大事件、飲みながらやると思えます!?!」

『悪かった。ところで学校の件について分かったこと……』

いきなり通話が途切れた。いくら耳を澄まして藤原さんの声が聞こえない。

俺はその携帯を確認すると……画面が真っ暗だった。ボタンや画面を押しても何の反応もない。

……電池切れ!?こんな時に!?

〔英語〕チクシヨウ!!」

俺はジョニー・マクレーンおっさに携帯を投げ返した。

〔英語〕何するんだ坊主!!」

〔英語〕電池切れだ!!充電しとけよおっさん!!」

俺はそこで『旧芝離宮恩賜公園で拾った携帯』を思い出した。☒☒サイモン☒☒にバレるかもしれないが……今は連絡が優先だ。今、その携帯は西住さんが持っているはず……。

〔西住さん!!携帯貸してくれ!!〕

俺はそう言っただけで運転をしながら左手を西住さんに向け、携帯を受け取ろうとするが……何の反応がない。

俺は後ろを振り向いた。そこには……今だ呆然自失のまま、空笑いをする西住さんがいた。

〔西住さん!!目を覚ませ!!〕

〔アハハ………えーあ、あれ?〕

俺は西住さんの胸元を両手で握り、大きく揺すった。そこでやっと西住さんは目が覚めたようだ。

〔英語〕いきなりハンドルを離すんじゃない!!」

ジョニー・マクレーンおっさが文句を言っているが……無視する。

〔西住さん!!携帯を出せ!!早く!!〕

〔……え?は、はい!!〕

西住さんは慌てながら、上着のポケットから『拾った携帯』を取り出し俺に渡した。

俺はそれを受け取るとジョニー・マクレーンから運転を引き継ぎ、ハンドルを握りながら電話番号を打ち込む。

プルル……

『はい、藤原d……』

「藤原さんですか!?!さっきの携帯の電池が切れたので、違う携帯で通話しています!!『学校の爆弾』については何もわかりません!!それと首都高の閉鎖とヘリの応援をください!!」

俺は電話に出た藤原さんに早口で情報を伝えた。

『……上に掛け合ってみるができるか分からない。『爆弾探し』のせいで人手が足りないんだ。』

バキツ!!ガン!!ベキ!!

藤原さんがそう言った時だった。俺はいきなり頭をバットで殴られたような強い衝撃が走り、ボロ車のフロントガラスにヒビが入った

……な、何だ!?

俺は慌てて被っていた戦闘ヘルメットを脱いで確認すると……銃弾をはじいた跡があった。

……う、運がいいな。

基本、戦闘ヘルメットはライフルなどの銃弾は防ぐことはできない。しかし、今回はたまたま銃弾の角度がよかったのだろう。奇跡的にはじくことができたようだ。

……って、撃たれたってことは敵か!?

俺とジョニー・マクレーン・西住さんは慌てて後ろを向いた。後ろには……少なくとも十数台はある軍用装輪装甲車。その軍用装輪装甲車を追い抜き、俺達に銃撃を加えるスポーツカーも多数いる。

「こういう時は一般車両でのカーチェイスだろ!?!なんで装輪装甲車を持ってきてんだよ!?!」

「(英語) う、嘘だろ!? なんだって装甲車が90マイル(≒時速約145キロ)以上出してんだ!?」

俺とジヨニー・マクレーおっさんは思わず叫んだ。

『む、村田!? 何があった!?』

「て、敵の追手が来ました!! 30台以上はいます!! 装輪装甲車が約半数!! 応援をください!!」

俺は大声で恐怖心を押さえつけながら報告する。

『分かった!! できる限りのことはするが、期待はするな!!』

ツー、ツー、ツー……

藤原さんが☒悲しい現実☒を叩きつけた後、電話が切れた。

今、警察・軍・武偵は『爆弾探し』で手一杯なはずだ。それに加え『首都高の封鎖』・『敵トラックの追跡』・『敵戦闘車両への攻撃』……できたとしても準備に時間がかかるだろう。それに藤原さんが『期待するな』という事は、できる可能性が☒本当に☒少ないのだろう。

……クソツ!! まさか軍が使えないなんて!!

最も信頼できる軍が使えないとは……思いもしなかった。他に助けてくれそうなのは……

……いるじゃないか!! 俺は今までどこの学校に通っていた!?

俺は急いで電話番号を打ち込んだ。

『はい、もしもし。』

「中空知さんか!? 俺だ、村田だ!!」

俺は中空知さんに電話をかけた。

今、武偵高の生徒も爆弾探しに追われているだろう。きっと俺達『COMPOTO』の面々に、『バスカービル』の面々、武藤・不知火・ジャンヌ・ワトソン達も探しているはずだ。しかし、軍や警察の様に☒面子がかかっている☒わけではないため、比較的自由な人員が多いはずだ。

だからと言っても、俺はみんな一人一人に電話をし、フリーかどうか



か聞いている時間はない。そこで俺は通信科コネットの中空知さんに用件を伝え、動かせる人員を送ってもらおうと考えた。

『首都高上野線で何か?』

中空知さんの清涼な声がスツと耳に伝わる。

中空知さんは得意の音響分析によって俺の居場所を特定したのだろう。彼女のその能力であれば、今の危機的状況は理解できるはずだ。

俺は中空知さんに現状を伝え、応援を要請した。

ダンダンダン!!ドカーン!!

「(英語) まず1台目!!」

助手席ではジョニーおっ・マクレーンきが身を乗り出して拳銃を発砲し、敵車輛の一台が爆発した。

『分かりました。今からですと時間がかかりますが、よろしいですか?』

携帯から俺が最も待ち焦がれていた言葉が、中空知さんの美声によって伝えられた。俺はその言葉を聞き、喜ぶ気持ちを押しさえることができなかった。

「ありがとう中空知さん!!愛してるぜ!!」

『ゴホッ!!ゲホッ……!!そ、それttt……』

ピッ!

俺はハイテンションのまま携帯の通話を切った。その時、敵のトラックの車列が他の高速に乗り換えている所を発見した。

「おい!!マジかよ!!」

俺が電話している間に他のレーンに移動していたのだろう。今からそのトラックの車列を追うとなると、逆走以外の手段がない。

……さて、落ち着け。あの道は『東京港』へ遠回りなはずだ。

俺はバックミラーを覗いた。後ろには、まだ装輪装甲車とスポーツカーが俺達のボロ車ビュートを狩ろうと追いかけてくる。

……クソッ!!敵が多すぎる!!このままじゃジリ貧、狩られるのも時

間の問題だ!!何とかできないか!?

「む、村田さん!!」

俺がどうやって時間稼ぎをするか悩んでいる時だった。西住さんは俺の肩を叩いてきた。

「どうした!?!」

「わ、私に使える武器を貸してください!!」

「……………え?」

俺は思わず後ろを振り向き、西住さんを見た。西住さんは何かを決意したような、真剣な目をしており、重いが崇高なオーラを出していた。

……………ほんと、何なの!?!西住さんは!?!

『重苦しいオーラ』を出すような人間は沢山見てきたが、『重苦しい中に崇高で、どこか気高いオーラ』を出す人間は初めて見た。

……………まあいい、とにかく使えそうなものはあるか?

俺は~~四~~四次元倉庫~~を~~をあさりだした。そして、以前テロリストから奪ったMG42機関銃とその弾を見つけた。第二次世界大戦中にドイツが使った機関銃だ。戦車道をやっている西住さんなら使えるかもしれない。

「これ使える?」

俺はその銃と弾を西住さんに渡した。

西住さんは戦車道で鍛えていたせいとか、約12キロ弱はある機関銃を軽々と受け取った。そして熟練兵の如く、流れるようにそして迷わずに弾を装填し、安全装置を外した。

発射準備完了の銃を座席の背もたれに置き、西住さんは座った眼をして発砲を始めた。

……………戦車道ってヤベエ

俺は思わず<sup>おの</sup>慄いた。

「(英語) ロケット弾だ!!」

ジョニー・マクレーンがそう叫んだ時、敵の装甲車の一台からロケット弾が発射された。俺は慌ててハンドルを操作し、ロケット弾を避けた。

チユドーン!!

ボロ車の真横にロケット弾は着弾した。爆発による破片がボロ車を襲う。

……軍も武偵も連絡した。後は警察か。警察で知り合いは……両川さん!?

ガタン!!

その時、高速道路のつなぎ目を踏み、ボロ車が揺れた。

……つなぎ目!! そうだ!! 『勝鬨橋』!!

数年前、両川さんから『小さいころ勝鬨橋に侵入して勝手に開いた』と言う話を聞いたことがある。もし、両川さんが今でも『勝鬨橋』を開く方法を憶えていれば、何とかなるかもしれない。

俺は両川さんの携帯番号に急いで電話をかけた。

……よし、繋がってくれよ? 両川さんの携帯を止められてませんよ。うに。

俺の祈りが通じたのか、すぐに両川さんが電話に出た。

『ハイ、もしm……』

「両川さん!! 村田です!! いきなりで悪いんですが今、爆弾魔の仲間に追われています!! 敵を撒くために勝鬨橋を開いてほしいんですが、できますか!？」

『はあ?! 村田あ? 何言ってるんだ?!』

携帯から両川さんの呆れた声が聞こえた。

「敵数十台に追われてるんです!! 敵を撒くために勝鬨橋を開いてください!! あと5分ぐらいで勝鬨橋に着きます!! ……両さん、助けてください!!」

『……………本田!!急いでわしを☒勝鬨橋☒まで送れ!!村田、車は!!』  
「傷だらけのビュートです!!」

『分かった!!死ぬんじやねえぞ!!』

ツー、ツー、ツー……

!! ……これで布石はすべて打った。あとは俺達が生き延びるだけだ

俺はハンドルを握る手に力を入れた。

「(英語)クソ!!いくら倒しても湧いてきやがる!!ありやゾンビか何か!?!」

ジョニー・マクレーンはボヤキながら拳銃を撃つ。すると

ジョニー・マクレーンの拳銃は銃弾が出なくなっていた。

ジョニー・マクレーンは替えの弾倉を探すが……見つからなかった。

「(英語)弾切れだ、クソ!!」

「(英語)俺のを貸そうか!?!」

俺が訊ねると、ジョニー・マクレーンは西住さんの横にあるアタッシユケースを見ていた。

「(英語)いや、あれを使う。……嬢ちゃん!!横のアタッシユケースをくれ!!」

「これですか!?!」

西住さんは射撃をいったん止め、アタッシユケースをジョニー・マクレーンに渡した。

あのアタッシユケースは……☒旧芝離宮恩賜公園☒に仕掛けられていた爆弾だ。『置きっぱなしは危険だろう』と言う理由でとりあえず持ってきたのだ。

ジョニー・マクレーンはそのアタッシユケースを開き、中をいじり始めた。

ピッ!!ピー、ピー、ピー!!

すると、アタツシユケースから嫌なアラーム音が聞こえてくる。ジョニー・マクレーンはそのアタツシユケースを閉めると、助手席から身を乗り出した。

「(英語) 坊主!! 嬢ちゃん!! 頭を下げる!! ……返品だ!!」

ジョニー・マクレーンはそう言ってアタツシユケースを首都高に投げ捨てた。敵の車両はそのアタツシユケースに気づかず、猛スピードで俺達を追いかけてくる。

……おい、まさか爆発させる気か!?

俺と西住さんは慌てて頭を低くした。その瞬間……

チユドーン!!!

爆発による爆音と熱風がボロ車を襲い……一瞬ボロ車の後部が宙に浮き、ドアガラスにヒビが入った。

俺はバックミラーを覗いた。そこには……数台のスポーツカーと装輪装甲車が宙高く空に舞っていた。

………ただけ威力があるんだよ!!あの爆弾!!と言うかさつきまであれ乗せてたんだよな!?

その時、目の前に『首都高 銀座出口』が見えてきた。もう『勝鬨橋』までは目と鼻の先だ。

「本田!!ここだ!!」

「了解だ!!両川の旦那!!」

キキー!!

勝鬨橋の旧運転室の前に白バイが急停止した。白バイには任侠の様な男と眉毛つながりの男が乗っていた。任侠男は本田隼人、眉毛つながりは両川勘吉と言う警察官だ。

「せ、せんぱい。勝手にこんなところに来ていいんですか?」

「いいんだよ!!『爆弾探し』なんか中川にでもまかすとけ!!」

両川は旧運転室への扉を見つけた。開けようとした所……扉に鍵

がかかっているようだ。

両川はその扉を蹴破ろうとした。その時……

「お巡りさん、何しとるんじや」

「ああ!? 爺ちゃん、悪いが今は時間が無いんだ!! 後にしてくれ!!」

「わしやく昔ここで働いておつてな。知つとるか? この橋は昔開いたんじや。それをしていてのおく」

「何だつて!?!」

俺達の乗るボロ車ビュートは首都高から降り、都道304号線・晴海通りに滑り込んだ。その後ろには、奴らが『ゾンビかゴキオリが如く』大多数で追ってくる。

……クソ!! なんて数だ!!

ジョニーおっ・マクレーきんと西住さんの努力により、少なくとも20台以上は撃破している。しかし、敵の数が変わっていないように見える。

ウウ~~~~!!!

「つておい!?! 嘘だろ!?!」

俺は前を見て驚いた。俺達の進行方向に☒戦車砲を搭載した装輪装甲車☒が4両も陣取っていたのだ。

……先回りされた!?!

ウウ~~~~!!!

ご丁寧にも、その☒戦車砲を乗せた装輪装甲車☒は4両ともボロ車ビュートに砲口を向けている。

……クソ!! ここまでか!?!

ウウ~~~~!!!

ドカーン!!

空からサイレン音と共に黒い物体が☒戦車砲を乗せた装輪装甲車☒へ落ちてきた。そして、その黒い物体が地面にぶつかった瞬間、

敵4両が爆発したのだ。

……いや、正確には『爆発に込まれた』か？

俺は思わず上を見た。そこには第二次世界大戦の遺産J u 8  
7スツーカー機が超低空飛行をしていた。

……な、なんであんな骨董品が東京の空を飛んでいるんだよ!?

おそらく、そのスツーカーが急降下爆撃をし、敵の装輪装甲車を撃破したのだろう。

……とにかく、助けてくれたのは有難い!!

スツーカーがボロ車の後方にいる敵車輛に機銃掃射を始めた。  
スツーカーのパイロットは凄腕なのか、一回の掃射で4〜5両撃破している。しかし、数が多すぎるせいで敵の勢いは殺しきれていない。

ブオオオオオ!!

その時、敵のスプーター1両が猛スピードでボロ車の左側に横付  
けてきた。その敵のスプーターの屋根には『忍者のコスプレをし  
たポニーテールの少女』が乗っていて、ボロ車の屋根に乗り移った。

〔(英語) クソ!!こいつ!!〕

「な、なんて運動神経!」

『忍者コスプレ少女』がボロ車に乗り移った時、横道からハイエースが  
猛スピードで飛び出した。そして、そのハイエースは横づけしていた  
スプーターの真横に体当たりを敢行した。

「む、武藤?!牛若!」

俺はしっかりと見た。そのハイエースの運転席には獰猛な笑  
顔を浮かべた武藤がいたことを。そして、ぶつかる瞬間にハイエー  
スの扉を開き、ボロ車に牛若が飛び乗ったことを。

「はああああ!!」

「あ、あと少しで殺せるところなのに!!」

ガキイイイイン!!!

ボロ車ビュートの上では牛若と『忍者コスプレ少女』が切りあっているらしく、刃が交わる音が聞こえる。

「(英語) ロケット弾来るぞ!!」

「ロケット弾きます!!」

「くそおおおお!!」

☒☒スツーカー☒☒の掃射から逃れた敵車輛の一部からロケット弾が数発放たれようとした瞬間、その車両が爆発した。

「「え?」」

「「困っているようだな!!マクレール刑事・村田少年・西住少女!!兵部省の要請により、我々が来たからにはもう安心だ!!!」」

チャチャチャチャチャーチャー♪

いきなり俺達を呼ぶ声が聞こえた後、へんなBGMが流れ始めた。

そして道横の歩道が割れ、そこから大量の水が噴き出るとともに小型の潜水艦が出てきた。

「おちやめなヤシの木カッツは伊達じゃない。海を愛し、正義を守る。

誰が呼んだかポセイドン。タンスに入れるは☒☒タンスにゴン☒☒ 特殊刑事課三羽鳥の一人、『ドルフィン刑事』!!ただいま見参!!」

「「……………」」

その小型潜水艦から、『禪ふんとしとセーラー服の襟しか着ていない、パイプを啜えた太った変質者』が出てきた。その禪には『水上警察隊』と書かれており、警察章も描かれているのだが……まさか警察関係者ではないはず……

「…………」

「(英語) 坊主、あれはなんだ?」

西住さんは『太った変質者』を見て戦意喪失したのか……射撃を止め、目のハイライトが消えていた。ジョニーおっ・マクレールきは頭が痛いのだろうか……眉間を押さえ、俯きながら俺に聞いてきた。

「(英語) 知るかよ、あんな変質sh……いや、待てよ?」



俺が武偵高に向向する前、『警視庁には特殊刑事課』という超エリート変態集団がいる』という噂で聞いたことがある。その時は『そんな集団いるわけないだろ』と部隊のみんなで笑っていたのだが……。もしかしてこいつが……

俺は冷汗をかき始めた。その『太った変質者』が何か言っているが、全く頭に入らない。

するとあちこちのマンホールからイルカが飛び出てきた。そのイルカが手榴弾を『シヨールのボール』の様に敵車輛へ投げつけ、撃破していく。

ブロロロ!!!

今度は上空でエンジン音が聞こえてきた。俺は上空を見ると『双発レシプロ機の翼に乗ったセーラー服を着た変態親父二人』がいた。

「華麗な変身、伊達じゃない。月のエナジー背中に浴びて、正義のステイツク闇を裂く。空の事件なら任せてもらおう!! 特殊刑事課三羽鳥の一人、月光デク……」

ズドドドド……

『セーラーコスプレ親父二人』が乗っている双発レシプロ機を『スツーカー』が攻撃した。

……よっしゃ!! ナイス『スツーカー』!!

俺達三人は全員でガッツポーズをしていた。

『スツーカー』の攻撃によって双発レシプロ機は火を吹いた。双発レシプロ機はそのまま敵の追手のど真ん中に墜落し、敵数両を巻き込んで爆発炎上した。

「おいコラア!! 口上の最中に攻撃するとはマナー違反だぞ!!」

「自分、名乗ってすらいないし……」

後ろで何か聞こえるが……気のせいだ。気のせいに違いない。

両川と本田、そして爺さんは『勝鬨橋』の運転室にいた。

「おい爺さん!! 本当に覚えてるのか!？」

この三人は『勝鬨橋』を動かすのに手を焼いていた。最後に動いてから50年以上経っており、しかも電気は通っておらず、可動部はロックされている。

そこで三人は電気を通し、ロックを外すところから始まった。そして後は電源を入れるだけなのだが……この爺さん、その入れ方を忘れてしまっていたのだ。

「何だったかのお……あ!!」

爺さんは急いでツマミをひねった。すると計器の針が動き始め、モーターの音が聞こえ始めた。

「爺さん!! 急いでくれ!!」

築地方面からボロボロのビュートが『勝鬨橋』目掛け、猛スピードで走ってくる。

「まあ慌てなさんな。……開け!! 勝鬨橋!!」

爺さんはそう言って、レバーを時計回りに回した。

『勝鬨橋』まであと400mを切った。しかし、『勝鬨橋』は開く気配がしない。

……クソツ!! 『勝鬨橋』は失敗か!!

その時、勝鬨橋の前に『海パン一丁の筋肉男』が仁王立ちをしているのに気が付いた。

「……」

とても嫌な予感がする。

「股間のもっこり伊達じゃない。陸に事件が起こった時、海パン一つですべて解決!! 特殊刑事課三羽鳥最後の一人、『海パン刑事』デカ只今参上!!とおう!!」

『海パン男』は唯一着ている海パンを脱ぎ捨てて全裸になり、俺達目が

けて走り出した。

「つておい!!来るな、来るなあー!!」

〔英語〕クソ!!コイツ!!」

「……東京、コワイ」

俺とジョニー・マクレーン、西住さんは『全裸の男』目がけて発砲するが、当たる気配がしない。

『全裸男』はボロ車にぶつかる瞬間、走り幅跳びの様に地面を蹴って宙を舞った。

「ゴールデンクラッシュ!!!」

『全裸男』は大声でそう言った後、ボロ車を飛び越えた。

……なんで飛び越えたんだ?あ、まさか……

「ギヤアアアアアア!!!」

ボロ車の上から女性の悲鳴が聞こえた。その後、『海パン男』、『忍者コスプレ少女』・牛若が地面へ落ちる様子を、俺はバックミラーでしっかり見ていた。

ゴゴゴゴゴゴ……!!

俺は心の中で牛若と『忍者コスプレ少女』に合掌したとき、轟音と共に目の前の道路が上がり始めた。『勝鬃橋』が開き始めたのだ。

「しっかり捕まってるよ!!」

キイイイイン!!!

俺はアクセルをいっぱい踏んだ。ボロ車のエンジンからは『悲鳴のような高回転音』が大音量で聞こえてくる。

〔英語〕クソツ!!坊主がいるといつもこれだ!!」

「え!?!村田さん!!なんか橋が上がってるんですけど、何する気なんですか!?!」

ジョニー・マクレーンは顔をこわばらせながらアシストグリップ(車の天井に着いている手すり)をしっかりと握った。西住さんはヒステリー気味に大声で俺に訊ねながら急いでシートベルトをつけた。

「行け!!お前の意地を見せてみやがれ!!」

速度計の針が千切れ飛んだ。それと同時にポロ車<sup>ビュート</sup>は橋を登りあがり、空を飛んだ。

「「うわあああああ!!!」」

Die Hard 3 in Tokyo 不死身は死なない……

「うわあああああ!!!」

ガシャン!!ベキベキベキ!!

空を飛んで数秒後、ボロ車は地面にぶつかり、数十メートル転がってやっと止まった。タイヤ四つがちゃんと地面に接地して止まったため、エンジンが死んでいなければこのまま走り出せるはずだ。

「グオオオ……」

俺は運転席側のシートベルトは千切れて使用不能だったため、車の衝撃がもろに体へ直撃したのだ。そのせいで体は新たな打撲を作り、閉じていた傷が開いてしまったのだが……頭はヘルメットのおかげで何とか守れたようだ。

……へ、ヘルメットしてなかったら死んでたな。

「(英語) 嬢ちゃん、生きてるかあ?」

「二人のせいで死ななくなりました……」

西住さんはこんな皮肉を言えるので、きつとピンピンしているのだろう。

ジョニー・マクレーンは元々心配していない。どんなことが起こってもジョニー・マクレーンなら生き残るだろう。

「(英語) なんだよ、おっさん。俺の心配はないのか?」

「(英語) 坊主がこれぐらいで死ぬはずねえだろ?」

「(英語) 嫌な信頼だなあ」

俺はヨロヨロとボロ車を出て、後ろの『勝鬨橋』を見た。『勝鬨橋』は可動部が直角に持ち上がっており、墨田川には沢山の車が浮かんでいた。

……『勝鬨橋』が開いているなんて、初めて見たな。

何十年も動かなかった巨大な機械が、たった今動いたのだ。感動しないはずがない。

……だけど、感動している暇はないよな。

俺達は急いで『東京港』へ向かわなければならぬ。俺はため息をついた後、上空で旋回する[ ]スツーカー[ ]と『勝鬨橋運転室』に敬礼した。

[ ]スツーカー[ ]は俺の敬礼を確認したのか、翼を振っていた。俺はそれを確認すると、ボロ車ビュートに乗り込んでエンジンを掛けた。

キュルキュル……ボン!!ドツドツドツ……

このボロ車ビュート、見た目の割には頑丈なようで、エンジンは生きていたようだ。

俺はギアを操作した後、労わる様いたにゆっくりとアクセルを踏んだ。

「追手はもういないはずだ!!『東京港』まで突っ走るぞ!!」

ボロ車ビュートは快調にスピードを上げていった。

『勝鬨橋』から飛ばし、東京臨海新交通臨海線『ゆりかもめ』青海駅近くに来た時だった。

「(英語) 坊主!!あそこだ!!」

俺はボロ車ビュートを止め、ジヨニーおっ・マクレんの指さす方向を見た。そこには[ ]お台場ライナー埠頭[ ]に俺達が追っていたトラックが多数置いてあった。しかし、そこにいたコンテナ船はすでに舳もやいを外し、出航を始めていた。今から[ ]お台場ライナー埠頭[ ]に向かっても手遅れだろう。

「(英語) 今からあそこに行っても間に合わねえぞ!!クソツタレ!!」

俺は大声で言う事で苛いらだ立ちを押さえた。

……あの動き出した船に乗り込む方法はあるか？

俺は周りを見渡し、使えそうなものを探す。

……近くには橋がないから飛び降りによる侵入は無理。上空に飛んでいるヘリを使うには新木場まで行かないと使えないから不可となると……

「あ、あれはどうですか!?!」

西住さんが指さした先には……目の前、青海駅付近の棧橋に停泊していた屋形船があった。

「あれは観光用だ。追いつけるか分からないぞ!」

屋形船は観光用で速度はそこまで出ない。それに対し貨物船やコンテナ船はおおよそ24ノット程度(時速44キロ程度)……果たして追いつけるのか?

「(英語)出航直後でしかも湾内だ!!スピードは出ない!!坊主は海軍の端くれなら分かってるだろ!」

「(英語)うるせえ!!海軍兵学校の実地訓練以来、船には縁がないんだよ!!」

……あれ?俺って一応、海軍所属なんだよな?なんで陸戦ばかり……

これ以上考えると大事な物が失われそうな気がしたため、俺は思考を切り替えた。

「と、とにかくあの棧橋に向かうぞ!!」

棧橋までは目と鼻の先だ。

俺はボロ車レギュートを歩道に乗り上げさせ、柵を蹴破って棧橋へ向かった。

東京のとある小学校にて……

「少佐殿!!」

藤原石町少佐は『爆弾探し』をしながら、後輩：村田大尉からの情報を上層部に報告し、彼への支援まで取り付けるといいうハードな仕事量をこなしていた。

さて、十数校目の『爆弾探し』を初めて3分後、兵の一人が藤原少佐を呼んだ。

「どうした?」

「少佐殿、スイマセンが確認をお願いします!!」

「分かった。案内を頼む。」

藤原少佐は兵の後ろをついて走って行った。

「これを見てください!!今朝届けられたそうです。10時半だったか?」

兵は用務員に聞くと、用務員は首を縦に振った。そこに合ったのは、大きな業務用冷蔵庫だった。

兵は業務用冷蔵庫の後ろに回り、電源用コードを見せた。

「このようにコンセントに繋がっていません。」

コードは切られており、銅線が丸見えだった。

「それで?」

「正面を見てください。」

藤原石町少佐は冷蔵庫の正面に立った。冷蔵庫はコンセントが繋がっていないのにも関わらず電源ランプがついており、温度表示もされていた。

「……………急いで爆弾処理班に連絡しろ。今すぐだ。」

藤原石町少佐は淡々と指示を始めた。

イブキや藤原石町少佐はまだ知らない。この小学校にはイブキが保護した車椅子の少女：八神はやてが通学していることを……

ボロ車<sup>ビュート</sup>が栈橋の手前に着くと、俺達三人は急いで降りて屋形船へ走った。

栈橋には船頭だろうか、数人がタバコをふかしながら談笑していた。

「……………おい、あんた達、まだ時間は早いぞ…………」

「二武偵だ!!(警察だ!!)屋形船を出せ!!」

俺達三人は持っている銃をその船頭たちに向けながら要求を言った。

「……………おい!!ちょっと!!」

「二早くしろ!!(してください!!)」



☒サイモン☒は『東京港』へ着くと、自ら船への詰め込みの指揮に当たった。

10分後には詰め込みは終わり、中国企業が港湾運営権を持つスリランカ・ハンバントタ港への長い航海が始まった。

「マシアス、私達は囚として調布へ向かう。後は頼んだぞ。」

「ああ、任せておけ。」

☒サイモン☒はタルゴ夫妻の夫・マシアス・タルゴの肩を叩きながら言うと、なんとも心強い返事が返ってきた。

「……全く、この子達も可哀想なものだ。あんな☒やくざ者☒達たちの投資家に目を付けられるなんて。確か……☒P a s t e l \* P a l e t t e s ☒だったか？」

艦橋にはライブハウスから誘拐した10人のうち☒P a s t e l \* P a l e t t e s ☒の5人、そして高鏡組組長・高鏡菊代の計6人の少女が縄で縛られていた。彼女達は猿轡さるくつわをかまされ、睡眠薬で眠らされている。

☒サイモン☒は同情するように彼女たちを見た。

「……輸送機の方にもお嬢さん達がいるだろ？……俺達は☒C h o n O y ☒の手先になった覚えはないがな!!」

バン!!

マシアス・タルゴは思い切り艦橋の壁を蹴った。鋼鉄の壁にヘコミの痕がついた。

「マシアス、彼女達は我々が躍進するための必要な犠牲だ。今までにも沢山の犠牲者が出ただろ？」

「ッ……!!」

☒サイモン☒の冷酷な言葉に、マシアス・タルゴは反論することができなかった。

「とにかく、      後は      頼んだぞ」

      サイモン      はそう言い放った後、艦橋を出ていった。

「部下を退去させろ。左舷のランチ（大型船に搭載される小型船）で待て」

      サイモン      の後ろをタルゴ夫妻の妻・カティア・タルゴ（タルゴ夫妻・妻）はさりげなくついて行った。

      サイモン      は左舷へ向かいながらニヤリと笑った。

      は自分達ではなく、この船なのだ。今回『東京国立○物館』から奪った美術品は百点以上だが、一つ一つが小さくて軽いため、総重量は3トンにも満たなく、容積もそれほど多くはない。そこで、調布飛行場に停めてある輸送機による輸送も可能なのだ。

      サイモン      は左舷の小型船に乗り込み、部下達はその船を海面まで降ろしていた時、背中に誰かが抱き着いてきた。      サイモン      は首をひねると、そこにはカティア・タルゴ（タルゴ夫妻・妻）がいた。      サイモン      は体を後ろへ回し、彼女の口へキスをする。

      サイモン      とカティア・タルゴ（タルゴ夫妻・妻）は……男女の関係を持っていたのだ。

船が海上に浮かぶと二人はキスを止めた。それと同時に部下達が小型船へ乗り込んでくる。

……あとは調布飛行場へ行き、輸送機に乗るだけだ。ムラタやマクレーなどの不安要素はあったが、私にかかればどうという事はない。タルゴと残る部下を除いた全員が小型船に乗った事を確認すると、ダンブが止まってある      お台場ライナー埠頭      へ向けて小型船は動き始めた。

……こんなところに観光用の船がある。      屋形船      だったか？こんなところも観光するの？日本は不思議な国だな。

マシアス・タルゴ（タルゴ夫妻・夫）が残るコンテナ船へ、ゆつくりと      屋形船      が近づいていくのを      サイモン      は確認した。

若い船頭が屋形船を操船し、俺達はコンテナ船を追っていた。

「なるほど、犯人が船で逃走ですか。大変ですね。」

その若い船頭は胆が据わっているのか、ニコニコ笑顔にのほほんとした口調で舵を取っていた。

「……今から爆弾魔のテロリストの船に近づくんですよ？怖くないんですか？」

西住さんは屋形船に置いてあったオレンジジュースを拝借し、それを飲みながら一息ついていった。

「実感がないんですよねえ。先週なんか年末年始の番組のロケだそうで、この船にカメラが荷物を運びに来たり、去年なんか綱渡りでしたっけ？それなんで、今回も『またテレビ局の番組かな』なんて半分思っちゃってますね。」

『確かウルトラマンがどうか……』と、若い船頭は気の抜けるような口調で答えた。

「……まさか平和ボケにも利点があったなんてなあ。……ていうか、『屋形船を追うカメラ』ってどんな番組だよ!!」

（英語）坊主、そろそろだぞ。」

（英語）分かってるよ。」

ジョニー・マクレーの言葉を聞き、俺は船頭に突っ込むタイミングを失った。

俺はため息を吐いた後、敵のコンテナ船を見あげた。水面から甲板までの距離は10m以上ありそうだ。

俺はベルトのバックルに仕込まれてあるワイヤーを取り出し、折り畳み式の鉤爪を展開した。そして頭上で回転させて勢いをつけ、コンテナ船に向かって投げた。

カン!!

鉤爪は一発でコンテナ船の手すりに引っかかった。

「へえ、上手いもんですね」

若い船頭の声で気が抜けそうになる。しかし、俺は何とか耐えてこの鉄の船の舷側をワイヤー1本で登り始めた。

俺は甲板まで登ると周囲を確認し、敵の有無を調べた。敵は周りにはいないようだ。

そこ俺は四次元倉庫から縄梯子を出して手すりに括り付け、屋形船へ向かって投げ渡した。ジョニー・マクレーンと西住さんは3分も経たずにその縄梯子を登った。

「あ、あの……これの弾ってまだありますか？」

西住さんは背中に背負ったMG42（重量12キロ弱）を指さして言った。

……よくそんな物を背負いながら縄梯子を登れたな。戦車道ってヤベエ……

俺はそう思いながら四次元倉庫をあさって探してみるが……MG42用の弾薬が見つからない。

……と言うか船内での室内戦に汎用機関銃はいらないだろ。

室内戦で有用な短機関銃を四次元倉庫から探すか、どうも見つからない。

「弾がもうない。その銃は捨ててコレを使ってくれ。」

俺は予備の44式騎兵銃と弾薬盒（弾薬を詰めた携帯用の箱）を西住さんに渡した。西住さんは44式騎兵銃を渡された後、顔をしかめた。

「あ、あの……どうやって撃つんですか？」

「ん？……戦車道じゃ教えないのか？」

「戦車道は『戦車の使い方』を教わっても、『ライフルの使い方』は教わりません!!」

西住さんは俺を睨みながら反論した。戦車道では車載機関銃（MG42）の使い方は知っていても、小銃の使い方は知らないらしい。

「（英語）嬢ちゃん、見てろ。」

ジョニー・マクレーンは西住さんに渡した44式騎兵銃と弾を取り上

げた。

「(英語)ボルトを引いて弾を込める。そしてボルトを戻して引金を引くだけだ。」

ガチャッ!!ガチャコン!!

ジョニー・マクレーンは見せつけるように弾を込めてボルトを戻した後、西住さんに銃を返した。

「これだけですか?」

「(英語)ああ、そうだ。自分を撃つなよ。……おい、坊主。こんな骨董品しかないのか?ジジイでもこんな銃は使わねえぞ?」

ジョニー・マクレーンは俺が貸したワルサーP38に弾を込めながらため息交じりに行った。

「(英語)うるせえ。44式騎兵銃は予備だし、ワルサーP38は在庫処分品だ。」

俺はそう言った後、38式歩兵銃を取り出して銃剣を装着した。ジョニー・マクレーンは俺の取り出した銃を見て呆れた様な表情をする。

……おっさんは分かかってないなあ。弾幕は張れないが……着剣すれば槍のように扱えるこの長さ、反動の軽さに命中率の良さを兼ね備えた銃はこいつぐらいなのに。

俺は四次元倉庫から日本刀を出して腰に挿した後、自分の汗と血が染み込んだ38式を一撫でし、痛む体を動かして船内へ潜った。

「タルゴ様、ちよつと見てもらいたいものがあるんです!!」

部下の一人が艦橋に飛びこんできた。彼は任務は船倉の戦利品警備だったはずだ。

「今は忙しい、後にしろ。」

この東京湾を出るまでは一切気が抜けない。そのため部下の進言

を却下し、艦橋の計器類と地図を確認する。

「とても大事なことです!!」

「後にしr……」

「今すぐ!!」

部下はマシアス・タルゴの腕を取って大声を発した。そして艦橋に居る人員の位置を確認した後、マシアス・タルゴにしか聞こえないように耳打ちをした。

「宝物がプラゴミに化けたんです……」

「……!?!」

部下が持っていたのは……朽ち果てたペットボトルのゴミだった。

マシアス・タルゴはその部下と一緒に船倉へ向かい、『東京国立○物館』の宝物が入っているコンテナを開けた。

俺達三人は船内に潜り込んだ。船内はコンテナばかりで巨大な迷路のようであった。

俺は耳を澄まし、敵の気配を探しながら着剣した38式を持って先頭を歩く。

ブー……ブー……

船の中ほどに来た時、とても小さなブザー音が聞こえてきた。「……………」

俺はハンドサインを出し、後ろの二人を止めた。敵の足音や気配を感じないため……ただ何かの機械が鳴っているのだろう。畏かもしれないが……もつと嫌な予感がする。

「(英語) 音の方へ行くぞ」

「(英語) ……分かった。」

ジョニー・マクレ<sup>おっ</sup>レー<sup>き</sup>が先頭に立った。

「(英語) ここからは俺の仕事だ。」  
そう言つて音の方へ歩き出した。

音の原因はすぐに見つかった。そこには……5トンは軽く超えそうなの液体爆薬が使われた爆弾が置かれてあつた。その爆弾はコンテナに囲まれおり、見えなくしていたようだ。

「えっ……これって!？」

「(英語) ……おっさん、何とか解除できないのか？」

爆弾のタイマーは残り15分を切つた。

「(英語) こんな精密機械を止められると思うか? 触れたと勝手に爆発だつてあり得るんだぞ!？」

ジョニー・マクレーンは冷汗をかきながら言つた。

「(英語) 高速の時、爆弾いじつて爆発させたじゃねえか」

「(英語) 止めるのは難しいが、爆発させるのは簡単なんだ!! ……それにこれだけかいと細工もしやすい。」

俺はジョニー・マクレーンのため息をつきながら、その高さ3mほどある爆弾を見上げた。

過酸化アセトン5トンはTNT換算で3.5〜4トン。という事は……計算上、戦艦大和の九一式徹甲弾103〜108発分の炸薬、155mm榴弾砲(FH70)のM107榴弾530〜606発分の炸薬となる。そんな量が一齐に爆発でもしたら……コンテナ船どころか戦艦や原子力空母ですら簡単に轟沈するだろう。

……こんな爆弾があるという事は、この船には『博物館の収藏品』はないだろう。きつとこれは困だ。だけど、収藏品はどこに消えたんだ?  
?

関東の陸海空輸送ルートのうち、これで海の線はなくなった。となると残りは陸と空。日本は島国だから陸のルートだと海外へは渡れない。空だと空港は限られているし、今は超厳戒態勢のはず。いった

いどうやって？

いや、それもそうだが……この船が東京湾を塞ぐ形で沈んでみる。その経済損失は果てしないことになるぞ!?

……急いでこの爆弾の解除方法を聞きださないと。

俺は念のため、『旧芝離宮恩賜公園で拾ったスマホ』のアラームを起動させ、爆発1分前にアラームが鳴る様にセットした。

俺達は爆弾から離れた。そして敵がいるであろう艦橋へ向かうため、再びコンテナの迷路を警戒しながら移動していた時だった。

カツン……

左側から俺達ではない足跡が聞こえた。

カチャカチャカチャ!!

俺とジョニー・マクレーン、そして西住さんは左へ抜ける通路(?)へ銃を向けると……白人の男がいた。

「(ハンガリー語) Ne 1j!!」

タアンタアンタアン!! ザク!!

白人の男が何か言っていたが、ジョニー・マクレーンは問答無用で拳銃を撃ちこみ、俺は銃剣を刺した。西住さんは発砲しなかったが、俺達がやった事に眉一つ動かさなかった。

「(英語) なんて言った?」

ジョニー・マクレーンがその男が動かなくなったことを確認した後、ポツリと言った。

「(英語) 『動くな!!』とでも言おうとしたんじ……!?!」

俺は適当に答えた瞬間、上から敵の気配を感じた。俺は慌てて防衛態勢を取った瞬間、強烈な力を受けた。その力は防衛態勢を力づくでカチ割り、顔面にぶつかったと同時に俺は宙に浮き、コンテナに激突した。

「ゴフツ!!」

「(英語) 『撃つな』と言ったんだ……!!」

……クソツ!! なんて馬鹿力だ!! 力だけなら鬼塚少佐以上、ベオウル



フ並みはあるぞ!?

鼻から生暖かい液体が垂れていくのが分かる。

俺は38式を杖代わりにヨロヨロと立ち上がると、そこには2m以上の大男がジョニー・マクレーの足を掴み、コンテナへ投げ飛ばしていた。

〔英語〕この世で一番嫌いなものを知っているか？警察と武偵だ!!〕

ドスツ!!

大男が倒れたジョニー・マクレーの腹を蹴飛ばす。

「ヤロオオオ!!」

俺は力を振り絞って38式を握り、大男の背中に銃剣を刺し、そのまま引金を引いた。しかし、その大男は多少痛がった程度で倒れもしなかった。

……この野郎!!不死身か何かか!!

俺は銃剣を抜くと大男は俺の方へゆっくりと振り向く。そこで、銃床で大男の顎を殴りその場で一回転、そして股間に銃剣を刺した。

「ゴフツ!!」

俺はボルトを引いて弾を装填し、銃剣を抜いて大男の胸を撃った。

タアン!!タアン!!

俺が大男に向けて再び発砲したと同時に、俺の横っ腹を弾丸が貫いた。

……は!?!?どういうことだ?

大男がゆっくりと倒れると、西住さんが涙目で銃を握っているのが見えた。その銃の銃口からは硝煙が上がっている。

きつと西住さんが俺を助けようと発砲し、その弾がコンテナによる跳弾で俺に当たったのだろう。

……うわぁ、運がねえ。

俺が今着ている『武偵高校の制服』は防弾防刃使用になっているが、流石に西住さんが持っている44式騎兵銃の様なライフル銃の弾は防ぐことはできない。

「全く……。助けてくれるのは良いけど、外すんじゃないよ。」

西住さんに『この大男を殺した』という誤解と罪悪感を持たせない

ようにするため、痛む傷を無視しながら、俺は『おちやらけて』いった。

「え!?今のは……」

「弾がそっち側に抜けているだろう。俺の弾だ。」

俺がそう言うと、西住さんは強張<sup>こわば</sup>らせていた顔を、ふにやつとした顔に戻した。

「(英語) おっさん、さっさと起きろ。艦橋へ急いで向かうぞ」

西住さんが表情を元に戻したのを確認すると、俺は  
ジヨニー・マクレ<sup>おっ</sup>ーの手を取り、無理やり立たせた。

「(英語) 俺への心配はなしかあ?」

「(英語) そこまで血だらけになっても、おっさんなら心配ないだろ?」

ジヨニー・マクレ<sup>おっ</sup>ーの顔とシャツは鮮血と埃<sup>ほこり</sup>で赤黒く染まっていた。

「(英語) ハッ!! 日本じゃ『水も滴る良い男』って言うんだろ? 坊主は『血も滴る良い男』だな。」

「(英語) おっさんみたいないな<sup>×</sup>いい男<sup>×</sup>になっただろ?」

……まだ俺は軽口が叩ける。だから……まだ大丈夫だ。

俺は血が足りず、ブーツとする頭を気力だけで働かせる。

マシアス・タルゴが艦橋から去って10数分後、白鷺千聖は目を覚ました。

……ここはどこ?

白鷺千聖はボヤツとした思考のまま周りを見渡した。自分のいる大きな部屋は鉄の壁に囲まれており、沢山の計器類がある。おそらく、船の艦橋であろうか?

その部屋に屈強な男20人弱がおり、一部は計器類とにらめっこをしている。

……私は『ライブハウス：C i R C L E』で『R o s e l i a』と

一緒にリハーサルをして、その後……

白鷺千聖はそこで自分が誘拐されたこと、そして自分が縛られていることに気が付いた。自分の置かれた環境に気が付き、恐怖心が胸の奥からあふれ出した。

「ツツツツツ!!」

白鷺千聖と着物を着た少女は同時に叫んだが、猿轡のせいでまともな声が出せなかった。しかし、まだ寝ているPastel\*Paletteのメンバーはこの叫び声(?)で起きたようだ。

「(英語) ん? 起きちまったか」

「(英語) 麻酔は大目にしたんだが……本国の安物だからな」

黄色人種と白人の話が聞こえるが……何をしゃべっているのか理解できない。

「(中国語) 犯つてもいいか? 傷が有無は問われないはずだ。ムラムラする。」

「(英語) こいつはなんて言ったんだ?」

「(英語) 『犯らせる』だと。」

「(英語) ……責任はそつちで取れ。俺達はあるたらに雇われただけだ。これだからChokyは……」

白人の一人が汚らしい物を見るような目で黄色人種の男を見た後、そつぽを向いた。

「(中国語) 犯つてもいいってよ。」

「(中国語) 分かってる。俺、この金髪の子が好みなんだよな。」

「(中国語) あ!!クソツツ!!次俺だからな!!」

「(中国語) 中国の先生方、組長の方は俺が犯つてもいいですか? 今までの鬱憤がありましたね」

「(中国語) いいぞ」

男たちがギロリと白鷺千聖やその他のメンバーたちを見た。白鷺千聖は何をしゃべっていたのか理解できなかったが、『自分が何かをされる』という事は薄々感づいていた。

……え?も、もしかして……

子役として名声を築き、今はその美貌で女優としての道を歩む白鷺

千聖は感づいた。今まで自分には縁がなかったが、噂では耳にする『あれ』……。いや、それ以上にひどい物、『強姦』だと……。  
「ツ~~~~!!」

〔中国語〕 いいねえ。俺はそうやって泣き叫ぶ方が好みだ。」

黄色人種の男は舌なめずりをしながら、白鷺千聖の着ている服をナイフで切り刻み、肌を露出させる。

〔英語〕 いいなあ。俺も混ぜる……」

〔英語〕 フーベルト!!何を言ってる!!」

〔英語〕 タルゴ隊長は今いませんし、今ならこいつらがやったことできる。いいでしょう?なあ、お前ら……」

〔英語〕 ……クソツ!!勝手にしろ!!」

後方で白人同士がの言い合いをしているが、白鷺千聖の耳には届かない。

男はある程度服を切り刻んで白鷺千聖の肌を大幅に露出させた後、汚物をさらけ出した。

……い、いや!!助けて!!助けてイブk……

バン!!ダアン!!タアンタアン!!

この部屋の扉が蹴破られると同時に、発砲音が響き渡った。全員がその音の方向を見ると……そこには血まみれの中年男性と青年、そして少女がいた。

……い、イブキ!?

白鷺千聖には、血まみれの青年が『白馬の騎士』に見えた。

俺は血が足りないせいで時々意識がなくなりかけるが、気合と根性で何とか艦橋まで走り抜けた。

俺とジョニー・マクレーンおっさは扉を蹴破り、目の前にいた男を問答無用で射殺し、38式のボルトさを操作しながら艦橋へ入ると……  
tel\*Palettesの5人と高鏡組組長・高鏡菊代が強姦さ

れる寸前だった。

「ハハハ……」

俺は何故か口角が上がり、笑い始めた。

……こういう様な事は、軍の時は沢山あっても、武偵高校に向向してからは無かったつけ。それに、軍の時は辻さん・神城さん・鬼塚少佐が俺以上に怒り心頭だったから、逆に冷静を保てたが……今回は無理そうだなあ

俺は『白鷺千聖を犯そうとしていた男』の頭をぶち抜いた後、その38式を『高鏡菊代を犯そうとしていた男』に投げ刺した。

そして左手でホルスターから14年式拳銃を抜き、右手で腰の日本刀を抜刀した。

「ああ……皆殺しだ!!一人もここから逃がすな!!」

俺はP a s t e l \* P a l e t t e s のメンバーに群がる奴らに接近して切り捨てた後、残っていた奴らに銃撃を食らわせる。

ジョニー・マクレーは銃弾を敵にくらわした後、弾切れになった俺のワルサーP38 を投げ捨て、一人に格闘戦を仕掛ける。

西住さんは敵から奪ったナイフを使いP a s t e l \* P a l e t t e s や高鏡菊代を縛る縄を切り、彼女たちを解放させた。

「(英語)ま、待ってくれ!!私はやってない……!!」

ジョニー・マクレーが格闘戦によって一人を倒した。そして最後に残った白人の男は両手を上げ、降伏の意思を示した。俺は投げた38式を回収し、ボルトを操作しながらその男に突きつける。

「(英語)おいサイモンくそ野郎は何処へ行った?ついでに『博物館の収蔵物』は何処だ?そして船の爆弾の解除コードを教えろ!」

「(英語)サイモン様は別の場所へ向かった。私はその場所は分からない!!それに宝物はこの船にあるはずだ!!サイモン様が荷詰めの指揮に当たったはずだ!!爆弾!何のことだ!!」

銃剣の切先が両手を上げる男の首に触れた。

「(英語)……本当か?」

「(英語) ほ、本当だ!!」

この男は嘘をついていない様だった。だが……爆弾も知っていないという事は、コイツは組織の末端にいたやつなのだろう。

……サイモン自らやったってことは、いくらでも偽装はできる。という事は、こいつは重要な情報を全く持ち合わせない、ただ強姦を黙認した男なんだな。

「(英語) ああ……残念だ。全く残念だ。」

バキツ!!

俺は38式の引金を引きそうになるが、それを我慢した。その代わり、銃床で男の顔を殴りつけた。

……強姦を見て見ぬ振りした野郎も、殺してやりたい。だが、この事件の犯人全員を殺すとすると、その後の対応が……藤原さん達の後始末が面倒になる。

「(英語) 坊主……気が晴れたか?」

「(英語) ……ああ」

「(英語) おいおい、キャラがブレてるぞ」

俺が殴った後、ジョニー・マクレイが場を和ませるように冗談を言いながら男を縄で縛った。

……とりあえず、艦橋の制圧完了。爆弾は解除コードが分からないため放置。あと、なんでここにPastel\*Palettesの5人と高鏡菊代が?

俺は彼女達の方へ向いた。Pastel\*Palettesの白鷺千聖を除いた4人は大丈夫だったようだ。しかし、白鷺千聖は服を引きちぎられ、ほぼ裸同然の姿のまま呆然としていた。

……いつまでもこんな状態はマズいな。

俺は四次元倉庫から何か羽織れる物を探すが……ちようどいい物が見つからない。

……血だらけで悪いが、これでも着てくれ。

俺は武偵高校の制服の上着を脱ぎながら、白鷺千聖の前に立つ

た。白鷺千聖はビクツ震えた後、己を守る様に自分の体を抱きしめる。

「助けが遅れて悪かった。護衛なのにな。」

俺はしゃがんで彼女に上着をかけた後、頭を一撫でした。白鷺千聖は俯うつむいているため、表情が分からないが……この嗚咽は彼女の物だろう。

白鷺千聖を安心させるため、彼女を抱きしめたほうがいいのだろうが……そんな時間はなさそうだ。

俺はスツと立ち上がると、『旧芝離宮恩賜公園で拾ったスマホ』のアラーム画面を見た。

……残り5分弱。という事は6分弱で爆弾が爆発する。爆発するにせよ、東京湾を塞ぐようにこの船を沈めたら経済損失が半端ない。どうすればいい？

俺が頭を抱えていたその時、肩を叩かれた。俺は振り向くと、そこには着物の乱れ乱れを直す高鏡菊代がいた。

「まさかアンタが来るは思いませんでした。村田大尉殿？」

乱れ乱れを直し、帯を締め直した高鏡菊代は床に転がっている肉塊から銃を剥ぎ取り、弾を装填する。

「キンジじゃなくて悪かったな。……なれない敬語は止めろ」

「そう？」

高鏡菊代は敵の戦闘用ナイフの刃の鋭さを確認し、帯に差し込んだ。

「……犯されかけたのにタフだな。」

「伊達にヤクザの組長はやってないわ」

高鏡菊代は剥ぎ取った短機関銃サブマシンガンのボルトと安全装置を自然に操作する。

「ヤクザも短機関銃サブマシンガンを扱うのか？禁酒法時代のマフィアか何かか？」

「……武偵中学に通っていたから。」

高鏡菊代がそう言った時、目の前には『武偵高校の浮島』と『空き地島』が見えてきた。

「そうだ!!武偵高校だ!!空き地島だ!!」

俺は『空き地島にこのコンテナ船を突っ込ませる』というを思いついた。空き地島の周囲には埠頭ふとうはなく、民間人はほとんどいないため、船が爆発しても被害は余りでないはずだ。

ただ一つ問題があるとすれば、こんなバカでかい船を操船できる人間がいるかどうか……

「(英語) おっさん!!この船、操船できるか!？」

「(英語) 何言ってやがる坊主!!出来るわけないだろ!？」

「(英語) クソツ!!俺がやるしかねえか……!!」

俺は艦橋を走り、操舵輪ステアリングホイールの前に立った。

海軍兵学校の時、実地訓練で操船方法を教わったことがあるが……その時使ったのは舵が効きやすい小型練習船ステアリングホイール。しかし、今から扱うのは超大型コンテナ船ステアリングホイール。勝手が全く違うが、果たしてうまく扱えるかどうか……。

「面舵いっばーい!!」

俺は操舵輪ステアリングホイールを思いっきり回した。

「あ、アンタ何やってんの!?!岸にぶつかるでしょ!!」

高鏡菊代が俺を突き飛ばし、操舵輪ステアリングホイールを元に戻そうとする。俺は

慌てて高鏡菊代を投げ飛ばし、操舵輪や機関出力を確認した。

「おいバカ止めろ!!この船は爆弾が乗っかつて……!!」

「(英語) タルゴ様、万歳!!」

投降してジョニー・マクレイおっさんが捕縛した男が、なぜか縄を解いて拳銃とナイフ持って立っていた。きつと持っているナイフで縄を切ったのだろう。

その拳銃の銃口の先には、投げ飛ばした高鏡菊代と白鷺千聖が……  
……クソツ!!あの男を無力化する時間がねえ!!

俺は駆け出し、高鏡菊代と白鷺千聖に覆いかぶさった。

ダアンダアンダアン!!

俺の頭に強い衝撃が伝わった瞬間強制シャットダウンの様



全ての感覚・思考回路がプツンと切れた。

ダアンダアンダアン!!

〔英語〕 くだばれジャガイモ野郎!!

イブキが撃たれた後、ジョニー・マクレーはその男を射殺した。射殺してから10数秒後、イブキは一向に立ち上がろうとしない。

「ドサクサに紛れて何処触れてるの!!」

「アイドルに何してるのよ!!」

高鏡菊代と白鷺千聖はイブキの顔を押しつけようとするが……イブキは一切動こうとしない。

重いイブキから二人は何とか脱出した。しかし、イブキはうつ伏せのまま身動き一つ取らない。

そんな状況を不思議に思ったのか、他のP a s t e l \* P a l e t t e s メンバーや西住みほが動かないイブキのもとに集まりだし……

「……!!」

全員が驚いた。イブキの被っていたヘルメットの後頭部には穴が開いており、頭から血がドクドクと流れて池を作っている。

「い、イヤ……」

白鷺千聖は血で汚れるのを一切気にせず、イブキを急いで仰向けにした。イブキは目をかっぴらいたまま、動かない。

高鏡菊代がイブキの首に手を置いた。

「……脈がない。」

「何で、なんで私と仲良くなると死んじゃうの!! 浩二も!! イブキも!!」

白鷺千聖の慟哭がコンテナ船に響き渡った。

完

☒☒関東の酒飲☒☒の次回作、『密着!!冬木税務署24時』  
く魔術師<sup>脱税者</sup>達

を見つけ出せ〜(飯)』をよろしくお願いいたしm……

「俺は生きてるぞ!!!」

……という事なので、『少年士官と緋弾のエリア』はまだまだ続きます。

Die Hard 3 in Tokyo 『おねー  
ちゃん』を探しますか……

俺は目を覚ますと、小舟の上にいた。その小舟は黄河やナイル川・アマゾン川の様な巨大な川を渡っているようだ。

「お？ やつと起きたかい？ いやあくさすがに話し相手がないのは寂しくってねえ〜」

小舟には癖のある赤髪をツインテールにし、半袖の着物(?)を着た少女が船首に座り、こちらを見ていた。

幻想郷の方だと人魂になるんだけど、こっちは違うみたいだね。いやあくこれだと話がいがあるってもんよ。……あ、悪い悪い。あたいの名前を言っってなかったね。あたいは小野塚小町って言うんだ」

「……村田維吹です。」

この自称死神がペラペラと良くしゃべる。

なんでも最近、『両川勘吉』という眉毛つながりの男がこの世界の地獄へ落されたそうさ。その男は地獄で反省すると思いきや、閻魔大王の政権を奪うべく反乱を起こして成功させ、地獄の独裁者となったらしい。そのまま天国に戦争をふっかけ、地獄も天国もボロボロになったそうさ。ついでに、その『両川勘吉』は生き返って常世を満喫しているらしい。

「と言うわけで、人手が足りないから違う世界の死神であるあたいがここで手伝ってるってわけ。全く、これじゃあサボれないったらありやしないさ。」

「……へ、へえ。そうですか。」

……その『両川勘吉』って『両川さん』の事じゃないよなあ。

俺はあの『眉毛つながりの破天荒警官』を思い出した。正直に言っ  
て、あの人なら『

地獄でクーデター』ぐらい普通に想像できる。

……って言うかここ三途の川!?俺死んだの!?あんなので!!……いや、この話を聞く限り、生き返ることは可能だ。『両川さん』にできたんだ、俺だってできるはずだ!!

俺はさりげなく自分の持ち物を確認した。俺の所持物は、着ている白の浴衣(?)に帯だけのようだ。

「小野塚さん、船が向かう方向が☒☒あの世☒☒ですか?」

「小町でいいさ。そうそう、それで合ってる。ついでに逆方向が☒☒賽の河原☒☒d……!?!」

俺は油断していた小野塚さんに一気に近づき、着物(?)を掴んで川へ投げ飛ばした。

「悪いが小野塚さん!!俺はまだ死ぬわけにはいかないんだ!!じゃあな!!」

俺は舵を取って進路を変えようとし……自動でこの船が動いていることに気が付いた。どうやっても進路を変えられそうにない。そこで俺は白の浴衣(?)を脱ぎ捨てて川に飛びこみ、☒☒賽の河原☒☒へ向けて必死に泳ぐ。

さて、この☒☒三途の川(?)☒☒では海水やプールの様な浮力をほとんど感じない。まるで重しを背負わされて泳がされている様だった。……だけど俺には関係ねえ!!軍で『荷物を持ったまま遠泳』の訓練は伊達にやってないぜ!!

俺は必死に泳ぎ、やっと岸に着いた。周りに居る獄卒(地獄にいる鬼)達や衣服を剥ぎ取っている爺婆ジジババがギョツと俺を見てくる。

俺は硬直している獄卒の一人に近づき、持っていた金棒を奪って殴り倒した。

「俺は生きてる!!俺は生きてるぞおお!!」

俺はそう叫び、手あたり次第に獄卒達をその金棒で殴り倒している。

「おい!!ちよつと待て!!今は両川のせいで混乱が起きているんだ!!だから反乱は止めt……!!」

「うるせえ!!」

バキ!!

俺は両手を上げて許しを請う鬼も殴り倒す。

……鬼は法律も~~〇~~ジュネーブ条約~~〇~~も適用外だ!!例え~~〇~~鬼畜~~〇~~と言われようとも俺は生き返るぞ!!

「お前ら未練はないか!!俺はある!!……生き返りたくば武器を取れ!!戦え!!ここがああ世なら死ぬことはない!!」

俺はそう叫びんだ後、獄卒共の親玉であろう3m近いの大鬼に接近し、鬼の股間を金棒で殴りあげた。

「……!?!」

大鬼は股間を押さえて白目をむき、泡を吹いて倒れる。

「お前ら!!生き返りたくばついてこい!!」

「「「おおおお!!」」」

血の気のない、三角頭巾（頭に付ける三角の布）を被った数百人の者達が倒した獄卒から武器を奪い、また転がっている石を拾って残った獄卒共を襲い始めた。

親玉が倒されたせい、残った獄卒は逃げ出し始めるが、三角頭巾を被った者たちは執拗に追う。その様子は波のように伝わり、最終的には数万人もの亡者たちが獄卒を追い立て始めた。

そして、獄卒共を全員倒した後、数万もの反乱軍は巨大な門を見つけるとこじ開け、その門をくぐっていく。

「俺は生きてるぞ!!」

俺も奪った金棒を担いでその門をくぐる……

「し、心臓マッサージを!!」

「無駄よ。頭をぶち抜かれたのよ……」

☒☒Pastel\*Palettes☒☒大和麻弥の言葉に、高鏡菊代は非情な現実を叩きつけた。そして、高鏡菊代は脈を計るためイブキの首に置いた手を放し、かっぴらいたまま目を閉じさせた。

「い、イブキさん……ブシドーを貫いたんですね」

「イブキ君……」

☒☒Pastel\*Palettes☒☒若宮イヴと丸山彩が目には涙を浮かべる。

「(英語) ……………。(坊主がこんな簡単に死ぬか?)」

「お願い!!目を覚まして!!」

ジョニー・マクレーンおっは『瀕死の状態から生還するイブキ』を何度か見ているために冷静だった。それに対し、白鷺千聖は女優・アイドルという事を忘れ、悲嘆で顔を歪ませ涙をこぼした。

その時だった。

「ねえ!!起きt……」

「俺は生きてるぞ!!」

ベキ!!

死んだと思っていた男村田維吹ぶきがいきなり飛び起き、白鷺千聖の顔面に頭がぶつかった。そして鈍い打撃音が艦橋に響く。

「ツ~~~~~~~~!!!」

村田維吹は額を押さえながら転がり周り、白鷺千聖は鼻を押さええて悶絶している。

「やっぱり村田さんは生きてましたか。さ、早く爆弾を止めないと。」

「(英語) 嬢ちゃん……だいぶ変わったな……」

「今日一日で色々巻き込まれましたから、嫌でも性格や考えが変わりますよ。……それよりも爆弾です。早くしないと私達も死んじゃいますよ?」

西住みほが無表情で淡々と言う姿を見て、ジョニー・マクレーンはドーン引きしていた。

『爆弾を見つけた』との情報により、田中曹長が駆け付け、その冷蔵庫を確認した。

「第一中隊……こうなると分かっていたから、俺だけ待機させたんですか？ねえ……少佐殿？」

田中曹長は鍵穴を特殊な道具を使って観察しながら言った。彼はHS部隊第二中隊第一小队所属の工兵だが、彼だけは上海には行けずに、本土で待機だった。

「さあ？最初から分かっていたら不発弾処理隊をここに集めていますよ」

藤原岩市少佐は涼しげな顔をしながら答えた。

「……そうですかい。全く、上海ガニ食いたかったなあ……。まあ良い、罨は見えない……開けるぞ。」

田中曹長はゆっくりと業務用冷蔵庫を開けた。

ピッ、ピッ、ピッ、ピッ……

冷蔵庫を開けると……そこには赤と白の筒に入った大量の爆薬と某リングゴ会社の大きめの端末がコードで繋がっていた。その端末には『Enter the ABORT CODE (訳：解除コードを入力せよ)』という文字と、カウントダウンの時間が表示されていた。誰がどう見ても、これはサイモンの仕掛けた爆弾だろう。

周りで見ていた軍・警察・消防の人たちは生唾を飲み込んだ。

「……ビング。少佐殿、他の学校の搜索は止めてもいいと思います。」「ダメだ。サイモンは個数を言っていない。無駄に終わるとしても搜索は続行する。……田中曹長、解除はできるか？」

藤原少佐は田中曹長の具申を一蹴した後、冷静に尋ねた。

「誰に聞いているんですか？当たり前ですよ……って言いたいところですが、こんな工芸品の様な爆弾、どんな罨があるか分かりません。………だけど、この作り手に、テロリストに負けたくはねえ」

田中曹長は口角を上げ、威嚇するように笑った。藤原岩市少佐をその表情を見た後、ため息をついた。

「相変わらず第二中隊は血の気が多いな。……生徒達を体育館かどこかに全員集める。サイモンは避難を禁止したが、生徒たちを集めることは禁止していない。」

藤原岩市少佐は部下に指示を出しながら、上層部へ連絡をし始めた。

「女優の顔に何するのよ!!」

白鷺千聖は白い肌を真っ赤にし、そして鼻血にまみれた顔で俺を問い詰めるように怒り散らす。この姿をマスコミが報道したら、きっと彼女の女優生命は断たれていただろう。

「知るかよ!!俺が何したって言うんだ!?ただ起きただけだろ!」「死んだかと思っただけ心配したのよ!」

「お前、俺を蛇蝎の如く嫌ってただろ!?冗談は止めてくれ!!」俺と白鷺千聖は互いに血にまみれた顔を互いに突きつけて批判し合っている。

「……なんで脈が無かったのに生きてるの?頭をぶち抜かれて即死のはずよ?」

「ヘルメットが貫通しただけで、脳には傷がないんじゃない?」

高鏡菊代がため息交じりで呟いた言葉にPastel\*Palette・氷川日菜はさも当然の様に答えた。

……ん?俺って頭を撃たれたのか?

白鷺千聖がヒステリー気味に怒るのを無視しながら、俺は戦闘用ヘルメットを脱いだ。それには、中心から右側の位置に弾が貫通した跡が残っていた。

俺は自分の頭皮に触れ、傷の有無を確認すると……側面に知らない傷があった。

……そう言えば、イギリス軍の兵士が某原理主義組織との戦



争でヘルメットをぶち抜かれたのだが、無事に生きていたってニユースがあつたな。

俺もきつと、それと同じことが起こつたのだろう。何とも運がいい。普通なら死んでいたはずだ。

俺はホツと胸をなでおろした、その時だった。

ズーーン!!!

鈍く、とても低い轟音が響き渡ると同時に、船が大きく揺れた。その揺れはとても大きく、例えどんなに訓練されていても立っていられないほどの巨大なものだった。

「「「キヤアー!!!」」」

……ま、まさか爆弾が爆発したのか?! いや待て、爆弾が爆発していたら俺達が知覚する前に海の藻屑となつているはず。

俺はパイプに掴まり、揺れが収まった後立ち上がった。

艦橋の窓ガラスからは、空き地島のコンクリートの地面しか見えない。

……船が空き地島に座礁したんだ。だから大きな揺れが起きたのか!! 後は俺達が脱出すれば被害はほぼ0になる!!

ブー、ブー、ブー……

そんな時だった。俺のポケットに入れてある『旧芝離宮恩賜公園で拾ったスマホ』がアラーム音を鳴らし始めた。そのスマホは爆弾の爆発1分前になるようにセットしたから……

……爆弾まで残り1分!? 解除どころか、この船から避難するのだけきついで!?

「む、村田さん!! そのアラームって!!」

「爆発1分前だ!!」

俺は西住さんの問いに、悲しい現実を伝えた。

コンテナ船は全長300m以上、乾舷(上甲板から水面まで高さ)は10mを超える。そのため、艦首から空き地島へ逃げる時間も、搭載艇ランチを下ろして海に逃げる時間もない!!

「(英語) とにかく逃げるぞ!!」

「急げ!! 爆発するぞ!! 艦尾だ!! 艦尾へ逃げろ!! 早く!!」

「皆さん!!こつちです!!」

ジョニー・マクレーンと俺、西住さんの剣幕で事態の緊急性を理解したのだろう。Pastel\*Palettesの全メンバーと高鏡菊代は顔を真っ青にし、西住さんの後を走り始めた。

アラームが鳴り、40秒ほどたったところか……高鏡菊代はともかく、Pastel\*Palettesのメンバーは走るのが遅かった。特に白鷺千聖と丸山彩はダントツで遅い。そのせいで、まだ艦尾につかなかった。

「(英語)もうだめだ!!ここから降りるぞ!!」

「ここで降ります!!皆さん着いてきてください!!」

ジョニー・マクレーンの言葉を訳した後、西住さんは舷側の手すりに足をかけ、10m下の海へ飛び込んだ。

「あ!!これはルンって来る!!」

「ぶ、ブシドー!!」

「何でこんな目に会うんですか!?!」

Pastel\*Palettes：氷川日菜・若宮イヴ・大和麻弥も後に続いて海へ飛び込むが……白鷺千聖・丸山彩・高鏡菊代は一向に飛び込もうとしない。

「何やってんだよ!!」

「(英語)何してるんだ!!早く飛び込め!!」

俺とジョニー・マクレーンは3人を急かすが……一向に飛び込まない。

「こんな高さ無理よ!!」

「む、ムリだよおゝ(泣)」

「カタギが全員避難しないと……巻き込んだ原因はアタシだし……」

白鷺千聖は逆切れ気味に、丸山彩は目に涙を浮かべ、高鏡菊代は気まずそうに答えた。

……気持ちは分かるけど!!もう10秒もないんだよ!!

「失礼いたします、お嬢様方ってか!?!」

「(英語) こんな時だから大目に見てくれよ!」

俺は近くにいた白鷺千聖と高鏡菊代を担ぎ上げ、  
ジョニー・マクレイは丸山彩を抱え上げた。

そして、俺達はお嬢さんたちを抱えたまま船から飛び降りた瞬間  
……

チユドーン!!

爆発による熱風、そして破片を喰らった後、海へ着水した。

俺は全身傷だらけで海へ潜ったため、体中に激痛が走り、脳が  
ショートしそうだった。

……せ、せめてこいつらだけでも……

その時、イルカが俺達に近づき、空き地島へ運びだした。俺はその  
ことに安心したのか、また気を失った。

「全く、~~爆~~~~弾~~爆弾いじり~~爆~~~~弾~~がこんなに面白いなんてなあ。歩兵から工兵  
に転向してよかったって思うぜ。」

田中曹長は呟きながら、電子回路と爆薬を把握していく。彼がこの  
爆弾を調べれば調べるほど……この爆弾の繊細さ、複雑さをより実感  
する。

「残り5分か……時間が無いな。」

パチン……

田中曹長は爆弾に繋がっているコードを一つ切り離した。

『No guts, no glory(訳:勇気無くして栄光無し)』  
か。よく言ったもんだ」

パチン……。パチン……

慎重に、そして大胆にコードを一気に切っていく。残ったのは白・  
赤・黒の3色だった。

「全校生徒が校外へ脱出する時間は予想で3分以上……だっけか」

爆弾が爆発するまであと4分を切った。しかし、残り3本のコードのうち、どれを切れば爆弾が止まるか見当もつかない。

「そう言えば、ここにイブキの妹がいるんだっけか？」

正確には八神保護した少女はやてなのだが、田中曹長は藤原岩市少佐から貰った情報を思い出した。そして、上司であり後輩で、今は武偵高へ出向中のイブキが脳裏よぎを過る。

……今度、酒の一杯でも奢おごってもらおうぞ。

田中曹長はそう思いながら、黒のコードを切った。

「ッ……!!」

ピーー!!

一瞬彼は身構えたが……爆弾が爆発する気配がない。爆弾についていた大きめの端末のタイマーは止まり、液体を混ぜ合わせるポンプが動く気配もない。

「……は、ハハハ、ハハハッ!!!!どうだテロリスト共!!解除成功!!爆弾解除成功!!」

田中曹長は大声でインカムに伝えた後、床に寝っ転がった。そして水筒を取り出し、浴びるように水を飲む。

その時だった。まるでシロップの様な甘ったるい香りが部屋に充滿していることに気が付いた。田中曹長は不思議に思い、ゆっくりと体を起こした。香りは爆弾から漂っているようだ。

「……?」

液体爆薬が入っている筒から、赤色の液体が少し漏れていた。田中曹長はその液体を指ですくって舐めた。

「……!!」

田中曹長その液体を舐めた後、慌てて他の筒の液体を取り出して舐め……そして理解した。

「クソッ!!クソッタレ!!」

『どうした、田中曹長』

「少佐殿!!筒の中身はシロップです!!俺達は嵌はめられた!!」

『液体爆薬が入っていると考えていた筒』には甘いシユガーシロップがたっぷりと充填されていたのだ。彼は爆弾魔との勝負に勝つ

ても（戦術的勝利）、爆弾ではないという事に気が付かなかった（戦略的敗北）のだ。

「チクシヨウ!!チクシヨウが!!この野郎!!」

田中曹長は上司達ストッパーがいなかったために怒りに囚われ、シロップの入った筒を蹴り飛ばした。

さて、『Die Hard 3 in Tokyo 『復讐』』じゃなくて『盗み』かよ……』において、劉翔武たち御一行はラーメン屋で1時間ほどタイムロスをしてしまった。

「……全く、俺は作戦外アドリブは上手くないからな。何故かこうなる。」  
今は高級バンに乗り込み、急いで調布飛行場へ向かっていた。

劉翔武は苦々しくタバコを咥え、ジッポで火をつけようとするが……中々火が付かない。ジッポの油が切れているようだ。

「……。すまないがシガライターを取ってくれ。……ああ、それだ。」

ジユツ……

劉翔武は真っ赤になった電熱線にタバコをくっ付けた。その時、劉翔武が乗る高級バンに爆風と閃光が襲った。

劉翔武はいきなりの爆発に驚きながらも、その優秀な頭脳で状況を整理する。

……車に爆弾が? いや、それなら確実に即死のはず。となると地雷!? こんな都市部に!?

劉翔武は何とか高級バンから這い出た。爆発の影響で片方の耳が

聞こえなくなっており、手足も怪我のせいで満足に動かせない。

這い出た劉翔武は違和感を覚えた。ここは東京の都市部。それなのに車一台、人ひとりもないのだ。

「(中国語) 70過ぎの老人とはいえ、流石は劉翔武。地雷程度じゃ爆殺できないか。」

「(中国語) 貴様……日本陸軍西機関機関長、鈴木敬次!!」

いや、一人いた。パイプを啜える陸軍将校が劉翔武を見下ろしていた。

「(中国語) 元だぜ? 今はHS部隊第一中隊だ。」

……『HS部隊第一中隊』か。日本軍暗部の国内担当だな。という事は、村田維吹は諸葛静幻の方へ行つたか。これは嬉しい誤算だ。

劉翔武はそう思いながら傷ついた体に鞭を打ち、何とか立ち上がる。その様子を鈴木敬次大佐は冷たい眼で見ながらパイプをふかす。「(中国語) 日本で色々やりやがって。……必要な情報は全て得ている。だから死んでくれないかい? 劉翔武、お前さんのような優秀な奴を生かして返すわけにはいかないんでね。」

鈴木敬次大佐はそう言った後、パイプを啜えながらスラリと軍刀を抜いた。

「(中国語) 何を言う……小童が……!!」

劉翔武は今までの戦闘で培った体術の構えを取った。気を体中に充満させ、殺気をこの鈴木敬次大佐にぶつける。

……村田維吹を諸葛静幻へぶつけるのは不可能とと思っていたが……。静幻、やつと貴様の策の上を行ってやったぞ?

そして劉翔武は地面をしっかりと踏みしめ、鈴木敬次大佐に一気に近づいた。

ズドドドーン!!

劉翔武は鈴木敬次大佐に近づいた瞬間、目の前が爆発した。そして気が付いた時には地面に横たわっていた。彼は手足の感覚がなかった。

「(中国語) 忘れているかもしれないが、俺はゲリラ戦の専門だぜ？俺弱者がお前強者に正々堂々と戦うわけないだろう？……やれ。」

鈴木敬次大佐は軍刀を鞘に戻し、劉翔武に背を向けながら無線で命令を下した。

……『因果応報』か。……まあいい、最後には静幻に勝てたのだ。これで奴の影響力は地に落ちる。……龍頭閣下、獄卒共を掃除しております。

ダダダダダーン!!

複数の銃声が響き渡った。

鈴木敬次大佐は後ろを振り返らず、襟を開けながら自分の車へ歩き出した。

「あの劉翔武でも『指向性対人地雷4基による面攻撃』、そして『対物狙撃銃を装備する5人の一斉狙撃』は耐えきれぬわけじゃないよなあ。……でも、第二中隊社達にあれだけやっても勝てる気がしないってのはどういうことだい。」

鈴木敬次大佐はため息をついた。

「まあいい。最低限の☒☒落とし前☒☒はつけさせてもらったぜ?。」

俺は目を覚ますと……目の前には☒☒ヤシの木カッター☒☒で半裸の太った変質者(♂)がいた。

「オロロロロロ……」

俺はその変質者(♂)を見ると、その見た目の気持ち悪さから吐き気に襲われ、胃の中の物を全て吐き出す(朝から何も食べていないため、出たのは胃液ぐらいだが)。

「む、村田少年!!大丈夫か!？」

その変質者はそんな俺を心配したのか、シャツの襟をつかみ、顔を

近づけて揺さぶってきた。

……心配してくれるのは有難いが離れてくれ。余計に吐き気g  
……

俺は瀕死になりながらその変質者に尋問され、やっと解放できた。

なんでも、あの変質者海野土佐工門(ア)は警視(上から5番目の階級、警察官全体の2.5%ほど)で、彼の調教したイルカによって俺達は空空地島空へ運ばれたらしい。

……助けてくれたのは有難いが、見た目を何とかしてくれよ。何だよ、空ふんどし一丁空に空セーラー服の襟とスカート空それに加えて空頭に小さなヤシの木空って。

俺は精神的にも、肉体的にも疲労困憊で、ヨロヨロと階段に腰を掛けた。

近くではジヨニー・マクレーンに西住さんは手当を受けていた。

空P a s t e l \* P a l e t t e s 空のメンバーに高鏡菊代は怪我を負っていない様だ。彼女達はバスタオルか何かを羽織り、時々尋問か何かをされている。

……よかった。女性陣は特に大きな怪我はないようだな。

座って数分後、やっと俺に救急隊員が来て、手当をしてもらっている時だった。

「貸したビュートあ、さらにボロくしやがって……俺の言ったとおりだったろ。」

後ろからよく知っている声が聞こえてきた。俺はゆっくり振り向くと、そこには左手を三角巾で吊り、頭に包帯を巻いた武藤がいた。

「武藤、『勝鬨橋』ではありがとな。」

武藤は勝鬨橋でのカーチェイスの時、乗っていたハイエースで敵車輛の1台に体当たりをして俺達を助けてくれたのだ。

「今度飯でも奢れよ? おかげであのハイエースは廃車だ。提出用の書類は面倒なんだぜ?」



武藤はそう言つて、怪我をしていない右手で何かを俺に投げ渡してきた。俺はそれを受け取ると……ボロ車のキーだった。

「ビュートでここまで来たんだ。棧橋近くに止めるんじゃないよ。船頭さん、困つてたぞ?」

武藤がそう言つて指を刺した。その指の方向には……見た目は廃車寸前のボロ車が止まつていた。

「いや、ほんと悪い。寿司でいいか?」

「それなら白雪さんの手料理でm……」

「お、おねーちゃん!?どこ!?おねーちゃん!!」

いきなり大声が上がった。俺と武藤はその声が発せられた方へ向くと、Pastel\*Palettes氷川日菜が顔をぐしゃぐしゃにしながら誰かを探している。

「なんでPastel\*Palettesの氷川日菜ちゃんが!?つてPastel\*Palettes主メンバーいるし……。おいお前!!もしかして護衛任務で学校に来てなかった理由……」

「いや、あくまでも護衛はPastel\*Palettesの白鷺千聖だぞ!!」

俺は毛布にくるまり、ベンチに座つて尋問を受けている白鷺千聖を見た。彼女は毛布の他に俺の上着ぐらいいしか身に着けていないため……今の姿がとて煽情的に見えた。

ガツ!!

「むしろ千聖ちゃんの方が好みだよおおお!!」

武藤は無傷の右腕で俺を掴み、悔し涙を流す。力いっぱい俺を掴むため、鎮痛剤を打つていても体中から悲鳴をあげる。

「何で俺の任務じゃないんだよおおお!!」

「それだからだろ!!いい加減離せ!!」

俺は武藤の怪我した左腕を殴った。武藤は左腕を抱えて蹲り、苦悶の声を上げる。

……武藤ならこのぐらいいやっても平気だろ。そんな事より氷川日菜だ。

俺は武藤を尻目に、氷川日菜へ近づいて声をかけた。

「どうした？そんな泣いも……」

「イブキ君!!おねーちゃん!!おねーちゃんは何処!?!」

氷川日菜は俺に縋<sup>すが</sup>り付き、『おねーちゃんを保護したと言って欲しい』という目で俺に尋ねる。

「いや、その『おねーちゃん』を俺は知らん……」

紗夜ちゃん<sup>の</sup>の事よ。……この前、学校の風紀委員にイタズラしたでしょ。あの時の髪の毛の長い子よ。」

氷川日菜に張り付かれていた時、白鷺千聖が毛布にくるまったままで俺に近づいてきた。毛布からチラツと見える、白鷺千聖のシミ一つない太ももが何とも艶<sup>なま</sup>めかしい。

……なるほど、『瀕死の状態だと生殖本能が活発になる』って言うのは本当だったのか。

『白馬の王子様モード……HSSのキンジじゃねえんだから』と思いながら俺ため息をつき、思考を元に戻した。

俺は『俺のいちばん長い日 with Bang Dream!』

形あるもの、いつか壊れる……』にて、風紀委員で青緑色の長髪少女にイタズラを仕掛けた事を思い出した。確かに、彼女と顔立ちが非常に似ている。双子か何かだろうか。

「ああ、あの時の美人さんか。」

「……ええ、その子よ。その紗夜ちゃんが所属するRoselina<sup>と</sup>と言うバンドと一緒にリハーサルをしていたら誘拐されたのよ。」

なぜか白鷺千聖は俺をギロリと睨みながら説明した。俺は『そう言えれば白鷺千聖は俺の事嫌ってたっけ』と思いながら、考察を立てていく。

……基本的に見張りの関係上、人質は1カ所に收容される。その人質の收容場所である艦橋には『紗夜ちゃん』たちはいなかった。また、敵の動きからして……俺達が船に侵入してきた事は想定外だったよ

うだ。その事から、敵は人質が奪われることを前提に、分散して収容などしてはいないはず。となると……彼女達は船以外のどこかに連れ去られたのか？

しかし、船にいないとなると……完全に行先は不明だ。俺には全く見当もつかない。

「……クソツツ!!これだけの情報だと流石に分からん……」

「計画通りだと、20分もしないうちに鏡高組本部で中国の先生達とキンジが戦う計画になってる。今回その計画を立てたのはその中国の先生達……あいつらなら知っているはずよ。」

高鏡菊代は乱れた改造着物を整えながら、今回の騒動の発端を説明した。

……しかしまあ、着物が着崩れた姿という物は何ともグツとくるものだ。

今日の俺はどうかしているらしい。……まあ、ここまで体力的・肉体的（主に出血量）・精神的に疲労した事件・訓練はなかった。そんなところに見目麗しい女性達がいるのだ。多少おかしくなってもシヨウガナイのでは……いや、ダメだろ。

「イブキ君!!あたしはなんだってするから……おねーちゃんを……おねーちゃんを助けて!!」

氷川日菜ちゃんのその懇願に俺はため息をついた。

警察は爆弾爆発の時刻が過ぎたとはいえ、念のための爆弾探しと後処理に追われているだろう。そんな彼らに人探しに人材を裂くことはできないはずだ。となると……俺が動くしかない。

……全く、俺はあくまでも白鷺千聖の護衛だ。それ以上でもそれ以下でもない。『氷川日菜の姉を探しだす』と言うのは営業外だ。だけど、見捨てるわけにはいかないよなあ。

「(英語) どうした坊主。行かないのか。」

ジョニー・マクレーはボロボロで、本当ならこのまま病院のベッドで寝たいのだろうに……あえて俺を挑発するように言った。

「村田さん……行かないんですか？」

西住さんは俺の肩に手をかけて言った。西住さんは巻き込まれただけだ。ここで警察やらなんやらに保護されれば、無事に実家に帰れるだろうに……全く、なんてお人好しだ。

「……今度ラーメンでも奢おごってもらおうぞ。」

「……………うん!!!」

俺はそう言った後、ボロ車ビュートに乗り込もうとした。その時、誰かが俺に抱き着いてきた。

「もう私を心配させないで……行かないd……」

背中から、白鷺千聖の声と感触が伝わる。

彼女は俺を嫌っていたはずだ。しかし、メンバーの氷川日菜のため、白鷺千聖は体を張って俺へアピールしているのだろうか。

「俺は少なくとも、あと百は生きるつもりだ。そんな簡単に死んでたまるかってんだ。」

俺は白鷺千聖の頭を一撫ヒでした後、ボロ車ビュートの運転席に乗り込もうとした所……その席には武藤が座っていた。

「お前だけ格好つける気か?……後で███Pastel\*Palett  
es███のメンバー全員に紹介してもらおうぞ。」

「……………はあ。相変わらずだな。」

俺は武藤ビュートにボロ車の鍵を渡すと、反対側へ向かって助手席に乘ろうとした。しかし、そこには高鏡菊代が座っていた。

「……………」

「あたしが道を教えるんだから、助手席は当たり前でしょ？」

高鏡菊代はフンと整った顔で勝気な笑顔を見せる。

……………つい十数分前には犯されかけたのに、胆きもが太すぎだろ。流石、この歳でヤ○ザの組長をやっているだけあるな。

俺はため息をついた後、後部席のドアを開け、ジヨニーおっ・マクレさーと西住さんを詰めさせて席に座った。

「……………なんでまあ、こんなにお人好しな奴らばっかなんだよ」

「(英語) おい、早く出せ。」

俺がぼやくのと同時に、ジヨニー・マクレーは新しいタバコを開けて一本取り出し、火をつけながら武藤に命令した。

キュルキュルキュル……

「しっかり捕まってるよ!!」

武藤はそう言つて、ボロ車の鍵を回した。

キュルキュルキュル、キュルキュルキュル……

武藤がキーを回して10数秒、ボロ車のエンジンは一向にかからな  
い。

「クソツ!!この車はボロいからなあ……」

武藤は思わずNGワードを口にした。

「おい、武藤!!何言つてやがr……」

「そ、その言葉はダメです!!」

ボーン!!

俺と西住さんが止めようとしたが……その前にボロ車はご機嫌斜  
めになったようだ。

「武藤!!この車に『ボロい』とか言ったら機嫌悪くなるんだよ!!謝れ!!  
……ごめんね。コイツはまるでわかってないから、機嫌戻してねえ  
〜」

「何やってるんですか!!この車に暴言を言ったら調子が悪くなるん  
ですよ!?!……スイマセン……調子に戻してくださいね。」

「……え?は?……ごめんね?」

俺と西住さんの必死の剣幕で、冗談を言っていないと武藤は理解し  
たのだろう。武藤は謝りながらキーを回し、エンジンを掛けようとす  
る。

「……何やってんの?コレ?」

「(英語) マオリのハカダだ」

高鏡菊代の呆れた言葉に……ジヨニー・マクレーは紫煙交じりの溜息を吐きながら答えた。

Die Hard 3 in Tokyo 高鏡組  
壊滅……

遠山キンジは東池袋高校でできた友人を高鏡組に人質に取られ、その友人を奪還すべく高鏡組本部へ単身殴り込んだ。

そのキンジを尾行していたGⅢとかなめに合流してその友人達を助け出し、3人は本部の大きな庭で鏡高組の幹部たちと相対した。

「やつと連れましましたか。遠山キンジ君ですね？あなたも鏡高菊代と一緒に香港のマフィアに売られることになってますので……大人しく投稿してもらえませんか？もちろん、キンジ君以外の二人も」

東大卒の幹部がメガネの位置を直しながら言う……30〜40人組員達がキンジ達を取り囲み、自動小銃アサルトライフルの銃口を向けた。

「そーゆー事だからキンジくうーん、結構いい金になるんだよ？香港でヨロシクやってよ。奴隷の鏡高菊代姐と仲良くさあ〜？」

ホスト風の幹部は汚らしくピアスが付いた舌で口元をなめ、大型のリボルバーをちらつかせる。

キンジは冷汗をかき始めた。今は丸腰の状態であり、しかもHSSヒステリア・モードでもない。敵は素人ばかりとは言え大量にいる。GⅢやかなめが居ても、無傷では済まないだろう。

「あなたが遠山キンジさんですか。なるほど……HSSになる前でも、一般兵以上の働きをしてくれそうですね。諸葛先生」

その時、鏡高組の家屋の屋根から声が聞こえた。キンジはSSSSSSという言葉にギョツとしながらその方向を向いた。

屋根の上には諸葛静幻・曹操コウソウ（メガネをかけているため末っ子か？）、そして老け顔の男、名古屋武偵高校の制服を着た少女がいた。

「再会を心よりお慶よろこび申し上げます。遠山キンジさん、ジーサードさん」

諸葛静幻は張り付けた笑顔でそう言いながらお辞儀をした。

……クソツどうすればいい？

曹操（メガネ）や諸葛正弦はともかく……初見の二人、老け顔の男、名古屋武偵高校の制服を着た少女はHSSでなくても強者という事が分かった。

老け顔の男は厳しい訓練によって研ぎ澄まされた軍人の様な気配を感じ、名古屋武偵高校の制服を着た少女はブラドの様なバケモノの気配を感じる。

「へっ……そのガキ、老け顔が藍幫の代表か。極東戦役の」  
GIIIは威嚇の様な鋭い眼で二人を睨む。ジーサードも注目すべきはこの二人だという事に気が付いたらしい。

本来、裏で行われている国際的な抗争である極東戦役は大きな被害を出さないようにするため、互いに何人かの代表だけで戦うのがルールだ（なお、藍幫はそのルールを破り、東京でテロを起こしているが）。

「ええ……。そうなのd……」

「バカキンジイイイイ!!」

小さい声ながらもよく響くアニメ声か、静幻の声をかき消した。

……アリア!!

キンジは声が聞こえてきた方向を見ると、アリアが平賀さんによって作り直した『ホバー・スカート』と言う飛翔ユニットで飛んできたのを確認した。アリアにキンジ、GIII、かなめの4人ならば、何とかこの場を乗り越えることができそうだ。

「やはり来ましたか……。鵬？」

「すでに準備してあります。」

諸葛静幻に鵬と呼ばれた老け顔の男はまだ空の上に居るアリアに『筒』を向けた。

……す、携帯式地对空ミサイル!

老け顔の男が持っていたものは、『FIM-92 スティンガー』だった。それは低空を飛行するヘリコプター・対地攻撃機はもちろん、低空飛行中の戦闘機・輸送機・巡航ミサイルなどにも対応で



きるよう設計されている。そんなものが（平賀さんには悪いが）ちつぽけな飛翔ユニット『ホバー・スカート』に当たったら、アリアは……  
「アリア!! 避ける!!!」

バシユツ……

キンジは自分でも驚くぐらいの大声を上げた。それと同時に☒☒老け顔の男☒☒が引き金を引き、筒から火炎が噴き出る。

『ホバー・スカート』はレーザーを感知したのか、フレアを発射するが……ミサイルはアリアに向かって一直線に飛んでいく。

チユドーーーン!!

「アリアアアアアア!!!」

『ホバー・スカート』は大爆発を起こし、破片が宙を舞う。アリアの生存は絶望的に思えた。

「馬鹿キンジ!! 会いたかったわよ!!」

しかし、それでもアリアの声が聞こえる。キンジは声が聞こえた方向を向くと……ピンク色の何かが空から落ちてくる。あれは……アリアだ!!

アリアはキンジへ向かって落ちてきた。キンジはそれを受け止めようとし……

ドシユツ!!

「へブツ!!」

失敗した。その結果、キンジはアリアのスカートの中に頭を突っ込む形で地面に倒れた。

「……って馬鹿キンジ!! 何してんのよ!! 変態!! 死ね!! か、風穴!! 風穴流星群!!!」

「……………アリア? 久しぶりの君とのダンスも楽しいけど、今はちよつと部外者が多いかな。」

アリアは地団駄を踏むようにキンジを蹴ろうとするが、HSSになったキンジはスルスルと避けて立ち上がり、アリアの手を取ってキスをした。

「ツ~~~~!!」

アリアはまるで赤鬼の様にその白い肌が真っ赤になる。キンジはその真っ赤なお姫様アリアを見てキザっぽく笑った。

「……流石に俺も兄貴ほどキザにならねえよ。」

「うわあ……やっぱり☒☒イブキにい☒☒方がいいや……」

遠山家次男キンジの行いに三男G・長女かなめがドン引きしているのだが……キンジは無視する。

「……ん？」

HSSになつたキンジは高鏡組の屋敷の柱に違和感を覚えた。よく凝らしてみると……柱に何か埋められ、隠蔽された形跡がある。その事を意識して周りを見ると、そんな形跡が至る所に、家屋だけではなく壁や堀へいにすらある。

……良く隠蔽されているが、隠蔽部分が若干明るい。ごく最近にやったものだ。しかし、あの中には何が埋まっている？

「投降はしてくれない様ですね。お前ら、やれ」

東大卒の高鏡組幹部が命令を下し、チンピラの兵士たちは引金を引いた。

チユドーーーン!!

その瞬間、爆音が響き渡った。高鏡組本部は爆炎と爆風、そして破片が飛び交い、家屋や堀へいが瓦礫がれに変わった。

H S 部隊第一中隊の藤原少佐とその部下数名、そして第二中隊の田中曹長は高鏡組本部が良く観察できるビルの一角に陣取り、爆破の様子を観測していた。

「爆破確認……昨日の夜、短時間の突貫工事で細工した割には、うまく行ったな。なあ、少佐殿？」

「本当に助かりました。ありがとうございます、田中曹長。」

昨日、第二中隊の田中曹長はテレビ電話で☒☒苦々しい顔をした☒☒第二中隊中隊長：辻大佐から命令を受け、藤原少佐の指示のもとに高鏡

組本部へ密かに爆弾を仕掛けたのだった。

「……でもなんであんなことを？テロを日本にいった諜報人だからって、幹部達その証拠ごと爆破ですか？」

「僕だって鈴木大佐と瀬島中佐からの命令に従っただけですよ？田中曹長だって辻大佐の命令を受けて、その裏にある物は理解していないでしょう？それと一緒にですよ」

藤原少佐はそう言って双眼鏡をしまいながら立ち上がり、今時珍しい電鍵（モールス信号を打電する時に使うあれ）を組み立て始めた。「佐官でそれはマズいでしょうに。」

「勘弁してくださいよ。あんな謀略に能力を振りまくった上司について行くのでやっとなんですから。」

藤原少佐は電鍵を操作し、『高鏡組 爆破』と3回打ち込んだ。

……こんな重大な事、下士官兵どころか尉官にだって言えない。

藤原少佐は操作を終えた電鍵をしまっている時、頭痛を覚えた。この事件の重大性を思い出したからだ。

今回の『東京でのテロ』はテロリスト ランパン サイモンとその仲間）と藍幫・高鏡組だけではなく、政治家・官僚・警察・軍部の一部も関与していた証拠が数日前に見つかったのだ。そのため、2日前に軍部はすでに憲兵隊・近衛師団を使って関与した軍人を一掃していた。

そして、今後国内で主導権を得るため、その かいざん 証拠 かいざん を改竄し（軍部は関与していないと改竄）、政治家・官僚・警察を脅す（一部は かいざん 見せしめ かいざん のため暴露するが）という事を考えていた。（その改竄がバレないようにするため、高鏡組本部を爆破）

警察庁長官はすでに かいざん 不倫疑惑&強制わいせつ罪 かいざん で記者会見を開いており（『Die Hard 3 in Tokyo 爆風は避けられない……』より）、それに加えて一部の警察官がテロに関与していたと暴露されれば……警察の威信は一気に低下する。

よって相対的に軍の信用・権力に上がり、日本が極東戦役やその後Fの抗争でも優位に立てると考えていた。

そんな重要な事を藤原少佐は軽々と話すことはできなかった。藤原少佐はため息をついた後、シガリ口を取り出して火をつけた。

「……少佐殿、もう少し腹芸を学んだ方がいいと思いますよ。」

「忠告ありがとうございます。もつと精進しなくちやなあ。」

田中曹長は藤原少佐の表情・態度で何か悟ったのだろう。ヤレヤレと肩をすくみながら忠告し、荷物をまとめる。

……『東京〇立博物館の宝物』は任せたぞ、村田。

藤原少佐はそう思いながら紫煙を吐き出した。

俺達は元（？）高鏡組組長・高鏡菊代の案内により、武藤が運転するポロ車<sup>ビュート</sup>で高鏡組本部へ向かっていた。

「おい武藤!!もつと飛ばせ!!車輛科<sup>ロジ</sup>だろ!?!俺が運転するよりもだいぶ遅いぞ!!」

俺は運転席を2く3回蹴り、運転手の武藤を急かす。

「(英語)おい!!ババアの運転の方がまだ早いぞ!?!」

ジョニー・マクレ<sup>おっ</sup>ーも苛立たし気に、タバコをふかしながら運転席を足で小突く。

「うるせえなあ!!!重い大人が二人も増えてるんだぞ!!スピードが出ないなんて当たり前だろ!?!」

武藤は怒鳴りながら110く120キロのスピードしか出ないポロ車<sup>ビュート</sup>のハンドルをさらに強く握る。

……それを考慮したとしても、だいぶ遅いんだよなあ。

勝鬨橋を飛んだ時は速度計の針が千切れるぐらいの速度が出たのに、今は110く120キロ程度しか出ないのはおかしい。おそらく、前話で武藤が悪口を言ったせいでポロ車<sup>ビュート</sup>がまだ少し拗ねているのだろう。

「何?アタシが重いつて事?」

チャキツ……

助手席に座る高鏡菊代はテロリストから奪った短機関銃サブマシンガンの銃口を武藤の側頭部に向け、殺気を込めて言った。

「ち、違います!!俺が、俺が人よりも重いせいです!!スイマセン!!」

武藤は隣から殺気をもろに受けるせいで涙目になりながら謝る。

……流石は元ヤクザ組長。その美貌で睨むことにより、ただでさえ恐ろしい殺気が何倍にも大きく感じる。……辻バケモノ上司三人組・神城・鬼塚ほどじゃないけど。

「無駄口叩かないでサツサと目的地まで移動してください。本当に車両科ロジ何ですか?」

「す、スイマセン!!!」

後部座席にいる西住さんにも怒られ、武藤は必死になって車を運転する。

バックミラーに武藤の顔がチラリと見えたのだが、彼の目から溢れ出る汗は見間違い……だと思いたい。

「やったな武藤!!ある意味女の子にモテモテだぜ!!」

「俺は白雪さんや千聖ちゃんのようなお淑しとやかな子お淑やかな子がいいんだよおお!!」

……二人とも『腹黒』だっことは教えなくていいか。

俺の軽口に反応し、車内に武藤の慟哭どうこくが響き渡る。

「アタシはお淑しとやかじゃないって? (チャキツ)」

『口じゃなくて手を動かせ』って言ってるんですよ? (ゲシツ)」

……ゴメン、武藤。今回ばかりは振った俺が悪い。

俺は心の中で武藤に謝った時、前方で巨大な爆炎が上がり、轟音がビリビリと車に伝わった。

「おい!!あの方向って!!」

俺は思わず叫んだ。あの爆炎が起こった方向には……俺達が今向かっている『高鏡組本部』があるのだ。

「もしかして中国の先生方とキンジが……おい!!もつと飛ばせ!!」

高鏡菊代は武藤の頬運動手に短機関銃サブマシンガンの銃口をグリグリさせ、焦る心は無

理やり押さえつけている様だった。

「分かっているから銃を向けなくてくれ!!……お願いだから、機嫌を直してくれ。スピードをもっと上げてくれよ……」

武藤の謝罪が届いたのか、ポロ車はゆっくりと加速を始めた。

「……大丈夫かい?お姫様?」

爆発による破片が降り止んだことを確認し、キンジは胸の中にいるアリアに話しかけた。

「……ッ!!……ッ!!……ッ!!……ッ!!」

キンジに抱きしめられていたアリアの肌は赤鬼の如く真っ赤になっていた。そして言葉にならない声を上げながら、力が入っていない拳でキンジを叩く。

キンジはそんなアリアを見て苦笑した後、彼女を抱えながら立ち上がった。

「……何が起った?」

「うわあ……先端科学兵器が壊れるぐらいの爆発って……」

ブオオオオオオン!!

GⅢとかなめは先端科学兵器である『天女の羽衣』の様な布で爆風や破片を防いだようだが……その布がボロボロになっている。

「先生!大丈夫ですか!?!諸葛先生!!」

「う……あ……ほ、鵬、私の事はいい。それよりも早く車を……早く……」

「しかし!!」

ブオオオオオオン!!

藍幫の諸葛静幻は瓦礫の下敷きになっていた。その瓦礫を司馬鵬は必死になってどかし、助け出そうとしていた。

「鵬!!大局を見失うな!!」

諸葛静幻はその体と風格に似合わない大声を出した。司馬鵬しばほうは苦々しい顔をした後、諸葛静幻に背を向けてモーゼルM712を取り出した。

「……………分かりました。猴こう、準備しろ。」

「……………是シイ」

司馬鵬しんげいの言葉に、猴こうと呼ばれた名古屋武偵高校の制服を着た少女は頷いた。そして猴こうの頭に金色の粒子が集まって周りだし、天使の輪ランパンの様な物を形成していく。

「藍幫秘蔵ランパンの必殺技がやつとお目見えか!!」

GⅢは不敵な笑顔を浮かべながら、ビームサーベルの様な物を抜刀し、猴こうへ一気に近づいた。

「待て!!サード!!」

キンジはとても嫌な予感がし、叫んだ。猴こうの天使の輪は高速回転し、目が赤く光る。

ブオオオオオオン!!!ベキヤ!!!

その時、100キロ以上出ている一台のボロ車ピュートがいきなり飛び出てきて、空中で猴こうと司馬鵬しばほう・GⅢにぶつかった。

「ガハッ……………!!」

「くらえええええ!!」

ダダダダ!!!

そのボロ車ピュートからイブキと高鏡菊代は上半身を出し、ギャグマンガの様に宙へ吹っ飛ぶ3人へ銃弾をばらまく。

「……………は?」

キンジはまるでコントの様なバカバカしい光景に唾然とした。

「……………何やってるのよ、アイツ。」

「さっすがイブキにいい!!かっこいい!!」

アリアは呆れて、かなめはイブキへ称賛を送る。

……………コイツ、だいたいイブキに毒されてるな。

キンジは思わずため息をついた。

キンジが呆然としている間にも、事態はさらに急変する。

ボロ車は3人を轢き、そしてスピードを保ったまま『瓦礫で下敷きになっている諸葛静幻』向かって突進した。

「……これが、これが天命ですか。」

さつきまで必死に瓦礫をどかさうとしていた諸葛静幻だが、死期を悟ったのだろう。今は穏やかな顔をしたまま固まっている。

ブオオオオオオン!!!

ボロ車は諸葛静幻をあつさりと轢いた。ボロ車の運転席には、涙を浮かべながら運転をする武藤が見えた。

キキツーーー!!!

敵味方問わず攻撃したボロ車がやつと止まり、武藤・イブキ・高鏡菊代、そしてスキンヘッドの大男の白人と茶髪ボブカットの軍服風学生服を着た少女がその車から降りてきた。

……ッ!?

その時、キンジの横で並々ならぬ殺気を感じた。キンジは思わず殺気のもとに振り向いた。

「へえ……イブキにい、また女作つたんだあ。義妹がいるのに。へえ……」

どうも、かなめが嫉妬に駆られて殺気を漏らしていたらしい。

……イブキも苦勞しているんだな。

キンジはため息をついた。

武藤の運転するボロ車が敵(味方もいたような気がするが)を轢き、やつと止まった。

「おい!!お前の言う通り轢いちまったけど大丈夫なのか!?俺あと(運転免許の点数が)1点しか残ってないんだぞ!」

「安心しろ武藤!!轢いたのは敵だし、敷地内だ!!せいぜい殺人罪くらいだから(運転免許の)点数には関係ねえ!!」



「いや!!それはそれでマズいだろう!?武偵法で殺人禁止だから!!」

武藤はギャンギャン叫んでいるのを無視し、俺はボロ車ビュートから出た。

……もし死人が出ていれば俺が運転していたことにするさ。一応この事件限定で殺人許可証マターライセンヌは持っているからな。

だが、今の武藤の反応が面白いため、そのことはあえて伝えない。

さて、ボロ車ビュートから降りると……さつき轢いた、老司馬鵬老と名古屋武偵高校の制服を着た少女名がヨロヨロと立ち上がり、武器を構えていた。

「貴様が……村田イブキ!!お前が不死の英霊か。」

老司馬鵬老はそう大声を上げながら、まるで親の仇の様に俺を睨んできた。

「ああ、そうだ。……お前が老司馬鵬か。写真でも見たが、さとう老けてやがるな。」

「余計なお世話だ。……お前は曹操姉妹を誑たぶらかせ、そして藍幫ランパンの今後の進退に関わる。猴こ、遠山キンジ 哥カよりも不死の英霊を狙え。」

老司馬鵬はそう言って、今時珍しいモーゼルC96系の拳銃を取り出し、名馬賊撃ち名の様に、横に向けて構えた。その横で名古屋武偵高校の制服を着た少女名の頭に金冠が出来る。

「いや……曹操の件、俺は悪くないと思うんだが……」

曹操四姉妹のうち、二人が変態ドになって俺に懐いたのだが……その件で俺は関係ないはずだ（詳細は名高校生活2学期編名参照）。

……まあ良い。ここには東京国立○物館の宝物は無いはずだ。なら……こいつらを早急に倒して、場所を白状させるだけだ。

俺は38式歩兵銃を取り出し、銃剣をつけたと同時に……声が聞こえた。

「はっはっはっはっは!!あーはっはっは!!君達!!この私が来たからにはもう安心だ!!」

「誰だ!!」

老司馬鵬と猴こが向いた先には……コートを着た変態がいた。

「股間のもっこり伊達じゃない。陸に事件が起こった時、海パン一つ

ですべて解決!!特殊刑事課三羽鳥最後の一人、『海パン刑事』再び参上!!」

海パン刑事は口上を述べた後、コート脱いで投げ捨てた。もちろん海パン刑事が下に着ていたのは海パンだけだ（作中では現在12月）。

……なんでまた登場するんだよ!!!

俺は頭痛を覚え、アスピリンの錠剤を取り出し、それを飲んだ。

「嘘でしょ!?!検挙率100%の海パン刑事!?!」↑アリア

特殊刑事課の噂は聞いていたけど……本当にあつたなんて!?!」  
↑高鏡菊代

「クソツ!!特殊刑事課は想定外だ!!これは逃げるしかない……」↑  
司馬鵬

敵味方問わず海パン刑事の登場にドン引きしていたのだが……上記の三人は海パン刑事の実力を知っているため、その男を警戒する。

「……想定以上の戦力だ。猴、撤退だ。」

「……是」

司馬鵬は撤退の命令を出し、ポケットから煙幕弾を取り出したが……その命令はすでに遅かった。

ダアン!!

「グッ……!?!」

海パン刑事の早撃ちによって煙幕弾が司馬鵬の手から離れた後、俺達の目の前で海パンを脱いだ。

「……」

海パンを脱ぎ終わり、フルチンになった海パン刑事は、急いで逃げ出す司馬鵬と名古屋武偵高校の制服を着た少女に向かって走り出した。

「ゴールデンクラッシュ!!」

「ぎゃあああああ!!」

そして海<sup>変</sup>パン<sup>態</sup>刑事は走り高跳びの要領で宙に飛び、股間から司馬<sup>しば</sup>鵬<sup>ほう</sup>と名<sup>名</sup>古<sup>古</sup>屋<sup>屋</sup>武<sup>武</sup>偵<sup>偵</sup>高<sup>高</sup>校<sup>校</sup>の制<sup>制</sup>服<sup>服</sup>を<sup>を</sup>着<sup>着</sup>た<sup>た</sup>少<sup>少</sup>女<sup>女</sup>に<sup>に</sup>突<sup>突</sup>撃<sup>撃</sup>した。

……これはR18にはならないはず。地上波のアニメでもこのシーンはあつたし、ハーメルンさんも許してくれる……よな？

醜い逮捕現場に、俺は思わず顔をそむけた。

海<sup>変</sup>パン<sup>態</sup>刑事は二人を簡単に倒した後、瓦礫に挟まって動けない諸葛<sup>しやくわ</sup>静<sup>静</sup>幻<sup>幻</sup>(瀕<sup>瀕</sup>死<sup>死</sup>)へゆつくりと歩いていく。

「待ちなさい!!いや、待って!!や、やめろおおおお!!……ぎゃああああ!!」

海<sup>変</sup>パン<sup>態</sup>刑事はあまりの恐怖にキャラ崩壊した諸葛<sup>しやくわ</sup>静<sup>静</sup>幻<sup>幻</sup>の顔面に突撃し、無力化した。

「……………」

「オエツ!!オロロロ……」

『海<sup>変</sup>パン<sup>態</sup>刑事が検挙率100%の理由』を知って俺達がドン引きしている中……キンジは顔を真っ青にして吐いていた。

……ん?どうかしたのか?

顔色が真<sup>真</sup>つ青<sup>青</sup>から真<sup>真</sup>つ白<sup>白</sup>に変化しても気持ち悪そうに吐いているキンジを観察してみると……さっきまでHSSだったキンジはすでにその状態が解け、いつもの『ノーマルキンジ(?)』の状態<sup>状態</sup>で吐いている。

そう言えば、ヒステリア・サヴァン・シンドローム H S Sは思考力・判断力・反射神経・視力・

聴力などが通常の30倍にまで向上するそうだ(この前調べた)。という事は海<sup>変</sup>パン<sup>態</sup>刑事による速<sup>大</sup>捕<sup>惨</sup>の瞬間も、単純計算で一般人の30倍も詳しく・細かく認識されるという……

「ゴホツ!!オエツ!!」

「キンジ!!大丈夫!?!」

弱り切ったキンジの背をアリアが擦<sup>こす</sup>る。このままではキンジは戦

力にならないだろう。

俺は思わずキンジに合掌した。

キンジに合掌した後、俺はジョニー・マクレー・西住さんと合流し、一緒に司馬鵬と猴を縛り上げ、所持品のチェックをしていた。

「(英語) ……偽造パスポートに国際運転免許証・スマホ、それに現金と弾薬だけだ。」

ジョニー・マクレーは司馬鵬のポケットから取り出した物を地面に放っていった。

「こつちなんて所持品一つもありませんよ」

西住さんは猴の衣服のポケットを裏つ返した後、ため息をついていた。

「……しょうがない。無理にでも聞き出すしかないか。」

俺は四次元倉庫から水の入ったペットボトルを取り出した。すると、ジョニー・マクレーは司馬鵬の鼻をつまみ、口を開けさせた。俺はその司馬鵬の口に向かって水を注ぎ入れた。

「……グゴゴゴ!!ゴホツ!!ゲホツ!!」

司馬鵬は気道を塞がれたため、咳き込みながら強制的に起こされた。俺はそれを確認すると、14年式拳銃を抜いて司馬鵬の額に突きつける。

「おい、単刀直入に聞く。司馬鵬、博物館から盗んだ物は何処にやった。」

「ゲホツ、ゴホツ!!………言うと思うか?」

……こいつは面倒だ。司馬鵬は覚悟を決めた、キリつとした顔つきをしていた。こういう奴は並みの拷問では口を割らないことが多い。

一応、えげつない拷問方法もあると言えばあるのだが……ジョニー・マクレーはともかく、武偵や民間人の前でやるのは色々問題がある。

……でも、今は手段を選んでいる場合じゃないか。  
俺は司馬鵬の膝に狙いを定め、引き金を引こうとし……

「……村田さん。少し待って居てください。」

西住さんに止められた。

西住さんは海。パン刑事のところへ行つて少し話をした後、諸葛静幻を担いだ海。パン刑事を伴つて戻ってきた。

「西住少女、ここでいいか？」

「ええ、ここに置いてください」

海。パン刑事は西住さんの指示のもと、司馬鵬の目の前に気絶している諸葛静幻を投げ捨てた。

「司馬鵬さん、私が3つ数えるうちに『博物館の展示品』をどこに輸送しているのか教えてください。」

西住さんは司馬鵬にそう言うと、俺が貸した44式騎兵銃の銃口を諸葛静幻に向けた。

「いゝち」

タァン!!

「「「ちよつと待って!!2と3は!」「」」」

西住さんは「1」を数え終わる前に諸葛静幻へ発砲した。弾は静幻の顔の右横5センチぐらいのところに着弾する。

その行いに司馬鵬を含めた俺達全員が思わず突っ込んだ。

「今は時間が無いんです。条件が刻一刻と変わるのは当たり前ですよね?……それにこんな言葉を知っていますか?『1発だけなら誤射かもしれない』って」

西住さんは素朴で可愛い、今日一番の笑顔を浮かべて言った。(しかし、その可愛い笑顔は泥と血で汚れていたが)

「「「……………」」」」

俺達がドン引きしている間に、西住さんは44式騎兵銃の遊底を操作して再装填を済ませる。

「いゝち」

タァン!!

弾はさらに諸葛静幻から近いところに着弾した。西住さんは再び遊底ポルトを操作し、今度は諸葛静幻の額に銃口を向けた。

「や〜……」

「調布だ!!調布飛行場!!そこにある輸送機から南沙諸島のファイアリー・クロス礁の飛行場へ行つた後、(中国)本土へ向かう!!」

「……ツチ」

司馬鵬しばほうが自白すると、西住さんはその笑顔のまま銃を下ろした。その時に聞こえた舌打ちは聞き間違いに違いない……はず。

「調布飛行場で間違いありませんね?」

西住さんはその笑顔を保ったまましゃがみ、司馬鵬しばほうに顔を近づけて尋ねた。

「そうだ!!だから先生を!!諸葛先生を解放しr……」

「いえ、もちろん拘束させてもらいます。司馬鵬しばほうさん?もし嘘をついていたら……全員『ゴールデンクラッシュ』を再び喰らうと思っ  
ていてください。」

「二……(何この子、怖い……)」

西住さんはその笑顔で忠告し、俺・ジョニー・マクレーン・武藤はこの可憐な少女の恐ろしさに思わず震えた。『綺麗な花には棘がある』とはよく言ったものだ。

「に、西住少女?すでに逮捕した物に『ゴールデンクラッシュ』はd……」

「嘘だつたらやっってくださいね?」

「は、はい!!」

海パン刑事は反対しようとしたが……西住さんの笑顔で一蹴された。

「な、なあイブキ……。あの子って民間人だよな。武偵とか軍人とか警察とかじゃないよな?」

「安心しろ武藤、西住さんは戦車道を嗜たしなんでいる普通の民間人だ。」

「戦車道」て……知波単学園の子達も一癖あったけどよ……」(高

校生活夏休み編 ガールズ& a m p : パンツァー 畑違いなんですけど…… より)

「(英語) 知らねえのか二人とも……女つてのは怖いんだぜ?」

俺達はその光景を見て思わず話し込んでいた時、西住さんがいきなり首をグルッと回して俺達を見てきた。

「3人とも何をしているんですか? 早く『調布飛行場』へ行きますよ?」

……武藤さん?」

「は、はい!!」

「早くエンジンを掛けてください。時間はありませんよ?」

ニタアゝ

西住さんは可憐な笑顔で、しかし目は一切笑わずに言ってきた。

武藤は目から汗を流しながら脱兎の如くボロ車ビュートに飛びつき、焦りながら運転席の扉を開けてエンジンを掛ける。その時だった。

「ねえイブキにい? あの女たちは何?」

「……!?!」

俺の後ろでかなめの声が聞こえた。俺は後ろゆっくり振り向くと……そこにはかなめ悪魔が立っていた。

「ねえイブキにい? ……イブキにいが白鷺千聖の所属するアイドルユニットの護衛をしていたのは知っているけど、この二人は何?」  
かなめが言っているのは高鏡菊代と西住みほの事だろう。

ついでに、高鏡菊代はかなめヤンデレと西住みほ軍神の気に当てられたのか……腰を抜かしてしゃがみ込み、水溜まりを作っていた。

「村田さん? 何をしているんですか? 早く調布飛行場へ向かいませよ?」

「おい、お前……なにイブキにに命令してるんだよ」

……あれ? ジョニー・マクレーはどこ行った?

俺は二人を無視し、ジョニー・マクレーを探すと……

「ジョニー・マクレーは俺を見捨て、ボロ車の助手席に乗り込むところだった。」

「……ジョニー・マクレー!!俺を見捨てたな!？」

「と、とにかく!!かなめ、説明は車内でだ!!急いで調布飛行場へ向かうぞ!!」

俺は急いでこの場を離れ、ボロ車の後部座席に乗り込んだ。すると、西住さんとかなめは俺を挟むように、後部座席の左右から乗り込んだ。

「急いで調布飛行場へ行くぞ!!……ざまあ!!」

「おいこの野郎!!」

俺は武藤の肩を掴んで揺さぶるが……武藤は笑いながらアクセルを踏んだ。

「イブキにい?……コイツ、誰?」

「村田さん……この子は?」

俺は思わず頭を抱えた。

「ウア~~~~ツ!!」

GⅢはイブキと高鏡菊代に無差別銃撃を受けた後、痛みを悶えながら転がっていたのだが……誰にも気づかれることがなかった。



Die Hard 3 in Tokyo 切れ味抜  
群すぎ……

ポロ車の後部座席で、西住さん龍と虎は俺を挟んで睨み合っていた。

「……。(ニヤニヤ)」

ジョニー・マクレーンと武藤はその睨み合いを『他人の不幸は蜜の味』  
とでも言いそうな眼で見る。

……ジョニー・マクレーンに武藤め。後でぶん殴ってやる。

俺は肩身の狭い思いをしながら拳を強く握った。

ついでに……西住みほは冷酷で非情に、かなめは今にも襲い掛かる  
猛獣の様に睨んでいて……

「……。(うわあああ!!もう一杯一杯だったから人に銃を向けて撃つ  
て、いろんな人に沢山の迷惑かけて……!!しかもこの子から睨まれて  
る!!)」↑西住みほ

「……。(こいつ誰?イブキにいの相棒で戦って……相棒はあたし  
!!)」↑かなめ

などと考えていた。もちろん、イブキは二人がこんな事を考えなが  
ら睨んでいるとは一切感づいていない。

西住さん龍と虎が睨み合って10数分、武藤の運転するポロ車は中央道を爆  
走して調布で降りた。そして、近道のために飛行場に隣接する多数の  
グラウンドや公園の敷地を横切る。

「イブキ!!本当に突っ切っていいのか!？」

武藤はその運転とは真逆な、焦りが混じった大声で俺に聞いてき  
た。

武藤は車のスピードを極力落とさぬようにするため、極力ハンドルを切らず、木や障害物をぶつかるギリギリのところで避けていく。「緊急事態だからいいんだよ!! 昼には千代田区の旧江戸城も通り抜けさせてもらったから!!」

「ん?……つておい!! 旧江戸城つて……」

武藤は驚いて俺に振り向いた。

ところで、時速60kmは秒速16.7mほど。このボロ車ビュートは時速60kmを大幅に超えているスピードを出している。なので、数秒でも運転手が後ろを振り向いている間にボロ車ビュートは何十mもの距離を移動していることになる。なので……

「前!! 前見ろ!!」

「……ッ!? うおおお!!」

俺達の目の前にサッカー場の柵が迫ってきていた。

バコーーン!!

ボロ車ビュートはサッカー場の柵を蹴破り、たくさんの少年たちが練習をしているグラウンドに突っ込んだ。

「む、武藤!! スピード落とせ!! 轢ひき殺す気か!」

呆然と突っ立っていたり、逃げようとする少年達を間一髪で避けていく。

「そんな時間ないんだろ!? 車両科ロジの腕を見せてやるぜ!!」

「(英語) こいつは坊主より (運転の) 腕があるから心配すんな」

「(英語) それは知っているけど!! そう言う問題じゃねえ!!」

武藤はさらにアクセルを踏み込み、ハンドルとサイドブレーキを駆使し、極力スピードを落とさないように運転する。車体は左右に激しく揺れ、左右に居る西住さんやかなめの体が当たるのだが……武藤の運転のせいで感触を意識する余裕は全くない。

「おお……」

そんな二人は武藤の運転技術の高さを、まるで『衝撃映像』か何か

を見ているかのような感嘆の声を上げていた。

……ふ、二人とも胆が太すぎだろ!?

バゴン!!ベキツ!!

俺が西住さんとかなめが落ち着いている事に驚く中、ボロ車はボールの籠かごを撥ね飛ばし、再び柵に突っ込んでサッカー場から脱出した。

……よかった、マジでよかった。誰も轢ひかなくて

俺は安堵の溜息が出た。

「っへ!!これが車両科だ!!見たか、二人とも?」

武藤は後部座席にいる女性陣にんじんに振り向いた。もちろん、運転手が後ろを振り向くという事は、運転がおざなりになるという事で……

「二前、前見ろ!!」

今度は少年野球の試合中である野球場にボロ車は突っ込んだ。

バキツ!!バコン!!

ボロ車柵を破壊して野球場に侵入し、ついでに飛んできた打球を跳ね返し、場外へ飛ばしてホームランにさせた。

「武藤何やってんだよ!!車両科のAランクじゃないのか?」

「こうなるからSじゃなくてAなんだよ!!」

……せ、せめて無関係な一般市民に殺人許可証マードライセンを使うような事を起こさないでくれよ!?

俺は武藤の運転技術を信じて祈るしかなかった。

俺の祈りが通じたのか、武藤は巧みな運転技術で野球場を難なく通過し、ボロ車は『調布飛行場』の敷地に躍り出た。

飛行場の反対側には……日本軍でも米軍でも、ましてや欧州軍NATO軍・ロシア軍でも見たことがない、プロペラがついた軍用大型輸送機が誘導路から滑走路へ移動している所だった。

……C-130に近い機影から察するに、中国のY-9か?そう言

えば空軍の後輩に敵機識別表を見せてもらった時、これと同じのが載っていたような気がする。

機種の特定はともかく、『調布飛行場』は一般的に小型の民間機が離発着する場所だ。緊急事態でも、こんな軍用大型輸送機が着陸するなんて普通ありえない。となれば……この軍用大型輸送機はテロリストの物である可能性が高い。

その軍用大型輸送機のコクピットから人の顔がチラリと見えた。その顔は……

「……………!!サイモン!!」

『サイモン』……本名：サイモン・ピーター・グルーバーは今回のテロ事件の実行犯、そのリーダーだ。

『Die Hard 3 in Tokyo 一般人でこの殺気つて……』において、俺・ジョニー・マクレーン・西住さんは資料の写真で見ていたため、『サイモン』の顔とすぐに気が付いた。ついでに、サイモンはドヤ顔で俺達を見下しているように見えた。

「武藤!!あの輸送機だ!!あの輸送機にテロリストがいる!!急げ!!」

俺は運転席を揺らしながら、移動中の軍用大型輸送機を指さした。

「な、なに言ってるんだ!!2キロは離れてるんだぞ!!追いつくころには滑走を始める!!どうやってあれを止めるんだよ!!」

車両科である武藤は滑走を始めた大型機を止める無謀さを誰よりもよく知っているはずだ。しかし、武藤は反論しながらもボロ車を加速させ、大型輸送機に接近する。

「止めるのは無理だって俺でもわかる!!だったら、あれに飛び乗って敵を殲滅するまでだ!!」

「何言ってるんだよお前!!滑走中の飛行機に飛び乗る!!無理に決まってるんだろ!!」

武藤は俺の言葉が冗談にでも聞こえたのだろうか。

「(英語)前に坊主と飛行機に飛び乗るってのはやったことがある。まあ、その時はヘリだったけどよ」

ジョニー・マクレーンはなだめるように言いながら、タバコに火をつけ、拳銃の残弾を確認した。

「いや、俺英語分かんねえから!!というかこのおっさんたれ!? シレットと車に乗ったから気にしてなかったけどよ!!こいつ、日本の武偵でも刑事でも軍人でもないよなあ!?!」

「お前分らないで運転してたのかよ?!というか、おっさんはともかく西住さんの事を疑問に思えよ!!おっさんはニューヨーク市警だけど、西住さんは民間人だぞ?!」

「何でニューヨーク市警がいるんだよ!?!……と、とにかく!!しつかり捕まってるよ!?!」

武藤はドリフトの要領で車体を180度回転させ、誘導路から滑走路についた軍用大型輸送機に横付けした。

「イブキ!!行くんだろ!!」

「ああ、ありがとよ!!」

……負傷した武藤がここまでお膳立てしてくれたんだ。絶対に成功させなきゃな

俺はベルトのバックルからワイヤーを取り出した。

サイモン達は高校生のガールズバンド:Rosealiaスポンサーからの依頼の品々と東京国立博物館の宝物ランパンを、藍幫から支給されたY-9輸送機に詰め込み、離陸を始めようとしていた。

『Request taxi. (訳:滑走路までの経路をお願いします)』

『Runwey……』

サイモンは計画通りに進んでホツとしながら管制塔の指示を聞いている時、飛行場の反対側からボロボロの車がこの輸送機に接近してくるのを確認した。

そのボロボロの車は『東京国立○物館』や高速道路で見た、村田とマクレーンが乗っていた車だ。

「……はははっ!!」

サイモンは思わず笑い声が出た。

この機体はすでに離陸体勢を整え始めている。そんな飛行機を、あんなちっぽけな小自動車止められるだろうか。管制官が止めようとするかもしれないが、その時は指示を無視すればいいだけだ。

「さ、サイモン様、向こうから車が来ますが……」

操縦手の部下から指示を仰がれた。

「無視しろ。管制官が止めようとしても無視して飛び立て。」

「わ、分かりました。」

サイモンはコクピットから、そのちっぽけな車の中で焦る村田とジョニー・マクレイ、西住みほを見つけ、思わず口角がさらに上がった。

武藤のおかげでボロ車ビュートは滑走路の軍用大型輸送機に横付けした。それと同時に軍用大型輸送機は加速し始める。武藤も間髪入れずにボロ車ビュートのアクセルを踏み込み、並走させた。

「すぐに追いつけなくなるからな!!」

「分かってる!!」

俺はベルトのバックルからワイヤーを取り出した後、かなめと席を交換してもらい、後部座席のドアを勢いよく開けた。力強く開けたせいか、ドアは車から外れて滑走路に転がり落ちた。

……まあ良い、むしろ邪魔なものが無くなってフックを引っ掛けやすくなった

俺はフックが付いたワイヤーを回して投げた。フックは主翼と後縁フラップ後縁フラップの高揚力装置の間に引っかかる。俺はそのワイヤーを伝って主翼へ登り、そして主翼から滑り落ちる様に大型輸送機の側面扉に飛びついた。

ジョニーおっ・マクレイさはボロ車助手席から輸送機の脚に飛び乗り、そこから登って側面扉の前方にある手すりにしがみ付いた。

「(英語) ジョン・F・ケネディ国際空港以来だな!!おっさん!!」

「(英語) その時の方が楽だった!!なんだって007やイーサン・ハント(M: ミッション:インボッソブル Iの主人公)の真似をしなきゃなんねえんだ!?!」

俺とジョニー・マクレーンは『民間人編 ダイ・ロード2』でヘリから敵テロリストの乗った飛行機に飛び乗ったことがあった。しかし、今回はその時以上に難易度の高いことをやっている。

「……うお!?!」

大型輸送機が加速度を上げ、強烈な慣性力が俺達を襲った。俺は慌てて銃剣を2本取り出し、それを側面扉に刺して大型輸送機から落ちないようにする。

その時、俺の背中に何かが捕まった。その重さと増えた空気抵抗が俺をさらに襲う。

「グオオ!?!な、何だ!?!」

新たな重さと抵抗のせいで握っていた銃剣が曲がった。

俺は思わず後ろを振り向いた。そこには、西住さんが俺の背中に張り付いていた。

「な、なんで西住さんが来るんだよ!?!死ぬ気か!?!」

「ここまで来たんですから最後までついて行きます!!それに二人とも前線で戦って後方がいないじゃないですか!!」

……まあ確かに、俺とおっさんが戦闘し、その間に西住さんが後方で人質解放とか多かった。だけれど、西住さんがここまで危険なことはしなくてもいいと思うのだが。

大型輸送機は時速150キロを超え、並走するボロ車が息切れを起し始めていた。この状況で西住さんをボロ車に戻すのはあまりにも危険すぎる。

「なんでイブキにいの背中に……」

光学迷彩(透明化)が出来なくなった先端化学兵器の『天女の布(仮)』で大型輸送機に掴まるかなめから絶対零度の視線が俺に浴びせられる。

「……うわあああ!?!」

いきなり慣性力のベクトルが変わった。大型輸送機が離陸したのだ。

地球の重力に慣性力、そして風の抵抗が俺達を襲う。俺の握る銃剣がさらに曲がった。

「に、西住さん、手を離すんじゃないぞ?！」

「は、はい!!」

西住さんが俺の体を強く抱きしめるせいで傷が開き、悪化しているのが良く分かる。

そんな中、ジョニー・マクレーは目の前にあつたハッチを開き、中にあるボタンを押した。

ウイイイイイン!!

しかし、俺達の目の前にある側面扉は開かず、逆に輸送機の後部扉(大型の荷物が行き交う扉)が開き始めた。

「(英語) おっさん!! そっちじゃねえ!!」

「(英語) 漢字を理解できるわけねえだろ!？」

ジョニー・マクレーはそう言った後、風と重力と慣性力にさらされながら再びボタンを押した。

すると後部扉が閉まりだし、逆に俺達の目の前にある側面扉が開いた。

高速で移動する車の窓を開けると、風が車内に勢いよく入る。俺達はその風の様に大型輸送機の機内に吸い込まれ、壁に叩きつけられた。

「……!!」

壁に叩きつけられた俺の隣に猿轡と縄をかけられた青緑色の長髪少女：氷川紗夜が涙目で唸っていた。近くには同年代の少女達が4人、同じように猿轡と縄をかけられている。

……やっぱりサイモンに誘拐されてたか。

カチャカチャ!!

その時、見張りであろう敵二人が慌てて俺達に銃を構えようとした。

俺は咄嗟に握っていた銃剣を敵の一人に投げつけた。



シユツ!!ダアンダアン!!

ジョニー・マクレーンが放った弾丸と、俺が投げた銃剣がその部下達に刺さった。刺さったそいつはバタツと倒れ、血を流したまま動かなくなった。

「ハアハア……助けに来たぜ。安心しろ」

「(英語) 騎兵隊の到着 っ てな……!!」

俺とジョニー・マクレーンは傷だらけの体を気力で動かし、立ち上がった。

……博物館の物もやっぱりここにあったか。

『氷川紗夜とその他四人の少女のバンド』:Roseliaの後ろ、俺達が叩きつけられた壁は……パレットに乗せられた多数の木製の箱だった。俺達が叩きつけられたせいで一部の木箱が割れ、中にある鏡や勾玉、陶器磁器に書物や日本刀が顔をのぞかせていた。

「かなめと西住さんで彼女達の解放及び護衛だ。俺とジョニー・マクレーンで残りをやる」

「(英語) 嬢ちゃん達はここで待ってる。」

俺は血を流し過ぎたせいで眩暈がし、しかも意識を失いかけた。俺は何とか気合でそれに耐え、四次元倉庫から刀と38式歩兵銃・新しい銃剣を取り出した。刀は腰に挿し、38式に銃剣を着剣させる。

「村田さん、マクレーンさん!!そんな体で……死ぬ気ですか!？」

「イブキにい!!そのおっさんよりもあたしの方g……」

「バンドやっってるんだってよ。これ以上トラウマが出来たらこの娘達が演奏できなくなるだろ?……それに同性だから融通が利く。かなめは護衛、西住さんはバックアップだ。この娘達を弾の当たらない場所へ案内してやってくれ。」

俺は人質の少女達をチラリと見た。彼女達は巻き込まれた事件の恐ろしさに気が付いていないのか、キョトンとしていた

多少治安が悪くなったとはいえ、それでも日本では拉致・誘拐は珍しい。それがいきなり身に降りかかったのだ。きつと今はキョトンとしているが、次第に彼女達は怯え始めるだろう。そんな時に必要なのは西住さんやかなめであって、『(辻・<sup>バケモノ上</sup>神城・<sup>司</sup>鬼塚の<sup>司</sup>せいで) 拉致・誘拐に慣れた俺』や『いつも何かに巻き込まれる<sup>おっ</sup>ジョニー・<sup>き</sup>マクレ』ではないはずだ。

……あれ？おかしいな。事件に巻き込まれる可能性が圧倒的に低いであろう軍艦に乗りたくて海軍に入ったのに、なんで拉致・誘拐に慣れたんだろ？……カット

これ以上考えると色々と自分の黒歴史を掘り返すことになりそうだ。俺は頭を搔いて思考を止めた。

「(英語) 話は済んだか、坊主？……おいおい、タバコは体に悪いんだぞ？」

「(英語) ああ……ってタバコ切らしたのかよ。吸いすぎだろ。」  
<sup>おっ</sup>ジョニー・<sup>き</sup>マクレは倒した敵の装備とタバコを奪い取り、代わりに愛飲しているマルボロの空箱を捨てていた。

死んだ敵の周囲には<sup>おっ</sup>開けて間もない<sup>おっ</sup>酒瓶<sup>おっ</sup>や<sup>おっ</sup>封<sup>おっ</sup>が切られていない<sup>おっ</sup>酒瓶<sup>おっ</sup>が多数転がっていた。祝勝として敵が飲もうとしていたのだろうか。

「(英語) ……だからいつまでたっても坊主なんだよ」

「(英語) ハイハイ……子供に臭いって言われても知らねえぞ」

……タバコの味は今のところ分からないしな。

俺と<sup>おっ</sup>ジョニー・<sup>き</sup>マクレは軽口を叩き合いながら輸送機のコックピットへ向かう。

ダダダダダ!!

「ッ!!」

俺とジョニー・マクレーンは貨物室とコックピットを仕切る扉を開けてコックピットの様子を覗いた瞬間、敵が発砲を始めてきた。ついでに、中にはサイモンと『カティア・タルゴ』の二人だけだった。俺達は慌てて頭を下げ、扉を閉めた。敵は短機関銃サブマシンガンを使っているおかげで弾は扉や壁を貫通しない。

「(英語) おっさん!! なんか案あるか!?!」

敵はコックピットの中だ。下手に撃ち合えば操縦系統が傷つき、輸送機が墜落する可能性もある。

「(英語) そつちに無線機か何かあるk……ッ!?!」

「……ッ!?!」

ベキツ!!

ジョニー・マクレーンが何か言った瞬間、俺達と敵を隔てる扉が切られた。そして敵側から俺達の方へ誰かが侵入してくる。そいつは……

「サイモン……!!」

俺は38式を突き出し、サイモンに銃剣を刺そうとした。するとサイモンは手に持った刀を振るった。

パキツ!!

「ウソだろ!?!」

サイモンの刀は包丁で大根を輪切りにするかの様に、俺の38式を3分割した。そのままサイモンは返す刀で俺を切ろうとしている。

「うおおお!!」

俺は銃床だけになった38式を捨て、横に転がって斬撃を躲かわして腰の刀を握った。輸送機の鉄の固い床が傷を刺激し、体に激痛が走る。

……クソツ!! なんだって38式があんな簡単に切り裂けるんだよ!!

俺はしゃがんだ体勢からバネを放つようにサイモンに接近し、抜刀した。サイモンは俺の放った刃の軌跡に合わすように、その刀を置く。

ギイイイン!!! ベキツ!!

俺の刀とサイモンの刀がぶつかって火花が上がり、俺の刀が折れた。

……嘘だろ!? スカサハ師匠から貰った紅刀だぞ!? こんな簡単に壊れるのか!?

カランカラン……

切られた紅いあか刀身が地面に落ちた。俺はあまりの驚きに一瞬固まってしまった。サイモンはその隙を見逃さずに刀を振るう。

ザシユツ……!!

「グアアッ!」

俺は咄嗟に利き腕の右手をかばい、左腕を切られた。一応避ける動作もしたため、傷はそこまで深くはないが……己の左腕はもう戦力外だろう。

俺は再び鉄の床を転がる様にしてサイモンと距離を取った。

ドン……!!

「ゴフツ!! ハア、ハア……」

俺は最初にぶつかった木箱の近くまで転がったらしい。俺の目の前には、割れ目から鏡や勾玉、陶器磁器に書物や日本刀が顔をのぞかせていた。……というか、その日本刀のせいで顔に新たな傷ができた。

「いやはや、『天下五剣』といっても所詮しよせん飾られた宝剣程度の物かと思っていたが……この『三日月宗近』は中々の切れ味だな。」

俺は寝返りを打つようにサイモンの方へ向いた。サイモンは手に持つ刀を振り、付着した血や油を落とす。

……おっジョニー・マクレーは何をしているんだ?

おっジョニー・マクレーは『カティア・タルゴ』の猛攻にさらされていた。『カティア・タルゴ』は素人でもわかるような小太刀の名刀を振るい、おっジョニー・マクレーが持つ銃を切り裂いていた。

……ん? 名刀?

俺はサイモンが持つ刀を見た。その刀は……今の時代では絶対に作れないであろう製作者の圧倒的な技術力と込められた思い、そして歴史の重みによるオーラを放っていた。

そしてサイモンは『……この三日月宗近は中々の切れ味だな。』  
と言っていた。という事は……

「サイモン、お前……その刀……!!」

なんで俺はサイモンの持つ刀を注目しなかったのだろう。柄がつけられているが……この刀は東京国立○物館で飾られていたものだ。

……**三日月宗近**は『天下五剣』の一つ。『東京国立○物館』に所蔵されている重要な太刀の一つだったはず。それをサイモンが使っているのか？

「流石に分かるか。これはあの博物館にあった刀の一つで『天下五剣』の一つ、『三日月宗近』だ。……それに私は武士や侍に興味を持っていてね。剣道と剣術を習っていた時もある。」

サイモンはそう言いながら、その**三日月宗近**を上段に持って構え、ジリジリと近づいてくる。

……クソツ!!何か、何か使えるものはないか？

俺は周りを見た。近くには蒸留酒が入った酒瓶が多数散らばっており、近くには俺の顔を切った日本刀が木箱からコンニチハしている。窓から見える景色から、すでに高度6000m以上の場所にいることが分かる。

「祖国の名刀に切られるのだ。光荣だな、村田君？」

サイモンがそう言った時、機内の空気が流れがいきなり変わった。

「ウワア……アア……ウウ……」

あちこち切られた**ジョニー・マクレ**は『カティア・タルゴ』に蹴られ、輸送機側面の壁に叩きつけられた。『カティア・タルゴ』は白兵戦の名手らしく、白兵戦が苦手であり、しかもボロボロ**ジョニー・マクレ**はとても不利な状況だった。

「……………」

『カティア・タルゴ』は**小太刀**の名刀**を**逆手に握り、**ジョニー・マクレ**にゆっくり近づいてくる。その時、**ジョニー・マクレ**は自分の横にあるボタン**があるのを**確認した。

「スカイダイビングはお嫌い……!?!」

ジョニー・マクレーンは『カティア・タルゴ』のタイミングを見計らってそのボタンを押した。すると機体前方の側面扉が一気に開いた。

与圧していた貨物室の空気が一気に機外へ噴き出される。

「……『カティア』ッ!!」

サイモンが思わず後ろを向いたがもう遅い。前方の側面扉から『カティア・タルゴ』は機外へ射出された

「……ッ!?!……ア!!……ッ!!」

メキキキキッ!!

そしてプロペラによるものだろう。鈍い、何かと衝突した音が聞こえた。

彼女は俺達が入ってきた主翼後方の扉ではなく、前方扉だ。前方扉のすぐ後方にはプロペラがある。そのため、今の異音は……

……まあ良い、これで一瞬の隙ができた。

ダンダンダン!!!

俺は腰の14年式を抜き、サイモンに連射した。サイモンは慌てて機内の鉄骨に隠れた。

俺は弾切れになった14年式を捨て、木箱から飛び出していた日本刀（なかにし）の茎（柄）に被われる刃のない部分（部分）を握り取って取り出し、痛む左腕で床に転がっていた酒瓶を拾い上げた。

……『ロンリコ 151』、このラムなら大丈夫なはずだ。

「うおおおおお!!!」

俺は酒瓶と木箱から引き抜いた刀を持ち、隠れるサイモンに近づいた。

「イブキにいい!!」

「イブキさん、援護します。」

ダダダ!!ダン!!ダン!!

有難い事にななめと西住さんが援護射撃をし、サイモンは鉄骨の陰から動くことはできない。

「兄弟共々くたばりやがれ!!」

俺は左手に持つ『ロンリコ 151』の酒瓶を足元に落とし、それ

をサイモンに向けて蹴り飛ばした。

「……ッ!!」

サイモンは『三日月宗近』でその酒瓶を切った。すると中身の酒がこぼれ、サイモンの全身に降りかかる。

そして、俺は右手に持った木箱から引き抜いた刀でサイモンを切りかかった。

ギイイイ!!

流石は木箱博物館にあった宝物の中に合った。俺の握るこの日本刀は『三日月宗近』に耐えられたようだ。

ところで、日本刀とは……要は鉄の塊だ。その二つが勢いよくぶつかれば火花が散る。その火花の一部はサイモンへ飛び……今さっき全身に浴びた『ロンリコ 高濃度アルコール』に着火した。

ボン!!!

「グアアアアア!!」

サイモンは衣服についたアルコールに火が付き、一瞬のうちに全身が燃え上がって火だるまになった。『三日月宗近』を投げ捨て、サイモンはその熱さに悶え苦しむ。

……『ロンリコ 151』は151USプルーフ(175.5%)という、超高濃度のラム酒だ。高濃度の酒とは言え、約25%は不純物であるから引火するかどうか心配だったが、成功したようだな。

俺は燃えるサイモンを前方の側面扉へ蹴り飛ばし、ジョニー・マクレーンは腰の拳銃を取り出して発砲し、とどめを刺した。

「(英語) 弟にもよろしく……!!」

ドン!!ダンダン!!

サイモンの弟はロサンゼルスおっの『ナカジマ・プラザ』で、俺とジョニー・マクレーンおっにより転落死している。

サイモンも弟と同じように外へ落ちて行った。この軍用大型輸送機は高度6500mを超えている。(俺の様な)特殊な訓練を受けていない限り、このような高度から落下すれば、海上・陸上どちらでも命はない。仮にその特殊な訓練を受けていても、ジョニー・マクレーンおっだ。

の放った銃弾で確実に死ぬ。

……貨物室はこれで完全に占拠した。コックピットにはサイモンとカティア・タルゴ以外は見えなかった。その二人は今、ミンチか落下傘なしのスカイダイビング中だ。

〔英語〕へへッ……!!ヒヒヒ……!!〕

ジョニー・マクレーンは思わず口角を上げ、笑いながら床に倒れこんだ。

「クククッ……!!」

俺も安堵のせいか床に崩れるように倒れこむと、思わず笑いが込み上げてきた。

「ハハハッ!!アーツハッハッハ!!」

……血を流し過ぎた。それに全身は傷だらけ。おまけに左腕は戦闘不可能。他にも色々とやっていそうだな。

俺達は立ち上がる元気もない。しかし、笑い転げるだけの力は残っていたようだ。

「イブキにいい!!大丈夫!」

「マクレーンさん!!しつかりしてください!!」

俺とジョニー・マクレーンにかなめと西住さんが駆け寄り、抱き上げた。二人は俺達の怪我を見て顔が真っ青になり、急いで応急処置しようとする。

「かなめ……俺の事はいい。それよりもこの飛行機を操縦できるか?」

〔英語〕嬢ちゃん、そんなことよりも輸送機だ。何とかしてくれえ……」

この大型輸送機は今でこそ自動操縦で安全に飛行しているが、コックピットには誰もいないのだ。軍用機とは言え、このような大型機は少しでもバランスを崩せばたちまち墜落してしまう。

それに、この輸送機は日本の領海領空から全力で抜け出そうとしている。そのため、誰かがコックピットに乗り込み、輸送機の進路を変



えなければならぬ。

「……ッ!!」

かなめと西住さんはそのことを理解したのだろう。苦虫を嚙み潰した様な、そしてどこか辛そうな表情をした。二人はスクッと立ち上がり、コクピットへ走って向かった。

ドスッ!!

……か、かなめ。コクピットへ向かってくれたのは嬉しいけど、抱えていた俺をそのまま床に落とさないでもらえるかなあ。

俺は後頭部を勢いよく床に叩きつけられ、打撲による鈍い痛みに襲われた。

「(英語) あんな子に抱き着かれてよかったじゃねえか」

ジョニー・マクレーンは痛みにも悶えながら、俺を揶揄う。

「(英語) ……うるせえ、そもそも☒かなめ☒は義妹だ。おっさんも知ってるだろ? ノーカンド。……それにおっさんは西住さんに抱き着かれたじゃねえか。」

「(英語) 娘と同年の子に抱き着かれてもなあ」

「(英語) ……マリーさん(おっさんの奥さん)にも言いつけてやる。」

俺がそう言うのとジョニー・マクレーンはビクツと震えた後、固まった。

「(英語) お、おい!! 坊主!! それだけh……!!」

ジョニー・マクレーンが慌ててそう言った時、木箱の後ろからちよこつと顔を出し、機内の様子を探る少女たちがいた。

……この子たちが攫われた子達、『Roselia』というバンドを組んでいるんだっただけ。

「敵はもう居ねえ。俺達が全員倒したぞ」

俺は彼女達を安心させようとヨロヨロと立ち上がった。

……クソッ。もう立つだけで眩暈がしてくる。

俺は思わず木箱に手をつき、己の体を支えた。『Roselia』のメンバーである少女達がビクツとする。

……こんな俺血まみれの男が対応したら、普通の女の子はびっくりするよな。  
俺は四次元倉庫から手ぬぐいを取り出し、顔を拭くが……半  
乾きの血糊が伸ばされる感触がする。

「あ、あの……『村田さん』？なんで……」

ガールズバンド・Roseliaの中で唯一面識がある氷川紗  
夜さんが怯えながら俺に尋ねてきた。

……そう言えば、氷川紗夜さんは  
Pastel\*Paletteの氷川日菜の双子の姉だっけ  
？確かに似ているな。

「ああ……俺は一点武偵だ。……緊急で氷川紗夜さんの妹さん  
の依頼を受けけてな。……全く、俺は

Pastel\*Paletteの白鷺千聖の護衛だったのに」  
俺は自己紹介も兼ねてそう言った時、今は懐かしげにセーラーム  
ンの変身BGMの様な物が聞こえ始めた。

……おい、もしかして  
俺は嫌な予感がした。すでに『海と陸の特殊刑事課』が登場したの  
だ。今度は『空の特殊刑事課』が登場してもおかしくはない。

「ムーンライトパワー!!」

俺はその場違いで呑気な声が聞こえると、機内の窓に飛びついた。

「おええええ!!」

そして、俺は吐き気を覚えた。

そこから見えるものは……この輸送機と並走する、太平洋戦争中に  
海軍が開発した双発夜間戦闘機月光。その翼で着替えをしてい  
る筋肉ムキムキで青髭の汚っさん（誤字に非ず）だった。

……おい、ちよつと待て!!時速350キロ以上出ている戦闘機の翼  
の上で着替えなんて普通出来ないだろ!?

背中を擦られる感触が伝わるが……そんなものどうだっていい。  
それよりもこの異常な出来事を自分の脳内でそう処理するかが問題  
だ。

……なんだってこんな人達が。

俺は諦めに近い悟りを開き、この現実を受け入れた。

「華麗な変身伊達じやない!!月のエナジー背中に浴びて、正義のステイツク闇を裂く!!空の事件なら任せて貰おう!!月よりの使者、月光刑事!!ただいま参上!!」

「同じく美茄子刑事ビーナステカもよろしく!!……説明しよう!!月光刑事は『女スパイ』に変身する事で、とてつもない力を発揮できるようになるのだ!」

俺達が乗る大型輸送機の機体後部のカーゴドアが開き、戦闘機：月光から二人の刑事が飛び移った。

一人は筋骨隆々な体にセーラー服の変態、そしてもう一人は有名な女スパイ：マタ・ハリの格好（しかもFGOの方ではなく、リアルの方）をしたムキムキの変態だ。正直に言って近づきたくない。

スタツ!!

「警察庁と警視庁からの命令で誘拐された少女達と博物館から盗まれた収蔵品を回収にやってきた!!」

「さあ君達。もう安全だ。一緒に来るがいい!!」

そう言つて二人の刑事が一步前へ動くと、ガールズバンド：Roseliaのメンバー全5人が恐れをなしたのか、全員が俺に抱き着いて後ろに隠れた。確かに、ごく普通の一般人はこの刑事変態に拒否反応が出るのはショウガナイ。

「だ、誰ですか!!警察を呼びますよ!!」

ガールズバンド：Roseliaのメンバーの一人、氷川紗夜さんが声を震わせながら俺の後ろで言った。

「我々がその警察だが?」

二人の刑事変態が不思議そうに首を傾げ、さらに一步近づく。

「ひいひいひい!!」

ガールズバンド：Roseliaは俺の背中に抱き着くように隠れる。

「ぶ、武偵何でしょ?!あの変態も倒してよ!!」

茶髪のギャルっぽい少女が縋る様に言う。

「いや……あれでも一応敏腕刑事らしいから。この輸送機にいるより確実に安全だ……」

「「「いや!!」」」

少女達は声をそろえて拒否をする。

……ああ、面倒なことになったぞ。クソツ

俺はボーっとする頭を無理やり働かせた。

「村田少年、ではその少女達を保護させてもらうぞ。」

「さあ君達、もう安全だ。」

俺の目の前に、二人の刑事の筋骨隆々な体がそびえ立っていた。  
変態 きちんとゆりゆう  
ガールズバンド：Roseliaのメンバーは俺に抱き着く力が強くなり、閉じかけていた傷がさらに開く。

「ああ……一応軍が保護したという形なので、上官の指示が無いと引き渡すことができないんですよ。」

俺は背中の彼女達を守る(?) ために……苦し紛れの、言い訳にす  
らならない屁理屈を言った。

「……分かった。ではこの博物館から盗まれた収蔵品は回収させてもらうぞ。」

「すみません、お願いします。」

月光刑事は少女達を見て察したのだろう。東京国○博物館の収蔵物が入った木箱の穴を塞ぎ、ワイヤーや縄でその大量の木箱を縛っていく。

「村田君、大丈夫か? 応急処置でm……」

「大丈夫です。ありがとうございます、美茄子刑事。……俺よりもおっさんの方を。」

……正直に言つて、あまり近づいて欲しくない。

変装していない方の美茄子刑事はボロボロの俺を心配してきた。

俺はその美茄子刑事をおっさんへ受け流す。

「(英語)……俺はいらねえ。……坊主、コックピットに行つてく



……今は12月の中旬。世間ではクリスマスの陽気であふれている。数あるクリスマスソングの中でもコイツとは、ラジオ局(?)の選曲はいいな

俺は目を閉じた。軍用機のせいかな、騒音がひどい。しかし、そんな環境が自分には似合っていると思った。

……後は西住さんとかなめがこの輸送機を操縦して帰れば終わりだ。

機体はゆつくりと傾き、旋回を始めた。俺は思わず口ずさむ。

「Let it snow! Let it snow! Let  
it snow!……」

映画や小説・漫画ならば、これで無事に事件が解決したという事になり、エンディングだろう。しかし、この輸送機には『村田イブキ』・『ジョニー・マクレ』という常に不幸を呼ぶ二人組がいるのだ。悲しいことにまだまだツイてない事が起こるのは確定事項である。

要は何を言いたいのかと言うと……これで終わるはずがない。現実には常に非情である。

キーン!!!

「うわあああ!?!」

機体が大きく揺れ、さつきまで感じていた旋回による慣性力と

逆方向の力が体にかかり、俺達は機内を転げまわった。

そのせいで  ガールズバンド・Roselia  の少女達と  組  
んずほぐれず  の状態になった。

……いったい何が起こったんだ!?

俺は自分に覆いかぶさる誰かの上半身を無理やりどかし、何とか立ち上がった。

「む、村田さああん!!」

すると、西住さんが何かを持ってコックピットから飛び出てきた。

……おいちよつと待て!! 西住さんの持つてる物つて

西住さんはあ  重苦しいオーラ  を  発 <sup>はっ</sup> していなかった。しかし、  
そんな事はどうだっていい。

それよりも西住さんが手に持っている物は……

「そ、操縦桿 <sup>そうじゆうかん</sup> が折れちゃいましたあ!!!」

「何でそれが折れるんだよお!!!」

……くそお!! サイモンの  置き土産  か!?

俺は頭を抱えた。

Die Hard 3 in Tokyo 後輩は自  
重しない……

俺はあちこち傷つき、大量出血のせいでぶっ倒れる寸前だった。しかし、西住さんが折れた操縦桿を持つてきたせいで俺の意識は覚醒し、急いでコクピットに向かった。

「おい!! 操縦桿が折れるってどういうことだよ!!」

俺は扉を蹴破り、コックピットに乗り込んだ。その際に衝撃が響き、激痛が体を突き抜けたのだが……俺は何とか耐えた。

さて、コックピットの操縦席では……おっジョニー・きマクレーンが足元に潜りこみ、何か作業をしている。そして副操縦席ではかなめがアワアワと慌てていた。

「い、イブキにい!!」

かなめは俺の存在に気が付くと、俺に飛びついた。

ガシツ!!

「……ツ~~~~ツ~~~~!!」

「あ、あのね!! 操縦桿を握ったらポキッと折れちゃって!!」

かなめが強く抱き着くために傷口が広がり、体中から悲鳴の合唱が聞こえてくる。

「分かった!! わかったから!!」

俺はかなめを無理やり引きはがした。

なんでも、副操縦席の操縦桿は最初から消し飛んでいたそうだ。そこで、かなめが操縦席に座って自動操縦オートパイロットを切り、操縦桿を握ったところ、ポツキリ折れてしまったらしい。

そのため、西住さんは壊れた操縦桿を持って俺を呼びに向かい、かなめは慌てて自動操縦オートパイロットに戻したようだ。

俺はその事を聞くと、思わずため息が出た。そして、コックピットを見渡した。

……な、何てひどい。



コックピットはあちこちに、弾丸の痕が多数残っていた。

前話で、サイモン達はコックピットで大量の弾丸を放った。その時に弾が跳弾し、今のような状態を作ったのだろう。大量の弾丸を密室で放てば、操縦系統へ流れ弾が被弾する可能性も高くなる。

……それらが操縦桿に直撃。それを知らずにかなめが引つ張って、ポツキリ折れたと。

操縦桿は操縦系統の中でも特に重要な部分であり、基本的に補助翼（主翼にある動く部分）と昇降舵（水平尾翼の動く部分）に直結している。しかし、方向舵（垂直尾翼の動く部分）には繋がっていない。なので方向舵（垂直尾翼の動く部分）と繋がっているラダーペダルさえ生きていれば、何とか旋回は可能ではある。（実際は機体が横滑りを起こすため、方向舵だけの旋回は困難を極める）

……ラダーペダルだけで旋回か。小型機なら一応可能だって教わったが……こんな大型機で出来るのか？

そんな時、操縦席の足元に潜り込んでいたジョニー・マクレーンがモゾモゾと出てきて、何かを投げ捨てた。

「（英語）クソ!!コイツもいかれてやがった!!」

ジョニー・マクレーンが投げだしたものは……銃弾か何かでボロボロになっているが、どう考えても『足を使って動かす道具』という事はすぐにわかる。

「（英語）おっさん……もしかして……」

俺は嫌な予感がした。噴き出た冷汗が傷口にしみて痛い。

「（英語）……ラダーペダルだ。」

「（英語）ウソだろ!?!スロットルレバー（車で言うアクセル）エンジンに繋がっている）しか使えないのかよ!!」

俺は天を仰ぎ見た。見えたのは……被弾痕が生々しい鉄の天井だけだった。

すると……俺の袖をクイクイツと引つ張られ、俺は下を向いた。引つ張っていたのは、とても気まずそうにしていた西住さんだった。

「あの……パラシュートがなk……」

「イブキにいい、この輸送機……落下傘は一つもないみたい。」

西住さんが何かを伝えようとした時、かなめが無理やり割って俺に言った。

……かなめ、そこまでして己を主張したいのか?……と言うか、今なんて言いやがった!?

俺一人ならば落下傘なしでも大丈夫だ。しかし、  
ジョニー・マクレーンに西住さん・かなめ(……かなめは先端化学兵器  
で何とかかなりそうなのが)、そして  
Roseliaのメンバーは落下傘無し  
の空挺などできるはずがない。

そのために……たった今、この大型輸送機は『空中の監獄』となつた。俺達は処刑<sup>燃料切れ</sup>までに、早くこの輸送機<sup>監獄</sup>から脱出しなければなら  
ない。

「(英語)……おっさん、なんか案はあるか!？」

俺は自分をシャキッとさせるため、ジョニー・マクレーンに怒鳴るよ  
うに尋ねた。

……いや、実際どうすればいい!?!  
[X]スロットルレバー [X]だけでど  
うやって日本に戻るなんてほぼ不可能だ!?!  
それに、操縦士と副操縦席  
の席に射出座席があるかもしれないが……  
脱出できるのは二人だけ  
だぞ!?!

「(英語)だからさっさと無線機を貸せ……!!」

ジョニー・マクレーンはかなめからヘッドセットを奪うと、操縦桿も  
ラダーペダルもない操縦席に座った。

「(英語)ハリウッドの『Air Force One』でハ○ソン・

○オードはどうやって脱出した!？」

ジョニー・マクレーンはそう言いながら大量のスイッチをいじりだ  
した。

……『エアフォースワン』? 米国大統領が搭乗した機体のコールサ  
インで、映画の題名でもある。確か映画の奴では……ああ!!

『エアフォースワン』では、エアフォースワン大統領専用機と並走する輸送機にワイヤーをかけ、そのワイヤーを伝って脱出していたはずだ。

という事は……おっジョニー・マクレーンは無線機で他の航空機援軍を呼ぼうとしているのだろう。

「(英語) ……って、おっさん。無線機のスイッチは分かるのか？」

「(英語) 大抵、スイッチはどんな奴も同じような場所にあるだろう？」

そう言っおってジョニー・マクレーンはスイッチに触れた。

ウウ!!!ウウ!!!

いきなり機内に警報が響き渡り、おっジョニー・マクレーンは慌ててそのスイッチを元に戻した。

「………」

俺達の間には不安な空気が立ち込めた。

「(英語) この中で……中国語、読める人いる？」

俺は思わず全員に聞いた。

おっジョニー・マクレーンは中国語など分かるはずがない。俺はせいぜい日常会話が理解できるレベルのため、こんな専門用語ばかりの文字は分からない。

……もしかしたら、西住さんかなめなら分かるか？

俺はそんな淡い期待を一瞬持ったが……二人は気まずそうに顔をそらした。

……だよなあ。

俺は思わずため息をついた。

もう、どうすればいいんだ……これ？

バーン!!

さて、俺達の中に重苦しい空気が居座っていた時、コックピットの扉が勢いよく開けられた。そして、その扉から 元人Rosealia 全質メンバーが入ってきた。

「村田さん!!今のサイレン音はなんですか!？」

この中で唯一の顔見知りである氷川紗夜さんが俺に詰め寄り、厳しい口調で……しかし、目には涙を浮かべながら聞いてきた。おそらく、彼女はこの非常事態に動揺しつつも、何とか己を保っているのだろう。

……しかし、どうする？彼女達に本当のことを伝えるか？

俺は返答に困った。

『いやあ、操縦桿にラダーペダルが折れちゃって操縦不可能になっちゃった。ついでに、落下傘は一切ないし、無線のスイッチもつかんない。テヘツ!』なんて事を彼女達に伝えるべきだろうか。

……正直に言って、民間人と一緒に任務はあまり受けたくないから……どうすればいいか分かんねえ。

俺はジョニー・マクレーンに目をやると……『勝手にしろ』と目でいい、あちこちのスイッチをいじり始めた。

今度は西住さんと目を合わせ……ダメだ、天井を向いて、何かをブツブツ呟いている。

かなめに目をやると……こいつもダメだ。かなめは『グルル……』と Roselia 全メンバーを威嚇している。

「はあ……」

……もういいや、全部話しちまえ。☒後は野となれ山となれ☒だ。思わずため息をついた。

俺は猫を撫でる様になめを撫で回し、何とか彼女の怒りを鎮めた。その間、俺は彼女達に全てのことを話す。

「……!!!」  
Roselia 全メンバーは伝えた事に衝撃を受けたのか、固まっていた。

「あ……!!あこ、そう言えばボンド持ってた!!」

「あ、あこちゃん!?なんでボンド!？」

R o s e l i a のメンバーの一人、紫の髪をツインテールにした年下の少女がポケットから、某有名な木工用ボンドを取り出した。……いや、それ木工用だし。そもそも固まっても強度の問題があるのだが。

とはいえ……方が一、億が一、兆が一で操縦桿が直るかもしれないため、一応そのボンドを借りて操縦桿に塗った。結果は……

ボロツ……

やはりと言うべきか……操縦桿はその重さに耐えきれず、ボンドを塗ってすぐにボロツと床に転がる。

……だよなあ。

俺は思わずため息をついた。そして R o s e l i a のメンバーの少女達は絶望の表情を浮かべる。

「ね、ねえ!! 私達って助かるんだよね?!

茶髪のギャル風な少女が継すがりついてきた。

「ああ……助かる……と思う。うん、助かるから安心しろ。」

「ちよつと待って!! 今の間は何?!

そのギャル少女が俺の上着をしっかりと握り、揺すりながら俺を問いただす。そんな時だった。

「(英語) なんだ? こいつは?」

ジョおっニー・マクレーんがそう言いながらレーダーの表示画面を指さした。

俺達はその画面をのぞき込むと、機体の2時方向から6機ほどの航空機が高速で接近している事が分かった。

「(英語) ……日本空軍ちか米軍の戦闘機部隊か?」

凡おおよそではあるが、調布飛行場を出て2〜3時間は経過したはずだ。

この軍用輸送機は時速550〜600キロほどで航行しているため……1100〜1800キロしか移動していない。

俺は頭の中から海図や航空図を取り出し、おおよその位置を測定した結果……東シナ海の 沖縄近くを飛んでいることが分かる。となれば、日本の領空ではなくても、防空識別圏にはいるはずだ。

そうなる……沖繩に展開中の日本空軍や在日米軍の可能性が大  
きい……

俺はその考察の元、呟いた。その時だった。

『人和？安全？』

中国語がいきなり機内に流れた。しかも、流暢で早口な中国語のため聞き取ることができない。

……なんだって機内に中国語が？

俺は嫌な予感がした。

〔英語〕 やつと無線のスイッチを見つけたぜ!!……こちらはジョ  
ニー・マクレイ刑事、人質確保。しかし操縦不能。救援を求め!!高度  
は27000ft、方位218度を時速360mileで航行中!!」  
やつとジョニー・マクレイが無線のスイッチを見つけたらしく、  
ヘッドセットのマイクに向かって状況を報告する。

『你在？什么？同？、人和？安全？』

もう一度、その流暢で早口の中国語が機内に流れた。俺は意識して  
聞いたため、何を言ったのかわかった。

……おいちよつと待て。そもそも、なんで6機の航空機は2時方向  
から来たんだ？哨戒だとしても、6機編成での哨戒なんて聞いたこと  
がない。つてことは……

ウウウ!!ウウウ!!ウウウ!!

いきなりサイレン音が機内に流れ出し、操縦席の画面には  
『自？跟踪』と表示された。

……クソ!!読めなくても、なんて書かれたかわかるぞ!!

〔英語〕 おい!!何か発射したぞ!!」

ジョニー・マクレイが叫んだ。レーダーの表示画面には1基につき  
2発、計12発の物体がこの機体に高速で接近していることが分か

る。

「(英語) ロックオンされたんだ!!」

俺はサイモンを倒した。あの日本刀を取り出し、天井に穴をあけた。そして座席を踏み台の代わりにし、その穴からヒョコツと上半身を出す。

「(英語) チクシヨウ!! なんだってこんな目に!!」

「ちよ、お前!! フレアはこっち!!」

操縦席でジョニー・マクレイとかなめの声が聞こえた後、機体後方からフレアが射出された。

俺は25ミリ機関銃を四次元倉庫から取り出し、ミサイルが来る方向に向けた。

「12本のうち3本がレーダーから消えました!! 9本が来ます!!」

西住さんがレーダーの状況を俺に報告する。

「了解!! Roseliaのみんなに揺れるから気をつけろよ!!」

俺はその9本のミサイルを視認した。ミサイルの速さは……マッハ3ほどのようだ。

……クソツ!! 本当に撃ち落とせるのか!?

25ミリ機関銃の弾倉は15発しか入らない。単純計算で、約1.5発の弾丸でミサイル1本を破壊しなければならぬ。

しかもマッハ3秒速約1000mの25ミリ機関銃の最大射程は8000mで有効射程は3500m。なので、最大射程では8秒以内、有効射程からでは3.5秒で撃ち落とさなければならぬ。

……大丈夫だ。俺ならできる……はず。

そんなことを考えていれば、ミサイルが最大射程圏内に入った。その時、ミサイル9本のうち4本が進路を変え、フレアの方へ突っ込んで行く。

……5本、5本ならいける!!

ミサイルが有効射程圏内に入る直前から、俺は発砲を開始した。

ダンダンダン!!! チュドーン!!!

俺は一本ずつ、確実にミサイルを破壊していく。

1本目はエンジン部分をやったのか、落下していく。2本目は索敵装置が破損したのか、急に進路を変更して爆散。3本目は4本目を巻き込んで爆発。

……残りはあの1本だけだ!!

しかし、その最後に残ったミサイルは中々しぶとい様で……数発ほど弾を当てているが、それでも止まらずにこの輸送機へ突っ込んでくる。

……クソツ!!他のミサイルは脆もろかったのに、なんでこいつだけ頑丈なんだよ!!

その最後の一本との距離が800mを切った。時間的にも、25ミリ機関銃が撃てる弾数はあと1発。その一発で確実に破壊しなければならぬ。

……クソツ!!あのミサイルはサイモンの怨念でも憑ついているのか!?

俺は血が足りないせいで、幻覚が見えるのだろうか。25ミリ機関銃の照準器越しに見える最後のミサイルにサイモンの怨念が見えた。

『死ネエエエエ!!』

……誰が死んでやるかってんだ

「イピカイエー・○サーファッカー!!」

ダアン!!

発射された弾丸はサイモンの怨念を引き裂き、ミサイルの弾頭に着弾した。着弾した弾丸はミサイルの弾頭を貫き、中で爆発した。

チユドーン!!!

何とかミサイルを撃破できたが、そのミサイルの爆発に伴う爆風と破片が俺を襲ってくる。



「グアアアア!!」

破片が俺の上半身や顔を引き裂く。爆風が肌を焼き、耳を一時的に使えなくする。

「む、村田さん!!大丈夫ですか!?……って血が!!」

西住さんが何か言っているが……聞こえないため、何を言っているのか分からない。

……それよりも、次は戦闘機が来るぞ?

俺は25ミリ機関銃の弾倉を交換した。目の前には、マッハ2程度で近づいてくる戦闘機6機が視認できる。

……ミサイルでも手こずったのに、今度は戦闘機か。

ミサイルは戦闘機よりも断然速いが、動きは直線的である。そのため、速度さえ気を付ければミサイルは比較的落としやすい。

しかし、戦闘機は人が操縦しているために回避行動を取り、死角から攻撃することができる。また、戦闘機であるため、ちよつとやそつとの被弾ではビクともしない。なので戦闘機を落とす難易度は高いのだ。

……とにかく、何とかしないと。

俺は顔の血を腕で拭き、機関銃を構えた。照準器から見える豆粒ほどの戦闘機がだんだんと大きくなっていく。

ウウウ!!ウウウ!!

「(英語)左、内側のエンジンが炎上!?お前、そのスイッチを……違う!!そっちのボタンじゃない!!逆!!」

「(英語)だったら嬢ちゃん、テメエがこっちの席に座るか!?……それにこっちでいいんだよ!!外を<sup>おっ</sup>てみる!!」

耳が回復してくると、<sup>おっ</sup>ジョニー・<sup>さ</sup>マクレーとかなめの怒鳴り声が聞こえた。二人は機内で言い争いをしているらしい。

「後方、7時方向から新たに2機が接近中です!!」

西住さんが叫ぶように俺へ伝えた。

前方から6機、後方から2機。どうやら敵に囲まれたようだ。

……チクシヨウ!!ここで死んでたまるか!!

ダダダダダダ!!!

俺は25ミリ機関銃の最大射程距離キロ圏内から発砲を始めた。前方6機の戦闘機は編隊を崩し、回避運動を取りながら接近してくる。

ダダダ!!!カチン!!

元々弾倉の装弾数が少ないため、25ミリ機関銃を連射すれば数秒も立たない内に弾切れを起こす。俺は急いで25ミリ機関銃の弾倉を交換するが、その間にも戦闘機はさらに近づいてくる。

「後方2機、ミサイル発射!!4発が来ます!!」

ダダダダダダ!!

弾倉を交換し、照準器を覗き込むと……そこには照準器からはみ出るほどまでに接近した戦闘機がいた。その戦闘機は発砲を始め、弾が俺のそばに着弾する。

ダダダダダダ!!!ペキツ!!

俺は慌てて反撃を始めた。

すると、俺の放った弾丸の一発がその戦闘機のキャノピー（コックピットのガラスの部分）を貫き、中で真っ赤な花を咲かせた。

真っ赤な花を咲かせた戦闘機は明後日の方向へ飛んでいく。

俺はその戦闘機を尻目に、他の獲物戦闘機を照準器の中に入れた時だった。

シューーチュドーン!!!

照準器に映った敵戦闘機にミサイルが命中し、翼が折れて錐揉み状態になって暗い海へ落ちて行った。

……は?どういうことだ?どこからミサイルが?

俺は照準器から目を離れた。その時日の丸が描かれたF-15が俺の目の前を横切った。そのF-15は俺達を襲っていた戦闘機をバタバタと、まるで訓練用的を落とすかのように撃破していく。

そんな圧倒的で一方的な空戦を繰り広げている時、俺はF-15の垂直尾翼に『343』という文字が描かれているのを発見した。

……343空!?やっと思方が助けに来てくれたのか!!

343空……『第343空軍特別飛行隊（通称：343空）』は選りすぐりのエースパイロットを集めた、正真正銘の空軍最強の戦闘機部隊だ。

同じように、エースパイロットを集めた『空軍飛行教導隊（通称：教導隊）』がいる。その『教導隊』は指導力などの能力も求められるのだが……『343空』は違い、ただひたすら技術を磨き、最強であることだけを求められる部隊なのだ。

ついでに、『有能な人間は癖がある……』で登場したイブキの後輩：笹井純少尉はこの部隊に所属している。

味方が来て俺がホツとしている間にも、F-15は敵を落としていった。

そして最後の1機を落とした後、2機のF-15は俺達が乗る大型輸送機に並走し始める。その時、2機のうちの1機のパイロットの顔が見えた。あの顔は……

……さ、笹井!!あいつ、来てくれたのか!!……もうちよつと早く来て欲しかったけど、それは我儘か？

俺は安堵のため息をついた後、ヨロヨロと機内へ戻った。

俺が機内へ戻ると、Roselia<sup>彼女</sup>が俺を見て悲鳴をあげた。

……なんだ？俺がなんかやったか？

「血が……大丈夫なの？」

Roseliaの一人、銀髪長髪の少女が俺に近づき、俺の額に手をやった。彼女のスラツとした綺麗な手が血でべったりと汚れる。

俺はハンカチを取り出し、顔を拭くと……白いハンカチは赤に染められた。どうも、頭を切つて血がドバドバ流れていたらしい。

……あぁ、傷を認識したら激痛が……

俺がハンカチで頭を押さえ、出血を押さえようとした時、機内に無

線が流れ始めた。

『先輩、まだ生きてます？……まあ、先輩の事ですから無事だと思いませんが。』

この声色、生意気な言葉遣い……これは間違いない、後輩の笹井だ。俺は並走するF-15を窓越しに見た。そのF-15のパイロットの一人がこちらに手を振っている。その仕草にしても、やはり笹井に違いない。

俺は副操縦席に掛けてあったヘッドセットを頭に付け、通信を始めた。

「まだ生きてるぞ。……なんだ笹井、助けに来てくれたのか？」

『藤原先輩が色々と駆けずり回ったみたいですよ？おかげで343空<sup>ち</sup>に命令が来て……、赤松中佐と一緒に抜け出して、新宿の<sup>〇</sup><sup>〇</sup>冴羽の兄さん<sup>〇</sup>も加えて一緒にナンパの予定がオジャンですよ!!』

「そいつあよかった。流石は藤原さんだ」

この馬鹿野郎 笹井 純は女好きであり、しかもよく警察に厄介になっている問題児でもある。時々、俺や藤原さんがこの馬鹿野郎 純を迎えに行くことがあるほどだ。

『……そんなこといいです。それよりも早く旋回してください。このままだと国境越えますよ？』

笹井は自分の予定が狂ったことを思い出し、不機嫌になったのだろう。明らかに声のトーンが低くなった。

『……ほお？笹井、外出届が出てないがどうということだ？それにお前は2週間の外出禁止だったはずだが？』

『ハハハッ……な、何言ってるんですか坂井隊長。この場を和ませるジョークに決まってるじゃないですかあ』

ドスの効いた低い声（笹井の上官らしい）が聞こえた後、その言葉を笹井は飄々<sup>ひょうひょう</sup>と受け流す。

……いや、若干笹井の声が震えている。あの野郎、マジでやる気だったのか？

いや、そんな事はどうでもいい。それよりも、この輸送機の状態を知らせないといけない。

「あの、笹井への追及は後でやってもらっていいですか。……笹井、旋回したいのは山々やまやまなんだが、この機体の操縦桿フットとラダーペダルが折れて旋回できない。」

『……………は？』

パイロットの二人が絶句した。流石に優秀なパイロットでも『操縦桿フットとラダーペダルが使えない』何てことは前代未聞なのだろう。

『……………や、やだなあ先輩。こんな時に冗談とk……………』

「冗談じゃない。事実だ。現実を起こっているんだ。しかもこの機体には9人いて、脱出用のパラシュートはない。……………なあ笹井、こんな状況でどうすればいい？一応お前もパイロット端くれなら、どうすればいいか分かるだろう？」

『先輩!! あんた~~×~~パイロットにはできないことはない~~×~~か思ってますん!?! 普通そんな状態になったらパイロットは脱出ですよ!?!』

藁すがにも継つる思いで笹井に聞いたが……………やはり笹井も知らないらしい。

……………ほんと、どうしようかなあ。俺が全員を抱えて飛び降りるか？ 東京スカイツリーが伐採破壊された時、俺は理子・ワトソン・リサを抱えて飛び降りたことがあった。

……………おっさんとかなめは多分大丈夫だから除外して……………6人を抱えて飛び降りるなんてできるかなあ

俺は最悪の場合を想定し、この輸送機からの脱出方法を考え出した。その時だった。

『……………本当にダメな時の方法があると言えはありますけど……………』

流石は343空最強パイロット集団に所属する笹井だ。この状況から何とか出来る方法を知っているようだ。

「それは何だ、笹井!! 早く教えろ!!」

『……………先輩。本当に、本当に!! 最期の時の方法ですからね? ………………酒はありますか? なるべくなら度数が高いのを』

「……………? ああ、今持ってくる。」

結構昔の話であるが、与圧に防寒もない機体だと、冬季では泡盛や

焼酎が常備されていたらしい（飲んで体を温めないと冗談抜きで凍死の可能性があるため）。そのため、当時の事を笹井が聞き、その事を思い出したのかもしれない。

……確か、俺達がこの機体に侵入したとき、Roselia<sup>人質</sup>を見張っていた敵は酒盛りをやっていたらしく、近くに酒瓶が転がっていたはずだ。だから酒はすぐに手に入るはずだ。

俺はヨロヨロと壁に手をつきながら、その酒瓶を回収するために歩き始める。

グラツ!!

歩き始めてすぐ、乱気流にでもぶつかっただろう。機体が大きく揺れ、俺は冷たい鉄の床に叩きつけられた。

「村田さん!」

「……だ、大丈夫ですか!」

すると、西住さんとRoselia<sup>長髪黒髪巨乳少女</sup>の一人が俺<sup>血まみれの男</sup>に駆け寄ってきた。そして西住さんは俺を膝枕し、Roselia<sup>長髪黒髪巨乳少女</sup>の一人は己のハンカチで俺の血を拭う。

「村田さん!!そこで休んでいてください!!お酒は私が取ってきます!!」

「あ、あたしも!!」

そしてRoselia<sup>長髪黒髪巨乳少女</sup>の氷川紗夜さんと茶髪のギャル風少女<sup>茶髪</sup>が貨物室へ飛び出ていった。

「村田さん!!何でそこまで無茶をするんですか!?死んじやいますよ!」

西住さんは目に涙を浮かばせながら、俺に説教をするかの様に言う。そして、Roselia<sup>長髪黒髪巨乳少女</sup>の一人もコクコクと頷く。

ところで、Roselia<sup>長髪黒髪巨乳少女</sup>の一人が頷くと、その<sup>茶髪</sup>とても大きな物<sup>茶髪</sup>が大きく揺れる。

……しかし、それに比べて西住さんは……

悲しいかな、胸のせいで天井が見えないなんて事は一切ない。  
『よく見れば胸による曲線があるかなあ〜』程度であら……

「フン!!」

ベキツ!!

「……!?」

「ゴフツ!!」

いきなり西住さんが汚らわしい物を見るような目になり、俺の顔面を思いっきり殴った。せつかく Roselia の一人に顔を拭いてもらったのに、新たな傷ができて血が流れる。

「な、何しやがる!!」

「いいですか!!日本人の平均はB〜Cなんです!!これが普通、むしろ大きいくらい!!」

「何の話だよ!!」

「……!?……??」

理由は分からないが、急に西住さんは怒りだし、そのことに対し Roselia の一人が慌てだす。

西住さんが再び拳を振り上げたため、俺はボロボロの体を振り絞り、急いで西住さんの膝枕から脱出した。

「持ってきました!!(持ってきたよ!!)」

それと同時に『酒回収班』が戻ってきた。俺は彼女達から酒を受け取ると、ヘッドセットを拾い上げ、逃げ出すように操縦席近くへ向かった。

「笹井、酒を持ってきたぞ!!これは……テキーラか?これでも大丈夫か!?!」

今、気が付いたのだが……氷川紗夜さんと茶髪のギャル風少女 A が持ってきたのは南米にありそうな石造の顔と『OL●EC A』と書かれたラベルが付いたゴールドテキーラだったようだ。

『大丈夫大丈夫。むしろテキーラが適役かもしれません。………じゃあ先輩、ググつとやってください、一気に!!』

「いや、流石にそんな事をすれば酔うぞ?」

『一気に!!』

「……………分かった。」

俺はテキーラの封を切ると、俺は瓶に口をつけて飲み始めた。

……………ヤバい!!いつもよりも酔いが回るぞ!?

それもそのはず、俺は今日一日何も食べていない。せいぜい少量の水を口にした程度だ。そんな『お腹ペコペコ・喉カラカラ』の状態でテキーラ(40度)を飲んだら……………一気に酔いが回る。

「ゴフツ!!ゴホツ!!カハツ……………さ、笹井いゝこれでいいかあ……………オエツ」

輸送機の振動が頭に響き、さらに気持ち悪くなる。三半規管がメチャクチャになり、立っている事が辛い。

『ククク……………せ、先輩……………』

「……………なんだよ。」

俺は、笹井が笑いを必死に隠そうとしている事がすぐに分かったが……………俺は酷い酔いのせいで、笹井が何を企んでいるのか一切分からない。

『……………後は酒で忘れてください(笑)』

「おい、笹井……………表に出やがれ……………!!!」

これが酔いのせいか、怒りなのか判断できないが、俺は頭に血が上った。

『あれえゝ先輩?俺達パイロットに飲酒が許されるなんてありえないじゃないですかあゝ』

そもそも、与圧に防寒もない機体……………など第二次世界大戦前(しかも風防無し)の事であり、現在では飲酒運転(飲酒操縦?)など言語道断である。

……………クソツ!!何でそのことに気づかなかった。ただ笹井が揶揄っていただけじゃねえか。それにこれだけ引つ張って、こんなオチなんて……………

俺はその事に気づかなかったにも、揶揄った笹井にも苛立つ。



『それに俺はF-15……しかも単座に乗っているんですよ？表に出れるわけないじゃないですか』

プチン!!

「そうか。じゃあテメエの機体に移り移ってやる」

『……へ?』

俺は怒りで酔いが覚めたようで、スタスタと歩いてコクピットを出ると、機体前方の側面扉を蹴破った。

そして四次元倉庫から鉤づめが付いたロープ（made by 平賀）を取り出し、笹井クソ後輩の乗るF-15へ投げて引っかけ、そのロープを引いて輸送機から飛び移れる距離まで近づける。

『何やってるんですか先輩!!落ちる、落ちるから!!それを離してください!!』

「何言っただだ笹井いゝ?テメエをボコすために乗り移るって言っただろお!!」

俺は力任せにロープを引っ張り、F-15との距離を10m弱まで近づかせる。

『嘘お!!出力上げても離れないんですけど?!……先輩待って!!落ちる、落ちるから!!……先輩、俺が悪かったです!!だから離して!!10億円弱の機体をこんな事で損失させないで!!』

「ああ?!?」

俺はさらに力を入れ、F-15を手繰り寄せる。

F-15はアフターバーナーでも点火したのか、機体の尻からガスバーナーの様な火を吹き出している。

「イブキにいい!!落ち着いて!!その怒りをアタシの体にぶつけてもいいから!!と言うかむしろ強引に……」↑かなめ

「村田さん!!そんな事よりも脱出方法ですから!!」↑西住みほ

「村田さん!!落ち着いてください!!」↑氷川紗夜

「気持ち分かるけど、あたし達は大丈夫だから……ね。」↑茶髪ギャル少女

彼女達が俺を羽交い絞めにするせいで、上手く力をロープに伝達できなくなつた。このままでは彼女達と一緒に機外空中で宙ぶらりんに出してしまうため、

俺は舌打ちをしながらロープを離した。

『あ、危ねえ……もう少しで翼が折れるところだった。……いつも思うんですが、先輩って本当に人間ですか？』

「ああ!？」

『……………スンマセン』

笹井がやつと大人しくなり、俺はため息をついた。

もめたところで☒俺達がこの機体からの脱出方法がない☒という条件は変わることがないのだ。

……そんな現状を忘れさせるために、ワザと笹井は<sup>からか</sup>揶揄ったのか？

……いや、ないな。

俺はため息をついた。

俺はトボトボとコクピットに戻った。そして投げ捨てたテキーラを拾い、一口飲んだ。

……クソツツ!!本当に飲んで現実から逃げるしかないのか？

アルコールが喉を焼き、腹で熱を持つ。ポーつとする頭をアルコールで無理やり覚醒させ、全員が助かる方法を探すが、いくら考えても出てこない。

……あれか？F-15の翼に掴まれば全員助かるかなあ

そんな危ないことを考えついた時だった。

『村田大尉、そんなに悲観的にならなくていい。東京武偵<sup>おたくの学校</sup>高校の航空機が救助に来るそうさ。時間は……あと5分ぐらいだな。』

「……………はあ？」

笹井ではないほう（確か……坂井中佐だったか？）から衝撃の事実が伝えられた。

「何でそれを先に伝ええないんですか!？」

『速度的に追いつくかどうか微妙だった。……それに笹井が「その事は言うな、その方が面白い」と言われてな。すまん』

坂井中佐が高圧的に伝えるが……そんなことなどどうでもいい。この<sup>クソ後輩</sup>笹井に制裁を加えるべきだろうか。

「……おい」

『いやいやいや!!確かに言いましたけど、先輩のためを思っていたんですよ!?!不確かな情報を伝えて下手に希望を持った後に☒やっぱ無理でした☒なんてことになったら嫌でしょう!?!』

「……………チツ」

……確かに、笹井の言う事に一理はある。一理はあるが……釈然としない。

俺は気を紛らわせるため、テキーラを煽った。しかし、テキーラは俺の怒りを消火することができず、むしろ増幅させる。

そんな時、俺の服をチョイチョイと引つ張られた。俺はその引つ張られた方向に振り向くと……そこにはRoseliaのメンバー5人がいた。

「あーっ達、助かるの?」

そのRoseliaのメンバーのうち、最も若い紫の髪の少女(ボンドを渡してきた子)が目には涙を浮かべながら聞いてきた。おそらく、彼女は中学生だろうか。

「ああ、大丈夫。今度は確実に助かるよ。……………まあ、さつきまでも助かる可能性があつたけどな。」

俺は重い空気に耐え切れず、茶化しながらその幼い少女の頭を撫でた。その少女はストンと地面に割座女の子座りをした。目に涙を浮かべ、嗚咽を必死に抑えながら俺の足に抱き着く。

……俺達の様な☒軍や武偵・警察の特殊な訓練☒を受けていない、ごく一般的な中学生が☒死☒を、しかも『数時間後には死ぬ(かもしれない)』と言う運命に向き合っていたのだ。それに耐えていた彼女の緊張が今、切れてしまったのかもしれない。だから……………かなめ、睨にらむな、座席を噛むな、ナイフを研ぐな。西住さん、☒汚らわしい物を見るような目☒で俺を見るな。おっさんは『またか』みたいな表情で溜息をつくな、二人を止めろ。

俺はため息をついた。

無情にも、こんな少女を足から引き離すことなど俺にはできない。泣き止むまでは放置しかないだろう。

「……あこ、離れなつて。お兄さんも困ってるからさ。」

「リサ姉え……」

Roseliaの茶髪ギャル少女が俺の足にしがみ付いた少女の背を擦り、やっと俺の足は解放された。

しかし、残念なことに……その彼女の声は俺のヘッドセットのマイクに伝わってしまった。マイクに伝わった音は電子信号に変換され、外部に発信される。そのため……

『……え!?先輩!!今の声は!?なんか女子高生の声が聞こえたんですけど!!』

この笹井バカ後輩にも伝わることになる。

笹井はまるで俺を脅すかのように、威圧しながら聞き出す。その威圧は……辻化・神城物・鬼塚三人クラスであったため、俺は思わず情報を口に出してしまった。

「……知らなかったのか?人質にされたのは『女子高生と女子中学生』だ。それと別に、女子高生二人(西住さんとかなめ)がこの機体に潜入して救出に来たんだ。」

俺は情報を口にした後、手に持っていたテキーラを一口飲んだ。

……はあ、なんで言っちゃったんだ。

『先輩!!何でそのことを先に言わないんですか!?!……ゴホン!!こんにちは、お嬢さん方。僕は笹井純、空軍戦闘機部隊・F-15のパイロットです。お嬢さん方を助けに来ました。(キラーン)』

笹井は乙女ゲーで出てきそうなイケメン風な声を出し、F-15のコクピットから女子受けがよさそうな笑顔をこちらに向けた。

もしここにいる女性陣が笹井このバカに初対面なら、きつと惚れないにせよ、多少はときめいたはずだ。しかし、笹井このバカの蛮行を今まで見ていたため……

「「「「「……」」」」」」

女性陣は汚らしいものを見るような目で笹井の乗るF-15を睨んだ。俺は思わず背筋が凍り、漏らすところだった。

……やっぱり、女って怖え

『あれ？返事が聞こえないな。……もしもし、聞こえますか？』

……笹井、お前はきつと大物になるよ。調子に乗るから口にはしないだろうけど。

俺は現実を忘れるため、テキーラを一口飲んだ。

〔(英語) 坊主、その酒を分けてくれ。〕

〔(英語) ほら、いくらでも飲んでくれ。〕

俺はテキーラの瓶をジヨニー・マクレーンに投げ渡した。そして俺とジヨニー・マクレーンは酒で現実を忘れようとした。

「お嬢さん方、もう僕が来たからには大丈夫です。安心してください  
(キラーン)」

「」「」「……」「」「」

……笹井、もうやめろよ……

Die Hard 3 in Tokyo 西住さん、  
誤解です……

『こちら東京武偵高校所属YS-11。左方から接近する。………  
イブキ、何とかやっつたようだな。』

笹井のナンパが無限に続くと思われた時、武藤の声が機内放送に流れた。俺は左側の窓を覗くと……そこには側面に大きく『東京武偵高校』と描かれた、今や珍しいYS-11が飛んでいた。

……よくもまあ、こんな古い航空機を保存してるなんて。

俺は救出に来てくれた安堵よりも、そっちの方を感心した。

「ああ、何とかな。……よくそんなオンボロを飛ばせるな。」

『おう、車輛科の秘蔵っ子だからな。前に飛ばしたのは3年前らしいぜ？』

武藤は『どうだ』とばかりに、自慢げに言うのだが……俺達は不安要素にしかない。

3年も飛んでいない飛行機を平然と飛ばしているのは……車輛科の整備のおかげか、それとも武藤の技量によるものだろうか？

……まあいい。製造されて60年は経っている機体でも、救援に来てくれたことには変わりない。

『あの後、調布から急いで戻って追っかけたんだ。……約束守れよ？』  
「白雪の手料理だっけ？……頼んでみるけど期待はするなよ？」

俺は『Die Hard 3 in Tokyo』おねーちゃん』を探しますか……』において、武藤が白雪の手料理を望んでいたことを思い出した。

『やっぱり持つべきものは友だな!!……今ワトソンがそっちへ移動する。速度、高度、角度をそのままにしろよ。』

「了解。操縦系が全部いかれて、今は自動操縦だ。下手に操縦席のスイッチは触らねえよ。」

武藤が弾んだ声でそう言うと、YS-11から一人空中に飛び出してきた。その人物はワイヤーで宙ぶらりんになりながらも、ゆっくり

と俺らの機体に近づいてくる。あれは……武藤の言う通り、ワトソンのようだ。

「Roseliaお嬢の皆さん、テロリストの輸送機にご搭乗ありがとうございます。脱出するまでは気を抜かず、搭乗員の指示に従ってください……つてな。」

「……」

俺は安心させるため、軽口を言ったが……いまいち受けが良くなかった。

「(英語)なんだ、日本じゃこういうのはウケないのか？」

……おっさん、傷に塩を塗り込むんじゃないよ

俺はため息をついた。

「白雪ちゃんって女性ですよ？ 武偵高の生徒も、先輩も知ってるって事は……女子高生ですか?! いいなあ、俺も白雪ちゃんの手料理食べたいなあ!!! そう言えば俺、敵機を4機も撃墜したんですよえ〜!!!」

「……笹井、いい加減にしろ。」

「……スイマセン」

とはいえ、笹井のおかげで助かったのは事実である。

後日、外出止め&自室にて謹慎を喰らっていたのにも関わらず、脱走しようとしていた笹井を見つけてボコボコにした後、俺は『白雪特製弁当』を渡してやった。

俺はコックピットを出ると、すでにワトソンが乗り移っていた。彼女はワイヤーのフックをこの機体に固定させていた。

「……ん？なんでワトソンが救出作戦に？」

俺は不思議に思った。

ワトソンは優秀な万能型の武偵だ。彼女はテロリストが仕掛けた爆弾の捜索で忙しいと思っていたのだ(何個仕掛けられたか分からないため、首都圏全ての学校を捜索しなければならない)。

「空挺訓練や空中機外作業の訓練を受けたことがある武偵はボクだけらしい。……それにムラタがピンチだつて聞いたから。」

「……?そうか、とりあえずこつちだ。」

ただでさえ、エンジン音にプロペラ音、それに風の轟音によって大声でしゃべらないと思疎通ができない。そんな場所でワトソンが小声で何か言ったようだが、俺は一切聞こえなかった。

……まあいい。それよりもRose<sup>お嬢</sup>selia<sup>さん</sup>の皆<sup>方</sup>さんの救出が最優先だ

俺は後ろで不機嫌になったワトソンの手を取り、コックピットへ案内した。

「……………ムラタ、コックピットで撃ち合いでもしたのかい?君は考えなしに戦うことがあるのは知っていたけど、コックピットで戦えば操縦不能になることくらい考えられないか……」

「これをやったのは俺じゃないから!!敵のテロリストが連射した結果、なっただけだから!!」

ワトソンはコックピットの<sup>多数の弾痕や破壊された機器</sup>悲惨な現状を見て一瞬茫然した後、俺をジト目で見てきた。

俺は慌てて反論と弁明をするが……ワトソンは信用していないのか、その批判的な視線を止めない。

「それに酒臭いよ?」

「飲まなきゃやってられない事情があつたんだよ。」

俺はため息をつき、笹井を睨んだ。笹井は『いいなあ』と指をくわえながらこつちを見てくる。

「……………分かった。それ以上は聞かない。……さ、皆さん。一人ずつこの機体から脱出します。僕の指示に従ってください。……武藤、



救出を開始する。移動をしてくれ。」

『了解。移動するぜ。』

ワトソンは俺の苦労を察したのか……追及を止め、Roseliaの皆さんの救出の準備を始めた。

……これでやつと肩の荷が下りたな。

俺がそう思った時、視線を感じた。俺はその視線を感じる方を向くと……Roseliaの5人が不安そうに俺を見ていた。

おそらく……ワトソンを信用してよいのか、そして（特殊刑事課の様な）変態ではないのか、と言う不安があるのだろう。

Roseliaの皆さん、安心しろ。ワトソンは世界を股に掛ける優秀な武偵だ。それに月光刑事の様な変態では……」

その時、俺は『ワトソンは男装の麗人であり、女性としてのふるまいにトラウマを持つため、リハビリをやっている』という事を思い出した。

……確かに一般女性とはかけ離れているが特殊刑事課の様な変態ではない……はず。うん、普段の言動からはそのような傾向はない……はず。

「変態では………ない。うん、変態じゃないから安心しろ」  
俺は少々考えた後、言葉を発した。

「ちよつと待って!!今の間は何!」 ↑茶髪ギャル

「あこ、あんな様な人は嫌だよ!」 ↑紫髪の少女

「村田さん、何とかありませんか!」 ↑氷川紗夜

「……!?!?!」 ↑黒髪巨乳少女&銀髪少女

それが悪かったのだろう。逆に彼女達の不安を煽ってしまったよ  
うだ。

「ムラタ!?君はボクを何だと思っているんだい!」

ワトソンが顔を真っ赤にしながら俺の胸元を握って揺らしてくる。

「いいから!!時間が無いから早く脱出しろ!!」

俺はワトソンを引きはがし、Roseliaの5人と一緒にをコックピットから追い出した。

『あれ、先輩？あの☒☒ワトソン☒☒って子って……女の子ですよね？』  
「違う!!ボクは……男だ!!」

笹井の戯言ざれごとに釣られ、ワトソンは思わず反応してしまった。

『この声や体形から考えて……やっぱり女性ですよね!?!……ゴホン!!  
こんばんは、お嬢さん。これが終わった後、一緒に食事でもいかががで  
sh……』

「笹井、救出の邪魔だ。静かにしろ。……そう言えば☒☒冬季の特別サ  
バイバル訓練☒☒に空きがあるらしいg……」

『冬季の特別サバイバル訓練』とは……(着ている)衣服一着のみ持ち  
込み可の条件で、1〜2週間ほど単独で山籠やまごもりするという訓練だ  
(時々追手アリ)。

追手のみならず、野生の動物(主に熊)からの襲撃もあるため、と  
ても厳しい訓練となる。

『ボクガ悪カッタデス。スイマセン。』

笹井はすぐに謝った。

さて、笹井の妄言を一蹴した後、この機体からの脱出が始まった。  
ワトソンとRoseお嬢liaさんの5人のうちの一人がスカイダイビン  
グのタンデム二人組の様になった後、ワイヤーを伝ってYS-11に移動す  
るといふ事を繰り返す。

紫髪宇田川あこの少女↓黒髪白金巨乳子少女↓銀髪湊友希那少女↓茶髪今井リサギャルという順番で  
移動が進み、最後に氷川紗夜が移動する順番になった。

「村田さん、助けてもらってなんてお礼をすればよいのか……」  
「気にするな。氷川日菜妹の依頼だから。」

俺がそう言うと、氷川紗夜さんが引きつった笑顔を浮かべた。

……ん？どうかしたのか？そう言えば氷川紗夜(姉)・氷川日菜(妹)の二人は双子なのだが、学校が違う。今の表情から……氷川紗夜は氷川日菜(妹) 苦手なのか？

氷川紗夜(姉)・氷川日菜(妹)の間に何か複雑な姉妹関係が見えた。「今度相談に乗りますよ。氷川日菜との関係に悩んでるんでしょ？……じゃ、ワトソン。よろしく」

「え?! い、いえ!! そう言うわけでは……!!」  
「……………」

ワトソンはムスツとむくれながら氷川紗夜を抱え、YS―11へ移動をしようとした。その時だった。

ウウウ!! ウウウ!! ウウウ!!

サイレン音が機内で鳴り響いた。

……この音って!? 聞き覚えがあるぞ!?

この音は前話で敵戦闘機にロックオンされた時になったサイレン音と同じ音だ。

俺は嫌な予感がし、急いでコックピットに走った。

「(英語) おっさん!？」

「(英語) クソツタレ!! またロックオンだ!!」

「え!?! ……え!?!」

ジョニー・マクレーは怒鳴るように答え、西住さんとかなめは慌てていた。

操縦席の画面には『自? 跟踪』の文字が表示されていた。俺はレーダーの画面を見ると……ミサイルしか表示していない。敵戦闘機は近くにはいないようだ。

……クソツ!! どこから発射されたんだ!?

俺はコックピットを出るとワトソン達とは逆側、右側面扉から上半身を出して周囲を確認した。

……いた!! あいつか!!

2時の方向に1隻の小さな漁船から煙を吹き、俺達がまだ乗るこの

機体へ真つすぐに飛んでくる小型ミサイルが見えた。そしてそのミサイルはすでに目と鼻の先にいる。

……チクシヨウ!! 迎撃も回避もできない!!

チユドーン!!!

「……ぐああああ!!」

小型ミサイルは右翼・内側エンジンに命中した。その破片が俺に降りかかり、体を切り裂いていく。俺は必死になってその痛みに耐えた。

ベキベキベキ!!

ミサイルとエンジンの爆発により翼に亀裂が走り、そこに風圧が加わり、片翼がゆっくりともげる。それと同時に機体のバランスがゆっくりと崩れていく。

『……ッ!! ヤロウ!! よくも先輩を!!』

『待て!! 待て笹井!!』

笹井が操縦するF-15が小型漁船へ急降下し、バルカン砲が火を吹いた。

……この機体は武藤が操縦するYS-11とワイヤーで繋がってるんだ。このままだとYS-11も道連れになっちまう!!

「二人とも!! 早く出る!!」

俺はワトソンと氷川紗夜へ怒鳴るように言うが、二人は動こうとしない。

「ムラタ!! 君はどうするんだ!!」

「村田さん!! もしかして死ぬ気ですか!？」

「大丈夫だから早く!!」

俺は二人を蹴飛ばすようにして機外へ脱出させた。その2〜3秒後、俺達の乗るこの大型輸送機は錐揉み状態きりもになって地球へダイブを始め、ワイヤーの固定具が吹っ飛んだ。

……機体の高度は約7000mほどだったはず。空気抵抗のない自由落下だと……地面まで35秒くらいか? 実際は空気抵抗が加わり、もつと長い時間がかかるはずだ。その間に何とかしないと!!

俺は無重力状態になった機内を何とか移動し、コックピットへ戻っ

た。

「アハハ……そう言えば、『東京で自殺しよう』って考えてたんだっけ……。ある意味叶ったかなあ……」

「(英語)嬢ちゃん!!ブツブツボヤいてないで、さっさと探せ!!」

「少なくとも、あたしとイブキに~~い~~だけ~~は~~助かるようにしないと……あ、イブキにい!!」

無重力状態の機内疑似宇宙空間を移動し、扉をくぐると……コックピットは混沌だった。

西住さんは虚空を眺めて笑いながら現実逃避をし、  
ジョニー・マクレーは必死に脱出装置を探し、かなめは何かを企んでいた。

……か、関わりたくねえ。

俺はため息をつき、思考と感情を強制的にリセットさせた。

……残っているのは俺を合わせて四人。脱出用のパラシュートはないらしいが、脱出装置がないというのはおかしい。

俺は抱き着いてくるかなめを引きはがし、西住さんの頭をはたいて現実逃避を止めさせた後、何か脱出用の装置がないか探し始めた。

……搭乗員用の脱出装置はなくても、少なくとも操縦員用の脱出装置は装備されているはずだ。

その時、座席横にレバーを発見した。レバーには『?射』と書かれている。きつと射出座席を発射させるためのレバーのはずだ。

「(英語)おっさん!!多分、座席横にあるレバーだ!!それが射出座席のスイッチだ!!……西住さん!!ポケットとしてないで座席に座ってくれ!!」

「こんな状態で席に座れませんよ!」

「口答えするなら行動してくれ!!」

俺はジョニー・マクレーに脱出装置(?)を伝えた後、目の前に漂っていた西住さんを捕まえ、シートベルトで座席に縛り付けた。

「(英語) こいつかあ!? ……おい、嬢ちゃん!! いや、お前!! 坊主の妹の方だ!! 早く席に座ってベルトを閉めろ!!」

「何でお前に命令されなきゃいけないんだ!! アタシを縛り付けていいのはイブキにだけだ!!」

「(英語) テメエは死にたいのか!? さっさとしろお!!」

ジョニー・マクレーンおっは文句を言うかなめに一喝し、そのまま座席に座らせてシートベルトをかけさせた。

……ま、間に合うか!?

俺は外を見た。すでに高度は3000mを切っていた。

「(英語) 坊主!! 座らせたか!？」

「(英語) 準備万端だ!! いつでもできるぞ!!」

俺とおっさんは二人を縛り付けた座席の背にしがみ付いた。

ところで、俺達が乗る大型輸送機は現在進行中で空中分解が進んでいる。

パリン!! ベキツ!!

たった今、コックピットのガラスが割れ、壁の一部がはがれた。

「(英語) 射出座席なんて何時以来だ? ……ああ神様、お助けを……」

「(英語) ジョン・F・ケネディ国際空港以来じゃねえか? ……行くぞ!!」

俺達は同時に座席横のレバーを引いた。

バシユ!!

コックピットの天井が外れ、座席下にあるロケットブースターに火が付いた。

「コウわあああああ!!」

俺達は強烈なGを受けながら、夜空に吹き飛ばされた。

チユドーン!!

そして俺達が脱出し、パラシュートが開いたと同時に輸送機の残骸が大爆発を起こした。

「(英語) くそお!! 日本になんてもう来てやるか!!」

「(英語) こっちから願い下げだ!! それにアメリカの方が危険だろうが!？」

「……………少なくとも、東京にはもう来たくないなあ。」  
「やっぱりこのおっさんは危険……イブキにはやっぱり閉じ込めていた方が……」

西住さんの射出座席に俺がへばりつき、かなめの方には  
ジョニー・マクレーンがへばりついていていた。

もちろん、射出座席は人間一人分で設計されているため、俺や  
ジョニー・マクレーンがしがみ付いていると重量オーバーとなる。な  
のでパラシュートは比較的早い速さで落下し、俺達は海面に叩きつけ  
られた。

……クソオ!! 叩きつけられた痛みなんて屁でもねえが、海水が傷に  
しみる!!

俺はあまりの痛さに気絶しそうになったが何とか耐え、海面に向  
かって泳ぎ始めた。

「プハッ!!」

俺は海面に出て新鮮な空気を肺に入れ込んだ後、周りを見た。海面  
には二つの小型ゴムボートが浮かんでいた。おそらく、このゴムボ  
ートは射出座席についていたものだろう。

「おっさん!? かなめ!? 西住さん!?!」

「(英語) 坊主……生きてるか?」

「イブキにいい!! よかった!! 生きてた!!」

俺は叫ぶように言った。するとジョニー・マクレーンとかなめの返  
事が聞こえたが、西住さんの声だけは聞こえない。

「(英語) おっさん!! 西住さんは!?!」

「(英語) 嬢ちゃん坊主と一緒に落ちたじゃねえか!! 知らねえぞ!」

俺は立ち泳ぎをしていたかなめとジョニー・マクレーンに近づいた  
が……やはり西住さんは見えない。

……おい、嘘だろ!?

すでに日は落ち、~~真~~つ暗な海~~と~~星々がきらめく夜空~~が~~ほとんどを占めている。~~燃~~え盛る機体の残骸~~が~~唯一の光源だ。

こんな状態で一度はぐれたら……よほどの豪運がない限り、生存の確率は一気に狭まる。

……いや、俺と西住さんは同じ場所に落ちたんだ。だけど声や返事が聞こえないってことは、そもそも海中から這い上がっていないのか？

俺は海面に浮いていた小型のゴムボートへ這い上がると、それに備え付けられていたサバイバルセットから懐中電灯を見つけた。

……よかった、懐中電灯は防水になってる。

「イブキにい……ナンデ他ノ女ノ心配ヲシテイルノ？」

俺はヤバそうなオーラを出すかなめを無視し、懐中電灯を啜えて暗い海へ飛び込んだ。

……海水が目にも傷にも染みる。クソツ!!西住さん、どこにいるんだ!?

俺は海水が目にも傷にも染みる中、暗い海の中で懐中電灯を振り回し、西住さんを必死に探していた。

……く、苦しくなってきた。いったん海面に……!?

その時、ゆっくりと海底に沈んでいく西住さんが見えた。

……いた!!気絶しているのか!?

俺は急いで西住さんの元へ泳いだ。西住さんの腕を掴んで一気に引き寄せたが、彼女の反応はない。

……とにかく、海面に戻らないと!!息が持たない!!

全力疾走中の時以上に心臓がバクバクと鳴る。意識が少しずつ薄れていく。



俺は西住さんを抱え、真っ暗な海の中を泳いだ。

「プハッ!!ハッ!!ハッ!!」

着衣泳をしたことはあるだろうか？一度水を吸った衣服は重くなり、裸（正確には水着のみ）の時に比べて泳ぐのがとても困難になる。

俺は息継ぎをした後、武偵高の上着を脱ぎ捨てた。そして多少身軽になった体を必死に動かし、西住さんを小型ゴムボートへ運び上げた。

「（英語）坊主!!嬢ちゃんは生きてるか!？」

「イブキにい……ナンデあたしジャナクテ、そいつナノ？」

ジョニー・マクレーンとかなめは別のゴムボートに乗っていた。ジョニー・マクレーンは心配そうに聞いてくる。

俺は気絶している西住さんの気道を確保したが……腹が動いていない。

「おい、嘘だろ!？」

西住さんは息をしていなかった。俺は西住さんの首に手を添え、脈を計るが……心臓の鼓動を感じない。

……クソツ!!息を吹き返してくれ!!

俺は四次元倉庫から銃剣を取り出し、西住さんが着ている上半身の衣服を全て切り裂き、開いた。そして上半身が裸になった西住さんの胸に手を当て、心臓マッサージを開始した。

「1、2、3、4……!!」

心臓マッサージ30回・人工呼吸2回が1セット。それを何回も繰り返し、明らかに蘇生したと判断できるまで続ける必要がある。しかも、心臓マッサージは肋骨を折る勢いでやらなくてはならない。

「18、19、20、21、……!!」

しかし、ここは海に浮かぶゴムボート。押せば少し沈む柔らかい床に西住さんは寝かせられ、しかも海の波による揺れまでである。心臓マッサージをやるにはとても難しい環境だ。

……でも、やらないよりはマシだ!!民間人なのに散々巻き込ませておいて、西住さんだけ死なす訳にはいかねえ!!

「27、28、29、30!!」

「いいなあ。あたしも気絶すればイブキにいいあんな事を……」

「(英語)なら俺がやってやろうか?」

「ジョニー・マクレーンおっとかなめが何かしやべっているらしいが無視をする。」

30回の心臓マッサージを終え、人工呼吸を始めた時、西住さんの目がうつすらと開いた。

……よかった!!何とか息を吹き返sh……!!!

俺が口を離そうとした瞬間、西住さんはカツと目を見開いた。そして鳩尾みぞおちに強烈な衝撃を感じたと同時に、アッパーカット気味あごに顎へ鋭い鉄拳が刺さり、俺は空中を飛んだ。

……は?……え?……は?

空中を飛んでいる時、顔を真っ赤にしながら鋭い目つきで俺を睨む西住さんと目が合った。

きつと……彼女は何か大きな、とても大きな誤解をしているに違いない。

バシヤン!!

……俺が何をしたって言うんだよ。今日丸一日、爆破やら銃撃やらで散々ボロボロになって最後はこの仕打ちかよ。俺はただ、西住さんを助けようとしただけなのにさあ。

俺は暗い海の中へ再び強制ダイブをさせられ、意識を手放した。

「おいお前何やってんだよ!!イブキに恩を仇で返しやがって!!」↑  
かなめ

「……え!?ああ!!む、村田さん!!ごめんなさい!!」↑みほ

「(英語)おい、坊主が動いてないぞ!」↑マクレーン

エンディングテーマ：『ジヨニーが凱旋するとき』

笹井は西住みほの衣服が切り裂かれたのを確認した時、目を皿のようにして彼女の裸を観察しようとしたのだが、運悪く窓枠の死角に彼女が入ってしまった。慌ててF―15の姿勢を変えた時にはイブキの体で西住みほの体は隠れていた。

笹井はF―15を旋回させ、覗きを試みるが……どうもイブキが邪魔だ。

そして西住みほがイブキを殴り、破れた衣服で上半身を隠すまで、笹井は彼女の裸を拝むことは一切できなかった。

「……いいなあ〜先輩。あんなに女の子に縁があつて。やっぱり軍隊の様な閉鎖的な男社会よりも、一般の学校の方が……。坂井隊長!!俺も村田先輩の様に武偵高校に一時転入とかできませんか!?将来的に考えて民間とのツテは重要だと思いますし、知見を広げるためにも必要だと思っんです!!」

笹井は己の欲望のため、嘘八百な理由をつけて上官の坂井へ願ひ出た。

「お前、声を小さくしても聞こえているんだぞ?そんな不純な理由で出来る分けないだろうが。……まあ、できなくもないが。」

「本当ですか!？」

坂井の言葉に笹井は食い気味に反応した。

「村田大尉は見た目に反し、とても優秀な人間だ。それほどの優秀な人間と判断されれば可能性は無いわけではない。343空だ……とりあえず模擬戦で太田を3分以内に落とし、俺か西沢から10分逃げ切れれば一考に値するか?」

空軍の超腕利きが集まる343空。

その中でも□□二つ名持ち□□である坂井隊長・西沢少佐魔王から逃げきる事。そして□□二つ名持ち□□ではないが、坂井・西沢このバケモノ二人と同じ小隊に所属する太田中尉を落とすのは困難を極めるだろう（坂井・西沢・太田・笹井で一つの小队）。

「模擬戦で太田中尉を落として、坂井隊長か西沢少佐から逃げきればいいんですね!!言質取りましたよ!!」

「……一考であつて、確定ではないんだが。」

後日、笹井は模擬戦で良いところまで行つたのだが、最終的にボコボコにされたの言うまでもない。

「あああああ!!!ふざけるな!!!ふざけるなッ!!馬鹿野郎!!あああああ

!!!」↑笹井

汚い慟哭どうごくを尻目に、笹井の上官達は話し合っていた。

「たった一年でここまで成長するなんて。努力はしてますし、いいんじゃないですか?」↑太田中尉

「確かに、能力に努力・伸びしろを考えたら外部への出向はありだと思  
うんだけど……」↑西沢少佐

「日頃の行いがなあ……」↑坂井

「「ハア……」」

『Die Hard 3 in Tokyo』 END?

Die Hard 3 in Tokyo キグルミ  
の中は暑い……

テロ事件が解決した翌日、俺は治療を受けた後、負傷と各種省庁への書類提出及び関係者への謝罪ため『白鷺千聖の護衛任務』を降りようとしたのだが……

「あら、プロ意識が足りないのかしら？」↑白鷺千聖

「そのぐらいの傷、すぐ治るやないか!!……ああ!？」↑蘭豹

白鷺千聖 蘭豹  
依頼人と仲介者のとても熱い希望により、喜んで任務を続行することになった。

とはいえ、各種省庁への書類提出及び関係者への謝罪をサボるわけにはいかない。そのため、俺は二日ほど休みをもらい、再び東京を駆け回ることになった。

その二日間はまさに地獄そのものだった。書類提出と謝罪や『東京国立○物館に三日月宗近を返還』・『宮内省にサイモンを切った刀の返還』などまだ楽な方で、『西住さんを殺そうとしていたかなめの説得』・娘が犯されたと勘違いをした西住母に「ティーガーで追われる」・西住流に取られたと言いながらセンチュリオンで俺を追う千代さん』など……

……これも全てサイモンと藍幫が事件を起こしたせいだ!!クソツタレ!!

俺はこの三人を何とか説得し、『暴走した三人のせいで迷惑をかけた関係各所への謝罪』などの仕事が増えることになったのは言うまでもない。

ついでに、俺は一部の仕事をジョニー・マクレに投げつけようと思ったのだが、ジョニー・マクレとその妻マリーさんはすでに日本から出た後だった。

二日間の休暇地獄が終わって数日後、俺はライブハウス CiRCL E いた。

『同章 まともな会議をしてくれ……』を覚えているだろうか。その時に議題に上がっていた『CiRCL E 合同ライブ』が今、ここで始まるのだ。

『CiRCL E 合同ライブ』はガールズバンドによる合同ライブであり……護衛とは言え、男の俺が楽屋に入るわけにはいかない。そのため、俺は客席でそのライブを鑑賞させてもらうことにした。

ついでに、この合同ライブが終われば、俺はやっと『白鷺千聖の護衛』から解放されることになる。

……この護衛もやっと終わるのか。長かったなあ……襲われたり、車が廃車になったりして。そう言えば次の車、どうしよう。

俺はため息をついた。

今だに俺はボロ車ビュートをまだ借りて使っているのだが、いつまでも借りておくわけにもいかない。

「いやあ、やつぱり熱いなあ」

「藤崎君ね、もうちよつと向こう行つてくれないかい？この状態じゃ撮れないでしょ？ただでさえ君はデブなんだから……」

「ああ!？」

「だって僕の場所の半分以上を君が取ってるでしょ!!それに音野君ももうちよつと向こう行けるだろ？」

「しようがないでしょ、機材があるんだからさあ」

「機材機材うるさいんだよ」

「機材なんか外に置いとけばいいよ、こんなの」

「盗られたらどうすんだよ」

「落ち着いてくださいって。こんなにいるさくしたら彼にバレちゃいますから。」

「うるさいなあ、なんでお前レイウ簡易O u ちゃんつけてんだよ。さつ

きからそれが当たって鬱陶しいんだよ」

「ほら、始まるから静かにしなさいって」

なぜか、ステージ側の客席で聞き覚えがある声~~が~~が聞こえたのだが……気のせいだろう。

……まさか~~が~~蝦夷テレビの皆さん~~が~~がここに来るわけないか。

バツ!!バツ!!バツ!!

いきなり照明が付き、ステージに立っていた少女達を映し出した。

「こんにちは!!私達……」

「~~Poppin, Party~~です!!」

ライブが始まったようだ。

「村田さん!!始まりましたよ!!」

「え?……あれ?なんで西住さんがいるの?お母さんと熊本帰ったんじゃない……」

~~蘭ちゃん~~がライブをやるって言ってたから……お母さんに頼んでもう少しだけ東京にいさせてもらってたんです。」

……『蘭ちゃん』って、事件の日に新宿御苑から東京駅へ向かうときに拾った黒髪赤メツシユの子だったよな。そうか、その子も出るのか。

「ライブって初めてで……ワクワクしますね!!」

西住さんは誰がどう見ても浮かれているのが分かる。彼女はポケットから未開封のペンライトを出し、袋を破ってそれを振り始めた。

「……そ、そうか。」

俺は~~彼女の~~彼女の母親に追い掛け回された~~こと~~ことを思い出して鳥肌が立った。

……~~母は強し~~とは良く言ったものだけ

西住母に追われた事  
俺はあの時のトラウマを忘れるため、集中してその演奏を聞いた。

ライブが始まって数分後、俺は彼女たちの演奏に聞き入ってしまった。『高校生の演奏』という事であまり期待していなかったのだが……いやはや、彼女達の演奏は見る人・聞く人達を魅了する。

……これが高校生だと？ 下手なプロのバンドなんかよりも上手だぞ!?

一番手、『Poppin' Party』はガールズバンドらしいポップで明るい曲が流れ、観客全員と一体になって盛り上がる。

二番手、『Afterglow』は美竹蘭みちちゃんが所属するバンドで、ロック調で格好いい曲を、彼女の低い声が歌うことによりさらに格好良くなる。

三番手、我らが白鷺千聖あが所属する『Pastel\*Palette』だ。流石はアイドルバンド、アイドルらしいポップでキュート（死語か？）な曲を披露する。

……白鷺千聖、見てくれは良いからなあ。普段もあんなにお淑しとやかだったらどれだけ楽だったか……。

そんなことを考えた瞬間、ステージから鋭い視線を感じたため俺は思考をやめた。

さて……四番手、サイモンに人質にされた『Roselia』の演奏の前に休憩があった。

俺はその時間に用を足し、トイレから出ると……アメフトの防具で身を固めた集団アにいきなり囲まれた。

……え？ 何!? どういう事!? 殺気は感じないが……というかここはライブハウスの中だぞ!? なんでアメフト!? ……ってこいつら、東京武偵高ちのアメフト部じゃねえか!?



俺は今現在、起こっている事が全く理解できない。

「者ども!! 出会え!! 出会え!!」

聞き覚えのある声が聞こえると、防具で固めた男達屈強な男達10数人が俺に襲い掛かる。

「なんだ、なんだよオイ!?!」

ここはライブハウスの中。ライブの観客たちが遠巻きに不審者アメフト部を見ている。なので俺がここで下手に抵抗すればその観客たちにも被害が及ぶため……せいぜい口ぐらいでしか抵抗ができなかった。

「クソツ!! 離せ、離せえええ!!……おい、田口テメエ、今蹴っただら……ゴフツ!! だれだ、今俺を殴ったやつ!!……って天の鎖!?! なんてエルが!?!……理子、何ニヤニヤしながらスタンガン持つて……アアー……ツ!!」

俺はアメフト部+@によって楽屋裏まで連れて行かれると衣服脱がされ、代わりに何かを着させられた。

「どうだい、和泉君? 仕掛ける方になった気分は」

「あれだね。いざやってみるとここまで面白いものはないね。今まで君たちはこんなことを僕にやっていたのかい?」

「村田さん遅いなあ……もう始まつちやうのに」

西住みほはライブキのことを心配していたが……Roseliaのライブが始まると、そんな些細な事は頭から消えていた。

あのRoseliaはガールズバンドの中で最も有名なバンドの一つらしい。

俺はアメフト部に楽屋へ連れられてある物を着させられた後、

そんなRoseliaのライブを舞台袖で拝聴させてもらっていた。もしRoseliaの熱狂的なファンならば大金を積んででもこの場所で拝聴したいだろう。しかし、俺はそんなありがたみを一切感じなかった。

「あら、面白いものを着ているわね。どうしたのかしら?」  
「……………」

俺は白鷺千聖のイジリにも耐え、最後のバンドが搭乗するのを待っていた。

「ハッピー!!ラッキィ!!スマイル!!イエーイ!!!」

五番手、最後のバンドは弦巻こころが牽引するバンド、『ハロー、ハッピーワールド!』の登場だ。

「今日はOuchanも呼んでいるの!!Ouchan!!」  
…………行かなきゃだめだよなあ。

俺は『蝦夷テレビのマスコット：Ouchan』の着ぐるみを着てステージへ向かった。

「アッハッハッハ!!」

Ouchanが登場すると、観客席の一番前に陣取っていた蝦夷テレビの皆さんが大爆笑する。

ところで、『同章 まともな会議をしてくれ…………』を覚えているだろうか?その時、俺は弦巻こころにOuchanの存在を教えってしまった。そのせいで彼女は『蝦夷テレビのマスコット：Ouchan』に興味を持ち、弦巻財閥の力を駆使してOuchanをこの場に呼び寄せたらしい。

テロが起きる数日前、札幌にて…………

Ouchan着ながら演奏なんて無理だよ…………」

弦巻財閥から蝦夷テレビに仕事が入り、そして『木曜どうでい』

のスタッフへ通達が来て、O uちゃん役（笑）である安浦憲之助  
が必死に練習をするのだが……彼は部類の不器用。着ぐるみを着て  
演奏なんて器用なこととはできない。

「こつもうちよつとシャつとできないかい？ 適当なバイトでもできる  
様な事で仕事を貰ったんだぞ？ 君には意地つて物は無いのかい？」

「……んなこと言つても『着ぐるみ着て演奏』なんてムリだろ」  
安浦憲之助と和泉が口論を始めた。

「……ん？ 和泉、今なんて言つた？」

「だから『こんな高校生のバイトでもできる様な事』で仕事貰ったんだ  
から、もつとしつかりy……」

木曜どうでいのディレクター・藤崎は和泉の言葉であることを  
思いついた。

「ちよつと待て？……俺達はO uちゃんのおかげで全員東京へ招  
待されて、しかも大量のギャラも貰えたわけだ。」

「そうだよ？ だから安浦憲之助が不器用ながら必死に演奏の練習を  
……」

『高校生のバイトでもできる様な事』なら……数千円で適当な高校生  
を雇つて、そいつにO uちゃんさせて俺達は高みの見物でもす  
ればいいんじゃないか？」

藤崎の言葉に鈴藤が食い付いた。

「あ……それ面白いかも、僕達は何もしなくていい訳でしょ？」

「ちよつと待つてマスター!? あくまでも僕達が仕事を受けたわけだ。  
それなのにその辺の高校生になんか……それにそんな都合のいい高  
校生なんているかい？」

「いるじゃない、東京に。彼がさ……」

「いや!! 彼がいてもだ!! 僕らにはテレビマンとしてのプライドつても  
のg……」

和泉が反論するが……楽な方法を考えついた『木曜どうでい』班の  
行動は素早い。

すぐに東京武偵高校に任務の依頼を出し、蘭豹と綴が酔っぱらいな  
がら承諾の印を押し……そして周りに回つて俺に行きついたそうだ。

「そのこのオッサンども、後で覚えてろよ?」

「「「アッハッハッハッハ!!」」」」

俺は~~〇~~〇uちゃん~~〇~~〇の着ぐるみを着て~~〇~~〇蝦夷テレビの皆さん~~〇~~〇を脅すが……俺の怒りは彼らの~~〇~~〇爆笑の火~~〇~~〇に油を注ぐだけだった。

「……いくわよ!! 『笑顔のオーケストラ』!!」

……え?ちよつと待って!?俺は何をやればいいんだ!?

弦巻ころの一言で演奏が始まったのだが……俺は何をすればいいのか一切教えられていない。

結局、俺は黒服(?)の人からマラカスを貰って振ったり、バズーカを渡されてそれを撃つたり(紙吹雪とか出るアレ)、小っちゃい大砲を使って空砲を撃つたりした。

「へえ……お前がイブイブの護衛対象か。」

「あなたがイブキの同じチームなのね?」

『合同ライブ』が無事終わり、打ち上げが『ライブハウス CiRCL E』の楽屋で始まり、俺も参加させてもらったのだが……そこで<sup>金髪ロリ巨乳</sup>峰理子と<sup>金髪美少女の女優</sup>白鷺千聖が出会い、互いに<sup>いかく</sup>威嚇し合っている。

……~~〇~~〇君子危うきに近寄らず~~〇~~〇~~〇~~〇触らぬ神に祟りなし~~〇~~〇とりあえずあの二人から離れよう。

俺は置いてあったパンの中から適当に一つ取り、部屋の隅でそれを食べる。

……あ、美味しい。

「あっはっはっは!!村田君、ごめんね。ライブは楽しかったかい!」

意外と美味しいパンを味わっていると……<sup>諸悪の根源</sup>藤崎さんが笑いながら近寄ってきた。

「……ええ。おかげで冬なのに汗ダラダラになりましたよ。」

俺は親の仇の様に藤崎さんを睨むが、彼は何処吹く風と一切気にしない。

「そう言えば村田君、来年の春と夏は暇かい？面白い企画を思いついてですね……」

藤崎さんはそのヒゲ面を俺に近づけ、メガネを曇らせながら話します。

……今度また『木曜どうでい』に出てみる？料理対決やクリスマス様の様に死ぬかもしれないぞ!?

俺は身代わりを探すため、頭が高速で回転する。

その時、俺の視界の隅に……いつの間にも仲良くなったのだろうか、理子と談笑する白鷺千聖が見えた。そして俺は『同章 まともな会議をしてくれ……』で白鷺千聖がテレビのロケをお蔵入りにさせた事を思い出した。

……そうだ!!そう言えば白鷺は前にテレビのロケをお蔵入りにしている。ならば俺が『Pastel\*Palettes』に新しいテレビの仕事を紹介しよう。

「藤崎さん。俺の代わりに『Pastel\*Palettes』が出たら面白いと思いませんか？」

「その話、詳しく聞かせて貰ってもよろしいですかな？」

事務所からの許可も下り、『Pastel\*Palettes』は来年の春に『木曜どうでい』のゲストとして登場した。彼女達は『どうでい班』と一緒に荒れ地を開墾して野菜を植え、食器を作り、和泉と料理の腕を競い合うという日本一長い料理番組を撮ることになるのだが……その過酷さを彼女達はまだ知らない。

「では試食に特別ゲストが来ております。村田君です!!」

「ツ~~~~!! ツ~~~~!!」↑鎖で椅子に縛られ、猿ぐつわを履かされた  
イブキ

閑話 俺のいちばん長い日 With Bang  
Dream!

1：無駄知識の泉

『CIRCLE合同ライブ』の数日前の事、『休日、友達と一緒にク  
ラゲの特別展示をやる水族館』と『その近くにできた喫茶店』へ遊  
びに行きたいから、護衛のお前も来いよ？（意識）』とお達しが届い  
た。そのため、俺は白鷺千聖を『休日』に『夜々』迎えに行くことになっ  
た。

……確かに契約の範囲内だけど、メンドクサイ。  
俺はため息をついた。

確かにあの事件の後、最近は襲撃など一切なかった。だが、それで  
も何かあって彼女に傷一つ付いたら俺の責任になるため……あまり  
外出してほしくないのが本音だ。（テロの時は国が俺を徴用したた  
め、その時の違約金などは国が負担したそうだ）

……それに休日出勤だし。どうか面倒な事は置きませんように  
俺はボロ車で白鷺家へ向かうと、白鷺千聖は家の前でちよこんと  
待っていた。

……本当、外見は綺麗だから困るよなあ。  
俺は再びため息をついた。

「何だって休日に出勤させるんだよ。それに何かあったら困るから、  
外出は最低限にして欲しいって言ったよな？」

俺は助手席に乗った白鷺千聖にボヤいた。

「あら？プライベートの外出時も契約範囲でしよう？」

彼女は黒いオーラを放ちながら『見惚れるような笑顔』で俺を  
脅してきた。

「お前、今まで何回襲われたと思ってんだよ。」

「でも最近は何もないことだし、それにあなたが守ってくれるので

しよう?」

白鷺に何を言っても駄目なようだ。俺はため息をつき、ギアを入れた。

「へいへい……………。で、俺は何処へ行けばいいんだ。」

「そこを左に曲がって頂戴。」

「…………了解」

ボロ車ビュートはガタガタ揺れながら、ゆっくり進み始めた。

「…………なんで車変えないのよ」

「…………『お前はすぐに壊すからこれしか貸せない』って言われたんだよ。」

「…………ごめんなさい」

「ここで止めてちょうだい。」

「ハイハイ」

キキッー!!ピキツ…………

住宅街の一角にボロ車ビュートが停車した。すると白鷺千聖は助手席から降り、目の前の家へ向かった。

「ち、千聖ちゃん?…………ここ、この車なの?」

「だ、大丈夫。見た目はこうだけど、腕利きの武偵だから…………」

「ふええ…………」

すると数分もしないうちに白鷺千聖は青髪ロングの少女青髪を連れて後部座席に乗り込んだ。

…………この青髪の少女。どこかで会ったような気が…………あ。

松原さん? 松原さん?

「ふええっ!…………む、村田さん!」

…………この特徴的な口癖に慌てよう、やっぱり松原さんだったか。

白鷺千聖の友人、松原花音は『極東戦役：極東編 いつ撮ったんだよ…………』でかなめと一緒に行った映画館のある総合ショッピングセ



ンター☒☒で道案内をしたことがある。

「あら、花音のことを知っていたの？」

白鷺千聖は大きい眼をさらに見開き、俺を凝視した。

「以前、道案内をしてな。……改めて、武偵の村田です。よろしく。」

「ふええ!?……ま、松原<sup>まつぼら</sup>花音<sup>かのん</sup>です。」

……松原さんは白鷺ほど面倒な子ではない。いや、よかった。

俺は松原さんに握手をすると、なぜか白鷺千聖は少し不機嫌になった。

1時間もしないうちに目当てのビルに到着した。駐車場にポロ車<sup>ピュート</sup>を止め、俺達はそのビルの中にある水族館へ向かった。

「クラゲの特別展、楽しみだなあ。……付き合ってくれてごめんね。千聖ちゃん、村田君」

「いいのよ。あの事件のせいでスケジュールに空きができたから。」  
「だからと言っても外出は控えてくれ……でも水族館か。何年ぶりだろう」

俺達はチケット売り場への列を並びながら雑談にふけていた。

「村田君、水族館はあまり来ないの？」

松原さんは俺の目を見ながらコテンと首を傾げた。彼女の水色の髪がサラツと揺れる。

「小学生以来行ってないな。……築地や豊洲なら月1回くらいで行くけど。」

時々、俺はリサに連れられて築地や豊洲などで荷物持ちをさせられるのだ。そのおかげか、多少食材の目利きができるようになった。

「……それは水族館じゃないでしょう。」

白鷺は呆れる<sup>あき</sup>ようにため息をついた。

「私、ここにはよく来てるから……色々教えてあげるね。村田君。」

松原さんは花の様な鮮やかな笑みを俺に向けた。俺はその笑顔を向けられ、一瞬ドキツとした。

松原さんは一つ一つの動作があざとい……が、白鷺の様に☒☒裏があ

る行動☒☒ではなく、彼女は無自覚でやっているようだ。

「ああ、よろしくな。」

……白鷺よりも松原さんの護衛をやりたかったなあ。彼女には☒☒癒し☒☒がある。

「高校生、3枚お願いします。」

やっと順番になり、俺は3人分のチケットを買った。

「あ、村田君。お金払うよ?」

松原さんは慌てて己のカバンをまさぐる。

「いいって。ここで割り勘だと支払いが面倒だ。」

俺達の後ろには多数の人達が並んでいる。迅速に支払いをするために誰かが一括で払った方がいいだろう。

それに女二人に男一人。しかも他人の目がある中で割り勘は……キツイものがある。

「なに花音には格好つけるのよ。」

「ふええ……でも、悪いよう」

白鷺が軽蔑するような目で、松原さんは申し訳なさそうに俺を見た。

「……………ほら、さっさと行こうぜ」

俺は誤魔化すため二人の手を取り、足早に水族館へ向かった。……久しぶりの水族館に少しワクワクしているという理由も無いわけはないが。

「え!?!ちよつと!!」

「ふええ!?!」

「すみません、大人5人で」

……ん? そう言えば俺達の後ろに並んでいた人達、格好が☒☒魚屋の店主☒☒のような恰好をしていたが……なんでだろう。

さて、入館して最初に見えるのはイワシの大群がいる水槽だった。

「村田君、これがマイワシだよ。」

「へえ〜……脂がのって美味そうだな。」

飼われているせいか……イワシ一匹一匹が大きく、ふつくと脂がのっている。しかもピンピン生きているため、とても新鮮なのは確かだ。生でも焼いても美味しいのはすぐわかる。

「ここは水族館なのよ。そんな事言っちゃ……」

白鷺がそう言った時だった。

「イワシですよ。イワシ。」

「美味そうですね」

「ふつくらしてますね」

「生で食べたり、酢でめたり……」

「焼いてもいいですよね……いくらぐらいですかね」

ゴム長靴に前掛エプロンを身に纏まとう、まさに典型的な魚屋の親父の様な格好をした男達5人が俺達の横でイワシの水槽を観察し始めた。

「そうですね、大小込々で1本250円くらいですかね。」

「でも、こんなに新鮮で脂がのってるからもう少し高くても……あ。」

俺はその魚屋の集団？の話に思わず反応してしまった。魚屋(?)の5人の視線が俺に集中する。

「……ん？あんた、リサちゃんによく一緒に来る兄ちゃんじゃないか？」

「……え？」

その5人のうちの1人、皺しわ枯れた声でメガネの中年男性が俺に声をかけてきた。

……あれ？この親父、確か築地か豊洲で見たような。

どこの店かは覚えていないが、リサがこの親父と何度か値段交渉をしていたのを思い出した。

「リサちゃんって、あのリサちゃんですか？」

「交渉上手でよく泣かされるって……」

「だけど美人で巨乳だから憎めないって……」

「ああ、そう言えばリサちゃんの荷物持ちしていた……」

どうも、うちのメイド様は市場その界隈で色々と有名らしい。

「ええ、あの時はどうも……」

俺はとりあえず無難に挨拶をして離れよう……

「兄ちゃんがいるってことはリサちゃんはいるのかい？」

その皺しわか枯れ声の親父しわかが周りをキョロキョロしながら俺に尋ねてくる。

「スイマセン、今日は仕事できているので……」

「リサちゃんいないかあ……もうちよつと高いかい？」

皺しわか枯れメガネの親父しわかは残念そうにした後、イワシを指さして言った。

「300円くらいですかね？……いや、これだと高いですよね」

個人的には、これほど良いイワシは300円出してもいいと思うが……イワシは大衆魚。300円は高すぎるかもしれない。

「兄ちゃん、それはちよつと高いですよ。」

「じゃあ間を取って280円だな。」

魚屋(?)の5人しわかは協議の結果、『イワシ1匹280円』と決定した。手板(魚屋で値段が書かれている木の板)にその値段を書く  
と水槽に張り付けた。

「花音、行きましよう。」

「……ふええ」

白鷺と松原さんは魚屋(?)の親父達と青年の怪しい集団しわかから逃げるように次の水槽水族館へ向かう。

……なんでここに魚屋の親父がいるか分からないが、一応今は護衛中だ。白鷺や松原さんから離れないようにしないと。

「じゃあスイマセン、俺はここで……」

俺は一言伝え、白鷺たちを追う様に足早に離れよう……

「まあまあ……」

「兄ちゃんもある程度分かるんだから……」

「そうですよ。それにリサちゃんのことも教えてくださいよ。」

「家じゃどんな感じなんですか？」

押し強い親父たちに囲まれ、俺は脱出することが出来なかった

さて、次の水槽は多種多様な魚がいる大型の水槽だった。

「わあ……沢山魚がいるわね。」

「あ……千聖ちゃん、あれ、エイだよ!!」

「あら……可愛いわね」

そんな風に魚を観察する白鷺と松原さんの横で……

「エイはヒレが貴重なんだよなあ……」

「エイヒレって酒の肴でありますよね？」

「兄ちゃん、それにフランス料理でムニエルにするんですよ。……これだと一万円ぐらいですかね」

「二そのぐらいじゃないですか？」

俺と魚屋(?)の5人が食べ方や値段を協議し、値段を書いた手板を水槽に張り付ける。

「見て花音!!これは何かしら!!」

「えつと……イヌザメみたいだね。」

白鷺と松原さんが一見食べなさそうな魚の観察を始めるが……

「イヌザメはフカヒレだな。」

「そう言えばすり身とか蒲鉾とかの材料にもなるんですよ」

「兄ちゃん、よく知ってますね。最近ヘルシーだとかで需要が上がってるんですよ」

「水揚げも減ってるし……このぐらいですかね」

白鷺と松原さんの目の前に値段が書かれた手板を張った。

「……………」

そのせいか……白鷺と松原さんの顔が引きつる。

……あれ?松原さんはともかく、あの白鷺の引きつった顔に……

俺はいつの間にか、白鷺のその表情で悦びを感じ始めていた。

「あ、あれがヨスジフエダイよね!!」

「そ、そうだね!!」

白鷺と松原さんが☒黄色と赤の鮮やかな魚☒を見るが……

「あれね、魚自体に脂があまり乗ってないんだよね」

「でも、淡白な白身で美味しいんですよ。」

「よ、良く知ってますね兄ちゃん。そう、フライとかにすると美味しいから、意外といい値段するんですよ。」

俺達がすぐにその魚の解説（食べ方、値段）をするため……

「……」

「ふ、ふええ〜……」

白鷺の顔が歪み、俺が愉悦を感じるという循環が発生していた。

「バイカルアザラシ、可愛いわね。（まさかこれは食べないでしょう）」

「そ、そうだね、千聖ちゃん!!」

白鷺達は絶対に食べないであろう生き物がいる水槽へ向かうが……

「バイカルアザラシってロシアでは毛皮や肉のための狩猟を許可しているらしいですよ。一回食ったことがあるんですが……」

「どんな味だった、兄ちゃん?」

……ふっ。残念だったな、白鷺。

「……」

「……ふええ〜」

白鷺が俺を睨むように見てくるが……その視線がいかにか心地よいことか。

「わあ〜!! 大きなクラゲ!!」

「こ、こんな大きなクラゲもいるのね」

特設展のクラゲでも……

「最近は大量に網にかかって邪魔だから、むしろ厄介者なんだよね」  
「あれ?……でも中華とかベトナム料理とかで沢山使われてますし、最近では刺身とかアイスクリームにいれるって聞いたんですけど。」  
「兄ちゃん、需要以上に獲れちゃうから面倒なんですよ。それに加工費がバカにならないんです。」

白鷺と松原さんの横でクラゲ(食用)の話をし、手板を張り付ける。  
「クラゲってこれを食べたの!?!」

「ふえ!?!クラゲって食べれたの!?!」

……なんだ、歪んだ表情が出ないのかよ。

二人は『クラゲが食べられる』という驚きの方が勝ったようだ。

さて、やっと魚屋の親父たちと分かれ、俺達は最近できた喫茶店へと入った。

俺は車の運転があるため……『カフェ・ロワイヤル』などの酒入りコーヒー・紅茶を泣く泣く断念し、普通の紅茶を頼んで啜った。

「久しぶりに花音と遊びに出たのに、何してくれるのよ……!!」

白鷺はテーブルの下で俺の足を蹴ってくるが……水族館での苦痛な表情の見物料と考えれば安いものだ。

「アハハ……。でも、色々と知ることができたし、よかったんじゃないかな、千聖ちゃん。」

松原さんは苦笑いをしながらも助け船を出してくれた。

「……でも、護衛の仕事はしていたのかしら? 私達から離れて……」

「い、いや。ちゃんとやってたぞ!!」

俺はあの魚屋(?)の5人と話をしながらも二人を監視し、何かあったらすぐに動けるようにはしていたが……仕事護衛をサボっていたと言われてもおかしくはない状況であったのは事実だ。

俺は睨んでくる白鷺から顔をそむけると、視線の先にメダカが

入った水槽が あった。

「……そう言えば、メダカは 佃煮 が有名だよな」

「!？」

俺は多少 魚屋の親父たち の影響を受けたのかもしれない。

数か月後、とある深夜番組において……

「投稿者さんの質問は……こういうことになります。『水族館の魚に魚屋さんが値段をつけると ●●●円になる』。……いくらになると思います?」

「水族館によつてはマグロが沢山いるところもあれば、全くいないところもありますから……分かんらん。」

サングラスをかけた男 は見当がつかなかったようだ。

「じゃあ見ていただきましょうか、こちらが確認のVTRです」

そのVTRに 魚屋少年 が映っていたそうだ。

## 2：東○Walker

東京、羽田空港第二ターミナルの外に、男四人の怪しい集団がいた。皆さん、おはようございます。我々は今、東京は羽田に来ております。ただいま朝の9時を回ったところです。」

その怪しい集団のうちの一人、鈴木藤と言う男がカメラに向かって説明をした。

「昨日拉致紛いの事を村田君にやったせいで、報復が怖いから急に場所を移動するって……なら何であんなことをするんだい?」

「アツハツハツハ!!」

そして和泉のボヤキ、藤崎がカメラの外で大声を出して笑う。

「まあ、あの後彼は許してくれましたし、東京武偵高校にも許可をいただいておりますから……。まあ、そんなことはさておき!!今回、和泉君は珍しく企画の内容を知っております。」



「そうなんです!!企画を聞かされてますけど……一考に内容が見えてないんで、やけにドキドキしております!!」

和泉は顔を強張らせながらカメラに向かって言った。

「まあ、そこまで勘繰らなくても大丈夫です。今回は楽しもうと、旅を満喫しようよ、そういう企画ですから。」

「そうは聞いております。だけどね、君達はそんな事を言っただけで何回僕を騙してきたんだい?」

鈴藤が和泉の緊張を解ほぐそうと、おどけて言うが……和泉はさらに警戒をした。

「とりあえず、最近は色々とお呼びなされてよく来ますが……実は我々、東京をあまり知りません。」

鈴藤は規格の説明を始めた。

「そりゃそうだよ、行ったところって言ったら空港かバスターミナルか、あと武偵高校ぐらいなもの」

和泉は疑いの目で鈴藤を見ながら相槌を打つ。

「ですので東京を満喫したいと、存分に楽しもうじゃないかと、そういう企画で御座います。……で、いつも和泉君はいつも何処へ行くか知らないでしょ?サイコロの出たところとか、海外もどこへ行くか知らされない……なので、和泉君が逝いきたい所に行こうと。和泉さんが全部行き先を決めてください!!」

鈴藤はそう言って「東○Walker」と「A1サイズの東京の地」を和泉に見せびらかす様に取り出した。

和泉はこの番組において『行先を自分で決める』など初めての事であつたため、目を白黒させている。

「疑ってるようだけど、君が全部決めるんだからね?」

ディレクター・藤崎がいまだに疑っている和泉を説得するかのよう  
に言った。後ろではカメラを構えた音野が首を縦に振うなづって頷く。

「まだ迷っているなら、この「東○Walker」で調べて貰もらってもいいですから。」

鈴藤はそう言って手に持っていた「東○Walker」を和泉に押し付ける。

「いや、疑ってはいましたけども、一応考えてきたので……」

「じゃあ、さっそくその場所をこの地図しずに印しるしていきましよう!!何かあれば、この☒☒東○Walker☒☒がありますから!!」

和泉は鈴藤や藤崎の言葉に☒☒嘘は☒☒無いという事を理解した。

「そうだねえ。僕が行きたいのは……」

そして鈴藤と藤崎に煽おだてられるまま、和泉は持ち前の話術を駆使しながら五つほど候補を挙げ☒☒A1サイズの東京の地図☒☒にシールを貼っていった。

「まあ、こんな所かな?」

和泉はドヤ顔をしながら全ての行き先を言い終えた。

「だいたい……行程70キロほどになりますかな?」

「じゃあ行きましよう。東京を☒☒たっぷり☒☒満喫しましよう。」

ディレクター・藤崎と鈴藤の言葉で、空気が変わった事を和泉は気が付いた。

「この雑誌にもある通り、☒☒歩Walkerく人☒☒でね。」

和泉は感づいた。今、自分の決めた場所を全てWa歩ikい行く企画だという事を……

「ハハハッ……た、タクシー!!!」

和泉の助けを求める声が羽田に響き渡った。

「村田さんスイマセン、送ってもらっちゃって」

「気にしないでいいぞ。……悪かったね、色々と巻き込んだりやって……」

「ええ、全く。」

今日、羽田発・熊本行きボの便で西住さんが帰るため、俺は彼女をビュート車に乗せ、羽田空港へ来ていた。

「そう言えば西住さん、なんか色々ボと悩みがあったみたいけど……」

大丈夫かい？なんか大会でやらかしたって聞いたけど……」

俺はそう言いながらターミナルの前に車を停めた。

俺はバックミラーで西住さんを確認すると、彼女は爽やかな笑みを浮かべていた。

「なんか私……下らない事で、ちっぽけな事で悩んでたんだなあって実感しました。村田さんとマクレイさんに巻き込まれましたけど、あの時の様に☒生か死か☒っていう訳ではなかったですし。」

「……いえ、ハイ。スイマセン。」

俺は謝らずにはいられなかった。

「あっ!!村田さんを非難しているつもりは……多少はありますけど、「あるのかよ。」

「それはありますよ。……でも、冷静に考えられるようになりました。それに、心配してくれる友達がいるってわかりました。」

ピコン!!

西住みほは自分のスマホを見た。スマホの通知には西住まほ・逸見エリカ・赤星小梅、そして東京で友達になった美竹蘭からもメッセージが来ている。

「じゃあ村田さん、送ってくれてありがとうございます。」

「ああ、気をつけろよ。また東京に来たら歓迎するぜ」

「あ、大丈夫です。村田さんに会ったらまた巻き込まれそうなので。」  
「おい!?!」

西住さんは笑顔を浮かべながらそう言い放って車から降り、ターミナルへ向かって行った。

「……行くか。」

俺はその姿を見送り、そして車を発進させた。

帰り道、俺は思わずため息をついた。

……今回の出費は痛いなあ。

今回の事件で、自分の高機動車<sup>愛車</sup>がお釈迦になったのを筆頭に、日本刀・38式歩兵銃・多数の銃剣にスマホが犠牲となった。

……銃剣は安物だし、軍の倉庫に38式の予備は大量にある。車もビュートをタダ同然で借りているからいいが……問題は日本刀だ。

市場で出回っている日本刀のほとんどが安物の鈍らだ。俺が欲しい『蛮用に耐えられて、切れ味抜群』な日本刀となると……安くても数百万は下らないだろう。(そもそも、そんな業物は出回る数がほとんどない)

……最悪、安物を~~使~~使い捨て~~て~~で使用するか？

再びため息をついた時、道路わきの歩道に良く見知った男四人組を見つけた。

……そういえば『和泉が決めた場所を~~歩~~歩いて~~行~~行く企画』って藤崎さんが言ってたっけ。

俺がそのことを思い出したと同時に、和泉さんは車道に向かって手を上げ、タクシーを呼び始めた。

……昨日の事もあるし、少しくらい<sup>からか</sup>揶揄つてもバチは当たらないだろう

俺はビュートを4人組の近く、カメラに映る様に停めた。

どうでい班の前に一台の車が止まった。

「おいおいおい!?何タクシー呼んじやってんだよ!?!」

「うるさい!!『東京をすべて歩く』だあ!?!馬鹿じゃないの!?!江戸時代じゃないんだ!!」

藤崎と和泉は声を荒げて口論を始めた。

「……あれ?これ、タクシーじゃないような……」

鈴藤は目の前に止まったレトロ……と言うよりは退廃的な車を見て疑問に思った。

ギイイイイイ!!

その退廃的な車の窓が開き、よく見知った人物が顔を出した。

「村田君!?!」

「和泉さん、徒歩での移動頑張ってください。俺は車で帰りますんで。じやつ!!」

村田はドヤ顔で言っつて窓を閉め、車でその場を去っていった。

「……ま、待てこの野郎!!」

和泉は顔を真っ赤にしてその車ををかけるがもう遅い。

「アッハッハッハ!!」

さあ、どうでい班は東京約70キロを徒歩で縦断できるのか!?

3：私の妹がこんなに怖いわけがない

家出(?)をした西住みほは東京で散々な体験をした後、飛行機で熊本に戻ることになった。

……村田さんの前で見栄張つたけど、やっぱり気まずいなあ。

西住みほは東京でのテロ事件に巻き込まれたせいで人並み以上<sup>の</sup>度胸を備えるようになったが……それでも、散々迷惑と心配をかけた実家に帰るのは気まずかった。

……また東京に行こうかなあ。でも、どうせまた何かの事件に巻き込まれそうだし……

西住みほはため息をつきながら到着ロビーへ向かうと……

「みほ!!みほ!!」

自分の名前が呼ばれたと同時に……誰かに抱き着かれたようだ。そのせいで口と鼻がふさがれたため、みほは必死になって抜け出そうとする。

「良かった……よかった……!!無事だったんだな!!」

「……!?!」

みほは顔だけ何とか抜け出すと……目と鼻を真っ赤にし、涙と鼻水を流す姉がいた。

西住みほにとって姉が涙を流す姿は数年ぶり……中学・高校では全く見なかった姉の醜態だった。

「いきなり居なくなつて……!!見つかつたと思つたら遠い所にいて!!しかもそこで事件が起こきて!!どれだけ心配したと思つているんだ、

みほ!!」

姉まほのその言葉を聞き、みほは抵抗する気力が失せた。何故だろう……姉まほが苦しいぐらいに力いっぱい抱きしめ、涙と鼻水を己みほの服に垂らす事に嫌悪感を抱くことができなかつた。むしろ、それが心地よい。

「ゴメンね、お姉ちゃん……」

「すまない……本当にすまない……」

姉まほは懺悔ざんげをするかのように……みほに謝り続けていた。

まほはひとしきり泣いた後、やっとみほを解放した。まほはいつもの通りの凜とした顔つきに戻っていたが、目と鼻は真っ赤に腫れている。

「全く……いいご身分ね、平日に東京観光なんて」

「そう言うエリカさんが一番心配してましたよね」

「な、なに言ってるのよ!!」

まほ以外にも逸見エリカや赤星小梅も来ていたらしい。

「心配させてごめんね……ん?」

みほは二人に違和感を覚えた。

☒家出(?)する前の西住みほ☒では全く気付かなかつたであろう、とても小さな違和感……。

東京で幾度も☒生きるか死ぬか☒という環境に置かれたために身につけた観察力と第六感がエリカと小梅に反応した。

……二人とも、体の一部をかばっている?

みほはズンズンとエリカの前まで歩くと、彼女のジャケットとシャツの裾すそを掴んで一気に持ち上げた。

「……ッ!?ちよ!?あんた何すんの!?!」

エリカの腹部が露出し、彼女のヘソと白い肌……そして、痛々しい青や赤の痣あざが多数確認できた。

「……!?!」

その様子を見ていた隊長まほはエリカのその姿を見て息をのんだ。痣あざを見て、何があつたのか理解したのだろうか。

一方、みほは握っていた裾すそを離すと、エリカは顔を真っ赤にしながら慌てて衣服の乱れを正す。

「くあwse d r f t g y ふじこ!!!」

エリカがギャンギャンと喚わめいているが……みほの耳には全く届かない。

……初心者なら、戦車の急停止・急発進で体をぶつけて怪我をする事はある。だけど、エリカさんがそんな事をやるはずがない。なら……

みほは膨れ上がる感情を押し殺し、何とか平静を保つ。そして回レ右の要領で小梅の方へ向いた。

「ヒイツ!？」

素人目でもわかるほど禍々しいオーラを放つ、無表情のみほがグツグツと近づいてくるため、小梅は思わず悲鳴をあげた。

みほは怯おびえる小梅の手を取ると、彼女の腕をまくった。

「……」

「……!？」

みほは無表情の顔がさらに固まった。まほは顔が真っ青になる。何故なら……小梅の腕にも、痛々しい痣あざが多数刻まれていたからだ。

……この痣も普通じゃない。やっぱり、二人とも……

……いじめ……この三文字がみほの脳裏をよぎった。つい最近まで、みほも引退した3年や2年生の一部にいじめられていたが……エリカや小梅まで受けているのは知らなかった。

……優勝を逃した原因の私はともかく、この二人まで被害が及ぶなんて……

みほは怒りよりも、『二人にまで被害が及び、その事を気づかなかつた』自分の情けなさで一杯だった。

……へえく。私ならまだしも、二人にまで手ヲ出シタンダア……

今までのみほなら泣き寝入りをしていただろう。しかし、東京で散々死にかけたせいで彼女の度胸は強化され、危機感や恐怖心は限りなく鈍化されている。

今の西住みほにとって銃や爆弾を持ったテロリストや変態

刑事□□に比べれば……上級生など何の脅威も感じない。

「……ククク、フフフフ、アハハハハ!!」

「……ッ!?!」

小梅の手を持ったまま急に笑い始めたみほに、迎えに来た三人は恐怖を覚えた。

「……み、みほ?」

(エリカ・小梅に目で急せかかされた)まほは意を決し、みほに声をかけた。するとみほはグルンツと首を回し、ハイライトのない濁った瞳でまほを見る。

「お姉ちゃん?」

「……な、なんだ?」

「最近、散々『いじめはダメだ』って叫ばれてるけど……それでも□□人をいじめる□□ってことは、それだけの覚悟を持ってやってるんだよね?」

「……。」

まほは……みほの変わりように驚き、動くことができなかった。

年明け早々、熊本のとある高校での□□いじめの動画□□がSNSにアップされ、大問題となった。

その事件と連動しているかどうか不明だが……とある□□戦車道の強豪校□□に所属する生徒のうち、□□卒業間近の3年生の大部分□□

□□2年生の一部□□□□とある1年の生徒□□が強制的自主的に転校することになったそうだ。

東京でテロがあつた翌年の春、とある少女は荷物を預けた後、熊本空港のロビーで連絡を取っていた。

「あ、蘭ちゃん?……うん、前にも言ったけど、そっちの方の学校に行くことになったんだ。まあ、そう言っても茨城だけだ。……今日には東京に着くから。……うん、演奏、楽しみにしてるね。じゃあ……」



とある少女はそう告げた後、スマホの通話を切った。

「村田さんとマクレーさんは……また何かに巻き込まれそうだしいや。お酒は送ってあるし。」

そろそろ搭乗時間である。その少女はボーディングパスを握りしめ、羽田行きの飛行機に乗り込んだ。

4：一方そのころの第二中隊

金は出す!!だから命だけは!!  
「?! 所以不要?人!!」

「タアン!!……バタツ

上海藍幫ランバンの本部にて、部屋に残っていた最後の一人が倒れた。

「クリア」「クリア」

神城中佐と鬼塚少佐の声が静かに響いた。

「我が国の宝物ほうもつを盗むどころか、国民の誘拐まで企くわだてておいて命乞いか。例え天が許してもこの希信が許さん……!!!」

辻大佐は汚物を見るような目でギロリと見た後、硝煙けぶる拳銃をしまった。

……ヤバい、マジでヤバいですよ!?

辻大佐が率いるHS部隊第二中隊、その第一小隊に所属する堀上メ等兵ガネ(昇進済み)は冷汗をかきながらパソコンを叩き、上海藍幫ランバンの資金を片っ端から奪っている最中だった。

HS部隊第二中隊は~~東京爆弾テロ事件~~及び~~刀剣窃盗未遂~~及び未成年誘拐未成年事件~~の~~報復として、上海藍幫ランバンの壊滅に乗り出していた。

その結果、上海藍幫ランバンは殲滅。その日、本部にいた人間は全て動かぬ肉塊となっていた。

……確かに兵部省からは『上海藍幫ランバンの壊滅(再編成が不可能になるほどの被害。およそ5割の損耗)』という命令が来ていますが、『殲滅皆殺し』なんて聞いてないですよ!?

堀上等兵は『周囲の警戒』と言ってこの場を離れた狙撃手：岩下兵長を恨んだ。

……クソツ!! ストツパー役の村田大尉や田中曹長がいないから、上官達の暴走を止められない!!

極東戦役という戦争であり、しかも敵が最初にルール破りをしてきたとはいえ、殲滅を行えば……戦後、面倒なことになるのは明らかだ。

「あ、あの……」

堀上等兵は意を決し、暴走する上官達に進言することにした。

「……民間人がいた可能性もありますし、殲滅は……」

上官三人の視線が堀上等兵に集中する。

「何言ってるんだメガネ? やられたらやり返す当たり前のことだろうが」

鬼塚少佐は常識を問われたかのような、キョトンとした顔で言った。

「民間人とはいつでも、ここにいるのは藍幫ランバンの構成員や関係者です。こいつらがやった無差別テロではないです……そもそも藍幫ランバンは犯罪組織です。ジュネーブ条約に値しません。」

神城中佐は鋭い目をしながらニコニコと笑顔を浮かべ、宥めるように言った。

「日本国民に害を与え、我が国の宝を奪い、それに加え婦女子を誘拐し慰め物なだにしようとしていた奴らだ!! 兵部省の命令なんぞ生ぬるい!! 中国の文化と歴史を尊重し、三族皆殺し、九族皆殺しにすべきなのだ!!」

辻大佐は顔を真っ赤にして充血した目をひん剥き、メガネを湯気で曇らせ、唾を飛ばしながら……まるで狂信者が演説をする様に、声高に言い放った。

堀上等兵はそんなヤバい上官達の雰囲気負け、現実から逃げるようにパソコンをさらに強く・早く叩き始めた。

「堀上等兵、責任は我々が取るんですから……君は己の職務に努めてください。あ、電子系の証拠の隠滅も頼みますよ?」

神城中佐は人を殺せそうな鋭い視線をしながら、声色は優し気に言った。

……村田大尉は無理でも、せめて田中曹長!!早く戻ってきてください!!

その日、上海藍幫は人的に、資金的に、物理的に消滅した。

5：年上の戦妹<sup>アミカ</sup>

護衛任務が終わり、俺はやっと普段通りの生活を送り始めたのだが、俺は初日でグロッキーになった。

……やっぱり通学ラッシュはキツイなあ

普段は車に全員を乗せての通学だった。しかし、高機動車<sup>俺の愛車</sup>が廃車になり、ビュート<sup>ポロ車</sup>では全員を乗せることができないため、渋々バス通学になった。

……こんなのを毎日とか流石にキツイ。だからと言ってビュート<sup>ポロ車</sup>だと誰かを置いて行かなきゃならないし……

俺は自分の机に倒れ込んだ。

「おいイブキ、そんなに顔を青くしてどうしたんだ?」

そんな俺が気になったのだろう。あのテロ事件の時に『海パン刑事<sup>デカ</sup>のイチモツをヒステリアモードでじつくり見てしまった』せいか、少しやつれたキンジが心配してきた。

「……いやな、前の車が廃車になったからバス通学になったんだが……通学ラッシュの洗礼を受けて……」

「日本のラッシュは酷いらしいね。大丈夫かい?」

俺は机の上でダラ〜と体の力を抜きながら言った。するとワトソン<sup>エツレ</sup>（男装）が来て、俺の背を擦った<sup>さす</sup>。

「あれ?イブキって自転車を持ってたよな。」

……ああ、そう言えばそんなのもあったな。

「自転車は数ヶ月前に二トに貸したら、近代アート<sup>アサルト</sup>になって戻ってきたよ。強襲科棟の前に置いといたらこうなってるんだと。」

キャラバン・ワン  
修学旅行Iの帰り・新幹線で曹操姉妹と戦った数日後、考古学の教授による冒険譚の映画を見た影響か……二トが珍しく『射撃訓練をしたい』と言い出し、自転車に乗って強襲科棟<sup>アサルト</sup>へ向かった。そして数時間後、強襲科棟の前に止めていた自転車は、見事なオブジェに変化していたそうだ。

なお、後日俺は教務課<sup>マスターズ</sup>の許可を得た後、犯人達<sup>一年達</sup>を超長距離遠泳<sup>島流しの刑</sup>に処したのだが……閑話休題

「どうせ新しく買いなおしてもすぐに壊れる<sup>壊される</sup>と思うと……なあ？」  
「まあな……」

キンジは俺の前の席に座り、背もたれを抱き着くように座った。  
「でも必要なら買うしかないんじゃないかい？」

「だよなあ……」

ワトソンが現実を突きつけてきた。

そんな風に話していると……

「あれ？村田君、遠山君、そんなに疲れたような顔をしてどうしたんだい？」

不知火はそう言いながら自分の席にカバンを置くと、俺達の席に近づいてきた。

……そう言えば不知火もバス通学、しかも俺よりも遅いバスなのに……

不知火の制服はアイロンをたった今かけたかの様にパリツとしていた。その制服に清涼感漂うイケメン顔……こいつがモテないはずがない。

俺は思わずため息をついた。

「ああ……久しぶりのバス通学でやられてな……」↑イブキ  
「不知火も任務で離れてたから……バスは久しぶりじゃないか？」↑  
キンジ

「その代わり山手線に乗ってたからね、ここの比じゃなかったよ……。  
そう言えば二人は……」↑不知火

「へえ〜村田、君はアイドルの護衛を……へえ〜!!」↑ワトソン  
俺達三人は会話が弾んでいった。

談笑を続けているとホームルーム数分前になっていた。その時、廊下からドタドタドタつと大きな足音が聞こえてきた。

バーン!!  
教室の扉が勢いよく開き、武藤が顔を真っ赤にして教室に入ってきた。

「おい!!お前ら聞いたか!?一年に転校生が来るらしいぞ!?しかもボン・キュツ・ボンの☒☒パツキン美女☒☒らしい!!」

武藤は大声に出し、息を荒げながら俺達が集う席へ直行した。

「なんだあ〜、武藤は☒☒パツキン美女☒☒より☒☒黒髪美女☒☒の方が好みじゃないのか？」

俺は机に上半身を投げながら、ボケーツとしながら言った。

「そんなのどうだっていいだろ!!それよりもこの時期に☒☒パツキン美女☒☒だぜ!?!気にならないか!?!」

「だけどなあ……☒☒この時期☒☒に転校だぜ?絶対何かしらの問題を持つてるに決まってる」

俺はウダあ〜と起き上がりながら言った。

武偵高校でも、転校生は基本的に4月〜5月上旬・9月・1月にやってくる人が多い。

要は学期や長期休暇の節目に来るのだが……その時期を外して転校してくる生徒は何かしらの面倒事を抱えていることが多いのだ。例としては、ジャンヌ(6月上旬)・ワトソン(10月上旬)など……

「この時期に転校か……」

「僕の方も情報が来てない……」

キンジとワトソンは顔をしかめながら言った。おそらく  
極東戦役の関係者かどうか疑っているのだろう。

「でも、情報はあっても困ることはないんじゃないかな。武藤君、どう  
いう子が来るのか教えてよ。」

不知火は苦笑しながら……しかし、鋭い目つきで武藤に尋ねる。

「何でもドイツからの転校生だそうで、飛行機がメインの車輛料らしい。それから……」

武藤は俺達だけに聞こえるように小声で、しかも早口で教えてくる。

……あれ？この人物、なんか知ってるような気が……

俺はその武藤の情報を聞けば聞くほど冷汗が噴き出てきた。気分  
が悪いのは……ラツシュの影響だけではないと思う。

ガラガラガラ……

「ホームルームを始めるので席に付いてくださいーい」

「……じゃあ、ホームルーム終わってからな!!」

高天原先生が教室に入ってきたため、武藤は話すのを止めて自分の  
席に戻っていった。同じようにキンジや不知火・ワトソンも自分の席  
へ戻っていく。

……ま、まあ、流石にハンナ・ウルリーケ・ルーデルではないはず  
だ。そもそもハンナは俺よりも年上のはず……武偵高の1年に来る  
はずないか。

俺は頭を振り、転校生のことを忘れようとした。

「皆さん、修学旅行・IIが近いので準備を忘れないてくださいね。  
毎年、飛行機の手ケットを忘れる生徒が多いので注意してください。」

高天原先生は注意事項が書かれた紙を読み上げていた。

……そうだ、チケットやホテルの手配は学校側では一切やってくれないんだった。チーム全員分のをリサに頼んでおくか？

俺はそんなことを考えながら頼杖について窓の外を見た。

ブロロロ……

外ではプロペラ機が低空で大きく旋回していた。

……あ、あれ？あの機体って……

俺は暖房が多少効いた教室にいるのに寒気がする。

ブロロロ……

プロペラ機は旋回を終えた後、ゆっくりと近づいてくる。そのおかげで……その特徴的な固定脚、液冷エンジン特有の鋭いカウル、逆ガ  
ル翼などが良く観察できる。

それらの特徴から……あの飛行機はJ u 8 7としか考えられない。

「お、おい!?あれはなんだ!？」

「せ、戦闘機!？」

「J u 8 7 G—2……いやG—1 だな。操作縦性が悪い。つて有名なのによく乗りこなせてる」

他の生徒達も気が付いたようで、高天原先生の注意を無視して窓にへばりつく。

ブロロロ……!!

翼に鉄十字を描いたJ u 8 7は校舎前の道路に見事な着陸を決めた。

しばらくするとJ u 8 7を操っていたパイロットが風防から這い出て地面に降り立ち、飛行帽を脱いだ。癖のない長い金髪零れ落ちる。

そして鼻の上には横一文字の傷痕があるのだが……その傷すらも芸術に思える、凛々しく美しい顔が露になった。

間違いない……アイツはハンナ・ウルリーケ・ルーデル。『高校生活

一学期編 大量破壊兵器は使っちゃいけない……』で登場した

魔女連隊・魔女連隊空軍所属の、アカを叩くのが趣味の『戦闘

狂の女性パイロット』だ。

……いや、なんでこいつが!? いや待て……こいつが転校生と決まったわけではない

俺はハンナと目があつたような気がした。するとハンナはニヤリと笑った後、俺達のいる校舎へ走り出した。

「皆さん? 席に付いてください」

「「「「……?!」」」」

散々注意しても生徒達が席に戻らないせいか……高天原先生は笑顔のまま、ねっとりとした殺気を周囲に放ち始めた。

席を立っていた生徒達は慌てて席に戻る。その事を確認した高天原先生は殺気を放つのを止め、笑顔で注意事項を伝える。

……何かすごく嫌な予感がする。

しかし、俺はハンナの事で頭がいっぱいだつた。

「ではホームルームは終わりです。」

ドタドタドタ……!!!

高天原先生はそう言つて教室を出ると……入れ替わる様にハンナが入ってきた。

ハンナは教壇に上がつて教卓に手をつき、そして猛獣の様な瞳をギリギリと光らせて教室を見回す。

「君は……ルフトヴァッフエ魔女連隊空軍のハンナ・ウルリーケ・ルーデル!!」

ワトソンはいきなり現れたハンナを警戒し、いつでも銃を抜ける体勢を作つた。

「お前はリバティイ・メイソンの小僧か。……上層部は散々お前に煮え湯を飲まされたそうだな。」

するとハンナは得物を見つけたとばかりに目を輝かせ、猛獣が獲物に近づくようにゆつくりと、確実にワトソンへ近づいていく。

……あ、上手く行けば逃げられるか?

俺は~~影~~の薄くなる技~~影~~を使い、教室を出ようとするのだが……

「私はワトソンお前なんぞに興味はない、退け……イブキ!!どこへ行こうというのだ!」



ハンナはいきなり進行方向を変え、チーターの様に急加速して俺へタツクルを決めて押し倒した。

「な、なんで俺が分かてて……」

「まばた瞬きすらせずにイブキを見ていたからな。存在感を薄くしようが無駄だ!!」

ハンナはとても嬉しそうなどうもう獰猛な笑顔を浮かべるとスクつと立ち上がり、俺の襟首を掴んだ。猛獣が狩った獲物を引きずって移動するが如く、ハンナはそのまま歩き始めた。

「ハハハツ!! 久しぶりに会えてうれしいぞ?! 任務はすでに受領してある!! さあ、出撃だ!!」

「いや、今から授業なんですけど?! ていうかなんでここにいるんだよ?! 年齢的に大学生だろ!!」

俺は必死に抵抗するが……どこからそんな馬鹿力が出ているのだろうか、全く抜け出せそうにない。

その様子を見ていた生徒たちは触らぬ神に祟りなしと俺とハンナを無視し、授業の準備を始めた。

「向こうドイツの高校には通っていたのだがルフトヴァアツフエ魔女連隊空軍での活動が楽しくてな!! 出席日数が足りずに中退してしまった!! だがそのおかげでイブキと同じ学校へ通うことができる。学年は違うが、なんと幸せな事か……。ああ、学力の方は問題ない。ルフトヴァアツフエ魔女連隊空軍で学んでいたからな!!」

「お。お前、ルフトヴァアツフエ魔女連隊空軍は……レギメント：ヘクセ魔女連隊はどうしたんだよ!!」

ハンナは俺を引きずったまま、スキップでもしそうなくらい速足で校舎を出た。

「ルフトヴァアツフエ魔女連隊空軍は辞めたぞ? なぜか追手が来るせいで日本へ行くのが遅れたが……まあいい、行くぞ!!」

「へぶつ!!」

ハンナはスツーカJu87の前までくると俺を後部座席に投げ込み、そして当の本人は操縦席に入り込んだ。

俺が慌てて体勢を立て直し、脱出しようとしたときには……スツーカJu87はすでに地から離れていた。

「イブキ？逃げたらどうなるか……分かるな？」

ハンナは上半身をひねり、操縦席から俺を嬉しそうに見ていた。彼女の手には拳銃ルガーが握られており、銃口を俺に向けている。

「……はい。」

俺は抵抗する気が失せた。

「ハハハッ!! さあ、任務はたんまりある!! 戦闘デイトを楽しもう!!」

俺はハンナと数日間一緒に任務をする羽目になったのだが……あまりの激務のせいで記憶に無い。その記憶がない時にハンナは戦妹アミカの申請をしていたそうで……いつの間にか俺の戦妹はハンナとなった。

イブキが拘束された翌日の事……

「おいお前!! イブキにいを独占してんだよ!!」

「お前がイブキの義妹か。私は将来の義姉あねだ。気軽にハナハンナ義姉おねえちゃんちゃんと呼んでもいいぞ?」

「は? 何言ってるんだよお前……死にてえのか?」

かなめは義兄イブキを取り返すべく実力行使に出たのだが……子猫かなめが猛獣ハンナに勝てるはずがない。

ハンナは小動物と戯れるかの様にかなめの相手した後、猫を摘まみ上げるように義妹かなめ(仮)の襟首を掴んで引きずり始めた。

「ハハハッ!! 義理とは言え姉妹だ!! 仲良くしようじゃないか!! とりあえず互いを知るために……出撃だな!! さあ、行くぞ!!」

「ふ、ふざけるな!! イブキにいを返せ!! 離せえええ!!」

かなめは手足をジタバタさせて抵抗するのだが……ハンナはその行動を『もつと構って欲しい』と言う意味でとらえていた。

ハンナは必死ワクワクに抵抗するかなめと一緒にJ u 8 7の前まで来ると、後部座席に座っているハナ半ばなか廃人化ハナしたイブキを引きずり下ろし

た。そして、ハンナはその空いた後部座席にかなめを投げ入れ、操縦席に飛び乗り、J u 8 7<sup>スツーカー</sup>を離陸させた。

「いやあああああ!! 助けて、イブキにい!!」

「ハハハッ!! とりあえず東京にいるテロ組織や準テロ組織の壊滅に行くぞ!!」

その後、卒業に必要な単位をたった数日で取得したハンナと廃人と化した義兄妹<sup>イブキとかなめ</sup>がいたとか……

## 極東戦役：香港編

酒は飲んでも飲まれるな……

「イブキさん、またテロと戦ったと聞きましたが……無事でよかったですわ。」

「全くだ、何度死にかけた事か……ああ、紅茶が美味しい。」

俺は聖グロリアーナ女学院の学園艦にあるクラブハウスで紅茶を飲んでいた。

数日前、俺はハンナに拉致され、休み無しで出撃させられた。

そして今日の朝、やつと俺はハンナから脱走すると今度は蘭豹に拉致され、とある役人に会うことになった。

その役人は俺に小言を言いながら感状を渡した後、恭しく一振の刀を机の上に出した。そして少しだけその刀を抜き、刀身を見えるようにおいた。俺はその刀を見て思わず息をのんだ。

金茶色の鞘や柄はおそらく最近作られた物であろう。しかし、『質実剛健』という文字を体現しているかの様に……あくまでも実用性を重視しつつも、うつつすらと見事な装飾がされている。

それよりもすごいのはこの刀身だ。前章でサイモンが使用した『三日月宗近』に引けを取らない、重々しいオーラを放っている。

その役人曰く、

「あるお方が今回の事件を解決した事を感謝している。謝礼と言ってはなんだが、この刀を貸し出す。お前が死んだら返せよ？（意訳）」

俺は面倒事に巻き込まれたので、刀の方は辞退させてもらおうとしたのだが……その役人はニコニコ笑いながら辞退するなよ？  
兵部省からの命令書を突きつけてきた。そのため俺は恐縮しながら刀をいただく事となった。

俺はその役人が帰るのを見送った後、聖グロの田尻凜からお茶会

の誘い☒☒の電話を貰った。そこで俺は交友現実から逃げを深めようと☒☒横浜港に入港中の聖グロリアーナ女学院学園艦☒☒へ飛び、今があるという訳だ。

なお、この部屋にいるのは俺を含め4人。『閑話・高校生活2学期編 BOKO Hard 2.5』で関係ができたダージリン・オレンジペコ・ローズヒップだ。

ついでに、俺をへりで連れてきてくれた武藤は……校庭で戦車道の操縦手達の指導をしている（鼻の下が伸びているのはご愛敬あいぎょう）。

「良かったらお代わりもありますよ。」

「あ。じゃあ貰おうかな。……やつぱり茶葉が違うからなあ」

俺は紅茶を飲み干すと、橙辺夕子は俺のカップに新たな紅茶を注いだ。

武偵高の寮でもリサの入れた紅茶を時々飲むが、ここまで上質な茶葉を使っていないため……軍配は聖グロに上がる。例えるなら、リサの紅茶は『そこらの材料でうまい料理を作る大衆食堂』、聖グロの紅茶は『材料からこだわる超高級レストラン』だろうか。

「あ!!次は私が!!わたくしが注ぐわ!!……注ぎますわ!!」

「ろ、ローズヒップさん?お茶の入れた事はまだ……」

「アツサム様に説明は受けましたので大丈夫よ!!……大丈夫ですわ!!」

矢場蘭は元気いっぱいな小学生の様に勢いよく手を上げて主張し、オレンジペコは困ったような顔をした。

「こんな格言を知ってる?『始めさえすれば、もう8割は成功したのと同じだ』」

「アメリカの映画監督、ウディ・アレンですね」

すると、ダージリンはティーカップを持ちながらすまし顔でそう言った。

「何でも☒☒最初の一步☒☒が大切な。イブキさん、いいかしら。」

ダージリンは笑顔で俺に尋ねてきた。ローズヒップは不安そうに

俺を見てくる。

……まあ紅茶をクソマズく淹れたり、木曜どうでいの和泉の料理の様な毒物にはならないだろう

「ああ、これを飲み干したらぜひ淹れてもらおうか」

俺はそう言つてカップを持ち上げると、ローズヒップはバラが咲いた様な大きな笑顔を浮かべた。

「そう言えばイブキさん。本当は数日ほど早く招待する予定だったの。でも港が混乱していて……なんでも、東京港の航路近くに貨物船が沈没したらしいわ。」

「へ、へえ……そ、そうなんだ。」

ダーズリンは申し訳なさそうに言い、俺はその事実を知つて動揺した。

……その沈んだ船つて、たぶん俺が空き地島に乗り上げさせた船の事だよな。まあ、いくら航路から外しても狭い東京湾じゃ船の往来の邪魔になる。なるほど、役人達が俺のことを恨めしそうに見る理由が分かった。

「い、いや。もう少し早かったら参加できなかったから……沈んだ船とその操舵手に感謝しないとな。」

「そう、それならよかったわ。」

俺は誤魔化すようにケーキスタンドのサンドイッチを取り、それを一口で平らげた。そして品は無いが、紅茶を一気に胃の中に流し込む。

……ああ、紅茶が美味しい。気分も落ち着く。今度いい茶葉を買つてリサに淹れてもらおうかな。

俺は飲み干したカップをソーサーに置くと、ローズヒップは俺のカップとソーサーを奪い取った。そして嬉々として紅茶を入れる準備を始める。

「ローズヒップ？イブキさんはお酒を入れた紅茶が好きだそうよ。」

「マジですの!?!ただいま準備いたしますわ!!」

ローズヒップは蹴破る様にクラブハウスのドアを開け、バタバタバタつと廊下を走っていった。

ダージリンはそれを確認すると、オレンジペコに目で合図をした。するとオレンジペコは頷き、部屋の片隅に置いてあったカートを押してきた。

「ローズヒップのを待っている間、これでもどうかしら？」

そのカートには見事な切子細工が施された瓶とグラスがそれぞれ5〜6個ほど置いてある。そして、その瓶には琥珀色や無色透明の液体が入っていた。

「聖グロ特製のウイスキーにジン、ラムです。こちらがノンアルコール、こちらが通常の物です。」

「へえ〜……は!？」

オレンジペコの説明を聞いていた俺は驚いた。

……ノンアルコールはともかく(プラウダのノンアルコールウオツカ等があるため)、普通のアルコール入りつて……二人とも未成年、どうやって手に入れたんだ!？」

俺はダージリンの方へ振り向くと悪戯が成功して喜ぶ少女様にクスクスと笑う彼女がいた。

「紅茶にブランデーやウイスキーを入れるのを知っていて? 聖グロでは比較的容易に手に入りますの。まあ、紅茶に入れる時はアルコールを飛ばすのだけれど……。驚いた顔が見れてよかったわ。」

「本当は最後に出すつもりだったんですけどね。」

ダージリンの説明に、オレンジペコが補足を加えた。

……ん? じゃあ何で出すのを速めたんだ? ……ああ

おそらくだが……『俺を酔わしてローズヒップの入れたお茶の味を誤魔化そう』という魂胆だろう。

ローズヒップ初めての紅茶しかもあの性格となれば……さつきまでの極上の紅茶に比べたら雲泥の差の物が出来上がるに違いな

い。なのでその味を誤魔化すため……ついでのに~~その粗相~~を酒に流せと……

などと下らない事を考えた後、俺は「それじゃ遠慮なく」と琥珀色のビンを掴んでグラスに注いだ。そしてグラスを持ち上げて臭いをかぐと……スコッチの様な芳醇ほうじゆんなピート香（煙の様な香り）を感じる。どうやら、この瓶はウイスキーのようだ。

香りを堪能した後、このウイスキーを少量口に入れると……口の中でほのかな甘みがじんわりと広がってくる。

……これ、絶対まあまあな値段する奴だぞ!?

「ダーズリン、これttt……」

「お気に召したようでよかったですわ」

ダーズリンが食い気味に言い、俺の言葉を塞ふさいだ。

……値段や入手方法は聞くなってることか？

「……でも、これだけの物を用意してくれてありがとう。」

「良かったらもう一本あるの。持って行ってくださいな」

バタバタバタ……バーン!!!

「お待たせいたしましたですわ!!!」

ダーズリンが笑顔で答えたと同時に、酒瓶を抱えたローズヒップが勢いよく部屋に飛び込んできた。

さて、俺達はローズヒップが紅茶を入れる姿を観察しているのだが……どうも怖い。

普通、最初にカップとポットに湯を注ぎ、それらを温めるのだが……ローズヒップはグラグラと湯が沸いた大鍋にカップとポット、それにソーサーまでも乱暴にぶち込んだ。

「な、何やってるんですかローズヒップさん!？」

「この方がすぐに温められて、いいと思ったのございますですが……」

「……取っ手まで熱くなって持てなくなりませよ」

「なるほど……流石オレンジペコさん」



そんなローズヒップとオレンジペコのコントの様な掛け合いをダーズリンは笑いながら見ているのだが……俺は心配でたまらなかつた。

……だ、大丈夫。たかが紅茶だ。死んだり病気になつたりしないはず……

紆余曲折がありながらも何とかカップやポットを温めた後、ローズヒップは俺のカップに酒（色から考えてブランデーかラム）を注ぎ始めた。その時だった。

ドタドタドタ!!バーン!!

「ダーズリン!!~~!!~~紅茶の園~~!!~~に殿方を入れたというのは本当ですか!!」

「あら、アツサム」

「……!?（ビクツ!!）」

長い金髪の少女が扉を蹴破るかのようにして部屋に入ってきた。そしてダーズリンを見つけると一気に近寄り、詰問しはじめた。

オレンジペコと俺はドン引きしながらそれを見ていると……

「あわわわわ……」

ローズヒップの慌てた声が聞こえた。俺はダーズリンと金髪少女から目を離し、ローズヒップの方へ振り向いた。そこには、酒をカップに目一杯……どころか完全に溢れるほど注ぎ、慌てるローズヒップがいた。

ローズヒップは二三回深呼吸して何とか落ち着くと、新しいカップを4つ取り出した。そしてそれらのカップにさつき注いだ酒を分配していく。

「もつたいいですわ」

……ちよつと待て!!ソーサーに零れた分まで入れるなつて!!もつたいいつて気持ちはわかるけど!!

そしてポットに大量の茶葉とお湯ぶち込んでシエイクし、真っ黒になつた紅茶をカップに注ぎ始めた。

……と、とりあえず死人病人が出る紅茶じゃないな。

「そもそも誰を呼んだのですか!!」

「村田イブキさんよ。アッサムも知っているでしょう。そこにいるわ」

「……ん?」

俺は名前を呼ばれたのかと思い、ダーズリンたちの方を振り向くと……その金髪ロングの少女と目が合った。

「……」

すると金髪ロング少女は目が合ったまま固まってしまった。固まっている間、彼女の顔が真っ赤になっていく。

「あ……どうも」

「……ご、ごきげんよう。アッサムと申します。村田さんの事はかねがね……」

俺はこの状態に耐え切れず、思わず声をかけた。するとその金髪ロング少女は絞り出したような声で挨拶をし、顔を赤から青に変わる。

アッサム(?)と言う少女は再びダーズリンに詰め寄った。

「……何故私に一言も無しに呼んだのですか!!とんだ赤っ恥をかいちゃいないですか!!」

「黒森峰への情報収集から帰ったばかりでしょう? 疲れているかと思っただけで言わなかったのだけだ……」

「だからと言って……!!」

再びアッサム(?)が詰問を始め、ダーズリンが受け流す。そんな時だった。

「できましたすわ!!ダーズリン様、アッサム様、オレンジペコさんもお飲みになってくださいですわ!!」

紅茶を入れたカップを乗せたお盆をローズヒップはテーブルへ叩きつけるように置いた。

……で、一旦全員席に付いてその紅茶を飲んだわけだけど……

ローズヒップの入れた紅茶の味は特段悪くはなく、むしろ大量の酒に濃い紅茶がマッチして意外と美味かった。美味かったのだが……

「~~~~♪」

「あの時、心配じだん”でずよ”おくく!!」

「グオ〜……グア〜……（イビキ）」

「ウヒヤヒヤヒヤヒヤ!!」

ここの淑女たちにはアルコールはまだ早かったようで……ローズヒップの紅茶を飲んで十数分後、優雅なお茶会から乱痴気騒ぎの酒宴に変わってしまった。

ダーズリンは俺の膝の上に座って鼻歌を歌いながら貧乏ゆすりをし、俺の分のローズヒップ特製紅茶を啜っている（自分のはすでに飲み干した）。

オレンジペコは俺の背中に抱き着き、顔から色々な液を流して俺の服を汚していく。

アツサムさんはテーブルに足を置き、大笑いしながら瓶に入った酒をラツパ飲みしている。

なお、この阿鼻叫喚の状態を作った張本人は……ローズヒップ床で爆睡していた。

……ローズヒップ!! テメエ何を入れたんだよ!!

ローズヒップが入れた酒は色から考えてブランデーやラムの一種。それらは普通、度数が40%ほどであるため……たった一杯（しかも紅茶割り）でこれほど酔うなんてありえない。

「アハハヒヤヒヤヒヤ!! もうない〜」

切子細工のビンに入った酒をすべて飲み干したアツサムさんはヨロヨロと立ち上がり、ローズヒップが持ってきた酒瓶を取ってグビグビとラツパ飲みを始めた。

その酒瓶には『LEMON HART 151』というラベルが張ってあった。

……つて151プルーフ（度数75.5%）!?何持つてきたんだよ!?

なるほど、確かにそんな物を飲ませたら一発でここまで酔うはずだ。

で、そんな酒をグビグビ飲んだアツサムさんはいきなり椅子に倒れこむように座った。俺は急性アルコール中毒を心配したが……アツサムさんは再び笑い始め、またその酒を煽<sup>あお</sup>っていく。

「……むく!!」

ドスツ!!ベキツ!!

俺が心配してアツサムさんを見てると……俺の膝上でちよこんと座っているダーズリンが唸った。それと同時に彼女は足を振って俺の脛<sup>すね</sup>を蹴り上げ、顔面にヘッドバットをぶち込んだ。

ダーズリンは小さな子の様にすっぽり入るといふ事はなく……彼女の頭頂部は俺の鼻の上ぐらいの高さにある。その状態でヘッドバットをしたら……

「ぐお……!!」

俺は鼻に殴られたかのような衝撃が来た。また、蹴りも脛<sup>すね</sup>……と言うよりは~~××~~弁慶の泣き所~~××~~に刺さる。

「アハハハツ!!ゴホツ……ゴフツ!!」

そして俺が苦悶の表情で耐えている姿を見て咳き込むほど爆笑するアツサムさん……

「もっ、う、無茶ばじな、い、でぐださい!!」

そんな事はお構いなしに、泣きついてくるオレンジペコ……

「……」

完全に夢の世界の住人になったローズヒップ……

悲しいことに、この部屋にはこの状況を変えてくれる人物はいない。

……な、何とかして脱出しないと……

「だ、ダーズリン？そろそろキツイからどいてk……」

「ヤッ!!」

ダーズリンは小さな子供の様に強く拒否した。そして俺の腕を取ってあすなる抱きの様な位置に置き、鼻歌を歌い出した。

「そろそろ痺れてきたからd……」

「ヤッ!!」

ドスツ!!ベキツ!!

「ツ~~~~!!」

鼻と弁慶の泣き所にクリーンヒット。俺の鼻から血が出てきた。

おそらく、傍目<sup>はため</sup>から見れば『鼻血を垂らす変態』と『そいつの膝に座る顔が赤い美少女』……。速攻で俺は逮捕されるだろう。

すると、俺の顔を見て真っ青になったオレンジペコはやつと背から離れ……酒（ジン？）の入った切子細工の瓶を持ってきた。

「怪我ばもっうっじなっいで下ざいっ!!」

「ゴフツ!?ゴボツ!」

そして、その瓶を俺の鼻に押し当て、ボトルの水で傷口を洗うが如くドバドバと酒を流し始める。本来ならジュニパーベリーとその他の香りが複雑に絡み合うのを感じるのだろうか……直接鼻に流し込まれるせいで痛みとアルコール臭しか感じない。

「アツハツハツハ!!私のも飲めく!!!」

アツサムさんはフラフラと立ち上がり、手に持っていた酒瓶（LEMON HART 151）を俺の口にねじ込んだ。

……待て!!流石に鼻と口からの酒攻めは耐えらr……

俺は……そこからの記憶がない。

その20分後……

「手持ちの小銃に刀が豆腐を切るが如く真っ二つにされ、絶体絶命の大ピンチ!!そこで俺は近くに落ちていた高濃度のラムをサイ

モン~~ク~~に浴びせ、木箱から飛び出ていた名刀を持ってサイモンと鏢迫り合いとなった!!刀と刀がぶつかり合い、火花が舞う!!その火花が着火剤となり……サイモンを火達磨にさせたんだ!!」↑イブキ

「わあく!!!」↑ダーズリン

「危ない、事ばやめ、で下さい!!」↑オレンジペコ

「アハハハ!!もつと飲めえくく!!なんか熱くなってきた……」↑アツサム

「……（ぐおおく……）」↑ローズヒップ

その後、衣服がはだけた少女達と一緒にいびきを掻く男が発見され、危うく警察沙汰になるところだったとか……

俺はヨロヨロとヘリから降り、やっと東京武偵高・車輛科棟近くの滑走路兼ヘリポートに足をつけた。

「ああ……クソツ。頭が痛いし気持ち悪い……。武藤、もつと揺らさずに操縦できないのか?」

「一切揺れない乗り物はねえよ。結構快適に飛んだはずだぜ?」

俺は武藤の言葉を聞き流しながらアスピリン錠剤を口に投げ入れ、ペットボトルの水を飲み干した。そして俺は近くのゴミ箱へ空のペットボトルを投げ……外した。

「……」

俺は無言でそのペットボトルを拾いに行った。

「でもあそこまで酔うなんて珍しいな。それにすごく酒臭いし……。何があったんだ?」

武藤は近くの後輩に水を持ってこさせ、その紙コップを俺に渡してきた。俺はそれを受け取り、一息で飲み干した。

「鼻と口から消毒薬クラスの酒を流し込まれたんだよ。」

「……いや、本当に何があったんだよ!? あのお嬢さんたちが!? そんなことを!」

「武藤、近くで騒ぐなって……頭に響く……」

ブロロロ……

俺は車輛科棟の壁に手をつき、ため息をついた。そして空を見上げると……ゆつくりと着陸態勢に移るJ u 8 7がいた。

俺は一気に酔い酔いや頭痛吐き気が収まり、悪寒が体中を駆け巡った。

……と、とにかく隠れないと!!

俺は影が薄くなる技を使い、近くにあったツツジの花壇の陰に隠れた。

「キンジは『女が嫌いだ』とか言ってモテるし、イブキも女の子の知り合いが多いし……。どうやって女の子と知り合えるんだy……あれ?」

武藤はいきなり俺が消えたように感じたのだろう。アイツはあたりを見回して俺を探していた。

ブロロロ……!!!

隠れて一分もしないうちにJ u 8 7は見事な着陸を決めた。俺はそのツツジの花壇から息をひそめてJ u 8 7を観察する。

停止したJ u 8 7から金髪美女が飛び出ると、車輛科や装備科の生徒達が彼女にワラワラと集まって行った。

「すまないが急いで給油と弾薬の補充を頼む!! 10分後には次の任務につかなければならない!!」

彼女はそう伝えると、周りを見渡した。まるで何かを探している様子に……

キツ!!

急にハンナは俺が隠れている花壇を睨みつけた。心なしか、花壇越しに覗いている俺と目が合ったような気がする。

「ッ……!?!」

……嘘だろ!? またバレたのか!?

そしてハンナはカツカツと靴を鳴らしながら花壇に近づいてくる。俺は息を潜め、神様仏様玉藻様に祈ることしかできない。

ドクツ!!ドクツ!!ドクツ!!

冬の寒空の下、俺は滝のような汗を流す。心臓の鼓動がやけに強く聞こえ、間隔が短くなっていく。

「ハンナさーん!!スイマセンがここを見てもらっていいですか!」

ハンナが花壇まで2mを切った時、J u 8 7の整備をやっていた後輩がハンナを呼んだ。

「分かった!!今行く!!おかしい、イブキの気配に匂いを感じた気がするのだが……」

ハンナは踵を返し、頭をかしげながらJ u 8 7の方へ向かって行った。

「ここ、機関砲の撃針なんです……」

「フム……替えは無いのか?」

「全く同じのはありませんよ。代用品で良いなら探してきますが……」

……な、何とかバレずに済んだ。

俺は崩れ落ちるように地面に寝転がり、胸をなでおろした。汗をかいたせいかな……急に空気が寒く感じる。俺はゆっくり息を吐き、心臓を落ち着かせ、東京の冷たい空気を肺にいれた。そして憎たらしいくらいに綺麗な青空が目に入った。

……あれ?そう言えば後部座席には誰がいるんだ?

俺は落ち着いたら疑問を持った。そこで再びツツジの花壇越しにJ u 8 7を見ると……後部座席にはかなめが座っていた。

「……ウツ!」

俺はかなめの表情を見て思わず声を出してしまった。

かなめは後部座席に座ったまま、俺がいる方向を虚ろな表情で見ている。その表情が無表情や真顔と言うよりは……まるで

埴輪の様な表情をしていた。表情のない顔に目と口を丸く描き、



そこを黒く塗りつぶした様な……そんな顔をしていた。

……へ、下手なホラー映画よりも怖いぞ!?

その時、かなめの口が動いた。声は聞こえないが、口の動きから察するに……『HELP』。

……み、見てられねえ。

しかし、J u 8 7の近くにはハンナがいる。影が薄くなる技を見破った事があるハンナからバレずにかなめを救う事は難しいだろう。

……スマン、かなめ。

俺はかなめを見捨て、この場から逃走しようとした時だった。

「スイマセン!!機関砲の弾薬でちよつと……」

「分かった!!今向かう!!」

今度は違う後輩にハンナは呼ばれた。そして二言三言話した後、ハンナはJ u 8 7から離れて装備科棟へ向かって行った。

……よし!!これなら……

俺は影の薄くなる技を使いつつ、バレないようにJ u 8 7に近づいた。そして後部座席を恐る恐る覗くと……

「Help……Help……Help me……」

かなめによく似た壇輪が……違った、壇輪によく似たかなめが虚空を見ながらボソボソと助けを求めている。

……ここまで来たら見捨てられないよなあ

俺はハンカチを出してかなめの口を塞ぎ、そのまま後部座席から引きずり下ろした。

「Help……Help……Help……」

そしてかなめを担ぎ上げ、俺は機材を運ぶそこらの生徒の様にながらツツジの花壇の陰まで移動し……今度はかなめを背負い、脱兎の如く逃げ始めた。

「……ん?イブキ?」

ハンナの声が聞こえたような気がした。俺はさらに走るスピードを上げ、この場から逃げ去った。

……ここなら、もう大丈夫だろ。

俺は滑走路から離れた強襲科棟アサルトの隅に腰を下ろした。いつも以上に息が切れて鼓動が激しいのはハンナに対しての緊張であって、体が鈍っているせいではないと信じたい。

「……ん？あれ？ここは？」

やっと背中のかなめハニワは人間に戻り始めたようだ。

「あれ……？あたし、アイツに喧嘩売って……無理やり飛行機に乗せられて……そして……」

見なくても分かる。かなめの目と口が丸くなっていき、白い肌が土色になっっているのだろう。

「ほら、ハンナはいないから。もう、大丈夫だ。」

俺は子供をあやす様に背中のかなめを揺らすと、かなめは段々と落ち着いていった。

「……い、イブキにい？助けてくれたの？」

「ああ。だからもう、大丈夫だ。」

「……ッ!!イブキにい……イブキにい!!」

かなめは俺の背に強く抱き着いて泣き始めた。背中のシャツが彼女の涙やら何やらで湿りはじめ、俺は多少既視感デジャヴを感じると共に……罪悪感に襲われた。

……ついちよつと前、俺はかなめを見捨てようとしたんだよなあ。

「I love you!!」

I love you!!

Nonetheless but you.

Be mine, forever!!

かなめが俺の背中に頭を擦りつけながら何か言っているのだが……それがさらに罪悪感を掻き立てていく。

そんな時だった。

サクツ……

俺の頬に、紙で切った様な痛みを感じた。俺は目だけを動かし、恐

る恐るその原因を探ると……俺の頬に刃を立てた幅広の軍用サバイバルナイフが見えた。

「ねえ、イブキにい？」

俺の背中から……くぐもった声が聞こえた。その声は小さいのだが……俺の頭に大きく響き渡る。

「他の女の臭いがする……。しかも、今まで無い匂い……。ねえ、イブキにい……。誰？」

……助けられない方が良かったかなあ

ナイフが頬から首に移動した。首の薄皮が切れ、痛みはないが……血が流れていくが分かる。

俺はため息をついた後、かなめへの言い訳を考え始めた。

この刀ってなんだよ……

かなめとの交渉の末、『今度一緒に東京を観光する』という事を条件に……俺はやつとかなめから解放された。

その日の夜……

俺は何処だか分からないが……草木が一本も生えていない荒野にいた。そして、俺を囲むようにして人民服漢民族の伝統的な衣服清朝時代の満州民族の衣服漢服を着たゾンビキョンシー(?)達、そして麒麟等の様々な妖怪が地平線の彼方までいる。

……またこの夢か。そろそろ飽きてくるんだが。

ここ数日、俺は『多数の妖怪達が自分を襲いに來る、やけにリアルな夢』を見ていた。

俺はため息をつきながら手榴弾をバケモノ達に投げつけた後、着剣した38式と紅槍を取り出して構えた。そして手榴弾の爆発音と共にバケモノ達が一齐に襲い掛かってきた。

俺は槍を振るい、銃弾を放ちながらバケモノ達から近づかれない様にする。

体感としては30分ぐらいであろうか。38式どころか25ミリ機銃に拳銃の銃弾も尽きてしまった。

……ああ!!クソツ!!面倒な……!!夢なら早く醒めてくれ!!

いつもであれば、戦闘が始まって10分ほど経過した後、誰かしらが援軍として加わるのだが(長槍を持った足軽・戦前の憲兵・辻とゆかいな仲間達上官達)……今日に限っては全く来る気がしない。

……今日はとうとう俺一人か、クソツ!!

銃剣は全て折れ、紅槍の穂先は血油で切れ味が落ちているため……38式と紅槍を棍棒の様に使う。

そんな時だった。いきなり俺の横に着物姿の白髪の老人がいきな

り現れた。

「新たな主人よ、私は刀の\*\*です。ですが錆と埃で鞘から抜けないので。この妖共をどうにかしたいのであれば、私の錆を取tt  
……ゴフツ!？」

「……あ。」

38式や紅槍などの重量物は急に動きを止めることができない。そのため、いきなり現れた老人の顔面に38式の銃床が、腹部には紅槍の柄が当たり……本塁打王の打球が如く、老人は何処かへ飛んで行ってしまった。

「……どんな混沌な夢だよ。」

打球を見送ったところで俺は夢から醒めた。

……あのジジイ、刀云々って言ってたっけ？

俺はあまり信心深い人間ではないのだが……なんとなく、先日で役人から貰った日本刀を抜いてみた。

そしてよく観察すると……その刀身の一部にうつすらと錆が浮いていた。

……このぐらいの錆ならボロ切れで拭えば落ちるな。でも、まさか本当だなんて……ってヤベエ!?

何処かにぶつけたのか、この刀の鍔がぐにやりと曲がっていた。この刀の鞘や柄・鍔は新造ではあるが……それでも最高級品であることはすぐにわかる。そのため……修理代も高くつくに決まっている。

……って言うか、昨日こんな風に曲がってなかったよなあ!……はあ、直さなきゃマズいよなあ。

俺は曲がった鍔の修理代を考え……早朝から頭が痛くなった。

その日の昼休み、俺は平賀さんに鍔の修理を依頼し、修理費と直

るまでの代替用の鍰つばの代金に頭を痛めた。

そして放課後、俺は我がチーム『COMPOTO』を選択教科棟の美術準備室に招集をかけた。修学旅行Ⅱキャラバン・ツアーの事で話があるからだ。最初は寮の部屋で話そうと思っていたのだが……アリアや白雪に聞いて欲しくない話(軍機に当たる部分)が多少含まれる。そのため、人目につかない美術準備室こで話すことになったのだ。

……ワトソンエッとの『おままごと』でこの部屋をよく使うため、勝手を知っているからとアと言う理由もあるが。

「……時間は過ぎていくんだけどなあ」

俺は安物のマグカップに、ワトソンが運び込んだそこそ良いティーバッグを入れた。そして湯を注いで十数秒待った後、ズズズ……とお茶を啜った時、勢いよく扉が開いた。

「久々の登場である!!」↑ネロ

「そうです!!同じチームであるのに何故出番がほとんど無いのですか!!」↑ニト

「主殿、ちゃんとした出番をください!!」↑牛若

「まだ牛若は前章で出たからいいじゃないか。僕なんていつ以来の登場場だい?」↑エルキドルウ

「……イブキ様、リサもお願いいたします」↑リサ

「比較的に出てるけど……前章だと出番がなかったからプンプンガオーだぞ!!」↑理子

「前章は出たとはいえ……僕の出番が少ないのはどういうことだい?」↑ワトソン

「何言ってるんだ、お前ら。」↑俺

扉が開かれたと同時に体操服姿(午後にスポーツテストがあったからか?)の『COMPOTO』女性陣(と言うか俺以外の全員)+@が『出番』やら『前章』やら訳のわからない事を言いながら入ってきた。いったい何のことを言っているのだろうか。

「こ、この章では出番を作りますので……はい」

俺は脳に直接、聞き覚えのない声が聞こえたのだが……きつと疲れしているせいで幻聴でも聞いたのだろうか。

「と言うか、なんだって全員体操服なんだよ。」

俺はため息をつきながら尋ねた。

「どこか問題でも?」

髪を後ろで一纏めにしたニトは不思議そうに己の衣服を確認した。

砂漠で生きる人は……強い直射日光をもちに浴び、夜は冷えこむため、長袖の~~□□~~身を隠す服~~□□~~を着るそうだ。しかし~~□□~~元フアラオ~~□□~~という理由のせいかな、ニトの普段着は水着……と言っても過言ではないほどの薄着である。そのせいかな、この衣装に疑問は無いらしい。

「主殿。女子更衣室が破壊されていたのでそのまま来たのです!!」

牛若は元気よくそう言った。

その言葉から察するに……おそらくロケット砲が無反動砲・迫撃砲・軽砲の誤射や流れ弾が運悪く女子更衣室に直撃したのだろう。軍ですら滅多に起きない事も武偵高では日常茶飯事なのだ。

「『重要な会議』と聞いて余は急いだのだぞ!!」

「久々の出番だから……道具は必要な場になればいけないから。」

ネロはふくれっ面をしながら言い、エルキドゥは笑顔で……いや、張り付けた笑顔のままイジケながら言った。

「『重要な会議』って……そんな固い言葉が出てきてみんな驚いたんだ。だからみんな着替えもせず慌ててきたんだよ。」

ワトソンはため息をつきながら言った。

男装しているとはいえ、化粧をしているのだろうか……ワトソンの頬や唇が普段よりも紅い。それに加え、Tシャツにハーフパンツという姿でもあるせいかな、ワトソンは倒錯的な色っぽさを身に着けていた。

……やったねワトソン!!おままごとの成果が出てきてるよ!!……はあ。

話が変わるが、現在この部屋にいる女性陣の服装は……牛若・エルキドゥ・ワトソンがTシャツにハーフパンツ。そしてネロ・ニト・リサ・理子がブルマ姿でいる。

……ちゃんとした体操用のブルマなんてまだ売ってたのか。

俺は需要と供給の関係に感心した後、今回呼び出した理由を口にした。

『重要な会議』って言うのは修学旅行Ⅱの事だが……」

「新大陸に行くのであろう？楽しみだな!!」

「まさか後世で新たな大陸が見つかるとは思いませんでしたが……楽しみですね。」

ネロとニトが反応した。その他英霊組も頷いている。

生前、発見すらされていなかった新大陸に行けるのだ。冒険心やらなんやらがくすぐられるのだろう。

「そのことで、オーストラリアに行く予定だったんだけど……軍の上層部の意向で俺は香港に行くことになったんだ。」

「……」

彼女達の笑顔がピシツと固まった。この棟の建付けが悪いのか、背筋が凍るほどの冷たい隙間風が俺に当たる。

「い、一応俺抜きでオーストラリアへ行くことは可能だけど……」

「何で香港へ行くんだい？」

エルキドゥは張り付けた笑顔のまま、瞳孔が開き切った目で俺を見ながら言った。その目を見ると、かなめを思い出すのは何故だろうか。

「ええつと……それは……」

俺は軍機に当たる部分を除きながら、頭の中で説明文を組み立てる。その時だった。

「軍機に当たる部分が多いからムラタは言いづらいと思う。だからボクが説明するよ」

ワトソンがそう言いながら美術準備室に置いてあるホワイトボード(ワトソンの私物)を引っ張り出してきた。そしてワトソンはそのホワイトボードを使いながら極東戦役の事先日のテロ事件と藍幫との関係性それに対しての日本軍の行動を事細かく説明した。



……あれ？~~部外秘~~（軽度の軍機）~~ならまだしも、なんで~~軍機・軍極秘（重度の軍機）~~までワトソンが知っているんだ？~~

『こつちも防諜はしているけど、天下のイギリス相手は厳しいよ』  
HS部隊第一中隊の藤原少佐藤原さんの声が聞こえたような気がしたのだが……疲れて幻聴でも聞こえたのだろうか。

俺は~~己の疲れ~~~~日本~~日本の防諜の低さとイギリスの情報収集能力~~にため息をついた。~~

「……というわけでムラタは香港に行くことになったんだ。」

「なんだって軍機にあたる部分を知っているのかは置いとくとして……そういう事です。楽しみにしているところ、スイマセンでした!!」

俺はそう言ってみんなに頭を下げた。みんなの視線が俺の頭部に刺さる。

俺が頭を下げて数分経った。

「……ハア」

誰かがため息をついた。

「おもて面を上げよ」

ネロの言葉に俺は首を横に振り、頭を下げ続けた。するとネロは歩いて近寄り、俺の頭を力強く掴み、無理やり頭を上げさせた。

「理由があるのであろう。ならば余達もその~~香港~~とやらに行こうではないか!!東端大國に後漢があつたのは知っていたが……ウム!!楽しみである!!」

ネロは薔薇の様な華やかな笑みを俺に突きつけるようにして言った。

「オーストラリア新大陸に行けないのは残念ですが、アメリカ新大陸は夏に行ったのでいいでしょう。……ですが大陸の東端ですか。この国も異国情緒があつて面白いですが、その~~香港~~はどうなっているのでしょうか?」

ニトは笑みを浮かべながら、ウキウキと言う。

ニトは紀元前23〜22世紀に生きたファラオ。彼女にとって、こ

の世の何もかもが新鮮に映っているのだろう。

「現代の唐土ですか!!楽しみです!!」

牛若は両手をバタバタと振り、その興奮を表現する。

「……(ニコツ)」

「リサは常にイブキ様について行きます。」

エルキドゥはいつも通りの瞳で笑みを浮かべ、リサも微笑みながら言う。

「理子、栗子月餅食べるー!!」

理子はそう言って俺に勢い良く抱き着こうとしてきた。俺は条件反射で理子を掴んで投げ飛ばす。

ドスツ!!

「ちよつとイブイブ!?なんで投げるの!?!」

「あ……いや、つい」

理子は頬を膨らませて抗議する。俺は久々のこの☒☒暖かい空気に顔が緩んだ。

「では!!遠征で☒☒藍幫☒☒とやらを潰してしまおうぞ!!」

「武器の方も準備しなければなりませんね。」

「主殿の障害は取り除きませんと……」

「……(ニコニコ)」

「ホテルの手配はお任せください!!」

「ふっふっふ……藍幫についてはこの理子りんに見ねなさい!!」

さて、何処から持ってきたのか……理子がホワイトボードにA3サイズ(420×594mm)の香港全域図を張った。そして『COMPOTO』の面々はその地図と☒☒にらめっこ☒☒をしながらヤバイ方向へ話が進んでいく。

……そう言えば、みんな血の気が多いんだっけ。

俺はその話題を止めようとした時、誰かが袖を引っ張った。

俺は引っ張られた方向を向くと……ワトソンがいた。

「ムラタ、ボクはGarriisonとして東京に残ろう。修学旅行Ⅱの時期はジャンヌもシンガポールだ。ああ、単位は心配しなくていい。留学生には見学する都市の一つに『東京』もあるんだ。」  
Garriison……直訳で守備隊・駐屯軍要は、ワトソンは留守役として日本に残るつもりらしい。

……それは有難い。助かるな。

留守役は楽なように見えるが、実は一番大変な仕事だ。味方本隊が出ているため、陣地は敵の工作を受けやすくなる。最悪、敵が攻めてくる可能性もあるため、留守役は任された陣地を単独で死守しなければならぬ。

軍としての留守役は藤原さんが所属するHS部隊第一中隊、個人としての留守役は玉藻にヴォルケンリッター（最近出番なし）がいるのだが……武偵としての留守役はいなかった。そのために心配していたのだが……ワトソンが立候補してくれたため、心配はなくなった。

「助かる。帰ってきたらなんか奢るぞ。」

俺は留守役を買って出てくれたワトソンに思わず礼を言った。

「じゃあ、帰国後に六本木・秋葉原・浅草を二人で一緒に回ろう。楽しみにしているよ」

ワトソンはそう言ってウインクをした。俺はその姿に一瞬ドキツとした。

……転装生だから女だってバレちゃいけないのに。化粧もしてウインクとか何やってんだよ。変な色気まで身に着けやがって。

軽い頭痛がするのだが……二日酔いのせいではないはずだ。

会議終了後、香港への荷造りの為に一端解散した。そこで、俺は久々に家に戻ることにした。

「イブキ兄ちゃん、香港行くん？ええなあ〜」

荷造りを粗方終え、居間で予備の38式歩兵銃と日本刀の簡易整備

をしていた。すると、海鳴市で保護した八神はやてちゃんが車椅子で近寄ってきた。

「ただの修学旅行だったらよかったんだけどなあ……。これでも喰らえ!!」

「うわわ!?!」

俺は整備の手を止め、手を拭うとはやてちゃんと肩を組むようにして抱き寄せ、もう片方の手で彼女の頭を乱暴に撫でまわした。

はやては軽く叫び声を上げ、「イヤイヤ」と離れようとしている。だが、その笑顔から察するに、彼女もこのスキンシップを楽しんでいるのである。

「やめてー、髪がボサボサになるー」

「ふっふっふ!!寝起きよりも以上にボサボサにしてやろう。ついでに頭皮マッサージも追加だ!!」

「ぎゃあ〜!!」

俺は修学旅行Ⅱの不安をかき消すように、はやての頭をガシガシといじくる。

……藍幫、諸葛静幻らは香港藍幫たっけか? その香港藍幫は『俺やキンジ達が香港へ遠征する』という情報は得ているはずだ。そして東京でボロ負けした奴らはこの防衛線では絶対に勝つ必要がある。

俺ははやての頭をグリグリと撫でまわしながら思わずため息が出た。

……可能性は低いが、勝利のためにルールを無視する可能性が十分にあるな。市民を巻き込んだ市街地戦、雑兵を総動員させる戦闘……東京での事を考えたら、そのぐらいの事はしてきそうだしなあ。

バタバタバタ、ドターン!!

すると、いきなり居間の扉がふっ飛んだ。俺はあまりの事に固まってしまう。

「主はやて!!大丈夫ですか!?

「はやて!?どうしたんだ!?

扉があつた場所からシグナムとヴィータが出てきた。そして彼女達は武器をどこからか取り出し、それらを振りかぶって俺へ一気に接近する。

「ちよ!!待て!!待て!!」

俺ははやてを離して彼女の前に立ち、38式の銃身(分解中)と、置いておいた日本刀で攻撃を受けた。

サクツ!!ギャイン!!……ドスツ!!

「つてあれ?イブキじゃねえか?」

「手荒い歓迎ありがとよ……ハア」

ヴィータは攻撃してやつと気が付いたようだ。俺は思わずため息が出た。

38式の銃身は彼女のハンマーを受け止めたせいでひん曲がつてしまった。この38式も廃棄決定だ。

……もう予備は無いから第二中隊の武器庫から貰ってくるしかないなあ。つてあれ?シグナムの反応がない。

俺は恐る恐るシグナムの方を見ると、彼女はメカメカしい剣(?)を振り下ろしたまま固まっていた。

よく見ると……彼女の持つている剣の形がどこかおかしい。まるで□□元々あつた剣を断ち切つた□□様な形をして……

……そ、そう言えば、銃身を持つた左手はすごい衝撃だったけど……日本刀を握つた右手は何の衝撃も無かつたぞ?ま、まさか……

今、俺が握つている日本刀は先日前話で役人から貰つたわざもの業物だ。多少錆さびが浮いていたのでふき取つたのだが……この日本刀は俺の様な素人でも□□すごい業物□□と言うのはよく分かる。そんな日本刀の切れ味はもちろん良いに決まっている。

俺は恐る恐る下を向くと……床にはシグナムの剣の破片(?)が刺さっていた。

「わ、私のレヴァンティンが……」

シグナムは手に持っていた剣(破損品)を落とす……膝をついて○

r zの体勢になった。

……う、嘘だろ?!この日本刀、シグナムの剣を簡単に切り裂いたのか!?

シグナムとヴィータが武器を下ろしたため、俺は警戒を解いて日本刀をまじまじと見た。

この日本刀、前章でサイモンが使用した~~三日月宗近~~に引けを取らないほどの重圧を感じる。

……こ、この日本刀は一体何なんだよ!?

俺は思わず冷汗をかいた。

「ほお、見事な切れ味であるな!!」↑ネロ

「現代でもあれほどの剣が……」↑二ト

「おおく!!すごい切れ味!!」↑理子

「……(ニコニコ)↑エルキドゥ<sup>エル</sup>

「どこか似たような物を見た事があるような……」↑牛若

「イブキ兄ちゃん?刀かえたん?」↑はやて

『COMPTO』の面々はこの日本刀の切れ味に思わず感嘆の声を上げていた。

……おい!?なんだって理子まで家<sup>うち</sup>にいるんだよ!?あとはやて、刃傷沙汰が目の前で起きても動じないなんて……兄ちゃん、君の成長がうれしいよ(泣)

俺はため息をつきながら日本刀を鞘に戻し、orz状態のシグナムに声をかけようと膝を折った。

その時だった。キッチンから濃厚な殺気が流れ出てきた。居間にいた全員が氷のように固まった。

ドスツ!!ドスツ!!ドスツ!!

二人分の小さな足音がやけに響き渡る。二つの濃厚な殺気の発生源が徐々に近づいてくるのを音と肌で感じる。

「シグナムさあん?この扉は一体どういうことですかあ?」

「帰りに買い物頼んだのですが……どうしたのですか?」

良妻賢母(魔王)濃厚メイド(怒)  
玉藻とリサが割烹着orzエプロン姿のまま、良い笑顔で尋ねてき

た。

俺はシグナムから離れ、鬼になった二人から目をそらすと……黄色い液体が漏れ出しているレジ袋を見つけた。おそらく中身は……割れた生卵。もったいないが、あの卵達は捨てるしかないだろう。

扉を破壊し、食材を無駄にする……主婦達はそれら行為を絶対許さないであろう。

「……（白目）」

己の武器メカメカしい剣が壊れて傷心中に、二人に睨まれ……シグナムは白目を向いて固まってしまった。

……俺は複数の武器を使って戦うから、武器が破損してもそこまで響かないけど……シグナムは替えの武器がないからなあ。それにあの二人に睨まれて普通でいられる方がおかしいよ。

そんなシグナムに対し、ヴィータはまだ離す余裕があったようで

……

「は、はやての悲鳴が聞こえたから、い、急いで……そしたらイブキがはやてをいじめてて……」

「……は？」

ヴィータの発言を聞いて、俺は固まり、冷汗がドバツと出た。

……確かにはやては『やめて〜』とは言ってたけど、あれはスキンシップの範囲内だろ!?

俺は後ろにいるはやてに弁護してもらおうと振り向き……いない!?

俺ははやてを探すと……彼女はネロやニト・理子達が寛いでいるソファへ車椅子を猛ダッシュさせていた。そしてそのソファ安全圏に着すると車椅子を180度回転させて俺の方を向き、拝み手をしながら申し訳なさそうな顔をした。

……は、はやて!?!見捨てる気がy……

「マスター？」

「イブキ様？」

「ひゃ、ひゃい!?!」

二人が俺をギロリと見てきた。俺は思わず両手を上げ、降伏の意を示

す。

「今の話……本当ですか？」

二人の眼光が……俺を貫いてくる。俺はさらに冷汗が噴き出る。

「い、いえ!? 確かにはやとじやれ合っていました。決してイジメてなど……なあ!？」

俺はソフアーで寛いでいる傍観者達に援護射撃を頼もうと振り向いた。しかし、そこにいる全員が顔を俺から背ける。

……おい!? みんな☒触らぬ神に祟りなし☒ってか!?

鏡が無いのに、自分の顔が真っ青になっていくのが自覚できる。

そして、今にも襲い掛かりそうな妖狐と人食い狼獣が睨みつけてくる様な幻覚が見え……ってというか、まんまその通りだ。

「嘘はついていないようですねえ」

「リサは信じていました」

二人は殺気を収め、慈愛の笑みを浮かべ……

「マスター（イブキ様）とシグナムさんは御飯抜きです」

俺とシグナムに裁きを下した。

「え? いや……原因はシグナムとヴィータだろ!？」

「誤解の原因を作ったのはマスターですし? それにヴィータさんは正直に話司法取引してくれたので。ええ、ここ最近ほとんど出番がないからってという事ではございませんよ?」



俺の言葉に、玉藻は笑顔でサムズB A Dダウン手をした。

……う、うわあ。怒ってらっしゃる。

俺は反論を止め、判決を受け入れた。



その日の夕飯、真っ白に燃え尽きたシグナムと俺の前には水の入ったコップが一つ置かれただけだった。





反省の色を示していたせいか……いただきますしてから五分後、主婦二人が許し、俺とシグナムに夕食を出してもらえた。その後、酒盛りも始まり……やっとな今、お開きとなったのだ。

「ああ……こりや早く寝ないと……」

俺は千鳥足で部屋まで戻り、壊れた38式と日本刀をそこらに立てかけた。そして布団に倒れこみ、目を閉じる。

酔いで三半規管がうまく働いていないらしく……布団が揺り籠の様に動いているような気がした。

揺り籠に揺られて数分後、俺は夢の住民となった。

俺は輸送機の中にいた。窓を見ると……青い地球が見える。

……あ、夢だ。明晰夢だっけか？最近をよく見るなあ。

俺はため息を吐くと……後ろに気配を感じた。俺はゆつくりと振り向くと、着物を着た痣だらけの老人が木箱に座っていた。

「私の錆を取ってくれたようですね。約束通り妖共を退治して見せましょう。」

老人がそう言った瞬間に床が無くなり、俺は輸送機から落ちて行く。

「とはいえ……私にやった仕打ち、忘れませんか？」

落ちて行く俺を、老人はにんまりと笑顔で見送っていく。

俺は地球へ向かって落ちて行き、大気との摩擦で体が燃え始め……

ピピピピピ!!

「う、うわああああああ!!」

俺は目覚まし時計の音で飛び起きた。心臓がドクドクと強く鼓動し、息が荒い。

たしか、怖い夢を見たような気がするのだが……どうも覚えていない。

……まあいいや。とりあえず目覚ましを止め……

俺は目をこすりながら、アラームを止めようと目覚ましに触れた時だった。

かたっ!!サクサク!!

立てかけていた日本刀が倒れ、刀身が鞘から抜けて……俺の指から数ミリ離れたところに刃が落ちた。

刃は目覚まし時計と……近くにあった金属製の小さな麒麟きりんの置物を真つ二つにした。まるで、包丁が豆腐を切る様に……

「……うっ……!?!ッ~~~~ッ??」

一気に眠気が冷めた。

俺はゆっくりと目覚まし時計から手を離し、ある程度離れると顔へ指を近づけた。

……だ、大丈夫だよな? け、怪我は……

指に欠損や傷は全くない。だが、さっきの出来事が衝撃的すぎて……手の震えが止まらない。

……こ、この刀、いったい何なんだよ。シグナムの剣(?)に目覚まし時計きりん麒麟きりんの置物きりんを簡単に切るなんて……って、え? 麒麟きりんの置物きりん?

俺は日本刀をしまった後、目覚まし時計と一緒に切られた麒麟きりんの置物きりんを手にとった。

麒麟きりんの置物きりんは某ビールメーカーのビールに描かれているような神々しさが無く、禍々まがまがしい見た目をしている。素材は金メッキが施ほどこされた鉄(?)で、中央には白色のセラミック(?)が入っていた。

……え? この置物、全然記憶にないぞ?

俺は気味が悪くなった。

ちようどこの日は燃もえないゴミの日ゴミだった。そこで、この置物ゴミを入れたビニール袋を集積所へ力いっぱい投げ捨てた。

この日以降、俺は『妖怪に襲われる夢』を見なくなった。

遠すぎた香港……

安眠ができるようになって数日後、俺達『COMPOTO』は羽田空港にいた。

俺達はカウンターで荷物を預けてボーディング・パス（飛行機の切符）を受け取り、武装職従事者専用の出国ゲートを抜け……ある一室へ向かっていた。

免税店に目もくれず（夏のアメリカ旅行で見たから）その一室へ着き、入り口にあるカウンターで簡単な手続きを済ますと……俺の目の前には桃源郷が広がっていた。

……ここが、かの有名な航空会社ラウンジ!!

航空会社ラウンジ……カードラウンジや有料ラウンジとは違い、『プレミアムメンバー』や『ファーストクラス・ビジネスクラス利用者』等しか利用できない特別なラウンジだ。

広々とした空間に、ソフトドリンク・アルコール類、軽食、シャワールーム全てが無料という、素晴らしいサービスを兼ね備えた場所だ。……一度、一度でいいから来てみたかったんだよ!!

HS部隊の時、移動で時々民間機を使う事もあった。そしてファーストクラス・ビジネスクラスしか空いていないという時は、軍の予算軍でその席にらせてもらっていた。

だが、俺の上官・辻希信大佐は 軍の予算軍であるため）ラウンジ利用の許可は一切出すことはなかった。なので俺は一度もラウンジを利用したことがなかった。

余談ではあるが、俺はHS部隊第二中隊第一小队（辻さん以外）全員巻き込み、ラウンジ利用を画策した事があるのだが……もろん 勿論辻さんにバレ、半殺しにされたの言うまでもない。

そんな下らない昔話とはかく……桃源郷ラウンジについて我々『COMPOTO』は席取りを終えると、おのおの 各々飲み物食べ物を取りに行ったり、シャワーを浴びに行ったりした。

「ふあはは、へんいんふいふいへすふあふあへ〜」

理子は無料のケーキやサンドイッチ・ビスケット・クッキーをハムスターの様に口に詰め込みながら言う。

そしてドリンクバーでミックスジュースを作るが如く、置いてあつた酒を適当に混ぜて作った即席カクテルで口の中の物を流し込んだ(悔しいことに、一口貰ったらうまかった)。

「はい!!リサ、頑張りました!!……イブキ様、頼んでいたかき揚げそばときつねうどんです。」

「流石リサだな。よくまあ、こんな割安でビジネスクラスを……。お、ありがとう。」

俺はウイスキーや日本各地の日本酒や焼酎を飲み、稲荷ずしやおにぎりを頬張っていたのだが……その手を止め、そばやうどんを啜り始める。

……数日間は日本食が食えないからな。食いだめしておかないと。

普通、武偵でも軍人でも敵地へ赴く数時間前に酒を飲むのは厳禁なのだが(判断力が落ちる云々)……縁起担ぎ・景気づけと言う名目で、俺は普通に酒を飲んでいた無料と言言葉のせいもあるだろうが)。

羽田〜香港間のフライトは4時間20分。待ち時間に不具合等の時間を合わせても……今か6〜7時間後には香港市内にいるだろう。そんなに時間があれば……今散々飲んでいても、市内に着く前には酔いは醒めている。

「……(ガツガツ)」

俺の斜向かいに座る牛若は勢いよくおにぎりや稲荷ずしを食べていた。おそらく、俺と同じような事を考えて食いだめしているのだろう。

「……(ニコニコ)」

エルキドゥはオレンジジュース片手にニコニコと静かに座っていた。そして、この場にいないネロとニトはシャワーを浴びに行っている。

「ねえねえ、みんなの席は何処？」

大量のサンドイッチやお菓子を食べてもまだ足りないのか、理子はそう言いながら再び山盛りの大皿と謎カクテルを持ってきた。

……そう言えば席の確認はしてなかったな。

俺はポケットに手をつ突っ込み、ボーディング・パスを探し始める。どこかのポケットに入れたのは覚えているのだが……ラウンジの事で頭がいっぱいだっただけか、なかなか見つからない。

「理子りんは10E〜！」

「10Gなので……理子殿と隣ですね！」

「いえ〜い!!」

理子と牛若は楽しそうにハイタッチをした。二人のノリが酔っぱらいのノリに見えるのは気のせいだろう。

「僕は……11Dだね。」

「リサは11Fですので……エル様、隣ですね!!」  
エルキドゥとリサも隣らしい。

ビジネスクラスの席の並びは1・2・1となっているため、順当に考えれば俺・ネロ・ニトが一人席の可能性が高い。

俺はやつとボーディング・パスを見つけ出した。それに書かれた席順を確認すると……

……GTE?おい、これってもしかして……

俺のボーディング・パスには座席番号が書かれてなかった。その代わりに『GTE』とだけ書かれている。俺は嫌な予感がした。

残っていたおにぎりとそばつゆを不安と一緒に飲み込もうとするが、不安だけはやはり残る。

……おい、噂で聞いたことがあるが……『オーバリーブッキング』かよ!?

さて、『オーバーブッキング』を知っているだろうか。

元々、航空会社は乗り遅れや直前のキャンセルなどの予約したが乗らなかつた客の数を予想し、座席数よりも多くの客を募集している。そのため、予約したが乗らなかつた客が予想よりも少なかった場合、全員を旅客機に乗らせることはできない。この状態を『オーバーブッキング』と言うのだ。

ただ、『フレックストラベラー制度』などがあるため旅客機に乗れないという確率はとても低く……1万人当たりの乗れなかつた乗客の割合はJALで0.04人、ANAで0.24人だそうだ(国土交通省 平成31年4～6月のデータより)。

そして、オーバーブッキングに会いやすい人は『予約時に座席を指定しない』・『チェックインが遅い』・『荷物を預けない』・『マイレージの高級会員でない客』・『運賃が高くない客』と言われているのだが……

……いやいやいや!? 座席指定は分からないけど、俺は早くチェックインして荷物を預けてビジネスクラスだぞ!?

そして、チケットに書いてある『GTE』とは……『オーバーブッキングで搭乗ゲートで調節するからそこで待ってるや(意識)』と言う意味だ。

「うむ!! いい湯であった!! ただ、テルマエが無かつたのは残念ではあるがな!!」

「無料のシャワー室と聞いていたのでそこまで期待していなかつたのですが……アメニティも揃って中々ですね。」

俺が予想外の事態で固まっていた時、シャワー組が湿った髪に火照った体で、冷えたビール(又は冷えたワイン)片手に戻ってきた。そして俺達のいるテーブルの前まで来ると二人は片手を腰につ

け、もう片方の手で☒冷えたビール（又は冷えたワイン）☒を一気に飲み干す。

……うん、二人とも日本に馴染なじんできたなあ

俺はボーディング・パスから目を離し、軽く現実逃避を始めた。

「ちようど今席に付いて話していました。ネロ様とニト様の席は何処ですか？」

リサが尋ねると、ネロとリサはボーディング・パスを探し始めた。

「余は11Aだな。」

「私は11Hですね」

……マジか、『GTE』は俺だけか。

俺は頭が痛くなってきた。

「さつきから静かだけれど……大丈夫かい？」

俺がいきなりしやべらなくなったからエルキドエルウは不思議に思ったのだろう。

俺は持っていたボーディング・パスをテーブルへ軽く放り投げた。

そのボーディング・パスは滑る様に動き、テーブルの中央で止まった。

「もしかしたら……俺、香港行けないかも。」

「「「「……は？」」」」

旅客機の席を手配したりリサは土下座せんばかりの勢いで俺に謝ってくる。だが、こればかりは運でしかない。

また、『フレックストラベラー制度』（オーバーブッキングになった時、自主的に他の便へ変えてくれた客には現金やその他サービスが受けられるという制度）があるため、オーバーブッキングになっても乗れないという事はほとんどない。そのため、乗れない確率は1万人に1人以下と言う確率なのだ。まさか俺がその一人になる事はないだろう。

そのため俺はリサを許し、そのまま搭乗時刻ギリギリまでラウンジ



で飲み食いも続けていた。

『先日の夜、在香港アメリカ総領事館で爆発事故が発生しました。このことを受け、アメリカでは……』

俺は視線を移すと……テレビでニュースを報じていた。ちょうど行先が同じ<sup>ランパン</sup>香港での事件、気にならないはずがない。

……まさか藍幫が？……いや、まさか極東<sup>F</sup>戦役<sup>E</sup>中にアメリカと事を構えるなんてことはしないはずだ。きっと他の勢力がやったに違いない。俺には関係ないはずだ。

俺はそう思いながら日本酒を飲み干し、お代わりを貰いに行った。

ラウンジをたつぷり堪能<sup>たんのう</sup>した後、そろそろ時間なので搭乗ゲートへ向かう事にした。

搭乗ゲートへ着くと、すでに<sup>ダイヤ</sup>ダイヤモンドステータス<sup>また</sup>または<sup>ファースト</sup>ファーストクラス<sup>の</sup>の搭乗が始まっていた。

アリアはファーストクラスを取っていたのだろう。アリアは小さい体を揺らして優雅（笑）にボーディング・ブリッジ（空港と飛行機を繋げる橋）を渡っている所だった。

……アリアがいるってことはキンジもいるのか？

搭乗口近くのベンチを探すと……いる。キンジが白雪と一緒に座っていた。近くにはレキもいる。

……どうせだ、冷やかしと（白雪への）応援でもしてやるか。

俺はキンジの席へ<sup>おもむ</sup>赴き、声をかけようとした時だった。

「お!? イブキにキンジ!! お前らも一緒の飛行機……って酒臭ツ!!」

背後から武藤がドカドカと近づいてきた。そして俺と肩を組もうとし……相当酒臭かったのか、俺を突き飛ばした。

「おう、当たり前だろう？ さつきまでタダ飯タダ酒を堪能してきたんだからよ。」

しかし、俺は酒が入っているせいにか心に余裕がある。俺は突き飛ばしてきた武藤を許し、陽気に答えた。

「……お前、浮かれすぎだろ。香港は敵地なんだぞ。」

そんな俺を見て、キンジは呆れてため息をついた。

「大丈夫だって、香港に着くころには酔いはさめてるからよお……」

……それに、最悪の場合は数時間後の別の便だけだな。

俺はそんなことを考えながらため息をついた。

そんなやり取りをしている間に、ビジネスクラスまたはその他優待客の搭乗が始まった。

俺もビジネスクラスのボーディング・パスを持っているとは言えない。『GTE』。もちろん搭乗はできない。

「イブキ様、本当に申し訳ございません。リサの責任です。よろしければチケットの交換を……」

「リサ、気にしなくていい。それに、リサは戦闘能力が無いんだから単独で香港へ行って襲われたら抵抗できないだろう？……まだ俺は乗れないと決まったわけではないから。ただ念のため、手配してくれたホテルの名前と住所を後で送ってくれないか？」

俺はそう言ってリサの頭を撫でた。リサは頭を下げ、静かに涙を流した。

……リサ、そこまで気にしなくていいから。重い、重いし周りの目が……なあ!?

白雪は何故か感銘を受けたのかハンカチで目尻を押さえていた。逆にキンジは呆れ、武藤は俺を睨んでくる。また、その他の客も俺を見てくるため……中々つらい。

俺の祈りが通じたのか……リサは名残惜しそうに俺から離れると己のスカートをつまんで持ち上げつつ頭を下げ、上品で見事なカー

テシー~~箱~~をした。そして飛行機に乗り込んで行った。

……周りの目がつらい。

最早俺はため息も出なかった。

「では先に乗っているぞ!!」↑ネロ

「乗れなかった場合は連絡してくださいね?」↑二ト

「……(ムスツ)」↑牛若

「ほら、行くよ。(牛若を引っ張って連れて行く)」↑エルキド<sup>エ</sup>ル

ネロと二トは『何とかなるだろう』と思っっているのか、すんなりで行った。それと対照的に『主と一緒に行く』と地面に根を張ったように動かない忠犬・牛若は、エルキド<sup>エ</sup>ル<sup>ル</sup>に首根<sup>エ</sup>つこを掴まれて飛行機へ運ばれていった。

そして白雪・レキもビジネスクラスだったらしく、キンジを置いて先に搭乗していく。

「……………」

残ったのは……いつもの野郎共に<sup>清涼剤(?)</sup>不知火を抜いた、むさ苦しい男3人だけだった。(武藤率いる『キャリアGA』はまだ乗ってないが)。

「とりあえず……おい、イブキ。何お前あんな巨乳美少女メイド泣かしてるんだよ。」

「武藤の言葉はともかく、流石に女を泣かすのはどうかと思うぞ。」

武藤は察していたが……キンジまで敵に回るとは予想外だった。

「泣いたのはともかく……これが原因だよ」

俺は自分のボーディング・パスを二人に見せた。

「つけ!!ビジネスクラスなんて金を持つてるなあ……ああ」

「なんだよ。お前までビジネスクラスか。乗らなくていいのか?」

武藤はパスを見て察したようだが……キンジはまだ気が付かないようだ。

『COMPOT<sup>ち</sup>』は補給や手配等の後方支援はリサが担当なんだ。で、このパスには座席が書いてないだろ?」

「…………言われればそうだな。」

「オーバーブッキングで俺だけ乗れない可能性が出てきたんだ。リサはメイド業や後方支援に人一倍のプライドがあるから……それで責任を感じていたんだ。で、俺が許したら……あぁなつたって訳だ。」

……でも涙を流すほど感動することではないと思うんだけどなあ。俺はため息をつき、武藤とキンジは俺から視線をそらした。

「それとさつき聞いたんだが……この便、エコノミーはともかくビジネスもファーストも今のところ空席は無いんだと。」

さつき搭乗ゲートにいるCAさんに聞いたのだが……今のところ、『フレックストラベラー制度』で移動してくれる客はいないそう。そのため、直前のキャンセルが無いと俺は乗れないそう。

「イブキ、悪かった。やっぱり親友を疑うってのは良くないよな!!」

「ごめん。」

武藤とキンジは素直に謝ってきた。とりあえず俺は武藤を一発殴っておいた。

それから時間が経ち、そろそろ搭乗締め切りの時刻が迫っていた。もちろんキンジや武藤はすでに搭乗を済ませており……搭乗ゲートにいるのはCAさん達と俺だけだった。そのCAさん曰く『オーバーブッキングで空席待ちは俺一人』だそう。

「あの……空席、あります?」

俺はCAさんに尋ねた。

「申し訳ございません。今、エコノミークラスが4席ほど空いております。そちらでよければ……」

CAさんが申し訳なさそうにそう伝えた時だった。

「おい藤崎くん!!君が羽田で饅頭とか買ったせいでもう搭乗ギリギリだよ!」↑和泉

「はあ!?そもそも和泉が寝坊したから遅くなったんだろ!」↑藤崎

「まあまあ……」↑鈴藤

「……(ビデオを撮っている)」↑音野

見覚えのある蝦夷テレビの4人が大声でこの搭乗口へやってきた。

「ん？村田君？奇遇だねえ」↑和泉

「もう時間だから早く乗ったほうがいいですよ!!」↑藤崎

「そうだよ？早く乗りなつて」↑鈴藤

「……（ビデオを撮りつつ、手で乗ることを急かす）」↑音野

4人は手早く搭乗手続きを済ませ、急いでボーディング・ブリッジを渡っていった。

彼らが出していたのはエコノミーのパスだった。そのため……

「……あの、CAさん？さつき『エコノミーが四席空いてる』って言うてましたよね？もしかして……」

「……お客様、申し訳ございません。別の便に変更なさつて貰つてもよろしいでしょうか？」

空いていたエコノミーの4人席、それは……あの蝦夷テレビは四人組の席だったようだ。

……香港つて、近い様でメチャクチャ遠い所なんだな

俺はため息を吐くのと同時に、ボーディング・ブリッジが飛行機から離れていった。

さて、次の ☒羽田空港↓香港行き☒の便は00:55発だそうだ。

現在時刻は午前9時過ぎなので15時間後……もはや明日である。

ほかの航空会社からも ☒羽田空港↓香港行き☒の便はあるのだが、アライアンス航空連合が違うために乗れないそうだ。

……流石に15時間後は無いだろ

そこで提案されたのは『 ☒成田空港↓香港行き☒か『 ☒羽田空港↓伊丹空港行き☒に乗り、別会社で ☒関西国際空港↓香港行き☒の二つ。

後者の方は2時間ほど到着が早い（とは言つても現地時間20時半ごろ到着）、俺は急遽伊丹大坂空港へ行く事となった。

……とはいってもなあ。元々の便に乗れていれば、現地時間の13時頃には香港に着いてたんだよなあ。

俺はため息をつきつつ……国際線ターミナルから羽田第2ターミナルへ向かった。

香港にて

「ええ、そのイモータル・スピリット不死の英霊エネイブルが乗る便は全部買い占め、オーバーブックキングを起こさせなさい。また、彼は他の便で来ようとするはずです。十分注意しなさい」

諸葛静幻はエネイブル「この体ていで何とか日本を脱出した後、急いで香港の防衛策を練っていた。

そしてエネイブル「エネイブル（キング）エネイブルはともかく、イモータル・スピリット不死の英霊（イブキ）エネイブルへの妨害を始めていた。

なお、イモータル・スピリット不死の英霊（イブキ）エネイブルへの超強力な呪術麒麟の置物エネイブルやエネイブルオーバブックキングエネイブルも全ては諸葛静幻が裏で手を回したことだった。

「あの、諸葛先生？なぜエネイブル「エネイブルよりイモータル・スピリット不死の英霊エネイブルを警戒するんですか？東京ではイモータル・スピリット不死の英霊エネイブルを瀕死にまで追い詰めることができました。全力を出せば……きつと奴の首を取れるはずですよ。ですエネイブルがエネイブル「エネイブルを、『バスカービル』を倒せる確証は……」

司馬老け顔馬老け顔は右手で書類にサインを、左手でキーボードを叩きながら尋ねた。  
今、香港ランパン藍幫上層部はいつもの数倍以上多忙だった。上海ランパン藍幫が壊滅したことにより、上海の仕事の一部が香港ランパン藍幫に降りかかってきたのだ。

『バスカービル』やイブキへの対策をしつつ、通常業務が倍増したため……香港ランパン藍幫上層部はすでに疲労していた。

エネイブル「手負いの獣エネイブルほど恐ろしい物はありません。例えば

不死の英霊を瀕死に追い詰めたとしても……彼は周りを巻き込んで戦い続けるでしょう。そして多大な被害を振り撒く……」

「そうですが……大量の雑兵に曹操姉妹に自分がいれば、奴の首は取れるはず……」

「鵬、大局を見失うな。彼らを倒すことが目的ではない。香港藍幫を……いえ、『香港を守り、そして戦後も藍幫の影響力を維持させ、増大させる事』が我々の使命ですよ?」

諸葛静幻は東京での戦闘に加え、香港での激務のせいでやつれていたが……眼光は今まで以上に鋭くなっていた。

不死の英霊は周りに撒く被害が尋常ではありません。自国の首都ですらあんな事になったのですよ?そんな彼が香港で遠慮しながら戦うと思えますか?」

静幻は口調では諭すように、しかし目は『このぐらいも分からないのか』と言う呆れた目をしていた。

ただ、彼を弁護すると……いつもの司馬鵬であればこの様な事はすぐに悟っていたはずだ。しかし今の彼はこなすべき仕事が多すぎて疲労困憊であり、頭の回転は非常に悪かった。

「日本の被害を考えれば……一地区くらいは焼け野原になりますね。まだ『バスカービル』との戦いの方が……」

司馬鵬は疲労によってさらにしわが増え、肌年齢が上がった顔を真っ青にしながら言った。

ついでに、もしここにイブキがいれば……『いやワザとじゃないから!!』と言うか teme エラ藍幫やサイモンが来たからだろ!?!と言うか、一人で一地区を焼け野原にできるほどの戦闘力は持つてねえ!!』などと全力で否定しているだろう。

「一地区ぐらいで済めばいいのですがね」

諸葛はボソツとそう言った後、仕事を片付けながら二人でため息をついた。

なお、香港国際空港では……

「イブキ先生、来なかたネ。」

「心配するな不用担<sup>シエンシヨン</sup>心、きつと乗り遅れネ。次は……JALの14時15分。イ

ブキ先生、一緒に待つネ。」

「……是<sup>ウツン</sup>的」

しよんぼりしたココ（三女：メイメイ猛妹）をココ（長女：ジュジュ狙姉）が慰めていた。一見、美しい姉妹愛を感じられる光景であるが……

「放置プレイだと思つと……なかなかヨ!!」

「……原<sup>なる</sup>来<sup>ほど</sup>是<sup>は</sup>??!!」

そして二人の頬は徐々に赤く染まつていく。

そんな二人から離れた場所……ココ（次女<sup>パオニヤン</sup>炮娘・四女<sup>ジーニヤン</sup>機嬢）が冷めた目で見ていた。

「姉ちゃん達、イブキのせいでおかしくな<sup>パオニヤン</sup>た。炮娘？どうしたら治る

力？」

「<sup>ジーニヤン</sup>機嬢、<sup>女は18回も大きく変わり</sup>女<sup>変わるたびに美しくなる</sup>大十八？、越<sup>越</sup>?越<sup>越</sup>好看<sup>ヨ</sup>ヨ。」

<sup>ジーニヤン</sup>機嬢の言葉に……<sup>パオニヤン</sup>炮娘は悟<sup>さと</sup>つた目で答えた。

さて、俺は羽田第二ターミナルへ向かい、大阪・伊丹空港へ向かう事になった。

その際、エコノミー席しか空いてなかったため、中央三席の真ん中に座ることになったのだが……

「……つて、そんな事があつたのよお!!」

「やっだあ〜!!」

俺を挟むように座つた<sup>オネエ</sup>オネエ<sup>二人</sup>二人が意気投合し……そのまま俺を挟みながら楽しく会話をし始めたのだ。

「あ、あの……俺、席交換しますか？」

「あ<sup>あ</sup>らあ<sup>あ</sup>〜。でも悪いからいいわよお」

「そうよお〜?坊や、気持ちだけ貰つておくわあ」

……いや、気まずいから席を移動したいんだけど



そんな俺の願いは通じる事はなく、俺を挟みながら彼彼女(?)達は話が弾んでいった。

「ねえ坊や、このマニキュア、どう思うかしらあ〜?」

「この色、なかなかいいと思わなあ〜い?」

「……いや、マニキュアなんて分からねえし。早く伊丹に着かねえかな……」

さて、伊丹空港へ着くと俺はバスに乗り、関西国際空港へ向かった。

関西国際空港へ着くとカウンターで手続きをし、休む間もなく旅客機へ乗り込むこととなった。

……だ、だけど今回はビジネスクラスでよかった。

ドタバタとした疲れからか……俺は豪華な機内食を平らげ、ビールを飲み干すと夢の中の住人になった。

香港国際空港は1998年に開港された比較的新しい空港で、現地ではチエクラップコク国際空港と呼ばれているようだ。

なんでも『2015年の年間乗降者数は約6,800万人でドバイ国際空港、ロンドンのヒースロー国際空港に次ぐ世界第3位、貨物取扱量においては世界第1位(Wikipediaより引用)』だそう  
で。

俺は襟を緩めてコートを脱ぎ、ハンカチで汗を拭きながら香港国際空港へ足をつけた。

……暖あたたかい。いや、少し暑苦しいくらいか

到着時刻は20時半前、予定時刻より少し早く到着したようだ。もちろん、香港の空は真っ黒に染まっている。

「本来なら昼過ぎには到着だったんだけどなあ。」

俺は思わずため息が出た。

入国審査を済ませ（入国管理官のおばちゃんにギョツとした目で俺を見てきたが……何故だ？）、手荷物を受け取り、俺は到着ロビーへ着いた。

……流石に来てないよな？

俺は『到着が夜遅くなるため、迎えは不要』と『COMPTON』全員に伝えてある。そうは言ってもリサや牛若あたりが迎えに来ているかもしれないので、到着ロビーを軽く見回してみると……

……こ、ココ!? それも四人そろって!?

到着ロビー入り口をちょうど見張れるベンチに、ココ姉妹4人が仲良く寝息を立てながらぐっすり寝ていた。一部ではヨダレが垂れていたり、鼻提灯ちようちんを作るほど爆睡している。

何故空港にココ達がいるのか分からないが……寝ているのは不幸中の幸いだ。俺はそそくさとその場を離れようと……

プルルルル……

その時、ココ姉妹の誰かのポケットから携帯のアラームが鳴った。

……マズい!! ココが起きる!!

俺は慌ててそこらにあつた柱に隠れ、ココの様子をうかがう。

「んみゅ……??……」

すると同時に、ココ姉妹のうちの一人が寝ぼけながらも携帯のアラームを止めた。そして、再び横になって惰眠むさぼを貪る。

……なんでここに奴らココ姉妹がいるのか分からないけど……とにかくここから離れるぞ!?

そう思つて足早にこの場から離れようと……そこで、周りが俺を注目していることに気が付いた。俺は自分自身を見ると……普段通りの東京武偵高校の制服だ。おそらく、この服が珍しいのだろう。

……念のために着替えておくか。

俺はトイレに駆け込み、個室に入ると念のために持ってきていた  
黒のスーツ黒に着替えた。

……これならあまり目立たないはずだ。黒ビジネスで来た日本人黒に見えればいいが。

それにネロや二トの事だ。待ち合わせ場所はそこのファミレス  
(香港にファミレスはあるのか?) の様な場所ではなく……格式のある場所、おそらくドレスコードのある場所になっているはずだ。そのような場所に学生服は……(日本だと)一応良いのだが、あまり良い顔はされない。しかもここは香港だ、学生服では拒否される可能性がある。

それに学生服は空港ここですら目立っている。市内ではさらに目立つはずだ。香港は敵地であり……敵地ではあまり目立ちたくはない。

……とはいえ、これは安物のスーツだからな。ドレスコードの場だと逆に目立つかも

俺はため息をつきながらネクタイを締めて背広を着た後、顔を隠すため黒のソフト帽を被った。

そして門番ココ姉妹からバレないようにこっそりと空港を出ると急いでタクシーに飛び乗り、香港市内へ向かった。

「もしもし……リサ、今着いたから。どこに向かえばいい?……わかった。ICCのOzoneって言うバーだな。」

香港ランバン藍幫はさらに荒れていた。

不死イモータルスピリットの英霊黒が入国した? その情報は本当ですか! ……そうですか。彼の後を追いなさい。最悪の場合は戦闘を許可します。また、彼の情報を全体に流しなさい。」

日本に潜入した偵察員がイブキを見失った事。それに加えて空港を何度も変え、最終的に関西から海外の航空会社で来たため……ネツ

ト上の監視員もイブキの事を見逃していたのだ。その他にも様々な要因が加わり、イブキを香港へ入れてしまった。

当初の予定とは違ったが……この事態は想定済みなのだろう。諸葛静幻はそれらの報告を聞いても焦らず、部下に命令を下していく。しかし、静幻は激務を重ねているせいも、顔色は少しずつ悪くなっている。

「……クソツツ!!ココ、何をしているんだ!!」

司馬鵬は空港にいる曹操達へ何度も電話をかけるが……なかなかでないため、苛立ちを募っていく。

「………?………何か用?」

やっと祈りが通じたのか……明らかに寝起きであろう、不機嫌なココの声が聞こえてきた。そんな声を聴き、司馬鵬は苛立ちを倍増させる。

「何じゃないだろうが!!イブキが来た!!早く追え!!そこまで遠くに入っていないはずだ!!戦闘許可も出た……」

『姉ちゃん!!快点起来!!我睡??了!!』

ブチツ!!ツ、ツ……

司馬鵬はため息をつきながら、投げるようにスマホを机の上に置いた。彼はココとの会話のせいで疲れが一気に噴き出たようで……さらに老け込んでいた。

再び司馬鵬はため息をつき、冷めきつたお茶を一飲みした。

バスカービルは仕事を始め……遠山キンジ 苛は香港島の何処かに潜伏中。村田イブキ 不死の英霊は結局香港に入国。先日の『在香港アメリカ領事館での爆破事件』で香港警察と米国シークレットサービスが蠢く。」

司馬鵬は頭を整理するため、今起こっている重要な事実を口にした。

先日の夜に起きた『在香港アメリカ領事館での爆破事件』……それは極東戦役の時期を狙い、下剋上を企んでいる香港の別組織がやった

事という事がすでに分かっている。

だが、そのせいで藍幫ランバンは圧倒的に不利な状態だ。下手な行動を打てば香港藍幫ランバンは……いや、藍幫ランバンは崩壊する可能性もある。

「……ん？」

司馬鵬は村田ムラタの英霊エイブキの経歴が書かれた紙を再び見た。

彼は今年の夏にアメリカでとある事件（高校生活夏休み編 ラツシュ○ワー）を解決している。その時はロス市警の一人とDIEディー HARDマクレー、そして香港警察のリーリー警部ケイと一緒だった。「……リー警部？」

司馬鵬は香港警察の資料を探し出した。

『在香港アメリカ領事館での爆破事件』で捜査に当たる香港警察の刑事は……リーリー警部ケイ同一人物だった。

そのリーリー警部ケイは香港（の裏社会）では有名な刑事ではあるが……香港警察には他にも優秀な刑事は沢山いる。それにそのリーリー警部ケイは最近長期の有給を取っているのだが、何故か働き詰めらしい。……どこか違和感を覚える。

「……先生、諸葛先生？『在香港アメリカ領事館での爆破事件』ですが、このリー警部は……」

そう言いながら司馬鵬は諸葛静幻に目をやり……固まった。諸葛静幻は悪魔が如く、邪悪な笑みを浮かべていたからだ。

「鵬？……我々の使命は『香港を守り、藍幫ランバンの影響力を維持・増大させること』ですよ？」

やせ細った諸葛静幻は……目をギラギラと光らせ、微笑んだ。

村田ムラタの英霊エイブキ それにリーリー警部ケイ 今後、東アジアで重要な人物となります。ならば、彼らと伝手があつたほうがいいでしょう？」

そんな諸葛静幻を見て……司馬鵬は鳥肌が立った。

証拠は一切ないし、おそらく残ってもいないだろう……しかし、司馬鵬の勘かんは冴さいていた。『この全ての状況を作ったのは諸葛静幻である』……と。

司馬鵬は鳥肌が立った。

「……諸葛先生。自分も戦闘に出たほうがいいですよ。準備します。」

司馬鵬は前線での戦闘指揮を執るため、村田イブキ不死の英霊、遠山キンジや、遠山キンジ 哿、遠山キンジ の情報を得るため、……そしてココ達の面倒を諸葛静幻に押し付けるために席を立った。

「そうですね。ココ達が暴走しないように監視をお願いします。」

「……………え、？」

「ココ達の暴走を止められるのはあなただけですよ？」

しかし、諸葛静幻にはバレバレだったようだ。

寒中水泳……

俺は黒のスーツに黒のソフト帽という姿でタクシーに乗り込み、リサに電話をかけた。すると3コール以内にリサは出た。彼女曰く「COMPOTONはアリアと環球貿易広場にある●zoneと言うバーで待っている」だそうだ。

俺はタクシートの運転手に『環球貿易広場へ行くように』と伝えると窓に寄りかかり、外の景色を眺めていた。

……「100万ドルの夜景ね。本物はどれほど綺麗なんだろうな。」

中華人民共和国香港特別行政区……通称：香港と言う地域は香港島・九龍半島・新界及び周囲にある数百の島々で構成されている。香港の総面積は東京23区の2倍ぐらいだそうだ。

そして、香港国際空港から香港島や九龍半島までも多数の島々があり、その往来は島々に架けられた橋での移動が一般的だそうだ。そのため俺が乗るタクシーは、島々の夜景を横目に橋を渡っていく。人の営みを感じる「街の灯」が、俺の目の前で流れていく……その景色はとても幻想的であった。

多少は海外という事でフィルターが作用しているのだろう。俺は現地の聞き取れないラジオをBGMに、その夜景に見とれていた。そんな時、ポケットに入れていたスマホが鳴った。

……普通ここでスマホが鳴るか？空気読めよ。

俺はため息をつきながらスマホを取り出すと……アリアからの電話だった。俺は再びため息をつく、渋々電話に出た。

「はい、もしもsh……」

『イブキ!? キンジを見なかった!?!』

「ツ……」

電話に出た瞬間、アリアの大声が俺の耳を襲った。俺は思わずスマホを耳元から離す。

アリアの声が聞こえなくなった後、俺は耳にスマホを押し付けた。「キンジ? 何のことだ?」

『キンジと連絡が付かなくて……どこにいるか分からないの!!空港にはいなかった!』

「いや、見なかったけど……」

俺はアリアの言葉から、キンジの置かれた状況を考察する。

そう言えばキンジ、『海外は初めて』だと言っていた。アリア曰く『連絡が付かなくて、何処にいるか分からない』。という事は……

……携帯をなくした電源が切れたかしたせいで迷子かになったか? いや、そうなくても金があればタクシーを拾って戻ってこれるはずだし……こりゃ財布も失くしたな。

携帯が何らかの理由で使用不能になり、財布も落としたとなると……戦闘か、スられたかの二択だろう。相変わらずキンジは不幸な男のようだ(自分のことを棚に上げている)。

……俺は何度か海外に行っているし、キンジは初めてという違いはあるが『人の振り見て我が振り直せ』。念のため警戒はしておくか。

俺は海外用のマジックテープ財布に紐ひもをつけ、その紐を背広くに括り付けた。そして財布を内ポケットにしまう。

次に紐付きひもの小さな収納袋にパスポートなどの重要書類を入れた後、紐ひもを首にかけ、袋をワイシャツの中にいれる。

……よし、これなら大丈夫だ。

「こつちも一応探しておくが……期待するなよ?」

『キンジは香港島の湾仔ワンチャイで降りたのは分かってるわ!!情報があつたら早く連絡すること!!』

ブチッ!!……ッー、ッー、ッー……

アリアはそう言った後、電話を切った。どうもアリアはだいぶキンジを心配しているようだ。

俺はスマホをスーツのもう片方の内ポケットにいれ、ボタンを留めて蓋をした。

「しかしなあ。香港島の湾仔ワンチャイかあ」

俺はため息をつきながらリュックからガイドブックを取り出し、巻頭の地図を広げた。



その地図を見る限り……~~香港~~香港国際空港↓I C C ~~まで~~までのルートは香港島を通らないようだ。

……キンジを探すよりも合流が先だな。それにキンジの事だ、何とかなるだろう。

俺はガイドブックをしまい、再び聞き取れないラジオをBGMに夜景を見る。その時だった。

ピー……『●●●!!』

ラジオを掻き消すかのようにタクシー無線が大音量で流れた。

『●●●、●●●。●●●!!』

そのタクシー無線のおかげで、またもこの雰囲気台無しだ。俺は思わずため息をついた。

……つたく、何を話してんだよ。

俺は耳をすませて会話を聞いてみると……

『(広東語) イブキ……した。似た人物……情報……渡せ!!』

「(広東語) はいはい……つと。」

広東語はあまり得意ではないが……一つ一つの単語を何とか聞き取った。その情報から考えるに、もう藍幫ランバンは俺の情報がある程度掴んでいるようだ。俺は冷汗が流れるのを感じる。

一方、タクシーの運転手は運転しながらも、面倒臭そうに助手席グロীবの小物入れボツクスからクリアファイルを取り出した。そしてそこに入っている写真を見て運転手はギョツとした。写真は……『バスカービル』全員と、俺の顔写真であった。

……この運転手、藍幫ランバンの一員かよ!?

俺は腰の14年式に手を伸ばす。そしてこの運転手を無力化しよう……する気持ちを何とか抑えた。

極東戦役F E Wの決まりでは『際限なき殺戮を避けるため、決闘に値せぬ雑兵の戦用を禁ずる』とある。要は『雑兵を戦闘に使ってはいけない』という事だ。

この運転手は~~雑兵~~雑兵又はそれ以下~~雑兵~~である可能性が高い。そのため、俺がこの運転手を倒してしまったら後々に問題となるかもしれない。

……戦えないとなると、この場をうまく切り抜けるしか無いな。  
その時、運転手が恐る恐るバックミラーで俺を見てきた。彼と目が合う……。

俺はその鏡にいる運転手に向かって満面の笑みを浮かべ、ピースサインをした。願わくは、ただの観光客に見えることを……

「(広東語) ……運んでいる客……イブキ……似ている……!!」

『(広東語) 今何処にいる!?!』

「(広東語) ……8号幹線、大嶼島ランタオとうに……あと数キロで……大橋です!!」

タクシー運転手は俺が広東語を分からないと思ったのだろう。大声でゆつくりと、比較的聞き取りやすく無線のマイクに答えた。

悲しいことに、俺の笑顔とピースサインではこの場を誤魔化す事ができなかったようだ。

……クソツ!! どうやってこの場を切り抜ける!?! もちろん雑兵との戦闘禁止で!!

俺は必死に頭を回すが……100キロ以上のスピードが出ているタクシーで、運転手と戦闘をせずにこの場を切り抜ける方法は思いつかない。

……最悪、この道は海岸線を通っているし……このまま海へ飛び下りるか!?

カッチ、カッチ……キキツー!!

そんな事を考えていると、巨大な橋が見えてきた。その時タクシーが路肩に入り、急ブレーキをかけた。シートベルトが締め付けられ、呼吸がうまくできなくなる。

……クソ!! もう行動に移すのかよ!!

そしてタクシーが完全停止をすると、運転手は中央センターの小物入れコンソールから拳銃を取り出し、俺へ向いた。

「Freeze!!」

ダンダンダン!!

そして運転手はリボルバー式の小型拳銃を発砲した。

おそらくこの運転手は非戦闘員なのだろう。幸運なことに拳銃の狙いはブレブレ。放った弾丸は俺に害を与える事は無く窓ガラスをぶち破り、外へ飛び出ていった。

……しめた!!これなら正当防衛だ!!

雑兵との戦闘は懸念事項ではあるが正当防衛……つまり向こうから手を出してきたならば話が違う(過剰防衛というリスクはあるが)。

俺は運転手の持つ拳銃を掴み、窓に向けた。

ダンダンダン!!カチツ!!カチツ!!カチツ!!

「……ッ!!」

運転手は拳銃が掴まれているのにもかかわらず発砲を続け、弾切れを起こした。俺は運転手の真つ青な顔に一発拳をくらわす。

運転手はのけ反った後、上着の中から小型のナイフを取り出して振るってきた。

「呀啊啊!!」

俺は左手で、その運転手のナイフを持つ手を横に叩いて軌道をそらす。

ザクツ!!

そのナイフが俺の太ももから数センチ離れた場所に突き刺さる。俺は右手でそのナイフを持つ手を押さえ、膝蹴りを放った。

まともに膝蹴りを喰らった運転手はフロントガラスに激突して気絶し、動かなくなった。

……い、いきなりか。香港に着いてすぐにこんな事が起こるなんて。こりゃキンジも戦闘に巻き込まれて連絡手段がなくなったんだな。

俺はそう思いながらタクシーから出て運転席の扉を開け、気絶した運転手を高速道路(?)の柵の外に安置した。

なお同時刻、キンジは携帯と財布をスられ、香港島・北<sup>ノースポイント</sup>角を当てもなくさまよっていたとか。

タタタタタ……!!!

俺は気絶したタクシーの運転手を柵の外に安置<sup>捨</sup>して、運転席に乗り込もうとした時だった。後方から機関銃の発砲音が聞こえると同時に俺の周囲に弾丸が着弾し、アスファルトが削れていく。

……銃撃!?もう俺がここにいるのがバレたのか!?

俺は慌ててタクシーの運転席に乗り込み、バックミラーで後方を確認すると……高速で接近する装輪装甲戦闘車が機銃をこちらに向けて発砲していた。その装輪装甲車から機嬢<sup>ジーニヤン</sup>(四女、メガネをかけているココ)は上半身を乗り出し、俺が乗るタクシーを睨みながら指示を出している。

……クソツツ!!もうココが追ってきやがった!!

俺はタクシーを急発進させた。それと同時にタクシーが停車していた場所に何かに着弾し、軽い爆発が起きる。装輪装甲車は機関銃だけでなく、機関砲も撃ってきたようだ。

……お、おい!?!民間人も巻き込む気か!?

俺はタクシー蛇行させ、射線を避けながら一目散に前方へ逃げ始めた。

ココ達は慌てて空港を飛び出し、情報の通り8号幹線に乗ると……イブキを発見した。しかし、彼は今タクシーに乗って逃走を始めている。

機嬢<sup>ジーニヤン</sup>、何で機関砲撃つたネ!!イブキ先生<sup>シエンシヨン</sup>が死ぬヨ!!」

「ね、姉ちゃん!!でも92式装輪装甲車は100公里<sup>キロ</sup>でないネ!!逃がさないために撃つしかないヨ!!」

イブキが逃走している時、装甲戦闘車に乗り込むココ姉妹達のうちの三女：猛娘メイメイと四女：機嬢ジーニヤンは口喧嘩グチケンパをしていた。

喧嘩の原因は『装甲戦闘車の機関砲グキケンポウの発砲』。

猛娘メイメイの言い分としては……戦闘許可が出たと言っても、あくまでも命令は『イブキの追跡。できれば身柄確保』。いくら不フ死シ身ミとト言イわれるイブキでも機関砲の砲弾に当たれば死んでしまうだろう。さすがに機関砲グキケンポウは威力過多である。

とはいえ、主砲を発砲した機嬢ジーニヤンの考えにも一理ある。彼女達が乗っている装輪装甲車の最高時速は90キロ弱、無理をしても100キロは越えない。そんな低速車輛でイブキを追うには……イブキの移動手段タクシを即座に破壊するのが手っ取り早い。そのため威力不足の機関銃ではなく、機関砲を使用したのだ。機関砲グキケンポウぐらいでイブキは死シなナいイとも思っているが)

『……おい、ココ。聞こえてるか？今九龍から8号幹線に乗ってそちらへ向かっている。順調にいけばイブキイブキを挟み撃ちにできる。……それとお前ら、幹線に大穴空けたらしいな。』

二人が口喧嘩から喧嘩に発展しようとした瞬間、司馬鵬シマホウから通信が入った。司馬鵬シマホウは怒りを押さえつけるように声を震わせながら言っている。

『今はすごく忙しいのに仕事増やすなよ。隠蔽するのはココ姉妹ココシメじゃなくて俺なんだぞ?』

「それが你お前の仕事ヨ!!愚痴に付き合っている暇はないネ!!」

機嬢ジーニヤンはすぐに口喧嘩をやめ、司馬鵬シマホウへ挑発するように言った。

「さすが機嬢!!」

「よく言ったネ!!」

「もつと言うネ!!」

他のココ姉妹ココシメは啖呵を切った機嬢ジーニヤンを褒めたたえる。

司馬鵬シマホウとココ姉妹の仲は比較的が良い。両方は同期であり年が近く、互いにその実力を認め合っている。

だが司馬鵬シマホウはホワイトカラーで事務労働がメインであり、ココ姉妹

はブルーカラーで現場作業がメインである。そのため、仕事上では二人(？)はぶつかることが多いのだ。

そんな事もあり、老け顔司馬鵬へジーニヤン機娘は挑発し、他の姉たちココ姉妹は騒ぎ立てたのだが……最近急激に増えた仕事によるストレスで余裕がない老け顔司馬鵬はその言葉を聞き、頭にきた。

「確かに隠蔽工作は俺の仕事だが……幹線道路に大穴を開けるなんて命令は出してない。道路の補修費、お前らココ姉妹に請求するからな……!!」

ココ姉妹達は慌てて弁明をするがもう遅い。老け顔司馬鵬はそう言い放つとすぐに通信を切ったからだ。

ココ姉妹達も弁明が無駄だと分かり、装輪装甲車の車内がお通夜のように静かになった。

「姉ちゃん、タイヤを狙撃できないか？」

ココ姉妹の次女：バオニヤン炮娘が空気を破り、ポツリと言った。

「イブキ先生に手を上げるのは……」

「姉ちゃん!!手を上げたなら、お仕置きをされるはずね!!」

「……ジーニヤン機娘、そこを退くヨロシ。弾の残りが無い没有子?了、しっかり狙うヨ」

ジーニヤン長女：狙姉は一瞬断ったが……ジーニヤン四女：ジーニヤン機娘の言葉を聞いて雰囲気が変わった。もう一人の変態(メイメイ三女：メイメイ猛娘)が不服を唱えているが、全員無視している。

「……ハア」

バオニヤン次女：バオニヤン炮娘とジーニヤン四女：ジーニヤン機娘は……ある意味ブレない変態二人(ジーニヤン長女：ジーニヤン狙姉とジーニヤン三女：メイメイ猛娘)に思わずため息をついた。

ココ達の装輪装甲車に追われつつ、俺が運転するタクシーは橋を越えて青衣島チンイとうに上陸した。この島には沢山のコンテナ船や油槽船タンカーが埠頭ふとうに泊まっており、沢山のコンテナや石油貯蔵タンクが置かれている。

『300メートル先、右折です』

「了解だよチクシヨウ!!」

なんとか起動させたスマホのナビによる案内の元、俺はココ達に追われながら環球貿易広場こくわんへ向かっていた。

しかし、このままではギリ貧であるのは確実だ。俺が今通っている8号幹線は高架橋にあり、基本的に一方通行である。そのため長い間この道を通っていれば、他の藍幫戦闘員ランパンが先回りをするだろう。

……クソツ!!九龍半島や香港島の地理はある程度頭に叩き込んでおいたが……青衣島こいや8号幹線周辺の細かい地理は分からねえぞ!?

『5キロ以上道なりです』

「分かってるよクソツタレ!!」

なので俺はナビに従って移動するほかなかった。

……ただ、向こうは何故か機関砲を撃つてこない事と、少しずつではあるが距離を離しているのが救いだな。

そしてこの青衣島チンイとうを抜け、橋を一つ渡れば九龍半島。

九龍半島であれば、ある程度の道路を覚えているためココ達から逃げることができるかもしれない。また、環球貿易広場こくわんも九龍半島にあるため、『COMPOTO』や『バスカービル』からの援護を受けられる可能性が高い。

ダダダダダダダダ……パリン!!ベキツ!!

その時装甲車からの機銃が当たり、タクシーのフロントガラスにひびが入り、ドアミラーが吹っ飛んだ。

……クソツ!!とにかく九龍半島だ!!そこにつけば何とかなるはずだ!!

俺の目の前に九龍半島への巨大な橋が見えてきた。

俺はその巨大な橋：昂船洲大橋ストーンカッターズ橋を通っていた。周囲は大量のコンテナとガントトリークレーンが並んでいる。ここらも巨大な埠頭ふとうらしい。……と、とりあえずここまでくれば大丈夫なはずううう!!!

俺は慌てた。目の前に新たな装甲車が数両、道を塞いでいたからだ。装甲車の近くには対戦車ロケットを構えた歩兵(?)も数人いる。『あく、テストス』

前方の装甲車の一つに、拡声器につなげたマイクを持った司馬鵬老け顔が立っていた。

『村田維吹大尉、今あなたは包囲されています。また、諸葛静幻先生があなたと話がしたいと仰おつしやられています。武装を解除し、投降してください。』

司馬鵬老け顔は流暢りゅうちやうな日本語で俺に投降を呼び掛けてきた。もちろん、俺は投降に応じる気は全くない。

とは言え、前方は数量の装甲車に対戦車ロケット・司馬鵬老け顔、後方は装輪装甲車1両とココ姉妹。まさに~~前~~前門の虎後門の狼~~後~~の状況だ。……前方の『司馬鵬老け顔と仲間達』よりは後方の『ココ姉妹』の方がこの包囲を抜ける確率が高いはずだ。

そこで、俺はタクシーを180度旋回させ、ココ達の方へ向かおうとした。その時……

タアン……バアン!!ギヤリギヤリギヤリ……!!

発砲音が聞こえ、タイヤの破裂音も聞こえた。俺は慌ててハンドルを操作するが、車を制御できない。

……一発!!?という事は狙撃か!?

前方の司馬鵬老け顔側で発砲炎を見ていないから……おそらく後方のココ、それも狙撃専門の長女：狙姉ジュシユがやったのだろう。または、近くに潜んでいた狙撃兵と言う可能性もあるが……

……や、ヤバい!!このままだと……

バキツ!!

「うわあああああ!?!」



俺から制御を離れたタクシーは柵に激突して乗り越え、そのまま海面へ高飛び込みを決めた。もしこの時、高飛び込みの採点者がいれば最低点一步手前の点数をつけただろう。

『……クソツ。ココ、何しやがる!!このまま後方へ進めば捕まえられ  
たはずなのに!!』

何か司馬鵬が叫んでいるが……それを聞き取る間もなく海面へ激突し、衝撃が体に伝わる。

その後、車のフロントガラスとリアガラスが銃撃によって割れているため、車内へ海水が大量に溢れ出てきた。

……ヤバい!!このままだとこの車から脱出できないぞ!?

俺は急いでシートベルトを外した後、ドアを開けようとするが……水圧のせいでドアを開けることができない。

……お、落ち着け!!水圧のせいでドアが開かないだけだ!!外と車内の水面が一致すれば普通に開ける事ができるはずだ!!

俺は一回深呼吸し、己を落ち着かせる。

車内の推移はさらに上昇し、すでに水面は顎上まで迫っていた。

……水没すれば圧力差は0になってドアが簡単に開けられるはずだ。だから落ち着け……

海水の流量が多いせいで、顎上だった水面はすぐに天井下10センチ以下にまで上昇する。俺は車内に残るわずかな空気をなるべく多く肺にいれ、潜水してドアを開く。

そして橋の上から照らされるライトから逃れつつ、潜水のままこの場を離れようと……

……おっと、帽子帽子。

黒のソフト帽が俺から離れ、フヨフヨと何処へ行くところだった。俺はそのソフト帽を捕まえて被り、潜ってこの場から逃げていった。

……スーツケースとリュックは持っていけないな。だが、貴重品は身に着けていたから何とかなるk……あれ?俺のスマホって海水は大丈夫なのか?

「プハッ!!ゼー……ゼー……」

俺はやつと海面に這い出た。近くには小型のコンテナ船があり、橋の方からは死角になる場所だ。

俺はそのコンテナ船から、ストリーンカッターズ橋 昂船洲大橋の方を覗き見ると……多数のサーチライトを海面に照らしている。おそらく俺を探しているのだろう。

……とりあえず環<sup>I</sup>球<sup>C</sup>貿易<sup>C</sup>広場<sup>C</sup>へ向かおう。確か……あっちのはず。俺は辛<sup>かろ</sup>うじて見える北極星と月を頼りに、環<sup>I</sup>球<sup>C</sup>貿易<sup>C</sup>広場<sup>C</sup>へ泳ぎ出した。

イブキがストリーンカッターズ橋 昂船洲大橋から落ちる数十分前、環<sup>I</sup>球<sup>C</sup>貿易<sup>C</sup>広場<sup>C</sup>のバー：O●oneの個室で待機していた『COMPTO』とアリアのもとに、船上パーティーの招待状が届いていた。

その招待状の送り主は~~リッ~~Rick<sup>I</sup>y Tan<sup>C</sup>と書かれていた。「Rick<sup>I</sup>y Tan<sup>C</sup>は元刑事。今は最近力をつけてきた香港の新興マフィアのボスよ」

Ozoe●eと言うバーは『地上から490m高い場所にあるバー』という事もあり、『100万ドルの夜景』と同様かそれ以上に内装も洒落<sup>しやれ</sup>た作りとなっている。そんな中でアリアは~~リッ~~ももまん~~リッ~~を齧りながら説明した。

「香港のマフィアですか。藍<sup>ラン</sup>幫<sup>バン</sup>とはどういう関係ですか?」

ビキニに限りなく近い白のロングドレスを着たニトは中国のビー

ルを傾けながら尋ねた。

「あんまり良くはないかなあ。でも今は藍幫ランバンは極東戦役F E Wに、Rick y Tanリック・タンは澳門マカオに進出途中、だからお互いに牽制し合って冷戦中だよ」

深紅のチャイナドレスを着た理子はそう言った後、カクテル：チャイナブルーの入ったロンググラスに口をつけた。

敵ランバンの敵……という事ですか」

「ですが……リサ達に関わりを持って良いのでしょうか。」

西陣織の様な見事な着物を着た牛若の言葉に、バーでも違和感がない改造エプロンドレスを着たりサが疑問を口にした。

『敵の敵は味方』という言葉はある。だが、武偵や軍人の集まりである『COMPTO』や『バスカービル』がRick y Tanマフィアのボスと関係を持てば、後々悪影響が出る可能性がある。その事をリサは心配していた。

「ええ、極東戦役F E Wに参戦している『バスカービル』が行ったら問題になるわ。でも……参戦していない『COMPTO』ならまだ何とかなる」

ももまんの欠片かけらを口元につけつつ、アリアはさらに言う。

「Rick y Tanリック・タンの裏の顔はマフィアのボスだけど表の顔は投資家よ。おそらく、船上パーティーには一般人も来ているわ。その一般人として接触すれば……」

「もうよい……余達が行こう。」

スカート前部が透けている特徴的なドレスを着たネロがアリアの言葉を遮った。

「……不遜ふそんにも余達を招待したのだ。そのRick y Tanとやらの顔を見てやろう。……それに行ったほうが良いと余の勘も告げているのでな。」

「……いいんじゃないかな。」

ネロの言葉に、大正浪漫を感じる女袴を着たエルキドゥエは呼応した。

ニトや牛若も首を縦に振り、その様子を見たりサはため息をついて

覚悟を決めた。

「イブキが来たら伝えろ。……それと、疑いをかけられたときは庇えよ?。」

理子は~~裏~~裏理子~~と~~となり、アリアへ釘を刺した。『COMPOTO』が『バスカービル』の走狗<sup>手先</sup>とならないように……。

「それは誓うわ。ホームズ家として。」

アリアは無い……薄い胸を張って宣言した。

「ぷー、クスクス。口元にもまんつけて言われてもなあ〜!!」

「……」

アリアは無言で己の口元に手を当て……次第に顔を真っ赤にする。結果的にもアリアの手先になるのは嫌だったのだろう。理子は高笑いをして溜飲を下げ、●zoneを去って行った。

『COMPOTO』がO●oneを出たのと同時刻、香港警察のリー警部（高校生活夏休み編 ラツシユ○ワーで登場）はRick<sup>キ</sup>y Tan<sup>タ</sup>が船上パーティーを行う船の近くに到着した。

彼は『在香港アメリカ総領事館での爆発事故』を捜査しており、Rick<sup>キ</sup>y Tan<sup>タ</sup>が怪しいと睨<sup>にら</sup>んでいた。そしてその捜査の最中、偶然香港へ観光に来ていたアメリカ人の友人：カーターが爆殺されてしまった（と思っている）のだ。

父を殺し、カーターをも殺したRick<sup>キ</sup>y Tan<sup>タ</sup>への復讐心は膨れ上がる。しかし、リー警部はその復讐心を抑え込み、密かにその船に忍び込んだ。

まだリー警部は知らない。カーターは爆殺されてなく、無傷であるという事を。そして独自にRick<sup>キ</sup>y Tan<sup>タ</sup>を追い、カーターもこ

の船に潜入しているという事を。

昂船洲大橋ストリークアタース橋から俺は3〜4キロほど海で着衣泳をしていた。

湾内という事もあり海流の影響はなく、穏やかな波であった。そのため俺は予想以上に体力の消費は無く、1時間も経たずに環球貿1易広場2が目の前に迫っていた。

……あと少しだな。ちやっちやと泳ぐか。

俺は小休止を終え、そう思いながら再び泳ぎ始める。

その時、数百メートル先に派手な電飾ほじこが施された豪華なクルーザーが横断していた。

「(広東語) お、おい!! あそこで誰か溺れてるぞ!？」

「(広東語) ほ、本当だ!! おい、急いでボートを出せ!! 早く助けるんだ!!」

そのクルーザーから何か聞こえるが……特に気にしなくてもいいだろう。

俺はそのクルーザーを無視して泳いでいると……小さなボートが近寄ってきた。

「(広東語) お〜い!! 大丈夫かあ〜!!」

「(広東語) 今助けるぞ〜!!」

ボートに乗っている男二人は俺に向かって手を振り、声を上げる。

俺は藍幫ランバンの手先だと思い、身構えた。……が、彼らは本当に心配している様で、その表情や声に演技を全く感じられない。

……泳ぐよりはボートの方が楽しいな。襲ってきたらボートを奪うなり、再び泳ぐなりすればいいか。

俺の目の前にボートはが来た。彼らは早口の広東語で大声を上げながら俺をボートへ引き上げた。

俺は特に抵抗せず、彼らの早口の言葉を聞き取ると……本当に心配しているだけらしい。

「(広東語) ありがとう。酔って、落ちた。」

俺は拙い広東語で感謝を伝えつつ、適当な嘘について素性がバレないようにする。すると助けてくれた男二人はため息をついた後、『(意訳) 心配かけるなよ』などいつて俺の背中を叩いてきた。

そして俺を乗せたボートは絢爛豪華なクルーザーけんらんこうごうかに向かって移動を始めた。

そのクルーザーのクレーンで俺らが乗るボートが吊り上げられた。そしてこのボートを収容する。

「(広東語) おい!! 大丈夫か!？」

「(広東語) 酔って落ちたんだってよ!!」

「(広東語) ……つたく、心配かけさせるなよな。いまタオル持ってくるからよ!!」

「(広東語) タオルもそうだけど着替えだ!!このままだと風邪をひく!!」

「(広東語) 俺達に支給してもらったスーツの予備があるはずだ!!今持ってくる!!」

「(広東語) ほら、お湯だ。温まるぞ!!」

彼らは船員だろうか？俺の周りで黒スーツの男達が集まり、何かしゃべっているが……あまりの早口で一部の単語を聞き取るので精いっぱいだ。

……とりあえず、『藍幫ランバンの手下で俺を捕まえに来た』ってわけじゃないだろうな。

そして男達はお湯の入ったコップ、そしてタオルや着替えを渡し、一室に俺を叩きこんだ。

彼らの言葉から察するに、『風になる前に着替えろ』という事だろう。

俺は濡れた衣服を脱ぎ、貰った衣服に着替える。

……この服、俺が来ていた服より高価だぞ!?

そう思いながら袖に腕を通す。そして濡れたソフト帽を振って水を落とし、顔を隠すために再び被る。

……帽子に海水はダメだろうし、また新しく買うしかないかなあ。気に入ってたんだが。

俺はため息をつきながら……最後に財布や重要書類の入った袋を身に着け、この部屋をでた。鍵はかけていないようで、すんなりと扉は開く。

「(広東語)もう心配かけるんじゃないやねえぞ。その服はやるから。貴重品は忘れるなよ?」

見張り(?)役だったのだろうか。扉の近くでは男一人が立っていた。

その男が俺に向かって早口で喋ってくる。俺は何とかその男がしゃべっている単語を聞き取り……

……とりあえず、金を払う心配はいらないようだな。

善意のみで彼らは助けたいらしい。俺はお礼を言おうとした時……急に背後から殺気を感じた。俺はしゃがみ、でんぐり返しの要領でその場から一時的に離れる。

そして振り返ると……蹴りを放つリー警部がいた。

……ちよつと待て!!何でここにリーさんが!?

俺はブリッジをしてその蹴りを避け、そのまま逆立ちをする様に蹴りを放ち、追撃を打ち落とす。

俺はチラツと視線をやると……見張っていた(?)男は浮き輪で拘束され、気絶しているようだ。

……とにかく、なんだか分からないがこの誤解を解かないと……

「(英語)リーさん!!俺、俺です!!ムラタです!!」

俺はリーさんのカンフー特有の拳や蹴りを何とかさばきながら、攻撃を止める様に説得をする。

「(英語) え? ……なんで君がここに?」

やっとリーさんは気が付いたようだが ……急に拳や蹴りは止まらない。

俺は足を掬われ、体勢を崩したところに拳が飛んできた。その拳のエネルギーを受け、俺は床に叩きつけられた。

「(英語)ゴフツ……。それは俺のセリフですよ。 ……香港で強制海水浴してたら助けて貰ったんです。」

俺は息を整えながら伝えると ……リーさんは呆れた表情をした。

「(英語)今の時期に海水浴って ……と、とにかく」

リーさんは俺から目を離し、浮き輪で拘束されて気絶している男を叩き起こした。

「(広東語) リツキー・タンは何処にいる!!!」

そしてリーさんは鬼気迫る顔でそう言い、浮き輪ごとその男を揺らす。

……え? 『リツキー・タン』? だれ、そいつ?

俺はその雰囲気にもまれ、固まってしまった。

カツカツ ……カツカツ ……

「(広東語) 奴が相棒を殺したんだ ……どこにいる!!!」

「(広東語) し、知らねえよ ……」

リーさんはその男を何度も壁に叩きつけ、尋問するが ……男はボロボロになってもしやべるつもりはないらしい。

……え? ちよつと待って!? カーターってあのカーターさん!? 殺されたの!?

俺が驚いていると ……近くから気配を感じた。俺はその方向へ向くと ……

「(英語) おい、リー!! 何してるんだ!? ……つて ☒ムラタ ☒!! なんてここに!？」



「リー警部!?イブキ様!?なぜここにいらつしやるのですか!？」

「環球貿易広場<sup>1</sup>へ向かうと聞いていましたが……アリアから聞いてこちらに来たのですか?」

近くの階段からカーターさん、リサ・ニトがこの甲板へ降りてきたようだ。3人は俺やリーさんの存在を確認し、目を見開いている。

……カーターさんは中国風の衣服、リサは改造エプロンドレス、ニトはビキニに近い白のドレスか。へえ、似合ってるじゃないの。

俺は衝撃的な情報量のあまりの多さに、軽く現実逃避をし始める。

「(英語)カーター!!殺されたんじゃないのか!？」

リーさんは浮き輪ごと男を叩きつけながら、英語で叫ぶようにカーターさんへ言った。

「(英語)死んだ!?誰が死んだんだ!？」↑カーター

「(英語)君だ!!」↑リー

「(英語)きみ?……~~キミ~~つてやつが死んだのか!？」↑カーター

「(英語)違う!!……ああ!!頼むから話を複雑にしないでくれよ!!」↑リー

「(英語)それはこっちのセリフだ!!どいつもこいつもよくわからない事言つて……!？」↑カーター

リーさんとカーターさんが軽口を叩き合っている時……黒スーツを着た男達十数人が来て俺達を囲んでいた。一部には俺を救助したり、衣服やタオルを渡してくれた人たちもいる。

そして俺は、彼らから多少なりとも殺気を感じた。

……こ、この場、抜けられるか?

俺は冷汗をかいていた。

この場には俺にリーさん・カーターさん、そしてリサとニトがいる。俺とリーさんは近接戦闘系、カーターさんも一応近接戦闘はできる。しかし、リサとニト……特にリサは後方支援特化であるため、近接戦闘は期待できない。確実に二人は足を引っ張るだろう。

リサ・ニトを守りつつ、こんな狭い船上の廊下での戦闘は……とて

もじやないが難しい。

……クソツ!! 覚悟を決めるしかないか!? 助けてもらった恩を仇あだで返す事になるが……シヨウガナイ

俺は右手をスーツの中ポケット近くに置き、四次元倉庫を開いて日本刀を握る。いつでも抜刀できるように……

〔英語〕ボスがお呼びだ!! ついてこい!!

俺達を囲んでいた男の一人が一步前出るとそう言い放った。

どうやらここで俺達を始末するつもりはないらしい。

……ボス? リーさんが言っていた『リツキー・タン』の事か? だとすれば……俺には関係ないはず。なら……俺とリサとニトだけでもこの場から逃げよう

藍幫ランバンと事を構えている中、その他組織を構っている余裕はない。

俺は逃げるため、リーさん・カーターさんを捨て駒とすることにした。

〔英語〕助けていただきありがとうございました。本来はお礼を言いたいところなのですが、急用がある御様子。ここらで失礼させていただきます。お嬢さん方、こんなところにいちやいかんよ。」

俺はあたかもこの場に関係ない観光客として振る舞う。そしてリサとニトの手を取って指で『逃げるぞ』とモールスで伝え、この包囲を突破しようとする……

カチャカチャカチャ!!

包囲していた男達全員は腰から銃を抜き、俺に突きつけてきた。どうやらボスとやらは俺にも会いたいようだ。

……クソツ。俺一人ならともかく、リサとニトを守りながらはキツイぞ?

俺・リサ・ニトは突破を諦め、両手を上げて反抗の意が無い事を示す。

濡れた帽子から水滴が流れ出たのだろうか、俺の頭から生温なまあたかい水滴が滴り落ちる。

〔英語〕もちろん『COMPOTO』のお前も、その女達もだ。」

俺達を包囲する黒スーツの男の一人がそう言った。

俺とニトはため息をつきながら、リサは怯えながら包囲の中央へ戻る。リーさん・カーターさんの視線が鋭く突き刺さり、痛い。

……ココ達と司馬しばほうから逃げて、今度は☒リッキー・タン(?)☒に捕まるか。俺、まだ香港に着いて3時間も経ってないんだけどなあ。

俺は思わずため息をついた。

「(英語) おいおい!! 自分だけ逃げようってか!? 薄情な奴だな!!」 ↑  
カーター

「(英語) 確かに君は無関係だが……日本人は☒☒義理と人情☒☒を大切に  
にするんだろう!?!」 ↑リー

「(英語) こっちはこっちで藍獲物幫がいるんです!! 他の組織に構っている  
余裕はありませんよ!! それに二人なら何とかなるでしょ!?!」 ↑イブキ  
「とにかく、この場を何とかしなければなりませんね」 ↑ニト

「リサ達はどうなってしまったのでしょうか……」 ↑リサ

「(英語) 話してないでさっさとついて来いよ!!」 ↑黒スーツの男